バクフーン達の冒険

バクフーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バクフーン達の冒険

【Ｎコード】
Ｎ６９１７Ｄ

【作者名】
バクフーン

【あらすじ】
ここはポケモンだけが暮らす、とくに争いも無い平和な世界。だけど、そんな平和な世界を脅かす出来事がもうすぐ起ころとしていた……

プロローグ

ここはポケモン達だけが暮らす、とくに争いもないとても平和な世界。

だけど、毎日が平和で何も変わらない日常に物足りなさを感じているポケモンがここに1人。

「はあ……」

フサフサとした体毛を持ち、深緑色をした背中にクリーム色をした腹、三角形の小さな耳があり、顔は何処かネズミに近い。そしてまるで炎みたいに赤い瞳を持っているそのポケモンの名はバクフーン。バクフーンは海が見える砂浜で横になり、軽く溜(た)め息を吐く。

「どうしたんだよバクフーン、溜め息なんか吐いてさ?」

そんなバクフーンに声を掛けるポケモンが1人。橙色を基調とした体色で竜を思わせるような顔をしている。頭部には角が2本あり、首はやや長い。背中には一組みの立派な翼、そして長い尻尾もあり、尻尾の先端には炎が灯っている。

「ん?　嗚呼(ああ)リザードンか」

海岸の砂浜で横になってたバクフーンに声を掛けた者はリザードンと呼ばれるポケモンだった。

リザードンはバクフーンの親友である。

「らしくないな、いつも陽気なお前が溜め息なんてさ」

いつもと違うバクフーンを見て、不思議そうな表情を浮かべるリザードン。

「俺だってたまにはこういう時もあるんだよ」

「ふ～ん……」

そこで会話が途絶え、海を見つめたまま、しばらく2人の間に沈黙が続く。

「……なんかさ、平和過ぎてつまらないなぁって思ってたんだよ」

先に沈黙を破ったのはバクフーンだ。

「そうか？　平和な事って良い事じゃないか？」

首を傾げながら言うリザードン。

「確かにそうなんだけど……もう少しワクワクするような事が起きてほしいんだよな～。なんかこう、燃えるようなやつがさ！」

「燃えるようなやつねぇ……だったら、ジムにチャレンジしてみたらどうだ？　いろんなバトルが出来るし、それに自分の力を試すには打って付けだと思うんだけど？」

腕組みしながらリザードンはそう言った。

ちなみにジムとはそれぞれの街に存在する物で、そこにはジムリーダーと呼ばれるバトルのプロフェッショナルがいる。

そのジムリーダーに挑戦し、見事勝利する事が出来れば勝者の証としてバッジが貰える。

バッジを8つ集めると、全国から集まった強者達と戦い頂点を決める大会、ポケモンリーグに挑戦する事が出来るのだ。

「あっ、それ良いかもな！　……だけどさ、確かジムに挑戦すんにはまずチームを組まないとダメだろ？　最低でも3人はいないといけねぇし……」

腕組みをして考え込むバクフーン……この世界では、ポケモンリーグに挑戦する為にまずチームを作る必要があるのだ。

「あっ、そうか。うーん……じゃあ、俺が一緒に行こうか？」

自分の事を指差しながらリザードンが答える。

「嬉しいけど……良いのか？　お前、父さんと母さんの店を手伝わないといけないんだろ？」

リザードンの両親は、様々な木の実を売るショップを経営しているのだ。

「それなら多分大丈夫。最近店は忙しくないし、俺が手伝わなくても母さんや父さんがなんとかしてくれるだろうしさ」

笑顔でリザードンはそう言った。

「お前がそう言うなら良いけど、でもあと1人はどうするよ？　他に頼めそうなやついるか？」

「どうだろ……他の知り合いはバトルとかあまり好きじゃないからなぁ……」

腕組みしながらリザードンとバクフーンは3人目に誰を誘うか一緒に考える。

「ん？」

2人で考えている時、リザードンは海の方で何かがプカプカと浮いている物を発見する。

「なんだあれ？　バクフーン、あれ何か分かるか？」

リザードンは海に浮いている物を指差しながらバクフーンに聞く。

「ん？　あれは……」

じーっと目を凝らして浮いている物が何かを確認しようとするバクフーン。

そしてその何かを確認出来た時、バクフーンは急に慌てだす。

「お、おい！？　あれポケモンだぞ！？」

「えぇ！？」

バクフーン達は急いでそのポケモンを助ける為に走り出す。そのポケモンとの出会い……まさかこれが旅立つきっかけになるとは、バクフーンとリザードンは思いもしなかった。

プロローグ（後書き）

プロローグ完成です。

バクフーン
「あっ、見つかったか。この小説を読んでくれてありがとうな。まだプロローグだけど、これからどんどんストーリーが展開していくからさ。楽しみにしていてくれよな♪」

第一話出会い

海で発見したポケモンを助け出したバクフーンとリザードン。
現在彼らはリザードンの家で、助け出したポケモンを看病していた。

「うっ……こ、ここは？」

助け出してから2時間後、そのポケモンは意識を取り戻す。

「あっ、気がついたか！　良かった～……」

ポケモンが意識を取り戻してくれて、ほっと胸を撫(な)で下ろしながら安堵(あんど)の表情を浮かべるバクフーン。

「ここは俺の親友の家だよ。ちなみに俺はバクフーン、よろしくな」

笑顔で自己紹介するバクフーン。その時、木の実を手に持っているリザードンが部屋に入ってきた。

「おっ、目が覚めたんだな」

助け出したポケモンの意識が回復していた事を喜ぶリザードン。
笑みを浮かべながらゆっくりとポケモンに歩み寄る。

「さあ、これをどうぞ。このオボンの実を食べれば元気になれるよ」

優しく微笑みながらリザードンは手に持っていたオボンの実をポケモンに手渡す。

オボンの実とは、弱った体力を回復してくれるありがたい食べ物なのだ。

「あっ、ありがとう……」

ちょっと戸惑いながらもオボンの実を受け取り、お礼を言うポケモン。

「……ところでさ、君名前は？　なんで海の上なんかで気を失っていたんだ？」

腕組みをし、首を傾げながらバクフーンは質問する。

「私は……あれ？　私……誰なんだろう？」

バクフーンの問いに答えようとしたポケモンだが、どうも様子がおかしい。

「どうしたの？」

今度はリザードンが質問する。

「……思い出せないんです。私が誰なのかを……」

『えっ！？』

自分が誰なのか分からない……予想していなかった返答に驚くバクフーンとリザードン。このポケモン、どうやら記憶喪失になっているようだ。

「私は……うぅっ!?」

自分が誰なのかを思い出そうとした刹那(せつな)、突然頭を抱えて苦しみだすポケモン。

「だ、大丈夫か!?」

心配そうに声を掛けるバクフーン。

「すみません……思い出そうとしたら、急に頭痛が……」

「あまり無理しちゃいけない、少し眠った方が良いよ。さあ、横になりな」

リザードンは優しく接しながら、そのポケモンを横にしてあげる。まだ体力が回復してなかったせいか、そのポケモンはすぐに眠ってしまった。

「リザードン、この子ってもしかして……」

「嗚呼(ああ)、記憶喪失ってやつみたいだな……」

頷きながらバクフーンに答えるリザードン。

「……なんとかしてこの子の記憶を戻せないかな?」

バクフーンは今横になって眠っているこのポケモンを助けたいらしい。

「んな事言われてもなぁ……う〜ん……」

リザードンは腕組みをして、このポケモンの記憶を蘇らせる方法がないかを考える。

「……まずこの子がどういうポケモンなのかが分かれば、少しは手助け出来ると思うんだけど……」

「どんなポケモンなのかか……じっちゃんに聞けばなんか分かるかな？　意外と結構物知りだし……」

バクフーンは物知りなおじいさんに聞かないかとリザードンに提案する。

「あ～、それが良いかもしれないな。よし、今からじっちゃんの所に行こう」

バクフーンとリザードンはこのポケモンの事を相談する為、１度おじいさんが暮らす家に向かう事にした。

リザードンの自宅から離れて数分後。

バクフーンとリザードンは物知りなおじいさんが暮らす家の前までやって来ていた。おじいさんの家はレンガ造りで、外見が亀をイ

メージさせるような形をしていた。

「じっちゃ～ん！　コータスのじっちゃ～ん！　いる～？」

リザードンは大きな声で中にいるであろうおじいさんに呼びかけた。しかし返事がない。

「あれ、留守かな？」

首を傾げるリザードン。

「じっちゃんって結構年寄りだろ？　もしかして耳が遠くなってんじゃないか？」

頭の後ろで両手を組みながらバクフーンはそう言った。しかしその刹那――

「なんじゃと！」

バクフーン達の背後から大きな怒鳴り声が聞こえてきた。

『わっ！？』

いきなり背後から怒鳴られたので2人は飛び跳ねて驚いてしまう。

「誰がよぼよぼで、ボケがひどくて死にかけの年寄りじゃと～！」

そう怒鳴っているのはバクフーン達が会おうとしていたおじいさん、陸亀のような姿をしており赤茶色の肌と黒い甲羅を持つポケモン、コータスだった。

「いやじっちゃん、そこまで言ってねぇし」

苦笑いしながら右手を左右に振るバクフーン。

「ん？　何じゃ、仲良しコンビのバクフーンとリザードンじゃないか。どうしたんじゃ今日は？」

首を傾げるコータス。

「実は相談したい事があってさ……」

バクフーンとリザードンは今までに起きた事をコータスに説明した。

「……なるほど、そんな事がのう」

「うん、それでリザードンと相談して、じっちゃんならあの子の事何か知ってるんじゃないかなぁって思ってここに来たんだ。んでじっちゃん、何か知らないか？」

早くあのポケモンの事を知りたいバクフーンはコータスを急かせ

る。

「う～む……そのポケモンに何か特徴はあるかの？」

「えっ、特徴？　えっと特徴は～……」

バクフーンは腕組みしながらポケモンの特徴を思いだそうとしている。

「確か、体の色は赤と白で胸には三角形の形したマークがあるんだ。それで姿はちょっと戦闘機に似た感じだったな……これで良いかなじっちゃん？」

バクフーンの代わりに特徴を詳しくコータスに教えるリザードン。

「……もしやそのポケモンは……ちょっと待っておれよ」

どうやら心当たりがあるようで、コータスは1人で家の中に入っていった。

「なんだ？　どうしたんだ？」

「さあ？」

首を傾げるバクフーンとリザードン。

それから数分後、ようやくコータスが家の中から出て来た。背中には何やら古そうな分厚い本が乗っかっている。

「何、そのいかにも古そうな本？」

本を手に持ち、首を傾げながらバクフーンはコータスに尋ねる。

「様々なポケモンの情報が載っておる本じゃよ。“ポケモン図鑑”とも呼ばれとるがの」

本の事を簡単に説明するコータス。

「へ～……あっ、リザードンが載ってる！」

早速ページをめくり中を確認するバクフーン。ちょうど開いたページにはリザードンの絵が書かれていて、種族の特徴や体長など細かく記されている。

「あっ、本当だ……でも俺こんなに太ってたかなぁ？」

リザードンは図鑑に載っているリザードンと自分の体を交互に見ながら確認する。

「まんまだぜリザードン。っとそれより、あの子と同じポケモンの絵を探さねぇと……」

「おぬし達が助け出したポケモンは、確か３８０ページに載っていた筈じゃ」

コータスに言われ、バクフーンはページをどんどんめくっていく。

「……あっ、あった！」

３８０ページで、助け出したポケモンと全く同じ姿をしたポケモンが載っていた。

「本当だ！　名前は……ラティアスって言うみたいだな？」

図鑑に載っている名前を確認するリザードン。

「やはりのう……かなり珍しいポケモンじゃよ。しかし、何故そんなポケモンが海に浮かんでいて……しかも記憶喪失になっていたんじゃ？」

ラティアスの身に何が起きたのか……首を傾げながら考えるコータス。

「じっちゃん、どうやったらあの子の記憶を戻せる？」

コータスに質問するバクフーン。

「う～む……何かショックを受けた拍子に戻る事があれば、自然に戻る事もあると聞くが……一番効果があるとすれば兄のラティオスに会わせてあげる事かのう？」

『ラティオス？』

口を揃えて言いながら、首を傾げるバクフーンとリザードン。

「ラティアスの次のページに載っておるぞ」

「次のページ？」

バクフーンは早速ページをめくる。

「おっ、こいつがラティオスか」

そこに載っていたのはラティアスとほぼ同じ姿をしたポケモン、ラティオスだった。

「兄であるラティオスに会わせてあげる事……それが一番だとワシは思うぞ」

「兄貴のラティオス、か」

コータスから色々と情報を貰ったバクフーンとリザードンはラティアスが待っている家に戻ろうとしていた。

「やっぱラティアスの記憶を戻すには、兄貴に会わせる事が1番なんだろうな」

腕組みしながら真剣な表情で言うリザードン。

「でもその兄貴は何処にいるんだろうな？」

頭の後ろで両手を組みながら、ラティオスが何処にいるのかを考えるバクフーン。

「それは分からねぇけど、やっぱ捜しにいくしか――」

リザードンがそう言いかけた時、フレイムシティの方から何かが爆発する音が鳴り響いた。

「な、なんだよ今の……リザードン、急ぐぞ！」

「分かってる！」

バクフーンとリザードンは急いで音がした方へ向かった。

「あれは！？」

爆発音がした所へ駆けつけた2人。

そこで目にした光景は、ラティアスが2人のポケモンに襲われているところだった。

1人は深い紫色を基調とした体色で、寸胴な人の形をしたポケモン……ゲンガー。

もう1人は人間に近い体型をしていて両手にはスプーンを持ち、長く伸びた髭があるポケモン……フーディンである。

「ケケケ、やっと見つけたぜ嬢ちゃん！」

ゲンガーが嫌みったらしい笑みを浮かべながらラティアスに近づいていく。

「手間を掛けさせてくれましたね……ゲンガー、早くその小娘を取り押さえなさい」

フーディンがゲンガーに命令する。

「ケケ、言われなくてもやるよ！　それ、黒い眼差し！」

ゲンガーの目から黒く怪しい光が放たれた。その光を浴びたラティアスは体が硬直してしまい、動けなくなってしまう。

「さあ、我々と一緒に来て頂きますよ」

ゆっくりとラティアスに近づいていくフーディン。

「誰か……助けて！」

必死に助けを求めるラティアス。

「火炎放射！」

「フレアドライブ！」

そこへバクフーンとリザードンが駆けつける。

リザードンは口から炎を吐き出してフーディンに向け放ち、バクフーンは体を炎を覆い全速力でゲンガーに突進する。

攻撃を受けたゲンガーとフーディンは大きく後方へ吹き飛ばされ

る。
その衝撃でゲンガーは黒い眼差しを維持する事が出来なくなり、ラティアスは呪縛から解放される。

「ケッ、誰だ邪魔しやがるのは！」

怒鳴りながらゲンガーは起き上がる。

「その子に手を出すな！　それ以上手を出すってんなら……俺達が相手になってやる！」

バクフーンは戦闘体勢に入り、ゲンガー達を睨みつけながら威嚇する。

「ラティアス、今のうちに俺達の後ろへ！」

「は、はい！」

ラティアスは慌ててリザードン達の後ろに逃げる。

「大丈夫だったか？」

心配そうな表情でバクフーンはラティアスに聞く。ラティアスは頷いて応える。

「良かった……お前ら、一体何者だ！　何故この子を襲った！」

バクフーンは怒鳴りながらゲンガー達に質問する。

「ケケ、関係ねぇお前達に話す事なんかねぇよ！」

「その通りです。さあ、その小娘をこっちに渡して下さい」

バクフーン達の問いには答えず、ラティアスを渡すよう要求するフーディン達。

「冗談言うな。誰がお前らみたいな怪しい連中にこの子を渡すかよ！」

当然バクフーン達はこの要求を拒否する。

「……仕方ありませんね。あまりこのやり方は好きではありませんが、実力行使です」

「ケケ、俺は最初っからそのつもりだったぜ！」

交渉が無理と判断したフーディン達は戦闘体勢に入る。

「この子は絶対守る！　やるぞ、リザードン！」

「当然だ！　ラティアス、ここは危ないから下がっていてくれ」

リザードンはラティアスにここから離れるように言う。

ラティアスは頷いてその場から離れる。

ラティアスを守る為、バクフーンとリザードンの戦いが始まろうとしていた。

第一話出会い（後書き）

第一話完成です。

リザードン
「よう、リザードンだ。今回登場したコータスのじっちゃん、ボケてるようでボケてない。まあ面白いじっちゃんなんだけどさ。次回はラティアスを狙う謎のポケモン、フーディンとゲンガーと俺達がバトルする話だ。一体どうなる事やら……とにかく、頑張るしかないよな」

第二話旅立ち（前書き）

ラティアスを守るためゲンガーとフーディンにバトルを挑んだバクフーンとリザードンだが！？

第二話旅立ち

「いくぜ、フレアドライブ！」

「火炎放射！」

バクフーンは体に炎を纏(まと)わせてフーディンに向かって突進、リザードンは口から炎を吐き出してゲンガーに向けて放つ。

「同じ手は通用しません、リフレクター！」

「シャドーボール！」

フーディンは前方にエネルギーで作ったバリアを出現させ、バクフーンのフレアドライブを受け止める。

そしてゲンガーは両手で黒いエネルギー弾を作り出して放ち、火炎放射にぶつける。

２つの技がぶつかった事で激しい爆発が発生した。

「ほう……ゲンガーの攻撃と互角に渡り合うとは、意外とやりますね」

相棒のゲンガーが放った攻撃を相殺させたリザードンのパワーを見て、少し驚いた表情を浮かべるフーディン。

「余所(よそ)見してて良いのかよ！」

バクフーンはフレアドライブのパワーを上げ、フーディンのリフレクターを押し始める。

「なかなかのパワーですね……では、私も少しだけ本気でやらせてもらいます」

リフレクターを解除したフーディンはテレポートを使用……瞬間移動をしてフレアドライブを回避し、バクフーンの背後に回り込む。

「サイコキネシス！」

フーディンが強く念じると、バクフーンの体は宙に浮かび上がる。サイコキネシスによって動きを封じられてしまう。

「ク、クソッ！？」

なんとか逃れようともがくバクフーンだが、サイコキネシスから抜け出す事が出来ない。

「バクフーン！」

バクフーンを助ける為にフーディンに攻撃を仕掛けしようとするリザードン。

「ケケ、お前の相手は俺だ！　１０万ボルト！」

バクフーンを助けようとしたリザードンを、ゲンガーは体から強力な電撃を放出して不意打ち。

リザードンは回避出来ずに攻撃をまともに受けてしまう。

飛行タイプを持っているリザードンに電気技は効果は抜群だ。

「ぐあぁっ！？」

１０万ボルトを受けたリザードンはその場に倒れてしまう。
なんとか立ち上がろうとするが、体が麻痺してしまったようで思うように動けない。

「リザードン！？」

「あなたも、そろそろやられなさい」

フーディンはサイコキネシスでバクフーンをリザードンの所まで吹き飛ばした。

「くっ……こ、こいつら強い……」

「ケケケ、お前らが弱いだけだろ？」

ゲンガーはバクフーン達をバカにするように笑いながらそう言い放つ。

「さて……邪魔が入りましたが、本来の目的を果たすとしましょう」

「ケケ、そうだな」

ゲンガーとフーディンはラティアスにゆっくりと近づいていく。

「行か……せるかよ！」

バクフーンは力を振り絞ってなんとか立ち上がり、２人の前に立ちはだかる。
リザードンも行こうとしたが、体が麻痺していて思うように動け

ない。

「ケッ……邪魔だ、退きな！」

行く手を遮るバクフーンに向かって怒鳴るゲンガー。

「退くもんか！　この子は……お前達なんかに渡さない！」

退くつもりは無いバクフーンだが、立っているのがやっとのようで体が震えている。

「……目障りですね。ゲンガー、排除しなさい」

ゲンガーにバクフーンを排除するよう命令するフーディン。

「ケッ、言われるまでもねぇ！」

ゲンガーはシャドーボールを放つ体勢に入る。

「消えな、シャドー――」

「ハイドロポンプ！」

ゲンガーがシャドーボールを放とうとした時、突然背後から大量の水がゲンガーに襲いかかる。

水タイプの技、ハイドロポンプだ。

ハイドロポンプを背中に受けたゲンガーは前方に吹き飛ばされる。

「何者です！？」

突然の攻撃に驚いたフーディンは慌てて後ろに振り向き、攻撃を仕掛けてきた何者かに向かって叫ぶ。

「敵に名乗る必要は無いね、次はお前だ！　ハイドロポンプ！」

謎のポケモンはフーディンに向けてハイドロポンプを放つ。

「光の壁！」

フーディンは前方にリフレクターとは違うバリアのような壁を出現させて、ハイドロポンプを防御する。

「またしても邪魔が入りましたか……さすがにこちらが不利ですね。仕方ありません、今日のところはこれで引き上げます」

フーディンは光の壁を解除し、すぐにテレポートを発動してハイドロポンプを回避、ゲンガーがいる所に瞬間移動する。

「次は必ずそのラティアスを連れて行きますからね……覚悟しておきなさい！」

そう言うと、フーディンはゲンガーと一緒にテレポートで何処かへと消えてしまった。

「ふう……皆さん、大丈夫ですか？」

敵がいなくなった事でほっと一安心したポケモンは、無事かどうかをバクフーン達に尋ねる。

そのポケモンは青を基調とした体色をしていて、硬い岩も砕きそ

うな太くて逞しい腕を持ち、頭には立派な鰭（ひれ）がある。

「嗚呼（ああ）、おかげで助かったよ。ありが……あれ？」

バクフーンは助けてもらったお礼を言いかけた時、そのポケモンを見て驚きの表情を浮かべる。

「ラ、ラグラージ！？」

「えっ、バクフーン！？」

バクフーン達を助けてくれたのはラグラージというポケモンだった。

お互いに名前を知っている事から、どうやら知り合いらしい。

「お前、なんでここにいるんだ？　確かウォーターシティに引越した筈だろ？」

首を傾げながらバクフーンは尋ねる。

ウォーターシティとはバクフーン達が暮らすフレイムシティから少し離れた場所にある港街だ。

「そうだよ。でも、久しぶりにバクフーン達に会おうと思ったからここに来たんだ。そしたら、いきなり爆発音が聞こえてきて……それで急いでここに駆けつけてきたら、バクフーン達がいたって訳」

ここに来た理由をバクフーンに簡単に説明するラグラージ。

「そうだったのか……いやぁ、でもおかげで助かったよ。お前が来

なかったらどうなってたか……」

「ところで……何でこんな場所でバトルしてたの？　それと後ろの子は誰？　見かけないポケモンだけど……」

首を傾げながらラグラージは尋ねる。

バクフーンは今までの事をラグラージに説明する事に。

「……なるほど、大体状況は分かったよ。あっ、そういえばリザードンは何処？」

リザードンの事を思い出したラグラージは辺りを見回し、リザードンを捜す。

「ラグラージ……お前のすぐ後ろだよ」

「えっ？」

ラグラージが振り向くと、そこには麻痺して動けないでいるリザードンがいた。

「お前らなあ……俺がいる事を忘れるなよ！？　まだ体が痺れて動けないっていうのによ……」

２人に忘れられていたリザードンはちょっと泣きそうになってい

る。

「あっ、悪いリザードン」

苦笑いを浮かべながらバクフーンは申し訳なさそうに謝る。

「ラグラージ、悪いんだけど俺達をポケモンセンターまで……連れて行ってくれないかな……」

そこまで言うと、バクフーンは突然大の字になって倒れてしまった。

「えっ!?」

突然バクフーンが倒れたのでラグラージは驚いてしまう。

「は、ははは……俺、もう体力の限界みたい……」

「はあ……もうしょうがないなあ。あっ、ラティアスだっけ？　悪いんだけどちょっと手伝ってくれないかな?」

さすがに1人でバクフーン達を運べないので、ラティアスに手伝ってもらうように頼むラグラージ。

「あっ、はい!」

ラグラージはラティアスと一緒に、バクフーンとリザードンを連れてポケモンセンターへと向かった。

ちなみにポケモンセンターとはラッキーとハピナスと呼ばれる姉妹のポケモンが運営していて、怪我をしたポケモンを治療したり、

旅をしているポケモンを無料で泊めてくれる施設なのだ。

翌日の朝。

「ふぁ～……いやぁ、良く寝た」

念の為ポケモンセンター1日入院する事になっていたバクフーンとリザードン。大きな欠伸(あくび)をしながらリザードンは目を覚ます。

「……あれ？　バクフーン、もう起きてたのか？」

ふと窓際に目をやると、外の景色を見ていたバクフーンを発見するリザードン。

普段バクフーンは起きるのが遅い為、珍しい事もあるもんだとリザードンは驚いている。

「ん？　あっ、おはよう……」

軽く挨拶するバクフーンだが、なにやら元気が無い様子。

「う～ん？」

バクフーンの元気が無い事にすぐ気づくリザードン。しかし、何故元気が無いのか分からないリザードンは首を傾げる。

「おはようさ～ん」

「おはようございます」

その時、寝室にラグラージとラティアスが入ってきた。

「あっ、ラグラージにラティアスか。おはよう」

リザードンは右手を上げ、2人に軽く挨拶する。

「良かった。2人共、元気になったんですね」

バクフーンとリザードンがすっかり回復した姿を見て、ラティアスは嬉しそうに笑みを浮かべる。

「そういえば2人共、ラティアスの記憶が少し戻ったみたいなんだよ」

『本当か！？』

ラティアスの記憶が少し戻った……ラグラージが言った言葉を聞いて、バクフーンとリザードンは驚きの表情を浮かべる。

「ええ、あのゲンガー達に襲われたショックで思い出せました。だけど、まだ全部を思い出した訳じゃないんですけどね……」

全部思い出した訳ではないので素直に喜べないラティアスは複雑

な表情をする。

「それでも、思い出せて良かったよ。なっ、バクフーン？」

「そ、そうだな……」

「……あれ、バクフーンどうしたの？　なんか元気無いみたいだけど？」

バクフーンが元気が無い事に気づいたラグラージはどうしたのかと尋ねる。

それから少し間を空けてから、バクフーンは話し始める。

「俺、ずっと考えてたんだ。またフーディン達が襲って来たら、ラティアスを守れないかもしれないってさ……だから、俺は今よりももっと強くなりたい！」

フーディン達に負けたのが余程悔しかったようで、バクフーンは今よりも強くなりたいと思っているようだ。

「気持ちはわかるけど……でも具体的にどうするのさ？」

首を傾げながらラグラージはバクフーンに尋ねる。

「前にリザードンと話してたんだけど……ポケモンリーグに挑戦しようと思う。各地のジムを巡って、ジムリーダーに勝って強くなってやるんだ！」

ポケモンリーグに挑戦する事……そうすれば自然と強くなるとバクフーンは考えたようだ。

「挑戦って……チームは？　ちゃんとチームは作ったの？」

再び首を傾げながらラグラージが尋ねる。

「あっ、まだ俺とリザードンだけだった……」

右手を後頭部に当て、苦笑いするバクフーン。

「……無計画なとこは相変わらずだねバクフーン……はあ、しょうがない。僕も一緒に行くよ」

僕も一緒に行く、その言葉を聞いたバクフーンとリザードンは驚きの表情を浮かべる。

「い、良いのか！？」

「うん、僕も前からポケモンリーグには興味があったからね。それに……彼女をバクフーン達だけに任せるのはかなり心配だしさ」

ラティアスを見ながらラグラージは答える。

「……あの、私もチームに入って良いですか？」

突然ラティアスがバクフーン達のチームに入りたいと言い出した。

『えーっ！？』

予想外だったラティアスの発言に3人は思わず驚きの声を上げる。

「ダメ……ですか？」

「いやダメじゃないけど……でもどうして？」

何故急にチームに入りたいと言ったのか、気になったラグラージはラティアスに尋ねる。

「私、バクフーンさん達に守られてばかりじゃいけないって思ったんです。せめて、自分の身は自分で守れる位にはなりたい……だから、私もチームに入って一緒に強くなりたいって思ったんです。それに……2人が必死に私を守ってくれたのに、何も出来なかった自分が悔しいんです！　だからお願いします、私もチームに入れてください！」

真剣な眼差しでラティアスはチームに入れてくれとバクフーン達に頼む。

どうやら本気のようだ。

「……わかったよ。一緒に頑張ろう、ラティアス」

ラティアスをチームに加える事にしたバクフーンは笑顔で言う。

「あ、ありがとうございます！」

チームに入れた事を喜ぶラティアス。

こうして4人はポケモンリーグを目指す為、バトルチームを結成した。

「えっとぉ……確かここに閉まってた筈……あっ、あったあった！」

旅の支度をする為、バクフーンとリザードンは自分の家に戻っていた。

バクフーンはバトルで役立つ道具を家中を探し回り、見つけてはリュックに入れるという作業を繰り返している。

「あとこれと、それにあれと～……だぁーっもう！？　面倒だ！適当に入れる！」

途中で面倒になったバクフーンは手当たり次第に道具をリュックに詰め込む。適当過ぎるバクフーンである。

「よし、これで準備ＯＫだ！」

準備出来たバクフーンはリュックを背負い、玄関へと向かう。

「……」

玄関前まで来て、バクフーンは壁に掛けてある１枚の写真を見つめる。その写真には小さなヒノアラシを抱き、優しく微笑んでいるバクフーンが写っていた。

「……じゃあ、行ってくるよ……母さん」

そう呟いた後、バクフーンは外へ出る。

一方リザードンは……

「母さーん！　ラムの実は何処に閉まってるんだっけ？」

様々な木の実を収納してある棚を漁(あさ)っていた。

ラムの実とは、体に悪い状態異常などを回復してくれるありがたい木の実なのだ。

「確かこの辺に……あっ、あったわよ！」

木の実を見つけてくれたポケモンは黄緑色を基調とした体色で首が長く、さらに首周りには大きな花びらがあり、草食恐竜のような姿をしている。リザードンの母親……いや、母親代わりであるメガニウムだ。

「ありがとう母さん」

リザードンはメガニウムからラムの実を受け取り、大きなリュックに入れる。

「……本当に旅に出るの？」

心配そうにしながらリザードンに尋ねるメガニウム。

「うん、もう決めた事だから……」

頷きながらリザードンは答える。

「……わかったわ、あなたが決めた事ですものね。でも……体には気をつけてね？」

「わかってるよ母さん。それじゃ、行って来ます！」

リザードンはそう言うと、皆と待ち合わせをしているフレイムシティにある噴水広場に向かって飛んでいった。

「……行ってしまったのか？」

家の奥から緑色を基調とした体色をしていて、両腕には葉っぱが生えており、肉食恐竜に似た姿をしたポケモンのジュカインがやってきて、メガニウムに尋ねる。

このジュカインはメガニウムの夫、そしてリザードンの父親だ。

「ええ……あなた、きっとあの子は無事に帰ってくるわよね？」

やはりリザードンの事が凄く心配のメガニウム。

「心配するな。あの子は大丈夫だ、俺達が育てた子だぞ？」

腕組みして、リザードンは大丈夫だと言うジュカイン。

「……えぇ、そうですよね」

フレイムシティの噴水広場。すでにそこにはラグラージとラティアスが2人が来るのを待ったいた。

「お～い！」

そこへリザードンが飛んでやってきた。

「悪い、待たせたな」

「やっと来たね。なんか凄いリュック……何が入ってるの？」

リザードンが背負っている大きいリュックを見ながらラグラージは尋ねる。

「木の実だよ。旅先でポケモンセンターが絶対あるとは限らないだろ？　とりあえず、いろいろ持って来たんだ」

「へ～……さすがリザードン、準備が良いね」

「皆もう来てたのか！」

そこにバクフーンが遅れてやって来た。

「バクフーンが遅いだけでしょ！　ってか、荷物少なっ！？」

旅に出るというのに、バクフーンが持っている荷物はバトルに役立つ道具が入った小さなリュックだけ……あまりの少なさにラグラージは驚く。

「そんなの気にしたら負けだぜ♪　それより、早速出発しようぜ～♪」

意気揚々（いきようよう）とバクフーンは出発しようとする。

「ちょっと待ったバクフーン！　まずは何処に向かうか決めないといけないでしょ！」

ラグラージがバクフーンを呼び止める。

「何処に向かうのかって……んなもんジムがある街に決まってるじゃんか？」

両手を腰に当てながらバクフーンは答える。

「ジムにもレベルがあるんだよ。まず最初にレベルが低い順に挑戦してバッジをゲットしないといけないんだ。じゃないと、レベルの高いジムには挑戦出来ないよ？」

ジムにはレベルが8段階存在していて、まずレベル1のジムから挑戦する必要がある。

それから順にレベル2、3のジムに挑戦挑戦する事が出来るのだ。

「えっ、そうなの？」

キョトンとした表情をするバクフーン。

どうやら知らなかったらしい。

「……バクフーン、まさかそんな事も知らないでジムに挑戦するなんて言ってたの？」

目を細め、呆れた表情をしながらバクフーンを見つめるラグラージ。

「えっとぉ……そのぉ……すんません」

肩を落としてしょんぼりするバクフーン。

「はあ……、まずは僕が住んでるウォーターシティに行くよ。あそこのジムはレベル1、最初に行かないといけない場所だからさ」

ラグラージの提案で彼が住む街、ウォーターシティに向かう事が決定した。

「わかった！　まずはウォーターシティだな？　よし、そうと決まったらしゅっぱ～つ♪」

先程までしょんぼりしていた筈が、急に元気になるバクフーン。

「……相変わらず切り替えが早いね、バクフーン」

「誉めんなよラグラージ♪」

「いや誉めてないから」

こうして４人はポケモンリーグに挑戦する為、そしてラティアスの記憶を取り戻す為に旅に出るのだった。

第二話旅立ち（後書き）

第二話が完成しました。

ラグラージ

「どうも、ラグラージだよ。ラティアスの記憶が戻るのを手助けする為、そしてポケモンリーグ挑戦の為に出発したけど……正直不安だよ（汗）特にバクフーン。彼、ある意味でトラブルメーカーだからねぇ（汗）でもまあ、僕やリザードンがいるからなんとかなる…かな？（汗）」

第三話迷いの森（前書き）

ウォーターシティに向け旅を始めたバクフーン達の前には大きな森があった。

第三話迷いの森

「随分大きな森ですね～！」ラティアスが言った。
「ここは別名、迷いの森って言われてるんだ。」ラグラージが答えた。
「何かいやな名前の森ですね・・・」
「確かにね、この森は常に霧が発生していてね、そのせいで方向感覚が失われて永遠に森から出られなくなるって伝説があるんだ！」
その話を聞いたラティアスは怖がってしまった。
「そんな所に入るんですか！？」
「ハハハ、大丈夫だよ！あくまでこれは小さな子供が一人で森に入らない用にって事で大人が考えた作り話だからさ！」
「そうなんですか、ふう良かった～！」（本当良かった～・・・）
「あれれ？バクフーン？何で安心した～って顔してるの？」
「えっ？」
「まさか、この森怖いの？」
「な・・・何言ってるんだよ（汗）そっそんな訳ないだろ！ほら、行くぞ！」バクフーンはやや焦りながら否定して森に入りました。
「あの反応は間違いなくビビってたな！」
「ですね」
「だな」三人は少し笑いをこらえながら言った。
「お～い、早く来いよ～！」バクフーンが三人に呼び掛けた。
「今行くよ～！」リザードンが返事して四人は森に入って行った。
森の中は確かに霧が発生していた。
「そういえばラグラージさん」
「うん？どうしたの？」
「前に話てたジムについて何ですけど、ジムは全部でいくつあるんですか？」
「そういえば説明してなかったね！ジムは全部で８つあってそれぞ

れのジムは一つのタイプを中心にしたチームで構成されてるんだ。これから行くウォーターシティにあるウォータージムは水タイプを中心にしたチームがいるんだ！バトルのルールはそれぞれのジムで違うんだけど、基本は勝ち抜きだね！そしてジムリーダーが率いるチームに勝てればバッジを貰えるんだ！バッジはそのジムを勝ち抜いた証だね！それを８つ全て集めたチームだけがポケモンリーグに挑戦できるんだ！」

「ポケモンリーグ？」

「簡単に言えば全てのバッジを集めたチームがバトルして一番強いチームを決める大会だね！長くなったけど大体解った？」

「はい！ありがとうございました！」

「役に立てて良かったよ。」「ラグラージってそんなに物知りだったか？」バクフーンが不思議そうに質問した。

「君とは違ってちゃんと調べてるんだよ！」

「ムッ！どうゆう意味だよ？」

「君は無計画過ぎるって意味だよ」

「何を～！」「まあまあ！バクフーンが無計画なのは昔からだろ！」

「リザードン・・・お前まで～！」四人はまるでピクニックに来ているみたいに楽しそうに会話していました。それからかなり森の中を進んだのですが中々出口に辿り着けません。「なかなか出口に着きませんね・・・」

「なぁーリザードン！今どの辺かなぁ？」

「俺が知るかよ！ラグラージに聞けよ。」

「じゃあラグラージ！今どの辺？」

「うーん・・・何か僕達、道に迷ったみたいだね・・・」

「えぇ！？」

「大丈夫だよ！今調べてみるからちょっと待ってて！」そう言うとラグラージは目を閉じ意識を集中しはじめた。

「ラグラージさんは何をしてるんですか？」

「ラグラージの頭のヒレはレーダーみたいになってね、周りの様

子を知る事ができるんだ！」リザードンがラティアスに答えた。
「ＯＫ！出口が解ったよ！」
「本当か！」
「うん、ここから北北東の方角だよ！でも、ちょっと気になる事が・・・」
「なんですか？」
「何かがその出口にいるみたい何だ。」
「敵か？」
「そこまでは解らないよ。でも数は二人みたいだよ。」
「とにかく行ってみようぜ！ここにいたってしょうがないし！」バクフーンがそう言うと三人とも頷き出口に向かいました。慎重に進んで行き、出口に到着しました。そこには確かにラグラージが言った通り二人のポケモンがいました。
「ケケケ、おいフーディン！本当に奴らはここに来るのか？」
「私の未来予知を信じてないんですか？奴らは必ずここに来ますよ。」そいつらはラティアスを誘拐しようとしたゲンガーとフーディンでした。
「あいつらは！？」バクフーンが飛び出そうとした所をラグラージに止められました
「落ち着いて！今無計画に突っ込んだらまたやられるよ？」
「じゃあどうするんだよ？」
「ハァ・・・本当昔から変わってないなあ、お前は！」
「ムッ！」
「バクフーン落ち着けって！でっラグラージ、どうするんだ？」
「あいつらに一対一で挑んでも恐らくまた負けてしまう、でも二対一なら勝てるかもしれない！」
「二対一って何か反則じゃね？」
「そんな事言ってる暇はないんだよバクフーン！この子を連れて行かれても良いの？」
「・・・解ったよ！」

「良し。じゃあ二人はフーディンを頼むよ！僕はゲンガーをやる！」
「ちょっとまて！さっき言った事と違うだろ！？」
「僕は平気だよ！君達よりは強いからさ！」
「何かムカつく・・・」
「私も戦います！」
「駄目だよ！バトルでは何が起こるか解らないんだよ？」
「それでも戦います！私は守られてばかりは嫌なんです！」
「ハァ・・・解ったよ。じゃあ僕と一緒にゲンガーと戦おう！でも危なくなったらすぐに逃げるんだよ？」
「・・・はい。」
「良し！じゃあ・・・行くよ皆！」四人は一斉に飛び出しました。
「来ましたか・・・」
「ケケケ、本当に来やがった！」
「今度は負けないぞ！行くぜリザードン！」
「おう！」
「ラティアス！僕から離れないでね！」
「はい！」バクフーン・リザードン対フーディンそしてラグラージ・ラティアス対ゲンガーのバトルが始まりました。
「くらえ！フレアドライブ！」
「リフレクター！」バクフーンのフレアドライブがリフレクターにガードされた。
「攻撃パターンが前と同じですね。それでは私に勝てませんよ！」
「いや、同じじゃねぇよ！リザードン今だ」
「おう！火炎放射！」フーディンがリフレクターでフレアドライブをガードしていて動けない所に空中からリザードンが攻撃しました。
「くっ！テレポート！」フーディンはテレポートで攻撃を回避しました。
「何処に行った！」
「バクフーン！後ろだ！」フーディンはバクフーンの後ろに周り攻撃してきました。

「サイケ光線！」
「させるか！火炎放射！」フーディンの攻撃をリザードンの火炎放射で防ぎバクフーンを守りました。
「サンキューリザードン！」
「油断するなよ！さあ、行くぜ！」
「ＯＫ！でんこうせっか！」
「エアスラッシュ！」バクフーンは先制技で、リザードンは翼から作った空気の刃で攻撃しました。
「がはぁ！」フーディンに攻撃が全てヒットしました。
「どうだ！」
「くっ！どうやら油断したようですね・・・」一方ラグラージ達の方は
「ケケ、シャドーボール！」
「ラティアス後ろへ！」
「はっはい！」
「守る！」ゲンガーのシャドーボールをラグラージは守るで防御した。
「今だラティアス！攻撃だ！
「解りました！ミストボール！」ラティアスの攻撃がゲンガーにヒットした！かなり効いてるみたいだ。
「ケっ・・・予想以上にやるな！」
「よそ見はダメだよ！冷凍ビーム！」ラグラージの攻撃がヒットした。その攻撃でゲンガーは凍りついてしまった。（体が凍って・・・動けねぇ・・・）
「やった・・・んですよね？」
「あぁ、僕達の勝ちだ！」ラグラージ達はゲンガーに勝利した。
「どうやらラグラージ達は勝ったみたいだな！さあどうする？」
「仕方ありません、ここは退きます。ですが私達はまだ諦めてません！必ずラティアスは奪いますからね！」そう言ってフーディンは凍りついたゲンガーと共にテレポートで消えてしまいました。「ラ

グラージ、ラティアス！大丈夫だったか？」
「大丈夫に決まってるでしょ？僕は君達より強いんだから！」
「一言余計何だよお前は！そりに俺達より強いって昔の話だろ！今やったらお前に負けねぇよ！」
「なら試してみるかい？」
「やってやろうじゃねぇか！」
「ハイハイラグラージ、バクフーン！そこまでにしろよ！」バクフーンとラグラージはバトルが終わったばかりでまだ興奮状態のようだった。
「とにかく奴らを倒せたんだから良かっただろ？この子も守れたんだし・・・」その時ラティアスが急に苦しみだした。
「うぅ！？」
「ラティアス！？どうしたの？」
「頭が・・・！？」その時ラティアスの記憶がまた少し戻って来ました。
「ハァ・・ハァ・・ハァ・・」
「ラティアス？」三人が心配そうに声を掛けました。
「・・・大丈夫です・・・また少し思い出しました・・・」
「えっ」
「あいつらは・・・私と兄を狙ってるんです」
「どうして？」
「私と兄だけが持っている物を狙ってるんです」
「それって一体？」
「解りません・・・まだ完全に思い出せないんです。」
「焦らなくて良いよ！ゆっくり思い出して行こう・・・な？」バクフーンが優しく言ってあげた。
「・・・はい。」
「そういえばラグラージ、ウォーターシティはどこだ？」
「あそこだよ！ほら、海の傍に街が見えるだろ？あそこがウォーターシティだよ！」

「あれがウォーターシティ・・・あそこに最初のジムがあるんだな！良し、行こう！」ラティアスを狙う謎の敵を退けラティアスを守る事が出来たバクフーン達。四人が目指すウォーターシティは目の前だ！

第三話迷いの森（後書き）

第三話が完成しました！ジム戦は次に出す予定です！頑張って作ります

第四話初のジム戦前編（前書き）

バクフーン達はついにウォーターシティにやって来た

第四話初のジム戦前編

「やっと着いた～！さあ早速ジムに挑戦しようぜ！」
「ちょっと待ってよバクフーン！今日はポケモンセンターで休もうよ！万全な状態でいかないとジム戦には勝てないよ！それに焦らなくてもジムは逃げないし。」
「うーん、解ったよ。んでポケモンセンターはどっちだ？」
「街の中心にあるからもう少し先だね！」
「解った、んじゃ行くか！」四人は疲れを取る為に今日はポケモンセンターで1日休む事にしました。「ラグラージ、ちょっと良いか？」
「何？どうしたのバクフーン？」
「ちょっと特訓に付き合ってくれないか？」
「特訓？まあ良いけど急にどうしたの？」
「相手は水タイプが中心のチームなんだろ？だから少しでも対策を考えた方が良いかなって思ってさ！」
「解った！確かセンターの近くに練習場があったはずだからそこに行こう！」こうして二人の特訓が始まった。翌日。
「頼もう！」バクフーンが威勢良く言いながらジムの扉を開いた。中は水タイプ中心のジムだけあってバトルフィールドはプールになっていた。プールの中には泳げないポケモン用にちゃんと足場が用意されていた。
「ジムに挑戦ですか？」
「ハイ！あなたがジムリーダーですか？」
「はい、私はミロカロスと申します。あなたの挑戦を受けましょう。」
「ありがとうございます！」「では早速始めましょう。」ミロカロスが率いるチームとバクフーン達はそれぞれのポジションに着いた。そこに審判のハッサムがやって来た。

「チャレンジャーチーム！あなた達のチーム名を教えて頂きたいのですが。」
「チーム名？」
「そういえば決めてなかったね！バクフーン何か良い名前ある？」
「うーん、チームブラストってのはどうだ？」
「うん、良いじゃないの？」
「俺もそれで良いと思う。」「私も良いと思います。」
「良し！じゃあチームブラストでお願いします！」
「解りました。」チーム名を確認したハッサムは審判台に立った。
「これよりジムリーダー率いるチームアクアとチャレンジャー、チームブラストのジム戦を行います！ルールは三対三の総当たり戦になります！どちらかのチームが全て戦闘不能になった時点でバトルは終了です。それでは両チーム出場するメンバーはバトルフィールドへ！」チームアクアはリーダーのミロカロス、フローゼル、シャワーズの三人が出で来た。
「俺は絶対出るからな！」
「バクフーンが出るなら俺もでるぜ！」
「僕も出るよ！ラティアス、悪いけど今回は見ていてくれないかな？」
「解りました。皆さん頑張って！」バクフーン達チームブラストはバクフーン、リザードン、ラグラージの三人が出で来た。
「それでは試合開始！」
「二人共水の波動行きますよ！」
「了解ッス！」「了解だ！」チームアクアは三人で水の波動を放った。
「バクフーン！リザードン！僕の後ろへ！」二人はラグラージの後ろに行った。
「守る！」ラグラージは三人が放った水の波動を守るで防御した。
「良し！さあ二人とも反撃する・・・」
「反撃はさせない！」いつの間にかフローゼルがラグラージの前ま

で来ていた。
「なっ！？」
「アクアジェット！」ラグラージはフローゼルのアクアジェットを受け吹き飛ばされた。
「ラグラージ！この、電光石火！」
「遅いな！高速移動！」バクフーンは電光石火で攻撃したが高速移動により素早さが上がったフローゼルには当たらなかった。
「速い！」
「相手はフローゼルだけじゃないッスよ！」バクフーンの後ろからシャワーズが飛び出した。
「水の波動ッスよ！」
「くっ！フレアドライブ！」シャワーズの水の波動をバクフーンはフレアドライブの炎で蒸発させて防御した。
「へぇ～やるッスね～！」
「余所見すんなよ！火炎放射！」リザードンはシャワーズに攻撃した。
「溶ける！」シャワーズは溶けるで水と一体なって回避した。
「消えた！？」
「消えてないッスよ！オーロラビーム！」シャワーズはリザードンの後ろから攻撃した。
「やべっ！」リザードンは攻撃が当たる寸前で空に飛んで回避した。
「狙い通りッスね！リーダー今ッス！」
「解ってますよ！ハイドロポンプ！」リザードンが上昇するのを待っていたミロカロスが攻撃して来た。
「させない！冷凍ビーム！」ラグラージが冷凍ビームでハイドロポンプを凍らせてリザードンを助けた。
「すまないラグラージ！」
「気をつけて！バラバラに戦ったら負けるよ！リザードン、バクフーンを抱えて飛べる？」
「出来ない事はないがどうするんだ？」

「説明してる暇は無いから頼むよ！」
「解った！」リザードンはラグラージの言う通りバクフーンを抱えて空に飛んだ。
「何をするつもりか知りませんがこれはチャンスですね！フローゼル、シャワーズ、あの二人を水の波動で落としますよ！」
「了解した。」
「ＯＫッス！」三人が水の波動を打つ体制に入ったその時
「地震！！」ラグラージが地震で三人に攻撃した。地震は味方も巻き込む技だがバクフーン達は空中にいるため地震は当たらなかった。
「くっ！そうゆう事ですか・・・フローゼル、ラグラージをお願い出来ますか？」
「任せな！」
「シャワーズは私とあの二人を攻撃します！」
「ラジャー！」フローゼルはアクアジェットでラグラージに、ミロカロスとシャワーズはバクフーン達にハイドロポンプとオーロラビームで攻撃した。
「リザードン！ダブル火炎放射だ！」
「おう！」二人は火炎放射で迎え撃った。オーロラビームはガード出来たがハイドロポンプは技の威力を下げるだけでガード仕切れなかった。ハイドロポンプはリザードンに当たった。
「ぐっ！」
「リザードン！大丈夫か？」
「あっあぁ！」威力が下がっていた為リザードンは持ち堪えた。
「降ろすぞ！これだと狙い撃ちだからな！」リザードンはバクフーンを近くの足場に降ろした。一方ラグラージは
「くっ！攻撃が当たらない！」フローゼルのスピードに翻弄されて攻撃を当てられずにいた。
「そろそろ終わりにするか！」そう言うとフローゼルは距離を取った。
「アクアジェット！」フローゼルは全身に水の鎧を纏い突っ込んで

来た。
「くっ！だったら・・・」ラグラージは身構えた。
「これで終わりだあ！滝登り！！」フローゼルはアクアジェットの勢いを利用して滝登りを使った。
「終わりなのは、君の方だ！アームハンマー！」ラグラージはアームハンマーで迎え撃った。お互いに技を受けた。
「・・・やるな・・・」
「・・・君も・・・ね・・・」そう言うと二人は倒れた。
「ラグラージ、フローゼル戦闘不能！」審判のハッサムがジャッジした。
「ラグラージ！大丈夫か？」
「・・・なんとか・・・ね・・・後は・・・任せたよ・・・」
「あぁ！」バクフーン達はラグラージをラティアスの所まで運んだ。
「ラティアス、ラグラージを頼む。」
「はい。」ラグラージをラティアスに任せて二人はバトルフィールドに戻った。ミロカロス達もフローゼルを休ませるとフィールドに戻った。
「それでは試合再開！」再びバトルが始まった。果たして二人はバトルに勝つことが出来るのか？

第五話初のジム戦後編（前書き）

ラグラージとフローゼルが戦闘不能になりダブルバトルの形になったバクフーン達！果たしてミロカロス率いるチームアクアに勝てるのか！？

第五話初のジム戦後編

「行きますよ！ハイドロポンプ！」ミロカロスがハイドロポンプで攻撃して来た。
「フレアドライブ！」バクフーンはフレアドライブで対抗した。
「炎は水に弱い！ハイドロポンプを炎技で防ぐ事は出来ませんよ！」
「そんな事・・・やってみなきゃ解らねぇだろ！」バクフーンはフレアドライブのパワーを上げた。するとハイドロポンプが少しづつ蒸発していった。
「ウォォォ！！」そしてハイドロポンプは完全に蒸発した。
「そんな！？」
「ハァ・・・ハァ・・・だから言ったろ？やってみなきゃ解らねぇって！」
「バクフーンさん凄い！」
「昨日の・・・特訓の成果だな・・・」
「特訓？」
「アイツは僕のハイドロポンプを・・・フレアドライブで防ぐ特訓をしてたんだ・・・」ラグラージは弱りながらも答えた。
「くっハイドロポンプを防がれたのには驚きましたが、まだ勝負はついてませんよ！」
「その通りッス！」シャワーズがいつの間にかバクフーン達の後ろにいた。
「水の波動！」
「エアスラッシュ！」シャワーズの水の波動はリザードンのエアスラッシュに切り裂かれた。
「サンキュー、リザードン！」
「良いって事よ！さあ反撃開始だ！行くぜ、火炎放射！」
「溶ける！」シャワーズは溶けるでまた水と一体になって回避した。
「またか！」

「俺はそう簡単にはやられないッスよ！オーロラビーム！」再び後ろから攻撃して来た。リザードンは紙一重で回避してすぐにシャワーズに向かって飛んでいった。
「これならどうだ！ドラゴンクロー！！」リザードンのドラゴンクローがシャワーズにヒットした。シャワーズは吹っ飛んだ。
「なかなかやるじゃないッスか！」だがシャワーズは今まで溶けるで回避しつつ防御力を上げていたので余りダメージは受けなかった。
「ちっ！これでもダメか！こうなったら母さんから教わった技しかないな！バクフーン少し時間を稼いでくれないか？」
「解った任せろ！電光石火！！」バクフーンはシャワーズに突っ込んだ。
「当たらないッスよ！溶ける！」シャワーズはまた溶けるで回避した。だがバクフーンの狙いはシャワーズではなくミロカロスだった。
「くらえ！フレアドライブ！！」バクフーンは電光石火のスピードを利用して普通より速いフレアドライブでミロカロスに突っ込んだ。
「アクアテール！」ミロカロスはアクアテールで迎え撃った。互いの技はぶつかり合い二人は吹き飛ばされた。その時
「バクフーン下がってろ！」バクフーンが声のする方を見るとリザードンが技を撃つ体制に入ってた。
「いくぜ、ソーラービーム！！」リザードンは草タイプの大技を放った。
「まずい！リーダー避けて！」だがミロカロスはバクフーンとのぶつかり合いでまだ体制を立て直せない。
「ハイドロポンプ！！」シャワーズはミロカロスの前に立ってハイドロポンプを放った。ソーラービームはシャワーズにハイドロポンプはリザードンに直撃した。
「くっ！・・・」
「へへへ・・・リーダーをやられる訳には・・・いかないッスからね・・・」シャワーズは倒れた。
「シャワーズ戦闘不能！」

「まさか・・・ソーラービームにじゃなく・・・俺を直接狙うとはな・・・がはっ」リザードンも倒れた。
「リザードン戦闘不能！」
「リザードン！大丈夫か？」
「大丈夫だ・・・それよりも・・・負けんなよ・・・」
「あぁ解ってるさ！」残ったのはバクフーンとリーダーのミロカロスだけだ。
「そろそろ決着が着きそうですね！」
「あぁ！だが勝つのは俺だ！」
「バトル再開！」
「ハイドロポンプ！！」ミロカロスはハイドロポンプで先制した。
「電光石火！」バクフーンは電光石火でハイドロポンプを回避した。
「火炎放射！」バクフーンの攻撃はミロカロスに当たった。だが余り効いていないようだ。
「その程度では私は倒れませんよ！水の波動！」「電光石火！」バクフーンはミロカロスの水の波動を電光石火で回避した。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」バクフーンの体力は限界に近づいていた。だがそれはミロカロスも同じであった。
「・・・次で・・・終わりにします！」
「ハァ・・・ハァ・・・あぁ！これで・・・最後だ！」
「行きます！ハイドロポンプ！！」ミロカロスは最大パワーで攻撃した。
「フレア・・・ドライブ！！」バクフーンも最大パワーで迎え撃った。二つの技は激しくぶつかり合った。
「ハァァ！！」少しづつミロカロスが押し始めた。
「クッ！俺は・・・負けねぇ！！」その時バクフーンの体が赤く光始めフレアドライブのパワーが上がった。そしてハイドロポンプを押し返し始めた。
「なっ！？」
「いっけぇ～！！」ハイドロポンプを打ち破り攻撃を決めた。ミロ

カロスは倒れた。
「ミロカロス戦闘不能！よって勝者チームブラスト！！」
「や・・・やったぜぇ！！」ついにバクフーンはミロカロスを倒しました。ラティアス達がバクフーンに近づいて来ました。
「やりましたねバクフーンさん！」
「あぁ！」
「・・・全く、ハラハラさせやがって・・・」
「・・・でも勝てたから・・・良しとしようよ？」四人が喜んでいる時にミロカロスが話掛けてきました。
「負けてしまいましたね・・・」
「ミロカロス・・・」
「まさかあのタイミングで特性の猛火が発動するとは予想外でしたよ！」
「俺はただ無我夢中で・・・」
「でもあなたの勝ちに変わりはありません。さあこれがこのジムを勝ち抜いた証、ウォーターバッジです。受け取って下さい。」バクフーンはミロカロスからウォーターバッジを受け取った。バッジは水をイメージさせる水滴のような形をしている。
「ありがとうございます！最初のバッジゲットだ！」
「そうだったんですか？ではバッジと一緒にバッジケースも差し上げましょう！」
「ありがとうございます！」
「これからも頑張って下さいね！」
「はい！」バクフーン達はついにウォータージムに勝利し最初のバッジをゲットした。次のバッジを目指し彼らの旅はまだまだ続く。

第五話初のジム戦後編（後書き）

かなりバトルのシーンには力が入りました！普通のシーンでもこんな感じに力が入れば良いのですが（＾―＾；）

第六話ライバル登場（前書き）

ウォータージムに挑戦し見事に勝利したバクフーン達。今はポケモンセンターで休んでいた。

第六話ライバル登場

「そういえばラグラージ？次に挑戦出来るジムは何処にあるんだ？」
「次はライトニングシティにあるライトニングジムだね！」
「そうか。そういえばラティアスとバクフーンは何処に行ったんだ？」
「あぁ、街を観光したいからって出掛けて行ったよ！」
「何でバクフーンまで一緒に行くんだ？」
「暇だから一緒に行くって！」
「ジム戦終わったばかりなのに元気だなぁ！まぁアイツらしいけど！」その頃バクフーンとラティアスは街の中を観光していた。ウォーターシティは港街なので様々な地方から来たポケモン達で賑わっていました。
「結構賑やかな街ですね！」
「そうだな！」
「あれ？バクフーンさんあそこで何かやってますよ？」そこには小さなバトルフィールドがあった。どうやらバトル大会が行われるらしい。
「へぇバトル大会か！ちょっと見て行く？」
「良いですよ！」バクフーン達はそのバトル大会を見学する事にしました。ちょうど大会は決勝戦が始まる所だった。
「これより決勝戦を行います！それでは選手はバトルフィールドへ！」審判のハッサムがそう言うと二人のポケモンがやってきた。
「あれが決勝を戦う二人みたいですね？」
「そうみたいだな！どんなバトルするのかな？楽しみ♪」
「それでは試合開始！」決勝戦が始まった。
「おいらはマッスグマ！よろしく」
「俺はゴウカザルだ！さあ熱いバトルをしようぜ！行くぜ、マッハパンチ！」ゴウカザルはマッハパンチで先制した。ノーマルタイプ

のマッスグマに格闘タイプの技マッハパンチは効果が抜群だ。
「まだまだ行くぜ！次は・・・」ゴウカザルが次の攻撃をしようとしたらマッスグマが倒れてしまった。どうやら急所に当たったらしい。
「勝者ゴウカザル！」周りで見ていた客は歓声をあげた。
「もう終わったのか！？」「何かあっという間でしたね・・・」その時優勝者のゴウカザルに大会主催者のオーダイルから優勝トロフィーが授与された。
「大会優勝おめでとう！どうだった？この大会は？」
「正直期待ハズレだったな！もっと強いヤツと俺は戦いたいんだ！」
「そっそうか、ふ～むでは！」するとオーダイルは周りにいるギャラリーにある提案をした。それは今優勝したゴウカザルに挑戦してみないかとゆうものだった。「バトルに自信がある者はいないか？この優勝者に挑戦する勇気ある者は！？」
「バクフーンさん？まさか挑戦するんですか？
「もちろん♪大丈夫、無理はしないから！」そう言うとバクフーンはバトルフィールドに行った。
「君が挑戦するのかい？」
「あぁ！」
「解った！ではハッサム、審判の方をよろしく頼むよ。」
「解りました！では両者これよりバトルを始めます！ルールは制限時間五分のシングル戦になります！それでは試合開始！」「俺はバクフーンだ！」
「俺はゴウカザル！俺を楽しませてくれよ！マッハパンチ！」ゴウカザルはマッハパンチで先制した。だがバクフーンはそれを受け止めた。
「何！？」
「俺は簡単にはやられないぜ！電光石火！」今度はバクフーンが反撃した。ゴウカザルは電光石火を受けた。
「クッ！やるじゃねぇか！」

「まだまだこれからだぜ！」
「面白い！さあ熱いバトルをしようぜ！フレアドライブ！」ゴウカザルがフレアドライブで攻撃した。
「だったら俺もフレアドライブだ！！」バクフーンもフレアドライブで攻撃した。二つの技が激しくぶつかり合い二人は吹き飛ばされた。
「まだまだ～！」
「負けねぇ！！」二人は再びフレアドライブで攻撃した。互いに一歩も譲らず激しい攻防が続いた。そして試合開始から五分がたった。
「そこまで！この勝負時間切れの為引き分け！」
「引き分けか～！でも楽しいバトルだったぜバクフーン！」
「俺も楽しかったぜゴウカザル！」二人は握手をした。その瞬間ギャラリーから歓声があがった。大会を終えたバクフーンとラティアスはポケモンセンターに戻る事にしました。その帰り道
「お～いバクフーン！」ゴウカザルがやって来た。
「ゴウカザル？どうしたんだ？」
「お前これから何処に行くんだ？」
「ポケモンセンターで休んだ後次のジムがある街に行く予定だけど？」
「て事はお前チームを持ってるんだな？」
「そうだけど？」
「じゃあ俺と同じだな！」
「えっ？」
「実は俺もチームを持ってるんだ！」
「そうなのか！」
「あぁ、ジムに挑戦するって事はポケモンリーグにも挑戦するんだろ？」
「もちろん！」
「じゃあ次に会う時はポケモンリーグで会おうぜ！そこで今日の決着を着ける！」

「望む所だ！」二人はポケモンリーグで再会を約束して別れた。「ライバル登場って感じですね？」
「あぁ！」バクフーンとラティアスはポケモンセンターに戻って来た。その時にはもう夜になっていた。
「ただいま～！」
「随分遅かったね？ちょっと心配したよ！」
「ワリィワリィ！ちょっとバトル大会に出ててさ！」
「ジム戦の後にバトル大会に出たの！？」
「楽しかったぜ♪」
「一体何処にそんなに元気があるんだよ？」
「まぁ良いだろ！所で次のジムがある街は何処にあるんだ？」
「ライトニングシティだよ！明日の朝には行く予定だから早く寝なよ？」
「解ったよ！」バクフーン達は朝に備えて寝る事にしました。翌朝
「ようし！皆準備できた？」
「ハイ！」
「俺も準備ＯＫだ！」
「俺も・・・ふぁ～・・・」バクフーンは眠そうだ。
「しっかりしろよ！ほら行くよ！」
「お～・・・」四人はウォーターシティを出発した。目指すは次のジムがある街のライトニングシティだ！

第六話ライバル登場（後書き）

第六話が出来ました！今回はバクフーンのライバルになるゴウカザルを登場させてみました！他にもライバルを登場させようかなって思ってます！

第七話新たなる刺客（前書き）

ライトニングシティに向けて旅を続けるバクフーン達。しかしバクフーン達の前に新たなる敵が現れようとしていた・・・

第七話新たなる刺客

「なぁーラグラージ！まだ着かないのか～？俺疲れたよ～！」
「うるさいなあ！まだ着かないよ！大体ジム戦やった後にバトル大会にも出れるやつが何で歩いてるだけで疲れるんだよ！？」
「だって疲れたんだもん！おんぶして♪」
「子供かお前は！？」
「ハイハイ！二人ともそこまでだ！バクフーン、もう少し我慢しな！それに、ライトニングシティにもバトル大会があるらしいぜ？」
「マジで！？だったら早く行こうぜ！」バクフーンはジム以外にバトル大会もあると聞いた途端元気になり走りだした。
「疲れたんじゃなかったのか？それにしてもさすがリザードン！アイツの扱い方良く解ってるね！」
「まぁ長い付き合いだからな！」
「あの～本当にライトニングシティにもバトル大会があるんですか？」
「ん？あれは嘘だよ！ああでも言わなきゃアイツずっと文句言ってるからさ！」
「やっぱり」
「お～い早く来いよ～！」三人が来るのが遅いのでバクフーンが呼んだ。
「ちょっと待ってよバクフーン！大体道解ってんの～？」
「あっ・・・」
「ハァ・・・解ってないなら先に行かないでよね！」
「・・・スンマセン」
「まぁ反省したなら良いけど、目の前に見える山があるでしょ？あそこを越えて行けばライトニングシティが見えてくるはずだよ！」
「そうか！良し行こうぜ♪」バクフーンはまた走りだした。
「・・・絶対反省してない！」

「まぁまぁ！さあ俺達も行こうぜ！ほっとくとアイツどんどん先に行っちまうよ！」
「ハァ・・・解ったよ！行こうラティアス」
「ハイ！」四人は山を目指して進んで行きました。しかしその四人を追跡する者がいました。
「・・・奴らか？」
「えぇ」
「見た感じ弱そうだが本当に奴らに負けたのか？フーディン？」
「私は負けてません！ただ状況が悪くなったので退いただけです。」
「それは負けて逃げたって事じゃ？」
「・・・黙らないと排除しますよ、ヨノワール！」
「そう怒るな！同じ幹部じゃないか？」
「ふん！」
「それよりもお前はこれ以上失敗は許されないぞ！ボスはかなり怒ってたぞ？」
「解ってます！」
「まあ今回はお前は見ていろ。ラティアス捕獲は俺と俺の部下に任せろ。」
「手柄を独り占めする気ですか！？」
「さっきも言ったがお前はもう失敗は許されない。だから俺がお前の変わりにやってやるってんだ！感謝して欲しいね！」
「・・・」
「まっ今回は大人しくしてろよ？」ヨノワールはそう言い残すと姿を消した。一方バクフーン達はライトニングシティを目指して山越えを始めていた。
「リザードンさん！」
「ん？どうしたラティアス」
「気になってた事があるんですけど、リザードンさんは何でソーラービームを使えるんですか？」「あぁ！あれは母さんのメガニウムに教えてもらったんだ！」

「お母さんのメガニウムさんに・・・ですか?でもリザードンさんは・・・」
「ラティアス!」
「えっ!?」ラティアスがリザードンに質問しようとしたらラグラージがそれを止めた。
「ラグラージ、良いんだ!」
「でも・・・」
「別に隠す事じゃないだろ?」
「・・・解ったよ」
「ラティアス、確かに俺は炎タイプのポケモンだ。母さんが草タイプのポケモンなのが不思議なんだろ?」
「ハ・・・ハイ」
「実は俺、捨てられたんだ」
「えっ」
「俺がタマゴだった時に家の前に捨てられていて、母さんがそれを見つけて俺を拾ってくれたらしい。」
「すっすみません!こんな質問して!」
「別に良いよ!謝らなくても」
「でも・・・」
「俺は大丈夫だからさ!確かに捨てられたのはショックだけど、俺にはここまで育ててくれた母さんや父さんがいる!それに本当に一番辛いのは俺よりバクフーンだからさ」
「え?」
「アイツの母親は・・・」リザードンがそう言いかけた時
「シャドーボール!」何者かに奇襲された。シャドーボールはラティアスに向かっていった。
「きゃあ~!」
「フレアドライブ!」シャドーボールが当たりそうになった時バクフーンがフレアドライブで阻止した。
「大丈夫かラティアス?」

「はっハイ！」
「誰だ！こんな事をするのは！？」「ほう！俺のシャドーボールを防ぐか！」バクフーン達の目の前にヨノワールが現れた。
「お前は誰だ！？」
「俺はヨノワールだ！フーディンが世話になったらしいな！」
「フーディン！？て事はアイツの仲間か？」
「まっそんなとこだ！ラティアスは頂いていくぜ！」
「お前達は何故この子を狙う！」
「正確にはそいつだけを狙ってる訳じゃあないが良いだろう、教えてやるよ！俺達の狙いはそいつら兄妹が持っている心のしずくだ！」
「心のしずく？」
「そうだ！俺達はその心のしずくが持つパワーが狙いなのさ！」
「待て！ラティアスは心のしずくを持っていないぞ！」
「そりゃそうだ！心のしずくは普通の代物ではない、そいつら兄妹の命そのものだからな！」
「何！？」ヨノワールの言葉にバクフーン達は衝撃を受けた。
「私か・・・兄さんの・・・命？」一番衝撃を受けたのはラティアスだ。
「知らないはずはないだろ？お前達兄妹が一番解ってる事だ！」
「私と兄さんの・・・うっ！？」
「ラティアス！？」ラティアスが苦しみだした。
「頭が・・・！？」ラティアスの頭の中の記憶が完全に戻ろうとしていた。
「何か知らんが動けない今がチャンスだな！出てこいヤミラミ供！」
「ウィ～！」ヨノワールが叫ぶと突然ヤミラミが五人現れバクフーン達は囲まれた。
「ヤミラミ供！ラティアスを捕えろ！」
「ウィ～！」
「来るぞ！リザードン、ラティアスを抱えて飛んでくれ！」
「解った！」

「ラグラージ！俺の後ろは任せたぜ！」
「それは僕のセリフだろ？」バクフーンとラグラージはリザードンとラティアスを空に逃がしヤミラミ達を迎え撃った。
「火炎放射！」
「ハイドロポンプ！」バクフーンの火炎放射とラグラージのハイドロポンプがヤミラミ達に炸裂し全員吹き飛ばされた。
「あれ？こいつら弱！？」
「フーディンの仲間でも力は低いって事かな？」
「フッ、ヤミラミ供！自己再生しろ！」ヨノワールが指示するとヤミラミ達の体が光始め傷がみるみるうちに治っていく。
「回復した！？」
「俺の部下を甘くみない方が良いぞ！さあやれ、ヤミラミ供！」
「ウィ～！」
「くっ火炎放射！」
「ハイドロポンプ！」再び二人は攻撃した。そしてヤミラミ達に炸裂し吹き飛ばしたが、また自己再生で復活した。
「またかよ！？」
「これじゃきりがないね・・・どうすれば良いんだ？」「このままだと二人共やばいな・・・」
「・・・思い出した・・・」
「ラティアス？」
「私と兄さんは世界を旅していてその途中でアイツらに襲われて、兄さんは私を逃がす為に囮になってくれたんです。でも私は逃げ切れずに攻撃を受けて海に落ちてしまった。」
「それで、あの浜に漂着したのか・・・」その時地上ではバクフーンとラグラージが必死に戦っていた。だが何度も立ち上がるヤミラミ達にてこずり次第に体力を奪われていく。
「ハァ・・・ハァ・・・こいつらしつこいぞ！」
「こいつらを一発で仕留めないとダメみたいだね・・・」
「一発か・・・」

「バクフーン！ラグラージ！」その時リザードンとラティアスが降りてきた。
「バカ！何で降りてきた！？」
「バカはねぇだろ！助けに来たんだよ！」
「ラティアスは？」
「私は大丈夫です！それよりコイツらを早く倒しましょう！」
「倒すっていったいどうするの？」ラグラージが質問した。
「バクフーンの技なら出来るはずだ！バクフーンこれを！」
「オボンの実？」
「それで体力を回復するんだ！そしてあの技を奴らにぶちかませ！」
「解った！やってみる！」バクフーンはそう言うとオボンの実を食べ体力を回復してから自分のリュックから木炭を取り出した。木炭は持っていると炎タイプの技の威力を上げてくれるアイテムなのだ。
「私が援護します、思いっきりやって下さい！」
「ＯＫ！行くぜ！最大パワーの・・・噴火だぁ！！」バクフーンは炎タイプの大技噴火をくりだした。
「手助け！」ラティアスはサポート技の手助けで噴火の威力を更に上げた。噴火攻撃はヤミラミ達に炸裂し全員戦闘不能にした。
「なっ！？俺のヤミラミ供が！」
「やったぜ！さあどうするヨノワール？」
「くっ！仕方ない、野郎供引き上げるぞ！」そう言うとヨノワール達は姿を消した。
「ふぅ！何とかなったね！」
「二人共大丈夫ですか？」
「大丈夫だ！それよりラティアスの方こそ大丈夫なのか？」
「ハイ！記憶も戻りましたし！」
「そうか・・・って記憶戻ったのか！」
「えぇ！」
「そうか！良かったな、ラティアス！」
「ありがとうございます！」バクフーン達はラティアスの記憶が戻

った事を喜んだ。
「後は君のお兄さんを見つけないとな！」
「ジム巡りをしていればそのうち会えるよ！頑張ろ！」
「ハイ！」四人はラティアスのお兄さんを見つけだすため再び次の街を目指して行きました。

第七話新たなる刺客（後書き）

実は自分が小説を書く時、その日に思いついたストーリーをそのまま書いちゃうんです！ですので、ストーリー展開がおかしくなるかもしれません！そうならないように努力します！

第八話バクフーンの過去（前書き）

ヨノワールを何とか追い返す事がバクフーン達は山越えを再開しましたが・・・

第八話バクフーンの過去

バクフーン達はヨノワールの襲撃で今日中に山越えが出来ず近くにあった洞穴で野宿する事にしました。
「すっかり暗くなったな！」
「そうだね、夜道は危険だから今日はここで野宿だね！」
「ハァ・・・ジム戦が～！」
「しょうがないだろバクフーン！それにジムは逃げたりしないよ！焦らない焦らない！」
「ちぇ～、解ったよ！んじゃお休み♪」そう言うとバクフーンはあっという間に眠ってしまった。
「寝るの早！？」
「コイツは何処でも寝れるやつだからな！それに疲れたんだろ？そっとしといてやろうぜ！」
「そうだね！」
「あの・・・」
「ん？どうしたラティアス？」
「ヨノワールとバトルする前に私に何か言おうとしてましたよね？バクフーンさんのお母さんがどうとか」
「・・・そうだったな」リザードンはバクフーンが完全に寝てるか確認してからラティアスに話した。
「コイツの母親は殺されたんだ・・・しかも目の前で・・・」「えっ！？」
「まだ俺がヒトカゲでコイツがヒノアラシの時だ、あの頃はいつも二人で遊んでいた。その日もいつもと変わらなかったんだ。遊び疲れた俺達は家に帰る途中だった、その時そいつは現れた！全身が真っ黒で不気味に光る目、俺達は見た瞬間普通じゃないとすぐに思った。逃げようと思ったその時いきなり攻撃をして来たんだ！俺達はその一発で大怪我をしてしまった！動けない俺達にそいつは更に攻

撃をしようとしていた、正直もうダメだと思ったその時にコイツの母親が助けに来てくれたんだ！そして謎のポケモンとバトルした。コイツの母親はかなり強かったんだ、ジムリーダーになれる位！あと少しで勝てる所まで来た時にそいつはヒノアラシに向かって攻撃をした！母親はヒノアラシを守る為にその攻撃を受けてしまった！当たり所が悪かったせいで母親は死んでしまった・・・謎のポケモンはそれを確認すると何処かに消えていった。」「そんな過去が・・・バクフーンさんに・・・とても信じられません・・・」「まぁ今までのバクフーンを見ていたお前には想像できないよな・・・でもこれは本当にあった事なんだ。」

「・・・そんな事があったのに何でバクフーンさんは明るく振る舞えるんですか・・・？」

「俺も解らない・・・本当は辛いはずなのにな・・・この話はもう止めよう！そろそろ寝ないと明日起きれないぞ！」

「えっ・・・はい・・・」リザードンはそう言うと眠ってしまいました。しかしラティアスはバクフーンの事が気になりなかなか眠れないでいた。「・・・ダメだ・・・全然眠れない・・・」ラティアスは洞穴から出て外の景色を見て気持ちを落ち着かせようとした。

「キレイな星・・・」その時

「寝れないのか？」ラティアスがその声がする方を見るとバクフーンがいた。

「バクフーンさん！？起きたんですか？」

「ちょっと早く寝過ぎて目が覚めちゃった♪それでラティアスがいないのに気づいて外に出たらここに君がいたって事！」「そう・・・ですか」

「うわぁ！キレイな星だなぁ！」

「えっ・・・あっそうですね。」

「ん？どうしたんだラティアス？何か元気ないけど？」バクフーンに言われラティアスは思いきってリザードンに聞いた事を話した。

「・・・リザードンのヤツ話したのか・・・」

「ごめんなさい！本当はこんな事聞いちゃいけないって思ったんですけど・・・」
「・・・別に謝る事はないよ」
「えっ？」バクフーンの意外な返事にラティアスは少し驚いた。
「確かに目の前で母さんが殺されたのはかなりショックだった！敵討ちをしようと思ってバトルの特訓も毎日した！でも、ある時浜辺で休んでる時に母さんの言葉を思い出したんだ・・・」
「どんな言葉ですか？」「自分の力は何か人の役立つ事や自分の夢の為に使いなさい、決して復讐のためや悪事に使ってはいけないって。」
「良い言葉ですね・・・」
「あぁ！だから俺は復讐は辞めようと思った！今は君の力になりたいんだ！」バクフーンの言葉にラティアスは少し顔を赤くした。
「それに俺には夢も出来たし！」
「夢？」
「うん！ポケモンリーグで優勝したいって夢が！」
「きっと叶いますよ！バクフーンさんなら！」「ありがとう！そろそろ戻ろうか？」
「ハイ！」バクフーンとラティアスは洞穴に戻っていった。翌朝、
「おはようございます！」
「おはようラティアス！」
「あれ？珍しくバクフーンが早く起きてる！」
「何だよラグラージ！早く起きちゃいけないのか？」
「いや別に・・・」
「おはよう！ん、何だ？バクフーンが早く起きてる！」
「リザードンまで何だよ！」「こりゃ今日は嵐でもくるな！」
「いや嵐どころか大津波が来るかもよ！」
「何で早く起きただけでそんなに言われないといけないんだよ！？」
三人は他愛のない話で盛り上がった。その時ラティアスは何かを感じとった。

「この感じ・・・」
「どうしたのラティアス？」
「兄さん・・・？」
「え？」その時ラティアスは意識を集中し始めた。するとラティアスの目が光った瞬間バクフーン達の目の前に別の景色が見えた。
「な、何だ！？」「これは・・・ライトニングシティ？」その景色は今向かっているライトニングシティでした。ラティアスが集中するのを止めると見えていたライトニングシティの景色は元の洞穴の景色に戻った。
「今のは、いったい？」
「今のは夢写しです。」
「夢写し？」
「夢写しは私や兄さんが見ている景色を相手に伝える特別な技なんです。」
「その夢写しが発動したって事は！」
「えぇ！兄さんはライトニングシティにいます！」
「でも、何で今まで夢写しが発動しなかったんだろ？」
「それは多分私が記憶を無くして技の使い方を忘れていたせいだと思います。」
「そんな事より！ラティアスの兄さんがライトニングシティにいるんだろ？だったら早く行こうぜ！」
「ハイ！」四人はラティアスの兄がいるライトニングシティに急いで向かいました。果たしてそこには本当に兄はいるのでしょうか？

第八話バクフーンの過去（後書き）

第八話が出来ました！今回はバトルが無くて何かバクフーンの過去話とかになっちゃいました！ちゃんと書けたか少し不安です（汗）

第九話兄妹の再会！二つめのジム！（前書き）

バクフーン達はラティアスの兄がいるライトニングシティに急ぎ向かった！

第九話兄妹の再会！二つめのジム！

「着いた～！」
「ここの何処かにラティアスの兄さんが・・・」
「皆で手分けして探そう！ラティアス、兄さんの特徴と名前を教えて！」
「ハイ！兄さんの名前はラティオス、特徴は私とほぼ同じですけど体の色は青色です！」
「それだけ解れば十分だよ！よしバクフーンは街の西側をリザードンは東側をラティアスは北側を僕は南側を探す！」
「ＯＫ！」
「解った！」
「解りました！」四人はそれぞれ別の場所でラティオスを探しました。ですが、なかなかラティオスが見つかりません。
「兄さん・・・何処？」その時ラティアスが探していた街の北側の外から爆発音が聞こえてきました。
「なっ何！？」ラティアスは急いで爆発音がした方へ向かいました。そこで見たのは誰かが激しいバトルをしたのか森の木がなぎ倒されていました。その時ラティアスは倒された木を見て何かに気づいた。
「木が・・・凍ってる？」木の一部が凍りついていました。
「バトルしてるのは氷タイプのポケモン？相手は誰？」ラティアスは辺りを見回しました。その時また爆発音が聞こえてきました。
「近い！」ラティアスはすぐに向かいました。そこには二人のポケモンがバトルしてました。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」
「さすがにやるわね！でもそろそろ決めさせてもらうわよ」バトルしていたのは一人は氷タイプのユキメノコ。そしてもう一人は・・・
「兄さん！！」ラティアスは叫んだ。すると二人はラティアスの方を見た。

「ラティ・・・アス？」
「あらあら！ターゲットがもう一人、これはついてるわね！あなたから先に捕まえてあげるわ！冷凍ビーム！」ユキメノコはラティアスに冷凍ビームを発射した。
「止めろ～！！」ラティオスはラティアスをかばって冷凍ビームを受けてしまい凍りついてしまった。
「兄さん！！」ラティオスは倒れた。
「まずは一人・・・ウフ、安心なさい！あなたも凍らせてあげる！冷凍ビーム！」ユキメノコは再び冷凍ビームを発射した。
「守る！」ラティアスは守るで冷凍ビームを防御した。
「抵抗する気？」
「・・・あなたは・・・許さない！！ミストボール！！」ラティアスは怒りのミストボールをユキメノコに発射した。
「あらあら！怒るとせっかくの可愛い顔が台無しよ？影分身！」ユキメノコは影分身をしてミストボールを回避した。更にラティアスは分身に囲まれた。
「くっ！本物はどれ！？」
「無駄よ、あなたに私は倒せない・・・シャドーボール！」ユキメノコは背後から攻撃した。
「きゃあ！」ラティアスは攻撃を受けてしまった。
「うっ・・・！」
「だから言ったでしょ？あなたに私は倒せないって！さあ、あなたも凍りなさい！」ユキメノコは冷凍ビームを撃つ体制に入った。
「私じゃ・・・ダメなの？・・・兄さん・・・」ラティアスは凍りついたラティオスを見た。
「いくわよ！冷凍・・・」その時！
「フレアドライブ！！」ユキメノコはフレアドライブを受けて吹っ飛ばされた。
「大丈夫か？」バクフーンだ！
「バクフーン・・・さん・・・」

「後は任せろ！お前は兄さんの所に！」バクフーンはそう言うとユキメノコの所に向かった。
「・・・痛いじゃない！あなた誰よ！？」
「俺はバクフーンだ！よくもラティアス達を！」
「バクフーン？あぁフーディンが言ってた邪魔者ってあんたね？」
「お前もフーディンの仲間なのか！？」
「えぇ！私はユキメノコ！漆黒の闇の幹部がその一人！」
「漆黒の・・・闇？」
「そうよ！私達の組織の名前よ！覚えておきなさい！」
「いったいお前達の狙いは何だ！？何故心のしずくを狙う？」
「それはこの平和な世界を破壊するためよ！」
「何！？」
「おっと話過ぎたわね！さあ、邪魔者は消えてもらうわ！冷凍ビーム！」ユキメノコは冷凍ビームを発射した。バクフーンは凍りついた。
「凍ってしまえば何も出来ないでしょ？アハハハハ！」その時バクフーンの氷が溶け始めた。「何！？」
「俺にこんな氷は通用しない！」バクフーンはフレアドライブの炎で氷を溶かしたのだ。
「やるじゃない！氷が駄目ならこれでどう？水の波動！」ユキメノコは水の波動で攻撃した。
「電光石火！」バクフーンは電光石火で回避した。
「水タイプの技を使えるのか！」
「幹部を舐めてもらっちゃ困るわね！さあまだいくわよ！」その時！
「火炎放射！」
「ハイドロポンプ！」二つの技がユキメノコに襲いかかる。
「影分身！」ユキメノコは影分身でこれを回避した。
「今度は何よ！？」
「バクフーン！大丈夫か？」
「遅くなってごめん！」リザードンとラグラージが駆け付けてきた。

「三対一はさすがに無理ね、ここは逃げるが勝ち！吹雪！」ユキメノコは吹雪でバクフーン達の視界を遮った。
「くっ前が見えない！」
「次は必ず兄妹を奪ってあげる！覚悟しなさい！オ～ホッホッホ！」吹雪が収まるとユキメノコはいなくなっていた。
「逃げられたか！」
「それよりバクフーン！ラティアスは？」
「あっそうだ！二人ともこっちだ！」バクフーン達はラティアスの所に戻りました。
「ラティアス！」
「・・・みなさん・・・」
「まさかこの凍ってるポケモンがラティオスなの？」
「ハイ・・・お願いですバクフーンさん！この氷を溶かして！」
「任せろ！少し下がってな！フレアドライブ！」バクフーンはラティオスにダメージを与えないように少しパワーを押さえてフレアドライブを使った。氷はみるみるうちに溶けてゆく。
「兄さん！」
「・・・ラティ・・・アス・・・」
「良かった・・・兄さん！兄さん！！」ラティアスは泣きながらラティオスを抱きしめた。「会いたかったよう！兄さん！」
「・・・俺もだよ・・・ラティアス・・・うっ！？」
「兄さん！？」
「・・・すっすまない・・・寒いんだ・・・」
「さっきまで凍り漬けにされていたからな！急いでポケモンセンターに行こう！」四人はラティオスをポケモンセンターに連れて行きました。「あっハピナス！ラティオスは？」
「大丈夫！今は落ち着いて寝てるわ！今日1日安静にしてれば明日には回復するわ！」
「良かった・・・」
「ラティアス、ラティオスについていてあげな！」

「えっ？でもバクフーンさん！ジム戦は？」
「なあに！ジム戦は俺達三人に任せな♪ずっと会いたかったんだろ？」
「バクフーンさん・・・ありがとうございます！」ラティアスはラティオスがいる病室に向かった。
「結構良いとこあるじゃんバクフーン？」
「何だよラグラージ！」
「いや別に！さあジムに行きますか？」
「そうだな！行こうぜバクフーン！」
「おっおう！」三人は二つめのバッジをゲットするためライトニングジムに向かいました。
「頼もう！」バクフーンが門を開くと同時に威勢良く言った。ジムの中には意外に普通のバトルフィールドだけがあった。
「おっチャレンジャーか？」
「あなたがここのジムリーダーですか？」
「そうだ！わしはエレキブル！よろしくな！がっはっはっは！」
「何かすごい元気な爺さんだな・・・」
「うん・・・」
「俺はバクフーンです！よろしくお願いします！」
「うん！元気があってよろしい！早速バトルするかね？」
「はい！ここのバトルルールは？」
「ルールは単純に三対三の勝ち抜き戦じゃ！」
「解りました！」互いのチームがそれぞれのポジションについた。
「これよりジムリーダー率いるチーム雷撃対チャレンジャー、チームブラストのジム戦を開始します！ルールは三対三の勝ち抜き戦になります！どちらかのチームが全て戦闘不能になった時点でバトル終了となります！それでは両チーム一番手の選手はバトルフィールドへ！」審判のハッサムが言った。
「ではデンリュウ、行ってこい！がっはっはっは！」
「は～い！相変わらず声がデカいんだから・・・」

「何か言ったか？」
「いっいえ別に～！」
「まずは俺から行かせてもらうぜ！良いよな？」
「僕は良いけど、大丈夫リザードン？電気は苦手でしょ？」
「相性なんて関係ねぇよ！まっ見てな！」
「頑張れよリザードン！一発でやられるなよ♪」
「解ってる！」チーム雷撃はデンリュウ、チームブラストはリザードンが出で来た。
「さて、バトルを始める前に天井を開けるか！」エレキブルが施設内にあるスイッチを押すと天井が開いた。
「スゲー！」
「これで空を飛びやすくなったであろう？がっはっはっは！」
「相手に有利になる状況作ってどうするんだよ！たくあのボケオヤジ・・・」「何か言ったかデンリュウ？」
「いっいえ別に～！」
「それでは、バトル開始！！」
「先手必勝！火炎放射！」リザードンは速攻で攻撃した。
「光の壁！」だがデンリュウは光の壁で火炎放射を防御した。
「焦っちゃダメだよ～！」
「チッ！ならばこれならどうだ？ドラゴンクロー！」リザードンは接近戦に切り替えてドラゴンクローで攻撃した。だがデンリュウは軽く回避。
「なっ！？」
「だから～焦っちゃダメだって！それ、電磁波！」デンリュウは電磁波で攻撃した。リザードンは急上昇して回避した。
「危ねぇ！」
「油断しちゃダメだよ～！雷！」デンリュウはすかさず雷で攻撃した。リザードンは間一髪それを回避した。
「良し！今度はこっちの番だ！」
「だから油断しちゃダメだって言ってるでしょ～？」

「何だと、ん?」リザードンが後ろを見るとさっき回避した雷がまた襲ってきた。これをギリギリ回避する事が出来た。
「アイツ、雷の方向をコントロール出来るのか!?」
「うんそうだよ!それ!」また雷がリザードンに襲ってきた。
「うわっ!」これも何とか回避したがなかなかデンリュウに近付けないでいた。
「だったらこれでどうだ!」リザードンは急降下した。
「穴を掘る!」リザードンは穴を掘るで地中に潜った。
「地面技を使えるのか!?ヤバい!」デンリュウは雷を止めて防御体制に入った。
「くらえ!」リザードンは地中から現れ一気に攻撃した。デンリュウは回避出来ずに攻撃を受けた。効果は抜群だ!
「はう〜・・・」
「デンリュウ戦闘不能!勝者リザードン!」
「よっしゃ!」リザードンはガッツポーズした。
「良いぞリザードン!」
「その調子だよ!」
「やれやれデンリュウはやられたか、しょうがないのうでは次はサンダース頼むぞ!がっはっはっは!」
「了解・・・」チーム雷撃の二番手はサンダースだ。
「では両者、試合開始!!」
「くらえ!火炎・・・」
「・・・10万ボルト!」リザードンは先手を取ろうとしたが相手のサンダースの方が速く逆に先手を取られた。
「ぐあああ!」リザードンは10万ボルトを受けた。
「・・・雷!」サンダースは至近距離で雷攻撃した。リザードンは回避出来ずに受けてしまった。
「がはっ!」リザードンは倒れてしまった。
「リザードン戦闘不能!勝者サンダース!」
「ターゲット撃破・・・」

「リザードン大丈夫か？」
「あいつ・・・強いぞ！」
「そうみたいだね！よし次は僕が出るよ！」リザードンの次はラグラージが出で来た。
「試合開始！！」
「・・・任務続行」
「さあ！いくよ、地震！！」ラグラージは地震で先制した。
「・・・身代わり！」サンダースは身代わりで自らの分身を作り、その分身を踏み台にしてジャンプして地震を回避した。
「なっ！？」
「・・・フラッシュ！」サンダースはフラッシュを使って強烈な光をラグラージに向けた。
「うわっ！？」ラグラージはもろにその光を見てしまった。
「目が・・・見えない！？」ラグラージは強烈な光を見たせいで一時的に視力を失った。
「・・・破壊光線！」サンダースは破壊光線で一気に勝負を着けようとした。
「守る！」だがラグラージは守るで防御した。
「・・・！」
「残念だったね！目が見えなくも僕は頭のヒレで周りを知ることが出来るんだ！ハイドロポンプ！」ラグラージは正確にサンダースがいる方向にハイドロポンプを撃った。サンダースはさっきの破壊光線の反動で動けずハイドロポンプを受けた！
「・・・無念・・・」
「サンダース戦闘不能！勝者ラグラージ！」
「サンダースもやられるか！やるのう、がっはっはっは！」
「ラグラージ！目は大丈夫か？」
「まだ少しボヤけるけど大丈夫！」「さて、いよいよわしの出番か！がっはっはっは！」
「試合開始！！」

「地震！！」ラグラージは地震で先制した。
「ならばわしも地震じゃ！」エレキブルも地震をした。するとラグラージの地震はエレキブルの地震で攻撃が相殺された。
「くっ！」
「ちゃんと地面対策はしとるんじゃよ！がっはっはっは！いくぞ、雷！」
「雷？僕には電気技は通用しませんよ！」
「早とちりしたぁいかんよ！この雷は攻撃ではない！」
「えっ？」エレキブルは雷を自分に撃った。
「何故自分に？」
「わしの特性は電気エンジンと言っての！電気技を受けるとスピードがあがるんじゃよ！がっはっはっは！」次の瞬間エレキブルは消えた。
「なっ！？何処に？」
「後ろじゃよ！冷凍パンチ！」
「しまっ・・・」エレキブルはいつの間にかラグラージの後ろに周り冷凍パンチをした。ラグラージは回避出来ず攻撃を受けた。すると、攻撃を受けた箇所から凍り始めた。
「くっ！マズイ・・・」どんどん氷は広がっていき完全に凍り漬けにされた。
「さて、そろそろ決めるかの！」エレキブルは攻撃をするため力を溜め始めた。（やばい！早くこの氷から出ないと・・・！）ラグラージは何とか氷から出ようともがくが体は全く動かない。
「ゆくぞ！ギガインパクト！！」エレキブルはギガインパクトで突っ込んで来た。ラグラージは吹っ飛ばされ壁に激突。その衝撃で氷は砕けた。
「くっ・・・」ラグラージは倒れた。
「ラグラージ戦闘不能！勝者エレキブル！」
「まだまだじゃのう！がっはっはっは！」
「ラグラージ大丈夫か？」

「あぁ・・・気をつけろよバクフーン！」
「任せろ！」残ったのはエレキブルとバクフーンだけになった。
「試合開始！！」
「さあ、最後のバトルじゃ！」
「全力であなたを倒します！フレアドライブ！」
「雷パンチ！」二人の技はぶつかり合い爆発が発生し二人は吹き飛ばされた。
「なかなかのパワーじゃのう！」
「まだまだこれからですよ！電光石火！」バクフーンは電光石火で攻撃した。
「守る！」エレキブルは守るで防御した。
「くっ！」
「次はこっちの番じゃ！雷パンチ！」今度はエレキブルが雷パンチで反撃した。
「電光石火！」バクフーンは電光石火で回避した。
「火炎放射！」すかさず火炎放射で攻撃しエレキブルに炸裂した。
「アチチ！やりおったな！地震！！」エレキブルは地震で反撃した。
「うわわ！」バクフーンは地震でバランスを崩した。
「雷パンチ！」そこにエレキブルがすかさず攻撃した。
「くっ！フレアドライブ！」バクフーンはフレアドライブで迎え撃った。再び二つの技がぶつかり合い爆発が発生し二人は吹き飛ばされた。
「がっはっはっは！楽しいバトルじゃのう！」
「えぇ！俺も今すごく楽しいです！」二人はバトルを心から楽しんでいた。
「さあ、行くぞ！雷！」エレキブルは雷を自分に当てスピードをあげた。「更に雷パンチじゃ！」
「だったらこっちは電光石火からフレアドライブだ！」バクフーンは電光石火の勢いを利用してフレアドライブを使った。二つの技は互いに当たりかなりのダメージを与えた。

「ハァ・・・ハァ・・・次の攻撃で最後じゃ！」エレキブルはそう言うと力を溜め始めた。
「ハァ・・・ハァ・・・望む所です！」バクフーンの体が赤く光始めた。特性の猛火が発動したのだ。これで炎技の威力があがった。
「ギガインパクト！！」
「フレアドライブ！！」二人は今出来る最高の攻撃で勝負した。二つの技は激しくぶつかり合い大きな爆発が発生した。
「・・・やりおるわい・・・」エレキブルは倒れた。
「エレキブル戦闘不能！よって勝者チームブラスト！！」
「やったぜ・・・」バクフーンは倒れた。
「バクフーン！？大丈夫か？」
「ハハハ・・・さすがに疲れたよ・・・」
「ほら、僕の肩につかまって！」
「サ、サンキューラグラージ・・・」
「たいしたもんじゃ・・・わしをここまで楽しませた挑戦者は久しぶりじゃ！」エレキブルがデンリュウやサンダースに支えられながらやって来た。
「さあ、これがこのジムを勝ち抜いた証、ライトニングバッジじゃ！受け取れ！」
「ありがとうございます！」バクフーンはライトニングバッジを受け取った。バッジは雷をイメージさせる形で出来ていた。
「良し！二つめのバッジゲットだ！」
「これからも楽しいバトルをするんじゃぞ！がっはっはっは！」バクフーン達は見事に二つめのバッジをゲットした。しかし彼らの旅はまだまだ続く。

第九話兄妹の再会！二つめのジム！（後書き）

第九話完成です。何か書いていたらいつの間にか長くなっていました（^―^；）

第十話ＶＳ漆黒の闇！（前書き）

ライトニングジムのジムリーダーに勝利し、見事バッジをゲットしたバクフーン達！しかし、彼等に漆黒の闇の魔の手が伸びようとしていた・・・『今回の小説の中で一部、技の効果が違うものがあります。黒い眼差しは、本来は相手を逃げる事が出来なくなる技なのですが、今回は相手の動きを完全に止める呪縛系にしてあります。』

第十話ＶＳ漆黒の闇！

ライトニングジムに挑戦して見事勝利したバクフーン達はこのことを知らせようとラティアスとラティオスがいるポケモンセンターに戻る途中でした。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」
「大丈夫かバクフーン？」
「・・・大丈夫だよ♪・・・ハァ・・・」
「明らかに大丈夫じゃないよね？全く！フレアドライブをあんなに連発するからだよ！あの技は確かに強力だけど自分にもダメージがくるんだから！」
「解ってるけど・・・」
「フレアドライブ以外の技をもっと使うべきだよ！噴火とか強力な技持ってるんだから！」
「ハァ・・・ハァ・・・」
「ラグラージ、今はとにかくポケモンセンターに行こう！話はその後だ！」
「・・・解ったよ！」ラグラージとリザードンはバクフーンを支えながらポケモンセンターに戻りました。
「あっバクフーンさん！おかえりなさい！」
「ただいまラティアス・・・ハァ・・・」
「バクフーンさん大丈夫ですか！」
「ちょっと無理しちゃってさ！休ませてあげないと！ハピナス、どこか空いてる部屋はない？」
「今だったらラティオスの部屋にもうひとつベッドがあるからそこを使うと良いわ！」
「ありがとうハピナス！さあ、行こうバクフーン！」
「あぁ・・・」三人はバクフーンをラティオスがいる部屋に連れていき空いてるベッドにねかせてあげた。

「ゆっくり休みなよ、バクフーン」
「ワリィな・・・リザードン・・・」よほど疲れたのかバクフーンはすぐに眠ってしまった。「かなり疲れてたみたいですね、バクフーンさん」
「あぁ、ジムリーダーがかなり強かったからな！」
「それもあるけど、やっぱりフレアドライブの連発が一番疲れた理由だよ！」
「どうゆうことですか？」
「フレアドライブは相手に与えたダメージが自分にもくる捨て身の技なんだ！それを何度も繰り返し使ったから疲れて当然だよ！」
「まあそうだが、勝てたから良いじゃないか？」
「だけどリザードン・・・」ラグラージが続きを言おとしたら
「それよりさラグラージ、トレーニングに付き合ってくれないか？」リザードンが割り込んだ
「えっ？」
「ちょっと試したい事があるんだ！行こうぜ！ラティアス二人の事頼むぜ！」
「ちょっちょっと！？」
リザードンは無理矢理ラグラージを連れ出した。
「急になんだよ！」「こうでもしないとお前ずっと喋ってただろ！バクフーンはバトルで疲れてラティオスはまだ回復してないんだから、あんなにうるさくしたら迷惑だろ！」
「それは謝るよ！でも、バクフーンがあんな無理な戦闘を続けたらポケモンリーグに挑戦する前に体壊しちゃうよ！」
「確かにな、だからそうならないように俺達がもっと強くなってあいつの負担を軽くすれば良いんじゃないのか？」
「それは・・・そうだけど・・・」「だろ？さあ、解ったらトレーニング場に行くぞ！」ラグラージの答えを聞かずに、リザードンは一方的にトレーニング場に連れて行ってしまいました。一方ポケモンセンターのほうでは・・・

「どうしたんだろ、リザードンさん？」ラティアスがリザードンの行動を不思議に思っていたその時
「・・・ここは？」ラティオスが目を覚ました。
「あっ兄さん！・・・良かった、目が覚めたのね！」ラティアスがラティオスを抱きしめる。
「ラティアス、心配かけたみたいだな・・・」「ごめんなさい！あの時、私をかばったせいで兄さんが・・・」
「何を言うんだ、あれはお前のせいじゃないよ・・・」
「でも・・・」
「それよりもお前が無事で良かった・・・」
「兄さん・・・」二人は再び抱き合いました。
「それにしても、今までよく奴らから逃げる事が出来たな？」
「それは、バクフーンさんが助けてくれたから・・・」そう言うとラティアスは眠ってるバクフーンの方を見た。
「この人が助けてくれたのかい？」
「うん、後他にリザードンさんやラグラージさんも助けてくれたの」
「そうなのか・・・なら、ちゃんとお礼を言わなきゃな・・・」その頃とある場所で奴らが集まっていた。
「何が、俺に任せな！ですか！結局失敗したじゃないですか、ヨノワール！」
「あれはあいつらの実力を知る為にやった事だ！まぁ、次で捕まえてやるよ！」
「よく言いますね！負け犬の遠吠えにしか聞こえません！」
「そう言うフーディンは二回あいつらに挑んで失敗したじゃないか！」
「何ですって！」
「おっ、やるか？」二人は戦闘体制に入った。
「止めなよ二人とも！みっともない！」そこにユキメノコがやって来て二人を止めた。
「ユキメノコじゃねぇか！ラティオス捕獲はどうしたよ？」

「途中で邪魔が入ってね、捕まえ損なったよ、フーディンが言ってたバクフーンにね」
「またアイツですか！」「て事は今、ラティオスとラティアスは一緒にいるってことか？」
「あぁ、さらにラティオスの方は一度アタイの冷凍ビームで凍らせたから回復までにはまだ掛かるはずだよ！」
「となると、攻めるには今がチャンスって事だな・・・」
「私が行きましょう！」
「アンタに任せるのはお断りだね！アタイが行くよ！」
「何ですって！」
「まあ待て！今回は俺達三人で行くのはどうだ？」
「何で二人の捕獲に幹部三人が行くのよ？アタイと部下だけで十分だよ！」
「さすがにこれ以上二人の捕獲を失敗する訳にはいかないんだよ！だから確実に捕獲する為に三人で行こうと言ってるんだ！お解り？」
「まぁ、良いでしょ」
「しょうがない、そのかわりアタイの足引っ張るんじゃないよ！」
「それはこっちのセリフだろ？」その頃ポケモンセンターにはバクフーン達全員が揃っていた。
「みなさん、妹と俺を助けてくれて、本当にありがとうございます！」ラティオスが助けてくれた事にたいして感謝の言葉を言った。
「僕達は当然の事をしただけだよ！ね、リザードン？」
「あぁ！」
「それより、これからどうするの？やっぱりラティアスと旅を続けるの？」
「その事なんですが、妹と話して決めました！俺もみなさんのチームに入れて下さい！」
「えっ！？」ラグラージとリザードンは驚いた。「ラティアスや俺を助けてくれたお礼を言葉だけで済ませる訳にはいきません！それに、妹があなた達と離れるのが嫌みたいですから」

「ラティアスが？」二人がラティアスの方を見るとラティアスは少し照れるような仕草をした。
「妹が残りたいなら、俺もチームに入れて欲しいんです！良いですか？」
「僕は良いよ！」
「俺も構わない！良いよな、バクフーン？」リザードンが聞いたが返事がない。まだ眠っているようだ
「まだ寝てるの！？」「たくっ、まあアイツなら即答でＯＫって言うと思うからいいや！んじゃ改めて、チームブラストにようこそ！歓迎するぜ、ラティオス！」
「ありがとうございます！」
「後、俺達と話す時、敬語じゃなくて良いからな！仲間なんだからさ！」
「解った！じゃあ、皆よろしくな！」チームブラストに新たな仲間ラティオスが加わった。皆がラティオスの仲間入りを喜んでいたその時、突然ポケモンセンターが大きく揺れた。
「な、何だ、地震か！？」
「いや、この揺れは地震じゃないよ！何か攻撃をされたような感じの・・・」再びポケモンセンターに衝撃が襲った。
「とにかく様子を見に行こう！」
「ラグラージさん！バクフーンさんはどうしますか？」バクフーンはこの状態でもまだ寝ていた。
「起こしてるヒマはないから、そのままで良いよ！行こう！」
「ハ、ハイ！」四人はバクフーンを残しポケモンセンターの外に出た。
「やっと出てきましたね！」
「待ってぜ！」
「フフフ、今度こそ凍えさせてあげるわ！」
「お前らはフーディン、ヨノワール、ユキメノコ！」そこには漆黒の闇の幹部達がいた。

「ん？バクフーンがいないようだな？」
「良いじゃない！こっちにとっては好都合なんだから！」
「私的には奴を倒したかったのですが・・・」
「本来の目的はラティアス、ラティオスの捕獲だ！忘れるなよフーディン？」
「あなたに言われなくても解ってます！」
「アンタ達！無駄話は良いからとっととやるわよ！」三人が攻撃体制に入った。
「来るよ！リザードン、ユキメノコは任せたよ！」
「任せな！」
「ラティオス！ラティアスと一緒にヨノワールを頼む！」
「解った！行くぞラティアス！」
「うん！」
「僕はフーディンを倒す！」リザードンＶＳユキメノコ、ラティオス＆ａｍｐ；ラティアスＶＳヨノワール、ラグラージＶＳフーディンのバトルが始まった。
「行くぜ、火炎放射！」まずはリザードンは火炎放射で先制した。
「影分身！」ユキメノコはそれを影分身で回避、更に分身でリザードンを囲む。
「だったらこれだ！炎の渦！」リザードンは一度空に上昇して分身達全員に炎の渦を決めた。
「どうだ！」分身は全員消えた。が、そこにはユキメノコ本体がいなかった。
「なっ！？」
「アタイは後ろだよ！」分身を囮にしてユキメノコはリザードンの後ろを取った。
「冷凍ビーム！」
「クソ！」リザードンは回避しようとしたが完全に回避出来ず冷凍ビームは翼に当たってしまい、翼が凍ってしまった。翼を凍らされたリザードンは飛び続ける事が出来ず墜落して行った。

「リザードンさん！」
「余所見はダメだぜ！シャドーパンチ！」ヨノワールはラティアスに拳から黒い固まりをだし攻撃した。
「ラスターパージ！」眩い光に包まれたラティオスがシャドーパンチを防いだ。
「兄さん！」
「ラティアス、今は目の前の敵に集中するんだ！」
「う、うん！」
「行くぞ！」そう言うとラティオスがヨノワールに突っ込んだ。
「ラスターパージ！」再びラティオスは光に包まれた。
「手助け！」ラティアスは手助けでラティオスにパワーを与えた。
それによりラスターパージは先ほどよりも更に光の強さが増した。
「ふん、守る！」ヨノワールの前にバリアのような壁が生まれラスターパージを防いだ。
「くっ！」
「次はこっちの番だ、鬼火！」するとヨノワールの周りに火の玉が出現した。
「更にサイコキネシス！」火の玉をサイコキネシスの力でコントロールしてラティオスめがけて飛ばした。
「神秘の守り！」ラティアスとラティオスの周りに優しい光のベールが現れ鬼火をガードした。
「すまないラティアス！」
「どういたしまして！」その時ラティアス達が戦っている周りが急に歪み始めた。
「な、何！？」
「遊びは終わりだ・・・」いつの間にかヨノワールが目の前に来ていた。
「いつの間に！」
「シャドーボール！」至近距離でラティオスはシャドーボールを受けて吹っ飛ばされた。

「がはっ！？」
「兄さん！」
「次はお前だ！」ヨノワールはすでにラティアスの目の前に来ていた。
「シャドーボール！」再びシャドーボールを使って来た。
「きゃあ！」ラティアスも吹き飛ばされた。
「うっ！・・・何でアイツ、急に動きが良くなったの？」
「おそらく、トリックルームだ・・・」ラティオスが何とか立ち上がりながら言った。
「トリックルーム？」
「周りの空間を歪ませ動きが速い者は遅くなり遅い者は速くなる・・・それがトリックルームだ。」
「良く解ったな！そう、確かにこれはトリックルームだ！この空間の中では俺には勝てないぜ！」「あのヨノワール、あんなに強かったのか・・・」
「あなたの相手は私ですよ！シャドーボール！」フーディンが黒い固まりをラグラージめがけて発射した。
「守る！」ラグラージは守るで防御した。
「こざかしいですね。ならばサイコキネシス！」フーディンが念じ始めるとラグラージの体が宙に浮いた。
「冷凍ビーム！」だがラグラージは冷静に冷静ビームで反撃した。
「くっ、テレポート！」フーディンはサイコキネシスを解除しテレポートで冷静ビームを回避した。サイコキネシスが解除された事によりラグラージは地面に戻った。
「今度はこれだ！地震！！」ラグラージが地震で攻撃した。フーディンはテレポートしたところで地震をくらいバランスを崩した。
「くっ！」
「今だ！ハイドロポンプ！！」ラグラージの口から大量の水が発射された。フーディンは回避出来ずにもろに受け吹っ飛ばされた。
「決まったね・・・早くラティオス達の所へ！」

「ケケケ、行かせるかよ！黒い眼差し！」ラグラージが行こうとした時、誰かに黒い眼差しを使われ体の自由が奪われた。
「な、何！？」
「ケケ、フーディンがいる所にはいつもこのゲンガー様がいるんだよ！」
「良くやりました、ゲンガー・・・」いつの間にか吹っ飛ばされたフーディンは戻って来ていた。しかも自己再生して体力を回復した状態で。
「ク、クソ！」
「ケケ、無駄だ！俺の黒い眼差しからは絶対逃げられねぇよ！」
「さあ、今までの借りをキッチリ返させてもらいますよ！」リザードン、ラティオス、ラティアス、ラグラージが大ピンチになってしまった、その時ポケモンセンターから一人のポケモンが出で来た。
「ふぁ～良く寝た～！」バクフーンだ！
「あれ？ラグラージ、そこで何してるの？」
「いや、何って・・・この状況見れば解るでしょ（汗）」バクフーンは周りの様子を見た。
「フーディン、ゲンガー、ヨノワール、ユキメノコ・・・なるほど、そうゆう事か・・・」すると、バクフーンは準備体操を始めた。
「準備体操してる場合かあ！？」
「だってバトルの前の準備体操は基本でしょ♪」バクフーンの言葉にラグラージは何か諦めたような表情をした。（ダメだ～アイツこの状況理解出来てない～！絶対寝ぼけてる～（泣））
「良し！準備体操終わり♪さて、やりますか♪」するとバクフーンは一気に戦闘体制に入った。
「一体あなた一人で何が出来ると言うのですか？」
「ケケ、確かに！」「俺達は四人、そっちはまともにやれるのがお前だけ！」
「圧倒的アタイ達が有利よ！」四人がそう言い終わった時、バクフーンはそこにいなかった。

「なっ、何処へ！？」
「火炎車！」バクフーンは電光石火のスピードを利用し、フレアドライブよりは威力が落ちるが火炎車でゲンガーを攻撃した。
「げはっ！」その衝撃でラグラージを拘束していた黒い眼差しの呪縛が解けた。
「ラグラージ！フーディンは任した！」「えっ？あっ解った！」バクフーンはそのままの勢いでユキメノコに向かって行った。
「アタイには当たらないよ！影分身！」ユキメノコはリザードンに使った戦法で迎え撃った。
「噴火！！」バクフーンは炎をまるで火山の噴火の如くユキメノコに浴びせた。ユキメノコは回避仕切れず攻撃を受けた。
「いやぁ～！」噴火はダメージを与えるだけじゃなく、リザードンの凍った翼を溶かした。
「リザードン！それで動けるな？」
「お、おう！」そしてバクフーンはヨノワールめがけて突っ込んだ。
「調子に乗るなよ、この野郎！シャドーボール！！」ヨノワールはシャドーボールを連発してバクフーンに向け発射した。
「電光石火！」バクフーンは電光石火でシャドーボールを次々と避けると一気にヨノワールとの間合いをつめた。
「なっ！？」
「フレアドライブ！！」バクフーンは得意技のフレアドライブをヨノワールに決め吹っ飛ばした。その衝撃でヨノワールが維持していたトリックルームが解除された。
「ラティアス、ラティオス！大丈夫か？」
「あ、あぁ！」
「大丈夫です！」バクフーンはあっという間にゲンガー、ユキメノコ、ヨノワールを倒してしまった。残ったフーディンはラグラージに倒された。
「ふう、終わった～♪」リザードン、ラグラージ、ラティアス、ラティオスは不思議そうにバクフーンを見ていた。

「な、何？俺の顔に何か付いてる？」
「い、いやそうゆう事じゃないんだけど、バクフーンってこんなに強かったの？」
「前にラグラージがフレアドライブの使い過ぎって言ってたろ？だからフレアドライブを最初から使わずに最後まで取って置こうと思ってバトルしてみたんだ！そしたら、思ってた以上に体が動いてさ♪やっぱフレアドライブは連発するもんじゃないな！うん♪」
「そ、そう・・・」その時倒したと思ってたフーディン、ゲンガー、ヨノワール、ユキメノコが立ち上がった。
「まだ、やられてませんよ！」
「ケッ、油断したぜ！」
「この程度でやられちゃ、漆黒の闇の幹部の名が廃る！」
「アタイ達を舐めるんじゃないよ！」四人はまだバトルをするつもりらしい。
「まだやるのか？」四人はバクフーン達に向かって行こうとしたその時！
「そこまでだ！お前達！」バクフーン達とフーディン達の間に一人のポケモンが現れた。
「お前はマニューラ！」
「何しに来たのですか？」
「アタイ達の邪魔しないでよ！どいておくれ！」どうやら漆黒の闇の仲間らしい。
「そうゆう訳には行かん！ボスがお呼びだ！」マニューラの言葉に四人は表情を変えた。
「ボスが？」
「あぁ、新たな標的を見つけたとの事だ、解ったら早く行きな！」
「わ、解った！」フーディン達は急いでその場から立ち去りました。
「な、何だ？奴らどうしたんだ？」バクフーン達が急な展開に驚いていると、マニューラがバクフーン達に向かって来た。
「お前がバクフーンだな？ラティオス、ラティアス捕獲を邪魔した

ヤツ！」
「だったら何だ！」
「これ以上漆黒の闇に関わらない事だな」
「それは忠告かい？」ラグラージが質問した。
「忠告ではない、警告だ！良いな？」マニューラがその場を去ろうとした時
「あっそうだ・・・」マニューラはバクフーン達の方を振り向いた。
「ラティオス、ラティアス！漆黒の闇はお前達をこれ以上狙う事はないだろう・・・」
「えっ？」
「じゃあな・・・」マニューラは闇の中に消えていった。
「何なんだ、アイツ・・・」
「私と兄さんを狙わないって本当でしょうか？」
「漆黒の闇の言う事だから信用出来ないよ！」
「いや・・・」ラグラージの意見をラティオスは否定した。
「ヤツが言う事は本当だろう」
「どうして解るの？」
「俺はテレパシーで相手の気持ちが解るんだ、ヤツからは騙そうとする気持ちは感じられなかった、信用して良いだろう」
「あの人は何で私達にその事を教えてくれたのかな？アイツらと同じ漆黒の闇なのに・・・」四人はマニューラの事で考えていた。その時
「考えても解らないなら、それで良いんじゃないか？」バクフーンが言った。
「でも・・・」
「アイツは嘘をついていない、それが解れば十分でしょ？」
「お前は楽天的で良いな！」
「まあね♪それよりポケモンセンターに戻ろうぜ？」
「そうだな！戻るか！」バクフーン達はバトルで疲れた体を休ませる為、ポケモンセンターに戻って行きました。「・・・お呼びです

か、ボス・・・」フーディン達漆黒の闇の幹部はアジトに戻りボスの所に集まっていた。
「お前達・・・また失敗したらしいな・・・」
「申し訳ございません、次は必ずやラティオスとラティアスを捕獲して参りますので、どうか我らにチャンスを！」
「・・・そいつらはもう捕獲しなくていい・・・」
「え？」
「同じ事は二度言わないぞ・・・」
「はっ！」
「心のしずくの力よりも、もっと強力なものが判明した・・・」
「それは、一体？」
「・・・お前達は神を知っているか？」
「神、ですか？」
「時間を司る神と空間を司る神と言われる二人のポケモンだ・・・そいつらの力があればこの世界を破壊する事など容易い事だ・・・」
「その神は一体何処に？」
「・・・それをお前達が探すのだ・・・今度失敗したら・・・解っているな？」
「ハ、ハイ！」
「・・・ならば行け・・・期待してるぞ・・・」
「はっ！」フーディン達は命令を聞くとすぐにその場から消えました。
「ククク・・・二人の神の力・・・必ず我が物にしてやる・・・」
一方その頃ポケモンセンターで一夜を過ごしたバクフーン達は次のジムがある街に向かう為、準備をしていた。
「ラグラージ、次のジムは何処にあるんだ？」バクフーンが尋ねた。
「次はフレイムシティだね！」
「そうか・・・って俺とリザードンが住んでる街じゃないか！？」
「そうだよ！あれ、バクフーンまさかジムがある事知らなかったの？」

「う、うん・・・リザードンは知ってたか？」
「当たり前だろ？自分が育った街なんだからさ！」
「バクフーン、ちゃんと自分が育った街位知っておこうよ？」
「・・・スンマセン」バクフーンは落ち込んでしまった。
「まっとにかく次はフレイムシティに向けて行こう！」
「解った！良し、出発だ～♪」
「・・・本当に切り替え早いね・・・」
「ま、アイツらしいから良いじゃねぇか！」
「ラティアス、いつもこんな感じなのか？」
「うん！いつもこんな感じだよ！楽しいでしょ？」
「フフ、確かにな！」
「お～い！早く来いよ～！」バクフーンはいつの間にか先に進んでいた。
「待ってよ、バクフーン！」
「今行くから待ってろ！」
「行こう、兄さん！」
「あぁ！」バクフーン達は次のジムがある街、フレイムシティに向けて出発した。彼等の旅はまだまだ続く・・・

第十話ＶＳ漆黒の闇！（後書き）

第十話完成です！本当はゲンガーを幹部にする予定だったんですが、フーディンの右腕って感じになってしまい結局幹部にはしませんでした！フーディンといつも一緒って、何かキモ（「□」；）！！（っておいヾ（＾―＾））

第十一話ピカチュウ登場！（前書き）

フレイムシティに向け旅を続けるバクフーン達、今は広い草原を歩いていた。

第十一話ピカチュウ登場！

「なぁ、ラグラージ～！」
「まだだよ！」
「まだ何も言ってないだろ！？」
「どうせ、まだ着かないのか～って聞こうとしたんだろ？」
「違うよ！あそこで何かやってるみたいなんだよ！」
「ん？」バクフーンが指差す先には確かに何かやっていた。にぎやかな感じからどうやら祭のようだ。
「ラグラージ！行ってみようぜ！」
「え？でも・・・」バクフーンはラグラージの答えを聞かずすでに向かっていた。
「人の話は最後まで聞け～！」「アイツは昔から祭とか、そうゆうイベントが大好きだからな！しょうがない、行こうぜ皆！」
「そうですね、気分転換にもなるし！行こう兄さん！」
「お前も祭とか好きだからな、良いよ、行こう！」
「もう、しょうがないなぁ」四人はバクフーンの後を追って行きました。そこには、いろんな店が並んでいてまるで祭のようでした。
「へぇ、結構いろんな物があるなあ」
「あっ！兄さん、これかわいい！」ラティアスはポケモンの人形を指差した。
「本当だな、欲しいのか？」
「えっ、買ってくれるの？」
「欲しいんだろ？兄ちゃんが買ってやるよ！」
「ありがとう！」ラティオスはラティアスに人形を買ってあげた。
「兄さん、これ大事にするね！」ラティアスは喜んだ。「お～い！皆こっちに来てみろよ！」その時バクフーンが皆を呼んだ。
「どうした？」
「これ見てみろよ！」バクフーンが指差す先には張り紙があった。

「なになに、今回の祭のメインイベント、ポケモンバトル大会！優勝者には賞金３０００ポケを差し上げます、腕に自信がある方は是非とも参加して下さい！・・・バクフーン、もしかして出たいの？」ラグラージがバクフーンに質問した時、バクフーンは目をキラキラさせていた。（・・・出る気満々だ（汗））

「でもバクフーンさん、この大会の受付時間、５分前に終わってるみたいですよ？」

「えっ！？」張り紙の端には受付時間が書いてあり、確かに５分前に終了していた。

「あら～残念だなバクフーン？」

「・・・」バクフーンは物凄い落ち込んでいた。

「そこまで落ち込まなくても（汗）」

「大会の見学は出来るみたいですから、見学して行きましょうよ？」

「そうだね！ほら、行くよバクフーン！」

「・・・解ったよ・・・」五人は会場の観客席に向かおうとした、その時ラティアスはラティオスに買ってもらった人形をなくしてしまっていることに気付いた。

「あっ！」

「どうしたラティアス？」

「お人形さんが・・・」

「どうしたのラティオス？」

「あぁどうやらラティアスが人形落としたらしいんだ、探してから行くから先に行っててくれ！」

「解った」その後二人は落とし人形を探した。

「どこら辺に落としたんだ？」

「入る前には持ってたはずなんだけど・・・」二人は入り口に向かって戻って行った。そこに人形があった。

「良かった～、見つかった！」

「もう無くすなよ？さあ、早く行こう、皆が待ってるぞ！」

「あっうん！」二人が戻ろうとしたその時

「きゃ！」ラティアスに何かぶつかった。
「あっすみません！急いでいたもので・・・」そこにはピカチュウがいた。どうやらラティアスにぶつかったのはピカチュウみたいだ。
「あぁ、大丈夫ですよ！」
「・・・」ピカチュウはずっとラティアスを見ている。
「あっあの・・・何か？」
「綺麗だ・・・」
「えっ？」ピカチュウはいきなりラティアスの前でひざまずいた。
「僕と付き合って下さい！」
「えぇ！？」「お、お前！人の妹にいきなり何を言うんだ！？」ピカチュウの言葉にラティオスは怒った。
「あっいた～！お兄ちゃん、こんな所で何してるの！」反対側の通路から別のポケモンがやって来た。
「ピチューか、邪魔するな！お兄ちゃんは今恋のアタックをしているんだ！」ピカチュウがそう言うとピチューはピカチュウの耳を引っ張った。
「ハイハイ、女の子を見てすぐにデートに誘うのはやめましょうねぇ！」
「イタタタ！」
「すみません！うちの兄がご迷惑おかけしまして！」
「い、いえ・・・」
「お兄ちゃん、後でお説教だからね！」ピチューはピカチュウの耳を引っ張りながら連れて行った。「イタタタ、わ、解ったから耳は引っ張るなぁ！」
「何だったんだ、今の？」
「さ、さあ？」その時ラグラージがやって来た。
「あっいたいた！二人とも席は取っておいたから早く行こうよ！」
「あ、あぁ！」
「今行きます」二人は急ぎ観客席に向かった。
「遅かったな？」

「ちょっといろいろありまして・・・」
「ん？」
「あっ始まるみたいですよ！」バトルフィールドには大会主催者のエレキブルがいた。
「これより、本日の祭のメインイベントのポケモンバトル大会を開始する！皆楽しんでくれ！がっはっはっは！」
「あれ？ジムリーダーのエレキブルじゃん！？」
「この大会の主催者ってジムリーダーだったんだ・・・」「では、ハッサム！後はよろしくの！がっはっはっは！」
「解りました！ではこれより、バトル大会を開始します！ルールはトーナメント方式のシングル戦になります！それでは、第一回戦を始めます！選手はバトルフィールドへ！」ハッサムの呼び出しに出場選手が出で来た。赤コーナーからはゴローニャが、そして青コーナーからは・・・
「あっアイツ！？」ラティオスは思わず驚いて声を出してしまった。
「ど、どうしたのラティオス？」
「あの人さっき会った人なんです！」そう青コーナーからはピカチュウが出で来たのだ。するとピカチュウはラティアスを見つけすかさず声を掛ける。
「あ、お～い！僕の活躍見ててね～！そして僕が優勝したら付き合って下さ～い！」ラティアスはその言葉を聞いて赤くなってしまった。
「あ、アイツ～！絶対ラティアスはやらん！！」
「に、兄さん・・・」
「ラ、ラティオス、キャラ変わってるよ（汗）」「え、えぇそれでは、試合開始！」大会が始まった。「試合前にふざけた奴だ！一発で終らせてやる、丸くなるから転がる！」ゴローニャは体を丸めてピカチュウめがけ転がってきた。
「一発で・・・ねぇ・・・」次の瞬間ピカチュウはゴローニャに向かって行き、そしてすれ違った。ゴローニャは転がるを止めたまま

全く動かない。
「どうしたんだ?」次の瞬間ゴローニャは倒れた。
「悪いけど、俺は男には手加減しないから」
「ゴ、ゴローニャ戦闘不能!」何と開始わずか１０秒でピカチュウは勝ってしまった。
「い、いったい何があったんですか?」
「解らない、いったい何をしたんだ?」
「・・・アイツすれ違い際にアイアンテールで攻撃をしたんだ・・・」バクフーンが答えた。
「そう何ですか?」
「てか、バクフーン今の攻撃見えたの!?」
「少しだけな!アイツスゲー!バトルしてみてぇ♪」その後も順調にピカチュウは勝ち進み、遂に決勝戦まで勝ち残った。
「あのピカチュウ、マジで強いな!」
「えぇ!」
「確かにヤツは強い、だが!ラティアスはやらん!」「いや、だからラティオス?キャラ変わってるから（汗）」
「おっ!決勝戦始まるみたいだぞ!」バトル大会決勝を始めるため、ハッサムがバトルフィールドにやって来た。
「それでは、バトル大会決勝戦を始めます!選手はバトルフィールドへ!」青コーナーからはピカチュウが、そして赤コーナーからはオニゴーリが出で来た。
「それでは、試合開始!!」
「くらえ、冷凍ビーム!」オニゴーリは速攻で攻撃して来た。
「高速移動!」だが、ピカチュウは高速移動で冷凍ビームを難無く回避した。
「ならこれでどうだ!」オニゴーリは冷凍ビームを地面に撃った。すると地面は凍りついて滑りやすくなった。
「うわ!?」ピカチュウは足を滑らせ転んでしまった。
「もらった～!冷凍ビーム!」オニゴーリはすかさず冷凍ビームで

攻撃した。ピカチュウは凍り漬けにされた。
「良し！」
「何が良し何だ？」何と凍り漬けにしたはずのピカチュウが後ろにいた。
「なっ！？」
「アイアンテール！」ピカチュウは尻尾を鋼のように硬くして攻撃した。鋼タイプの技は氷タイプのポケモンには効果は抜群だ。
「なっ何故、凍り漬けにしたはずなのに・・・」
「お前が凍り漬けにしたのは、俺が身代わりで作り出した分身だ」
「そうだったのか・・・がはっ」オニゴーリは倒れた。
「オニゴーリ戦闘不能！よって勝者ピカチュウ！！」ピカチュウは見事に優勝した。大会主催者のエレキブルからピカチュウにトロフィーと優勝賞金の３０００ポケが授与された。
「良いバトルだった！これからも楽しいバトルをするんじゃぞ？がっはっはっは！」
「ありがとうございます」大会が終わりバクフーン達は会場の外に出た。
「大会終わっちゃいましたね！この後はどうしますか？」
「そうだなあ・・・」
「十分楽しんだからそろそろ行かない？」
「え～！」バクフーンとラティアスは一緒に言った。
「え、何？」
「何じゃねぇよ！もっと店とか見て行こうぜ！まだ全部見て無いんだからさ！」
「そうですよ！せっかくのお祭り何ですから！」
「ラ、ラティアスまで（汗）」その時ピカチュウが何処からともなく現れた。
「娘さん、ご一緒にお茶でも飲みに行きませんか？」
「えぇ！？」
「って何処から出で来た！？」さらにその時ピチューもやって来た。

「・・・お兄ちゃん！」ピチューはピカチュウの耳を引っ張った。
「イタタタ！」
「何回言えば解るのかな？」
「わ、解ったから離して～！」ピチューは離してあげた。
「もう！すみませんまた兄がご迷惑をおかけしまして！」
「い、いいえ、あっ大会優勝おめでとうございます！」
「ありがとうございます、そういえば自己紹介がまだでしたね！僕はピカチュウ、そしてこっちは妹のピチュー」
「私はラティアス！こっちは兄さんのラティオス、そしてバクフーンさんとリザードンさんにラグラージさん！私達はポケモンリーグに挑戦する為に今ジム巡りをしてるんです！」「へぇ！お姉ちゃん達はポケモンリーグに挑戦しようとしてるんだあ！お姉ちゃん達は今バッジ何個持ってるの？」
「まだ2個だけなの！これから3個目のバッジがあるジムに向かうとこよ！」
「あのさ～・・・」その時バクフーンがピカチュウに聞いてきた。
「何だ？」
「俺とバトルしてくれない？」
「お前と？」バクフーンはピカチュウにバトルを申し込んだ。
「バクフーン急にどうしたの？」
「大会優勝者が目の前にいるんだぜ？バトルしたくなるだろ！」バクフーンは目をキラキラさせながら言った。
「本当にバトル好きなんだから（汗）ピカチュウ、悪いけどバトルしてくれない？」
「俺は別に構わないぜ！確か会場の近くに練習用のバトルフィールドがあるからそこに行こう！」
「お兄ちゃんやるの？」
「申し込まれたら、断るのは相手に失礼だろ？」バクフーン達はバトルフィールドにやって来た。
「じゃあ審判は僕がやるよ、ルールはシングルバトルで時間無制限、

どっちかが戦闘不能になった時点でバトル終了で良いよね？」
「ＯＫ！」
「それで良い」
「それじゃ、バトルスタート！」
「先攻はどうぞ！」
「んじゃ、遠慮なく行くぜ！火炎放射！」バクフーンはまず火炎放射による炎攻撃をした。
「高速移動！」ピカチュウは高速移動でスピードをあげて回避した。
「なら、電光石火！」バクフーンは素早い動きでピカチュウに体当たりをした。
「スピード勝負で負ける訳にはいかないな！電光石火！」ピカチュウも電光石火で応戦した。二人とも物凄いスピードでぶつかり合った。その度に閃光が発せられた。
「二人とも、凄い！」
「全く攻撃が見えねぇ！どっちが今有利なんだ？」その時バクフーンとピカチュウは動きを止めた。
「あんた、結構やるね！」
「へへ、まだまだこれからだぜ！火炎車！」バクフーンは体に炎の鎧を身にまとい突っ込んで行った。ピカチュウにヒットしたが、そのピカチュウは消えた。
「え！？」
「それは俺の分身だ！」ピカチュウは身代わりで作り出した分身に攻撃を受けさせ、自分は攻撃するために力を溜めていた。
「くらえ、気合いパンチ！」ピカチュウは渾身のパンチをバクフーンに決めた。
「ぐっ！この、火炎放射！」バクフーンは吹き飛ばされながらも火炎放射をピカチュウにヒットさせた。
「うわぁ！」互いに吹き飛んだ。すぐに二人は立ち上がるがかなりダメージがあるようだ。「なあピカチュウ！次は互いが持ってる最高の技で勝負を決めようぜ！」

「良いぜ、これで決めてやるよ！」バクフーンは炎の鎧を身にまとった。が、さっきのとは違い炎の力がかなり強い。ピカチュウの方は電気を溜めているためか、バチバチと体中から電気が出ていた。
「フレアドライブ！！」バクフーンは得意技で勝負した。ピカチュウもバクフーンめがけダッシュした。すると、ピカチュウの体は電気の鎧のようなものに包まれた。
「ボルテッカー！！」二つの技はぶつかり合い大きな爆発が起きた。
「どっちが勝ったんだ！？」フィールドには爆発で起きた煙で状況が解らなかった。少したって煙がはれてきた。フィールドの中央に二人はいた。
「・・・やっぱ強いな・・・」
「・・・お前も強かったぞ・・・」バクフーンとピカチュウは同時に倒れた。
「両者戦闘不能！よってこの勝負引き分け！」バトルが終わり、皆バクフーンとピカチュウに駆け寄った。
「大丈夫ですか、バクフーンさん？」
「あ、あぁ！何とか・・・」
「お兄ちゃん大丈夫？」
「だ、大丈夫だ・・・」二人は何とか立ち上がった。
「こんなバトルは久しぶりだ！バクフーンだっけ？最高のバトルだったぜ！」
「あぁ！俺も最高に楽しかったぜ！」二人はがっちり握手した。「二人とも凄かったです！」
「ありがとう、ラティアスちゃん！では、この後疲れた体を癒す為に一緒に・・・」その時、ピカチュウは何か殺気のようなものを感じた。殺気がする方を振り向くとそこにはピチューがいた。
「お兄ちゃん、ラティアスお姉ちゃんと何処に行くつもり？」ピチューは顔は笑っているが、目が凄く怒っていた。
「いや、その、あのなだな・・・すみません・・・」
「解ればよろしい！・・・そういえばラティアスお姉ちゃん達は、

3つ目のジムは何処に行くの？」
「フレイムシティよ！」
「そうなの？アタシとお兄ちゃんもフレイムシティに行くとこなの！ねぇ、一緒に行かない？」
「私は良いけど、バクフーンさん、どうします？」
「良いんじゃない？旅の仲間はたくさんいたら楽しいし♪」
「ありがとう、バクフーンお兄ちゃん！」
「ラティアスちゃんと旅・・・ムフフ♪」
「・・・お兄ちゃん！」
「・・・すみません・・・」「一緒に行くのが決まった所で、そろそろ出発しようよ！」
「そうだな！バクフーン、行こうぜ！」
「ＯＫ！そんじゃフレイムシティに出発！」こうしてバクフーン達は、ピチューとピカチュウと一緒にフレイムシティに向けて再出発した。彼等の旅はまだまだ続く！

第十一話ピカチュウ登場！（後書き）

第十一話完成です！最近気付いた事が、何故か自分が書いてる小説で登場するポケモンは最終進化系ばかりでその前の段階のポケモンが全然登場してなかった（「□」；）！！　そこで今回ピチューとか大人気のピカチュウを出してみました！でも、書いてる内にピカチュウらしくない感じになった気が（＾―＾；）

第十二話意思の神（前書き）

お祭りを十分楽しんだバクフーン達は目的地が同じとゆう事で、ピチューとピカチュウと行動をともにする。今は大きな湖で一休みしていた。

第十二話意思の神

「綺麗な湖・・・」
「確かに、何か泳ぎたくなっちゃったから僕泳いでくるね！」そう言ってラグラージは湖に飛込んだ。
「私も泳ごうかな！バクフーンさんはどうします？」
「い、いや、俺はいいや！」
「俺もパス、炎タイプの俺達は水が苦手だからさ！」
「解りました！じゃあ私ちょっと泳いできますね！」ラティアスも飛込んだ。湖の中はとても綺麗で何処までも見渡せるくらいに透明だった。そして様々な魚達が泳いでいた。
「本当に綺麗な湖ですね！」
「そうだね！僕もこんなに綺麗な水の中を泳ぐのは初めてだよ！」
二人はしばらく海中散歩を楽しんでいた。一方地上の方は・・・
「そういえばラティオスは行かないのか？」
「ん？あぁ俺は・・・」ラティオスの視線はピカチュウを見ていた。
「・・・なるほどな！」
「何がなるほどなんだ？リザードン？」「ラティオスはピカチュウがラティアスに何かするかもしれないと思って見張ってるんだよ！けどさあ、ラティオス、いくらなんでもそれは考えすぎだと思うぜ？」
「しかし・・・」
「確かにアイツは女の子が好きみたいだが、悪いやつではないだろ？」その時ピチューとピカチュウが近づいてきた。
「何を話してたんだ？」
「いや、別に！ところで何の用だ？」
「いやね、実は妹と話してたんだ、フレイムシティに着いて用を済ましたらどうするかさ！そして決めたんだ、俺とピチューを仲間に入れてくれないか？」ピカチュウの言葉に三人は驚いた。

「ダメか？」
「ダメじゃないが、でもどうして俺達の仲間になりたいんだ？」
「まさか、ラティアスが目当てなんじゃ・・・」
「い、いやそうじゃない！」（本当はそれもあるが・・・）
「俺の夢は世界一強いポケモンになる事なんだ！その為にはいろんなバトルを経験しなきゃいけない！ポケモンリーグやジム巡りは良い経験になる！それに、チームを組むならお前達が良い、お前達と一緒だと楽しそうだからな！」
「だとさ！どうするバクフーン？」
「俺は大歓迎だぜ！」
「俺も良いぜ、ラティオスは？」
「まぁ、ラティアスに何かしなければ・・・」「ご心配なく！アタシがちゃんとお兄ちゃんを見張りますから！」
「ピ、ピチュー・・・あっそうだ！ピチューはまだバトルをちゃんと出来ないからチームのサポーター役で良いかな？」
「良いよ！んじゃ改めて、今日からお前達は俺達の仲間だ！よろしくな！」
「こちらこそよろしく！」
「ちゃんと皆のサポートするからね！」バクフーン達は新たにピチューとピカチュウを仲間にした。
「そういえばラティアスちゃん達遅いなぁ・・・」
「言われてみれば確かに・・・」
「俺が様子をみてくる！」そう言ってラティオスが飛込んだ。その頃ラティアスとラグラージは・・・
「ラティアス、そろそろ戻ろうか？」
「そうですね！」二人はバクフーン達がいる所に戻ろうとした時、ラティアスが湖の底に何か見つけました。
「ラグラージさん、あれはなんでしょう？」
「どうしたの？」
「ほら、あそこ！何か光ってますよ？」ラティアスが指差す先には

確かに何か光る物体がありました。
「なんだろ?行ってみる?」
「えぇ!」二人は光る物体に近づいて行きました。その時!
「待て!」誰かが二人を呼び止めた。
「だ、誰!?」二人の目の前に大きなポケモンが現れた。
「俺はギャラドス!ここから先には行かせん!ハイドロポンプ!!」
ギャラドスはいきなり攻撃してきた。
「守る!」二人は守るで防御した。
「いきなり何をするんだ!?」
「問答無用!竜巻!!」ギャラドスは巨大な竜巻を作り出し二人に向けた。
「くっ!ラティアス、援護を!」
「はい!」
「ハイドロポンプ!!」
「手助け!」ラグラージのハイドロポンプをラティアスが手助けで強化した。二つの技はぶつかり合い、そして打ち消しあった。
「やるな!だが、必ず追い返してやる!」ギャラドスはまた攻撃をする体制に入った。
「ちょっと待ってよ!?僕達は何もしないよ!」
「私達はただ、あの光が気になって、見てみようと思っただけで・・・」
「そんな事信じられるか!お前達はアグノム様を誘拐しに来たのだろ!」
「アグノム?」
「ラティアス!ラグラージ!」その時ラティオスが駆け付けた。
「兄さん!」
「大丈夫か二人とも!?」
「僕達は大丈夫!」
「くっ新手か!だが、何人来ようが必ずアグノム様はお守りする!」
その時。

「止めるんだギャラドス・・・」誰かがギャラドスを止めた。
「し、しかし！」
「その人達は敵じゃないよ・・・」光の物体が目の前に現れた。その光の正体はポケモンのアグノムだった。
「あなたは・・・」
「ガーディアンのギャラドスが迷惑をかけたね、僕はアグノム！」
「私はラティアス！」
「僕はラグラージ！」
「俺はラティオスだ！」
「よろしく！ほらギャラドス！ちゃんと謝らなきゃダメだよ！」
「は、はい・・・」ギャラドスは少し申し訳なさそうにラティアス達に近づいて来た。
「先程は大変失礼な事をした、申し訳ない！」
「いや、良いんですよ！誤解だって解ってくれれば！それにしても、アグノムさんは何故この湖に？」「それは・・・」
「アグノム様！これは秘密にしなきゃいけない事では！」
「大丈夫だよ！この人達は信用出来るからさ！」
「・・・解りました・・・」ギャラドスはあまり納得いってない様子で何処かに行ってしまった。
「あの～・・・」
「あっ気にしないで！彼少し頑固なところがあるから・・・で、さっきの話だけど、僕はここで世界のバランスをとっているんだ！」
「世界の・・・バランス？」
「そう、僕はここで世界のバランスをとる為にエネルギーを少しづつこの星に送ってるんだ！」
「何か凄いな、まるで神様みたいだな！」
「一応僕、神なんだけど」
「・・・えぇ！？」三人はもの凄く驚いた。
「ほ、本当ですか！？」
「うん！僕は意思の神って呼ばれてるんだ！」

「本当に神様なんだ・・・君一人で世界のバランスをとってるの？」
「まさか！僕一人じゃ無理だよ、僕以外にも後二人いるんだ！三人で協力しながら世界のバランスをとってるんだよ！」
「そうなんだ！」
「なあ、ガーディアンがお前達を守ってるって事は誰か一人でも欠けたら世界のバランスは崩れるのか？」ラティオスが質問した。
「いや、僕達三人がもしいなくなっても、あの方達がいる限り大丈夫だよ！」
「あの方達？」
「さすがにこれは教えられないんだ・・・ごめんね！」アグノムはそれ以上語ろうとはしなかった。
「解りました、では私達はそろそろ戻りますね！」
「えっ？もう行っちゃうの？」
「地上では僕達の仲間が待ってるんだ！これ以上心配させる訳にはいかないからね！」
「他にも仲間がいるの？」「あぁ！かなりにぎやかな連中がな！」
「僕も会ってみたいな！良いかな？」
「良いですけど、ギャラドスさんには言わなくて良いんですか？」
「大丈夫！行こう！」アグノムはラティアス達と地上に向かった。
「あっお帰りラティアスちゃん！・・・あれ？そちらの方は？」
「彼はアグノム！さっき知り合ったの！彼は意思の神って呼ばれてる神様何ですって！」
「よろしくね！」
「へぇ・・・って神様～！？」リザードンとピカチュウとピチューはもの凄く驚いた。
「そこまで驚かなくても（汗）」
「いや、普通の反応だって！だって目の前に神様だぜ！？」
「僕は確かに神って呼ばれてるけど、出来れば普通に接してくれると良いな！」
「そう言われても・・・」その時バクフーンがアグノムに近づいて

来た。
「俺はバクフーン！よろしくな♪」
「よろしく♪フフ、君は普通に接してくれるんだね！」
「だって神様って言ったって俺達と同じポケモンだろ？」
「そうだよ！だから皆も普通にして良いよ！」「でもな～・・・」
リザードン達はまだ戸惑っていた。
「まぁ、急には無理だよね、・・・ん～やっぱ外は良いなぁ！」
「今まで外に出てなかったのか？」
「そうなんだ、ガーディアンのギャラドスがさ、ちゃんと自分の役目を果たさなきゃいけません！って言ってなかなか外に出してくれなかったんだ！」
「そうなのか！」
「うん、だから久しぶりの外に嬉しくなっちゃって！ねぇ、何かして遊ばない？」
「そうだなあ、じゃあ競争しないか？あそこの木にタッチしてからここに早く戻って来た方が勝ちだ！」
「あっ良いね♪僕負けないよ！」
「俺だって負けないぜ♪じゃあ行くぞ、よーい、ドン！」バクフーンとアグノムは走り出しました。
「アイツ、ある意味凄い・・・」ピカチュウが言った。
「まぁ、アイツは誰とでも仲良くなれるやつだからな！しかし、神様とまで友達になるとは・・・」「アグノムさんはちょっとバクフーンさんに似てるところがあるんですよね！」
「例えば？」
「子供っぽいところとか！」
「なるほど、似たもの同士って事か！」バクフーンとアグノムがこっちに走って戻って来た。
「よ～し！俺の勝ちだ♪」
「いいや、僕の方が早かったよ！」
「いいや、俺だ！」

「僕だって！」二人は自分が一番だと言い合った。その時リザードンはため息をつきながら二人に近づいた。
「ハイハイ、二人ともそこまで！どっちも同時に着いたから、この勝負は引き分けだ！」
「えぇ～！」
「マジかリザードン！？」
「マジだ！嘘言ってどうするんだよ？」
「ちぇ～！・・・でも、楽しかったな♪」
「うん！僕も楽しかった♪ねぇ、次は何して遊ぶ？」
「次はかくれんぼはどうだ？」
「あ～やるやる♪皆もやろう！」
「えっ？」
「皆でやった方が楽しいでしょ？だからやろうよ♪」
「そうだぜ皆！やろう♪」二人は目をキラキラさせながら言った。
「・・・本当に二人とも似てるな（汗）」
「だね（汗）」
「でも面白そうですね！皆さんやりましょうよ？」
「仕方ない、やるか！」
「ラティアスちゃんがやるなら俺もやる！」
「アタシもやる！お兄ちゃんが変な事しないように見張らなきゃ！」
「・・・少しは信用してくれよ（泣）」
「全員参加で良いな？んじゃ、誰が鬼をやるかじゃんけんだ！」皆でじゃんけんをした。
「はい！ラグラージが鬼～！皆隠れろ～」バクフーン達はそれぞれ、バラバラに隠れに行った。
「ラグラージが鬼か・・・強敵だな・・・」
「ラグラージはそんなにかくれんぼが強いのか？」ピカチュウが聞いた。
「あぁ！アイツがかくれんぼで負けた事は一度もないんだ！」皆が隠れてから一分がたった。

「そろそろかな、もう良いかい？」
「・・・もう良いよ～！」皆が答えた。
「良し！行きますか！まずはっと・・・」ラグラージは意識を集中しはじめた。
「うん・・・どうやらここから東の方に二人いるな・・・」ラグラージはそこに向かった。当たりを探してみたが誰もいない。
「おかしいなぁ？」その付近には実はピチューとピカチュウが木の上に隠れていた。
「・・・もう来たのか！？」
「ちょっとお兄ちゃん静かにしてよ！見つかっちゃうでしょ！」
「・・・それ！」ラグラージは一本の木に体当たりした。「わわわ！？」
「きゃ！？」ピチューとピカチュウは落ちてしまった。それをラグラージがキャッチした。
「ピチューにピカチュウ見～つけた！」
「もう見つかったか～！」
「でもなんでアタシ達の場所が解ったの？」
「それはね、僕の頭のヒレがレーダーみたいになってるからさ！」
「それちょっとせこくねぇ！？」
「しょうがないだろ？生まれつきの能力なんだし！さあて、次はっと・・・」ラグラージはまた意識を集中しはじめた。
「北の方に誰かいるな・・・良し行きますか！」ラグラージは北に向かった。
「リザードンが言ってた事は本当らしいな、てかっ絶対勝てないだろ！？」
「しょうがないわね、相手が悪かったのよ！お兄ちゃん、とりあえず湖に戻りましょう？」二人は湖に戻った。
「ここら辺だな・・・」ラグラージは辺りを見回した。（ラグラージのヤツ、もう来たのか！ここだとすぐ見つかるな・・・移動しなきゃ！）近くに隠れてのはリザードンでした。その時ラグラージは

何か見つけた。
「・・・えい！」ラグラージは何かを掴みそれを引っ張った。
「うわ！？」
「リザードン見～つけた！」
「クソ～なんでバレたんだ？」
「だってリザードンの尻尾が丸見えなんだもん！」リザードンの尻尾は先から炎が出ていてそれを見つけられたらしい。
「うぅ・・・」
「まさに頭隠して尻隠さずだね！さあて、次は・・・北東の方か！」
次にラグラージが向かった所は大きな岩がいっぱいありました。
「ここら辺のはずだな・・・こっちか」向かった先にはバクフーンとアグノムがいた。
「やっべぇ・・・見つかっちまう！」
「どうするバクフーン？」
「移動しよう・・・ゆっくり行くぞ・・・」バクフーンとアグノムはラグラージにバレないようにゆっくり移動を始めた。
「・・・そこか！」ラグラージは近くにあった岩を持ち上げた。
「えっ！？」
「マジか！？」そこにはバクフーンとアグノムがいた。
「はい、バクフーンとアグノム見～つけた！」
「あ～見つかったかぁ！」
「でもラグラージ君は凄い力持ちなんだね！こんな大きな岩を持ち上げるなんて！」
「これ位はどうって事ないよ！さて、あとはラティオスとラティアスだけか・・・南の方か」ラグラージは南に向かった。そこは見晴らしが良い草原が広がっていた。
「ここに・・・いるのか？」ラグラージはまた意識を集中した。
「・・・確かにここのはずだけど、誰もいないよなあ？とりあえず行ってみますか！」ラグラージは二人がいるはずの近くまで行った。
「兄さん、こっちに来たよ、バレちゃったのかな？」

「いや、俺達の姿は見えていないはずだ・・・しばらく様子をみよう」ラグラージは近くまで来た。
「おっかしいなあ?確かにここのはずなんだけど・・・あれ?」ラグラージは何か気付いた。
「何でここの草だけ倒れてるんだ?それも二ヶ所も・・・」ラグラージはその草に触ろうとした。が、何故か草に触ろうとすると何かに阻まれて触れない。何かそこに透明な何かがあるみたいな・・・
「まさかね・・・でも・・・」ラグラージは試しにその透明な何かをくすぐってみた。すると・・・
「ウ、フフフ・・・」
「えっ?」何か笑い声が聞こえた。ラグラージはまたくすぐってみた。
「フフフ・・・ハハハハ!や、止めてくれ~!」すると突然目の前にラティオスが現れた。
「ラティオス見~つけた!」
「ハァ・・・ハァ・・・見つかったか」
「ラティオスって自分の姿を消せるんだね!びっくりしたよ!てっ事は・・・」ラグラージはもう一ヶ所の方を見た。
「ラティアス、出てこないと君もくすぐるぞ?」
「わわ、解りましたよ(汗)」ラティアスが現れた。
「ラティアス見~つけた!」
「あ~あ、見つかっちゃった!結構かくれんぼには自信あったのになぁ!」
「残念でした!さぁ、これで全員見つけたぞ!湖に戻ろう!」三人は湖に戻った。「ラティアスちゃん達も見つかっちゃったの?」
「ラグラージさん、かくれんぼ強いですね!」
「まあね!」ラグラージは自慢そうに言った。
「見つかったのは悔しかったけど、すっごく楽しかった~!」
「そうだな!」気がついたらもう夕方になっていた。
「いつの間にかこんな時間になってたんだね!」

「そろそろ出発するか？」
「もう行っちゃうの？」
「ごめんな！またいつか遊びに来るからさ！」
「本当？約束だよ！」
「あぁ、約束だ！」バクフーン達は湖を出発しようとした。
「きっとだよ～！」アグノムがバクフーン達に呼び掛けた。
「必ず来るからな～！」バクフーンは答えた。バクフーン達の姿がどんどん小さくなっていく。
「行っちゃった・・・」
「アグノム様！ここに居ましたか・・・心配しましたぞ！」ギャラドスが怒りながら言った。
「ごめんギャラドス、ちょっとのつもりが、おもっいきり遊んじゃった♪」
「全く、アグノム様は仮にも神なんですよ？もっと自覚して下さい！」
「解ってるよ！でも、あの人達と遊んでる時は凄く楽しかった・・・」アグノムは笑いながら言った。
「・・・ならば、あの者達が平和に暮らせるように頑張らなければいけませんね！」
「うん！」と、その時何者かがアグノム達の前に現れた。
「ム！アグノム様、下がって！」
「う、うん！」
「貴様何者だ！？」
「別に怪しい者じゃない、俺はマニューラ、お前達に伝える事がある」
「何だ？早く答えよ！」
「近々、漆黒の闇と呼ばれる組織の奴らがアグノムを奪いに来る」
「なっ！？」
「目的は・・・言わなくても解るな？」
「その話、本当だろうな！？」

「彼はウソを言ってないよ・・・」アグノムが言った。
「さすが意思の神だな・・・まぁ、そうゆう事だ・・・気をつけろよ、じゃあな」マニューラはその場を去った。
「あの者はいったい？」
「敵じゃない事は確かだね」
「アグノム様、あなたが狙われているとゆう事は！」
「うん、ユクシーとエムリットも狙われるね・・・」
「伝えなければ！」
「大丈夫、今の話は直接テレパシーで二人にも聞かせていたから！」
「漆黒の闇・・・いったい何者か知りませんが、アグノム様は私が必ずお守りします！」
「ありがとうギャラドス！でも、無理しないでよ？僕はギャラドスがいなくなるのは嫌だからね！」
「アグノム様・・・約束します、絶対にあなたのそばを離れませんから・・・」漆黒の闇が動き出した。アグノム達が狙われている事をバクフーン達はまだ知らない。果たしてこの先、いったいどうなるのか？物語はまだまだ続く・・・

第十二話意思の神（後書き）

第十二話完成です！最近花粉症のせいか、鼻水が止まらないし、目がかゆいです（T＿T）でも、負けずに小説書くぞ！

第十三話挑戦！フレイムジム！（前書き）

バクフーン達は三つ目のジムがある、そしてバクフーンとリザードンの故郷フレイムシティにやって来た。

第十三話挑戦！フレイムジム！

「久しぶりだ～！」
「そうだな！母さんや父さんは元気かなあ？」
「そういえばピカチュウ達はここに用があるんだよね？」
「あぁ、その用を済ませればすぐジムに行ける！」
「その事何だが、ジム挑戦は明日にしないか？今日はちょっと母さん達に顔を見せに行きたいからさ！」
「僕は構わないけど、バクフーンは？」
「俺も別に良いよ！リザードンの頼みだしな♪」「すまない、ちょっと先に行って来る！それじゃ明日の朝にポケモンセンターで良いよな？」
「良いよ！じゃあ明日！」
「あぁ！」リザードンは自分の家に向かって飛んで行きました。
「じゃあ俺とピチューも行ってくるな！」
「バクフーン兄ちゃん達、またね～！」ピチューとピカチュウも用を済ませる為に行ってしまった。
「僕達はどうする？」
「俺は一度家に戻るよ！しばらく帰ってないし！」
「解った！ラティオス達は？」」
「そうだなあ・・・」
「あっ私バクフーンさんの家に行っても良いですか？」
「えっ？」
「ダメですか？」
「別に構わないけど、何もないよ？」
「私、バクフーンさんの家を見てみたいんです！兄さんはどうする？」
「俺も行って良いか？とくに行くとこもないし」
「良いよ！ラグラージはどうする？」

「僕はリザードンの両親に会ってくるよ！前に来た時は挨拶できなかったし！」
「解った！んじゃ明日ポケモンセンターでな！」ラグラージはリザードンの所に、バクフーンはラティオスとラティアスと一緒に自分の家に向かいました。
「ただいま～って、誰もいないか・・・さ、入って！」
「お邪魔します！」
「ここがバクフーンの家か・・・」バクフーンの家の中はかなり清潔にされていた。
「思ってたより、綺麗な部屋だな！」
「まあな！母さんに自分の家なんだから清潔にしなきゃダメって言われててさ！」
「へぇ～」
「とりあえず、適当にくつろいでくれ！荷物置いてくるからさ！」そう言ってバクフーンは奥の方に行った。
「あっこれ、バクフーンさんの昔の写真かな？」ラティアスは壁に掛けてあった写真を見て言った。
「もしかして、このヒノアラシがそうなのか？」そこにはバクフーンに抱っこされたヒノアラシが写っていた。
「きっとそうよ！かわいい！じゃあ、これがお母さんね？優しそうな人・・・」
「こっちにもいろんな写真があるぞ！」
「どれどれ？」ラティオスのいる方に行くと、そこにも壁にたくさんの写真が掛けてあった。
「どれも幸せそうな顔してるね！」
「そうだな、そういえばバクフーンの母親は何処にいるんだ？」
「・・・そういえば、兄さんは聞いてなかったんだっけ？実は・・・」ラティアスはラティオスにバクフーンの過去を話した。
「・・・そんな事があったのか・・・」
「うん・・・」その時奥からバクフーンが戻って来た。

「お待たせ～ってどうした？何か暗い顔してるぞ？」
「そ、そんな事ありませんよ！」
「そう？まぁいいや！そういえばお前達、お腹空いてる？」
「えっ？えぇ、ちょっと空いちゃったかな？」
「そうだな、ご飯食べるにも何処で食べる？」
「俺が作ってやるよ！」
「・・・えぇ！？」バクフーンの発言に二人は驚いた。
「バクフーンさんってお料理出来るんですか！？」
「まぁ簡単なやつなら！」
「予想外だ（汗）」
「とりあえず、リビングで待っててくれ！」二人をリビングで待たせてバクフーンは台所に来た。
「久しぶりだなぁ、今回はラティオスとラティアスがいるからな！気合い入れるか！よ～し・・・」バクフーンは調理を始めた。しばらくしてからリビングにバクフーンが戻って来た。
「お待たせ～♪」バクフーンが自分が作った料理をテーブルに並べた。
「すっご～い！」
「これお前が本当に作ったのか？」
「当たり前だろ？さぁ、食べてみてくれ！」
「じゃあ・・・いただきま～す！」まずはラティアスが試食した。
「もぐもぐ・・・」
「・・・どう？」
「・・・おいしい！バクフーンさん、この料理は？」
「良かった～！それは木の実グリルだよ！」
「凄いな・・・じゃあこれは何だ？」
「まぁ食べてみてくれ！」
「・・・解った」ラティオスは恐る恐る食べてみた。
「・・・う、美味い！これは？」
「良かった♪木の実カレーってとこかな？クラボの実を入れて少し

ピリ辛にしてみたんだ！気に入った？」
「あぁ！」三人はあっという間に完食した。
「ごちそうさまでした！」「バクフーンさん、本当に美味しかったです！」
「へへ、そう言ってもらえると嬉しいな♪」
「バクフーンは何処で料理を教えてもらったんだ？」
「母さんが昔教えてくれたんだ！」
「お母さんに？」
「あぁ、俺母さんが作ってくれた料理が大好きでさ、自分でも作りたいって思って母さんに教えてもらったんだ！」その時、誰かが玄関をノックした。
「誰だろ？は～い！」バクフーンがドアを開けるとそこにはリザードンとラグラージ、さらにピチューとピカチュウもいた。
「よっ！」
「お前達！？どうしたんだ？」
「いやね、用事を済ませたは良かったんだが、その後が暇でさあ！そこでリザードンとラグラージに頼んでバクフーンの家まで案内してもらったんだ！」
「何で俺ん家なんだ？」
「ラティアスがこっちにいるって僕が言ったら是非案内してくれって言って来てさ！」
「ラグラージ！それは言うなって頼んで・・・」その時ピカチュウは寒気を感じた。
「・・・ラグラージ兄ちゃんとこそこそ話してたのは、やっぱりラティアス姉ちゃんの事だったのね？」
「いや、その、これはだな～・・・すんません（泣）」
「もう！」
「ハハハハ！とにかくお前ら中に入れよ！そういえばお前達は飯食った？」
「いや、実はまだ何だ」

「俺も」
「僕も」
「アタシも～お腹ぺこぺこ！」
「良し！俺が何か作ってやるよ！」
「バクフーン兄ちゃん料理出来るの！？」
「バクフーンさんの料理、美味しいわよ！バクフーンさん、私も手伝います！」
「助かるよ！良し、んじゃお前達待ってな！美味いやつ作ってやるから♪」バクフーンとラティアスは台所に向かった。しばらくしてから、二人が料理を持って戻って来た。
「お待たせしました～！」
「おっ！スゲー美味そう！」
「冷めない内に食べな♪」
「いっただっきま～す！」四人はバクフーンとラティアスが作った料理を食べた。余程美味しかったのかあっという間に完食した。
「ごちそうさまでした！」
「バクフーン兄ちゃん、ラティアス姉ちゃん！すっごく美味しかったよ！」
「サンキューピチュー♪」
「ウフッありがとう！」気が付けば外は暗くなっていた。
「もうこんな時間か！」
「じゃあ俺は家に帰るよ！母さん達の手伝いをしなきゃいけないから！」
「解った！んじゃ明日な！」リザードンは帰って行った。
「ラグラージ達はどうするんだ？」
「そうだなぁ・・・」
「・・・良かったら、泊まっていくか？」
「良いの？バクフーン兄ちゃん！」
「せっかく来たんだ！良いよ、泊まっても♪」
「じゃあ、お言葉に甘えて！」

「悪いなバクフーン！」
「じゃあそろそろ寝る？」
「そうですね、明日は早いですし！」
「ＯＫ！じゃあ寝るか！お休み～！」バクフーン達は明日に備えて寝る事にした。夜中・・・
「・・・何か・・・寝れないな・・・」バクフーンは眠れずにいた。気分転換にベランダに出て風に当たる事にした。
「・・・風が気持ちいい」
「寝れないのか？」バクフーンが振り返るとラティオスがいた。
「あっ起こしちゃった？」
「いや、俺も寝れなかったんでな・・・風が気持ちいいな！」
「あぁ・・・」しばらく沈黙が続いた。先にラティオスから口を開いた。
「・・・っで、どうしたんだ？」
「ん？あぁ、久しぶりなんだよ、俺ん家がこんなににぎやかなのは・・・少し興奮しちゃって！」
「そうか・・・ラティアスから聞いたよ、お前の母親の事・・・」
「・・・そう」
「その、気の毒だったな・・・」
「・・・俺は大丈夫・・・ありがとう・・・」
「強いな・・・お前は・・・」また沈黙が続いた。しばらくして・・・
「そろそろ戻るか？」
「そうだな・・・」二人は部屋に戻った。翌朝・・・
「ふぁ～・・・」
「おはようございます、バクフーンさん！」
「おはよう・・・早いね・・・」バクフーンはまだ眠そうにしている。今にも寝そうな感じだ。
「ほら！今日はジム戦しに行くんだろ？それにポケモンセンターでリザードンが待ってるよ！」

「解ってるよ・・・でも後五分寝かせて・・・」バクフーンが眠りそうになったその時！
「電気ショック！」ピチューが電気ショックで軽く攻撃した。
「イテテ、いきなり何すんだよ～！」
「目が覚めたでしょ？バクフーン兄ちゃん♪」
「ピチュー、ちょっとやり過ぎじゃない？」
「そう？これが普通なんじゃないの？・・・あっ」ピチューの目線はピカチュウを見ていた。ピカチュウはまだ寝てる。
「電気ショック！」
「ぎゃあ～！？」ピチューはピカチュウにも電撃をくらわせた。
「いい加減に起きなさい、お兄ちゃん！」
「う～、ピチュー、いきなり何だよ～・・・」
「・・・なるほど、これが普通になったのはピカチュウのせいか・・・」
「さぁ、お兄ちゃん達！もう目が覚めたでしょ？早く支度をしなさい！」
「・・・は～い」バクフーンとピカチュウはジム戦に行く為に支度を始めた。
「何かピチュー、まるでお母さんみたいね？」
「だってお兄ちゃん達だらしないんだもん！」そうこう話してる内にバクフーンとピカチュウは用意が出来たようだ。
「お待たせ～！」
「準備出来たみたいだね！じゃあ行きますか？」
「おう！まずはリザードンと合流だな？」バクフーン達はリザードンと合流する為にポケモンセンターに向かった。しかし、リザードンはいなかった。
「あれ～？リザードンまだ来てないのか？」
「ん～集合時間は合ってるはず何だけど・・・」
「アイツも寝坊か？」
「お兄ちゃんとは違うでしょ！」

「でも、どうしたんでしょうね、リザードンさん？」その時リザードンがやって来た。
「悪い皆！遅れた！」
「珍しいね、リザードンが遅れるなんて！」
「いやぁ、寝坊しちゃってさ（汗）」
「やっぱ寝坊か！」
「リザードン兄ちゃんはお兄ちゃんとは違うと思ってたのに～」
「まぁ、これで皆揃ったから良いだろ？さあ、行こうぜ！」バクフーン達はフレイムジムに向かった。
「ラグラージ、フレイムジムはどんなチームがいるんだ？」
「確か、炎タイプが中心だったはずだよ！」
「炎タイプか～！何か燃えてくるぜ！」
「バクフーンも炎タイプだからね、でも熱くなりすぎないでよ？」
「解ってるって♪」
「あっあれがフレイムジムですか？」バクフーン達はフレイムジムに到着した。
「よ～し、行くぞ！」バクフーンは門を開けた。そこには・・・
「あれ？何でコータス長老がいるんだ？」そこにはフレイムシティの長老のコータスがいた。
「バクフーンじゃないか！久しいのう！何でここにいるんじゃ？」
「いや、それはこっちのセリフ（汗）」
「なんじゃい！ジムリーダーがここにいたらいかんのか？」
「・・・えぇ！？」バクフーンとリザードンは驚いた。
「長老、ジムリーダーだったの！？」
「驚く事はなかろう、正真正銘ワシがここのジムリーダーじゃよ！」
「マジか！」
「それより、お前さん達はジム戦に来たのかの？」
「あぁ！」
「良かろう、さあ、こっちに来なさい」コータス長老に案内された先はバトルフィールドがあった。

「長老、ここのルールは？」
「ここのルールはちと変わってての！まず、バトルに出るのは五人でシングル対戦、勝った数が多い方が勝ちなんじゃが、チャレンジャーチームが戦いたい相手を決めるんじゃ！」
「俺達が相手を決めて良いの！？」
「そうじゃ！さぁ、そろそろ始めるかの！」コータスは向かい側の方に向かった。
「今回は誰がでる？まず、俺は絶対出る♪」
「相性的に僕が一番有利だから僕も出るよ！」
「俺も参加させてくれ！ラティアスちゃん、俺の活躍を見ててね！」
「もうお兄ちゃんったら！」
「俺も出る、しばらくバトルしてなくて身体が鈍るといけないからな！」
「兄さん頑張ってね！」
「後一人か・・・リザードンは出る？」
「・・・えっ？」リザードンは何故かぼーっとしていた。
「どうしたの？」
「いっいやなんでも！俺も出るぜ！」
「そう？じゃあ出るのは僕、バクフーン、ラティオス、ピカチュウ、リザードンで良いね？」
「ＯＫ！」
「じゃあ最後に一番最初は誰が行く？」
「俺から行く！」リザードンが言った。
「解った、皆もそれで良い？」
「良いぜ！頼むぜリザードン！」
「おう！」
「一番手はリザードンか、さあリザードン、ワシのチームの誰と戦いたいんじゃ？」コータスのチームメンバーはコータス、ウインディ、キュウコン、ブーバーン、そして・・・
「ちょっ！あのポケモンは！？」

「ワシの古くからの友人のファイヤーじゃ！今日は遊びに来ていたんじゃが、無理を言って今日は助っ人を頼んだんじゃ！」
「コータスの頼みですからね、私は手加減しませんよ！」
「まさか、こんな所で伝説の鳥ポケモンの一人に会えるなんて！」
「さあリザードン、誰と戦いたいんじゃ？」
（正直、ファイヤーと戦って勝てるとは思えない、さらにはウインディやキュウコンは俺より素早い、となると長老かブーバーンだが、長老はバトル経験が豊富そうだからここは・・・）リザードンはしばらく考えて、相手を決めた。
「ブーバーン！俺と勝負だ！」
「だそうじゃ！行ってこいブーバーン！」
「解った・・・」
「それじゃハッサム、審判よろしくの！」
「解りました！それでは、チーム火山とチームブラストのジム戦を行います！まずは、第一回戦ブーバーン対リザードン、試合開始！」
「そんじゃ行きますか・・・火炎放射！」ブーバーンは腕のさきからまるで砲撃するように火炎放射を撃ち出した。リザードンに向かって行くが、リザードンは回避しようとしない。
「リザードン避けろ！」
「えっ？」火炎放射はリザードンに直撃した。
「くっ！？」
「リザードンしっかりしろ！ジム戦は始まっているんだぞ！」
「あ、あぁ・・・」どうもリザードンの様子がおかしい。
「おいおい、俺を指名しといて何だ？勝つ気あるのか？」
「・・・うるさい！！ドラゴンクロー！！」リザードンはブーバーンの言葉に我を忘れ突っ込んで行った。
「フッ・・・１０万ボルト！」ブーバーンは電気タイプの技をリザードンに直撃させた。効果は抜群だ。
「がはっ！？」リザードンは倒れた。
「リザードン戦闘不能！勝者ブーバーン！」

「リザードン!?大丈夫か?」
「すまない・・・負けちまった・・・」
「気にするな!後は俺達に任せろ!」バクフーンはリザードンを隅の方に連れていって休ませてあげた。
「リザードンさん、一体どうしたんでしょう?」
「解らんが、今はジム戦に集中だ!リザードンの事は終わった後にしよう!」
「解ったよ、次は誰が出る?」
「俺が出る、流れを変えないとな!」
「頑張って兄さん!」
「次は君か、さあ、誰と戦いたいんじゃ?」
「・・・ウインディ勝負だ!」
「お呼びじゃぞウインディ!」
「OK!」
「それでは第二回戦!ウインディ対ラティオス、試合開始!」
「いっくぞ~!神速!」ウインディは目にも止まらぬ速さでラティオスに体当たりした。
「守る!」だがラティオスは守るで防御した。
「ラティオスいつ守るを使えるようになったんだ?」
「あれは私が兄さんに教えたんです!防御の技もあると役に立つからって!」
「さぁ、次はこっちの番だ!」すると、ラティオスの目の前に球状のエネルギーの塊が出現した。まるで、水の塊みたいな・・・
「炎タイプには、水タイプの技!くらえ、水の波動!!」ウインディに水の波動が炸裂した。効果は抜群だ。かなり効いたのかウインディは目を回して気絶した。
「ウインディ戦闘不能!よって勝者ラティオス!」
「さすが兄さん!」
「ありがとう、ラティアス!これで1勝1敗だ、気を引き締めるぞ!」

「うん！次は僕が出るよ！」
「次はラグラージか、さぁ対戦相手を選ぶが良い！」
「じゃあ、キュウコン！勝負だ！」「だそうじゃ、頑張って来いキュウコン！」
「はい」
「それでは第三回戦キュウコン対ラグラージ、試合開始！」
「行くよ！ハイドロポンプ！！」ラグラージはハイドロポンプで先制した。
「・・・守る！」だが、キュウコンの守るで防御された。
「次はこっちの番ね・・・火炎放射！」キュウコンは火炎放射で反撃した。
「守る！」ラグラージも守るで防御した。
「僕だって守るが使えるんだ！」
「・・・そう」いつの間にかキュウコンはラグラージの目の前にいた。
「さあ、私の目を見て・・・催眠術！」
「しまっ・・・」キュウコンはラグラージを眠らせようと催眠術を掛けた。
「さあ・・・深い眠りに・・・」「うぅ・・・眠って・・・た・・・ま・・・」ラグラージは耐えられずに眠ってしまった。
「ラグラージ！起きろ！」
「無駄よ・・・さあ、これで終わりよ・・・」キュウコンが攻撃の体制に入った。キュウコンは自分の九本ある尻尾を一点に集めてエネルギーの塊を作り出した。
「水と地面タイプの両方を持つあなたにはこの技ね・・・エナジーボール！」草タイプのエナジーボールがラグラージに炸裂した。効果は抜群！
「・・・決まりね」
「ラグラージ戦闘不能！勝者キュウコン！」「ラグラージ！」
「ごめん・・・」

「気にするな、次は俺が行く！必ず勝って来る！」
「お兄ちゃん頑張れ！」「次は君かね？さぁ、残ったのはワシとファイヤーじゃ！どっちと勝負する？」
「・・・俺は・・・ファイヤーと勝負がしたい！」
「ほう！てっきりワシに挑むと思っていたが、まあ良い、ファイヤー頼んじゃよ！」
「えぇ、解ってるわ！」
「それでは第四回戦ファイヤー対ピカチュウ、試合開始！」
「行きますよ！火炎放射！」
「高速移動！」ファイヤーの火炎放射をピカチュウは高速移動で素早さを上げて回避した。
「なかなか素早いですね」
「雷パンチ！」ピカチュウは高速移動のスピードを生かし、一気に接近して雷パンチで攻撃した。だが、ファイヤーはピカチュウのこの行動を呼んでいたのか回避された。「ちっ！」「熱風！」ファイヤーは炎の翼をばたつかせ熱風を起こした。
「光の壁！」ピカチュウは光の壁を作り出し熱風を防御した。
「１０万ボルト！」ピカチュウは光の壁をジャンプ台代わりにして飛んで攻撃した。「鋼の翼！」ファイヤーは翼を鋼のようにして地面に突き刺した。
「どうゆうつもりだ？」１０万ボルトはファイヤーに炸裂した。効果は抜群・・・のはずなのだが、ファイヤーはダメージを受けていなかった。
「なっどうゆう事だ！？」
「さっきの鋼の翼で地面を攻撃したのは１０万ボルトの電撃を地面に受け流すため・・・」
「アース代わりにしたって訳か・・・」
「そうゆう事です、さあ行きますよ！エアスラッシュ！」ピカチュウに空気の刃が襲いかかる。
「アイアンテール！」ピカチュウはアイアンテールでエアスラッシ

ュを防御した。
「電光石火！」すかさずピカチュウはファイヤーに接近していった。
「させません！炎の渦！」ピカチュウの目の前に巨大な炎の渦が出現した。炎の渦はピカチュウを閉じ込めた。
「これで終わりです！オーバーヒート！！」ファイヤーは火炎放射の倍はあろうかと思われる強力な炎をピカチュウに炸裂させた。渦が消えていった、だがそこにピカチュウはいなかった。
「えっ！？一体何処へ！？」
「ここだあ！」ファイヤーが振り返るとピカチュウがいた。身体から電気をバチバチ出しながら。
「くらえ、ボルテッカー！！」電気の鎧を身にまといファイヤーに突っ込んで行った。
「ならば・・・」すると、ファイヤーの身体が光始めた。
「ゴッドバード！！」ファイヤーは飛行タイプ最強技で迎え撃った。二つの技は互いに炸裂した。
「くっ！」ピカチュウが倒れた。
「お兄ちゃん！？」
「ピカチュウ戦闘・・・」その時倒れたピカチュウが消えた。
「やはり・・・身代わりで作った分身・・・でしたか」
「そうだ」ファイヤーの後ろからピカチュウが現れた。
「さすがに俺自身で突っ込んで勝てるとは思えなかったから分身に突っ込ませた・・・正解だったな」
「フッ・・・やりますね・・・」ファイヤーは再び戦闘体制に入った。
「くっ！まだやれるのか！？」ピカチュウも身構えた。が、ファイヤーは何故か身構えるのを止めた。
「ん？」
「降参です・・・」「ファ、ファイヤー試合放棄！よって勝者ピカチュウ！」
「何故、リタイアした？」

「あのまま続けても、あなたに勝つ事は出来ないと思った・・・ただそれだけです」ファイヤーはコータスの所に戻って行った。
「すみませんねコータス」
「何、気にする事はない。さて、いよいよワシの番じゃな！」コータスはバトルフィールドに出た。
「お兄ちゃんご苦労様！」
「・・・あぁ」ピカチュウはあまり嬉しそうではなかった。
「何か嬉しくなさそうだな？」
「戦闘不能にしたんじゃなく、相手の試合放棄・・・俺的には納得いかないな・・・」
「でもピカチュウさん、あのファイヤーさんと張り合ったんですから！凄いですよ！」
「・・・ラティアスちゃんに言われると嬉しいなあ♪」その時ピチューがピカチュウの耳を引っ張った。
「イタタタ！」
「もう、お兄ちゃんはすぐに調子に乗るんだから！」
「ハハハ・・・そんじゃ、行って来る！」
「頑張ってバクフーンさん！」バクフーンはバトルフィールド向かった。
「お待たせ長老♪」
「全く、歳よりを待たすとはな！まぁ良いわい、さあ始めるかの！」
「それではラストバトル、コータス対バクフーン、試合開始！」
「行くぞバクフーン！火炎放射！」
「だったらこっちも火炎放射だ！」コータスの火炎放射にバクフーンは同じ技で対抗した。パワーはバクフーンの方が上みたいで、徐々に押し始めた。（やはり、パワーで負けてしまうか・・・ならば！）するとコータスは火炎放射を止めた。
「鉄壁！」コータスは甲羅の中に身を潜め火炎放射を防御した。
「更に高速スピン！」コータスは身体を高速回転させてバクフーンめがけて突っ込んだ。

「わわ！電光石火！」バクフーンは電光石火で避けた。
「やはりな！火炎放射！」コータスは回転しながら火炎放射で攻撃した。予想外の攻撃にバクフーンは回避できなかった。
「くっ！この、火炎車！」バクフーンは炎の鎧を身にまとい攻撃した。
「鉄壁！」コータスは再び鉄壁で防御した。
「また！」
「甘いのう！煙幕！」コータスは煙幕でバクフーンを覆った。
「ゲホっゲホ！何も見えない！」
「それ、のしかかり！」コータスはバクフーンにのしかかった。
「ぐへっ！？」
「降参するかねバクフーン？」
「冗談！スピードスター！」バクフーンは星形をした無数のエネルギー弾をコータスにぶつけた。その衝撃でコータスは吹っ飛ばされた。
「やりおるわ！」
「捨て身タックル！」バクフーンは捨て身タックルでコータスに突っ込んだ。
「これを忘れていまいな？鉄壁！」コータスはまた鉄壁で防御しようとした。
「忘れてないぜ！穴を掘る！」バクフーンはコータスに接触するまえに地中に潜った。
「しまった！捨て身タックルはフェイクか！？」コータスは急いで甲羅から出ようとした、その時！
「もらった～！」バクフーンは地中からコータスに体当たりを決めた。地面タイプ技は炎タイプに効果は抜群だ！
「くっ！油断したわい！」
「長老思ってたよりしぶといんだな！」
「ジムリーダーを侮るんじゃない！これで決めてやるわい！」するとコータスの身体が赤く光始めた。エネルギーを溜め始めたのだ。

「くらうが良い！オーバーヒート！！」コータスのオーバーヒートがバクフーンめがけて飛んで来た。
「電光石火！」バクフーンは電光石火で回避し、そのままコータスに突っ込んだ。
「しまった！」
「フレアドライブ！！」得意技のフレアドライブがコータスに決まり吹っ飛ばした。
「・・・負けたわい・・・がくっ」コータスは倒れた。
「コータス戦闘不能！勝者バクフーン！よって3対2でチームブラストの勝利！」
「よっしゃ～！」
「おめでとう、あなた達、やるわね！」ファイヤーが言った。
「ありがとうファイヤー！」
「本来ならジムリーダーがこれを渡すのだけれど、見ての通りコータスは気絶しちゃってるから、私がこれを渡すわね！」ファイヤーからフレイムバッジを受け取った。それは炎をイメージさせる形だった。
「ありがとう！良し、3つ目のバッジゲットだ！」
「あなた達が気に入ったわ！応援してるから頑張ってね！」
「おう！」バクフーン達は見事3つ目のバッジ、フレイムバッジをゲットした。
「リザードンさん！？」その時ラティアスが叫んだ。
「どうしたラティアス？」
「リザードンさんの様子が・・・」
「ハァ・・・ハァ・・・うぅ」リザードンはかなり苦しそうだった。
「おいリザードン！？どうしたんだよ！？」
「凄い熱だよ！早くポケモンセンターに連れて行こう！」バクフーン達は急いでリザードンをポケモンセンターに連れて行った。
「・・・」
「ハピナス！リザードンは？」

「・・・かなり熱が高いわね・・・彼、朝調子が悪そうじゃなかった？」
「そういえば・・・」
「多分それが原因ね！無理してバトルしたから熱が高くなったのよ！・・・ジム戦で勝ちたいのは解るけど、もっと自分を大切にしないとダメよ！」「・・・すんません・・・」
「今日1日は寝てなさい！」リザードンは1日ポケモンセンターで過ごす事になった。バクフーン達はリザードンが心配で一緒にいる事にした。翌日・・・
「ふぁ～・・・」珍しくバクフーンが一番早く起きた。
「・・・あれ？」バクフーンがリザードンが寝てるはずのベッドを見て驚いた。リザードンがいない！
「どこ行ったんだ！？」
「ん～・・・何だよバクフーン・・・朝っぱらから～」
「ラグラージ！リザードンがいないんだ！」
「・・・えぇ！？」バクフーン達はリザードンを探した。だが、何処を探してもいない。バクフーン達は一度街の入り口に全員集まった。
「いたか？」
「ダメ、見つかんない！」
「こっちもダメです！」
「リザードン兄ちゃん、何処行っちゃったんだろう？」その時ピカチュウが街の外の森を見て誰かいる事に気付いた。
「おい！あれリザードンじゃないか？」皆がピカチュウの指差す方を見た。確かにリザードンだ！
「あんな所に！お～いリザードン！」バクフーンが呼び掛けた。だが、聞こえてないのか返事をしない。仕方なくバクフーンはリザードンのとこに向かった。
「おい、リザードン！」
「・・・」リザードンは前を見たまま返事をしない。

「おいってば！」
「・・・え？」ようやくバクフーンに気付いたようだ。
「探したぞリザードン！心配させやがって！」
「バクフーン・・・あれ？なんで俺はここにいるんだ？」
「はい？覚えてないのか？」
「ジムで負けて、ポケモンセンターに運ばれたとこまでは覚えてるんだけど・・・」
「何か恐いな・・・大丈夫か？」
「今は大丈夫だ！ぼーっとしないし！」
「そうか？なら良いけど、とにかく皆の所に戻ろうぜ！」
「そうだな！」バクフーンとリザードンは皆の所に戻った。
「リザードンさん！心配しましたよ！」
「ごめんラティアス！」
「もう身体は良いの？リザードン兄ちゃん？」
「あぁ！」
「心配させないでよね！まぁ、無事だったから良かったけど」
「悪かったよラグラージ！」
「本当に大丈夫なのか？」
「大丈夫だよラティオス！」
「まぁ本人がそう言うなら良いんじゃない？それより次のジムがある街にはいつ行く？」
「俺は今日でも良いぜ！」リザードンが言った。
「でも・・・大丈夫か？」
「だから大丈夫だって！俺は一度家に戻って支度してくるから！待ち合わせはここで！」そう言うとリザードンは自宅の方に飛んで行った。
「あ！ちょっとリザードン！・・・行っちゃったよ、本当に大丈夫かなあ？」
「アイツが言うんだから大丈夫だろ？俺達も支度しようぜ！」
「ハァ、解ったよ！」バクフーン達は旅に出る為に支度する事にし

ました。ラグラージはリザードンの所に向かいました。やっぱり少し心配だったから・・・ラグラージがリザードンの家に着いた時、リザードンはすでに支度出来ていた。
「早いね！」
「何だラグラージか！どうした？」
「い、いやね！ちょっとリザードンに木の実の事を相談しようかなぁって！アハハ・・・」（何で嘘ついてるんだ僕・・・）
「木の実か？何だ相談って？」
「う、うん！リンドの実って持ってないかな？出来れば欲しいんだけど・・・」
「リンドの実？あぁあれか！確かあったはずだな、ちょっと待ってろ！」リザードンはリンドの実を探すため家に戻った。
「僕も手伝おうかな・・・」ラグラージも家に入った。そこである事に気付いた。リザードンの両親のメガニウムとジュカインがいないのだ。
「あれ？ねぇ、メガニウムさんとジュカインさんは何処に行ったの？」
「あぁ、父さんと母さんは今出掛けてるんだ！」
「え？でもこの店どうするの？」
「しばらく休みだ！」
「大丈夫なの？」
「大丈夫だよ！・・・あれ～無いなぁ、悪いラグラージ！リンドの実今は無いみたいだ！」
「そ、そう！無ければ良いや！」
「悪いな！さ、そろそろ行こうぜ！皆待ってるかもしれないし！」
「う、うん」ラグラージとリザードンは待ち合わせ場所に向かった。
バクフーン達はその五分後にやって来た。
「やっぱそっちの方が早かったか！」
「バクフーンが遅いんだよ！」
「悪い悪い！ところでラグラージ！次のジムは何処にあるんだ？」

「次はリーフシティだね！」
「解った！良し皆！リーフシティに向けて出発！」バクフーン達は次のジムがあるリーフシティに向けて出発した。彼等の旅はまだまだ続く！

第十三話挑戦！フレイムジム！（後書き）

第十三話完成です。

第十四話新たなライバル（前書き）

バクフーン達はリーフシティに向かう途中にあるサニータウンで一休みしていた。

第十四話新たなライバル

「火炎放射！」
「ならこっちも火炎放射！」バクフーンとリザードンは次のジムに備えてトレーニングをしていた。
「大丈夫そうだなリザードン！」
「当たり前だろ！さぁ次行くぜ！」
「ＯＫ！来い！」
「リザードンさん絶好調ですね？」
「そうだね！」
「俺もトレーニングしようかな！ラティオス、相手してくれよ！」
「良いだろ」ラティオスとピカチュウはバクフーン達の隣のバトルフィールドでトレーニングする事にした。
「手加減はしなくて良いからな！」
「フッ！お前も加減しなくて良いぞ！行くぜ、水の波動！」ラティオスは水のエネルギー弾を発射した。
「アイアンテール！」ピカチュウはこれをアイアンテールで防御した。「１０万ボルト！」しかしラティオスもピカチュウと同じ技でこれを防御した。
「ラティオスもこの技使えるのか！？」
「油断するなよ！水の波動！」ラティオスは再び水の波動で攻撃した。
「ちっ、高速移動！」ピカチュウは高速移動で避けた。
「さすがに素早いな・・・」
「油断するな！だろ？雷パンチ！」ピカチュウは一気にラティオスに攻撃した。
「サイコキネシス！」だが、ラティオスは強い念力でピカチュウの攻撃を止め、さらにはピカチュウの動きを封じた。

「油断はしてないさ・・・」
「・・・どうかな?」そう言うと捕えたはずのピカチュウが消えた。
身代わりで作り出した分身だったのだ。
「ボルテッカー!」ピカチュウは電気の鎧を身にまとい突っ込んだ。
「守る!」ラティオスはピカチュウの攻撃を守るで防御した。
「何!?」
「身代わりで隙を作り、一気に攻めるつもりだったんだろうが、残念だったな!」
「・・・電磁波!」いきなりラティオスの後ろから電撃が襲いかかって来てラティオスは回避出来ずに受けてしまった。
「な、バカな!?」ラティオスは麻痺してうまく動けない。
「ボルテッカーで突っ込んだのも俺の分身だ!」ラティオスが何とか振り向くとそこにピカチュウがいた。
「ラティオス、お前の負けだな!」
「・・・負けは、お前だ!」ラティオスがそう言った瞬間ピカチュウの身体が急に動かなくなった。麻痺したように・・・
「な!?いつ、電磁波を!?」
「電磁波じゃないさ・・・」そう言うとラティオスは立ち上がった。
「サイコシフト・・・自分の状態異常を相手に移す技だ。それでお前が麻痺した!」
「・・・なるほどな・・・そんな技があるとはな、負けたよ」
「あ~あ!兄ちゃん負けちゃった!」
「兄さんお疲れさま~!」
「凄い戦いだったね!」
「そうだな!」
「俺もラティオスとバトルしたい♪」いつの間にかバクフーンとリザードンがいた。
「いつの間に!?トレーニングは?」
「いやぁ二人のバトルが凄かったからつい、見入っちゃった!」
「それじゃトレーニングにならないじゃん!」

「堅いこと言うなよラグラージ！」その時トレーニング場に別のポケモン達が入って来た。「見てましたよ、あなた達のバトル・・・無駄な動きが多すぎますね」
「何だと！」
「事実を言っただけです」
「何かムカつくヤツね！」
「本当！兄さんやピカチュウさんの何処が悪いんですか！」
「落ち着いて二人共！ねぇ？君はいったい誰なんだい？」
「おっと自己紹介が遅れました。自分はメタグロスと言います。チームメタルのキャプテンをしています」
「チームメタル？君達もポケモンリーグに挑戦するのかい？」
「えぇ、勿論です。」
「僕達と同じだね！」
「一緒にされちゃあ困りますね！あなた達とはレベルが違いますから」（・・・本当にムカつくヤツだな！）
「レベルが違うって言うなら、僕達とバトルしないかい？どのくらい強いのか見せてよ！」
「良いでしょう！ルールはダブルバトルの三本勝負、先に二勝した方が勝ちでどうです？」
「良いよ！それでやろう！」ラグラージの提案でチームメタルとバトルする事になった。
「あいつらとバトルするのかラグラージ？」
「うん、他のチームとバトル出来るのは良い経験になるし」
「・・・それは良いが、俺麻痺して動けないんだが（汗）」
「リザードン、クラボの実とオボンの実あるでしょ？ピカチュウにあげて！」
「わ、解った！」
「何か・・・珍しくやる気だな！」
「・・・あのメタグロス、めちゃくちゃムカつくから一発殴らないと気が済まないんだよ！だから皆！絶対勝つよ！」

「お、おう！」「まず最初にラティオスとラティアスが行ってくれる？今回はダブルバトルだから二人のコンビネーションならいけるはずなんだ！」
「解ったよ、ラティアス気合い入れて行くぞ！」
「うん！」
「二番目は僕とピカチュウが組む！良いね？」
「お前とか？まぁ良いが」
「最後はバクフーンとリザードンだよ！」
「解った！」
「ＯＫ！」バトルするペアが決まりバクフーン達はバトルフィールドに向かった。
「では、我々も行きましょう」メタグロス達もバトルフィールドに向かった。
「まずは俺達だ！」ラティオスとラティアスが前に出た。
「では、ドータクン、ハガネール、行って下さい」チームメタルからはドータクンとハガネールが出で来た。
「行くぞラティアス！」
「うん！」二人は先制するため突っ込んだ。
「慌てるなよ、砂嵐！」ハガネールは砂嵐を発生させて二人の視界を遮った。
「前が見えない・・・」
「ラティアス、一旦退くぞ！」二人は一度ハガネール達から離れた。
「接近がダメなら遠距離だ！ラティアス、援護頼む！」
「うん！」
「水の波動！」
「手助け！」ラティオスの水の波動をラティアスが手助けして威力が上がった。
「守る！」だが、ハガネールが守るで防御した。
「ラティアス！あれ行くぞ！」
「解った！」そう言うと二人の姿が消えた。

「何!?」
「どうやらあの二人は自分の姿を相手から見えなくする力があるみたいだな・・・」
「何冷静に言ってるんだドータクン!どうするんだよ?」
「砂嵐を使いな、それで奴らの居場所が解るはず」
「良し、砂嵐!」ハガネールが再び砂嵐を発生させた。すると、砂がラティアスの身体に当たり、居場所がばれてしまった。
「あそこだ」
「くらえ、竜の息吹!」ハガネールは竜の息吹で攻撃した。
「守る!」ラティアスは守るでこれを防御した。
「もう一人は何処にいった?」その時ハガネール達の後ろから眩い光が突っ込んで来た。
「ラスターパージ!」
「トリックルーム」ドータクンがトリックルームを使うと周りの空間が歪み始めた。するとラティオスのスピードが遅くなった。
「これは!?」
「ハガネール、今のあなたなら行けますね?」
「当たり前だろ!ジャイロボール!」ハガネールは身体をジャイロ回転させながらラティオスに突っ込んだ。
「トリックルーム!」突然周りの歪みが消えた。するとラティオスのスピードが元に戻った。そのおかげでジャイロボールを回避出来た。「おいドータクン!何でトリックルームを解除した!?」
「俺じゃない!」
「間に合った・・・兄さん大丈夫?」
「あぁ!助かったよラティアス!遂に使えるようになったんだな!」
ラティアスがトリックルームを解除したようだ。
「トリックルームを破るには同じ技を使うしか無いからって兄さんに言われて、私、一生懸命練習したんだから!」
「さすが俺の妹だ!」
「えへへ!」「アイツが俺のトリックルームを・・・ハガネール、

守るを使え」
「お前、あれやる気か？」
「あぁ、少し奴らを甘く見てた、本気でやる！」
「解った、行ってこい！」ドータクンがラティオス達に突っ込んだ。
「来るぞラティアス！」
「解ってる！」
「くらえ、大爆発！！」ドータクンの身体が光出し、大きな爆発が起きた。ドータクンは自爆したのだ。ハガネールは守るでダメージを受けなかった。
「ラティアス！ラティオス！」ラティアスとラティオスとドータクンは倒れていた。
「うぅ・・・」
「何で・・・守るが出なかったの・・・」
「フッ・・・お前達の守るは・・・俺が封印で・・・使えなくしたのさ・・・」
「この勝負は俺達の勝ちだな！」最初の対決はチームメタルが勝利した。
「大丈夫二人とも！？」
「さすがに・・・キツイな・・・」
「・・・ごめんなさい・・・」
「ラティアスちゃん達は頑張ったよ！後は俺達に任せろ、ラグラージいくぞ！」
「解ってる！」ラグラージとピカチュウが前に出た。
「次はボスゴドラ、エアームド、行って下さい」チームメタルからはボスゴドラとエアームドが出で来た。
「行くぞ、１０万ボルト！」ピカチュウはエアームドに攻撃した。
「鋼の翼！」エアームドは地面に翼を突き刺した。電撃は地面に受け流され、ダメージを与えられなかった。
「電気対策は出来てるんだよな～！残念でした！」
「あぁそうかい」ピカチュウはいつの間にかエアームドの前にいた。

「気合いパンチ！」ピカチュウは渾身のパンチをエアームドに放った。しかし、それはボスゴドラに止められた。
「相手はエアームドだけじゃないんだぜ？メタルクロー！」ボスゴドラの鋼の爪がピカチュウを切り裂こうとした。
「させない！ハイドロポンプ！」ラグラージはハイドロポンプでボスゴドラを攻撃した。
「おっと！」ボスゴドラはピカチュウを盾にハイドロポンプを防御した。
「ぐああ！」ピカチュウはラグラージのハイドロポンプを受けてしまった。
「あっごめんピカチュウ！」
「人の心配して良いのかな～？」上空からエアームドがラグラージに突っ込んできた。
「ドリルくちばし！」
「くっ！？」ラグラージは攻撃を受けた。
「どうだい、俺のドリルくちばしは？効くだろ！」
「・・・そうだね」ラグラージは攻撃の体制入っていた。
「おかげでこの技の威力も上がるよ・・・カウンター！！」ラグラージはカウンターで受けたダメージをエアームドに倍返しにした。
「がは！？」エアームドは吹っ飛ばされた。
「うぅ・・・やりやがったな！」
「冷凍ビーム！」ラグラージはすかさず冷凍ビームで攻撃した。
「ぐわあああ！」エアームドは倒れた。
「アイツもうやられたのか！なら、コイツも倒して一対一にするか！」
「誰を倒すって？」ボスゴドラの後ろにいたピカチュウが言った。
「なっ！？さっきまで俺が掴んでいたのに！」
「あれは身代わりで作り出した俺の分身だ！」
「くっ！くらえアイアンテール！」ボスゴドラはアイアンテールで攻撃した。

「高速移動！」ピカチュウはこれを高速移動で避けた。
「遅いんだよ！１０万ボルト！」ピカチュウは１０万ボルトをボスゴドラに決めた。
「くっ！？」
「タフだな」
「ナメるなよ！」
「僕を忘れてない？」ボスゴドラが振り向くとラグラージがいた。すでに攻撃体制に入っていた。
「しまっ！？」
「アームハンマー！」ラグラージは格闘タイプの技を決めた。鋼と岩タイプ両方持ってるボスゴドラには効果は絶大だ！
「くそ・・・がは」ボスゴドラは倒れた。
「僕達の勝ちだね！」
「まぁ、当然だな！」ピカチュウとラグラージは見事に勝利した。
「最後は俺達か！行こうぜリザードン！」
「おう！」最後の勝負でバクフーンとリザードンが前に出た。
「では、ジバコイル行きますよ」チームメタルからはジバコイルとメタグロスが出で来た。
「リザードン、ダブル攻撃だ！」
「よっしゃ！」『火炎放射！』二人は一緒に火炎放射でメタグロスを攻撃した。
「データ解析・・・ジバコイル、しばらく時間稼ぎをお願いします」
「了解・・・守る！」ジバコイルが守るでメタグロスを防御した。
「何をしてるんだ？アイツ？」
「さあな、それより攻撃だ！」
「ＯＫ！火炎車！」
「穴を掘る！」バクフーンは火炎車でジバコイルに、リザードンは穴を掘るでメタグロスを攻撃した。
「影分身！」ジバコイルは影分身で無数の分身を作り出し、バクフーンを攪乱した。

「どれが本体なんだ!?」その時ジバコイルはリザードンが掘った穴の入り口にいた。
「電磁砲!」ジバコイルは電気の塊を撃った。穴の中では逃げ場がない為にリザードンは電磁砲を受けてしまった。その衝撃でリザードンは地上に出で来た。
「リザードン!大丈夫か?」
「身体が・・・痺れて・・・動けねぇ」リザードンは電磁砲のせいで麻痺してしまった。「ロックオン」ジバコイルはバクフーンに狙いを定めた。
「電磁砲!」ジバコイルは電磁砲を放った。
「やべ!電光石火!」バクフーンは電光石火で回避した、しかし、電磁砲はバクフーンを追って来た。
「嘘!?何で追っかけて来るんだ!?」
「ロックオンされたらそれを避けるのは不可能・・・」
「クソ!」バクフーンは何回も回避するがしつこく追って来る。
「避けれないなら、撃ち破る!火炎放射!」バクフーンは電磁砲に火炎放射した。だが、パワーはあちらが上で徐々に押される。その時、別の所から火炎放射がきて電磁砲を撃ち破った。リザードンが麻痺しながら、援護したのだ。
「サンキューリザードン!」
「良いって事よ・・・痺れてて、上手く動けないが、まだやれる!」
「データ解析終了・・・ジバコイルご苦労様です。この勝負は確率９９％で我々の勝利です」
「さっきから何言ってるんだ?データとか、確率とか、バトルにそんなの関係ねぇだろ!常に全力で勝負するもんだろバトルは!」
「単細胞には解らないでしょうね」
「一々ムカつくヤツだな!」
「話は終わりです、そろそろ決着をつけます」
「望むところだ!火炎放射!」
「守る」バクフーンの攻撃はメタグロスの守るで防御された。

「ジバコイル、バクフーンに攻撃を。リザードンは９０％の確率で動けません」
「了解・・・１０万ボルト！」ジバコイルはメタグロスに言われた通りにバクフーンを攻撃した。
「げっ！？電光石火！」バクフーンは電光石火でこれを回避、しかし「電光石火で回避する確率１００％、アームハンマー！」メタグロスはバクフーンの行動を予測して攻撃した。
「やば！？」バクフーンは攻撃が当たる寸前で回避した。
「アームハンマーを回避する確率７５％・・・バレットパンチ！」メタグロスは先制技で攻撃した。
「うわ！？」バクフーンはパンチが顔に当たる寸前に何とか回避した。「バレットパンチが回避される確率５５％・・・地震！」メタグロスは容赦なく地震で攻撃した。さすがにこれは回避出来ないとバクフーンが思ったその時、身体が空中に飛んだ。
「なっ！？」
「リザードンサンキュー！助かった！」
「話しかけるな！・・・まだ痺れてるんだ！」リザードンは麻痺しながらもバクフーンを空中に抱えて飛び、地震を回避した。「何故こうもデータが覆される！？」メタグロスは驚いていた。
「リザードン、離してくれ！」
「解った！」バクフーンはリザードンに離してもらい、メタグロスに向かって落下していった。
「バトルはデータなんかでやるんじゃない！本能でやるんだ！」バクフーンは強力な炎に身を包まれた。
「フレア・・ドライブ！！」落下スピードが加わったフレアドライブはメタグロスにヒットした。効果は抜群だ！
「そ・・・んな・・・」メタグロスは倒れた。
「後は・・・アイツだけか！ハァ・・・ハァ・・・ハァ」落下しながらのフレアドライブでバクフーンには想像以上の反動があり、かなりのダメージを受けていた。そこにジバコイルが攻撃をしようと

した、その時！
「俺も残ってるぜ！」ジバコイルが上を見ると、リザードンがこちらに落下して来た。身体を赤く光らせながら・・・
「くらえ、オーバーヒート！！」リザードンは最大パワーでオーバーヒートを放った。
「電磁砲！」ジバコイルは電磁砲で応戦したが、この技は命中させるのが難しい技で、電磁砲は全く関係ない場所に放たれ、オーバーヒートを防げずまともに受けた。
「ぐあぁぁ！？」ジバコイルは倒れた。
「ナイスリザードン！」
「へへへ・・・さすがに疲れたぜ・・・」バクフーン達は見事にチームメタルに勝利した。
「お疲れ～！ほらリザードン！クラボの実だ！」ピカチュウがリザードンにクラボの実をあげた。
「すまないな」
「気にすんな！」その時チームメタルのハガネールがこちらに近づいて来た。
「何だ？」
「・・・お前達、結構やるんだな・・・正直驚いたよ」
「当たり前よ！お兄ちゃん達はすっごく強いんだから！」
「・・・私は認めない！」その時メタグロスが起き上がり、怒った口調で言った。
「次やる時は完璧に倒して差し上げます！覚悟しなさい！お前達、行きますよ！」そう言うとメタグロス達は行ってしまった。その時ハガネールがメタグロス達と行く前にバクフーン達の方を振り向いた。
「すまないな・・・次は楽しいバトルをしたいものだな・・・じゃあな」ハガネールは行ってしまった。
「あのハガネールはメタグロスとかなり違うね！」
「そうだな、それはそうと、疲れたからポケモンセンターに戻ろう

ぜ？」
「そうだね！」バクフーン達は疲れた身体を休ませる為にポケモンセンターに戻った。その夜、バクフーンはラグラージにリーフシティにあるジムのチームについて質問した。
「ラグラージ、リーフシティのジムのチームってどんなタイプの奴がいるんだ？」
「確か、草タイプが中心だったはずなんだけど、最近チームメンバーを変えたらしいから詳しい事は解らないんだよ」
「ふ～ん、あれ？リザードン何処行った？」辺りを見たらリザードンがいなくなっていた。
「またいなくなったの！？」
「誰がいなくなったって？」その時リザードンがやって来た。
「何処に行ってたんだ？」
「ん？ちょっと外の風に当たりにさ！」
「もう！心配させないでよね？前回だって急にいなくなったから皆心配して捜したんだから！」
「悪い悪い！さぁ、夜も遅いし寝ようぜ！」
「お、おう」翌朝・・・
「バクフーン兄ちゃん起きて！もう朝だよ？」
「う～ん・・・後三分寝かせて・・・」
「・・・電気ショック！」ピチューは電気ショックで軽く攻撃した。
「いたたた！」
「目が覚めた？バクフーン兄ちゃん♪」
「・・・はい」
「ヨロシイ♪」
「・・・バクフーン、お前の気持ち解るぞ・・・」
「お兄ちゃん何か言った？」
「い、いや別に（汗）」
「皆起きたみたいだね！じゃあ、そろそろ出発しようか！」バクフーン達は支度を済ませ、ポケモンセンターを出た。「ラグラージ、

ここからリーフシティまでは後どれ位？」
「そうだね～、夕方には着くと思うよ！」
「解った！良し、じゃあリーフシティに向けて出発！」バクフーン達はリーフシティに向けて再び出発した。彼等の旅はまだまだ続く。

第十四話新たなライバル（後書き）

第十四話完成です！最近発売された、ポケモンレンジャーバトナージにハマってしまって小説書くの忘れてしまいました（┐；）！！まぁクリアしましたからこれからは小説に集中します！

第十五話動き出した漆黒の闇！リーフジムへの挑戦！（前書き）

リーフシティに到着したバクフーン達！そこである奴と再会する！前回の前書きで書くのを忘れたので今回に書きます。この小説の中でラティアスがトリックルームを使うことが出来る設定になっておりますが、本来は使う事は出来ません。

第十五話動き出した漆黒の闇！リーフジムへの挑戦！

「やっと着いた～！」
「ここがリーフシティか」
「すごーい！家が木の上にあるよ兄さん！」
「ツリーハウスってやつだな！見るのは初めてだ！」
「さぁ、早速ジム戦だ♪」バクフーンが行こうとした時
「ちょっと待ったバクフーン！」ラグラージがバクフーンを止めた。
「まずはポケモンセンターに行こう！サニータウンからずっと歩いて来たから皆疲れてるし」
「ちぇ～、解ったよ」バクフーン達はまずポケモンセンターで休む事にしました。ポケモンセンターの中に入っていくと、そこには・・・
「あれ？ゴウカザルじゃないか！」
「バクフーンか！久しぶりだな！」そこにはウォーターシティで出会ったゴウカザルがいた。
「これがバクフーンの仲間か？」
「あぁ！」
「俺はリザードンだ！よろしく」
「僕はラグラージだよ」
「私はラティアスです。よろしくお願いします！」
「俺はラティオス」
「アタシはピチュー！そしてこっちがお兄ちゃんのピカチュウよ！」
「俺だけ自分で名乗れないのかい！？」
「省略よ省略！細かいことは気にしないの！」
「細かい事なのか（汗）」
「随分と楽しそうなチームだな！俺はゴウカザルだ！そうだ、俺の仲間も紹介するぜ！お～い皆、ちょっとこっちに来てくれ！」すると、ポケモン達がやって来た。

「何だゴウカザル？」
「ほら、前に話したバクフーンだよ！」
「あぁ、お前と引き分けたってゆうアイツか！」
「今自己紹介してもらったとこなんだ。俺達も自己紹介しないといけないだろ？」
「そうだな！じゃあまずは俺から、俺はライチュウだ！」
「俺はエルレイド！」
「オイラはドサイドンだ！」
「私はプラスル！そしてこっちは仲良しの・・・」
「マイナンだよ！よろしくね♪」
「俺はムクホークだ」
「よろしくな！そういえばゴウカザル、お前のチームは何て名前なんだ？」
「名前はチーム業火だ！俺がゴウカザルだからって理由でライチュウが考えたんだ。バクフーンのチームは何て名前なんだ？」
「チームブラストだ！」
「良いチーム名だな！お前達はリーフジムに挑戦するのか？」
「あぁ！ゴウカザル達もそうなのか？」
「いや、俺達は昨日挑戦したんだ！」
「結果は？」
「当然、俺達が勝ったぜ！」
「さすがだなぁ！俺達も負けてられないぜ！」バクフーン達がゴウカザル達と話し合ってる時、ポケモンセンターにあるテレビに突然ニュースがながれた。
「番組の途中ですが、ここで緊急ニュースです。先程、ウォーターシティでジムリーダーのミロカロスさんが率いるチームアクアが何者かに襲われ、意識不明の重体です！繰り返します・・・」それはウォーターシティのジムリーダーミロカロス達が何者かに襲われたとゆうニュースだった。
「ミロカロスさんが！？」バクフーン達はニュースに注目した。

「現在の状況を現場のサーナイトさんに聞いてみましょう。現場のサーナイトさん？」
「・・・はい！こちら現場のサーナイトです！私は今ウォータージムに来ています！ジムはかなり激しいバトルがあったためでしょうか、所々崩壊しています！現在ジムリーダーのミロカロスさんとチームアクアの一人シャワーズさんはポケモンセンターで治療中ですが、命に別状は無いそうです！しかし、チームアクアのフローゼルさんは行方不明だそうです！現在ポケモンポリスが全力でフローゼルさんを捜しています！詳しい情報が入り次第またお伝えします！以上現場からでした！」「・・・ミロカロスとシャワーズが意識不明、更にフローゼルが行方不明・・・物騒な話しだな・・・」
「そうだな・・・」
「フローゼルさん大丈夫でしょうか？」
「ポケモンポリスが全力で捜索してるらしいからきっとすぐ見つかるよ！それに、フローゼルだって結構強いんだから簡単にはやられないはずだし！」・・・その頃、ウォーターシティから少し離れた迷いの森の中に奴らがいた。
「・・・相変わらずお前は短気だなあユキメノコ？」
「うっさいわね！質問に答えないあいつらが悪いのよ！大体、こうゆうのはアンタがやれば良いじゃないヨノワール！」そこには漆黒の闇の幹部、ユキメノコとヨノワールがいた。
「お前が自分でやるって言ったんだろ？それにお前は俺の言う事聞くの嫌だろ？」
「ふん！ま、でも良いわ！今日は結構イケテる奴をコレクションに出来たし！ユキノオー、そいつを持って来なさい！」
「はいよ～」ユキメノコは部下のユキノオーにある凍り漬けにしたポケモンを持って来させた。
「なかなか良い感じに凍ってるわね！確かフローゼルとか言ったわね？」
「やれやれ、お前のその趣味は俺には理解出来ねぇなあ！てか、悪

趣味だな！」
「・・・それ以上言うとアンタもコレクションに加えるわよ？」
「それは御免だな！・・・とにかく、次の場所に向かおう。すでにフーディンは三つの内一つを見つけて捕獲作戦を開始してるんだからな！」
「解ってるわよ！でもその前に、このフローゼルを保管しなきゃいけないからアンタは先に行ってて！後からちゃんと行くから！さぁユキノオー、コイツを持ってさっさと行くよ！」
「ウ～ス！」ユキメノコとユキノオーは凍り漬けになっているフローゼルを持って行ってしまった。
「・・・やれやれ」一方バクフーン達はゴウカザル達と別れ、リーフジムに向かっていた。
「ここがリーフジムか、よ～し！」バクフーンは扉を開けた。
「おや？リーフジムに挑戦しに来たのかい？」
「あぁ！あんたがジムリーダーか？」
「そうだよ！僕はロズレイドだ！君達の挑戦、受けてたつよ！さぁ、バトルフィールドはこっちだ！」バクフーン達はロズレイドに案内されて、バトルフィールドにやって来た。
「ロズレイド、このジムのバトルルールは？」
「ルールはダブルバトルを三回やって先に二勝した方の勝ちだよ！結構単純でしょ？さぁ、そろそろ始めようか！ハッサム頼むよ！」
審判のハッサムがやって来た。
「それでは、ジムリーダー率いるチームプラント対チームブラストのジム戦を行います！まずは第一試合に出場する人はバトルフィールドへ！」「ラティオスとラティアス、行ってくれるかな？」
「解った」
「解りました！」
「えぇ～！？俺じゃないの！？」
「バクフーンは一応このチームの大将なんだよ？大将は最後に出るもんでしょ？」

「ちぇ～」
「じゃ、二人とも頼むよ！」最初はラティオスとラティアスが出るようだ。
「メガヤンマにウソッキー、最初は君達だよ！」チームプラントからはメガヤンマとウソッキーが出で来た。
「それでは、試合開始！」
「じゃあ、行くか・・・エアスラッシュ！」メガヤンマが先制して攻撃した。
「オイラも行くぞ～！」ウソッキーはラティオス達に向かってダッシュした。「１０万ボルト！」ラティオスは１０万ボルトでエアスラッシュを打ち消した。
「くらえ～！ウッドハンマー！」ウソッキーは自分の手をハンマーの如くラティアスに向けた。
「守る！」ラティアスはそれを守るで防御した。
「草タイプならこの技だ！冷凍ビーム！」ラティオスはウソッキーに氷タイプの技冷凍ビームで攻撃した。「わっ！？」冷凍ビームはウソッキーに当たったが効果は普通のようだ。
「ん？思った以上に効いてないな・・・」
「よくもやったな～！お返しだ、ものまね！」ウソッキーはものまねでさっきラティオスが使った冷凍ビームをコピーして攻撃した。
「守る！」ラティオスは守るで防御した。
「ものまねを使えたのか！厄介だな」
「ウソッキーに気を取られ過ぎだ！」いつの間にかラティオスの後ろにメガヤンマが来ていた。
「ソニックブーム！」メガヤンマは羽根を高速で羽ばたかせて衝撃波を発生させてラティオスを攻撃した。
「くっ、守る！」ラティオスはもう一度守るで防御しようとした。
「守るは連発で出る技ではない！防げまい！」メガヤンマの言う通り、守るは連続で使うと失敗しやすい。ラティオスは賭けたのだ。
すると、ラティオスの前にバリアのような光が発生してソニックブ

ームを弾いた。守るが成功したのだ。
「なっ!?守るが決まるだと!?」
「成功する事もあるってことだ!１０万ボルト!」ラティオスは反撃した。
「電光石火!」しかしメガヤンマは電光石火で避けた。
「速いな・・・もしかして、特性の加速か?」
「良く知ってるな!確かに、俺の特性は加速だ!時間が経てば経つ程俺のスピードは上がって行くぞ!」
「あの～?」メガヤンマが話してる時にラティアスが喋り掛けてきた。
「なんだ?バトル中に!」
「あなたが特性の説明してる間に、ウソッキーさん倒れましたよ?」
「え?」メガヤンマが地上を見ると、ウソッキーは目を回して倒れていた。
「ウソッキー、戦闘不能!」
「何故ウソッキーが!?」
「ラティアス、ナイスだ!」
「えへへ!兄さんに教えてもらった水の波動のおかげよ!ウソッキーさんに冷凍ビームがあまり効かなかったから、草タイプじゃないとすぐに解ったから、試しに水の波動をぶつけてみたら結構効いたのよ!どうやらウソッキーさんは岩タイプだったみたいね!」
「くっ、ウソッキーが倒されたのは誤算だったが、俺を倒す事は出来ない!このスピードについてこれない限り!」
「・・・だとさ?ラティアス、あの技を頼む」
「解った!トリックルーム!」ラティアスがトリックルームを使うと、辺りの空間が歪み始めた。
「何だ!?これは!?」
「ラティアスが作り出したトリックルームだ」いつの間にかラティオスはメガヤンマの目の前にいた。
「この空間の中では速さが逆転する。速い者は遅くなり、遅い者は

速くなる！１０万ボルト！」ラティオスはメガヤンマに１０万ボルトで攻撃した。効果は抜群だ！メガヤンマは倒れた。
「メガヤンマ戦闘不能！勝者ラティオス・ラティアスペア！」
「やったなラティアス！」
「うん！」
「二人ともお疲れ様！さぁ、次はリザードンとピカチュウ行ってくれる？」
「リザードンとか？まぁ構わないが」
「なんだ？俺とじゃ不満か？」
「別に、誰と組んでも俺は全力でやるだけさ！行くぞ」リザードンとピカチュウはバトルフィールドに向かった。
「リーフィア、ユレイドル！頼むよ」チームプラントからはリーフィアとユレイドルが出で来た。
「むっ！」ピカチュウはリーフィアを見た瞬間飛び出した。
「リーフィアって名前なんだね！良い名前だ！・・・バトルの後ご一緒に食事でもいかがですか？」
「はい？」ピカチュウはいきなりリーフィアをデートに誘った。
「またお兄ちゃんったらもう！」ピチューがピカチュウの耳を掴み引っ張った。
「いい加減にしなさいお兄ちゃん！これからバトルなんだから！」
「イタタタ！解ったから離してくれ～！」
「・・・そ、それでは第二試合開始！」
「行くわよユレイドル！」
「解ってるよ！原始の力！」
「手助け！」ユレイドルは地面から岩を空中に浮かばせてそれをリザードンに向けて放った。リーフィアは手助けで原始の力の威力を上げた。
「げっ！？」
「アイアンテール！」ピカチュウはアイアンテールで向かって来た岩を全て弾き返した。

「すまないピカチュウ！」
「気にすんな！それより次が来るみたいだぞ！」リザードンが見るとリーフィアが突っ込んで来た。「リーフブレード！」リーフィアはピカチュウに頭の葉っぱを刀のように斬りつけて来た。
「おっと！」ピカチュウはリーフブレードを受け止めた。
「くっ！」
「良いリーフブレードだね！でも、そんな大振りだと相手にすぐ見切られちゃうよ？」
「確かにね！だけど、これはダブルバトルなのよ！」「その通り！岩石封じ！」リーフィアがピカチュウから離れると、地面から岩が盛り上がりピカチュウを閉じ込めようとした。その時ピカチュウの身体が宙に浮いた。「ギリギリセーフだな」リザードンがピカチュウを抱えて飛んだのだ。
「サ、サンキュー」
「良いって事よ！」
「逃がさないよ！原始の力！」ユレイドルは原始の力でリザードン達を攻撃した。
「リザードン！俺をあの岩に向かって投げろ！」
「解った！」リザードンはピカチュウを力いっぱい投げた。
「アイアンテール！」ピカチュウはアイアンテールで岩を砕いた。
「まだだ！」更にピカチュウは砕いた岩をユレイドル達に向けてアイアンテールで飛ばした。
「リザードン！」
「解ってるよ！火炎放射！」リザードンはピカチュウが飛ばした岩に火炎放射を当て、燃える岩石にした。まるで流星群のようにユレイドル達に襲いかかる。
「砂嵐！」ユレイドルは砂嵐で防いだ。
「まだまだぁ！」ピカチュウは落下しながら拳に力を溜めていた。
「気合いパンチ！」ピカチュウの渾身の一撃がユレイドルに炸裂した。ユレイドルは倒れた。

「ユレイドル戦闘不能！」
「後は君だけだね？出来れば降参してくれると助かるんだけど？」
「冗談でしょ？誰が降参するもんですか！」
「やっぱりね」
「行くわよ！リーフブレード乱れ切り！」リーフィアはピカチュウにリーフブレードの連続攻撃をした。だが、ピカチュウはそれを全て回避した。
「この～！」リーフィアの攻撃が大振りになってきた。ピカチュウはそれを見逃さずリーフブレードを受け止めた。
「電磁波！」ピカチュウが電磁波を使うと、リーフィアは動かなくなった。
「身体が・・・動かない！？」
「そりゃそうだよ」ピカチュウがリーフィアを軽く押すと彼女はそのままの体制で倒れた。
「電磁波で麻痺したんだよ！その身体じゃあもうバトルは出来ないよ！」
「リーフィア戦闘不能！勝者リザードン・ピカチュウペア！二勝したのでチームブラストの勝利です！」「二人共ご苦労様！僕達の勝ちだね！」
「・・・俺の出番は？」
「あぁ・・・ピカチュウ達が勝っちゃったからバクフーンと僕は出番なしだね・・・」
「・・・えぇ！？」
「しょうがないよ！僕達勝ったんだから良いじゃない！」
「俺もバトルがしたい～！」
「良かったらバトルしようか？」ロズレイドがバクフーンに提案した。
「マジで！やろうやろう！」
「その前に、リーフバッジを君達に渡すね！」ロズレイドからリーフバッジをもらった。葉っぱをイメージした形をしている。

「ありがとうロズレイド！ラグラージ、ちょっと持っててくれ！」
バクフーンはラグラージにバッジを預けた。
「さぁやろうぜロズレイド！」
「ＯＫ！」急遽ロズレイドの提案でバクフーンとロズレイドのバトルが始まった。
「行くぜ！火炎放射！」バクフーンは火炎放射で先制した。
「なら、こっちはシャドーボールだ！」ロズレイドはシャドーボールで迎え撃った。二つの技はぶつかり合い、爆発した。
「マジカルリーフ！」ロズレイドはすかさず攻撃した。無数の葉っぱがバクフーンに襲いかかる。
「電光石火！」バクフーンは電光石火で回避しようとした。
「無駄だよ」ロズレイドがそう言うとマジカルリーフがバクフーンの後を追って来た。
「ウソ！？」
「マジカルリーフは回避不可能・・・君に当たるまで何処までも追いかけるよ」
「回避出来ないなら・・・これでどうだ！火炎車！」バクフーンは炎の鎧を身にまといマジカルリーフを防いだ。
「どうだ！」バクフーンが自慢気に言った時、フィールドに雨が降り始めた。すると、火炎車の炎が少し弱くなった。
「こんな時に何で雨が・・・」
「これは僕が雨乞いで呼んだのさ、これで君の得意の炎技は威力が落ちるだろ？」
「だったら炎技以外を使えば問題ないだろ！スピードスター！」ロズレイドに無数の星型のエネルギーが飛んで来た。
「マジカルリーフ！」ロズレイドはマジカルリーフでスピードスターを防御して、すかさず反撃した。
「ウェザーボール！」エネルギー弾がバクフーンに直撃した。
「ぐは！？」ウェザーボールは天気によって技のタイプが変わる。今は雨が降っているため、水タイプに変化。バクフーンには効果は

抜群だ！

「この、電光石火！」バクフーンはロズレイドに一気に接近し、体当たりを決めた。

「ウェザーボールを受けても反撃するとはね！でも・・・」

「ぐっ！？」気がつくとバクフーンの腕にトゲが刺さっていた。するとバクフーンはフラフラし始めた。

「な・・・んだ？」

「僕の特性、毒のトゲさ！物理攻撃して来た時に刺さったのさ。今君の身体に毒がまわり始めたのさ！」

「クソ・・・」バクフーンにはめまいが襲い始めていた。目の前がボヤけて来た。

「これで決めるよ。ウェザーボール！」バクフーンに向けてロズレイドはウェザーボールを放った。「く・・・電光・・・石火！」バクフーンは何とかウェザーボールを電光石火で避けた。そしてそのままロズレイドに向かって行った。

「フレア・・・ドライブ！！」得意技のフレアドライブで最後の勝負に出たバクフーン。電光石火のスピードを利用して繰り出されたフレアドライブはロズレイドに決まった。

「ぐっ！？」だが、雨の影響でフレアドライブの威力は少し下がっていた為ロズレイドを倒す事はできなかった。

「ハァ・・・ハァ・・・」

「毒が効いてるはずなのに、まだ動けるなんて・・・」

「ハァ・・・ハァ・・・ウォォォ！！」バクフーンが再びロズレイドに突っ込んだ。

「フレアドライブ！！」

「ウェザーボール！」ロズレイドのウェザーボールはバクフーンのフレアドライブで蒸発した。

「なっ！？」

「ウォォォ！！」フレアドライブが再びロズレイドに決まった。

「・・・特性の猛火か・・・」ロズレイドは倒れた。

「・・・うっ」バクフーンも倒れた。
「・・・あれ?ここは?」バクフーンが目を覚ますとバトルフィールドじゃなく、ベッドの上にいた。
「おっ!気がついたか!」
「リザードン・・・ここは?」
「ポケモンセンターだよ!お前無茶しすぎだぜ!毒を受けた身体でフレアドライブを使うんだからな!」
「・・・あっそうだ!ロズレイドは?」
「僕ならここだよ!」ロズレイドはバクフーンの隣のベッドにいた。
「君は強いね!負けたよ!」「でも、俺も倒れたから引き分けじゃ?」
「いや、僕が先に倒れたから君の勝ちだよ!楽しいバトルだったよ!またいつかバトルしてくれるかい?」
「もちろん!またバトルしようぜ!」二人はがっちり握手した。
「僕はそろそろ戻るよ!次のジム戦頑張ってね!」
「おう!」ロズレイドはジムに戻って行った。バクフーン達は一日ポケモンセンターで身体を休ませる事にしました。翌朝・・・
「ふぁ~・・・」
「おはようございますバクフーンさん!今日はちゃんと起きれましたね?」
「ピチューの電撃は受けたくないからね・・・」バクフーンがそう言った時、隣から閃光が・・・
「お兄ちゃん早く起きなさい!」ピチューが電気ショックでピカチュウを攻撃したのだ。
「・・・あれは確かに何度も受けたくは無いですよね(汗)」バクフーン達は次のジムに向かう為に準備しました。
「ラグラージ、次のジムは何処にあるんだ?」
「次はサンドロックシティだよ!でも、途中砂漠を越えないといけないから結構大変だよ!」
「まぁ何とかなるだろ!さぁ、行こうぜ!」バクフーン達はサンド

ロックシティに向けて出発した。彼らの旅はまだまだ続く！

第十五話動き出した漆黒の闇！リーフジムへの挑戦！（後書き）

第十五話完成です！

第十六話ＶＳフライゴン！（前書き）

リーフジムで見事に勝利して四つ目のバッジをゲットしたバクフーン達！次のジムがあるサンドロックシティに向かって今は砂漠を歩いている。

第十六話ＶＳフライゴン！

「・・・何処まで行っても砂ばっかりだ～！もう飽きた～！」
「砂漠だからしょうがないよ！」
「そうだぜバクフーン！」
「ちぇ～」
「あれ？ねぇ兄さん、あそこに何かあるよ？」ラティアスが指差す先には確かに何かあった。
「あれは・・・町か？こんな砂漠の中に？」
「とりあえず行ってみますか？」
「そうだね！」バクフーン達はその町に向かった。しかし、その途中突然砂嵐が起こった。
「何だよ急に！？」だが、すぐに砂嵐は止んだ。
「何だったんだ今の？」
「あの砂嵐、町に向かって行ったみたいですね？」
「・・・正確には、あのポケモンだな」
「どうゆう意味だラティオス？」
「まぁとにかく町に行こう！答えはそこにあるはずだから」バクフーン達は再び町を目指しました。
「やっと着いた！」
「おや？お客とは珍しいね！」
「すみません、ここは何て町何ですか？」
「ここはサンドタウンだよ！ちなみに、ポケモンセンターはそこだよ！」この町に住むサンドパンが指差す先を見ると確かにポケモンセンターがあった。バクフーン達はポケモンセンターで休む事にしました。
「いらっしゃい！ゆっくり休んでいってね！」
「ありがとうハピナス！」
「ハピナスさん！頼まれた物を持って来ましたよ！」バクフーン達

の後ろから声がした。
「あっご苦労様！奥の部屋に置いておいて！」
「解りました！」
「ハピナス、彼は？」「彼はフライゴンって言うの！ここのお手伝いをしてくれてるのよ！」
「へぇ～」
「ハピナスさん、荷物置いて来ました！」
「ありがとうフライゴン君！助かるわ！」
「いいえ！これ位ならお安いごようですよ！・・・そちらの方々は？」
「俺はバクフーンだ！よろしく！それから、こいつらは俺の仲間だ！」
「リザードンだ！」
「僕はラグラージだよ！」
「アタシはピチューでこっちがお兄ちゃんのピカチュウよ！」「だから自分で名乗らせてくれよ！」
「私はラティアス！」
「俺はラティオスだ！君だな？さっきの砂嵐を起こしたのは？」
「あっ（汗）もしかして、さっきすれ違ったのはあなた達だったんですか？だったら、すいません！急いでいたものですから！」
「気にしなくて良いよ！でも、一体何を運んでいたんだ？」
「あぁ、あれはトレーニング道具とかですよ！子供達用の」
「子供用？どうゆう事？」
「それはですね・・・」フライゴンが説明しようとした時、大勢の子供達がやって来た。
「ハピナス先生！授業受けに来ました～！」
「は～い！皆良く来たわね！さぁ、今日はバトルの授業するからトレーニング場に集まって下さ～い！」
「は～い！」ハピナスは子供達を連れてトレーニング場に行った。
「ハピナス先生って？」

「実はハピナスさんは学校の先生もしてるんですよ！」
「そうなんですか？」
「はい！今日はバトルの練習をする予定だったので、僕がサンドロックシティまで飛んで行って、ジムリーダーからトレーニング道具を貸してもらいに行ってたんです！」
「そうだったんですか！そうだ！バクフーンさん、授業見学して行きませんか？」
「良いよ！」バクフーン達はハピナスの授業を見学する事にしました。
「は～い皆！今日は技を目標に当てる練習です！フライゴン君、的の準備お願いします！」
「あ、は～い！」フライゴンは的を用意した。
「まずはあの的に当てて下さい！それでは、始め！」子供達は的めがけて攻撃した。ほとんどの子は上手に的に当てる事が出来るが、ヒトカゲだけはうまく当てる事が出来ないみたいだ。
「そんなに力を入れなくて良いよヒトカゲ。リラックスして・・・」
フライゴンがヒトカゲにアドバイスしている。
「フライゴンさんもまるで先生みたい！」
「そうだな！」しばらくするとフライゴンにアドバイスされたヒトカゲの技が的に当たり始めた。
「当たった！当たったよフライゴンのお兄ちゃん！」
「な？リラックスしてやれば当たるだろ？」
「うん♪そうだ！フライゴンのお兄ちゃんもやってよ！」
「えっ？」
「フライゴンのお兄ちゃんのやるところが見たいんだよ！」
「あっ私も見たい！」
「アタシも！」子供達がフライゴンに集まって来た。「あっそうだ！そういえばさっきハピナスさんに頼まれた事があったんだった～（汗）」フライゴンはそう言いながら逃げた。
「フライゴンのお兄ちゃん・・・」

「さぁ、皆そろそろ休憩よ～！」
「は～い！」子供達は休憩するためにポケモンセンターに戻って行った。バクフーン達もポケモンセンターに戻ろうとした時、ハピナスが呼び止めた。
「バクフーン君、ちょっと良いかな？」
「ん？」「実は子供達に実際にバトルをしてるところを見せたいと思ってるんだけど、協力してくれない？」
「バトルか！良いよ！でも相手は？」
「その相手なんだけど・・・」その時、フライゴンが戻って来た。
「あっ丁度良かったわ！」
「へ？何がですか？」
「フライゴン君、子供達にバトルをしてる所を見せたいからバクフーン君とバトルしてくれない？」
「僕がですか！？」
「そう！お願いフライゴン君！」
「・・・ちょっと・・・考えさせて下さい・・・」フライゴンはそう言うとまたポケモンセンターに戻ってしまった。
「どうしたんだアイツ？」
「やっぱりまだダメなのかしら？」
「どうゆう事ですか？」
「実は彼バトルに自信を無くしてるの。一週間位前にこの町に来たチームの一人にバトルを挑んだんだけど、その人に負けたのが余程ショックだったみたいでね。それ以来彼はバトルしなくなってしまったの」
「そうだったんですか・・・」
「でも、彼は本当はバトルが大好きなの！だから、バクフーン君とバトルして少しでも自信を取り戻してくれればと思ったんだけど・・・」
「そう言う事か！解った！協力するぜ！」
「本当！？ありがとうバクフーン君！」

「任せとけって♪」
「バクフーン本当に大丈夫?今回のバトルはフライゴンに自信を取り戻させる為なんだよ?」
「解ってるって!兎に角、バトルすれば良いんだろ?」「・・・やっぱり解ってないな・・・」その時フライゴンが再び戻って来た。
「ハピナスさん・・・僕やります!」
「本当!?ありがとうフライゴン君!じゃあ待ってて!子供達を呼んで来るから!」ハピナスの提案で、子供達に実際のバトルを見せる為、そしてフライゴンの自信を取り戻す為、バクフーンとフライゴンがバトルをする事になった。ハピナスは子供達にその事を伝える為にポケモンセンターに戻った。しばらくすると、ハピナスと子供達が戻って来た。
「良し、じゃあやるかフライゴン!」
「は、はい!」バクフーンとフライゴンはバトルフィールドに入った。
「フライゴンのお兄ちゃん頑張れ~!」
子供達がフライゴンを応援している。
「お、おう!」
「リザードン!審判頼む!」
「良し、じゃあこれより、バクフーンとフライゴンのバトルを開始する!ルールはシングルバトルで時間無制限!それじゃ、試合開始!」バクフーンとフライゴンのバトルが始まった。
「行くぜフライゴン!電光石火!」まず、バクフーンが電光石火で先手を取った。だが、フライゴンはバクフーンの動きを見切り、電光石火を受け止めた。
「やるな!」
「えい!」フライゴンはバクフーンを投げ飛ばした。
「火炎放射!」バクフーンは投げ飛ばされながら火炎放射を放った。
「砂嵐!」それをフライゴンは砂嵐で防御した。
「火炎放射がダメならこれだ!スピードスター!」バクフーンは星

型のエネルギー弾を放った。
「ドラゴンクロー！」それをフライゴンはドラゴンクローを高速で繰り出してスピードスターを打ち消した。
「げっ！？」
「今だ！竜の息吹！」フライゴンは竜の息吹で攻撃した。
「電光石火！」バクフーンは電光石火で回避した
「これでどうだ！噴火！！」バクフーンは噴火で攻撃した。
「砂嵐！」だが、再びフライゴンの砂嵐で防がれてしまう。（こいつ、めちゃくちゃ強いじゃん！）と、バクフーンは思いながら次の攻撃を繰り出す体制に入った。「電光石火！そして、捨て身タックル！」バクフーンは電光石火のスピードを利用して、捨て身タックルを繰り出した。
「砂地獄！」フライゴンが技を繰り出すと、バクフーンは何かに足をとられて動けなくなった。
「な、何だ！？」バクフーンが下を見ると、足が砂に埋まっていた。しかも、どんどん身体が砂に沈んでいく。それはまるで流砂だ。
「やば！？」バクフーンは何とか砂地獄から出ようとするが、もがけばもがく程身体は砂に沈んでいく。
「これで決めます！破壊光線！！」バクフーンが動けないところにフライゴンは破壊光線で攻撃した。破壊光線はバクフーンにヒットして、すさまじい爆発が発生した。
「・・・やったかな？」フライゴンが確認してみると、そこにはバクフーンはいなかった。
「えっ！？い、いない！？」
「ふ～！危なかったぜ！」フライゴンの後ろから声が聞こえて来たので振り返るとバクフーンがいた。
「一体どうやってあの砂地獄から！？」
「穴を掘るで逃げたのさ！上がるのがダメなら下にって思ってさ！さぁ、バトルの続きだ！火炎放射！」バクフーンが火炎放射で攻撃した。

「竜の息吹！」フライゴンは竜の息吹で火炎放射を防いだ。そのあとフライゴンは空に飛んだ。
「これならどうですか！僕のとっておきです！」すると、フライゴンの頭上に無数の巨大なエネルギーの塊が現れた。
「行きます！竜星群！！」無数の巨大なエネルギーの塊がバクフーンに降り注ぐ。竜星群はフィールド全体に降り注ぎ、またすさまじい爆発が発生した。
「これなら・・・」
「まだまだ！」
「えっ！？」フライゴンが声がする上の方を見ると、何とバクフーンがいた。
「くらえ！捨て身タックル！」バクフーンは落下スピードを利用して攻撃した。フライゴンは回避出来ず捨て身タックルを受けた。二人はそのまま地上に落ちていった。
「くっ！？」フライゴンは地面に当たる寸前で何とか上昇する事が出来た。
「火炎放射！」バクフーンは地面に火炎放射をぶつけて、衝撃を和らげた。
「スゲー・・・フライゴンのお兄ちゃんも凄いけど、あのバクフーンのお兄ちゃんも凄い！どっちも頑張れ～！」ヒトカゲの応援が二人に聞こえて来た。
「ヒトカゲ・・・」
「こりゃ、もっと頑張らなきゃな！」二人は攻撃する体制に入った。
「・・・バクフーンさん・・・僕、今凄く楽しいです！」
「へへ！俺もだぜフライゴン！やっぱバトルは楽しくやらないとな？」
「はい！」
「さぁ、行くぜ！」バクフーンとフライゴンはまたバトルを再開した。二人は一進一退の攻防を繰り広げた。バトルが始まって三十分が経過した。「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」

「ハァ・・・ハァ・・・」二人共もう体力の限界で倒れていた。
「こりゃ、引き分けだな・・・」
「フライゴンのお兄ちゃん！バクフーンのお兄ちゃん！」子供達が二人の所に向かって行った。
「大丈夫？」
「ハァ・・・だ、大丈夫だよ」
「ハァ・・・ハァ・・・俺も大丈夫だぜ」
「二人共凄いかっこよかったよ！・・・俺もお兄ちゃん達みたいになれるかな？」
「あぁ、きっとなれるよヒトカゲ！」
「もちろんだぜ！」ヒトカゲはその言葉を聞いて喜んでいる。
「二人共お疲れ様！さぁ、ポケモンセンターで休みましょう！皆、手伝ってね！」
「は～い！」ハピナスと子供達に支えてもらいながら二人はポケモンセンターに戻った。二人は余程疲れたのかベッドに横になるとすぐに眠ってしまった。
「ハピナスさん、二人は？」「ぐっすり眠ってるわ！あれだけのバトルをしたから当然ね！それにしても、フライゴン君が自信を取り戻してくれて良かったわ！」
「そうですね！」
「ラティアス、ちょっと良いか？」ラティオスがラティアスを呼んだ。
「何、兄さん？」
「今からトレーニング場に行くぞ！」
「えっ？う、うん・・・」ラティオスはラティアスを連れてトレーニング場に向かった。
「何をするの兄さん？」
「・・・今から何をするのか見せる、少し離れてな！」そう言うとラティオスは集中し始めた。すると、ラティオスの頭上に無数のエネルギーの塊が出現した。

「こ、これってフライゴンさんが使ってた・・・」
「竜星群！」ラティオスは竜星群を使った。竜星群はバトルフィールドに降り注ぐ。
「・・・ふぅ」
「兄さん竜星群を使えるんだ！凄い！」
「驚いてばかりいられないぞラティアス！お前も竜星群を使えるようにするんだ！」
「えっ！？私も！？」「そうだ！今のお前には強力な技が必要だ！一人でも戦えるようになるために・・・さぁ、早速練習だ！」ラティオスはラティアスに竜星群を教える為にトレーニングを始めた。トレーニング開始から三時間後・・・
「竜星群！」ラティアスの頭上に無数のエネルギーの塊が出現した。
「良し！そのエネルギーをキープするんだ！」ラティアスは必死でエネルギーをキープしようとする。だが、徐々にエネルギーが小さくなって行く。
「くっ！？」エネルギーを維持出来ず消えてしまった。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」
「惜しかったなぁラティアス！今の感覚を忘れるな！」
「・・・うん！」
「今日はここまでにしよう！続きはまた明日にしよう！」ラティオスとラティアスはトレーニングを終えてポケモンセンターに戻って行った。翌日・・・
「ふぁ～・・・もう朝か・・・」バクフーンが眼を覚ました。
「おはようバクフーン！」「おはようラグラージ・・・ふぁ～」
「良いのかなバクフーン？そんなに眠そうにしてると・・・」
「起きなさいお兄ちゃん！電気ショック！」
「ぎゃあ～！？」ピカチュウがピチューの電撃を受けた。
「・・・あんな事になるよ」
「それだけは勘弁だな（汗）・・・あれ？そういえばいつも早起きのラティアスは？」

「まだ寝てるよ」ラティオスが指差す先にはまだ寝てるラティアスがいた。
「ラティアス姉ちゃんまだ寝てるの？」
「昨日の俺とのトレーニングで疲れたんだろ、しばらく寝かせてやってくれ」皆はラティアスをもう少し寝かせてあげる事にして、出発の準備を始めました。
「そういえばフライゴンはどうしたんだ？」
「バクフーンより先に起きてハピナスの手伝いに行ったよ！」その時ポケモンセンターのロビーでは・・・
「ハピナスさん！言われた物運びました！」「ありがとうフライゴン君！助かったわ！」フライゴンがハピナスの手伝いをしていた。
「あのハピナスさん・・・実は話しが・・・」
「何？話しって？」
「あの・・・僕、旅に出ようと思うんです！」
「旅に？」
「はい、バクフーンさん達みたいにチームを作ってジムに挑戦して、そしてポケモンリーグに出たいんです！」
「・・・そう、やっぱりね」
「え？」
「あなたはバトルが大好きだもの、いつかは旅に出ると思ってたわ！頑張るのよ！私応援するから！」
「はい！」その時出発の準備が出来たバクフーン達がやって来た。
「よっ！」
「バクフーンさん！もう行くんですか？」
「あぁ！サンドロックシティのジムに早く挑戦したくてさ！」
「そうですか！そうだ！サンドロックシティまで案内しましょうか？」
「良いのか！」
「えぇ！僕も旅に出ますからそのついでに！」
「え？旅？」

「フライゴン君もあなた達みたいにチームを作ってポケモンリーグに挑戦したいんですって！」
「そうなのか！じゃあ俺達のライバルって事だな！」・・・その時バクフーン達とフライゴンの会話をヒトカゲが聞いていた。
「フライゴンのお兄ちゃんが・・・旅！？大変だ！皆に知らせなきゃ！」ヒトカゲは慌てて皆に知らせに行きました。
「じゃあそろそろ行きますか？」
「そうだな！」
「じゃあハピナスさん！行ってきます！」
「フライゴン君、子供達には言わなくても良いの？」
「・・・別れが辛くなりますから黙って行きます・・・」
「そう・・・じゃあ、気を付けてね！」
「はい！」フライゴン達はポケモンセンターを出ました。そのまま町の出入口に向かいます。その時・・・
「待って！」バクフーン達が振り返るとそこには子供達がいた。
「待ってよ・・・フライゴンのお兄ちゃん・・・」
「ヒトカゲ・・・皆・・・」
「本当に・・・行っちゃうの？」
「・・・うん」
「じゃあ、俺達からプレゼントだよ！」
「えっ？」子供達からフライゴンにプレゼントが渡された。それは、バトルの時に持ってると技の威力が上がる道具や傷を癒す薬が入った袋だった。
「お前達・・・」
「また・・・会えるよね？」
「・・・うん！また会いに来るよ！」
「きっとだよ！絶対に会いに来てよ！約束だよ！」
「うん！約束するよ！」フライゴンと子供達はまた会う約束をした。
「じゃあ・・・行ってくるよ！」フライゴンはバクフーン達と一緒に町を出ました。子指すはサンドロックシティだ！彼等の旅はまだ

まだ続く！

第十六話ＶＳフライゴン！（後書き）

第十六話完成です！

第十七話挑戦五つ目のジム！（前書き）

バクフーン達はフライゴンの道案内のおかげでサンドロックシティにたどり着いた！

第十七話挑戦五つ目のジム！

「着きましたよ！ここがサンドロックシティです！」
「ここが！ありがとうなフライゴン！ここまで案内してくれて！」
「良いんですよ！では、僕はもう行きますね！」
「もう行っちゃうのか？」
「はい！また何処かで会ったらバトルして下さいね！」
「おう！またな！」フライゴンは飛んで行ってしまった。
「さて、早速ジムに行こうぜ♪」
「ちょい待ちバクフーン！まずはポケモンセンターだよ！」
「やっぱし？」バクフーン達はまずポケモンセンターに向かいました。
「そういえばサンドロックジムにはどんなチームがいるんだ？」
「確か岩タイプと地面タイプのポケモンが中心だった筈だよ！相性から言うとバクフーンとリザードン、そしてピカチュウには不利だね！」
「俺達に相性何て関係ないぜ！なっ二人共？」
「当たり前だろ？じゃなきゃ世界一強いポケモンにはなれないしな！」
「俺は・・・あんま自信ないな・・・特に岩タイプには」
「何だよリザードン！バトルする前からそんな弱気じゃあ勝てないぞ？」
「しょうがないよ！リザードンは炎タイプに加えて飛行タイプも持ってるから岩タイプは凄く苦手なんだから！」
「そりゃそうだけどさ～」
「すまない・・・だけど、やれる限り頑張るからさ！」
「頼むぜ！さて、そろそろ行こうぜ！」バクフーン達はサンドロックジムに向かいました。その道の途中・・・
「何だ？何かあったのか？」ジムに向かう途中にある広場でポケモ

ン達が集まっている。ラグラージは近くにいたゴローニャに話しを聞く事にした。
「すみません、何かあったんですか？」
「ん？あぁ、あれだよ！」ゴローニャが指差す先にはチラシが貼ってある掲示板があった。
「え～と、サンドロックジムリーダーであるバンギラスが散歩に行ったきり帰って来ません！何処かでリーダーを見つけたらすぐにジムに戻るように言って下さい！サンドロックジム、チームガイアのメンバーラムパルドより・・・って今ジムリーダーいないの！？」
「毎度の事だよ！ここのリーダーは良くいなくなる事で有名なんだ！」
「良いのかジムリーダーがそんなんで（汗）」
「どうしますか？」
「兎に角、ジムに行ってみよう！本当にリーダーがいないのか直接聞こう！」バクフーン達は急いでジムに向かいました。ジムの前にはラムパルドがいました。
「すみません！」
「ん？もしかしてジムに挑戦しに来たのか？悪いな、リーダーがいないんでジム戦が出来ないんだ！」
「本当にジムリーダーがいないんですか？」
「そうなんだよ！全く、アイツはジムリーダーの自覚が足りなさすぎるぜ！ハァ・・・悪いがもしバンギラスを見つけたら連れて来てくれないか？」
「解った！」
バクフーン達はバンギラスを探す為にバクフーンは北、ラグラージは西、ピカチュウは東、ピチューは南、そしてリザードンとラティオスとラティアスは空からとバラバラに別れて捜す事にした。しかし、中々バンギラスを見つける事が出来ません。
「いないなぁ・・・何処にいるんだろ？」
「ジムリーダー出てこ～い！！俺とバトルしてくれ～！！」

「・・・今バクフーン兄ちゃんの声が響いたような（汗）それは良いとして、中々見つからないわね～・・・お兄ちゃんはちゃんと捜してるのかしら？」
「ムフフ♪今はピチューがいないから・・・あっ！そこの綺麗なお嬢さ～ん♪」一方ラティオス達は・・・
「リザードン、どうだった？」
「ダメだ！見つからない！」
「俺もだ、ラティアスは？」
「私もまだ見つけてないわ！」
「これだけ捜していないとは・・・一度皆と合流しよう！」ラティオス達は一度バクフーン達と合流する事にした。その頃ピカチュウは・・・
「えっ！？ジムリーダーの居場所を知ってるのかい！」ナンパした女の子が偶然にもバンギラスの居場所を知っているらしい。
「うん知ってるよ！」
「お願い！バンギラスがいる所を教えてくれない？」ピカチュウはその女の子にバンギラスの居場所を教えてもらい、すぐにそこへ向かいました。
「あの子の話しでは確かここら辺の筈なんだけど・・・」そこは町外れでかなり淋しい所でした。
「・・・ジムリーダーじゃなくて別のやつがいるみたいだな・・・出てこいよ！」
「ほう・・・俺の存在に気付くとはな！」暗闇の中からポケモンが出て来た。
「何なんだお前は？」
「俺はドンカラスだ、金を置いて行け！そうしたら命だけは許してやる」
「・・・さっきの女の子はお前のグルか？」
「女？知らないなぁ！さぁ、金を渡すのか命を盗られるかどっちにする？」

「・・・金をやる気も無ければ命を盗られる気もない！」・・・5秒後。
「・・・ま・・・参りました・・・」
「弱すぎるぞお前！？良くそれで俺に挑んできたな？」
「命だけはお助けを～（泣）」
「さっきまでの威勢は何処に行ったよ（汗）まぁ良い・・・お前サンドロックジムのリーダーバンギラスが何処にいるか知らないか？」
「バンギラス？俺は知らない！」
「本当か？」
「ヒィィ～！？ほ、本当に知らないんだ！頼むから命だけは～（泣）」
「ハァ・・・しょうがない・・・信じてやろう。ただし！」ピカチュウはドンカラスに少しきつめに電磁波を使った。
「か、身体が・・・」
「そこでしっかり反省してな！心配すんな！朝にはその麻痺は治ってるはずさ！じゃあな！」
「トホホ・・・」ピカチュウは町外れから出た。
「結局バンギラスは見つけられずか・・・一体何処にいるんだ？・・・仕方ない、一度バクフーン達と合流するか！確か広場に集まるんだったな」ピカチュウはバクフーン達と合流する事にしました。
「あっピカチュウさん！バンギラスさんは見つかりましたか？」
「まだ見つけてないんだよ！ラティアスちゃんも？」
「はい・・・一体何処にいるんでしょうバンギラスさん？」
「俺がどうした？」
「えっ？」ラティアス達が振り返ると何とバンギラスがいた！
「彼方がバンギラスさんですか！？」
「そうだが・・・俺を捜していたのか？」
「はい！ラムパルドさんが彼方の事を捜してくれって・・・」
「アイツが？」
「兎に角！ジムに戻りましょう！」バクフーン達はバンギラスと一

緒にジムに向かいました。
「バンギラス！一体何処に行ってたんだよ！？ジムをほったらかしにして！仮にもお前はジムリーダーだろ！？」
「ちょっと散歩に行って来ただけじゃんか！そんなに怒るなよ」
「いいや！今日と言う今日は絶対許さないからな！大体お前は・・・」ラムパルドの説教が始まった。
「・・・あれじゃどっちがリーダーか解らないな（汗）」
「アハハ・・・そうだね（汗）」説教が始まってから１０分後・・・
「・・・もう勝手にいなくならないなバンギラス？」
「はいはい」
「はいは一回だ！」
「解ったよ！それよりこいつら挑戦者なんだろ？お前は中に行って準備しててくれよ！」
「お前・・・絶対反省してないだろ（怒）」
「ちゃんと反省してるから！頼むよ！」
「たくっ！解ったよ・・・」ラムパルドはジムに戻って行った。「ふぅ・・・やっと説教から解放されたぜ・・・アイツ説教始まると長いからな～！っとそういえば自己紹介がまだだったな！改めて・・・俺がジムリーダーのバンギラスだ！よろしくな！」
「あ、あぁよろしく！俺はバクフーンだ！」
「バクフーン？お前があのバクフーンか？」バンギラスはバクフーンの事を知ってるようだ。
「俺の事を知ってるのか？」
「お前だろ？アグノムと仲良くなったって奴は？」
「アグノムを知ってるのか！？何でアンタが？」
「さあ、何でかな？教えて欲しいならジム戦に勝ってみな！そしたら教えてやるよ！んじゃ行くか！」バンギラスはジムに入って行った。バクフーン達もジムに入った。
「さて、このジムのルールだが六対六でやる」
「何だ案外普通だな？」

「話しは最後まで聞け！良いか？六対六でやるが、ただ普通にバトルするんじゃないんだ！まずはあれを見な？」バンギラスが指差す先には大きな岩が二つあった。
「あれがどうしたんだ？」
「あの二つの岩の中にはバトルに役立つ道具が入った宝箱がある！俺達は手前の岩を守る、そしてお前達は奥の方の岩を守る！先に相手の岩を砕き宝箱をゲットした方の勝ちだ！」
「へぇ！面白そうじゃん！」
「だろ？だが、あの岩は普通のと違って結構硬いぞ？並の攻撃じゃヒビ一つ入らないからな！さぁ！やろうか！」バンギラス達とバクフーン達はそれぞれ自分達が守る岩の方に向かった。
「今回のバトルは攻める側と守る側の二組に別れた方が良いね！まずは守る側だけど・・・まずはリザードン！良いかな？」
「良いぜ！」
「次にラティアス！」
「解りました！」
「最後にラティオス！」
「解った」
「後の二人と僕は攻める側だよ！多分あの岩を砕けるのはパワーがある僕とアイアンテールや気合いパンチを使えるピカチュウだと思うからやられないようにしないと！」
「任せな！ラティアスちゃん！俺の活躍を見ててね♪」
「ってラグラージ！今までの話しだと俺じゃあの岩を砕けないみたいじゃないか！？」
「別に砕けないとは言ってないよ！ただ確実に砕ける事が出来るのは僕やピカチュウだって事だよ！まぁバクフーンがあの岩を砕けるなら良いけど？」
「良し！やってやるぜ！」
「頑張ってよ？それじゃあ・・・行こう！」バクフーン達は準備が整った。

「準備出来たようだな・・・俺達も行くぞ！」バンギラス率いるチームガイアも準備出来たようだ。チームガイアの配置は攻撃側がラムパルドとグライオン、守備側がバンギラスとダグトリオとボスゴドラとトリデプスだ。
「さぁ・・・ショータイムだ！」バトルが始まった。
「ラムパルド！頼むぜ？」
「解ってるよ！最初からとばして行くぜ！もろはの頭突き！」ラムパルドは物凄い勢いでラティオス達に向かって行った。
「来るぞ！ラティアス！」
「うん！」
「「水の波動！」」二人は水の波動でラムパルドを攻撃した。
「悪いがそうはさせないぜ？それ！」バンギラスは砂嵐で水の波動を食い止めた。
「ナイスバンギラス！このまま一気に行くぜ！」ラムパルドのもろはの頭突きが岩に炸裂しそうになった時、リザードンが立ちはだかった。
「こっから先には行かせない！オーバーヒート！！」リザードンのオーバーヒートがラムパルドのもろはの頭突きとぶつかり合った。しかし、ラムパルドの方がパワーが上でオーバーヒートをどんどん押し返して行く。
「くっ・・・ダメか！？」
「噴火！！」ラムパルドに噴火の炎が降りかかる。
「バクフーン！」
「へへ！お前がピンチの時には俺が駆けつけてやるよ♪それよりラムパルドは？」二人がラムパルドの方を見るとラムパルドは無傷だった。
「なっ！？なんで無傷なんだ！？」
「俺の砂嵐でお前達の炎からラムパルドの身を守ったのさ！」
「さっきの俺とラティアスの水の波動を止めた時といい、技の発生が早すぎる！どうゆう事だ？」

「破壊光線！」バンギラスが破壊光線で攻撃して来た。
「させない！サイコキネシス！」それをラティアスがサイコキネシスで軌道を変えて狙いを外させた。狙いが外された破壊光線はジム壁に当たり爆発！壁に大きな穴が開いた。
「凄い威力の破壊光線ね！あれが当たっていたらこの岩何か簡単に吹き飛ぶわね・・・」
「ほぅ・・・俺の破壊光線の軌道を変えるとはな・・・中々やるじゃないか！だが、今のでラムパルドがフリーになってるぞ？」バクフーン達がラムパルドを見るとすでに攻撃する体制に入っていた。
「もう一発行くぜ！もろはの頭突き！」ラムパルドはもう一度もろはの頭突きで攻撃して来た。
「させないよ！アームハンマー！」ラグラージのアームハンマーとラムパルドのもろはの頭突きがぶつかり合いパワー勝負になった。
「こいつ！？」
「力比べなら負けないよ！」ラムパルドと互角のラグラージ。皆がそれに見入っている最中にグライオンが別の方から攻撃しようとしていた。
「ラムパルドだけに気を取られ過ぎだぜ？ハサミギロチン！」グライオンは相手に当たると一撃で倒す事が出来る強力なハサミギロチンで岩を砕こうとした。
「させるかよ！アイアンテール！」ピカチュウがアイアンテールでグライオンのハサミギロチンを受けた。岩を砕かれる事は避けられたがピカチュウは吹き飛ばされてしまった。ピカチュウは壁に激しくぶつかったのだがそのピカチュウは身代わりで作り出された分身で本体はすでに相手の岩の上にいた。
「いつの間に！？」
「気を取られてたのはお前達だったみたいだな？悪いが・・・砕かせてもらう！アイアンテール！」ピカチュウがアイアンテールで岩を攻撃しようとした時、突然砂が現れてアイアンテールを妨害した。
「何！？」

「そう簡単に砕かせてたまるかよ！そら！」砂がピカチュウに襲いかかる。
「高速移動！」ピカチュウは高速移動で砂を回避した。
「くそ！さっきから何なんだあの砂は！？」
「俺は砂嵐を自由にコントロール出来るんだよ！さっきの砂も俺がやったのさ！さらに言うと俺の特性の砂起こしで砂嵐の発生が普通より早いんだがな！」
「なるほどな・・・そいつは厄介だ・・・なら！」ピカチュウはバンギラスに向かって行った。
「あんたを倒せば厄介な砂はなくなるよな！アイアンテール！」
「そう簡単に俺は倒せないぜ？」再びピカチュウのアイアンテールはバンギラスの砂に防がれた。
「ちっ！」
「ボスゴドラ！」
「解ってますってリーダー！捨て身タックル！」ボスゴドラがピカチュウに捨て身タックルで突っ込んで来た。
「光の壁！」ピカチュウは光の壁を下に出現させてそれを踏み台にして捨て身タックルを回避した。
「・・・逃がさないよ・・・砂地獄なんてどうですか！」ピカチュウの着地地点にダグトリオが砂地獄を発生させた。
「身代わり！」今度は身代わりで作り出した分身を踏み台にして砂地獄を回避した。
「結構身軽だな？」
「近距離がダメなら遠距離攻撃だ！雷！！」ピカチュウの雷が岩に炸裂した。が、岩は少しヒビが入っただけで砕けなかった。
「遠距離だと威力が下がるな・・・やはり近距離でやらないとダメか！」その頃ラグラージとラムパルドのパワー勝負はまだ続いていた。最初は互角だったがラグラージが若干疲れてきた為か徐々に押され始めた。
「くっ・・・！」

「パワー勝負で俺に挑んだのは誉めてやるが・・・ここまでだな？一気に行かせてもらうぞ！」ラムパルドが更にパワーを上げた。
「まだ・・・こんなパワーが！？うわっ！？」ラグラージは到頭吹っ飛ばされてしまった。
「グライオン！」
「待ってました！ハサミギロチン！」
「もろはの頭突き！」ラムパルドとグライオンの同時攻撃が岩に炸裂しようとしていた。
「させるか！ラティアス！」
「解ってるわ！」
「「守る！」」ラティオスとラティアスは守るでグライオンとラムパルドの攻撃を防いだ。だが！
「もらった！破壊光線！」バンギラスの破壊光線が到頭岩を破壊した。壊れた岩の中から宝箱が出現した。
「グライオン！あの宝箱を取れば俺達の勝ちだ！」
「了～解！行くぜ！」グライオンが宝箱を取ろうとした。
「させるか！エアスラッシュ！」リザードンのエアスラッシュがグライオンに直撃！グライオンは怯んでしまった。
「チャンス！」リザードンは宝箱を抱えて飛び上がった。
「宝箱を取られなければ負けにはならないんだろ？俺が守ってるから早くあいつらの宝箱を！」
「リザードンナイス！皆！一気に行くぜ！」バクフーン達は一斉に向かって行った。
「来たぞ！ダグトリオ！トリデプス！」
「・・・解ってますよ」
「やっとオイラの出番か！」
「「「砂嵐！」」」三人は同じ技で攻撃した。すさまじい砂嵐がバクフーン達を襲う！
「くらうか！穴を掘る！」バクフーンは穴を掘るで砂嵐を回避。ラティオスとラティアスは空に上昇して。ピカチュウはラティオスに

乗せてもらって回避した。ラグラージは地面タイプも持っているので砂嵐は効果がなくそのまま突っ込んで行った。
「ボスゴドラはラグラージを頼む！ダグトリオは地面に潜ってバクフーンを！トリデプスは俺とあの空に飛んだ奴らを落とす！」
「「「了解！」」」
「ラティオス！俺をあの岩まで投げてくれ！」
「解った！」
「ラティアスちゃん！手助けでサポートを頼む！」
「解りました！」
「行くぜ！」ラティオスはピカチュウを岩の所まで思いっきり投げた。ラティアスはピカチュウに手助けでパワーを与えた。そしてピカチュウは拳に力を溜めている。
「させるか！」
「それはこっちのセリフだよ！ハイドロポンプ！」ラグラージがハイドロポンプでバンギラスを攻撃した。
「ちっ！？」バンギラスはピカチュウに向けようとした砂嵐をハイドロポンプのガードに使ったためピカチュウには使えなかった。
「ボスゴドラ！ピカチュウを・・・」
「もう遅い！気合いパンチ！！」ピカチュウの渾身の一撃が炸裂した。攻撃した箇所からヒビがどんどん広がって行く。だが、それでも岩は砕けない！
「まだダメなのか！？ならアイアンテールで・・・」
「はいそこまで！シザークロス！」いつの間にかグライオンがやって来ていた。シザークロスがピカチュウに炸裂した・・・かのように見えたがピカチュウはシザークロスを受け止めていた！
「あぶね～・・・」
「やるなぁピカチュウ！俺も負けてられないぜ！」バクフーンが地面から出て来た。
「火炎放射！」バクフーンの火炎放射が岩に当たったがあまり変化がない。

「あら？」
「バクフーン！この流れでそれは無いだろ（汗）」
「これでダメなのか・・・ならもっと威力の高い技か・・・良し！試してみるか！」バクフーンは少し距離をとって炎のエネルギーを集め始めた。それは徐々に大きくなっていく。
「何だ？」
「いっけ～！」バクフーンは巨大な炎の塊を岩にぶつけた。するとすさまじい爆発が発生！岩は跡形もなく吹き飛んだ！
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・やっぱ・・・エネルギーを集めて使うから疲れるな・・・」
「何なんだ今の技！？とんでもない威力だったぞ！？」
「今のは・・・ってそれより宝箱を守るんだ・・・あっ！」
「残念ながら宝箱は頂いたぜ？俺達の勝ちだな！」ピカチュウが宝箱を取っていた。
「あっちゃ～・・・俺達の負けか～！」
「ハァ・・・ハァ・・・ナイスピカチュウ！」
「大丈夫かバクフーン？何かかなり辛そうだが？」
「そりゃそうだ！ブラストバーンを使ったんだからな！」バンギラスが答えた。
「ブラストバーン？」
「炎タイプの最強技だ！極一部のポケモンしか使えない技なんだが・・・まさかお前が使えるとはな！正直驚いたぜ！」
「あれ・・・思い付きでやっただけなんだけど・・・」
「・・・はい？」バクフーンの言う事に皆呆然としていた。
「ハァ・・・それに・・・そんな技があるなんて俺知らなかったよ・・・」
「マジかバクフーン！？冗談じゃあないよな？」
「俺はマジだ・・・」
（こいつ・・・思い付きで炎タイプ最強の技ブラストバーンを出したってのか！？凄いバトルセンスだな・・・こいつがしっかりバト

ルの訓練を受けたら今よりもっと強くなるぞ！）「おいバンギラス？何ぼーっとしてるんだよ！ほら！あいつらにこのジムを勝ち抜いた証のバッジを渡さないと！」

「ん？あ、あぁそうだったなラムパルド！」バンギラスが何処に持っていたのかバッジを取り出した。

「ほら！これがサンドロックバッジだ！受けとれ！」バクフーンはサンドロックバッジを受け取った。硬い岩をイメージさせる形をしている。

「ありがとうバンギラス・・・ハァ・・・しんどい・・・」

「早いとこポケモンセンターに行きな？あとで俺も行くからさ！さっきの話しの答えを教えてやるよ！」

「解った・・・」バクフーン達はポケモンセンターに向かいました。

それから一時間後・・・

「よう！じゃまするぜ？」バンギラスがやって来た。

「疲れは取れたか？」

「ハピナスのおかげで大分良くなったよ！」

「そりゃ良かったぜ！・・・んじゃ本題に入ろうか！行くぜ！」

「行くって何処に？」

「答えを知りたいんだろ？話すより実際に見せた方が早いからさ！」

バクフーン達はバンギラスに連れられてある所に向かいました。

「あれ？ここは・・・」そこはピカチュウが一度来た町外れでした。

「どうしたピカチュウ？」

「俺一度ここに来たんだ！女の子がここでバンギラスを見たって言ってたからさ！結局見つけられなかったんだけど」

「ふ～ん・・・女の子がね～・・・」

「な、何だよピチュー！」

「・・・どうせその子を食事にでも誘うつもりで話しかけたら偶然バンギラスの情報が入ったんでしょ？」

「そ、それは～（汗）」

「図星ね？」

「・・・すんません」
「話しは済んだか？行くぞ！」バンギラスが壁のある所を押すと突然地面から地下に行く為の入口が出現した。
「すっげ～！何か秘密基地みたいだな♪」
「行くぞ」バクフーン達は地下に入って行った。かなり深そうだ・・・
「本当に秘密基地みたいだ！ワクワクしてきた♪」
「バクフーンは昔から秘密基地とか好きだよな！覚えてるか？お前と俺とで木の上に秘密基地を作った時の事？」
「あぁ！懐かしいなぁ！二人で材料集めて一生懸命作ってたよな！」
「あの時お前材料を木の上に持って行こうとしてる時、途中で下を見たから怖くなって降りれなくなったんだよな（笑）」
「そんな事があったんですか？」
「リザードン！それは言わなくても良いだろ（汗）」バクフーンは少し顔を赤くしていた。しばらくバクフーン達は昔話で盛り上がっていた。その時・・・
「着いたぞ！」バンギラスがバクフーン達に言った。
「ここは・・・地底湖か？」バクフーン達の目の前には大きな地底湖が広がっていた。
「綺麗な所ですね！」
「お～い！俺だ！バンギラスだ！出てきてくれ！」バンギラスが呼びかけると地底湖からポケモンが飛び出して来た。
「よっ！エンペルト！」
「どうしたんですかバンギラス？おや、そちらの方達は？」
「例のバクフーンとその仲間達さ！あいつに紹介したくてさ！良いか？」
「彼等がそうなんですか！解りました！あの方もきっとお喜びになります！今お連れしますね！」エンペルトは再び地底湖に戻って行った。
「バンギラス彼は？」

「あいつはエンペルトだ！ちなみに彼じゃなくて彼女な？」
「えっ！？女性だったの！？」
「まぁ驚くのも無理ないな！見た目は男だからさ！」
「誰が男ですって？」いつの間にかエンペルトが戻って来ていた。
「エンペルト！？いつの間に！？」
「全く！私は列記とした女ですからね！」
「解った解った！で、あいつは？」
「僕ならここだよ」エンペルトの後ろにもう一人別のポケモンがいた。
「ようユクシー！何だ？相変わらず眠たそうな顔してるな？」
「バンギラス！ユクシー様に失礼でしょ！？」
「良いよエンペルト、気にしてないから！それより・・・君がバクフーンだね？アグノムから聞いてるよ！僕はユクシー、よろしくね」
「おう！よろしく♪」
「ユクシー・・・ってアグノムが言ってたもう一人の神様の名前じゃないか！？バンギラスはユクシーと知り合いだったの？」
「まあな！お前達の事を知っていたのはユクシーから聞いていたからさ！あっそうだ！ユクシーと知り合いって事は俺のチームの奴らには言わないでくれよ！あいつら口が軽いからユクシーがこの町にいる事を言っちゃいそうだからさ？」
「解ったよ！」しばらくバクフーン達はユクシーらと楽しく喋っていた。三十分位喋っていただろうか、そろそろバクフーン達はポケモンセンターに戻る事にした。
「じゃあなユクシー！またいつか会いに来るからな！」
「えぇ！待ってますよ！」ユクシーはバクフーン達が見えなくなるまで手を振って見送った。
「・・・行っちゃいましたか・・・アグノムの言ってた通り楽しい人達でしたね！」
「そうですね！」その時！
『ユクシー！聞こえる？』

「アグノム？」アグノムからユクシーにテレパシーが送られて来た。
「どうしたんですかアグノム？」
『前に言ってた漆黒の闇が現れたんだ！』
「何ですって！？大丈夫何ですか？」
『今のところはギャラドスが頑張ってくれてるから何とか！そっちに奴らは来てないよね？』
「来てませんよ！」
『そっか！でもいつ奴らが来るか解らないから気をつけてね！』
「アグノムも捕まらないで下さいね！」
『解ってるって♪じゃあ！』アグノムからのテレパシーは終わった。
「漆黒の闇がアグノムの所に・・・」
「アグノム様は大丈夫でしょうか？確かにギャラドスは強いですが・・・」
「・・・彼等に協力をお願いしてみましょう！」ユクシーとエンペルトは急いで地上に向かいました。その頃バクフーン達は地上に戻っていました。
「楽しかった～♪ユクシーもアグノムと同じで良いやつだったなぁ！」
「そうですね！」
「なぁさっきも言ったが他の奴らにユクシーがこの町にいるって事は・・・」
「解ってるよ！誰にも言わないから！」
「みなさ～ん！」その時ユクシーとエンペルトが慌ててやって来た。
「どうしたんだユクシー？それにエンペルトまで？」
「バクフーン、君達にお願いがあります！」
「お願い？」
「アグノムを助けてくれませんか？」
「アグノムを？え？アグノムに何かあったのか？」
「・・・漆黒の闇がアグノムを捕まえに来たんです！」
「何だって！？」

「今はガーディアンのギャラドスが応戦してるらしいんですが・・・心配で」
「解った！すぐに行くよ！」
「ありがとうございます！」
「皆すぐに行こう！」
「行くたって走って行ってもかなり時間がかかるぞ？」
「だから飛んで行くんだよ！」
「・・・お前まさか・・・」
「よろしく頼むぜリザードン？」
「やっぱりか・・・しょうがないなあ！だけど俺はお前だけで精一杯だからラグラージとかは抱えられないぜ？」
「それでしたら私と兄さんに任せて下さい！」
「えっ？」
「俺とラティアスの念力でラグラージを飛ばしてやるからさ！ピチューとピカチュウは俺とラティアスの背中に乗れ！」
「じゃあ俺はラティアスちゃんの背中に♪」
「もうお兄ちゃんったら！」
「準備は良いか？それじゃ行くぜ！」バクフーン達は急いでアグノムがいる湖に向かいました。果たして彼等はアグノムを助ける事が出来るのか！彼等の旅はまだまだ続く！

第十七話挑戦五つ目のジム！（後書き）

第十七話完成～（＾－＾）ｂ最近の自分のマイブームはゲームセンターにあるガンダムＶＳガンダムをやる事っす！自分の得意な機体はグフ・カスタムっす！（何か俺キャラ変わってないかな？夜遅くにやってるから妙なテンションに～（笑））

第十八話アグノムを救え！（前書き）

バクフーン達はアグノムを助ける為に大急ぎで向かっていた。

第十八話アグノムを救え！

アグノムのガーディアンギャラドスはアグノムを守る為に漆黒の闇の幹部とバトルしていた。
「竜巻！」ギャラドスは巨大な竜巻を発生させて相手に攻撃した。
だが、その竜巻は相手のサイコキネシスで打ち消されてしまった。
「竜巻が！？」
「フフフ・・・さぁ大人しくアグノムを渡して下さい。」
「ふざけるな！アグノム様は渡さん！ハイドロポンプ！」ギャラドスはハイドロポンプで攻撃した。しかしまたサイコキネシスでハイドロポンプは打ち消されてしまった。
「ケケケ！おいフーディン！遊んでないで早くやっちまおうぜ？」
「相変わらずうるさい奴ですね・・・良いではないですかゲンガー、このボスから授かった力をもっと試してみたいんですよ。」ギャラドスが戦っている相手は漆黒の闇の幹部の一人フーディンとその部下ゲンガーだった。
「ケケ！しょうがねぇなぁ！でも早くしろよ？捕獲作戦を開始するまでの準備で大分時間が掛かってるんだからな？」
「お前に言われなくても解ってます。」
「お前達・・・俺をバカにするなぁ！！」ギャラドスが怒ってフーディン達に突っ込んで来た。
「アクアテール！！」ギャラドスはアクアテールでフーディンを攻撃した。
「・・・リフレクター！」フーディンはリフレクターでアクアテールを受け止めた。
「ガーディアンの力はその程度ですか？もっと楽しませてもらいたいですね・・・フフフ」
「・・・余裕でいられるのも今のうちだ！この距離なら避ける事は出来まい！ハイドロポンプ！！」ギャラドスが至近距離でハイドロ

ポンプを放った。フーディンに直撃したように見えたが・・・
「なっ!?消えた!?」
「何処を見てるんです?私はここですよ。」フーディンはギャラドスの頭上にいた。テレポートでハイドロポンプを回避していたのだ。
「この・・・竜巻!」ギャラドスが再び竜巻でフーディンを攻撃した。しかしまたテレポートで避けられてしまう。
「フフフ・・・」
「ケケケ!フーディン!何かお前キモイぞ?その笑い方は止めた方が良いぞ(笑)」
「お前にだけは一番言われたくありませんね!」フーディンとゲンガーは口ゲンカを始めた。完全にギャラドスは遊ばれている。
「ギャラドス!」その時にアグノムがやって来た。
「アグノム様!?来てはダメです!戻って下さい!」
「やだ!僕も戦うよ!」
「それはなりません!あなたをお守りするのが我等ガーディアンの役目です!アグノム様を危険にさらす訳にはいきません!」
「大丈夫だよ!僕も結構強いから!」
「ですが!」
「ターゲットが向こうからやって来ましたか。」
「ケケケ!さっさと捕獲しようぜ!」
「いえ・・・捕獲する前に神と呼ばれるポケモンに今の私の力が通用するか試してみましょう。」
「ケッ!しょうがねぇな!でもあまり遊び過ぎるなよ?」フーディンとゲンガーが向かって来た。
「来るよギャラドス!」
「くっアグノム様!私から離れないで!」
「あなたは邪魔ですね・・・サイコキネシス!」フーディンはサイコキネシスでギャラドスを吹き飛ばしてアグノムから引き離した。
「ギャラドス!?」
「意思の神アグノム!手合わせをしてもらいますよ!シャドーボー

ル！」フーディンのシャドーボールがアグノムに向かって来る。
「見切り！」アグノムは攻撃を身切って避けた。
「火炎放射！」アグノムは火炎放射でフーディンを攻撃した。
「サイコカッター！」フーディンのサイコカッターで火炎放射が切り裂かれた。
「アグノム様！？今行きます！」
「ケケケ！悪いが行かせる訳にはいかないなあ！黒い眼差し！」ゲンガーの黒い眼差しでギャラドスは動けなくなってしまった。
「身体が・・・動かない！？」
「ケケケ！俺の黒い眼差しから逃げられる奴はいねえよ！まぁ大人しく二人のバトルを見てな！ケケケ・・・」
「炎がダメならこれだ！１０万ボルト！」アグノムは１０万ボルトでフーディンを攻撃。
「サイコキネシス！」だが、サイコキネシスによって１０万ボルトは打ち消されてしまった。
「今度はこちらから行きますよ。電撃波！」フーディンは電撃波がアグノムを襲う。アグノムは何とか回避しようとするが・・・
「私の電撃波からは逃げられませんよ。」電撃波がアグノムを追跡してきた。
「回避不可能ってやつか！だったら守るだ！」アグノムは守るで電撃波をガードした。
「今度は僕の番だ！シャドーボール！」アグノムのシャドーボールがフーディンに向かって行く。
「サイコカッター」サイコカッターでシャドーボールは切り裂かれた。
「・・・神の力はこの程度ですか？期待外れですね。」
「僕をあまく見ない方が良いよ？・・・来た！」するとフーディンの頭上から光線が振って来た。それはフーディンに直撃した。
「未来予知・・・１０万ボルトを撃った時に使っていたんだよ！」
「・・・なるほど、やはりこの程度ですか・・・」フーディンは傷

一つ付いてなかった。
「なっ!?直撃のはずなのに!?」
「遊びは終わりにしましょう・・・」するとフーディンの身体から不気味な黒いオーラが出現した。
「何だ、あれ!?何か・・・とても嫌な感じがする・・・」
「今の私はさっきまでと違いますよ・・・シャドーボール!」さっき使ったシャドーボールより大きいエネルギーがアグノムを襲う。
「わっ!?み、見切り!」アグノムは何とか見切りで避けた。
「こうなったらこれだ!ギガインパクト!!」アグノムは最大パワーのギガインパクトでフーディンに突っ込む。
「サイコキネシス!」だが、フーディンのサイコキネシスがアグノムを捕えた。
「うっ!?」
「アグノム様!?クソ、動け・・・」
「だから無駄だって!ケケケ・・・」
「少々痛めつけておきましょう・・・抵抗出来ないようにね!!」
アグノムはサイコキネシスで木に叩き付けられた。
「がはっ!?」
「まだまだですよ!それ!!」フーディンは執拗にアグノムを木に叩き付ける。
「うぅぅ・・・」
「アグノム様!?貴様ぁぁぁ!!!」ギャラドスは力任せに黒い眼差しからの呪縛を解いた。
「ケッ!?バカな!?」
「くらえぇぇ!!破壊光線!!!」ギャラドスの最大パワーで放たれた破壊光線がフーディンに向かって行く。
「ふん!」しかしサイコキネシスによって破壊光線はまるで時を停められたようにその場で静止している。
「なっ!?」
「全く・・・うるさいですね!!」破壊光線はギャラドスに跳ね返

って来た。
「ぐわぁぁぁ!?」ギャラドスは吹き飛ばされた。
「ギャラ・・・ドス・・・」
「さぁ、うるさい奴は倒しました。あなたはこのまま連れて行きますよ。」
「ケケケ!やっと捕獲作戦の完了か!」
「な~んだ!もう終わっちゃったのね?」その時ユキメノコがやって来た。
「ユキメノコ!何しに来たんですか?」
「あんた達が遅いからボスに言われて来たのよ!けど無駄足だったようね?あら?あそこに倒れてるギャラドス、中々良い男じゃない!決めた!コレクションにしましょ!」
「相変わらずですねユキメノコ・・・その趣味は私には理解出来ません。」
「別に理解しなくても良いわよ!それよりあんた達は早くアグノムを連れて・・・」
「ちょっと待ったぁぁぁ!!」その時フーディン達に向かってくる一人のポケモンが!バクフーンだ!
「火炎車!」火炎車がフーディンに当たりそうになったがテレポートで避けた。
「バクフーンですか!」
「ピカチュウ!今だ!」
「解ってるよ!高速移動!」ピカチュウは高速移動で移動しながらアグノムを救出した。
「ケッ!?待て!」
「行かせるか!リザードン!ラティアス!ラグラージ!」
「おう!」
「解ってるわ!」
「OK!」ラティオスはラスターパージで、ラティアスはミストボールで、リザードンは火炎放射で、ラグラージはハイドロポンプで

それぞれ攻撃してゲンガーの足止めをした。その間にバクフーンとピカチュウに合流する。
「アグノム！大丈夫か？」
「バ・・・ク・・・フーン・・・それに・・・皆まで・・・どうして・・・ここに？」
「ユクシーに頼まれて来たんだよ！もう大丈夫だからな！」
「うぅぅ・・・」
「アグノム！？」
「かなりやられてるみたいですね・・・ここは私が！」
「ラティアスお前まさかあの技を！？あれを使えば確かにアグノムは回復するがその代わりお前が・・・」
「大丈夫よ兄さん！加減してやれば倒れないから！私の体力を半分アグノムさんに分ける感じだから・・・癒しの願い！」するとラティアスとアグノムは優しい光に包まれた。
「・・・バクフーン・・・久しぶりですね？」
「・・・」
「やはりあなたは私達の邪魔をするんですね？本当に目障りです！」
「・・・お前がアグノムをこんなになるまでやったのか？」
「だったら・・・どうなんです？」
「・・・許さねぇ・・・」バクフーンの背中の炎が激しく燃えている。
「お前は俺がぶっ倒す！！噴火！！！」バクフーンの噴火がフーディン達に降り注ぐ。
「ぶっ倒す・・・ですか・・・そのセリフそのままお返ししましょう。サイコキネシス！」噴火の炎がフーディンのサイコキネシスによって停められた。
「なっ！？俺の噴火が！？」
「今の私は昔の私じゃありませんよ。この炎返します！」噴火がバクフーンに跳ね返った。
「バクフーン！」ラグラージがバクフーンの前に立った。

「守る！」ラグラージは守るでバクフーンを助けた。
「大丈夫？」
「サ、サンキューラグラージ！」
「私はもうあなたに負けません！」フーディンの黒いオーラがさっきよりも色が更に濃くなった。「何なんだ？あの黒いのは？」
「・・・気をつけて！そのオーラが出てる時あいつは強くなるんだ・・・」アグノムはラティアスの癒しの願いのおかげで少し体力を回復したようだ。
「行きますよバクフーン・・・サイコカッター！」サイコカッターがバクフーンに向かってくる。
「ここで避けるとラティアス達に・・・火炎放射で打ち消す！」バクフーンは火炎放射でサイコカッターを打ち消そうとしたが、火炎放射は引き裂かれてしまった。
「火炎放射が！？クソっ！」バクフーンは素手でサイコカッターを停めようとした。
「どいてバクフーン！」その時ラグラージがバクフーンを押し退けた。
「ラグラージ！？」
「発動してくれよ・・・守る！！」ラグラージは連続で守るを使った。だが、守るは発動しなかった。その為サイコカッターはラグラージを直撃した。
「うわぁぁぁ！？」ラグラージは吹き飛ばされた。
「ラグラージ！？大丈夫か？」
「あんまり・・・大丈夫じゃないよ・・・」
「あの野郎・・・絶対ぶっ倒す！」
「待ってバクフーン・・・今回はアグノムを助けるのが目的でバトルに勝つ事じゃないよ・・・」「だから何だよ！」
「冷静になるんだ・・・兎に角今はアグノムを連れてここから逃げるんだ！」
「なっ！？逃げるだって！？」

「良いから行くよ！」ラグラージはバクフーンを強引に引っ張って行った。
「ちょっ！？待てよラグラージ！？」
「皆！アグノムを連れて早く逃げるんだ！」
「逃げるんですか？」
「確かに・・・今回はアグノムの救出が優先だからな！皆行くぞ！リザードンはバクフーンを！俺とラティアスの念力でラグラージを飛ばす！ピチューとピカチュウは俺に乗れ！」
「逃がしませんよ！」フーディンが向かって来たその時！
「アクアテール！」ギャラドスがフーディンの行く手を阻んだ。
「ハァ・・・ハァ・・・俺が時間を稼ぐ！今の内にアグノム様を！」
「すまない！行くぞ！」
「ギャラドス！一緒に行こう！約束したじゃない！絶対離れないって！」
「逃がさないと言ってるでしょう！シャドーボール！」
「ケケケ！俺もシャドーボールだぜ！」フーディンとゲンガーのWシャドーボールが向かって来る。
「竜巻！！」ギャラドスの竜巻がシャドーボールを防いだ。
「さぁ早く！」ラティオスは頷くとラティアスと一緒に念力でラグラージを飛ばして上昇した。リザードンも納得のいってないバクフーンを無理矢理抱えて飛んだ。
「逃がさないわよ！」ユキメノコがいつの間にかラティオス達の近くにいた。
「凍りつきなさい！冷凍ビーム！！」ユキメノコの冷凍ビームがラティオス達に向かって行こうとしたその時！ギャラドスが自分から冷凍ビームに当たってラティオス達に当たるのを防いだ。
「うっ！？」
「ギャラドス！？」ギャラドスの身体が少しずつ凍りついていく。
「アグノム様・・・約束を・・・守れなくて・・・すみません・・・」

「ギャラドス・・・」
「ど・・・うか・・・ご無事・・・で・・・」ギャラドスは完全に凍りついた。
「嫌だ・・・嫌だぁぁぁ!!」ラティオス達はその場からどんどん離れて行く。
「あ～らら!逃げられちゃった!フーディンがもっと早く捕獲作戦を成功させてたらこんな事にはならなかったのにね～?」
「うるさいですね!まだ失敗した訳ではないですよ!」
「そうかしら?まぁ私としてはどっちでも良いけど?それにしてもこのギャラドスは良い男だわぁ!ユキノオー!運びなさい!」
「ウ～ス!」その頃バクフーン達はユクシーがいるサンドロックシティに向かっていた。
「・・・ギャラ・・・ドス・・・うぅぅ」アグノムは泣いていた。
「アグノムさん・・・」
「あのまま・・・」
「バクフーン?」
「あのままバトルしてたらギャラドスはああはならなかったんじゃないのか?もしかしたら奴らを倒せたんじゃないか!?」
「あのままバトルをしてたらアグノムは守れなかったよ!」
「やってみなきゃ解らないだろ!?」
「あの時のお前はアグノムを傷つけられて、怒りで冷静さを無くしていただろ!その状態で戦ったら敗けは目に見えてるよ!」
「何だと!?」
「二人共止めろ!!ケンカしてる場合じゃないだろ?それに今アグノムが一番つらいんだぞ!」
「うぅぅ・・・」
「・・・悪い・・・」
「・・・ごめん・・・」しばらく沈黙が続いた。最初に沈黙を破ったのはラティオスだ。
「アグノム・・・ギャラドスは死んでないぞ」

「・・・えっ？」
「ユキメノコの氷技は相手を倒すためじゃなく相手を捕獲するための技なんだ！」
「何でそんな事が解るんだ？」
「俺はテレパシーで相手の心が解るだろ？それでさ！それに、一度俺も奴に凍り漬けにされたからな！凍り漬けにされても意識ははっきりしていたんだ！一種の冷凍保存何だと俺は思う。」
「じゃあ・・・ギャラドスは・・・まだ生きてるんだね？」
「あぁ！だから必ず助け出すんだ！な？」
「・・・うん！」アグノムはギャラドスが生きている事が解ると悲しみの顔から決意の顔に変わった。ギャラドスを助ける！それが今の彼を支える力になっていた。それから一時間後、バクフーン達はサンドロックシティにたどり着いた。すぐにバクフーン達はユクシーがいる地底湖に向かった。出入口にはバンギラスがいた。
「アグノム！無事だったか！」
「うん・・・」
「ここだと目立つな！中に入ろう！ユクシーが待ってるぞ！」バクフーン達は中に入って行った。
「アグノム！良かった！無事だったんですね！」
「バクフーン達のおかげでね・・・でも、ギャラドスは・・・」
「テレパシーでアグノムのつらい気持ちが僕にも伝わって来ました。」
「そう・・・僕は必ずギャラドスを助けるからね！」
「アグノムらしいですね！でも助ける前に僕らが捕まる訳にはいきませんよ？」
「解ってるよ！」
「・・・」その時バクフーン達の会話を聞いてるポケモンがいました。
「そういえばフーディン。ゲンガーは何処よ？」
「ゲンガーならあいつらを追って行きましたよ。あいつは相手の影

に入りこむ事ができますからね。奴らは気づいてないでしょうね・・・フフフ」そう、ゲンガーは今バクフーンの影に入りこんでずっと付いて来ていたのです。

（ケケケ・・・そろそろ引き上げるか！場所も解った事だし！）ゲンガーは出口に向かいました。

「・・・」

「どうしましたバンギラス？」

「ちょっと待ってろよ！すぐ戻る・・・」バンギラスは出口に向かいました。

「ケケケ！早くフーディンに知らせるか！こいつは大手柄だぜ！俺様偉い♪」

「何が俺様偉い♪っだよ？」ゲンガーが振り向くとそこにはバンギラスがいた。

「ウゲゲ！？何でバレたんだ！？」

「んな事はどうでも良い・・・お前を行かせる訳にはいかねぇなぁ！」

「ケケケ！どうするんだ？」

「そうだな・・・お前をとっ捕まえる！」

「ケッ！そいつは御免だな！逃げるぜ！」

「逃がすか！そら！」バンギラスの砂がゲンガーを取り囲む。

「更に岩石封じ！」バンギラスが拳を地面に叩き付けると地面から岩石が現れてゲンガーを閉じ込めた。

「どうだ！」

「ケケケ！これで俺様を閉じ込めたつもりか？あまいぜ！」ゲンガーは岩石をすり抜けて脱出した。

「なっ！？」

「ゴーストタイプにとっては簡単な事なんだよ！ケケケ・・・あばよ！」

「だから逃がさないって・・・」

「黒い霧！」ゲンガーは黒い霧でバンギラスを覆った。「ゲホっゲ

ホっ!?ま、前が見えねぇ!?」霧が晴れた時にはすでにゲンガーはいなかった。
「ちっ!逃がしたか・・・まずいなぁ、奴らにここがバレちまった・・・ユクシーに知らせないと」バンギラスは地底湖に戻りました。
「ユクシー!まずい事になった!」
「どうしたんです?」
「奴らにここがバレた!」
「何だって!?でも何で?」
「ゲンガーが付いて来ていたんだ!取り抑えようとしたんだが逃げられちまった・・・すまん、俺のミスだ・・・」
「バンギラスが謝る必要はないですよ!それよりもこれからどうするかを考えなければ・・・まずここにはもう居られませんね・・・」
「そういえばユクシー、エムリットの所はどうだ?まだ見つかってないんだろ?」
「確かにそうですけど、僕達が行けば見つかる可能性があります。それは避けなければなりません。」
「そうか・・・ん~何か良い案はねぇか?」ユクシー達はしばらく考えた。だが、中々良い案が思い浮かばない。その時バクフーンがユクシー達にある提案をした。それは自分達と一緒に行かないかとゆう提案だった。
「どうだ?」
「・・・確かに旅をしているあなた達と一緒に行けば奴らに見つからないかもしれません。ですが・・・あなた達が危険な目に会うかもしれないんですよ?」
「ほっとけないんだよ!目の前で友達がピンチなのに何もしないなんて俺には出来ない!」
「バクフーン・・・」
「俺達と行こうぜ?」
「・・・うん!」
「ユクシーは?」

「僕は・・・ここに残ります。」
「えっ!?何で!?」ユクシーの出した答えに皆驚いた。
「僕はここで時間稼ぎをします。アグノムが出来るだけ遠くに行けるように・・・」
「ユクシーが捕まっちゃうよ!?」
「確かに僕は捕まってしまうでしょう・・・ですが奴らの目的は僕達三人を捕まえる事・・・僕一人が捕まっても奴らの目的は達成しません。」
「でも!」
「それに・・・僕は信じてますよ?アグノムが助けてくれるって。」
「えっ?」
「バクフーン、アグノムをお願いしますよ?」
「・・・解った!行こうアグノム!」バクフーン達はアグノムを連れて地底湖の出入口に向かって行った。
「バンギラスはジムに戻って下さい。巻き込む訳にはいきませんから・・・」
「何言ってるんだよ?俺はお前と一緒に戦うぜ!数は多い方が良いだろ?それにエンペルトだけじゃ頼りないしな(笑)」
「ムッ!言ってくれるじゃないバンギラス!じゃあ期待して良いのね?あなたがピンチになっても私は助けませんよ!」
「冗談だって冗談!そんなに怒んなよ?」
「・・・ふふ!こんな状況でも二人は変わらないんですね!」
「当たり前だろ?・・・だけど、お前の事は全力で守るからな!」
「私も・・・ガーディアンとしてユクシー様をお守りします!」
「バンギラス・・・エンペルト・・・ありがとう・・・」その時地底湖の出入口付近に何者かの気配を感じた。
「・・・来たか」その頃バクフーン達は街から大分離れていた。
「ここまで来れば大丈夫だろ・・・」
「ユクシー・・・」アグノムはやはりユクシーの事が心配のようだ。
バクフーン達がアグノムに何と声を掛ければ良いか考えていた時、

目の前で立ちはだかるポケモンがいた。そのポケモンとは・・・
「お前は・・・マニューラ!?」
「やはりお前達か・・・俺の警告を聞いてなかったのか?漆黒の闇に関わるなって!」
「何しに来たんだ!」
「・・・誰でも良い・・・構えろ・・・」マニューラは戦闘体制に入った。
「俺がやってやる!アグノムは俺が守る!」バクフーンが前に出で来た。
「行くぞ・・・シャドーボール!」マニューラはシャドーボールで攻撃した。
「火炎放射!」バクフーンは火炎放射でシャドーボールを打ち消した。
「くらえ!火炎車!」炎の鎧を纏いマニューラに突っ込んで行った。
「・・・高速移動!」しかし火炎車は高速移動で回避された。
「電光石火!」マニューラは高速移動からの組み合わせで電光石火を使いバクフーンを攻撃した。あまりに速くてバクフーンは回避できなかった。
「ぐっ!?」
「更に駄目押し!」マニューラは駄目押しで更に攻撃した。駄目押しは一度攻撃を当てた後に使うと威力が倍に跳ね上がるのでバクフーンにはかなりのダメージが与えられた。
「くっ!?この・・・フレアドライブ!!」バクフーンは得意技のフレアドライブでマニューラに突っ込んで行った。
「・・・岩砕き!」マニューラはその鋭い爪で地面の岩を砕き、その破片をバクフーンに放った。
「そんな岩なんか!」バクフーンは岩の破片を受けながらもそのまま突っ込む。
「高速移動から影分身!」マニューラは高速移動から影分身のコンビネーションで無数の分身を作り出しバクフーンを惑わす。本体が

解らずバクフーンは止まってしまった。
「どれが本物なんだ・・・こうなったら皆まとめてやってやる！噴火！！」バクフーンは噴火で分身全てに攻撃した。だが、本体は何処にもいなかった。
「なっ！？」
「・・・高速移動からブレイククロー！」マニューラは高速でバクフーンに近づき鋭い爪でバクフーンを切った。
「ぐっ！？・・・クソ・・・」
「・・・」
「俺は・・・アグノムを・・・守るんだ！」バクフーンは炎のエネルギーを集め始めた。徐々にその集め始めたエネルギーが大きくなっていく。
「ブラスト・・・バーン！！」バクフーンのブラストバーンがマニューラに向けて放たれた。
「守る！」だが、ブラストバーンは守るで防御されてしまった。
「ハァ・・・ハァ・・・そんな・・・」バクフーンはブラストバーンの反動で動けないでいた。
「・・・高速移動からつじ切り！」マニューラは容赦なくバクフーンを攻撃した。バクフーンは回避出来ずにマニューラのつじ切りで斬り刻まれていく。
「・・・駄目押し！」再び駄目押しで攻撃されバクフーンは吹き飛ばされた。
「ぐあぁぁぁ！？」吹き飛ばされた先にあった岩石にバクフーンは頭をぶつけてしまい気を失ってしまった。
「バクフーン！？」
「・・・」マニューラが気を失っているバクフーンに近づいて行く。
「お前は良くやったが・・・その実力ではアグノムは守れない。・・・お前達！ここから少し先にポケモンセンターがある。そこにバクフーンを連れて行け・・・」
「何なんだよ・・・お前の目的は一体何だ！？」

「お前達が知る必要はない・・・それよりこいつをポケモンセンターに連れて行くんだな！・・・それとお前。」マニューラがリザードンを指差した。
「何だよ・・・」
「・・・闇の声に惑わされるな・・・」
「は？」
「闇の声に惑わされたらお前は仲間と戦う事になる・・・それを忘れるな。じゃあな・・・」
「ちょっと待てよ！？俺が皆と戦うってどうゆう事だよ！？」リザードンが質問したがマニューラは答える事なく去ってしまった。
「何なんだよ・・・」
「リザードン！今は早くバクフーンをポケモンセンターに連れて行かなきゃ！」
「あ、あぁ・・・そうだよな・・・」リザードン達は気を失っているバクフーンを急いでポケモンセンターに連れて行きました。・・・その頃ユクシー達は・・・
「・・・捕獲完了。」フーディン達の前には凍り漬けになっているユクシーとエンペルトとバンギラスがいた。
「全部アタイのお陰よ！感謝しなさいよ！」
「別にユキメノコがいなくても私だけで捕獲できましたよ！」
「それにしてもこのバンギラスも良い男だねぇ・・・ユキノオー！ユクシーとバンギラスを運びなさい！」ユキメノコはフーディンの話を聞いてなかった。
「・・・ハァ。まぁ良いです。それよりユキメノコ、エンペルトは運ばないのですか？」
「アタイは良い男をコレクションするけど、女には興味ないわ！ここに放って置くわ！」
「氷が溶けたら間違いなくこいつは私達を追いかけて来ますよ？」
「アタイの氷は簡単には溶けないわよ！誰かが炎で溶かさない限りね！行くわよ？」

「・・・解りましたよ。」フーディン達はユクシーとバンギラスを連れて行きました。エンペルトは凍り漬けにされてても意識はあった。ユクシーとバンギラスが連れて行かれるのに自分は何も出来ずただ見つめるしか出来なかった。

第十八話アグノムを救え！（後書き）

第十八話完成です！

第十九話漆黒の闇の首領！その名はダークライ！（前書き）

マニューラに敗れ重傷を負ったバクフーンはポケモンセンターで治療を受けていた・・・だが、バクフーンの意識は中々戻らず皆はとても心配していた。

第十九話漆黒の闇の首領！その名はダークライ！

「・・・ここは・・・俺ん家の中？」バクフーンは何故か自分の家の中にいた。
「何で俺ここにいるんだ？」その時家の玄関を開ける音が聞こえてきた。
「お母さん！すっごく楽しかったね♪また行こうよ！ね？」入って来たのは小さなヒノアラシと・・・
「母さん！？」バクフーンの母親だった。
「そうね！また行きましょうか♪」
「わ～い♪やった～♪」
「本当に・・・母さんだ・・・じゃああれは昔の・・・俺？」
「お～い！ヒ・ノ・ア・ラ・シ～！遊ぼうよ～！」誰かが外からヒノアラシを呼んでいる。
「あっ！ヒトカゲだ！お母さん！遊びに行っても良い？」
「良いわよ！でもあまり遅くまで遊んじゃダメよ？」
「うん解った！じゃあ行って来ま～す♪」ヒノアラシは元気良く外に出ていった。
「そういえば・・・母さんと海を見に砂浜まで行ったんだっけ？それで帰って来たらヒトカゲが遊びに誘いに来たんだよな！懐かしいなぁ・・・」
「さぁ、今日はあの子の好きな木の実のグリルを作りましょうか！」バクフーンの母親が調理場に向かった。
「母さんの料理する後ろ姿を見るの久しぶりだなぁ！」母親が料理を作っている時、突然外から大きな爆発音が聞こえた。
「な、何だ！？」
「な、何！？」バクフーンと母親は外に出た。周りを見渡してみると煙が上がっている所があった。
「あそこはいつも俺とヒトカゲが遊んでいた所・・・待てよ！あそ

こで爆発があった日って・・・母さんが・・・殺された日!?」
「坊や!?無事でいてよ!」母親がその煙が上がっている所に行こうとした。
「待って母さん!行っちゃダメだ!」バクフーンが母親を停めようと前に立ちはだかったが、何とバクフーンの身体を母親はすり抜けて行った。
「そんな!?・・・待ってよ母さん!!」バクフーンは急いで母親を追い掛けた。
「うぅ・・・痛いよ~」ヒノアラシとヒトカゲは大怪我をしていた。近くには黒いポケモンがいた。そのポケモンがヒノアラシ達に攻撃をしようとした時、火炎放射が飛んできた!黒いポケモンが火炎放射が向かってきた方を見るとそこにはバクフーンの母親がいた!
「お母・・・さん」
「あなた・・・よくも私の坊やを・・・許さないわよ!!」
「ククク・・・やっと来たか・・・お前の力を見せてみろ!」母親と黒いポケモンのバトルが始まった。その後でバクフーンが追いついた。
「ハァ・・・ハァ・・・あいつは・・・あの黒いポケモン!?」
「フレアドライブよ!」母親がフレアドライブで黒いポケモンを攻撃し、それは直撃した。だが、あまり効いてないようだ。
「守るで防御したのね・・・でもその技は連続では発動しない!くらいなさい!スピードスターから火炎放射!」バクフーンの母親はスピードスターを火炎放射の炎で包んだ。炎のスピードスターとなって黒いポケモンに襲いかかる!
「あの時と同じだ・・・だとしたら!?」
「噂通りの強さだな・・・だが!」黒いポケモンがヒノアラシに攻撃した。
「わっ!?」
「止めてぇぇぇ!?」母親はヒノアラシをかばって攻撃を受けてしまった。

「お母・・・さん?」ヒノアラシが母親に声を掛けるが返事をしてくれない。
「母さん・・・くっ!お前ぇぇぇ!!!」バクフーンは黒いポケモンに火炎放射を放つがすり抜けてしまう!
「ブラストバーン!!」バクフーンはブラストバーンで攻撃するがやはりすり抜けてしまう!
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」
「・・・これでお前は我が物になる・・・ククク・・・」
「・・・くも・・・」
「何だ?」
「よくもお母さんを!!」突然ヒノアラシは凄まじい炎に包まれた!
「な!?」
「フレアドライブ!!」ヒノアラシはフレアドライブで黒いポケモンを攻撃した!フレアドライブは黒いポケモンの片目に当たった。
「ぐっ!?おのれぇぇぇ!!」黒いポケモンは怒り、ヒノアラシを攻撃して吹き飛ばした。
「まさかこのガキにこれほどの力があるとは・・・さすが奴のガキだな・・・面白い!貴様も我が物にしてやる!」黒いポケモンは手のひらから黒いエネルギー弾を作り出しヒノアラシに放った。
「ヒノアラシ!!」ヒトカゲはヒノアラシを助けようとしたが一緒に黒いエネルギーに包まれてしまった!
「な・・・に・・・」
「ヒ・・・ト・・・カ・・・」二人は眠るように倒れた。
「余計な奴が入ったせいで完全なる闇の支配が出来なかったか・・・まぁ良いだろ・・・いずれ必ず我の物にしてやるからな!ククク・・・」黒いポケモンはバクフーンの母親を連れて消えてしまった。
「ハァ・・・ハァ・・・どういう事だ?・・・途中で俺が覚えている事と違ってたぞ・・・母さんは目の前で殺されて・・・その後は泣きながら母さんの葬式をやったはずなのに・・・それにあの黒いエネルギーは何だ?」バクフーンは記憶に無い事が目の前で起きて

少し混乱していた。その時、突然バクフーンに睡魔が襲った。
「な・・・んだ・・・急に・・・眠く・・・・」バクフーンは眠ってしまった。しばらくして・・・
「・・・ン！・・・きて・・・れ・・・！」
(誰かの声が聞こえる・・・)
「バクフーン！頼むから起きてくれよ！」
「・・・うぅ」
「バクフーン！」
バクフーンがゆっくり目を開けるとそこにはリザードンがいた。
「・・・ここは？」
「バクフーン！良かった・・・目が覚めたんだな！心配したぞこの野郎！」
「リザードン？・・・痛！？」
「まだ動くな！頭を岩に強く打ったんだからな！」リザードンはゆっくりバクフーンを横にした。「ここは何処だ？フレイムシティじゃないのか？」
「え？ここはサンドロックシティから結構離れた所にあるポケモンセンターだが？」
「そうか・・・じゃあ、あれは夢だったのか・・・」
「夢？そういえばお前かなりうなされていたぞ！悪い夢でも見たのか？」
「ちょっとな・・・そういえば皆は？」
「ロビーの方にいるよ。・・・さっきテレビでニュースが流れてたよ・・・バンギラスが行方不明だって・・・」
「・・・捕まったのか・・・」
「多分な・・・あいつらの思いを無駄にしない為にアグノムは絶対に守らなきゃな！」
「・・・なぁ、リザードン・・・俺・・・アグノムを守れるのかな？」
「え？」

「マニューラに負けた俺が・・・本当にアグノムを守れるのかな？」
「な、何だよバクフーン・・・お前らしくないな！ユクシーと約束しただろ？アグノムは必ず守るって！マニューラに負けたからって何だよ！負けたならもっと強くなって勝てば良いだろ！」
「・・・まさか、お前に説教されるなんてな・・・でも、そうだよな？また負けないようにもっと強くなって、アグノムを守れる位に強くなれば良いんだよな？」
「あぁ！そしてバンギラス達を助けるんだ！」
「そう・・・だよ・・・な・・・」
「バクフーン？」バクフーンはまた眠ってしまった。
「まだ本調子じゃないのか・・・ゆっくり眠りな。」リザードンはバクフーンに布団を掛けてあげると部屋を出た。その後リザードンは皆がいるロビーに向かった。
「あっ！リザードン！バクフーンは？」
「意識が戻ったぜ！」
「本当ですか！？」
「あぁ！だけどまだ本調子じゃないみたいですぐに眠ったけど・・・」
「そうか・・・だとしたらもうしばらくここにいる事になりそうだな？」
「そうだな・・・あれ？なぁ、あそこにいるあいつら・・・もしかしてチームメタルじゃないか？」リザードンが指差す先には確かにチームメタルがいた。チームメタルはリザードン達に気がついた。
「久しぶりだなお前達！」
「会いたくない奴らに会ってしまいましたね・・・」
「・・・相変わらず嫌な奴だなお前は！」
「ふん！お前達！行きますよ。」メタグロスと他のメンバーはトレーニング場に行った。だが、ハガネールだけは残った。「ハァ・・・悪いな、アイツの性格は前にも増して悪くなってさ・・・そういえばバクフーンはどうした？姿が見えないが・・・」

「実は・・・」リザードンはバクフーンに起きた事をハガネールに説明した。
「アイツがバトルに負けて大怪我!?大丈夫かよアイツ?」
「さっき意識が戻ったんだけど・・・今はまた寝てる。」
「そうか・・・しかし、メタグロスに勝ったバクフーンが負けるとは・・・世の中にはまだ強い奴がいるんだなぁ!」
「ハガネール!早く来なさい!あなたがいないとトレーニングが出来ませんよ!」
「わぁったよ!すぐ行くからよ!悪い、アイツが待ってるから行くわ!バクフーンによろしく言っといてくれ!」ハガネールはそう言うとメタグロスの所に向かって行きました。
「あれ?なぁ、アグノムは何処に行った?」リザードンはアグノムがいなくなってる事に気がついた。
「今まで私の隣にいたのに・・・あっ!いましたよ!」ラティアスが指差す先にアグノムがいた。外に出ようとしている。
「ちょっと待ってアグノムさん!何処に行くんですか?」
「助けなきゃ・・・」
「えっ?」
「今エンペルトの声が聞こえたんだ!エンペルトはまだサンドロックシティの地底湖にいる!」
「ちょっと待って下さい!エンペルトさんの声が聞こえたってどういう事ですか?」
「行かなくちゃ・・・早く助けなくちゃ・・・」アグノムにはラティアスの声が聞こえていないようだ。
「待てよアグノム!今お前が行ったら奴らに見つかってしまうぞ!」
「だって・・・エンペルトがいるんだ・・・」
「・・・確かに地底湖にいるのか?」
「間違いないよ!だから助けなきゃ・・・」
「待て、俺が行こう!」「えっ?でも兄さん・・・」
「このままにしとくとアグノムは一人でも行っちゃうだろ?俺なら

姿を消しながら移動が出来るからな！何かあったら夢写しで知らせる事が出来る・・・だからアグノムはここで待っててくれ！良いな？」

「・・・うん。解った、エンペルトを頼むよ！」

「任せな！行ってくるぞ！」ラティオスはサンドロックシティに向けて飛んで行った。

「ラティオスだけで大丈夫かなぁ・・・」

「心配ですけど兄さんならきっと大丈夫です！私はそう信じてます！」

「ラティアスちゃんがそう言うなら俺も信じる！とりあえずバクフーンの所に行こうぜ？」リザードン達はラティオスからの知らせが来るまでバクフーンの所で待つ事にした。その頃ラティオスはもうすでにサンドロックシティが見える所まで来ていた。

「あと少しだな・・・そろそろ姿を消した方が良いな・・・」ラティオスは身体を透明にして、その状態のまま一気にサンドロックシティに向かいました。

（着いたか・・・本当にエンペルトはここに？）ラティオスは中に入って行きました。すると・・・

（な・・・何だこれ！？地底湖が凍りついてるじゃないか！）中に入ってラティオスが目にしたものは完全に凍りついた地底湖でした。

（ラティアス達にもここの状況を伝えないとな・・・夢写し！）

「・・・あっ！兄さんからだ！皆さんにも今から見せます・・・」

ラティアスが念じるとリザードン達もラティオスが見ているものが見えてきた。

「おい・・・これ・・・本当にあの地底湖か！？」

「間違いないよ・・・ユクシーがいた所だ・・・完全に凍りついてる・・・」

（この氷は・・・ユキメノコがやったものか・・・前に俺と戦った時に比べると恐ろしくパワーアップしているな・・・ん？何だあれは？）ラティオスは奥の方に何か見つけた。リザードン達もラティ

オスと同じものを見ているので解った。ラティオスはゆっくりとそれに近づいて行く。
「これは!?」それは凍り漬けにされているエンペルトだった。
「エンペルトさん・・・ひどい・・・」
「ユキメノコの仕業だな・・・」
『ラティアス・・・エンペルトをそっちに運ぶから夢写しを解除するぞ・・・』ラティオスがテレパシーでラティアスにそう伝えると夢写しを解除した。
『エンペルト・・・聞こえるか?』ラティオスはテレパシーでエンペルトに話しかけた。
『・・・聞こえます・・・』
『やはり意識はあったんだな!一体何があったんだ?』
『フーディンとユキメノコがやって来て・・・私とバンギラスは何とかユクシー様をお守りしようと戦ったんですが・・・結果がこれです・・・』
『そうか・・・ユクシーとバンギラスは奴らに連れて行かれたのか?』
『はい・・・二人とも私と同じく凍り漬けにされた状態で・・・私は・・・連れて行かれるのをただ・・・見ているだけしか出来なくて・・・』
『その状態じゃあ動けないだろ?仕方ないさ・・・今からお前をバクフーン達の所まで運ぶ・・・少し揺れるぞ』ラティオスはサイコキネシスで凍り漬けになってるエンペルトを浮かせた。そしてバクフーンがいる所まで運んでいった。それから1時間後・・・ラティオスはポケモンセンターに戻って来た。
「帰って来た!皆行こう!」リザードン達はラティオスの所に向かった。
「リザードン!こいつの氷を溶かしてくれ!」
「任せろ!炎の渦!」リザードンの炎の渦がエンペルトの氷を溶かしていく。そして完全に氷は溶けてエンペルトは解放された。

「ハァ・・・ハァ・・・た・・・助かりました・・・」
「エンペルト！」アグノムはエンペルトに抱きついた。「良かった・・・無事で本当に良かった・・・」
「アグノム様・・・」
「アグノムさん・・・エンペルトさんをゆっくり休ませてあげましょ？今まで凍り漬けにされていたんですから・・・」
「・・・うん。」ラティアス達はエンペルトをバクフーンがいる部屋で休ませてあげる事にしました。エンペルトをベッドに寝かせた後、皆は起こさないように部屋から出てロビーの方へ行きました。
「・・・なぁラグラージ？」
「何ピカチュウ？」
「トレーニングに付き合ってくれないか？」
「別に良いけど・・・急にどうしたの？」
「ちょっとな・・・行こうぜ！」ピカチュウとラグラージはトレーニング場に向かいました。
「ラグラージ！本気で頼むぜ！」
「え？トレーニングなのに？」
「本気じゃないとダメなんだ！頼む！」
「解ったよ・・・でも本気でやるからには僕が勝つからね！行くよ！地震！！」ラグラージは電気タイプに効果がある地面タイプの地震で攻撃した。
「光の壁！」ピカチュウは光の壁を作り出して、その壁を使って上にジャンプして地震を回避した。
「そうくると思ったよ！ハイドロポンプ！」ラグラージは空中にいるピカチュウにハイドロポンプで攻撃した。
「身代わり！」ピカチュウは身代わりで作り出した分身に自分を地面に投げてもらってハイドロポンプを回避した。
「今度はこっちの番だ！電光石火！」ピカチュウは電光石火でラグラージに突っ込んで行った。
「守る！」ラグラージは守るで電光石火を防御しようとしたが・・・

「そうくると思ったぜ！フェイント！」ピカチュウはフェイントで守るを打ち破った。
「僕の守るが！？」
「守るは確かに強力な防御技だが・・・全てを防げる訳ではないって事だ！アイアンテール！」ピカチュウはすかさずアイアンテールでラグラージを攻撃した。
「カウンター！！」ラグラージはアイアンテールを受けたがカウンターでピカチュウに倍返しで攻撃した。
「ぐっ！？」
「守るを破った事で油断したようだね？僕はやられたらやり返すタイプなんだよね！」
「それは・・・俺も同じさ！」
「え？」ラグラージはカウンターで使用した右腕が痺れている事に気づいた。
「特性静電気・・・俺に物理攻撃してきた相手は痺れるのさ！」
「さすがだね・・・」二人が本気のバトルをしてる時、ラティオス達が様子を見にやって来た。
「トレーニングの割にはかなり本気でやってるな二人共？」
「この位やらないと強くなれないだろ？またあいつらが来た時の為にもっと強くならなきゃさ！」
「ピカチュウ・・・お前・・・」
「正直・・・バクフーンが負けたのには驚いてるんだ。俺と引き分けたあいつがさ・・・これから先、もっと強い奴らと戦う事になる筈だろ？なら、今よりもっと強くならないとって思ってさ！」「・・・そうだよな・・・良し！俺達もトレーニングしてレベルアップするか！」
「僕も・・・一緒にトレーニングして良いかな？」
「えっ？アグノムさんもですか？」
「僕も強くなって・・・ユクシーやギャラドスやバンギラスを助け

たいんだ！守られてばかりは嫌なんだ！」
「あっ・・・」ラティアスはアグノムを昔の自分と同じだと感じたようです。
「しかしアグノム・・・」
「お願いだよ！」
「兄さん、私からもお願い！」
「ラティアスまで・・・仕方ない、一緒にやろうアグノム！」
「ありがとう！」こうしてラティオス達はレベルアップする為にトレーニングを開始しました。その頃・・・
「ユキノオー！もう少し右に寄せて！」
「ウ～ス！・・・これでどうですか姉御？」
「良いわ！後はこいつをボスのとこに連れて行くだけね！ユキノオー！」
「ウ～ス！」漆黒の闇アジトでユキメノコは凍り漬けにしたバンギラスをコレクションの保存室に置いて、ユクシーをボスに届けに向かった。
（・・・行ったか・・・そろそろこのうざったい氷から出るか・・・怪力！）バンギラスは物凄い力で氷から脱出した。
「ハァ・・・ハァ・・・長時間凍り漬けはやっぱキツイな・・・」
実はバンギラスはユキメノコにワザと凍り漬けにされてアジトに潜入してボスを倒そうと考えていたのです。
「まずは身体を暖めねぇと・・・火炎放射！」バンギラスは火炎放射の炎を自分に当てて身体を暖めようとしました。
「ふ～・・・大分暖まったな！良し・・・まずはユクシーを助けねぇとな・・・」バンギラスはユクシーを連れて行ったユキメノコを追いかけました。その頃ユキメノコはボスがいる大広間にいました。
「ボス！ユクシーを捕獲したよ！ユキノオー！」ユキメノコは凍り漬けになってるユクシーをユキノオーに持って来させた。
「・・・良くやったユキメノコ・・・と言いたいところだが・・・ねずみが侵入したぞ。」

「え？」
「てめぇがボスか？」ユキメノコが振り返るとさっきまで凍り漬けになっていた筈のバンギラスがいた。
「あんた！？一体どうやって氷から！？」
「サンドロックジムリーダーをナメんなよ！それより・・・そこの黒いのがボスなのかって聞いてんだよ！」
「・・・」
「だんまりかい・・・まぁ良い・・・てめぇをぶっ倒してユクシーを助ける！くらえ！」バンギラスは得意の砂嵐をボスに向けて放った。
「・・・闇よ・・・我を守れ・・・」バンギラスの砂嵐は突然出現した闇の穴に吸い込まれてしまった。
「な！？何だありゃ！？」
「ククク・・・貴様なかなか見込みがあるな・・・貴様を我の仲間にしてやろう。」
「はぁ？誰がてめぇらの仲間になるかよ！破壊光線！！」バンギラスは最大パワーの破壊光線を放った。だが、またしても闇の穴に吸い込まれてしまった。
「ククク・・・我が闇の洗礼を受けよ！」ボスが黒いエネルギーの塊をバンギラスに向けて放った。バンギラスは破壊光線を使ってしまったのでその反動で動けないため黒いエネルギーの塊を受けてしまった。
「な・・・んだ・・・こ・・・りゃ・・・」バンギラスは眠るように倒れてしまった。
「・・・ユキメノコよ・・・」
「す、すみません！まさかアタイの氷から自力で脱出するとは思いもしませんでしたから！」
「・・・お前は他の奴と共にエムリットを捜し出せ・・・」
「え？しかし奴らと一緒にいるアグノムは？」
「・・・我が闇の分身が向かっている・・・そいつがアグノムを連

れて来るだろう。」その頃、ラティオス達はトレーニングを終え、バクフーンとエンペルトが回復するのを待ってポケモンセンターで1日を過ごした。「・・・ん?もう朝か・・・あれ?バクフーンがいない?」朝早く起きたリザードンはバクフーンがいない事に気づいた。

「何処に・・・あっいた!」ベランダを見るとバクフーンがいた。

「バクフーン!」

「ん?あぁリザードンか・・・おはよ・・・」

「もう大丈夫なのか?」

「まだ頭が少し痛いけどこれ位なら大丈夫だよ!・・・なぁリザードン」

「ん?」

「・・・やっぱ良いや。何でもない・・・」

「そうか?」バクフーンとリザードンは部屋に戻りました。中に戻ると皆起きていて、エンペルトもすっかり元気になっていた。バクフーン達はとりあえず次のジムがある街に向かう為に準備を済ませ、ポケモンセンターを出発した。出発してから30分位たった時、突然目の前にブラックホールのような穴が出現した。

「何だ!?」その穴から黒いポケモンが現れた。そのポケモンは片目に傷があった。

「・・・」

「何だよあいつ?」

「兄さん・・・あの人怖い・・・何か嫌な感じがする・・・」

「・・・まさか・・・お前は!?」バクフーンとリザードンはそのポケモンに見覚えがあった。

「どうしたんですか二人共?」

「あいつは・・・俺の母さんを・・・殺した奴だ!」

「え!?」

「・・・あの時のメスのバクフーンのガキか・・・」

「一体何しに来た!?」

「・・・お前達は随分と我が部下の邪魔をしたようだな？」
「部下？・・・まさかフーディン達の事か！？という事はお前が漆黒の闇のボスか！？」
「そうだ・・・我が名はダークライ・・・漆黒の闇の首領だ・・・アグノムを渡してもらおうか」
「ふざけんな！お前にアグノムは渡さないぞ！」
「・・・仕方ない・・・ならば連れて来てもらうまでだ・・・」
「何を言ってる？」
「・・・リザードンよ！アグノムを連れて来い！」ダークライがそう言った時リザードンの身体から黒いオーラが出現した。リザードンはアグノムを取り押さえた。
「ぐっ！？」
「何をやってるんだリザードン！？止めろ！」
「・・・」
「無駄だ・・・我が闇の支配を受けているそいつには、もうお前達の声は届かぬ・・・ククク・・・」
「お前・・・ぶっ倒す！！火炎車！！！」バクフーンは火炎車でダークライに突っ込んで行った。しかし・・・
「リザードンよ！我を守れ！」ダークライがそう言うとリザードンはバクフーンの前に立ちはだかった。
「なっ！？」バクフーンは慌てて火炎車を止めた。
「さぁ、二人で戦うが良い・・・ククク！」
「俺達がいるのを忘れるなよ！」ラティオス達がダークライに向かって行こうとした時、ラティオス達は黒いバリアのようなものに閉じ込められてしまった。
「貴様達はそこで大人しくしていろ！・・・さぁ戦うが良い！」リザードンはバクフーンに襲いかかった。バクフーンはリザードンの攻撃を回避する事に専念した。
「止めてくれリザードン！！」
「・・・」しかし、バクフーンの声はリザードンには届いていない

ようだ。リザードンがドラゴンクローで攻撃してきたところをバクフーンは受け止めた。
「くそ・・・一体どうすれば良いんだ!?」バクフーンはどうやればリザードンを救えるのか一生懸命考えていた。
「ククク・・・そんなにそいつを救いたいか?」
「当たり前だ!」
「ならばその願い叶えてやろう・・・」ダークライがそう言った途端、リザードンの黒いオーラがバクフーンに移って来た。
「何だ!?」
「ただし願いを叶える代わりにお前が我の支配を受けてもらうがな・・・ククク・・・」リザードンの黒いオーラがバクフーンに全て移った時にリザードンは倒れた。
「リザードン!?」
「眠ってるだけだ・・・まもなくお前も深い闇の底に墜ちるがな・・・そうなればお前は我の物になる・・・ククク・・・」その時バクフーンは完全に黒いオーラに包まれた。すると、黒いオーラがどんどんバクフーンの中に入り込んでいく・・・バクフーンは眠るように倒れてしまった。
「バクフーンさん!?」
「予定していた順番が逆になってしまったな・・・まぁ良い・・・アグノムを渡せ・・・」ダークライがラティオス達に近づいて行く・・・その時!
「オーロラビーム!」オーロラビームがダークライに向かって行く。ダークライはそれを避けた。
「やっと見つけたわよダークライ!」オーロラビームが放たれた方を見ると一人のポケモンがいた。
「お前は・・・クレセリア!まだ我を追っていたのか?しつこい奴だ・・・」
「あんたを捕まえるまで私は何処までも追いかけるわ!これでもくらいなさい!ソーラービーム!!」クレセリアはダークライにソー

ラービームで攻撃したが、これも避けられてしまった。
「邪魔が入ったな・・・仕方ない・・・」ダークライは闇の中に消えていく。バクフーンと一緒に・・・
「バクフーンをどうするつもりだ!?」ラティオスはバクフーンの手を掴もうとしたが間に合わなかった。
「バクフーンを助けたければ・・・アグノムと交換だ・・・場所はバトルシティにあるバトルタワーの屋上だ。待ってるぞ・・・ククク・・・」ダークライは闇の中に消えた。
「バクフーン・・・くそ!!」
「兄さん!リザードンさんが起きないの!」
「私に任せて・・・」クレセリアがリザードンに近づいて、自分の羽根をリザードンに当てた。すると、羽根がまるで月の光のように輝き始めた。その時リザードンが目を覚ました。
「・・・あれ?・・・俺は・・・今まで何を?」
「リザードンさん!良かった!気が付いたんですね!」
「私の羽根には眠ってしまった人達を起こす効果があるの!さあて・・・バトルシティのバトルタワー・・・ここからそんなに遠くないわね・・・」
「あの・・・あなたは一体?」
「私?私はクレセリア!ポケモンレンジャーよ!」
「ポケモンレンジャー!?」
「そうよ!ずっとダークライを追っていたんだけど・・・あれ?あなた・・・」
「久しぶりですね!クレセリア先輩!」
「やっぱりピカチュウじゃない!」
「ピカチュウさん、クレセリアさんとお知り合いなんですか?」
「彼は昔私と同じレンジャーだったのよ!」
「先輩昔の話は良いですから・・・それよりも今はバクフーンを助けないと!」
「そうだったわね・・・アグノムとの交換が条件だったわね・・・

奴の事だから約束は守らないわね・・・アグノムを渡しちゃ駄目よ！」

「解ってます！しかし・・・どうやってバクフーンを助け出すんです先輩？」

「私に考えがあるわ！」クレセリアはリザードン達に作戦を説明した。

「・・・なるほど・・・さすが先輩だ！」

「でしょ？皆も良いわね？」

「はい！」

「解った！」

「ＯＫ！それじゃ、バトルシティに行くわよ！」

「なぁ？何がどうなってるんだ？」

「急いでるから行きながら説明してあげるわよ！さぁ行きましょ！」

「お、おい待てよ！？」クレセリア達はバクフーンを助ける為に急ぎバトルシティに向かった。

第十九話漆黒の闇の首領！その名はダークライ！（後書き）

第十九話完成です！

第二十話突入！漆黒の闇のアジトへ！（前書き）

ダークライの闇の力にリザードンが支配されてしまい助けだそうとしたバクフーンだか！？
ええぇ、前回の話を投稿するさいに操作ミスか何かで同じ話が二つ出てしまいましたがあまり気にしないで下さい！

第二十話突入！漆黒の闇のアジトへ！

「俺が・・・そんな事を・・・」
「覚えてないんですか？」
「無理もないわね。ダークライに操られた人は意識がないからね・・・」
「俺が・・・」
「落ち込むのは後よ！今はあなたのお友達を助ける方に集中して！」
「・・・解った。でも、本当にさっき言ってたあんたの作戦でバクフーンを助けられるのか？」
「大丈夫よ！私はポケモンレンジャーよ？必ず成功させるから！ほら、着いたわよ！」
「ここがバトルシティ・・・じゃああそこに見える大きな建物が？」
「そう。あれがバトルタワーよ！あそこは全国のポケモン達が腕試しに来る所よ！」
「先輩、そのバトルタワーで何かあったみたいですよ？」ピカチュウが指差す先にはポケモン達が何やら騒いでいた。
「まさかダークライが何かしたのかしら？行ってみましょう！」クレセリア達はバトルタワーに急いで行きました。するとそこには怪我をしたポケモン達がいました。
「あなた達一体どうしたの！？何があったの？」
「うぅ・・・黒い・・・変な奴が・・・」
「ダークライだわ！」
「頼む・・・奴を追ってリーダーが中に・・・」
「リーダーって・・・もしかしてあなた達はバトルジムのジムリーダールカリオのチームに所属してるの？」
「そうだ・・・頼む・・・リーダーを助けてやってくれ・・・」
「解ったわ！皆行きましょう！」クレセリア達はタワーの中に入った。中は激しい戦闘の跡があった。

「ここにはいないわね・・・屋上に行きましょう！」クレセリア達はタワーの屋上に向かいました。皆が屋上に着く時、大きな爆発が起きました。
「何だ！？」
「恐らくルカリオがまだ戦ってるのよ！行くわよ！」クレセリア達は屋上にたどり着きました。そこでは、ダークライとルカリオが激しいバトルを繰り広げていた。
「波動は我にあり・・・波動弾！」ルカリオは波動弾でダークライを攻撃した。
「闇よ・・・我の盾となれ！」ダークライの影から黒い壁が出現して波動弾を防いだ。
「ダークライ！」クレセリアが叫ぶと二人はクレセリアを見た。
「お前はクレセリア！」
「ようやく来たか・・・待ちくたびれたぞクレセリア・・・」
「バクフーンは何処だ！バクフーンは無事なのか？」
「奴ならここにいるぞ？出てこい・・・」ダークライが作り出した闇の穴からバクフーンが出てきた。
「バクフーン！」
「さぁ、アグノムを渡してもらおうか・・・」
「・・・良いわ。アグノム！」
「・・・」アグノムがゆっくりとダークライの所に向かって行く。
「さぁ！バクフーンこっちに！」
「・・・」だが、バクフーンは戻ろうとしない。
「どうしたんだバクフーン？」
「・・・」
「ククク・・・せっかく手に入れた駒を簡単に手放す筈がないだろ！こいつはもう我のしもべだ！」
「あんた！？アグノムと交換でバクフーンを返すって言ったじゃない！？」
「さぁ？そんな約束をした覚えはないなぁ・・・ククク・・・」

「ダークライ！」
「バクフーンよ・・・お前の力を見せてみよ！」ダークライがそう言うとバクフーンは戦闘体制に入った。
「おい・・・冗談止めろよな・・・バクフーン！」
「殺れバクフーン！」
「解りました・・・ダークライ様・・・」バクフーンはリザードン達に噴火で攻撃して来た。ダークライの闇の力の影響か今までより威力が倍増していた。
「ラグラージ、ラティアス！」
「うん！」
「解ってるよ！」
「「守る！！」」ラティアスとラティオスとラグラージの三人は守るを使って皆を噴火から守った。
「止めろよバクフーン！！俺達が解らないのか！？」
「・・・排除する・・・電光石火！」バクフーンは物凄い速さでリザードンに向かって来た。
「くっ！？」
「ボーンラッシュ！」そこにルカリオが来てバクフーンを停めた。
「更に水の波動！」ルカリオは至近距離でバクフーンに効果が抜群の水の波動で攻撃したが電光石火で避けられてしまった。
「大丈夫か？」
「あ、あぁ！すまない」
「・・・お前・・・邪魔だ・・・」バクフーンは炎のエネルギーを集め始めた。
「あれは！？」
「ブラストバーン！」バクフーンのブラストバーンがルカリオに向けて放たれた。
「水の波動からボーンラッシュ！」ルカリオはボーンラッシュで作り出した棒を水の波動で包み更にそれを高速回転させてブラストバーンを防御した。

「ブラストバーンは使った後反動で動けない筈！」ルカリオはエネルギー弾を作り出した。
「波動は我にあり・・・波動弾！」ルカリオの波動弾がバクフーンに向かって行く！
「フレアドライブ！」だが、バクフーンはフレアドライブの炎で波動弾を防いだ。
「何！？反動で動けない筈じゃ！？」
「闇の力を受けているバクフーンが自分の技の反動ごときで動けなくなる筈がなかろう？今回はここまでだ・・・戻るぞバクフーン・・・」
「はい・・・ダークライ様・・・」
「アグノムは確かに貰ったぞ！ククク・・・ハハハハハ！」ダークライとバクフーンはアグノムを連れて闇の穴の中に消えて行った。
「・・・本当にバクフーンが俺達に攻撃して来た・・・クレセリアが言ってた通り操られてるのか・・・」
「そんなに落ち込まないで？とりあえず作戦は成功よ。アグノム！もう出てきて良いわよ！」クレセリアが呼ぶと出入口からアグノムが出てきた。
「どう？私の作戦は？」
「どうって言われても・・・僕の代わりに捕まったメタモンが心配だよ！」
「メタモン？なるほど、どうりでさっきのアグノムから感じた波動に違和感を感じた筈だ！」「メタモンなら心配ないわよ！ポケモンレンジャーの中で一番の変装の名人なんだから！それに私の先輩がすでに漆黒の闇の中に潜入してる筈だからその人がメタモンを助けてくれる筈よ！」
「クレセリア先輩の先輩？一体誰なんですか？」
「あら？あなた達はもう会ってる筈よ？」
「えっ？」その頃アグノムに変身したメタモンを連れてダークライとバクフーンはアジトに戻っていました。

「戻ったか・・・我が分身よ・・・」
「あぁ・・・アグノムとバクフーンを連れて来たぞ！」
「・・・解った。もう戻れ・・・」するとダークライの分身体は闇の中に消えて行った。
（オイラを連れて来たダークライが偽物！？随分と便利な技を使えるんだなこいつ！）
「ハァ・・・やはり所詮は分身・・・能力は我に少し劣るし思考能力は主人格と同じでバカときた・・・お前はアグノムではないな？」
（ギクッ！？もうバレたのか！？）
「貴様にはここで消えてもらおうか・・・」
「そう簡単に消えてたまるかって！変身！テッカニン！」メタモンはアグノムから素早いテッカニンに変身した。
「さいなら～！」テッカニンに変身したメタモンは物凄いスピードで逃げた。
「バクフーンよ・・・奴を追え！」
「はい・・・ダークライ様・・・」バクフーンは電光石火でメタモンを追いかけた。
「・・・まずいな・・・高速移動！」一部始終見ていたマニューラが高速移動で二人を追いかけた。
「やっぱテッカニンは速いなぁ！これなら楽に逃げきれ・・・」
「・・・お前・・・捕まえて・・・ダークライ様の・・・所へ」いつの間にかバクフーンが追いついていた。
「げげ！？何で追い付けるんだ！？」
「火炎放射！」バクフーンは火炎放射で撃ち落とそうとした。今のメタモンは虫タイプのテッカニンになっている為に炎タイプの技は効果が抜群だ！
「やばい！？」
「吹雪！」誰かの吹雪が火炎放射の軌道を変えた為に火炎放射がメタモンに当たらなかった。
「え？」

「俺が時間を稼いでやるからさっさと逃げろ！」
「マニューラ先輩！」
「早く！」
「は、はい！」メタモンは出口に向かった。
「・・・まさかこんなに早くダークライがお前達に近づくとはな・・・誤算だった・・・」
「・・・邪魔する者・・・排除する・・・火炎放射！」バクフーンはマニューラに火炎放射で攻撃した。
「高速移動！」マニューラは高速移動で火炎放射を避けた。
「完全にダークライに支配されてしまったんだな・・・」
「火炎車！」バクフーンはマニューラの言葉を無視して攻撃してきた。
「守る！」マニューラは守るで火炎車を防御した。
「もうメタモンは逃げた頃だな・・・俺もそろそろ引き上げるか・・・」
「・・・逃がさん」
「吹雪最大パワー！」マニューラは最大パワーで吹雪を放ち、巨大な氷の壁を作り出してバクフーンの行く手を塞いだ。
「噴火！」バクフーンは噴火で氷の壁を溶かした。だが、すでにマニューラはいなかった。
「・・・」その頃メタモンはアジトから脱出して安全な所にいた。
「ここまで来れば大丈夫だろう！マニューラ先輩は大丈夫かなあ？」
「呼んだか？」メタモンが振り向くとマニューラがいた。
「マニューラ先輩！無事だったんですね！」
「当たり前だ！それより今は本部に戻って現在の状況を伝えるんだ！飛行タイプのポケモンに変身して俺を乗せてくれ！」
「了～解！」メタモンは飛行タイプのピジョットに変身してマニューラを背中に乗せてポケモンレンジャー本部に向かって飛んだ。その頃リザードン達はクレセリアに連れられてポケモンレンジャー本部に来ていた。

「マニューラがクレセリアの先輩!?」
「そうよ。」
「信じられないな・・・あいつはバクフーンに大怪我させたんだぞ!?」
「あの人は時々やり過ぎる事があるからねぇ・・・それに結構規則に厳しい人だから・・・レンジャーは一般の人を事件に巻き込まないようにするのが仕事の一つ何だけど多分あなた達をこれ以上巻き込まないように手を引かせようとしたんでしょう。」
「そういえばピカチュウさんは知らなかったんですか?あの人がクレセリアさんと同じポケモンレンジャーだって?」
「俺はクレセリア先輩以外の先輩には会った事がなかったんだ。クレセリア先輩、もしかして彼も先輩と同じトップレンジャーだったりします?」
「そうよ!ただ彼はレンジャークラス9で私はレンジャークラス8だから同じとはあまり言えないわね。」
「ピカチュウさんトップレンジャーって何ですか?」
「トップレンジャーってのは名前の通りポケモンレンジャーの中でも優秀なレンジャーだけが集まった人達の事だよ!」
「ピカチュウさんもトップレンジャーだったんですか?」
「俺はエリアレンジャーだったんだ!簡単に言えばそれぞれの町にいる交番のポケモンポリスってとこかな?ちなみにエリアレンジャーの中で優秀な成績を取った奴がトップレンジャーになれるんだ!」
「へぇ。そういえば何でピカチュウさんはポケモンレンジャーを辞めたんですか?」
「えっ?いや、それは・・・」
「ピカチュウって女の子が大好きじゃない?ミッション中だったのに女の子とばっかり喋って遊んでたから上司に怒られて辞めさせられたのよ!」
「先輩~!?」
「事実でしょ?」

「・・・こんな時に随分と盛り上がってるなクレセリア？」クレセリアが振り向くとマニューラとメタモンがいた。
「マニューラ先輩！それにメタモン！良かった！無事だったのね！」
「マニューラ先輩のおかげでね！でも危なかったッスよ！オイラを連れ去ったダークライが偽物だったりオイラの変身が一発で見破られたり！」
「私と戦ったダークライが偽物！？それは確かなのかメタモン？」
「本当ッスよルカリオさん！本人が言ってたんですから！それにそこの君達の仲間のバクフーンには襲われたし・・・」
「バクフーンが・・・なぁクレセリア、バクフーンを助けるにはどうすれば良いんだ？」
「お前達はもう関わるな！」マニューラが強い口調で言った。
「バクフーンを見捨てろって言うのか！？」
「そうじゃない！バクフーン達は必ず俺達が助けだす！だが、お前達をこれ以上巻き込む訳にはいかないんだ！」
「マニューラ先輩。彼らも協力させてあげても良いんじゃないですか？」
「クレセリア？」
「それに今回のミッションは多分私達レンジャーだけでは達成出来ないと思いますから他のチームのポケモン達にも協力をお願いした方が良いと私は思います！」
「オイラもそう思います！マニューラ先輩、オイラ達だけじゃとてもじゃないけどダークライを捕まえる事は出来ないと思います！」
「メタモンまで・・・」
「俺達はあんたに何て言われようが絶対行くからな！バクフーンやユクシー、それにバンギラスやギャラドスを助けるんだ！」
「・・・仕方ない・・・だが、お前達に何かあっても俺達は助けに行けないかもしれないんだからな！」
「俺達全員前よりレベルが上がってるんだ！簡単にはやられないさ！」

「決まりね！じゃあ私は協力してくれるチームを探して来ます！メタモン手伝ってね！」
「了～解！」クレセリアとマニューラは漆黒の闇を捕まえる為に協力してくれるチームを探しに行きました。
「俺達はクレセリア達が戻るまではここで待機だ！」マニューラやリザードン達はクレセリア達が戻るまで待機する事にした。その頃漆黒の闇アジトでは・・・
「マニューラが裏切った！？それは本当なのかフーディン？」
「えぇ。そのようです。まぁ私は最初から奴は怪しいと思ってたんですがね。」
「ざ～んねん！あいつ結構良い男だったのに！それよりさ・・・」
ユキメノコはバクフーンを見た。
「何であいつがここにいるのよ？」
「あぁ何でもボスが奴を闇の力で支配したそうですよ。」
「そうなの？今まで散々アタイ達の邪魔をしたあいつが今ではボスの操り人形って訳ね。何かアタイ達がエムリットを捕獲してた間にいろんな事が起きてるわね？」
「ケケケ！三人共！ボスがお呼びだぜ！」
「解りましたゲンガー。ご苦労。」
「にしてもあんた、アタイ達より階級が低いんだからもう少し敬語とか使いなさいよ！」
「ケケケ！まぁ気にすんな！とにかく伝えたからな？ケケケ・・・」
ゲンガーは闇の中に消えた。
「全く、フーディン！あんたの部下何だから何とかしなさいよ！」
「あれは私でも無理です。それよりボスのところに急ぎますよ。」
フーディン達はダークライの所に向かった。
「ボスお呼びですか？」
「・・・マニューラが裏切ったのは知っているな？」
「はい。」
「奴の事だ・・・ユクシーとエムリットを我らから奪い盗ろうとす

るだろう・・・それぞれ自分のフロアで準備しておけ・・・」
「はっ！」
「それと・・・ユクシーとエムリットを我の所に連れて来い・・・」
「？・・・解りました。ゲンガー！」
「ケケケ！解ったよ！」ゲンガーがユクシーとエムリットを連れて来た。二人共眠らされていた。「ボス、その二人を一体どうするんですか？」
「役に立ってもらうだけだ・・・お前達は持ち場に行け！」
「はっ！」フーディン達は自分の持ち場に向かった。
「・・・バクフーン・・・貴様にも役に立ってもらうからな・・・」
「・・・はい・・・」その頃、ポケモンレンジャー本部ではクレセリア達が協力してくれるポケモン達を連れて戻って来た。
「お待たせ皆！協力してくれる人達を連れて来たわよ！」リザードン達が協力してくれるポケモン達を見たら、見覚えがある連中だった。
「あれ？チーム業火じゃないか！それにチームメタル！」
「よっ！久しぶりだな！協力しに来たぜ！」
「まさかあなた達がいるとは・・・計算外でしたよ。一つ言っておきます！私達の足を引っ張らないで下さいよ？」そしてもう一チームがいた。そのチームの中に知ってるのが一人いた。
「お久しぶりですね！」
「フライゴンさん！もしかしてフライゴンさんのチーム何ですか？」
「はい！紹介しますよ！まずはこちらがバシャーモ！僕の最初の仲間です！」
「良くフライゴンからあんた達の事は聞いてるよ！俺はバシャーモ！よろしくな！」
「次にスターミー！」
「・・・」
「あ、あの～？」
「あはは・・・彼は無口なんですよ。次にミミロップ！」

「よろしく・・・もう良いわよね？」
「あ、うん・・・じゃ、じゃあ次にライボルト！」
「オッス！」
「次にグレイシア！」
「よろしくね！」
「最後にマナフィ！」
「は～い！よろしくお願いしま～す！えへへ♪」
「これが僕のチーム竜星です！全力であなた達に協力させてもらいます！」
「クレセリア、協力してくれるのはこれだけか？」
「私もいるぞ！」
「ルカリオ！ジムはどうした？」
「メンバーがダークライのせいで怪我をしたからジム戦できる状態じゃない。それにジム戦をしてる場合ではないだろ？」
「すまない・・・助かるよ。良し、それじゃ皆に作戦を伝える！」
マニューラは皆を集めて作戦を話し始めた。
「まず奴らのアジトの場所だがここから北東の海に浮かぶ島にある！奴らはダークネス島と言っている。そして中に侵入するには四ヶ所ある入り口を同時に開ける必要がある。」
「四ヶ所に入り口？」
「・・・敵が攻めて来た時に敵の戦力を分散する為の仕掛け・・・と言うところですか？」
「メタグロスの言う通りだ！そしてその四ヶ所の入り口の先にあるのは漆黒の闇の幹部がいるフロアになる。そいつらを倒さない限りダークライのいるフロアにはたどり着けない。」
「あの、四ヶ所って事は幹部は四人って事ですよね？」
「そうだフライゴン！フーディン、ヨノワール、ユキメノコ、そして俺の四人だ！だが、俺が抜けた事で残る幹部は三人って事になるんだが・・・」
「何か問題でもあんのか？」

「俺が抜けたフロアにはダークライの闇の力で支配された奴がいる筈なんだ・・・」
「まさか・・・バクフーンが?」
「可能性は高いな。リザードン・・・もしバクフーンがいるフロアに当たったら、あいつと戦えるか?」
「・・・解らない。だけど、もしその時が来たら・・・覚悟を決める!」
「・・・そうか。では、そろそろ行くぞ!」マニューラ達は漆黒の闇アジトに向かう為に北東にある海を目指しました。
「ところでマニューラ殿?海はどうやって渡るんです?まさか私に泳げと言うんじゃないでしょうね?」
「心配するなメタグロス!メタモン!頼む!」
「了~解!変身!ホエルオー!」メタモンはポケモンの中で一番大きなホエルオーに変身した。
「これで海を渡るんだ!さぁ皆乗るんだ!」リザードン達はホエルオーに乗ってダークネス島に向かいました。
「さて、島に着くまでに四つのグループに別れないとな・・・ちょうど君達のチームで四つ・・・後は俺、クレセリア、メタモン、ルカリオが一人ずつチームに加わる事になるが・・・俺はチームブラストに入る!今までの事があるからな・・・」
「私はチームメタルに加わろう。」
「オイラはチーム竜星に加わるよ!」
「じゃあ私はチーム業火ね?よろしく!」
「見えてきたっすよ!」皆が前を見ると島が見えた。島には黒い霧のようなものが掛って更には雷まで鳴っていた。
「いかにも悪役がいるって感じの所だな?」
「上陸するぞ!」マニューラ達はダークネス島に無事着いた。そして皆それぞれ四ヶ所ある入り口に向かおうとした時、突然目の前に黒い穴が出現して中からダークライが現れた。
「ダークライ!」

「やはり来たかマニューラ・・・それに、アグノム・・・」
「ユクシーやバンギラスにバクフーン、ギャラドスを返せ！」
「ほう・・・随分と勇ましいなアグノムよ・・・だが、一人返してほしくないのかな？エムリットを・・・ククク・・・」
「えっ！？まさかエムリットまで！？」
「すでに我が手中だ！証拠を見せてやろう・・・」ダークライは闇の中からユクシーとエムリットを出現させた。
「ユクシー！エムリット！」アグノムが呼びかけるが二人共ダークライに眠らされている。
「後は・・・アグノムだけだ・・・ククク・・・」
「俺がいる限りアグノムは渡さないぞダークライ！」
「別に我から行く事はない。連れてこさせれば良いだけの事・・・アグノムを連れて来るのだ・・・ラティアス！」
「え？」ダークライがラティアスを指差した瞬間ラティアスの身体から黒いオーラが出現してラティアスを包んでいく。
「ラティアス！？」
「嫌！？助けて・・・兄・・・さん・・・」ラティアスは完全に包まれた。そして黒いオーラがラティアスの身体の中に入って行く・・・次の瞬間！
「わっ！？」アグノムはラティアスに捕まってしまった。
「止めるんだラティアス！？」
「・・・アグノム・・・捕獲・・・ダークライ様に・・・」
「良くやったラティアス・・・これで鍵は全て揃った・・・」ダークライとラティアスはアグノムを連れて闇の中に消えて行った。
「ラティアス・・・何で・・・何で俺の妹が・・・」
「ラティオス・・・ショックなのは解るが今は時間がない！ダークライに三人の神が捕まってしまったんだ！急がないと奴は何をするか解らんぞ！」
「・・・解ってる・・・行こう・・・必ずラティアスは助けだす！」
マニューラ達はそれぞれ四ヶ所の入り口に向かいました。

「準備は良いか？」
「ＯＫだぜ！」
「大丈夫です！」
「いつでも良いです。」
「良し・・・皆、幸運を祈る！行くぞ！」マニューラ達は漆黒の闇アジトに侵入しました。彼等はダークライを倒す事が出来るのか！？

第二十話突入！漆黒の闇のアジトへ！（後書き）

第二十話完成です。いよいよ漆黒の闇とのラストバトルです！

第二十一話チームメタルＶＳ漆黒の闇幹部・フーディン！（前書き）

四つのチームに別れたリザードン達はそれぞれ四つの入り口に入って行った。

第二十一話チームメタルＶＳ漆黒の闇幹部・フーディン！

「随分暗いな・・・これじゃ前が見えねぇよ！」
「・・・後３０秒歩いたら扉がある。」
「あんた見えるのか？」
「ルカリオはあらゆる波動をキャッチする事が出来ると聞いた事がありますが・・・どうやら本当のようですね。」それから３０秒歩いたら本当に扉があった。メタグロス達は扉を開けた。
「何だ・・・ここは？墓地・・・なのか？」
「・・・！皆、左に避けろ！」ルカリオがそう言うと前からシャドーボールが飛んできた！
「うお！？」チームメタルの皆は何とか避ける事が出来た。
「ケケケ・・・良く避けたな！」
「誰だ！？」
「・・・そこか！水の波動！」ルカリオは水の波動で攻撃してきた敵が隠れてる所に向かって攻撃した。
「ウゲゲ！？」水の波動をギリギリでそのポケモンは避けた。正体はゲンガーだ。
「危ねぇ危ねぇ！良く俺の居場所が解ったな？」
「お前の波動をキャッチしただけの事。それと・・・後５人いるな？出てこい！」
「ほう・・・あらゆる波動をキャッチ出来るとゆうのは本当のようですね。バトルジムのリーダー、ルカリオ。」奥の方からフーディンとその部下の四人が出てきた。
「てっきりバクフーンの仲間が来ると思ってましたが・・・雑魚が来てしまいましか。」
「雑魚ねぇ・・・随分ナメられたもんだな！」
「バレットパンチ！」メタグロスがいきなりフーディンにバレットパンチで攻撃した。

「リフレクター！」フーディンはリフレクターでバレットパンチを防御した。
「無駄話してるヒマがあるんでしたらさっさと攻撃しなさいハガネール！」
「あいよ！アイアンテール！」ハガネールはアイアンテールでフーディンを攻撃した。だがフーディンはテレポートで回避した。
「お前達！見てないで攻撃しなさい！」
「ケケケ！やるか！行くぜ野郎共！」ゲンガーと他四人が襲いかかって来た。
「くらえシャドーボール！」ゲンガー達はシャドーボールで攻撃してきた。
「任せな！砂嵐！」ハガネールが砂嵐でシャドーボールを防いだ。
「ゴーストタイプにはこの技だ！噛み砕く！」ハガネールはゲンガーに悪タイプの技噛み砕くで攻撃した。当たれば効果は抜群なのだがゲンガーは宙に浮いてそれを回避した。
「ケケケ！くらってたまるかよ！」
「だろうな・・・エアームド！そっちに行ったぞ！」ゲンガーが振り向くとそこには回転しながら向かって来るエアームドがいた。
「解ってるってハガネール！ドリルくちばし！」エアームドのドリルくちばしがゲンガーに当たりそうになった時、突然エアームドが停まった。
「・・・すぐに油断するのがお前の悪い癖だぜゲンガー？」
「ケッ！うるせぇよスリーパー！」スリーパーのサイコキネシスがエアームドを捕えたのだ！
「何やってんだよエアームド！メタルクロー！」ボスゴドラがスリーパーにメタルクローを決めた。その衝撃でサイコキネシスが解除されてエアームドは解放された。
「ワリィボスゴドラ！」
「たくっ！世話が焼ける奴だな！」その時ボスゴドラにシャドーボールが飛んで来た。

「おっと！守る！」ボスゴドラは守るでシャドーボールを防御した。
「見た目の割りには意外と反応が良いね？」シャドーボールを撃ったのはブーピッグのようだ。
「人を見た目で判断すんな！アイアンヘッド！」ボスゴドラはブーピッグにアイアンヘッドで突っ込んで行った。
「飛び跳ねる！」ブーピッグは尻尾をバネのようにして飛んでアイアンヘッドを回避した。ボスゴドラは勢い良く壁に激突した。壁は粉々に砕けた。
「凄いパワーだなぁ！まぁ当たらなければ問題無いんだけどね！」
「・・・ターゲットロックオン・・・電磁砲！」ジバコイルがブーピッグにロックオンしてから電磁砲を発射した。
「やば！？それ！」ブーピッグはサイコキネシスで仲間ヌケニンを自分の前に連れて来て電磁砲を防ぐ盾に使った。ヌケニンは特性の不思議な守りで自分に効果が抜群の技しか通用しない為、電磁砲を受けてもダメージがなかった。
「ふぅ～！危ない危ない！やっぱヌケニンはある意味最強の盾になるよなぁ！」
「悪の波動！」ルカリオはヌケニンに効果がある悪の波動を使いヌケニンに炸裂した。ヌケニンは一発で倒れた。
「ありゃりゃ！？」
「神速からボーンラッシュ！」ルカリオは神速を使い一瞬でブーピッグの前に来てボーンラッシュでブーピッグに連続攻撃した。
「これで決める！悪の波動！」ルカリオはブーピッグに悪の波動を決めた。ブーピッグは倒れた。ルカリオはあっという間に二人を倒した。
「さすがバトルジムのリーダーだな！」
「・・・感心してる場合か・・・不意打ち！」突然ジュペッタが現れボスゴドラは背後から攻撃された。
「痛！？やりやがったな！アイアンテール！」ボスゴドラはアイアンテールで反撃したがそのポケモンは影の中に入ってアイアンテー

ルを回避した。ボスゴドラはアイアンテールを外した事で勢い良く転んでしまった。
「いって～！あんにゃろどこに行きやがった！？」
「・・・そこか！水の波動！」ルカリオは波動をキャッチして攻撃した。
「シャドーボール！」だが、水の波動はシャドーボールで打ち消された。「・・・やっぱあんたは厄介だな・・・トリックルーム！」フロアの中の時空が歪み始めた。
「・・・これであんたは俺より動きが遅くなった・・・シャドークロー！」ジュペッタはシャドークローでルカリオを攻撃しようとした。
「トリックルーム！」その時ドータクンがトリックルームを使って時空を元に戻した。そのおかげでルカリオはシャドークローを回避する事が出来た。
「助かったよドータクン！」
「ちっ・・・トリックルームを使える奴がいたか・・・」ジュペッタはフーディンの所に戻った。
「・・・フーディン、そろそろ戦闘に参加しろよな？」
「解ってますよジュペッタ。そろそろ戦闘に参加させてもらいましょう。相手の行動パターンは大体解りましたから。」フーディンの身体から黒いオーラが出現した。
「フフフ・・・さぁ、ショーの始まりです！」フーディン達が突っ込んで来た。
「くらいなさい！サイコカッター！」フーディンはサイコカッターでボスゴドラを攻撃した。
「やば！？岩石封じ！」ボスゴドラは地面から岩石を出してサイコカッターを防ごうとしたがサイコカッターは岩石封じの岩石を切り裂いてしまい、ボスゴドラはサイコカッターを受けてしまい吹き飛ばされた。
「がはっ！？」ボスゴドラの自慢の鋼の身体はサイコカッターで切

傷が出来ていた。
「・・・ゲンガー、合わせ技行くぞ！」
「ケケケ！良いぜ！」
「シャドーボール！」
「鬼火！」ゲンガーのシャドーボールにジュペッタが鬼火を絡ませて炎のシャドーボールとなってドータクンに向かって行った。
「守る！」ドータクンは守るを使ってこれを防御した。
「鋼タイプを持ってるお前にはこれだ！炎のパンチ！」スリーパーはルカリオに炎のパンチで攻撃した。
「ブレイズキック！」ルカリオの足から炎が現れて炎のキックで炎のパンチを止めた。
「なっ！？」
「私に接近戦で勝てると思ったのが間違いだ！神速からボーンラッシュ！」ルカリオは神速のスピードを利用して高速でボーンラッシュをスリーパーに決めた。
「これでフィニッシュだ！はっけい！」ルカリオはスリーパーのお腹に手を当て、手のひらから衝撃波を放ちスリーパーを吹っ飛ばした。スリーパーは倒れた。
「俺にも活躍させてくれよ！ゴッドバード！」エアームドは飛行タイプ最強技のゴッドバードでフーディンに突っ込んで行った。
「サイコキネシス！」だが、エアームドはフーディンのサイコキネシスに捕まって動けなくなってしまった。
「フフフ・・・あなたでは私に触れる事すら出来ませんよ。」
「エアームドを離せ！捨て身タックル！」ハガネールはフーディンに最大パワーの捨て身タックルで突っ込んで行った。
「・・・」その時目の前にルカリオにやられた筈のヌケニンが現れて捨て身タックルを自分で受けた。
「な！？お前はさっきルカリオに倒された筈！？ん？」その時ハガネールはヌケニンが身につけてる道具に気付いた。
「それは気合いのタスキ！そうか、その道具のおかげで耐える事が

出来たのか！」気合いのタスキとは一度だけ瀕死になるのを防ぐ事が出来る道具なのだ。
「良くやりましたヌケニン。さぁ、あなたは吹き飛びなさい！」フーディンはサイコキネシスでエアームドを壁まで思いっきり吹き飛ばした。
「ケケケ！おまけだ！１０万ボルト！」ゲンガーはエアームドに効果がある電気タイプ技の１０万ボルトで攻撃した。エアームドは避ける事が出来ずに受けてしまい倒れてしまった。
「ロックオン・・・電磁砲！」ジバコイルはゲンガーにロックオンしてから電磁砲を放った。だが、またヌケニンが現れて電磁砲を受けた。
「ケケケ！残念でした！・・・そろそろかな？」ゲンガーがそう言った時、突然ジバコイルは倒れてしまった。
「ジバコイル！？一体何があったんだ！？」
「・・・俺がそいつに呪いを掛けたのさ！」呪いとは自分の体力の削り相手をじわじわと苦しめる技なのだ。
「ゴーストタイプが得意とする技だな・・・だが、呪いを掛けられる前に倒せば良いだけの事だ！ジャイロボール！」ドータクンはジュペッタにジャイロボールで攻撃した。呪いを使った為にジュペッタは一発で倒れてしまった。だが、同時にドータクンも倒れてしまった。
「ドータクン！？今度はなんだ！？」
「ケケケ！ジュペッタは道連れを使ってたのさ！自分を倒した相手も一緒に倒す技さ！これも俺達ゴーストポケモンが得意とする技何だぜ！ケケケ・・・」これで残ったのはフーディン・ゲンガー・ヌケニン。チームメタルはメタグロス・ハガネール・ルカリオ。三対三になった。
「そろそろ決着が着きそうですね。あなた達は良くやりましたが、ここまでです。」
「・・・それはこちらのセリフですね。」今まで最初だけ攻撃して

以来戦闘に参加してなかったメタグロスが言った。
「取れたのかメタグロス、データが？」どうやらメタグロスは今までフーディン達のデータを取っていたようだ。
「えぇ。この勝負は１００％の確率で私達の勝ちです。」
「ケケケ・・・笑わせるぜ！お前達が勝つだって？」
「その通りです。」
「ケッ！じゃあ証明してみな！シャドーボール！」ゲンガーはメタグロスにシャドーボールで攻撃した。
「ハガネール！最大パワーの砂嵐を使って下さい！」
「任せな！」ハガネールはメタグロスに言われた通り最大パワーで砂嵐を使った。シャドーボールは砂嵐で弾かれた。
「俺様のシャドーボールが！？」
「それだけではありません！ヌケニンを見てみなさい。」ゲンガーがヌケニンを見ると倒れていた。
「バカな！？いつ効果が抜群の技を受けたんだ！？」
「受けてませんよ。不思議の守りは一見強力な特性に思えますが弱点もあります。一つは効果が抜群の技を防げない事。もう一つは天気です。砂嵐やあられによるダメージは不思議の守りでは防げない・・・だからヌケニンは倒れたんです。そして・・・あなたもね！コメットパンチ！」メタグロスは砂嵐の中を突っ込んでゲンガーにコメットパンチを決めた。メタグロスの位置が解らなかったゲンガーは道連れを使うヒマもなく倒れた。
「後はあなただけですね！バレットパンチ！」メタグロスはバレットパンチでフーディンに攻撃した。
「テレポート！」だが、フーディンはテレポートでバレットパンチを回避した。
「データは取れてるんですよ。あなたがテレポートで現れるのは・・・ここです！コメットパンチ！」メタグロスはフーディンが現れると予想される場所にコメットパンチを繰り出した。すると、本当にそこにフーディンが現れた。

「これで決まりです！」メタグロスのコメットパンチがフーディンに当たりそうになったその時！突然メタグロスの動きが停まった。
「・・・良いタイミングですゲンガー。」倒したと思ってたゲンガーが黒い眼差しでメタグロスの動きを封じたのだ。
「何故・・・コメットパンチが決まった筈ですよ！？」
「ケッ！確かにな！結構効いたぜ！だが、今回の俺様は気合いが違うんだよ！」ゲンガーの頭を良く見ると何かハチマキのような物を巻いていた。
「あれは気合いのハチマキか！運の良い奴だな！」気合いのハチマキとは気合いのタスキみたいに瀕死になるのを防ぐ事ができる道具だ。タスキと違うところは必ず発動する訳ではなくハチマキを持ってる者の運次第なのだ。
「フーディン！やるなら早くやれ・・・今の俺様じゃ・・・長くは捕まえてられないぜ・・・」ゲンガーはハチマキで耐えたがダメージは残っているようだ。
「解ってますゲンガー！いきますよ・・・」フーディンはシャドーボールを最大パワーでメタグロスに放とうとしている。
「させるか！捨て身タックル！！」ハガネールはフーディンに最大パワーの捨て身タックルで突っ込んで行った。
「あいつのスピードでは間に合わない！神速！」ルカリオは神速でゲンガーに向かって行った。
「これで終わりです！シャドーボール！！」フーディンの最大パワーのシャドーボールがメタグロスに放たれた。
「高速移動！」シャドーボールが当たる寸前でメタグロスは高速移動でこれを回避した。
「何！？」
「コメットパンチ！！」高速移動のスピードを最大限に利用して高速コメットパンチをフーディンに決めた。
「ぐわぁぁぁ！？」フーディンは吹き飛ばされた。
「まだまだぁ！！」そこにハガネールが駄目押しの捨て身タックル

を決めた。フーディンは倒れた。
「ふぅ～・・・助かりましたよルカリオ殿！」ルカリオがゲンガーを倒した事で黒い眼差しの呪縛からメタグロスを解放したのだ。
「しかし、データを完璧に集めた筈でしたが・・・コイツが気合いのハチマキで私の攻撃に耐えたのは計算外です。」
「まぁ勝てたから良いじゃねぇかメタグロス！」「いえ！私のプライドが許しません！もっとデータを完璧にしなくては！」
「それは良いが・・・メタグロス、先を急がなくては！」
「解ってますよ。」
「おいちょっと待て！ドータクン達はどうするんだよ？」
「・・・先に行け・・・俺達は少し休んでから行く・・・」
「大丈夫か？」
「大丈夫だ・・・ちゃんと追いつくからよ・・・ほら早く行け！」
「解った・・・待ってるからな！」ハガネール達はドータクン達をおいて先に進みました。・・・チームメタル残った人数3人。メタグロス・ハガネール・ルカリオ。

第二十一話チームメタルＶＳ漆黒の闇幹部・フーディン！（後書き）

第二十一話完成です！

第二十二話チーム業火ＶＳ漆黒の闇幹部・ヨノワール！（前書き）

チーム業火は暗い通路を進んでいた。

第二十二話チーム業火ＶＳ漆黒の闇幹部・ヨノワール！

「皆ついて来てるか？」
「えぇ！助かるわゴウカザル！あなたの炎で周りが良く見えるし！」
チーム業火は暗い道の中をゴウカザルの炎で照らしながら進んでいた。しばらく進むと目の前に扉が見えてきた。
「開けるぞ・・・」ゴウカザルはゆっくりと扉を開けた。
「何だよここ・・・まるで墓場だな・・・」そこのフロアは今にもお化けが出てきそうな雰囲気が漂っていた。
「・・・良く来たな・・・歓迎するぜ！」
「誰だ！？」その時奥の方から一人のポケモンがやって来た。
「俺はヨノワール！こっから先には行かせないぜ！出てこいヤミラミ共！コイツらを八つ裂きにしろ！」
「ウィ～！」墓場の中からヤミラミが五人飛び出して来た。
「やれヤミラミ共！シャドークローだ！」ヨノワールの指示でヤミラミ達はシャドークローでゴウカザル達に襲いかかって来た。
「エルレイド！」
「任せろ！剣の舞いからリーフブレード！」エルレイドは剣の舞いで攻撃力を上げてからヤミラミ達にリーフブレードを連続で決めた。ヤミラミ達はあっという間に倒れた。
「・・・弱！？」
「マニューラ先輩の話しじゃヨノワールが一番厄介だって言ってたけど・・・何か拍子抜けね？」
「フッ！ヤミラミ共！」ヨノワールがヤミラミ達を呼ぶとヤミラミ達は立ち上がった。
「自己再生か・・・なるほど、こうやって持久戦に持ち込んで相手の体力を奪うって訳か・・・」
「やれ！」再びヤミラミ達がシャドークローで攻撃して来た。
「プラスル！マイナン！手助けを頼む！」

「ＯＫ♪」
「任して♪」
「「手助け！」」
「リーフブレード！」エルレイドはプラスルとマイナンに手助けを使ってもらいリーフブレードの威力を上げてヤミラミ達に決めた。
ヤミラミ達は倒れた。
「これなら自己再生で回復しきれないだろ！」
「ほう・・・ヤミラミ共を倒したか・・・なかなかやるじゃないか！」ヨノワールはヤミラミ達を倒されたのに余裕の態度でいる。
「あなたの部下は倒したのよ！その余裕は何？」
「俺の部下を倒した？ハッ！俺の部下はヤミラミ共で全員じゃないんだぜ？出てきな野郎共！」ヨノワールが呼ぶとまた別の墓場から今度は四人のポケモンが出てきた。
「ミカルゲ共！久しぶりに暴れるが良い！」ヨノワールが言うとミカルゲ達がギガインパクトで襲いかかって来た。
「皆避けろ！」ゴウカザル達はミカルゲの集団ギガインパクトを何とか回避する事が出来た。だが、プラスル・マイナン、ライチュウ・ムクホーク、エルレイド・ドサイドン、ゴウカザル・クレセリアと、皆バラバラに離れてしまった。
「フッ！狙い通りだな・・・」どうやら、皆をバラバラに離れさせるのがヨノワールの狙いだったようです。
「ミカルゲ共！殺れ！」ヨノワールの指示でミカルゲ達は攻撃を開始した。
「来るよプラスル！」
「解ってるわ！」プラスルとマイナンはミカルゲのギガインパクトを回避した。
「今度はこっちの番だ！プラスル！」
「ＯＫ！」プラスルとマイナンは互いに手助けをして技の威力を高めた。
「「１０万ボルト！」」プラスルとマイナンは１０万ボルトでミカ

ルゲを攻撃した。二人の攻撃は見事にヒットした。
「やった！」
「私達二人が一緒ならどんな相手にだって負けないわ！ねぇマイナン♪」
「もっちろん♪」その時、ミカルゲが起き上がって破壊光線で攻撃して来た。
「わっ！？」
「きゃっ！？」プラスルとマイナンは破壊光線の直撃は避けたが爆風で吹き飛ばされた。
「イテテテ・・・プラスル大丈夫かい？」
「う、うん何とか・・・あのミカルゲ、思ってたよりタフね・・・」
「そうだね・・・でも破壊光線を使ったから今は反動で動けない筈！反撃なら今だ！」
「うん！」プラスルとマイナンはミカルゲに向かってダッシュした。
「「手助け！」」再び互いに手助けで技の威力を高めた。
「「雷！！」」プラスルとマイナンはミカルゲに超至近距離で雷を決めた！これにはたまらずミカルゲは倒れた。
「今度こそ決まった！」プラスルとマイナンがミカルゲを一人倒した。その時ライチュウとムクホークはミカルゲのギガインパクトに対してブレイブバードとボルテッカーで迎え撃っていた。だが、ミカルゲの方がパワーが上だったようで二人は吹き飛ばされてしまった。
「くっ！？まさかパワー負けするなんて・・・」
「真っ向勝負は無理って事だな・・・なら攻め方を変えるまでだ！行くぞムクホーク！」二人はミカルゲに突っ込んで行った。ミカルゲは破壊光線をムクホークに放った。
「高速移動！」ムクホークは高速移動で破壊光線を回避した。その間にライチュウはミカルゲに近づいた。そしてライチュウは自分の尻尾をミカルゲにぶつけた。
「良し！ムクホーク！フェザーダンスを頼む！」

「解った！」ムクホークはフェザーダンスでミカルゲの攻撃力を下げた。ミカルゲは構わずギガインパクトを繰り出して来た。
「「高速移動！」」二人は高速移動で素早さを上げてギガインパクトを避けた。
「ムクホーク！もう一発だ！」
「任せな！フェザーダンス！」ムクホークはもう一度フェザーダンスを使ってミカルゲの攻撃力を更に下げた。ライチュウとムクホークはミカルゲが攻撃を仕掛けて来てはそれを回避してフェザーダンスなどの能力変化技でミカルゲの能力を下げる事を繰り返した。
「そろそろやるか！行くぜ！ボルテッカー！！」
「ブレイブバード！！」二人はボルテッカーとブレイブバードでミカルゲに突っ込んで行った。ミカルゲはギガインパクトで応戦したが攻撃力が下がっているので二人の攻撃を受けて吹っ飛んだ。
「ふぅ～・・・やっと倒せたか・・・」
「妙だな？俺達の攻撃を弾き返す程のやつがこれだけでやられるなんて・・・」
「それは俺がどくどくを奴に使ったからさ！」
「どくどくだって？一体いつ使ったんだ？」
「アイツに近づいた時に尻尾をぶつけただろ？その時だよ！」
「なるほどな。」その頃エルレイドとドサイドンは・・・
「リーフブレード！」
「メガホーン！」二人はミカルゲのギガインパクトに対してリーフブレードとメガホーンで対抗していた。
「くっ！凄い力だ！？」
「下がってろエルレイド！あれを使う！」ドサイドンは手のひらをミカルゲに向けた。
「解った！」エルレイドはミカルゲから離れた。
「くらえ！岩石砲！！」ドサイドンは手のひらから岩石を勢い良くミカルゲに放った。ミカルゲは吹っ飛んだ。
「どんなもんだい！」

「さすがチーム一の力持ちだな！」
「力比べならオイラは負けないさ！」エルレイドとドサイドンは一発でミカルゲを倒した。その時ゴウカザルとクレセリアの方もミカルゲを倒す事が出来ていた。ゴウカザル達は合流した。
「皆ミカルゲを倒す事が出来たみたいだな！さぁ、これでアンタ一人だな！降参するなら今のうちだぜ？」
「俺が降参？ハハハハハ・・・バカな事を言うな！」そう言うとヨノワールの身体から黒いオーラが現れた。
「本番はこれからだぜ！トリックルーム！」ヨノワールのトリックルームによってフロア全体の空間が歪み始めた。
「行くぞ！」ヨノワールが突っ込んで来た。ヨノワールはまずプラスルとマイナンに狙いを定めたようだ。
「シャドーボール二連弾！！」ヨノワールの二つのシャドーボールがプラスルとマイナンに向かって来た。
「この位の技なら簡単に避けれるさ！プラスルジャンプだ！」
「ＯＫ！」二人はシャドーボールをジャンプして回避した。
「さぁ、今度は僕達の・・・」
「貴様らに反撃などさせん！」いつの間にかヨノワールは二人の目の前にいた。
「ナイトヘッド！！」ヨノワールは二人にナイトヘッドで攻撃した。ナイトヘッドは自分のレベルが高ければ高い程威力が上がる技なのだが、ヨノワールのレベルは相当高いらしく物凄い威力だった。更にミカルゲとの戦闘で体力を消耗していた為に二人はあっという間に倒されてしまった！
「プラスル！！マイナン！！」
「コイツ！最大パワーのブレイブバードをくらえ！！」ムクホークはヨノワールに最大パワーのブレイブバードで突っ込んで行った。
「くらうかよ！」何とヨノワールは近くに倒れていた自分の部下のヤミラミを盾に使ってブレイブバードを防御した！
「なっ！？」

「雷パンチ！！」ヨノワールはムクホークに飛行タイプに効果抜群の雷パンチで攻撃した。ムクホークは倒れてしまった。「貴様！つじ切り！」エルレイドはトリックルームのおかげで何時もより速く動いてヨノワールに近づきゴーストタイプに効果抜群のつじ切りで攻撃した。

「おっと！」またしてもヨノワールは部下のミカルゲを盾に使って攻撃を防御した。

「シャドーパンチ！！」そしてすかさずヨノワールはシャドーパンチでエルレイドに反撃！

「くっ守る！」エルレイドは当たるギリギリのところで守るを使い何とか防御する事が出来た。

「くらえロックブラスト！！」ドサイドンは手のひらから小さい岩石を五発連続で撃ち出してヨノワールに攻撃した。だが、またヨノワールは自分の部下を盾に使って防御した。

「またか！？」

「黒い眼差し！！」ヨノワールは黒い眼差しをドサイドンに使って動きを封じた。

「気合いパンチ！！」ヨノワールは動けないドサイドンに渾身の一撃を決めた。

「ぐっ！？」

「さすがにタフだな・・・だが、これで終わりだ！冷凍パンチ！！」ヨノワールがドサイドンに冷凍パンチを繰り出そうとした時ライチュウがアイアンテールでそれを止めた。

「ライチュウ・・・助かったぜ！」

「動けるかドサイドン？」

「悪い・・・まだ奴の黒い眼差しが解けてないみたいで動けないんだ・・・」

「解った！ちょっと待ってろよ！すぐ動けるようにしてやるから！」ライチュウはそう言うとヨノワールに向かってアイアンテールで攻撃した。

「炎のパンチ!!」ヨノワールは炎のパンチでアイアンテールを打ち返した。
「まだまだぁ!」ライチュウは連続でアイアンテールを繰り出した。ヨノワールも炎のパンチで応戦した。
「コイツ!」ライチュウは勝負を決めようと大振りになってしまった。ヨノワールはその隙を見逃さなかった。
「もらったぁ!」ヨノワールの炎のパンチがライチュウにヒットした。
「がはっ!?」ライチュウは吹っ飛ばされた。
「ライチュウ!?」
「そろそろお前も殺られな!!」ヨノワールはまだ黒い眼差しのせいで動けないドサイドンに冷凍パンチを決めた。ドサイドンは倒れてしまった。ヨノワールは一人でチーム業火の四人を倒した。
「お前達の力はその程度か?」
「何だと?サイコカッター!」エルレイドはサイコカッターでヨノワールを攻撃した。
「ふん!」ヨノワールはミカルゲを盾に使った。「また自分の仲間を・・・お前!仲間を何だと思ってるんだ!?」ゴウカザルはヨノワールの行為に怒っていた。
「仲間?こいつらは仲間じゃねぇ!俺の戦闘を有利にする為のただの道具さ!」
「・・・あんたは最低な野郎だな!あんたみたいな奴は俺は一番大嫌いなんだ!!」怒ったゴウカザルはフレアドライブの炎を身に纏った。
「あんたは絶対許さない!マッハパンチ!!」ゴウカザルは炎の身に纏いながらマッハパンチをヨノワールに決めようとした。
「マッハパンチだと?バカめ!俺に格闘技が通用する訳が・・・」ヨノワールが言いかけた時、マッハパンチがヨノワールにヒットした。
「がはっ!?・・・バ、バカな!?何故俺に格闘技が!?」ヨノワ

ールは自分に効果が無い格闘技が決まった事に驚いていた。
「マッハパンチからインファイト!!」ゴウカザルは容赦なくヨノワールにマッハパンチのスピードを利用して超高速インファイトを決めた!ヨノワールは吹っ飛ばされて壁に激突した。
「あんたに俺の格闘が当たるのはこのフレアドライブの炎のおかげさ!この炎を身に纏いながら攻撃すれば格闘技が炎技に変化する。格闘技が効かない相手対策として俺が考えた戦法だ!」
(だけど、フレアドライブを維持しながら別の技を使うからかなり疲れるんだよな・・・)
「くっ!?・・・調子に乗るなよ・・・このサルがぁぁぁ!!」ヨノワールがゴウカザルにナイトヘッドを決めようとエネルギーを集めようとした時、ヨノワールは突然よろけだした。
「な・・・んだ!?急に・・・めまいが・・・」
「やっと効いてきたか・・・」ライチュウが言った。
「貴様・・・一体何を・・・!?」
「お前が炎のパンチで俺のアイアンテールとやりあった時だよ!お前が俺の技を弾く時にどくどくをアイアンテールと同時に使っていたのさ!」
「貴・・・様ぁぁ!?」
「ゴウカザル!後は任せたぜ!」
「おう!」ゴウカザルは拳に力を溜め始めた。
「これで終わりだぁ!!気合いパンチ!!!」ゴウカザルは最大パワーで気合いパンチをヨノワールに決めた!ヨノワールは倒れた。
「皆!」ゴウカザルは傷ついた仲間の所に向かった。
「皆、大丈夫か?」
「・・・大丈夫に見えるの?イテテ・・・」
「俺達はしばらく動けそうにない・・・俺達はいいから先に行け!」
「仲間を置いて行けるかよ!」
「・・・お前ならそう言うと思ったよ!だけど、今の俺達が一緒に行っても足手まといになるだけだ・・・心配すんなよ?動けるよう

になったらすぐに行くからよ・・・」「ムクホーク・・・解った。だけど、無理するなよ?」

「解ってるよ・・・」ゴウカザル達はムクホーク達を残して先に進んだ。チーム業火、残った人数四人。ゴウカザル、クレセリア、ライチュウ、エルレイド。

第二十二話チーム業火ＶＳ漆黒の闇幹部・ヨノワール！（後書き）

第二十二話完成です！

第二十三話チーム竜星ＶＳ漆黒の闇幹部・ユキメノコ！（前書き）

チーム竜星は暗い道の中を進んでいた。

第二十三話チーム竜星ＶＳ漆黒の闇幹部・ユキメノコ！

「暗いな～・・・皆大丈夫かい？」その時フライゴンの背中に誰かがぶつかった。
「ちょっとフライゴン！いきなり停まらないでよ！？」
「あっ！？ごめんミミロップ！」
「もう！これじゃ危なくてしょうがないわ！バシャーモ！アンタの炎で周りを照らしてよ！」
「何で俺だよ！？」
「アンタ以外に誰がいるのよ！」
「オイラに任せるっすよ！変身！デンリュウ！」メタモンはデンリュウに変身した。デンリュウの尻尾の先が光始めて周りを照らした。
「どうっすか？」
「周りが良く見える！ありがとうございますメタモンさん！」
「良して下さいよさん付けは！呼び捨てで構わないっすよ！」
「そうですか？じゃあ・・・ありがとうございます！メタモン！」
「へへ！良いって事っすよ！」デンリュウに変身したメタモンに誘導してもらってフライゴン達は先に進んだ。
「・・・ねぇ、何か寒くない？」
「そういえば・・・あっ扉が見えて来たよ！」フライゴンが指差した先に扉があった。
「この先から冷気が来てるみたいっすね・・・」
「・・・皆・・・開けるよ！」フライゴンはゆっくりと扉を開けた。
「寒！？何なのよここは！？辺り一面氷だらけじゃない！」そこのフロアは周りが氷で覆われていた。
「・・・これって・・・氷の像？しかもこんなにたくさん・・・」
フライゴン達の周りにはポケモンの氷の像がたくさんありました。
「どう？アタイのコレクションは？皆良い男だろ～？」その時奥の方から誰かの声が聞こえて来た。フライゴン達は身構えた。

「誰ですか!?」
「アタイはユキメノコだよ!あら?良く見たらアンタも良い男じゃないか!アタイのコレクションに加えようかしら?」
「コレクションにって・・・どういう意味ですか?」
「アンタを凍り漬けにしてここの奴らみたいに飾ってやるって事よ!後一人で百人なのよね。」
「えっ!?まさかこの氷の像みんな!?」
「そうよ!さぁ、アンタも凍り漬けになりな!冷凍ビーム!!」ユキメノコはフライゴンに冷凍ビームを放った。その時グレイシアが前に出てきた。
「グレイシア!?」
「下がってて!」グレイシアは冷凍ビームを受けた。だが!
「お返しよ!ミラーコート!!」グレイシアはミラーコートを使って冷凍ビームを倍返しでユキメノコに放った!
「影分身!」しかし、ユキメノコは影分身でこれを回避した。
「大丈夫フライゴン?」
「う、うん!ありがとうグレイシア!」
「アタイの冷凍ビームを倍返しで返すなんてね・・・アンタ結構やるのね?」
「あなたに誉めてもらっても嬉しくないわね!」「生意気ね・・・出てきな!アタイのかわいい子分達!」ユキメノコが呼ぶと奥からユキノオー・トドゼルガ・マンムー・パルシェン・オニゴーリがやって来た。
「アンタ達!あいつらをやっちまいな!」
「ウ~ス!」ユキノオー達が向かって来た。
「来るよ皆!」
「解ってるわよ!あのユキノオーは私に任せな!」ミミロップがユキノオーに向かって行った。
「ちょっとミミロップ!?・・・もうしょうがないなぁ!皆、ダブルバトルのペアでやるよ!メタモンはスターミーとペアを組んでね

！」

「了〜解っす！」フライゴン・バシャーモ、スターミー・メタモン、ライボルト・マナフィとダブルバトルのようにペアを組んでミミロップに続いた！

「くらいな！」ミミロップは何処から出したのか黒い鉄球を思いっきりユキノオーにぶつけた！

「どうよ！」

「ウ〜ス・・・」ユキノオーは黒い鉄球を受け止めていた。

「あっ！こら離しなさいよ！」

「ギガインパクト！」ミミロップの黒い鉄球をユキノオーが掴んでいる間にマンムーがギガインパクトでミミロップに突っ込んで来た。

「「火炎放射！」」フライゴンとバシャーモの火炎放射がマンムーに直撃！マンムーは吹き飛ばされた。

「ミミロップ！油断しちゃダメだよ！」

「こんのぉぉぉ！！」ミミロップはユキノオーを黒い鉄球ごと投げ飛ばした！

「まだまだぁ！」ミミロップは投げ飛ばしたユキノオーを追い掛けた。フライゴンの言葉は全く聞いてないようだ。

「・・・凄いな・・・相変わらず・・・」

「フライゴン！次が来るぞ！」フライゴンが振り向くとマンムーとオニゴーリが二人で冷凍ビームを撃とうとしていた。

「フライゴン！火炎放射行くぞ！」

「うん！」

「「冷凍ビーム！」」

「「火炎放射！」」ダブル冷凍ビームとダブル火炎放射がぶつかり合った。技の威力は互角だ！

「フライゴン！もっとパワーを上げろ！」

「解ってるよ！」二人は火炎放射の火力を上げた。少しずつ相手の冷凍ビームを押し返していく。

「良し！もう少しだ・・・」その時二人の頭上から何かが降って来

た。
「な、何だ!?」
「えぇ!?」確認するとそれは何とユキノオーだった!二人はユキノオーにのしかかられてしまった。その為火炎放射を撃てなくなり冷凍ビームが二人に向かってきてしまった!
「やばい!?」
「うりゃぁぁぁ!!」その時ミミロップがやって来て炎のパンチをユキノオーに決めた。ユキノオーは吹き飛ばされて冷凍ビームを受けて、更にはマンムーとオニゴーリにぶつかった。
「まだこれで終わらないわよ!!」ミミロップはユキノオー達に向かって走って行った。
「・・・アイツと一緒に戦って良い事なんか一つも無いな・・・」
「ハハハ・・・」その時ライボルト・マナフィペアはトドゼルガと戦っていた。
「１０万ボルト!」
「吹雪!」ライボルトの１０万ボルトはトドゼルガの吹雪で防御されてしまった。
「今だマナフィ!」
「は～い♪渦潮!」マナフィは渦潮を使ってトドゼルガを渦の中に閉じ込めた!
「良し、マナフィ!今のうちに次の攻撃の準備だ!」
「解ったよ!」
「充電!」
「雨乞い!」ライボルトは次に使う電気技の威力を倍にする為に充電を開始して、マナフィは自分の水タイプの技の威力を上げる為雨乞いでフロアの中に雨を降らせた。その時トドゼルガは何とか渦潮から脱出して二人に攻撃をしようとエネルギーを集めていた。
「まずいな・・・まだ充電が終わってねぇってのに!」ライボルトはまだ充電が完了していなかった。
「くらえ!破壊光線!」トドゼルガは最大パワーの破壊光線を放っ

た！
「くそ！間に合わない・・・」
「水の波動！！」その時マナフィがライボルトの盾になる形で前に出てきて水の波動で破壊光線に対抗した。だが、技の威力は遥かに破壊光線が上なのでどんどん水の波動が押されていく。そして遂に水の波動が打ち消され、破壊光線がマナフィに直撃してしまった！
「うわぁぁぁ！？」
「マナフィ！？」その時ようやくライボルトの充電が完了した。
「よくもマナフィを！くらえ！雷！！」ライボルトは雷をトドゼルガに放った！充電からの雷なので威力は超強力だ！トドゼルガは倒れた。
「やったねライボルト♪」その時破壊光線を受けた筈のマナフィが元気良く言って来た。
「うお！？お前、破壊光線を受けたんじゃ？」
「忘れたの？僕には眠るってとっておきの技があるんだよ！」眠るとは名前の通り、眠って自分の体力を完全に回復する技だ。更にマナフィには特性潤いボディがあり雨が降ってる時だと自分に掛った状態異常を瞬時に回復するため眠ってもすぐに起きれるのだ！
「確かにそうだけど、あまり心配させんなよな？」
「は～い♪」その頃スターミー・メタモンペアはパルシェンとバトルしていた。
「氷柱針！」パルシェンの氷柱針がメタモンに向かって来た。
「変身！テッカニン！高速移動！」メタモンは素早さのあるテッカニンに変身して更に高速移動でスピードを上げて氷柱針を回避した。
「・・・」パルシェンがメタモンに気を取られてる隙にスターミーは１０万ボルトでパルシェンを攻撃した。
「高速スピン！」だが、パルシェンは高速スピンを使い１０万ボルトを回避してそのままの勢いでスターミーに突っ込んで来た！
「・・・！」
「危ないっす！変身、トリデプス！鉄壁！！」メタモンは防御力が

高いトリデプスに変身して更に鉄壁で防御力を上げて高速スピンを受けてスターミーを守った！

「お返しっすよ！メタルバースト！！」メタモンは受けたダメージを１．５倍にして相手に返すメタルバーストで反撃！パルシェンは少し吹っ飛ばされた。

「大丈夫っすか？」

「・・・」スターミーは無言だったが頷いたように見えた。

「大丈夫みたいっすね？んじゃ、反撃行くっすよ！変身、デンリュウ！１０万ボルト！！」デンリュウに変身したメタモンとスターミーは１０万ボルトでパルシェンを攻撃！二人の攻撃はパルシェンを直撃した！パルシェンは倒れた。

「やった！やったっすねスターミー！」

「・・・」スターミーはやっぱり無言だった。

「・・・何か調子狂うっすねぇ・・・」

「ぶっとべぇぇぇ！！」その時背後からミミロップの声が聞こえて来た。二人が振り向くと・・・「えぇ！？」何とユキノオー・マンムー・オニゴーリ三人がミミロップにぶっとばされて二人の所に向かって来た！二人は当たるギリギリのところで何とか避ける事が出来た。三人は壁に激突した！「危ないっすよミミロップさん！？」

「あら？そこにいたあなた達がいけないんでしょ！それより、あんた達気をつけなよ？後ろ見てみな！」

「へ？」二人が恐る恐る振り向くとユキメノコがいた！

「げげ～！？」メタモンはテッカニンに変身し、スターミーを連れて大急ぎでフライゴン達の所まで逃げた。

「ハァ・・・全くうちの男共と来たら情けない・・・誰も倒せないのかい！」ユキメノコは怒っていた。その時ユキメノコの身体から黒いオーラが現れた！

「男に頼るあんたが悪いんだろ？あんたを倒してさっさと先に行かせてもらうよ！・・・うらぁぁぁ！！」ミミロップは黒い鉄球をユキメノコめがけて投げ飛ばした！

「アタイにそんな物投げつけるんじゃないよ！」ユキメノコの周りで突然吹雪が発生した！黒い鉄球は吹雪に触れた途端凍りついてしまい、ユキメノコが軽く叩くと簡単に砕けてしまった！
「アンタも凍りついておしまい！冷凍ビーム！」ユキメノコの冷凍ビームがミミロップに向かって来た！
「冗談じゃないわよ！岩砕き！！」ミミロップは地面の岩を砕いて破片を冷凍ビームを防ぐ盾に使った！
「そんな岩でアタイの攻撃は止められないよ！」ユキメノコの言う通り冷凍ビームは岩を弾いてそのままミミロップに向かって行った！
「そんな！？」
「危ない！」ミミロップに当たりそうになった時フライゴンがミミロップを助けた。
「フ、フライゴン！？」
「間に合って良かった！怪我はないかいミミロップ？」
「ふ、ふん！あんたに助けてもらわなくてもあれぐらい・・・ちょっとあんた！？翼が！？」フライゴンの翼はミミロップを助ける時に冷凍ビームを避けきれず凍りついていた！
「あぁ・・・僕なら大丈夫だよ！それよりもミミロップが無事で良かったよ！」
「何で・・・私を助けなければあんたの翼は・・・」
「仲間を助けるのは当たり前でしょ？」
「・・・バカ・・・」
「アタイの前で何やってんだよ！吹雪！！」ユキメノコは容赦なく二人に吹雪で攻撃した！フライゴンは翼が凍りついていてうまく動けない！
「ミミロップだけでも逃げて・・・」
「冗談じゃないわよ！」何とミミロップはフライゴンを担いで吹雪を跳び跳ねるで回避してしまった！
「これで借りは返したわよ！ほら！さっさとその凍った翼を溶かしなさい！」

「う、うん！火炎放射！」フライゴンは火炎放射で凍った翼を溶かした。
「さぁ、とっととあの嫌な女を倒して先に進むわよ！」
「アタイは簡単にはやられないわよ！」
「・・・悪いけど、簡単にやられてもらうわ！シャドーボール！！」
その時ユキメノコは突然背後からシャドーボールを受けた。
「駄目押しでアイアンテール！」ユキメノコはアイアンテールを頭に受けた！ユキメノコは倒れた。
「私の存在に気づかないなんて・・・よほどミミロップが気に入らなかったのね！」
「グレイシア！今まで何処にいたんだい？」
「ずっといたわよ？ユキメノコの後ろに。」
「えっ！？」
「全然気付かなかったっす・・・」
「まぁユキメノコは倒したんだから良いでしょ？それよりここにいるポケモン達の氷を溶かしてあげなきゃ！」
「そうだね！」
「でもよ・・・この数はちょっと多すぎるだろ・・・全部溶かすのにどれ位時間かかるよ？」
「文句言わないのバシャーモ！ほらさっさとやる！」
「解ったよ！フライゴンにメタモンも手伝ってくれよ！」
「うん！」
「了～解！」メタモンは炎タイプのヘルガーに変身してフライゴンとバシャーモと一緒に火炎放射で凍り漬けのポケモン達を氷から解放した！
「終わった～・・・」
「これで９９人全員っすね・・・」
「疲れてるかもしれないけど先を急ぐよ皆！」フライゴン達が先に進もうとしたその時。
「待ってくれ！」誰かがフライゴン達を呼び止めた。

「あなたは？」
「俺はアグノム様のガーディアン、ギャラドスだ！俺も一緒に連れていってくれ！」
「アグノムって・・・ダークライに連れ去られたポケモンの事だよね？」
「なっ！？アグノム様は捕まってしまったのか！？」「うん・・・今大急ぎで助けに行くところだったんだよ！解った！一緒に行きましょう！」
「すまない！」フライゴン達はギャラドスを加えて先に進んだ。チーム竜星、全員突破！

第二十三話チーム竜星ＶＳ漆黒の闇幹部・ユキメノコ！（後書き）

第二十三話完成です！

第二十四話チームブラストＶＳ？？？（前書き）

チームブラストは暗い道の中をリザードンの炎で照らしながら進んでいた。

第二十四話チームブラストＶＳ？？？

「マニューラ、この先にある幹部の間はお前がいた所なのか？」
「・・・間違いない・・・俺が残した目印があるからな。」壁にはマニューラの爪でひっかいた跡があった。
「じゃあ・・・この先にいるのは・・・バクフーンか？」
「恐らくな・・・それにラティアスもいるだろう・・・」
「ラティアス・・・」
「扉が見えて来たぞ！」リザードンが指差す先には幹部の間に続く扉があった。
「・・・開けるぞ！」マニューラは扉を開けた。中には何も無く寂しい感じがする所でした。
「誰もいない？」
「・・・伏せろ！」マニューラが皆に指示した時、破壊光線が飛んできた！リザードン達はマニューラのおかげで何とか避ける事が出来た。
「今のは破壊光線か？凄い威力だったぞ！」
「うわ！？また来たよお兄ちゃん！？」今度は砂がリザードン達に向かって来た！
「エアスラッシュ！」リザードンがエアスラッシュで砂を吹き飛ばした。「この砂・・・何処かで見たような・・・」
「・・・侵入者発見・・・排除する・・・」奥から誰かがやって来た。
「嘘だろ・・・バンギラスじゃないか！？」
「まさかバンギラスまでダークライに支配されたのか？」その時、バンギラスの後ろから二人のポケモンがやって来た。
「・・・敵発見・・・排除します・・・」
「・・・」バクフーンとラティアスだ！
「ラティアス！！」

「バクフーン・・・」二人が来たと同時に地面から闇のゲートが出現した。中からは何とダークライが現れた！
「なっ！？何故ここにダークライが！？」
「・・・行け。」ダークライがそう言うとバクフーン・バンギラス・ラティアスがリザードン達に向かって来た！
「ラティアスは俺が元に戻してみせる！！」
「バクフーンは・・・俺が必ず止める！皆はバンギラスとダークライを頼むぞ！」ラティオスはラティアスに、リザードンはバクフーンに向かって行った！
「僕はバンギラスを何とか押さえるからピカチュウとマニューラ、それにエンペルトはダークライを頼むよ！」
「解った！あの野郎を倒してこの戦いを終らせてやるぜ！」ピカチュウ・マニューラ・エンペルトはダークライに向かって行き、ラグラージはバンギラスに向かって行った！
「アタシは・・・何も出来ないの？・・・いえ、アタシにも何か出来る事を見つけなきゃ！」ピチューはピカチュウ達の後を追った。
「竜の波動！」ラティアスは向かって来たラティオスに竜の波動で攻撃した！
「サイコキネシス！」ラティオスはサイコキネシスで竜の波動を壁の方にぶつけた。
「止めろラティアス！俺だ！兄ちゃんだ！」
「・・・水の波動！」ラティアスはラティオスの言葉を無視して水の波動で攻撃してきた！
「くっ！？」ラティオスはギリギリで水の波動を回避した。
「ラティアス！！」その時リザードンもバクフーンを元に戻そうと必死だった。
「火炎放射！」バクフーンの火炎放射がリザードンに放たれた！
「うわっ！？」リザードンはこれを何とか避ける事が出来た。だが！
「電光石火！」バクフーンは電光石火をリザードンに決めた！リザードンは吹っ飛ばされた！

「ぐっ!?・・・相変わらず速いなバクフーンは・・・ヒノアラシの頃からお前は足が速かったよな?」

「火炎放射!」バクフーンはすかさず火炎放射でリザードンを攻撃!火炎放射はリザードンに直撃した!

「・・・この火炎放射も、良く俺とどっちが強い炎を出せるか競いあったよな・・・覚えてるか?」

「・・・・」

「・・・覚えてるって・・・言ってくれよ・・・なぁ、バクフーン!!」・・・・

ザードンもフレアドライブで突っ込んで行き、そしてぶつかり合った！
「・・・！」
「このフレアドライブは俺とお前にとって大切な技だ・・・そうだよな？バクフーン！」その時闇の中にいたバクフーンは・・・
「・・・何だ？何か急に周りが明るくなったぞ？」真っ暗だった闇がどんどん明るくなっていく・・・その時バクフーンの頭上から誰かがやって来た。
「・・・バクフーン」
「リザードン！何でここにいるんだ？」
「迎えに来たんだよ！ほら、皆の所に帰るぞ！」リザードンはバクフーンに手を出した。バクフーンはしっかりとリザードンの手を握りどんどん空に昇って行く。外の世界では・・・
「・・・うぅ」バクフーンの身体から黒いオーラがどんどん出ていく！
「バクフーン！」
「・・・リザードン？」
「元に・・・戻ったんだな！たくっ心配させんなよな！・・・でも・・・お帰り、バクフーン！」
「・・・ただいま、リザードン！」バクフーンは完全にダークライの支配から解放された！
「・・・で、今どういう状況だこれ？」
「今はな・・・」リザードンはバクフーンに現在の状況を説明した。
「・・・なるほど、大体解ったよ！んじゃ、ダークライをとっととぶっ倒すか！」
「おう！」バクフーンとリザードンはダークライの所に向かった。
「アイアンテール！」
「切り裂く！」
「ドリルくちばし！」ピカチュウはアイアンテール、マニューラは切り裂く、エンペルトはドリルくちばしでダークライを攻撃した。

「そんなもの我には通用しないぞ！悪の波動！」ダークライは普通より強力な悪の波動で三人を吹っ飛ばした。
「弱いな・・・」
「誰が弱いだって？」ダークライが声のする方を見るとピカチュウが攻撃する体制に入っていた。
「気合いパンチ！！」
「ふん」ピカチュウの渾身の一撃だったが、ダークライは片手で気合いパンチを受け止めてしまった！
「なっ！？」
「まだこっちもいるぞ！ダークライ！！」マニューラがダメージを受けた後に使うと威力が倍になるリベンジをダークライに使った！
「あまい！」ダークライはピカチュウをマニューラに投げつけた。
「がはっ！？」マニューラとピカチュウは吹っ飛ばされた！
「これでもくらいなさい！ハイドロカノン！！」エンペルトは水タイプ最強技でダークライを攻撃した！
「闇よ！！」ダークライは地面から闇のエネルギーで作り出した壁を出してハイドロカノンを防いでしまった！
「そんな・・・」
「それで終わりか？」
「電気ショック！」ダークライは背中に電気ショックを受けたがダメージはなかった。
「なんだこのレベルが低い攻撃は？」
「あっ・・・」ピチューが出した電気ショックだった。ダークライはゆっくりとピチューに近づいて行く。
「ピチュー・・・早く逃げろ！！」ピカチュウが必死に言うがピチューは恐怖で身体が動かせないでいた。
「我に攻撃するとは、良い度胸だ・・・死ね！」ダークライがピチューに攻撃しようとしたその時！
「「火炎放射！」」二つの火炎放射がダークライに直撃した！
「えっ？」

「大丈夫かピチュー？」ピチューが振り向くとリザードンとバクフーンがいた。
「バクフーン・・・兄ちゃん・・・」
「よっ♪帰って来たぜ！こいつは俺とリザードンに任せな！行くぜリザードン！」
「解ってるって！ピチュー、お前は三人と一緒にラティオスとラグラージの手助けをしてくれ！」
「う、うん！任せて！」リザードンとバクフーンはダークライに向かって行った。そしてピチューはピカチュウ達と一緒にラティオスとラグラージの所に向かいました。
「・・・我の闇の支配を解くとは・・・お前が初めてだ・・・さすが奴の息子だな」
「無駄話は抜きだ！さっさとお前を倒してやる！ブラストバーン！！」バクフーンはいきなり大技のブラストバーンでダークライを攻撃した！
「悪の波動！！」ダークライはこれに対して悪の波動で迎え撃った！二つの技はぶつかり合い大きな爆発を起こした！
「ダークホール！！」ダークライはすかさず攻撃！黒い球体のエネルギーを無数に飛ばして来た！
「げっ！？」リザードンはバクフーンを抱えて上昇し、ダークホールを回避した。
「サンキュー、リザードン！助かったよ！」
「お前なぁ、いきなりブラストバーンを使うか普通！？確かに強力な技だけど命中させるのが難しいし、一発撃つとしばらく反動で動けなくなるんだから少しは考えろよ！」「悪い悪い！そんなに怒るなって！次からは気をつけるからさ！」
バクフーンとリザードンがダークライと戦っている時、ラティオスはまだラティアスを元に戻せずにいた。
「ミストボール！」
「守る！」ラティアスのミストボールをラティオスは守るを使って

これを防御した。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」
「・・・」ラティオスは体力が限界に近づいていた。肩で息をしているラティオスに対しラティアスは息一つ乱してない。
「・・・いつの間に・・・こんなに強くなったんだろうな・・・ラティアス・・・」
「・・・」
「昔は泣き虫で・・・いつも兄ちゃんを頼ってたお前が・・・もう兄ちゃんがいなくてもお前は大丈夫だな・・・最後にお前に出来る事は・・・ダークライの支配からお前を解放してやる事・・・ふぅ・・・やるか!」ラティオスは何か決意したようだ。ラティオスは目を閉じて集中し始めた。すると、ラティオスは眩い光に包まれていく。ラスターパージとは違う光だ。
「・・・待ってろよ・・・今、助けに行くからな!」ラティオスはラティアスに突っ込んで行った!ラティアスは竜の波動で攻撃するが、光が全ての攻撃を弾く!そして、ラティアスはラティオスの光に包まれた。
「・・・!」
「ラティアスの中にいる闇よ!出ていけ!!」光が更に強く輝くとラティアスの身体から黒いオーラがどんどん出ていく!『・・・ラティアス・・・ラティアス』
「・・・うぅ・・・兄・・・さん?」
『元に戻ったんだな・・・良かった・・・ラティアス』
「ここは何処?私今まで何をしていたの?」
『お前はダークライに操られていたんだ・・・でも、もう大丈夫・・・』
「・・・兄さん!?どうしたのその身体!?」ラティオスの身体はまるで水晶のように変わっていた。『・・・お前を助ける方法がこれしか思いつかなくてな・・・もうすぐ・・・お前と話せなくなるな・・・』

「待ってよ・・・嫌よ!兄さんがいなくなるなんて私嫌だ!!」
『・・・お前なら大丈夫だ・・・兄ちゃんは・・・ずっと見守ってるよ・・・』ラティオスの身体がどんどん形が変わっていく・・・
「兄さん!!」
『・・・ラティ・・・ア・・・ス・・・』ラティオスの意識は完全に消えた・・・その時、ラティオスの身体は丸い宝石に変わってラティアスの所にやって来た。
「心の・・・しずく・・・兄さん・・・兄さーーーん!!!」ラティアスは心のしずくになってしまったラティオスを強く抱きしめる。
「・・・兄さん・・・私、負けないよ・・・必ずダークライを倒すから・・・」
「うわぁぁぁ!?」
その時ラグラージがラティアスの所まで飛ばされて来た!
「サイコキネシス!」
ラティアスはサイコキネシスでラグラージを助けた!
「大丈夫ですか?」
「ラティアス!?元に戻ったんだね!」
「一体何があったんですか?」
「あれだよ・・・」ラグラージが指差す先には暴れまわるバンギラスがいた。マニューラやピカチュウやエンペルトが必死に止めようとしている。「バンギラスさん・・・解りました!」ラティアスはそう言うとバンギラスの所に向かった。
「ラティアス?何をするの?」
「バンギラスさんを元に戻します・・・皆さんは下がって下さい!」
ラティアスに言われてピカチュウ達は下がった。
「・・・兄さん、私に・・・力を貸して!」ラティアスが集中すると心のしずくが輝き始めた!
「バンギラスさんの中にいる闇よ!出ていって!!」強い光がバンギラスを包みこんだ!すると、黒いオーラがバンギラスの身体からどんどん離れていく!黒いオーラが抜けきると光が消えた。

「・・・あれ？俺はこんな所で何してんだ？」
「凄い！本当にバンギラスが元に戻った！ラティアスちゃん、一体何をしたんだい？」
「兄さんの力を借りただけです。」
「ラティオスの？どういう事？」
「ラティアス・・・まさか、それはラティオスなのかい？」
「・・・はい。」
「ラグラージ、どういう事だよ？」
「心のしずくはラティオスなんだよ！自分の命を犠牲にラティアスを元に戻したんだね・・・」
「・・・マジかよ・・・」その時、奥の方で爆発が発生した！
「な、何！？」
「そうだった！今奥でリザードン兄ちゃん達がダークライと戦ってるのよ！」
「何ですって！？皆、私達も行きましょう！」ラティアス達は急いでリザードン達の所に向かった。
「リザードン！合わせ技行くぜ！」
「ＯＫだ！エアスラッシュ！！」
「スピードスター！！」リザードンのエアスラッシュにバクフーンのスピードスターが合体してダークライに向かって行く！しかし、ダークライは１０万ボルトを使ってこれを打ち消した！
「遠距離がダメなら接近戦だ！電光石火！！」
バクフーンは電光石火でダークライに突っ込んで行った！
「悪の波動！！」
ダークライは悪の波動でバクフーンを攻撃した。
「おっと！」バクフーンはこれを簡単に回避してダークライの周りをぐるぐる走り始めた。
「何をする気だ？」
「へへ、今に解るさ！」バクフーンは背中の炎の火力を上げた。すると、少しずつバクフーンの姿が歪み始めた。

「そろそろ行くぜ！！」その瞬間バクフーンの姿が消えた！
「何！？一体何処に？」
「ここだぁぁぁ！！」
ダークライが振り向くとすでにバクフーンが火炎車で目の前まで来ていた！火炎車がダークライに直撃して、ダークライは空中に吹き飛ばされた！
「リザードン！」
「待ってたぜ！」空中にはリザードンが待ち構えていた！
「くらえ！オーバーヒート！！」リザードンは最大パワーでオーバーヒートをダークライに当てた！ダークライは地面に叩きつけられオーバーヒートの炎に包まれた！
「よっしゃ！ナイスだリザードン！」
「お前もな！」バクフーンとリザードンはハイタッチした。
「リザードンさん！」
その時ラティアス達がやって来た。
「ラティアス！？元に戻ったのか？」
「はい、兄さんのおかげで・・・あれ？バクフーンさん？」
「よっ♪俺もリザードンのおかげで戻ってこれたんだ！」
「そうだったんですか！・・・そういえばダークライは？」
「奴なら俺とリザードンで倒したぜ！ほら！」バクフーンはダークライが倒れている所を指差したが、そこにはダークライはいなかった。
「あれ！？アイツ何処に行った！？」
「ククク・・・貴様は本当に我を倒したと思っているのか？あまいな・・・」
「何処だ！？何処にいる！」
「貴様が倒したのは我が分身だ！我はもっと奥のフロアにいる・・・我を倒したければ来るが良い！待っているぞ・・・ククク、クハハハハ！」ダークライの声が聞こえなくなった。
「奥に来いってか・・・行ってやるさ！行こうぜ皆！」

「ちょっと待った！一体何がどうなってるのか説明してくれよ！訳が解らん！」
「説明なら行きながら僕がするよバンギラス！だから行こう！」
「わ、解った！解ったから引っ張るな！？自分で歩けるからよ！」
バクフーン達は急いで奥のフロアに向かいました。
チームブラスト、バクフーン・ラティアス帰還。ラティオス、心のしずくに変化。

第二十四話チームブラストＶＳ？？？（後書き）

第二十四話完成です！やっとバクフーンが帰って来ました！しばらく主人公不在が続きましたが次からはちゃんと主人公がいますよ！

第二十五話ダークライの野望（前書き）

何とかバクフーン達を元に戻す事が出来たリザードン達は更に奥の方に進んで行った。

第二十五話ダークライの野望

「・・・俺があの黒い野郎に操られていた!?」
「そうだよ。」
「クソ!あの野郎、次に会ったら絶対ぶっとばしてやる!!」バンギラスはかなり怒っていた。
「なぁリザードン、さっきから聞きたかったんだけどさ・・・何でマニューラが俺達と一緒にいるんだ?」
「あぁ言って無かったか?実はマニューラはポケモンレンジャーでずっと漆黒の闇を調べる為に潜入調査してたんだってさ!」
「ふ~ん・・・ってえぇ!?マジっすか!?」
「マジっす。」
「はぁ~!人は見かけによらないなぁ・・・あっ!皆!扉が見えて来たぞ!」バクフーンが指差す先には確かに扉があった。バクフーンは扉を勢い良く開けた!
「うわ!?広!?」
「まるでどっかの城の中みたいだな・・・」そこのフロアはかなり広く例えるなら劇場版ポケットモンスターミュウツーの逆襲に出てくるミュウツーの城の中のような感じだ。そのフロアの中心には・・・
「・・・来たか・・・」ダークライがいた。ダークライの後ろにはアグノム・ユクシー・エムリットもいた。
「アグノム!」
「ユクシー様!」
「・・・」バクフーン達の呼びかけにアグノム達は答えなかった。
「無駄だ・・・すでにこいつらは我の言いなりだ!ククク・・・もうすぐだ・・・もうすぐ我の望みが叶うのだ!」そう言いながらダークライは手に持ってる物をバクフーン達に見せた。
「何だあれ?」

「あれは・・・まさか赤い鎖!?」
「そうだ!こいつらを操って作らせた物だ!これを使えば時の神ディアルガと空間の神パルキアを呼び出し、意のままに操る事が出来るのだ!そして我はこの世界の支配者になる!ククク・・・クハハハハ!」
「貴様の思い通りになると思うな!高速移動から切り裂く!!」マニューラは高速移動で一気にダークライに近づいて切り裂くで攻撃した!だが、ダークライに腕を掴まれてしまい切り裂くは直撃しなかった。
「くっ!?」
「ククク・・・マニューラよ、貴様では我を倒す事は出来んぞ!」
「だったら俺ならどうだ?マッハパンチからインファイト!!」その時ゴウカザルが現れ、ダークライにマッハパンチのスピードを利用した超高速インファイトをダークライに決めた!
「ゴウカザル!」
「よう!久しぶりだなバクフーン!」
「ゴウカザル、俺達を置いて先に行くなよな?」別の扉からライチュウ達がやって来た。
「遅いぜお前ら!」
「遅いって言われてもなぁ・・・なっ!?ゴウカザル!後ろ!?」
ライチュウに言われてゴウカザルが振り向くと倒したと思ったダークライが立ち上がっていた!
「何か・・・したか?」
「なっ!?」
「伏せてろゴウカザル!波動は我にあり・・・波動弾!!」ゴウカザルが伏せた時、波動弾がやって来てダークライに直撃した!皆が波動弾が放たれた方を見るとチームメタルがいた!
「すまないルカリオ!」
「油断するな!まだ奴は倒れていない!早くそこから離れろ!」ルカリオに言われマニューラとゴウカザルはその場から離れた。波動

弾が直撃した事によって発生した爆煙が晴れるとルカリオの言う通りダークライは倒れていなかった。
「貴様らの技など我には効かぬ！」
「ならこれならどうです？竜星群！！」ダークライに無数のエネルギー弾が隕石の如く襲いかかり、全てダークライに直撃した！
「フライゴン！」
「間に合いましたね！お久しぶりですバクフーンさん！」チーム竜星も合流した。これで全チームが揃った！
「ククク・・・だから言ったであろう！我には効かぬと！」竜星群は確かに直撃したのだが、ダークライには傷一つついてない！
「そんな！？最大パワーの竜星群だったのに！？」
「どうなってるんだ？」
「・・・神速！」
突然ルカリオが神速を使いダークライに一気に近づいた！
「くらえ！高速ボーンラッシュ！！」ルカリオは神速で素早く動きながらボーンラッシュの連打を決めた！だが、ダークライには一切ダメージがない！
「やはりか！」ルカリオはダークライにダメージを与えられない理由が何か解ったようだ。ルカリオは再び神速を使い、ダークライから距離をとった。
「奴はバリアのようなものを身体に纏ってるようだ・・・それが私達の攻撃を全て弾いてしまってるんだ！」
「ほう・・・さすがはバトルジムのリーダー、良く気づいたな？だが、気づいたところでどうする事も出来まい！・・・そろそろ我は行くとするか。後はお前達に任せるぞ？」
「はい・・・ダークライ様・・・」アグノム・ユクシー・エムリットにバクフーン達の相手をさせてダークライは別のフロアに行こうとした。
「行かせるか！行くぞリザードン！」
「解ってる！」バクフーンとリザードンはダークライを追い掛けた！

「貴様らには特別な相手を用意してある!そいつらに相手をしてもらえ!来い!」バクフーンとリザードンの前に突然闇のゲートが現れた!ゲートから三人のポケモンが現れた。そのポケモンとは・・・
「嘘だろ・・・何で・・・父さんと母さんが・・・」
「・・・母・・・さん・・・」そのポケモンは何とバクフーンの母親とリザードンの父親のジュカインと母親のメガニウムだった!
「ククク・・・お前達は自分の親を倒せるかな?ククク・・・クハハハハ!!」ダークライは笑いながらアジトの最上階に向かって行った。
「母さんが・・・生きてた!」
「バクフーン!今はダークライを追い掛けよう!」リザードンとバクフーンが追い掛けようとしたらバクフーンの母親が行く手を遮った!
「・・・行かせない・・・行きたければ・・・私を倒せ・・・」
「母さん・・・」
「・・・来ないのか?・・・ならば・・・こちらから行く・・・電光石火!」バクフーンの母親が電光石火で攻撃して来た!バクフーンはあまりの速さに回避出来なかった。
「くっ・・・」
「バクフーン!?大丈夫か?」
「あ、あぁ!だけどどうすれば良い?母さん達を攻撃何て出来ない!」
「解ってるさ!何とか母さん達を攻撃せずに先に進めれば良いんだが・・・」
「なら俺に任せな!」その時二人の所にピカチュウがやって来た。
「俺の電磁波で麻痺させて動けなくさせれば問題ないだろ?あの三人みたく!」ピカチュウが指差した先にはアグノム・ユクシー・エムリットがピカチュウの電磁波を受けて麻痺して動けなくなっていた!
「いつの間に・・・」

「ダメージを与えずにやるにはこれしか方法が無いしな！それに時間が無いだろ？さっさとやるぜ！」ピカチュウは高速移動で素早く動き、まずメガニウムに向かって行った。
「電磁波！」ピカチュウはメガニウムに電磁波を決めた！
「良し！これで麻痺して動けなくなった筈・・・」
「つるのムチ！」だが、メガニウムは何事もなかったかのようにつるのムチでピカチュウを攻撃した。ピカチュウは高速移動でつるのムチを避けた。
「何で電磁波が効かなかったんだ！？」
「まさかあのメガニウム・・・」ルカリオはメガニウムの事を知っているようだ。
「知ってるんですか？ルカリオさん？」フライゴンが聞いた。
「過去のポケモンリーグでシングル戦負け無しだった草タイプのポケモンがいると聞いた事がある・・・そのポケモンの名前がメガニウムだった筈だ！」
「シングル戦負け無しって・・・凄く強いって事じゃないですか！？ピカチュウさんは大丈夫なんですか？」
「解らん・・・それよりメガニウムに電磁波が効かなかったのが気になる・・・」その時、ジュカインがルカリオにリーフブレードで攻撃して来た！
「ボーンラッシュ！」ルカリオはボーンラッシュでこれを受け止めた！
「はっけい！」ルカリオはすかさずはっけいを当てる為に手のひらをジュカインのお腹に当てようとした。
「見切り！」だが、ジュカインに見切られてしまいはっけいは当たらなかった！
「あのジュカイン・・・出来る！仕方ない、ここは私とチームブラストが引き受ける！他の皆はダークライを追ってくれ！」
「解りました！・・・気をつけて！」チーム竜星とチーム業火、チームメタルのメタグロスとハガネールはダークライを追って最上階

に向かって行った。
「マニューラ！君も行ってくれ！彼らはダークライに関して情報をあまり持っていない！君が彼らのサポートをしてくれ！ここは私達に任せろ！」
「解った！」マニューラも最上階に向かった。
「リーフストーム！」
その時ジュカインが草タイプ大技リーフストームでルカリオを攻撃した！
「見切り！」ルカリオはこれを見切って回避した。
「波動は我にあり・・・波動弾！」ルカリオは反撃で波動弾を放った。
「見切り！」だが、ジュカインも見切りを使い波動弾を回避した。
「このジュカイン・・・私と同じバトルスタイルか？」その時ピカチュウはメガニウムに大苦戦だった。
「参ったなぁ・・・電磁波が効かなかったのは身代わりで作り出した分身だったってのは解ったんだが・・・」ピカチュウはメガニウムの身代わりで作り出した分身に囲まれていた！
「こんなにいたんじゃどれが本体なのか解らないし・・・それにあの人が持ってるたべのこしと光合成で消費した体力を回復されてしまう！戦いが長くなるとこっちが不利だな・・・」一方バクフーンは母親の猛攻に防戦一方だった。
「スピードスターから火炎放射！」
「くっ！？スピードスター！！」母親はコンビネーション技で炎のスピードスターで攻撃！これにバクフーンはスピードスターで対抗したが、相手のコンビネーション技の方がパワーが上でバクフーンのスピードスターは全て弾かれてしまった！
「電光石火！」バクフーンは電光石火で炎のスピードスターを回避した。だが！
「電光石火！」母親も電光石火を使いバクフーンを攻撃した！
「ぐっ！？」バクフーンは回避出来ずに電光石火を受けて吹っ飛ば

された！
「ハァ・・・ハァ・・・母さんが強いのは知ってたけど・・・こんなに強いなんて・・・」その時母親は容赦なく電光石火の連続攻撃をバクフーンに決めた！
「くっ！？」
「その程度か・・・つまらないな・・・もっと熱いバトルが出来ると思ったのだが・・・」その時、バクフーンはある事に気づいた。
「熱い・・・バトル？そういえば母さんは燃えるような熱いバトルが大好きだって昔言ってたな・・・ダークライに操られてもその事は忘れてないんだ・・・もしかしたら！」
「火炎放射！」その時母親の強力な火炎放射がバクフーンに放たれた！
「火炎車だ！！」だがバクフーンは母親の火炎放射を利用して自分の火炎車の威力を上げて母親に突っ込んで行った！母親はこの奇襲を回避出来ずにまともに受けた！
「思い出したよ・・・母さんの口癖。母さんの口癖は二つあったよね？一つは自分の力を悪い事に使わずに良い事に使いなさい・・・そしてもう一つは、バトルをするならいつでも全力で！・・・ごめんね母さん、今まで全力じゃなくて・・・でも、今から本気でやるよ！」やる気の炎とでも言うのかバクフーンの背中の炎が勢い良く燃え始めた！
「行くよ母さん！電光石火の火炎車！！」バクフーンは電光石火のスピードを利用した火炎車で突っ込んで行った！
「火炎車！」これに対して母親は火炎車で真っ向勝負を挑んだ！二つの技はぶつかり合った。
「小細工無しの真っ向勝負か・・・かっこいいなぁ母さん！けど、俺は負けないよ！！」バクフーンはさらに火炎車の火力を上げた。
「・・・まだまだ！！」母親の方もさらに火炎車の火力を上げた！どちらも一歩も引かない！
「バクフーン！」その時リザードンが加勢しようと近づいて来た。

「来るなリザードン！」
「な、何で？」
「これは俺と母さんの全力勝負なんだ！一対一でやらせてくれ！頼む！」
「・・・解った、だけど無茶すんなよ？」
「ありがとうリザードン！」
「・・・余所見して良いのか？」バクフーンがリザードンと話てる隙に母親は一気に火炎車を最大パワーまで上げてバクフーンを吹っ飛ばした！
「イテテテ・・・やったな母さん！火炎放射！！」バクフーンは火炎放射で反撃した！
「電光石火！」だが、母親は電光石火でこれを回避、そのままバクフーンに突っ込んで行った！
「負けるもんか！こっちも電光石火だ！！」バクフーンも電光石火で応戦、二人はもの凄いスピードで何回もぶつかり合った。
「凄い親子だな・・・」その時、リザードンの後ろから何か光が発せられた。リザードンが振り向くとラティアスがアグノム達に掛けられた洗脳を解こうとしていた。
「・・・」
「大丈夫ラティアス姉ちゃん？」
「任せて・・・もうすぐでアグノムさん達の中にある闇を追い出せそう・・・」ラティアスがそう言った時、ラティアスが持ってる心のしずくが強く輝き出した。
「・・・アグノムさん達の中にいる闇よ！出ていって！！」その瞬間アグノム達の身体から黒いオーラが現れて徐々に離れていく。その時アグノム達が苦しみ始めた。
「・・・うぅ！？」
「アグノム様！？」
「頑張ってアグノムさん！もう少しだから・・・この、早くアグノムさん達の中から出ていって！！」ラティアスが強く念じるとアグ

ノム達の身体から黒いオーラが一気に離れていった。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・お、終わりました・・・あっ・・・」ラティアスが倒れてしまった！
「ラティアス姉ちゃん！？だ、大丈夫！？」
「え、えぇ・・・ちょっと疲れただけ・・・」
「・・・あれ？僕は今までどうしてたんだろ？」アグノム達が正気に戻った！
「アグノム様！元に戻られたのですね！」
「えっ・・・ギャラ・・・ドス？」
「はい、私です。」
「・・・良かった・・・生きてたんだ！」
「私はそう簡単に死んだりしませんよ！」
「・・・ギャラドス！」アグノムはギャラドスに抱きつこうとしたが身体が動かなかった。
「あれ？何で動けないの？」
「お兄ちゃんの電磁波のせいね！」
「麻痺か・・・ならクラボの実だな！ほら、これを食べな！」リザードンは自分のリュックからクラボの実を３つ取り出してアグノム達に食べさせた。
「んっ！？これ、辛～い！！」
「クラボの実だからな！でも、麻痺は治っただろ？」
「えっ？あっ本当だ！身体が動く！」
「良かったですね！アグノム様！」
「うん！」
「・・・ところでエンペルト、今の状況はどうなっているんですか？」
「今の状況は・・・はっきり言って最悪ですね・・・ダークライはユクシー様達を操り、赤い鎖を手に入れてしまいました。」
「赤い鎖を！？・・・そうですか・・・今ダークライは何処に？」
「最上階です。・・・ユクシー様、一つダークライは気になる事を

言っていまして・・・」
「何ですか？」
「はい、赤い鎖を使いディアルガ様とパルキア様を呼び出してお二人を操り世界を支配する・・・と言っていました。」
「・・・そうですか。」
「ダークライは何か勘違いをしているみたいだねユクシー。」
「えぇ。」
「どういう事だ？」
「赤い鎖はディアルガ様とパルキア様、お二人を一度に呼び出す事は出来ないんです。赤い鎖で呼び出せるのはディアルガ様だけ・・・それに世界を支配なんて事も出来ません。だけど・・・」
「だけど、何だよ？」
「もしダークライが赤い鎖を使い、ディアルガ様を呼び出してしまえば・・・世界は破滅してしまいます！」
「・・・えぇ！？お、オイオイ冗談は止めてくれよ！それに、何で呼び出しただけで世界が破滅するんだよ？」
「お二人は決して出会う事はありません、いえ、出会う筈が無いんです、お二人はそれぞれ別の次元にいるから、もしダークライが赤い鎖でディアルガ様を呼び出してしまえば時空に歪みが生じてしまい、それを直そうとパルキア様がやって来ます。そうなればディアルガ様とパルキア様は出会ってしまいます！」
「だから、何でそうなるといけないんだ？」
「そうなってしまえば、お二人は戦いを始めてしまいます！お二人が戦えば時空の歪みが世界中に広がり、最後には世界は次元の中に飲み込まれ消滅してしまいます！」
「それが世界の破滅・・・でも解らないなぁ、何で二人は戦いを始めるんだ？」
「それは・・・」
その時突然、ピカチュウがアグノム達の所に飛んで来た！
「お、お兄ちゃん！？どうしたの！？」

「イテテテ・・・あの人マジで強いぜ・・・」皆が振り向くとメガニウムがゆっくりとこちらに近づいて来ていた。
「母さん・・・」
「私が・・・元に戻します・・・」
「待ってラティアス姉ちゃん！そんなにフラフラじゃない！」
「ハァ・・・ハァ・・・でも・・・私がやらなきゃ・・・」ラティアスはかなり苦しそうだ。
「・・・ラティアス、俺のリュックにオレンの実やオボンの実がまだあった筈だ、それで体力を少しでも回復するんだ！」
「リザードン・・・さんは・・・？」
「俺は・・・何とか母さんを正気に戻してみる！」リザードンはそう言うとメガニウムに向かって行った！
「攻撃したくなかったけど、バクフーンが頑張ってるのに俺だけ何もしない何て出来ないよな・・・行くよ母さん・・・エアスラッシュ！」リザードンは先制でメガニウムにエアスラッシュで攻撃した！
「守る！」メガニウムは守るを使ってこれを防御した。
「葉っぱカッター！」メガニウムは反撃で葉っぱカッターを繰り出した！「火炎放射！」リザードンは火炎放射で葉っぱカッターを全て燃やした！だが、燃えた葉っぱが邪魔をしてメガニウムの姿が見えなくなってしまった！
「くっ！あの葉っぱカッターはおとりか！？エアスラッシュ！！」
リザードンはエアスラッシュで葉っぱを吹き飛ばした！
「えっ！？」その時リザードンが目にしたものは二人のメガニウムだった！
「身代わりか・・・だけど、全体技でやれば！熱風！！」リザードンは熱風を使い二人のメガニウムに攻撃した！
「守る！」だが、二人のメガニウムは守るを使って防御した！
「つるのムチ！」メガニウムはつるのムチを使いリザードンの口を塞いだ！
「んっ！？ん～！？」リザードンはつるのムチを外そうとするがな

かなか外れない。その間に本物のメガニウムは光合成を使って体力を回復していた。（クソ・・・このつるのムチなかなか外れないな・・・それなら！）リザードンはつるのムチを掴みそのまま空中に上昇した。そして、分身のメガニウムを振り回し始めた！その時リザードンの口を塞いでいたつるのムチがほどけた！

「いっけぇぇぇ！！」リザードンは分身のメガニウムを本物のメガニウムに向けて投げ飛ばした！

「つるのムチ！」その時無数のつるのムチが分身のメガニウムを受け止めた！いつの間にかメガニウムは新たな分身を二人作り出していたのだ！

「母さんが・・・四人！？そんなのありか！？」その時四人のメガニウムの身体が輝き始めた。

「ソーラービームか！母さんの得意技の一つだな！だけど、ソーラービームは発射までに時間が掛かる、攻撃するなら今だ！熱風！！」リザードンは四人のメガニウムを一気に攻撃出来る熱風を使おうとしたその時！背後からつるのムチがやって来てまたリザードンの口が塞がれてしまい熱風を撃てなくなってしまった！リザードンが振り向くとメガニウムがいた！

（あっちにも母さんが！？まずい、早くこのつるのムチをほどかないと！）リザードンがつるのムチをほどこうとしたら別の方からつるのムチがやって来て手足を縛られてしまい動けなくなってしまった！何とメガニウムは合計六人の分身を作り出していたのだ！

（こんなに分身が！？一体いつの間に！？）その時遂に四発のソーラービームがリザードンに向けて放たれた！

（クソッ！？）

「フレアドライブ！！」その時突然バクフーンがリザードンの前にやって来てフレアドライブで四発のソーラービームとぶつかり合った！

（バ、バクフーン！）

「ウオォォォ！！」バクフーンはフレアドライブを最大パワーまで

上げて四発のソーラービームを打ち消した!
「ハァ・・・ハァ・・・よ、ようリザードン・・・何だよその格好は?待ってな・・・すぐに助けてやるから・・・」バクフーンがリザードンの動きを封じてるつるのムチをほどこうとした時、バクフーンの母親がフレアドライブで突っ込んで来た!
「くっ・・・電光・・・石火!」バクフーンは何とか電光石火で回避しようとしたが、先程のソーラービームを打ち消す際に体力をほとんど使ってしまい、いつものスピードが出せずフレアドライブをまともに受けてしまった!
「がはっ!?・・・ハァ・・・ハァ・・・まだ・・・倒れないよ・・・母さん!」バクフーンは何とか持ち堪えた。だが、もうフラフラだ。
「リーフブレード!」
「ボーンラッシュ!」
その時ルカリオとジュカインがリーフブレードとボーンラッシュで激しい攻防をしながらバクフーン達のところに向かって来た!
「波動弾!」
「見切り!」ルカリオの波動弾はジュカインに見切られて避けられてしまった!だが、外れた波動弾はリザードンを捕えていた分身のメガニウムに直撃して分身は消滅した!そのおかげでリザードンの塞がれていた口が解放された。
「火炎放射!」リザードンはすかさず火炎放射を他の二人の分身に当てて消滅させた!
「大丈夫か?」
「すまないルカリオ!助かったよ!そうだ、バクフーンは大丈夫か?」
「大丈夫って・・・言いたいけど・・・ちょっとしんどいな・・・」
「これを使えバクフーン。回復の薬だ!」ルカリオはバクフーンに体力を完全に回復する薬を手渡した。
「薬、苦手なんだよな〜・・・苦いし・・・」

「文句言わずに飲め！」リザードンはバクフーンに無理矢理回復の薬を飲ませた。
「げほっ！あ～、苦い～！何すんだよリザードン！？」
「元気になれたんだから良いだろ？それに傷何かも治ってるし、さすが回復の薬だな！」リザードンに言われてバクフーンは身体を見てみると、確かに今まであった傷が治っていた。
「マジだ！お～！すっげ～身体が軽い！これならいけるぜ！」
「気合いが入ったのは結構だが、どうやって彼らを元に戻す？」
「ラティアスなら元に戻す事が出来るが・・・さっきアグノム達を元に戻す際に力を使いすぎてしまったみたいで・・・」
「・・・となると私達が何とかするしかないと言うことか・・・そういえばバクフーンはどうやって元に戻ったんだ？」
「俺はバクフーンにフレアドライブを使って元に戻したんだ。俺らにとって大切な技だから・・・」
「なるほど・・・となると何か彼らにとって大切な何かを見せるもしくは使えば、刺激を受けて洗脳が解けるかもしれないな！」その時ジュカイン達がルカリオ達に向かって攻撃して来た。
「神速！」
「電光石火！」
「えっと・・・飛ぶ！」ルカリオは神速で、バクフーンは電光石火で、リザードンは空中に飛んで回避した。
「俺も二人みたいな高速で動ける技があったら良いのに！」その時メガニウムのつるのムチが襲いかかって来た。
「何度も捕まってたまるか！」リザードンはつるのムチを受け止めた。
「母さんにとって大切な何か・・・一体何だ？・・・もしかしてあの技なら・・・上手く出来るか解らないけどやるしかないな！」リザードンはつるのムチを払ってメガニウムから距離を取った。
「良し・・・」リザードンはエネルギーを集め始めた。だが、メガニウムはすかさず葉っぱカッターで攻撃して来た。リザードンはエ

ネルギーチャージが終わってない為まともに受けた。
「くっ・・・あともう少しだ・・・」メガニウムは容赦なくつるのムチをリザードンに連続で叩きつけて来た。
「・・・溜った！いっけぇぇ！ソーラービーム！！」リザードンはエネルギーチャージが完了して、ソーラービームを放った！だが、メガニウムにではなく空中に向かって放ってしまった！
「上手くいってくれ・・・」リザードンが少しエネルギーを強くすると、ソーラービームは空中で爆発した。爆発と言うより、まるで大きな花火が打ち上がったような感じだ。
「・・・あれは？」その時メガニウムは少しずつ意識が戻り始めた。
「・・・あっ」その時ジュカインもソーラービームの花火を見て意識が少し戻ろうとした。
「良し、もう一発！」リザードンはもう一発ソーラービームの花火を打ち上げた！ソーラービームは綺麗な花火になった！もう一発の花火が打ち上がりそれを見たジュカインとメガニウムの身体から黒いオーラが離れて行った！
「・・・あら？私、何でこんな所にいるのかしら？」
「俺は・・・一体？」
「母さん！父さん！」リザードンの声に二人が振り向いた。
「リザードン！」
「良かった！・・・元に戻ったんだね！父さんが母さんにプロポーズする時に使ったソーラービームの花火、上手くいって良かった・・・」
「何がどうなってるのリザードン？」
「後で説明するから今はここで待ってて！」リザードンは二人にそう言うとバクフーンの所に向かって行った。その時バクフーンは母親と激しいバトルを繰り広げていた。
「「火炎放射！！」」二人は同時に火炎放射を放った。二つの炎はぶつかり合い爆発した。
「「電光石火！」」また二人は同時に同じ技を使った。まさに一進

一退の攻防、どちらも一歩も引かない。
「・・・やるな・・・こんなに燃えるバトルは久しぶりだ！」母親の背中の炎は勢い良く燃えている。
「へへ、俺も今すっげ～楽しいよ母さん！」バクフーンの背中の炎も勢い良く燃えている。良く似た親子である。
「バクフーン！こっちは何とか元に戻せたぞ！そっちは・・・まだみたいだな？」バクフーン達の所にリザードンがやって来た。
「あぁ、だけど後もうちょいで元に戻せそうなんだ！」
「リザードン！」その時ジュカインとメガニウムがやって来た。
「大体の話はルカリオに聞いた！父さん達も協力するぞ！」
「助けられたらんだから、今度は私達が助けてあげる番よ！」
「父さん、母さん、ありがとう！」
「さあ、彼女を元に戻してあげよう！」ジュカイン達が身構えた。
「・・・フ、フフ・・・私を元に戻す？・・・もうとっくに元に戻ってるわよジュカイン。」と突然バクフーンの母親が喋って来た！
「・・・はい？」
「だから、もう元に戻ってるんだってば！しばらく見ない間に耳が遠くなったんじゃないジュカイン？」
「うちの旦那に何を言うのよ！？」
「ごめんねメガニウム！冗談よ冗談！」どうやら本当に元に戻ってるようだ。
「一体いつ元に戻ってたの？」
「私の子供とバトルしてる時にね！久しぶりに燃えたわぁ！」
「でも何ですぐに言わなかったんだ？」
「私の子供がどこまで強くなったのか知りたくてね！ちょっと芝居してみたの♪ごめんね坊や、騙したりして！あっ、こんなに大きくなったんだから坊やって呼べないわね？」
「・・・」
「どうしたの？」
「ヒドイや母さん・・・俺必死だったのに・・・でも、母さんとの

バトル楽しかった！・・・それに、良かった・・・元に戻って・・・」

「ごめんね・・・心配かけて・・・」

「・・・母さん！！！」バクフーンは母親に泣きながら抱きついた。

「あらあら、どうしたのよ？」

「だって・・・あの時・・・母さんが死んだって思って・・・もう会えないって思ってたのに・・・また会えたから・・・俺・・・すっごく嬉しくて・・・」

「ほ～ら！男の子が泣かないの！・・・身体は大きくなっても、中身は変わってないわね？」しばらくバクフーンは母親に抱かれたまま泣き続けた。

「ところでジュカイン、メガニウム、今どうなってるの？それと、ここは何処？」

「ちゃんと説明してやるよ、リリ！」リリとはバクフーンの母親の名前である。大体の人達はその姿の時の名前にするのだが、彼女はそれじゃ普通すぎるとの事で、自分で名前を考えたらしい。ジュカインはバクフーンのリリに現在の状況を教えた。

「・・・私が眠ってる間にとんでもない事になってるようね・・・で、親玉が今最上階にいて、他の仲間がそこに向かってるのね？」

「そうよ。」

「だったら、こんな所でぐずぐずしてられないわね！私達も行きましょう！ほら坊や！泣くのは止めて行くわよ！」

「・・・解ってる！」二人はダークライがいる最上階に向かおうとした。

「ちょっと待った二人共！そっちは反対方向だぞ！」

「「えっ？」」二人は同時にリザードンの方に振り向いた。

「本当に良く似た親子だな・・・最上階に行く道はそっちじゃなくてこっちだよ！」

「アハ、アハハ・・・わ、解ってるって！冗談だよ冗談・・・」バクフーン達は改めて、ダークライがいる最上階に向かって行きまし

た。果たしてダークライの野望を止める事が出来るのか・・・

第二十五話ダークライの野望（後書き）

第二十五話完成です！

第二十六話時の神ディアルガ降臨！（前書き）

バクフーン達はバクフーンの母親リリとリザードンの両親メガニウムとジュカイン、そしてアグノム、エムリット、ユクシーを助け出す事に成功。今は急ぎ、ダークライがいる最上階に向かっていた。

第二十六話時の神ディアルガ降臨！

バクフーン達が最上階に向かっている時、チームメタル・チーム業火・チーム竜星はダークライと死闘を繰り広げていた。
「インファイト！」ゴウカザルはインファイトをダークライに決めた。だが、ダークライが身に纏っている闇のバリアのせいでダメージを与えられなかった。
「クソ！駄目か！？」
「どきなゴウカザル！スカイアッパー！！」ミミロップが女の子とは思えない怪力でスカイアッパーをダークライにヒットさせた。ダークライは空中に飛ばされた。
「まだまだぁ！飛び跳ねる！」ミミロップは自慢の脚力でジャンプしてダークライを追い抜いた。
「これでどうよ！ギガインパクト！！」ミミロップは空中で最大パワーのギガインパクトをダークライ直撃させて地上に吹き飛ばした！
「フライゴン！」
「解ってるよミミロップ！いっけぇぇ！破壊光線！！」フライゴンは地上に叩きつけられたダークライを更に破壊光線で攻撃！凄まじい爆発が発生した。
「いくらダークライでもこれなら・・・」爆発で発生した爆煙が晴れていく・・・
「・・・ククク・・・言ったであろう・・・我に貴様達の攻撃は効かぬ！」あれだけの攻撃を受けてダークライは無傷だった！
「そんな！？」
「くらうが良い！悪の波動！！」ダークライは悪の波動をゴウカザル・ミミロップ・フライゴンの三人に放った。ゴウカザルは回避する事が出来たがミミロップ・フライゴンはギガインパクトや破壊光線を使った為にその反動で動けなかった。悪の波動が目の前まで迫る！

「「守る！」」その時クレセリアとエルレイドが守るを使って悪の波動から二人を守った。
「しめつける！」ハガネールはその長い身体でダークライをしめつけた。
「本当にどんな攻撃も効かないのかこの技で試してやるよ！」その時ハガネールの身体が光始めた！
「皆離れてろ！大爆発！！」ハガネールはダークライをしめつけたまま大爆発した！
「ハガネールさん！？」
「あいつ・・・自爆しやがった・・・」ハガネールの大爆発によって発生した爆煙が晴れていく・・・
「・・・大爆発か・・・少し痛かったぞ・・・」ダークライはゼロ距離で大爆発を受けたにもかかわらず少しだけしかダメージを受けていなかった！
「・・・化物か・・・お前・・・は・・・」ハガネールは倒れた。
「あの大爆発を受けてかすり傷程度なんて・・・」
「・・・貴様達と遊ぶのも飽きた・・・そろそろ終わりにするぞ！」
「「火炎放射！」」その時二つの火炎放射がダークライに放たれた。
「悪の波動！」ダークライは悪の波動で火炎放射を打ち消した。
「俺達抜きで勝手に終わらせるなよ！」バクフーン達がやって来た！
「・・・貴様達か・・・ほう、我の闇の洗脳を解いたか・・・」
「随分長い間私を操ってたみたいね？あんただけは絶対許さないから！」リリの背中の炎が激しく燃え始めた、完全に戦闘モードだ。
「・・・貴様達と遊ぶのは後だ・・・」そう言いながらダークライは赤い鎖を取り出した。
「ククク・・・さあ、時の神ディアルガ、空間の神パルキア！ここに現れよ！」
「させるか！」バクフーンがダークライに向かって突っ込んで行った。
「邪魔はさせん！」ダークライは自分の周りに闇の力でバリアを出

現させてバクフーンの行く手を阻んだ！
「くっ！？」
「赤い鎖よ！次元の扉を開き神をここへ！」繋がっていた赤い鎖はバラバラに別れて空中で円を描くように回転し始めた。すると、中心から空間が歪み始めた。そして、その空間は裂けて別の次元と繋がった。すると、その次元から何かがやって来た。ディアルガだ！ディアルガが空間の裂目を通ろうとした時、赤い鎖がディアルガの首に巻き付いた。まるで首輪みたいに。そして次元の裂目は消えていった。
「・・・何故ディアルガだけしか現れなかった・・・まぁ良い、ディアルガだけでも世界を我がものにするのは容易いからな・・・まず手始めにこいつらを使ってディアルガの力を試すか・・・さあディアルガよ！まずは目の前にいるこいつらを倒せ！」
「・・・」ディアルガはダークライの指示に従いバクフーン達に向かって来た。
「こいつが時の神ディアルガ・・・でっけぇなぁ！身長どん位あるんだ？」
「何呑気な事言ってるんだよバクフーン！このままだと世界は破滅しちまうんだぞ！？」
「・・・いや、パルキア様がやって来る前にディアルガ様を操っている赤い鎖を破壊して正気に戻すんだ！そうすればまだ望みはあるよ！」
「俺がやる！」マニューラがディアルガの赤い鎖めがけて突っ込んで行った。
「つじ切り！」マニューラはつじ切りで赤い鎖を攻撃しようとした時、ディアルガは眩い光を発した！
「・・・何んだ今の光？・・・あれ？マニューラ？」光が消えた時攻撃しようとしていた筈のマニューラが倒れていた！
「お、おいマニューラ！？一体どうしたんだよ！？」「多分、ディアルガ様が時間を停めてからマニューラを攻撃したんだと思う・・・

」
「時間を・・・停める!?そんな事が出来るのか!?」
「ディアルガ様は時を司る神・・・簡単な事だよ。」その時、ディアルガは強力な竜星群をバクフーン達に向かって放った!
「やば!?皆避けろ!」バクフーン達は間一髪竜星群を回避する事が出来た。
「お返しだ!火炎放射!」バクフーンはディアルガに火炎放射で反撃した。その時またディアルガは光を発した。光を浴びた火炎放射はその場で静止していた!
「マジかよ・・・」
「下がって下さいバクフーンさん!竜星群!!」フライゴンが竜星群でディアルガを攻撃した。だが、やはりディアルガに竜星群も停められてしまった。
「無駄だ!貴様らでは神に攻撃を当てるどころか触れる事も出来ん!ディアルガよ!!」再びディアルガは光を発した。すると、時間を停められた火炎放射と竜星群が消えていってしまった!
「何をしたんだ!?」
「時間をさかのぼっただけの事・・・つまり火炎放射と竜星群が放たれる前の時間にな!」
「停めるだけじゃなくて巻き戻す事も出来るのか・・・まさに時の神だな・・・」
「・・・ねぇアグノム。見た感じディアルガってドラゴンタイプみたいだけど、他にタイプ持ってる?」
「えっ?ディアルガ様はドラゴン以外に鋼も持ってるけど?」
「鋼・・・ならこの技ならいけるかもしれない!皆、揺れるけど勘弁してね!地震!!」ラグラージは鋼タイプに効果がある地震で攻撃した!だが、ディアルガは空に飛んでこれを回避した。
「えぇ!?ディアルガって飛べるの!?」地震はディアルガに全くダメージを与える事は出来ず周りにいる空を飛べない仲間達にダメージを与えてしまった。

「ラグラージ～！地震使うなら最初に言えよ！？」
「言ったら相手にも聞こえるでしょ！」
「じゃあせめて何か合図でも出せよ！」
「そんな事今言われても・・・」
「二人共ケンカは後にしてくれ！来るぞ！！」ディアルガは再び竜星群で攻撃して来た。バクフーン達はそれぞれ得意な技で応戦して竜星群を打ち消した。
「今度こそ！火炎放射！更にスピードスター！！」バクフーンは火炎放射とスピードスターのコンビネーションでディアルガの赤い鎖を攻撃した。今度は直撃した、だが赤い鎖はヒビ一つ入ってなかった！
「なっ！？壊れない！？」
「あっ言い忘れてた！あれを破壊出来るのは僕ら三人だけなんだよ！」
「それは最初に言ってくれ！」
「ご、ごめん・・・」
「じゃああれを破壊してくれよ！」
「やりたいけど、ディアルガ様には簡単に近づけないんだよ！迂濶に近づくとマニューラみたいに倒されちゃうから・・・何とか皆がディアルガ様の動きを止めてくれれば良いんだけど・・・」
「解った！何とかやってみよう！行くぜ皆！」バクフーン達はディアルガに向かって行った。
「一ヶ所にかたまらずに皆バラバラに別れるんだ！」ルカリオの指示で皆バラバラ別れた。チーム竜星がディアルガの右側、チームメタル最後のメタグロス、そしてルカリオ、メタモン、クレセリアが左側、チーム業火はディアルガの後ろ、そしてチームブラストとアグノム、ユクシー、エムリット、ギャラドス、エンペルト、バンギラス、リリ、メガニウム、ジュカインはディアルガの正面側だ。
「行くよ皆！」
フライゴン・バシャーモは火炎放射、スターミー・マナフィは水の

波動、グレイシアは手助けでライボルトの雷をアシスト、ミミロップは突っ込んで行った。
「無駄だと何度言えば解るのだ?ディアルガ!」ディアルガはフライゴン達の攻撃を再び時間を停めて防いだ。
「まだ私の攻撃が残ってるわよ!スカイアッパー!!」ミミロップはディアルガの真下からスカイアッパーを決めようとした。だが、ディアルガはその攻撃を難無く回避し、ドラゴンクローをミミロップに決めた。ミミロップはフライゴン達の所まで吹き飛ばされた。
「今度は俺達だ!行くぜライチュウ!エルレイド!」
「解ってるよ大将!」今度はゴウカザル達がディアルガに向かって行った。
「鋼タイプなら格闘技が弱点だよな!マッハパンチ!」
「気合いパンチだ!」
「インファイト!!」
ゴウカザルはマッハパンチ、ライチュウは気合いパンチ、エルレイドはインファイトで攻撃した。
「闇よ!」だが、ダークライが闇のバリアを作り出したせいでディアルガに攻撃が届かなかった。
「ちっ!」
「波動弾!」ルカリオがダークライに向かって波動弾を放った。
「悪の波動!」ダークライの悪の波動がルカリオの波動弾とぶつかり合い大きな爆発が起きた。
「今だ!神速!」ルカリオは神速で素早くディアルガに向かって行った。
「私達も行くわよメタモン!」
「了解っす!変身、サワムラー!」メタモンは格闘タイプのサワムラーに変身。クレセリアと一緒に突っ込んで行った。
「・・・データ解析・・・」メタグロスは動かずディアルガやダークライのデータを取っていた。「ボーンラッシュ!」
「冷凍ビーム!」

「飛び膝蹴りっすよ！」
「させるか！」三人の攻撃はダークライの闇のバリアで防がれた。
「・・・あのダークライが邪魔ね・・・ディアルガから離さなきゃ駄目ね！坊や！ダークライは私が引き付けるからその隙にディアルガをお願いね！」
「えっ！でも母さん・・・」
「大丈夫よ！私は同じ奴に二度も負けたりしないから！」
「・・・解った！気をつけてね！」
「解ってるわよ！」
「ちょっと待った！俺も行くぜ！あの野郎は絶対ぶっとばしてやるんだ！」
「俺とメガニウムも行くぞ！」
「えぇ！私達を怒らせた事を後悔させてやるんだから！」
「解ったわよ！行くわよ！」リリ、ジュカイン、メガニウム、バンギラスはダークライに向かって行った。
「電光石火から火炎車！」リリは電光石火のスピードを利用した高速火炎車でダークライに突っ込んだ！
「闇よ、我が盾となれ！」ダークライは闇のバリアで火炎車を防いだ。
「貴様か・・・」
「今度は負けないわよダークライ！」
「下がってろリリ！リーフブレード！」今度はジュカインがリーフブレードで攻撃した。だが、再び闇のバリアが阻んだ。
「悪の波動！」
「見切り！」ダークライは悪の波動でジュカインを攻撃したが、見切りで避けられた。
「今度はこれよ！ソーラービーム三連発！！」メガニウムは身代わりで作り出した二人の分身と一緒にソーラービームを放った！
「おまけだ！破壊光線！！」更にバンギラスの破壊光線も放たれた！全てダークライに直撃した！「・・・無駄だ！この身に纏う闇の

バリアがある限り我を倒す事は出来ん！」
「オーバーヒート！！」リリのオーバーヒートがダークライに直撃した。ダークライは吹っ飛ばされた。
「倒してみせるわよ！必ず！」
「やるなぁ母さん！俺も負けてられないぜ！リザードン、火炎放射行くぜ！」
「ＯＫ！」
「「火炎放射！！」」
バクフーンとリザードンは二人で火炎放射をディアルガに放った。二つの火炎放射は合体して普通より大きい火炎放射になった。だが、これをディアルガは竜星群で打ち消した。
「今度は俺だ！気合いパンチ！！」ピカチュウは二人が火炎放射でディアルガの気を引いてる間に高速移動でディアルガに近づいて渾身の一撃を決めようとした。しかし、ディアルガは空に急上昇して回避した。
「今だラティアス！」
上空にはラティアスが待機していた。
「・・・兄さんに教えてもらったこの技で！いっけぇぇ！竜星群！！」
ラティアスはディアルガに竜星群で攻撃した。竜星群はディアルガに全て直撃した。
「・・・やった・・・のかな？」その時竜星群が直撃した事で発生した爆煙の中からディアルガが飛び出しラティアスに突っ込んで来た！
「そんな！？全弾命中したのに倒れないなんて！？」ディアルガのドラゴンクローがラティアスに襲いかかる！
「させるか！皆、ラティアスさんを助けるよ！」チーム竜星はそれぞれ得意の技でディアルガを攻撃して、ディアルガの気を引いた。
「ラティアスさん！今のうちにそこから離れて！」
「は、はい！」ラティアスはバクフーン達の所に戻った。

「大丈夫かラティアス？」
「フライゴンさん達のおかげで何とか・・・」
「そうか・・・良かった、しかしどうやったらディアルガの動きを止める事が出来るんだ？俺達の攻撃は回避されるか時間停止されちまうし・・・」
「いや、多分もうディアルガ様は時間停止をしないと思うよ。」ユクシーが言った。
「どういう事だ？」
「今のディアルガ様は赤い鎖のせいでダークライの操り人形みたいになってしまっているよね？多分ダークライの指示が無いと時間停止はしないと思うんだ。その証拠にダークライが離れてからディアルガ様は時間停止をしてこないでしょ？」
「言われてみれば・・・だけど、どうやってディアルガの動きを止めるんだ？時間停止しなくても俺らの攻撃を簡単に避けちまうんだぜ？」
「・・・ディアルガ様に時の咆哮を使わせるんだ。」
「時の咆哮？」
「ディアルガ様だけが使う特別な技だよ。凄く強力な技何だけどそれを使うとディアルガ様はしばらく動けなくなるんだ。」
「なるほど、つまりバクフーンが使うブラストバーンみたいな技だな？だけど、使わせるって言ってもどうやるよ？」
「・・・バクフーンにエンペルト、君達のブラストバーンとハイドロカノン、その二つをディアルガ様に放つんだ。そうすればディアルガ様は時の咆哮を使う筈・・・」
「俺のブラストバーンとエンペルトのハイドロカノンを？」
「そうだよ。そして時の咆哮を使わせたらすぐに逃げるんだ。あれを受けたらひとたまりも無いからね。ディアルガ様が動かなくなったら僕達がすぐに赤い鎖を破壊するから。」
「解った！良し、いっちょやるか！行くぜエンペルト！」
「えぇ！」バクフーンとエンペルトはブラストバーンとハイドロカ

ノンを放つ為にディアルガから少し距離をとった。
「ん？」その様子をメガニウムとジュカインが見ていた。
「バクフーンとエンペルト、何をするつもりかしら？」
「バクフーン、エンペルト、ディアルガから距離をとる理由があるとしたら何か大技を使う為か・・・あいつらが使う大技といったら・・・なるほど、そういう事か。すまないがメガニウム、ダークライを任せて良いか？」
「えっ？私は良いけどどうしたのあなた？」
「俺もバクフーン達に協力しに行こうと思ってな！あいつらが使う大技はおそらくブラストバーンとハイドロカノン・・・」
「なるほどね、良いわ！ここは私達に任せて！」
「すまない！」ジュカインはバクフーン達の所に向かった。
「オーイお前達！」
「あれ？リザードンのお父さん、どうしたの？」
「お前達に協力しに来たんだ。お前達、ディアルガにブラストバーンとハイドロカノンを使うつもりだろ？」
「どうしてそれを？」
「長年の経験で解ったんだよ！それより早くしないとあいつらがやられるぞ？」ジュカインが指差す先をバクフーンが見たら、ゴウカザル達が大ピンチになっていた。
「やば！？急がなくちゃ！じゃあ二人共、やるよ！」バクフーン・エンペルト・ジュカインはエネルギーを集め始めた。その時、ディアルガがバクフーン達の事に気づいた！「皆離れてろ！いっけぇぇぇ！！ブラストバーン！！」
「ハイドロカノン！！」
「ハードプラント！！」三人の最強技がディアルガに放たれた。ブラストバーンとハイドロカノン、そしてハードプラントは向かう途中で合体して強力な技になった！
「・・・！」これにディアルガも反撃しようとエネルギーを集め始めた。

それと同時に胸にあるダイヤモンドのような宝石が光始めた。
そしてディアルガのせびれが大きくなるとエネルギーを口に集めた。
次の瞬間ディアルガは強力なエネルギー波を放った。時の咆哮だ！
時の咆哮はバクフーン達のブラストバーン・ハイドロカノン・ハードプラントとぶつかり合った。最初は互角だったがディアルガの方がパワーが上で徐々にバクフーン達が押され始めた。
「まずい！二人共、技を使うのを止めて回避するぞ！行くぞ、3、2、1・・・今だ！」ジュカインの合図とともにバクフーンとエンペルトは技を解除して回避行動をとった。三人はギリギリで時の咆哮を回避する事が出来た。その時ディアルガは時の咆哮でエネルギーを消費して動けないでいた。
「今だアグノム！ユクシー！エムリット！」
「解ってる！」アグノム、ユクシー、エムリットは急ぎディアルガのもとに向かった。
「そうはさせん！」その時ダークライが三人を邪魔しようとした。
「行かせるかよ！」バンギラスが砂嵐の砂を使ってダークライの前に巨大な砂の壁を作り進路を塞いだ。その隙にアグノム達はディアルガの所にたどり着いた。
「待っていて下さいディアルガ様・・・今、解放します！行くよユクシー！エムリット！」アグノムの合図で三人の身体から光が発生した。すると、赤い鎖が光始めた。その時、赤い鎖に少しずつヒビが入ってきた。ヒビがどんどん大きくなっていく・・・そして赤い鎖はまるで砕かれるように壊れてしまった。
「やった！」
「・・・こ、ここは・・・ここは一体何処なのだ？何故、私はここにいる？」どうやらディアルガは正気に戻ったようだ。その時、アグノム、ユクシー、エムリットがディアルガに近づいて行った。
「ディアルガ様！」
「お前達はアグノム、ユクシー、それにエムリット。」
「良かった・・・元に戻られたのですね！」

「元に・・・戻った?どういう意味だ?」
「ディアルガ様はダークライに赤い鎖で操られていたんです。」
「そうだったのか・・・お前達が私を元に戻してくれたのか?」
「僕達だけじゃありません。彼らの・・・バクフーン達の協力があったから、ディアルガ様を助ける事が出来たんです!」「そうか・・・」ディアルガはバクフーン達の所に向かった。
「どうやら・・・お前達に迷惑を掛けてしまったみたいだな・・・すまない。そして、ありがとう。私を目覚めさせてくれて。」ディアルガは深々とバクフーン達にお辞儀した。
「良いって良いって!俺達は当たり前の事をしただけだから!それより・・・まずはあいつをどうすらかが先だろ?」バクフーンはダークライを指差した。
「そうだな・・・」ダークライはディアルガ達に囲まれた。
「貴様が私を操っていた者か・・・」
「・・・まさか、ディアルガをこうも簡単に助けだすとは・・・だが、我はまだ諦めんぞ!今度は我の闇の力を使って・・・」「時よ・・・」ディアルガが念じると胸のダイヤモンドが光、その光はダークライを照らした。しばらくすると、光は消えた。すると、ダークライはそのままの体勢で動かなくなっていた。
「えっ?何がどうなったんだ?」
「奴の時間を停止した。私が解除しない限り奴はあのままだ。だが、私はあのままにするつもりは無い・・・」そう言うとディアルガはダークライに近づいて行った。
「どうすんだ?」
「全ての命は初めから悪ではない・・・奴も同じだ。ただ、育つ環境が悪かっただけ・・・」その時またディアルガは念じた。そして再び光がダークライを照らした。すると、ダークライの姿がみるみるうちに変わっていき、何とタマゴになってしまった。
「今度は何だ!?」
「時間をさかのぼり、こいつが生まれる前の状態・・・タマゴにし

ただけだ。ちゃんとまだ生きている。」
「そのダークライのタマゴどうするんだ?」
「私が責任を持って育てる。ちゃんとまともな奴にな!」ディアルガは大事そうにタマゴを自分の背中に置いた。
「そういえばまだお前達に礼をしてなかったな。言葉だけじゃ悪い、お前達の願いを叶えてやろう。私の出来る範囲であれば・・・」
「じゃあそうだ!ラティアス!こっちに来てくれ!」バクフーンに呼ばれてラティアスが来た。
「何ですか?」
「ディアルガ、ラティアスが持ってるこの心のしずく、元々はラティアスの兄貴のラティオスなんだ!ディアルガ、あんたの力でラティオスを元に戻してくれないか?」
「・・・解った、やろう!ラティアスと言ったね?君のお兄さんをそこに置いてくれないか?」
「あっ、はい・・・」
ラティアスは心のしずくを置いた。そしてディアルガは念じ始めた。胸のダイヤモンドが光始め、その光が心のしずくを照らした。すると、心のしずくに変化が起きた。丸い宝石だったのが少しずつ形が変わっていくではないか。しばらくすると、心のしずくは丸い宝石ではなくラティオスの姿に変わった。
「・・・後少しだ・・・」ディアルガが更に強く念じるとラティオスの身体が宝石から元の身体に戻っていく。そして、ラティオスの身体は完全に元に戻った。
「良し・・・」ディアルガは念じるのを止めた。それと同時に胸のダイヤモンドも光を放たなくなった。
「・・・あれ?俺・・・身体が元に戻ってる?」
「兄さん・・・兄さん!!」ラティアスはラティオスを強く抱きしめた。
「良かった・・・兄さんに・・・また会えた・・・」ラティアスは泣いていた。

「ラティアス・・・俺、一体どうやって元に戻れたんだ？」
「私が君を心のしずくになる前の時間まで戻したんだ。」
「あなたが？あなたは、一体・・・？」
「こいつはディアルガ！時の神なんだぜ！」
「ちょっ！？バクフーン！？ディアルガ様をこいつとか、呼び捨てにするのはダメだよ！」
「良いんだアグノム。それより、ラティオス、だったね？もう自分を犠牲にするような無茶はしないように！妹のラティアスが悲しむからな！」
「はい。助けていただいてありがとうございます。」ラティオスはディアルガにお礼を言って、まだ泣いているラティアスの頭を撫でてあげた。
「ラティアス、もう兄ちゃんはいなくなったりしないからな！」
「本当・・・？約束する・・・？」
「あぁ、約束だ！」
ラティオスとラティアスは約束した。その時、突然上空に次元の歪みが発生した。
「何だ！？」
「この気配・・・」
次元の歪みは裂けて別の次元に繋がった。中から大きなポケモンが現れた。
「何だあいつは？」
「・・・」ディアルガはそのポケモンを見た途端、戦闘体制に入った。その瞬間先程別の次元から現れたポケモンがディアルガめがけて突っ込んで来た。
「ディアルガァァァ！！」ディアルガもそのポケモンめがけて突っ込んで行った。
「パルキアァァァ！！」二人は空中で激しく激突した。二人の激突は凄まじい衝撃波を発生させた。その衝撃波でバクフーン達は吹き飛ばされた。「イタタタ・・・何なんだよいきなり！？」

「ディアルガ様とパルキア様が出会ってしまった・・・このままじゃ、本当に世界が破滅する！」

第二十六話時の神ディアルガ降臨！（後書き）

第二十六話完成です！

第二十七話ディアルガＶＳパルキア（前書き）

赤い鎖を破壊してディアルガを正気に戻す事が出来たバクフーン達。更にダークライもディアルガの力でタマゴにされた。全て終わったと思ったその時、パルキアが現れてディアルガと壮絶なバトルを始めてしまった・・・

第二十七話ディアルガＶＳパルキア

「竜星群！」
「波動弾！」ディアルガの竜星群とパルキアの波動弾がぶつかり合い、凄まじい爆発が発生した。爆発の発生と同時に、衝撃波も発生した。その衝撃波でバクフーン達は吹き飛ばされた。
「イタタタ・・・皆、大丈夫か？」
「あ、あぁ、何とか・・・」
「「破壊光線！！」」その時、ディアルガとパルキアがお互いに破壊光線を放ってそれがぶつかり合った。先程の竜星群と波動弾のぶつかり合いとは比べ物にならない激しい爆発が発生！バクフーン達はまた吹き飛ばされてしまった。
「いってぇ・・・またかよ！」
「本当に俺達と同じポケモンのバトルなのか！？レベルが違いすぎる！」
「・・・ねぇ、何か、この建物揺れてない？」
ラグラージの言う通り確かに漆黒の闇アジトは揺れていた。ディアルガとパルキアのバトルの影響で建物が崩壊し始めているのだ。
「まずいな・・・皆、ここから離れよう！急げ！マニューラは俺が運ぶ、ラグラージ、ハガネールを抱える事出来るか？」
「僕を誰だと思ってるの？出来るよ！」
「待ってくれバクフーン！まだ仲間が幹部のフロアにいるんだ！」
「じゃあまずそいつらの所に急ごう！」バクフーン達はチーム業火とチームメタルのメンバーがいるフロアに急いで向かいました。フーディンのフロアにはチーム竜星とメタグロス、ルカリオ、メタモン、クレセリアが。ヨノワールのフロアにはバクフーン達チームブラストとリリ、ジュカイン、メガニウム、バンギラス、チーム業火が向かった。そしてそれぞれ傷ついた仲間達を抱えて外に脱出する事が出来た。脱出出来たと同時に、アジトが崩壊した。

「危ねぇ!?ギリギリセーフだったな!」
「・・・おい、何だよ・・・あれ・・・」リザードンが見ている方をバクフーン達も見ると、そこには海が上空に出来た次元の歪みに吸い寄せられていた。まるで竜巻のようだ。一本や二本ではなく無数に発生していた。
「どうなってるんだよ・・・」
「世界の破滅が近づいてるんだよ・・・」
アグノムがバクフーンに言った。
「ディアルガ様とパルキア様がこのまま戦いを続けたら、間違いなく破滅してしまう!」
「アグノム、さっきから気になってたんだけど、何で二人は突然バトルを始めたんだ?」
「・・・僕達はそれぞれ湖で世界のバランスをとる為にエネルギーを送ってるって最初に会った時言ったよね?ディアルガ様とパルキア様もそうなんだ。
いや、あの方達の存在自体が世界のバランスをとってるって言っても言い過ぎじゃないね。
お二人が一緒にいると互いの力を打ち消しあってしまうから、だから別々の次元で暮らしていたんだ。
それで世界のバランスはとれていた・・・だけど、ダークライが赤い鎖を使い、ディアルガ様をこの世界に呼んでしまった。その時に発生した次元の歪みに誘われてパルキア様もやって来た。出会ってしまったお二人は自分の力を打ち消してしまう相手を倒し、そして世界のバランスをとろうとする為に・・・」
「バトルを始めちまうって訳か・・・」
「そう・・・そして強い力を持ったお二人がバトルすれば時空が歪みこの世界は異次元の中に飲み込まれて、消滅する・・・」
「何とか二人を止める事は出来ないのか?」
「お二人は今、相手を倒そうとする事だけしか考えられない状態にある・・・」

「つまりは正気じゃないって訳だな？じゃあ、二人を正気に戻せば・・・」
「うん。バトルを止めてくれると思う。」
「うっし！じゃあ、二人を正気に戻すか！」
「簡単に言うけどバクフーン、どうやってあの暴走してる二人を止めるの？」
「こうすんだよ！」
バクフーンはいきなり火炎放射をディアルガめがけて放った。だけど、ディアルガはパルキアに掴まれて、アジトがあった所に落ちていってしまった為に火炎放射は無駄撃ちに終わった。
「・・・バクフーンの事だからもしやと思ったけど・・・やっぱりバトルかい！？」
「他に思いつかなかったんだよ！だけど、これが一番簡単な方法だろ？」「確かにそうだけど、相手は神だよ！しかも二人も！勝てる訳・・・」
「勝てる訳無いとか言うんじゃないだろうな？確かに勝てないかもしんないけど、やらなきゃ世界が破滅しちまうんだぜ？俺は破滅何てお断りだ！お前が戦わなくても俺はやる！」バクフーンはラグラージにそう言うと、ディアルガとパルキアがバトルしてる所に向かって行った。
「さっすが私の子だ！私も負けてられないわ！」リリもバクフーンに続いた。
「本当に良く似た親子だよ。あの子は昔のリリにそっくりだ！どんな危険な状況でも決して逃げたりしないあの勇気とか。」
「本当ね。あなた、私達も行きましょう！」
「あぁ！皆も来い！世界を破滅から救うんだ！」ジュカインとメガニウムもバクフーンとリリに続いた。そして、他の皆も覚悟を決めて次々に向かって行く。だけど、ラグラージだけはまだその場を動かないでいた。そんなラグラージにリザードンが声を掛けた。
「どうしたんだよ？」

「何で、皆、怖くないの？相手は神だよ？」
「皆本当は怖いに決まってるさ！俺だって正直びびってるし。」
「じゃあ何で皆、立ち向かえるの？」
「・・・この世界を守りたいからかな？少なくとも俺はそうだ。俺は、バクフーンやお前がいるこの世界が大好きだ！だから、俺は戦う！お前はこの世界が好きじゃないのか？」
「・・・僕だって好きだよ。この世界の事。」
「じゃあ、答えはもう出てるだろ？行こうぜ！この世界を守る為に！」
「・・・解った！行こう、リザードン！」
「そうこないとな！」
リザードンとラグラージも皆に続いてディアルガとパルキアの所に向かって行った。
「火炎放射！」
「ハイドロポンプ！」
「ソーラービーム！」
バクフーンは火炎放射、エンペルトはハイドロポンプ、メガニウムはソーラービームをパルキアに放った。３つの技は合わさり強力な攻撃になった。だが、パルキアは空間移動を使って三人の攻撃をあっさり回避してしまった。
「ラティアス、フライゴン！竜星群行くぞ！」
「うん！」
「解りました！」
「「竜星群！！」」ラティアス、ラティオス、フライゴンは三人でディアルガに竜星群を放った。数えきれない数のエネルギー弾がディアルガに直撃したように見えたが、守るで全て防御されていた。
「守るが使えたのか！」
「気をつけろラティオス、ラティアス、フライゴン！後ろだ！」ゴウカザルに言われ三人が振り向くと、空間移動していたパルキアが

そこに現れていた。すでに、攻撃する構えに入っている。
「ラティアスちゃんを攻撃させてたまるか！雷！！」ピカチュウはパルキアに雷を放った。それと同時に別の方向からも二発の雷が放たれた。ライチュウとライボルトだ。三人の雷はパルキアに直撃しそうになったが、またしても空間移動で回避された。だが、ラティアス達を助ける事は出来た。
「ありがとうピカチュウさん！」ラティアスはピカチュウにそう言うと、ピカチュウは親指を立ててそれに答えた。
「ゴウカザル、私に連いてこられるか？」
「へっ！当ったり前だ！」ゴウカザルとルカリオがディアルガに向かって走り出した。
「良いか！奴は鋼タイプを持っている！格闘技で攻撃するぞ！」
「おう！まずは、俺からだ！マッハパンチ！」
ゴウカザルはマッハパンチでディアルガに攻撃したが、空に飛ばれてしまいマッハパンチは外れてしまった。
「波動は我にあり・・・波動弾！」ルカリオは空に逃げると予想していたようで、ディアルガが空に飛ぶと同時に波動弾を放った。しかし、波動弾はディアルガに時間停止をされてしまいその場で静止してしまった。更にその波動弾をドラゴンクローで打ち返してルカリオに反撃した。
「くっ見切り！」ルカリオはこれを回避した。
「高速移動！」その時ピカチュウが高速移動でディアルガに突っ込んで行った。更にピカチュウに続いてライチュウも高速移動でディアルガに突っ込んで行った。
「「ボルテッカー！」」二人はボルテッカーでディアルガを攻撃した。その時、頭上からパルキアが現れて二人に奇襲して来た。ディアルガに向かってジャンプしていたので回避する事が出来ない。
「やっべ！？ライチュウ、俺の手と足にあんたの手と足を合わせろ！」ライチュウは言う通りにした。
「今だ！」二人は互いに押した。そうする事で空中で方向転換する

事が出来て、パルキアの攻撃を回避する事が出来た。
「パルキアァァァ！！」二人に攻撃を回避された事でバランスを崩したパルキアにディアルガは時の咆哮で攻撃した。
「ディアルガァァァ！！」パルキアも負けじと反撃しようとした。その時、パルキアの腕にあるパールのような宝石が光、それと同時に腕の先も光った。
「亜空切断！！」パルキアは三日月型のエネルギー弾を放った。ディアルガの時の咆哮とパルキアの亜空切断がぶつかり合った。二つの技がぶつかり合った瞬間、とてつもない大爆発が発生した。皆、その大爆発で起きた爆風で吹き飛ばされた。
「・・・うぅぅ・・・今までで一番凄かったな・・・皆、無事か？」
「・・・な、何とか・・・」どうやら全員無事のようだ。皆立ち上がって爆発が起きた方を見た。
「何だこりゃ・・・」
そこには二つの技のぶつかり合いで起きた大爆発で作られた大きなクレーターが出来ていた。その中で、ディアルガとパルキアはまだ戦っていた。
「まだ正気に戻らないのか！？」
「クソ、一体どうすれば良いんだ！？」
「・・・皆、ディアルガに一斉攻撃するんだ。いくらディアルガでも、皆の攻撃を受けたら倒れるだろう・・・」
「だけど、何回もやったが奴に俺達の攻撃はかすりもしないんだぞ？一体どうやって当てるんだ？」
「最初にアグノム達が赤い鎖を破壊する時に、ディアルガに時の咆哮を撃たせただろ？あれをやるんだよ。」
「だけど、そう簡単にディアルガが時の咆哮を撃ってくれるのか？」
「そこは俺に任せてくれ！んじゃ、後は頼むぜ皆！」そう言った後、バクフーンはパルキアに向かって行った。
「行くぜパルキア！電光石火！」バクフーンは電光石火で一気にパルキアに近づいた。そして、パルキアに飛び付いた。パルキアはバ

クフーンを振り落とそうとするがバクフーンは必死に耐える。
「落ちて、たまるかって！ディアルガ、やるんなら今だぜ！さあ、攻撃して来いよ！」ディアルガは時の咆哮を撃つ体勢に入った。パルキアはそれに気づき、亜空切断を撃とうした。
「おっと！そうはさせないぜ！最大パワーのフレアドライブ！！」
バクフーンはパルキアごとフレアドライブの炎で包んだ。そのせいでパルキアは集中出来ず、亜空切断を撃てないでいた。
「時の咆哮！！！」
そして遂に、ディアルガは時の咆哮を放った。
「バクフーン！早くそこから離れろ！お前まで巻き込まれるぞ！」
リザードンはバクフーンに言ったが、バクフーンは離れようとしない。今離れれば、パルキアは時の咆哮を回避してしまうから離れられないのだ。
「リザードン！ディアルガは任せたぜ！」バクフーンは笑いながらリザードンに言った。その瞬間、時の咆哮がパルキアとバクフーンに直撃して、大きな爆発が発生した。爆発で起きた爆煙が晴れると、そこには倒れたパルキアとバクフーンがいた。
「バクフーン！！」
「リザードン、せっかくバクフーンが作ってくれたチャンスを無駄にするな！行くぞ！」
「くっ・・・」リザードン達は時の咆哮を使って動けないでいるディアルガに、持てる力全て使って一斉攻撃した。その一斉攻撃で凄まじい爆発が発生した。
「ハァ・・・ハァ・・・やった・・・のか？」
爆煙が晴れていく・・・「・・・嘘だろ！？」何とディアルガは一斉攻撃を受けたにも関わらず、まだ立っていた。だが、ディアルガにはかなりのダメージを与えているようだ。あと少しで倒せそうだが、リザードン達はさっきの一斉攻撃で力を使い果たしてしまった為に動けないでいた。そんなリザードン達にディアルガはゆっくりと近づいて来る。

「クソ・・・ここまでなのか・・・」皆が諦めかけたその時！パルキアが倒れていた方から火炎放射が飛んで来た。火炎放射はディアルガに直撃、ディアルガの巨体が吹き飛ばされた。リザードン達が火炎放射が放たれた方を見ると、バクフーンがいた。
「バクフーン！無事だったのか！」
「おい、何か、バクフーンの様子がおかしくないか？」バクフーンは凄まじい炎に包まれていた。特性の猛火のように見えるが、普通の猛火とは違っていた。
「・・・」先程の火炎放射でディアルガは倒れていた。そして、バクフーンを包んでいた凄まじい炎が消えると、バクフーンも倒れた。
「バクフーン！」リザードンがバクフーンの元に向かった。
「おい、バクフーン！」リザードンが呼ぶがバクフーンは返事をしない。どうやら、気を失っているようだ。
「リザードンさん。バクフーンさんは？」
「大丈夫だラティアス。気を失っているだけみたいだから。・・・アグノム、これで世界を破滅から防げたのか？」
「・・・まだだよ。まだ最後にやらないといけない事があるんだ。」
「まだ何かあんのか！？」
「まだ次元が歪んだままなんだ。それをディアルガ様とパルキア様に直してもらわないと。」
「またバトルを始めちまうんじゃないか？」
「大丈夫だよ。もう正気に戻ってる筈だから・・・ユクシー、エムリット。」アグノムとユクシーとエムリットはディアルガとパルキアを起こしに行った。
「ディアルガ様・・・大丈夫ですか？」
「・・・うぅぅ・・・アグノム、か？一体、今度は何が？」
「パルキア様と戦っていたんです。」
「パルキアと？」
「あぁ・・・どうやらそうらしい。」ユクシーとエムリットに起こされたパルキアがディアルガに言った。

「パルキア・・・」
「本当は戦いたくないんだが・・・本能って奴にはどうしても勝てないな・・・ところでアグノム、お前達が俺達を正気に戻したのか？」
「僕達ではなく、彼らです。」ユクシーはリザードン達の方を見た。
「彼らがいなかったら、今もお二人は戦っていたでしょう。」
「そうか・・・」パルキアとディアルガはリザードン達の所に向かった。
「どうやら迷惑掛けたみたいだな・・・すまなかった・・・」
「一度だけじゃなく、二度も助けられるとはな・・・感謝している。」
二人は深々と頭を下げた。
「俺達が暴れちまったせいで、世界が荒れちまったな・・・」
「あぁ、だから今度は元に戻すんだ。」
「解ってるよ・・・そんじゃ、始めようぜ！」
二人は目を閉じて集中し始めた。すると、二人を中心に眩しい光が発生した。次の瞬間、その光は世界中に広まった。リザードン達はあまりの眩しさに目を開けられなかった。しばらくすると、光がおさまった。皆が目を開けると、そこには元通りの世界があった。
「元に・・・戻ってる！」
「本当にすまなかったな・・・二度とこんな事が無いようにしないとな。なぁ、ディアルガ？」
「そうだな・・・」
その時、ディアルガとパルキアの前にそれぞれが暮らす次元への扉が開いた。ディアルガとパルキアは最後に皆に謝ってから自分達が暮らす次元に帰って行った。

第二十七話ディアルガＶＳパルキア（後書き）

第二十七話完成です！今回の話で漆黒の闇との対決は終了。再びバクフーン達のジム巡りが始まります。更に新たな敵を出そうと思っています。お楽しみに（＾―＾）ｂ

第二十八話旅、再開！（前書き）

ディアルガとパルキアを正気に戻し、世界の破滅を防いだバクフーン達は疲れきった身体を休める為、ポケモンレンジャー本部で1日過ごす事にした。

第二十八話旅、再開！

「う～ん・・・もう朝か・・・」リザードンが皆より一番早く起きた。皆は昨日の戦いでかなり疲れたのであろう。まだしばらく起きそうにない。リザードンは皆を起こさないように部屋を抜け、外に出た。昨日、世界が破滅しかけていたとはとても思えない程、雲一つない快晴だった。

「良い天気だなぁ！良し、んじゃ行きますか！」リザードンは空高く上昇した。リザードンは朝早く起きたら軽い運動も兼ねて空の散歩をするのが日課なのだ。リザードンはしばらく空中散歩を楽しむ事にした。それから二時間後位にようやく皆が起きだした。

「おはよう兄さん！」

「あぁ、おはようラティアス。良く寝れたか？」

「うん！」

「おはようラティアス、ラティオス。」

「おはようございますラグラージさん！」

「おはようラグラージ。何だ？珍しくまだ眠たそうだな？」

「そりゃ昨日の戦いがあったからね・・・ふぁ～・・・」

「あんま眠たそうにしてると・・・」

「電気ショック！」

「ぎゃあぁぁぁ！？」

ピチューの電気ショックがピカチュウに炸裂した。

「あのモーニングコールが来るぞ？」

「それは勘弁だね（汗）」

「だよな。」いつの間にかバクフーンはラグラージの隣にいた。

「ってバクフーン！？いつ起きたの？」

「ピチューの電気ショックがピカチュウに炸裂したあたりに。危ない危ない、危うく俺もモーニングコールされるところだった（汗）」

「朝から賑やかだなお前達は。」バクフーン達が振り向くと、ゴウ

カザル達チーム業火やメタル、竜星がいた。
「ようゴウカザル！それにフライゴンにメタグロス！おはよう！」
「おはようございますバクフーンさん。」
「おはよう。しかし、昨日のお前にはビックリさせられたぜ？ディアルガをぶっとばす程の強力な火炎放射！あれは凄かったぜ！」
「えっ？ディアルガはお前達が倒したんじゃないのか？」
「何言ってんだよ？お前が倒したんだろ？覚えて無いのか？」
「う～ん・・・パルキアと一緒に時の咆哮を受けたとこまでは覚えてるんだけど・・・」どうやらバクフーンは、時の咆哮を受けた後の事は覚えていないようだ。
「マジで覚えて無いのか？お前、猛火以上の力でディアルガをぶっ倒したのに？」
「う～ん・・・んな事言われてもなぁ・・・」
その時リザードンが帰って来た。
「おっ！やっと起きたか！」
「リザードン、お帰り～！今日は結構長く飛んでたな？」
「まあな。そういえば、リリさんと俺の母さんと父さんが呼んでたぞ？飯を作ったからって！」
「マジか！？よっしゃ、飯だ～！」バクフーンは一目散に食堂に直行した。
「速！？」
「こういう時のバクフーンはバトルする時の2倍速く動くからな。お前らも来いよ！皆のも作ってあるって言ってたからさ！」リザードン達は食堂に向かった。食堂のテーブルには豪華な食べ物が並んでいた。
「すっげ～・・・まるでどっかの高級レストランに来たみたいだな！」
「美味しそうですね！」
「美味しそうじゃなくて美味いんだよ！」
バクフーンはすでに食べていた。

「もう食ってるんかい！？」
「だって腹減ったんだもん！」
「まったく！皆が来るまで待てって言ったのに！まぁ良いわ！さぁ皆も食べて！今日はお祝いよ！」皆は世界を救った事を祝うパーティーで盛り上がった。パーティーは1日中続いた。パーティーが終わった翌日、チーム業火とチームメタル、チーム竜星は再びジム巡りの旅に戻って行った。
「さて、俺達もそろそろ行こうか！」
「そうだな。マニューラ、クレセリア。母さん達をちゃんと送ってくれよ？」
「あぁ。」
「任せなさいって！」
「坊や、頑張ってね！」
「うん！旅が終わったらちゃんと家に帰るからね！」リリ達をマニューラとクレセリアに任せたバクフーン達は、再びジム巡りの旅に出発しました。

第二十八話旅、再開！（後書き）

第二十八話完成です。

第二十九話休息（前書き）

バクフーン達は次のジムがあるアイスシティに向かっていましたが、途中にある広い草原で一休みしていた。

第二十九話休息

「・・・ハァ～。何か、こんなにのんびりして昼寝するのなんて久しぶりだなぁ・・・」
「だなぁ・・・今まで漆黒の闇の連中と戦ってばっかだったからなぁ・・・」バクフーン達は次のジムがあるアイスシティに向かっていたのだが、途中の広い草原で昼寝していた。
「でもさぁ、せっかくバトルジムでジム戦出来ると思ってたのに、バッジが六個ないとバトル出来ないなんてなぁ～・・・」
「しょうがないよバクフーン。そういう決まりなんだから。」
「・・・あれ？なぁ、誰かピチューが何処に行ったか知らないか？」ピカチュウがピチューがいなくなっている事に気がついた。
「そういえばラティアスもいないぞ？」
「あぁ、二人ならあっちの方に行ったよ。綺麗なお花畑を見つけたからって。」ラグラージが答えた。その時ラティアスとピチューは綺麗なお花畑にいた。
「本当に綺麗なお花畑ね・・・良い香り！」
「ラティアス姉ちゃん！はい！プレゼント！」
ピチューは手作りの花の首飾りをラティアスにプレゼントした。
「うわぁ綺麗！ありがとうピチュー！」
「えへへ！良かった、喜んでもらえて！」
「おっ！いたいた。ピチュー！」その時ピチューとラティアスを探しにピカチュウとラティオスがやって来た。
「お兄ちゃん！どうしたの？」
「お前がこっちにいるってラグラージが言ってたから来てみたんだ。」
「兄さんも？」
「まあな。ちょっと心配して。急にいなくなるもんだから・・・」
二人共、妹のピチューとラティアスが心配でやって来たようだ。

「ごめんね兄さん、心配かけて。」
「お前が無事ならそれで良い。それにしても見事な花畑だなぁ！そういえばラティアス、その首飾りどうしたんだ？」
「これ？ピチューが作ってくれたの！綺麗でしょ？」
「へぇ、良く出来てるじゃないか！」
「ピチューは器用だからな！」
「お兄ちゃんは不器用だけど（笑）」
「がくっ！？」
「ハハハ・・・さぁ、そろそろ戻ろう！バクフーンが次のジムに行きたがってるからな！」
「は～い！」ラティオス達はバクフーン達の所に戻ろうとしたその時、突然シャドーボールが後ろから飛んできた！
「アイアンテール！」
ピカチュウはそのシャドーボールをアイアンテールで打ち返した。
「誰だ、俺達を攻撃した奴は！？」
「よく俺のシャドーボールを打ち返したな！それは誉めてやるよ・・・」近くにあった森の中から三人のポケモンが現れた。グラエナにヘルガー、そしてドンカラスだ。
「命が惜しかったら金を置いていけ！」
ヘルガーがラティオス達に言った。
「そうだ！おとなしく言う事を聞いた方が・・・」そこまで言いかけた時、ドンカラスはピカチュウを見た瞬間驚いた表情をした。
「お、お前は！？」
「またお前か・・・まだ懲りずにこんな事してんのか？」
「お兄ちゃん、あの人知ってるの？」
「サンドロックシティでバンギラスを探してた時にちょっとな。きつくお仕置きしたんだが・・・どうやらまたお仕置きされたいらしいな！」
「ふん！今日はあの時のようにはならないからな！」ドンカラスはかなり強気だ。

「アニキ、やっちゃって下さい！」ドンカラスがそう言うとヘルガーが前に出で来た。
「俺の子分を可愛がってくれたみたいだな？たっぷりと礼をさせてもらうぜ？」
「やれやれ・・・ピチュー、ここは危ないから下がってな。」
「う、うん。」
「手伝おうか？」
「いや、俺だけで充分だ。ラティオスとラティアスちゃんはピチューを頼む。」そう言った後、ピカチュウはヘルガーに向かって行った。バトルが始まって３０秒後・・・
「ま、またやられた・・・」ヘルガー達はピカチュウにあっという間に倒された。更に、電磁波で麻痺して動けなくなっていた。
「・・・本当に弱いなお前？まぁ、お前のアニキは良く頑張ったほうだけど、相手が悪かったな！」
「ク、クソ・・・」
「しばらくそこで反省してな！もうこんな事すんなよ！」ピカチュウはそう言うとラティオス達の所に戻った。
「終わったぜ！」
「随分早く終わったな？まぁ、あいつらの実力を考えたら当然か。」
「あの人達、あのままにして良いんですか？」
「良いんだよラティアスちゃん！それより、バクフーン達の所に戻ろうぜ？」
「そうだな。」今度こそラティオス達はバクフーン達の所に戻って行きました。
「あっ！お帰り皆！何か騒がしかったけど、何かあったの？」
「まぁちょっとな！それよりラグラージ、バクフーンとリザードンはどうした？」
「あそこだよ。」ラグラージが指差した先にはバクフーンとリザードンがいた。何やらバトルの準備をしている。よく見ると、向こう側に何人かポケモンがいた。

「あいつらは？」
「僕達と同じで、ポケモンリーグに挑戦する為にジム巡りしてるんだって！でも、最近結成したばかりのチームだからバッジはまだ持ってないらしいよ。僕達は彼らの先輩って事になるね。先輩である僕達にバトルのアドバイスが欲しいって言ってきたんだけど、バクフーンが、
「口で言うより身体で教える！」って言ってさぁ。」
「それでバトルになった訳か。でも何でリザードンまで準備してるんだ？ダブルバトルでもすんのか？」
「最初はシングルでやる筈だったんだけど、リザードンが試したい事があるからって言ってダブルバトルになったんだよ。」
「ふ～ん。」ラグラージ達が話てる間に、バクフーンとリザードンのダブルバトルが始まった。相手はストライクとガラガラだ。ストライクはリザードンに向かって行った。
「高速移動！更に影分身！！」ストライクは高速移動でスピードを上げてから影分身を使った。高速移動のおかげで普通の影分身よりも多くの分身が現れた。
「つじ切り！！」
無数のストライクがリザードンにつじ切りで攻撃しようと、一斉に向かって来た。
「煙幕！」リザードンは煙幕を使って、自分の姿を隠した。ストライクは構わず突っ込んで行ったが、全ての攻撃はリザードンに当たらなかった。「剣の舞い！」ストライクは身体を高速回転させて、煙幕を吹き飛ばした。すると、リザードンがいた場所には大きな穴が掘られていた。リザードンは穴を掘るを使っていたのだ。
「煙幕を使ってすぐに地面に潜ったのか！」
「火炎車！」ストライクがリザードンに気を取られている隙にバクフーンは火炎車でストライクに突っ込んで行った。
「させるか！」ガラガラがバクフーンに向かって行こうとした。
「それはこっちのセリフだ！くらえ！」

リザードンが地面から出てきて、ガラガラにドラゴンクローで攻撃！だが、これをガラガラは骨棍棒で防いだ。だけど、ガラガラはストライクの援護に行けなくなった。
「バクフーン！こっちは任せろ！思いっきり行け！」
「サンキューリザードン！」バクフーンは一気に加速してストライクに向かって行った。
「シザークロス！！」
これにストライクはシザークロスで真っ向勝負を挑んだ。
「真っ向勝負か！受けてたつぜ！」バクフーンは火炎車の火力を更に上げた。二人はぶつかり合った。だが、バクフーンの方がパワーが上だったようで、すぐにストライクは吹き飛ばされた。
「今度はお前だ！」
バクフーンはそのままの勢いでガラガラに向かって行った。
「リザードン！」
「解ってるよ！」
リザードンはガラガラをバクフーンの方に投げ飛ばした。ガラガラはバランスを崩しながらも骨棍棒でバクフーンに攻撃しようとした。
「フレアドライブ！！」バクフーンは火炎車をフレアドライブに切り替えた。今までのフレアドライブよりも強力な炎に包まれたバクフーンはガラガラの骨棍棒を簡単に弾いてしまった。そしてガラガラはストライクの所まで吹き飛ばされた。
「リザードン！あの技で決めるぜ！」
「ＯＫ！」バクフーンとリザードンは炎のエネルギーを集め始めた。
「「ブラストバーン！！」」バクフーンとリザードンは一緒にブラストバーンを放った！二つのブラストバーンはガラガラとストライクに命中！二人は倒れた。
「はいそこまで！バクフーンとリザードンの勝ちだよ！」
「よっしゃ！」
「二人共大丈夫か？」
リザードンがガラガラとストライクに呼びかける。

「は、はい・・・」
「何とか・・・」二人はそう言いながら立ち上がった。
「やっぱりお強いですね！完敗です。」
「お前達も結構強かったぞ！楽しいバトルだったぜ！またやろうな！」
「はい！次は負けませんから！」ガラガラ達はそう言うと、近くの街にあるポケモンセンターに向かいました。
「お疲れ二人共！それにしても驚いたよ！リザードンもブラストバーンを使えるようになったなんて！」
「いつ使えるようになったんですか？」
「前に俺、朝の散歩に行ってただろ？その時になんだ！まぁ、バクフーンに教えてもらったから出来たんだけど。」
「そうだったのか。」
その時、すでに時間は夕方になっていた。
「もうこんな時間になってたんだね。そろそろ行こうよ！アイスシティまであと少しだし。」
「そうだな！」バクフーン達は再び、アイスシティに向かって出発しました。彼らの旅は、まだまだ続く！

第二十九話休息（後書き）

第二十九話完成です！

第三十話久しぶりのジム戦！アイスジム！（前書き）

バクフーン達は一番北に位置する街、アイスシティに到着した。

第三十話久しぶりのジム戦！アイスジム！

「寒！？」
「まぁ、一番北にある街だからねぇ。」
「ラグラージさんは寒くないんですか？」
「水タイプだからね。てか、炎タイプの二人が何でそんなに寒がってんの？」
「俺は飛行タイプも持ってるから、そんなに寒さに強い訳じゃ無いんだよ！」
「俺は寒いの嫌い。」
「だらしないなぁ。ラティオスを見てよ！ドラゴンタイプなのに全然平気な顔してるよ！」
「・・・」若干、ラティオスの身体が震えている。
「ラティオス？」
「・・・さ、寒がって、な、何か、い、いないからな！」
（寒いんだ・・・声が震えてるし。）
「皆、早くポケモンセンターに行こうぜ？ここにいたら風邪ひいちまうよ！」バクフーン達はポケモンセンターに向かいました。ポケモンセンターに着いて、早速中に入るとそこにはクレセリアがいました。
「また会ったわね！」
「クレセリアじゃん！ここで何してんの？」
「ポケモンレンジャーは休んでなんかいられないのよ。ある依頼があってね。私はその依頼を受けてここに来たの。」
「ふ～ん。」
「依頼ってどんな内容ですか？」
「本当は教えちゃいけないんだけど、あなた達だから特別に教えてあげる！最近、あちこちで謎のポケモンが目撃されているのは知ってる？」

「謎のポケモン？いや、知らないけど・・・」
「そのポケモンが何かしたんですか？」
「まだ何か事件を起こした訳ではないんだけど、正体不明のポケモンだから一応警戒しとかないとね。私はそのポケモンを捜してるの。あなた達も、旅の途中で見かけたら注意してね！」
「解ったよ！」
「じゃあ私はそろそろ行くわね！皆、ジム戦頑張ってね！」クレセリアはポケモンセンターから出ようとした。その時、クレセリアは何かを思い出したのか、バクフーン達の方に振り向いた。
「そうだ！言い忘れてたわ！そのポケモンの特徴は人型で胸に宝石みたいな物が付いているらしいから見かけたら、バトルとか仕掛けないでね！特にバクフーン。」
「解ってるよ！」
「それじゃあね！」
クレセリアはそのポケモンを捜しに行きました。
「謎のポケモンか～。どんな奴かな～？」
「まぁそのポケモンはクレセリアに任せて、僕達はアイスジムに備えるよ！」「解ってるよ。ラグラージ、アイスジムにはどんな奴がいるんだ？」
「アイスって名前だけに氷タイプが中心のチームだよ。」
「て事は、俺とリザードンの出番って訳だな！」
「そうだよ！期待してるから頑張ってよ？」
「任せとけって！なぁリザードン？」
「あぁ！」
「その意気だよ！それじゃ、行きますか？」
「おう！」バクフーン達はポケモンセンターで一休みした後で、アイスジムに向かいました。
「ここがアイスジムか～！すんげ～！門が氷で出来てるよ！」
「冷たそうだな・・・」
「そんな事言ってないで行くよリザードン！」

バクフーン達は氷の門を開けて中に入った。ジムの中も全て氷で出来ていた。
「寒～！？外より中の方が寒いってどういう事だよ！？」
「俺が知るかよ！あ～、マジで寒い！」
ラグラージ以外の皆は相当寒そうにしている。寒さを我慢してバクフーン達は更に奥の方へ行きました。すると、広いフロアに着きました。そこには何人かポケモンがいました。
「おや？もしかして、このアイスジムに挑戦しに来たのかい？」
「あぁ！あんたがジムリーダーか？」
「いや。僕はジムリーダーじゃないよ。僕はここのチームブリザードのメンバー、デリバードだよ。よろしくね！」
「よろしく！それで、ジムリーダーは何処に？」
「僕ならここだ。」奥の方からジムリーダーがやって来た。そのジムリーダーはなんと！
「フリーザー！？」
「なんで伝説の鳥ポケモンの一人がジムリーダーなんだ！？」そう、アイスジムのジムリーダーは伝説の鳥ポケモンの一人、フリーザーだったのだ！「君達は・・・もしかしてチームブラストかな？」
「えっ！？なんで俺達の事を知ってるの！？」
「ファイヤーから聞いたのさ。面白いチームがいるってね。」
「そ、そうなんだ。で、なんでフリーザーがジムリーダーなんだ？」
「実は、前のジムリーダーが行方不明でね。未だに見つからないんだよ。それで、ポケモン協会は僕にジムリーダーの代理をしてくれって頼んできてね。」
「それでフリーザーがここにいるって訳か。」
「そういう事。それで、君達はジム戦をしに来たんだよね？早速始めるかい？」
「おう！ここのジムのバトルルールは？」
「そうだね～・・・前のジムリーダーは結構変わったルールでやっていたらしいけど・・・ここはシンプルにダブルバトルを二回、シ

ングルを三回やって、先に三勝した方が勝ちにしよう。それで良いかな？」

「ちょっと待ってフリーザー。僕達は戦えるけど、まだピチューはバトル出来ないからそのルールだと、僕達の誰かは二回バトルに出ないといけなくなるんだけど・・・」「ラグラージ兄ちゃん。私なら大丈夫よ。私もバトルする！」

「えっ！？」

「大丈夫だよラグラージ。ピチューはちゃんとバトル出来るようになったからさ！」

「本当かピカチュウ？」

「あぁ！毎日俺と特訓してたからな！」

「じゃあ、さっき言ったルールで良いかな？」

「ＯＫだ！」

「良し。それじゃ始めようか！」バクフーン達とフリーザー達はそれぞれ自分達の陣地に向かった。その時、バトルフィールド中央に審判のハッサムが現れた。

「あっハッサムだ。」

「何か久しぶりに会った気がする。」

「それでは！ジムリーダー率いるチームブリザード対チャレンジャー、チームブラストのジム戦を開始します！まず、ダブルバトル第一回戦に出場する者は前へ！」チームブリザードからはニューラとジュゴンが出で来た。バクフーン達の方はどうやらピチューとピカチュウが出るようだ。

「それでは試合開始！」

「アクアジェット！」

ジュゴンはアクアジェットで先制攻撃した。

「ピチュー、俺の背中に乗れ！」

「うん！」ピチューはピカチュウの背中に乗った。

「振り落とされるなよ？高速移動！」ピカチュウはピチューを背中

に乗せたまま、高速移動でアクアジェットを避けた。
「今だピチュー！」
ピカチュウの合図と共にピチューはジュゴンに飛び付いた。
「天使のキッス♪」
ピチューは♂であるジュゴンにキスをした。天使のキッスは異性にたいして使うと、相手は混乱状態になる技なのだ。ジュゴンは天使のキッスのせいで混乱してしまった。「更に、電磁波！」
そこにピカチュウが電磁波でジュゴンを麻痺させた。
「良し、これでしばらくこいつはバトルに参加出来ないだろ。」
「それはどうかな？雨乞い！」ニューラが雨乞いでフィールドに雨を降らせた。すると、混乱に麻痺までしていたジュゴンが何も無かったかのように起き上がった。
「えっ！？何で！？」
「・・・潤いボディか」ジュゴンの特性、潤いボディは雨が降っている時に発動して、状態異常を全て治してしまうのだ。
「厄介だな・・・だけど、雨が降ってそっちが有利になるとは限らないぜ？雷！！」ピカチュウはニューラに雷で攻撃した。これをニューラは高速移動で回避しようとした。しかし、雷はニューラを追いかけて、避けたと思い込んだニューラが止まった瞬間雷は直撃した。
「雨が降っている時に雷を回避するのは不可能なのさ！」ニューラは倒れた。後はジュゴンのみ。「絶対零度！！」ジュゴンは逆転を狙って、当たれば一撃で相手を倒す事が出来る大技の絶対零度をピカチュウに使った。「身代わり！」ピカチュウは絶対零度が当たる寸前で身代わりを使い、分身に受けさせる事で直撃を回避した。
「ピチュー！」
「解ってるわ！行くわよお兄ちゃん！」ピチューとピカチュウはジュゴンに突っ込んで行った。
「「ボルテッカー！」」二人はボルテッカーでジュゴンを攻撃した。さすがに二つのボルテッカーを受けたジュゴンは耐える事が出来ず、

倒れてしまった。
「ジュゴン・ニューラ戦闘不能！よって勝者、ピチュー・ピカチュウペア！」
「やったわお兄ちゃん！」
「あぁ！」二人はバクフーン達の所に戻った。
「お疲れさまピチュー！私驚いちゃった！ピチューがあんなに強いなんて！」
「えへへ！さぁ、次はラティアス姉ちゃんの番だよ！頑張ってね！」
「任せておいて！行こう兄さん！」
「あぁ！」今度はラティアスとラティオスが出るようだ。チームブリザードからはイノムーとポワルンが出で来た。
「それでは試合開始！」
「先手必勝だ！ラティアス！」
「うん！」
「「竜星群！！」」
ラティオスとラティアスはいきなり竜星群で攻撃した！
「「守る！」」しかし、竜星群は守るで防御されてしまった。
「ポワルン、あれ頼む」
「オッケー！あられ！」ポワルンはフィールドにあられを発生させた。すると、ポワルンの姿が変わった。ポワルンは特性の天気屋で天気によって姿が変わり、タイプも変化するのだ。今はあられが降っているので氷タイプに変化している。
「そんじゃ、次はこっちの番だな。白い霧！」
イノムーは白い霧を発生させて自分とポワルンの姿をラティオス達から見えなくした。
「ウェザーボール！」
白い霧の中からウェザーボールがラティアスに向かって来た。
「ミストボール！」
ラティアスはミストボールでウェザーボールを打ち消した。
「お返しよ！シャドーボール！」ラティアスはシャドーボールで反

撃したが当たらなかった。
「むやみに攻撃してもダメだラティアス。兄ちゃんに任せろ、サイコキネシス！」ラティオスはサイコキネシスで白い霧を吹き飛ばした。イノムーとポワルンの姿が確認出来るようになった。
「氷の牙！」その時、イノムーが霧が吹き飛ぶのと同時に、ラティオスに向かって氷の牙で攻撃した。氷の牙はラティオスに当たった。
「くっ！？この、水の波動！」ラティオスは水の波動で反撃した。至近距離で弱点の水タイプの技、水の波動を受けたイノムーは倒れてしまった。
「ハァ・・・ハァ・・・油断・・・した・・・がはっ！？」
イノムーを倒したの同時にラティオスも倒れてしまった。どうやらイノムーの一撃はかなりの威力だったらしい。ラティオスならギリギリで耐えられたはずだが、あられのせいで体力を消耗していたため耐えきれなかったのだ。
「兄さん！？」
「ダメだよ余所見しちゃ！吹雪！」ポワルンがラティアスに吹雪で攻撃した。
「守る！」ラティアスは当たる寸前で守るで防御した。
「この！竜の波動！」
ラティアスは竜の波動で攻撃した。だが、ポワルンは守るで防御した。
「竜星群！！」ラティアスは守るが解けた瞬間に最大パワーの竜星群でポワルンを攻撃した。
「ならこっちは吹雪だ！！」ポワルンは最大パワーの吹雪で攻撃した。お互いに竜星群と吹雪が直撃した。
「女の子なのに・・・やるね・・・」ポワルンは倒れた。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・もう・・・ダメ・・・」ラティアスまで倒れてしまった。
「両ペア戦闘不能！よってこの勝負引き分け！」
「ラティオス！ラティアス！大丈夫か？」

「すまない・・・勝てなかった・・・」
「ごめんなさい・・・」
「二人が謝る事は無いよ。相性が悪いのにあそこまでやったんだから！二人はゆっくり休んでて。後は僕達に任せて！」
「それでは、シングルバトルを行います！両チーム、出場する選手はバトルフィールドへ！」
「まずは僕から行くよ」
「頼むぜラグラージ！良いとこ見せてくれよ！」ラグラージがバトルフィールドに出た。チームブリザードからはラプラスが出てきた。
「それでは試合開始！」「ハイドロポンプ！！」ラグラージは速攻でハイドロポンプをラプラスに放った。
「冷凍ビーム！」ラプラスは冷凍ビームで応戦した。ハイドロポンプと冷凍ビームはぶつかり合ったが、冷凍ビームがハイドロポンプをどんどん凍らせていく！
「くっ！」ラグラージはハイドロポンプを撃つのを止めて一旦下がった。目の前にハイドロポンプが凍りついて出来た氷の柱が出来ていた。
「この氷の柱もらい！それ！！」ラグラージは氷の柱をラプラスめがけて投げ飛ばした！
「角ドリル！」ラプラスは氷の柱を角ドリルで粉砕した！そしてそのままラグラージめがけて突っ込んで行った。
「守る！」ラグラージは守るでこれを防御した。
「これならどうだ！アームハンマー！！」ラグラージは最大パワーのアームハンマーをラプラスに決めた！ラプラスはフィールドの外の壁まで吹き飛ばされた。
「どうだ！」
「なかなか強力なアームハンマーですね。」何とラプラスはアームハンマーを受けたにも関わらず、何も無かったかのように起き上がった！
「なっ！？僕のアームハンマーを受けたのに平気なの！？」

「平気じゃないですよ。だから私はアームハンマーを受けた時にすぐ眠るを使って体力を回復したんです。」
「ん？ならなんでこんな早く起きているんだ？」
「カゴの実ですよ。これのおかげですぐに目を覚ます事が出来たんです。さぁ、そろそろ反撃させてもらいますよ！渦潮！！」ラプラスは渦潮を発生させた。ラグラージは渦潮の中に閉じ込められた！
「この、ハイドロポンプ！！」ラグラージはハイドロポンプをラプラスに向けて放った。だが今回は、ラプラスは回避せずにハイドロポンプを自ら受けに行った。
「言い忘れてましたが、私に水タイプの技は通用しませんよ。特性の貯水を持ってますから。」
「じゃあ、なんでさっきわざわざ冷凍ビームで応戦したんだ？」
「あれは、私が貯水の特性を持っていないと思わせる為にワザとやったんですよ。冷凍ビーム！」ラプラスは冷凍ビームを渦潮に向けて放った。すると、渦潮は一瞬で凍りつき、中に閉じ込められたラグラージの手足も一緒に凍ってしまった！この為ラグラージは動く事が出来なくなった。
「これでフィニッシュです！絶対零度！！」
ラプラスは当たれば一撃で倒す事が出来る絶対零度を放った！手足が凍りついたラグラージは回避する事が出来ずに絶対零度を受けてしまった！絶対零度が直撃した事によって発生した煙が晴れた時、そこにはラグラージの氷像が出来上がっていた。
「ラグラージ戦闘不能！よって勝者ラプラス！」
「ラグラージ！待ってろ！すぐに溶かしてやるから！火炎放射！」
バクフーンが火炎放射で、ラグラージの氷を溶かした。
「ラグラージ、大丈夫か？」
「だ、大丈夫、じゃあ・・・な、無い、よ・・・」ラグラージは寒さで震えている。
「バクフーン、ラグラージを暖めてやっていてくれ。次は俺がやる！」

「解った。リザードン！負けんなよ？」
「解ってるよ！」今度はリザードンがフィールドに出た。チームブリザードからはデリバードが出てきた。
「それでは試合開始！」
「行くぜ！火炎・・・」リザードンが火炎放射を放とうとした時、デリバードは持っている袋の中から何かを出して来た。
「はいこれどうぞ！」
デリバードはリザードンに光の玉を渡した。
「何だこれ？」
「プ・レ・ゼ・ン・ト」次の瞬間、デリバードが渡したプレゼントが爆発した！
「おや？どうやら当たりだったみたいですね（笑）あなたは運が良い。」
「・・・ドラゴンクロー！」リザードンはドラゴンクローでデリバードを攻撃した。
「おっと！」デリバードはドラゴンクローを難無く避けた。
「こいつ！？」
「あら、怒っちゃいました？そんなに怖い顔しないで下さいよ。」
「・・・ムカつく！火炎放射！！」リザードンは怒りに任せて火炎放射で攻撃した。
「吹雪！」デリバードは吹雪を使って火炎放射を防いだ。
「この野郎！！」リザードンは完全に冷静さを無くしている。
（作戦通りだね。やっぱり炎タイプはやりやすいやりやすい♪）デリバードはリザードンを挑発して、冷静な判断力を無くそうとしているのだ。
「どうしました？その程度の攻撃じゃ、僕には当たりませんよ？」
「ならこれでどうだ！エアスラッシュ乱れ撃ち！！」リザードンはエアスラッシュを連続でデリバードに放った。
「よっ！ほっ！あらよっと！」デリバードは全てのエアスラッシュを避けきった！

「残念でした♪今度はこっちの番ですよ！電光石火！」デリバードは電光石火でリザードンに向かって行った。リザードンがドラゴンクローで攻撃しようとしたその時、デリバードの姿が一瞬で消えた！
「なっ！？消えた！？」
「消えてないですよ！燕返し！！」デリバードは電光石火のスピードを利用して、回避不可能と言われる燕返しでリザードンを攻撃した。
「ぐっ！？」
「まだ終わりじゃないですよ！冷凍パンチ！！」デリバードは更に冷凍パンチでリザードンを攻撃しようとした。だが、リザードンはそれを右手で受け止めた！
「そこまでだ！」
「げっ！？冷凍パンチを素手で受け止めた！？」
リザードンの右手は冷凍パンチのせいで少しずつ凍りついていく。
「この時を待ってたんだ！お前が俺に接近して来るこの時を！」
「ま、まさかあなた！ずっと怒ってるフリをしていたんですか！？」
「今更気づいても遅いぜ！くらえ！ブラストバーン！！」リザードンは最大パワーのブラストバーンを放った！弱点のうえ至近距離でのブラストバーンを受けたデリバードは、この一発で倒れてしまった。
「デリバード戦闘不能！よって勝者リザードン！」
「やったなリザードン！」
「当たり前だろ！」
「ところでさ、それ冷たくないの？」バクフーンは凍りついたリザードンの右手を指差した。
「あっ！溶かすの忘れてた！？火炎放射！」リザードンはよっぽど冷たかったのかすぐに火炎放射で氷を溶かした。
「最後は俺だな！うっし！行ってくるぜ！」
「勝てよバクフーン！」
「おう！」バクフーンがフィールドに入った。

「・・・僕の番か。」
チームブリザードからはフリーザーが出てきた。「それでは試合開始！」
「最初からとばしていくぜ！噴火！！」バクフーンは最大パワーの噴火でフリーザーを攻撃した。
「良い噴火だ。パワーも申し分ない。だけど・・・吹雪！！」フリーザーは吹雪を放った。噴火と吹雪がぶつかり合った。相性から言えば噴火が断然有利なのだが、フリーザーの吹雪の方がパワーが上だったようで、噴火が押し返された！
「くっ！電光石火！」
バクフーンは噴火を使うのを止めて電光石火で吹雪を回避した。
「ファイヤーに比べればまだまだ火力が弱いよ。氷のつぶて！」
フリーザーは無数の氷の塊を放った。
「まだ俺の実力はこんなもんじゃないぜ！火炎車！！」バクフーンは火炎車で氷のつぶての氷を全て溶かした。
「さぁ、ガンガン行くぜ！炎全開！！」バクフーンの背中の炎の火力がどんどん上がっていく。すると、バクフーンの姿が熱のせいで歪んで見えるようになってきた。
「・・・陽炎ってやつだね？それで姿を隠して僕に攻撃するつもりなんだろうけど・・・そうはさせないよ！」その時、バクフーンが炎全開で上げた周りの温度がフリーザーの冷気でどんどん温度が下がっていき、歪みも無くなってしまった！
「これってまさか！？」
「絶対零度！！」
フリーザーが一撃必殺の絶対零度をバクフーンに放った！
「電光石火！」バクフーンはギリギリで電光石火を使って回避した。
「ふ～、危ねぇ危ねぇ！あれ受けたらひとたまりもないからな！しっかし、俺の陽炎を簡単に攻略するなんて・・・あんたスゲェな！何だかワクワクしてきたぜ！」
「余裕だね？でも、いつまでその余裕が持つかな？原始の力！」フ

リーザーは岩タイプの技、原始の力でバクフーンの攻撃した。
「電光石火！」バクフーンは電光石火でこれを回避。そのままの勢いでフリーザーに向かって行った。
「風起こし！」フリーザーは風起こしを使ってバクフーンを近づけないようにして上空に逃げた。
「これを君はどう対処する？まず、高速移動から影分身！」フリーザーは高速移動からの影分身のコンビネーションで無数の分身を作り出した。
「燕返し！！」無数のフリーザーがバクフーンめがけて燕返しを繰り出した！
「穴を掘る！」バクフーンは穴を掘るで地面に潜り燕返しを回避した。
「攻撃する為の技を回避する為に使ったか・・・良い判断だね。でも、次にどう繋げるかな？」
「こうするんだよ！火炎放射！！」バクフーンは穴から出たと同時に火炎放射で攻撃した。だが、火炎放射が当たったのは分身だった。
「むやみに撃っても僕には当たらないよ。」
「今狙ったのはあんたじゃなくてあれさ！そろそろ落ちて来るぜ？」バクフーンに言われてフリーザーが上を見ると、絶対零度を使った時に出来た無数の氷柱があった。次の瞬間氷柱が落ちて来た！
「マズイ！？吹雪！！」
フリーザーは高速移動と影分身を止めて、吹雪で氷柱を吹き飛ばした。
「今だ！噴火！！」
バクフーンは再び最大パワーの噴火でフリーザーを攻撃した。噴火はフリーザーに直撃した。
「くっ！？」フリーザーはバランスを崩して地面に向かって落下していく。
「まだ行くぜ！電光石火から火炎車！！」
バクフーンは電光石火と火炎車のコンビネーションでフリーザーに

突っ込んで行った。
「リフレクター！！」
フリーザーはバクフーンの火炎車をリフレクターで弾いた！
「冷凍ビーム！！」
「火炎放射！！」
バクフーンの火炎放射とフリーザーの冷凍ビームがぶつかり合い、凄まじい爆発が起きた！その爆発の衝撃でバクフーンとフリーザーは吹き飛ばされた。
「イテテ・・・本当に強いなあんたは！」
「君も中々の実力だよ。僕をここまで追い詰めたのは、ファイヤーとサンダー以外では君が初めてだよ。そして・・・」
その時、周りの温度が下がり始めた。
「このコンビネーション技を使うのもファイヤーとサンダー以外では君が初めてだよ。果たして、君はこれをどう乗り切るかな？行くよ・・・心の眼から絶対零度！！！」フリーザーは心の眼で次に使う技を必ず当てる事が出来るようにしてから、一撃必殺の絶対零度を放った！
「やっば！？電光石火！」バクフーンは電光石火で回避しようとするが、心の眼の効果を受けた絶対零度はどこまでもバクフーンを追ってくる！
「この、火炎放射！」
バクフーンは火炎放射で絶対零度を打ち消そうとしたが逆に打ち消されてしまった！
「その程度じゃ僕の絶対零度は防げないよ！」
「クソ！」バクフーンは何とか電光石火で絶対零度を避けてはいるが、少しずつバクフーンの体力は限界に近づいていた。
「ハァ・・・ハァ・・・逃げてばかりじゃダメだな・・・こうなったら！」バクフーンは電光石火を止めて絶対零度のほうに突っ込んで行った！
「最大パワーの・・・フレアドライブ！！」

バクフーンは最大パワーのフレアドライブで絶対零度にぶつかって行った！
「くっ！？すっげ～パワーだ！？けど、負けねぇぞ！！」その時、バクフーンの身体から赤いオーラが現れた。特性の猛火が発動したのだ！少しずつ、絶対零度を押し返して行く！
「冷凍ビーム！！」
フリーザーは絶対零度に冷凍ビームを当てて押し返され始めた絶対零度を後押しした。バクフーンは再び押され始めた。
「・・・」バクフーンはフレアドライブの炎を維持しつつ、別の炎技を繰り出そうと炎エネルギーを集めていた。その間にもバクフーンは絶対零度に押されている。遂にバクフーンはフィールドの外の壁にぶつかってしまった！
「・・・これで・・・ラストだ！ブラストバーン！！！」バクフーンはフレアドライブの炎をブラストバーンと一緒に放つ事で凄まじいブラストバーンに変化した！どんどん絶対零度を押して行く！
「うわぁぁぁ！？」
遂にブラストバーンは絶対零度を撃ち破り、フリーザーを直撃した！
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・や、やったか・・・？」
ブラストバーンの炎が消えていく・・・
「・・・」何とフリーザーは倒れていなかった！まだ立っている！
「まだ倒れないのか！？」バクフーンはフラフラになりながらも何とか構えた。
「・・・負けたよ・・・ギブアップだ！」
いきなりフリーザーが降参した！
「えっ！？何で！？」
「もう・・・僕は動けないからさ・・・正直立ってるのがやっとなんだ・・・」
「ハァ・・・ハァ・・・俺はてっきり・・・まだやるのかと思って焦ったぜ・・・」
「僕は相手の目の前では絶対に倒れないって・・・そう決めてるか

らね・・・」
「あんた・・・カッコイイな！」バクフーンがそう言った時、フリーザーは照れたのか顔が少し赤くなった。
「オホン！・・・デリバード！」
「はいはい！さぁこれを受け取って下さい！」
デリバードは袋の中から何か出してバクフーンに渡した。
「ちょっ！？爆発する！？」次の瞬間渡された物が爆発・・・ではなくパカっと割れた。
「あれ？」バクフーンは割れたそれを確認すると、バッジが入っていた。
「それはこのジムを勝ち抜いた証、アイスバッジだよ。受け取って。」
「ありがとうフリーザー！これで六個目のバッジゲットだ！」
「ファイヤーが君達を気に入った理由が解った気がするよ。次のジム戦も頑張ってね！」
「おう！」バクフーン達は遂に六個目のバッジ、アイスバッジをゲットした。次のバッジをゲットする為に、彼らの旅はまだまだ続く！

第三十話久しぶりのジム戦！アイスジム！（後書き）

第三十話完成です！

第三十一話謎のポケモン襲来！（前書き）

見事アイスジムのジムリーダー、フリーザーを倒しバッジをゲットしたバクフーン達。次のジムがあるバトルシティに向かっていた時、またあの三人組が現れた。

第三十一話謎のポケモン襲来！

「待っていたぞお前達！今度こそお前達から金を奪い盗ってやる！」またドンカラス・ヘルガー・グラエナの三人がバクフーン達の前に現れた。
「もう前のようにはいかないからな！俺達はな・・・」ドンカラス達が話てるのを無視してバクフーン達は皆で話始めた。
「ま～た出で来たよあいつら。」
「懲りないねぇ。何度やっても結果は同じだと思うんだがなぁ。」
「どうするあれ？」
「相手にしなくて良いと思うぞ？正直面倒だ。」
「アタシもそう思う。」
「私も。」
「ラティアスちゃんと同じ意見だ。」
「んじゃ行きますか？」
「・・・ってコラァ！？人の話はちゃんと聞けぇ！？」バクフーン達は無視して先に進もうとしていました。

「お前ら～！これでもくらえ！火炎・・・」
「ハァ・・・遅いんだよ！雷！！」ピカチュウはヘルガーが火炎放射を放つ前に雷を決めた。
「お金はあげないけど代わりにこれをあげるよ！ハイドロポンプ！！」
ラグラージはハイドロポンプをドンカラス達に当てた。
「そんなのいらな～い！？」ドンカラス達はハイドロポンプで空のかなたに飛んで行きました。
「ありゃ。ちょっとやり過ぎたかな？」
「あいつらにはそれ位がちょうど良いんじゃない？さぁ、バトルシティに行こうぜ♪」再びバトルシティに向かおうとした時、ピチュ

ーが何かを見つけた。
「何、あれ？」
「どうしたピチュー？」
「お兄ちゃん、何かこっちに来るよ？」ピチューが指差した先には確かに何かがこちらに向かって来ていた。
「何だ？」次の瞬間、その何かからエネルギー弾がバクフーン達に放たれた！
「やばい！？皆避けろ！」バクフーン達はエネルギー弾が当たる寸前で避けた。
「危ねぇ・・・皆大丈夫か？」
「あぁ。」
「大丈夫です。」その時、バクフーン達の前に攻撃した奴が舞降りた。
「いきなり攻撃するなんてひどいじゃないか！何なんだお前は！？」
「・・・」
「黙って無いで何か言えよ！」
「・・・」そのポケモンは無言のまま戦う体制に入った。
「バトルするってか？やってやろうじゃんか！」「離れてろ！！」
バクフーンがそのポケモンに向かって行こうとしたその時、誰かがバクフーンを呼び止めて、オーロラビームと氷のつぶてを放った！だが、二つの攻撃はそのポケモンが守るを使って防御してしまった。その後すぐにそのポケモンは空に飛んで逃げてしまった。
「くっ逃げられたか！」
「あれ！？マニューラにクレセリアじゃん！？」
バクフーンを呼び止めたのはクレセリアとマニューラだった。
「あなた達無事？」
「平気です。あの、もしかしてさっきのポケモンがクレセリアさんが言っていた・・・」
「えぇそうよ。途中の街で私と先輩の目の前で、街の人達を攻撃したの！それで私達はあいつを捕まえようとしたんだけど、思ってい

た以上に強いうえに逃げ足が速くてね。ここまで追って来たらあなた達がいたって事。・・・それにしてもバクフーン！」
「え！？俺何かしたか？」
「前に言ったじゃない！あのポケモンを見つけたらバトルしちゃダメだって！」
「んな事言われても、あっちから先に攻撃して来たんだぜ？」
「クレセリア！今は話てる場合じゃないだろ。すぐに奴を追うぞ！」
そう言うとマニューラは逃げたポケモンを追い掛けた。
「あっ先輩待って下さいよ！あなた達、あいつを見つけても絶対にバトルしちゃダメよ！」
バクフーン達にそう言った後、クレセリアはすぐにマニューラの後を追った。
「マニューラさんにクレセリアさん、捕まえる事が出来ると良いですね。」
「そうだね。さぁ、僕達はバトルシティに向かおう！」謎のポケモンが気になりながらも、バクフーン達は次のジム、ルカリオがいるバトルシティに向かって再び歩き始めた。

第三十一話謎のポケモン襲来！（後書き）

第三十一話完成です。

第三十二話ＶＳカイリュー！（前書き）

バクフーン達は途中で立ち寄ったファイトタウンで一休みしていた。

第三十二話ＶＳカイリュー！

「行くぞリザードン！」「いつでも良いぜバクフーン！」バクフーン達はファイトタウンでバトルジムに備えてトレーニングしていた。
「ブラストバーン！」
「ならこっちもブラストバーン！！」バクフーンのブラストバーンとリザードンのブラストバーンがぶつかり合った。
「いきなりブラストバーンかよ。二人共加減を知らないなぁ。」
「そういうお前はどう何だ？俺が相手で加減出来るのか？」
「・・・出来ないな。むしろ本気でやりたいね！前回は負けたが今回は勝つぜ！１０万ボルト！」
「そう簡単には勝たせないぞ！１０万ボルト！！」ピカチュウとラティオスもトレーニングを開始した。
「ラグラージさん。本当に私達二人で相手して良いんですか？」
「うん。さぁ、どっからでも良いよ！」
「怪我しても知らないわよラグラージ兄ちゃん！行こうラティアス姉ちゃん！」
「え、えぇ。それじゃあ行きますよラグラージさん！」ラグラージはピチューとラティアス二人を相手にトレーニングを開始した。まず、バクフーンとリザードンの方は・・・
「電光石火！」
「おっと！」バクフーンの電光石火をリザードンは空に飛んで回避した。
「今度はこっちの番だ！エアスラッシュ連発！」リザードンは空中からエアスラッシュを雨の如くバクフーンに向けて放った。
「穴を掘る！」
バクフーンはエアスラッシュを穴を掘るで地面に潜る事で回避した。
「スピードスター！」
バクフーンは穴から出たと同時にスピードスターで攻撃した。

「火炎放射！」
スピードスターをリザードンは火炎放射で打ち消した。そしてすぐに次の攻撃をしようとしたのだが、バクフーンはすでにそこにはいなかった。
「また地面に潜ったのか？」
「残念！上だリザードン！」リザードンが上を見ると、何とバクフーンが火炎放射の勢いを利用して飛んでいた！
「行くぞリザードン！捨て身タックル！！」
バクフーンは落下スピードを利用して捨て身タックルで攻撃した。
「煙幕！」
リザードンは煙幕を出して自分の姿を隠した。バクフーンはそのまま突っ込んで行ったが攻撃は外れてしまった。リザードンは煙幕を出してすぐに移動していたのだ。バクフーンは地面に落下する前に火炎放射で落下スピードを遅くする事で何とか着地出来た。
「ふ～危ねぇ危ねぇ！やるなリザードン！」
「お前もな！まさか火炎放射の勢いを利用して俺の上を行くとは思わなかったぜ？本当、お前にはいつも驚かされてばっかりだよ。」
バクフーンとリザードンのトレーニングが盛り上がっている時ピカチュウとラティオスの方は・・・
「アイアンテール！」
「守る！」ピカチュウのアイアンテールをラティオスは守るで防御した。「「１０万ボルト！」」
ピカチュウはすかさず１０万ボルトで攻撃したが、ラティオスも１０万ボルトを使ってピカチュウの攻撃を防御した。
「ならこれだ！高速移動の影分身！そしてボルテッカー！！」ピカチュウは高速移動と影分身のコンビネーションで無数の分身を作り出し、更にその状態のままボルテッカーでラティオスを攻撃した。
「ラスターパージ！」
ラティオスはラスターパージの光を身に纏うのではなく、光を放出してピカチュウからラティオスの姿を見えなくした。ピカチュウは

かまわず突っ込んだが全ての攻撃が外れた。
「残念だったなピカチュウ。ラスターパージにはこんな使い方があるんだよ。」
「あっそう。ちなみにボルテッカーもこんな使い方があるんだぜ！くらえ！」ピカチュウはボルテッカーのエネルギーを尻尾に集めて、アイアンテールと同じような感じでラティオスを攻撃した。ラティオスはギリギリで直撃は避けたが、ボルテッカーの電気で軽くダメージを受けた。
「くっ！？やはり油断出来ない奴だなお前は！」
「へっ！さぁ、こっからだぜラティオス！」その時ラグラージとラティアス・ピチューは・・・
「あまえる♪」ピチューはラグラージに思いっきりあまえた。あまえるは相手の攻撃力をかなり下げる技なのだ。更に相手に軽く精神にダメージを与えてやる気を無くさせるのだ！
（・・・すっごくやりづらい（汗））
「だから二人で相手して良いのか聞いたのに。何か、ピチューだけで勝てそうだわ。」こっちのトレーニングは・・・いや、もはやトレーニングとは言えない状況だった。
「・・・」そんなバクフーン達のトレーニングを観察している一人のポケモンがいた。バクフーンはそのポケモンに気づいた。
「ん？何かよう？」
「このファイトタウンでトレーニングしているって事は、もしかしてバトルジムに備えてかな？」
「そうだけど、あんた誰だ？」
「僕はカイリュー。ねぇ君、僕とバトルしてみない？」
「俺？」
「そう、君。どうかな？」
「ＯＫだぜ！リザードン、良いか？」
「良いよ。」
リザードンはフィールドの外に出て、代わりにカイリューがフィー

ルドの中に入った。その時他の皆がトレーニングを中止して集まって来た。
「先攻は君からで良いよ。」
「んじゃ、遠慮なくやらせてもらうぜ！噴火！」バクフーンは噴火でカイリューを攻撃した。
「・・・」カイリューは噴火を避けようともせず、ただ噴火を観察していた。そして噴火はカイリューを直撃した。
「・・・良い噴火だね。」カイリューは噴火を受けた筈だが、全然平気な顔をしていた。
「あんた、かなり強いな？」
「次は僕の番だね。行くよ・・・ドラゴンダイブ！！」カイリューは物凄い勢いでバクフーンに突っ込んで行った。今度はバクフーンが避けようとせず、攻撃を受け止めようとしている。次の瞬間、カイリューのドラゴンダイブがバクフーンを直撃した！
「くっ！？」
バクフーンは何とかカイリューを受け止めようとしているがどんどん押されていき、最後にはフィールドの外に吹き飛ばされてしまった。
「いってぇ～・・・」
「まだバトルは始まったばかりだよバクフーン君。」
「解ってるさ！さっきのお返しだ！電光石火から捨て身タックル！！」
バクフーンは電光石火のスピードを利用して高速捨て身タックルを仕掛けた。
「竜の舞い。」
カイリューは竜の舞いでパラメータを上げながら高速捨て身タックルを回避した。
「なら火炎放射だ！」
バクフーンの火炎放射がカイリューに向かって行く。
「水の波動。」

バクフーンの火炎放射はカイリューが放った水の波動で打ち消されてしまった。
「君の力はそんなものじゃないだろ？君の全力を見せてくれよ。」
「これでも全力のつもり何だけどなぁ（汗）しゃあない、あの技を見せてやるよ！行くぜ、ブラストバーン！！」
バクフーンは最大パワーのブラストバーンを放った。
「ドラゴンクロー！！」カイリューはドラゴンクローでブラストバーンを切り裂いてしまった！
「なっ！？」
「高速移動からドラゴンダイブ！！」カイリューは高速移動のスピードを利用して高速ドラゴンダイブをバクフーンに決めた。バクフーンは吹っ飛ばされた！
「くっ・・・俺のブラストバーンを・・・切り裂くなんて・・・」
「これで終わり！」
カイリューは動けないバクフーンに最後の攻撃をしようとした。

「カイリュー！」その時突然ガブリアスがやって来た。カイリューは攻撃するのを止めた。
「やっと見つけたぞカイリュー！」
「あら。もう追いついたのガブリアス？」
「全く！勝手にいなくなるなよな！ほら、帰るぞ！」
「ハァ・・・解ったよ。ごめんねバクフーン君、バトルは中止。続きはまた今度やろう！それと、ジム戦頑張ってね！」
そうバクフーン達に言うと、カイリューはガブリアスと共にその場を去った。
「なんだったんだろう？」
「さあ？それより、バクフーン大丈夫か？」
「あ、あぁ・・・」
バクフーンはリザードンの肩を借りて何とか立った。
「随分やられたな？」

「参ったよ・・・あいつマジで強かった・・・だけど、次は絶対に勝つぞ！」

「まぁ今はとにかくポケモンセンターに行こう！回復したらバトルシティでジム戦だよ！」

バクフーン達はポケモンセンターで一日休んでから、いよいよ七つ目のジム、バトルシティに出発した。

第三十二話ＶＳカイリュー！（後書き）

第三十二話完成です！

第三十三話バトルジムへの挑戦！ＶＳルカリオ！（前書き）

バトルシティにやって来たバクフーン達。果たしてバクフーン達はバトルジムを制覇出来るのか？

第三十三話バトルジムへの挑戦！VSルカリオ！

「やっと着いた～！待ってろよルカリオ！必ずバッジをゲットしてやるからな！」
「気持ちは解るけどバクフーン。」
「まずはポケモンセンターだよ！って言いたいんだろ？」
「解ってるなら行くよ」
「は～い。」
バクフーン達はポケモンセンターで一休みする事にしました。
「ラグラージ！」
「はいはい、バトルジムのメンバーにはどんな奴らがいるのが知りたいんでしょ？」
「そう！」
「バトルジムのメンバーはルカリオのように格闘タイプが中心のチームらしいよ。それと後もう一つ。バトルジムのルールは二つあるみたいだよ。」
「二つのルール？」
「一つはチーム戦の六対六。そしてもう一つはルカリオとチャレンジャーチームの大将のシングルバトル。こっちのルールは滅多にやらないんだけど、ルカリオに認められた相手だけがこのルールでやるみたい。」
「ルカリオとタイマン勝負かぁ！やりたいなぁ！」
「そろそろ時間だな。行くか？」
「おう！」バクフーン達はバトルジムに向かいました。
「来たか・・・待っていたぞバクフーン！」
「ようルカリオ！ちゃんと六つ目のバッジをゲットして来たぜ！これでジム戦やってくれるよな？」
「もちろんだ！さぁ、バトルフィールドはこっちだ。」バクフーン達はルカリオに案内されてバトルフィールドにやって来た。

「ルカリオ。ジム戦のルールは？」
「いつもなら六対六でやるんだが・・・私はお前と戦いたい！お前と私のタイマン勝負はどうだ？」
「マジか！俺もルカリオと戦いたいと思ってたんだ！良いぜ！」
「決まりだな。早速やるか？」
「あぁ！」バクフーンとルカリオはバトルフィールドに入った。その時いつの間にか審判のハッサムもフィールドにいた。
「それではこれより、ジムリーダールカリオ対チャレンジャーバクフーンのジム戦を始めます！ルールはシングルバトル、時間無制限！それでは、試合開始！」
「行くぜルカリオ！火炎放射！」バクフーンはまず火炎放射でルカリオを攻撃した。
「ボーンラッシュ！！」ルカリオはボーンラッシュを高速回転させて火炎放射を防いだ。
「水の波動！」ルカリオは火炎放射を防ぎきった後にすかさず水の波動で反撃した。
「フレアドライブ！！」バクフーンはフレアドライブで水の波動を蒸発させて防いだ。
「火炎車！」バクフーンはフレアドライブから火炎車に切り替えて攻撃した。
「見切り！」ルカリオはこれを見切りを使って回避した。
「真空波！」ルカリオは衝撃波を放った。
「電光石火！」バクフーンは電光石火を使って真空波を回避。そのままルカリオに攻撃しようとしたその時、神速を使ってルカリオが目の前に来ていた！
「はっけい！」
「やっべ！？穴を掘る！」ルカリオがはっけいで攻撃した時、バクフーンは穴を掘るでこれをギリギリで回避した。
「波動は我にあり・・・」ルカリオは地面に潜ったバクフーンの波動を感じ取ろうとした。

「・・・来る！」ルカリオが高くジャンプしたその瞬間、バクフーンがルカリオがいた所から現れた！
「波動弾！」
「火炎放射！」ルカリオの波動弾とバクフーンの火炎放射がぶつかり合って爆発した。
「メタルクロー！！」
ルカリオは爆煙の中を突っ切ってバクフーンにメタルクローで攻撃した。
「電光石火！」
バクフーンは再び電光石火を使ってメタルクローを回避した。ルカリオのメタルクローは地面に直撃した。その瞬間地面が砕けて岩の破片が飛び散った。
「真空波！」ルカリオは真空波を使って岩の破片をバクフーンに放った！
「なら、噴火！！」
バクフーンは噴火を放って真空波と岩の破片を全て吹き飛ばした。
「電光石火から火炎車！」バクフーンは電光石火のスピードを利用したコンビネーション技で攻撃した。
「ブレイズキック！！」バクフーンのコンビネーション火炎車に対し、ルカリオはブレイズキックを使って防いだ！
「金属音！」ルカリオはここでステータス変化技の金属音を使った。まるで黒板を爪でひっかいたような音が響いた。
「うわぁ嫌な音だぁ！？」バクフーンは音を遮ろうと耳を塞いだ為に無防備になってしまった！
「隙有り！はっけい！」ルカリオは動けないでいるバクフーンにはっけいで攻撃しようとした。
「くっ！火炎放射！」
バクフーンは金属音に耐えながら火炎放射を放った。
「ボーンラッシュ！」
ルカリオははっけいを止めてボーンラッシュを高速回転させて火炎

放射を防いだ。
「あ～マジで嫌な音だった～！しっかし、まさかあのタイミングでステータス変化技を使って来るなんて・・・」
「相手の意表を突くのも戦術の一つだぞ。」
「なるほど。覚えておこう！んじゃ、バトルの続きといきますか！」
「あぁ、来い！」
「気合い玉！！」
バクフーンは格闘タイプの技である気合い玉をルカリオに放った。
「波動弾！」ルカリオは波動弾を使い気合い玉を打ち消した。
「神速！」
「電光石火！」ルカリオは神速、バクフーンは電光石火を使って物凄い速さでぶつかり合った！
「火炎車！」バクフーンは電光石火を使い続けながら火炎車を使った。
「見切り！」ルカリオはこれを冷静に見切りで対処した。
「これならどうだ！スピードスターから火炎放射！！」バクフーンはスピードスターと火炎放射のコンビネーションで攻撃した。
「ボーンラッシュ！！」だが、再びルカリオはボーンラッシュを高速回転させてこれを防御した。「波動弾！」
「火炎放射！」ルカリオはボーンラッシュで防ぎきった後すかさず波動弾で反撃した。その波動弾に対してバクフーンは火炎放射で応戦した。二つの技は激突して爆発した！その爆発で発生した爆煙の中をルカリオは神速で一気に突っ切りバクフーンの目の前まで来た！
「しまっ！？」
「インファイト！！」
ルカリオは神速のスピードをそのまま利用して超高速インファイトをバクフーンに決めた！バクフーンは吹っ飛ばされた！
「くっ！？油断しちまったぜ・・・」
「波動弾！！」
ルカリオは更に波動弾で追い討ちをかけた！

「・・・ブラスト・・・バーン!!!」バクフーンは一発逆転を狙って最大パワーのブラストバーンを放った!ルカリオの波動弾を弾きそのままルカリオめがけてブラストバーンは向かって行く。
「神速!」だが、神速でブラストバーンを回避された!ルカリオはそのままバクフーンの所に向かった。
「これで終わりだ!はっけい!!」ルカリオはブラストバーンを使った事で動けなくなっているバクフーンに最大パワーのはっけいを決めた!バクフーンは倒れた!
「バクフーン戦闘不能!よって勝者、ジムリーダールカリオ!」
「大丈夫かバクフーン!?」リザードン達がバクフーンに駆け寄った。
「身体が・・・動かねぇや・・・やっぱルカリオは強いなぁ・・・今回は負けたけど、次は必ず勝つからな・・・」
「あぁ。待ってるぞ。」バクフーンはバトルジムのジムリーダー、ルカリオとのバトルに負けてしまった。果たしてバクフーンはルカリオにリベンジ出来るのか?

第三十三話バトルジムへの挑戦！ＶＳルカリオ！（後書き）

第三十三話完成です！

第三十四話打倒ルカリオ！特訓開始！（前書き）

ルカリオに負けてしまったバクフーンはもっと強くなる為に特訓しようしていた時ルカリオがやって来た。何と自分が使っていた修行場所を貸してくれると言うのだ！バクフーン達はお言葉に甘えて修行場所を借りる事にした。

第三十四話打倒ルカリオ！特訓開始！

「ここがルカリオが言ってた修行場所か・・・随分バトルシティから離れた所にあるな～！」
「でもルカリオさん、何で私達に修行場所を貸してくれたんでしょう？相手を強くするって事は自分が不利になる事のに」
「ジムリーダーってのは、ただ勝つ為にジム戦をするのだけが仕事じゃなくて、挑戦者の力を引き出す事も仕事の一つなんだ。」ラティアスの疑問にラティオスが答えた。
「へぇ。兄さん詳しいね？」
「ま、まあな！」
（本当はこの前に見た週間ポケモンサンデーに載ってた事をそのまま言っただけなんだが・・・）「んじゃ行こうか！」
バクフーンはルカリオが修行場所として使っていた山の頂上に向かった。「あっ！待てよバクフーン！」リザードン達もバクフーンの後を追った。この山はかなり険しく、頂上を目指すだけでもかなり大変な山道だった。
「ハァ・・・ハァ・・・ルカリオ、良くこんな所で修行してたな・・・登るだけでもしんどいぜ・・・」
「それに・・・何だか息苦しいしね・・・」
「それは酸素が少ないからだろ。高い所に行けば酸素も少なくなるからな。」
「・・・てかお前達も歩けよ！ずるいぞ飛んで頂上行くとか！」
リザードン・ラティオス・ラティアスは歩かなくても飛べるからバクフーン達のように歩いていなかった。
「俺とラティアスは元々飛ぶ為に身体が出来てるから歩くとか出来ないんだよ。」
「ごめんなさいねバクフーンさん。」
「リザードン！」

「解った解った！俺も歩けば良いんだろ歩けば！」リザードンは飛ぶのを止めてバクフーン達と同じように歩き始めた。
「皆頑張って歩けよ～」いつの間にかピカチュウはラティアスの背中に乗っていた。
「あっピカチュウさんいつの間に・・・」
「お前も歩け！」
ラティオスはサイコキネシスでピカチュウをラティアスの背中から降ろした。
「やっぱダメ？」
「全くお兄ちゃんったら・・・ズルしちゃダメよ！」そういうピチューはラグラージの背中に乗っていた。
「お前はどうなんだよ！？」
「アタシは疲れたからラグラージ兄ちゃんの背中で休ませてもらってるだけですから♪」
（嘘だ！絶対頂上に着くまでラグラージの背中にいるつもりだ！）
バクフーン達が登山を開始してから2時間。ようやく山の頂上にたどり着いた。
「ハァ・・・ハァ・・・や、やっと着いた・・・疲れた～・・・」
バクフーンは大の字になって倒れた。
「まるでバトルフィールドだなここは・・・」
ラティオスが言うように山の頂上はバトルフィールドのような所だった。「どうする？早速トレーニング始めるか？」
「ちょ、ちょっと休憩させてくれよ・・・マジでクタクタなんだから・・・」
「ぼ、僕も・・・」
「・・・みたいだな。それじゃしばらく休憩してから始めるか。良し、俺は何か食べ物でも探して来る。リザードン、手伝ってくれ。」
「俺かよ！？」
「良いだろ。飛んで行けばすぐ何だから。ほら行くぞ！」
「はぁ～、解ったよ。」リザードンとラティオスは山の麓まで飛ん

で行きました。
「それじゃアタシはちょっと探検でもして来ようっと♪ラティアス姉ちゃんも来る？」
「良いわよ！」
ピチューとラティアスは近くを探検しに行きました。

「さてと・・・」
「どうしたのピカチュウ？」
「トレーニングだよ。」
「良くそんな体力が残ってるな・・・」
「トレーニングって言っても何をするの？」
「まぁ見てな！」
そう言うとピカチュウは近くにある岩場に向かって高速移動した。
そして、岩から岩へとジャンプしつつ高速移動した。
「ハァ・・・ハァ・・・こんな感じでやればルカリオみたいに足腰が強くなるだろ？」
ピカチュウは少し動いただけですでに肩で息をしている。
「なるほど。ただここでバトルするだけじゃなく周りのものも利用するって事だね？ルカリオもそんな感じでトレーニングしてたのかな？」
「多分な・・・しかし、少し運動しただけでこんなに疲れるとは・・・ここはトレーニングするにはうってつけって訳だな・・・」
「お～い！」その時リザードンとラティオスが戻って来た。
「早かったね？」
「そりゃ飛んで来たからな！それより、結構木の実持って来たぞ！」
リザードンのリュックの中にはたくさんの木の実が入っていた。
「凄いいっぱい持って来たね！」
「俺モモンの実も～らい♪」バクフーンは素早くモモンの実を食べた。
「速！？」

「疲れたんじゃなかったのか（汗）そういえばラティアスとピチューはどうした？」
「探検だって。もうそろそろ戻って来るよ。」
「何で解るんだ？」
「忘れたの？僕の頭のひれはレーダーになってるって。ほら、帰って来たよ。」ラグラージの言う通りラティアスとピチューが帰って来た。
「あっお帰り兄さん！」
「わぁ♪木の実がいっぱいだ♪」
「さぁ皆、まずは食べて体力を回復させるか！」バクフーン達はお腹がいっぱいになるまで木の実を食べた。それから１０分後、いよいよトレーニングを開始した。
「よ～し！行くぞリザードン！そりゃ！！」
「よっと！良い球投げるじゃないか！今度はこっちの番だ！うりゃ！！」トレーニング？いや、何故かバクフーン達はドッジボールを始めた。
「トレーニングが何でドッジボールになる訳！？」
「どうせやるなら楽しくやった方が良いだろ？それに、ドッジボールって意外に身体動かすから良いと思うんだけど？」
「わざわざ山の頂上でやらなくても良いと思うんだけど（汗）もっとちゃんとしたトレーニングをさ・・・って、げは！？」その時バクフーンが投げたボールがラグラージの顔面に直撃した！
「あらら（汗）」
「・・・バ～ク～フーン！！くらえ！！！」
ラグラージは渾身の力を込めてボールをバクフーンめがけて投げた！更にハイドロポンプを使ってボールのスピードと破壊力を上げた！
「うわわ！？」バクフーンはギリギリで避けた。
「この！！！」ラグラージはたくさんのボールをハイドロポンプで飛ばした！
「ちょ、ラグラージ！？いくら何でも怒り過ぎだって！？わわわ！

？」

バクフーンは全てギリギリでボールを避けていく。

「何で俺まで攻撃すんだよ!?おわっ!?」リザードンにもボールが飛んできた!リザードンも何とか空に飛んでこれを避けていく。

「・・・何だかんだ言いながらラグラージもドッジボールやってるな。」

「・・・それもラグラージかなり本気モードだしな。」

「兄さん達冷静ねぇ。止めさせ無くて良いの？」

「良いだろ。一応運動している事には変わりないし。」

「ラティオス兄ちゃんってクールねぇ！」

「さてそれはさておき、俺達も何かするか！」

「何かって何をすんだよ?ドッジボールか？」

「いや、鬼ごっこだ！」

「何故そこでその言葉が出る!?」

「鬼ごっこは鬼に捕まらないように絶えず走り回るし、鬼は捕まえようと必死に追うだろ?これはかなりの運動になると思うんだが。」

「そりゃそうだが、やっぱ技とかもっと鍛えた方が良いと思うんだが？」

「・・・タッチ!ピカチュウが鬼な!良し!二人とも逃げろ!」

ラティオスとラティアスとピチューはバラバラにピカチュウから逃げた。

「ズルイぞラティオス!?待てやこら!!」

ピカチュウは高速移動を使ってラティオスを追いかけた。

「もらったぁ!」

ピカチュウはラティオスを捕まえようとジャンプした。

「甘いな!」ラティオスは自分の姿を消した。ピカチュウはラティオスを見失い地面に激突した。

「イタタタ・・・そういえばラティオスとラティアスちゃんは姿を消せるんだった!てか、鬼ごっこでそれは反則じゃないか!?」

「解った解った。姿消すのは無しにしよう。」

ラティオスは姿を見えるようにした。
「お兄ちゃんもやる気になってるわね。」
「そうね・・・フフ！」
「どうしたのラティアス姉ちゃん？」
「何かこんな風に皆で遊ぶの久しぶりだなぁって思ってね！」
「そういえばそうね！いつ以来かしら？」
「アグノムさんと遊んで以来かしら？そういえばアグノムさん元気にしてるかしら？」
ラティアスとピチューが話てる間にピカチュウがやって来た。
「隙有り！」ピカチュウがピチューにタッチしようとした時、バクフーン達の方からボールが物凄いスピードで飛んで来てピカチュウに直撃した。「イタタタ・・・」
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・だ、大丈夫かピカチュウ？」
「ハァ・・・ハァ・・・ラグラージ、もう止めないか？」
「ハァ・・・ハァ・・・そ、そうだね・・・何か、怒るのにも疲れたし・・・」
バクフーンとリザードンとラグラージはかなり疲れてる様子だった。
「あと少しでタッチ出来たのに～・・・」
「不意打ちしようとするからよ！」
「う～ん・・・やはりバラバラに違う遊びをやるとこうなるか・・・次からは一緒にやるか。」
「・・・最初からこうなるのは解ってたような気がするのは気のせいかしら？」バクフーン達はトレーニングを開始してからあまり時間が経ってなかったが休憩する事にした。休憩する事１０分。
「うし！体力回復！何して遊ぶか？」
「また遊びかい！？そろそろ真面目にトレーニングした方が良いと思うけど・・・」
「そうか？ん～、じゃあそうするか！でも、何してトレーニングする？」
「やっぱバトルかな？」

「賛成！」バクフーンは勢い良く手を挙げて答えた。
「じゃあまず誰と誰がバトルするか決めないとね！」
「バクフーン。俺とバトルしないか？」
ラティオスがバクフーンにバトルしようと言って来た。
「ラティオスとか？」
「そういえば兄さんとバクフーンさんってまだ一度もバトルした事なかったっけ？」
「あぁ。一度バクフーンとバトルしてみたかったんだ！どうだ？やってくれるか？」
「ＯＫだぜ！やろう！」
「一組は決まりだね。他はどうする？」
「俺とやらないかピカチュウ？まだお前とバトルしてなかったからさ！」
「リザードンとか・・・良いぜ！」
「残るは僕とラティアスと・・・」
「アタシよ♪」
「だよね・・・」
（出来ればピチューとやりたくないなぁ。凄くやりづらいから（汗））
「ラグラージさん。私とやりませんか？」
「ラティアスと？僕は良いけど・・・ピチューは？」
「ラティアス姉ちゃんがやりたいなら良いわよ！アタシは見てるわ！」
「ありがとうピチュー。やりましょうラグラージ！」
「良いよ！」
こうしてバクフーンＶＳラティオス、リザードンＶＳピカチュウ、ラグラージＶＳラティアスのトレーニング試合を始める事になった。
まずはバクフーンとラティオスから始めた。
「行くぞバクフーン！水の波動！！」ラティオスは水の波動でバクフーンを攻撃した。

「火炎車！」バクフーンは火炎車で水の波動を蒸発させた。
「スピードスター！」
バクフーンは火炎車の周りにスピードスターを展開してラティオスに突っ込んだ。
「コンビネーション技か・・・ならこっちもコンビネーションだ！水の波動！そして１０万ボルト！！」ラティオスは水の波動と１０万ボルトを合わせて攻撃した。互いの技はぶつかり合った。
「電光石火！」
バクフーンは火炎車とスピードスターを解除して、一度電光石火を使ってラティオスから距離を取った。
「火炎放射！」
「竜の波動！」
バクフーンは火炎放射で攻撃した。それに合わせてラティオスも竜の波動で攻撃。再び互いの技はぶつかり合った。そして大きな爆発が発生した。「ハァ・・・ハァ・・・やっぱやるなラティオス！」
「ハァ・・・ハァ・・・お前もなバクフーン！」やはり酸素が少ないせいか二人共すでに疲れた表情をしている。
「だが・・・このバトルは俺が勝たせてもらうぞ！自己再生！」
ラティオスは自己再生を発動させて体力を回復させた！
「ハァ・・・ハァ・・・自己再生で持久戦に持ち込む気だな・・・だけど、そう簡単には負けないからな！電光石火から捨て身タックル！！」
バクフーンは速攻で勝負に出た！
「ラスターパージ！！」ラティオスはラスターパージで真っ向勝負を挑んだ！二人の技は互いにヒットし、二人共吹っ飛ばされた。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・限界・・・」バクフーンは倒れた！
「・・・くっ・・・」
ラティオスも倒れた。この勝負はどうやら引き分けのようだ。

「自己再生で回復したのに・・・回復以上のダメージを与えてくるとは・・・」
「ハァ・・・ハァ・・・電光石火のスピードで・・・捨て身タックルの威力を上げてたからな・・・」
「二人共ご苦労さん。良いバトルだったよ。さて、次はリザードン達の番だよ！」ラグラージに言われてリザードンとピカチュウが前に出た。
「手加減無しだからなリザードン！」
「あぁ！」
「行くぞ！１０万ボルト！」ピカチュウはまず１０万ボルトでリザードンを攻撃した。
「鋼の翼！」
リザードンは鋼の翼を地面に突き刺した。それにより１０万ボルトの電流を地面に逃がしてダメージを無くした。
「そのやり方・・・」
「あぁ、ファイヤーの鋼の翼の使い方を真似してみたのさ！本当にダメージが無いから正直驚いたよ。さぁ、今度はこっちの番だな。火炎放射！」リザードンは火炎放射で反撃した。
「高速移動！」
ピカチュウは高速移動で火炎放射を回避した。
（やっぱピカチュウのあのスピードは厄介だな・・・あのスピードを封じるには・・・やっぱあれか。）
「ボルテッカー！！」
リザードンが考えている間にピカチュウはボルテッカーでリザードンに突っ込んで来た。
「煙幕！」リザードンは煙幕を使い自分の姿をピカチュウから見えなくさせた。
（おそらくピカチュウの事だから煙幕を気にせず突っ込んで来るだろうから、ここで空に上昇してボルテッカーを避けて、隙が出来た所へ炎の渦でピカチュウの動きを封じれば！）リザードンの予想通

りピカチュウは突っ込んで来た。
（今だ！）リザードンは空に上昇してボルテッカーを回避。そして炎の渦を放つ体制に入った。ところが、さっきまでいた筈のピカチュウがすでにそこにはいなかった。
「いない！？一体何処に！？」
「ここだ！！」
ピカチュウはリザードンの頭上にいた！ピカチュウは落下スピードを利用してボルテッカーを使った。
（くっ！？どうする？さっきみたいに鋼の翼で電流を受け流そうにもここは空だから使えない。だとしたら・・・真っ向勝負しかないか！）
「フレアドライブ！！」リザードンは悩んだ末、フレアドライブでピカチュウのボルテッカーに真っ向勝負を挑んだ。二つの技はぶつかり合い爆発が発生して二人は吹っ飛ばされた。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・落下スピードを利用してボルテッカーを使うなんて・・・いやその前にどうやって俺の上を飛んだんだ？」
「ハァ・・・ハァ・・・簡単な事だ・・・光の壁を作りながら上まで登ったのさ・・・」
「なるほどな・・・」
（やっぱ強いなピカチュウは・・・空を飛べるからって全く有利にならない・・・）
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」
「ん？」
リザードンはピカチュウがかなり体力を消耗している事に気づいた。
（いくら酸素が少ないからってあそこまで・・・そうか！ピカチュウは高速移動やボルテッカーを使って多く動いたから俺より体力の消耗が早いのか！となると、もうピカチュウはさっきみたいに素早く動けない筈。なら、攻めるなら今だ！）
「オーバーヒート！！」リザードンは一気に勝負を決めようとピカ

チュウにオーバーヒートを放った！
「・・・光の壁！」
ピカチュウは光の壁を作ってオーバーヒートの軌道を変えて直撃を避けた。
「ハァ・・・ハァ・・・簡単にはやられないぜ・・・」
「くっ・・・まだそんな力が残ってたのか・・・だけど、これは今のようにはいかないぞ！」
リザードンは炎のエネルギーを集め始めた。
「これで最後だ！くらえ！ブラストバーン！！」リザードンはピカチュウにブラストバーンを放った。
「雷！！」
ピカチュウはブラストバーンを受けるのを承知で雷をブラストバーンにでは無くリザードン本人を狙って放った。互いの技は直撃した。
「・・・俺を直接狙って来るなんて・・・」
「ハァ・・・ハァ・・・ブラストバーンに・・・ぶつけるのも良かったが・・・パワーじゃお前に負けるからな・・・だから、お前を狙ったのさ・・・勝ちはしないが・・・負ける訳でも無いからな・・・くっ！？」
ピカチュウは倒れた。
「負けず嫌いな奴だな・・・」
リザードンも倒れた。先程のバクフーンとラティオスの時と同じでこの対決も引き分けのようだ。「お疲れ二人共！さぁ、今度は僕とラティアスの番だね！」
「よろしくお願いしますラグラージさん！」
ラグラージとラティアスが前に出た。
「先攻はラティアスからで良いよ！」
「それじゃ行きますよ！ミストボール！！」
ラティアスはまずミストボールでラグラージを攻撃した。
「アームハンマー！」

ラグラージはアームハンマーを地面に使って岩を砕いて目の前に岩の壁を作りミストボールを防いだ。
「ハイドロポンプ！」
ラグラージはハイドロポンプで反撃した。
「サイコキネシス！」
ラティアスはサイコキネシスを使ってハイドロポンプの軌道を変えてラグラージの方に向かわせた。
「守る！」
ラグラージは守るでハイドロポンプを防御した。
「僕のハイドロポンプをサイコキネシスでカウンターするなんて・・・」
「私だって強くなってるんですよ。竜の波動！」ラティアスは竜の波動を放った。
「冷凍ビーム！」
竜の波動にたいしてラグラージは冷凍ビームで対抗した。二つの技はぶつかり合い爆発した。
（今だ！）
ラティアスは爆発で起きた爆煙の中に入ると同時に自分の姿を透明にした。
「・・・そこだ！ハイドロポンプ！」
ラグラージは的確にラティアスの居場所を捕えてハイドロポンプを放った！
「守る！」
ラティアスはギリギリで守るを使って防御した。
「そうだったわ・・・ラグラージさんには姿を消そうが関係ないんですよね。」
「そういう事。アームハンマーからハイドロポンプ！」
ラグラージはアームハンマーで岩を砕いて、その岩をハイドロポンプでラティアスに飛ばした！
「サイコキネシス！」

ラティアスはサイコキネシスで無数に押し寄せる岩をラグラージに跳ね返した。
「ハイドロカノン!!」ラグラージはハイドロカノンで無数の岩を吹き飛ばした!更にそのままハイドロカノンはラティアスに向かって行く!
「守る!」
ラティアスはギリギリでハイドロカノンを守るで防御した。
「びっくりしたぁ!ラグラージさんいつハイドロカノンを使えるようになったんですか?」
「ポケモンレンジャーの本部でエンペルトに教えてもらったのさ!まだ完全にコントロール出来ないんだけどね。さぁ、バトルを続けようかラティアス!」
「えぇ!シャドーボール!!」
ラティアスはシャドーボールを放った。
「マッドショット!!」ラティアスのシャドーボールにたいしてラグラージはマッドショットで対抗した。二つの技はぶつかり合い爆発した。
「エナジーボール!!」ラティアスはすかさずラグラージの弱点である草タイプの技、エナジーボールを放った。
「守る!」
ラグラージはこれを守るで防御した。
「今だ!竜星群!!」
ラティアスは守るを使い終わった瞬間を狙って竜星群を使って勝負に出た!
「ハイドロカノン!!」ラグラージもハイドロカノンで最後の勝負に出た!だが、ハイドロカノンをまだ完全にコントロール出来ないラグラージの攻撃はラティアスに当たらなかった。ラティアスの竜星群は全てラグラージに直撃した。ラグラージは倒れた。この勝負はラティアスの勝ちだ!
「大丈夫ですかラグラージさん?」

「・・・う、うん大丈夫・・・」
（本当は大丈夫じゃないけど・・・）
「お疲れラティアス姉ちゃん！かっこよかったわよ！」
「ありがとうピチュー！」皆のバトルが終わった頃にはもう夜になっていた。
「いつの間にこんな時間になってたのか！」
「どうする？もう寝るか？」
「そうだね。さすがに疲れたし。」
バクフーン達は寝る為によこになった。
「星が綺麗・・・」
「本当ねぇ・・・」
「また明日もトレーニングだから早く寝なよ？」
「は～い。」
「・・・ぐぅぅ・・・」
「バクフーンもう寝たのか！？」
「昔から寝るの早いからな。俺達も寝ようぜ・・・」
「うん・・・お休み～」バクフーン達は明日のトレーニングに備えて眠りについた。

第三十四話打倒ルカリオ！特訓開始！（後書き）

第三十四話完成です。

第三十五話バクフーン覚醒！（前書き）

バクフーン達がトレーニングを開始してから約一週間が経過していた。

第三十五話バクフーン覚醒！

「火炎放射！」
「１０万ボルト！」
バクフーンの火炎放射とピカチュウの１０万ボルトがぶつかり合い爆発が発生した。
「あの時は引き分けだったが、今日は俺が勝つからなバクフーン！」
「そうはいかないぜ！勝つのは俺だ！」
「「電光石火！」」
二人は電光石火を使って何回も超高速でぶつかり合った。
「二人共速いなぁ！あんなに動いたらすぐに疲れが出ちゃうんじゃないのかなぁ？」
「でも、最初の時に比べるとすぐに疲れなくなりましたよね？」
「体力がついたからだろうな。」
「お～い！木の実持って来たぞ～！」
リザードンが大量の木の実を持って来た。
「おっ！来た来た！バクフーン！ピカチュウ！バトルはそこまでにしてランチにしようよ！」
「いただきます♪」
すでにバクフーンはモモンの実を食べていた。
「速！？てか、またモモンの実かい！？」
「だって美味いんだもん！」
「まぁとにかく皆も食べよう！」
リザードン達もランチにした。
「そういえば俺達がここに来てどれ位たった？」
「そうだねぇ・・・１週間位かな？」
「もうそんなにいるんですね私達！」
「ビックリだねラティアス姉ちゃん！」
「って二人共！？」

「はい？」
「何？」
ラティアスとピチューの口の中が真っ黒になっていた。
「二人共何食べてるの？」
「ブリーの実だよ。」
「この実を食べると毛づやが良くなるんですって！ラグラージさんもどうですか？」
「いや・・・遠慮しとくよ・・・（汗）」
「おっ！この実美味そうじゃん！」
ピカチュウが凄く赤い実を食べようとした。
「ちょっと待ったピカチュウ！その実はマトマの実だぞ！」
「マトマの実？」
「すっげぇ辛い木の実なんだ！採る時に紛れ込んだんだな。それは食わない方が良いぞ！」
「わ、解った。」
ピカチュウはマトマの実を置いた。
「ごちそうさまでした♪ピカチュウ！バトルの続きをしようぜ！」
「もう食ったんか！？ちょっと待ってくれよバクフーン！俺まだ食べ終わってないからさ！」
「え～！やろうぜバトル～！バトル！バトル！」
「うるさいなバクフーン！ランチの時位静かにしてよ！」
「ちぇ～・・・」
バクフーンはしょんぼりしてしまった。
「はぁ・・・しゃあないな！バクフーン、俺が代わりにバトルしてやるよ！」
リザードンがバクフーンに言った。
「マジで！やろうぜ！」リザードンの言葉を聞いた途端バクフーンは元気になった。
「本当にバトルが好きだよなぁお前。ここじゃラグラージ達に迷惑だから少し遠くでやろうぜバクフーン。」

「ＯＫ♪」
バクフーンとリザードンはラグラージ達の所から離れた。
「ここまで離れれば良いだろう。そんじゃ、やるかバクフーン！」
「おう！行くぜリザードン！火炎放射！」
バクフーンは火炎放射を放った。
「炎の渦！」
リザードンは炎の渦でバクフーンの火炎放射を渦の中に取り込んだ。
「げっ！？」
「炎の渦にはこういう使い方があるのさ！ほら、ぼーっとしてると渦に巻き込まれるぜ？」
炎の渦は火炎放射を取り込んだ事で勢いを増し、バクフーンに近づいていく。
「電光石火！」
バクフーンは電光石火を使ってこれを回避して。
「待ってました！」
リザードンはバクフーンが電光石火で回避する事を予想していて先回りしていた。ドラゴンクローがバクフーンに襲いかかる！
「おっと！？」
バクフーンはドラゴンクローが当たるギリギリの所で何とか回避する事が出来た。バクフーンは一旦電光石火でリザードンから離れた。
「ふ～！危ねぇ危ねぇ！良く俺の避ける方向が解ったな？」
「どんだけ付き合い長いと思ってんだよ？お前が右や左に動く時、必ずお前はその方向に身体を傾けるんだよ。ほんの少しだけな。」
「あらま。俺ってばそんな癖があったのか！」

「まぁあんま気にしなくて良いと思うぞ。癖ってのはすぐには治らないしな。・・・バトルの続きやるか？」
「もち♪」
「ＯＫ！行くぜ！」
バトルが再開した。

「炎の渦五連発！！」
リザードンは炎の渦を連発してバクフーンを囲んだ。
「逃げ場は無いぜ！くらえバクフーン！オーバー・・・」
リザードンがオーバーヒートを放とうとした時、突然上空から破壊光線が放たれた！リザードンとバクフーンは直撃は避けたが爆風で吹き飛ばされた！
「痛ってぇ・・・リザードン無事か？」
「あぁ・・・」
「何処のどいつだこんな事する奴は！？」
「・・・」
バクフーンとリザードンの目の前に一人のポケモンが舞降りた。
「お前は・・・あの時のポケモン！？」
バクフーン達の前にいるのはクレセリアが言っていた謎のポケモンだった。すでにバトルをする体勢に入っている。
「・・・リザードン、皆を呼んで来てくれ。」
「お前まさか戦うつもりか！？」
「大丈夫、無茶しねぇから。さぁ、早く！」
「・・・解った。」
リザードンはラティオス達の所に向かった。
「・・・お前は一体何者なんだ？何で俺達を攻撃したんだ？」
「・・・オレ・・・デオキシス・・・オマエ・・・コロス・・・」
「俺を・・・殺す！？俺がお前に何したんだよ！？」
「・・・シネ・・・！」デオキシスは自分の腕をまるで槍のように尖らせて、バクフーンを攻撃した！
「電光石火！」
バクフーンは電光石火で回避した。
（こいつ・・・本気で俺を殺す気だ！こんな所で死んでたまるかよ！）
「噴火！！」
バクフーンは最大パワーの噴火をデオキシスに放った！

「・・・フォルムチェンジ・・・ディフェンス・・・！」
デオキシスはディフェンスフォルムにフォルムチェンジした。バリアを展開して噴火を防御した。
「姿が変わった！？何なんだお前は！？」
「・・・フォルムチェンジ・・・アタックフォルム・・・ハカイコウセン！」
噴火を防いだ後、デオキシスはアタックフォルムにフォルムチェンジした。そして凄まじい威力の破壊光線を放った！
「くっ！？電光石火！！」バクフーンは当たる寸前でなんとか電光石火で回避した。破壊光線は近くにあった別の山に直撃した。その瞬間その山は跡形も無く吹き飛んでしまった！
「・・・山が・・・吹き飛んだ！？なんて威力の破壊光線だよ！？」
「バクフーン！」
その時、リザードンが皆を連れて戻って来た。
「大丈夫かバクフーン？」
「あぁ。それより気をつけろ皆！あいつはマジでやばいぞ！」
「・・・フフフ・・・ミンナソロッタ・・・オマエラ・・・ミナゴロシダ・・・！」
デオキシスがバクフーン達に向かって突っ込んで来た！
「上等だ！俺が倒してやる！ボルテッカー！！」ピカチュウはボルテッカーでデオキシスに突っ込んで行った！
「・・・テレポート・・・！」
デオキシスはボルテッカーが当たる寸前でテレポートを使い回避した。
「ちっ！何処に行った！？」
「ピカチュウ！上だ！」ピカチュウが上を見るとデオキシスがアタックフォルムの状態で突っ込んで来ていた！
「・・・バカヂカラ・・・！」
デオキシスの馬鹿力がピカチュウに決まった！
「がはっ！？」

「・・・オマエカラ・・・シネ・・・！」
デオキシスが腕を槍のように鋭く尖らせてピカチュウに向けて突き刺そうとした！
「電光石火からフレアドライブ！！」
その時バクフーンがコンビネーション技でデオキシスを吹き飛ばし、ピカチュウを助けた！
「大丈夫かピカチュウ！？」
「・・・」
ピカチュウはどうやらさっきの馬鹿力を受けて気絶してしまったようだ。
「ピカチュウを一発で・・・」
「あいつ・・・許さん！竜の波動！！」
ラティオスはデオキシスに向けて竜の波動を放った。
「・・・フォルムチェンジ・・・ディフェンスフォルム・・・！」
デオキシスはディフェンスフォルムにフォルムチェンジしてバリアを作り出し、竜の波動を防御した。
「ラティアス！竜星群であいつを倒すぞ！」
「うん！」
「「竜星群！！」」
ラティオスとラティアスは最大パワーの竜星群を放った！
「・・・ミラーコート・・・！」
デオキシスは受けた技を倍返しにして相手に跳ね返してしまうミラーコートを使った！竜星群が倍返しとなってラティオスとラティアスに直撃した！
「ぐあぁぁぁ！？」
「きゃあぁぁ！？」
二人は吹き飛ばされた！「ラティオス！？ラティアス！？」
二人共気絶していた。
「・・・何なのよあいつ・・・恐い・・・」
ピチューはデオキシスに恐怖して震えていた。

「・・・ピチュー、お前は逃げろ！」
「えっ！？」
「あいつは俺達が抑えるから・・・ピチューはここから逃げて助けを呼んで来てくれ！」
「で、でも！」
「大丈夫だよピチュー。ここは僕達に任せて早く行って！」
「・・・うん。兄ちゃん達・・・気をつけてね！」ピチューはバトルシティに向かって走って行った。
「・・・ニガサン！」
デオキシスがピチューに向かって行こうとした。
「行かせるかって！火炎放射！」
「エアスラッシュ！」
「ハイドロポンプ！」
バクフーンの火炎放射、リザードンのエアスラッシュ、ラグラージのハイドロポンプがデオキシスの行く手を阻んだ！
「ここから先に行きたかったら・・・俺達を倒してからだ！」
「・・・イイダロ・・・サキニオマエラカラ・・・コロス・・・！」
デオキシスがディフェンスからアタックにフォルムチェンジしてバクフーン達に突っ込んで来た！
「ラグラージ！」
「任せて！アームハンマー！！」
ラグラージはアームハンマーを地面にぶつけて巨大な岩を作り出した。
「リザードン！」
「おう！岩砕き！！」
リザードンは岩砕きで巨大な岩を砕いた！
「ラストは俺だ！噴火！！」
バクフーンは噴火を使って砕けた岩を炎に包ませてデオキシスに放った！それは直撃して、デオキシスは燃える岩石の下敷きになった。
「よっしゃ！決まったぜ！」

「バクフーン！今のうちに三人を連れてここから逃げよう！」
バクフーン達がラティアス達の所に行こうとした時、突然岩石が宙に浮いた！デオキシスがサイコキネシスで浮かせたのだ！
「そんな・・・」
「・・・シネ・・・！」デオキシスがサイコキネシスで岩石を操ってバクフーン達を攻撃した。バクフーン達は回避しようとしたが、岩石の数が多すぎて回避しきれず受けてしまった！デオキシスは岩石を何回も連続でバクフーン達にぶつけた。
「くっ・・・」
バクフーンは何とか立っているが、リザードンとラグラージはもう立てない程ダメージを受けていた。
「・・・クソ・・・身体が・・・動かねぇ・・・」
「・・・ククク・・・マズハ・・・オマエカラダ・・・」
デオキシスはゆっくりとリザードンに近づいて行く。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・ま、待てよ・・・」
バクフーンは何とかデオキシスを自分に向かわせようとするがデオキシスはバクフーンを無視してリザードンの所に向かった。そして腕を槍のように鋭く尖らせた。
「・・・やっべ～・・・」リザードンは逃げようとするが身体が思うように動かない。
「・・・シネ！」
デオキシスが槍の腕をリザードンに突き刺そうとした。
「止めろぉぉぉ！！！」その時バクフーンの身体から凄まじい炎が現れてバクフーンを包み込んだ。次の瞬間、バクフーンは一瞬でデオキシスの目の前に現れて火炎車を決めた！デオキシスは吹っ飛ばされた！
「・・・バクフーン・・・お前・・・」
「・・・休んでいろリザードン。あいつは俺が倒す。」
バクフーンの雰囲気がいつもと違っていた。その時、吹っ飛ばされたデオキシスが起き上がった。

「ヨクモ・・・コロス・・・オマエハ・・・ゼッタイコロス！」
「・・・うるさい奴だ・・・良いからかかってこい。」
「・・・シネ！」
デオキシスはテレポートで一気にバクフーンの前まで来て、槍の腕をバクフーンに繰り出した。だが、バクフーンは簡単にその攻撃を避けた。
「・・・終わりか？」
「・・・コノ！」
デオキシスは連続で突き刺そうとするが全てバクフーンは回避した。
「・・・今度は俺の番だ。火炎放射。」
バクフーンはゼロ距離で火炎放射をデオキシスに決めた。いつもの火炎放射より何倍も威力が上がっていた。デオキシスは再び吹っ飛ばされた！
「・・・デオキシスを・・・完全に圧倒している！」
「リザードン・・・大丈夫？」
ラグラージがフラフラになりながらもリザードンの所にやって来た。
「あぁ・・・まだ生きてるぜ・・・」
「ねぇ・・・バクフーンのあの炎って・・・ディアルガを倒した時に出した炎だよね・・・？」
「あぁ・・・」
「何なの・・・あの炎は？」
「さぁ・・・俺も解らないが・・・一つ解るのは・・・今のあいつはとてつもなく強いって事だ」その言葉の通り、バクフーンは圧倒的な力でデオキシスを圧倒していた。
「・・・クソ・・・ドウナッテル！？」
「・・・そろそろこの戦いを終わりにしようか」バクフーンは炎のエネルギーを集め始めた。すると、巨大な火の玉が現れた。
「終わりだ。ブラストバーン。」
バクフーンは巨大なブラストバーンをデオキシスに放った！ブラストバーンは直撃し、巨大な火柱が発生した。

「やったのか？」
火柱が消えていく・・・しかし、そこにはデオキシスはいなかった。
「いない！？」
「・・・テレポートで逃げたか・・・」
バクフーンを包んでいた炎が消えた。その瞬間まるで力が抜け落ちたようにバクフーンは倒れた。
「疲れた～・・・」
いつものバクフーンに戻っていた。
「バクフーン兄ちゃーん！」
その時、ピチューが戻って来た。隣にはルカリオとルカリオのチームメンバーがいる。ピチューはルカリオ達に助けを求めたようだ。
「大丈夫か！？」
「ようルカリオ・・・一応大丈夫・・・皆生きてるよ・・・」
「バクフーン兄ちゃん、あいつは何処？」
「テレポートでどっかに逃げちまった・・・」
「逃げたって・・・あいつを追い払ったの！？」
「バクフーンがディアルガを倒した時に出した炎のおかげでね。」
「ピチュー、今はバクフーン達をポケモンセンターまで連れていくのが先だ。話はそれからだ。」
「あ、うん！」
バクフーン達はルカリオ達に連れられてポケモンセンターに向かいました。

第三十五話バクフーン覚醒！（後書き）

第三十五話完成です。

第三十六話ピカチュウの新戦法！（前書き）

デオキシスを何とか追い返す事がバクフーン達はポケモンセンターで傷の手当てを受けていた。

第三十六話ピカチュウの新戦法！

「イタタタ！？も、もうちょい優しくやってくれよハピナス！」
「何言ってるの！男だったらこれくらい我慢しなさい！」
そう言うとハピナスはバクフーンに包帯をきつく巻いた。
「はい終わり！後はラグラージ君とリザードン君で最後ね。・・・覚悟は良い？」
「えっいや、まだ・・・」
「あっぼ、僕は大丈夫だから・・・」
「問答無用！おとなしくしてなさい！」
二人はハピナスに優しく？包帯に巻かれた。二人の悲鳴が聞こえたような気がするのは気のせいだろう。
「バクフーン。ちょっと話が・・・」
「ん？ん～んん・・・」ルカリオが話そうとしたらバクフーンはミイラのように包帯がぐるぐる巻きにされてるせいでまともに喋れない状態だった。
「ハピナス・・・これはやり過ぎだぞ（汗）」
「あら。それでも軽めのつもり何だけど。」
「良いから、包帯をもっと軽めにしてやれ。あとそこの二人も。」
ルカリオの視線の先にはバクフーンみたいにミイラのようにぐるぐる巻きにされたリザードンとラグラージがいた。
「はぁ、解ったわよ。」ルカリオに言われてハピナスは三人の包帯を軽めにした。
「ルカリオ、話ってなんだ？」
「まず、お前らに襲いかかって来たデオキシスはポケモンレンジャーが今全力で捜索している。それと、私を含め全ジムリーダーも捜索に協力する事になった。」
「そうなんだ。」
「あぁ。それとバクフーン、ジムの事なんだが・・・私はあのデオ

キシスの事を調べる為にしばらくジムを留守にするんだ。」
「えっ!?じゃあジム戦はどうすんだよ!?」
「私は3日後に出発する。それまではジムにいるから・・・」
「じゃあ3日以内にジム戦しに行くよ!」
「待ってるぞ!」
ルカリオはジムに戻って行った。
「3日以内か・・・それまでに怪我治さないとな!待ってろよルカリオ!」
「バクフーン。ちょっと聞きたい事があるんだけど・・・」
「何だラグラージ?」
「デオキシスを追い払った時に出したあの炎・・・あれは一体何なの?」ラグラージはずっと疑問に思っていた事をバクフーンに聞いた。
「あれか?う~ん・・・実は俺も良く解らないんだよな。気がついたらあれが出てたんだよなぁ。そしたら、身体中から力が溢れて来てさ!誰にも負ける気がしなかったんだよな!」
「本人も解らないって・・・あ~何なんだあの炎は!気になる~!」
「まぁ良いじゃないかラグラージ。それよりバクフーン。あの炎は絶対ルカリオとの戦いやこれから先の戦いでも役に立つと思うんだ!だから、いつでもあの炎を出せるようにしたらどうだ?」
「そうだな!後で練習してみるか!」
「・・・練習するのは良いけど、まずはその怪我を治してからよ!」ハピナスが言った。
「は~い。」
バクフーン達は怪我を治す為にポケモンセンターで1日休む事にした。・・・翌日。
「うっし!治った!」
「やっぱハピナスが作った薬は効くねぇ。」
バクフーン達の怪我はハピナス特製の薬のおかげで怪我はすっかり完治した。

「ようし！リザードン！さっそく悪いんだけど・・・」
「まさか・・・バトルか？」
バクフーンの目はキラキラ輝いていた。
「やっぱか（汗）しゃあないな！それじゃ、近くのトレーニング場に行くか。」
「そうこなくちゃ♪」
バクフーン達はポケモンセンターの近くにあるトレーニング場にやって来た。
「ルールはシングルで時間無制限で良いな？」
「ＯＫ！」
「良し！じゃあ行くぞバクフーン！」
バクフーンとリザードンはバトルを始めた。
「なぁラグラージ。俺達が気を失ってる間に何があったか教えてくれないか？」
「そういえば言ってなかったね。実は・・・」
ラグラージはラティオス達に昨日起きた事を説明した。
「・・・じゃあ、バクフーンがディアルガを倒した時に出したあの炎のおかげで俺達は助かったのか。」
「うん。」
「「火炎放射！」」
バクフーンとリザードンの火炎放射がぶつかり合った。
「・・・ところでさ、何で二人はバトルする事になったんだ？」
今度はピカチュウがラグラージに質問した。
「バクフーンがいつでもあの炎を出せるようにする為・・・なんだって。でも、そんな簡単に出せるようになるとは思えないんだよなぁ。」
「ラグラージ兄ちゃん、あれ。」
ピチューが指差した先には例の炎を出しているバクフーンがいた。
「・・・えぇ！？出せるようになっとる！？」
ラグラージは凄い驚いている。

「・・・大体感覚は解った。リザードン、ありがとうな。」
「お、おう・・・」
（こんなに早く出せるようになるとは思ってなかったぜ（汗）やっぱすげぇや、バクフーンは！）
「何か・・・バクフーンさん雰囲気変わってますね？」
「あぁ・・・いつものバクフーンが子供なら、今のバクフーンは大人って感じだな。」
バクフーンは例の炎を消した。
「ふ～・・・この炎、出してるとすっげぇ疲れるな～・・・！」
「あっいつものバクフーンさんに戻った。」
「そういえばバクフーン。その炎あの炎って言うより何か名前付けたら良いんじゃないか？」
リザードンが言った。
「あっ良いねそれ！う～んどんな名前が良いかな～・・・ギア・セカンドは？」
「いや・・・それもう他の漫画で出てるから・・・」
「じゃあ天衣無縫の極み。」
「それも他の漫画でやってるし！」
「あの～・・・ブラストモードってどうでしょうか？」
ラティアスがバクフーンに言った。
「ブラストモード？」
「はい。何か強そうなイメージじゃないですか。どうですか？」
「ラティアス！それ採用♪良いねブラストモード♪」
バクフーンは気に入ったみたいだ。
「良かった、気に入ってもらって！」
「・・・」
ピカチュウは何か考え事をしているようだ。
「どうしたんだピカチュウ？」
「えっ？い、いや、何でも無い・・・それよりバクフーン。ジム戦はいつ行くんだ？」

「俺は今すぐにでも行きたいんだけど・・・」
「バクフーン。」
「解ってるってラグラージ！ジム戦は明日にするよ！」
「明日か・・・解った。」そう言うとピカチュウは何処かに行こうとした。
「何処行くんだピカチュウ？」
「ちょっとトレーニングしに行って来る。」
「付き合おうか？」
「いや、一人で平気だ。後でポケモンセンターでな！夜には帰るから！」ピカチュウはトレーニングしに何処かに行ってしまった。
「どうしたんだあいつ？」
「デオキシスに勝てなかったのが悔しかったんだろ。あいつ負けず嫌いだからな。」
「でもトレーニングなら俺達と一緒にやれば良いのに。」
「いつも俺達とトレーニングしても、レベルアップにはならないから一人でやろうとしてるんだろう。それより、俺達は夜までどうする？」
「そういえば最近バトルシティに美味しいラーメン屋さんが出来たらしいんだけど行ってみる？」
「おっ良いね♪」
バクフーン達はバトルシティのラーメン屋さんに行く事にしました。
一方ピカチュウは一人でトレーニングをしていた。
「１０万ボルト！」
ピカチュウの１０万ボルトは用意された的に命中した。
「クソ・・・こんなんじゃダメだ・・・何か良い方法は無いのか？もっと技の威力を上げる方法は？」
ピカチュウは自分の技の強化をする為にはどうすれば良いか一生懸命考えていた。そんなピカチュウを遠くから見つめているポケモンが三人いました。
「・・・兄貴！あいつですよ！」

「解ってるさ・・・今日こそぶっ倒してやる！」「・・・兄貴達～何であいつらにこだわるんすか～？他の奴に狙いを変えたりした方が良いと思うんすけど～？」三人とはヘルガー・ドンカラス・グラエナの事だった。
「馬鹿野郎グラエナ！あいつらに馬鹿にされたままで悔しく無いのか？」
「そりゃ悔しいっすけど～・・・」
「とにかく！今日こそあいつにギャフンと言わせてやる！」
「何か策があるんですか兄貴？」
「フッフッフ！良くぞ聞いてくれたドンカラス！今日はとっておきの作戦があるのだ！」
「お～さすが兄貴！それでどんな作戦何です？」
「それはだな！まず・・・」ヘルガーはドンカラスとグラエナに作戦を説明した。
「・・・とっ言う訳だ！どうだこの作戦は？」
「完璧です兄貴！」
「何か～今回はやれそうな気がするっす～。」
「そうだろそうだろ♪良し、早速準備だ！」
ヘルガー達は何処かに行った。そんなヘルガー達に気づいていないピカチュウはまだ技の威力を上げる方法を考えていた。
「・・・あぁダメだ！全然思いつかない！」
ピカチュウは大の字になって倒れた。
「・・・はぁ・・・」
「お兄ちゃん。」
その時ピチューがやって来た。
「ピチューか・・・どうした？」
「お兄ちゃんが気になったから来たの。トレーニングはどうしたの？」
「ちょっと休憩中。技の威力を上げる方法を考えていたんだけど・・・全然思いつかなくてさぁ・・・」

「そうなんだ・・・ねぇお兄ちゃん。バクフーン兄ちゃん達が今バトルシティに出来たラーメン屋さんにいるんだけど行かない？すっごく美味しいんだよ！」
「ラーメンなぁ・・・」
「たまにはバトルの事を忘れたら？それに美味しいものを食べれば何か良い方法が思い浮かぶかもしれないわよ？」
「・・・そうだな。良し、行くか！」
「ラーメン屋さんはこっちよ！早く行こう！」
ピカチュウはピチューと一緒にバクフーン達がいるラーメン屋さんに向かう事にしました。
「お兄ちゃん早く～！」「そんなに急ぐなよ！ラーメン屋は逃げたりしないだろ？」
「きゃ！？」その時目の前を走っていたピチューが突然消えた！
「ピチュー！？」
ピカチュウが慌ててピチューが消えた所に向かうとそこには大きな穴があった。
「ピチュー大丈夫か？」
「いった～い！？もう何なのよ！」
「ハーッハッハッハ！引っ掛かったな！」
その時ピカチュウ達の前にヘルガー・ドンカラス・グラエナが現れた。
「またお前達か・・・」
「あれ？兄貴、何かピカチュウじゃない奴が落とし穴に落ちてますよ？」
「何！？」
「お前達がやったのか・・・この落とし穴。」
ピカチュウは怒り口調で言った。ほっぺたの電気袋から電気をバチバチと出しながら。
「兄貴～すっごい怒ってるよあいつ～（汗）」

「ちっ！あいつを落とし穴に落としてボッコボコにしてやろうとしたが仕方ない！行くぞドンカラス！グラエナ！」
「了解兄貴！」
「結局いつもと変わらないような気がするっすけど了解～！」
三人はピカチュウに向かって行った。
「良くも妹を・・・怪我でもしたらどうすんだ！雷！！」
ピカチュウは怒りの雷を三人に決めた！
「あぁ・・・またやられた・・・」
「兄貴！次こそは成功しますって！」
「まだ諦めてないんすか～？もう止めた方が良いと思うんすけど～！」
そんな事を言いながら三人は空の彼方に消えて行った。
「たくっ！懲りない奴らだ！ピチュー、俺の尻尾を掴め！」
ピチューはピカチュウの尻尾を掴んで落とし穴から脱出した。
「ありがとうお兄ちゃん。」
「怪我は無いか？」
「うん大丈夫！もうあいつらのせいで時間とられちゃった！早く行かないとラーメン無くなっちゃう！お兄ちゃん行こう！」
「お、おう！」
ピチューとピカチュウは急いでバクフーン達がいるラーメン屋に向かいました。
「ここだよお兄ちゃん！バトルシティに出来た新しいラーメン屋！早く中に入ろ！」
ピチューとピカチュウはラーメン屋さんの中に入った。
「おっ来た来た！お～いこっちだこっち！」
リザードンがピカチュウ達を呼んだ。
「遅かったな？」
「ごめん。途中でちょっと邪魔が入っちゃって。って！？バクフーン兄ちゃん！？それ全部一人で食べたの！？」

ピチューが指差した先にはドンブリが１０杯位重ねてあった。
「いやぁここのラーメン美味くてさぁ♪」
「限度があるだろ・・・しかもまだ食ってるし（汗）」
「お前らも食えよ！マジ美味いからさ♪」
その時ピカチュウとピチューのお腹がグゥ～と鳴った。
「・・・見てたら腹減ってきちまった・・・食べるか！親父！ラーメン一杯！」
「アタシも！」
ピチューとピカチュウもラーメンを頼んだ。しばらくしてから二人の前にラーメンがやって来た。早速食べる二人。すると、凄く美味しかったのか二人はあっという間に食べてしまった。スープも残さず完食である。
「ふ～、ごちそうさまでした！美味しかった～！ね、お兄ちゃん？」
「あぁ！」
「俺もごちそうさま・・・もう食えねぇ！」
バクフーンの前には先程より倍の数のドンブリがあった。
「お前はフードファイターか（汗）」
「明日はジム戦だぜ？エネルギーチャージしとかなきゃさ♪」
「エネルギーチャージ？」ピカチュウはバクフーンのその言葉を聞いて何か閃いたようだ。
「そうだ・・・チャージか！そうかその手があったか！」
「ど、どうした急に！？」
「何か思いついたみたいねお兄ちゃん？」
「あぁ！バクフーンのおかげでな！」
「へっ？俺？」
「皆盛り上がってる所悪いけど・・・お金ある？何かラーメン屋では中々見ない金額になってるんだけど（汗）」
ラグラージは皆にレシートを見せた。
「えっと、一、十、百、千・・・えぇ！？」
どうやら１万ポケをオーバーしていたらしい。

「何でこんな料金になってんだ!?」
バクフーンがそう言った時に皆揃って。
「お前のせいだろ!!」っと言った。
「・・・申し訳ない（泣）」バクフーンは落ち込んでしまった。
「どうする（汗）」
「あっラグラージさん、このメニューの下の方見て下さい!」
ラグラージはメニューの下の方を見た。
「えっ!?ここの店員さんにバトルで勝つと料金タダになるの!?」
「マジで!?じゃあ俺がバトルして・・・」
「あっでもバトル出来るのは電気タイプの方に限りますって書いてあるよ?」
「ガクッ!?何だよそれ!?何で電気タイプ限定何だ?」
「何でも良いじゃねぇか。俺がやるからさ。親父!バトルをしたいんだが。」
「おっ!早速チャレンジするお客が来たな!相手ならこの店の裏の方のバトルフィールドにいるぞ!」
店長に言われてバクフーン達は店の裏のバトルフィールドにやって来た。そこには地面タイプのカバルドンがいた。
「どうやらあいつがバトルの相手みたいだな。なるほど、だから電気タイプ限定って訳だ。」
「相性的にピカチュウは圧倒的不利だね。」
「心配すんな!相性の悪さなんて俺には関係無いからさ!んじゃ、行ってくるぜ!」
ピカチュウはバトルフィールドに入った。
「さぁバトルを始めようぜ!」
「・・・」
カバルドンからの返事が無い。
「ん?おい聞こえてんだろ?バトル始めようぜ」
「・・・ぐぅ～」
カバルドンは目を開けたまま眠っていた。

「寝てるんかい!?」
「しかも目を開けたまま・・・器用な人（汗）」
「おい起きろよ!」
ピカチュウはカバルドンを起こそうとするがカバルドンは全く起きない。
「ピカチュウ、僕が起こすよ。水鉄砲!」
ラグラージは軽〜く水鉄砲を当てた。すると、水の冷たさでカバルドンは起きた。
「・・・う〜ん冷たいんだな〜誰だ〜水を掛ける奴は〜?」
「やっと起きたか・・・あんた、俺とバトルしてくれよ!」
「バトル〜?あ〜ラーメンのタダを賭けたバトルだな〜!O〜K〜やるんだな〜!」
やっとピカチュウとカバルドンのバトルが始まった。
「行くぜ!アイアンテール!!」
ピカチュウはまず、アイアンテールで先制した。ピカチュウの攻撃は簡単に直撃した。
「ん〜?何かやったか〜?」カバルドンにはどうやらダメージは無いようだ。
「結構防御力が高いんだな・・・それとも鈍いのか?」
「今度は俺の番なんだな〜!噛みついてやるんだな〜!」
カバルドンはピカチュウに噛みつく攻撃をしようとした。
「高速移動!」
ピカチュウは高速移動で噛みつく攻撃を避けた。
「噛みつかれてたまるかって!電光石火!」
ピカチュウの電光石火が炸裂した。
「そこか〜!今度こそ噛みついてやる〜!」
「効いてないのか!?高速移動!」
電光石火は確かに決まったのだがカバルドンにはダメージを与えられなかった。カバルドンが再び噛みつこうとしたところをピカチュウは高速移動で回避した。

「ちょこまかとすばしっこいんだな～！砂嵐～」カバルドンは砂嵐を放った。
「高速移動！」
ピカチュウは高速移動で砂嵐を回避した。だが・・・
「逃がさないんだな～」何と砂嵐の砂がピカチュウを追いかけて来た！
「これは・・・バンギラスが使ってたのと同じ技か！？」
「そこか～！」
砂嵐の砂がピカチュウを囲んだ！
「やっべ！？光の壁！」
ピカチュウは光の壁をジャンプ台にして飛んで砂嵐を回避した。
「もういっちょ光の壁！」今度は空中で光の壁を作りピカチュウはその壁を蹴って一気にカバルドンの所まで飛んでいった。そしてピカチュウは拳に力を込める。
「これでどうだ！気合いパンチ！！」
ピカチュウは渾身の気合いパンチをカバルドンに決めた！
（何だ？この手応えの無さは？）
ピカチュウの気合いパンチはカバルドンの砂嵐の砂で作られた壁で防御されていた！
「ちっ！高速移動！」
ピカチュウは一度高速移動でカバルドンから離れた。
「あの砂は厄介だな・・・それにカバルドン自身も防御力がかなり高いときた・・・さて、どうしたものか・・・」
「今度こそ捕まえてやるんだな～！砂嵐なんだな～！」
カバルドンは再び砂嵐をピカチュウに放った。
「高速移動！」
ピカチュウは高速移動で砂嵐を回避。そのままカバルドンに向かって行く。
「この～！」
カバルドンは砂嵐の砂でピカチュウの前に壁を作ろうとした。

「遅い！アイアンテール！」
だがピカチュウは壁が出来る前にカバルドンにアイアンテールを決めた。
「そんな攻撃なんか痛くないんだな～！砂嵐～」カバルドンはまた砂嵐の砂でピカチュウを捕まえようとした。
「高速移動！そして気合いパンチ！！」
ピカチュウは高速移動で砂を回避して、高速移動のスピードを利用した気合いパンチをカバルドンに決めた！カバルドンの砂はピカチュウに全く追いつけない。
「こいつ～！」
「お前の砂嵐は見切った。俺にはもう通用しないぜ！電光石火！」
ピカチュウは砂を回避しつつ電光石火を連続で決めた。
（これだけ動いてるのに、まだ全然疲れない！山でのトレーニングの成果って事か！）
確かに前のピカチュウならもう息切れを起こしてるころだが、今のピカチュウは息一つ乱れが無い。ピカチュウはまた高速移動でカバルドンから距離をとった。
「俺にお前の攻撃は効かないんだな～！」
「・・・あれだけ打ち込んだのにダメージがあまり無いか・・・となると、早速あれを試すか！」ピカチュウは空の雲に向かって雷を放った。
「何をしてるんだな～？」
「まぁ見てな！・・・来た！」
空の雲はピカチュウの雷を受けた事で雷雲となり、自然の雷が発生した。その雷はピカチュウに直撃した！
「くっ！？思ってたより・・・け、結構キツイな・・・」
ピカチュウは自然の雷のエネルギーを取り込もうとしているのだ。
だが、自然の雷はかなりの高エネルギーの為ピカチュウには想像以上の激痛が襲う！
「ウオォォォ！！」

ピカチュウは激痛に耐えて自然の雷の高エネルギーを取り込んだ！
その瞬間ピカチュウの身体は金色に輝いた！
「・・・待たせたなカバルドン！さぁ、バトルの続きだ！高速移動！！」ピカチュウは高速移動でカバルドンに突っ込んで行った。
「何か凄そうだけど、俺は負けないんだな～！破壊光線なんだな～！！」カバルドンは破壊光線を放った。
「今の俺にそんな技は効かないぜ！アイアンテール！！」
ピカチュウはアイアンテールで破壊光線を打ち返した！
「これで決めるぜ！」
ピカチュウは拳に力を溜めた。
「くらえ！気合いパンチ！！」
ピカチュウは最大パワーの気合いパンチでカバルドンに向かって行く。
「砂嵐～！」
カバルドンは砂嵐の砂でピカチュウの前に巨大な壁を作った。だが、雷のエネルギーを取り込んだピカチュウはその壁を粉砕してそのまま突っ込んで行った！そして、気合いパンチはカバルドンに直撃した。強化されたピカチュウの気合いパンチを受けたカバルドンは吹っ飛ばされた！
「ま、負けました～・・・がくっ・・・」
カバルドンは倒れた。ラーメンのタダを懸けた対決はピカチュウの勝利だ！バトルが終わった瞬間ピカチュウの身体から金色のオーラが消えた。
「お疲れピカチュウ！やったな！」
バクフーンはピカチュウに触れた瞬間静電気が発生した。
「イタッ！？」
「あっ今の俺に触らない方が良いぞ？まだ雷の電気が残ってるからな！」
「そ、それは早く言ってくれよ！」
「それにしても、まさか自然の雷のエネルギーを取り込むなんて・・

・無茶するなぁ。」
「でもかっこよかったですよピカチュウさん！」
「ありがとうラティアスちゃん。この後俺の勝利を祝って一緒にデートでも・・・ってイタタタ！？」ピカチュウの耳をピチューが引っ張った。
「はいはい。あまり調子に乗らないでね～。」
「わ、解ったから耳を引っ張るのは止めてくれ～！？」
「出た、必殺の耳を引っ張る！」
「効果は抜群だね。」

「だな。んじゃ、そろそろポケモンセンターに戻ろうぜ。明日はルカリオにリベンジだ！」
バクフーン達は明日のジム戦に備えてポケモンセンターに戻って行った。明日はいよいよ、ルカリオにリベンジだ！

第三十六話ピカチュウの新戦法！（後書き）

第三十六話完成です。

第三十七話リベンジ！ＶＳルカリオ！（前書き）

バクフーン達は再びバトルジムにやって来た！

第三十七話リベンジ！ＶＳルカリオ！

「ルカリオー！ジム戦しに来たぜー！」
バクフーンがルカリオに叫んだ。すると、ジムの中からルカリオがやって来た。
「来たなバクフーン！」
「おう！今日は俺が勝つからな！」
「気合い十分だな。早速始めよう！さぁ、中に入れ！」
バクフーン達はバトルジムの中に入って行った。「ルールは前回と同じで一対一のタイマン勝負だバクフーン！」
「ＯＫ！」
「ハッサム！頼んだ！」
「解りました！」
審判のハッサムがやって来た。
「それではこれより、ジムリーダールカリオとチャレンジャーバクフーンによるジム戦を開始いたします！ルールは一対一のタイマン勝負、時間無制限！では試合開始！」バクフーンとルカリオのジム戦が始まった。
「行くぜルカリオ！電光石火から火炎車！！」
バクフーンは電光石火と火炎車のコンビネーション技で攻撃した。
「見切り！」
ルカリオは見切りを使ってコンビネーション攻撃を回避した。
「まだ行くぜぇ！スピードスターから火炎放射！！」バクフーンは今度はスピードスターと火炎放射のコンビネーションで攻撃した。
「ボーンラッシュ！」
ルカリオはボーンラッシュを高速回転させてコンビネーション攻撃を防いだ。
「電光石火！」
バクフーンは攻撃の手を休めずに電光石火でルカリオに突っ込んで

行った。
「神速！」
ルカリオは電光石火にたいして神速で対抗した。二人は超高速で何回もぶつかり合った。
「煙幕！」
バクフーンはここで煙幕を使ってルカリオをかくらんしようとした。
「はっけい！」
しかし、ルカリオは的確にバクフーンがいる位置にはっけいを放った。バクフーンは吹っ飛ばされた！
「いってぇ・・・やっぱルカリオ相手にこの戦法はダメか・・・ならこれはどうだ！噴火！！」
バクフーンは噴火を放った。
「見切り！」
ルカリオは見切りを使って噴火を回避した。だが！
「ブラストバーン！！」バクフーンはルカリオが見切りを使い終ったその瞬間にブラストバーンを放った！
「波動は我にあり！水の波動！そして波動弾！！」ルカリオは水の波動と波動弾のコンビネーション技でブラストバーンに対抗した。二つの技はぶつかり合い激しい爆発が発生した！その爆発で発生した衝撃波で二人は吹き飛ばされた！
「イタタタ・・・俺のブラストバーンが・・・ルカリオは何処行った？」
「波動弾！」
爆発で発生した爆煙の中からルカリオの波動弾が放たれてバクフーンに炸裂した！
「ぐっ！？」
「更に水の波動！」
ルカリオは水の波動で追い討ちをかけた！
「これ以上くらってたまるかって！火炎車！！」バクフーンは火炎車でルカリオの水の波動を蒸発させた。

「神速！そしてはっけい！」ルカリオは神速で一気にバクフーンに近づきはっけいを決めようとした。
「電光石火！」
バクフーンは電光石火で何とか当たる寸前で回避する事が出来た。そして一度ルカリオから距離をとった。
「ふぅ～・・・危なかったぜ！油断するとあっという間に負けちまうな・・・ちょっと落ち着こう・・・」
バクフーンは一度深呼吸して集中力を高めようとした。
「・・・良し、行くか！電光石火！」
バクフーンは電光石火でルカリオに向かって行った。
「神速から影分身！」
ルカリオは神速と影分身のコンビネーションで無数の分身を作り出した。
「さぁ、どう対処するバクフーン？」
「噴煙！」
バクフーンは分身全員に噴煙を放った。ルカリオの分身は全て消えた。だが、本体は何処にもいなかった！
「ルカリオの運動神経なら・・・上か！」
バクフーンが上を見たら、そこには高くジャンプしていたルカリオがいた。ルカリオは空中から波動弾を連発した！
「火炎放射！」
波動弾の連発にたいしてバクフーンは火炎放射の連発で対抗。二つの技は激突して爆発した。
「メタルクロー！」
ルカリオは落下スピードを利用してメタルクローで攻撃した。
「・・・今だ！」
バクフーンはメタルクローを受け止めた！
「何！？」
「まだまだぁぁぁ！」
バクフーンはそのままルカリオを投げ飛ばした！

「くらえ！火炎放射！」バクフーンはすかさず火炎放射で攻撃した。
火炎放射はルカリオに直撃した！鋼タイプを持っているルカリオには効果抜群だ！ルカリオは吹き飛ばされ壁に激突した。
「いくらルカリオでも、今の受けたら・・・」
「・・・神速！」
ルカリオはやられてはいなかった！神速で一気にバクフーンの目の前までやって来た！
「インファイト！！」
ルカリオは神速のスピードを利用して超高速インファイトをバクフーンに決めた！今度はバクフーンが吹き飛ばされた！
「ルカリオさんは火炎放射を受けても平気なの！？」
「いやそうじゃない。ルカリオは火炎放射を受ける瞬間水の波動で火炎放射の威力を下げたんだ。それでルカリオは火炎放射に耐える事が出来たんだ。」
「そうなの兄さん？」
「あぁ。しかし、とっさにそれをする事が出来るなんて・・・さすがルカリオだな。」
その時、倒れたバクフーンが激しい炎に包まれた！
「この炎は・・・あの時の炎か！」
バクフーンはブラストモードになった！
「勝負はこれからだルカリオ。火炎車。」
バクフーンは火炎車で攻撃した。ブラストモードになったバクフーンは一瞬で火炎車をルカリオに決めた！ルカリオは吹き飛ばされた！
「くっ！？今までとスピードもパワーも桁外れに上がっている！」
「火炎放射。」
バクフーンは火炎放射を放った。
「ボーンラッシュ！」
ルカリオはボーンラッシュを高速回転させて火炎放射を防ごうとした。だが、強化された火炎放射を防ぎきれずにルカリオはまた吹き飛ばされた！

「くっ・・・波動弾！」ルカリオは吹き飛ばされながらも波動弾をバクフーンに放った。
「フレアドライブ。」
バクフーンはフレアドライブで波動弾を打ち消した！そしてバクフーンはそのままルカリオに突っ込んで行った！
「見切り！」
ルカリオはすぐに体勢を立て直し、フレアドライブを見切りで回避した。そして、神速を使いバクフーンから一度離れた。
「電光石火、更に火炎車。」バクフーンは電光石火と火炎車のコンビネーションでルカリオの後を追った！
「・・・今だ！」
ルカリオは急停止してバクフーンの攻撃をワザと受けた！
「どういうつもりだ？」
「くっ・・・こういう事だ！カウンター！！」
ルカリオは受けたダメージを倍にして返すカウンターをバクフーンに決めた！バクフーンは吹き飛ばされた！
「くっ・・・さすがだなルカリオ・・・」
「ハァ・・・ハァ・・・お前もな・・・良くここまで強くなった・・・次で・・・ラストだ。」
ルカリオは波動弾を放つ体勢に入った。エネルギーを極限まで集めている波動弾は巨大になっていく。
「あぁ・・・これで決めてやる・・・」
バクフーンはブラストバーンを放つ体勢に入った。バクフーンを炎エネルギーを集めて巨大な炎の塊を作っていく。
「ブラストバーン！！」
「波動弾！！」
二人は特大なブラストバーンと波動弾を放った！二つの技はぶつかり合いとてつもない爆発を起こした！
「うわぁ！？」
近くにいたラグラージ達は爆発で起きた衝撃で吹き飛ばされた。

「イタタタ・・・凄い爆発だったなぁ・・・皆大丈夫？」
「あ、あぁ。あっそれより二人は？」
リザードン達がバトルフィールドの方を見るとバクフーンとルカリオは二人共倒れていた。
「両者、戦闘不能！よってこの勝負引き分け！」今回のジム戦は引き分けだった。倒れたバクフーンとルカリオの所にリザードン達が駆け寄ってきた。
「バクフーン！大丈夫か？」
「・・・何とか・・・でも・・・またルカリオに勝てなかった・・・悔しいなぁ・・・」
「バクフーンは良くやったさ！それに前回と違って今回は引き分けだったんだぞ？負けた訳じゃないんだから元気出せよ」その時ルカリオがフラフラになりながらもバクフーンに近寄って来た。
「バクフーン、お前に渡す物がある・・・受けとれ・・・」
ルカリオはバクフーンにある物を手渡した。それは何とバトルジムを勝ち抜いた証、バトルバッジだった！
「えっ何で！？俺・・・ルカリオに勝てなかったのに？」
「私がお前を認めた・・・それだけだ。受け取ってくれ。お前はそのバッジを受け取るのに十分な資格がある・・・」
「でも・・・」
「受け取っておけよバクフーン。ルカリオがお前の事を認めてくれたんだから。」
「・・・解ったよ・・・ルカリオ、ありがたく受け取っておくよ！」
バクフーンはバトルバッジを受け取った。これでバッジは七個になった！リザードン達はバクフーンを休ませる為にポケモンセンターに向かった。バクフーンの身体の事を考えて１日ポケモンセンターに泊まる事にした。その日の夜、ルカリオがポケモンセンターにやって来た。
「ルカリオさん！」
「やぁ。確かラティアスだったね？バクフーンは？」

「バクフーンさんなら・・・」
ラティアスの視線は食堂を向いていた。ルカリオが食堂を見るとバクフーンがいた。もの凄い勢いで夜ご飯を食べている。
「・・・お前良く食うなぁそんなにいっぱい（汗）ルカリオとバトルしたとは思えないぞ？」
「ふぁってお腹ふいふぁんふぁもん！」
だってお腹すいたんだもん！っと言ったのであろう。バクフーンの口の中はご飯がたくさん入っていた。
「喋る時はちゃんと食べてから喋ろよ。何言ってるか解らないから。」
「んっ！？うぐぐ・・・」突然バクフーンが苦しみ出した。どうやら食べ物が詰まったようだ。バクフーンは慌てて水を飲んで食べ物を流し込んだ。
「ぷはぁ～！あぁ死ぬかと思った（汗）」
「元気そうで何よりだバクフーン。」
ルカリオがやって来た。
「おっ！ルカリオじゃん！どうしたんだ？」
「出発する前にお前達に伝えておきたい事があってな。」
「何だ？」
「お前達は最後のジムがある街、ドラゴンシティに行くのだろ？」
「そのつもりだよ。」
「なら、途中お前達は一つ大きな山を登る事になるだろう。・・・実はその山には困ったポケモンが住んでいてな・・・」「困ったポケモン？」
「ムウマージと言うんだが、イタズラが好きで毎回山越えをしようとするポケモン達にイタズラをするんだ。最近では登ってくるポケモン達じゃ物足りないのか山のすぐ近くにある小さな村にまでやって来てイタズラするそうだ。私が何度止めるように注意しても全く聞こうとしないのだ・・・」
「うわぁ迷惑な奴だなぁ！」

「山を超える時はムウマージに気をつけろよ。伝えたかったのはそれだけだ。それじゃあ、私は行く。」
「おう！教えてくれてありがとうな！」
ルカリオはバクフーン達にイタズラ好きのムウマージの事を教えた後、すぐに出発してしまった。「あっもうこんな時間だったんだ！そろそろ寝ようよ。」
「そうだな。」
バクフーン達は明日に備えて眠る事にしました。

第三十七話リベンジ！ＶＳルカリオ！（後書き）

第三十七話完成です！最近ポケモンの新作が上映されたので早速見に行きました！今年の映画も良かったです！シェイミ、カワイイですねぇ！

第三十八話消えた村人の謎（前書き）

ルカリオにリベンジしてバッジをゲットする事が出来たバクフーン達。今は次のジムがある街を目指して進んでいた。

第三十八話消えた村人の謎

「ラグラージ～腹減った～！何か持ってない？」
「無い。」
ラグラージは即答で答えた。
「もうすぐ村に着くからそれまで我慢してな！」
「俺もう腹減りすぎて一歩も動けない～！」
バクフーンは座り込んでしまった。
「わがまま言わないでよバクフーン！早く行くよ！」
ラグラージが言ってもバクフーンは動こうとしない。
「そういえば今から向かう村にはそこでしか食べられないモモンの実を使ったケーキがあるらしいぞ？」
「行こう♪」
リザードンがそう言うとバクフーンは素早い動きで村に向かって行った。
「動けないんじゃなかったんかい！？」
「リザードンさん。本当に村でしか食べられないモモンの実を使ったケーキなんてあるんですか？・・・またバクフーンさんを動かす為の嘘だったり？」
「いや、今回は本当の事だ。ほれ、この週間ポケモンサンデーに載ってるだろ？」
リザードンは持っていた週間ポケモンサンデーをラティアスに手渡した。
「あっ本当だ！結構美味しそう！」
「どれどれ？・・・うわぁ本当に美味しそう♪ラティアス姉ちゃん、着いたら食べてみようよ！」
「そうね！」
ラティアスとピチューは凄く盛り上がっている。
「女の子って何で甘い物が好きなんだろう？」

「お～い！早く来いよ～！置いてっちまうぞ～」バクフーンが皆を呼んでいる。
「さっきまで動けないとか言ってたくせに・・・今行くから待ってよ！」バクフーン達は再び村を目指して進み出した。歩き始めて約３０分・・・バクフーン達はようやく村に到着した。
「着いた～！」
「おっ！あれだな？俺達が越えなきゃならない山は！」
ピカチュウが見ている先には高い山があった。例えるならポケットモンスターダイヤモンド・パールに出てくるテンガン山のような山だ。
「うわぁ・・・こりゃ結構高い山だねぇ（汗）」
「・・・美味そう♪」
バクフーンは山ではなく村の名物モモンの実を使った特製ケーキの見本にみとれていた。
「山じゃなくてそっちを見てるんかい！？」
「まぁまぁ落ち着けよラグラージ！」
「・・・」
ラティオスは周りを見ながら何か考えていた。
「どうしたの兄さん？」
「変だと思わないか？」
「何が？」
「この村・・・静か過ぎやしないか？それに村に住んでいる筈のポケモンも見当たらない。」
「えっ？」
ラティオスに言われて皆周りを見たり耳をすませてみたりした。
「・・・確かに静か過ぎるね・・・それに村の人達も見かけない・・・」「家の中で寝てんじゃないの？」
「まさか・・・とにかく調べてみよう！」
バクフーン達は手分けして村の中を調べる事にした。
「誰かいませんか～？」ラティアスは家の中に入った。中には誰も

いなかった。
「ここも誰もいない・・・どうなってるの？」
ラティアスは一度その家から出ようとした。その時ラティアスの背後から突然謎の光が現れた。
「えっ？」
その時ピチューとピカチュウは村にあるポケモンセンターに入った。
「お～い！誰かいるか～？」
ピカチュウが叫んでみるが返事は帰って来ない。
「ポケモンセンターにも誰もいないのかなぁ？」
「とにかく探そう！俺は二階を探すからピチューは一階を頼む！」
「解った！」
ピチューは一階を、ピカチュウは二階を調べる事にした。
「誰かいませんか～？」ピチューが呼びかけるが、やはり返事は無い。
「誰もいないポケモンセンターって・・・何か嫌だなぁ・・・」
ピチューはちょっと怖くなってしまい、ピカチュウがいる二階に向かおうとした時、背後からラティアスの時に出た謎の光が。
「な、何？」
その時バクフーン・リザードン・ラグラージは村の周辺を調べていた。
「いたか～？」
「いや誰も。そっちはどうだった？」
「こっちもいないよ。どうなってるんだろうこの村は？」
「まだ調べてない所があるかも知れない。もう一度調べてみよう！」
バクフーン・リザードン・ラグラージはバラバラに別れて調べに行きました。
「ここもいないか～・・・一体何処にいるんだろ？・・・あっ！」
ラグラージはある事を思い出してすぐに意識を集中しはじめた。
（始めからこうやって探せば良かったよ・・・おっ！いたいた！あれ？でもこの位置は・・・？）ラグラージは村の住人がいる位置を

特定した。その位置にラグラージは疑問に思ったがとにかくそこに向かおうとした。その時ピチューとラティアスの時に現れた謎の光がラグラージの目の前に現れた。
「何だ?」
その時ラティオスは空から住人を探していた。
「見つからないなぁ・・・ラティアスは見つけたのかな?」
ラティオスはテレパシーでラティアスに連絡を取ろうとした。
(ラティアス、ラティアス、聞こえるか?)
だが、ラティアスから返事が帰って来ない。
「どうしたんだラティアスは?・・・ちょっと戻ってみるか。」
ラティオスは一度村に戻る事にした。
「ラティアス!何処だラティアス!」
「ピチュー!お~いピチュー!」
その時ピカチュウがやって来た。
「あっラティオス!ピチューを知らないか?急にいなくなっちまってさ」
「いや、知らないが・・・それよりラティアスを知らないか?」
「えっ?まさか、ラティアスちゃんもいなくなったのか?」
「お~い!」
その時バクフーンとリザードンがやって来た。
「なぁ、ラグラージが何処に行ったか知らないか?」
「まさか、ラグラージもいなくなったのか!?」
「ラグラージもってどういう事だ?」
「実はピチューとラティアスちゃんもいなくなっちまったんだ!」
「なんだって!?」

「・・・」
その時バクフーン達を建物に隠れながら見ているポケモンがいた。
そのポケモンにピカチュウが気づいた。
「誰だ!」

「・・・」
そのポケモンは素早くそこから逃げた！
「逃がすかよ！高速移動！」ピカチュウは高速移動でそのポケモンの後を追い掛けた。
「あっおい待てよピカチュウ！？」
バクフーン達もすぐにピカチュウを追い掛けようとした。その時、また謎の光が発生した。
「な、何だ！？」
しばらくすると光は消えた。
「なんだったんだ今の光は？」
「おい、ピカチュウがいないぞ！」
ラティオスが言う通り、ピカチュウはいなくなっていた。
「どうなってんだよ・・・」
「・・・フフフ・・・」その時バクフーン達の背後から笑い声が聞こえた。振り返るとそこには一人のポケモンがいた。
「お前は！？」
「・・・」
次の瞬間そのポケモンの眼から光が発せられた！しばらくすると光は消え、光を出したポケモンはいなくなっていた。
「あれ？あいつ何処に行った？なぁリザードン、解るか？・・・ってあれ？」
いつの間にかリザードンとラティオスもいなくなっていた。
「お～い！リザードン！ラティオス！」
バクフーンは二人を呼ぶが返事は帰って来ない。
「何だよ・・・しゃあない、捜すか・・・」
バクフーンは二人を捜す事にした。とりあえず始めにポケモンセンターに向かう事にした。その道の途中。
「バクフーンさん！」
いなくなっていたラティアスが現れた！
「ラティアス！」

「あぁ良かった～！やっと会えましたよ～！」
「やっとって・・・今までずっと捜していたのか？」
「そうですよ！待ち合わせ場所の広場に行っても誰もいないんですもの！」
「えっ、俺達広場にいたぜ？」
「えっ？」
「まっ良いか！こうして会えたんだし！そういえばリザードンとラティオス見なかったか？」
「いえ、見てませんけど？」
「そっか・・・俺は今二人を捜しにポケモンセンターに行こうとしてたんだ。また会えなくなるといけないから一緒に行こうぜ！」
「あっはい。」
二人は一緒にポケモンセンターに向かいました。「お～いリザードン！」
「兄さ～ん！いないの～？」
二人を呼んでみるがやはり返事はない。
「ここにはいないのか？仕方ない、他を捜すか」
「そうですね。」
二人がポケモンセンターを出ようとした時、誰かが走ってくる足音が聞こえてきた。
「バクフーン兄ちゃ～ん！ラティアス姉ちゃ～ん！！」
ピチューだ！
「ピチュー！」
ピチューは泣きながらラティアスに抱きついた。
「うわぁ～ん！会いたかったよ～ラティアス姉ちゃ～ん（泣）」
「ほらほら！もう大丈夫だから泣かないで！」
ラティアスはしばらく、ピチューが落ち着くまで抱いてあげた。
「なぁピチュー。もしかして、ラティアスと同じようにずっと捜していたのか？」
「うん・・・一度待ち合わせ場所の広場に行ったんだけど誰もいな

かったからあちこち捜して・・・それでも見つからないから疲れてここに戻って休んでたら・・・」
「俺達が来たって訳か・・・でも変だな?俺やリザードンやラティオスは広場にいたぞ?」
「え?でも・・・」
「俺達はいなかったって言うんだろ?ラティアスにも同じ事言われたよ。たくっ!あの光を見てから変な事が起こってばっかだよ!」
「光?それってもしかして、紫っぽい色をした光の事ですか?」
「えっ?もしかしてラティアスも見たのか?」
「アタシも見たわよ!」
「ピチューもか!」
「あ~!」
バクフーンとラティアスとピチューが話てる時に、聞き慣れた声がポケモンセンターの出入口から聞こえて来た。三人が振り返るとそこにはラグラージがいた。
「バクフーン!ピチュー!それにラティアスも!やっと見つけたよ~!」
「ラグラージ!今まで何処にいたんだよ!」
「いやぁ、村の人達の居場所が解ったからそこに行こうとしたら変な光がさぁ・・・」
「ラグラージ兄ちゃんも見たんだあの光!」
「てか村の人達の居場所解ったのか!?」
「う、うん。でも・・・その場所が妙なんだよね・・・」
「何が?」
「実は・・・村の人達がいるのは山の方なんだよね。」
「山?俺達が超える予定のあの山か?」
「うん。」
「でも何で村の人達が全員山にいるんでしょう?」
「まぁとにかくその山に行ってみようぜ!」
バクフーン達は山の方へ向かおうとしました。

「うぅ！？」
その時突然ラティアスが倒れてしまった！
「ラティアス姉ちゃん！？どうしたの？」
「わ、解らない・・・きゅ、急に寒くなって・・・」
ピチューがラティアスの身体に触れた。
「えっ！？ラティアス姉ちゃんの身体、氷みたいに冷たいよ！？」
「ハァ・・・ハァ・・・どうなってるの？」
「とにかく暖めてやらないと！待ってろよ！」
バクフーンは火炎車を使ってラティアスを暖めようとした。だが・・・
「・・・あれ？」
「どうしたのバクフーン？早く炎を出してよ！」
「解ってるんだけど・・・何でだ？炎が・・・出せない！？」
どういう訳かバクフーンは炎を出せないみたいだ。
「あっ・・・」
その時今度はピチューが倒れてしまった！
「ピチュー！？」
「寒い・・・」
ピチューは寒さのせいでブルブル震えている。
「ピチューまで・・・どうなってんだよ！？」
「・・・ごめんね。」
その時バクフーン達の目の前に一人のポケモンが現れた。
「お前はさっきの！一体ピチューとラティアスに何をした！？」
「・・・僕の名はムウマージ・・・現実世界で二人は今凍り漬けにされているんだ。」
「現実世界？何を言ってる？」「今君達は僕の力で眠ってるんだ。ここは僕が作り上げた夢の世界。」
「夢？」
「君達は僕の催眠術を受けたんだ。光を見ただろ？」
「あれか・・・」

「ねぇ、何で君は僕達にこんな事するの？」
「好きでやってる訳じゃないんだ・・・あっ。」
「どうしたの？」
「ごめん。今現実世界の方で僕が呼ばれてるから行かないと。その前に・・・」
ムウマージはピチューとラティアスに光を当てた。
「あれ？寒くなくなった！」
二人は立ち上がった。
「僕の力で寒さを感じなくしてあげた。あと、現実世界の事が気になったらここにあるテレビを見ると良いよ。映るようにしといたから。」
そう言うとムウマージは姿を消した。
「ラティアス、大丈夫か？」
「は、はい。もう寒くないですから。」
「あのムウマージ、ルカリオが言う程イタズラ好きの困った奴って感じはしなかったけど・・・」
「でもアタシ達この夢の世界に閉じ込められたのよ！」
「そりゃそうだけど・・・でも何か訳有りっぽかったし・・・」
「とりあえずテレビつけてみようぜ？あいつが言うにはこれで現実世界の様子が解るらしいし。」バクフーンはポケモンセンターに置いてあるテレビをつけた。すると、画面には何処かの洞窟の中みたいな所が映し出された。そこには何処かで見た事があるポケモンが映っていた。
「ウフフ♪ま～さかこんな所でまた出会うとはね～！ねぇバクフーン？」ユキメノコだ！ユキメノコが眠っているバクフーンの頬を触っている。
「げっ！？ユキメノコじゃん！？うわぁ俺触られてる～！？」
「それにしても、あんたは使える奴だねぇ。散々アタイ達の邪魔してきたバクフーン達をこうも簡単に捕まえてくるなんて・・・残りの奴もちゃんと捕まえて来なよ！さもないと・・・解ってるわよね

？」

「解ってるよ・・・」

ムウマージは洞窟の外へと出ていった。

「ウフフ・・・さぁ、前は出来なかったけど・・・今のあんたならアタイのコレクションになんて簡単に出来るわ♪冷凍ビーム！」

ユキメノコは眠っているバクフーンに冷凍ビームを当てて凍り漬けにした。

「完成♪ユキノオー！」

「ウ～ス！」

これまたお久しぶりのユキノオーが凍り漬けになったバクフーンを同じく凍り漬けになっているラティアスとピチューそしてラグラージの横に置いた。

「あ～俺凍り漬けにされちまった～・・・くそ～あんな氷火炎車を使えば簡単に壊せるのに！」

「ねぇ・・・見た感じピカチュウやリザードンにラティオスがいないみたいだけど・・・」

「まだ捕まってないんだお兄ちゃん達！」

「でも、ピカチュウはムウマージの光を受けた時にいなくなっちまったしリザードンやラティオスは俺が光を見た時一緒にいた筈なんだが・・・」一方現実世界では・・・

「ここか・・・」

リザードンとラティオスはバクフーン達が捕えられている洞窟の近くに来ていた。

「さっきは助かったぞリザードン。良くとっさに煙幕を出せたな？」

実はリザードンが光を見る前に煙幕を使って催眠術を受けずにすんだのだ。

「でもバクフーンは助けられなかった・・・」

「なに、俺達が助け出せば良いだろ？」

「俺もいるぜ！」

リザードンとラティオスのもとにピカチュウがやって来た。

「ピカチュウ!?お前無事だったのか!」
「あぁ!あの時、あいつが振り向いた時に何か仕掛けてくると思ったから身代わりを使って分身体に突っ込ませたんだ!んで、俺は奴から離れたんだ。」
「そうだったのか。」
「見つけたよ!」
三人の所にムウマージが現れた!
「見つかったか!?」
「君達には悪いけど・・・捕まえさせてもらうよ!催眠術!」
ムウマージは三人に催眠術をかけようとした。
「させるか!煙幕!!」リザードンは催眠術が発動する前に煙幕を出した。目標を見失ったムウマージは催眠術を使えなかった。
「良し、今のうちに中に行くんだ!」
「解ってる!」
リザードン達は洞窟の中に潜入した。
「うわっ!?寒!?」
「壁が凍りついてるな・・・どうなってんだ?」
「この氷・・・」
「どうしたラティオス?」
「いや、まさかな・・・何でもない。先を急ごう!」
ラティオス達は更に奥の方へと進んで行った。しばらく進むと広い空間に出た。
「おい・・・何だよこれ!?」
そこには凍りついたポケモン達がたくさんいました。
「まさか村の人達か!?」
「おい二人共!これ!」リザードンが指差す先には凍りついたバクフーン達がいた。
「ラティアス!?」
「ピチューまで!?」
「皆眠ってるみたいだ・・・でも何で凍り漬けになってるんだ?」

「それはアタイがやったからさ！」
洞窟の奥から誰かがやって来た。
「誰だ！？」
「あらあら！アタイを忘れちまったのかい？」
一人のポケモンがリザードン達の前に姿を現した。
「お前はユキメノコ！？」
「思い出したようだね！久しぶりじゃないかぁ」
「何でお前がここにいるんだ！？お前はあのダークネス島のアジトで死んだんじゃ？」
「勝手に殺されちゃあたまんないねぇ！アジトの崩壊の時はさすがに焦ったけれど、そんなんで死ぬアタイじゃないよ！」
「あっそうかい！アイアンテール！」
ピカチュウはユキメノコにアイアンテールで不意打ちした。
「ウッドハンマー！」
その時ユキノオーが現れてウッドハンマーでアイアンテールを受け止めた。
「いきなりご挨拶だねぇピカチュウ。」
「うるさい！お前をとっとと倒してピチューを助ける！１０万ボルト！」
ピカチュウは１０万ボルトをユキメノコに放った。
「シャドーボール！」
ユキメノコの目の前にムウマージが現れて１０万ボルトをシャドーボールで防いだ。
「良くやったわねムウマージ。」
「・・・」
「ちっ邪魔をするな！」
「落ち着けピカチュウ！ムウマージ！何故ユキメノコの味方をする？」
「・・・好きで味方してる訳じゃない。」
「何？」

「あ～らムウマージ。そんな言い方はないんじゃない？あまりアタイを怒らせない方が良いわよ？ユキノオー！」
「ウ～ス！」
ユキノオーは一人の凍り漬けにされたポケモンを持って来た。
「この子がどうなっても良いのかしら～？」
「あれは・・・ムウマージ？ムウマージが二人？どういう事だ？」
凍り漬けにされているのはムウマージだった。でも、良く見ると色違いのムウマージだった。
「くっ・・・解った。解ったから弟には手を出すな！」
「なら、早くあいつらを眠らせておしまい！」
「なるほど・・・だからムウマージは俺らを捕まえようとしていたのか・・・」
ピカチュウはリザードンの方をチラッと見た。
「解ってるさピカチュウ、煙幕！」
次の瞬間リザードンは煙幕を出した。
「ゲホッゲホッ！？やだ～前が見えないじゃない！？」
「今だ！高速移動！」
ピカチュウは高速移動で向かって行った。しばらくすると、煙幕は消えていった。
「一体何をしたかったのか知らないけど、まぁ良いわ！さぁムウマージ！さっさとやっておしまい！」
「・・・」
ムウマージは言うことを聞こうとしなかった。
「早くしなって言ってるだろ！言うこと聞かないなら・・・ってあれ？ちょっとユキノオー！ムウマージはどうしたのよ！」ユキノオーが持っていた凍り漬けにされたムウマージがいなくなっていた。
「残念だなユキメノコ！ムウマージならこっちだ！」
ユキメノコがピカチュウの方を見ると凍り漬けにされたムウマージがいた。
「さっきの煙幕の時に奪わせてもらったぜ！」

「こいつ！？」
「さぁ、これでムウマージは自由だ！あいつ、ぶっ倒すだろ？」
「もちろん！」
その時、バクフーンの方から炎が現れて氷を溶かした！更に炎は激しさを増して周りにいるポケモン達の氷も溶かした。
「な、何！？」
「催眠術を解いただけさ！」
「助かったぜムウマージ！さぁって・・・久しぶりじゃないかユキメノコ！よくも俺達を凍り漬けにしてくれたな？」
「あなただけは本当に許さないから！」
皆めちゃくちゃ怒っている。
「・・・吹雪！」
ユキメノコはいきなり吹雪を放った！フルパワーで放たれた吹雪のせいでバクフーン達は前が見えない。
「うわぁ！？」
「アタイはこのへんでおさらばするわ！またね！オーッホッホッホ！」
吹雪が止んだ時にはもうユキメノコはいなかった。だが、一人ぼーっとしてるユキノオーが一人。
「・・・あっ！？待って下さいよ姉御～！？」
ユキノオーは慌ててその場から逃げた。
「あっ逃げた。」
「まぁ良いだろ、ほっとけ。それよりも村の人達の氷を溶かさないと！」バクフーン達は村の人達の氷を溶かした。そして、皆で村まで戻って行った。
「いやぁ本当に助かりました！村の代表としてお礼させてもらいます！」バクフーン達の目の前には村の名物のモモンの実を使ったケーキが用意されていた。
「美味そう♪そんじゃ、いっただっきま～す♪」バクフーンは物凄い勢いでケーキを食べていく。

「そんなに慌てて食べなくても（汗）」
「そういえば何でユキメノコはムウマージさんの弟さんを捕えたんでしょう？」
「あぁ・・・それは弟があいつにイタズラしたからですよ。」
「イタズラ？」
「弟はイタズラするのが大好きでして・・・いつも山を登ってくるポケモンや村の人達にイタズラをして楽しんでいたんです。」
「ルカリオが言ってたイタズラ好きの困ったポケモンのムウマージって君の事だったのか～！」
「うっ・・・」
色違いのムウマージは少ししょんぼりしてしまった。
「それである時、あいつが現れて弟がイタズラしたんです。そしたらあいつが怒って・・・」
「弟君が凍り漬けにされちゃったって訳だね？」
「はい・・・そしてあいつに弟を助けたければ言うこと聞けって脅されて・・・」
「それで今までに至ったって訳か・・・もうイタズラするなよ？こんなにめにはもうあいたく無いだろ？」
「うん・・・」
「村長！おかわり♪」
バクフーンはケーキのおかわりを頼んだ。
「もう食べたの！？」
「だって美味いんだもん！ラグラージ全然食べてねぇじゃん！何なら俺が食ってやろうか♪」
「ダメ！僕だって食べたいんだから！」
ラグラージは慌ててケーキを食べた。それから皆はしばらく村の名物のケーキを楽しんでいた。楽しい時間はあっという間に過ぎてもう夜になっていた。バクフーン達は今日は村のポケモンセンターで休んで明日出発する事にした。・・・そして翌日の朝。
「電気ショック！」

「うわぁ！？」
バクフーンはピチューの電気ショックによって叩き起こされた。
「おはようバクフーン兄ちゃん♪」
「イタタタ・・・お、おはよう・・・」
「大丈夫バクフーン？」
「な、何とか・・・でも、相変わらずあれはキツイ・・・」
「電気ショック！！」
「ぎゃあぁぁぁ！？」
今度はピカチュウが電気ショックで叩き起こされた。
「お兄ちゃん早く起きなさい！もう朝だよ！」
「あぁ・・・これは夢だ・・・きっと悪夢だ！」
「・・・１０万ボルト！」ピチューは１０万ボルトをピカチュウに決めた。
「寝ぼけてないでさっさと起きなさい！」
「・・・はい。」
バクフーン達は出発の準備を整えた。
「そんじゃ行きますか！」
「待って下さ～い！」
その時バクフーン達の所にムウマージ兄弟がやって来た。
「ムウマージ！どうしたんだ？」
「皆さんもう行かれるんですか？」
「あぁ！この山を越えて最後のジムに挑戦する為にな！」
「そうなんですか・・・あの、これを受け取って下さい。」
ムウマージはバクフーンに綺麗な透明の羽根を渡した。
「これは？」
「助けてもらったお礼です。僕達お金が無いからそれくらいの物しか渡せないんですけど・・・」
「もらっちゃって良いのか？」
「はい。」
「じゃあ、ありがたく受け取っておくよ！ありがとうな！それじゃ

俺達はそろそろ行くよ。」
「ジム戦頑張って下さい！応援してます！」
「おう！」
バクフーン達はムウマージ兄弟に見送られて出発した。彼らの旅はまだまだ続く！

第三十八話消えた村人の謎（後書き）

第三十八話完成です！

第三十九話デオキシス再び！？（前書き）

死んだと思っていたユキメノコらに遭遇し一度は捕まってしまうがムウマージの協力でこれをピンチを切り抜く事が出来たバクフーン達。今は山を登っていた。

第三十九話デオキシス再び！？

「いやぁ・・・思ってたより高いなぁこの山、まだ越えられないのか？」
「あともう少しで頂上だよ。そこまで行けばポケモンセンターがある筈だから。」
「こんな山の中にもポケモンセンターがあんのか！？」
「だってタウンマップに書いてあるから。ほら」ラグラージはバクフーンにタウンマップを見せた。確かにポケモンセンターがあるらしい。
「本当にあるよ・・・」
「でしょ？さぁ気合い入れて登ろう！」
バクフーン達は再び登り始めた。
「・・・」
バクフーンはムウマージ兄弟にもらった綺麗な透明の羽根を見ていた。
「綺麗な羽根ですねバクフーンさん。」
「あぁ。でも、これは一体何の羽根なんだろ？」
「もしかしてフリーザーの羽根だったりして？」
「いやぁフリーザーの羽根だったらもうちょい青い色してるだろう？」
「じゃあピジョット？」
「ピジョットの羽根は透明じゃあないだろ！」
「じゃあバクフーンは何の羽根だと思うの？」
「う～ん・・・解んね」
「がくっ！？」
「まぁ良いか！綺麗な羽根には変わりないし♪」「良いんだ（汗）」
その時、山の頂上付近でドォーンと大きな爆発音が聞こえた。
「な、何だ！？」

「あの辺りは山の頂上・・・て事はポケモンセンターで何かあったのかな？」
「とにかく行こう！」
バクフーン達は急いでポケモンセンターへ向かいました。その時ポケモンセンターでは・・・
「待って下さい！僕の話を聞いて下さい！」
「問答無用！デオキシス！お前は必ず捕まえる！クレセリア行くぞ！」
「解ってますってマニューラ先輩！オーロラビーム！」
クレセリアはデオキシスにオーロラビームを放った！
「くっ・・・フォルムチェンジ！ディフェンスフォルム！守る！！」
デオキシスはディフェンスフォルムにフォルムチェンジして守るを使いオーロラビームを防御した。
「そこだ！シャドークロー！」
マニューラは守るが解けた瞬間にシャドークローで攻撃した！
「テレポート！」
デオキシスはシャドークローが当たる寸前でテレポートを使いシャドークローを回避した。
「逃がすか！」
「お願いですから僕の話を聞いて下さい！僕はやってません！」
その時マニューラとクレセリアとデオキシスがバトルしている所にバクフーン達がやって来た。
「マニューラ！それにクレセリアまで！一体何があったんだ？」
「バクフーン！あれ！」ラグラージが指差す先にはデオキシスがいた。
「デオキシス・・・」
バクフーンはデオキシスを見た瞬間激しい炎に包まれた！ブラストモードだ！
「マニューラ。クレセリア。二人は下がってろ、こいつは俺が倒す。」

次の瞬間バクフーンは火炎放射をデオキシスに放った！
「守る！」
デオキシスは守るでブラストモードになったバクフーンの火炎放射を防御した。
「ディフェンスフォルムか・・・」
「お願いですから話を聞いて下さい！僕は戦うつもりはありません！」
「何？」
「油断するなバクフーン！そう言って奴はお前を騙そうとしているんだ！」
「違います！僕は本当に戦うつもりは無いんです！」
「嘘をつくな！つじ切り！！」
マニューラはデオキシスにつじ切りで攻撃した！その時！
「守る！」
マニューラの攻撃をラティアスが守るで防いだ！
「何！？」
「ラティアス・・・何故デオキシスを助けた？」
「だって・・・彼は嘘をついてないから！」
「何を言ってる？」
「ラティアスの言う通りだマニューラ。」
ラティオスが言った。
「俺とラティアスはテレパシーで相手の気持ちを感じ取る事が出来る・・・あいつからは本当に敵意を感じない。話を聞いてやっても良いんじゃないか？」
「しかし・・・」
「お願いですマニューラさん！彼の話を聞いてあげて下さい！」
「・・・解った。だが、奴が少しでも妙な動きをみせたらすぐに捕まえるからな！」
「ありがとうございますマニューラさん！」
「バクフーンも良いな？」ラティオスの言葉を聞いてバクフーンは

ブラストモードを解除した。
「解ったよ。」
「さぁ。あなたが言いたい事を私達に聞かせて下さい。」
「はい・・・まず、そこのポケモンレンジャーに・・・僕は誰かを襲ったりなんてしてません。」
「嘘だ!俺達はお前が街の人達を襲っていた現場にいたんだ!あれは間違いなくお前だ!」
「ですから僕はやってません!それは・・・僕の兄がやった事です。」
「あなたのお兄さんが?」
「はい・・・」
「・・・街の人達を襲ったのがお前ではなく兄がやったと証明出来るか?」
「・・・あなたが見たそのポケモンは僕のように緑色のコアでしたか?」そう言いながらデオキシスは自分の胸にあるコアを指差した。
「・・・いや、青色だった・・・」
「そういえば俺達を襲って来たデオキシスも青色のコアだった・・・」
「その青色のコアを持ったデオキシスが・・・僕の兄のキラです。」
「あなたのお兄さんのキラさんは何で街の人達や私達を襲ったりするんですか?」
「解りません・・・だけど、僕は兄の暴走を止めなくてはなりません!だから僕は兄を捜しているんです!ここにも兄を捜して来たんです。そしたら彼らがいて、僕の事を見たらいきなり・・・」「捕まえようとして攻撃を仕掛けて来たって訳か・・・まぁ、姿形が全く同じだからマニューラ達の気持ちも解らないでもないが・・・」
その時マニューラとクレセリアがデオキシスに近づいて行った。
「・・・その、すまなかったな・・・疑ってしまって・・・」
「私も・・・」
更にバクフーンもデオキシスに近づいて行った。

「俺も悪かったな・・・攻撃したりして・・・」
「いえ、解って頂ければそれで良いです。」
「ねぇ。少し話変わるけど良いかな?君に質問したい事があるんだけど?」ラグラージがデオキシスに言った。
「僕の事はイルと呼んで下さい。何でしょう?」
「じゃあイル、君やお兄さんのキラは今まで見た事のないポケモンなんだ。君達は一体何処から来たの?」
「僕達は宇宙から来ました。」
「へぇ・・・ってえぇ!?宇宙!?」
「はい。」
ラグラージは物凄く驚いている。
「スッゲェなぁ!宇宙からか~!でも、何しに来たんだ?」
今度はバクフーンがイルに質問した。
「実はこの星の人達に大切な話があって来たんですが・・・」
「大切な話?何だその話って?」
「その話は兄だけが知っているんです。僕は兄の護衛で一緒に来たんですが・・・この星に着いた瞬間兄は何処かにいなくなってしまって・・・」
「そうなのか・・・一体どんな話なんだ?」
「何かとっても大事な話みたいなんですが・・・すみません。」
「君が謝る事は無いよ」
「でも、僕が兄から離れさえしなければ街の人達や君達に迷惑をかけなくてすんだ筈です・・・」「そこまで君が責任感じる事無いよ。君のお兄さんが誰かを襲う何て誰にも解らなかった事なんだしさ?」
「・・・」
デオキシスのイルは黙り込んでしまった。
「とにかく、お前の兄貴のキラを見つけないと!そして、何で街の人達や俺達を襲った理由とか聞かないとな!」
「俺達ポケモンレンジャーも全力で捜す!それとイル。君の事を間違えて捕まえたりしないように君とキラの特徴を仲間や協力者に俺

から伝えておく。」
「ありがとうございます。それじゃ・・・」
イルは宙に浮いた。
「もう捜しに行くのか？」
「えぇ。これ以上犠牲者を出す訳にはいきませんから。」
「そうか・・・気をつけてな！」
「はい！」
イルは兄のキラを捜しに飛んで行った。
「クレセリア、俺達もすぐに行くぞ！」
マニューラは走り出した。
「あっ！待って下さいよマニューラ先輩！？じゃあねバクフーン！ジム戦頑張ってね！」
クレセリアはバクフーン達にそう言った後、慌ててマニューラの後を追いかけた。
「行っちゃった・・・マニューラってあんな熱血タイプだったかな？」
「人は見かけによらないからねぇ・・・とりあえず僕達はポケモンセンターで一休みしようよ？」
「そうだな。」
バクフーン達は一度ポケモンセンターによって休憩する事にしました。
「・・・」
バクフーンはまた綺麗な透明の羽根を見ていた。
「何でだろ・・・この羽根見てると懐かしい感じがする・・・」
「どうしたんですかバクフーンさん？」
ラティアスがやって来た。
「えっ？あっいや、何でも無い。何か用ラティアス？」
「あっそうだった！テレビ見て下さい！何か凄い事になってるみたいなんです！」
「凄い事？」

バクフーンはラティアスに連れられてロビーにやって来た。ポケモン達がテレビに注目している。
「どうしたんだ?」
バクフーンはラグラージに聞いた。
「最近自然災害が続発してるってニュースでやってるんだよ。」
「自然災害?」
「うん、突然山の噴火が起きたり、森が火事になったり。あとは地震が多くなったりとか。」
「地震か・・・そういえばこの前もあったな。」
「とにかく自然災害が多くなってるから気をつけてだって。」
「ふ~ん・・・でも何で自然災害が多くなったんだ?」
「僕に聞かれても解らないよ。それより、ちゃんと休んでよ?あと1時間後には出発だからね!」
「解ってるよ。」
バクフーンは疲れをとる為に部屋を借りて眠る事にした。だけど、ちょっとだけのつもりがバクフーンは思いっきり爆睡してしまい出発の時間になっても眠っていた。
「ねぇ!ちょっとバクフーン!起きてよ!」
「・・・ぐ~・・・ぐ~・・・もう食べられない・・・ムニャムニャ・・・」
「夢の中でも何か食ってるんか(汗)はぁ・・・ピチュー、あれお願いしても良いかな?」
「オッケー♪電気ショック!」
ピチューはバクフーンに電気ショックを決めた。
「痛ッ!?・・・あっ、おはよう。」
「おはよう、じゃないよ!もう出発の時間だよ!」
「・・・あらら(汗)」
バクフーンは慌てて準備した。
「悪い悪い(汗)すっかり爆睡しちまったよ。」
「次から気をつけてよ?それじゃあ早速出発しようか!」

「おう！」
バクフーン達は再びドラゴンシティに向けて歩き始めた。

第三十九話デオキシス再び！？（後書き）

第三十九話完成です。

第四十話最後のジムがある街。ドラゴンシティ！（前書き）

やっとドラゴンシティが見える丘の上までやって来たバクフーン達。
しかし、その丘のところであるポケモンと再会する。

第四十話最後のジムがある街。ドラゴンシティ！

「おっ！ラグラージ！あそこに見えるあれがそうか？」
バクフーンは遠くに見える街を指差してラグラージに質問した。
「そうだよ！あそこが最後のジムがある街、ドラゴンシティだよ。」
「あそこがそうなのか～！くぅ～！早くジム戦やりてぇ～♪」
バクフーンはジム戦が早くやりたいのか凄くテンションが上がっている。
「あれ？バクフーンさん、あそこにいる人ってもしかしてカイリューさんじゃないですか？」
ラティアスが指差す先には確かに昼寝しているカイリューがいた。
「あっ本当だ！」
その時バクフーン達に気がついてカイリューが目を覚ました。
「ん？やぁバクフーン君じゃないか。」
「お前一体ここで何してんだ？」
「ここは風が気持ち良いからねぇ。ちょっとだけ休んでたらつい寝ちゃって。君達がここに来たって事は、ジム戦しに来たんだね？」
「もちろん！」
「やっぱり。だけど今ジムリーダーはいないよ」
「・・・えっ！？」
カイリューの言葉に皆驚いた。
「なんでいないんだ？」
「今夜ちょっとしたイベントがあったね。ジムリーダーはそれの準備をしているんだ。だから今ジムに行っても誰もいないんだよ。」
「そうなのか～（泣）」
バクフーンはちょっとがっかりしてしまった。
「イベントって何をやるんですか？」
「バトルだよ。」
バトルとゆう単語にバクフーンがすぐさま反応した。

「バトル！？」
「うん。毎年やってるんだ。しかもポケモンリーグでも使われる公式ルールでね。だから、このイベントには全国からいろんなチームがやって来るんだ。」
「マジか！やりてぇ♪」バクフーンの目はキラキラ輝いていた。
「いきなり元気になったなお前（汗）」
「あと、バトルが終わったら祭りもあるんだ。」
「「祭り！？」」
今度は祭りという単語にバクフーンとラティアスが反応した。
「祭り・・・これは絶対に行かなきゃダメね！」
「ど、どうしたんだラティアスちゃん、何か人が変わったみたいに（汗）」
「あぁそういえばお前は知らなかったな。ラティアスは大の祭り好きでな。祭りと聞いた途端あぁなるんだよ。」
ピカチュウにラティオスが説明してあげた。
「それにしても君はなんでそんなに詳しいの？」ラグラージがカイリューに質問した。
「そりゃそうだよ。ここは僕が生まれ育った街だもの。」
「そうなんだ。」
「あっそうだ！もし良かったら僕が街を案内してあげようか？」
「えっ良いのか？」
「うん。」
「それじゃあお願いしよかな！」
「解った。じゃあ行こうか。」
バクフーン達はカイリューと一緒にドラゴンシティに向かいました。
「まず最初にポケモンセンターに行こうか。イベントに出たいならポケモンセンターで参加登録出来るから。」
「出る出る！早く行こうぜ♪」
バクフーン達はまず最初にポケモンセンターに向かいました。
「いらっしゃい。」

「やぁハピナス。」
「あらカイリューじゃない！今日のイベントには出るの？」
「ごめん。今回はパス。今日は父さんの手伝いをしなきゃいけないからね。そのかわり、彼等が出るよ。」
カイリューはハピナスにバクフーン達を紹介した。
「貴方達がもしかしてチームブラスト？」
「そうだけど？」
「やっぱり！貴方達の事は姉さん達から聞いてるわ！私、貴方達のファンなの！サインもらっても良い？」
何処から用意したのかハピナスはサイン色紙とマジックペンを持っていた。
「俺達のファン！？マジで！？」
「えぇ！それに貴方達結構人気なのよ！ほら、このホームページ見てみて。」
ハピナスはバクフーン達にパソコンを見せた。そこには今注目のチームベスト5は彼等だ！っと書いてあった。
「あっ本当だ！俺らがランキングに載ってる！」
「5位か～でも凄いね！あっチーム業火も載ってる！」
「あっマジだ！あ～俺らより一つ上だ～！」
「その上のはチームメタルじゃないか？」
リザードンが指差す先を見てみると確かにチームメタルの名前があった。
「あいつらよりも下なのか（汗）何か悔しいなぁ・・・」
「その上はフライゴンさん達のチームですね！」
「本当だ！2位だなんて凄いな！じゃあ1位は何処のチームだ？」
「えっと・・・チーム龍だって。どんな人達がいるのかな？ハピナス、知ってるかい？」
「あら！それなら貴方達の目の前にいるじゃない！」
「えっ！？」
ハピナスが言う目の前の人。そう、それはカイリューだ。

「カイリューがそうなのか！？」
「そうだよ。あとはガブリアスとか。君達は前に会ったよね。」
「あぁあいつね！でも凄いな1位なんて！」
「そんな事ないよ。って何か話がだいぶ脱線したけど、早く登録した方が良いよ。あと1分で受付終了するよ？」
「げっ！？ハピナス！すぐに登録して！」
「解ったわ。」
バクフーン達はイベントの大会に参加登録した。
「はい。受付完了しました。」
「サンキュー！」
「それじゃ街を案内するよ。まずは何処からが良いかなぁ・・・」
「なぁ、ジムの所に案内してくれないか？どういう所か見てみたいんだ」
「良いよ。じゃあ皆ついてきて。」
バクフーン達はカイリューに案内されてドラゴンジムにやって来た。
「ここがドラゴンジムだよ。結構ポケモンセンターから近いでしょ。」
「ここがドラゴンジム・・・何か神殿みたいなところだな。」
バクフーンが言う通りドラゴンジムは神殿のような場所だった。例えるならゲームポケットモンスターダイヤモンド・パールに出てくるキッサキ神殿みたいなところだ。
「さっきも言ったように、今はイベントの準備で皆忙しいから誰もいないんだ。ジム戦が出来るとしたら明日だね。」
「明日かぁ。んじゃ、今日は大会と祭りを楽しむか♪」
「あっそうだ。大会が行われる会場に行ってみるかい？」
「行く行く♪」
バクフーン達は今度は大会が行われる会場に案内してもらった。
「デッケェ～！ここが大会が行われる会場なのか？」
「うん。」
そこの会場はまるで東京ドームのように大きかった。入口付近には

関係者以外が入らないように警備員のウインディが見張っていた。
「中はどうなってるのかなぁ？」
「気になるんなら入ろう。」
「えっ？でも今準備中だから関係者以外入れないんじゃ？」
「大丈夫だよ。ほら、行こう。」
バクフーン達はカイリューと共にウインディのもとに向かいました。
「やぁ、ご苦労様。」
「やぁカイリュー！おや、そちらの方々は？」
「僕の友達なんだ。彼等に中を見学させたいんだけど良いかな？」
「君の頼みならＯＫだよ！さぁ中へどうぞ！」
ウインディは道を開けてくれた。
「さぁ皆、行こう。」
カイリューは会場の中へ入って行った。
「あっ待ってくれよ！？」バクフーン達も慌てて中へ入って行った。
「カイリューさんって一体何者何でしょう？」
「さぁ。でも警備員が簡単に通してくれたからここら辺では有名人なのかもしれないね。」
しばらく通路を進んでいたら前の方から光が見えて来た。
「ここが今日の大会の会場だよ。」
そこはとても広いバトルフィールドがあった。そして周りはバトルを観戦しにくる客が座る観客席でいっぱいだった。
「スッゲェ～・・・何かポケモンリーグに来たみたいだ！」
「見ろよバクフーン！でっかいスクリーンがあるぜ！」
リザードンが指差す先にはとても大きなスクリーンがあった。
「あれは対戦するチームが表示されたりバトルしてるところを映してくれたりするんだ。」
「へぇ～・・・おっ！何か映ったぞ！」
その時スクリーンに二人のポケモンが映し出された。
「ちゃんと映像が出るかチェックしてるんだ。」
「あそこに映ってるのガブリアスさんじゃないですか？」

「そうだよ。ちなみに一緒にいるのはこの街のジムリーダーだよ。」
「あの人が・・・」
映像に映っていた二人はガブリアスとジムリーダーのカイリューだ。
このカイリューは片目に傷があってその目は開いていない。
「それじゃあ最後の映像チェックに入ります。お二人はバトルを始めて下さい。」
大会スタッフらしき人が二人にバトルするように言った。
「解った。ガブリアス、始めるぞ。」
「はい！」
二人はバトルを始めた。
「いきますよリーダー！ドラゴンダイブ！！」
ガブリアスは一気に加速して片目のカイリューにドラゴンダイブで突っ込んで行った。
「龍の舞い。」
片目のカイリューは龍の舞いで攻撃力と素早さを上げながらドラゴンダイブを回避した。
「あの回避の仕方は前に俺とカイリューが戦った時に見たやつと同じだ！」
「うん。もともとあの回避方法を考えたのはジムリーダーだからね。それより、良く見ててよ。あそこからリーダーの得意技が出るよ。」
カイリューに言われてバクフーン達は片目のカイリューに注目した。
次の瞬間、片目のカイリューが消えた！
「燕返し！」
「ドラゴンクロー！」
片目のカイリューは龍の舞いから燕返しのコンビネーションで攻撃した。それに対抗してガブリアスはドラゴンクローで迎え撃った。
二つの技はぶつかり合い二人は吹き飛ばされた。
「えっ？今何があったんですか？」
「速くて全然見えなかったわ！」
ラティアスとピチューは二人の動きが見えていなかったらしい。

「・・・龍の舞いから燕返しのコンビネーションか。普通なら回避出来ない攻撃を良くあのガブリアスは見切ったな！」
「やっぱり君には見えたんだねバクフーン君。そう、あれは龍の舞いと燕返しのコンビネーション技だよ。まぁ今のは５０％位の力しか出して無いけどね。」
「今ので半分位なのか！？」
「ジムリーダーが本気を出したらいくらガブリアスでも見切れないよ。」
「チェック完了！お二人共、バトルを中止して下さい。」
大会スタッフが二人に言った。
「解った。ガブリアス、あとは任せたぞ。」
「解りました！」
ガブリアスにそう言うと片目のカイリューは大会スタッフ達と一緒に別の場所に行った。
「終わったみたいだね。皆、あのフィールドに行ってみるかい？」
「行く♪」
バクフーン達はジムリーダー達がいるバトルフィールドに向かった。
「ガブリアス、ご苦労様。」
「あっカイリュー！お前今まで何処に行ってたんだよ！」
「ごめんごめん。いつもの場所に行ってちょっと休憩しようと思ったらついつい寝ちゃって。」
「ったく！・・・ん？彼等はもしかしてこの前の？」
「バクフーン君達だよ。偶然出くわしてね、今彼等にこの街を案内してる途中なんだ。」
ガブリアスとカイリューが話てる間にバクフーン達はバトルフィールドと会場の広さに驚いていた。
「うわぁ～！ここから見ると本当に広いですねぇ！」
「まるでポケモンリーグの会場みたいだね！」
「やっべ～早くここでバトルして～♪」
「お～いバクフーン君達～！そろそろ他の場所に行こうよ～！」

カイリューがバクフーン達を呼んでいる。
「今行く～！」
「ガブリアス、彼等の案内が終わったらちゃんと手伝いに来るよ。」
「まっ期待しないで待ってるよ。」
再びカイリューとバクフーン達の街めぐりが始まった。バクフーン達はいろいろカイリューに案内をしてもらった。そして一通り案内してもらったあとバクフーン達はポケモンセンターに戻って来た。
「ありがとなカイリュー！いろいろ案内してくれて！」
「良いよ、それじゃ僕はそろそろ行くよ。ガブリアスが待ってるから。」
「解った！またな！」
カイリューはバクフーン達と別れ大会会場に向かった。バクフーン達は大会が始まるまでポケモンセンターで休む事にしました。それからしばらくして、大会が始まる時間になったのでバクフーン達は大会会場に向かいました。
「うお！？スッゲェ人がいっぱいいるな～！」
すでに会場前には大会に出場するポケモンとその大会を見に来たポケモンでいっぱいになっていた。その時大会スタッフが大会参加者を会場に誘導していた。バクフーン達も会場の中に入った。中では大会スタッフが参加者に大会のルールを説明しようとしていた。
「それでは大会のルールを皆さんに説明致します！ルールは実際にポケモンリーグで行われるルールと同様に六対六のシングル、勝ち抜き戦になります！どちらかのチームが全員戦闘不能になった時点で試合終了です。ただし、一部ポケモンリーグとルールが違う所があります！ポケモンリーグでは気合いのタスキなどの道具の使用が認められておりますが、この大会では道具の使用を一切禁止です！もし道具の使用が発覚した場合は即失格にします！ルールの説明は以上です！それでは皆さん、こちらの扉からバトルフィールドに入って下さい！」
バクフーン達出場選手はバトルフィールドに向かった。扉を開けた

瞬間、観客から大きな歓声があがった。
「うわぁ！スッゲェ数の人だなぁ！」
「何か僕緊張してきたよ・・・」
その時バクフーン達出場選手の所に片目のカイリューがやって来た。
「皆良く本日の大会に参加してくれた！今日は自分が持つ力を全て出しきってバトルを楽しんでくれ！そして観客席にいる皆も存分に楽しんでいってくれ！」
片目のカイリューの言葉を聞いた瞬間会場のボルテージは最高潮に達した。その時会場にある巨大スクリーンが起動した。それと同時にスクリーン付近にバクフーン達を案内してくれたカイリューが現れた。
「あっカイリューだ！」
「皆！盛り上がってるかい！」
カイリューが会場にいる皆に聞くと皆はそれに元気良く答えた。
「ＯＫ！良い返事だ！その調子で最後まで盛り上がって行こう！」
再び会場から大きな歓声があがった。

「何かカイリュー性格変わってるな～（汗）」
「さぁ皆！まずこのスクリーンを見てくれ！」
カイリューが言った瞬間スクリーンに出場選手達のチーム名が表示された。
「今回の出場チームは全１６チーム。今からコンピューターがランダムで対戦するチームを決定する！」
次の瞬間チーム名がシャッフルされた。そして対戦するチームが決定した。
「さぁ対戦するチームが決定した！一番最初に対戦するチームはバトルフィールドへ！それ以外のチームはバトルフィールドから離れて下さい！」一回戦で対戦するチーム以外はバトルフィールドから離れた。
「それじゃあ準備は良いかい？行くよ！バトル、スタート！！」

遂に大会が開催された。
「俺らは一番最後かぁ。結構長いなぁ（汗）」
「でも他のチームの情報は手に入るから良いんじゃない？」
「でも暇だぁ～リザードン！何か食い物ない？」
「無いよ。でもこの会場の中に飲食店があるみたいだからそこに行くか？」
「行く♪」
「ラグラージ達はどうする？」
「僕はここで待ってるよ。他のチームが気になるから。」
「あっ私行きます！ちょうどお腹空いちゃって」
「ラティアスちゃんが行くなら俺も♪」
その時ピチューの必殺耳を引っ張るがピカチュウに炸裂した。
「お兄ちゃんはここでおとなしくラグラージ兄ちゃんとアタシと一緒に留守番しましょうねぇ。」
「イタタタ！？」
「ラティオスは？」
「俺もここで待ってるよ。三人で行ってきな。」
「解った。じゃあ行くか二人共。」
「はい。」
「おう♪」
バクフーンとリザードンとラティアスは食事しに行った。
「おぉっとぉ！ここでボスゴドラ選手の破壊光線がケンタロス選手に炸裂したぁ！」
カイリューの力が入った実況が会場に響いた。
「本当にキャラが変わってるなぁカイリューのやつ（汗）」
「普段のカイリュー兄ちゃんと全然違うね。」
「・・・」
ピカチュウはこっそりとバクフーン達の所に向かおうとした。
「お兄ちゃん！」
「イタタタ！？わ、解った！おとなしくしてるから耳は引っ張らな

いでくれ～！？」
またしても必殺の耳を引っ張るが炸裂した。
「・・・痛そ（汗）」
それからしばらくして食事をすませたラティアスが帰って来た。
「あっラティアス姉ちゃんお帰り～！」
「早かったな？ん、バクフーンとリザードンはどうした？」
「もうすぐ来るよ。あっほら来た！」
「いやぁ満腹満腹♪」
「・・・ハァ（泣）」
ご飯をたらふく食ってご機嫌なバクフーンにたいしてリザードンはもの凄くテンションがダウンしていた。
「ど、どうしたんだリザードンの奴？」
「私は自腹でお金出してご飯食べたんだけど、バクフーンさんお金持ってなくて。それでリザードンさんがバクフーンさんのご飯をおごる事になったんだけど・・・」
「・・・あぁ・・・それでリザードンの奴元気無い訳か・・・」
「どんまいリザードン」ラグラージがリザードンの肩をたたきながらそう言った。そして気がついた時バクフーン達の番まであと少しというところまで来ていた。
「あら！今バトルしてるチームが終わったら次俺らじゃん！」
「何か意外に出番が早いね。」
「うし！んじゃ準備運動でもするかな！」
バクフーン達がバトルの準備をしようとした時。
「ここでキュウコン選手のだいもんじがスピアー選手に炸裂したぁ！スピアー選手たまらずダウン！よって勝者キュウコン選手！おめでとう！！」バクフーン達の前のチームのバトルが終わった。
「あっ終わっちった。」
「さぁ皆！次で最後のチームだ！まずはチームイーブイズ！」
カイリューに言われチームイーブイズがバトルフィールドに入った。

チームの編成は名前の通りイーブイとイーブイから進化するポケモン7人だ。
「そして次に紹介するのは僕の友達のバクフーン君がいるチーム！彼等はランキング第5位のチームブラストだぁ！！」
カイリューの紹介と同時にバクフーン達は元気良くバトルフィールドに入った。
「へぇ貴方達が噂のチームブラストなんだぁ。一度バトルしてみたかったのよねぇ。」
チームイーブイズのエーフィがバクフーン達に言った。その時。
「あなたみたいな美しい方にお会い出来て光栄です。このバトルが終わったらあとで僕と一緒にお食事でもいかがですか？」ピカチュウがいつものようにデートに誘おうとしている。
「おっとぉ？チームブラストのピカチュウ選手！いきなり相手のエーフィ選手にデートを申し込んだぞ！これは何かの作戦なのか！？」
「もうお兄ちゃん！！」ピチューが今回三度目の必殺耳を引っ張るをピカチュウに決めた！
「恥ずかしい事しないでよね！！」
「イタタタ！？」
会場から笑い声が聞こえてきた。

「さぁ会場も盛り上がったところでそろそろバトルを始めようか！まず最初に戦う選手は前に出てきてくれ！」
「まずは私から行かせてもらうわね。」
チームイーブイズからは先程のエーフィが出で来た。
「チームイーブイズの最初の選手はエーフィ選手だ！さぁチームブラストは一体誰が最初にやるんだい？」
「ようし！俺が♪」
「ちょっと待ったバクフーン！お前は一応俺達のリーダーなんだ！リーダーは一番最後に出るもんだろ？最初は俺がやるよ！」そう言ってラティオスが前に出で来た。

「どうやらチームブラストの最初の選手はラティオス選手のようだ！OK！これで準備は整った！それじゃあ行くよ！バトルスタート！！！」

遂にバクフーン達の試合が始まった！果たしてバクフーン達はこの大会で優勝する事が出来るのか？

第四十話最後のジムがある街。ドラゴンシティ！（後書き）

第四十話完成です！
いやぁ最近本当に暑いですねぇ（＾―＾；）暑さのせいで最近バクフーン達の話の続きが思いつかない時なんかしばしば（―_―；でも！暑さに負けずに頑張って続きを書きます！

第四十一話優勝出来るか？バトル大会！（前書き）

最後のジムがあるドラゴンシティにやって来たバクフーン達は途中カイリューと再会した。カイリューの話によると今日大きなイベントがあるためにジムリーダーはジム戦が出来ないらしい。そのイベントがバトル大会と聞いたバクフーンはその大会に参加する事にした。・・・今回の話は第一回戦から決勝戦まで書いたのでいつもより長めです。

第四十一話優勝出来るか？バトル大会！

「シャドーボール！」
「守る！」
エーフィはシャドーボールを放ったがラティオスは守るでこれを防御した。
「なかなかのシャドーボールだが・・・まだ甘いな。」
「言ってくれるわね！だけど、他の技でも私のシャドーボールを打ち消す事が出来たのに貴方はそれをしなかった・・・それは守る以外じゃあ私の技を打ち消す事が出来ないからじゃないの？シャドーボール！！」
エーフィは最大パワーのシャドーボールを放った！

「ドラゴンクロー！！」ラティオスはドラゴンクローでシャドーボールを切り裂いた！
「えっ！？」
「竜の波動！！」

エーフィが驚いている隙にラティオスは竜の波動を決めた！エーフィは倒れた。
「エーフィ選手戦闘不能！ラティオス選手の勝ちだぁ！凄い！試合開始からまだ1分もたたないうちに倒してしまったぁ！」
「くっ・・・」
「出来ない訳じゃない。お前の力量を知る為にワザとやらなかっただけだ。それに、試合はまだ始まったばかりだ。体力の温存も考えないといけないからな。」
「・・・さすがランキング5位のチームメンバーなだけはあるわね。負けたわ・・・」
エーフィはバトルフィールドから離れた。

「さぁイーブイズ！次の選手は誰だい？」
「・・・俺が行く。」
今度はブラッキーがバトルフィールドに入った。
「ＯＫ！それじゃあブラッキー選手対ラティオス選手！バトルスタート！」ブラッキーとラティオスの試合が始まった。
「俺はエーフィのようにはいかないからな・・・悪の波動！」
ブラッキーは悪の波動を放った。
「守る！」
ラティオスは守るで悪の波動を防御した。
「悪タイプか・・・となるとエスパータイプの技は効かないか・・・ならばこれだ！竜の波動！」ラティオスはドラゴンタイプの竜の波動を放った。
「守る！」
ブラッキーも守るを使って竜の波動を防御した。
「お前も守るが使えるのか。」
「最初に言っただろ。俺はエーフィのようにはいかないと・・・電光石火！そしてどくどく！」
ブラッキーは電光石火で一気にラティオスに近づき、どくどくを使ってラティオスを猛毒状態にしようとした。
「ラスターパージ！」
ラティオスがラスターパージで作り出した光でブラッキーはラティオスを見失ってしまった。ブラッキーは一度そこから離れた。
「シャドーボール！」
ブラッキーはラスターパージの光に向かってシャドーボールを放った。だが、シャドーボールはラティオスに当たらずにすり抜けてしまった。
「冷凍ビーム！」
ラスターパージの光を維持したままラティオスは冷凍ビームを放った。ブラッキーはこの奇襲に回避する事が出来ず冷凍ビームを受けた。

「くっ！？ゆ、油断したか・・・月の光！」
ブラッキーは月の光を使って体力を回復しようとした。だが、何故か月の光が発動しない。
「な、何故月の光が発動しない！？」
「隙あり！竜星群！！」ラティオスは竜星群をブラッキーに決めた！ブラッキーは倒れた。
「ブラッキー選手戦闘不能！勝者ラティオス選手！凄いぞラティオス選手！これで2連勝だぁ！」
「くっ・・・何故月の光が・・・」
「ラスターパージを使っている時、お前に回復封じの技を発動した。それで月の光が発動しなかったのさ。」
「・・・し、しかし回復封じは相手が回復技を持ってなければ何の意味の無い技・・・何故それを使おうと思った？」
「お前がどくどくを使って来た時さ。状態異常を起こす技を使ってくる奴らは持久型が多いからな。それでもしやと思っただけだ。」
「フッ・・・完敗だ。」ブラッキーはバトルフィールドを離れた。
「何か今日のラティオス絶好調だね！」
「兄さんはそう簡単に負けませんから！」

そのあとラティオスはイーブイズのシャワーズ、サンダース、ブースターと三人を倒した！
「凄いぞラティオス選手！これで5連勝！あと1勝でチームブラストは2回戦に進出出来るぞぉ！」
「あと一人か・・・出てきて無いのはリーフィアとグレイシアとイーブイの三人・・・」
「さぁイーブイズ！最後に誰がバトルするんだい？」カイリューの言葉を聞いた時、グレイシアが前に出ようとした。
「やはりグレイシアか・・・」
「・・・イーブイ。最後はあなたに任せたわよ」
「うん！」

なんとラティオスが予想していたグレイシアではなくイーブイがバトルフィールドに入って来た。
「おぉっとぉ！ここは相性で有利なグレイシア選手だと思われたが！出てきたのはなんとイーブイ選手だぁ！」
会場からも驚きの声があがった。
「お兄ちゃん！僕がちっちゃいからって手加減しないでね！」
「・・・」
（このイーブイ・・・良い目をしている・・・油断すると負けるなこれは・・・）
ラティオスはいつになく真剣な顔になった。
「どうしたんだラティオスの奴？何か急にマジな顔になったぞ？」
「さぁそれじゃあ始めるよ！バトルスタート！」イーブイとラティオスのバトルが始まった。
「行くよお兄ちゃん！電光石火！」
イーブイはラティオスに電光石火で突っ込んで行った。
「守る！」
ラティオスは守るで電光石火を防御した。だが、イーブイの電光石火はもの凄いパワーを持っていて、守るで防御してもラティオスは吹き飛ばされた！
「くっ！？」
イーブイの力を見た瞬間また会場から驚きの声があがった。
「凄いぞイーブイ選手！あの小さな身体の何処にあんなパワーが秘められているんだぁ！？」
「まだ行くよお兄ちゃん！電光石火から突進！」イーブイは電光石火と突進のコンビネーションでラティオスに突っ込んで行った。
「ドラゴンクロー！！」ラティオスはドラゴンクローでイーブイのコンビネーション攻撃に対抗した。しかし、イーブイのコンビネーション攻撃の方がラティオスよりもパワーが上でラティオスのドラゴンクローは弾かれた！そしてコンビネーション攻撃はラティオスに直撃してラティオスは吹っ飛ばされた！

「どんなもんだい！」
イーブイは勝利を確信したのかラティオスから離れていく。
「・・・大したパワーだ。特性の適応力をフルに使う事で電光石火などの小技が突進並の威力に変化してる・・・だけど、まだまだ経験が足りないな。」
倒れたと思われたラティオスが何事もなかったかのように起き上がった。
「嘘！？直撃だった筈だよ！？」
「直撃する瞬間、リフレクターを発動させて物理ダメージを半減させた。そして倒れている間に自己再生を使って体力を回復したのさ。」
「くっそ～！今度こそ決めてやる！電光石火から突進！！」
イーブイは再びコンビネーション攻撃でラティオスに突っ込んで行った。
「今の俺じゃあ君の力には対抗出来ない・・・だが、サイコキネシス！」ラティオスはサイコキネシスでイーブイを壁に吹き飛ばした。電光石火のスピードもあったためにイーブイには大きなダメージが与えられた。イーブイは倒れた。
「対抗出来ないならその力を逆に利用すれば良い・・・悪いな。」
「うぅ～・・・」
「イーブイ選手戦闘不能！よって勝者ラティオス選手！そしてチームブラストは二回戦に進出だぁ！おめでとう！！」
「やったなラティオス！」
「お疲れさま兄さん！かっこよかったわよ！」
「ありがとう皆。だが、まだ試合は始まったばかりだ！気を引き締めて行こう！」
「解ってるって！」
バクフーン達は見事二回戦に進出した。
「さぁこれで全チームの一回戦は終了！二回戦は３０分後に始まるから皆それまでバトルの疲れをとっておいてくれよ！それから見に

来てくれたお客さんには退屈しないようにジムリーダーや大会スタッフらがショーをやるから楽しみにしといてくれよ！」

バクフーン達はバトルの疲れを癒す為に休憩場に向かった。もっともバトルしたのはラティオスだけなので他の皆は元気が有り余っているが。

「兄さん。疲れたでしょ？マッサージしてあげる！」

「悪いなラティアス。」ラティアスはラティオスをマッサージしてあげた。

「ぬぬぬ・・・ラ、ラティオスめなんてうらやましい！俺もラティアスちゃんのマッサージ受けた～い！」

「あ～また始まったよピカチュウの暴走が。」

「痛っ！？」

ラティアスがラティオスの右腕をマッサージした時ラティオスが痛がった。

「あっごめん兄さん！痛かった？」

「あ、あぁ大丈夫・・・ラティアスのせいじゃない・・・さっきのイーブイのコンビネーション攻撃をドラゴンクローで受けた時に痛めたみたいだ。」

「あの子見た目はかわいいのに凄いパワーだったもんね！本当に大丈夫なの兄さん？」

「大丈夫。心配すんな」その時バクフーン達大会選手がある休憩場にカイリューがやって来た。

「やぁバクフーン君。」

「カイリュー！どうしたんだ？」

「僕もちょっと休憩さ。さすがにあれだけ大きな声で実況すれば疲れるからね。」

「だよな～、ってかお前が実況してる時は俺ら驚いたぜ？性格全然違うからさぁ！」

「僕が普段通りに実況やるとお客さんはあんまり盛り上がらないからね。でも・・・あのテンションを維持するは大変だよ（汗）」

その時休憩場に大会スタッフからのアナウンスが流れた。
「まもなく第二回戦を開始します。選手の皆さんはバトルフィールドに向かって下さい。」
「もう休憩時間終わっちゃったのか。それじゃあバクフーン君、試合頑張ってね。」
「おう！お前も実況頑張れよ！」
カイリューはまた巨大スクリーン付近に向かって飛んで行った。バクフーン達はバトルフィールドに向かった。
「お待たせしました！第二回戦の開始だぁ！皆、盛り上がっていこう！」カイリューの言葉を聞いて会場内はまた歓声であふれた。
「切り替え早いなぁカイリューの奴！」
「さぁ第二回戦の最初のバトルをするチームはバトルフィールドへ！」
カイリューに言われて2チームがバトルフィールドに入った。
「準備は良いかい？それじゃあ行くぞ！バトル、スタートォォォ！！」
第二回戦が始まった。

「始まったね二回戦。」
「そうですね。」
「また俺ら最後かぁ・・・暇だなぁ。」
「何言ってるのバクフーン！こういう時こそ他のチームを観察して少しでも情報を集めてだね・・・」
「・・・く～・・・く～・・・」
バクフーンは眠ってしまった。
「寝た～！？」
「まぁ良いじゃねぇかラグラージ。順番がくるまで寝かせてやりな。」
リザードン達はバクフーンを寝かせたまま他のチームの試合をずっと観察した。しばらくしてバクフーン達の出番がやってきた！

「さぁ第二回戦もいよいよ最後！まずはチームインセクト！」
カイリューに呼ばれチームインセクトがバトルフィールドに入った。
チーム編成はビークイン・ガーメイル・アーマルド・ヘラクロス・フォレトス・ケムッソ・ツボツボの7人だ。
「続いてチームブラスト！バトルフィールドに入ってくれ！」
カイリューがチームブラストの名前を呼んだ瞬間観客席から大きな歓声があがった。どうやら最初のバトルを見て会場の皆がチームブラストのファンになったようだ。
「おい起きろバクフーン！出番が来たぞ！」
「マジ！」
バクフーンは飛び上がるように起きた。
「良し！行こうぜ皆！」バクフーン達は元気良くバトルフィールドに入った。
「それじゃあ両チーム！最初にバトルするのは誰だい？」
チームインセクトからはアーマルドが前に出てきた。
「あっちはあのアーマルドか・・・良し！今回は僕が最初に行かせてもらうよ！皆良いよね？」
「私は構いませんよ。」
「ラティアスちゃんが良いなら俺も！」
他の皆もラグラージで構わないらしい。
「頑張れよラグラージ！いきなり負けんなよ？」
「僕が簡単に負ける訳無いだろバクフーン。それじゃ、行ってくるよ！」ラグラージはフィールドに入った。
「ＯＫ！これで準備は整った！それじゃあ行くよ皆！バトルスタート！！」ラグラージとアーマルドのバトルが始まった。
「行くよ！マッドショット！！」
ラグラージはまず大技ではなく小技で相手の様子を見る事にした。
「シザークロス！」
アーマルドはラグラージのマッドショットをシザークロスで切り裂いた！

「この程度の技、俺には通用しないぜ！今度はこっちの番だ！くらえ、岩石封じ！」
アーマルドは岩石封じを使った。すると、ラグラージの周りに岩石が現れてラグラージに向かって来た。
「アームハンマー！！」ラグラージはアームハンマーで周りの岩石をすべて粉砕した。
「ハイドロポンプ！」
ラグラージはすかさずアーマルドにハイドロポンプで反撃した。
「守る！」
アーマルドはハイドロポンプを守るで防御した。
「一気に行くよ！ハイドロカノン！！」
ラグラージは守るが解けた瞬間に自身が持つ最強技を放った。ハイドロカノンはアーマルドに直撃した。アーマルドは倒れた。
「アーマルド選手戦闘不能！よって勝者ラグラージ選手！凄いハイドロカノンだったぞ！チームブラスト、まずは1勝だ！さぁチームインセクト、次の選手は誰だい？」

「俺が出る。」
フォレトスがフィールドに入った。
「それじゃあフォレトス選手対ラグラージ選手！バトルスタート！」
ラグラージとフォレトスのバトルが始まった。
「先手必勝！地震！！」ラグラージは地震でフォレトスを攻撃した。
「電磁浮遊！」
何とフォレトスは電磁浮遊を使って宙に浮いた！
「飛んだ～！？」
「これでお前の地面タイプの技は俺には効かないぞ！高速スピン！」
フォレトスはラグラージに高速スピンで攻撃した。高速スピンはラグラージに直撃した。
「この！カウンター！」ラグラージはカウンターで受けたダメージを倍返しにしてフォレトスに攻撃した。

「負けるか！リベンジ！」フォレトスはダメージを受けたら威力が倍に跳ね上がるリベンジでラグラージを攻撃した。ラグラージは吹っ飛ばされた！
「くっ！？まさかリベンジが使えたなんて・・・だけど僕は負けないよ！ハイドロカノン！！」
ラグラージは最大パワーでハイドロカノンを放った！
「高速スピン！！」
フォレトスは高速スピンの回転を利用してハイドロカノンを防御してしまった！
「なっ！？そんな防御方法があったなんて！？」
「ハイドロカノンは使ったあと、その反動で動けなくなる・・・この勝負俺の勝ちだ！」
そう言った時、フォレトスは光のエネルギーを集め始めた。
「あれはまさか！？」
「これで終わりだ！ソーラービーム！！」
フォレトスは最大パワーのソーラービームを放った！ソーラービームはラグラージに直撃し大きな爆発を起こした！
「勝った！」
「ハイドロカノン！！」その時爆発で発生した爆煙の中からハイドロカノンが放たれフォレトスに直撃した！フォレトスは倒れた。
「がはっ！？・・・くっ・・・な、何故？」
「残念だったね。ソーラービームが直撃する瞬間守るで防御したのさ。あと、さっき君が高速スピンで防御したのはハイドロカノンじゃなくてハイドロポンプだよ。」
「な、何！？・・・くっ騙された訳か・・・」
「君が高速スピンで防御してくるのは大体予想出来たからちょっと君を油断させるために芝居をしてみたんだ。悪いね。」
「ラグラージ選手の勝利！ラグラージ選手！これで２連勝だ！さぁチームインセクト！次は誰が出るんだい？」

「俺がやる！」
今度はヘラクロスがフィールドに入った。
「それじゃあヘラクロス選手対ラグラージ選手！バトルスタート！」
「小細工無しだ！くらえメガホーン！！」
ヘラクロスは自慢の角を使ったメガホーンでラグラージに突っ込んで行った。
「アームハンマー！！」ラグラージはアームハンマーで対抗した。
二つの技はぶつかり合い、お互いに吹き飛んだ。
「まだまだ！乱れ突き！」ヘラクロスは角を何回もラグラージに向けて攻撃してきた。
「くっ！」
ラグラージは何故か反撃せずヘラクロスの乱れ突きを受け続けた。
「これで決める！メガホーン！！」
ヘラクロスは乱れ突きを止め一旦ラグラージから距離をとったあと、最大パワーのメガホーンでラグラージに向かって突っ込んで行った！
「今だ！我慢解放！！」実はラグラージは乱れ突きを受けている時ずっと我慢を使っていたのだ。受け続けたダメージを全て相手に倍返しにしてしまう強力な技だ。解放されたエネルギーは極太のレーザーのようになってヘラクロスに放たれた。それはヘラクロスに直撃した。
「ハァ・・・ハァ・・・やった・・・かな？」
「・・・まだ・・・倒れないぞ・・・！」
何とヘラクロスは立ち上がった！
「これをくらえ！起死回生！！」
ヘラクロスは自分の体力が少なければ少ないほど威力が上がる起死回生をラグラージに決めた！ラグラージはフィールドの外の壁まで吹き飛ばされた！
「・・・何で・・・あの攻撃を耐える事が・・・？」
「ハァ・・・ハァ・・・堪えるを使っただけさ・・・」
「なるほどね・・・くっ・・・」

ラグラージは倒れた。
「ラグラージ選手戦闘不能！よって勝者・・・」カイリューがヘラクロスの勝ちと言おうとした時、ヘラクロスまで倒れてしまった！
実はラグラージは起死回生を受けた時にアームハンマーを決めていたのだ！
「両者戦闘不能！よってこの勝負は引き分け！二人共、凄く良いバトルだったよ！さぁ、チームインセクトとチームブラストは次の選手を決めてくれ！」
「我が行こう・・・」
チームインセクトからはビークインがフィールドに入った。
「よ～し！今度こそ俺が♪」
「ちょっと待ったバクフーン！今回は俺にやらせてくれないか？」
リザードンがバクフーンに言った。
「リザードンが？」
「あぁ！良いか？」
「う～ん・・・まっお前の頼みならしゃあないか、良いぜ！」
「ありがとよバクフーン！それじゃ行ってくる！」リザードンがバトルフィールドに入った。
「チームインセクトからはビークイン選手！チームブラストからはリザードン選手！それじゃ二人共準備は良いかい？行くよ！バトルスタート！」ビークインとリザードンのバトルが始まった。
「我が息子達よ。敵を攻撃せよ！」
ビークインの攻撃指令で胴体からビークインの子供が現れてリザードンに向かって突っ込んで行った。
「うわ！？何か出てきた！？火炎放射！」
リザードンは火炎放射でビークインの子供を撃ち落とした。
「おのれ！よくも我がかわいい息子達を！」
「かわいいと思うなら攻撃指令なんかするなよ（汗）」
「黙れ！パワージェム！」ビークインは岩タイプの技パワージェムをリザードンに放った。

「おっと!?」
リザードンは当たるギリギリのところを空に飛ぶ事で回避した。
「さすがに岩タイプの技をくらう訳にはいかないんで。今度はこっちの番だ!火炎放射!」
リザードンは再び火炎放射を放った。
「我が息子達よ、我を守る盾となれ!」
ビークインの防御指令で子供がまるで盾のように集まって火炎放射からビークインを守った。
「また子供使った!?てかあの身体に一体何人子供いるんだよ!?」
「行け!」
ビークインは再び攻撃指令を出して子供達にリザードンを攻撃させた。
「また来た!炎の渦!」リザードンの炎の渦がビークインの子供達の行く手を塞いだ。
「決めさせてもらうぞ!オーバーヒート!!」
リザードンは炎の渦をオーバーヒートで撃ち抜きそのままビークインを攻撃した。オーバーヒートは直撃!ビークインは倒れた。
「ビークイン選手戦闘不能!よって勝者リザードン選手!さぁあと2勝でチームブラストは準決勝に進出だ!果たしてチームインセクトはここから挽回出来るのか!?チームインセクト、次の選手は誰だい?」
「は〜い。」
チームインセクトからはケムッソが出てきた。
「よろしく〜。」
「あ、あぁよろしく・・・」
「さぁ行くよ!バトル、スタート!!」
リザードンとケムッソのバトルが始まった。
「行くよ〜。」
ケムッソがリザードンに向かって来た。リザードンは相手の攻撃に備えて身構えた。

「・・・」
だが、なかなかケムッソからの攻撃がやってこない。何故なら・・・
「うんしょ、うんしょ」ケムッソの移動スピードがめちゃくちゃ遅いからだ。
「遅!?」
リザードンは思わず突っ込みを入れてしまった。その時、ケムッソは不気味に笑った。そして次の瞬間ケムッソは今までとは比べ物にならないくらいスピードでリザードンに突っ込んで行った!
「うお!?」
リザードンは間一髪ケムッソの攻撃を回避した。
「あ~ら。油断させたところを奇襲したのに避けられちゃったか・・・」
「何でいきなり動きが速くなったんだ?ん?」
リザードンはケムッソから糸が出ているのに気がついた。
「糸?」
「あら?ばれちゃいましたか・・・そう。僕はこの糸を使って素早く動けるんですよ。次は外しませんよ!」
ケムッソは再びもの凄いスピードでリザードンに突っ込んで行った。
「おっと!」
リザードンはまた紙一重で回避した。
「糸を使って素早く移動するのは解ったけど・・・その糸をいつ出しているんだ?今のといいさっきといい、糸を出してるようには見えなかったぞ?」
リザードンが考えている間にケムッソはまた突っ込んで来た。
「って考えても解らないか!火炎放射!」
リザードンは向かってくるケムッソに火炎放射を放った。
「当たりませんよ!」
何とケムッソは一瞬で方向転換して火炎放射を回避してしまった!
「なっ!?」
「さぁ勝負はこれからですよ!」

ケムッソはリザードンの周りを高速で動き回り始めた。リザードンは火炎放射で攻撃するがケムッソは素早くなかなか攻撃が当たらない。

「こんなに苦戦するなんて！こうなりゃ接近戦で・・・」

リザードンは火炎放射での攻撃からドラゴンクローなどの近接攻撃に切り替えようとした時、リザードンは身体が動かなくなっているのに気がついた。

「な、何で身体が？」

リザードンは自分の身体を確認してみた。すると、身体中糸が絡まっていた。

「いつの間に糸が！」

「ショータイムの時間ですよ！それ！」

ケムッソは一気にリザードンを糸でぐるぐる巻きにした。

「更に毒針！」

ケムッソはぐるぐる巻きにされて動けないリザードンに毒針で攻撃した。「ぐっ！？」

リザードンは毒針をまともに受けてしまった！

「トドメです！」

ケムッソはリザードンから離れたあとに糸を使い、勢いをつけて一気にリザードンに向かって突っ込んで行った！

「調子に乗んなよ！フレアドライブ！！」

リザードンはフレアドライブで身体中に絡まった糸を燃やして束縛から解放された！そしてそのままフレアドライブでケムッソを攻撃した。ケムッソは吹き飛ばされ倒れた。

「ケムッソ選手戦闘不能！よって勝者リザードン選手！リザードン選手、思わぬ苦戦を仕入れられたが何とか勝利！さぁあと1勝で準決勝だ！チームインセクト、最後の選手は誰だい？」

「俺がやる。良いよなツボツボ？」

「まぁ良いよ。」

チームインセクトからはガーメイルがバトルフィールドに入った。
「それじゃ行くよ！ガーメイル選手対リザードン選手！バトルスタート！」リザードンとガーメイルのバトルが始まった。
「行くぞ！サイケ光線！」ガーメイルはサイケ光線をリザードンに放った。リザードンは空に飛ぶ事でこれを回避した。
「逃がさねぇ！」
ガーメイルもリザードンのあとを追った。
「もう一発サイケ光線！」ガーメイルはもう一度サイケ光線を放った。
「火炎放射！」
リザードンはサイケ光線に火炎放射で対抗した。二つの技はぶつかり合い爆発した。
「エアスラッシュ！」
ガーメイルはすかさずエアスラッシュでリザードンを攻撃した。
「くっ！」
リザードンはギリギリでエアスラッシュを回避する事が出来た。
「こいつ！これをくらえ！炎の・・・」
リザードンはガーメイルに炎の渦を放とうとした時、突然めまいが襲った。
「な、何だ・・・急にめまいが・・・それにこの身体のだるさは・・・」
「ふ～ん・・・やっとケムッソの毒が効いてきたんだ。」
「毒・・・？」
そう、リザードンは先程のケムッソとのバトルの時に毒針を受けていた。その毒針の毒が今になって効き始めたのだ。

「悪いが倒させてもらうぜ！サイコキネシス！」ガーメイルはリザードンをサイコキネシスで地面の方へ吹き飛ばした。リザードンは何とかバランスを立て直して着地する事が出来た。だが、毒がかなり効き始めたのかフラフラしている。

「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」
「これで終わりだ！ギガインパクト！！」
ガーメイルは急降下してリザードンにギガインパクトで突っ込んで行った。
「・・・毒何かに・・・負けてたまるか！ブラストバーン！！」
リザードンは最大パワーのブラストバーンを放った。ガーメイルは急降下していた為ブラストバーンを回避出来ずまともにブラストバーンを受けた。ガーメイルは倒れた。
「ガーメイル選手戦闘不能！よって勝者リザードン選手！そしてチームブラストは準決勝に進出だ！おめでとう！」
「やったなリザードン！」バクフーン達がリザードンに駆け寄った。
「へへへ・・・ちょっと・・・やばかった・・・ぜ・・・」
リザードンは倒れてしまった。
「リザードン！？」
「毒のせいです！待ってて下さい。今治しますから・・・リフレッシュ！」ラティアスはリフレッシュの力をリザードンに分けてあげる事でリザードンの毒を治してあげた。
「・・・ありがとうラティアス・・・だいぶ楽になったよ・・・」
「あぁ・・・俺もラティアスちゃんにリフレッシュしてもらいたい！」
またピカチュウが一人で勝手に暴走している。
「はいはい。リフレッシュならアタシがしてあげるからねぇ。」
そう言いながらピチューは必殺耳を引っ張るをピカチュウに決めた。
「イタタタ！？」
「バカやってないでリザードンを休憩場まで連れて行くの手伝え！」
ラティオス達はリザードンと一緒に休憩場に向かった。次の試合までまた３０分の休憩である。
「・・・ふう。どうですか？少しは元気になりました？」
「あぁ！凄いなラティアスの癒しの願いって技は！」
リザードンはラティアスの癒しの願いで体力を回復してもらってい

たのだ。その時、アナウンスが流れた。試合が始まるようだ。バクフーン達はフィールドに向かった。
「さぁ遂にベスト４のチームが揃ったぞ！ここでこの４チームを皆に紹介しよう！まずはチーム忍だ！」
カイリューがチーム名を言った瞬間そのチームがライトアップされた。

「次に、チーム爆！」
先程のチーム忍と同じようにライトアップされた。
「次にチームスカイ！」先程と同じように。何か省略してすみません（汗）
「そして最後にチームブラスト！」
チームブラストの名前が言われたとともにバクフーン達はライトアップされた。その瞬間観客から歓声が上がった。
「俺ら結構人気者になったんじゃね♪」
バクフーンは観客の皆に手を振っている。
「バクフーン、あんまり調子に乗らないでよ？」「解ってる解ってる♪」
「・・・絶対解ってない（汗）」
「さぁこの４チームの中で優勝するチームは果たして何処のチームだ？それじゃあ準決勝、張り切って行こう！」
カイリューの言葉を聞いて瞬間観客から歓声の声があがり会場に響いた。
「それでは準決勝最初の対戦はチーム忍とチーム爆！両チーム、最初に戦う人を決めてくれ！」
チーム忍からはテッカニン、チーム爆からはマルマインがバトルフィールドに入った。
「準備は良いかい？それじゃあ行くよ！準決勝、バトルスタート！！」
準決勝最初のバトルが始まった。

「やっと準決勝まで来たね。」
「そうだな～でもさ～何か俺まだ一回もバトルしてないんだけど？」
「それを言うならラティアスとピチューとピカチュウも同じだよ。」
「アタシは楽だから良いんだけどね♪」
「私は癒しの願いを少し使ったからちょっと疲れちゃいました。」
その時ピカチュウがラティアスの横に現れた。
「なら、俺がラティアスちゃんの疲れを癒してっ！？」
「お兄ちゃん、いい加減にしないと本気で怒るわよ！」
ピチューの必殺耳を引っ張るがまたしてもピカチュウに炸裂した。
「イタタタ！？も、もうすでに怒ってるだろう！？」
「痛そ（汗）てか、今日1日で一体何回耳を引っ張られてるの（汗）」
「解んねぇけど、間違いなく今までの1日で引っ張られた回数の新記録は更新だな。」
その時バトルフィールドから大きな爆発が発生した。
「おぉっとぉ！マルマイン選手、玉砕覚悟の大爆発を発動したぁ！自分は瀕死になってしまうが、これを受けたらテッカニン選手はひとたまりもないでしょう！」
爆発で発生した爆煙が晴れていく・・・マルマインは倒れていた。
だが何とテッカニンは無傷だった！
「忍たる者、いついかなる時にも冷静に対処するものでござる。」
テッカニンは守るを使って大爆発から身を守ったのだ。
「あいつやるな！」
そのあとチーム忍のテッカニンは勢いにのりあっという間に6連勝してしまった。
「チーム忍！決勝進出だぁ！おめでとう！！さぁ残るはチームスカイとチームブラストだ！両チームバトルフィールドへ！」チームスカイとバクフーン達チームブラストはバトルフィールドに入った。
「さぁ両チーム最初にバトルする人を決めてくれ！」

チームスカイはペリッパーが最初にバトルするようだ。ちなみにチームスカイは飛行タイプが中心のチームである。
「今度こそ俺が♪」
「ちょっと待ったぁ！」バクフーンが行こうとした時、ピカチュウが先にフィールドに入ってしまった。
「今回は俺がやらせてもらうからな！」
「え～！？」
「悪く思うなよ！」

「チームブラストはピカチュウ選手が最初にバトルするようだ！それじゃあ二人共準備は良いかい？行くよ！バトル、スタート！」
バクフーン達の準決勝が始まった。相手は全員飛行タイプの為ピカチュウの攻撃は効果抜群！相手はちゃんと電気対策はしていたのだが、ピカチュウは難なくその対策を打ち破ってしまいあっという間にピカチュウは６連勝してしまった！

「フッ！楽勝だぜ！ラティアスちゃん見てたか～い♪」
「最後の相手はチーム忍ですか・・・手強そうですね。」
「まぁ大丈夫でしょ？ここに今までバトル出来なくて若干イライラしてるバクフーンがいるし。」ラティアスはラグラージ達と最後の対戦相手のチーム忍について話し合っていた。
「見てないし！？」
ピカチュウはそう言いながらずっこけた。
「チームブラスト決勝進出！おめでとう！両チーム、最後の試合に備えてちゃんと休息するんだよ！」
決勝に進出したチームはまた休憩場に戻り３０分の休憩に入った。
そして３０分後・・・
「さぁ遂に決勝戦だぁ！皆、今まで以上に盛り上がって行こう！！」
観客から大きな歓声が会場に響いた。
「それじゃあ決勝まで残った２チームを紹介するよ！まずはチーム

忍！」カイリューに呼ばれた瞬間素早い動きでチーム忍がバトルフィールドに入った。チーム忍のチーム編成はテッカニン、ストライク、クロバット、アリアドス、カクレオン、ダーテング、ヌケニンの7人だ。
「そしてチームブラスト！」
「おし！行くか！」
バクフーン達は元気良くバトルフィールドに入った。
「それじゃあ決勝戦の最初のバトルをする人を決めてくれ！」
「拙者から行くでござる！」
チーム忍からはテッカニンがフィールドに入った。
「よ～し！今度という今度こそは！」
「ちょっと待てバクフーン！」
「がくっ！？またかよ！？」
「今からバトルするチームは今までのチームとはレベルが違う。いきなりお前が出るのは俺は賛成しかねる。」
「じゃあどうすんだよラティオス？」
「やはりお前は一番最後に出るべきだと思う。相手は素早いテッカニンだ。最初にバトルするのはピカチュウが良いんじゃないか？」
「うん、僕も同じ考えだよ。それで良いよねバクフーン？」
「ハァ・・・解ったよ。ピカチュウ、最初のバトル任せたぜ！」
「任せな！」
ピカチュウはフィールドに入った。
「チーム忍のトップバッターはテッカニン選手！そしてチームブラストはピカチュウ選手だ！それじゃあ準備は良いかい？行くよ！バトル、スタート！！」
遂に決勝戦が始まった。「一気に決めさせてもらうぜ！１０万ボルト！」
ピカチュウは１０万ボルトで攻撃した。
「忍法！影分身の術！」テッカニンは影分身で無数の分身を作り出しつつ１０万ボルトを回避した。

「忍法ってただ影分身やっただけだろ（汗）」
「これはノリで言っているだけでござる。」
「ノリって・・・そんなんで良いのか（汗）」
「隙あり！忍法、シャドーボール！」
テッカニンはシャドーボールをピカチュウに放った。
「アイアンテール！」
ピカチュウはシャドーボールをアイアンテールで打ち返した。シャドーボールはテッカニンに向かっていくが、当たったのは影分身だった。
「ならこれでどうだ！放電！」
ピカチュウはバトルフィールドいっぱいに放電した！
「忍法守る！」
テッカニンは守るを使って放電を防御した。しかし、放電は影分身を全て消し飛ばした。
「そこか！電光石火！」ピカチュウはテッカニンに電光石火で突っ込んで行った。
「忍法高速移動！」
テッカニンは高速移動でピカチュウの電光石火を避けた。
「野郎！」
ピカチュウはもう一度電光石火でテッカニンに突っ込んで行くが、テッカニンは高速移動と特性の加速で極限までスピードを上げているのでピカチュウは追いつけなかった。
「ちっ！スピードはやっぱあっちが上か！」
「攻めて来ないでござるか？ならばこちらから行くでござるよ！忍法、剣の舞い！」
テッカニンは剣の舞いを使って自分の攻撃力を極限まで上げた。
「来るか！」
ピカチュウはテッカニンの攻撃に備えて身構えた。スピードで追いつけないのならピカチュウはテッカニンが自分に向かってくる一瞬に攻撃しようと考えたのだ。

「忍法バトンタッチ！」しかし、テッカニンは攻撃して来なかった。
それどころかバトンタッチを使って味方のストライクと交代してしまった！
「えっ！？ちょっとカイリュー！勝ち抜き戦で交代して良いのかよ！？」
「バトンタッチは公式に認められてる技だから問題は無いよ。」
カイリューはさらりと答えた。
「そう言う事だ。だから今からお前の相手はこのストライクがお相手致す！行くぞ！居相切り！」ストライクはバトンタッチのおかげでテッカニンが今まで使っていたステータスアップの技の影響を全て受けている為、眼にも止まらぬスピードでピカチュウに向かって居相切りで攻撃した！居相切りはピカチュウに決まった！
「決まったな・・・」
「俺が簡単に攻撃をくらう訳がねぇだろ！ボルテッカー！！」
確かに居相切りは決まったのだが、決めたのはピカチュウが作り出した身代わりの分身体だった！ピカチュウは尻尾を使って高くジャンプしていて、落下スピードを利用してボルテッカーを発動させた！
「これで終わりだぁ！」ボルテッカーはストライクに決まった。ストライクは倒れた。
「ふう・・・何とかなったな・・・」
「シザークロス！！」
突然シザークロスがピカチュウを襲った！不意を突かれた為にピカチュウは攻撃をまともに受けてしまった！
「な・・・に・・・」
ピカチュウは倒れてしまった！
「残念だったな。貴様が倒したのは我が忍法、身代わりの術で作り出した分身体だ。まさか貴様もこの戦法を仕掛けて来るとは驚いたが、俺の方が一枚上手だったな。」
「ピカチュウ選手、戦闘不能！よって勝者ストライク選手！さすが決勝戦！最初からハイレベルな戦いだぞ！さぁチームブラスト！次

の選手を！」
「次は俺が行こう。」
「兄さん頑張って！」
「任せとけ！」
ラティオスがバトルフィールドに入った。
「それじゃあ行くぞ！ストライク選手対ラティオス選手！バトル、スタート！！」
ラティオスとストライクのバトルが始まった。
「行くぞ！居相切り！」ストライクは素早い動きでラティオスに近づき居相切りで攻撃した。
「守る！」
ラティオスは居相切りを守るで防御した。防御されたストライクは衝撃でよろけた。
「竜の波動！！」
ラティオスはすかさず竜の波動を放って攻撃した。だが、今のストライクは素早さが極限にまで高まっているために竜の波動はあっさり回避されてしまった。
「・・・やはり普通に攻撃するだけでは避けられるか・・・ならば！」
ラティオスは身体を透明にした。
「なっ消えた！？」
「別に消えた訳では無い。サイコキネシス！」
ラティオスはいつの間にかストライクの背後に回っており、サイコキネシスを使ってストライクを捕まえた。
「これなら攻撃が当たるだろ！１０万ボルト！」
ラティオスはストライクに効果がある１０万ボルトを放った。サイコキネシスで動きを封じられている為ストライクは回避出来ずに攻撃を受けた。
「くっ！？」
「これで終わりだ！」

ラティオスはサイコキネシスでストライクを壁に叩きつけた。ストライクは倒れた。
「ストライク選手戦闘不能！勝者ラティオス選手！ラティオス選手、見事なバトルだ！さぁチーム忍、次の選手は？」
「拙者でござる！」
再びテッカニンがフィールドに入った。
「それではラティオス選手対テッカニン選手！バトル、スタート！」
ラティオスとテッカニンのバトルが始まった。
「行くでござるよ！忍法影分身の術！」
テッカニンは最初のピカチュウ戦と同じく影分身を使った。

「またステータスを上げてからバトンタッチ戦法か・・・やられる前に倒す！１０万ボルト！」
ラティオスは１０万ボルトを影分身全てに放った。そして分身が消えて残すは本体のみになった。
「そこか！竜の波動！」ラティオスは竜の波動を放った。
「忍法守る！」
テッカニンは守るで１０万ボルトを防御した。
「拙者は簡単には捕まらないでござるよ！忍法高速移動！」
テッカニンは高速移動でスピードを上げた。
「サイコキネシス！」
ラティオスは先程のストライクと同じようにサイコキネシスでテッカニンを捕まえようとした。
「忍法影分身の術！」
テッカニンは影分身でラティオスに狙いを絞らせないようにした。
「くっ・・・ダメだ、サイコキネシスが決まらない！」
「そろそろでござるな！忍法バトンタッチ！」
テッカニンは再びバトンタッチを使って味方のダーテングと交代した。
「くそ！間に合わなかったか！」

「今から俺がお前の相手をしてやる！行くぞ・・・」
ダーテングの周りに空気の渦が現れた。

「くらえ！かまいたち！」ダーテングはラティオスにかまいたちを放った。
「守る！」
ラティオスは守るでかまいたちを防御した。
「竜の・・・」
「遅い！タネマシンガン！！」
竜の波動で反撃しようとしたラティオスだが、いつの間にかダーテングはラティオスの後ろにいてタネマシンガンを放って来た！タネマシンガンはラティオスに直撃した！
「くっ！？速い・・・だがこれなら！」
ラティオスは自分の身体を透明にした。
「ストライクの時に使った技か・・・だが、俺には通用しない！そら！」ダーテングは自慢の葉っぱのうちわをあおいだ。するとすさまじい突風が発生した！その突風でラティオスは壁に吹き飛ばされた！その衝撃でラティオスの身体は元に戻ってしまった！
「そこか！リーフストーム！！」
ダーテングはリーフストームをラティオスに放った。
「負けるか！竜星群！」ラティオスは竜星群を放った。その時、先に放たれていたリーフストームがラティオスに直撃した！ラティオスは倒れてしまった！ラティオスが最後に放った竜星群はダーテングに回避されてしまいダメージを与える事が出来なかった。
「ラティオス選手、戦闘不能！よって勝者ダーテング選手！ラティオス選手、バトンタッチを使われる前にテッカニン選手を倒そうとしたが惜しくも倒す事が出来なかった！チームブラスト、若干苦しくなって来たがこの状況を打開する事が出来るのか？さぁチームブラスト、次の選手は？」
「俺が行く！」

「頑張れリザードン！」
「おう！」
リザードンがバトルフィールドに入った。
「それではリザードン選手対ダーテング選手！行くよ！バトル、スタート！！」
リザードンとダーテングのバトルが始まった！
「行くぜ！」
リザードンは空へ急上昇した。
「空を飛べるからと言って有利になるとは限らないぞ！そら！」
ダーテングは地面に向かって葉っぱのうちわをあおいだ。その時に発生した突風を利用してリザードンがいる上空まで飛んだ！
「うわ！？こっち来た！？」
「タネマシンガン！」
ダーテングはタネマシンガンを乱射した。
「炎の渦！」
リザードンは炎の渦を放ちタネマシンガンを打ち消した！炎の渦はそのままダーテングに向かって行く。
「させるか！」
ダーテングはまた突風を生み出し炎の渦を吹き飛ばした！

「エアスラッシュ！！」ダーテングが炎の渦に気をとられている隙にリザードンは後ろに回り込みエアスラッシュを放った。エアスラッシュはダーテングに直撃した！ダーテングはそのまま地面に向かって落下していく。
「これで決めてやる！」リザードンは一気にダーテングに接近してドラゴンクローを決めようとした。だが、ドラゴンクローはダーテングに受け止められてしまった！
「なっ！？」
「奥義！大爆発！！」
ダーテングはリザードンを捕まえたまま大爆発した！大爆発は使っ

た側が瀕死になってしまう技だが、威力はとてつもなく、０距離で受けてしまったリザードンは耐えきれずに倒れてしまった！

「両者戦闘不能！チーム忍はまだ二人しか倒されていないが、チームブラストは三人倒されてしまった！チームブラストはこのままのペースで行くとちょっと危ないぞ！この悪い流れを断ち切る事は出来るのか！？さぁ両チーム！次の選手は？」

「拙者が・・・」

「ちょっと待てよテッカニン。俺にもやらせてくれよ。」

クロバットがテッカニンに言った。

「しかし・・・」

「たまにはお前の力を借りないでやっておきたいんだよ。良いだろ？」

「・・・仕方ない、良いだろ。そなたに任せるぞ！」

チーム忍からはクロバットがフィールドに入った。

「今度は僕が行く！」

「頑張って下さいラグラージさん！」

「良いとこ見せてくれよ？最近お前活躍あまりしてないんだから。」

「がくっ！？そこは応援するところでしょバクフーン！それに活躍してないってそういう事言うか普通！？」

「事実だからしょうがない（笑）」

「ムカッ！絶対勝ってやる！！」

ラグラージは怒りながらバトルフィールドに入った。

「それじゃあ行くよ！クロバット選手対ラグラージ選手！バトル、スタート！」

ラグラージとクロバットのバトルが始まった。

「冷凍ビーム！！」

ラグラージはスタートと同時に冷凍ビームを放った。

「影分身！」

クロバットはこの奇襲を影分身を使って冷静に対処した。

「そんな分身僕には通用しないよ！波乗り！！」ラグラージは波乗

りで分身全てを攻撃した。分身は消え去り更には本体にもダメージを与えた。
「くっ！流れを変えなければ！催眠術！」
クロバットはラグラージに催眠術を掛けようとした。
「催眠術か・・・それなら君の目を見なければ良い話だよね？」
ラグラージは目をつむってクロバットの目を見ないようにした。
「フッ！確かにそれなら催眠術は無理だが、お前はこちらが何処にいるか解るまい！」
クロバットはラグラージの周りをぐるぐる飛行し始めた。
「・・・そこだ！冷凍ビーム！」
ラグラージは目をつむったままクロバットに冷凍ビームを決めた！
冷凍ビームを翼に受けた為に翼が凍りついてしまいクロバットは飛べなくなった！
「な、何故俺の居場所が！？」
「残念だったね。僕の頭のヒレはレーダーみたいになってるから君の居場所が手に取るように解るんだよ。これで決めるよ！ハイドロカノン！！」ラグラージは飛べなくなったクロバットに最大パワーのハイドロカノンを決めた。クロバットは倒れた。
「クロバット選手戦闘不能！勝者ラグラージ選手！ラグラージ選手何とノーダメージで倒してしまった！これで三対三！チームブラストはこのまま勢いに乗れるのか？さぁチーム忍次の選手は？」「やはりここは拙者が行くでござる！」
再びテッカニンがバトルフィールドに入った。
「テッカニン拙者対ラグラージ選手！バトル、スタート！！」
ラグラージとテッカニンのバトルが始まった。
「冷凍ビーム！！」
ラグラージはまた冷凍ビームで奇襲した。
「忍法高速移動！」
テッカニンは高速移動で冷凍ビームを難なく回避した。
「波乗り！」

ラグラージは波乗りでフィールド全体に攻撃した。
「忍法守る！」
テッカニンは守るを使って波乗りを防御した。
「だったらこれならどうだ！アームハンマー！そしてハイドロポンプ！」ラグラージはまずアームハンマーで地面を砕き、無数の岩の破片をハイドロポンプでテッカニンに向かって飛ばした。
「忍法高速移動！更に影分身の術！」
テッカニンは高速移動と影分身のコンビネーションでラグラージのコンビネーションを回避した。
「そろそろ行くでござるよ！忍法バトンタッチ！」テッカニンはバトンタッチでアリアドスに交代した。
「あとは任せたでござるよ！」
「任された。さぁ行くぞ、ナイトヘッド！」
アリアドスはラグラージにナイトヘッドを放った。
「守る！」
ラグラージはナイトヘッドを守るで防御した。そしてすかさずラグラージはハイドロポンプで反撃しようとした。だがアリアドスはいつの間にかラグラージの背後にいた。
「不意打ち！」
アリアドスの不意打ちがラグラージに炸裂！ラグラージは吹っ飛ばされた！
「くっ！まだ、僕は負けてないよ！」
ラグラージはハイドロカノンで反撃しようとした。しかし・・・
「がはっ！？」
「毒突き・・・悪いがお前の敗けだ・・・」
アリアドスの毒突きが炸裂した。ラグラージは倒れた。
「ラグラージ選手戦闘不能！勝者アリアドス選手！テッカニン選手からのバトンタッチ戦法がチームブラストを苦しめる！果たしてチームブラストは逆転出来るのか！？さぁチームブラスト、次の選手は？」

「私がやります！」
「ラティアス姉ちゃん頑張って！」
「うん！」
ラティアスがバトルフィールドに入った。
「アリアドス選手対ラティアス選手！バトル、スタート！！」
ラティアスとアリアドスのバトルが始まった。
「いきますよ！水の波動！」
ラティアスは水の波動を放った。
「糸を吐く！」
アリアドスは糸を壁に張り付け、まるでゴムに引っ張られるように壁に向かって飛んでいき水の波動を回避した。
「シャドーボール！」
ラティアスは続けてシャドーボールを放った。だが、これも先程と同じようにアリアドスは糸を使って回避した。その後もラティアスは連続でシャドーボールを放つが全て回避されてしまった。
「遠距離攻撃がダメならこれでどう！鋼の翼！」ラティアスは鋼の翼でアリアドスを攻撃しようとした。だがその時、アリアドスを目の前にしてラティアスの動きが止まってしまった！
「えっ何？」
「かかったな！自分の身体を良く見てみな！」
アリアドスに言われラティアスは自分の身体を見てみた。
「これは糸！？」
ラティアスの身体には細い糸がたくさん絡まっていた。
「俺の蜘蛛の巣だ！お前の攻撃を回避しながら作っていたのさ！その罠にはまったが最後、お前はそこから脱け出す事は出来ない！これで決めてやる！」
アリアドスはエネルギーを集め始めた。ラティアスは逃げようとするが蜘蛛の巣からなかなか脱け出せない！
「破壊光線！」
アリアドスは破壊光線を放った。ラティアスは最後まで脱け出す事

が出来ず破壊光線を受けてしまった！ラティアスは倒れた。
「ラティアス選手戦闘不能！勝者アリアドス選手！チームブラスト後が無いぞ！果たして逆転出来るのか？それともチーム忍がこのまま押しきるのか？さぁチームブラスト最後の選手は？」
「良し！行くか！」
「頑張れバクフーン兄ちゃん！」
遂にバクフーンがバトルフィールドに入った。
「く～！やっとバトル出来る！さぁ早くやろうぜ！」
バクフーンはもう待ちきれないようだ。
「バクフーン君やる気満々だね！それじゃあ始めようか！バクフーン選手対アリアドス選手！バトル、スタート！！」
バクフーンとアリアドスのバトルが始まった。
「お前を倒して俺達チーム忍が優勝してやる！くらえ・・・」
「フレアドライブ！！」アリアドスがナイトヘッドで攻撃しようとした時、バクフーンが電光石火とのコンビネーションで高速フレアドライブをアリアドスに決めた！アリアドスは倒れた。
「アリアドス選手戦闘不能！勝者バクフーン選手！凄いぞバクフーン選手！一発でアリアドス選手を倒してしまった！バクフーン選手、このまま勢いに乗れるか？チーム忍、次の選手は？」
「拙者が行くでござる！」テッカニンがバトルフィールドに入った。
「テッカニン選手対バクフーン選手！バトル、スタート！」
バクフーンとテッカニンのバトルが始まった。
「噴火！！」
バクフーンは高速移動や影分身で逃げられないように噴火をフィールド全体に放った！
「忍法守る！」
テッカニンは回避が無理と解るとすぐに守るを使って噴火を防御した。
「忍法・・・」
「させるか！」

バクフーンは電光石火で一気にテッカニンの目の前まで来た！
「速い！？」
「火炎放射！」
バクフーンは至近距離で火炎放射を放った！火炎放射はテッカニンに直撃した！
「良し決まったぁ！」
「甘いでござるよバクフーン殿！」
テッカニンはバクフーンの後ろにいた。実はテッカニンは身代わりを使って火炎放射を回避していたのだ。
「やっぱそう簡単には勝たせてくれないか！」
バクフーンは再び構えた。
（さすがチームブラストのリーダーでござる。油断するとあっという間にやられてしまうでござるな・・・）
「だが、最後に勝つのは拙者達チーム忍でござるよ！忍法高速移動！」
テッカニンは高速移動でバクフーンの周りを飛び回り始めた。
「またバトンタッチで誰かと交代するつもりだな？だったら・・・」
バクフーンは何とその場に座り込んでしまった！
「おっと？バクフーン選手一体どうしたんだ？急に座り込んでしまったぞ？」
「どういうつもりでござるかバクフーン殿？」
「またバトンタッチするつもり何だろ？今まで皆それを阻止しようとあんたを攻撃したけど、素早いあんたには全部避けられて体力を消耗。そして交代して来た奴らに倒された・・・だったら、無駄に攻撃して体力を消耗するより交代して来た奴の為に体力を温存してた方が良いだろ？だから、俺は座ってバトンタッチするまで待ってようって思った訳。」
「・・・そなた、面白い奴でござるな。そなたのような者に今まで会った事が無いでござるよ。そなたの望み通りバトンタッチするでござる！」

テッカニンは高速移動などでステータスを上げてからバトンタッチを使ってカクレオンと交代した。
「あんたにバトンタッチしたのか。そんじゃ、バトルしようぜ！」
バクフーンは立ち上がって構えた。
「行くよ～！」
突然カクレオンの姿が消えた！
「えっ！？消えた！？ラティアスやラティオスと同じ能力か？」
「シャドークロー！」
カクレオンは一気にバクフーンに近づきシャドークローを決めた！
「イタタタ・・・姿消せるのは厄介だなぁ・・・ん？何だあのギザギザ模様？」
バクフーンは空中に浮いているギザギザ模様に気がついた。実はカクレオンは完全に姿を消せる訳ではなく、何故かお腹のギザギザ模様だけは消えないのだ。
「見っけ♪火炎放射！」バクフーンはそのギザギザ模様に向かって火炎放射を放った。火炎放射はカクレオンに直撃した！
「この！ドレインパンチ！」
カクレオンはドレインパンチで反撃してバクフーンに決めた！ドレインパンチは相手に与えたダメージの半分を自分の体力回復のエネルギーにしてしまう厄介な技なのだ！
「やったなぁー！火炎放射！」
バクフーンは再び火炎放射を決めた！だが、さっきは効いた筈の火炎放射が今は全然効いてないのかカクレオンは平気な顔をしている！
「あり？何で効かないんだ？」
「カクレオンの特性・・・変色だよ・・・」
まだバトルのダメージが残っているラグラージがバクフーンに言った。
「変色？」
「受けた攻撃と・・・同じタイプになるんだよ・・・」
「受けた攻撃と同じタイプ？・・・あっ！だから火炎放射を受けた

のに平気な顔をしていたのか！てことは、今あいつは炎タイプって事だな？だったらこれだ！穴を掘る！」バクフーンは地中に潜った。
カクレオンは攻撃をくらわないように走り出した。
「逃がさないぜ！」
バクフーンは穴を掘る攻撃をカクレオンに決めた！炎タイプになっていたカクレオンには地面タイプの攻撃は効果抜群だ！
「今なら地面タイプになってるからこの技は効くだろ！ブラストバーン！！」
バクフーンはトドメの一撃でブラストバーンを決めた！カクレオンは倒れた！
「カクレオン選手戦闘不能！勝者バクフーン選手！さぁいよいよ決勝戦も大詰め！遂に両チーム最後の一人となったぞ！果たして勝つのはどちらのチームだ！？さぁチーム忍のテッカニン選手！フィールドへ！」
テッカニンがバトルフィールドに入った。
「さぁ泣いても笑ってもこれがラストバトルだ！準備は良いかい？行くよ・・・バトル、スタートォォォ！！」
バクフーンとテッカニンのラストバトルが始まった。
「行くぜ！火炎放射！」バクフーンは火炎放射を放った。
「忍法影分身の術！」
テッカニンは影分身で火炎放射を回避した。
「今回は全力で攻めさせてもらうでござる！必殺！シザークロス！」
テッカニンは影分身したままシザークロスでバクフーンを攻撃しようと向かって来た！
「ならこれだ！スピードスター！そして火炎放射！」
バクフーンはスピードスターと火炎放射のコンビネーションで攻撃した。
「名付けて、ファイアースターだぜ！」
バクフーンが命名したファイアースターはテッカニンの分身体全てを吹き飛ばした！だが、本体はいなかった！

「あいつのスピードなら・・・後ろか！火炎車！」バクフーンはテッカニンが後ろにいると予想し、後ろに向かって火炎車で突っ込んだ！すると予想通りテッカニンはいた！バクフーンのこの奇襲にテッカニンは回避出来ず火炎車を受けて壁まで吹き飛ばされた！
「これで終わり！ブラストバーン！！」
バクフーン渾身のブラストバーンがテッカニンに炸裂！大きな火柱が発生した！火柱が消えた時テッカニンは倒れていた。「テッカニン選手戦闘不能！勝者バクフーン選手！そして、チームブラストの優勝だぁ！おめでとうチームブラスト！！」バクフーン達が優勝した！その時観客から大きな歓声があがった。バクフーン達の優勝が決まってからしばらくして表彰式が行われた。バクフーン達は片目のカイリューから優勝トロフィーと大会優勝記念のメダル、そして優勝賞金の十万ポケが渡された。
「スッゲェ～！このトロフィーとかこのメダルかっけぇ～！」
バクフーンはすっごい喜んでいる。
「十万ポケか・・・何かバクフーンの食費で全部消えそうな気がするのは僕の気のせいかな（汗）」
「きっと気のせいだ・・・そう願おう（汗）」
ラグラージとリザードンは賞金を気にしていた。
「さて、大会も終わって残すはあれだけだな♪」
「ですねバクフーンさん♪」
バクフーンとラティアスは何故か笑っている。何故なら・・・
「お祭りだぁ～♪」
そう、大会が終わったあとの残されたイベント、お祭りだ！バクフーン達はあっちこっち行きまくった。金魚すくいならぬトサキントすくいやミルタンクが作るミルク味の綿菓子などいろいろ楽しんだ。そしてお祭りのメインイベント、ポケモン花火が始まった！
「おっ！花火だ花火♪」
「うわぁ綺麗！あっ兄さん！あれピカチュウさんみたいな花火だよ！」

「本当だなぁ。ここにいるピカチュウよりよっぽどかわいく出来ているな。」
「がくっ！？そりゃ無いぜラティオス～！？」
「楽しんでるかい？」
カイリューがバクフーン達の所にやって来た。
「もち楽しんでるぜ♪」
「良かった。あっそうだ、ジムリーダーが明日君達の挑戦を受けるだって。」
「マジか！」
「うん。」
「よっしゃ！絶対最後のバッジをゲットしてやる！」
バクフーンは凄く燃えている。
「やる気満々って感じだね？だけど、今日は楽しんでね？せっかくのお祭りなんだから。」
「もちろん♪」
バクフーン達は明日、最後のジム戦をする事になった。果たしてバクフーン達は最後のジムを制覇する事が出来るのか？

第四十一話優勝出来るか？バトル大会！（後書き）

第四十一話完成です。いやぁ一回戦から決勝までまとめて書いたら今まで書いた中で一番長くなってしまいました（＾―＾；）正直、疲れましたねこれは（笑）だけど、僕はもっとたくさんの人達に読んでもらう為に頑張ってバクフーン達の冒険を書いていきます！

第四十二話最後のジム戦！（前書き）

見事バトル大会で優勝したバクフーン達！この調子で最後のジムでも勝利する事が出来るのか！？

第四十二話最後のジム戦！

バクフーンとラティアスはまだ眠そうにしている。時刻は午前１１時。
「ふぁ～・・・」
「そうですね～・・・ふぁ～・・・」
「あ～・・・まだ眠い～・・・」
「二人共大会終わった後にペース配分考えずにお祭りで騒ぎ過ぎたせいでしょ！」
「お祭りは思いっきり楽しむものだろ！」
「そうですよラグラージさん！」
バクフーンとラティアスはちょっと怒り口調でラグラージに言った。
「二人共そんなムキにならなくても（汗）」
「ラティアスちゃん・・・」
「さてはラティアスのもう一つの顔を見て付き合うのを諦めたか？」
ラティオスはそう思った、が・・・
「・・・お祭り好きのラティアスちゃんも素敵だ～♪」
全然諦めていないピカチュウ。いやむしろ更にラティアスを彼女にしたい気持ちが強くなったようだ。
「ラティアスは絶対お前にはやらん！！」
「何を！！」
ラティオスとピカチュウは睨みあっている。
「こっちはこっちで何かやってるし（汗）」
「はいはい皆そこまでだ！今日は最後のバッジをかけたジム戦だろ？気合い入れないと今回のジム戦に勝てないぞ？」
リザードンが皆に言った。
「リザードン君の言う通りだよ皆。」
カイリューがやって来た。
「カイリュー！どうしたんだ？」
「君達のジム戦が気になってね。応援しに来たんだ。」

「そうなのか！サンキューカイリュー！よーし！気合い入れてやるか！行こうぜ皆！」
バクフーン達は気持ちを切り替える事が出来たようだ。気合いを入れてドラゴンジムに向かった。
「一体ここはどんなルールでバトルするんだろう？」
「ドラゴンジムは主にダブルバトルでジム戦をするんだよラグラージ君」カイリューがラグラージに答えた。
「へぇ、ダブルバトルなんだ。」
「うん。ダブルバトルの勝ち抜き戦でね。先に相手チームを全員倒した方が勝ち。結構シンプルでしょ。」
「そうだね。ってあれ？バクフーンがいない？」
「お～い！早く来いよ～！」
カイリューの説明を聞いてる間にバクフーンはもう中に入ろうとしていた。
「あっ待ってよバクフーン！」
ラグラージ達も急いでバクフーンの後を追った。ジムの中に入ってしばらくするとバトルフィールドが見えて来た。建物の中だが、そこのバトルフィールドの上だけ天井がなく、更にはバトルフィールドの半分はプール、半分は土の床になっていた。
「変わったバトルフィールドだなぁ。」
「・・・良く来たな。」そこのフィールドには片目のカイリューがいた。
「まず始めに、大会優勝おめでとう。見事なバトルだった。」
「ありがとうございます！」
「うわっ！バクフーンの敬語久しぶりに聞いた！」
「良いだろ別に！」
「俺の息子のカイリューからは君達の事を良く聞いていたよ。息子の言った通り、君達は素晴らしいものを持っているな」
「えっそうですか？・・・って、今息子って？」
「何だカイリュー、話してなかったのか？」

「いけない。すっかり忘れてたよ。ごめんね皆、実は僕の父さんはジムリーダーなんだ。」
「・・・えぇ！？」
バクフーン達はもの凄く驚いている。
「それマジか！？」
「うん。そんなに驚く事かな？」
「そりゃ驚くって！」
「ハハハ・・・まぁそういう事だ。息子は見た通りのんびりした性格だが、これからも良い友達でいてくれ。さて・・・そろそろ始めようかジム戦を！」
バクフーン達は陸側、片目のカイリューが率いるチーム聖竜がプール側に向かった。ちなみに片目のカイリューの名前はリュウと言うらしい。リュウ率いるチーム聖竜のチーム編成はリュウ、ボーマンダ、キングドラ、チルタリス、ハクリュー、コモルーの六人だ。
「ハッサム審判頼むぞ」
「はい！」
何処からともなくハッサムが審判台に現れた。
「いつの間に・・・毎回毎回思うけど、ハッサムは一体何処から来てるんだ？」
「さぁ？」
バクフーン達をよそにハッサムはルール説明を始めた。
「それではこれより、ジムリーダー率いるチーム聖竜とチャレンジャーチーム、チームブラストのジム戦を開始致します！ルールは勝ち抜き戦、六対六のダブルバトル！先に相手チームを全て戦闘不能にしたチームの勝利とします！それでは、チーム聖竜から二名バトルフィールドへ！」
チーム聖竜からはキングドラとチルタリスがバトルフィールドに入った。
「続いてチームブラストから二名バトルフィールドへ！」
「まずは僕とピカチュウで行こう！」

「解った。」
「お兄ちゃん頑張ってね！」
「任せろ！ラティアスちゃん見ててね♪」
「・・・真面目にやってよお兄ちゃん。」
ピチューからもの凄い殺気が・・・
「は、はい（汗）」
ピカチュウとラグラージがバトルフィールドに入った。
「それでは、バトル開始！！」
ジム戦が始まった。
「そんじゃ行くか！チルタリス！」
「ＯＫキングドラ！」
「水の波動！」
「竜の波動！」
キングドラの水の波動とチルタリスの竜の波動は合わさり合体攻撃となってラグラージとピカチュウに襲いかかる！
「ピカチュウ！僕の後ろに！」
「解った！」
「守る！」
ピカチュウはラグラージの後ろに行き、ラグラージは守るを使って合体攻撃を防御した。
「良し！」
ピカチュウはラグラージを踏み台にして高くジャンプして１０万ボルトをキングドラに放った！
「守る！」
キングドラに向けて放たれた１０万ボルトはチルタリスの守るで防御されてしまった。
「私も守るは使えるのよ！キングドラ！」
「任せな冷凍ビーム！」キングドラは空中にいるピカチュウに向けて冷凍ビームを放った。
「光の壁！」

ピカチュウは光の壁を作りそれを踏み台にして冷凍ビームを開始した。
「ラグラージ！」
「うん！ハイドロポンプ！」
ラグラージはピカチュウに向けてハイドロポンプを放った。ピカチュウはそのハイドロポンプに乗ってチルタリスに向かっていく！波乗りピカチュウだ！
「くらえ！アイアンテール！！」
ピカチュウはアイアンテールでチルタリスを攻撃した。
「なら、鋼の翼！」
チルタリスの鋼の翼とピカチュウのアイアンテールがぶつかり合った。
「待ってなチルタリス！ハイドロポンプ！」
キングドラはハイドロポンプでチルタリスの援護をしようとした。
「させない！冷凍ビーム！！」
ラグラージは冷凍ビームでキングドラのハイドロポンプを凍らせてピカチュウへの直撃を阻止した。
「ナイスだラグラージ！１０万ボルト！」
ピカチュウはつばぜり合いをしている最中に１０万ボルトを使ってチルタリスを攻撃した。
「くっ！？この！」
チルタリスは１０万ボルトを受けながらもピカチュウを鋼の翼で弾き飛ばした。ピカチュウはまた光の壁を作ってそれを利用して安全に着地した。
「こうなりゃあれを使うか！行くぜチルタリス！」
「いつでも良いわよ！」
「竜巻！」
キングドラは竜巻を発生させた。そしてチルタリスは竜巻の中心に入った。チルタリスは竜巻の中心で次の攻撃に備えて力を溜め始めた。それと同時にチルタリスの身体が光始めた。そうしている間に

竜巻はラグラージとピカチュウに向かって来る！
「ありゃ何かやばいのが来るな・・・」
「やらせる前に倒せば問題無いよ！冷凍ビーム！！」
ラグラージはチルタリスに向かって冷凍ビームを放った。だが、竜巻がバリアのような役割をして冷凍ビームを弾いてしまった！
「ならこれだ！雷！！」今度はピカチュウが雷を放ったがやはり竜巻に弾かれた。
「パワーが足りないのか・・・だったらあれをやるしかないな！ラグラージ、少しの間だけ俺を守ってくれないか？」
「解ったよ。でも急いでよ？」
「あぁ！行くぜ！」
ピカチュウは空の雲に向かって雷を放ち、雷雲を作り出して自然の雷を自分に呼び寄せてエネルギーを溜め込もうとした。
「ぐっ！？・・・やっぱキツイぜ・・・こりゃ・・・！」
「何をする気か知らないが隙だらけだぜ！ハイドロポンプ！」
キングドラはピカチュウにハイドロポンプを放った。
「だったら僕もハイドロポンプ！」
ラグラージもハイドロポンプを放った。二つのハイドロポンプはぶつかり合った。
「こいつ！最大パワー！！」
キングドラはハイドロポンプを最大出力で放った。
「負けないよ！ハイドロ・・・カノン！！」
ラグラージはハイドロポンプからカノンに切り換えた。どんどんキングドラのハイドロポンプを押し返していき、最後にはハイドロカノンを決めた！そしてその時、やっとピカチュウのチャージが完了した。ピカチュウの身体は金色の輝きを放っている。
「待たせたなラグラージ！さぁ、そこの竜巻の中にいるチルタリス！覚悟しなよ！」
ピカチュウは攻撃する構えに入った。
「覚悟するのは・・・そっちよ！ゴッドバード！！」

チルタリスもエネルギーチャージが完了して、最大パワーのゴッドバードで突っ込んで来た！
「ゴッドバードか・・・なら俺はこれだ！ラグラージ！また背中借りるぜ！」
ピカチュウはまたラグラージを踏み台にした。
「ボルテッカー！！」
ピカチュウのボルテッカーとチルタリスのゴッドバードが激突して大きな爆発が発生した！
「・・・悪いな。今の俺はさっきより強くなってるんでね。」
「くっ・・・」
チルタリスは力尽きて落下していく。ピカチュウは光の壁を作り踏み台にしてジャンプし、キングドラに向かって行った。
「もう一発ボルテッカー行くぜ！」
「くらってたまるかよ！高速移動！」
キングドラは高速移動でボルテッカーを回避しようとしたその時、何故か身体が動かなかった。キングドラが確認して見るといつの間にかプールが凍りついていて身体も半分凍りついていた。
「冷凍ビーム・・・今だよピカチュウ！」
そう。ラグラージが冷凍ビームでプールとキングドラを凍らせて動きを封じたのだ。
「ナイスだぜラグラージ！くらえぇぇぇ！！」
ピカチュウのボルテッカーがキングドラに決まった！キングドラは倒れた。
「キングドラ・チルタリス、戦闘不能！よってピカチュウ・ラグラージの勝利！」
まずはチームブラストが1勝した。勝ち抜きなので二人は引き続きバトルを続行する。チーム聖竜の次のペアはハクリューとコモルーのペアだ！
「ハクリュー・コモルー対ピカチュウ・ラグラージ！試合開始！」
「一気に行くぜ！ボルテッカー！」

まだチャージしたエネルギーが残っているピカチュウは速攻で決めようとコモルーに向かってボルテッカーで突っ込んだ！

「・・・」

コモルーは無言のまま守るを使ってボルテッカーを防御した。

「くっ！？」

「竜の怒り！」

守るで防御され軽く吹き飛ばされたところをハクリューが竜の怒りを放った。竜の怒りはピカチュウに決まり、ピカチュウは吹き飛ばされた。

「大丈夫ピカチュウ！？」

「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・ちょっと・・・飛ばし過ぎたかな・・・」

その時コモルーが二人に向かって竜星群を放った。ラグラージは動けないピカチュウをかばいながら守るで防御した。

「まだ終りません！竜星群！！」

今度はハクリューが竜星群を放って来た！

「またか！？お願いだから発動してよ！守る！」

ラグラージはもう一度守るを使おうとした。だが、守るは連続で使うと失敗しやすくなる技。守るは失敗してしまい二人は竜星群をまともに受けた。二人は倒れてしまった！

「ピカチュウ・ラグラージ戦闘不能！勝者ハクリュー・コモルーペア！」「大丈夫か二人共！？」

二人の所にバクフーン達が駆け寄って来た。

「・・・悪い・・・負けちまった・・・」

「ごめん・・・」

「二人は頑張ったさ！後は任せろ！行くぞラティアス！」

「うん！」

ラティオスとラティアスのゴールデンペアがバトルフィールドに入った。バクフーン達はラグラージとピカチュウを運んであげた。

「ハクリュー・コモルーペア対ラティオス・ラティアスペア！試合

開始！」

「「竜の波動！」」

ラティオスとラティアスは二人で竜の波動をハクリューに放った。

「・・・」

コモルーが守るを使ってハクリューを助けた。

「ありがとコモルー！」

「・・・」

「・・・相変わらず無口だね（汗）」

「・・・行くぞ・・・」「あっうん！」

コモルーは竜の息吹を放った。

「竜の怒り！」

ハクリューは竜の怒りを放った。竜の怒りと竜の息吹が合体して大きな攻撃になってラティオスとラティアスに襲いかかる！

「「守る！」」

二人は守るを使ってこれを防御した。

「ラティアス！」

「解ったわ！ミストボール！」

ラティアスはミストボールを放った。だが、このミストボールは攻撃する為に放ったのでは無かった。ハクリューとコモルーの目の前まで来たミストボールは突然弾けて二人を濃い霧が包んだ！

「前が見えないよ！？」

「・・・！」

「ナイスミストボールだラティアス！さぁ、仕上げだ！」

「うん！」

「「竜星群！！」」

二人揃って竜星群を放った！ハクリューとコモルーは竜星群が放たれた事に気づけず竜星群をまともに受けた。ハクリューとコモルーは倒れた。

「ハクリュー・コモルーペア戦闘不能！勝者、ラティオス・ラティ

アスペア！」
「やったね兄さん！」
「あぁ・・・だが、油断するなラティアス。次の相手は強敵だぞ。」
「行くぞボーマンダ。」
「あいよ、リーダー。」ジムリーダーのリュウとボーマンダがバトルフィールドに入った。
「ジムリーダーリュウ・ボーマンダペア対ラティオス・ラティアスペア！試合開始！」
「ボーマンダ、いつもの戦法で行くぞ。」
「ウィ～ス！」
ボーマンダが一人で突っ込んで来た！
「行くぜドラゴンダイブ！！」
ボーマンダはラティアスにドラゴンダイブで突っ込んだ！
「守る！」
ラティオスが守るを使ってラティアスを助けた！
「今だラティアス！」
「竜の波動！」
ラティアスは竜の波動で反撃した。
「おっと、竜の舞い！」ボーマンダは竜の舞いを使って攻撃力と素早さを上げながら竜の波動を回避した！
「ラティアス！」
「ＯＫ！手助け！」
ラティアスは手助けを使ってラティオスに力を与えた。
「良し、１０万ボルト！」ラティオスは手助けでパワーアップした１０万ボルトを放った。
「これは竜の舞いじゃあ避けきれないな・・・だったら守るだ！」
ボーマンダは守るを使って１０万ボルトを防御した。
「今度はこっちの番だぜ！竜の舞いから、ドラゴンダイブ！！」
ボーマンダは再び竜の舞いで攻撃力と素早さを上げた。そしてドラゴンダイブでラティオスに突っ込んで行った。

「危ない兄さん！守る！」ラティアスがラティオスを守るを使って助けた。
「すまないラティアス」
「ふう・・・お前達なかなかのコンビネーションだな。俺の攻撃がなかなか決まらないぜ。だけど・・・そろそろだな。」ボーマンダは後ろを振り返った。ラティオスとラティアスもその方向を見ると、リュウがいた。
「ご苦労だったボーマンダ・・・準備は出来た。」
「待ってたぜリーダー。あとは任せたぜ！」
ボーマンダはラティオス達から離れた。
「何・・・あの人の身体からオーラみたいなのが見えるのは？」
リュウの身体からはエメラルドグリーンのような色をしたオーラが出ていた。
「前にルカリオから聞いた事がある・・・自分と同じくうちなる波動の力を解放して身体能力を高める事が出来るカイリューがいるって・・・」
「まさか、それがあのジムリーダーって事？」
「・・・らしいな。油断するなよラティアス。」ラティオスとラティアスはいつ攻撃が来ても良いように身構えた。
「・・・何処を見ている？」
いつの間にかリュウはラティオス達の後ろにいた。
「なっ！？いつの間に！？」ラティオスは攻撃しようとした。
「・・・君にはもう戦う力は残っていない。」
「何？・・・ぐっ！？」
突然ラティオスの身体に激痛が走った！次の瞬間にラティオスは倒れてしまった！
「兄さん！？」
「・・・君もだ。」
リュウがそう言った瞬間ラティアスにも激痛が襲った！ラティアスも倒れてしまった！

「ラティオス・ラティアスペア戦闘不能！リュウ・ボーマンダペアの勝利！」
「今・・・何があったんだ・・・？」
「相変わらず怖いなぁ父さんは。手加減無しだよ。どうやらリザードン君には見えて無かったみたいだね？父さんが燕返しとドラゴンクローのコンビネーション攻撃を決めたところを。」
「コンビネーション攻撃だって！？だが、燕返しは一度勢いをつけてから一気に加速して一瞬相手には消えたように見える技の筈だ！そんな動作一度も無かったぞ！」
「ちゃんとやってたよ。今の父さんは自分のうちなる力を解放して身体能力を上げているんだ。全ての動作が速すぎて君には見え無かっただけさ」「・・・スッゲェ～♪」バクフーンは目をキラキラさせていた。
「カイリュー！お前の父さんスッゲェ～なぁ！やっべ～早くバトルしてぇ♪早く行こうぜリザードン！」
バクフーンはリュウとバトルしたくてたまらないようだ。
「・・・ハハハ・・・たくっ本当にバトルバカ何だからお前は！良し、行くか！言っておくが、今の俺じゃジムリーダーに勝てない。お前に任せるからな！」
「任せとけ♪」
バクフーンとリザードンはバトルフィールドに入った。
「リュウ・ボーマンダペア対バクフーン・リザードンペア！試合開始！」
「最初から行くぜ！」
次の瞬間バクフーンは凄まじい炎に包まれた。ブラストモードだ！
「リザードン、ボーマンダは任せたからな。」
「あぁ解ってるよ！」
次の瞬間バクフーンは電光石火でリュウに向かって行った。
「燕返し！」
リュウは燕返しで応戦した。二人は超高速で何度もぶつかり合った！

「・・・火炎放射。」
バクフーンは高速ですれ違う時に火炎放射をリュウに放った。
「水の波動！」
リュウは水の波動で火炎放射を防いだ。
「電光石火から火炎車」
「高速移動からドラゴンダイブ！」
バクフーンは電光石火から火炎車のコンビネーション、リュウは高速移動からドラゴンダイブのコンビネーションでまた超高速で何度もぶつかり合った！
「・・・凄い戦いだ・・・俺が加勢しに行ってもバクフーンの足を引っ張るだけだな・・・」
「そう。だから俺とお前とで戦うしか無いって事だ！ドラゴンクロー！」ボーマンダはドラゴンクローでリザードンを攻撃した。
「おっと！」
リザードンはドラゴンクローをギリギリで受け止めた！
「へぇ～、俺のドラゴンクローを受け止めるなんてやるじゃないか！」
「俺はバクフーンみたいなパワーを持っていないが・・・弱くは無いと思うぜ？火炎放射！」
リザードンは至近距離でボーマンダに火炎放射を決めた！
「・・・良い火炎放射だ・・・だが、ドラゴンタイプの俺には効かないぜ！雷の牙！」
ボーマンダはドラゴンタイプを持っているので炎タイプの火炎放射は効果はいまひとつ。ボーマンダにはあまりダメージが無い。ボーマンダは反撃でリザードンに効果がある雷の牙で攻撃しようとした。
リザードンはギリギリで雷の牙を回避する事が出来た。
「危ねぇ！さすがにそいつをくらう訳にはいかないからな！」
「ちっ！意外に素早いじゃねぇか！まぁ、簡単に倒れてもらってもつまらないからな！」
その時、凄まじい爆発が発生してその衝撃波でリザードンとボーマ

ンダは吹っ飛ばされた。
「な、何だ!?」
爆発した方を見るとバクフーンとリュウがフレアドライブとドラゴンダイブでぶつかり合っていた。どうやら強力な技と技がぶつかり合った時に爆発が発生したようだ。
「オーバーヒート。」
「竜星群!」
バクフーンのオーバーヒートとリュウの竜星群がぶつかり合った。その瞬間再び凄まじい爆発が発生した!その時に発生した衝撃波でバクフーンは壁に、リュウはプールの方に吹き飛ばされた!
「バクフーン!?」
「リーダー!?」
リザードンはバクフーンの所へ、ボーマンダはリュウの所へ向かった。
「バクフーン!大丈夫か!?」
「・・・あ、あぁ。何とかな・・・だが、そろそろブラストモードが解けそうだ・・・次で決めないと・・・」
バクフーンはフラフラになりながらも何とか立ち上がった。
「リーダー!」
「くっ・・・」
リュウは何とかプールから陸の方にあがった。
「リーダーがこんなにやられる何て・・・ルカリオと息子のカイリューとやりあって以来だな?」「あぁ・・・こんなに楽しいバトルは久しぶりだ・・・いや、もしかすると今までで一番楽しいかもしれないな・・・」
リュウは笑みを浮かべていた。
「・・・あんたがそんな風に笑うところ、久しぶりに見たぜ。・・・次の攻撃で最後みたいだな?」
「あぁ・・・残念だが・・・次で決める!」
リュウは立ち上がった。次の瞬間バクフーンとリュウはエネルギー

を集め始めた。
「・・・決まれ・・・ブラスト・・・バーン!!」バクフーンは最大パワーのブラストバーンを放った。
「・・・これで最後だ!破壊光線!!」
リュウは最大パワーの破壊光線を放った。バクフーンのブラストバーンとリュウの破壊光線はぶつかり合った!
「くっ!?」
「ハアァァァ!!」
破壊光線が少しずつブラストバーンを押していく。
「・・・くそ!」
「ブラストバーン!!」その時リザードンがブラストバーンで加勢してくれた!
「リザードン・・・!」
「ダブルバトルなんだ!俺も手伝うぜ!」
リザードンの加勢でブラストバーンが破壊光線を押し戻し始めた!
「ぐっ!?」
「破壊光線!!」
今度はボーマンダがリュウの加勢に来た。
「ボーマンダ!」
「俺はリーダーが負けるところとか見たく無いんだよ!」
再び破壊光線がブラストバーンを押し始めた。
「くっ!?」
「クソ・・・俺にも・・・バクフーンみたいな力があれば・・・」
どんどん破壊光線がブラストバーンを押していく。あと少しでバクフーン達に直撃しそうだ!
「・・・負けて・・・たまるかぁぁぁ!!」
次の瞬間リザードンの尻尾の炎が激しく燃え始めた!特性の猛火のように見えるが、少しバクフーンのブラストモードに近いものがある。とにかく尻尾の炎が激しく燃えた瞬間リザードンのブラストバーンの火力が大幅に上がり押されていたブラストバーンが再び破壊

光線を押し戻した!更に勢いがつき一気に破壊光線を押し返してブラストバーンをリュウとボーマンダに決めた!リュウとボーマンダは倒れた!

「リュ、リュウ・ボーマンダペア戦闘不能!バクフーン・リザードンペアの勝利!よってチームブラストの勝ち!!」

「やった・・・」

勝利を確認した時、バクフーンとリザードンは大の字になって倒れた。

「ハァ・・・ハァ・・・やったなリザードン・・・にしても驚いたぜ、お前あんな力持ってたのか?」

「ハァ・・・ハァ・・・自分でも正直驚いてる・・・火地場の馬鹿力ってやつかな?」

「ハァ・・・ハァ・・・何でも良いや。お前のおかげで助かったぜ・・・ありがとな。」

「・・・良いって事よ」バクフーンとリザードンはしっかり手と手を握りあった。

「父さん大丈夫かい?」

「・・・正直キツイ・・・カイリュー、お前の友達は強いなぁ・・・」

「うん。」

「カイリュー・・・これをバクフーン達に渡してくれないか?俺は・・・まだ動けないんだ・・・」リュウはジムバッジをカイリューに渡した。

「解ったよ。父さんはゆっくり休んでて。」

カイリューはバクフーン達の所に向かった。

「おめでとうバクフーン君。凄かったよ。」

「・・・ありがとよ。」

「父さんから預かったものだよ。これがドラゴンジムを勝ち抜いた証、ドラゴンバッジだよ。受け取って。」

カイリューはバクフーンにドラゴンバッジを手渡した。伝説のポケ

モン、レックウザに似た龍の形をしている。
「これがドラゴンバッジ・・・サンキューカイリュー・・・やっとバッジが8つ全部集まった!」
「いよいよ君達もポケモンリーグに挑戦出来るようになった訳だね。あとはポケモンリーグへの参加登録をするだけだね」
「・・・参加・・・登録?」
「今日はとにかくポケモンセンターで休むと良いよ。参加登録の仕方は明日僕が教えてあげるから。」
バクフーン達はカイリューの言うように今日はポケモンセンターで休む事にした。・・・翌日。
「ふぁ~・・・良く寝た・・・」
「おはよう。バクフーン君。」
「うお!?何でカイリューがここにいんだよ!?」
ここはポケモンセンターの寝室なのだが、何故かカイリューがいた。
「昨日言ったでしょ?ポケモンリーグへの参加登録の仕方を教えるって」「そりゃそうだが・・・何でロビーにじゃなく寝室に来てんだよ(汗)」
「う~ん・・・なんとなく。」
「なんとなくかよ!?」
「まぁとにかくまずはロビーに行こう。そこで教えてあげるから。」
「じゃあわざわざ寝室に来る事無かったような・・・あ~もう突っ込むのよそう、疲れる(汗)」
バクフーン達はカイリューと共にロビーに向かった。
「んで、参加登録はどうやるんだ?」
「ハピナスにやってもらうんだ。」
「ハピナスに?」
「うん。参加登録の手続きをハピナスがしてくれるんだ。」
「へぇ~。んじゃ早速。ハピナスよろしく!」
「は~い!じゃあまずバッジを見せて下さい。」バクフーンは8つのバッジを見せた。すると、ハピナスは機械を取り出してバッジを

スキャンし始めた。そしてパソコンをいじりだす。
「・・・はい！登録完了です！これであなた達はポケモンリーグに参加出来るわよ！」
「よっしゃ！ありがとうハピナス！」
「あとそうだ！ポケモンリーグは今日から三ヶ月後にレジェンドシティで開催するからね！忘れないでよ？」
「えっ！？三ヶ月後！？」
バクフーン達はハピナスの言葉を聞いて驚いている。

「すぐにやるんじゃないのか！？」
「そりゃそうよ！何せポケモンリーグよ！いろいろ準備が大変なのよ！」
「そういう事。」
「マジか～。三ヶ月・・・長いなぁ！」
「逆に言えば三ヶ月の間トレーニングしたり、家族に会いに行ったり出来るでしょ？もっと前向きに考えないとバクフーン君。」
「家族・・・か。そういえば母さん何してるかなぁ？」
「まぁとにかく、三ヶ月後にポケモンリーグの会場で会おう。それじゃ、僕はもう行くね。父さんにトレーニング付き合えって言われてるから。」
「あ、あぁ。じゃあなカイリュー！」
カイリューはポケモンセンターを出ていった。

「さて、どうすっかなぁ～？皆はどうする？」
「う～ん・・・」
皆揃って三ヶ月間何をするか考えた。しばらくしてラグラージが口を開いた。
「ねぇ、とりあえず皆自由行動にしない？二ヶ月後位にまた集まる事にしてさ！」
「・・・そうだな、そうするか！」

「じゃあ二ヶ月後に何処で合流するか決めないとね！何処にする？」
「・・・彼処が良いんじゃないか？フレイムシティにある噴水広場で。」
「噴水広場か！良いんじゃないか！」
「良し！じゃあ決まりだな！・・・それじゃあ皆、二ヶ月後噴水広場でまた会おうな！」
チームブラストは二ヶ月後に再会する事を約束して一度解散した。
皆、自分が行きたい場所を目指してバラバラに別れた。

第四十二話最後のジム戦！（後書き）

第四十二話完成です！

第四十三話同じ境遇のポケモン！新たなる意外な仲間！？（前書き）

一度チームブラストを解散して自由行動をする事になったバクフーン達。バクフーンとリザードンは共に故郷のフレイムシティに向かっていた。

第四十三話同じ境遇のポケモン！新たなる意外な仲間！？

「いやぁこりゃ楽で良いな♪」
「・・・お前なぁ（汗）」自由行動にする事にしたバクフーンとリザードンは、故郷のフレイムシティに帰る事にしたのだが、バクフーンが歩いて帰ると時間が掛かる！との事でリザードンにつかまって空を飛んで行く事になったそうだ。
「リザードン！もっと高く飛べないのか？」
「お前がいるからこれ以上は無理だっつの！まぁ、お前をここで落とせば楽に飛べるがな！」
「いやぁ・・・それは勘弁（汗）」
「ならおとなしくしてなよ！」
「は～い。」
しばらくおとなしくしていたバクフーンだが、どうもじっとしていられないようだ。また騒ぎ始めた。
「リザードン！高く飛べないならスピード上げようぜ♪」
「・・・落とすぞ（怒）」リザードンはバクフーンを少しずつ落とし始めた。
「うわぁ！？待った待った！？おとなしくするから落とさないで～！？」
「ったく！・・・ん？」リザードンが地上に目を向けた時、四人のポケモンが見えた。一人はまだ子供のようで残り三人のポケモンに攻撃を受けているようだ。
「バクフーン、ちょっと寄り道するぞ！」
リザードンは四人のポケモンがいる所に向かって急降下した。
「この！木の実を返してよ！」
「うるさい！俺様達は腹が減ってんだよ！」
「兄貴に逆らわない事だな！」
「ねぇアニキ達～さすがに子供から物盗るのはマズイんじゃないっ

すか～?返してあげましょうよ～。」
「お前はいつから善人になったグラエナ!俺様に逆らうのか?」
子供から木の実を奪っているのはヘルガー・ドンカラス・グラエナの三バカトリオだ。でも、何だか仲間割れしているみたいだ。ちなみに子供ポケモンはブイゼルだ。
「いやぁ逆らうつもりは無いんすけど～・・・やっぱ子供から盗るのはちょっと・・・ていうかもうこういう事するのは辞めにしないっすか～?」どうやらグラエナは今の生き方にうんざりしているようだ。その時、ブイゼルが盗られていたオレンの実を隙をみて取り返した!そして全速力で走る!
「あっこら待てガキ!」ヘルガーとドンカラスがブイゼルの後を追いかけた。
「もう～アニキ達辞めましょうって～!」
そう言いながらグラエナも後を追った。
「・・・またあの三バカトリオか・・・でも何かいつもと様子が違うな?」リザードン達は気づかれないように近くの森に着地して様子を見ていた。
「・・・お～いリザードン、そっちばっか見てないでこっちも見てくれよ!」
バクフーンは木に引っかかっていた。
「あっ悪い。」
「悪いじゃねぇよ!せめて前もって言ってくれれば・・・」
「言っただろ?寄り道するぞって。」
「まさか森の中に着地するとは誰が予想出来るよ!?」
「って話てる場合じゃなかった!俺は奴らの後を追う!バクフーンは・・・自力で頑張れ!」
そう言ってリザードンは四人を追って行った。
「自力って・・・マジかよ・・・あ～うっとーしいなぁこの枝!燃やせば楽何だか、さすがにそれをやると火事になるからなぁ（汗）ハァ・・・」

一方四人の方は・・・
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・もう、しつこいなぁ！」
「待てって言ってんだよ！シャドーボール！」
ヘルガーのシャドーボールがブイゼルに直撃した！
「うわっ！？」
ブイゼルは倒れた。
「たくっ！手間とらせるなってんだよ！」
ヘルガーは倒れているブイゼルを前足で踏みつけた。
「ぐっ！？」

「だから兄貴に逆らうなって言ったんだ！」
「お前みたいなガキには罰を与えてやる！くらえ、シャドー・・・」
「ダメっす～！！」
ヘルガーがブイゼルにシャドーボールを放とうとした時、グラエナがヘルガーに体当たりをした。ヘルガーは吹き飛ばされた。
「グラエナ・・・貴様何のつもりだ？」
「いくら何でもやり過ぎっすよ！相手はまだ子供なんすよ！？」
「・・・どうやら貴様から罰を与えないといけないみたいだな！ドンカラス！」
「翼で打つ！」
ドンカラスの翼で打つがグラエナに直撃した。
「い、痛いっす・・・」どうやら急所に当たったようだ。グラエナは倒れた。
「次はお前だ！」
ヘルガーがゆっくりブイゼルに近づいて行く。ブイゼルはもう今にも泣きそうな顔をしている。
「くらえ！シャドー・・・」
ヘルガーがシャドーボールを放とうとしたその時！
「エアスラッシュ！」
何処からともなくエアスラッシュが飛んで来てヘルガーに直撃！へ

ルガーは吹き飛ばされた！
「えっ！？」
ブイゼルは突然の出来事にびっくりしている。
「くっ！？今度は何だ！？」
「お前ら！今回は悪さが過ぎるんじゃないか？」リザードンだ！
「お前は！？」
「こんな子供に攻撃なんてしやがって、お前ら何考えてんだ？」
「うるさい！ドンカラス！やるぞ！」
「了解兄貴！」
ドンカラスとヘルガーがリザードンに向かって来た。
「エアスラッシュ、乱れ撃ち！」
リザードンはエアスラッシュを連続で放った！全てのエアスラッシュは直撃した！
「あ～また吹き飛ばされた～（泣）」
「いつも横にいるアイツがいないから何か寂しいぞ～（泣）」
そんな事を言いながらヘルガーとドンカラスは空高く飛んで行った。
「まったく！・・・君、大丈夫かい？」
リザードンはブイゼルに手をさしのべた。
「う、うん・・・助けてくれてありがとう・・・」ブイゼルはリザードンの手を借りて立ち上がりお礼を言った。
「お～い！」
その時ようやくバクフーンがやって来た。
「遅かったな？」
「誰のせいだと思ってんだよ？」
「悪い悪い！」
「あの・・・お兄ちゃん達は一体？」
ブイゼルはバクフーンとリザードンに質問した。
「そういえば自己紹介がまだだったね。俺はリザードン、こっちはバクフーン。チームブラストのメンバーだ。」
「チームブラスト！？」

ブイゼルはチームブラストの名前を聞いた瞬間興奮しだした。
「もしかして、ドラゴンシティのバトル大会で優勝したあのチームブラスト!?」
「そうだよ。良く知ってるね?」
「やっぱり!何処かで見た事あるってずっと思ってたんだ!僕、あなた達のファンなんです!」
さっきまで泣きそうな顔をしていたのが嘘のように今は目をキラキラさせているブイゼル。
「ん~・・・」
その時バクフーンはまだ気絶しているグラエナを見つけた。
「何でこいつがここでのびてんだ?」
「あっその人僕を助けようしてくれたんです。」「こいつが!?どういう風のふきまわしだ?」
「まぁとにかくこいつを運んで治療してもらわないとな。君、何処か近くにポケモンセンターは無いかな?」
「僕の名前はゼロって言うんだ!ポケモンセンターならあるよ!僕が案内してあげる!ついてきて!」
ブイゼルのゼロはバクフーン達を近くのポケモンセンターまで案内した。「ハピナス!悪いけどこいつを治療してやってくれないか?」
「解ったわ!」
バクフーン達はグラエナをハピナスに託した。
「とりあえずこれで安心だな!」
「そうだな。ところで気になったんだが、このポケモンセンター何か子供が多くないか?」
リザードンが言うようにこのポケモンセンターにはどういう訳か子供がたくさんいた。
「皆親に捨てられたんだよ・・・」
リザードンの疑問にブイゼルのゼロが答えた。
「親に・・・捨てられた・・・?」
「うん・・・ここには親に虐待を受けて最後には捨てられて行き場

を無くした子供達がたくさんいるんだ。」
「て事はハピナスがこの子供達の保護者ってところか・・・」
「まさか、ゼロもか・・・？」
「ううん。僕は虐待を受けたりとかはしてないよ。僕は・・・タマゴだった時にここに捨てられたみたいなんだ。」
「・・・えっ？」
その時ハピナスが戻って来た。
「もう大丈夫よ！あとは今日1日ゆっくりと休ませれば元気になるわ！」
「さすがハピナス！」
「さてと・・・ゼロ！」突然ハピナスがゼロを怒り出した。
「また勝手に森に入ったでしょ！危ないから一人で行かないでって言ってるでしょ！」
「うるさいな！僕の勝手でしょ！」
ブイゼルはポケモンセンターから出ていった。
「あっゼロ！？・・・もう・・・」
「何か訳有り？」
バクフーンがハピナスに聞いた。
「最近自然災害が多いでしょ？危ないから森には入らないでって言ってるんだけど・・・」
「勝手に入っちゃうのか・・・」
「えぇ・・・困ったわ～あの子とちゃんと話をしないといけないんだけど・・・ここを離れる訳にはいかないし・・・」
「俺が話をしてくる！」そう言ってリザードンはブイゼルのゼロの後を追いかけた。
「あいつ・・・やっぱほっとけないんだな。」
「どういう事？」
「実はリザードンもゼロと同じでタマゴの時に捨てられたんだ・・・だから、リザードンはゼロの気持ちが痛い程解るんだと思う。」
「・・・」

ブイゼルのゼロはポケモンセンターの近くにある川にいた。川の流れをぼーっと見ている。
「隣、良いか？」
そう言ってリザードンはゼロの隣に座った。
「急に飛び出してどうしたんだ？」
「・・・」
「ハピナスに怒られたのがショックだった・・・な訳無いか。お前、ハピナスにいちいち何か言われるのが嫌なんだろ？」
「えっ？」
ゼロは自分の気持ちを見抜かれた事に驚いている。
「何で自分の気持ちが解ったのかって顔してるな？解るんだよ。・・・俺もタマゴの時に捨てられたから・・・」
「リザードンさんも！？」ゼロは更に驚いた。
「あぁ。フレイムシティの木の実屋の前に捨てられてさ。そこをメガニウム、今の俺の母さんが拾ってくれたんだ。あの時の俺は母さんにいちいち何か言われるのが嫌だった・・・何で自分の本当の親じゃない人にそこまで言われないといけないのかってな。」
「・・・僕も、そう。」
「だけどさ、ある時俺が風邪ひいて高熱出して倒れた時があってさ。母さんは風邪が自分にうつるかもしれないのにずっと俺を看病してくれたんだ。その時、俺は母さんに何で本当の息子じゃない俺を心配するの？って聞いてさ。そしたら母さんは当然じゃない！血は繋がって無くてもあなたは私にとっては大事な息子なのよ！って言ったんだ。」
「・・・」ゼロは黙って聞いている。
「親が子供を心配するのは当然だよな。たとえ血が繋がって無くても・・・心配してくれてるからいちいちうるさく言うんだよな・・・俺はその時初めて母さんの気持ちが解った気がした。」
「・・・」
「俺、難しい話は苦手だからあまり上手く話せないけど、もし母さ

んがタマゴだった俺を拾ってくれなかったら今の俺はいない・・・
それはゼロも同じだろ？」
「・・・そう、だね。」「ハピナスはお前の事を心配してあんな風に怒っただけなんだ。・・・仲直りした方が良いと思うぞ？」
「・・・」
その時、突然地震が発生した！

「うわっ！？じ、地震！？」地震は予想以上に強い！地震の影響でリザードン達がいた所に地割れが発生した！ゼロが地割れの中に落ちた！
「うわぁぁぁ！？」
「ゼロ！！」
リザードンはすぐにゼロを助けようと後を追いかけた！
「もう・・・少しで・・・！」
リザードンはゼロを捕まえた。
「リザードンさん！」
ゼロは泣きながらリザードンに抱きついた。
「もう大丈夫だ！」
リザードンはしっかりとゼロを抱いて地上に向かって飛んだ。その時、また地震が発生してその影響で落石が発生した！
「おいマジかよ！？冗談キツイぞ！？」
リザードンは落石をギリギリで回避していく。だが、地上まで後少しというところで今までで一番大きな岩が落下して来た！
「だ、駄目だ！」
「ブラストバーン！！」その時大きな岩にブラストバーンが直撃して岩を粉々に粉砕した！
「一体何が・・・」
「リザードン！ゼロ！大丈夫か？」
バクフーンだ！
「バクフーン！今のお前がやったのか？」

「当たり前だろ！地震が起きたから慌てて二人の所にいったら地割れがあったから焦ったけど・・・無事で良かった。」
リザードンとゼロは地上に戻った。
「ゼロー！」
その時ハピナスが慌ててやって来た。そしてゼロを抱きしめた。
「えっ？」
「・・・良かった・・・無事で本当に良かった・・・」
「・・・母さん・・・」ゼロもハピナスを抱きしめた。
「・・・ごめんなさい・・・さっき母さんにひどい事言って・・・」
「ううん・・・ゼロが無事なら・・・それで良いわよ・・・」
どうやら二人は仲直り出来たようだ。
「・・・」
リザードンは少し泣いていた。
「リザードン、泣いてんのか？」
「・・・俺、こういうのに弱いからさ・・・」
「・・・二人共仲直り出来て良かったな。」
「あぁ。」
それからしばらくして、リザードンとバクフーンはフレイムシティに向かおうとしていた。
「リザードンさん達、もう行っちゃうの？」
「あぁ。ゼロ、母さんと仲良くしろよ？」
「うん！ねぇリザードンさん。」
「何だ？」
「・・・僕大きくなったらリザードンさん達みたいにチームを作ってポケモンリーグに挑戦する！そして優勝してチャンピオンになるんだ！」
「・・・そうか。お前なら、きっと出来るさ！応援してるからな！」
「うん！」
「じゃあな！」
リザードンはバクフーンを抱えて空に飛んで行った。

「さようなら～！」
ゼロとハピナスは手を振ってリザードンとバクフーンを見送った。
「・・・」
その時、バクフーン達を追いかけるように一人のポケモンが走って行った。
「・・・」
バクフーンとリザードンはしばらく静かに飛んでいた。だけど、やはりバクフーンはどうも落ち着かないようだ。
「・・・あの～リザードン？何か喋らない？」
「・・・何を話すんだよ？」
「えっと～・・・あ～話すネタが思いつかない～！」
「・・・お～い！待ってくれっす～！」
その時地上から誰かが叫んでいる声が聞こえた。「何だ？」
「リザードン、あれグラエナじゃないか？」
バクフーンが指差す先をリザードンは見た。
「あっ本当だ。」
「何しに来たんだ？」
リザードンはグラエナがいる所に着地した。
「ハァ・・・ハァ・・・や、やっと追いつけたっす～・・・」
「何のようだ？」
「ハァ・・・ハァ・・・二人に、頼みがあるっす！」
「やだ。」
バクフーンはグラエナの頼みを聞く前に断った。
「まだ何も言って無いっすよ～！？」
「バクフーン、そんなに奴をいじめるなよ？でっ何だ頼みって？」
「俺をチームブラストに入れて欲しいっす！」
「なるほど。俺達のチームに・・・ってえっ！？」二人はグラエナの頼みを聞いてびっくりしている。
「また何で俺達のチームに入りたいんだ？」
「ハピナスから聞いたっす。あんた達が俺をポケモンセンターまで

運んでくれたって！だから、恩返ししたくて！それと・・・俺もう盗みとかそういうの嫌なんすよ！」

「・・・だとさ。どうするバクフーン？」

「う～ん・・・まぁ仲間は多い方が賑やかだし・・・良いぜ！仲間にしてやるよ！」

「本当っすか！ありがとうっす～！そうだ！これからはアニキと呼ばせて下さい！」

「あ、アニキって・・・まぁ良いけど・・・」

「じゃあこれからよろしくっす！バクフーンのアニキ！」

チームブラストに新たな仲間、グラエナが加わった。そしてバクフーンとリザードンはグラエナと共にフレイムシティに向かって再び進みだした。

第四十三話同じ境遇のポケモン！新たなる意外な仲間！？（後書き）

第四十三話完成です！今回はリザードンを中心にして書いてみたんですが、あまり中心になっていない気が（＾―＾；）

第四十四話やりたい事。（前書き）

バクフーン達と別れたラティオス・ラティアスはラグラージと共にウォーターシティにやってきた。

第四十四話やりたい事。

「ここがウォーターシティ・・・ラグラージの住んでる所か。」
ラティオス・ラティアス・ラグラージはウォーターシティに来ていた。
「そういえばラティオスはここに来るの初めてだっけ?」
「あぁ。俺がお前達と合流したのがライトニングシティだったからな。」
「あの時は漆黒の闇のユキメノコに追われていたのよね?」
「・・・嫌な事を思い出させないでくれラティアス(汗)」
「ハハハ・・・とりあえず僕の家に来るかい?」
「良いのか?」
「私ラグラージさんの家初めてです!何処にあるんですか?」
「もう見えてるよ。」
「えっ?」
ラティオス・ラティアスは周りを見回す。
「何処だよ?」
「大きすぎで解らないかな?ほら、あれ。」
ラグラージは指差した。二人はその先を見て驚いた。
「あれって・・・めちゃくちゃ大豪邸じゃないか!?」
ラグラージの家は大富豪が住んでいそうな立派な豪邸だった!
「ラグラージさんって・・・実は凄くお金持ちだったんですか?」
「僕がじゃなくて父さんが金持ちなんだけどね。とにかく中に入ろう!案内するよ!」
ラグラージは豪邸の敷地に入って行った。
「・・・ラグラージって一体何者?」
「さぁ・・・(汗)」
「二人共早くおいでよ」ラグラージが二人を呼んでいる。
「あっ今行きます!」

ラティオス・ラティアスはラグラージの後を追いかけた。
「お帰りなさいませ。ラグラージおぼっちゃま」中に入るとメイドのサーナイトが三人を出迎えた。
「ただいま。サーナイト、おぼっちゃまって呼ぶのは止めてくれっていつも言ってるでしょ？」
「あっすみません！でも、何てお呼びすればよろしいのでしょうか？」
「呼び捨てで良いよ。」
「えっ！？ですが・・・」
「大丈夫だから。今は父さんもいないし。」
「・・・じゃあ、お帰りなさい。ラグラージ。」
「うん！ただいま！」
そんな二人のやりとりをずっと見ていたラティオスとラティアス。
「あっごめん二人共！紹介するよ！この人はサーナイト。見ての通りメイドさんだよ。」
「はじめまして！ここでメイドをやらせてもらっています、サーナイトと申します！」
「あっはじめまして！私はラティアスっていいます！」
「俺はラティオスだ。よろしくな！」
「サーナイト、何か食べる物無い？僕お腹空いちゃって。」
「あっそういえば私も（照）」
「俺も・・・」
「じゃあ何かお料理をお作りしますね！待っててください！」
ラグラージ達は豪邸の中にある食堂でサーナイトを待つ事にした。
「しっかし驚いたな！ラグラージがこんな豪邸に住んでいたなんて！」
「何で黙ってたんですか？」
「あんまり言うと自慢に聞こえちゃうかもしれなかったし・・・それに、僕あまりこの生活好きじゃないから・・・」

「え？」
「何か訳有りか？」
その時サーナイトが豪華な料理を持って戻って来た。
「お待たせしました♪」テーブルの上に料理が並ぶ。
「うわぁ～美味しそう♪」
「何か・・・高級レストランに来た感じだな・・・やっぱここはマナーを守って食べた方が良いのか？」
「そんな堅苦しいのは抜きで普通に食べよ！」
「じゃあ・・・」
「「「いただきま～す！」」」
三人は普段通りに食事した。
「ごちそうさまでした！とっても美味しかったですよ♪」
「ありがとう♪」
サーナイトは嬉しそうだ。
「なぁラグラージ。お前の父さんって何をしてるんだ？」
「製薬会社ポケモンドラッグの社長。」
「社長ですか！？」
「しかも製薬会社ポケモンドラッグって言えばインドメタシンとかタウリンとか作っている所じゃないか！？」
「凄いんですねラグラージさんのお父さんって！」
「・・・形だけだよ凄いのは・・・」
ラグラージは妙にテンションが下がっている。
「どうしたんだよ？」
「・・・昔の父さんは良かった・・・まだ小さな薬屋だったころは仕事に一生懸命で、それに優しかった・・・だけど、店が大きくなって、会社の社長になってから父さんは変わった・・・考えるのはお金の事、そして自分の社長の地位を守る事しか考えないようになって・・・優しかった父さんはもういない・・・」
「ラグラージさん・・・」
「何か・・・悪い事聞いたな・・・」

「良いよ、僕は気にしてないから！それより、気分転換に買い物しに行こうよ！サーナイトも行かない？」
「私はここを離れる訳にはいきませんから・・・お友達と一緒に楽しんできて下さい。」
「そう・・・解った。じゃ、行こう！ラティオス！ラティアス！」
三人は外に出掛けて行った。
「へぇ～、ここにはいろんな商品が置いてあるんだなぁ！」
「港街だからね！ここには世界からいろんな商品がやってくるんだ！」
「ふ～ん。」
「きゃあ～泥棒～！？」
その時何処からか悲鳴が聞こえて来た。
「泥棒だって！？」
その時ラティオス達に向かって走ってくるザングースが一人。何やら高価そうなバックを持っている。
「あいつだな！」
ラティオスがザングースの前に立ちはだかる！
「どきやがれ！！」
「盗んだ物を返すんだ」
「うるせぇ！くらえ！ブレイククロー！」
「ドラゴンクロー！」
ザングースのブレイククローにラティオスはドラゴンクローで対抗した。
「ちっ！邪魔すんじゃねぇ・・・ってあれ？バックがねぇ！？」
「バックならここよ？」ラティアスがいつの間にかバックを取り返していた。
「こいつ！？そいつを寄越せ～！！」
ザングースがラティアスに飛びかかった！
「サイコキネシス！」
ラティアスはサイコキネシスを使ってザングースを空中に浮かせた。

「泥棒はダメですよ！」
「クソッ！？降ろしやがれ！？」
「降ろしてあげますよ！けど、その前に♪兄さん！よろしく！」
「冷凍ビーム！」
ラティオスはザングースに冷凍ビームを放った。「・・・！？」
ザングースは凍り漬けになって抵抗出来なくなりました。凍り漬けになったザングースが地面に落ちた。
「この世に悪が栄えた事何て無いって事だ！」
「ラティオス、それ何かのヒーロー戦隊で聞いたようなセリフだよ？」
「い、良いだろ別に！？」ラティオスはちょっと顔が赤くなっている。
「はい。あなたのですよね？」
ラティアスは持ち主にバックを返してあげた。
「あ、ありがとうございます！助かりました！」その時街の人達から拍手が起きた。
「良いぞ二人共！」
「かっこよかったわよ！」街の人達はラティオスとラティアスのこの行動に感動したようだ。
「な、何か、恥ずかしいね兄さん（照）」
「そ、そうだな・・・」「二人共目立ったからねぇ！とりあえず、ここで凍り漬けになってる奴は僕が警察まで届けるから二人は買い物を続けてて！」
ラグラージは凍り漬けになっているザングースを警察まで運んで行った。「買い物を続けててって言われても・・・何かこの状況で買い物とかやりづらいんですけど・・・」
「ちょっと海の方にでも行くか？」
「そうだね！」
ラティオスとラティアスは海を眺めに行きました。
「綺麗な海ねぇ♪」

「そうだな・・・何か、こうして兄妹二人でいるのって久しぶりだな。」
「そうね。」
しばらく二人の間に沈黙が流れた・・・
「なぁラティアス。」
先にラティオスが喋った。
「何兄さん？」
「俺、今回のポケモンリーグが終わったらチームブラストを抜けようと思う。」
「えっ！？」
ラティアスはラティオスの言葉を聞いてびっくりしている。
「どうして兄さん！？」
「やりたい事、見つけたんだ。」
「やりたい事？」
「あぁ・・・俺は・・・」ラティオスが何か言いかけた時、突然大きな地震が発生した！
「えっ！？地震！？」
「結構デかいな！」
しばらくして地震はおさまった。
「おさまったか・・・」
「お～い！」
ラグラージがやって来た。
「ラグラージさん！」
「いやぁ探したよ！市場に戻ったらいなくなってるし大きな地震が起きるし。」
「悪い悪い！」
「ねぇ・・・兄さん、これ・・・」
ラティアスが指差す先をラティオスとラグラージが見るとさっきまであった海の水が無くなっていた！
「海が・・・消えた！？」

「兄さん・・・これってまさか!?」
「あぁ・・・地震が起きて海が消えるって事は・・・デかいのが来るぞ!」
「まさか、津波が!?」
三人はジッと海があったほうを見ている。すると、なにやら遠くに白い線みたいなものが見えて来た。
「来たぞ・・・ありゃ・・・めちゃくちゃデかい!」
「マズイ!?早く街の皆を避難させなきゃ!」
ラグラージは慌てて街に戻って街の人達に津波を知らせた。街の人達は慌てながらも高い所に避難しようとしている。だが、津波が来るスピードが早くとてもじゃないが街の人全員の避難は無理だ!
「間に合わないか・・・こうなったらやるしか無いな!ラティアス!」
「うん!」
ラティオスとラティアスは津波に向かって突っ込んで行った!
「あっラティオス!?ラティアス!?」
ラグラージや街の人達はただラティオスとラティアスを見守るしか出来なかった。ラティオスとラティアスは全速力で飛んで行ったので津波はもう目の前まで来ていた。
「「光よ!!」」
次の瞬間ラティオスとラティアスは眩い光に包まれた!二つの光は合わさり一つの大きな光となって津波の中に入った!そして、光は衝撃波を放ちながら大きくなり、津波を吹き飛ばした!吹き飛ばされた津波は普通の波に変化した。
「・・・やった・・・あの二人が津波を消してくれたぞ!」
街の人達は物凄く喜んだ!
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・ラ、ラティアス、大丈夫か?」
「・・・う、うん・・・なんとか・・・津波は?」
「大丈夫だ・・・なんとか津波は消せた・・・」
「そう・・・良か・・・った・・・」

ラティアスは気を失ってしまって落下した！
「ラティアス！？」
ラティオスはラティアスをなんとか捕まえて抱きかかえた。
「ふう・・・力を出し過ぎたんだな・・・」
その後ラティオスはラティアスを抱えてポケモンセンターに向かった。

「・・・う～ん・・・あれ？・・・ここは？」
「ここはポケモンセンターの中にある寝室だラティアス。」
ラティアスはポケモンセンターの中にある寝室で目を覚ました。
「兄さん・・・」
「良かった～！心配したよラティアス！」
「ラグラージさん・・・」ラティアスはゆっくりと起きた。
「兄さん、この花束は？それもこんなにたくさん・・・」
周りにはたくさんの花束があった。
「街の人達が俺とラティアスにって渡してくれたんだ。」
「そうなんだ・・・うわぁ～良い香り♪」
「グラシデアの花って名前らしい。」
「グラシデアの花？」
「人に感謝の気持ちを伝える時におくる花束なんだってさ。」
「へぇ～・・・あっ！そういえば兄さん、さっきは何を言いかけたの？」「ん？」
「やりたい事が見つかったって言ってたでしょ？」
「あぁ、そうだったな・・・ラティアス、俺はポケモンレンジャーになりたいんだ。」
「ポケモンレンジャー・・・」
「世の中には困っている人がたくさんいる・・・俺はそんな人達を助けたいんだ！」
「・・・兄さんもポケモンレンジャーになりたかったのね？」
「え？もしかしてラティアスもか？」

「うん。なりたい理由も兄さんと同じ。・・・ねぇ兄さん、一緒にポケモンレンジャーを目指しても・・・良いかな？」
「・・・断る理由なんて無いだろ？・・・一緒に頑張ろ、ラティアス。」
「うん！」
ラティオスとラティアスは共にポケモンレンジャーを目指す事を約束した。
「やりたい事・・・か・・・僕は何がやりたいんだろ？」
「そのうちラグラージもやりたい事が見つかるさ！今は見つからなくてもいつか必ずな！」
「・・・そうだと良いな。さて、今日は何か大変だったから１日休むとして・・・明日はどうする？まだ約束の日まで６０日あるけど・・・」
「そうだな～・・・まぁそれは明日になってから決めよう。」
「それもそうだね。」
ラティオス達は今日１日ゆっくり休む事にした。約束の日まであと、６０日

第四十四話やりたい事。（後書き）

第四十四話完成です！

第四十五話ピカチュウの決意！（前書き）

バクフーン達と別れたピチューとピカチュウは自分達の故郷であるライトニングシティにいた。

第四十五話ピカチュウの決意！

「やっと帰ってこれたか・・・ライトニングシティに！」
「久しぶりだねお兄ちゃん！」
ピチューとピカチュウは故郷であるライトニングシティにいた。
「長い事帰ってなかったけど、あんま変わってねぇなぁ！」
「ねぇ、おじいちゃん元気にしてるかな？」
「あのじいさんはそう簡単に死なないだろ？今にもあの特徴のある笑い声が聞こえてきそうだよ（笑）」
「・・・がっはっはっは・・・」
その時遠くから特徴ある笑い声が聞こえてきた。
「むっ！このやたらと元気が良い笑い声は・・・」
「あっおじいちゃんだ！お～い！おじいちゃ～ん♪」
ピチューは叫びながら走り出した。
「おっ！ピチュー！ピチューじゃないか！」
「おじいちゃん！ただいま～！」
ピチューは飛び付いて抱きしめた。おじいちゃんと呼ばれているのはライトニングシティジムリーダーのエレキブルだ！
「がっはっはっは！良く帰って来たなピチュー！って事は当然あいつも・・・」
「俺ならここだよじいさん。相変わらず元気だなぁ？」
「がっはっはっは！やはりおったかピカチュウ！もちろんわしは元気じゃ！わしから元気を取ったら何が残る？」
「まっそりゃそうだ。」
「・・・たまには元気無くても良いのに・・・」エレキブルと一緒にいたデンリュウがぼそりと呟いた。
「何か言ったかデンリュウ？」
「い、いや、何でも無いです（汗）」
「ハハハ・・・デンリュウも相変わらずだな？」その時、ピカチュ

ウ達の近くを綺麗なメスのポケモンが通って行った。
「はっ！そこの綺麗なお姉さ～ん♪」
ピカチュウはすっとんで行った。
「・・・ピカチュウも相変わらずじゃないの？」
「ハァ・・・もうお兄ちゃんったら！」
ピチューはすかさずピカチュウに必殺耳を引っ張るを炸裂させて連れ戻してきた。
「イタタタ！？」
「相変わらずその技は健在みたいだね（汗）」
「がっはっはっは！いやぁ愉快愉快！さぁお前達、ここではゆっくり出来んだろ？家に帰ろう！いろいろ話を聞かせてくれ！」
「賛成～♪」
「ピ、ピチュー！もうやらないから耳を離してくれ～！？」
ピチューはピカチュウの耳を引っ張りながらエレキブル達と共に家に向かった。家に着いたピカチュウ達は今までの旅の話をエレキブル達に聞かせてあげた。その後はエレキブルがピカチュウ達が帰って来たからホームパーティーだ！っと言ってどんちゃん騒ぎした。更にエレキブルはお酒が大好きで何杯も飲んでしまって、しまいには酔っ払っていきなり暴れるしまつ・・・何とかピカチュウとデンリュウが押さえる事が出来たが、気がついたらもう夜中の２時になっていた！皆エレキブルを押さえるので疲れ果ててしまい、すぐに熟睡してしまった。・・・翌日の午前１０時
「・・・ふぁ～・・・いやぁ・・・良く寝た・・・もう１０時か・・・」
ピカチュウが目を覚ました。隣を見るとピチューとデンリュウがまだ寝ていた。
「・・・もう少し寝かしてやるか・・・そういえばじいさん何処に行ったんだ？」
何故かエレキブルが居なくなっていた。ピカチュウはエレキブルがいそうな場所に向かった。

「雷パンチ！」
エレキブルの雷パンチがサンドバックに炸裂した。ここはピカチュウ達の自宅の近くにあるエレキブルが作った特製のトレーニング場だ。
「やっぱここにいたかじいさん。朝練か？」
「ピカチュウか・・・そうじゃよ。最近挑戦者がだんだん強くなってきているからな。ジムリーダーが簡単に倒される訳にはいかん！だから、トレーニングしておるんじゃ！・・・じゃが・・・」「ん？」
急にエレキブルがくらくなった。
「やはり歳には勝てんのかのう・・・最近体力が落ちたのか、身体が思うように動かなくなってのう・・・このままではジムリーダーとしての威厳が保てん・・・」
「じいさん・・・」
ピカチュウは何か考え事をし始めた。そして何か思いついたのかエレキブルに歩み寄った。
「じいさん・・・俺とバトルしないか？」
「なんじゃいきなり？」
「良いからやろうぜ！ルールは時間無制限の一本勝負だ！」
「・・・まぁ良いじゃろ。だが、やるからには手加減しないからの！」
「手加減なんてしたらしょうちしないからな！行くぜ！電光石火！」
ピカチュウはまず電光石火で先制攻撃した。
「嫌な音！」
エレキブルは黒板を爪でひっかいたような嫌な音を発生させた。ピカチュウはその音を聞いて思わず動きを止めてしまった。
「本当に嫌な音だ～！？」
「雷パンチ！」
エレキブルはすかさず雷パンチでピカチュウを攻撃した。だがピカチュウはこれをギリギリで回避した。

「危ねぇ！？」
「やりおるなピカチュウ！以前より回避の仕方がうまくなったな？」
「誉めてる余裕あんのか？アイアンテール！」
ピカチュウはアイアンテールでエレキブルの足めがけて攻撃した。
アイアンテールを受けたエレキブルはバランスを崩してこけた。
「もう一発アイアンテール！」
今度は高くジャンプして、クルクルと回転して遠心力の力を利用してアイアンテールで攻撃した。
「守る！」
エレキブルは守るを使ってこれを防御した。
「ちっ！」
「回避だけじゃなく攻撃の仕方もうまくなっておる！成長したもんじゃなぁ・・・」
「バトルに集中しろよじいさん！叩きつける！」ピカチュウは自分の尻尾をエレキブルに叩きつけた！っと思ったが、エレキブルは自分の二本の尻尾を器用に使いピカチュウの尻尾を受け止めていた！
「ちゃんと集中しておるよピカチュウ！冷凍パンチ！」
エレキブルはそのまま冷凍パンチをピカチュウに放った！冷凍パンチはピカチュウに決まった！
「この手応えの無さは・・・身代わりで作った分身体じゃな？」
「正解。気合いパンチ！」ピカチュウは渾身の気合いパンチをエレキブルに放った！
「電光石火！」
エレキブルは当たる寸前で電光石火を使い気合いパンチを回避した。
「もらったぞい！ギガ・・・！？」
エレキブルはピカチュウにギガインパクトで攻撃しようとしたが、足が動かなかった。先程の電光石火で足にきてしまったようだ。
「クソ！こんな時に！」
「身代わり！そして気合いパンチ！！」
ピカチュウは身代わりで作り出した分身体に自分をエレキブルの所

まで投げてもらい、そして渾身の気合いパンチをエレキブルに決めた！エレキブルは吹き飛ばされた！
「くっ・・・」
エレキブルは立ち上がれないようだ。
「俺の勝ちだな、じいさん・・・」
「そうじゃな・・・あの大事な場面で足が動かなくなるとは・・・わしもそろそろ引退かのう？」
「・・・ポケモンリーグが終わるまで・・・」
「ん？」
「ポケモンリーグが終わるまで頑張ってくれないか？そしたら俺、このジムを継ぐから！」
ピカチュウはエレキブルに自分が代わりにジムリーダーになると言い出した！
「お前さんがこのジムを？本気か？」
「あぁ！じいさんにはいつも世話になってたから・・・その、恩返しがしたいしさ・・・それにデンリュウじゃじいさんのあとを継げないだろ？」「あやつに聞かれたら怒るだろうが、確かにピカチュウの言う通りじゃ。あやつは電撃をコントロールするのは抜群に上手いんじゃが・・・経験不足じゃからなぁ・・・その点お前さんなら経験は豊富で実力も充分・・・ピカチュウ、本当にジムリーダーを頼んで良いのか？」
「もちろんだ！じいさんに楽させてやるよ！」
「言ってくれるわい！良し！ポケモンリーグが終わるまでは何とか頑張るかの！それじゃ、そろそろ家に戻るか？ピチュー達も起きた頃じゃろ？」
「そうだな！」
ピカチュウはエレキブルにポケモンリーグが終わったらジムリーダーになると約束した後で家に戻る事にしました。バクフーン達と約束した再会する日まで、あと５８日。

第四十五話ピカチュウの決意！（後書き）

第四十五話完成です！

第四十六話リリとメガニウムのお料理バトル！？（前書き）

バクフーンとリザードンは自分達の家に戻って来ていた。

第四十六話リリとメガニウムのお料理バトル！？

「坊や～朝ごはん出来たわよ～♪」
「は～い♪」
「朝飯っす～♪」
バクフーンは一ヶ月前に自分の家に戻って来ていた。この一ヶ月は母親のリリと一緒に楽しく過ごしていた。昔出来なかった事をたくさんして。ちなみにグラエナは帰る所が無いとの事でバクフーンの家にしばらく泊めてもらう事にしたらしい。今ではすっかりバクフーン達の家族みたいになっている。
「そういえば母さん。俺っていつまで坊やって呼ばれるの？」
「あっ！そういえばそうよね～でも、何か坊やの方が呼びやすいのよね～（笑）」
「まぁ俺も母さんに坊や以外の呼び方で呼ばれたらちょっと戸惑うかもしれない（笑）」
「じゃあこれからも坊やで良いわよね？」
「良いよ♪」
「決まりっす～♪」
いつもこんな感じで会話が弾む。しばらくこんな調子で話ながら朝ごはんを食べ終えた。
「ごちそうさまでした♪」
「ごちそうさまでしたっす～♪」
「はい。お粗末さまでした♪」
「よ～し！片付けが終わったらいつものあれやろうぜ母さん！」
「良いわよ！ただし、今回も私が勝つわよ♪」
「いいや、今回は絶対俺が勝つからな！」

「俺だって負けないっすよ～！」
いつものあれっとゆうのはバトルの事である。

この一ヶ月の間、バクフーンはただリリと普通に過ごしていた訳では無い。バクフーンは毎日リリとバトルで特訓をしていた。リリは過去のポケモンリーグで優勝した事がある実力者。特訓するにはうってつけの相手とゆう事だ。そんなリリとバトルしていくうちにグラエナはどんどんバトルが強くなっていた。今ではバクフーンとも良い勝負をする程だ。食器の片付けが終わったバクフーン達はいつもバトルしているトレーニング場にやって来た。すでにトレーニング場には先客がいた。「おっ！来たなバクフーン！」

「ようリザードン！」

先客とはリザードンとメガニウム、そしてジュカインだ。リザードンも家に帰って久しぶりに家族と楽しく過ごしていた。だが、リザードンもバクフーンと同じく毎日メガニウムやジュカインとバトルで特訓していた。二人共リリと同じく過去のポケモンリーグで優勝した経験がある実力者。そんな二人に特訓してもらった為にリザードンもかなり強くなっていた。今はちょうどジュカインに特訓してもらっている最中だった。

「ちょうど良かった！実はバクフーンに見せたいのがあってさ！」

「見せたいの？」

「今やるから！良く見てろよ！エアスラッシュ！」リザードンは近くにあった自分と同じ位の大きさの岩に向かってエアスラッシュを放った！エアスラッシュが岩に当たった瞬間綺麗にスパッと斬れてしまった！

「飛行タイプの技のエアスラッシュで岩を斬った！？すっげ～！スゲーよリザードン！」

バクフーンは物凄く感動していた。

「へへ！父さんに特訓してもらったのさ！」

「力のコントロールを完璧に出来れば誰でも出来るさ。」

「くぅ～！！俺も負けてられねぇ～！母さん！早速バトルしようぜ！」

「ＯＫ！行くわよ！」

バクフーンとリリはバトルを始めた。
今のところバクフーンとリリのバトル戦績は３０回やって０勝３０敗でバクフーンの完敗である。何故バクフーンはリリに負け続けているかと言うと、実はバクフーンは一度もブラストモードになっていないからなのだ。確かにブラストモードになればリリには勝てるのだが、それじゃ特訓の意味が無いとバクフーンはブラストモードにならないと決めているからである。・・・しばらくして。
「・・・ま、負けた～（泣）」
「ま～た私の勝ちね♪これで３１連勝♪」
「おい、バクフーン。」リザードンが小声でバクフーンに話しかけた。
「いつも思ってたが何でブラストモードにならないんだよ？なったらリリさんに勝てるかもしれないだろ？」
「それじゃ特訓の意味が無いんだよ。ブラストモードに頼りっぱなしじゃあ、いつまで経っても強くなれないし・・・だから、普段の俺でも勝てるようにならないと！」
バクフーンも小声で話した。
「二人供なにこそこそ話してるんだ？そろそろランチにしよう！メガニウムがサンドウィッチ作って来たから皆で食べよう！」
ジュカインが二人に言った。
「マジですかリザードンのお父さん！食べます食べます♪」
「今行くよ父さん！」
バクフーンとリザードンは皆でメガニウムが作ったサンドウィッチを食べる事にしました。
「美味い！美味いよリザードンのお母さん！」
「ふふ♪ありがとう♪」
「まぁ私の作る料理の方が美味しいけどね～！」
「あ～ら？いつから私より料理が上手くなったのかしら？あなたに料理を教えたのはこの私だって事をお忘れで？」
「そんなの昔の事でしょ。今の私の方が絶対あなたより美味しい料

理を作れるんだから！」
「言ってくれたわね！だったらどっちが一番料理を美味しく作れるか勝負よ！」
「やってやろうじゃないの！」
リリとメガニウムは完全にバトルモードに入っている。
「あれ？あれれ？何か二人共スッゴい闘志むきだしにしてるんですけど（汗）」
「止めなくて良いの父さん？」
「あぁなった二人を止める事は誰にも出来ない。まぁ好きなようにやらせてやろう。」
「凄く冷静っすね～（汗）」という訳で・・・急遽リリとメガニウムによるお料理バトルが開始された。審査員はバクフーンとリザードンとグラエナとジュカインだ。ちなみに作る料理は木の実チャーハンである。
「さぁ早速始めようじゃないの！」
「リリには負けないから！」
まだ料理を作っていないが二人のバトルはすでに始まっていた。
「リリさんとメガニウムさんは闘志をメラメラと燃やしてるっすね～！ジュカインさん！この料理対決はどっちが勝つっすかね～？」
「うむ。実力的に二人は恐らく互角。この勝負を予想するのはかなり難しいなぁ。」
すっかりグラエナとジュカインは審査員になりきっている。

「何でこういう展開になっちゃってるんだ？」
「まぁ良いじゃんかリザードン！何か楽しくなって来た♪」
「それじゃ二人共！お料理バトル、スタートっす～！」
リリとメガニウムのお料理バトルが始まった。二人共素晴らしい手際の良さでどんどん木の実チャーハンを作っていく。しばらくして・・・
「「出来た！」」

二人はほぼ同時に仕上げた。
「うわぁ～美味そう♪ジュル・・・あっいけね、よだれが・・・」
「それじゃ、試食タイムっす～！」
四人はリリとメガニウムの作った木の実チャーハンを食べた。
「やばい・・・どっちも美味い・・・え～どっち選べば良いんだ（汗）」
「本当っすね～・・・」
「う～ん・・・」
バクフーンとリザードンとグラエナは悩んでいた。だがその時、ジュカインが急に立ち上がった。
「二人共、まだあまい！本当の木の実チャーハンとはこうだ！」
いきなりジュカインが木の実チャーハンを作り始めた。しかも、二人が作るのにかかった時間よりも圧倒的に早く出来てしまった！
「早！？しかも母さん達のよりも美味そう！」
バクフーン達はジュカインが作った木の実チャーハンを食べてみた。
「・・・すっげ～美味い～！こんな美味いチャーハン始めて食った！」
「本当に美味いっす～！ジュカインさん凄すぎるっす～！」
「俺・・・食べ物で感動したの始めてだ・・・父さん凄いね！」
「「まいりました～（泣）」」
リリとメガニウムはジュカインに土下座した。
「今回のチャンピオンはジュカインさんに決定っす～！」
「ふん・・・まだまだだな！」
「何か父さんキャラ変わってる（汗）」
最初はリリとメガニウムの対決だった筈がいつの間にかジュカインが参加して二人に勝ってしまった。実はジュカイン、元プロの料理人だったらしい。何かトレーニングの時間よりも料理バトルの時間の方が長かった為に時間はもう夕方になってしまっていた。
「もうこんな時間になっていたのか！？」
「何かほとんどリリさんと母さんの料理対決で終わった気が（汗）」

「「申し訳ありません（汗）」」
リリとメガニウムが二人そろって謝った。
「まぁたまにはこういうのも良いだろ。心に余裕を持たないといけない時もある。」
「お～い！」
その時遠くからバクフーン達を呼ぶ声が聞こえて来た。
「ん？あれは・・・ラグラージ！？それにラティオスとラティアスも！」
バクフーン達を呼んでいたのはラグラージ達だった。
「どうしたんだよ？まだ約束の日までまだ一ヶ月あるぜ？」
「そうなんだけどね、何かバクフーンがいないと寂しいって二人が言うから・・・」
「あっラグラージさんズルイ！本当はラグラージさんが寂しいって言ったんじゃないですか！」
「ちょっラティアス！？」
「事実だ。」
「ラティオスまで！？」
「ふ～ん、何だよラグラージ、そうならそうと最初に言えば良いじゃんか？」
「お～い！バクフーン兄ちゃ～ん！」
今度はピチューがやって来た。
「ピチュー！？どうしたんだよピチューまで！？」
「何かバクフーン兄ちゃんがいないと寂しいから来ちゃった♪」
「あれ？ねぇピチュー、ピカチュウさんは？」
「俺ならここだよラティアスちゃん。いつも綺麗だねぇ！今日は再会を祝して一緒にディナーでもどうかな？」
ピカチュウはいつの間にかラティアスの後ろにいた。
「ピカチュウさん（汗）」「はいはい、会って早々そういう事しないでねぇ。」
ピチューの必殺耳を引っ張るが炸裂した。

「イタタタ！？」
「おっ！久しぶり出たな必殺技♪」
気がついたらチームブラスト全員揃っていた。
「ところで・・・何でこいつがここにいんだ？」ピカチュウはグラエナを指差した。
「あぁ！そいつは新しい仲間だ！」
「・・・えぇ！？」
ピカチュウ達は驚いた。
「よろしくっす～！」
「おいバクフーン、良いのかこいつを仲間に入れて？」
ピカチュウはバクフーンに聞いた。
「良いんだよ！こいつはもう昔と違う。」
「・・・まぁ、お前がそう言うなら良いけど・・・」
「よろしくお願いしますね。グラエナさん。」
「よろしくっす～！」
「ところでお前らどっか泊まる所あんのか？」
リザードンがピカチュウ達に聞いた。
「あっ・・・」
「考え無しで来たんかい（汗）」
「私達の家に泊まれば良いんじゃない？」
リリが皆に言った。
「えっ！？良いんですか？」
「良いわよ！それに、大勢の方が楽しいしね！」
「じゃあ・・・よろしくお願いします♪」
バクフーンの家に皆で泊まる事になりました。約束していた日とは違うが、全員揃った。ポケモンリーグまであと二ヶ月。

第四十六話リリとメガニウムのお料理バトル！？（後書き）

第四十六話完成です！

第四十七話夏だ！海だ！バトルだ！？（前書き）

皆で楽しく遊ぼうという事になったバクフーン達。何をして遊ぶか考えている時にリリが皆に一つ提案した。

第四十七話夏だ！海だ！バトルだ！？

「バクフーンもうちょい右だ右！」
「こ、こっちか？」
「あぁ行き過ぎ行き過ぎ！少し左だ！」
バクフーン達は今、海に来ていた。リリの提案で皆で海水浴に来ているのだ。そして今バクフーンはスイカ割りに挑戦中。「ここだぁ！！」
バクフーンは持っている木の棒を思いっきり振り落とした！
「どうだ！」
バクフーンは目隠しを取って確認してみる。スイカには傷一つ入ってなかった。バクフーンが振り落とした所はスイカから随分離れていた。
「・・・ありゃりゃ（汗）」
「残念だったねぇバクフーン（笑）よ～し、今度は僕がやるよ！絶対成功させるから！」
「ちょっと待った！ラグラージ、頭のヒレ使って周りを確認するのは無しだからな！」
「ドキッ！？」
「・・・使う気だったんかい（汗）それじゃあゲームになんないだろ！」
「・・・せい！」
ジュカインがスイカを見事に割った。
「「あっ（汗）」」
バクフーンとリザードンとラグラージは突然の事に驚いていた。
「さっすがあなた！かっこいいわよ！」
「よ、よせよメガニウム・・・皆が見てるだろ（照）」
ジュカインは照れているのか顔が少し赤くなっている。
「三人共何ボケッとしてんのよ？スイカ食べるわよ♪」

そう言いながらリリはすでにスイカを食べていた。
「って母さんズルイ!?俺も食べる!」
三人もスイカを食べた。しばらく皆は美味しいスイカを堪能していた。
「はぁ～美味しかった♪さあって、次は何をしましょうか?」
「そうだね～・・・」
「ビーチフラッグはどうだ?遊びながら足腰が鍛えられるぞ?」
ジュカインが提案した。
「良いね!じゃあやろうよ!」
今度は皆でビーチフラッグをする事にした。今フラッグが無いので代わりにスイカ割りで使用した木の棒をフラッグ代わりにする事にした。
「よ～し!準備ＯＫ♪」
「良し、それじゃあトーナメント方式でやろう。優勝した奴には俺が何か美味い料理作ってやる」
「マジですか!?うお～気合い入って来た～!」
「それじゃあ始めるぞ。まず最初にリリとメガニウムからだ。」
リリとメガニウムがスタンバイした。
「今度こそ私が勝つからねメガニウム!」
「そのセリフ、そっくりそのままお返しするわリリ!」
「行くぞ・・・よ～い、スタート!」
合図と同時にリリがロケットスタートした!あっという間にフラッグはもう目の前に!
「私の勝ちね!」
リリは勝利を確信した。だが、リリがフラッグを取ろうとした瞬間目の前にあったフラッグが突然消えた!
「えっ!?フラッグは!?」
「ふふ♪フラッグならここよリリ!」
何とメガニウムはスタート位置からつるのムチを伸ばしてフラッグを取ったのだ!

「ちょっと!?それ反則じゃないの!?」
「あ～ら?必ず走って取る何てルールは無かったわよ?」
「ちょっとジュカイン!良いのこれ!?」
「・・・まぁ、メガニウムの言ってる事は間違いでは無いからな・・・」どうやら判定はメガニウムの勝ちみたいだ。
「悪いわねリリ♪」
「う～何か納得いかない～!!」
「・・・ゴホン。・・・じゃあ次はラグラージとリザードンだ。」
今度はリザードンとラグラージがスタンバイした。
「行くぞ・・・よ～い、スタート!」
スタートの合図と同時にリザードンは走らずに超低空飛行でフラッグに向かって飛んで行った。
「やっぱそうきたね!なら僕はこうだ!冷凍ビーム!」
ラグラージは冷凍ビームで氷の道を作りその上を滑ってフラッグに向かって行った。ラグラージが若干リザードンを抜いてリードした。
「僕の勝ちだよ!」
ラグラージはフラッグに手を伸ばした。
「マズイ!?エアスラッシュ!!」
リザードンはエアスラッシュを放ってフラッグを空中に飛ばした!
飛ばされたフラッグをリザードンがキャッチした。
「えぇ!?そんなのあり!?」
「技使っちゃいけないってルールは無いだろ?お前も冷凍ビームで氷の道作ったし。」
「うっ!?・・・メガニウムさんにそっくりなんだから・・・」
この勝負はリザードンの勝ちだ。
何か普通のビーチフラッグからだいぶかけ離れてしまったが、こんな感じで次々と勝負をしていった。
ラティアスとピチューの対決はピチューが勝った。
サイコキネシスを使えば勝てたのだが、ラティアスは優しいために

それをしなかった。
次にラティオスとピカチュウが対決。
勝ったのはラティオス。
ピカチュウは自慢の俊足をいかしたのだが、ラティオスはピカチュウには加減をしないでサイコキネシスを使ってフラッグをゲットした。
次にジュカインとグラエナが対決。主催者の筈のジュカインが参加したのは楽しそうだったから、だそうだ。この対決はジュカインの圧勝だろうと誰もが予想したのだが、意外にもグラエナが勝利した！一番まともな対決だったのだが、グラエナの素早さの方がジュカインを上回っていたらしい。ちなみにバクフーンはシードである。
続く第二回戦、最初の対決はメガニウムとリザードン。メガニウムは初戦と同じくつるのムチを伸ばしてフラッグを取ろうとした。リザードンはつるのムチよりも速くフラッグに向かって飛んで行ったのだが、飛ぶ前にメガニウムがこっそりともう一本のつるのムチをリザードンの足に巻き付かせていたために、リザードンはあと一歩の所でフラッグに手が届かずメガニウムに取られてしまった。次はラティオスとグラエナの対決。
ラティオスはまたサイコキネシスでフラッグを取ろうとしたのだが、フラッグを引き寄せている最中にグラエナにフラッグを盗られてしまい敗北してしまった！またしてもグラエナが皆の予想を裏切り勝利した。次はピチューとバクフーンの対決。ピチューはあまえる作戦でフラッグを取ろうとしたがバクフーンは手加減無しにフラッグを取った。バクフーンはこのまま決勝戦に進出、メガニウムとグラエナの対決が終わるのを待つだけになった。そしてメガニウムとグラエナの対決。メガニウムはやはりつるのムチを伸ばしてフラッグを取ろうとしたのだが、つるのムチを伸ばすよりも速くグラエナはフラッグを取ってしまった！またまた予想外の勝利である！そして・・・遂に決勝戦！
「まさかグラエナがここまで勝ち上がって来るとはな・・・」

「俺だってやる時はやるんすよ～！」
「二人共準備は良いか？そろそろ始めるぞ。」
バクフーンとグラエナはスタンバイした。
「行くぞ・・・よ～い、スタート！」
「電光石火！」
バクフーンはスタートの合図と同時に電光石火でロケットスタートした。一気に離したと思ったバクフーンだったが何と、グラエナはバクフーンの真横についていた！
「げっ！？お前そんなに足速かったか！？」
「言ったでしょバクフーンのアニキ！俺だってやる時はやるんすよ！」
もうフラッグは目の前だ。二人はフラッグに飛びかかった！
「負けねぇ～！」
「俺だって～！」
次の瞬間砂が舞ってバクフーンとグラエナの姿が見えなくなった。
「どっちだ！？」
・・・二人の姿が見えてきた。フラッグは・・・グラエナがくわえていた！惜しい事にバクフーンはあと野球ボール一個分届かなかった。
「勝ったっす～♪」
「負けた～（泣）」
「どうやら優勝はグラエナみたいだな。良し、特別に木の実ステーキでも作ってやろう！」
「やった～ステーキっす～♪」
「なかなかやるじゃんかグラエナ！少し見直したぜ！」
そう言いながらピカチュウはグラエナの背中を叩いた。
「イタタタ！？ちょっとピカチュウのアニキ～痛いっすよ～！日焼けのせいでまだヒリヒリしてるんすから～！」
「あっ悪い！」
「日焼け？・・・あ～解った！グラエナが速かった理由が！」

ラグラージが突然叫んだ。
「何だよいきなり？」
「グラエナは日焼けしすぎて軽い火傷みたいな状態になったんだよ！それで特性の速足が発動したんだ！」
「速足？」
「自分が毒・麻痺・火傷の状態になると素早さが普段の二倍になる特性だよ！それでグラエナはあんなに速く走れたんだ」「なるほど、グラエナが速かったカラクリはそういう事だったのか。」
その時、何か食べ物の良い香りが。
「待たせたな。」
ジュカインがステーキを持って来た。
「ジュル・・・う、美味そうっす～♪それじゃあ、いっただっきま～す♪」グラエナはステーキにかぶりついた。
「・・・あ～美味そう・・・ジュル・・・あっまたよだれが・・・」
「・・・見てたら腹減ってきちまった・・・」
「そう言うと思ってちゃんと皆の分も作っておいてあるぞ。」
「マジっすか！？」
「さっすが父さん！」
「やはり、食事は皆で食べた方が美味いからな」でっ結局優勝とか関係無しで皆揃ってジュカイン特製の木の実ステーキを食べる事になった。ビーチフラッグと食事を終えた時にはもう夜になっていた。
「もうこんな時間か・・・そろそろ帰る？」
「チッチッチ！まだ帰るには早いわよバクフーン！まだメインイベントが残ってるんだから！」
メガニウムがバクフーンに言った。
「メインイベント？なんすかメガニウムさん？」
「もう、暑い夏の夜にやる事と言ったら・・・」
「暑い夏の夜にやる事・・・あっ解った花火！」「正解♪」
次の瞬間上空に花火が打ち上がった！
「うお！？結構本格的じゃないっすか！？」

「綺麗♪でも誰があの花火を打ち上げてるんですか？」
「あそこにいるわよ。」メガニウムの視線の先にはジュカインがいた。
ジュカインがソーラービームを花火のように見せているのだ。
「ジュカインさんって何でも出来ちゃうのな（汗）」
「・・・あの人のソーラービームの花火。久しぶりに見たわね・・・」
「そういえば母さんにプロポーズする時に父さんがソーラービームの花火を打ち上げてくれたんだよね？」
「そうよ。」
「素敵ですね・・・」
「さて・・・最後の一発！」
ジュカインは特大のソーラービームの花火を打ち上げた！
「スゲー！」
「綺麗っすね～！」
バクフーン達は夜空に打ち上げられたソーラービームの花火に感動していた。この日の事をバクフーン達はずっと忘れないだろう。
ポケモンリーグ開催まで後一ヶ月。

第四十七話夏だ！海だ！バトルだ！？（後書き）

第四十七話完成です！

第四十八話出発！レジェンドシティに向かって！（前書き）

ポケモンリーグ開催まであともう少しとなったバクフーン達。いよいよレジェンドシティに向けて出発する事にした！

第四十八話出発！レジェンドシティに向かって！

「良し！準備ＯＫ！」
「忘れ物無いわね坊や？ちゃんとチェックした？」
「もちろんだよ母さん！じゃ、行ってきま～す♪」バクフーンは外に出ようとした。
「坊や～忘れ物よ～？」リリの手にはバクフーンのリュックが・・・
「あっどうりで背中が軽い訳だ（汗）」
「もう忘れないでよ？」リリはバクフーンにリュックを渡した。
「ありがとう母さん！」
「頑張ってね！私も準備が出来たら、ちゃんと応援しに行くからね♪」
「うん！それじゃ、行ってきま～す！」
バクフーンはリリと別れ、皆との待ち合わせ場所にした噴水広場に向かいました。
「おっ来た来た！お～いバクフーン！」
すでにリザードン達が来ていた。
「お待たせ～！」
「またバクフーンが一番最後だよ？最初の旅立ちの時もバクフーンが最後だったよね？」
「そうだったけか？」
「そうだよ！」
「まぁ良いじゃんかラグラージ！ちゃんと来たんだから。それじゃ、出発しようぜ！」
「おう♪・・・って何処に行くんだっけ？」
「ズコッ！？」
バクフーンのボケに皆こけた。
「昨日散々説明したじゃないかバクフーン！まず僕が住んでるウォーターシティに行って、そこでレジェンドシティ行きの船に乗るん

でしょ！」
「あぁそうだったそうだった♪」
バクフーンは手をポンと叩いてそう言った。
「こんな調子でポケモンリーグ本当に大丈夫かな～・・・何か不安になってきた（汗）」
「大丈夫大丈夫！ほら、早く行こうぜ♪」

「あっ待ってよバクフーン！」
バクフーン達はまずレジェンドシティ行きの船に乗る為にウォーターシティに向けて出発しました。途中で通り道である迷いの森にやって来た。
「この森も懐かしいなぁ！」
「そうだねぇ。あの時に僕が迷いの森の伝説を話したらバクフーンちょっと怖がってたね（笑）」
「えぇ！そうなんすかバクフーンのアニキ～？」
「こ、怖がってねぇって！？」
「いや、あれは怖がってたな。」
「怖がってましたね。」
「リザードンとラティアスまで～（汗）」

皆から笑いが起きた。
「さぁ、行こうよ！ここを抜ければすぐにウォーターシティだよ！」
バクフーン達は再び進み出した。
迷いの森は相変わらず濃い霧が発生していた。

下手したら道に迷ってしまいそうだ。
だけど、バクフーン達は以前にもここに来ているから大丈夫・・・
「だぁ～！？道に迷った～！？」
大丈夫では無かった。
「ここは今どの辺なんだ？」

「ラグラージ！前みたいにレーダーで道調べてくれよ！」
「・・・さっきからやってるんだけど・・・妙なんだよね・・・」
「何が妙なんですか？」
「僕達はちゃんと出口に向かって進んでる筈なんだけど・・・何故か途中でまた戻ってきてるんだよね・・・」
「どういうこった？」
「それが解れば苦労しないよバクフーン。」

「・・・困ってるみたいだね？」
その時誰かがバクフーン達に喋りかけた。
「今のバクフーン？」
「俺じゃねぇよ？」
「じゃあリザードン？」
「俺でも無いぞ？」
「じゃあ誰？」
「私よ♪」
いきなりラグラージの後ろから一人の小さなポケモンが現れた。
「わっ！？びっくりした！？」
「ウフフ♪良いリアクションね！」
「き、君は誰！？」
「私はセレビィ。」
「セレビィだって！？」
「兄さん知ってるの？」
「時間を超える事が出来る伝説のポケモンだ！」
「良く知ってるわね！さすがラティオスってところかしら？」
「俺の事を知ってるのか？」
「あなただけじゃないわ。隣にいるのは妹のラティアスでしょ？それに、そこにいるのはバクフーンにリザードンにラグラージ。そしてピカチュウにピチューにグラエナ」セレビィは何故かバクフーン達の事を知っていた。

「何で俺達の事を知ってるんだ？」
「ラティオスが言ったでしょ？私は時間を超える事が出来るって。」
「それってつまり、未来で君は僕達に会ってるって事？」
「さすがラグラージ！ご名答よ！」
「未来から来たのか！なんかスゲーな！」
「それでセレビィ、君は知ってるの？この森から抜け出す方法を？」
「まあね♪でも、あなた達が自力で抜け出すのは無理ね。」
「えっ！？どういう事！？」
「今この森は時間が乱れているの。そのせいで出口に向かっても途中でその乱れに巻き込まれてもといた場所に戻ってきてしまうの。」
「時間が乱れてる？それってどういう事？」
「私は今それを調べているの。いろんな時代にタイムスリップしてね。まだ原因は解らないけど・・・」
「じゃあ俺達はどうやってここから出られるんだ？」
「私の力で森に入る前の時間に連れていってあげる。そしたら森に入らないで空を飛んで行くの。森にさえ入らなければ時間の乱れに巻き込まれる事はないから。」
「解った！」
「じゃあ、さっさとやるわよ！」
セレビィは目を閉じて集中し始めた。すると、セレビィの身体から眩い光が発生した。その光は徐々に大きくなっていきバクフーン達を包んだ。
あまりの眩しさにバクフーン達は目を開ける事が出来なかった。
しばらくして・・・
「着いたわよ♪」
バクフーン達が目を開けるとそこは迷いの森の入口前だった。
「おっ！本当に迷いの森の入口だ！」
「本当に時間を超えた・・・凄いなセレビィの力って！」
「こんなの朝飯まえよ♪さっきも言ったけど、今は森に入らないでね？ちゃんと空を飛んで行くのよ？」

「解ってるって！」
バクフーンはリザードンにつかまって、ピチューとピカチュウはラティオス・ラティアスの背中に乗って、ラグラージは二人の念力の力で、グラエナはそのラグラージの背中に乗って飛んで行った。
「セレビィ～！いろいろありがとうなぁ！」
バクフーンは大声でセレビィにお礼を言った。セレビィは手を振ってそれに答えた。
「・・・本当にお礼を言わないといけないのは私の方何だけど・・・元の時代に戻ったらちゃんとお礼を言おう！」
そう言った後、セレビィは時渡りをして今現在の時代から他の時代にタイムスリップしていった。一方バクフーン達は空を飛んだ事であっという間にウォーターシティに到着した。
「最初から空飛んで行けば良かったな？」
「簡単に言うなよバクフーン！お前重いから運ぶの大変なんだぞ！」
「俺はカビゴンみたいに太ってないぞ！」
「二人共、言い合うのは良いけど、急がないと船出ちゃうよ？」
ラグラージが言った。
「解ってるよ！」
バクフーン達は急いでレジェンドシティ行きの船に乗船した。
船の中は豪華客船みたいに広かった。
「広いなぁ！」
「そりゃポケモンリーグ出場者が乗る船だからね！周りを見てみてよバクフーン、皆ライバルになるチームなんだよ。」
バクフーン達以外にも多くのポケモン達が乗っていた。皆、ジム戦を制覇してきた強者だ。
「皆ライバルか・・・くぅ～！何かスゲーワクワクして来たぜ♪」
その時、まもなく出航するというアナウンスが流れた。
「いよいよ出発か！」
「今日からこの船で3日かけてレジェンドシティに向けて移動する

んだ」
「3日!?そんなにかかるのか!?」
「うん。でも大丈夫だよバクフーン。この船にはちゃんとトレーニングが出来る所とか、バトルが出来るバトル場とか、あとは娯楽施設とかがあるから!」
「マジで!良し!早速バトル場に♪」
「まだ早いっちゅうの!?まずは、僕らが寝泊まりする部屋に行こうよ!荷物とか置いてこないと」「じゃあ置いたら行こうぜ!バトル場に♪」
「・・・本当にバトルバカなんだから（汗）」
その時、遂に船がレジェンドシティに向けて動き出した。ポケモンリーグ開催まで、後二周間。

第四十八話出発！レジェンドシティに向かって！（後書き）

第四十八話完成です！

第四十九話初めての船の旅！（前書き）

レジェンドシティに向かう為に船に乗ったバクフーン達。初めての船にバクフーンは興奮している・・・と思いきや？

第四十九話初めての船の旅！

「いやぁ～・・・良い天気だねぇ・・・」
「そうですね～・・・」
「ラティアスちゃん！オイル塗ってあげようか♪」
「い、いえ、いいですピカチュウさん（汗）」
船の旅一日目。ラティアス達は娯楽施設の一つ、プールに来ていた。
「・・・あ～・・・気持ち悪い・・・」
「船って・・・結構揺れるんすね・・・うっ！？」バクフーンとグラエナは船酔いしていた。
「おいおい大丈夫か二人共？」
そう言いながらリザードンはバクフーンとグラエナの背中をさすっている。
「さすがのバクフーンも弱点があったか。」

「アタシ酔い止めの薬持ってるよ！飲む？」
「ください・・・うっ！？」今にも吐きそうなバクフーンとグラエナ。
「うわぁ！？ちょ、ちょっと待ってて！すぐにあげるから！」
ピチューは自分のリュックから酔い止めの薬を取り出してバクフーンとグラエナに飲ませてあげた。
「お前らは先に寝室に行って休んでな？」
「そうさせてもらう・・・あ～・・・」
「お先に失礼するっす～・・・」
バクフーンとグラエナは寝室に戻って行った。
「大丈夫かなあの二人？」
「アタシの酔い止め飲んだから多分大丈夫だと思うけど・・・」
一方バクフーンとグラエナは自分達の寝室に戻る途中で・・・
「あ～・・・船が・・・これほど辛いものだったとは・・・」

「思ってなかったすね～・・・」

「ちょっとそこの！」

二人組のポケモンがバクフーンとグラエナを呼び止めた。

「ん？俺らか・・・？」「あんた、チームブラストのバクフーンだろ？俺はアーボック、こっちはハブネーク。俺らとバトルしてくれよ！」

「バトルか・・・やりたいけど・・・今ちょっと船酔いしちゃってさ・・・また今度にしてくんない？」

「何だ？俺達に負けるのが怖くて逃げんのか？」

「ムッ（怒）やってやろうじゃないか！」

「そうこないとな！ルールはダブルバトルだ！近くにバトル場があるからそこでやろうぜ！」

バクフーン達は船に用意されているバトル場にやって来た。

「おっ何だ何だ？」

船に乗っている他のポケモンが集まって来た。

「それじゃ行くぜ！毒針！」

アーボックは二人に毒針攻撃をした。

「おっと！」

バクフーンとグラエナはこれを回避した。

「火炎放射！」

ハブネークがグラエナに向かって火炎放射を放った！

「わわわ！？」

グラエナは伏せをして火炎放射を回避した。この後もアーボックとハブネークの執拗な攻撃をバクフーンとグラエナは最小限の動きで回避していく。だが、何故かバクフーンとグラエナは反撃をしなかった。

「避けてばかりじゃ俺達には勝てないぜ！反撃してこいよ！」

「・・・」

アーボック達は挑発してくるがバクフーン達は無視した。

「来ないんなら・・・これで決めるぜ！行くぜハブネーク！」
「あいよ！」
「「ヘドロ爆弾！」」
アーボックとハブネークはヘドロ爆弾を放とうとした。
「今だ！電光石火！」
「不意打ちっす！」
バクフーンとグラエナは電光石火と不意打ちをアーボックとハブネークに決めた！電光石火と不意打ちを受けたアーボックとハブネークは吹き飛ばされた！
「これで終わり！火炎放射！」
「シャドーボールっす！」バクフーンとグラエナは火炎放射とシャドーボールを決めた！これが決定打になりアーボックとハブネークは倒れた。
「ま、負けた・・・」
「俺らの勝ちだな！」
「やったっすね！バクフーンのアニキ！」
さっきまで船酔いで苦しんでいたバクフーンとグラエナはすっかり元気になっていた。
「何故・・・すぐに反撃しなかったんだ？」
「単純にお前らが大技を使うのを待ってただけだ。大技を使う時はどうしても若干隙が出来る。そこを狙ったのさ。」
「そういう事っすよ～」
「なるほどな・・・さすがチームブラストってところか・・・負けたよ。だけど、ポケモンリーグでは負けないからな！」
「俺らだって負けないぜ！」
「負けないっすよ～！」バトルを終えたアーボックとハブネークは仲間の所に帰って行った。
「あれが噂のチームブラストのバクフーンか・・・なぁ！次は俺らとバトルしてくれないか？」
「いえ、次は私達とバトルしてよ！」

周りで見学していたポケモン達はバクフーン達のバトルを見て、自分もバトルをしたくなってしまったらしい。次々とバトルをしたいと申し込まれるバクフーンとグラエナ

「な、何か凄い事になっちゃったっすね～バクフーンのアニキ（汗）」

「よっしゃ！じゃあまずそこの二人！バトルしようぜ♪」

バクフーンはバトルが出来る事が凄い嬉しいのかまた挑戦を受けた。

「今バトルしたばかりなのにもう別のバトルを・・・さすがバクフーンのアニキ！俺も付き合うっすよ～！」

この後もバクフーンとグラエナは六回ダブルバトルをした。結果は全勝！これでバクフーンとグラエナは七連勝した事になる。

「よっしゃ！勝った♪」

「勝ったっす～♪」

バトルに勝って喜ぶバクフーンとグラエナ。だが、そんなバクフーンとグラエナをずっと見ているポケモンが一人・・・

そのポケモンはバクフーン達の所にやって来た。

「良い気なものですね・・・」

「あんた誰っすか？」

「あっ！メタグロス！」そのポケモンとはチームメタルのリーダー、メタグロスだった。

「アニキ～この人知り合いなんすか～？」

「チームメタルのリーダーでメタグロスって言うんだ。久しぶりじゃんメタグロス！元気にしてたか？」

「ふん・・・なれなれしく私の事を呼ばないでもらいたいですね。」

「あれれ（汗）」

「・・・アニキ～・・・こいつ何か嫌な奴っすね～？」

グラエナは小声でバクフーンに言った。

「聞こえてますよ・・・そこのペット。」

「誰がペットっすか！？」

「まぁそんな事はどうでも良いです・・・バトルを楽しむのは結構

ですが、ここにいるポケモン全員があなたのライバルなんですよ?」
「だからなんだよ?」
「はぁ～・・・鈍いですね・・・良いですか?ここでバトルをするとゆう事は相手に自分の手の内を教えるも同然なんですよ。それはつまり、ポケモンリーグでの戦いが不利になる事になる・・・」
「あっ・・・言われてみればそうっすね!」
「物解りが良くて結構ですねペット。」
「だから誰がペットっすか!?」
「まぁとにかくそういう事です。バトルは控えた方が良いですよ。・・・では、私はこれで。」
メタグロスは仲間のいる所に戻ろうとした。
「メタグロス!教えてくれてありがとな♪」
「ふん・・・勘違いしないで下さいよ?あなたを倒すのはこの私です。あなたがすぐに負けてもらっては困るんですよ。」そう言いながらメタグロスは帰って行った。
「あいつ物凄い嫌な奴っすね!あんな奴には絶対負けたくないっす!」
「まぁそんなに怒るなよグラエナ。本当に嫌な奴なら、俺らにあんな事を言ったりしないさ。」
「う～ん・・・そうなんすかね～?」
「・・・さて、何か船酔い治っちまったし、寝室じゃなくてリザードン達の所に戻ろうぜグラエナ!」
「そうっすね～!」
バクフーンとグラエナはリザードン達がいるプールの方に戻る事にしました。ところが、プールに戻ってみたらラティアス達がいなかった。
「ありゃ?皆何処行ったんだ?」
「クン・・・クンクン・・・あっちに行ったみたいっすね～!」
「えっ?何で解んだグラエナ?」
「ピカチュウのアニキの臭いがあっちに向かってるんすよ。俺につ

いて来て下さいっすバクフーンのアニキ！」
バクフーンはグラエナの鼻を頼りに進んだ。そしてたどり着いた場所は・・・
「・・・トレーニング場だな？スッゲ、いろんなトレーニング器具がいっぱいある！」
そこは様々なトレーニング器具が置いてあるトレーニング場だった。

「おっいたいた！お～い皆～！」
「バクフーン！それにグラエナも！お前ら船酔いは治ったのか？」
「何かバトルしてたら治っちまった（笑）」
「・・・はい？」
バクフーンとグラエナは今まで起きた事をリザードン達に説明した。
「あの後ダブルバトルを七回連続でやったのか！？」
「おう♪」
「楽しかったっす～♪」
「・・・信じられん（汗）船酔いした状態でバトル出来るか普通？」
「まぁ・・・バクフーンだからねぇ・・・おまけにグラエナもバクフーンのバトルバカが移ったみたいだし（汗）」
「バカは余計だ！」
「余計っす！」
「意気までぴったりだね（汗）」
「まぁ何にしても、船酔いが治って良かったな！ところでお前らどうする？俺らはまだしばらくここでトレーニングするつもりなんだが・・・」
「暇だから俺もやる！」
「俺もやるっす～！」
バクフーン達はしばらくトレーニングをする事にしました。
トレーニングを終えた後は気分転換に娯楽施設の一つ、映画館に行ったりしました。その時にピカチュウがラティアスに近づいて良い感じになろうとした所をラティオスとピチューにいつものように阻

まれたとか（汗）
まぁとにかく楽しく過ごす事が出来たバクフーン達は寝室に戻って眠りにつきました。
皆が寝静まった夜、ただ一組動き回るポケモンが・・・
「兄貴！」
「し～！バカ野郎、声がデかい！」
「あっ失礼しました・・・」
「たくっ！せっかく忍び込んだのに見つかったら意味ねぇだろが！」
そのポケモンとはヘルガーとドンカラスでした。
「グラエナの野郎・・・まさかあのバクフーンの仲間になってやがったとはな！」
「まぁ、あいつはワルになりきれなかったのも確かですしね・・・何か悲しい（泣）」
「こら泣くなドンカラス！」
「だって・・・見ましたグラエナの幸せそうな顔？うらやましくて（泣）」
「だから泣くなって！俺らはとことんワルの道を突っ走るだけだ！この船に忍び込んだのも、金になりそうな物を片っ端から盗る為だろ！」
「・・・グスン・・・そうでしたね兄貴！」
「それに今回は大物も狙うんだからな・・・気合い入れろよ？」
「解ってますよ兄貴。今回の最大のターゲットはポケモンリーグ優勝トロフィーですよね？」
「おうよ！優勝トロフィーを売れば大金がガッポリ・・・」
その時、ヘルガーとドンカラスに誰かが近づいて来ました。
「誰だ！？」
「・・・くぅ～・・・・・待って下さいよ～・・・バクフーンのアニキ～・・・ムニャムニャ・・・」
グラエナだ。寝たまま歩いている。
「グ、グラエナ？」

「そういえば・・・こいつ良く寝たまま歩いたりいきなり攻撃とかしてたような・・・」
「・・・シャドーボール・・・」
ドンカラスがそう言った時、グラエナがいきなりシャドーボールを放った！シャドーボールを受けたヘルガーとドンカラスは空高く吹き飛ばされました！
「あ～・・・何でいつも飛ばされるんだろ～（泣）しかも今回は寝ぼけたグラエナに～（泣）」
「俺らは諦めねぇからな！とことんワルの道を突っ走ってやるからな～！」そう言いながらヘルガーとドンカラスは星になりました。
「・・・あれ？何で俺ここにいるんすかね～？・・・まっ良いか・・・戻って寝るっす～・・・ふぁ～・・・」
グラエナはヘルガー達を吹き飛ばした事を知らずにバクフーン達が眠る寝室に戻って行きました。翌日、バクフーン達は船の旅初日と同じくトレーニングしたり娯楽施設で楽しく遊んだりしました。そしてあっという間に船の旅は三日目になりました。
「見えて来たよ！」
ラグラージが指差す先をバクフーンが見ると大きな島が！
「あれが！」
「そう、レジェンドシティがある島、レジェンドアイランドだよ。」
「あそこでポケモンリーグが・・・くぅ～！燃えて来たぜ！！」
ついにレジェンドシティに着いたバクフーン達。ポケモンリーグ開催まであと一週間と四日。

第四十九話初めての船の旅！（後書き）

第四十九話完成です！

第五十話デオキシスのキラ襲来！キラの後ろに黒い影！星、消滅の危機！？（前

バクフーン達はポケモンリーグが開催されるレジェンドシティにやって来た。

第五十話デオキシスのキラ襲来！キラの後ろに黒い影！星、消滅の危機！？

「遂に来たぜレジェンドシティ！早くポケモンリーグ始まらないかなぁ♪」
「気が早いよバクフーン。ポケモンリーグ開催まで一週間以上あるんだから。」
「あ～待ち遠しい！・・・ところでラグラージ、何で一週間以上早く俺ら出場選手はここに来たんだ？」
「あれ？バクフーン手紙読まなかったの？」
「手紙？あぁそういえば来てたなぁ！まだ読んでなかった（笑）」
「ダメじゃん！？良いバクフーン、手紙に書かれてたのは・・・」
ラグラージが言いかけた時、突然レジェンドシティ内にアナウンスが流れた。
「お知らせします。今から呼ばれたチームの方々は至急、ポケモンセンターにお越しください。チームブラスト、チーム業火、チームメタル、チーム竜星、・・・繰り返します。」
何故かバクフーン達とバクフーン達が知っているチームの名前が呼ばれた。
「ん？何だ？」
「どうやら来たみたいだね。早く行こう！」
バクフーン達はレジェンドシティのポケモンセンターにやって来た。
「来たな。」
「あれ！？ルカリオじゃんか！？それにマニューラにクレセリアまで！？」
ポケモンセンターにはルカリオとマニューラ、そしてクレセリアがいました。
「何でルカリオ達がここにいるんだ？」
「あら？バクフーンにもちゃんと手紙を送った筈なんだけど・・・もしかして読んでなかったの？」クレセリアが聞いた。

「読んでなかったらしいよ（汗）」
クレセリアの質問にラグラージが答えた。
「申し訳ない（汗）」
「まぁ・・・バクフーンらしいといえばらしいわね・・・」
「おっ！久しぶりだなバクフーン！」
「お久しぶりです！」
その時、チーム業火とチーム竜星がやって来た。
「お～ゴウカザルにフライゴン！久しぶり！」
「本当に久しぶりだな！漆黒の闇の連中と戦った時以来だな！」
「だなぁ！あれから結構たったな！」
「・・・そろそろ話をしても良いか？」
「あっ悪いマニューラ！久しぶりに会ったから嬉しくてつい（笑）
てか、メタグロス達を待たなくて良いのか？」
「・・・もう来てますよ。」
メタグロス達はもうすでにポケモンセンターに来ていた。
「あら、いつの間に・・・」
「あなた方が遅かっただけですよ。それよりマニューラさん、本題
に・・・」
「解っている。」
マニューラはかなり真剣な顔をしている。

「お前達を呼んだ理由は手紙にも書いてあるが、デオキシスのキラ
がこのレジェンドシティに来るからだ。」
「キラが！？」
「ルカリオ・・・」
「私はジムを留守にしている間、ずっとデオキシスのキラを調べて
いた。キラは何故、他のポケモンを襲うのか・・・調べていくうち
に襲われたポケモン達の共通点が解ったんだ。」
「共通点？」
「皆、ポケモンリーグに出場するチームだったんだ。」

「えっ！？」
「理由は知らんが、キラはポケモンリーグ出場チームを狙って動いている。つまり、このレジェンドシティにキラが来る可能性が高いと言う事だ。」
「だったら皆に早く知らせて避難させないと！」
「それはダメだ！」
「何で！？」
「避難させてしまえばキラはここに来なくなってしまう。」
「それって・・・他の皆を囮に使うって事か！？」
「・・・そうだ。」
「お前、一般のポケモンを巻き込むのかよ！？」
「待ってバクフーン！ちゃんと話は最後まで聞いて！良い？他のチームのポケモン達は自分からこの作戦に賛同してくれたのよ！」
「賛同？作戦？」
「実はポケモンリーグ出場チームの皆を一週間以上早くレジェンドシティに集めたのはキラを捕獲する為なのよ！そして、手紙でその事を知らせて捕獲作戦に協力してくれないか頼んだの。」
「・・・へ？」
「つまり、他の皆もこの作戦の事は知ってるのよ。手紙をしっかり読んでくれたからね。」
「そうなのね（汗）」
その時、レジェンドシティ全体に警報が鳴り響いた！
「な、何だ！？」
「まさかもう来たのか！？急ぐぞ皆！」
バクフーン達はレジェンドシティの中心にある広場に向かった。
「シネ！ミンナシネ！コノヨカライナクナレ！」キラだ！ポケモンリーグ出場チームのポケモン達が戦っているが手も足も出ないでいる！
「キラ・・・今度こそ倒してやる！」
「ちょっと待ったバクフーン！」

「何で止めるんだよマニューラ!?」
「今行くとあいつの邪魔になる!」
「あいつ?」
その時、空から高速でデオキシスのキラに迫ってくるポケモンが一人。
「フォルムチェンジ・・・ディフェンス!」
デオキシスのイルだ!イルはディフェンスフォルムになってバリアーのような物を作り出してキラをその中に閉じ込めた!「イル!」
「久しぶりです皆さん・・・今は話かけないで下さい・・・集中しないと兄にバリアーから抜けられてしまいますから・・・」
イルが作り出したバリアーを破ろうとキラが暴れている。
「ダセ!ココカラダセ!」
「キラ・・・お前には聞かないといけない事がある。お前は何故、ポケモンリーグ出場チームのポケモンを狙う?」
「キラ?・・・オレハキラジャナイ・・・」
「キラじゃないだと?ならばお前は誰だ?」
「オレハ・・・ダレデモナイ・・・オレハ・・・ヤミソノモノダ!」
次の瞬間キラの身体からドス黒いオーラが現れた!そのオーラはどんどんキラの身体から溢れていく!
「くっ!?凄いパワーだ!?うわぁ!?」
イルのバリアーが破られた!そして黒いオーラはキラの身体から離れて空へ!キラは倒れた!
「兄さん!?」
「・・・大丈夫、気を失っているだけだ・・・しかし、あれは何だ?」
まだ空中には黒いオーラが固まりとなり浮遊していた。
「ブラストバーン!!」いきなりバクフーンが黒い固まりに向かってブラストバーンを放った!
「ちょっ!?なにしてんのバクフーン!?」
「とりあえずあれぶっ壊そうと思って。」

「むやみに正体が解らない物に攻撃しないでよ！何が起きるか解らないんだから！」
ブラストバーンが当たった事で発生した爆煙が晴れていく・・・なんと、黒い固まりは無傷だった！
「嘘！？ヒビ一つ入ってねぇ！？」
次の瞬間、黒い固まりに変化が現れた。どんどん形が変わっていく・・・そして黒い固まりはあるポケモンのシルエットになっていく。
バクフーンはそのシルエットに見覚えがあった。いや、バクフーンだけじゃない。漆黒の闇と戦った他のポケモン達もそのシルエットに見覚えがあった。何故ならその形は・・・
「・・・まさか、ダークライ・・・？」
そう、その姿はダークライそのものだったのだ！
「何でダークライが！？あいつはディアルガの力で卵にされた筈だろ！？」
「・・・我はダークライではない・・・我は闇・・・闇そのもの・・・我は・・・全てを闇に染める者なり！」
ダークライの身体から凄まじいエネルギー波が放たれた！そのエネルギー波はその場にいたポケモン達を吹き飛ばした！
「くっ！今のは悪の波動！？何てパワーだ！」
「神速！」
ルカリオが神速でダークライに向かって行った！
「波動は我にあり・・・波動弾！」
ルカリオは波動弾を放った！だが、波動弾はダークライの身体をすり抜けた！
「なっ！？バカな！？」
「我は闇・・・闇そのもの・・・闇にいかなる攻撃も通用せん！」
またダークライが悪の波動を放った！ルカリオは吹き飛ばされた！
「がはっ！？」
「ルカリオ！？大丈夫か！？」
「あ、あぁ・・・これ位で倒れる私ではない・・・だが、あのダー

クライは一体なんなんだ・・・私の波動弾が効かないなんて・・・」
「あいつ自分の事を闇そのものだって言ってたよね？もしそれが本当なら・・・どんな攻撃もあいつには効かないって事になる！」
「んなもんやってみなきゃ解んないだろ！フレアドライブ！！」
バクフーンは最大パワーのフレアドライブでダークライに突っ込んで行った！だが、やはり攻撃はダークライの身体をすり抜けてしまう！
「くっ！」
「・・・全てを闇に・・・全て・・・」
ダークライは呪文のように同じ言葉を繰り返し言っている。
「やっぱりどんな攻撃もあいつには通用しないんだ！？」
「そうとも限らないぞラグラージ。」
「えっ？」
「私達に任せて下さい！行こう兄さん！」
「解ってるさラティアス！行くぞ！」
ラティオスとラティアスがダークライに突っ込んで行った！
「「光よ！」」
ラティオスとラティアスの身体から眩い光が発せられた！これは津波を消した時に使っていた光だ！二つの光は合わさり一つの大きな光となってダークライに迫る！そして、ダークライはその光を見た途端急に苦しみだした！
「やはりな！闇には光だ！」
「闇は闇に帰りなさい！」ラティオスとラティアスは更に光を強くした！「・・・闇は・・・闇は消えん！」
ダークライの身体から黒いオーラが溢れだした！
「なっ！？」

「全て闇が飲み込んでくれる！」
次の瞬間黒いオーラはラティオスとラティアスの光を跳ね飛ばし、その場にいたポケモン達全員を包み込んだ！

「・・・うっ・・・一体・・・何が？・・・何だよここ？」
しばらくした後、バクフーンが目覚めたらそこは何も無い真っ暗な世界だった。
「・・・不気味な所だな・・・あっ！皆！」
周りを見てみたらあの場にいたポケモン達全員がいた。だが、皆まるで眠っているかのように動かない。
「おい！ラグラージ起きろよ！ラティオスとラティアスも！なぁピカチュウ！ピチュー！」
バクフーンは必死に呼びかけるが、ラグラージ達は目覚める事はなかった。
「どうなってんだよ？他の皆も目が覚めないし・・・俺だけなのか？そういえばリザードンがいないな・・・」
そう、何故かリザードンが近くにいないのだ。
バクフーンはもう一度周りを見る。すると、遠くの方に炎が見えた。
「あれはリザードンの尻尾の炎！間違いない！」バクフーンはその炎を目指して走った！近くまで来て確認すると、やっぱりリザードンだった！
「リザードン！」
「・・・」
だが、やはりリザードンも眠っているようだ。
「リザードンまで・・・起きてるのは本当に俺だけなのか？何で・・・」その時、バクフーンは自分が背負っていたリュックの中が光っている事に気づいた。
「何か光ってるぞ？」
バクフーンはリュックの中を開けた。光っていたのはムウマージ兄弟からもらった綺麗な透明の羽だった！
「何でムウマージからもらった透明の羽が・・・何だろ・・・すっげ～暖かい光だ・・・」
その時、透明の羽に変化が起きた。光が少しずつ強くなると同時に

透明の羽に色が付き始めたのだ。しばらくすると、透明の羽は透明ではなくなり七色に輝く羽に変化した！

「何だ・・・力が湧いてくるこの感じは！」

七色に輝く羽に変化した瞬間、バクフーンの身体から物凄い炎が現れた！自分の意思とは関係なくブラストモードが発動したのだ！

「・・・ブラストモードが勝手に・・・まぁ良いや・・・そこにいるんだろダークライ。出てこいよ。」

バクフーンがそう言った瞬間、目の前にダークライが現れた！

「貴様は何者だ！？何故闇の眠りに落ちない！？」

「んなもんどうでも良いだろ・・・お前は俺がぶっ倒してやるからよ。火炎放射。」

バクフーンはダークライに火炎放射を放った！

「何度言えば解る！我は闇そのもの・・・いかなる攻撃も我には通用・・・ぐあぁぁぁ！？」

火炎放射がダークライに直撃した！

「ば、バカな！？何故だ！？」

「いちいちうるさいぞ。火炎車。」

いつの間にかバクフーンはダークライの背後にいた！そして火炎車を決めた！

「ぐっ！？」

「オーバーヒート。」

火炎車を決めた後に至近距離でオーバーヒートを決めた！

「わ、我は・・・闇は・・・消えん！」

ダークライは最大パワーの悪の波動を放った！

「とっとと闇は闇に帰れ。ブラストバーン。」

悪の波動にたいしてバクフーンはブラストバーンを放った！二つの技はぶつかり合ったがバクフーンのブラストバーンの方がダークライの悪の波動を圧倒してしまう！あっという間に悪の波動を打ち消しダークライにブラストバーンが直撃した！

「ぐあぁぁぁ・・・！？」ダークライはブラストバーンを受けて消

滅した。その瞬間真っ暗だった世界がどんどん消えて、元の世界に戻って来た。
「・・・はぁ～・・・終わった～！」
いつの間にかバクフーンのブラストモードが解けていた。そして、眠らされていたポケモン達が次々と目を覚ました。
「うぅ・・・一体何が・・・？」
「よっマニューラ！お目覚めかい？」
「バクフーン・・・あのダークライは何処に行った？」
「俺がぶっ倒したよ。」
「お前が！？しかし、一体どうやって？」
「う～ん・・・これのおかげかな？」
そう言ってバクフーンは七色に輝く羽を見せた。「それは？」
「ある村でムウマージにもらったんだ。」
「それは！？」
いきなりルカリオが叫んだ。
「な、何だよルカリオ？いきなり・・・」
「それはホウオウの羽じゃないか！？」
「ホウオウの羽？ホウオウってあの伝説のポケモンのホウオウの事か？」
「そうだ！ホウオウの羽にはホウオウが持つ聖なる力が宿っているんだ。バクフーンが奴に勝てたのはそのホウオウの羽に宿る聖なる力を借りたからだろう。」
「そういえばこの羽を持った時、身体中に力がみなぎって来たんだ。」
「・・・話てるところ悪いんだけど三人共・・・ちょっと良いかな？」
ラグラージがバクフーン達に喋りかけて来た。
「どうしたんだよラグラージ？」
「何か・・・キラが起きないんだよ・・・」
他の皆は目覚めたのに、デオキシスのキラだけが目覚めないのだ。

「キラ兄さん・・・」
「キラが起きないのか?」
「はい・・・」
「クレセリア、お前の力で何とかならないか?」
「・・・やってみます」クレセリアは目を閉じて集中し始めた。すると、クレセリアの三日月型の羽から光の粒子が発生した。その光の粒子はデオキシスのキラに降りそそぐ・・・
「・・・うぅ・・・」
「キラ兄さん!」
「・・・ここは?」
キラが目を覚ました!
「良かった!目が覚めたんだね!」
「・・・イル?・・・俺は・・・今まで何を?」「覚えてないの?」
「・・・この星に着いた時までは覚えてるんだが・・・そこから先はほとんど・・・」
「・・・キラ兄さんは・・・」
デオキシスのイルは兄のキラに今までの事を説明した。
「・・・俺が・・・そんな事を・・・」
「気にすんなよ。お前は操られてただけなんだからさ。」
「・・・だが・・・俺がやった事には変わりない・・・」
「だから気にすんなって!お前が悪いんじゃないんだからさ!皆だって許してくれるって!なっ皆?」
他のポケモン達皆頷いてくれた。
「・・・皆・・・ありがとう・・・」
キラは皆の優しさに感動して涙を流した。
「・・・はっ!そうだ!イル、俺達がこの星に来てからどのくらいたった?」
「えっ?えっと・・・四ヶ月位かな?」
「なんだって!?もう時間が無いじゃないか!?」
「どうしたんだよ急に?」

「・・・俺達がこの星に来たのは・・・この星に危機が迫っていたからだ！」
「危機？」
「この星に隕石が向かっているんだ！それもこの星を消滅させてしまう程の大きな隕石が！」
「なんだって！？」
「隕石が衝突する前に皆に知らせて対策を考えようと思っていたんだが・・・俺はそいつに操られてしまった・・・イルに教えていれば良かったんだが・・・急いでいたから・・・」
「・・・それでキラ、その隕石はいつくるんだ？」
「・・・空を見てみろ・・・」
キラに言われ皆空を見た。すると、普段は無い筈の星が一つあった。
「・・・まさか、あれが？」
「そうだ・・・後・・・六時間後に隕石はこの星の大気圏に突入する・・・」
「六時間！？」
「・・・六時間では充分な対策を考える事が出来ない・・・どうすれば・・・」
「・・・何とかなるかもしれない・・・」
バクフーンが言った。
「どういう事バクフーン？」
「この星を消滅させてしまう程の大きな隕石・・・そんな物を何とか出来そうな奴らが、俺らの知り合いにいるだろ？」
「・・・まさか・・・ディアルガにパルキアの事？」
「そう！」
「でも、またあの二人が出会ったら戦いになるんじゃない？」
「今はそんな事言ってる場合じゃないだろ？とにかく、一度アグノム達の所に行こう！」
「またお前を抱えて飛ばないといけないのか？」

「よろしくリザードン♪」
「待って下さい。バクフーンさん、そのアグノムさんがいる場所は何処ですか？」
「フレイムシティの近くにある大きな湖にいるんだ。だけどどうして？」「フレイムシティの近くの湖・・・解りました。僕がテレポートで皆さんをそこへお連れします」「おっマジで！じゃあ頼むよ！」
「ちょっとバクフーン！アグノムとの約束忘れて無い？良いの？アグノムの居場所を教えちゃって？」
「今は非常事態なんだ、アグノムだって解ってくれるさ！」
「じゃあせめて行くメンバーは僕達チームブラストとイルとキラだけにしない？こんなに大勢で行ったら・・・」
「・・・だな（汗）マニューラ、良いか？」
「・・・仕方ないな・・・頼むぞ！」
「任せておけって！じゃあイル、よろしく！」
「解りました・・・テレポート！」
バクフーン達はイルのテレポートで一気にアグノムが住んでいる湖に飛んだ。
「久しぶりだなぁ！お～い！アグノム～！いるか～？」
バクフーンはアグノムを呼んだ。すると、湖から二人のポケモンが出てきた。

「騒がしいな・・・一体何処のどいつだ？・・・ん？お前達は・・・」
「バクフーン♪」
アグノムとガーディアンのギャラドスが出てきた。アグノムはバクフーンを見た瞬間バクフーンに抱きついた。
「よっアグノム！」
「久しぶりだね！また来てくれて嬉しいよ！・・・あれ？バクフーン、この人達は？」

「紹介するよ。こっちがイルで、こっちがキラ。二人共デオキシスっていうポケモンなんだ。・・・アグノム。お前に頼みたい事があるんだ。」
「頼みたい事？」
バクフーンはアグノムに今までに起きた事を説明した。
「・・・なるほどね。確かにディアルガ様にパルキア様なら隕石を何とか出来る筈だよ・・・」
「やっぱり二人が出会ったらまた戦いになっちゃうのかな？」
「・・・今のままならね・・・だけど、これをディアルガ様とパルキア様に持たせれば。」
アグノムは念力を使ってかなり大きめの宝石のような物を二つ浮かせてバクフーン達に見せた。
「それは？」
「名前をつけるとしたら・・・時の結晶と空間の結晶・・・かな？僕とユクシーとエムリットがディアルガ様とパルキア様の為に作り出したんだ。これをディアルガ様とパルキア様に持たせれば、お二人が出会っても戦わないようにしてくれるんだ。」
「戦わないように？」
「う～ん・・・何て言えば良いのかな～・・・僕達ポケモン皆、本能を持っている。もちろんディアルガ様とパルキア様にも。お二人が出会うと戦ってしまうのはお二人の中にあるその本能が目覚めてしまうからなんだ。この結晶はその本能が目覚めないようにしてくれるんだ。こんな説明で理解出来るかな？」
「ようするに、それ持ってればディアルガとパルキアは戦わないようになるんだろ？」
「うん。」
「なら、早くディアルガとパルキアを呼んでそれを持たせて、隕石を何とかしてもらおう！」
「待ってバクフーン、お二人をお呼びする為には僕だけじゃダメなんだ。ユクシーとエムリットと三人でやらないと。」

「じゃあまず二人の所に行かないとな！イル、またテレポートを頼んで良いか？」
「もちろん。それで、そのユクシーさんとエムリットさんがいらっしゃる場所は？」
「ユクシーはサンドロックシティの地底湖にいるんだ。エムリットは・・・あれ？エムリットって何処にいるんだ？」
「エムリットなら・・・レジェンドシティにいるよ。」
アグノムはエムリットがいる場所を教えてくれた。
「レジェンドシティ！？あそこにいたのか！？」
「うん。とにかく、まずはユクシーの所に行こう！エムリットには僕がテレパシーでレジェンドシティの港のほうに来てもらうように伝えておくから。」
「解った。じゃあイル、頼む！」
「テレポート！」
バクフーン達はユクシーがいるサンドロックシティにテレポートした。そしてユクシーとユクシーのガーディアンであるエンペルトに出会い、今までの事を説明した。
そして状況を理解したユクシーはバクフーン達と共にレジェンドシティの港の方にテレポートした。港にはすでにエムリットがいた。
「随分早かったわね？まぁ、待たされるよりはずっと良いけど。」
「おっ！エムリットが喋った！」
「前回あった時は一言も喋らなかったよね？」
「うっさいわね！別に良いでしょ！それより早くディアルガ様とパルキア様を呼ばないといけないんでしょ？」
「うん。早速始めよう！」アグノム・ユクシー・エムリットの三人は目を閉じて意識を集中し始めた。
「まずは・・・ディアルガ様を・・・」
三人を中心にエネルギーが集まり始めた。そのエネルギーは空に向かって行く。
まるで光の柱のように。そして光の柱の先端が少しずつ広がってい

き大きな魔法陣のようになった。
そして魔法陣の中心がまるで扉が開くように開いていき別の次元に繋がった。そしてその次元から一人の大きなポケモンが現れた。ディアルガだ!「・・・私を呼んだのは誰だ?」
「よっ!久しぶりだなディアルガ!」
「ちょっバクフーン!?ディアルガ様は時の神何だからそんな言葉遣いは失礼だよ!?」
「ふふふ・・・良いんだアグノム。久しぶりだなバクフーン。お前が私を呼んだのか?」
「あぁ。ちょっと力を貸して欲しいんだ。」
バクフーンは事情を説明した。
「・・・なるほど。今まで世界のバランスが取れなかったのはそのせいだったのか・・・解った。力を貸そう。」
「サンキューディアルガ!」
「それではディアルガ様、これを・・・」
アグノム・ユクシー・エムリットはディアルガに時の結晶を渡した。
三人は時の結晶をネックレスのようにディアルガにつけてあげた。
「あとはパルキア様を・・・二人共、良いね?」アグノム・ユクシー・エムリットは再び目を閉じて意識を集中し始めた。そして先ほどと同じ事が起きた。
魔法陣が開かれた時、また別の次元に繋がった。そしてその次元から一人の大きなポケモンが。
パルキアだ!
「俺を呼んだのは何処のどいつだ?」
「よっ!パルキア!」
バクフーンは軽く手を上げて挨拶した。
「バクフーンじゃねぇか!久しぶりだなぁ!お前が俺を呼んだのか?」
「そうだ。そして私もバクフーンに呼ばれた。」
「ディアルガ!?何でお前がここに!?・・・ってあれ?ちょっと

待てよ。俺らは出会った瞬間本能に負けて意識を無くしちまう筈なのに・・・何でまだ意識を保ってられるんだ?」
「それはこのアグノム達が作ってくれた結晶のおかげなんだぜ!」
「結晶?」
「とにかくパルキア様、この空間の結晶を。」
アグノム・ユクシー・エムリットの三人はパルキアにもネックレスのように空間の結晶をつけてあげた。
「へぇ。結構しゃれてるじゃんか!」
「パルキア、あんたにも力を貸して欲しいんだ。」バクフーンはパルキアにも今までの事を説明した。
「・・・そんな事になってやがったのか・・・」
「あぁ・・・だから、二人の力で何とかしてほしいんだ!」
「・・・何とかって言われてもなぁ・・・」
パルキアは空に見える隕石を見た。
「破壊は出来るが・・・星との距離が近すぎるな・・・」
「そうだな・・・隕石の破壊に成功しても、その破壊した隕石の破片がこの星に降り注ぐ事になる。星の消滅は避けられるが・・・我々ポケモンは絶滅してしまうだろうな・・・」
「そんな!?」
「・・・破壊が無理ならあの隕石を何処かよそにやれないのか?」
バクフーンがディアルガとパルキアに聞いた。
「よそにって・・・一体どうやってやるのさバクフーン?」
ラグラージがバクフーンに聞いた。
「例えばあの隕石をテレポートさせてこの星からとうざけるとかさ!」
「いくら何でもそんな事・・・」
「・・・待てよ!バクフーン、そのアイデア良いかもしれないぞ!」
「えっ!?」
「さすがにテレポートは無理だが・・・俺とディアルガの力で新しい次元を作り出して、その次元にあの隕石を閉じ込めるのさ!」

「そんな事出来るのか！？」
「任せな！俺らを誰だと思ってんだバクフーン？ディアルガ、良いな？」
「それしか方法は無さそうだな・・・解った、やろう。」
「良し！ならさっさとやろうぜ！あの隕石はどうもせっかちみたいだからな！」
すでに隕石はすぐそこまで迫っていた！
「行くぜディアルガ！」
「解っている！行こうパルキア！」
ディアルガとパルキアは隕石に向かって行った！
「「我が持てる全ての力よ！ここに新たな次元を産み出せ！我が持てる全ての力、ここに解き放たれん！！」」
ディアルガの胸にあるダイヤモンドのような宝石とパルキアの腕にあるパールのような宝石が眩い光を放ち始めた。すると、ディアルガとパルキアの前方が歪み始めた！
その歪み始めた所に超巨大隕石が突っ込んで来た！すると、その超巨大隕石はどんどんその歪みの中に飲み込まれていく！
「スゲー・・・どんどん隕石が消えていく！」
「消えてるんじゃないよ。あの隕石はディアルガ様とパルキア様が新たに作り出した次元に入っていってるんだ。」
バクフーン達が話てる間にもどんどん隕石は別の次元に入っていく！
「・・・くっ！？」
だが、想像以上に隕石が巨大でディアルガとパルキアはエネルギーをどんどん消費して隕石を別の次元に入れるのが困難になってきた！
「クソ・・・あと少しだっつーのに・・・！？」
「頑張るんだパルキア・・・私達が諦めた瞬間・・・この星のポケモン達は・・・！」
「解ってるっつうの・・・！」
ディアルガとパルキアはかなり苦しそうだ！
「俺達はただ見てるだけしか出来ないのか・・・なぁアグノム！俺

達にも何か出来る事は無いのか？」
「・・・あるとすれば・・・ディアルガ様とパルキア様に力を分けてあげる事だね。」
「どうすれば良いんだ？」
「皆僕達に触って！僕達が皆の力をお二人に届けるから！」
「解った！」
バクフーン達はアグノム達に触れた。そしてアグノム達は目を閉じた。
すると、バクフーン達の身体から光が現れた！
その光はディアルガとパルキアに向かって行く！そして光はディアルガとパルキアの身体の中に入って二人のエネルギーとなった。だが、バクフーン達のエネルギーだけではまだ足りなかった！
「俺達だけじゃ足りないのか！？」
「俺らがいるだろ！」
その時、バクフーン達の後ろにはポケモンリーグ出場チームの皆が来ていた。皆、バクフーン達に触れてディアルガとパルキアにエネルギーを送ってくれた！
「ゴウカザル！」
「お前らだけに良い格好させてたまるかってんだよ！」
皆のエネルギーを受けたディアルガとパルキアは力を取り戻した！
「あいつらの力を感じるぜ・・・これならいける！」
「一気にやるぞパルキア！」
「解ってらぁ！」
二人はフルパワーで隕石を別の次元に引きずり落としていく！
そして・・・隕石は完全に別の次元に姿を消した！
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・や、やったぜ・・・」
「ハァ・・・ハァ・・・何とかなったな・・・」二人はとても疲れた表情をしながらバクフーン達の所に降りてきた。
「ディアルガ、それにパルキア。ありがとうな！」バクフーン達はディアルガとパルキアにお礼をした。

「いや、あれは私達の力だけでは出来なかった・・・お前達の協力のおかげだ。礼を言うなら私達の方だ。ありがとう。」
「ありがとよ。」
今度はディアルガとパルキアがバクフーン達にお礼をしている。
「なぁ、あの隕石は別の次元にやったんだよな?その後はどうすんだ?」
「そうだなぁ・・・俺らのストレス解消の道具にでもするかな（笑）あの新しく作った次元なら本気で暴れても大丈夫だしな！」
「だが、暴れすぎはダメだぞパルキア？」
「おめぇに言われなくても解ってるさディアルガ！」
星の消滅が回避された事で皆はりつめていたものが無くなっていつの間にかいつもの賑やかな雰囲気になっていた。
「さて、俺らはそろそろ元の次元に帰るとするか。」
「そうだな。」
「もう行っちゃうのか?」
「あんまりこっちに来ているとまたバランスが崩れる可能性があるからな。」
「そっか・・・じゃあ元気でな二人共！また会おうぜ！」
ディアルガとパルキアは皆に別れを言った後、それぞれの次元に帰って行った。
「行っちゃったか・・・さあて！俺らは気合い入れてポケモンリーグに備えてトレーニングするか！」
「悪いがバクフーン、ポケモンリーグ優勝は俺達チーム業火がもらうからな！」
「いいえ！優勝は俺達チーム竜星です！」
「ふん・・・あなた達のデータは完璧に分析してあります。優勝は私達チームメタルですよ。」
「優勝すんのは絶対俺達チームブラストだ！」
皆まだポケモンリーグは始まっていないのにもう火花を散らしている。ポケモンリーグ開催まで、後わずか！

第五十話デオキシスのキラ襲来！キラの後ろに黒い影！星、消滅の危機！？（後

第五十話完成です！
最近地元でポケモンのゲーム大会があったので参加してみました！
結果は準優勝でした！まぁ小さなお店での大会だったので人数はそんなに多くはないんですが（＾―＾；）

第五十一話開幕！ポケモンリーグ！（前書き）

星の消滅を回避する事が出来たバクフーン達。ディアルガとパルキアが帰ったあと、アグノム達も自分達の湖に帰って行った。そしてキラとイルは今までにキラが迷惑をかけたポケモン達に謝るために行ってしまった。それから一週間後・・・

第五十一話開幕！ポケモンリーグ！

「バクフーン！ねぇ起きてよバクフーン！」
「・・・もうちょい寝かせて～・・・後五分で良いから～・・・」
「もう・・・こうなったら最終手段だね。ピチュー♪」
「オッケー♪１０万ボルト！」
ピチューの１０万ボルトがバクフーンに炸裂した！「痛ッ！？ちょっと！？何で今回は電気ショックじゃなくて１０万ボルトな訳！？」
「気分的に♪」
「気分って（汗）」
「でも目が覚めたでしょバクフーン？ほら早く支度して！バクフーンが聖火ランナーなんだから！」
「あっ！？そうだった！？」バクフーンは慌てて支度して聖火がある場所に向かった。バクフーンが聖火ランナーに選ばれた理由は星の危機を救ってくれたからだ。
「やっと来たわね！遅いわよバクフーン！」
「って！？えっ！？何でファイヤーがいるの！？」
聖火がある場所には以前フレイムシティで出会った伝説の鳥ポケモンの一人ファイヤーがいた。それとあと二人のポケモンも。
「ファイヤーだけじゃないよバクフーン。」
「フリーザーまで！？・・・て事はもしかしてそこにいるのは・・・」
「お前がバクフーンだな？ファイヤーとフリーザーから聞いているぞ！俺はサンダー！よろしくな！」
ファイヤーだけではなくフリーザーとサンダーもいた。伝説の鳥ポケモンの三人が全員いた！
「何で伝説の鳥ポケモンの三人がここにいるんだ？」
「私達は聖火の警備ってところよ。たまにいるのよ、聖火を盗もうとするバカな連中がね。」

「ふ～ん。でもさすがに伝説の鳥ポケモンの三人が守ってるんだからそういう奴らは来ないだろ？」
「それがね・・・」
「いるんだ（汗）」
「そう（汗）」
「そういえばさぁ。この聖火は何の炎なんだ？」
「ホウオウの聖なる炎だよバクフーン。」
「へぇ！これホウオウの炎なんだ！」
「・・・昔は私の炎が聖火だったのに・・・ブツブツ・・・」
ファイヤーが何か独り言を言っている。
「どうしたんだファイヤーは？」
「あぁ気にしないで良いよ。いつもの事だから。それより聖火ランナー頑張ってねバクフーン！」
「おう♪」
バクフーンは聖火を持って走り出した。
一方リザードン達は自分達が宿泊する選手村にいた。
「そろそろバクフーンが聖火持って走り出した頃だね。」
「そうですね。」

「でもバクフーンが聖火ランナーに興味があったなんて意外だったな？」ピカチュウが言った。
「あいつの場合聖火ランナーに興味があるんじゃなくてただ目立ちたいだけなんだよな（汗）ほら、聖火ランナーはテレビに映るし。」
リザードンが答えた。
「そういう事か（汗）」
「ねぇリザードン兄ちゃん。ポケモンリーグの本戦に出るにはどれ位バトルしないといけないの？」
「えっ？えっと・・・ラグラージ頼む（汗）」
「解ったよ。まず今回ポケモンリーグに集まったチームが６００チーム以上。６００チーム以上のチームは最初に予備戦を勝ち抜く事

になるんだ。そしてその予備戦で勝ち残った２５６チームで予選リーグをやるんだ。」
「予備戦だけで半分以上のチームが消えるの！？」
「そうだよ。しかも最初の予備戦は一対一のシングルで一発勝負。誰が最初にバトルするか良く考えないといけないね。」
「そのうえ予選リーグまで・・・かなり沢山バトルしないといけないのね（汗）」
「そうだね。」
「・・・そういえばグラエナはどうした？」
気がついたらグラエナがいなくなっていた。
「グラエナさんなら散歩に行きましたよ？」
「散歩って・・・あいつ大丈夫か？バクフーン並に方向音痴だったよな？道に迷ってなってなきゃ良いが・・・」
そのころグラエナは・・・
「・・・ここは・・・何処っすかね～？」
見事に道に迷っていた。
「おかしいっすね～・・・さっきまで選手村の中を歩いていたの・・・あれ？あそこにいるのは・・・」
グラエナが見た先には何やら手に何か持って走っているポケモンがいた。
「あっバクフーンのアニキっす！お～い！バクフーンのアニキ～！」
「グラエナ！？何でお前こんな所にいるんだよ？」
「散歩してたら道に迷ったんすよ～（汗）」
「あらま（汗）こっからだと選手村はどっちだ？・・・あ～解んね！しょうがない！グラエナ！一緒に走るか？」
「走るっす～♪」
何故かグラエナもバクフーンと一緒に走る事になった。しばらくした時、ポケモンリーグ出場チーム全員スタジアムに集合していた。もうすぐポケモンリーグの開会式が始まるからだ。スタジアムにはすでに観客達が来ていた。観客席は満席である。

「なぁグラエナ見つかったか？」
「ダメ、全然見つからない！」
「あいつ一体何処に行ったんだ？」
その時スタジアム内に歓声があがった。どうやら聖火ランナーであるバクフーンがスタジアムに入ったようだ。スタジアムにある巨大スクリーンにバクフーンが映っている。そしてバクフーンと一緒に走っているグラエナも。
「・・・何であいつバクフーンと一緒にいるんだ？」
「道に迷ったら偶然バクフーンを見つけて一緒に走ってきたってところじゃない？」
ラグラージ達がそんな事を言っている間にバクフーンとグラエナは聖火を聖火台にともした。いよいよポケモンリーグ開幕である！開会式が終わった後バクフーン達はポケモンセンターにやって来た。何故なら、ポケモンセンターで予備戦の組み合わせが発表されるからである。
「よっバクフーン！聖火ランナーご苦労さん！」
「あっゴウカザル！」
ゴウカザル達チーム業火は先にポケモンセンターに来ていた。
「皆さんお揃いですね！」
「おっフライゴン！」
フライゴン達チーム竜星もやって来た。
「おやおや・・・仲良し組が勢揃いですね。」
「メタグロス！なぁたまには仲良くやらないか？」
「結構です。」
チームメタルもやって来た。
「やぁバクフーン君。見てたよ聖火ランナー。」
「カイリュー！俺目立ってたか？」
「うん。聖火ランナーだからね。」
チーム龍もやって来た。ちょうどチーム龍が来た時に予備戦の組み合わせが発表された。ポケモンセンターにあるスクリーンに組み合

わせが表示された。
「えっと・・・俺達がいきなり当たる事は無いみたいだな？」
「そうみたいだな！」
「最初から当たりたくはありませんからね！」
「私は別に構わなかったのですが・・・まぁ良いでしょう。」
「皆、いきなり負けないように気をつけてね？」
「それはこっちのセリフだぜカイリュー！お前らこそいきなり負けんなよ？」
皆、予備戦が行われるスタジアムに向かった。最初に予備戦を戦うのはバクフーン達チームブラストだ！そしてバトルをするのはラティオスだ！
「何で俺じゃないんだ～！？」
「だってバクフーンはさっき聖火ランナーとして走ったばかりでしょ？それに、ラティオスならどんなタイプの相手が来ても対応出来るしね。」
「う～・・・」
バクフーンはバトルが出来ない事が残念がっている。ちなみにバクフーン達の相手はチームリズムのルンパッパだ。
「兄さん頑張ってね！」
「あぁ！」
ラティオスはバトルフィールドに入った。
「イエイ♪リズムに乗ってくＹＯ♪」
ルンパッパが踊りながらバトルフィールドに入った。
「な、なんだこいつ・・・（汗）」
「それではチームブラストのラティオス選手対チームリズムのルンパッパ選手のバトルを開始致します！」
またいつの間にか審判のハッサムがいた。
「ハッサム・・・いつの間に（汗）」
「試合開始！」
ラティオスとルンパッパのバトルが始まった。

「１０万ボルト！」
ラティオスはルンパッパに１０万ボルトを放った！
「イエイ♪守る行くＹＯ♪」ルンパッパは守るを使って１０万ボルトを防御した。
「イエイ♪エナジーボールくらえＹＯ♪」
ルンパッパはエナジーボールを放った。
「竜の舞い！」
ラティオスは竜の舞いを使って攻撃力と素早さを上げながらエナジーボールを回避した。
「竜の波動！」
ラティオスはすかさず竜の波動で反撃した。
「イエイ♪守るだＹＯ♪」ルンパッパは再び守るで防御した。
「・・・なるほど。そうやって自分のリズムを作っていく訳か・・・悪いがそのリズム・・・崩させてもらう！ドラゴンクロー！」
ラティオスは守るを使い終えた瞬間にドラゴンクローで攻撃した！
「ま、守るだＹＯ！」
ルンパッパは再び守るを使おうとしたが守るは連続で使うと失敗しやすくなる技。守るは不発に終わりドラゴンクローがルンパッパに決まった！
「とどめだ！サイコキネシス！」
ラティオスはサイコキネシスでルンパッパを吹き飛ばした！吹き飛ばされたルンパッパは壁に激突！大きなダメージを受けたルンパッパは倒れた！「ルンパッパ選手戦闘不能！よって勝者ラティオス選手！」
「良し！」
これでバクフーン達チームブラストは予備戦をクリアして予選リーグ出場を決めた！
「やったぜラティオス！」
「兄さんかっこよかったわよ！」
「ありがとうラティアス。そういえばそろそろチーム業火の試合が

始まるんじゃないかバクフーン？」
「あっそうだな！良し、応援しに行くか！」
バクフーン達はゴウカザル達を応援しに行った。ここレジェンドシティにはいくつものスタジアムが用意されておりそれぞれのスタジアムで予備戦が行われているのだ。

すでにゴウカザル達の試合が始まっていた。バトルしているのはライチュウと相手チームのグライオンだ！
「間に合った～！おっライチュウが出てんのか！」
「相手は・・・地面飛行タイプのグライオンか・・・相性最悪だな。」
「な～に、ゴウカザルの仲間なんだ！相性なんて関係ないさ！頑張れよライチュウ！」
バクフーンの声援が聞こえたのかライチュウがバクフーン達を見た。
「あいつら・・・どうやら勝ったらしいな。」
「余所見してんなよ！ハサミギロチン！」
グライオンはライチュウにハサミギロチンで攻撃した。
「おっと！」
ライチュウは自分の尻尾を器用に使ってハサミギロチンを受け止めた！
「焦んなよ？バトルはこれからだろ？」
「余裕じゃねぇか・・・これでもくらえ！アイアンテール！」
グライオンはアイアンテールで攻撃した。
「雷パンチ！」
ライチュウはアイアンテールに雷パンチで対抗した。グライオンには電気タイプの技は効かないがアイアンテールを受け止めるには充分だ。
「こいつ！？地震！」
グライオンは地震を発動させようとした。
「そいつは勘弁だな！おらっ！」

ライチュウは絡ませていた尻尾を離した。そして尻尾を使って高くジャンプした。
「地面にいなければ地震なんて怖くねぇさ！」
「くっ！この・・・」
グライオンは再びライチュウに向かって攻撃しようとしたが、突然動きが鈍くなった。
「な、なんだ・・・急に・・・めまいが・・・」
「ようやく効いてきたな。どくどくが。」
「どくどくだと！？・・・一体いつの間に・・・」
「最初にあんたのハサミギロチンを受け止めただろ？その時にこっそり使っておいたのさ。」
「そうだった・・・のか・・・がはっ・・・」
毒が効いた為にグライオンは倒れた。
「グライオン選手戦闘不能！よって勝者ライチュウ選手！」
ライチュウが勝利した！これでチーム業火も予選リーグ進出だ！
「うわぁ・・・あいつの戦いこえ～（汗）」
「どくどくを発動させていたなんて・・・全然解らなかった。」
「よっ！お前らも当然予備戦通過したんだろ？」ゴウカザル達がやって来た。
「当然だろ♪見てたぜライチュウのバトル！正直な感想・・・ライチュウのバトルって怖いな（汗）」
「まあな。うちのチームの中で一番のくせ者だからな。」
「あっ！ちょうど今フライゴン達の試合が始まるよ！応援しに行く？」
「もち♪」
バクフーン達はゴウカザル達と共にフライゴン達の試合を応援しに行きました。バトルはフライゴンが出ていました。相手チームのポケモンは氷タイプのニューラだ！
「フライゴンが出てんのか！相手は・・・ニューラか・・・負けんなよフライゴン！」

バクフーンの声援が聞こえたのかフライゴンがバクフーン達を見た。
「バクフーンさん・・・勝ったみたいですね。なら、このバトル負けられないな！」
フライゴンは気合いを入れた。
「負けられないのは俺も同じなんだよ！切り裂く！」
ニューラは素早い動きでフライゴンに接近して切り裂く攻撃をした。
「はっ！」
フライゴンはニューラの切り裂く攻撃を受け止めた！
「なに！？」
「鋼の翼！」
フライゴンはニューラに鋼の翼を決めた！効果は抜群だ！
「ぐっ！？この・・・凍える風！」
ニューラはフライゴンに効果がある氷タイプの凍える風を放った！
「火炎放射！」
フライゴンは火炎放射で凍える風を打ち消した！
「俺のチームにいるグレイシアの方がもっと強力な凍える風を出せますよ！あなたの凍える風は俺には効きません！」

「だったらこいつはどうだ！冷凍パンチ！！」
ニューラは冷凍パンチを決める為に素早い動きでフライゴンに向かって行った。
「砂嵐！」
フライゴンは砂嵐を発生させて自分の姿をニューラに見えないようにした。
「ちっ！？何処だ！？」
「ドラゴンクロー！！」ニューラが見失っている間にフライゴンは空に上昇していた。そして一気にニューラめがけて急降下、勢いがついたドラゴンクローでニューラを攻撃した。ドラゴンクローはニューラに決まった！
「く・・・そ・・・」

ニューラは倒れた。フライゴンが勝利した事でフライゴン達チーム竜星は予選リーグ出場を決めた！
「やったなフライゴン！」
「はい！」
「そういえばフライゴンさん、前にあった時は自分の事を僕って言ってたのに今は俺って言ってますね？」
ラティアスが言う通りフライゴンの一人称が変わっていた。
「俺もいろいろとありまして（汗）何か変ですか？」
「いえ、別に。」
「バクフーンさん、そろそろメタグロスさんの試合が始まりますけどどうします？」
「もちろん応援しに行くさ♪」
バクフーン達はメタグロス達の応援をしに行った。
「クラブハンマー！」
「高速移動。」
すでにメタグロス達のバトルは始まっていた。バトルしているのはメタグロスと相手チームのシザリガーだ。
「もう始まってるよ！おっバトルしてんのはメタグロスじゃん！」
「相手はシザリガーか。何かメタグロスの奴おされてないか？」
ピカチュウの言う通り、先程からシザリガーの攻撃をメタグロスは高速移動で回避するだけなのだ。
「・・・データ解析率・・・８０％・・・」
「何を考えてるのか知らねぇが・・・避けるだけじゃあバトルには勝てないぜ！クラブハンマー！」シザリガーは連続でクラブハンマーで攻撃した。
「守る。」
メタグロスは守るでクラブハンマーを防御した。
「・・・データ解析率・・・１００％。あなたの行動パターンは解りました。このバトル・・・１００％の確率で私の勝ちです。」
メタグロスは勝利宣言した。メタグロスの勝利宣言にスタジアムの

観客達は驚いている。
「１００％でお前の勝ちだと・・・ふざけんな！！クラブハンマー！！」
シザリガーは怒りに任せてクラブハンマーで攻撃した。
「バレットパンチ。」
メタグロスはバレットパンチでクラブハンマーを弾いた！
「アームハンマー。」
すかさずメタグロスはシザリガーに効果があるアームハンマーで攻撃した。アームハンマーはシザリガーにクリーンヒットした！
「ぐっ！？」
「・・・破壊光線！」
メタグロスは至近距離で破壊光線をシザリガーに決めた！シザリガーは倒れた。
「・・・アームハンマーで決まる筈でしたが・・・まだデータが完璧じゃなかったようですね。私とした事が・・・」
メタグロスはアームハンマーで決まらなかった事がどうやら悔しいようだ。ともかく、メタグロス達チームメタルも予選リーグ出場を決めた。
「やったじゃんメタグロス！」
「・・・高速移動で回避しながら相手を分析するだけでは足りない・・・ならば鉄壁を使って相手の攻撃を一度受けてみるか・・・いや、もっと良い方法があるはずですね・・・ブツブツ・・・」バクフーンの呼びかけに気づいていないようだ。メタグロスはそのまま行ってしまった。
「・・・あれれ（汗）」
「悪いなバクフーン。あいつ一度考えだすと周りが見えなくなっちまう奴でよ（汗）」
ハガネールがバクフーンに言った。
「そうなんだ。」
「それじゃあな！今のあいつを一人にしとくといろいろ面倒なんで

な！」ハガネール達チームメタルはメタグロスのあとを追って行った。
「行っちゃった・・・あとはカイリュー達の試合か。」
「呼んだかいバクフーン君？」
いつの間にかカイリューがバクフーン達の所にいた。
「うお！？カイリュー！？いつの間にいたんだよ！？」
「ハガネール君が話てた時あたりかな。バクフーン君達も予選リーグ出場を決めたんだね？」
「って事はカイリューもか？」
「もちろんだよ。君ともう一度戦うまで負ける訳にはいかないからね。」
「でも随分早く試合が終わったんだね？」
「まぁちょっとだけ本気出して戦ったからね。」
「ふ～ん。まっでもこれで皆予備戦はクリアした訳だな！あとは予選リーグを勝ち抜いて一気に優勝してやるぜ！」
「ちなみにバクフーン、予選リーグを勝ち抜いてもまだ優勝出来る訳じゃないからね。」
「へっ？」
「予備戦を勝ち抜いた２５６チームは予選リーグでダブルバトルを三回やるんだ。それで残った３２チームで決勝リーグに出場出来るんだ。その決勝リーグで勝ち抜いたチームがやっと優勝出来るんだよ。あっちなみに予選リーグのダブルバトルで一回でも負けるとそこでアウトだからね。」
「マジですか（汗）」
「さらに言うと予選リーグが始まるのは明日からなんだよバクフーン君」
「なぬ！？」
「そりゃそうだよバクフーン。今日は予備戦で皆疲れてるんだもん。休みは必要だよ。」
「ちぇ～。せっかくバトル出来ると思ったのに～・・・」

バクフーンは少し残念そうにしている。ともかく、バクフーン達やゴウカザルらライバルチームも見事予選リーグ出場を決めた！果たしてバクフーン達は予選リーグを突破して決勝リーグに進めるのか？ポケモンリーグはまだ始まったばかりだ！

第五十一話開幕！ポケモンリーグ！（後書き）

第五十一話完成です！

第五十二話予選リーグを勝ち抜け！（前書き）

予備戦を勝ち抜いたバクフーン達。今日は予選リーグの初戦だ！

第五十二話予選リーグを勝ち抜け！

「はい、一、二、三・・・」
ただいまバクフーン達は朝の体操をしています。
「・・・眠い～・・・」でもバクフーンは凄く眠そうにしている。
「ほら！ちゃんと体操して身体ほぐさないと今日の予選リーグのバトルでちゃんと動けないよ！」
「解っちゃいるけどさぁ・・・ふぁ～・・・」
「グラエナを見てみなよ！しっかり体操してるよ？」
ラグラージに言われバクフーンはグラエナを見てみたら確かに体操している。だけど、何か様子がおかしい。
「・・・ぐ～・・・ぐ～・・・」
グラエナは寝ながら体操していた。
「こいつ寝ながら体操してるんですけど（汗）」
「器用だねぇ（汗）」
とまぁこんな感じで朝の体操を終えたバクフーン達は今日の予選リーグの組み合わせを確認する為にポケモンセンターに向かった。ポケモンセンターにはすでにチーム業火、竜星、メタル、龍のメンバーがいた。
「おっ！皆揃ってるな！」
「ようバクフーン！」
「おはようございますバクフーンさん！」
「おはようバクフーン君。」
「・・・ふん。」

相変わらずメタグロスはバクフーンに冷たい態度をとっている。
「ありゃ（汗）なぁメタグロス～もうちょい仲良くしようぜ？」
「結構です。」
そう言ってメタグロスはバクフーンから少し離れた。その時、ハピ

ナスがやって来た。
「皆さん！おはようございます！今日の予選リーグの組み合わせが決定いたしました！それではスクリーンに注目してください！」
ポケモンセンターにある大きなスクリーンに予選リーグの組み合わせが発表された。
「えっと・・・俺達チームブラストはＡスタジアムで午後からか！」
「俺らはＢスタジアムで午前からだな！」
「・・・Ｃスタジアムで午前ですか。」
「俺達チーム竜星はＥスタジアムで午前からですね！」
「僕達はＤスタジアムで午後からだ。」
また今回も皆バラバラの組み合わせになっていた。
「今回も皆バラバラか！となると、当たるとしたら決勝リーグだな！皆負けんなよ！」
「それはこっちのセリフだぜバクフーン！お前らこそ負けんじゃねぇぞ！」この後皆は予選リーグに備えて準備する為に選手村に戻って行った。
「ラグラージ、俺らの相手はどんな奴らなんだ？」
「ちょっと待ってね・・・今これで調べてみるから。」
ラグラージは部屋に用意されていたテレビ画面をタッチし始めた。
「・・・何してんの？」バクフーンはこの不思議な光景に質問せずにはいられなかったので質問した。
「このテレビはね、普通のテレビ機能だけじゃなくてパソコン機能もついてるんだよ！こうやって画面をタッチすれば・・・」
ラグラージが操作したらテレビ画面に対戦相手のデータが表示された。
「ほらね？」
「すっげ～！え、何これ！マジで凄いんですけど！」
バクフーンはもの凄く感動している。
「えっと・・・今日の対戦相手はチームポイズンだって。それで・・・チーム編成は皆同じ毒タイプのポケモンだね。」

「毒タイプか・・・弱点をつけるのは俺とラティアス、それと地面タイプの技を使えるラグラージにリザードン、それにバクフーンとグラエナだな・・・今日のバトルは誰が出る？」
ラティオスが皆に聞いた。
「俺やりたい～！」
「俺もやりたいっす～！」
バクフーンとグラエナがバトルしたいと言い始めた。
「確かに二人は地面タイプの技を使えるとは言ったが・・・ここはエスパータイプの俺とラティアスが出た方が良いと思うんだが・・・」
「絶対やりたい～！」
「絶対やりたいっす～！」
「・・・本当にバトルバカなんだから（汗）しょうがない、やらせてあげようよ。」
「やった～♪」
「やったっす～♪」
二人は喜んでいる。
コンコン。その時誰かがノックした。
「誰だろ？は～い！」
ラグラージがドアを開けた。ドアの向こうには・・・
「やっほ～♪」
「応援しにきたわよ～！」
「体調は万全か？」
リリとメガニウムとジュカインだった。
「母さん！それに父さんも！どうやってここに来たの？確か参加者以外は入れなかったはずだけど？」
リザードンはメガニウムとジュカインに質問した。
「俺やメガニウム、それにリリも昔のポケモンリーグで優勝した事があるからな。大会スタッフとも顔見知りだから、特別に入る事が出来たのさ」

「そういう事。」
「そうなんだ！」
「あっそうだ！皆に元気をつけてもらう為に私が特製の料理を作ってきたわよ！皆で食べて！」
リリが作ってきた料理がテーブルに並べられた。
「うお美味そう♪」
「私も作ってきたのよ！」メガニウムも実は料理を作って持ってきていた。
「こっちも美味しそうですね！」
「ちょっとメガニウム！私が作るからってちゃんと言ったじゃない！」
「あなたの料理は高カロリーな料理ばかりなのよ！やっぱりこういう時はヘルシーで身体に良い料理じゃないとね！」
「何言ってんのよ！こういう時だからこそ力がつくような料理が必要なんじゃないの！」
「なんですって！」
「なによ！」
リリとメガニウムは睨みあっている。
「ありゃりゃ（汗）何かこの展開前にもあったような・・・」
「「こうなったら料理でバトルよ！」」
バクフーンが思った通りリリとメガニウムが前にもやったお料理バトルをしようと言い始めた。
「やっぱりね（汗）」
「二人共止めないか！今日は料理対決する為に来たんじゃないだろ？」
ジュカインがリリとメガニウムを止めた。
「あっ！ねぇバクフーン、そろそろゴウカザル達の試合が始まる時間だよ！」
「おっマジか！応援しに行かないとな！」
「ちょっと坊や！私達が作った料理はどうするの？」

「そうよ！せっかく作ったのに！」
「え～っと～・・・あっそうだ！」
場所は変わってBスタジアム。まもなくゴウカザル達の試合が始まろうとしていた。
「もうすぐだな・・・ムシャムシャ・・・美味いよ母さん！」
バクフーン達はリリ達が作ってくれた料理を食べながら応援する事にしたようだ。
「何か・・・僕達普通の観客みたいになってるね（汗）」
「気にしたら負けだぜラグラージ♪」
その時スタジアム内にアナウンスが流れた。
「ただいまより、チーム業火とチームイーブイズの試合を始めます。両チーム、バトルフィールドへ。」
バトルフィールドにチーム業火とチームイーブイズが入った。
「あれ？あのチームイーブイズは確かドラゴンシティでやった大会で戦ったチームじゃないか？」そう。バクフーンが言う通り、ゴウカザル達の相手はドラゴンシティのバトル大会で戦った事があるチームイーブイズだった。
「両チーム、ダブルバトルの用意をして下さい」チームイーブイズからはリーフィアとブースターが出てきた。
「頼むぜ二人共！」
「任せておけ。」
「オイラ達が負ける訳ないだろ？」
チーム業火からはエルレイドとドサイドンが出てきた。
「エルレイドとドサイドンか！負けんなよ～！」その時またいつものようにハッサムが現れて審判をし始めた。
「これより！リーフィア・ブースターペア対エルレイド・ドサイドンペアのダブルバトルを始めます！それでは、試合開始！」
ゴウカザル達の予選リーグ最初の戦いが始まった。
「まずは下準備、日本晴れ！」
リーフィアは日本晴れを使った。すると、陽射しが強くなってきた。

「ブースター姉さん！よろしく♪」
「オッケー♪だいもんじ！」
ブースターはだいもんじを放った！日本晴れのおかげで威力が上がっている！
「守る！」
そのだいもんじをエルレイドは守るを使って防御した。
「今度はオイラの番だな！岩砕きから岩雪崩れ！」ドサイドンは自慢の怪力で地面を砕き、砕いた岩をリーフィア達に向かって放った！
「リーフブレード！」
リーフィアはリーフブレードを使って全ての岩を切り裂いた！
「ブースター姉さん！アシストお願い！」
「解ったわ！手助け！」
「ソーラービーム！」
ブースターの手助けでリーフィアに力を与えてからソーラービームをリーフィアは放った。ソーラービームは発射までに時間がかかるのだが、日本晴れで陽射しが強くなっているのでソーラービームはすぐに放たれた！
「リーフブレード！」
なんとエルレイドがソーラービームをリーフブレードで切り裂いてしまった！
「嘘！？私のソーラービームが斬られた！？」
「居相の名手と呼ばれる俺をあまく見てはいけないな？ドサイドン！準備は良いか？」
「準備ＯＫだぜエルレイド！離れてろ！岩石砲！！」ドサイドンはエルレイドがソーラービームを斬っている隙に先ほど岩砕きで砕いた岩を自分の手のひらの穴の中につめていた。ドサイドンの岩石砲はそのつめた岩を勢い良く発射する技なのだ。ドサイドンの岩石砲はブースターに向けて放たれた！
「穴を掘る！」
ブースターは穴を掘るで地面に潜って岩石砲を回避した。

「穴を掘るか・・・ドサイドン！」
「解ってるよ！エルレイド、オイラを踏み台にしてジャンプだ！」
「解った！」
エルレイドはドサイドンを踏み台にして高くジャンプした。
「地震！！」
ドサイドンは地震を発動させた！地震は穴を掘るを使って地面に潜っている相手にもダメージを与えられる。しかもブースターは炎タイプ、効果は抜群だ！地震の衝撃でブースターは地上に押し上げられた。ブースターは目を回している。
「ブースター選手、戦闘不能！」
これでリーフィアは一人でエルレイドとドサイドンを相手にしないといけなくなった。
「ブースター姉さんが・・・このっ！」
リーフィアはブースターを倒したドサイドンに向かって行った。
「サイコカッター！」
その時リーフィアの頭上からエルレイドが念力で作り出した刃を放った！リーフィアにサイコカッターが直撃した！リーフィアは倒れた。
「リーフィア選手戦闘不能！よって勝者エルレイド・ドサイドンペア！」ゴウカザル達チーム業火は初戦を突破した！
「やったじゃんゴウカザル！」
「ようバクフーン！見ててくれたんだな！」
「当たり前だろ！」
「皆！そろそろフライゴン達の試合が始まるよ！応援しに行くんでしょ？」
「もちろん！」
バクフーン達はゴウカザル達と共にフライゴン達の試合が行われるEスタジアムに向かった。
「うらぁぁぁ！！」
すでにフライゴン達の試合が始まっていた。バトルしているのはミ

ミロップとグレイシア。対戦相手はチームハイドロのカメックスとオーダイルの水ポケモンペアだ！今、ミミロップは持っている黒い鉄球をカメックスに投げつけたところだ。

「ハイドロポンプ！」

カメックスは甲羅のロケット砲からハイドロポンプを噴射して黒い鉄球を弾き飛ばした。

「もう始まってんじゃん！出てんのはミミロップとグレイシアか！頑張れよ～！」

バクフーン達がスタジアムに着いた。

「アクアテール！」

オーダイルがアクアテールでグレイシアを攻撃しようとした。

「私にそんな攻撃当たらないわよ・・・吹雪！」グレイシアは自分の周りに吹雪を発生させた。凄まじい吹雪のせいでオーダイルはグレイシアを見失ってしまった！

「何！？」

「まだこれで終わりじゃないのよね・・・」

気がついたらオーダイルはグレイシアが発生させた吹雪に囲まれていた。

「くそ！何処だ！ハイドロポンプ！」

オーダイルはハイドロポンプを放ったが、吹雪が一瞬でハイドロポンプを凍らせてしまった！

「そろそろ終わりにしてあげるわ・・・」

吹雪がオーダイルを包み込んだ。しばらくすると吹雪が晴れていく。吹雪が晴れた時、オーダイルの氷像が出来上がっていた。

「ミミロップ、仕上げは任せたわよ・・・」

「あんたに言われなくても解ってるわよ！うらぁぁぁ！！気合いパンチ！！！」

ミミロップの渾身の気合いパンチが凍りついたオーダイルに直撃した！オーダイルはスタジアムの壁まで吹き飛ばされた。壁に激突した瞬間氷が砕けた。凍らされていてなおかつ気合いパンチをまとも

に受けたオーダイルには相当なダメージが与えられた為、オーダイルは耐える事が出来ずに倒れた。
「オーダイル選手戦闘不能！」
これで二対一となってグレイシア達が圧倒的有利になった。
「残るはあんただけよ！くらいなさい！雷パンチ！！」
ミミロップはカメックスに効果がある雷パンチで攻撃した。
「高速スピン！」
カメックスは殻に込もって高速スピンする事で雷パンチを弾いた！
「くっ！」
「この高速スピンの防御は簡単に破る事は出来ないぞ！」
「破ってやろうじゃない！飛び跳ねる！」
ミミロップはカメックスの真上に向かって飛び跳ねた！
「ギガインパクト！！」ミミロップはカメックスの真上から最大パワーのギガインパクトを叩き込んだ！回転の中心にギガインパクトを叩き込んだので高速スピンを止める事が出来た。
「なっ！？」
「グレイシア！」
「解ってるわよミミロップ・・・シャドーボール！」
グレイシアはシャドーボールをカメックスに決めた！
「くっ・・・ハイドロポンプ！」
カメックスはシャドーボールを受けながらもハイドロポンプで反撃した。
「吹雪！」
グレイシアは吹雪を放ってハイドロポンプを凍結させた。
「ミミロップ、あなたは離れてなさい！」
グレイシアは先程のオーダイルと同じようにカメックスを吹雪で包み込もうとした。
「飛び跳ねる！」
近くにいたミミロップは飛び跳ねるで高く飛んで吹雪を回避した。
その間にカメックスは吹雪に包み込まれた。

「しまっ・・・」
しばらくして吹雪が晴れた。カメックスはオーダイルと同じく氷像になっていた。
「ミミロップ、後は任せたわよ。」
「スカイアッパー！！」ミミロップが凍りついたカメックスに最大パワーのスカイアッパーを決めた！スカイアッパーが直撃した事で氷が砕け、カメックスは吹き飛ばされた！カメックスは倒れた。
「カメックス選手戦闘不能！よって勝者ミミロップ・グレイシアペア！」チーム竜星も予選リーグ初戦を突破した！
「お疲れ様二人共！良いバトルだったよ！」
「あったりまえでしょフライゴン！私が簡単に負ける筈が無いでしょ！」
「私がじゃなくて私達がでしょミミロップ？」
「お～い！」
フライゴン達はバクフーンの呼びかけに気づいた。
「バクフーンさん！」
「見てたぜ！やったじゃんか！」
「ありがとうございます！でもまだ初戦ですから気は抜けませんけど。」
「まっそりゃそうだな！」
「バクフーン、メタグロス達の試合が始まってるけど、どうする？」
「もち応援しに行こうぜ！」
バクフーン達は今度はメタグロス達の応援しに向かいました。場所は変わってCスタジアム。メタグロス達チームメタルの試合はもう始まっていた。バトルしているのはハガネールとエアームド。相手はトロピウスとキレイハナだ！
「捨て身タックル！」
ハガネールはトロピウスに捨て身タックルで攻撃しようとした。
「おっと！」
トロピウスは空に飛んで回避した。

「エアームド行ったぞ！」
「待ってました！ドリルくちばし！」
エアームドはトロピウスに向かってドリルくちばしで攻撃した。
「吹き飛ばし！」
トロピウスは凄まじい突風を起こしてエアームドを吹き飛ばした。
「このっ！スピードスター！」
エアームドはバランスを立て直してスピードスターで反撃した。
「葉っぱカッター！」
トロピウスの葉っぱカッターとエアームドのスピードスターが激突して爆発が発生した。
「援護するぞエアームド！竜の息吹！」
ハガネールはトロピウスに向かって竜の息吹を放った。
「させないわよ！リーフストーム！」
キレイハナのリーフストームがハガネールの竜の息吹を打ち消した。
「日本晴れ！」
竜の息吹を打ち消したと同時にキレイハナは日本晴れを発動した。
陽射しが強くなってきた。
「アイアンテール！」
ハガネールはキレイハナにアイアンテールで攻撃した。
「今の私にそんな攻撃当たらないわよ！」
キレイハナは俊敏な動きでアイアンテールを回避した。
「なっ！？さっきまでとスピードが全然違う！？」
「ブレイブバード！！」空の方ではエアームドがブレイブバードでトロピウスを攻撃しようとしていた。
「よっと！」
トロピウスも先程までとは比べ物にならないスピードでブレイブバードを回避した。
「嘘っ！？」
「ソーラービーム！！」トロピウスはソーラービームをエアームドに決めた！

「くっ!?にゃろっ!エアスラッシュ!」

鋼と飛行の両タイプを持っているエアームドには草タイプの技ソーラービームはあまり効かない為ダメージはあまりなかった。すかさずエアームドはエアスラッシュで反撃した。だが、トロピウスはあっさりそれを回避してしまった。

「どうなってんだよ?」

「メタグロスが言ってたが・・・特性のようりょくそってやつだな。」

「ようりょくそ?てかメタグロスそんな事言ってたか?」

「・・・聞いてなかったのかよ(汗)良いか?ようりょくそはな、陽射しが強い時だと素早さが二倍になるんだ。」

「そういう事よ!ソーラービーム!」

いつの間にかキレイハナが背後にいた。ソーラービームをハガネールに決めた!

「ぐっ・・・アイアンテール!!」

ハガネールはアイアンテールで反撃したが、やはり素早くなったキレイハナには当たらなかった。「やっと着いた~!おっハガネールとエアームドがバトルしてんのか!」その時、ようやくバクフーン達が到着した。

「何かハガネール達苦戦してない?」

「ハガネール達なら大丈夫さ!負けんなよ~!」バクフーンの声援が聞こえたのか、ハガネール達がバクフーン達の方を見た。

「あいつら応援しに来てくれたのか。」

「応援されたんなら、勝たないとな!だろ?ハガネール。」

「当然!行くぞエアームド!砂嵐!」

ハガネールは砂嵐を発生させた!強力な砂嵐は強い陽射しを遮断した。そのせいでトロピウス達の特性ようりょくそが発動しなくなった。

「前が見えない・・・あいつらは何処だ?」

更にトロピウス達は強い砂嵐のせいでハガネール達を見失ってしまっていた。
「一気に決めるぞ！捨て身タックル！！」
「ゴッドバード！！」
ハガネールはキレイハナに捨て身タックルを、エアームドはトロピウスにゴッドバードを決めた！トロピウスとキレイハナは倒れた。
「トロピウス選手、キレイハナ選手戦闘不能！よって勝者、ハガネール・エアームドペア！」
メタグロス達チームメタルも初戦を突破した！
「やったじゃんハガネール！エアームド！」
「まぁ当然だな♪」
「あんま調子に乗るなよエアームド？」
「・・・二人共、次のバトルに備えてミーティングです。そんな連中と喋ってないで行きますよ」メタグロスがやって来てハガネールとエアームドに言った。
「解ったよメタグロス・・・悪いな皆、俺達行くから！」
「決勝で会おうぜ♪」
ハガネール達はメタグロスと一緒に行ってしまった。
「行っちゃったよ・・・何かメタグロスの奴、仲間が勝ったのにあんま喜んでなかったな？」
疑問そうにゴウカザルが言った。
「メタグロスっていかにも完璧主義者って感じだから、ハガネール達が苦戦したのが許せなかったってところじゃないかな？」
ゴウカザルの疑問にラグラージが答えた。
「そんな事より、俺達も準備した方が良いんじゃないか？もうそろそろ俺達の出番だろ？」
リザードンがスタジアムに用意されている時計を見ながら言った。
「やっと俺らの出番か！よっしゃ！暴れてやるぜ♪」
「頑張るっす～♪」
バクフーンとグラエナは気合い充分だ！

「初戦はお前らがバトルすんのか！俺らも応援すっから頑張れよ！」
「頑張って下さいバクフーンさん！」
「おう♪」
バクフーン達はゴウカザル達と別れて、自分達の試合が行われるＡスタジアムにやって来た。
「バクフーン、グラエナ、負けたりしないでよ？」
「心配すんなってラグラージ！グラエナ！楽しくやろうぜ♪」
「もちろんっす～♪」
バクフーンとグラエナは意気揚々とバトルフィールドに入った。バクフーン達の相手はチームポイズンのマルノームとドラピオンだ！
「あれ？」
「どうしたんすかバクフーンのアニキ？」
「あのチームのメンバー見てみろよ。」
バクフーンに言われ、グラエナはチームポイズンのメンバーを良く見てみた。
「あっ！船に乗ってた時にバトルを申し込んだ二人がいるっすね！」
そう。チームポイズンのメンバーの中に船に乗ってた時にバトルを申し込んだハブネークとアーボックがいたのだ。
「うちのアーボックとハブネークが世話になったみたいだな？今回はチームリーダーである俺と相棒のマルノームが相手するぜ！」
ドラピオンがバクフーン達に言った。
「これより、チームポイズンのドラピオン・マルノームペア対チームブラストのバクフーン・グラエナペアのダブルバトルを開始します！試合開始！」
バクフーン達のバトルが始まった。
「行くぜグラエナ！」
「了解っす！」
バクフーンとグラエナはドラピオン達に向かって行った。
「火炎放射！」
「シャドーボールっす！」バクフーンの火炎放射とグラエナのシャ

ドーボールは合わさって炎のシャドーボールとなってドラピオンに放たれた！
「マルノーム！」
「任せといて！」
マルノームがドラピオンの前に立って炎のシャドーボールを自ら受けた。だが、マルノームの身体は伸縮自在で炎のシャドーボールを跳ね返してしまった！
「げっ！？俺らのコンビネーション攻撃が！？」
「今度はこっちの番だ！破壊光線！！」
「電撃波！！」
ドラピオンは破壊光線、マルノームは電撃波を放った！
「電光石火！」
「穴を掘るっす！」
バクフーンは電光石火で、グラエナは穴を掘るで破壊光線と電撃波を回避した。
「このまま行くぜ！火炎車！！」
バクフーンは電光石火と火炎車のコンビネーションでドラピオンの背後から攻撃しようとした。
「あまい！」
何と、ドラピオンの頭が１８０度回転した！そして両腕でバクフーンを捕まえた！
「ぐっ！？お、お前の頭一体どうなってんだよ！？」
「俺の頭より、自分の事を気にするんだな？」
ドラピオンは両腕にある鋭い爪を力いっぱいバクフーンに食い込ませた。ドラピオンの爪は自動車をスクラップにする程の破壊力を持っていてバクフーンには凄まじい激痛が走った！
「ぐあぁぁぁ！？」
「止めるっす！
その時グラエナが穴から出てきてドラピオンに体当たりした。その衝撃でバクフーンはドラピオンの爪から解放された。

「大丈夫っすかバクフーンのアニキ？」
「ハァ・・・ハァ・・・な、何とかな・・・助かったぜグラエナ・・・あいつ、とんでもない力だぜ・・・」
「奴を休ませるな！行くぞマルノーム！」
「了解リーダー！ヘドロ爆弾！」
「高速移動！」
マルノームはヘドロ爆弾でバクフーンを攻撃した。そしてドラピオンは高速移動でバクフーン達に向かって来た。
「バクフーンのアニキを集中攻撃する気っすね！そうはさせないっすよ～！シャドーボール連発っす！」
グラエナはシャドーボールを連発で放ってヘドロ爆弾にぶつけた。二つの技はぶつかり合い爆発した。その爆発で発生した爆煙の中をドラピオンが突っ切ってバクフーンに向かって行った！
「もらった！クロスポイズン！」
「やべっ！？」
「不意打ちっす！」
バクフーンにドラピオンのクロスポイズンが決まりそうになった時、グラエナが不意打ちでドラピオンを攻撃。その衝撃でクロスポイズンは軌道がずれてバクフーンに当たらなかった。
「更にアイアンテールっす！」
グラエナはアイアンテールをドラピオンに決め、マルノームの所までドラピオンを吹っ飛ばした！
「大丈夫っすか？」
「助かったぜグラエナ！サンキュー！」
「ダストシュート！」
マルノームがダストシュートを放ってきた！
「うお！？」
バクフーンとグラエナはこれをギリギリで避ける事が出来た。
「危ねぇ～！？やっぱポケモンリーグに出るだけあって強いなぁ！面白くなってきたぜ♪」

バクフーンはピンチの筈なのだが、凄く楽しそうだ。
「行くぜグラエナ！反撃開始だ！」
「了解っす！」
バクフーンとグラエナは再びドラピオン達に向かって行った。
「火炎放射！」
バクフーンはドラピオンに火炎放射を放った。
「マルノーム！」
「ＯＫ！」
またマルノームがドラピオンの前に出て壁になろうとした。
「させないっすよ～！噛みつく！」
グラエナはマルノームのヒゲに噛みついた。そして、全体重をかけてマルノームを投げ飛ばした！壁が無くなったドラピオンに火炎放射が直撃した！
「くっ！？」
「まだまだ行くぜ！フレアドライブ！！」
バクフーンは更にフレアドライブをドラピオンに決めた！ドラピオンは吹き飛ばされた。
「こいつ！電撃波！」
マルノームはバクフーンに向かって電撃波を放とうとした。
「あくびっす！」
グラエナはあくびを発動した。グラエナの口から泡のようなものが出現してマルノームに向かって行った。マルノームの目の前で泡が破裂した。その瞬間マルノームの目がとろ～んとしてきた。
「何か・・・急に・・・眠く・・・ぐ～・・・」マルノームは眠ってしまった。
「あくび成功っす・・・ふぁ～・・・あっいけない！俺まで眠っちゃ意味無いっす！」
マルノームが眠った事でバクフーン達の方が有利になった。
「ナイスグラエナ！このまま一気に・・・」
突然バクフーンがよろけた。

「どうしたんすかバクフーンのアニキ？」
「・・・急に・・・めまいが・・・何だ・・・これ・・・？」
「ようやく俺の毒が効いてきたか。」
「毒・・・だって・・・一体いつ・・・？」
「俺は爪の先から毒を出す事が出来るのさ。」
そう言ってドラピオンは自分の爪をバクフーン達に見せつけた。
「爪・・・あの時か・・・」
その時、毒がかなり効いてきたのかバクフーンの身体が震えてきた。
立ってるのも辛そうだ。
「バクフーンのアニキ・・・俺が頑張るっす！」グラエナは一気に勝負を決めようとドラピオンに向かって行った！
「アイアンテールっす！」グラエナは最大パワーのアイアンテールで攻撃した。だが、アイアンテールはドラピオンに受け止められてしまった。
「氷の牙！」
ドラピオンは氷の牙でグラエナに噛みついた。
「ぐっ！？」
その時、氷の牙で噛みつかれた所からグラエナの身体がどんどん凍りついていく！
「か、身体が・・・」
「氷の牙の追加効果さ。奴を倒すまで、お前には凍っていてもらう！」
次の瞬間、氷は一気にグラエナを包み込んだ。グラエナは凍り漬けにされてしまった。
「グラエナ・・・」
「この勝負もらった！くらえクロスポイズン！」ドラピオンのクロスポイズンがバクフーンに襲いかかる！
「くっ・・・電光石火！」バクフーンは電光石火でなんとか回避した。
「毒なんかに負けてたまるか！」

バクフーンの身体から真っ赤なオーラが出現した。特性の猛火が発動したのだ！
「火炎放射！」
猛火でパワーアップした火炎放射がドラピオンに直撃した！
「くっ！？毒が効いてる筈なのに・・・さっきよりも動きが良くなっている！？」
「ピンチになればなるほど俺は燃えるタイプなんだよ！オーバーヒート！！」
バクフーンはオーバーヒートを放った！
「破壊光線！！」
ドラピオンは破壊光線でオーバーヒートに対抗した。二つの技はぶつかり合った！
「負けねぇ！最大パワー！！」
バクフーンはオーバーヒートの火力を最大パワーにした。どんどん破壊光線をおしていく！
「うわぁぁぁ！？」
ドラピオンにオーバーヒートが直撃した！ドラピオンは吹き飛ばされた。だが、ドラピオンは倒れずに耐えた！
「嘘っ！？耐えた！？」
「ハァ・・・ハァ・・・そう簡単に倒れる訳にはいかないんでな・・・」
「倒れてもらわないと困るんすよね～！アイアンテールっす！」
凍り漬けにされていた筈のグラエナがいつの間にか氷から脱出していて、ドラピオンにアイアンテールを決めた！オーバーヒートによるダメージがあった為にアイアンテールを受けたドラピオンは耐えきれずに倒れた。
「ふう～・・・やっと倒れてくれたっす～！」
「グラエナ！お前どうやってあの氷から？」
「バクフーンのアニキのおかげっすよ！アニキのオーバーヒートの炎が俺の氷を溶かしてくれたんすよ！」

「そうだったのか。」
「ところでアニキ・・・あそこで寝てる奴はどうします？」
「・・・とりあえず・・・ブラストバーン！」
バクフーンのブラストバーンが眠っているマルノームにクリーンヒットした。それでも目を覚まさないマルノーム。どうやら気絶したようだ。
「マルノーム選手戦闘不能！よって勝者、バクフーン・グラエナペア！」バクフーン達も初戦を突破した！
「勝った～・・・あっ・・・」
バクフーンが倒れてしまった！
「ちょっ！？バクフーンのアニキ！？」
「あ～・・・やばい・・・世界がぐるぐる回ってる～・・・」
ドラピオンの毒がかなり効いてきてるようだ。
バクフーンは目を回している。
「あら～だいぶ無理してたみたいだね。」
「なに冷静に言ってるんすかラグラージのアニキ！？バクフーンのアニキを早くポケモンセンターに連れていかないと！」
「その必要はないよ。ここにバクフーンをなんとかしてくれるのがいるから。リザードン。」
「あいよ。えっとまずはっと・・・あった！バクフーン、ほれ！」
リザードンは自分のリュックからモモンの実を取り出してバクフーンに食べさせた。
「これで毒は消えたっと・・・あとはこれだな！ほれバクフーン！」
今度はリザードンはオレンの実とオボンの実をあるだけバクフーンにあげた。
「美味い♪」
バクフーンは物凄い勢いでオボンの実とオレンの実を食べた。
「うおぉぉ！ふっか～つ♪」
バクフーンは完全復活した。
「・・・マジっすか（汗）」

「こういう奴なんだよバクフーンは。」
「君達も勝ったみたいだね？バクフーン君。」
バクフーン達の所にカイリュー達がやってきた。「カイリューじゃん！君達もって事はお前らも勝ったんだな？」
「もちろん。言ったでしょ？君達と戦うまで負ける訳にはいかないって」
「そうだったな。」
「これで皆初戦を突破したって事だね？」
「そうだな！よ～し！この調子で予選リーグを勝ち抜くぞ！」
バクフーン達は見事初戦を突破した。この調子で決勝リーグまで勝ち進める事は出来るのか？彼らの戦いはまだまだ続く！

第五十二話予選リーグを勝ち抜け！（後書き）

第五十二話完成です！

第五十三話予選リーグラストバトル！（前書き）

見事予選リーグ初戦を勝ち抜いたバクフーン達！そのあとの二日目の予選リーグ第二回戦も見事に勝ち抜いた！あとは今日の予選リーグ最終試合のみ！これに勝てば決勝リーグに進出出来る！さぞかし気合いが入っているだろうと思われたバクフーンだが・・・

第五十三話予選リーグラストバトル！

「・・・ぐ～・・・ぐ～・・・ムニャムニャ・・・」
バクフーンは幸せそうな顔をして眠っていた（汗）
「バクフーン！起きてよバクフーン！」
「ムニャムニャ・・・もう食べられましぇん・・・♪」
「食い物食ってる夢を見てるんかい（汗）」
「ラグラージ、もうしばらく寝かせてやりな？どうせ俺らの試合は午後からだろ？」
リザードンがラグラージに言った。
「それに、今日試合に出るのは俺とお前なんだしさ。」
「そりゃそうだけど・・・でも良いのかな？ゴウカザル達の応援しに行かなくて？」
「別に俺らの応援が無くてもあいつらなら決勝リーグに勝ち進むさ！それよりラグラージ！試合前にウォーミングアップしに行こうぜ！」
「解ったよ。」
ラグラージとリザードンはウォーミングアップしに行きました。
「私達はどうする兄さん？」
「試合までまだ時間があるな・・・時間になるまで散歩でもするか？」
「あっ行く行く！」
「ラティアスちゃんが行くなら俺も♪」
その時ピカチュウにピチューの必殺耳を引っ張るが炸裂した。
「はいはい。お兄ちゃんはここで大人しくアタシとグラエナ兄ちゃんと一緒にお留守番しましょうねぇ。」
「イタタタ！？」
「ピチュー、ピカチュウを良く見張っててくれよ？」
「任せてラティオス兄ちゃん♪行ってらっしゃい♪」

「行ってらっしゃいっす～♪」
「何故俺はダメなんだ～!?」
ラティオスはラティアスと一緒に試合が始まるまで散歩に出掛ける事にした。
「兄さん、何処に行く?」
「そうだなぁ・・・おっここはどうだ?」
ラティオスは持っていたガイドブックをラティアスに見せた。
「へぇ!この施設には歴代チャンピオンチームの写真が飾ってあるのね!しかも今大会の優勝トロフィーもあるんだ!行ってみましょうよ兄さん!」
「良し、行くか!」
ラティオス達は歴代チャンピオンチームの写真と大会優勝トロフィーが飾ってある施設に向かいました。
「いろんな人達の写真があるわねぇ・・・皆チャンピオンチームなんだ!」
「そうらしいな。」
「あっ見て兄さん!リリさん達よ!」
ラティアスが指差す先には確かにリリが写っている写真があった。
リリの横にはメガニウムにジュカインもいる。
「リリさん達って同じチームだったんだね!」
「みたいだな。じゃあ他に写っているのは昔の仲間って事か。」
リリ達三人以外に写っているのがエンペルト、ラグラージ、バシャーモの三人だった。
「皆凄く良い笑顔をしてるわね!」
「そうだな。」
その時ラティオスは誰かの気配を感じた。
「ん?」
「どうしたの兄さん?」
「誰かいるみたいだな・・・数は二人ってところか。大会優勝トロフィーがある所だな。」

「こんな朝早くに私達以外に来てる人達がいたのね。兄さん！私もトロフィー見たい！」
「じゃあ行くか。」
ラティオスとラティアスは大会優勝トロフィーが飾ってある場所に向かった。近くまで来ると誰かが話てるのが聞こえてきた。
「兄貴！早いとこトロフィー持っていっちゃいましょうよ！」
「焦るなドンカラス！まずは辺りに誰もいないか確認してからだ。」
話てるのはヘルガーとドンカラスだった。
「あれは・・・確か前にグラエナと一緒にいた連中だったな？」
「何かトロフィーを持っていこうとか言ってるね？」
「また変な事を考えているみたいだな・・・」
「誰だ！？」
ヘルガーがラティオス達に気がついた。
「お前らは！？」
「トロフィーを盗もうとしているようだが・・・止めておけ。」
「けっ！このトロフィーを売ったら大金が入るんだ！止める訳にはいかないな！」
「あなた達もグラエナさんみたいに真面目になれば良いのに・・・」
「俺と兄貴はワルの道を突き進むって決めたんだ！今さらそんな事出来るか！」
「そういうこった！悪いがトロフィーは貰うぜ！」
ヘルガーとドンカラスはトロフィーを盗ろうとした。
「冷凍ビーム！」
ラティオスは冷凍ビームを放った！冷凍ビームはヘルガーとドンカラスに直撃して二人を凍り漬けにした。
「まったく・・・困った連中だな。」
「兄さん、この人達どうする？」
「警察に届けるさ。急いで届けよう。もうすぐ試合の時間だからな。」
ラティオス達は凍り漬けにしたヘルガー達を警察に届けた。そして

急いでバクフーン達の所に戻っていった。
「待たせたな！」
「遅くなりました！」
「やっと来た！今まで何してたの？」
「ちょっといろいろあってな。遅れた訳は行きながら話す。」
バクフーン達は試合が行われるAスタジアムに向かいながらラティオス達は今までの事を説明した。
「またあいつらですかい（汗）懲りないねぇ。」
「まぁでもこれに懲りて反省してくれれば良いんだが・・・」
「あっバクフーンさん！あれ見てください！」
ラティアスが指差す先にはスタジアムの出入口に設置してあるスクリーンがあった。決勝リーグ進出を決めたチームの名前が表示されている。そこにはゴウカザル達チーム業火、フライゴン達チーム竜星、メタグロス達チームメタル、カイリュー達チーム龍の名前があった。
「おっ！皆決勝リーグ進出を決めたんだな！」
「こりゃ負ける訳にはいかないな！気合い入れて行こうぜラグラージ！」
「うん！」
試合に出るリザードンとラグラージは気合いを入れた。そしてバクフーン達はスタジアムの中へ。
「おっ来た来た！坊や達～！頑張れ～！」
観客席からリリやメガニウムやジュカイン、そして決勝リーグ進出を決めたゴウカザル達が応援が聞こえた。
「皆！」
「俺達は決勝リーグ進出を決めたんだ！お前らも決勝リーグまであがって来いよ！」
「おうよ！リザードン、ラグラージ、頼むぜ！」
「おう！」
リザードンとラグラージはバトルフィールドに入った。リザードン

達の相手は・・・
「うおぉぉぉ！俺の筋肉が唸りをあげる！勝利を掴めと叫んでいるぜぇ！」
「少し黙れよカイリキー（汗）一緒にいる俺が恥ずかしくなるだろ（汗）」
チームバスターズのカイリキーとレントラーだ。
「恥ずかしがるとは筋トレが足りないようだなレントラー！試合が終わったら俺と一緒に筋トレだ！」
「いや、筋トレ関係ないだろ（汗）てか、筋肉筋肉うるさいんだよこの筋肉バカ！だいたい筋肉の何処が良いんだよ？お前は筋肉を鍛える事ばかり考えていたから彼女に逃げられたんだろ？筋肉が役に立ったか？」
「貴様！？俺の事はいくらでもバカにしても構わないが、筋肉の事はバカにするなぁ！！」
「えぇ（汗）筋肉とお前は別扱いなのか（汗）」
「・・・随分キャラが濃い奴だな（汗）」
「・・・だね（汗）」
その時審判のハッサムがいつも通り突然現れた。
「これより、チームバスターズ、カイリキー・レントラーペア対チームブラスト、リザードン・ラグラージペアの試合を開始致します！それでは、試合開始！」
リザードン達のバトルが始まった。
「カイリキー！気合い入れてやるぞ！」
「解っているさ！見ろこの筋肉を！ビルドアップ！！」
カイリキーはビルドアップで攻撃力と防御力の両方を上げた。
「筋肉！筋肉！筋肉が唸る！唸りをあげる！」
「お～いそこの筋肉止まりなさ～い（汗）暑苦しいので止まりなさ～い（汗）筋肉見せるのはいいからバトルに集中してくれよ（汗）」
「・・・何か調子狂うなぁ（汗）」
「意外にそれが狙いの作戦だったりして？」

「まっなんにしても俺達は俺達のバトルをするだけさ！ラグラージ！あれよろしく！」
「ＯＫ！地震！」
ラグラージは地震を発動して全体攻撃をした。
リザードンは巻き添えにならないように空に上昇して地震を回避した。
「うおぉぉ！筋肉パワー全開！！」
カイリキーはレントラーを抱えて空高くジャンプして地震を回避した！
「嘘っ！？飛んだ！？」
「行けレントラー！！」カイリキーはレントラーをリザードンめがけて投げた。
「ちょっ！？無茶すんな～！？」
「うわっこっち来た！？」リザードンとレントラーはぶつかり合った！二人はそのまま地面に落下した。
「イテテ・・・あの筋肉バカ・・・あとで痛い目にあわせてやる！」
「味方投げるとか・・・予想外だ（汗）」
「ハイドロポンプ！」
ラグラージはリザードンの上に乗っかっているレントラーに向かってハイドロポンプを放った！
「電光石火！」
レントラーは電光石火でハイドロポンプを回避した。
「大丈夫リザードン？」
「あぁなんとか。」
「この筋肉バカ！噛みついたる！」
レントラーはカイリキーに怒りの噛みつく攻撃をした。
「何を怒っている？見事に決まったじゃないか！レントラーボンバー！」
「人を道具にすな（怒）」仲間割れを起こし始めたレントラーとカイリキー。

「・・・何か仲間割れ始めちゃったね（汗）」
「こんなチームワークで良くポケモンリーグに出れたな？・・・まぁなんにしても、倒すなら今がチャンスだな！ラグラージ！練習したあの技行くぞ！」
「ＯＫ！行くよ、ハイドロポンプ！」
「オーバーヒート！」
リザードンはオーバーヒート、ラグラージはハイドロポンプを放った。二つの相反する技は途中で交わり、凄まじい攻撃となってカイリキーとレントラーに直撃した！
「・・・ふ、不覚・・・俺の・・・筋肉が～・・・」
「・・・俺・・・なんもしてねぇ（泣）」
レントラーとカイリキーは倒れた。
「カイリキー選手、レントラー選手戦闘不能！よって勝者、リザードン・ラグラージペア！」
リザードン達が勝った事でチームブラストも決勝リーグ進出を決めた！
「よっしゃ！決まったなラグラージ！炎と水のフュージョン！」
「そうだね！」
「やったじゃんリザードン！ラグラージ！かっこよかったぜ、今の合体攻撃！」
「サンキューバクフーン！」
「これで私達も決勝リーグに進出なんですね！」
「そうだな！よ～し、この調子で明日の決勝リーグも勝つぞ～♪」
「あっちなみにバクフーン明日大会休みだよ？」
「なぬ！？」
「明日は一日休んで今までの疲れを癒して、そして明後日に決勝リーグを始めるんだよ。」
「マジですか～！せっかく盛り上がってきたのに～・・・」
バクフーン達も決勝リーグ進出を決めた！果たして彼らは決勝リーグを勝ち進んで優勝する事が出来るのか？彼らの戦いはまだまだ続

〈!

第五十三話予選リーグラストバトル！（後書き）

第五十三話完成です！
今回のカイリキーのキャラは、僕の友達がやっているゲームに登場するキャラクターをイメージして書いてみました。
そしたら思ってた以上に濃いキャラになりました（＾―＾；）

第五十四話休日の過ごし方。（前書き）

見事決勝リーグに勝ち上がったバクフーン達！
今日一日ポケモンリーグはお休みで、皆今までの疲れを癒したりトレーニングをしたりと好きなように過ごしていた。
バクフーン達はどんな過ごしかたをしているのかな？

第五十四話休日の過ごし方。

「ふぁ～・・・今何時だ・・・あっまだ朝の８時だった・・・（汗）」

今日は一日大会が休みなのだが、何故かバクフーンは早く目が覚めてしまった。眠い目を擦りながらバクフーンは辺りを見回す。

「・・・もうリザードンはいつもの空中散歩か・・・あいつ相変わらず起きるの早いなぁ・・・」リザードンだけが部屋にいなかった。いつもの日課の空中散歩に行っているようだ。

「・・・とりあえず外に出るか・・・ふぁ～・・・」

バクフーンはまだ寝ているラグラージ達を起こさないように静かに部屋を出て外に向かった。

「う～ん・・・たまには朝早く起きるのも悪くないかもな！天気も良いし空気も美味いし♪・・・でも正直、朝早く起きてもやる事ないんだよな～（汗）どうすっか～・・・ん？あそこにいるのもしかして・・・」

「こらフライゴン！早く来なさいよ！まだ行く所あるんだからね！」

「ちょっと待ってよミミロップ！？まだ行く所あるの！？もう散々買い物したから良いでしょう？」

「ダメよ！昼になると人が混むからこの朝早い時間のうちにショッピング済ませないと買いたい物が買えないんだから！」ミミロップとフライゴンがいた。どうやらフライゴンはミミロップの買い物に付き合わされているようだ。

両手にはこれ以上持ちきれない位に買い物した荷物が。さらにはフライゴンの長い首にも荷物が掛けられていた。

「よっフライゴン！」

「あっバクフーンさん！おはようございます！」

「おはよう！・・・何か大変そうだな（汗）」

「そうなんですよ（汗）買いたい物があるからってミミロップが言

うから付き合ったらこの有り様で（汗）」
「そういえばレジェンドシティには買い物ができる所や映画何かの娯楽施設がたくさんあるんだったっけ？」
「えぇ。この調子だとレジェンドシティ全体を連れ回されそうですよ（汗）」
「フライゴン！早く来なさいよもう！」
「うわっ！？」
ミミロップはフライゴンの尻尾を掴んで凄い力でフライゴンを引っ張った。
「ちょっ！？ミミロップ！？あっバクフーンさん！明日はお互い頑張りましょう！・・・ミミロップ自分で歩くから尻尾を離してよ！？」
フライゴンはミミロップに引きずられて行った。
「あらら（汗）大変だなぁフライゴンは・・・」
そのあとバクフーンはまだ朝早いから皆が起きる時間になるまでしばらく散歩する事にしました。

「おっ！あそこにいんのはハガネールじゃんか！お～い！」
バクフーンはチームメタルのメンバーハガネールに声をかけた。
「ん？なんだバクフーンじゃねぇか！散歩か？」
「まぁそんなとこ！ハガネールはなにしてんの？」
「俺もお前と似たようなもんだな。」
バクフーンとハガネールが話てる時、空からエアームドがやって来た。
「ハガネール！メタグロスがミーティングやるから来いってさ！」
「はぁ・・・またかよ・・・」
「しょうがないさぁ。何せメタグロスだから（汗）」
「なぁハガネール。メタグロスっていつもミーティングやんのか？」

「あぁ。これでもかって言う位やる（汗）たまには何かして遊んで楽しみたいんだが・・・あいつ、勝ちたい勝負がある時はいつもこうなんだよな～。」
「ふ～ん。」
「って行かないと奴が怒るな（汗）じゃあなバクフーン！また明日会おうぜ！」
ハガネールとエアームドはメタグロスの所に向かった。
「ミーティングねぇ・・・俺らそんなのした事無いなぁ。てか、もししたとしても俺は絶対寝てるな（笑）さて、散歩の続きでもすっかな！」
バクフーンは再び歩き始めた。

「・・・そういえばエムリットはレジェンドシティのどっかにいるんだったな？でも何処にいるんだ？今までレジェンドシティ内は見て回って来たけど、あいつが住んでそうな湖は無かったし・・・」
「呼んだ？」
いきなり目の前にエムリットが現れた！
「うおっ！？ビックリしたぁ！？な、何でエムリットがこんな所にいんだよ！？」
「散歩。」
「散歩って・・・良いのかよ神って呼ばれてるポケモンが散歩とかしてて（汗）」
「大丈夫よ。だって本体の私はちゃんと湖にいるから。」
「はい？一体どういう事だ？」
「私に触ってみたら解るわよ。ほら。」
エムリットがバクフーンに手を差し延べた。
バクフーンが手を握ろうとした。だがなんと、エムリットの手をすり抜けてしまった！

「えぇ！？な、何で！？」
「驚いた？ここにいる私は念力で作り出した影ってところかな。私はそう簡単に湖から離れる訳にはいかないからね。こうやって影を作って散歩してるって訳。お解り？」
「・・・う～ん」
バクフーンはどうやら理解出来てないみたいだ。
「・・・まっ良いわ。」
「あっ！今お前俺の事バカだって思っただろ！」
「バカじゃん。」
「バカって言う奴がバカなんだよ！」
「子供っぽいわよ？まぁ、あんたのそういうところがアグノムは好きみたいだけど・・・私はそろそろ帰るわよ。あまり長い時間念力使うのも疲れるから。じゃあね。大会、頑張りなさいよ。」
そう言うとエムリットは光の粒子となって消えた。
「消えたよ・・・影か・・・あ～難しい事解んねぇよ～！・・・もう良いや！考えるの止めた！」バクフーンはそう言って散歩の続きを始めた。

「・・・もうそろそろ皆起きたかなぁ？さすがに散歩にも飽きてきたんだよなぁ（汗）・・・おっ！何かスッゲ～良い香りが♪」
バクフーンは良い香りがする方に向かって走り出した。
「あれか♪美味そうな良い匂いだぁ♪」
バクフーンの目の前にはクレープ屋さんがあった。早速食べようと思い、バクフーンは自分の財布を取りだそうとする。だが・・・
「あっ（汗）財布・・・部屋に置いてきちまった（汗）」
バクフーンは財布を持ってきてなかった。
「何してんだバクフーン？」
バクフーンが振り向くとリザードンがいた。

「リザードン♪丁度良いところに♪」
「へっ？」
しばらくして・・・
「美味いなぁこのモモンの実を使ってクレープ♪リザードン！ゴチになります♪」
しっかりバクフーンはリザードンにクレープを買わせていた。
「はぁ～・・・何で毎回お前におごらないといけないんだよ？・・・まぁ俺もクレープ食べたかったから良いけどさ。」
リザードンはクラボの実を使ったちょっと辛味があるクレープを食べていた。
「でも珍しいな？バクフーンがこんな朝早く起きていてなおかつ散歩してるなんて。」
「何か目が覚めちゃってさ。ジッとしてるのも暇だから散歩してたんだ」
「そっか・・・ん？バクフーン、あそこにいるのゴウカザル達じゃないか？」
リザードンが指差す先を見てみると、確かにゴウカザル達チーム業火がいた。
「本当だ！ちょっと行ってみようぜ！」
バクフーンとリザードンはゴウカザル達の所に向かった。
「お～い！」
「うん？よう！バクフーンじゃんか！」
「何してんだ？」
「トレーニングだよ！休みだからって言って気を抜くと明日の決勝リーグですぐに負けちまうからな！」
「さすがゴウカザルだな。うちのどっかの誰かさんとは大違いだ。」
そう言いながらリザードンはバクフーンを見た。
「俺かよ！？」
「何回俺がお前の飯おごってると思ってんだよ。それに、まだドラゴンシティの時の飯代返してもらってないからな。」

「・・・覚えていたか（汗）」
その時チーム業火のメンバーであるライチュウがやって来た。
「ゴウカザル！そろそろ次のトレーニングしようぜ！」
「解ったライチュウ！とりあえず先にやっててくれ！俺もすぐに行くからさ！」
「あいよ！」
ライチュウは他のメンバーと共に走り出した。
「次のトレーニングって？」
「ランニングだよ。とりあえずレジェンドアイランドをぐるりと一周するつもりだ。」
「一周！？この島相当でかいんですけど（汗）」
「それくらいしないとトレーニングにならないからさ！じゃあなバクフーン！明日の決勝リーグでな！」
そう言ってゴウカザルは仲間達を追いかけて行った。
「頑張るなぁあいつら（汗）」
「絶対明日まで疲れが残ると思うんだが・・・まぁゴウカザル達だから大丈夫か。ところでバクフーン、今日はどうする？」
「どうっすっかな～・・・とりあえず皆と相談して決めようか！」
「そうだな。」
バクフーンとリザードンは自分達が宿泊している選手村に戻った。
さすがに皆はもう起きていた。バクフーンは皆に今日はどうするか聞いた。
「やっぱりトレーニングした方が良いんじゃないかなぁ？」
「私はショッピングしたいなぁ。」
「アタシも。」
「俺はバクフーンのアニキに合わせるっすよ～！」皆意見バラバラ・・・
「何かめんどいから皆で自由行動にしない？」
バクフーンが言った。
「バクフーンのアニキが言うならそれで良いっすよ～！」

「私も賛成！」
「アタシも！ねぇラティアス姉ちゃん！何処に買い物しに行く？」
「そうねぇ～・・・」
「俺は散歩でもしてようかな。・・・そして綺麗なお姉さんを見つけたら・・・ムフフ♪」
ピカチュウがにやけている。その時、ピカチュウにピチューの必殺耳を引っ張るが炸裂した。
「イタタタ！？」
「お兄ちゃんはアタシ達と一緒に来てもらうから！いっぱい買い物するから荷物運びしてもらうわよ！」
「俺には自由が無いのかぁ～！？」
ラティアスとピチューはショッピングに出かけた。ピカチュウはピチューに耳を引っ張られたまま連行された。
「ねぇリザードン。僕と一緒にトレーニングしない？」
「良いよ。ラティオスはどうする？」
「俺も一緒に行こう。」リザードンとラグラージとラティオスはトレーニングしに行った。
「バクフーンのアニキ～！俺達は何するんすか～？」
「そうだな～・・・とりあえず、娯楽施設に遊びに行くか♪」
「行くっす～♪」
バクフーンとグラエナは娯楽施設に遊びに行きました。今日一日は皆それぞれ好きなように過ごす事にした。明日はいよいよ決勝リーグだ！

第五十四話休日の過ごし方。（後書き）

第五十四話完成です！
いやぁ、ポケットモンスタープラチナにはまってしまって更新するのが遅れてしまいました！
オイオイヾ（＾―＾）
やっと四天王を倒したからいつものペースで更新出来ると思います。
多分（汗）

第五十五話ポケモンリーグ決勝トーナメント初戦！チームブラストＶＳチームメテオ

ポケモンリーグ決勝トーナメントの初日を迎えたバクフーン達。果たして見事一回戦を突破出来るのか？

第五十五話ポケモンリーグ決勝トーナメント初戦！チームブラストＶＳチームメタル

「来たなバクフーン！」
「おはようございますバクフーンさん！」
「おはようバクフーン君。」
「・・・」
すでにポケモンセンターにはゴウカザルやフライゴン、カイリューやメタグロスが来ていた。
「皆早いなぁ！もう来てたのか！」
「当たり前だろ！今日から決勝リーグなんだからな！」
「ま、そりゃそうだな！」皆が会話してる時、ハピナスがやって来た。どうやら今日の決勝リーグの組み合わせが決まったみたいだ。
「皆さんおはようございます！今日の決勝リーグの組み合わせが決定しました！それでは、スクリーンにご注目下さい！」ポケモンセンターにある大きなスクリーンに勝ち残った１６チームの名前が表示された。気になる組み合わせは・・・
「・・・ふふふ・・・まさか一回戦目から当たるとは思いませんでしたが・・・まぁ良いでしょう。」
「いきなりメタグロスのチームかよ。」
一回戦はバクフーン達チームブラストとメタグロス達チームメタルの対決となった！ゴウカザルやフライゴン達は皆それぞれ違うチームとの対戦になった。
「必ずあなた達は倒してさしあげます。覚悟していて下さい。」
そう言うとメタグロス達チームメタルはポケモンセンターを出ていった。
「何かメタグロス、いつもより怖いんですけど（汗）」
「余程僕達に勝ちたいんだろうね。それよりバクフーン！僕達も準備しに行こう！僕達とメタグロス達の試合が一番最初なんだから！」
「解ってるって！」

「バクフーン！いきなり負けんなよ！お前とはまだ決着ついて無いんだからな！」
「ゴウカザル達こそ、初戦敗退なんてすんなよ！」バクフーン達も準備をする為にポケモンセンターをあとにしました。
それから1時間後。
「お待たせしました！いよいよポケモンリーグ、決勝トーナメントを開催いたします！」
遂にポケモンリーグ決勝トーナメントが開始された。会場には大勢の観客がこの決勝トーナメントを観戦しに来ている。
「実況は私、ロトムのＬＯＬＯが勤めさせていただきます！そして今回はスペシャルゲストとして歴代ポケモンリーグチャンピオンチームの中で最強と言われたチームのメンバーであるバクフーンのリリさんとメガニウムさん、そしてジュカインさんに来ていただきました！皆さん、よろしくお願いします！」
「よろしく。」
「ここからだとバトルフィールドが良く見えるわね～！」
「坊や～！頑張って～！」何故かリリ達がいた。スタジアムにある大きなスクリーンにロトムのＬＯＬＯとリリ達が映っている。
「か、母さん（汗）」
「何で父さん達が彼処にいんだ（汗）」
「凄い目立ってるね（汗）」
「リザードンさん！」
その時バクフーン達の近くの観客席から誰かがリザードンの事を呼ぶ声が聞こえた。リザードンが声がする方を見てみるとそこには・・・
「ゼロじゃないか！」
「久しぶりです！」
リザードンと仲良くなったブイゼルのゼロがいた。となりには母親代わりのハピナスもいた。
「どうしてここに？」

「リザードンさん達がポケモンリーグの決勝トーナメントに出場したって聞いたから、直接応援したくて来ました！」
「そうだったのか。でもポケモンセンターは大丈夫なのか？ハピナスが居なくて？」
「妹のラッキーがいるから大丈夫ですよ。」
「リザードンさん！絶対優勝して下さいね！」
「おう！約束するよ！」リザードンはゼロに優勝すると約束した。
「リザードン。カッコ悪いところゼロに見せんなよ？」
「解ってるさバクフーン！」
その時、いつものように審判のハッサムが突然現れた。
「これより、ポケモンリーグ決勝トーナメント第一回戦を開始致します！ルールは六対六のシングル勝ち抜き戦です！それでは両チーム最初にバトルする選手はバトルフィールドへ！」
「トップは俺がやらせてもらうぜ！ラティアスちゃん見ててね♪」
ピカチュウが最初にバトルするようだ。
「やはり速攻タイプのピカチュウで来ましたか・・・行きなさいハガネール。」
「んじゃ行きますか。」チームメタルの最初の選手はハガネールだ！
「ピカチュウ選手対ハガネール選手！試合開始！」遂に決勝トーナメント第一回戦が始まった！
「飛ばして行くぜ！高速移動！」
ピカチュウはまず高速移動でハガネールを翻弄しようとした。
「相変わらずのスピードだな！だが、この技ならそんなスピード無意味だぜ！地震！」
ハガネールは地震を発動した！
「光の壁！」
ピカチュウは光の壁を作り出し、それを踏み台にして空中に高くジャンプ！地震を回避した。
「俺に地面技を当てるのは簡単じゃないぜ？アイアンテール！」
ピカチュウはクルクルと回転しながらアイアンテールで攻撃した。

「アイアンテールなら負けねぇぞ！」
ハガネールのアイアンテールとピカチュウのアイアンテールがぶつかり合った！
「ぐっ！？」
パワーはハガネールの方が上だったようでピカチュウは吹き飛ばされた！
「竜の息吹！」
ハガネールは追い討ちをかけるように竜の息吹を放った！
「１０万ボルト！」
ピカチュウは１０万ボルトを放って竜の息吹を打ち消した。
「あれを試してみるか！行くぜハガネール！高速移動！そして影分身！更に身代わり！！」
ピカチュウは高速移動しながら影分身を発動してたくさんの分身を生み出した。
「行くぜ！気合いパンチ！」
たくさんのピカチュウがハガネールに気合いパンチを繰り出そうとした。
「ちっ！アイアンテールでなぎ払ってやる！」
ハガネールはアイアンテールで大群のピカチュウを攻撃した。だが、本物に当たる事は無かった。
「くらえ！！」
何体か残った分身と共に気合いパンチをハガネールに決めた！
しかし、ここでハガネールは疑問に思った。いくら影分身したとしても所詮は実体の無いただの影。気合いパンチを受けたとしても本物は一人しかいないはずだから痛みを感じる場所も一ヶ所の筈。だが、今くらった気合いパンチは何発も受けたような痛みだった。
「な、何故影分身の攻撃で痛みを感じる？」
「ただの影分身じゃないからさ！俺がエレキブルのじいさんの所でトレーニングしている時、ある事に気づいたんだ。影分身中に身代わりを発動させると、ただの影でしか無かった俺の分身が実体を持

つ事が出来るってな！つまり、今ここにいる分身は皆実体があるんだ！」

（ただし、通常の分身と違って体力の消費が激しいんだけどな・・・）

「ここにいる全員が実体を持ってるってか・・・なら、戦い方を変えるまでだ！砂嵐！」

ハガネールは砂嵐を発生させた！強烈な砂嵐のせいでピカチュウはハガネールの姿を見失ってしまった。

「なんて強力な砂嵐だ！？くそっ前が見えねぇ！？」

「チームの勝利の為この技を使う！大爆発！！」ハガネールは大爆発を使った！フィールド全体を包む凄まじい爆発が発生した！・・・爆発で出来た爆煙が晴れていく。フィールドにはハガネールとピカチュウが倒れていた。

「両者戦闘不能！」

「ちょっと待ちなハッサム！早とちりすんなよ！」何と地面からピカチュウが現れた！

「俺はやられてねぇよ！そこにいんのは俺の分身だ！」

ピカチュウがそう言うと倒れていたピカチュウは光の粒子となって消えた。

「訂正します。ハガネール選手のみ戦闘不能！」

「これは驚きました！ハガネール選手の大爆発で戦闘不能となったと思われたピカチュウ選手ですが、そのピカチュウ選手が地面から現れました！ジュカインさん、これは一体？」

「あの砂嵐の中でおそらくピカチュウはハガネールが大爆発で攻撃して来ると予想したのだろう。分身を残して本体は穴を掘るで大爆発を回避した。しかし、あの状況で良く冷静に判断したな。」

「さっすがピカチュウちゃんね！その調子よ～！」

その後ハガネールは仲間に支えられてバトルフィールドから離れた。
「ピカチュウが穴を掘るを覚えていたのは予想外ですね・・・ジバコイル。次はあなたが行って下さい。」
「・・・了解。」
チームメタルからはジバコイルが出てきた。
「ピカチュウ!そのまま勢いに乗ってガンガンいっちゃえ!」
「お前に言われなくても解ってるさバクフーン!」
「ピカチュウ選手対ジバコイル選手!試合開始!」ピカチュウとジバコイルの試合が始まった。
「・・・ターゲットロックオン!」
ジバコイルはピカチュウにロックオンした。これで次の攻撃はピカチュウに当たるまで何処までも追尾してくる。
「攻撃させなきゃ良いんだろ!電光石火!」
ピカチュウは電光石火でジバコイルに突っ込んで行った。
「・・・電磁砲発射!」
「なっ!?」
ピカチュウが思っていた以上にジバコイルの攻撃が早かった!電磁砲がピカチュウに決まった!そして電磁砲の追加効果でピカチュウは麻痺してしまい思うように動く事が出来なくなってしまった!
「くそっ!?」
「・・・エネルギーチャージ・・・ターゲットロックオン・・・破壊光線発射!」
ジバコイルは至近距離で破壊光線をピカチュウに決めた!ピカチュウは壁まで吹き飛ばされて倒れた。
「ピカチュウ選手戦闘不能!」
「おおっと!?ピカチュウ選手、あっという間にKOされてしまったぁ~!?」
「ピカチュウの奴、油断したな。ここはポケモンリーグなんだ。相手が弱い訳が無い。」

「あ～残念ピカチュウちゃん・・・」
「リリ、あなた解説そっちのけで完全に観客になってるわよ？」

「お疲れピカチュウ。あとは僕に任せて！」
「すまない・・・」
ピカチュウに代わって今度はラグラージがバトルフィールドに入った。
「ラグラージ選手対ジバコイル選手！試合開始！」ラグラージとジバコイルの試合が始まった。
「マッドショット！」
ラグラージはジバコイルに効果がある地面技のマッドショットを放った！
「・・・影分身！」
ジバコイルは影分身をしてマッドショットを回避。そのまま分身を出現させながらラグラージを取り囲んだ。
「ならまとめて攻撃すれば良いだけだよ！ハイドロポンプから冷凍ビーム！」
ラグラージはまずハイドロポンプを空中に向けて放ち、そのハイドロポンプに冷凍ビームを当てて凍らせ大きな氷の柱を作った！そしてその氷の柱を掴むと周りにいるジバコイルに向かって振り回した！分身はどんどん消えていって最後に本体に氷の柱が直撃した！
「見つけたよ！ハイドロポンプ！」
ラグラージはすかさずハイドロポンプを本体に向けて放った！
「防御フィールド展開・・・守る！」
ジバコイルはハイドロポンプを守るで防御した。「金属音！」
ハイドロポンプを防ぎきったあとジバコイルは金属音を発動した。
周りに金属をひっかいたような嫌な音が響いた。
「うわぁ！？嫌な音だぁ！？」ラグラージは思わず耳を塞いだ。そ

のせいでラグラージは今無防備になってしまった！
「ラスターカノン！」
その隙にジバコイルはラグラージにラスターカノンを放った！水タイプのラグラージに鋼タイプの技ラスターカノンは効果は今ひとつだが、金属音のおかげでラグラージには大きなダメージを与えた！
「くっ！？」
「ミラーショット！」
立て続けにジバコイルはラグラージを攻撃した。ミラーショットがラグラージに迫る！
「守る！」
ラグラージは守るでミラーショットを防御した。
「こうなったらこれで一発逆転だ！ハイドロカノン！」
ラグラージは逆転を狙ってハイドロカノンを放った！
「影分身！」
しかし、ジバコイルに影分身をされてハイドロカノンは回避された！
「そんな！？」
「ターゲットロックオン・・・エネルギーチャージ・・・破壊光線発射！」ジバコイルは最大パワーの破壊光線を放った！ラグラージはハイドロカノンの反動で動く事が出来ない！破壊光線はラグラージを直撃した！ラグラージは耐えきれずに倒れた。
「ラグラージ選手戦闘不能！」
「ラグラージ！大丈夫か？」
「ごめん・・・負けた・・・」
「気にすんなって！まだ俺達が残ってんだ！まだ勝てるさ！」
ラグラージはバクフーンとリザードンに支えられてバトルフィールドを離れた。
「バクフーンのアニキ！次は俺にやらせてくれっす！」
「解った！頼むぜグラエナ！」
「了解っす！」
次はグラエナが戦うようだ。

「ジバコイル・・・解ってますね？」
「・・・任務は成功させる。」
メタグロスはジバコイルに何かするよう指示したようだ。
「ジバコイル選手対グラエナ選手！試合開始！」
「一気に行くっすよ～！炎の牙！」
グラエナは炎の牙で一気にジバコイルを倒そうと飛びかかった！だがその時、突然ジバコイルの身体が光始めた！
「な、なんすか！？」
「・・・リミッター解除・・・大爆発！！」
ジバコイルは大爆発を発動した！至近距離で大爆発を受けたグラエナは壁まで吹っ飛ばされた！
ジバコイルとグラエナは倒れた。
「両者戦闘不能！」
「何とまたしてもチームメタルは大爆発を発動したぁ！？」
「確かに大爆発は相手に凄まじいダメージを与える事が出来る大技だが・・・ハガネールに続きジバコイルも使うとは・・・」
「もしかしてチームメタルの狙いは少しでもリードしたら大爆発を使って一気に相手を突き放す事なのかも・・・」
「うむ。メガニウムの言う通りだろう。」
「坊や！まだ逆転は狙えるわ！頑張れ～！」

「すんませんアニキ・・・」
「気にすんな。お前の分も俺が頑張るからさ！」
「バクフーン。次は俺が行こう。俺がこの流れを変える。」
「あぁ！頼むぜラティオス！」
ラティオスがバトルフィールドに入った。
「ドータクン・・・しっかり役目を果たして下さいよ。」
「言われなくても解ってるさ。」

チームメタルからはドータクンがやって来た。
「ドータクン選手対ラティオス選手！試合開始！」
「１０万ボルト！」
ラティオスは試合開始の合図と同時に１０万ボルトを放った！
「守る！」
だが、ドータクンに守るを使われて防御された。
「トリックルーム！」
ドータクンはトリックルームを発動した。バトルフィールドの空間が歪み始めた。
「さぁこっからが俺の本領発揮だぜ！ジャイロボール！」
トリックルームのおかげで普段は遅いドータクンが素早い動きでラティオスに向かって行った。
「ラスターパージ！」
ラティオスのラスターパージの強い光でドータクンはラティオスを見失った！ジャイロボールは外れた。
「やはりな。メタグロスの言った通りだ。・・・ラスターパージの次は水の波動で俺を攻撃してくる。」
「水の波動！」
ドータクンの言った通りラティオスは水の波動で攻撃してきた。
「守る！」
これをドータクンは守るできっちりガードした。「なっ！？俺の行動が読まれただと！？」
「メタグロスのデータはほぼ完璧なんだよ！悪いがあんたには俺と一緒に倒れてもらうぜ！」
そう言った瞬間、ドータクンはラティオスに突っ込んで行った。
「大爆発か！なら守るで・・・」
「忘れたのか？俺がこの技を使える事を！封印！」ドータクンは封印を発動した。これでラティオスはドータクンが使える同じ技をしばらく使えなくなった！
「これで守るは使えねぇぜ！大爆発！！」

「しまっ・・・!?」
ドータクンの大爆発が炸裂した!フィールドが凄まじい爆煙で包まれた。・・・しばらくすると爆煙が晴れてきた。フィールドにはラティオスとドータクンが倒れていた。
「両者戦闘不能!」
「ラティオス!?」
バクフーン達がラティオスに駆け寄って行った。
「おい!大丈夫か?」
「・・・す、すまない・・・流れを変える事が出来なかった・・・」
ラティオスは悔しそうに言っている。
「・・・俺が行く。俺が流れを変える!」
リザードンがそう言うと尻尾の炎が物凄い勢いで燃え盛った!自分がこの悪い流れを断ち切ると決意したようだ。
「頼むぜリザードン!」そう言うとバクフーンはラティオスを抱えてバトルフィールドから離れた。リザードンはフィールドに残った。
「・・・この状況になっても諦めませんか・・・ならばもっと追い込むとしましょう・・・」
メタグロスはバクフーン達を徹底的に追い込むつもりらしい。
「・・・今日のメタグロスいつも以上に怖くないかエアームド(汗)」
「てか、完全悪役になってるよなアイツ(汗)」
ボスゴドラとエアームドは小声で話している。
「ボスゴドラ。次はあなたが行きなさい。・・・しくじったらどうなるか解ってますね?」
ボスゴドラはメタグロスから凄い殺気を感じとった。一瞬ボスゴドラは身震いしてしまった。
「わ、解ってるって!?そ、そんな怖い顔すんなよ!?」
余程メタグロスが怖いのであろう。ボスゴドラの声は震えていた。
ボスゴドラはメタグロスから離れたいと思い急いでバトルフィールドに入った。

「たくっ！アイツ怖すぎだっつうの・・・ん？」
「・・・」
目の前には鋭い目でボスゴドラを睨んでいるリザードンがいた。
（こっちも怖っ！？）
ボスゴドラはちょっと後退りした。
「い、いかんいかん！しっかりしろ俺！」
ボスゴドラは自分の頬にビンタして気合いを入れた。
「リザードン選手対ボスゴドラ選手！試合開始！」ハッサムの試合開始の合図と同時にリザードンは空高く急上昇した。
「火炎放射！」
リザードンは火炎放射を放った！今まで以上の火力を持った火炎放射がボスゴドラを襲う！
「岩砕き！」
ボスゴドラは地面に向かって岩砕きをした。そして、巨大な岩を自分の前に立てて火炎放射から身を守る盾にした。
「炎タイプの技で岩を壊せる筈は・・・」
ボスゴドラはそう思ったのだが、みるみるうちに目の前にある岩がドロドロの溶岩のように溶けていく！
「嘘っ！？うわぁ！？」
そして完全に岩は溶けて火炎放射がボスゴドラに直撃した！ボスゴドラはフィールド外の壁まで吹き飛ばされた！
「ピカチュウ！お前の技借りるぞ！」
リザードンは一気にボスゴドラに向かって急降下した！そしてリザードンの右手が光だした！
「トドメだ！気合いパンチ！！」
リザードンはピカチュウも良く使う技、気合いパンチをボスゴドラに決めた！落下スピードと全体重をかけた為に凄まじい威力となった！その証拠にボスゴドラの身体が壁にめり込んでいる。
「ボスゴドラ選手戦闘不能！」
「・・・」

リザードンは勝ったにも関わらず笑顔を出さなかった。まだエアームドとメタグロスが残っているから喜んでいる暇など無いのだ。
「・・・エアームド。」
「・・・やんなきゃダメ？俺絶対今のあいつに勝てないぜ？」
「・・・」
メタグロスはエアームドを睨みつけた。
「はぁ・・・解ったよ。ただし、ちゃんと取ってくれよ？あいつのデータ。」
エアームドはしぶしぶバトルフィールドに入った。メタグロスはエアームドを言い方が悪いかもしれないが捨て駒にしてリザードンのデータを取ろうとしているのだ。
「リザードン選手対エアームド選手！試合開始！」ハッサムの合図と同時にリザードンはボスゴドラの時と同じように空へ急上昇した。エアームドもリザードンと同じく急上昇した。
ある程度上昇したら二人はその場で止まり、しばらく出方を伺うように上空で旋回し始めた。
「・・・」
リザードンは片時もエアームドから目を離さず睨みつけている。
（隙がねぇ・・・迂闊に動くとあっという間にやられちまうよ（汗）でもやらないとメタグロスはデータが取れねぇし・・・どうしよう（汗））
エアームドはリザードンの気迫に押されて攻撃出来ないでいた。
「火炎放射！」
遂にリザードンが動いた！火炎放射がエアームドに襲いかかる！
「き、来た～！？」
エアームドは再び急上昇して火炎放射を回避した。リザードンはエアームドのあとを追いかけた！
「もうこうなったらヤケだ！燕返し！」
エアームドは急上昇から急降下に切り替えてリザードンに向かって突っ込んで行く！

「ドラゴンクロー！」
リザードンは冷静に燕返しをドラゴンクローで対抗した。リザードンの鋭い爪とエアームドの鋭いくちばしがぶつかり合った。
「これで決めさせてもらう！」
リザードンはエアームドを弾き飛ばした。エアームドは体制を立て直そうとした時、いつの間にかリザードンが背後にまわっていてしっかりと身体を抱きしめられる感じに掴まれてしまった。そしてリザードンはその状態のまま急降下して行く！「フレアドライブ！！」更にリザードンはフレアドライブを発動した。炎の鎧がエアームドごと包み込んだ。そのままリザードンはエアームドを地面に叩きつけた！
「や・・・やっぱり無理だった・・・がく・・・」
「エアームド選手戦闘不能！」
「・・・あとはメタグロスだけか・・・」
リザードンはメタグロスを睨みつけた。
「・・・データ解析完了・・・まぁ頑張った方でしょう。良くやりましたエアームド。」
メタグロスはサイコキネシスを使って気絶しているエアームドをバトルフィールドの外に運んだ。そのあとでメタグロスがバトルフィールドに入った。
「バトルの前にひとつ言っておきます。リザードン、あなたは私に勝てませんよ。データは完璧ですから。」
「初めて俺とバクフーンとバトルした時にも同じ事を言ってたよな？でもお前は俺達に負けた。悪いが今回も勝つのはお前ではなく俺達だ！」
二人は睨みあっている。良くアニメで睨みあった二人の間に火花がちる事があるが・・・今まさにその状況である。
「リザードン選手対メタグロス選手！試合開始！」再び試合開始の合図と同時にリザードンは空へ急上昇した。
「やはり最初にする行動はそれですか・・・火炎放射で攻撃する確

率９０％・・・」
「火炎放射！」
メタグロスの読み通りにリザードンは火炎放射を放った！
「高速移動！」
メタグロスは高速移動を使ってその巨体からは想像出来ないスピードで火炎放射を回避した。

「ならこれで・・・」
「火炎放射を避けられたあなたが次に出る行動は７５％の確率で炎の渦を放ちフィールドを炎で埋め尽すでしょう。」
「なっ！？」
リザードンは今まさに炎の渦を放とうとしていた！ズバリ的中されたリザードンは炎の渦を使うのを止めた。
「言った筈です。あなたのデータは完璧に取っていると。」
「・・・完璧かどうか確かめてやる！エアスラッシュ！」
リザードンはメタグロスに向かってエアスラッシュを放った！空気の刃がメタグロスに襲いかかる！
「高速移動！」
当たる寸前でメタグロスは高速移動を使ってエアスラッシュを回避した。エアスラッシュが地面に直撃した瞬間エアスラッシュが当たった所は切り裂かれたようにざっくりと割れていた。
「エアスラッシュ乱れ撃ち！更に火炎放射！」
無数に放たれた空気の刃に火炎放射を組み合わせて炎の刃となりメタグロスに向かっていく！
「サイコキネシス！」
メタグロスはサイコキネシスを使って炎のエアスラッシュをまるで時を停めたかのように静止させた。
「これはあなたに返します。」
メタグロスが念じると静止していた炎のエアスラッシュがリザードンに向かって行った！

「くっ！ドラゴンクロー！」
リザードンはドラゴンクローで炎のエアスラッシュ全てを打ち消した！
「これならどうだ！オーバーヒート！」
リザードンは火炎放射よりも強力なオーバーヒートを放った！
「サイコキネシス！」
だが、オーバーヒートはメタグロスのサイコキネシスでメタグロスに当たる寸前で停められてしまった！
「読めてると言ったでしょう。はっ！」
オーバーヒートがかき消された！
「本当に・・・俺のやる事が読まれている・・・」リザードンは自分の攻撃が全て返されてしまいどうすれば良いのか解らなくなってしまい戦意を失いかけていた。
「諦めんなリザードン！」その時、バクフーンがリザードンに叫んだ。
「バクフーン・・・」
「最後まで諦めんなよリザードン！せっかくの楽しいバトルなんだからさ♪途中で辞めるなんて勿体無いだろ？」
「・・・ふっ。お前らしいなバクフーン。でも・・・確かにここで諦める訳にはいかないな。今まで戦ったピカチュウやラティオス達の思いが無駄になっちまう。」
バクフーンのおかげで再びリザードンに闘志が戻った！
「勝負はこっからだメタグロス！」

リザードンは炎のエネルギーを集め始めた！炎のエネルギーは徐々に丸い球体のような形になっていく。
「往生際が悪いですね・・・まぁ良いでしょう。すぐに終わらせさしあげます。もうすでに勝利への布石は出来上がってますから。」
「そんなもん知るか！くらえ！ブラストバーン！」リザードンは最大パワーのブラストバーンを放った！ブラストバーンはメタグロス

に直撃すると思われたが、当たる寸前に突然ブラストバーンが何かに打ち消された！

「なっ！？何が起きた！？」

「光の壁ですよ。しかも何重にも重ねた特大の壁です。あなたの攻撃を避けている最中に作っていたんですよ。それをサイコキネシスで操りブラストバーンから身を守る盾にしました。しかし、私の光の壁は防御だけではなくこんな事にも使えるんですよ！」

メタグロスはサイコキネシスを使って光の壁をリザードンに向けて放った！光の壁はリザードンの周りを取り囲み、光の壁の檻となった！メタグロスが更に念じると光の壁の檻がどんどん狭くなってきた！

「何だ・・・これ！？」

「どうです？苦しいでしょう？それは普段私がエアームド達にお仕置きをする時に使うんですがね。徐々にその檻は狭くなっていきあなたを絞めあげます。ですが安心して下さい。私は徐々に相手をいたぶる趣味はありませんから。一瞬で決めてあげます！」

メタグロスがエネルギーを集め始めた！リザードンは逃げようにも光の壁の檻で拘束されているため逃げる事が出来ない！「破壊光線！！」

エネルギーチャージが完了したメタグロスは破壊光線を放った！破壊光線が直撃した瞬間光の壁の檻ごとリザードンを吹き飛ばした！

リザードンがフィールドの外の壁に激突しそうになった！

「おっと！」

その時バクフーンがリザードンを受け止めて壁に激突するのを防いだ。

「大丈夫かリザードン？」

「すまない・・・バクフーン・・・」

「気にすんなよ。かっこよかったぜお前！あとは俺に任せな！ハッサム！リザードンはもうバトルは無理だ！」

「解りました。リザードン選手の戦闘不能とします。」

バクフーンはリザードンを皆がいる所まで運んで行った。
「じゃっ行って来るぜ！ラティアス、ピチュー。リザードン達を頼む。」
「解ってるわよバクフーンの兄ちゃん！」
「バクフーンさん。頑張って下さい！」
「おう♪」
バクフーンは笑顔で答えた。そしてバトルフィールドへ。
「待たせたなメタグロス！さぁ、楽しいバトルをしようぜ！」
「ふん。私は今日この日が来るのを待っていました。必ずあなたは倒します。」
メタグロスは今まで以上に怖い顔になった。
「バクフーン選手対メタグロス選手！試合開始！」遂にバクフーンとメタグロスの試合が始まった！まずバクフーンは試合開始の合図と同時に電光石火でメタグロスに接近して行った。
「試合開始と同時に電光石火で向かって来る確率１００％！バレットパンチ！」
やはりメタグロスはバクフーンの行動を読んでいた！高速で繰り出されるバレットパンチがバクフーンの顔面に迫って来た！
「うおっ！？」
バクフーンは間一髪でスライディングしてバレットパンチを回避した！

「やはり避けられましたか。・・・あなたならその体制から立て直して私に火炎車で反撃するでしょう。」
「ありゃバレたか！でも解っていても避けたり出来なきゃ意味無いよな！電光石火から火炎車！」スライディングした状態からバクフーンは地面を強く蹴ってメタグロスに向かってジャンプした。そして火炎車で反撃しようと炎の鎧を身に纏った！
「リフレクター！」
メタグロスは光の壁とは違う壁、リフレクターを作り出してバクフ

ーンの火炎車を受け止めた！
「別に避ける必要はありません。受け止めれば良いだけですから。」
「ちぇっ！止められたか！電光石火！」
バクフーンは電光石火でメタグロスから一旦離れた。
「今度はこれでどうだ！噴火！！」
バクフーンの背中の炎が激しく燃え盛り、噴火の如くメタグロスに炎が降り注いだ！
「高速移動！」
メタグロスは高速移動で素早く動き、噴火を回避した。
「噴火を放ったあとに火炎放射を使う確率７２％」
「火炎放射！」
またしてもメタグロスの読み通りになった。バクフーンの火炎放射をメタグロスは光の壁で防いだ。
「あら～これも防がれたか～・・・やっぱメタグロスはスゲ～や♪絶対攻撃当ててやるからな！」
「無駄です。あなたのデータは完璧に取ってあるんですから。」
「お前が取ったって言うデータは過去の俺だろ？今の俺が過去の俺と同じとは限らないぜ！電光石火！」
バクフーンは再び電光石火でメタグロスに向かって行った。
「そんな短期間の間に強くなる筈がありません。・・・電光石火からコンビネーションで火炎車を仕掛けてくる確率８５％・・・リフレクターで防いでやります！」
メタグロスはリフレクターを展開した。そしてバクフーンはメタグロスの予想通り火炎車を発動させて炎の鎧を身に纏った。だが、バクフーンは火炎車をメタグロスに決めようとはせずにメタグロスの周りをぐるぐると火炎車を維持しながら電光石火で走り始めた。
「どういうつもりです？」
「まだお前には見せてない戦法があるんだよ！見せてやるよ・・・俺の陽炎！」
メタグロスの周辺がバクフーンの炎の熱でどんどん温度があがって

いく。
「うっとうしいですね！コメットパンチ！」
メタグロスはバクフーンを止めようとコメットパンチを繰り出そうとした。だが次の瞬間バクフーンの姿が消えた！
「なっ！？」
「どうだ？お前からは俺の姿が見えないだろ？」声は聞こえるがメタグロスはバクフーンの姿を確認出来ないでいた。
「これが陽炎ですか・・・確かにこの戦法は初めて見ますね。しかし・・・地震！」
メタグロスは地震を発動させた！フィールドどころかスタジアム全体を揺らす程の大きな地震だ！
「わわわ！？」
バクフーンは地震のせいで立っていられずにその場でしりもちをついてしまった。それと同時にずっと維持していた火炎車も解いてしまい陽炎が消えてしまった！
「今度こそ決めます！コメットパンチ！」
メタグロスのコメットパンチがバクフーンに襲いかかる！しかしバクフーンはこのコメットパンチを受け止めてしまった！「何！？」
「うおりゃぁぁぁ！！」更にバクフーンはメタグロスを投げ飛ばした！
「電磁浮遊！」
メタグロスは地面に叩きつけられないように電磁浮遊で浮かびあがった。
「あ～いってぇ～！？お前力強すぎ！？」
余程痛かったのかバクフーンは両手をブルブルと降っている。
「バレットパンチ！」
メタグロスはバクフーンに休ませないようにバレットパンチで攻撃した。
「うおっ！？」

バクフーンは顔に当たるギリギリのところでバレットパンチを回避した。「バレットパンチを回避したあとに火炎放射で反撃する確率９０・・・」

「火炎放射！」

バクフーンはメタグロスの予想通り火炎放射で反撃したが、攻撃速度がメタグロスの予想より遥かに早く火炎放射をまともに受けた！

「ぐっ！？」

「電光石火から火炎車！」火炎放射を直撃させたあとすかさずバクフーンは電光石火と火炎車のコンビネーション攻撃を仕掛けた！

「高速移動！」

メタグロスは高速移動でバクフーンのコンビネーション攻撃を回避した。そしてバクフーンの背後に周りコメットパンチで反撃しようとした。

「データ通りならこの攻撃は回避出来ない筈！」コメットパンチがバクフーンに直撃しそうになった時、バクフーンは高くジャンプした！そして月面宙返りでメタグロスの背後に！

「なっ！？」

「フレアドライブ！！」火炎車よりも強力な炎の鎧の身に纏いメタグロスに体当たりした！

「くっ！？」

「電光石火！」

バクフーンは電光石火でメタグロスから離れて一旦距離を取った。

「へへ♪ようやく俺の攻撃が当たるようになってきたぜ！さぁメタグロス！もっと楽しくバトルしようぜ♪」

バクフーンは笑っている。本当にバトルが楽しくてしょうがないみたいだ。それとは裏腹にメタグロスの表情は最初と比べて暗い表情に変わっていた。

「・・・私はまた彼に負けてしまうのか・・・私のデータは完璧だった・・・なのに彼はそのデータを簡単に超えてしまう・・・」

メタグロスは自分が取ったデータ以上の動きをバクフーンにされて

しまい戦意を失いかけていた。「・・・なんだよメタグロス？お前一度や二度位俺の攻撃をもらっただけで諦めんのか？」

「・・・」

メタグロスは沈黙している。

「・・・メタグロス選手戦意喪失により・・・」

「ちょっと待ったハッサム！」

ハッサムがメタグロスを戦意喪失とみなしバクフーンの勝利にしようとしたがバクフーンがそれを止めた。

「こんなんで勝っても俺は嬉しくねぇよ！おいメタグロス！このバトルはお前一人がやってんじゃないんだぞ！ハガネールやジバコイル、お前の仲間がチームの勝利の為にマジになってバトルしたんだ！そんなお前の仲間の気持ちを無駄にすんのか！」

「・・・仲間の・・・思い・・・」

メタグロスはハガネール達がいる方に振り向いた。そこには傷ついて満足に動けないが必死に声を出して応援してくれている仲間の姿があった。

「諦めんなメタグロス！お前の実力ならデータが無くたって大丈夫だろ！」

「ハガネール・・・ふっ。どうやら私は大事な事を忘れていたようですね・・・私は今まで一人でやっているつもりでしたが・・・いつも側には彼らがいたんですよね・・・まさかよりにもよってあなたに気づかされるとは・・・」

メタグロスの暗かった表情がどんどん変わっていく。

「へっ！どうやらやる気が戻ったようだな！さぁ、続けようぜメタグロス！」

「良いでしょう。ただし、さっきまでの私と思わないで下さいよ。たった今から私は・・・データを捨てます！いきますよ！高速移動からコメットパンチ！！」

メタグロスは高速移動で素早くバクフーンに近づきコメットパンチ

を繰り出した！
「電光石火！」
バクフーンは当たる寸前のところで電光石火を使いコメットパンチを回避した。
「逃がしません！」
メタグロスが高速移動であとを追いかけて来た！「バレットパンチのスピードを利用したコメットパンチをくらいなさい！！」
メタグロスはバレットパンチとコメットパンチの合わせ技でバクフーンを攻撃した。
「くらってたまるかって！」
バクフーンはこの攻撃を全て紙一重で避けていく。しかし、避けるのが精一杯でなかなか反撃が出来ない。
「データ無しの方がお前強いんじゃないか・・・ってうわぁ！？」
バクフーンが油断した隙にメタグロスの攻撃がバクフーンに決まった！
この攻撃でバクフーンは吹っ飛ばされた！
「いってぇ～・・・やったなメタグロス！火炎放射！」
バクフーンは火炎放射で反撃した。しかし、メタグロスは高速移動でこれを回避してそのままバクフーンに向かって行きコメットパンチを繰り出そうとした。
「炎全開！！」
バクフーンの背中の炎が激しく燃えた！そしてバクフーンの周りの温度が一気に上昇して陽炎が発生した！これでメタグロスはまたバクフーンの姿を見失ってしまった。
「ならば地震で・・・」
「させるか！オーバーヒート！！」
メタグロスが地震を発生させようとした時、バクフーンはオーバーヒートを直撃させてメタグロスをフィールドの外の壁まで吹き飛ばした！メタグロスは壁に激突！その衝撃で壁が壊れてしまいメタグロスは壁の破片の下敷きになった！

「ハァ・・・ハァ・・・決まったのか・・・？」バクフーンがそう思ったその時、メタグロスを覆っていた壁の破片が突如浮かび上がった！破片の下からはメタグロスが現れた。どうやらサイコキネシスで破片を浮かび上がらせているようだ。
「俺のオーバーヒートを耐えたのか！？」
「ハァ・・・ハァ・・・仲間の為にも負ける訳にはいきませんからね・・・これでもくらいなさい！」
サイコキネシスで壁の破片をバクフーンめがけて飛ばした！
バクフーンは電光石火でこれを回避していくが最後に残った壁の破片がバクフーンに直撃してしまった！今度はバクフーンがフィールドの外まで吹き飛ばされた！
「ハァ・・・ハァ・・・イテテテ・・・やっぱ強いなぁメタグロスは・・・だけどよ、仲間の為に負けられないのは俺も同じなんだよ！」
バクフーンは立ち上がった！そして身体から赤いオーラが出現した！特性の猛火だ！
「これで決める！」
バクフーンは全炎エネルギーを集め始めた。少しずつ集まる炎エネルギーは丸い球体の形になってそれがどんどん大きくなっていく。
「私は・・・絶対勝つ！」メタグロスも全エネルギーを集め始めた！
「破壊光線！！」
先にメタグロスが最大パワーの破壊光線を放った！破壊光線がバクフーンに迫る！
「ブラストバーン！！」バクフーンの全炎エネルギーを集結させた特大ブラストバーンが放たれた！メタグロスの破壊光線とバクフーンのブラストバーンの激しいぶつかり合いが始まった！最初は互角だったが少しずつバクフーンのブラストバーンが押され始めた！
「くっ！？」
「勝つのは私だ！！」
破壊光線がバクフーンの目の前まで迫って来た！

「・・・負けねぇぇぇ!!うおりゃぁぁぁ!!」ここでバクフーンの身体から凄まじい炎が出現した!それと同時にブラストバーンの威力もぐーんと上がり破壊光線を押し返し始めた!どんどん破壊光線をブラストバーンが押していく!

「うあぁぁぁ!?」

遂に破壊光線を打ち破りブラストバーンがメタグロスに直撃した!直撃と同時に凄まじい爆発が発生!メタグロスは爆発の衝撃でフィールドの外の壁まで吹っ飛ばされた!

「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」

バクフーンはかなり疲労している。立ってるのも辛そうだ。

ハッサムがメタグロスの状態を確認する為に近づいて行った。

「・・・」

メタグロスはぴくりとも動かない。気絶しているようだ。

「メタグロス選手戦闘不能!よって勝者チームブラスト!!」

遂にバクフーンがメタグロスに勝利した!そしてチームブラストの決勝トーナメント二回戦進出も決まった!バクフーンが勝利した瞬間スタジアムにいる観客から大きな歓声が聞こえてきた。

「勝った・・・はぁ~疲れた~・・・」

バクフーンはその場で大の字になって倒れた。

その時バクフーンの所にリザードン達が駆け寄って来た。

「お疲れ様ですバクフーンさん!」

「よう皆・・・へへ、勝ったぜ♪」

バクフーンは皆にピースしながら言った。

「まったく・・・お前らにはかなわないな。参ったよ。」

チームメタルがバクフーン達の所にやって来た。

「俺達に勝ったんだ。優勝しなかったら許さないからな!」

「解ったよハガネール」

「・・・うっ・・・」
ハガネールの背中に乗せていたメタグロスが目を覚ました。
「目が覚めたか？」
「ハガネール・・・私は負けたようですね・・・すみません・・・」
「えっ！？」
普段絶対謝らないメタグロスが謝った事にハガネール達が驚いた。
「メタグロスが謝ったぞ（汗）」
「これは不気味な事が起きるまえぶれか（汗）」
エアームドとボスゴドラが小言で言っている。

「バカな事言ってないでポケモンセンターに行くぞお前ら！」
「解ったよ・・・」
ハガネールに言われチームメタルはスタジアムから出ようとした。
その時バクフーンが起き上がった。
「メタグロス～！またバトルしようぜ～！」
バクフーンは大きな声で言った。メタグロスは片手をあげてそれに答えた。
「さて、俺達も行くか！もう俺へとへとだ～！」
「そうだね。あっそういえばバクフーン。ジュカインさんが僕達の為に料理を作っておいてくれたらしいよ？」
「マジか！？ならば全速力で行かなければ！飯だ飯～♪」
「待って下さいよバクフーンのアニキ～！」
バクフーンとグラエナは選手村目指して全速力で走り出した。
「行っちゃったよ・・・ていうかへとへとじゃなかったのか（汗）」
「それにゴウカザル達の応援しなくて良いのか？」ラグラージとピカチュウがツッコミいれたり疑問に思った事を言ったりした。
「選手村のテレビでもトーナメントの状況を知る事が出来るから良いんじゃないか？それより早く行かないとあの二人に飯全部食われちまうぞ？」「それは断固阻止しなくては！」
リザードン達もバクフーンとグラエナのあとを追いかけた。

第五十五話ポケモンリーグ決勝トーナメント初戦！チームブラストＶＳチームメテオ

第五十五話完成です！

第五十六話チーム業火敗北！？（前書き）

チームメタルに見事勝ち第二回戦に進出する事が出来たバクフーン達！
バクフーン達に続こうとゴウカザル達も気合いが入っていた。

第五十六話チーム業火敗北！？

「美味い♪さっすがジュカインさんだぜ♪」
バクフーン達はチームメタルとの死闘に勝利したあと、選手村に戻りジュカインが作ってくれた料理を食べていた。
「おいバクフーン。あんまり慌てて食べると・・・」
「・・・んぐっ！？」
バクフーンは食べ物を喉に詰まらせた。かなり苦しそうだ。
「だから言わんこっちゃない！ほら水！」
リザードンはバクフーンに水を飲ませた。
「ぷはぁ～・・・あ～死ぬかと思った（汗）」
「・・・にしてもお前は元気だなぁ？ついさっきメタグロス達とバトルしたばっかりなのに。」
「それほどでも♪」
「いや誉めてないし。」リザードンがバクフーンにツッコミをいれた。
「そういえばゴウカザル達の試合どうなったかな？」
ラグラージはテレビをつけた。
「・・・さぁ白熱したバトルが展開されてきた決勝トーナメント初戦。
チーム業火ＶＳチームノーマルの試合もいよいよ大詰め！互いに残った人数は一人！この戦いで決着がつきます！」
テレビをつけると実況のロトムのＬＯＬＯの熱い解説が聞こえた。
ゴウカザル達の試合もいよいよクライマックスを迎えたようだ。チーム業火の最後の一人はゴウカザル。相手のチームノーマルはカビゴンだ。
「おっゴウカザルじゃん♪」
「相手はノーマルタイプのカビゴンか。これは素早いうえに格闘タイプも持っているゴウカザルが圧倒的有利だな。」

誰もがゴウカザルの圧勝だと思っていた。だが、試合が始まってから10分。ゴウカザルはなかなかカビゴンに決定打を決められないでいた。

「クソ！マッハパンチ！」ゴウカザルはマッハパンチでカビゴンを攻撃した。高速で繰り出されるパンチがカビゴンの腹部に直撃した！

「何度やっても無駄だべよ～！」

確かにマッハパンチは直撃したのだが、カビゴンのぶよぶよの脂肪が衝撃を吸収してしまいダメージを与えられなかった！

「火炎放射！」

ゴウカザルは一度カビゴンから離れて今度は物理ではなく特殊技の火炎放射で攻撃した！火炎放射はカビゴンに直撃した。だが・・・

「何かやったべか？」

カビゴンの特性暑い脂肪で炎技の威力が半減してしまいこれもあまりダメージを与えられなかった。しかもカビゴンは道具の食べ残しで徐々に体力を回復していく。

「この野郎・・・俺は・・・こんなところで負けられねぇんだよ・・・バクフーンと戦うまで負けられねぇんだよ！！」

ゴウカザルはカビゴンに向かって走り出した。

「のしかかりだべ！」

カビゴンはゴウカザルに向かってジャンプしてのしかかろうとした。

「これで決めてやる！マッハパンチからインファイト！！」

ゴウカザルはのしかかろうとしてきたカビゴンにマッハパンチのスピードを利用した超高速インファイトを繰り出した！

「だから無駄だって言ってるべ！」

ゴウカザルの超高速インファイトはやはりカビゴンの脂肪で衝撃が吸収されてしまい大きなダメージを与える事が出来なかった。そしてゴウカザルにカビゴンののしかかりが決まった！

「がはっ・・・」

ゴウカザルは気絶した。

「ゴウカザル選手戦闘不能！よって勝者チームノーマル！」

チーム業火が敗れてしまった！
「嘘だろ・・・ゴウカザルが・・・負けた・・・」バクフーンはゴウカザル達の敗北にかなり驚いている。その時バクフーンはいきなり立ち上がり部屋を出ようとした。
「ちょっとバクフーン！？何処に行くの？」
「ゴウカザル達の所に決まってんだろ！お前らは待っててくれ！」
そう言ってバクフーンは部屋を飛び出した。
「バクフーン・・・」
「信じられないんだろ。ライバルのゴウカザルが負けた事が・・・」

「ゴウカザル！」
バクフーンはゴウカザル達の所に駆け寄った。
「バクフーン・・・」
ゴウカザルはかなり負けた事がショックだったのであろう。いつもの元気なゴウカザルはそこにいなかった。
「ゴウカザル・・・その・・・」
バクフーンはゴウカザルにどう言葉を掛ければ良のいか解らないようだ。
「・・・はは。ダッセェ～よな？お前に初戦敗退すんなって言っておいて自分が初戦敗退してんだからよ・・・」
「ゴウカザル・・・」
しばらく二人の間に沈黙が続いた。
「・・・でもさ。」
その時ライチュウが沈黙を破った。
「あいつら絶対なにか細工してるぜ？」
「細工？」

「俺はチームノーマルのザングースと戦ったんだが・・・奴の切り裂く攻撃が俺の右手にかすった時があったんだ。普通の切り裂くなら何も追加効果が無い筈だろ？なのに・・・奴の切り裂くを受けた俺の右手は麻痺したみたいに痺れて動かす事が出来なくなっちまったんだ。」

「えっ！？それは絶対変だろ！？何でお前ら審判のハッサムに言わなかったんだよ？」

「・・・相手が卑怯な方法でこようが俺達は真っ向勝負で挑む。それがチーム業火のやり方だ。負けたのは相手が卑怯だからじゃなくて俺達の実力不足だった。ただそれだけさ・・・」

「ゴウカザル・・・」

「・・・俺達はそろそろポケモンセンターに行くよ。傷の手当てをしてもらわないといけないから・・・バクフーン。チームノーマルには気をつけろよ・・・」

ゴウカザルはバクフーンにそう言うと仲間を連れてポケモンセンターに向かって行った。

「・・・ゴウカザル・・・お前達の分も俺頑張るからな！」

バクフーンはそう決意したあと皆がいる選手村に戻って行った。

時間は午後五時三十分。決勝トーナメント初戦も全てが終了した。フライゴン達やカイリュー達も初戦を突破した。今は明日の大会の組み合わせの発表を皆揃ってポケモンセンターで待っていた。

「ゴウカザルさん残念でしたね・・・」

「ポケモンリーグでは何が起きるか解らない。それが面白くもあり怖いところなんだよ。」

その時ハピナスがやって来た。明日の組み合わせが決まったみたい

だ。
「皆さんお疲れ様です！明日のトーナメントの組み合わせが決定しました！それではスクリーンに注目して下さい！」
大きなスクリーンに明日のトーナメントで戦うチームの組み合わせが表示された。
「・・・俺らの相手はチームブリザードって奴らか。今回は身内戦は無いみたいだな？」
バクフーン達の相手はチームブリザードに決定した。フライゴン達は以前バクフーン達も戦った事があるチーム忍に決まった。そしてカイリュー達の相手は・・・
「僕達の相手はチームノーマルみたいだね。」
ゴウカザル達を倒したチームノーマルに決定した。
「チームノーマル・・・気をつけろよカイリュー。あいつらは何をしてくるか解らないぞ。」
「どういう事だいバクフーン君？」
バクフーンはゴウカザル達に聞いた事をカイリュー達に説明した。
「・・・そうなんだ。」カイリューはいつもと変わらず笑顔で答えた。
「だから気をつけろよ」
「うん。教えてくれてありがとうバクフーン君。でも心配しなくても良いよ。僕達は負けたりしないから。それじゃあバクフーン君。それにフライゴン君。明日もお互い頑張ろうね。」
そう言ってカイリュー達は選手村に戻ろうとした。ポケモンセンターの出入口付近まで来た時、カイリューが突然バクフーン達の方に振り向いた。
「そうだバクフーン君。明日は僕の本気を見せてあげるよ。楽しみにしててね。」
カイリュー達はポケモンセンターを出ていった。「カイリューさんの本気って・・・今まで本気じゃなかったって事でしょうか？」
フライゴンは首を傾げながら言った。

「明日になれば解るだろ。今日はとにかく明日に備えて休もうぜ？」
「そうですね。それじゃあバクフーンさん。また明日会いましょう！」
バクフーン達は疲れを癒す為に早めに選手村に戻って行った。
翌日。
「さぁポケモンリーグ決勝トーナメントも第二回戦となりました！第二回戦最初の対戦はチーム龍とチームノーマルの対決だ！」
ロトムのＬＯＬＯの実況と共にカイリュー達チーム龍とカビゴン達チームノーマルがフィールドに現れた。バクフーン達とフライゴン達は自分達の試合が始まるまで観客席から応援する事にした。
「これよりチーム龍ＶＳチームノーマルの試合を始めます！両チーム最初の選手はバトルフィールドへ！」
チームノーマルからはザングースがバトルフィールドに入った。
「・・・本当に行くのか？」
「うん。ガブリアス達はゆっくりしてて良いよ。・・・今日の僕は本気だから。」
カイリューは笑いながら言っている。どうやら最初に戦うのはカイリューのようだ。
「いきなりカイリューが出んのか！？」
バクフーン達は驚いている。
「カイリュー選手ＶＳザングース選手！試合開始！」カイリュー達の試合が始まった！

第五十六話チーム業火敗北！？（後書き）

第五十六話完成です。

第五十七話カイリューの本気！決勝トーナメント第二回戦！（前書き）

ゴウカザル達がまさかの敗北をしてしまった！
バクフーンはゴウカザル達の分も頑張ると決意してチームノーマルとの対決を望んでいたがチームノーマルの対戦相手はカイリュー達に決定した。バクフーンはカイリューにチームノーマルが何か卑怯な手段を使ってバトルしてくる事を告げるとカイリューはバクフーンに自分の本気を見せると言った。果たしてカイリューの本気とはどれ程のものなのか？

第五十七話カイリューの本気！決勝トーナメント第二回戦！

「くらえ！切り裂く攻撃！」
ザングースの鋭い爪がカイリューに迫る！
「・・・」
カイリューは避けようとはせずに左腕で切り裂く攻撃を受けた！
「・・・ふっ。」
切り裂く攻撃が直撃した瞬間ザングースはニヤリと笑った。そしてザングースはカイリューから離れた。
「・・・」
カイリューは切り裂くを受けた左腕を動かそうとしてみた。だが、左腕は麻痺したように全く動かなかった！左腕は力無く垂れ下がっている。
「ふ～ん。バクフーン君が言ってた事は本当みたいだね。左腕が動かないや。」
明らかにカイリューが不利な筈なのにカイリューは表情ひとつ変えない。「次は右腕をやらせてもらう！」
再びザングースがカイリューに向かって切り裂く攻撃を仕掛けようとした。だが！
「う～ん。やっぱり片腕が使えないのは不便だなぁ。」
いつの間にかザングースの背後にカイリューがいた！
「なっいつの間に！？」
ザングースはもう一度カイリューに向かって行こうとした。
「・・・悪いけど君はもう負けてるよ。」
カイリューがそう言った瞬間ザングースは倒れてしまった！その瞬間会場が静寂に包まれた。
「ハッサム。コールまだ？」
「あっ！ザ、ザングース選手戦闘不能！」
「い、今何が起きたんだ・・・皆解ったか？」

「い、いえ・・・」
皆カイリューが何をしたのか全く解らないようだ。ただ一人を除いて。
「・・・さすがだなカイリュー。あんな速い燕返し初めて見たぜ。」
「燕返し!?今カイリューは燕返しを使ってたの!?」バクフーンだけはカイリューの動きが見えていた。
「ねぇ?次の相手はまだ?早くやろうよ。」
カイリューは余裕の表情で相手チームに言っている。
「次はオラが行くべ!」カビゴンがバトルフィールドに入った。
「カイリュー選手VSカビゴン選手!試合開始!」「のしかかりだべ!」
試合開始の合図と同時にカビゴンがカイリューにその太った体型からは想像出来ないスピードで飛びかかった!そしてドシンッと会場に衝撃音が響いた。
「どうだべ!オラののしかかりを受けて無事でいられた奴はいないんだべ!」
「受けたらね。」
またいつの間にかカイリューはカビゴンの背後にいた。
「なっ!?」
「さっきのザングース君といい君といい・・・何でそんな違法行為をするの?」
「な、何を言ってるべ!?」
「まずさっきのザングース君の爪には相手を痺れさせる作用がある物が塗られている。痺れ粉か何かを液状にすればそれは可能だし。それと君は誰かにツボを突く技を試合前にやってもらったんでしょう?だから普通のカビゴンではあり得ない俊敏な動きが出来るんだ。何か間違ってるかい?」
ツボを突く。それは対象者の能力を大幅に上げる技である。
「オ、オラ達はそんな事しねぇべ!」
カビゴンはそう言っているが明らかに動揺している。

「このポケモンリーグは神聖な大会なんだ。その大会を汚すような事はしないでもらいたいな。」「だから、オラ達はそんな事はしねぇって言ってるべ！のしかかり！」
カビゴンはカイリューに再びのしかかり攻撃を仕掛けようとした。
カビゴンの巨体が空高く飛びあがりカイリューめがけて落下していく！
「素直に答える筈が無いか・・・」
そう言いながらカイリューは右手に力を込め始めた。そしてカビゴンの巨体が目の前まで来たその時！カビゴンは一瞬にしてフィールドの外の壁まで吹き飛ばされた！
「気合いパンチ・・・」カイリューは高速でカビゴンに気合いパンチを決めたのだ。
「つ・・・強すぎる・・・べ・・・」
カビゴンは倒れた。
「カ、カビゴン選手戦闘不能！」
カイリューの圧倒的な強さに観客はどよめいている。その後もチームノーマルからはケッキング、キリンリキ、ビーダルが出で来たがいずれもカイリューに一瞬で倒されてしまった。
「あとは君だけだね？」チームノーマル最後の一人はドーブルだ。
「あんたが強いのは知ってたがここまで強いとは予想出来なかったなぁ。せっかく俺が皆に細工したのに全部倒しちゃって・・・」
どうやらこのドーブルが主犯のようだ。
「どうしてそんな違法行為をするんだい？」
「勝ちたいからに決まってんじゃん！それにポケモンリーグ優勝トロフィーにはかなりの値がつくからね。売ったら一生遊んで暮らせる金が手に入るんだぜ？」
「・・・」
穏やかだったカイリューの目つきが鋭くなった。
「そんなくだらない理由でポケモンリーグに参加するなよな・・・僕は宣言するよ。君とのバトル・・・5秒で終わらせてあげる。」

そう言い終えた時、カイリューの身体から金色のオーラが出現した。
「ドーブル選手ＶＳカイリュー選手！試合開始！」
「逆鱗！！」
カイリューは試合開始と同時に逆鱗を発動した。怒り狂うかの如くドーブルに向かって行く！
「何が５秒で終わらせるだ！守る！」
ドーブルは守るを発動させた。ドーブルの目の前にバリアのような光の壁が出現した。
「この守るを破る事は・・・」
「ウオォォォ！！！」
カイリューは鋭い爪を光の壁にぶつけた！すると、光の壁にどんどん亀裂が生じていく！
「そんな！？守るが破られる筈が・・・」
次の瞬間守るで作った光の壁が破壊された！そしてそのままカイリューはドーブルを攻撃した。攻撃を受けたドーブルはフィールドの外に吹き飛ばされ壁に激突した。
「がはっ・・・」
ドーブルは倒れた。試合開始からわずか５秒。カイリューの宣言通りになった。
「ドーブル選手戦闘不能！よって勝者、チーム龍！」
カイリュー達は準決勝進出を決めた！バトルが終わったと同時にカイリューの身体から発せられた金色のオーラが消えた。
「ふぅ～・・・」
「お疲れカイリュー。珍しいな？お前があんなに怒るなんて？」
「そりゃ僕だって怒る時はあるよ。」
「お～い！」
カイリューは観客席からバクフーンが呼んでいる事に気づいた。カイリューはバクフーン達の所に向かった。
「さすがだぜカイリュー！さっき出したあのオーラ。お前の父さんと同じやつか？」

「そうだよ。うちなる波動の力を解放して身体能力を高めたんだ。」
「・・・身体能力を高めなくても充分強いと思うんだけど（汗）」
小言でラグラージが言った。
「なぁカイリュー。その左腕大丈夫か？」
バクフーンはカイリューの麻痺した左腕を指差した。
「まだ動かせないけど、ポケモンセンターで治してもらうから大丈夫だよ。それよりバクフーン君、次は君達の出番だよ。頑張ってね。」
「おう♪」
バクフーンにそう言うとカイリュー達はポケモンセンターに向かいました。
「良し！俺らも行こうぜ！」
バクフーン達は次の試合に出る為にバトルフィールドへ向かう事にした。

「只今より、チームブラストＶＳチームブリザードの試合を始めます！両チーム、最初にバトルする選手はバトルフィールドへ！」
審判のハッサムがそう言うとチームブリザードからはユキノオーがバトルフィールドに入った。
「バクフーン。本当にやんの？」
「おう！カイリューがやったんだ！俺だって負けてられねぇからな！」
「はぁ・・・解ったよ。でも無理しないでよ？」
「解ってるって♪」
どうやら最初からバクフーンが出るようだ。
「バクフーン選手ＶＳユキノオー選手！試合開始！」バクフーンと

ユキノオーのバトルが始まった。
「凍りつくが良い！」
試合開始と同時にユキノオーは凄まじいブリザードを発生させた！
バトルフィールドは一瞬にして真っ白な世界に豹変した！バクフーンはブリザードを受けて凍り漬けになっていた。
「ギガインパクト！！」ユキノオーは一気に勝負を決めようと凍り漬けになっているバクフーンに向かってギガインパクトで突っ込んで行った！
「火炎車！」
その時、凍り漬けだったバクフーンは火炎車を発動して氷を溶かした！そしてバクフーンは炎の火力を更に上げて真っ白に染まったバトルフィールドを今度は真っ赤な炎で埋めつくした！熱いのが苦手なユキノオーはこれにより集中力を失いギガインパクトを途中で止めてしまった。
「今だ！電光石火！」
バクフーンは火炎車を維持したまま電光石火でユキノオーを攻撃した！電光石火と火炎車のコンビネーションは直撃！この攻撃を受けたユキノオーは吹き飛ばされた！
「おまけの一発！火炎放射！」
バクフーンは更に火炎放射を放ちユキノオーに決めた！ユキノオーは火炎放射を受けた事で真っ黒焦げになって倒れた。
「ユキノオー選手戦闘不能！」
「うっし！まず一勝！」バクフーンが勝利した瞬間観客が歓声をあげた。「次は俺だ！」
チームブリザードからパルシェンがバトルフィールドに入って来た。
「バクフーン選手ＶＳパルシェン選手！試合開始！」先手必勝と言わんばかりに、バクフーンは電光石火でパルシェンに突っ込んで行った！
「殻に籠る！」

パルシェンはその硬い殻を閉じて自身の防御力を高めた。バクフーンはお構い無しに殻に向かって頭突きをした！
「痛っ！？硬すぎるだろお前の殻！？あ～イテテテ・・・」
バクフーンは頭を押さえながら痛みに耐えている。

「隙あり！氷柱針！」
パルシェンはバクフーンに針のように鋭く尖らせた氷を射出した！
しかも五発も！
「うおっ！？」
バクフーンはこの五発全てを紙一重で避けた！

「このっ！火炎放射！」バクフーンは火炎放射で反撃した。だが、再びパルシェンは殻に籠って火炎放射から身を守った。だがバクフーンはそのまま火炎放射をパルシェンに浴びせ続けた。すると、パルシェンの殻がどんどん赤くなっていく。熱い炎を浴び続けたせいでかなりの高温になっているのだ。そして殻の中はもう灼熱地獄！とても我慢出来ずパルシェンは殻に籠るを解除した。
「もらったぁ！オーバーヒート！！」
バクフーンは火炎放射から更に威力の高いオーバーヒートを放った！オーバーヒートはパルシェン本体に直撃した！パルシェンは倒れた。
「パルシェン選手戦闘不能！」
「よっしゃ！」
今日のバクフーンは絶好調のようである。これで二連勝だ！チームブリザードとしてはここで流れを変えたい為、チームブリザードのリーダーがここで出てきた！そのリーダーはルージュラである。
「あんたの快進撃もここまでよ。私の魅力であなたを悩殺してあげる。」ルージュラはセクシーポーズをとった。おまけにウインクまでして。
（な、何だこいつ？）

バクフーンは少し戸惑っている。
「バクフーン選手ＶＳルージュラ選手！試合開始！」試合開始と同時にルージュラが物凄い勢いでバクフーンに向かって走って来た！
「悪魔のキッスを受けてもらうわ～！」
ルージュラはバクフーンにキスをしようと顔を近づけて来た。

「ぎょっ！？」
バクフーンはすぐにルージュラから電光石火で離れた。
「待ちなさ～い！！」
ルージュラがしつこく追いかけて来た！
「マジこっち来んなお前！？火炎放射！！」
バクフーンは火炎放射を放った。しかしこのルージュラ、意外にもフットワークが軽く火炎放射をあっさり避けてしまった。そして再びバクフーンにキスをしようと顔を近づけて来た。
「フレアドライブ！！」バクフーンは炎の鎧を身に纏ってルージュラを近づけさせないようにした。氷タイプのルージュラは炎が苦手なので一度バクフーンから離れた。
「もう！悪魔のキッス受けなさいよ！」

「断る！絶対断る！」
「遠慮なんかしないで良いのに・・・私のキスを受けたら天にものぼる程気持ち良くなるのよ～？」再びルージュラはウインクをした。
「ぞわっ！？」
バクフーンは鳥肌がたった。
「あ～もう！調子狂うなぁ！こうなったらこれだ！噴火！！」
バクフーンは噴火を発動させた！炎の雨がルージュラに降り注ぐ！
「守る！」
ルージュラは守るを使って噴火を防御した。
「守るが使えんのか！」
「今度は逃がさないわよ！サイコキネシス！」

ルージュラはサイコキネシスを使ってバクフーンの動きを封じようとした。だがバクフーンは電光石火で素早く動き、サイコキネシスが決まらないようにした。そしてバクフーンはルージュラの背後に！
「もう一発噴火だぁ！」再びバクフーンは噴火を発動させた。先ほど守るを使ったばかりなのでもう一回使おうとすれば失敗する可能性が高いので、ルージュラは守るを使わずサイコキネシスを使って噴火を停めた！時間が停まったように静止した噴火の炎をルージュラはバクフーンに向かって放った！だが、そこにはバクフーンはもうすでにいなかった！
「一体何処へ！？」
「ここだぁ！穴を掘るから火炎車！！」
次の瞬間バクフーンが地面から現れた！穴を掘るで地面に潜っていたのだ！そして火炎車を発動してルージュラを攻撃！この奇襲をルージュラは回避する事が出来ずに攻撃をまともに受けた！
「これでフィニッシュ！火炎放射！！」

更にバクフーンは至近距離で火炎放射をルージュラに決めた！ルージュラはバトルフィールドの外まで吹き飛ばされた。
ルージュラは倒れた。
「ルージュラ選手戦闘不能！」
これでバクフーンは三連勝だ！相手チームのリーダーを倒した事でバクフーンは更に勢いがついてそのまま残りの相手を倒してしまった。
「試合終了！勝者チームブラスト！」
バクフーン達は準決勝進出を決めた！
「うっしゃ～！！」
バクフーンはガッツポーズをして喜んだ。
「本当にバクフーン一人で勝っちゃったよ（汗）」
「まぁ相性が良かったって事もあるからなぁ。」ラグラージとリザードンがそんな会話をしているとバクフーンが帰って来た。

「勝ったぜ皆♪俺かっこよかっただろ?な?な?」
「調子に乗らない！」
ラグラージがバクフーンにツッコミをいれた。
「バクフーンさん。お疲れ様です。」
フライゴンがバクフーンに声をかけた。
「次はフライゴン達の出番だな！頑張れよ！」
「はい！」
このあとのフライゴン達の試合をバクフーン達は観客席から応援する事にした。そしてフライゴン達チーム竜星と相手チームの忍の試合が始まった。お互いに一歩も譲らない激しいバトルだったが最後にフライゴンがきっちりと決めてチーム竜星も準決勝進出を決めた。
試合が終わったその日の夜。皆明日の準決勝の組み合わせの発表をポケモンセンターで待っていた。しばらくバクフーン達はフライゴン達やカイリュー達と会話を楽しんでいた時、ハピナスがロビーにやって来た。
「皆さんお待たせしました！明日の準決勝の組み合わせが決定しました！それではスクリーンにご注目下さい！」
ポケモンセンターにある大きなスクリーンに残り四チームの対戦の組み合わせが表示された。その組み合わせは・・・
「・・・俺達の相手はフライゴン達か・・・」
バクフーン達の相手はフライゴン達に決まった。カイリュー達は別のチームとの対戦になった。
「そういえば俺とフライゴンの最初の対決は引き分けだったな?明日の準決勝、決着をつけようぜ！」

「もちろんですよ！ただし、勝つのは俺達ですよ！」
「そのセリフそっくりお返しするぜ！勝つのは俺達だ！」

翌日。
「それではこれより、チームブラストＶＳチーム竜星の準決勝を開始致します！最初にバトルする選手はバトルフィールドへ！」
「スターミー！最初のバトルは君に任せたよ！」
「・・・」
スターミーは無言のままバトルフィールドに入った。
「やっぱり喋ってくれないんだね（汗）」
一方バクフーン達の方はラティオスが最初にバトルするようだ。
「兄さん！頑張ってね！」
「あぁ！それじゃあ行ってくる！」
ラティオスはバトルフィールドに入った。
「ラティオス選手ＶＳスターミー選手！試合開始！」遂にバクフーン達とフライゴン達の試合が始まった！勝つのバクフーン達か？それともフライゴン達か？

第五十七話カイリューの本気！決勝トーナメント第二回戦！（後書き）

第五十七話完成です！

第五十八話ポケモンリーグ準決勝！チームブラストＶＳチーム竜星！（前書き）

準決勝の相手はフライゴン達チーム竜星！果たして勝つのは？

第五十八話ポケモンリーグ準決勝！チームブラストＶＳチーム竜星！

「１０万ボルト！」
ラティオスは試合開始と同時に水タイプに効果がある電気技の１０万ボルトをスターミーに放った！だが、スターミーも１０万ボルトを使ってラティオスの攻撃にぶつけた！そして大きな爆発が発生した。二人の技は相手にダメージを与える事が出来なかった。
「ならこれだ！シャドーボール！」
今度はラティオスがゴーストタイプの技シャドーボールを放った！スターミーは水タイプに加えてエスパータイプも持っている為、この攻撃も効果があるのだ。黒いエネルギーの塊がスターミーに向かって行く。しかしスターミーもシャドーボールを放って先ほどの１０万ボルトのようにまた二つの技はぶつかり合い爆発した。
「・・・」
スターミーはやはり無言のままだ。
「冷凍ビーム！」
ラティオスは冷凍ビームを放った！だが、やはりスターミーもラティオスと同じ技で反撃してきた。冷凍ビームがぶつかり合うとバトルフィールドの中心に大きな氷の柱が出来た。
「サイコキネシス！」
ラティオスはその大きな氷の柱をサイコキネシスで浮かばせてスターミーに向かって放った！
スターミーもサイコキネシスを使って向かって来た大きな氷の柱をバトルフィールドの外に吹き飛ばした！
「このスターミー・・・やるな・・・だが、この技だけはお前には使えまい！ラスターパージ！」ラティオスは眩い光の鎧を身に纏いスターミーに向かって突っ込んで行った！
「・・・！」
その時、突然スターミーの身体から光が発生した！そしてその光は

まるでラティオスのラスターパージのように光の鎧みたいになった！光の鎧を身に纏ったスターミーはラティオスに向かって行き、お互いにぶつかり合った！

「こいつ！？まさかモノマネが使えたのか！？」

モノマネとは相手が使った技をしばらくの間コピーして自分の技として使う事が出来る技なのだ。ラスターパージとラスターパージがぶつかり合った事で二人には身体に衝撃が起こり二人は吹き飛ばされた。

「くっ！？」

ラティオスはなんとか踏ん張った。それはスターミーも同じく。

「いくらお前でもドラゴンタイプの技は使えないだろ！竜の波動！」

ラティオスは竜の波動を放った！スターミーはその特徴的な星型の身体を高速回転させはじめた。これは高速スピンと言う技だ。スターミーは高速スピンを使ってまるでフリスビーのように空を飛んで竜の波動を回避した。そして高速スピンしたままラティオスに向かって行った！

「守る！」

ラティオスは守るを発動した。ラティオスはバリアのような光の壁に包まれた。そしてスターミーの高速スピンはその光の壁に阻まれてラティオスに直撃させる事が出来なかった。

「今だ！１０万ボルト！」守るに阻まれバランスを崩したスターミーにラティオスは１０万ボルトを決めた！だが、スターミーはこの攻撃を耐えきった！そして次の瞬間、スターミーの身体が光輝き始めた。そしてみるみるうちにスターミーの身体の怪我が治っていった！

「自己再生か・・・ならばこの技だ！回復封じ！」ラティオスは回復封じを発動した。これでしばらくの間スターミーは自己再生での回復が出来なくなった。

「シャドーボール連弾！」ラティオスは一気に勝負を決めようとシャドーボールを連発した！それにたいしてスターミーは冷凍ビームを地面に放って目の前に巨大な氷の壁を作ってシャドーボールを防御した。シャドーボールを受けた事で氷の壁は崩壊した。それと同時にスターミーはラティオスに向かって冷凍ビームを放った！

「１０万ボルト！！」

ラティオスは相撃ち覚悟で１０万ボルトを放った！１０万ボルトはスターミーに直撃したが、ラティオスも冷凍ビームを受けてしまった！

「・・・」

「・・・お前もな・・・くっ・・・」

ラティオスとスターミーは倒れた。

「両者戦闘不能！」

「ラティオス！？」

「スターミー！？」

ラティオスの所にバクフーン達が駆け寄った。

フライゴン達もスターミーの所に駆け寄った。

「兄さん！大丈夫？」

「あ、あぁ・・・」

バクフーン達はラティオスを連れてバトルフィールドから離れた。

「ゆっくり休んでてよラティオス。次は僕が行くから。」

次はラグラージがバトルに出るようだ。ラグラージはバトルフィールドへ向かった。

「ねぇ兄さん。さっき何をスターミーさんと話してたの？」

「あぁ・・・あいつが俺に強いなってテレパシーで言ったから俺もあいつにお前もなって言っただけさ・・・」

「スターミーさん喋ったんだ（汗）」

バトルフィールドにはラグラージ。そしてミミロップがいた。
「女だからって甘く見ないでよ！」
そう言ってミミロップは自前の黒い鉄球を軽く持ち上げた。
「・・・相変わらず怖いな（汗）」
「ラグラージ選手ＶＳミミロップ選手！試合開始！」
「おらぁぁぁ！！」
試合開始と同時にミミロップが黒い鉄球を振り回しながらラグラージに向かって走りだした！
「うわっ！？鬼が来た！？」
「誰が鬼じゃこらぁぁぁ！！」
ミミロップは凄い形相で黒い鉄球をラグラージに振り落とした！
「アームハンマー！！」ラグラージはアームハンマーで黒い鉄球を打ち砕いた！
「もう一発アームハンマー！」
ラグラージは連続でアームハンマーで攻撃した。
「スカイアッパー！！」ラグラージのアームハンマーにたいしてミミロップはスカイアッパーで対抗した。二人の拳はぶつかり合った。パワーは互角だ！

「やるじゃないの！だけどね・・・私がパワーだけでバトルすると思ったら大間違いよ！」
次の瞬間ミミロップの拳から冷気が発生した。これは冷凍パンチだ！ミミロップの拳から発生した冷気がラグラージの拳を凍らせ始めた！
「ハイドロポンプ！」
ラグラージは冷静にハイドロポンプを放ってミミロップを自分から

遠ざける為に吹き飛ばした！
「ふぅ～・・・危うく全身凍り漬けになるところだったよ・・・水鉄砲。」ラグラージは凍りついた拳に水鉄砲を放って氷を溶かそうとした。氷よりも水の方が温度が高いので氷はすぐに溶けた。
「もう！あんたのハイドロポンプのせいで私の綺麗な毛並がびしょ濡れじゃないの！」
ミミロップはラグラージのハイドロポンプのせいで確かにびしょ濡れになっていた。
「そんな事を言われても・・・バトルだからしょうがないと思うんだけど（汗）」
「うっさい！あんたは絶対ぶっ倒してやるんだから！高速移動！」
いつも綺麗に整えている毛並をびしょ濡れにされて怒ったミミロップは高速移動で素早くラグラージに向かって行った。
「冷凍ビーム！」
ラグラージは向かって来るミミロップに冷凍ビームを放った！
「私が使えるのは冷凍パンチだけじゃないのよ！炎のパンチ！」
ミミロップの拳から炎が出現した！炎のパンチでラグラージの冷凍ビームを打ち消しながら前に進むミミロップ。
「炎に氷じゃあ相性が悪いか！ならハイドロポンプで・・・」
「もう遅いわよ！スカイアッパー！！」
ラグラージが冷凍ビームからハイドロポンプに切り替えようとした時にはもうミミロップがラグラージの目の前まで来ていた！ミミロップのスカイアッパーがラグラージのあごに直撃！ラグラージは空中に吹き飛ばされた！
「まだまだぁ！飛び跳ねる！！」
ミミロップは空高くジャンプした。先程吹き飛ばしたラグラージをあっという間に追い抜いた！
「おらぁぁ！気合いパンチ！！」
ミミロップは渾身の一撃をラグラージに直撃させた！ラグラージは地面に叩きつけられた！

「ぐっ！？」
「トドメよ！ギガインパクト！！」
ミミロップは落下スピードを利用して最大パワーのギガインパクトでラグラージに向かって行く！
「ハイドロポンプじゃ間に合わない・・・なら！」次の瞬間ラグラージにミミロップの最大パワーのギガインパクトが直撃した！あまりに強い衝撃で地面に亀裂が発生した！
「くっ！？・・・カウ・・・ンター！！」
ラグラージは最後の力を振り絞り、受けたダメージを倍にして相手に返すカウンターでミミロップを攻撃！カウンターはミミロップに直撃し、ミミロップは空高く吹き飛ばされた！
「ハァ・・・ハァ・・・本当に・・・女の子・・・な・・・の・・・？」ラグラージは気絶した。その時、ミミロップが地面に落ちた。
ミミロップも気絶していた。
「両者戦闘不能！」
またしても両者引き分けになった！
二人が倒れた所に仲間達が駆け寄って安全な場所まで運んで行った。
「ラグラージ、ゆっくり休んでな。さて、次は誰が行くか？」
バクフーンがラグラージを休ませた後に皆に聞いた。
「そろそろ流れを変えないといけないよな？次は俺が出るよ。」
ピカチュウがバトルすると言った。
「お兄ちゃん大丈夫？次の対戦相手はあの人みたいよ？」
ピチューが指差す先にはグレイシアがいた。どうやら次はグレイシアがバトルするようだ。そしてグレイシアを見るやいなやいきなりピカチュウがグレイシアの所へ突っ走った！
「久しぶりだねグレイシアちゃん♪どうだい？バトルが終わった後に俺と・・・いやいや、僕と食事にでも行かないかい？そして・・・二人の未来の話でも・・・」
やはりピカチュウは可愛い子を見つけるとこうなってしまうようだ。
「お兄ちゃん！！」

ピチューが必殺耳を引っ張るをピカチュウに炸裂させようとしてピカチュウに近づいて行こうとした時、ピカチュウが戻って来た。若干しょんぼりした感じだ。
「どうしたの？」
「うぅ～あっさり断られた～（泣）だが！俺は諦めんぞ！あのグレイシアちゃんのクールな心を俺がホットに変えて・・・」ピカチュウがまた暴走し始めた。そこですかさずピチューが必殺耳を引っ張るを決めた！
「はいはい。今は試合に集中しましょうねぇ。」
「イタタタ！？わ、解ったから耳は引っ張らないでぇ！？」
その時、観客から笑い声が聞こえて来た。
「・・・えぇ・・・そろそろバトルを開始しても宜しいでしょうか（汗）」審判のハッサムがどのタイミングでバトルを開始すれば良いのか迷っていた。
「あっ悪い悪いハッサム！いつでも始めて良いぜ！」
ピカチュウがハッサムに言った。
「では・・・ピカチュウ選手ＶＳグレイシア選手！試合開始！」
ようやくピカチュウとグレイシアのバトルが始まった。
「先攻はグレイシアちゃんからどうぞ！レディーファーストだよ！」
やはり女の子にはかなり優しいピカチュウである。
「・・・随分と余裕なのね？だけど・・・いつまでその余裕が持つのかしら？」
その時、グレイシアの周りに小規模の吹雪が発生した。まるで吹雪の衣を纏ったようだ。吹雪の衣を纏った瞬間、グレイシアの周りのバトルフィールドが凍りついていく！「お言葉に甘えて私からやらせてもらうわよ！」次の瞬間グレイシアの強烈な吹雪がピカチュウに向かって来た！
「光の壁！」
ピカチュウは光の壁をジャンプ台にして空高くジャンプした！吹雪はなんとか回避したがピカチュウがバトルフィールドを見た時、バ

トルフィールド全体が完全に凍りついて氷のバトルフィールドと化していた！
「凄い威力の吹雪だな・・・こりゃ一発でもくらったら一瞬で凍りついちまうよ。」
「余所見しちゃダメよ？」突然ピカチュウの頭上の方から声が聞こえて来た！ピカチュウが上を見るとそこにはグレイシアが！
「なっ！？」
「冷凍ビーム！！」
グレイシアは冷凍ビームを放った！
「光の壁！！」
ピカチュウは光の壁を作り出した。そしてその壁をまたジャンプ台にした更に高く飛び上がり冷凍ビームを回避した。
「一体どうやってこんな高い所まで・・・ん？あれは？」
ピカチュウはグレイシアの足元に薄い氷の板のような物を確認した。
「バレちゃったみたいね。私は空気中の水分を凍らせる事が出来るの。その凍らせた水分を階段みたいにしてここまで昇って来たのよ。だけど、凍らせた水分はすぐに地上に落下しちゃうから長くはいられないんだけどね。」
そんな事を言いながらグレイシアは氷の階段を作ってどんどんピカチュウに迫って来る！
「１０万ボルト！」
ピカチュウは迫って来るグレイシアに向かって１０万ボルトを放った！だが、グレイシアは空気中の水分を凍らせて薄い板を作り、それをジャンプ台にして高くジャンプし１０万ボルトを回避した。
「今度はこっちの番よ。シャドーボール！」
グレイシアはシャドーボールを放ちピカチュウに決めた！ピカチュウは地上の方へ吹き飛ばされた！
「くっ！？身代わり！！」ピカチュウは身代わりで分身を作り出し、地面に激突しそうになったところを分身をクッションの代わりにして衝撃を和らげた。

「ふ～ん。身代わりで作った分身をクッションの代わりにするなんてね。」グレイシアは吹雪を使って着地する時の衝撃を和らげて着地した。
「空中戦は負けたけど、地上戦なら負けないからな！電光石火！」
ピカチュウは電光石火でグレイシアに向かって行こうとした。
「地上なら負けないか・・・それはどうかしらね？」
「うわっと！？」
ピカチュウは滑ってこけてしまった。最初にグレイシアが吹雪でバトルフィールドを凍らせていたのをピカチュウはすっかり忘れていたのだ。
「イテテ・・・すっかり忘れてたよ（汗）」
ピカチュウは立ち上がろうとしますが氷のせいでつるつる滑って上手く立てません。
「この氷のフィールドで私に勝てると思ったら大間違いよ。」
グレイシアはまるでスケートをするように氷のフィールドを滑りながらピカチュウに向かって行った！ピカチュウは回避しようとするがやはり不慣れな氷のフィールドのせいで上手く立てない！
「アイアンテール！」
グレイシアは優雅に氷のフィールドを滑りながらピカチュウにアイアンテールを決めた！ピカチュウは吹き飛ばされた！だが、ピカチュウに鋼タイプの技は効果は今ひとつなのでそれほどダメージは無かった。ピカチュウは反撃しようと踏ん張ってグレイシアに向かって行こうとするが氷のフィールドのせいで滑って踏ん張れずにバトルフィールドの外の壁まで吹っ飛ばされてしまった。
「くそ～！氷で滑るから上手く走れねぇ！」
「悪いけど、次で決めさせてもらうわよ！」
グレイシアがピカチュウに向かって来た！
「まずいな・・・ん？待てよ・・・走れねぇんだったら！」
ピカチュウは何か思いついたようだ。ピカチュウの後ろにある壁を思いっきり蹴って勢いをつけてグレイシアに向かって行った。

「「アイアンテール！」」ピカチュウとグレイシアのアイアンテールがぶつかり合った！これは相殺に終わった。そして二人は技の衝撃で吹き飛ばされた。
「ここで光の壁！！」
ピカチュウは光の壁を作り出し、それを蹴ってグレイシアのところへ滑りながら向かって行った！
「走れねぇならグレイシアちゃんみたいに滑れば良いんだ！方向転換するには光の壁を利用すれば良い！」
その時、ピカチュウの身体から電気がバチバチと鳴りながら放出され始めた！そしてその電気はピカチュウを包んでいく。まるで電気の鎧だ！
「ボルテッカー！！」
ピカチュウはボルテッカーを発動した！電気の鎧を身に纏ったピカチュウがグレイシアに迫る！
「吹雪！」
グレイシアは吹雪を発動した！だが、この吹雪は攻撃するために発動したようでは無いようだ。フィールド全体が吹雪に覆われ観客やバクフーン達はピカチュウとグレイシアの姿を見失ってしまった。
「うわっ！？全然フィールドが見えなくなっちまった！？バトルはどうなってんだ？」

「・・・どうなってんだよ・・・これは・・・」吹雪の中ではピカチュウとグレイシアのバトルは続いていた。ピカチュウは戸惑っている。何故なら、グレイシアが何人もいるからだ！
「どう？私のミラーコートを使ったこの戦法は？」ミラーコート。本来は相手の特殊技、例えば１０万ボルトや火炎放射などの技でダ

メージを受けた時にそれを倍返しにして相手を攻撃する技だ。
グレイシアはこのミラーコートをまるで鏡のように自分を映して何人もいるように見せているのだ。普通ならすぐにバレてしまうが、吹雪で視界が悪くなっているので見分ける事が出来ないのだ。「くっ・・・これが本物か!?１０万ボルト!」
何人もいるグレイシアのうちの一人に１０万ボルトを放った!
「・・・残念。それはハズレよ。言い忘れてたけど、本物の私以外の私に攻撃すると・・・」
偽物のグレイシアに放った１０万ボルトがピカチュウに倍返しになって跳ね返って来た!
「ぐわぁぁ!?」
「あなたがダメージを受ける事になるわよ。」
本物以外はミラーコートなのでそれに攻撃すると特殊技が全て倍返しで反射してくるのだ。
「イタタタ・・・そうか。本物以外はミラーコートなんだよな・・・何やってんだ俺は（汗）対処方法は簡単じゃないか!電光石火!」
ピカチュウは電光石火で向かって行った。
ミラーコートは特殊技を反射出来るが、物理技は反射出来ないのだ。
「まず一人目!」
ピカチュウの電光石火がグレイシアに直撃した。その瞬間そのグレイシアは鏡が割れたように砕けた。
「こうしてやって行けばいずれは本物に・・・」
「それはどうかしら?」グレイシアがそう言った時、砕いた筈のミラーコートが再び再生してまた元通りになってしまった!
「なっ!?」
「物理技での攻撃は正解だったけど・・・一人ずつやるって言うのは不正解よ。砕いたミラーコートはすぐに再生するの。私のこの戦法を攻略するんだったら本物の私を見つけるか・・・物理の全体技で攻撃するしか無いわよ。」
グレイシアは自信の現れなのか自ら攻略の方法を教えた。

「物理の全体・・・俺にはそんな技を使う事は出来ないけど・・・こういう事は出来る！高速移動から影分身！更に身代わり！」
ピカチュウは対ハガネール戦で使った高速移動と影分身、更に身代わりのコンビネーションでたくさんの実体を持った分身を作り出した！
「行くぜたくさんの俺！気合いパンチ！！」
無数にいるピカチュウ達がグレイシアめがけて気合いパンチで向かって行った！そして次々と気合いパンチが直撃し、ミラーコートを破壊していく。全てのミラーコートを破壊した時、ようやくピカチュウは本物のグレイシアを確認する事が出来た。
「そこかぁ！！」
無数のピカチュウ達が本物のグレイシアに向かって行く！
「・・・」
その時グレイシアはこの時を待っていたと言わんばかりにうっすらと笑みをこぼした。
それからしばらくするとバトルフィールドを覆っていた吹雪が徐々に晴れていく。そして吹雪が晴れ、見えてきたのは凍り漬けになっているピカチュウを余裕の表情で眺めているグレイシアだった！グレイシアは向かってきたピカチュウに最大パワーの吹雪を放っていたのだ。
「残念だったわね。ちゃんとミラーコート戦法を攻略された時の事も考えてるのよ。」
「そりゃそうだよな。だけど最後まで油断しちゃダメだぜグレイシアちゃん！ボルテッカー！！」突然地面からピカチュウが現れてグ

レイシアにボルテッカーを決めた！
グレイシアは空高く吹き飛ばされた！
「まだまだ！」
ピカチュウは尻尾をバネのように使い空高くジャンプ！そしてグレイシアの上を取るとクルクルと回転し始めた。
「トドメのアイアンテール！！」
遠心力を利用したアイアンテールがグレイシアに直撃！グレイシアは地上に吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」
「ど・・・どうして・・・あなたは確かに・・・吹雪を受けた筈なのに・・・」
「ハァ・・・ハァ・・・あれは俺の分身体さ・・・本体の俺は分身に隠れて穴を掘るを使っていたのさ・・・」
「・・・そうだった・・・の・・・」
グレイシアは気絶した。
「グレイシア選手戦闘不能！」
ピカチュウが勝利した！これでチームブラストが一歩リードした。
だが、ピカチュウは今のバトルで体力を大分消費したようでかなり苦しそうだ。「グレイシア。ゆっくり休んでね。ライボルト、頼むよ！」
「任せとけ。」
チーム竜星からはライボルトが出で来た。
「ハァ・・・ハァ・・・後の奴らの為にも・・・少しでも奴の体力を削らないとな・・・」
「ピカチュウ選手ＶＳライボルト選手！試合開始！」試合開始と同時にピカチュウは電光石火でライボルトに向かって行った！だが、最初に比べるとスピードが落ちている。やはり体力の限界が近いようだ。ライボルトはピカチュウの電光石火をあっさりと回避してしまった！
「へとへとのあんたに俺を倒す事は出来ないぜ！炎の牙！」

ライボルトの牙から炎が出現した。炎を纏った牙でピカチュウに噛みつこうとした！
「くっ・・・電光石火！」ピカチュウは炎の牙をなんとか電光石火で回避した。
「逃がすか！」
ライボルトは炎の牙を維持したまま電光石火でピカチュウを追った！
「ハァ・・・ハァ・・・ただじゃやられねぇぞ・・・せめて一発決めてやる！気合いパンチ！」
ピカチュウは真後ろに迫っているライボルトの方へ振り向いて今持てる全力の気合いパンチを叩きこもうとした。だが、先に炎の牙がピカチュウに直撃してしまった！
「ぐっ！？ま・・・まだだぁ！！」
ピカチュウは痛みを堪えて気合いパンチをライボルトに直撃させた！気合いパンチを受けたライボルトは吹き飛ばされた！「くっ！？まだそんな力が残ってたのか！？」
「へ・・・へへ・・・決めてやった・・・ぜ・・・」
ピカチュウはついに限界に達したのか倒れてしまった。
「ピカチュウ選手戦闘不能！」
「ピカチュウ！」
バクフーン達がピカチュウの所に駆け寄った。
「お兄ちゃん大丈夫？」ピチューが声をかけるがピカチュウからの返事は無い。どうやら気絶しているようだ。だが、ピカチュウの表情は何処か達成感を感じさせるような表情をしていた。
「ピカチュウのアニキ・・・アニキの思い、無駄にしないっすよ！バクフーンのアニキ！次は俺にやらせて下さいっす！」「解った！頼むぜグラエナ！」
「了解っす！」
次はグラエナがバトルするようだ。グラエナがバトルフィールドに入った。
「グラエナ選手ＶＳライボルト選手！試合開始！」「シャドーボー

ルっす！」試合開始と同時にグラエナはシャドーボールを放った！
「電撃波！」
シャドーボールに対してライボルトは電撃波で対抗した。二つの技はぶつかり合い爆発した。爆発が起きた事で爆煙も発生。お互いに相手の姿が見えなくなった。
「迂闊に動くと相手にチャンスを与え兼ねないな・・・ここは充電を使って次の攻撃に・・・」
ライボルトは爆煙が晴れるまでグラエナは行動しないと予想して充電を開始した。充電は次に使う電気技の威力が倍になる技だ。
「甘いっすよ！穴を掘るから氷の牙！」
突然地面からグラエナが現れた！グラエナはさっきの爆発の時に穴を掘るを使って地面に潜っていたのだ。ライボルトは充電を発動している為に動く事が出来ずグラエナの氷の牙を受けた！
「くっ！？なめるなぁぁぁ！！雷！！」
氷の牙に耐えながらライボルトは充電を完了！
最大パワーで雷を放った！充電を使ってからの雷は凄まじい威力だ！直撃すればグラエナはひとたまりもない！

「ラティオスのアニキに教えてもらったこの技を使うっす！守るっす！」グラエナは守るを発動してライボルトの雷を防御した！
「くっ！なら電光・・・」
「不意打ちっす！」
ライボルトが電光石火で攻撃しようとした時、グラエナが不意打ちで先制攻撃した！不意打ちを受けたライボルトは吹き飛ばされた！
「トドメのアイアンテールっす！！」
吹き飛ばされたライボルトを素早い身のこなしでグラエナが追い、アイアンテールを決めた！
ライボルトはフィールドの外の壁まで吹き飛ばされ激突した。ライボルトはなんとか立ち上がろうとするがピカチュウ戦で受けた気合いパンチのダメージが残っていたみたいでなかなか立ち上がれない。

「くそ・・・」
ライボルトは力尽きて倒れてしまった。
「ライボルト選手戦闘不能！」
「やった勝ったっす～♪」グラエナは今回のバトルでポケモンリーグ初勝利だったので凄く喜んでいる。
「やったなグラエナ！その調子で次も頼むぜ！」
「了解っすバクフーンのアニキ！」
「そう簡単に勝たせる訳にはいかないな・・・」グラエナが声がする方を振り向くとバシャーモがいた。凄い気合いが入っている。バシャーモの手首からは燃え盛る炎が溢れ出ている。
「グラエナ選手ＶＳバシャーモ選手！試合開始！」グラエナとバシャーモのバトルが始まった！
グラエナはすぐに飛びかかろうとしたが、バシャーモからのプレッシャーが強力でグラエナは動きを停めてしまった。
「どうした？何処からでもかかってこいよ。」
バシャーモはグラエナを挑発している。だが、グラエナは動かない。いや、動けないと言った方が正しいだろう。今仕掛ければ確実にやられるとグラエナは直感的に感じていたからだ。だからグラエナはバシャーモが動くのを待っている。バシャーモが攻撃する時の一瞬の隙を突くために。
「来ないなら・・・こっちから行くぞ！」
バシャーモが攻撃する体制に入った。
「今っす！不意打ち！」グラエナは先制技の不意打ちでバシャーモを攻撃しようとした！
「かかったな！」
バシャーモが攻撃しようとしたのはフェイクだった！バシャーモは自慢の脚力で空高くジャンプした。グラエナは勢いが付いているためすぐには停まれなかった！
「くらえ！ブレイズキック！！」
バシャーモの足から炎が出現した！全体重をかけたブレイズキック

がグラエナに直撃した！
「がはっ！？」
「もう一発ブレイズキック！！」
バシャーモは更にブレイズキックをグラエナに決めた！グラエナはバトルフィールドの外まで吹き飛ばされた！
「くっ・・・つ、強いっす・・・がくっ・・・」グラエナは倒れた。
「グラエナ選手戦闘不能！」
「あのバシャーモ・・・強いな。バクフーンじゃないが・・・なんだかワクワクして来たぜ！」
同じ炎タイプのリザードンはバシャーモとバトルしたくてしょうがないみたいだ。それはバクフーンも同じである。
「アイツともバトルしてぇけど・・・その前に決着つけないとならない相手がいるからな・・・」そう言ってバクフーンは相手チームのフライゴンを見た。
「リザードン。バシャーモの相手はお前に任せたぜ！」
「おう！」
リザードンがバトルフィールドに入った。
「あんたが俺の相手か・・・前からあんたとは一度バトルしたいと思ってたんだ。」

バシャーモがリザードンに言った。
「へぇ～。実は俺もバトルしたいと思ってたんだ。最初から全力でやるからバシャーモも全力で頼むぜ？」
「それはこっちのセリフだ。」
そう言った時、バシャーモの手首から炎が勢い良く燃え盛った！リザードンも尻尾の炎がいつもより大きな炎となって燃え盛っている。
二人とも気合いが入っている。
「リザードン選手ＶＳバシャーモ選手！試合開始！」
「「火炎放射！！」」
試合開始と同時に二人は火炎放射を放った！二つの火炎放射はバト

ルフィールドの中央でぶつかり合い、大きな火柱となって燃え盛った！
「互角か・・・なら別の技で！」
リザードンは空高く飛び上がった！
「エアスラッシュ！！」リザードンはエアスラッシュを放った！空気の刃がバシャーモに向かって行く！
「炎のパンチ！！」
バシャーモは炎のパンチでエアスラッシュを打ち消した！
「今度はこっちの番だ！」バシャーモはリザードンがいる所に向かってジャンプした。３０階建てのビルも楽に飛び超える事が出来る脚力を持つバシャーモはリザードンがいる所まで簡単にたどり着いてしまった！
「ブレイズキック！！」バシャーモの右足から炎が出現！リザードンの顔に向けてブレイズキックで攻撃した！
「させるか！」
リザードンはブレイズキックを左手で受け止めた！
「ドラゴンクロー！！」リザードンは右手でドラゴンクローを使いバシャーモを攻撃！
「なんの！」
リザードンのドラゴンクローをバシャーモは両手を使って防いだ！
「「火炎放射！！」」
再び二人は火炎放射を放った！二つの火炎放射はぶつかり合い巨大な火柱となった！この巨大な火柱の発生で二人は吹き飛ばされた！
リザードンは空を飛べるのですぐにバランスを立て直す事が出来た。だがバシャーモはそうはいかない。地上に向かってまっ逆さまだ！
「エアスラッシュ乱れ撃ち！！」
リザードンはチャンスとばかりにエアスラッシュを5発放った！
「ブレイズキック5連脚！！」
バシャーモは落下しながらもブレイズキックを使ってエアスラッシュを打ち消した！

「火炎放射！」
バシャーモは地面に向かって火炎放射を放ち衝撃を和らげて安全に着地した。

「俺のエアスラッシュはバシャーモに通用しないか・・・並の攻撃じゃダメならこれだ！オーバーヒート！！」
リザードンは火炎放射より強力なオーバーヒートを放った！
「ならこっちもオーバーヒートだ！！」
バシャーモもオーバーヒートを放った！二つのオーバーヒートはぶつかり合い凄まじい爆発が発生した！
「今だ！」
リザードンは爆発でバシャーモがこちらの事を見失っている間に急降下して一気にバシャーモに近づきドラゴンクローを決めようとした。
「くらえドラゴンクロー！！」
「むっ！」
ドラゴンクローが当たりそうになった時、バシャーモは紙一重で避けた！
「ちっ！」
「ブレイズキック！」
バシャーモの反撃のブレイズキックがリザードンの顔に直撃した！
リザードンは負けじと自分の尻尾をバシャーモの顔に叩きつけて反撃した！痛み分けに終わった二人はバトルフィールドの外まで吹き飛ばされた！
「くっ！？にゃろ！！」
「まだまだ！！」
二人はすぐに体制を立て直して向かって行った！
「ドラゴンクロー！！」
「ブレイズキック！！」リザードンのドラゴンクローとバシャーモのブレイズキックがぶつかり合った！パワーは互角！

「押してダメなら・・・引いてみなってな！」
バシャーモはブレイズキックを解除して後ろに後退した。いきなりの事でリザードンはバランスを崩してしまった！
「スカイアッパー！！」バランスを崩したリザードンにバシャーモはスカイアッパーで攻撃！バシャーモのスカイアッパーはリザードンのあごに直撃した！だが、それと同時にリザードンもバシャーモにドラゴンクローを決めていた！スカイアッパーを受けたリザードンは空に。ドラゴンクローを受けたバシャーモはフィールドの外にそれぞれ吹き飛ばされた！だが、すぐに二人は体制を立て直した。
「ハァ・・・ハァ・・・俺がこんなにバトルが楽しいって思ったのはバクフーンとやって以来だぜ・・・もっとやりたいところだが・・・そろそろ体力の限界が近い・・・次で決めてやる！」
リザードンの身体が炎の鎧に包まれた！
「あれは・・・なるほど。てっきりブラストバーンでくると思ったが・・・真っ向勝負で決着をつけようって訳か・・・だったらその勝負、受けてたってやる！」
バシャーモの身体も炎の鎧に包まれた！そして次の瞬間、リザードンが急降下して一気にバシャーモに向かって来た！
バシャーモもジャンプしてリザードンに向かって行った！
「「フレアドライブ！！」」
二人の最大パワーのフレアドライブがぶつかり合った！そして凄まじい爆発が発生！二人はフィールドの外まで吹き飛ばされ、壁に激突した！そして二人は倒れた。
「ハァ・・・ハァ・・・くっ・・・動け・・・俺の身体・・・」
リザードンは必死に立ち上がろうとしている。
バシャーモも同じく立ち上がろうとしている。二人の必死な姿を見て観客から頑張れと応援する声がスタジアムに響き渡った。
「頑張れリザードン！」バクフーンもリザードンを応援している。
「くっ・・・うおぉぉぉ！！」
リザードンは気合いで立ち上がった！

「ま・・・負けるかぁぁぁ！！」
バシャーモも気合いで立ち上がった！
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・くっ・・・」だが、バシャーモはまた倒れてしまった！バシャーモは再び立ち上がろうとするが身体がもう言うことをきかなかった。
「バシャーモ選手戦闘不能！」

審判のハッサムはバシャーモを戦闘不能と判定した。
「やったなリザードン！」バクフーンがリザードンの所に駆け寄った。
「・・・」
リザードンの様子がおかしい。
「リザードン？」
「・・・」
バクフーンが語りかけても返事が無い。どうやらリザードンは立ったまま気絶しているようだ。
「リザードン・・・ご苦労様。後は俺に任せな。ハッサム、リザードンの次のバトルは棄権にしてくれ！もうリザードンはバトル出来る状態じゃないからさ。」
「解りました。」
バクフーンはリザードンを仲間がいる所まで運んであげた。そしてバクフーンはすぐにバトルフィールドへ戻って行った。すでにバトルフィールドにはフライゴンがいた。「待たせたなフライゴン！さぁ、楽しいバトルをしようぜ！」
「もちろんですよ！」
二人はすぐにバトルがしたくてしょうがないみたいだ。
「バクフーン選手ＶＳフライゴン選手！試合開始！」遂にバクフーンとフライゴンのバトルが始まった！試合開始と同時にバクフーンが電光石火でフライゴンに向かって行った！フライゴンはそれを見て即座に空へ上昇した！

「火炎放射！」
バクフーンは空に飛んだフライゴンに向かって火炎放射を放った！
「砂嵐！」
フライゴンは自分の周囲に砂嵐を発生させて火炎放射から身を守った。
「竜星群！更に火炎放射！」
フライゴンは竜星群と火炎放射のコンビネーションで反撃した！炎を纏った無数のエネルギー弾がバクフーンに降りかかる！
「うおっ！？」
バクフーンは電光石火で降りかかる炎の竜星群をなんとか回避した。
「そっちがコンビネーションならこっちだって！スピードスター！そして火炎放射！」
バクフーンはスピードスターと火炎放射のコンビネーション攻撃で反撃した。無数の星型のエネルギーが火炎放射の炎に包まれ炎のスピードスターとなってフライゴンに向かって行く！
「ドラゴンクロー！！」フライゴンは炎のスピードスターにドラゴンクローで攻撃して全て打ち消した！
「あらま（汗）俺のコンビネーション攻撃が全部打ち消されちまったよ。」「油断しちゃダメですよバクフーンさん！地割れ！！」
フライゴンが地面を思いっきり殴ると、地面に亀裂が生じた！その亀裂はどんどんバクフーンの方へ向かって行った。それと同時に地面が割れた！
「おわっ！？」

バクフーンは地割れの中に落ちそうになったが、なんとか崖と崖の間で自分の両手両足を思いっきり伸ばして踏ん張り、落ちずにすんだ。
「あ、危ねぇ（汗）」
「ソニックブーム！」
フライゴンは容赦なくバクフーンをソニックブームで攻撃した。衝

撃波がバクフーンに襲いかかる！
「いやちょっと待って！？この状況で攻撃くらったら落ちるって！？火炎放射！！」
バクフーンは下に向かって火炎放射を放った！火炎放射の勢いを利用してバクフーンは空へ飛び、ソニックブームを回避した。
「逃がしませんよ！」
フライゴンはバクフーンのあとを追った。そしてドラゴンクローで攻撃する構えに入った。
「ドラゴン・・・」
「させるか！オーバーヒート！！」
目の前まで来たフライゴンにバクフーンはオーバーヒートを直撃させた！フライゴンは吹き飛ばされ地面に叩きつけられた！
「よっしゃ♪・・・って、あぁぁぁ！？」
バクフーンは空中にいるのを忘れていたようだ。そのまま地面へ落下してしまい地面に叩きつけられた。
「い・・・痛い（汗）」
腰を強く打ったみたいで、バクフーンは腰を押さえている。
「砂嵐！！」
その時フライゴンが砂嵐を発動した！砂嵐がバクフーンに向かって行く！「って休む暇無しですか！？うわっ！？」
バクフーンは砂嵐に包まれた！砂嵐のせいで周辺の状況が解らなくなってしまった！
「くそ！砂で周りが見えねぇ！」
「ドラゴンクロー！」
フライゴンのドラゴンクローがバクフーンに直撃した！
「痛っ！？くっそっちか！火炎放射！」
バクフーンは火炎放射で反撃するが、フライゴンには命中しなかった。
「そんな闇雲に攻撃しても俺には当たりませんよ！ドラゴンクロー

！」
再びフライゴンのドラゴンクローがバクフーンに直撃した！
「ぐっ！？」
砂嵐のせいでフライゴンの位置が解らない為バクフーンは回避する事が出来ない。更に砂嵐の砂がじわじわとバクフーンにダメージを与えていく！
「このままじゃヤバいな・・・こうなったらこれだ！噴火！！」
バクフーンはフィールド全体に噴火を放った！
噴火の凄まじい力でバクフーンを包んでいた砂嵐が消し飛んでしまった！だが、フライゴンには直撃しなかった。フライゴンはバクフーンが噴火を使うと予想して、噴火が届かない高さまで上昇していたのだ。
「あそこか！」
バクフーンはフライゴンを見つけた！そして火炎放射を放とうと構えた。
「くらえ！火炎・・・ってうわっ！？」
突然バクフーンは尻餅をついてしまった！理由は・・・
「良し！砂地獄成功！」フライゴンが砂嵐で姿を隠している間にバクフーンの足下に砂地獄を仕掛けていたのだ！
バクフーンの身体がどんどん砂の中に埋もれていく！
「お前と初めてバトルした時に受けた砂地獄は脱出するのに苦労したけど・・・今の俺ならすぐに脱出出来るぜ！オーバーヒート！！」
バクフーンはオーバーヒートを地面に撃った。
そしてオーバーヒートの勢いで空高く上昇した！先程の火炎放射で上昇した時よりも高く飛んだ！
「行くぜフライゴン！」バクフーンは炎の鎧を身に纏った！そしてフライゴンに向かって行った！いや、正確にはフライゴン目指して落下して行った！
「フレアドライブ！！」
「ドラゴンクロー！！」バクフーンのフレアドライブに対してフラ

イゴンはドラゴンクローで対抗したが、落下スピードを利用しているフレアドライブの方がパワーが上だった！ドラゴンクローは弾かれ、フレアドライブがフライゴンに直撃した！
「くっ！？ま、負けません！！破壊光線！！」
フライゴンはフレアドライブを耐えた！そしてフライゴンはバクフーンに最大パワーの破壊光線で反撃した！バクフーンは回避しようとしたが間に合わず、破壊光線をまともに受けてしまった！破壊光線を受けたバクフーンはバトルフィールドの外の壁まで吹き飛ばされた！
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・やった・・・のかな？」
「・・・ブラスト・・・バーン！！！」
バクフーンは破壊光線を耐えていた！そしてフライゴンに最大パワーのブラストバーンで反撃！
破壊光線を使ってしまったのでフライゴンはその反動で動く事が出来ず、ブラストバーンをまともに受けた！フライゴンはフィールドの外の壁まで吹き飛ばされた！
「くっ！？・・・さ、さすがです・・・バクフーン・・・さ・・・ん・・・」フライゴンは倒れた。「フライゴン選手戦闘不能！よって勝者、チームブラスト！！」
遂にバクフーン達はフライゴン達に勝利！決勝進出を決めた！
「ハァ・・・ハァ・・・か、勝った～・・・フライゴン、大丈夫か？」
バクフーンはフラフラになりながらもフライゴンの所に来て、手をさしのべた。
「な、なんとか・・・」フライゴンはバクフーンの手を掴み、立ち上がった。
「負けちゃいましたか・・・やっぱりバクフーンさんは強いですね。」
「お前だって強かったぜフライゴン！楽しいバトルだったぜ！またやろうな？」

「もちろん！」
二人はがっちり握手した。その時観客から拍手が鳴り響いた。皆バクフーン達とフライゴン達のバトルを見て感動したようだ。

バトルを終えた後、疲れきった身体を癒す為にバクフーン達はフライゴン達と共にポケモンセンターに来ていた。
「ようバクフーン！フライゴン！」
皆が休んでいる時、チーム業火のリーダーのゴウカザルがやって来た。
「ゴウカザル！てっきり帰ったんだと思ってたけど？」
「お前らの試合を応援しないで帰れるかって！あっそうだ！バクフーン、決勝進出おめでとう！」
「サンキューゴウカザル♪」
ゴウカザルがバクフーン達の決勝進出を祝った時、急に周りにいる他のポケモン達が騒ぎ始めた。確認すると皆テレビに注目している。テレビにはカイリュー達が映っていた。どうやらカイリュー達も決勝進出を決めたようだ。
「やっぱカイリュー達が勝ち上がったか・・・って事は、バクフーン達の決勝の相手はカイリュー達って事だな。」
「ですね・・・バクフーンさん。俺達に勝ったんですから、絶対優勝して下さいよ！」
「任せとけ♪お前達の分も頑張るぜ！」
バクフーン達の相手はカイリュー達に決まった！果たしてバクフーン達はカイリュー達に勝利し、見事優勝する事が出来るのか？

第五十八話ポケモンリーグ準決勝！チームブラストＶＳチーム竜星！（後書き）

第五十八話完成です。
いやぁ・・・どういうバトル展開にすれば良いかずっと考えてたら
更新するのがかなり遅くなってしまいました（＾―＾；）

第五十九話ラストバトル！それぞれの道・・・前編（前書き）

フライゴン達に勝利して見事に決勝進出を決めたバクフーン達。最後の相手はカイリュー率いる強敵チーム龍。果たしてバクフーン達はカイリュー達に勝利し、見事優勝する事が出来るのか？

第五十九話ラストバトル！それぞれの道・・・前編

ポケモンリーグ決勝が始まる日。決勝が始まるのが午後2時から。
現在は午前9時。
「・・・ふわぁ～・・・良く寝た・・・あり？もう9時なのか？」
バクフーンが目覚めた。ちなみにリザードンや他の皆はすでに起きていて、朝食を食べに行ったり空中散歩しに行ったりと各自自由に行動していた。だから、今寝室にはバクフーン一人だけ。
「もう皆いねぇのか・・・てか、俺が起きるのが遅いだけか？」
ぐぅ～。バクフーンのお腹が鳴った。
「腹減ったなぁ・・・良し！食堂に直行♪」
バクフーンはダッシュでポケモンセンターの食堂に向かった。食堂に向かう途中、バクフーンは空中散歩から帰って来たリザードンに遭遇した。
「おっ！リザードンじゃん！おはよう♪」
「おはようバクフーン。そんなに急いで何処に行くんだ？食堂か？」
「当たり♪腹減っちゃってさ～！」
「やっぱりな。俺も今から食堂で朝食にしようと思ってたところなんだ。一緒に行こうぜ。」
「良いぜ♪」
バクフーンはリザードンと一緒に食堂に向かいました。食堂にはラグラージ達が先にいて、朝食を食べてました。
「おはよう皆♪」
「おはようバクフーン。やっと起きたの？」
「メシだ～♪」
ラグラージの言うことをスルーしてバクフーンはご飯を取りに行きました。
「・・・まぁいつもの事だから良いか。」
「おっいつもなら怒るところを怒らないとは、ちょっとは成長した

なラグラージ？それとも諦めたか（笑）」
「からかわないでよリザードン（汗）まあ答えるとしたら後者だね。だってあのバクフーンだよ？」
「確かに言えてるな（笑）」
「何を話してるんだ？」バクフーンが戻って来た。大量のご飯を持って来て。
「おまっ！？朝からそんなに食うのか！？」
リザードンはバクフーンが持って来たご飯の量に驚いている。
「おう♪腹が減ってはバトルは出来ぬって言うだろ？」
「限度があるだろ（汗）」
「大丈夫大丈夫♪俺の胃袋は宇宙だからな！」
「昔のドラマで聞いたようなセリフだぞそれ？」
「気にしない気にしない♪んじゃ、いっただっきま～す♪」
バクフーンは持って来たご飯を凄いスピードで食べ始めた。余程お腹が空いていたのであろう。
毎度ながら、バクフーン達は賑やかに朝食を食べていた。そんな時、食堂に今日の決勝の相手であるカイリュー率いるチーム龍がやって来た。
「おっ！カイリューじゃん！おはよう！」
「おはようバクフーン君。」
「あっそうだ！カイリュー、一緒に食べないか？テーブル空いてるし！」
「そうだね。食事は皆で食べた方が美味しいからね。」
バクフーン達とカイリュー達は一緒に朝食を食べる事にした。とても今日の決勝で戦うとは思えない位に仲良く食べている。しばらくした時、急にカイリューがバクフーン達に言った。
「あっそういえばまだ僕の仲間をちゃんと紹介してなかったね？ガブリアスはもう会ってるから解るよね？ガブリアスの隣にいるのがボーマンダのキバって言うんだ。」
カイリューがそう言うとボーマンダのキバが立ち上がった。

「キバっていいます。よろしくお願いします。」随分と大人しいボーマンダだ。
「そこにいるのがチルタリスのソラだよ。」
「自己紹介しなきゃダメかカイリュー？面倒くさいんだけど・・・」
凄い面倒くさそうにチルタリスのソラがカイリューに言った。
「まぁそう言わないで。ちゃんと自己紹介はしなきゃ。」
「はぁ・・・ソラだ。・・・もう良いだろ？」
そう言うとチルタリスのソラは座った。本当に面倒くさがりのようだ。
「次に、彼はウインディのフレイ。」
「フレイだ。よろしくな。ところでさ、そっちにいるラティアス可愛いねぇ！今度デートしない？」いきなりウインディのフレイがラティアスをデートに誘った。
「お前にラティアスちゃんをデートに誘う事は俺がさせないぜ！ラティアスちゃんとは俺が！」
やはりここで出てきたピカチュウ。
「お前ら勝手な事を言うな！！ラティアスは誰にもやらん！！」
そしてラティオスも出てきた。
「フレイ。そういう軽はずみな事はしないようにって前から言ってるでしょ？」
「ハハ・・・悪いカイリュー（笑）」
あまり反省してないウインディのフレイである。
「ごめんねラティオス君、ラティアスさん、フレイは女の子が大好きでね。」
「大丈夫ですカイリューさん。私達のチームにも同じような人がいますから・・・」
そう言ってラティアスがちらっとピカチュウを見た。それに気づいたピカチュウ。
「はっ！ラティアスちゃんが俺に熱い視線を送っている！やはりラティアスちゃんは俺の事が・・・」

またピカチュウが暴走し始めた。そこにすかさずピチューが必殺耳を引っ張るをピカチュウに炸裂させた。
「はいはい。勝手な妄想は辞めましょうねぇ。」
「イタタタ！？」
「・・・なるほどね（汗）さて、話を戻すよ。最後に彼女がプクリンのクレアだよ。」
「よろしくね♪」
プクリンのクレアはウインクしながら挨拶した。これでチーム龍のメンバー全員の挨拶が終わった。チーム龍のメンバーはカイリューを始め、ガブリアス、ボーマンダ、チルタリス、ウインディ、プクリンの六人だ。バクフーン達よりも少人数のチームである。
一通り挨拶が済んだ時、時刻は午前１１時になっていた。
「それじゃバクフーン君。僕達は行くよ。決勝の為にウォーミングアップしないといけないからね。」
「解ったよ。カイリュー、決勝戦は楽しいバトルにしようぜ！」
「もちろんだよ。それじゃバクフーン君。次は決勝戦で会おう。」
カイリュー達は行ってしまった。
「そんじゃ、俺達もウォーミングアップしに行くか！」
バクフーン達も決勝が始まるまでウォーミングアップをする事にした。

時刻は午後2時。
「さぁ観客の皆さん！お待たせしました！いよいよポケモンリーグ、決勝戦が始まります！」
実況のロトムのＬＯＬＯのアナウンスが流れたと同時にスタジアム

にいる観客から待ってましたと言わんばかりに大きな歓声があがった。
「それでは！この決勝まで勝ち残った強豪チームを紹介しましょう！まずはこのチームから！やはり決勝まで勝ち残ってきました！人気ナンバーワンのチーム龍！！」
ロトムのＬＯＬＯの紹介と同時にカイリュー達がやって来た。カイリュー達がやって来たと同時に観客からまた大きな歓声があがった。さすが人気ナンバーワンのチーム龍である。
「そしてもう一チーム！最近人気が急上昇中の注目チーム！チームブラスト！！」
ＬＯＬＯがそう言うとバクフーン達がやって来た。
カイリュー達の時と負けない位に大きな歓声があがった。
「それでは、チーム龍ＶＳチームブラストのポケモンリーグ、決勝戦を開始致します！最初にバトルする選手はバトルフィールドへ！」
またいつものように審判のハッサムが突然現れた。
「それじゃクレア、頼んだよ。」
「ＯＫ♪任せといて♪」
チーム龍からプクリンのクレアが出てきた。
「バクフーンのアニキ！最初は俺にやらせてくれっす！」
「おっやる気満々だな！頼んだぜグラエナ！」
最初はグラエナがバトルするようだ。

「プクリン選手ＶＳグラエナ選手！試合開始！」
クレアとグラエナのバトルが始まった。
「行くっすよ～！シャドーボール！」
グラエナは試合開始と同時にシャドーボールを放った。だがこれは・・・
「あんたバカ？ノーマルタイプの私にゴーストタイプの技なんか効かないわよ。」
そう。ゴーストタイプの技はノーマルタイプには全く効かないのだ。

プクリンのクレアはシャドーボールを受けたが全然効いていない。
クレアはグラエナに反撃しようと往復ビンタの構えに入った。
しかし、さっきまでそこにいたグラエナがいなくなっていた。その代わり、ちょうどグラエナが入れそうな穴が一つ・・・「へぇ～。シャドーボールを放ったのは穴を掘るを使う為のフェイントだったって訳ね。だけど・・・私が地面にいなければその攻撃は当たらないわよ。」
プクリンのクレアは大きく息を吸った。すると、クレアの身体が風船のように膨らんだ！
そしてクレアの身体は宙に浮いた！それと同時にグラエナが地面から出てきて攻撃しようとしたが、宙に浮いたクレアには届かなかった。
「空を飛べたんすか！？」
「・・・」
クレアは返事をしない。いや、正確に言えば返事が出来ない。吸った空気を出さないように口を閉じてないといけないのだ。喋ろうと口を開ければ空気が抜け浮いていられなくなるからである。
「でも、空を飛べるからバトルが有利になるとは限らないっすよ！」
グラエナは力いっぱいジャンプ！クレアの真上を取った！
「アイアンテール！」
グラエナはアイアンテールで攻撃した！完全に直撃するとグラエナは思った。だが、アイアンテールがクレアに直撃しそうになった時、ふわりとクレアが移動してアイアンテールを避けられてしまった！
「嘘っ！？なんで外れたんすか！？」
グラエナから充分距離が取ったクレアは口を開け空気を抜いて地面に着地した。
「驚いたみたいね？簡単な事よ。風船は風を受けると飛ばされるでしょ？それと同じよ。」
そう。つまりグラエナのアイアンテールで発生した風圧に乗る事でクレアは攻撃を回避したのだ。「あなたの攻撃は私には通用しない

わよ。」
「そんなのやってみなきゃ解らないっすよ！今度はこれでどうっすか！雷の牙！」
グラエナは自らの牙に電気を纏わせた。そしてクレアに向かって走った。
「メロメロ！」
向かって来たグラエナにクレアはハート型のエネルギー弾を放った！
「あっ！？」
グラエナにハート型のエネルギー弾が直撃した。すると、グラエナは走るのを止めてその場で停まってしまった。そしてクレアの事をじーっと見ている。
「・・・可愛い♪可愛いよクレアちゃん♪」
突然グラエナはクレアの事を可愛いと言い始めた。しかも目がハートになっている。これはクレアが放った技、メロメロでグラエナはクレアにメロメロになってしまったのだ。
「メロメロ成功♪それじゃ次で決めてあげる！」クレアはグラエナに向かって走りだした。
「グラエナ来るぞ！逃げろ！」
バクフーンが叫ぶがまだグラエナはメロメロ状態から抜け出せていない。今のグラエナにバクフーンの声は届いていないようだ。
「せーっの！気合いパンチ！！」
クレアの気合いパンチがグラエナにクリーンヒットした！グラエナはバトルフィールドの外まで吹き飛ばされた！グラエナは倒れた。
「グラエナ選手戦闘不能！」
「グラエナ！」
バクフーン達がグラエナの所に駆け寄った。
「大丈夫かグラエナ？」バクフーンがグラエナに言った。
「ク、クレアちゃん・・・素敵だぁ・・・」
だが、グラエナはまだメロメロから回復していなかった。
「まだクレアにメロメロしてるし（汗）」

「余程強力なメロメロなんだね。あのメロメロに対抗するとしたら・・・」ラグラージが対抗手段を言おうとした時。
「私が行きます！」
ラティアスがバトルすると言い出した。
「うん。同じ女の子のラティアスならメロメロは効かないからね。バクフーン、良いよね？」
「おう！ラティアス、頑張れよ！」
「はい！」
ラティアスがバトルフィールドに入った。
「ラティアス選手ＶＳプクリン選手！試合開始！」ラティアスとクレアの試合が始まった。
「水の波動！」
試合開始と同時にクレアに向かって水の波動を放った！
「その攻撃にも風圧は起きるのよね～♪」
クレアは先程と同じように大きく息を吸って風船みたいに膨らみ風に乗って水の波動を回避した。「やっぱりそうきましたね！確かにその方法なら簡単に攻撃を避ける事は出来ます。けど、シャドーボールからサイコキネシス！」
ラティアスはシャドーボールを2発放つと同時にサイコキネシスを使いシャドーボールをコントロールした。2発のシャドーボールをクレアの後ろで接触させ、爆発を発生させた！その時に発生した爆風でクレアがラティアスの所に向かって吹き飛ばされた！
「・・・っ！？」
「攻撃を避ける事は出来ても風を避ける事は出来ませんよね！竜星群！」ラティアスはクレアに向かって竜星群を放った！無数のエネルギー弾がクレアに直撃した！クレアは衝撃で空高く吹き飛ばされた！風船ポケモンと言われるだけあってどんどん高い所に吹き飛んでいく。
「いけない！？」
その時カイリューが慌ててクレアを追いかける為に空へ飛んだ。か

なり高く飛ばされていたがカイリューはあっという間にクレアに追いついた。
「クレア！大丈夫？」
カイリューが呼ぶが返事は無い。クレアは目を回して気絶していた。
「・・・ご苦労様クレア。後は僕達に任せてね。」カイリューは優しく微笑みながらクレアに言った。しばらくするとカイリューはクレアを抱いたまま地上に戻ってきた。
「待たせたね。あっハッサム。このバトルはクレアの負けだからコールお願い。」
「解りました。プクリン選手の戦闘不能とします。」
カイリューはクレアを仲間がいる所に運んで行った。
「あの娘中々やるな。カイリュー、次は俺が出たいんだが良いか？」
フレイがカイリューに聞いた。
「良いよ。」
一言で返事がきた。
「よっしゃ♪んじゃ行ってくるぜ！」

ウインディのフレイがバトルフィールドに入った。
「ラティアスちゃん♪お手柔らかに頼むよ♪」
フレイはラティアスにウインクしながら言った。
「は、はぁ（汗）」
ピカチュウで慣れてるとはいえ、やはり戸惑うラティアスである。
「ウインディ選手ＶＳラティアス選手！試合開始！」ラティアスとフレイのバトルが始まった。
「炎タイプにはやっぱり水タイプの技！水の波動！」
ラティアスは水の波動を放った！
「火炎車！」
フレイは火炎車を発動して炎の鎧を身に纏った。水の波動は火炎車に阻まれ蒸発してしまった！
「悪いね。水対策はちゃんと考えてあるんだ♪」またウインクしな

がらラティアスに言った。
「ならこれはどうです？シャドーボールとサイコキネシス！」
ラティアスはシャドーボールを４発放ち、それをサイコキネシスでコントロール。フレイを取り囲むようにシャドーボールを浮遊させた。
「行きます！」
まずは一つ目をフレイに向けて放った！
「おっと！」
フレイは軽い身のこなしで右側に回避した。
「えい！」
すかさずラティアスは二つ目のシャドーボールを放った！
「よっと！」
今度は地面に伏せて回避した。
「それ！」
次にラティアスは三つ同時にシャドーボールをコントロールしてフレイの前と後ろから放った！
「ほっ！」
フレイはジャンプして回避した。
「それを待ってました！一気に行きます！」
ラティアスはフレイがジャンプするのを待っていたようだ。空中にいるフレイに四つのシャドーボールを一斉に放った！

「うわっ！？」
さすがに空中では身動きが出来ずにフレイは四つのシャドーボールを受けた！直撃と同時に爆発が発生した！その衝撃でフレイは空へ吹き飛ばされた！
「くっ！？ちょっと油断しすぎたかな？」
「だと思いますよ。」
いつの間にかラティアスはフレイの上にいた！
「これで決めさせてもらいます！竜星群！！」

至近距離でラティアスは竜星群を放ちフレイに決めた！フレイは吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた！フレイは倒れた。「ウインディ選手戦闘不能！」

これでラティアスは2連勝だ！

「フレイの奴・・・油断し過ぎだ！」

ガブリアスは怒っている。

「そんなに怒らないでガブリアス。まだバトルは始まったばかりなんだ。充分逆転出来るよ。ソラ、次は君がやってくれるかい？」

「え～俺が～？面倒くさいなぁ・・・」

チルタリスのソラは凄く嫌そうな顔をしている。「そう言わないでさ、頼むよ。」

「はぁ～・・・解ったよ。」

ソラは渋渋バトルフィールドに入った。

「チルタリス選手ＶＳラティアス選手！試合開始！」ラティアスとソラのバトルが始まった。

「竜の波動！」

ラティアスは試合開始と同時に竜の波動を放った！当たればチルタリスのソラに大きなダメージを与えられる！

「守るだ。」

だが、ソラは守るを使い竜の波動を防御した。

「白い霧。」

チルタリスのソラは白い霧を発動した。バトルフィールドが真っ白な霧で覆われてしまった！

「さて、どうバトルするかな・・・」

ソラは白い霧の中に隠れてる間にどうバトルするかを考えていた。

だがそれはラティアスも同じだった。

「迂濶に動くと相手に自分の位置を教える事になっちゃうわね・・・ここは・・・」

ラティアスは目を閉じて瞑想を始めた。瞑想は自分の能力を高める技だ。ソラが行動するまでラティアスは自分の能力アップに専念す

る事にした。
「・・・良し。やるか・・・歌う・・・」
ソラは歌うを使った。フィールドに心地よい歌声が響いた。
「これは・・・歌う!?いけない!」
ラティアスは慌てて手を耳に当て歌うを聞かないようにした。ずっと聞いていると眠ってしまうからだ。
「上手いわね・・・白い霧で姿を隠して音による攻撃を仕掛けてくるなんて・・・だけど、こっちにだって対抗手段はあるんだから!神秘の守り!」ラティアスは神秘の守りを発動した。これでしばらくの間は状態異常にならないようになった。「これで良し!あとはどうやってソラさんの位置を特定するかね・・・何か良い方法はないかしら?」
「竜の息吹!」
突然ラティアスの前から竜の息吹が放たれてきた!
「守る!」
ラティアスはとっさに守るを使って竜の息吹を防御した。
「どうして私のいる位置が・・・あっそうか!さっきの神秘の守りで発生した光で私の位置が解っちゃったのね・・・このままここにいたらまた攻撃されるわね・・・なら空に!」
ラティアスは空へ飛んだ。
「もう少しで霧から抜けられる!」
ラティアスは白い霧から脱出した。だが!
「待ってたよ。」
目の前に突然ソラが現れた!ラティアスが空へ飛ぶと予想して待ち伏せしていたのだ!
「えっ!?」
「悪いけど・・・これで決めさせてもらう!ゴッドバード!!」
ソラは飛行タイプ最強の技、ゴッドバードをラティアスに直撃させた!
ラティアスは吹き飛ばされ、地上に叩きつけられた!

「うっ・・・ど、どうして・・・私の行動がバレたの・・・？」

「簡単な事さ。そうするように俺が仕向けたのさ。まず歌うを使った時、君に神秘の守りを使うように仕向けた。それで君の位置を特定。竜の息吹の攻撃は君が守るを使うようにする為に放った。これで君は自分の位置がバレた事に焦った筈だ。位置がバレたうえに守るを一回使ってしまった君はその場にとどまっていてはまた攻撃されると思った。そうなると、次にとる行動は空への上昇・・・全て俺の計算通りだったって訳さ。」

「そう・・・だった・・・のね・・・」

ラティアスは倒れた。

「ラティアス選手戦闘不能！」

「ラティアス！？」

ラティオスが慌ててラティアスに駆け寄った。

「大丈夫かラティアス！？」凄く心配そうにラティアスに話かけるラティオス。

「・・・う、うん・・・ごめんね兄さん・・・負けちゃった・・・」

「ラティアスは良く頑張ったさ！あとは兄ちゃん達に任せて、お前はゆっくり休みな？」

ラティオスは優しく微笑みながらラティアスに言った。

「リザードン。ラティアスを頼む。次は俺がやる！」

「解った。」

ラティオスはリザードンにラティアスを任せ、自分はバトルフィールドへ向かった。

「次はお兄さんの方な訳？」

「あぁ。お前は絶対俺が倒す！」

ラティオスは凄い気合いが入っている。

「ラティオス選手ＶＳチルタリス選手！試合開始！」ラティオスとソラのバトルが始まった。

「一気に決める！冷凍ビーム！！」

ラティオスは試合開始と同時にソラに向かって冷凍ビームを放った！
ドラゴンタイプと飛行タイプの二つを持つソラに氷タイプの技冷凍ビームが当たれば大ダメージを与える事が出来る。
「くらう訳にはいかないっつうの！守る！」
ソラは守るを使って冷凍ビームを防御した。
「白い霧！」
ソラは先程のラティオス戦と同じく白い霧を発動した。フィールド全体が白い霧で覆われた。
「さて、じっくり考えようかな・・・」
白い霧で時間稼ぎをして作戦を考えようとするソラ。

「竜星群！！」
その時ラティオスがバトルフィールド全体を竜星群で攻撃した！無数のエネルギー弾がバトルフィールドに降り注いだ！
一つ一つのエネルギー弾が地面に直撃する度に爆発が起きた。その爆発で発生した爆風で白い霧が吹き飛ばされていく！
最後には白い霧は完全に消え、ラティオスはソラを発見する事が出来た。
「強引にきたなぁ（汗）他にも方法があったでしょうに。いきなり竜星群を使うなんて勿体無いだろ。竜星群は使う度に威力が落ちる技。最初が一番威力があるのにさ。」
呆れた感じで言うソラ。
「良いんだ。お前の姿を確認さえ出来ればな！」ラティオスはソラに向かって全速力で飛んだ！
「ドラゴンクロー！！」ラティオスが全速力で飛べばジェット機よりも速い為、ソラはラティオスのドラゴンクローを回避する事が出来ずまともに受けた！
「くっ！？」

「もう一発くらえ！」

すかさずラティオスはドラゴンクローをもう一発ソラに決めた！
「くっまずいな・・・このままだと俺が負ける・・・面倒くさいのは嫌だけど、負けるのはもっと嫌なんだよ！滅びの歌！」ソラは自分が持つとっておきの切札である滅びの歌を発動した！フィールドに不気味な歌が響き渡る。
「ぐっ！？」
滅びの歌を聞いた途端ラティオスが苦しみだした！滅びの歌を聞き続けたポケモンは必ず戦闘不能になってしまう恐ろしい技なのだ。
だが、当然リスクもある。滅びの歌は使ったポケモンも戦闘不能にしてしまうのだ。
「く・・・くそ・・・まさか・・・滅びの歌を使う・・・とは・・・がはっ・・・」
ラティオスは倒れた。
そして同時にソラも倒れた。
「両者戦闘不能！」
これでお互いに三人ずつ倒れた事になる。
ソラとラティオスを安全な場所までバクフーンやカイリュー達が運んだあと、バトルフィールドにはチーム龍からはボーマンダのキバ、チームブラストからはラグラージが入った。
「僕の相手は君か。お互い良いバトルにしようね？」
「あぁ！だが、勝つのは俺だ！」
大人しい筈のボーマンダのキバだが、急に性格が変わっている。
実はキバは普段は大人しいのであるが、バトルになると性格が豹変して攻撃的になるのだ。

「かなり性格変わってるんですけど（汗）」
ラグラージはキバの豹変ぶりに少し驚いている。
「ボーマンダ選手ＶＳラグラージ選手！試合開始！」ラグラージとキバのバトルが始まった。バトルが始まったと同時にキバがラグラージに向かって突っ込んで行った！

「くらえ！ドラゴンクロー！！」
キバの右手の鋭い爪がラグラージに襲いかかる！
「アームハンマー！」
ラグラージは右手でアームハンマーを使いキバのドラゴンクローを弾いた！
「もう一発！」
今度は左手でアームハンマーを使い、キバの顔に直撃させた！
「・・・効かねぇよ！！火炎放射！！」
ラグラージのアームハンマーを耐えたキバは至近距離でラグラージに火炎放射を直撃させた！
水タイプを持っているラグラージに炎技はあまり効果は今ひとつだが、至近距離で直撃させた為にダメージは大きい！
「ぐっ！？」

「まだだ！くらえ、連撃ドラゴンクロー！！」
キバはすかさずラグラージに連続でドラゴンクローを直撃させた！
何回も受けた事でラグラージは意識が朦朧としてきた。
「これで最後だ！」
キバは渾身のドラゴンクローをラグラージに直撃させた！ラグラージはバトルフィールドの外まで吹き飛ばされた！
ラグラージは倒れたまま動く事はなかった。
「ラグラージ選手戦闘不能！」
これでバクフーン達はカイリュー達に一歩リードされてしまった。
しかも、試合のペースは完全にカイリュー達が握っている。
「ふぅ・・・良し、次は俺が行く！」
深呼吸して気合いを入れてからリザードンがバトルフィールドへ向かった。
「リザードン選手ＶＳボーマンダ選手！試合開始！」リザードンとキバの試合が始まった。
試合開始と同時にリザードンは空へ上昇した。

キバもリザードンを追って空へ。
「捨て身タックル!!」先に攻撃を仕掛けたのはキバだ!全速力でリザードンに向かって行く!

(キバを含め相手は残り三人。対してこっちは俺とバクフーンの二人。状況は明らかにこっちが不利。この状況をどうにかするにはまずキバを一発で倒さなきゃならない。だが、俺の炎技で一番威力が高いやつを叩き込んでもドラゴンタイプのキバを一発で倒すのは恐らく無理・・・ん?待てよ・・・俺だけの力じゃ無理でもキバの力を利用すれば・・・いちかばちかやってみるか!)
リザードンは何か閃いたみたいだ。リザードンはいきなり急降下した!
キバもリザードンを追って急降下!
(追って来たな!そのまま追いかけて来い!)
リザードンは地上ギリギリまで急降下を続けた。キバはまだリザードンを追い続けている。
(今だ!)
リザードンは自分の翼を思いっきり広げて急停止した。そしてすぐ後ろについてきていたキバの背後に周り込み抱きしめるようにキバを掴んだ!
「くっ離せ!」
「そうはいかないんだよ!!」
リザードンはキバの捨て身タックルの勢いを利用して一気に地上へ!そしてリザードンはキバを地面に叩きつけた!
「これで決める!ブラストバーン!!」
地面に叩きつけたキバにリザードンは最大パワーのブラストバーンを直撃させた!キバは凄まじい炎にその身を焼かれた。いくらドラゴンタイプとはいえ地面に叩きつけられたうえに至近距離で最大パワーのブラストバーンを受けたのだ。そのダメージは計り知れない。
・・・炎が消えていく。中から倒れて動かないキバが現れた。

「ボーマンダ選手戦闘不能！」
リザードンはキバをブラストバーン一発で倒す事が出来た！
「あのキバを一撃で倒すか・・・あのリザードン出来るな。」
腕組みをしながらガブリアスはそう言った。
「ガブリアス。リザードン君を甘くみない方が良いよ。彼はこのポケモンリーグでどんどん強くなっているからね。油断すると負けちゃうよ？」
「俺を誰だと思ってるんだカイリュー？フレイじゃあるまいし。油断なんかしないさ。」
そう言いながらガブリアスはバトルフィールドへ入った。
「リザードン選手ＶＳガブリアス選手！試合開始！」リザードンとガブリアスの試合が始まった。
「速攻で行く！」
試合が始まったと同時にガブリアスは身体を折りたたんで翼を伸ばして飛んだ。ガブリアスは音速の速さで飛ぶ事が出来るポケモン。物凄い速さでリザードンに向かって行った！
「は、速い！？」
「ドラゴンダイブ！！」ガブリアスは強烈なタックルをリザードンに決めた！リザードンはバトルフィールドの外まで吹き飛ばされた！
「くっ！？負けるか！火炎・・・」
「遅い！ドラゴンクロー！！」
リザードンが火炎放射で反撃しようとした時、すでに目の前にはガブリアスがいた！火炎放射を放つ前にドラゴンクローがリザードンに炸裂！壁に叩きつけられてしまった！
「ぐっ！？」

「休む時間は与えない！ドラゴンダイブ！！」
一旦距離をとってから再びガブリアスはドラゴンダイブでリザードンに突っ込んで行った！
「煙幕！」

リザードンは煙幕で自分の姿を隠した。
ガブリアスは構わずそのままドラゴンダイブで突っ込んだ！そしてスタジアムに衝撃音が響き渡った。それと同時に煙幕が晴れた。
「・・・上手く逃げたか・・・」
ガブリアスのドラゴンダイブはリザードンにではなく壁に直撃したようだ。壁が崩れている。
近くにリザードンの姿が無い。あるのは大きな穴が一つだけ。リザードンは穴を掘るを使って地面に潜ってドラゴンダイブを回避したのだ。
「・・・」
ガブリアスは目を閉じて精神を集中させている。
「ドラゴンクロー！」
ガブリアスの背後の地面からリザードンが現れた！リザードンのドラゴンクローがガブリアスに直撃しそうになった！
だが、ガブリアスは自分の尻尾でリザードンのドラゴンクローを弾きとばした！
「なっ！？」
「砂嵐！」
リザードンのドラゴンクローを弾いたあとすぐにガブリアスは砂嵐を発動！フィールドが砂嵐で覆われた！それと同時にリザードンはガブリアスの姿を見失ってしまった！「特性の砂隠れってやつか・・・まずいな・・・ただでさえ素早いガブリアスなのに・・・」
「ドラゴンクロー！！」突然リザードンは背後からドラゴンクローで攻撃された！
「くっ後ろか！？火炎放射！」
リザードンは火炎放射で反撃するがガブリアスはすでにそこにはいなかった。
「無駄だ！この砂嵐の中で俺に攻撃を当てるのは不可能！ドラゴンクロー！」
今度は前からドラゴンクローで攻撃されたリザードン！なんとか耐

えたが、次に攻撃を受けたらリザードンは倒れてしまうだろう。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・集中しろ・・・集中するんだ・・・このまま負けたらバクフーンはガブリアスとカイリューの二人と戦う事になる・・・俺は・・・絶対勝つんだ!!」
その時、リザードンの尻尾の炎がいつも以上に激しく燃え盛った!
さらに身体からは燃えるような赤いオーラが!
特性の猛火が発動した!
「猛火か・・・だが、この状況を覆す事は出来ない!これで終わりだ!ドラゴンダイブ!!」
ガブリアスはリザードンの真っ正面からドラゴンダイブで突っ込んで行った!
「見えた!」
リザードンはガブリアスのドラゴンダイブを両手でしっかり受け止めた!
「何!?」
「捕まえればこっちのもんだ!」
リザードンは炎エネルギーを集め始めた!
「これはブラストバーン!?まずい!?」
ガブリアスはリザードンの攻撃がブラストバーンだと解ると回避しようとしたがリザードンがしっかりとガブリアスの身体を掴んでいて動く事が出来ない!
「逃がすか!ブラストバーン!!」
リザードンの最大パワーで放ったブラストバーンはガブリアスに直撃した!猛火の力が加わったブラストバーンを至近距離で受けたガブリアスには凄まじいダメージが与えられた!
「うっ・・・油断したつもりはなかったが・・・ここまでやる・・・とは・・・な・・・」
ガブリアスは倒れた。
「ハァ・・・ハァ・・・た、倒した・・・ハァ・・・ハァ・・・俺・・・もう・・・限界だ・・・」リザードンも倒れてしまった!

「両者戦闘不能！」
「リザードン！」
バクフーンがリザードンの所に駆け寄った。
「ハァ・・・ハァ・・・あとは・・・任せたぜ・・・バクフーン・・・」
「あぁ！お前の頑張りを無駄にしないからな！」そう言ったあと、バクフーンはリザードンを安全な場所まで運んだ。そしてバトルフィールドへ。「・・・遂にこの時がきたようだね。バクフーン君。」カイリューがそう言いながらバトルフィールドへ入った。
「あぁ。お前には下手な小細工は通用しないからな。最初から全力でいくぜ！」
バクフーンは激しい炎に包まれた！久しぶりのブラストモードだ！
「・・・僕も最初から全力でやらせてもらうよ。」カイリューが目を閉じて意識を集中し始めた。次の瞬間カイリューのうちなる波動の力が解放され、身体から金色のオーラが現れた！
「バクフーン選手ＶＳカイリュー選手！試合開始！」遂にバクフーンとカイリューの試合が始まった。このバトルに勝利するのはバクフーンか？それともカイリューか？

第五十九話ラストバトル！それぞれの道・・・前編（後書き）

第五十九話完成です。
今回は前編と後編に分ける事にしました。

第六十話ラストバトル！それぞれの道・・・後編（前書き）

カイリューとバクフーンの最後のバトルが始まった！勝つのはどっち！？

第六十話ラストバトル！それぞれの道・・・後編

「行くぞ。電光石火。」試合開始と同時にバクフーンは電光石火でカイリューに向かって行った！ブラストモードになったバクフーンのスピードは通常の三倍近くまで上がっているため凄いスピードだ！普通のポケモンなら見切るのは難しい。

「竜の舞い。」

カイリューは竜の舞いで攻撃力と素早さを上げながらバクフーンの電光石火を回避した！やはりカイリューは今までバクフーンが戦ってきたポケモン達の中で最強クラスの実力を持っている！

「今度は僕の番だよ。」カイリューがそう言った瞬間バクフーンの目の前でカイリューが消えた！「これは・・・ドラゴンジムのリーダーが使ってた竜の舞いと燕返しのコンビネーション技か・・・」

バクフーンの言う通り、カイリューは竜の舞いと燕返しのコンビネーション技を使っているのだ。カイリューはすぐには攻撃せずにバクフーンの周りを高速で飛行している。スタジアムにいる観客やチームブラストの皆やチーム龍の皆にもカイリューの姿を確認する事が出来ない。それほどカイリューは高速で飛行しているのだ。

「電光石火。」

突然バクフーンは電光石火を使った。しかもさっきよりも速い！スタジアムにいる皆がバクフーンの姿を見失った！

「気づかれたみたいだね。その場で止まってれば僕の姿を見つけるのは困難だけど、僕と同じスピードで動けば簡単に見つける事が出来るって。」

「あぁ。こっからが本番だぜカイリュー。」

バクフーンは電光石火、カイリューは燕返しを使いお互いに何回もぶつかり合った！スタジアムにいる他の皆にはバクフーンとカイリューがぶつかり合った時に発生する閃光しか確認出来ない。それほ

どまでの超高速バトルがフィールドで展開しているのだ！
「火炎車。」
「ドラゴンダイブ。」
ここで流れを変えようと思った二人は互いに火炎車とドラゴンダイブを使いぶつかり合った！
二人は互いの技の衝撃で吹き飛ばされた！
「火炎放射。」
すぐに体制を立て直したバクフーンは火炎放射を放った！
「水の波動。」
カイリューは水の波動を使い、自分の目の前に水の壁を作り出して火炎放射を防御した！

カイリューがすぐに反撃しようとしたその時、火炎放射を防いでいる間にバクフーンが電光石火でカイリューの目の前までやって来ていた！
「電光石火から捨て身タックル。」
バクフーンの捨て身の攻撃がカイリューに直撃した！カイリューはバトルフィールドの外まで吹き飛ばされた！
「さすがだねバクフーン君。久しぶりだよ。攻撃を受けて吹き飛ばされたのは。」
そう言いながらカイリューは何事もなかったかのようにすぐに起き上がった。
「・・・カイリュー。そろそろ本気出しても良いんじゃないか？お前、最初に本気でやるって言っておきながらずっと加減してただろ。」
ちょっと怒り口調でバクフーンが言った。
「バレちゃった？ごめんねバクフーン君。僕はスロースターターなんだ。準備運動をしないと本気を出せないんでね。でも・・・だいぶ身体が温まってきた事だし、そろそろ本気を出すとするよ・・・」
そう言った瞬間カイリューの身体から出ている金色のオーラが更に

輝きを増した！そしてカイリューの目つきが鋭くなった！
「行くよ・・・燕返し！！」
「おわっ！？」
カイリューは一瞬でバクフーンの目の前まで来て燕返しを直撃させた！
バクフーンはバトルフィールドの外まで吹き飛ばされ壁に激突した！
「いってぇ～・・・さっきよりも桁外れにスピードが上がってやがる・・・ってあれ？」
あまりに強い衝撃を受けたのでバクフーンのブラストモードが解かれていた！
「やばっ！？早くブラストモードに・・・」
「ドラゴンクロー！！」バクフーンが再びブラストモードになろうとした時、カイリューがいつの間にか目の前まで来てバクフーンにドラゴンクローで攻撃してきた！
「電光石火！」
バクフーンは間一髪電光石火でドラゴンクローを回避する事に成功した！カイリューのドラゴンクローは壁に直撃し、壁を粉々に粉砕してしまった！
「えぇ～（汗）どんだけ威力あるんだよ（汗）ってんな事言ってる場合じゃなかった！」
バクフーンはすぐにブラストモードを発動した。「・・・さっきは油断したが、今度はそうはいかないからな。電光石火、そして火炎車。」
バクフーンは電光石火と火炎車のコンビネーション攻撃でカイリューに突っ込んで行った！
「・・・」
バクフーンの攻撃が直撃しそうになったその時、カイリューは一瞬でバクフーンの攻撃を回避して背後に周り込んだ！
「なっ！？」
「今の僕には君が停まって見えるよ。燕返し！」カイリューの燕返

しがバクフーンの背中に直撃した！
「ぐっ！？このっ火炎・・・」
「遅いよバクフーン君！水の波動！！」
バクフーンが火炎放射で反撃するよりも早くカイリューが水の波動をバクフーンに決めた！
バクフーンはまた吹き飛ばされ壁に激突した！
「くっ・・・マジで強いなカイリューの奴・・・またブラストモードが解けちまったぜ・・・」
「どうしたんだいバクフーン君。まさかギブアップなんて言わないよね？」
「へっ！こんな楽しいバトルを途中で止める訳がねぇだろ！行くぜカイリュー！電光石火！」
バクフーンは電光石火でカイリューの周りをぐるぐると走り始めた！
「行くぜブラストモード！そして炎全開！！」
バクフーンは再びブラストモードになり背中の炎を最大出力で放出した！「これは・・・メタグロス君とのバトルで使ってた陽炎だね。だけど僕には通用しないよ！竜巻！」カイリューは竜巻を発生させた！
「まずい！？」
カイリューの周りを走っていたバクフーンはすぐに竜巻から離れた！
バクフーンの陽炎を使った戦法はあっさり攻略されてしまった！
「俺の陽炎をこんなにあっさり攻略するなんて・・・」
「余所見はダメだよバクフーン君！１０万ボルト！！」
カイリューが１０万ボルトをバクフーンに向けて放った！
「穴を掘る。」
バクフーンは穴を掘るで地面に潜り１０万ボルトを回避した。
「甘いよバクフーン君！地震！！」
カイリューは自分の拳を地面に叩きつけて地面に潜っているバクフーンに唯一ダメージを与える事が出来る地面タイプの技地震を発動した！

地面に潜っていたバクフーンには凄まじいダメージが与えられた！
そして強い衝撃を受けたバクフーンは地上へ引きずり出された！

「これで決める！気合いパンチ！！」
カイリューは地上に引きずり出したバクフーンに向かって全速力で飛行！そして渾身の一撃をバクフーンに決めた・・・ように見えたが！
「ま、まだだぜカイリュー！」
バクフーンは両手を使ってカイリューの気合いパンチを受け止めていた！
「やるね！でも、次で本当に最後だよ！」

カイリューはバクフーンを抱きしめるようにして掴み、そのまま空へ急上昇した！バクフーンは必死にもがくがカイリューから離れる事が出来ない！ある程度上昇したカイリューは次に一気に地上へ向かって急降下した！
「ドラゴンダイブ！！」ドラゴンダイブは本来相手に向かって攻撃する技なのだが、カイリューはドラゴンダイブの勢いを利用してバクフーンを地上に叩きつけるつもりなのだ！
（まずい！？これはマジでまずい！？どうする！どうするよ俺！）
バクフーンは必死に対処方法を考えるがその間にもどんどん地上が近くなっていく！
「くそ！こうなったらいちかばちかだ！」
バクフーンは口の方にエネルギーを集め始めた。
「これで・・・終わり！」
「そうはいくか！破壊光線！！」
カイリューがバクフーンを地上に叩きつけようとした瞬間、バクフーンは破壊光線を地上に放った！破壊光線は地上に直撃したと同時に大きな爆発が起きた！その爆発の衝撃でカイリューとバクフーンは空の方へ吹き飛ばされた！カイリューはすぐにバランスを立て直

した。だが、バクフーンを見失ってしまった！
「くっ！？まさかバクフーン君が破壊光線を使えたなんて！バクフーン君は一体何処に？」
「ここだぁ！！」
カイリューが上を見上げると巨大な炎の塊を作り出したバクフーンがカイリューに向かって落下していた！爆発の衝撃はバクフーンをカイリューよりも上の方へ運んでくれたのだ！
「俺の全ての力を・・・受けやがれカイリュー！ブラストバーーーン！！」バクフーンは自分が持てる全ての力をブラストバーンに込めて放った！巨大な炎の塊がカイリューに向かってくる！それはまるで小さな太陽だ！
「避けきれない！？」
不意をつかれたカイリューはバクフーンの超特大ブラストバーンを避ける事が出来ずにその攻撃を受けてしまった！
カイリューは超特大ブラストバーンと共に地上へ激突し凄まじい炎にその身を焼かれた！
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・き、決まった・・・」
全ての力を出し尽したバクフーンはそのまま地上へ落下してしまった。
そして地面に激突。
「痛っ！？ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」
バクフーンはまだブラストバーンの炎が燃えている方を見た。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・お、おいおい・・・嘘だろ・・・」
燃え盛る炎の中からなんとカイリューが出てきた！ゆっくりとバクフーンに近づいて来る！
バクフーンは全ての力を出し尽したので立ち上がる事が出来ない！
・・・カイリューがバクフーンの目の前までやって来た。
「ハァ・・・ハァ・・・たくっ・・・マジで強いなカイリューは・・・やるなら早くやれよ・・・」

「・・・いや・・・本当に強いのは・・・バクフーン君、君の方だよ・・・」
そう言うと突然カイリューが倒れてしまった！
「・・・へっ？」
審判のハッサムが慌ててカイリューの所に駆け寄った。そしてカイリューの状態を確認する。
「・・・」
どうやらカイリューは気絶しているようだ。
「カイリュー選手戦闘不能！よってポケモンリーグ優勝チームはチームブラスト！！」
バクフーンがカイリューに勝利した！その瞬間スタジアムにいた観客が一気に盛り上がり大きな歓声をあげた！
「えっ・・・俺・・・勝ったの？」
バクフーンは自分がカイリューに勝ったのが信じられないのかキョトンとしている。
「バクフーン！」
声が聞こえた方をバクフーンが見るとリザードン達が凄い嬉しそうな顔をしながらバクフーンの所に駆け寄って来た。
「やったなバクフーン！俺達ポケモンリーグで優勝したんだ！」
「ねぇこれ夢じゃないよね？現実だよね？」
ラグラージはまだ自分達が優勝した事が信じられないようだ。
その時リザードンがラグラージのほっぺたを引っ張った。
「イタタタ！？な、何するのさリザードン！？」
「痛がるって事は夢じゃないってこった（笑）」
「ラティアスちゃん！優勝した記念に俺とキスしよう♪」
ここぞとばかりにラティアスに迫るピカチュウ！そこにすかさずピチューが必殺耳を引っ張るを炸裂させた！
「はいはい。そういう事は夢の中でしてちょうだいねぇ。」
いつもよりも強めに引っ張るピチュー。
「ぎゃあ～！？」

「ピカチュウさん（汗）」毎度お馴染みとはいえ、ピカチュウのこの行動に呆れるラティアスであった。
「・・・」
いつも見るこの光景をぼーっと見つめるバクフーン。
「どうした？」
バクフーンの様子がおかしいと思ったラティオスが話しかける。
「・・・本当に勝った・・・んだよな？」
「あぁ。確かに勝った。お前がカイリューを倒した事で俺達の優勝が決まったんだ。」
「そっか・・・勝ったんだ・・・やった・・・ぜ・・・」
バクフーンが突然倒れてしまった！
「あっお、おいバクフーン！？」
ラティオスがバクフーンの状態を確認する。
どうやら気絶しているようだ。
「だいぶ無理してたんだな・・・」
「でもどうする？この後すぐに表彰式だよ？」
「な～に大丈夫さ。そん時になった時に起こせばさ。」
「そんなんで良いのリザードン？」
「細かい事は気にすんなよラグラージ（笑）」

それからしばらくしてバクフーン達チームブラストの表彰式が始まった。
「おい、バクフーン起きろよ！」
リザードンが呼びかけるがバクフーンは目を覚まさない。
「こうなったら・・・おいバクフーン！あそこにお前の好きな食い物があるぞ！」

「何っ!?何処だ!?」
食い物というキーワードが出た途端目を覚ましたバクフーン。
「えぇ～（汗）それで目が覚めるんかい（汗）」
ラグラージはちょっと驚いている。そんな事を言っている時、バクフーン達の所にポケモンリーグ優勝トロフィーを持ってサンダー、ファイヤー、フリーザーの伝説の鳥ポケモンの三人がやって来た。
「おめでとう!やったじゃないあなた達!」
ファイヤーが笑顔でそう言った。
「まぁ、こうなるとはなんとなく解ってたけどね。」
凄いクールに言うフリーザー。
「本当かよ?」
めちゃくちゃ疑った目でフリーザーを見るサンダー。
「ほら二人共!バクフーン達にトロフィー渡さなきゃ!」
「解ってるよファイヤー。」
サンダー、ファイヤー、フリーザーはちゃんと人数分用意してある優勝トロフィーをバクフーン達に渡した。トロフィーは金で作られたかなり豪華なトロフィーである。
「スッゲー!ありがとうファイヤー、サンダー、フリーザー!」
三人にお礼を言うバクフーン。
「それじゃあ最後に優勝チームの写真を撮るから皆集まってね!」
ファイヤーがそう言うとカメラを持ったカクレオンがやって来た。
「はいじゃあ撮りますよ～。はいチーズ!」
カクレオンがそう言った時、バクフーン達はとびきりの笑顔をした。
写真を撮り終えた後はポケモンリーグ閉会式が始まった。閉会式のフィナーレに大きなポケモン花火が打ち上がり皆おおいに盛り上がった。

閉会式が終わった翌日。バクフーン達は故郷に帰る為に選手村で荷造りをしていた。
「お～いバクフーン。そっちはもう終わったか～？」
リザードンが荷造りが終わったのかバクフーンに聞いた。
「おう！準備出来たぜ！」
「解った！そんじゃあそろそろ行こうぜ！」
バクフーン達はレジェンドシティに来た時に乗ってきた船に乗る為に港に向かった。そして港に着いた時もうすでに他のポケモン達が船に乗り込んでいた。ちなみにバクフーンの母親リリやリザードンの両親のメガニウムやジュカインは閉会式が終わったその日にもう故郷に帰っていた。

船に乗り込んでから一時間後、バクフーン達は甲板で海を眺めていた。
「・・・ねぇ、兄さん。」
「解ってるさ・・・」
ラティオスとラティアスがひそひそと何か話している。
「どうした二人共？」
バクフーンが気になったので質問した。
「・・・実は・・・皆に言わないといけない事があるんだ。」
ラティオスが真剣な顔をして言った。
「何だよ？言わないといけない事って？」
「・・・俺とラティアスは・・・チームブラストを抜ける。」

「へぇ～・・・ってえぇ！？嘘！？なんで！？」
ラティオスとラティアスがチームブラストを抜けると言った途端バクフーン達は驚いた！
「私達、ポケモンレンジャーになりたいんです。」
「ポケモンレンジャー？マニューラやクレセリアみたいにか？」
「そうだ。世の中には悪事を働くポケモンに困っているポケモン達がたくさんいる。俺はそんなポケモン達を助けたい。もっと世の中が平和になるようにしたいんだ！」
「私も兄さんと同じ考えです。ですから・・・」
「・・・そうか。まぁラティオスやラティアスが決めた事だからな。俺達がとやかく言う事じゃない。」
「バクフーンさん・・・」
「二人共！頑張って最高のポケモンレンジャーになれよ！応援してるからさ♪」
「ありがとうバクフーン！」
「あっついでに俺も言う事があんだけど。」
今度はピカチュウが言った。
「どうしたピカチュウ？」
「俺とピチューもチームブラストを抜ける事にしたんだ。」
「えっ！？」
ピカチュウの言葉にバクフーン達はまた驚いた！
「お前らも知ってるだろ？ライトニングシティのジムリーダー。」
「あぁあのやたら元気なエレキブルだろ？エレキブルがどうしたんだ？」
「そのエレキブル、実は俺とピチューの父親代わりなんだよ。」
「マジか！？そいつは初耳だ！」
「初めて言うからな。最近、そのエレキブルじいさんが歳のせいで足腰が弱くなって満足にバトルが出来ないんだ。それで、俺がエレキブルじいさんの代わりにジムリーダーをやる事にしたんだ。」
「お前がジムリーダー！？でもお前、世界一強いポケモンになるっ

て夢はどうすんだよ？」
バクフーンが聞いた。
「その夢は諦めちゃいねぇよ。だけどよ、親のようなエレキブルじいさんが困ってるのに放っておく訳にはいかないからさ。」
「ピカチュウ・・・」
「まぁそういうこった。だから俺とピチューはチームブラストを抜けるから。」
「そうか・・・解ったよ。ピカチュウ、ジムリーダー頑張れよ！」
「あぁ！」

「ラティオスのアニキ達がチームブラストからいなくなるんすか・・・何か寂しいっすね。」
グラエナが本当に寂しそうに言った。
「確かに寂しいな・・・だけど、皆と別れるまでまだ3日あるんだ！この3日間、思いっきり楽しもうぜ♪」
バクフーンが言った。
「そうだな。確かにバクフーンの言う通りだ。まだ3日ある。別れる前に楽しい思い出を作っておくか！」
ラティオスもバクフーンの意見に賛成のようだ。もちろん他の皆も同じく。バクフーン達は残りの3日間を思いっきり楽しむ事にした。

第六十話ラストバトル！それぞれの道・・・後編（後書き）

第六十話完成です。

第六十一話仲間との別れ・・・そして新たなる挑戦！（前書き）

今まで一緒に旅をしていたラティオスとラティアス、そしてピカチュウとピチューとの別れの時が迫っていた。
だがもう一人、チームブラストを抜けようと考えているポケモンがいる事を、バクフーンはまだ知らなかった。

第六十一話仲間との別れ・・・そして新たなる挑戦！

バクフーン達は残り3日間の船の旅を思いっきり楽しんでいた。
船に用意されている娯楽施設を全部行ったり、船の中を探検したり、バクフーンだけは船の中にあるレストランに全部行って美味しい食べ物を食べたりした。
あとは夜の船の中で肝試しをしたりした。
騒ぎ過ぎて船乗りのポケモンに怒られたり（汗）
それでもバクフーン達にとっては全て楽しい思い出になった。
だけど楽しい時間が過ぎるのは速いものであっという間に3日経ってしまった。

ウォーターシティの港。「着いたな。何か・・・レジェンドシティに向かうまでの3日は長く感じたのに、帰ってくる時の3日はあっという間だったな。」
バクフーンがちょっと寂しそうな感じで言った。
「そうだな・・・ラティオス達はもう行っちゃうのか？」
リザードンがラティオス達に質問した。
「あぁ。俺とラティアスは一度マニューラやクレセリアがいるポケモンレンジャー本部に行こうと思う。」
「俺とピチューはそのままライトニングシティに行くつもりだ。」
「そうか・・・じゃあ、ここでお別れだな・・・」皆が暗い感じになった。そんな暗い雰囲気を消したのはやはりバクフーンだった。
「皆そんな暗い顔すんなよ？永遠のお別れじゃないんだからさ！会

おうと思えばまた会えるだろ？」
「・・・そうだな。会おうと思えばまた会えるもんな。」
「そうですね。」
「バクフーン兄ちゃんたまに良い事言うね（笑）」
「たまには余計だピチュー！」
皆から笑いが起きた。
最初の暗い感じがどこかに行ってしまったようだ。
「・・・じゃあ、俺達はそろそろ行くよ。」
ラティオスが言った。
「解った。皆、元気でな！また会おうぜ！」
「あぁ！」
ラティオスとラティアス、そしてピカチュウとピチューはバクフーン達と別れた。
バクフーンは皆が見えなくなるまで手を振っていた。
「・・・行っちゃったか・・・さて、俺達も行くか！」
「行くかってバクフーン。僕の家はこの街にあるから僕はここでお別れだよ？」
「あっ！そういえばそうだったな（笑）んじゃラグラージ！またな！」
バクフーンとリザードンとグラエナはラグラージと別れ、フレイムシティに向かった。
その道の途中、迷いの森の入口まで来たバクフーン達は森に入らないでリザードンに頼んで空を飛んだ。以前セレビィに言われた事を思い出したからだ。また時間の乱れに巻き込まれるのは困るから。
空を飛んだ事でフレイムシティにはあっという間に到着した。
「到着～♪いやぁサンキューリザードン♪」
「サンキューっすリザードンのアニキ～♪」
「お前らな（汗）俺はお前らの運び屋じゃないっつうの！」
「まぁ細かい事は気にすんなって（笑）気にしたら負けだぜ♪」
「負けっすよ～♪」

二人共凄いにっこり笑って言っている。
「はぁ・・・まぁ良いか。それじゃ、俺の家はこっちだから。バクフーン、グラエナ、またな！」
「おう！またなリザードン！」
リザードンはバクフーン達と別れ自分の家に向かって行った。
「よっしゃグラエナ！どっちが先に家に着くか競走しようぜ♪」
「良いっすよ♪バクフーンのアニキ、俺が勝つっすからね！」
「それはこっちのセリフだぜ！そんじゃ行くぞ～！よ～い、スタート！」バクフーンとグラエナは家に向かって走り出した。

「よっしゃ～勝った～♪」
「く～負けちまったっす～！」
バクフーンが一番に家に到着した。

「何か家に帰って来るのが久しぶりに感じちゃうなぁ。母さん！ただいま～♪」
「ただいまっす～♪」
バクフーンとグラエナは勢い良くドアを開けて家の中に入った。
しかし、いつもならリリがお帰りなさ～い♪って返事してくれる筈なのだが、今回は何も返事が帰って来なかった。
「あれ？母さん！いないの～？」
バクフーンとグラエナはリリを捜すが何処を捜しても見つからない。
「変だなぁ・・・母さん何処行ったんだ？」
「もしかしてジュカインさんとメガニウムさんの所じゃないっすか？」
「かもしれないな！良し、行ってみるか！」

バクフーンとグラエナは外に出た。
「お～い！」
二人が外に出た時誰かが叫んだ。二人が声が聞こえた方を見てみるとそこにはリザードンがいた。
「あっリザードン！どうしたんだ？」
「こっちに父さんと母さん来てないか？」
「いや、来てないけど・・・あっそうだ！なぁリザードン。そっちに俺の母さん行ってない？」
「いや来てないぞ・・・ってお互いに親が居なくなってんのか？」
「らしいな・・・皆何処行ったんだ？」
「とにかく捜そう！お前達は母さん達が行きそうな所を捜してくれ！俺は空から捜す！」
「解った！」
三人はリリ達を捜す為にバラバラに別れた。

捜索を開始してからだいぶ経ったが、バクフーン達はリリ達を発見する事が出来なかった。
バクフーン達は一度街の噴水広場に集まった。
「見つかったか？」
「ダメっす。リザードンのアニキはどうっすか？」
「こっちもだ。これだけ街の中を捜しても見つからないとなると、あとはあそこしか無いな。」
「だな。」
「あそこって何処っすかバクフーンのアニキ？」
「そういえばお前はまだ行った事が無かったな。母さん達、たまに

だけど長老のコータスの家に遊びに行く事があるんだ。」
「へぇ～。じゃあリリさん達はそこにいるかもしれないんっすね？」
「そういうこった。んじゃ、早速行ってみようぜ！」
バクフーン達はフレイムシティから少し離れた場所にあるコータスの家に向かった。

「うわぁ！コータス長老の家に来るのスッゲー久しぶりだなぁ！」
「だな。父さんと母さんいれば良いけど。」
コータスの家に着いたバクフーン達は早速中に入ってみた。だが、家の中は真っ暗で何も見えなかった。
「うわっ！真っ暗やん！リザードン、ちょい尻尾貸してくれ。」
「俺の尻尾の炎はライトじゃねぇっつうの！」
二人がそんな会話をしていたら、突然家の電気が点灯して一気に明るくなった！それと同時に誰かがクラッカーを鳴らした！
「お帰り～♪待ってたわよ坊や達♪」
クラッカーを鳴らしたのはリリ達だった！
「な、何これ母さん？」
「決まってるじゃない坊や！ポケモンリーグ優勝を祝う為にやってるのよ！それに、ご馳走だってたっぷり用意したんだから♪」
リリが指差した先にあるテーブルの上にはリリとメガニウムとジュカインが作ってくれた豪華な料理が並んでいた。
「うわぁ美味そう♪ジュル・・・あっよだれが（笑）」
「ポケモンリーグ、優勝おめでとう皆♪さぁ、遠慮せずにどんどん食べてね♪」
リリがそう言った時にはすでにバクフーンが物凄い勢いで料理を食べていた。

「美味い～♪生きてて良かった～♪」
「速っ！？さすがバクフーンのアニキ！俺も食べるっす～♪」
「待てお前ら！？俺の分も残しとけよ！？」
バクフーン達は美味しそうに料理を食べた。

「あっそうだ！坊や達、あなた達宛てに手紙が来てるわよ。」
「手紙？」
バクフーンはリリから一通の手紙を受け取った。「誰からっすか？」
「えっと・・・あれ？差出人の名前が書いてないぞ？」
「とにかく内容を読んでみろよ。」
「・・・チームブラストのみなさん。ポケモンリーグ優勝おめでとう。ポケモンリーグ優勝チームであるあなた達に是非とも我々が作ったバトルフロンティアに挑戦してもらいたいと思い手紙を送らせていただきました。もし挑戦する気持ちがおありなら、バトルアイランドにお越し下さい。あなた達の挑戦を心待ちにしております・・・だってさ。」
「バトルフロンティア？なんすかそれ？」
「バトルフロンティアか。懐かしいな。」
ジュカインが言った。
バトルフロンティアについてジュカインは何か知っているようだ。

「父さん。バトルフロンティアって一体何？」
リザードンがジュカインに質問した。

「バトルフロンティアは様々なバトルをする事が出来る場所だ。全部で七つの施設があって、それぞれの施設にジムリーダーみたいな存在のフロンティアブレーンと呼ばれるポケモンがいるんだ。そのフロンティアブレーンに勝つとシンボルを貰えるんだ。」
「シンボル？」
「ジムバッジみたいな物さ。七つ全てのシンボルを集めてバトルフロンティア制覇を目指すって訳だ。俺やメガニウム、そしてリリもバトルフロンティアに挑戦したもんさ。」
「へぇ～！それで、ジュカインさん達はフロンティア制覇したんすか？」
「それがねぇ・・・制覇出来なかったのよ（汗）」リリが答えた。
「えっ！？そうなの母さん！？」
「えぇ。六つのシンボルはゲットしたんだけど、どうしても最後のシンボルがゲット出来なかったのよ。最後のフロンティアブレーンが物凄く強くてねぇ（汗）」
「母さん達でも勝てなかったんだ・・・そんなに強いポケモンがバトルフロンティアにいるんだ！そいつとバトルしてみてぇ♪」
バクフーンは目をキラキラさせながら言った。
「じゃあバクフーンのアニキ！行くんすね？バトルフロンティアに！」
「当たり前じゃん♪リザードンも当然行くだろ？」
「えっ？あの・・・俺は・・・」
リザードンが返事に困っている。一体どうしたのであろうか？
「ん？どうしたよリザードン？」
「・・・あの・・・さ・・・実は・・・お前にまだ言ってなかったんだけどさ・・・俺もチームブラストを抜けようと思ってるんだ・・・」
「えっ！？」
リザードンの言葉にバクフーンは物凄く驚いた！
「な、何でだよリザードン！？」

「・・・ラティオス達がやりたい事をやる為にチームを抜けたように・・・俺もやりたい事を見つけたんだ。」
「リザードンの・・・やりたい事？」
「ゼロを覚えてるか？」
「ゼロ？・・・あぁ！あのブイゼルか！」
「ゼロみたいに、世の中には親に捨てられた子がたくさんいるんだ。俺のように・・・俺はそんな子達を助けたいんだ！」
「リザードン・・・」
しばらく沈黙が続いた。そして先に沈黙を破ったのはバクフーンだった。「・・・解ったよ。お前が決めた事だもんな・・・」
「バクフーン・・・」
「頑張れよリザードン！俺応援するからさ！」
「あぁ！」
ラティオスにラティアス、それにピカチュウやピチューに続きリザードンまでもチームブラストから抜けてしまった。
「バクフーンのアニキ、チームブラストに残ったのはアニキと俺だけになっちゃいましたっすね・・・」
「しょうがないさ。皆やりたい事を見つけたんだからさ。」
「でも、バトルフロンティア挑戦はどうするんすか？俺らだけで出来るんすか？」
「それなら大丈夫よグラエナちゃん。フロンティアブレーンとバトルする時のルールはシングルバトルが基本だから。」
グラエナの疑問にリリが答えた。
「そうなんすか？でもさっきジュカインさんの説明じゃあいろんなバトルが出来るって話だったっすけど？」
「ただのシングルバトルじゃないって事よ。いろいろ特殊な条件付きでやるの。今ここで説明しても良いけど・・・」
「あ～母さん！言わないで！楽しみが減っちゃうから！」
「うふふ。そう言うと思ってたわよ。」
「バクフーンのアニキ。いつバトルフロンティアに行くっすか？」

「今日はもう夜遅いから明日出発する事にするよ。グラエナ、明日は朝一で出発だからな！」

「了解っすアニキ！」

バクフーン達は明日の朝一にバトルフロンティアに向かう事にした。

バクフーン達の新たな挑戦が今始まろうとしている！

第六十一話仲間との別れ・・・そして新たなる挑戦！（後書き）

第六十一話完成です。

第六十二話出発！バトルフロンティアへ！（前書き）

チームブラストからラティオス、ラティアス、ピチュー、ピカチュウ、リザードンが抜けてたった二人になってしまったバクフーンとグラエナ。
ん？でも誰か忘れているような・・・

第六十二話出発！バトルフロンティアへ！

バトルフロンティア挑戦を決めたバクフーンとグラエナ。今日は朝一でバトルフロンティアがある島、バトルアイランドに向かう予定・・・なのだが。

「ぐ～・・・ぐ～・・・もう食えない♪・・・むにゃむにゃ・・・」

「・・・アニキ～・・・待って下さいよ～♪・・・すやすや・・・」

二人揃って爆睡である（汗）

「ほら坊や達！もう朝よ！」

リリが二人を起こそうとするが二人はまるで起きようとしない。

「・・・しょうがない。じゃあ朝ごはんは私が先に食べちゃうわよ～？」リリの朝ごはんというキーワードが出た時、二人の耳がぴくっと動いた。「朝ごはんっ！？」

「朝ごはんっすか！？」

二人同時に飛び起きた！さすがリリ。二人の事を良く解っている。

目が覚めたバクフーンとグラエナはリリが作ってくれた朝ごはんをあっという間に食べてしまった。

「ごちそうさまでした～♪」

「ごちそうさまでしたっす～♪」

「はい。おそまつさまでした♪さぁ食器を片付けなくちゃ！二人共手伝って！」

「「は～い♪」」

二人はリリと一緒に食器の片付けを開始した。

朝一で出発する筈がなんだかんだで時間は午前１１時になっていた。

「はい片付け終了！二人共ありがとうね♪」
「どういたしまして♪ん～お腹いっぱいになった事だし、じゃあそろそろ行きますか！」
「了解っす！」
昨日の夜の間に用意していたリュックやバックを背負う二人。
「二人共。バトルフロンティア、頑張ってね！」
「うん！じゃあ母さん！行ってきま～す！」
「行ってくるっす～！」二人は家を飛び出した。「バクフーンのアニキ！バトルアイランドにはどうやって行くんすか？」フレイムシティの噴水広場まで来た頃にグラエナがバクフーンに質問した。
「えっと・・・この手紙によるとウォーターシティの港からバトルアイランドに向かう船が出てるみたいだな。」
「じゃあまずはウォーターシティに向かうんすね？」
「だな！・・・って待てよ？ウォーターシティに行くには迷いの森を抜けないといけないんだったな（汗）」
迷いの森。まだセレビィが言っていた時間の乱れが直っていない可能性があるためバクフーン達は迷いの森に入りたくないのだ。
「あっそういえば（汗）でも、空から行こうにもリザードンのアニキはいないっすよ？迷いの森を抜ける以外に何かウォーターシティに行く方法は無いんすか？」
「う～ん・・・」
バクフーンは考え込んだ。そろそろ二人共まだいる仲間の事を思い出しても良いと思うのだが・・・
「あっ！そうだそうだ！あいつがいるじゃんか♪」
「あいつって誰っすか？バクフーンのアニキ。」
「とにかく一度ポケモンセンターに行くぞ！それ！」
バクフーンはポケモンセンター目指して走り始めた！
「あっ待って下さいよバクフーンのアニキ～！？」グラエナは慌ててバクフーンのあとを追いかけた。

ポケモンセンターのロビー。バクフーンはセンターに用意されているテレビ電話を使用していた。
「誰に電話するんすか?」グラエナはまだあいつの事を思い出せていない様子。
「すぐに解るさ・・・」しばらくすると誰かが電話に出てきた。
「はいもしもし。ラグラージですが・・・」
「おっ!出た出た♪ようラグラージ♪」
「あ~!あいつってラグラージのアニキの事だったんすね!」
あいつとはラグラージの事である。ラティオスやリザードン達がチームから抜けたなどいろいろな事が起きた為ついさっきまでラグラージの事をすっかり忘れていた二人。「なんだバクフーンにグラエナか。どうしたのさ?」
「いやさ、ちょっとお前に頼みたい事があんだけど・・・」
「あ~断っておくよ。」
「ってまだ何も言ってねぇっつうの!?」
「またどうせ変な頼み事とかなんかでしょ?」
「違うっつうの!まぁ聞けよ・・・」
バクフーンはラグラージにバトルフロンティアの事、そしてバトルフロンティアに挑戦したい為にバトルアイランドに行きたい事を説明した。
「へぇ~バトルフロンティアねぇ。それで、僕にどうしてほしいのさ?」
「いやな、俺達を連れてってほしいなぁ・・・なんて思ってさ。」
「う~ん・・・まぁ迷いの森が安全かどうか解らない限り入るに入れないからねぇ・・・解った。なんとかしてあげる。」
「サンキューラグラージ!さっすがお前だ♪」
「とりあえずそこで待ってて。すぐに迎えに行くから。」
「おう!」

ラグラージが迎えに来るまでバクフーンとグラエナはポケモンセンターで待つ事にした。
「いやぁ、やっぱこういう時に頼りになるんだよなぁラグラージは♪」
「でも迎えに来るって言っても一体どうやってこっちに来るんすかね？」グラエナがそんな事を言っていたその時、一人のポケモンがポケモンセンターにやって来た。
「あっいたいた。二人共お待たせ！」
ラグラージだった。
「えっ！？もう来たんすか！？」
「何を驚いてるのさグラエナ？空を飛んでくればウォーターシティからフレイムシティまであっという間だから別に速すぎる事は無いと思うけど。」
「空飛んでって・・・一体どういう事っすか！？」
「まぁ口で説明するより実際に見た方が早いね。」ラグラージに連れられてグラエナとバクフーンは外に出た。
そしてグラエナが外で見た物は・・・
「へ、ヘリコプター！？」そこにはヘリコプターがあった！
「僕のヘリコプターだよ。あれに乗って来たんだ。」
「ラグラージのアニキ・・・あなた一体何者っすか！？」
「そういえばグラエナは知らなかったっけか？ラグラージは大富豪の息子だって。」
「初耳っすよ！！」
グラエナは物凄く驚いている。
「いやぁ悪いなラグラージ！でも、おかげでウォーターシティの港から出るバトルアイランド行きの船に乗れるぜ！」
「ねぇ。どうせだから僕のヘリでバトルアイランドまで乗せてってやろうか？」
ラグラージの言葉を聞いてバクフーンは驚いた。

「良いのか！？」
「うん。それに船で行くよりヘリの方が速いしね。」
「でもラグラージのアニキ。バトルアイランドの場所は解るんすか？」
「それなら問題無いよ。ちゃんと来る前に調べておいたから。」
「さすがラグラージ！頼りになるぜ♪んじゃ早速行こうぜ♪」
バクフーンはすでにラグラージのヘリに乗り込んでいた。
「調子良いんだから（汗）まぁ良いや。」
ラグラージとグラエナもヘリに乗り込んだ。
「俺ヘリコプターに乗るの初めてっす！」
グラエナは初めてのヘリコプターに目をキラキラさせている。
「ちゃんとシートベルトをしてよ。それじゃ、出発！」
バクフーン達を乗せたヘリコプターはバトルアイランドを目指して出発した。果たしてバトルアイランドにあるバトルフロンティアでは何がバクフーン達を待ち受けているのか？

第六十二話出発！バトルフロンティアへ！（後書き）

第六十二話完成です。

第六十三話最初の挑戦！バトルファクトリー！（前書き）

ラグラージのヘリコプターに乗ってバトルアイランドに向かっているバクフーンとグラエナ。今はまだ海の上を飛行中である。

第六十三話最初の挑戦！バトルファクトリー！

「お～海がスッゴい綺麗っす～♪」
グラエナはヘリコプターから見える海の景色に凄く感動している。
「なぁラグラージ。バトルアイランドはまだか？」
「・・・あっ！見えてきたよ！」
ラグラージが見る視線の先には大きな島があった。島の中心には大きな山が見える。
「あれがバトルアイランドか！くぅ～！早くバトルフロンティアでバトルしてぇ～！」
バクフーンは早くバトルがしたくてたまらない様子。
「とりあえずあの港に着陸させるよ。」
ラグラージはヘリコプターをバトルアイランドの港に着陸させた。
「やっと着いたぜバトルアイランド！さぁ早速バトルフロンティアに挑戦だぜ♪」
「ちなみにバクフーン。何処にバトルフロンティアの施設があるのか知ってるの？」
ラグラージがバクフーンに聞いた。
「それは・・・解りません（汗）」
「やっぱりね（汗）一番近くの施設はここから東の方角にあるバトルファクトリーって所だよ。」
ラグラージはしっかりと何処にどんな施設があるのか調べてきていた。
「じゃあまずそのバトルファクトリーに向かうっすね？」
「だな！よっしゃ！そうと決まれば早速・・・」
「ちょっと待った！」
二人が向かおうとするのをラグラージが止めた。「なんだよラグラージ？」
「行く前にバクフーン達にこれを渡しておくよ。」バクフーンはラ

グラージからバトルアイランドの地図を渡された。地図を良く見ると何やら×印が七つ書かれている。
「この×印はなんだ？」
「バトルフロンティアの施設がある場所さ。それなら方向音痴の二人でも道に迷わないでしょ？」
「あれ？ラグラージのアニキは一緒に行かないんすか？」
「本当は一緒に行きたいんだけど、僕の家のメイドのサーナイトが風邪をひいちゃって倒れちゃったんだ。心配で・・・」
「・・・そっか。解ったよ。ラグラージ、早くサーナイトが元気になると良いな。」
「うん。ありがとうバクフーン。バトルフロンティア頑張ってね！」
「おう♪」
ラグラージは自分のヘリコプターに乗ってウォーターシティへと帰って行った。
「また二人だけになっちゃったっすねバクフーンのアニキ。」
「だな・・・まぁなんとかなるだろ。さぁ、気合い入れてバトルフロンティアクトリーに行こうぜグラエナ！」
「了解っす！」
バクフーンとグラエナは元気良くバトルファクトリー目指して走り始めた。一方ウォーターシティへ帰る途中のラグラージはヘリコプターの中で無線を使い誰かと話していた。
「・・・バクフーンがバトルフロンティアにねぇ。」
「うん。だけどグラエナと二人だけだから心配なんだよ。一応二人には地図を渡したけど、地図があっても道に迷いそうな二人だから（汗）」
「・・・それで、俺にどうしてほしいんだラグラージ？」
「二人に協力してほしいんだ。ヘリコプターの中でバクフーンに聞いたけど、リザードンもチームを抜けたって事だから頼めるとしたら君しかいないんだよ。」
「・・・まぁ良いだろ。バトルフロンティアは自分の実力を上げる

にはうってつけの場所だしな。」
「君なら引き受けてくれるって思ってたよ。じゃあ、お願いするよ。」
「あぁ。」
ラグラージは無線を切った。果たしてラグラージは誰と話していたのであろうか？一方その頃バトルファクトリー目指して元気良く走って行ったバクフーンとグラエナは・・・
「バクフーンのアニキ～ここって今どの辺っすか～？」
「う～ん・・・何処だろうな？」
ラグラージの思った通り二人は地図を持っていても見事に道に迷っていた（汗）何処をどうやって間違えたのか、二人は今深い森の中にいる。
「おかしいなぁ・・・確かに方角はあってた筈なんだが・・・」

「お困りかね？」
何処からか声が聞こえた。バクフーンとグラエナは周りを見渡すが誰もいない。
「誰？」
「上じゃよ上。」
二人が上を見上げると木の枝で休んでいるヨルノズクがいた。
「この辺では見かけない顔じゃな？何処から来なすった？」
「俺らはフレイムシティから来たんだ。俺はバクフーン。こっちはグラエナ。俺達、バトルファクトリーに行こうとしてたんだけど道に迷っちゃって（汗）」
「ほう。バトルファクトリーか。それじゃったらここから北に向かって十分程歩けば良い。そうすればバトルファクトリーに着くぞ。」
「本当っすかおじいさん！」
「よっしゃ！そうと解れば早速出発だ！じいさん！ありがとな♪」
「ありがとうっす♪」
二人は元気良く北に向かって走り出した。

「・・・あれが今年のポケモンリーグ優勝チームのリーダー、バクフーンか・・・良い目をしていたのう。リリにそっくりじゃ。果たしてリリの息子はバトルフロンティアを制覇出来るのか・・・楽しみじゃのう。」
そう言うとヨルノズクは空に飛んで何処かに行ってしまった。
一体このヨルノズクは何者なのであろうか？
バクフーンとグラエナは全速力で走ったのでバトルファクトリーにすぐに到着した。バトルファクトリーは何か物を作る工場のような雰囲気がある建物だった。
「やっと着いたっすねバクフーンのアニキ～♪」
「あぁ！早速バトルファクトリーに挑戦だぜ♪」バクフーンとグラエナはバトルファクトリーの中に入ろうとした。
だがその時、何やら機械が起動する音が聞こえてきた。
「何の音だ？」
「何か・・・音がどんどん近づいてきてるような気がするっす・・・」
次の瞬間バトルファクトリーの中から大きなトラックのような機械が飛び出してきた！その機械はバクフーン達に向かってきた！
「うおっ！？」
バクフーン達は何とか暴走する機械の突進を回避する事が出来た。
「な、なんすかあれ！？」
「俺が知るかよ！だけど・・・あの機械・・・カッコイイ♪」
バクフーンは凄い目をキラキラさせながら言った。そんな事を言っていたらさっきの機械がUターンして戻ってきた！

「また来たっすよ！？」
「二人共伏せろ！雷！」突然二人の後ろから凄まじい雷が放たれた！二人はすぐに伏せたので雷の直撃を避ける事が出来た。雷は機械に直撃した。機械は雷を受けた事でショートして動かなくなった。
「と、停まったっすね・・・でも今の雷凄い威力だったっすね・・・」
「大丈夫だったか二人共？」
誰かがバクフーン達に話しかけてきた。二人が振り向くとそこにいたのは・・・
「サンダー！何でサンダーがここにいんだ？」
そこにいたのは伝説の鳥ポケモンの一人、サンダーだった。
「俺はここのフロンティアブレーンだぞ？いないと変だろ。」
「サンダーがフロンティアブレーン！？」
バクフーンは驚いている。グラエナも同じく。

「あぁ。バトルファクトリー、ファクトリーヘッドのサンダーとは俺の事さ。」
サンダーがちょっとかっこよく言った。
「何かカッコイイ♪」
またバクフーンは目をキラキラさせている。
「ところでサンダーさん。あの機械は一体なんなんすか？」
「あれか？あれは俺の知り合いからもらった物だ。俺は機械いじりが好きでさ。改造してもっと性能を良くしようとしたんだが・・・ちょいやり過ぎて暴走させちまってさ（汗）」
「マジっすか（汗）」
「ところで、お前達がここに来たって事はバトルファクトリーに挑戦しに来たって事か？」
「もちろん♪」
「やっぱな。久しぶりに本気を出せそうだ！良し、早速やるか！ついてきな！」

バクフーンとグラエナはサンダーと共にバトルファクトリーに入って行った。
「ここがバトルファクトリーのバトル場だ。」
バトルファクトリーのバトル場は意外とシンプルで何処にでもありそうなバトル場だった。
「意外とシンプルっすね？」
「俺は相手とガチンコでやりたいのさ。だからバトル場はシンプルにしたのさ。もちろんバトルルールもシンプルで一対一のタイマン勝負。さぁ、どっちが俺とバトルするんだ？」
「グラエナ、俺にやらせてくれないか？」
「バクフーンのアニキがやりたいんならどうぞっす！」
「サンキューグラエナ！よっしゃ！俺がやるぜ！」バクフーンは元気良くバトル場に入った。
「やはりお前が来たか！ファイヤーやフリーザーが気に入ったというお前の実力。見せてもらうぜ！レイ！審判を頼む！」サンダーがそう叫ぶとサンダースがやって来た。
「今日はいつもより張り切ってるわねサンダー？」
「当然だ。相手はバクフーンだからな。」
「まぁ、負けないように頑張ってねサンダー。それじゃあ二人共始めるわよ。一対一のタイマン勝負で時間無制限。バトル、開始！」
サンダースのレイの試合開始の合図と同時にバクフーンは電光石火でサンダーに向かって行った。
「放電！」
サンダーは放電を自分の周りに放ってまるで電気のバリアのような壁を作り出した！
バクフーンは構わず電光石火でそのまま突っ込んだが電気のバリアに弾き飛ばされてしまった！
「いってぇ～・・・どうなってんだよ？」
「驚いたか？これは俺が長い間時間をかけて作りあげたオリジナル技さ。名前をつけるとしたらライトニングシールドってところかな。

相手の攻撃を防御しつつ相手を攻撃する攻防一体の技だ。」
「ライトニングシールド・・・カッコイイ♪」
またまた目をキラキラさせているバクフーン。

「ってんな事言ってる場合じゃねぇな。次はこれでどうだ！火炎放射！」バクフーンは火炎放射を放った！
「ライトニングシールド！！」
サンダーは再びライトニングシールドを発動させて火炎放射を防御。
そして電気の壁はまるで波のようにバクフーンに向かってきた！
「穴を掘る！」
バクフーンは穴を掘るで地面に潜り攻撃を回避した。
「穴を掘るで上手く避けたか・・・だが、俺が空中に飛べば攻撃は届くまい！」
サンダーは空中に飛び地面から離れた。それと同時にバクフーンが地面から飛び出した！
「あっ！空に飛んでやがる！」
「残念だったな！こいつをくらえ！チャージビーム！！」
サンダーは電気エネルギーを集め、それをまるでビームのようにしてバクフーンに放った！
「電光石火！」
バクフーンは電光石火でチャージビームを回避した。
「逃がさん！」
サンダーは連続でチャージビームを放った！
バクフーンは電光石火で全て避けていく。
「火炎放射！」
バクフーンは火炎放射で反撃した！
「ライトニングシールド！」
だが、またしてもサンダーのライトニングシールドに火炎放射が阻まれてしまった！電気の波がバクフーンに迫る！
「負けるか！フレアドライブ！！」

バクフーンは得意技のフレアドライブを発動！
炎の鎧を身に纏いライトニングシールドに突っ込んだ！
「その程度の技じゃ、俺のライトニングシールドは破れないぜ！」
「くっ・・・うあっ！？」バクフーンはライトニングシールドに弾き飛ばされてしまった！

「隙あり！１０万ボルト！！」
弾き飛ばされて大勢を崩したバクフーンにサンダーは１０万ボルトを放った！バクフーンは回避出来ずに攻撃を受けてしまった！
「ぐあぁぁぁ！？・・・うっ・・・さ、さすが伝説のポケモンの１０万ボルトだ・・・効いたぜ・・・」バクフーンは何とかサンダーの攻撃を耐えた。「どうしたバクフーン？ファイヤーやフリーザーが気に入ったっていうお前の実力はその程度か？」余裕の表情で言うサンダー。
「へっ・・・こっからが本当の勝負だぜサンダー！」
次の瞬間バクフーンの身体が凄まじい炎に包まれた！ブラストモードだ！「これがブラストモードってやつか・・・」
「・・・今度はさっきのようにはいかないからな。」
「噂通り性格まで変わるみたいだな。まぁそんな事はどうでも良い。そのブラストモードの力、見せてみろ！」
そうサンダーが言った次の瞬間、バクフーンが消えた！電光石火を使い高速で動いた為である。
「捨て身タックル。」
バクフーンはサンダーの右側から電光石火と捨て身タックルのコンビネーション技で突っ込んだ！
「見切り！」
サンダーは見切りを使いバクフーンの攻撃を紙一重で回避した！
「・・・見切りを使えたのか。だが、見切りは連続で使うと失敗しやすくなる技。次の攻撃は防げまい。火炎放射。」
バクフーンは火炎放射を放った！

「忘れてないか?俺にはこの技があるのを!ライトニングシールド!!」サンダーは電気の壁を作り出して火炎放射を防御!そして電気の壁はどんどんバクフーンに迫って来た!

「電光石火。」

バクフーンは電光石火で迫りくる電気の壁を避けようと後ろに下がった。だが、しつこく電気の壁はバクフーンに向かってくる!バクフーンはとにかく後ろに後退していったが、ついに壁際まで追い詰められてしまった!

「これ以上は下がれないか・・・なら、ライトニングシールドを打ち破るまで。オーバーヒート。」バクフーンは最大パワーでオーバーヒートを放った!バクフーンのオーバーヒートはサンダーのライトニングシールドを見事に突き破った!そしてオーバーヒートはサンダーに向かっていく!

「見切り!」

だが、オーバーヒートはサンダーに見切られてしまい避けられた!

「一気にやらせてもらう。煙幕。」

バクフーンは煙幕を使った。バトルフィールド全体が煙幕に包まれ何も見えなくなってしまった。

「電光石火。」

バクフーンはサンダーが自分の姿を見失っている間に接近して大技ブラストバーンを決めようと電光石火で煙幕の中に突っ込んだ!

煙幕の中にバクフーンが突っ込んで10秒経過した。今のバクフーンのスピードならあっという間にサンダーの目の前まで接近してブラストバーンを決めている筈なのだが、いつまで経っても何も起こらない。

「・・・くっ。」

「残念だったなバクフーン。霧払い！」
サンダーが霧払いで煙幕を吹き飛ばした。ようやくバトルフィールド全体が見えるようになった。バトルフィールドには、サンダーを目の前にして動こうとしないバクフーンの姿が。いや、動こうとしないのではなく動けないのだ。バクフーンは必死に動こうとするが、バクフーンの身体はまるで麻痺したかのように動かない。
「・・・一体、何を？」
「お前の煙幕を利用させてもらった。あの煙幕の中で直接お前を狙うのはかなり難しいから、煙幕全体に電磁波を流したのさ。電気タイプの俺は多少の電磁波を受けても何ともないが、お前は違う。煙幕を伝って電磁波がお前に当たり麻痺の効果が出たのさ。」
「・・・煙幕を使ったのが裏目に出たか・・・」「・・・これで終わりにしてやる！充電！」
サンダーの身体から電気がバチバチと音をたてながら出現した。充電は名前の通り、電気エネルギーを充電する技。この技を使った後に電気タイプの攻撃技を使うと威力が倍になるのだ！バクフーンはすぐに理解したが身体が麻痺している為逃げる事が出来ない！
「くらえ！雷！！」
充電が完了したサンダーが最大パワーの雷を放った！動けないバクフーンはこの雷をまともに受けてしまった！バクフーンは吹き飛ばされた！
「終わったな・・・」
サンダーはそう確信した。だが！
「まだ終わっちゃいないぜサンダー！！」
突然地面からバクフーンが勢い良く飛び出した！
「なっ！？」
「ブラストバーン！！」バクフーンが至近距離でサンダーに最大パワーのブラストバーンを決めた！サンダーは吹き飛ばされた！
「ぐっ！？な、何で・・・お前が地面から・・・」
「今サンダーが攻撃したのは俺が身代わりで作った分身さ。煙幕に

突っ込んですぐに身代わりを使って分身に行かせた後すぐに本体の俺は穴を掘るを使ったんだ。」
「・・・なるほどな。ふっ・・・参ったよ・・・今のブラストバーンで身体がもう言う事きかなくなっちまったみたいだ・・・」
サンダーは降参した。
「サンダーの負けね。じゃ、勝者は挑戦者のバクフーン。」
何かかったるい感じで言っているサンダースのレイ（汗）
「やったっすねバクフーンのアニキ♪」
グラエナが満面の笑みを浮かべながらバクフーンの所に駆け寄って来た。
「おう♪」
「でもびっくりしたっすよ！バクフーンのアニキがピカチュウのアニキが良く使う戦法を使ったのを！」
「あれか。サンダーを倒すにはいつもの戦い方じゃダメだって思ってさ。どういう風に戦えば良いかずっと考えてたらピカチュウの事を思い出してさ。アイツの戦法ならサンダーに勝てるんじゃないかってそう思ったんだ。」
「なるほど・・・つまり今回はある意味仲間の力を借りたって事か・・・」サンダーが言った。
「良い仲間を持っているな、バクフーン。」
「ところでサンダー。彼にあれ渡さないといけないんじゃない？」
サンダースのレイがサンダーに言う。
「そうだったな。悪いがレイ、俺の代わりに渡してくれないか？まだ動けないんだ（汗）」
「しょうがないわねぇ。解ったわよ。」
レイはサンダーから何かを受け取った。それを持ってバクフーンの所へやってきたレイ。
「はい。これがバトルファクトリーを勝ち抜いた証、ノウレッジシンボルよ。」
レイはバクフーンにノウレッジシンボルを渡した。バッジのような

それは金色に輝いていて、それにはKの文字が書いてあった。
「サンキューレイ！これがノウレッジシンボルか。」
「綺麗っすね！」
「あとこれも渡しておくわ。シンボルケース。」更にバクフーン達はレイからシンボルを入れるケースを渡された。
「おっ！こいつは便利だな！ありがとな♪」
「ところであなた達、次の目的地は決まっているの？」
「いや、まだ決まってないけど・・・」

「ならバトルアリーナに向かえば良いわ。他の施設よりは一番近くにあるから。」
「バトルアリーナ・・・って何処にあるんだ？」
「地図持ってる？」
「これっす。」
グラエナが地図を取り出した。
「今私達がいるバトルファクトリーがここで、バトルアリーナがここ。ここから北の方角よ。」
「地図で見ると結構近いっすね。」
「だな。良し、次の目的地はバトルアリーナに決定！レイ、いろいろありがとな！よっしゃ行くぜグラエナ♪」
そう言ってバクフーンはバトルファクトリーを飛び出した。
「あっ！？待って下さいよバクフーンのアニキ～！」グラエナも慌ててバクフーンのあとを追いかけた。
「・・・忙しい人達（汗）」
「ほっほっほ。本当に昔のリリにそっくりじゃのう。」
サンダーとレイの所にバクフーン達にファクトリーの場所を教えてくれたヨルノズクが現れた。
「オーナーじゃないですか！」
サンダーがヨルノズクを見て驚きながらそう言った。実はこのヨルノズク、バトルフロンティアの最高責任者なのである。

「見てたぞ。お主とバクフーンのバトル。随分と派手に負けたのう。」
「面目ない（汗）」
「ヨルノズクオーナー。今日はなんでここに？」レイが質問した。
「うむ。実は例の奴らがこのバトルアイランドに潜入したらしいのじゃ。」ヨルノズクは凄い深刻そうな顔をしながら言った。
「奴らが！？」
レイが凄く驚いている。
「奴らが来たと言う事は・・・やはり目的はこの島で眠るあのポケモンですか？」
サンダーが言った。
「恐らくそうじゃろう。」
「でもオーナー。あのポケモンが目覚めるのは千年に一度ですよね？なんで今奴らが・・・」
レイは首を傾げながらそう言った。
「・・・その千年に一度の目覚めが一週間後にくるのじゃ。」
「えぇ！？」
「じゃから、ワシ達は奴らよりも先にあのポケモンを見つけ、保護せねばならん！すでにポケモンレンジャーにも連絡して協力するよう頼んである。お主達も協力してくれ。」
「解りました。でも、今バトルフロンティアに挑戦中のバクフーンや他のポケモン達はどうするんです？」
「・・・この事は彼らには知らせない。パニックを起こさせる訳にはいかぬからな・・・秘密裏にやる。」
ヨルノズクが言う奴らとは一体何者なのか？
このバトルアイランドで新たな敵が現れようとしていた。だが、バクフーン達はまだこの事を知らない。

第六十三話最初の挑戦！バトルファクトリー！（後書き）

第六十三話完成です。
最近更新が遅れがちですみません（＾―＾；）

第六十四話新しい仲間！新たな敵！

バクフーンとグラエナがバトルアリーナを目指してファクトリーを元気良く飛び出してから約三時間後・・・

「はぁ～・・・ちょっと休憩しようぜ～グラエナ～（汗）」

バクフーンはそう言いながら大の字になって倒れた。サンダーとのバトルの疲れが残っていたのである。

「やっぱりさっき通った時に見つけたポケモンセンターで休んでおいた方が良かったんじゃないっすか？」

「はぁ・・・かもな（汗）でも今からポケモンセンターに戻る元気が無い（汗）」

「じゃあしばらくここで休憩っすね。俺、近くに木の実が無いか探してくるっす。バクフーンのアニキはここで休んでて下さいっす！」

「悪いなグラエナ。」

「じゃあ行って来るっす～♪」

グラエナはバクフーンを残して一人、木の実を探しに出掛けた。

「う～ん・・・探すとは言ったものの、中々見つからないっすね～。バクフーンのアニキが好きなモモンの実の匂いもしないし・・・」

グラエナはバクフーンの為に木の実を探すが中々見つからない様子。そんな時、森の茂みから何か物音が聞こえてきた。

「何の音っすかね？」

グラエナは音がした方へ行ってみた。そこでグラエナが見たものは・・・

「これは・・・石？いや、石にしてはキラキラし過ぎっすね～・・・

」
そこには何やら石とも宝石とも解らない妙な物が転がっていた。
「誰かの落し物っすかね～・・・う～ん、まぁとりあえず拾っておくっす！」
グラエナはそのキラキラした物を自分が持っていたバックに入れた。
「意外に大きいっすね。俺のバックがパンパンっす。・・・これ以上探しても何も見つかりそうにもないっすね～。しょうがないっす。バクフーンのアニキの所に戻るっす！」
グラエナはバクフーンの所に戻ろうとした。
『危ない！上！』
「えっ？」
突然声が聞こえた！
グラエナはとにかく上を見てみた。するとなんと破壊光線がグラエナに向かって来ているではないか！
「わわわ！？」
グラエナは近くの茂みにジャンプして飛び込み破壊光線を回避する事が出来た。
「あ、危なかったっす・・・一体誰が？」
グラエナの疑問はすぐに解けた。上空からポリゴンZが五人舞い降りてきたのだ。
「あいつらが・・・危ないじゃないっすか！一体何の目的があってこんな事をするっすか！？」
「・・・ターゲット確認・・・ボス、ご指示を・・・」
グラエナの質問は無視して何やらポリゴンZの一人が誰かと通信機を使って話ている。
「一体なんなんすか・・・」
『こいつらは危険だよ！早く逃げて！』
また誰かの声が聞こえた。グラエナは辺りを見回すがポリゴンZ以外誰もいない。
「誰っすか？」

「・・・任務了解・・・これよりターゲットの奪取を開始致します。」
通信が終わったようだ。一人のポリゴンZがグラエナに近づいて来た。
「・・・おい。そこの犬。」
「誰が犬っすか!?・・・ん?あながち間違いじゃないような・・・ってそんな事はどうでも良いっす!」

「・・・用件を言う。貴様が持っているGを渡せ。そうすれば命は助けてやる。」
「G?なんすかそれ?俺そんな物持って無いっすよ?」
「・・・もう一度言う。Gを渡せ。」
「だから~Gってなんすか?」
「・・・交渉決裂だな。只今より強行手段をとる。やれ。」
一人のポリゴンZがそう言うと残り四人のポリゴンZがグラエナに襲いかかって来た!
「なんだか知らないっすけど、バトルなら相手になってやるっすよ!」
グラエナは戦闘体勢に入った。
「破壊光線!」
リーダーらしきポリゴンZが指示すると四人のポリゴンZがグラエナに破壊光線を放った!
「破壊光線が四発!?それはいくらなんでも無理っす!?」
グラエナはすぐにその場から逃げて破壊光線を回避した。
「し、死ぬかと思ったっす(汗)四対一なんて卑怯っすよ!」
「・・・正確には五対一だがな。」
いつの間にかリーダーポリゴンZがグラエナの背後にいた!
「電磁砲!」
リーダーポリゴンZが至近距離で電磁砲をグラエナに直撃させた!
グラエナは吹き飛ばされ、木に叩きつけられた!

「うっ・・・か、身体が・・・動かないっす・・・」
電磁砲の追加効果でグラエナは麻痺してしまったのだ！
「大人しく言う事を聞いていれば良かったものを・・・くたばれ。」
リーダーポリゴンZがグラエナに最大パワーの破壊光線を放とうとしている！
「うぅ・・・ダ、ダメっす・・・」
「くらえ！破壊・・・」
「させるかぁぁぁ！！」その時、凄まじい炎がリーダーポリゴンZを吹き飛ばした！
「ハァ・・・ハァ・・・よ、ようグラエナ。無事だったか？」
バクフーンだ！バクフーンがフレアドライブでリーダーポリゴンZを吹き飛ばしたのだ！
「た、助かったっすバクフーンのアニキ・・・」
「何か騒がしいから来てみたら・・・なんだよこいつら？」
「知らないっすけど・・・いきなり俺を襲ってきたんすよ・・・」
「・・・とにかくお前はそこで休んでな。こいつらは・・・俺が倒す！」バクフーンの身体から凄まじい炎が溢れ出た！
「・・・お前ら、よくも俺の大事な仲間を怪我させやがったな・・・覚悟は出来てんだろうな！」バクフーンはグラエナを傷つけられた事にかなり怒っている！
「また邪魔者か・・・邪魔者は排除するのみ。やれお前達！」
リーダーポリゴンZの指示を聞いた他のポリゴンZ四人がバクフーンに破壊光線を放った！
「噴火！！！」
バクフーンの最大パワーの噴火が発動した！
四発の破壊光線をバクフーンの噴火はあっという間に打ち消してしまった！そして噴火がポリゴンZ四人に命中！
「す、凄いっすバクフーンのアニキ・・・」
「ハァ・・・ハァ・・・あとは一人だけだな・・・」
「動くな。」

声が聞こえた方をバクフーンが見たら、そこにはリーダーポリゴンZが動けないグラエナを人質にとっていた！
「き、貴様！？」
「おっと。それ以上動けばこいつの命は無いぞ。」
「くっ！？」
「バ、バクフーンのアニキ・・・すまないっす・・・」
グラエナを人質にとられてしまったバクフーンはリーダーポリゴンZを攻撃出来なくなってしまった！その間に先程倒した四人のポリゴンZが起き上がった。
「・・・構えろ。」
リーダーポリゴンZがそう言うと四人のポリゴンZはバクフーンに破壊光線を放とうとエネルギーチャージを始めた！
「ア、アニキ・・・」
「・・・やれ。」
「ハードプラント！！」四人のポリゴンZが破壊光線を放とうとしたその時、突然地面からイバラのようなトゲがついた植物が出現して四人のポリゴンZの身体に巻き付いた！トゲが身体中に刺さりその痛みで四人のポリゴンZは破壊光線を放つ事が出来なくなった！
「な、何！？」
「貴様もだ！」
リーダーポリゴンZにもハードプラントが襲いかかる！
「ちっ！」
リーダーポリゴンZはグラエナから離れ空に逃げた！
「何者だ！？」
「そいつはこっちのセリフだ。お前達こそ何者だ？」
そう言いながら一人のポケモンが森の中から姿を現した。そのポケモンはとても大きく、姿は亀に近い姿をしていて背中にはムックルクラスの小さなポケモンなら住めそうな木が生えている。
「・・・これ以上任務に時間を掛ける訳にはいかない！貴様が何者

だろうと関係無い！排除する！」リーダーポリゴンZが突っ込んで来た！
「悪いが、俺はお前に排除される程弱くないぞ。リーフストーム！！」
突っ込んで来たリーダーポリゴンZにその大きなポケモンは草タイプの大技、リーフストームを放った！リーダーポリゴンZはリーフストームを受けて空のかなたに吹き飛ばされた！
「ふん。相手が悪かったな。大丈夫かバクフーン？」
「あんた・・・誰だ？」
「がくっ！？」
バクフーンがそういうと大きなポケモンは思わずこけた。
「あ、相変わらずだなお前は（汗）まぁ、最後に会ったのが俺がナエトルの時だったから無理ないか・・・」
「ナエトル・・・あ～！？お前、まさかあの泣き虫ナエトルか！？」
バクフーンは何か思い出したようで大きな声でそう呼んだ。
「泣き虫は余計だが（汗）そうだ。久しぶりだな。」
「マジであん時のナエトルか！うわぁ懐かしいなぁ！こんなにでっかくなりやがって！」
「ドダイトスに進化したからな。」
バクフーン達を助けてくれたこのドダイトス、実はバクフーンの昔の友達なのだ。
「何でお前がこんな所にいるんだ？」
「ラグラージに頼まれたのさ。お前が心配だから自分の代わりにサポートしてやってくれってな。」
「ラグラージが・・・」「まぁいろいろ話したい事はいっぱいあるがその前に・・・」
そう言ってドダイトスはグラエナの所へ。
「た、助けてくれてどうもありがとうっす・・・」
「当然の事をしただけさ。それよりも君、身体が動かないのか？」
「そうなんすよ・・・奴らの電磁砲を受けちまって・・・」

「麻痺したのか・・・急いでポケモンセンターに向かおう。バクフーン、グラエナを俺の背中に乗せてくれ。」
「解った！」
バクフーンはグラエナをドダイトスの背中に乗せ、自分の荷物とグラエナの荷物を持ってドダイトスと共にポケモンセンターに向かった。

バクフーンとドダイトスはポケモンセンターに到着した後すぐにグラエナをハピナスに診てもらった。ハピナスが言うには自分が作った薬を飲んで一日安静にしていればすぐに良くなるそうだ。
グラエナを寝室に寝かせた後、バクフーンとドダイトスはポケモンセンターの食堂に行き、ご飯を食べながら話をする事にした。
「グラエナ、明日には良くなるようで良かったなバクフーン。」
「あぁ♪うお、このご飯美味い♪」
バクフーンは大量に持って来たご飯を美味しそうに食べている。
「・・・ヒノアラシの時も結構大食いだったけど、今もそれは変わらないみたいだな（汗）」
「腹ペコだったんだよ。そういえばお前、今まで何してたんだよ？フレイムシティからリーフシティに引っ越したのは聞いてたけど何も連絡してこなかったよな？」
「・・・あの時は・・・ちょっといろいろあってさ・・・連絡いれる余裕が無かったんだ・・・」急にドダイトスが暗い表情になった。
「ふ～ん・・・まぁ、こうしてまた会えたんだから良いか！ところでさ、そのご飯食わないんなら俺食っちゃって良いか？」
「ダメだ！俺だって腹減ってるんだから！」
バクフーンにご飯をとられまいと慌てて食べるドダイトス。この後

は昔話に花が咲いて二人は何時間も喋っていた。
気がついたらもう夜になっていた。
「ふぁ～・・・もうこんな時間か・・・今日はもう寝ようぜ？」
「先に寝てて良いぜ。俺は用事を済ませてから行くから。」
「ふぁ～・・・解った～・・・じゃあお休み～・・・」
バクフーンはあくびをしながらグラエナが眠っている寝室に向かった。
一方ドダイトスはポケモンセンターのロビーにあるテレビ電話を使って誰かと連絡をとっていた。「じゃあバクフーンと合流出来たんだね？」
「あぁ。あいつは昔とちっとも変わってないな。」ドダイトスが連絡をとったのはラグラージだった。
「まぁバクフーンだからねぇ。」
「・・・ところで、前に頼んであったやつは何か解ったか？」
「うん。一応調べておいたけど・・・でもなんでドダイトスがこんなのを調べてるの？」
「・・・ちょっとな。」
「まぁとりあえず結果を言うね。」
ドダイトスがラグラージに頼んだ調べておいてほしいものとは一体何なのであろうか？
・・・しばらくして。
「・・・なるほど。じゃあさっき会った連中が・・・」
「ん？何か言った？」
「いや、何でもない。調べてくれてありがとうなラグラージ。」
「友達の頼みだもん。じゃあバトルフロンティア頑張って！バクフーンをよろしくね！」
そう言ってラグラージは電話を切った。
「・・・あのポリゴンZ共が・・・奴の部下・・・て事は奴はこの島の何処かにいるのか・・・」ドダイトスは凄い真剣な表情になった。ドダイトスが言う奴とは一体何者なのであろうか？

翌日。
「う～ん・・・復活っす～♪身体が動くってこんなに嬉しい事だったんすね～♪」
グラエナはすっかり元気になったようだ。
「いやぁ元気になって良かったなグラエナ♪」
「はいっす♪」
「朝からテンション高いなぁお前達（汗）」
二人のテンションの高さにちょっとついて行けてないドダイトス。
「そうか？別に普通だと思うが？なぁグラエナ？」
「ねぇアニキ？」
息のあった二人である。「まぁとにかく、今日から俺も一緒に行動させてもらう。よろしくな！」
「おう♪頼りにしてるぜドダイトス♪」
「よろしくっす～♪」
チームブラストに新たな仲間、ドダイトスが加わった。
「じゃあ、ドダイトスが仲間に加わった事だし、そろそろ出発するか♪」
「目指すはバトルアリーナっすね♪」

「バトルアリーナか・・・確かここから北の方角だな。」
「よ～し！バトルアリーナ目指して出発～♪」
「了解っす～♪」
「お、おう（汗）」
バクフーン達はバトルアリーナ目指して再び歩き始めた。ちなみにまだグラエナは森で拾った不思議な石を持ったままである。この石は何なのか？グラエナが聞いた不思議な声の正体は？全ては謎のままであるがグラエナ自身はバトルアリーナの事で頭がいっぱいのよ

うでこの事を忘れている様子である（汗）

バトルアイランドから少し離れた海の上。一隻の船がいた。

「・・・任務失敗とはな・・・使えぬ奴だ・・・」

「も、申し訳ありませんボス・・・次こそは必ず成功させます！だから、私にチャンスを！」

誰かに必死に許しを貰おうとしているのはバクフーン達を襲ったポリゴンZである。

「・・・使えぬ奴にチャンスなど無い・・・おい。」

「はっ！」

ボスらしき巨体な身体をしたポケモンが近くにいる部下のカイリキーに目で合図を送るとカイリキーは四本の腕を使ってポリゴンZを取り押さえた。

「お、お止め下さいボス！？お願いします！私にチャンスを！」

「・・・うるさいゴミだ・・・カイリキー、奴をカプセルにぶち込め。」

「はっ！」

カイリキーは近くにある大きなカプセルにポリゴンZを放り投げた。そしてカプセルを閉める。

中でポリゴンZが何か必死に叫んでいるが外にはその声は聞こえない。

「やれ。」

ボスがそう言うとカイリキーは近くにあったボタンを押した。するとカプセルの中が突然光だした！光始めて数秒経った後、光は消えた。中にいた筈のポリゴンZは跡形もなく消えていた・・・

「あのポリゴンZは失敗作だったぞヤドキングよ・・・」

「う～ん・・・プログラムは良かった筈なんですけどねぇ・・・あとで修整しときます。」
そう言ってヤドキングは別の部屋に向かった。
「・・・おい。」
ボスが残り四人のポリゴンZ達に言った。
「・・・Gは今どうなっている？」
「は、はい・・・今Gはグラエナというポケモンが所持しております。」「・・・なんとしてもGを奪え。もし失敗したら・・・次はお前達全員デリートするからな・・・解ったら行け。」
「は、はい！？」
四人のポリゴンZは慌てて外に出た。
「・・・ドクロッグ。」
「呼んだかいボス？」
「・・・お前も行け。もし奴らが任務を失敗したら・・・」
「言われなくても解ってるよボス。任せときな・・・」
ドクロッグはポリゴンZの後を追いかけた。
「・・・待っていろ・・・必ず貴様を我が物にし俺の願いを叶えてもらうからな・・・ジラーチよ・・・フフフ・・・フハハハハ！！」

第六十四話新しい仲間！新たな敵！（後書き）

第六十四話完成です。

第六十五話謎の屋敷で探検！グラエナは幽霊が嫌い？

「お～い！早く来いよ～ドダイトス～！」
「置いてっちゃうっすよ～！」
バトルアリーナ目指して旅を続けるバクフーン達。今はまだ森の中を進んでいた。
「お前らどっちに行く気だ？バトルアリーナは逆の方向だぞ！」
「「あり？」」
バクフーンとグラエナはバトルアリーナとは逆方向に行こうとしていた。「お前ら・・・地図持ってるのに何で道に迷いそうになるんだよ？」
ドダイトスはちょっと呆れたような感じで言った。
「「申し訳ない（汗）」」二人揃って謝った。
「ラグラージが心配する筈だな（汗）俺が先導するから二人共ちゃんとついて来な。」
「「は～い。」」
ドダイトスを先頭にバクフーン達は再びバトルアリーナ目指して進み始めた。
「ねぇねぇドダイトスのアニキ～。」
「ア、アニキ？」
ドダイトスはアニキと呼ばれる事にちょっと戸惑いを感じた。
「ドダイトスのアニキはバクフーンのアニキとどういう関係なんすか？」そんなドダイトスの気持ちを知らないグラエナはそのまま質問した。
「俺とバクフーンの関係か？ただの友達だよ。昔アイツがまだヒノアラシだった頃、良くヒトカゲとミズゴロウと一緒に遊んでたんだ。」
「ミズゴロウとヒトカゲ・・・あ～リザードンのアニキとラグラージのアニキの事っすね！」

「そうだ。」
「こいつ本当に泣き虫でさぁ！ちょっと転んだだけで泣いてたりしてさ。更には夜一人でトイレにも行けなかったんだよな（笑）」
「な、何言ってんだよバクフーン！？」
昔の恥ずかしい思い出を暴露されて顔が赤面しているドダイトス。
「へぇ～今のドダイトスのアニキからはとても想像出来ないっす！」
「でも本当の事なんだ！そしてさぁ・・・」
「それ以上何か言うとぶっとばすぞバクフーン！」バクフーンが更にドダイトスの過去を暴露しようとしたのをドダイトスが慌てて止めた。
「わ、解った解った！そんなに怒るなって！」
「たくっ・・・」
「あっ！アニキ達！彼処に見える建物はなんすかね？」
グラエナが見ている視線の先には何やら大きな建物があった。
「なんだろなあれ？」
「バトルアリーナまではまだ距離がある筈だが・・・ちょっと待ってろ。今地図で確認してみる。」ドダイトスは地図を広げた。
「さっき出発したポケモンセンターがここでバトルアリーナがここだろ・・・変だな。地図ではこの間には何も無いぞ？」ドダイトスが言うように地図には何も無かった。
「地図には載って無い場所か・・・」
バクフーンがにやにやし始めた。
「お前まさか・・・あの建物に行こうとか考えてるんじゃないだろうな？」
「そのまさかさ♪だってワクワクするだろ？地図には載って無い建物なんてさ！もしかしたら中にはお宝とかあるかもしんねぇだろ♪」
「バトルアリーナはどうすんだよ？」
「バトルアリーナは逃げたりしないさ！よっしゃグラエナ！あの建物にどっちが先にたどり着くか競走だ♪」
「良いっすよ♪」

「そんじゃ行くぞ～・・・よ～い、スタート！」バクフーンとグラエナは謎の建物目指して走り出した。
「・・・やれやれ（汗）」ドダイトスはため息をつきながらバクフーン達のあとを追いかけた。

「ゴールっす～♪」
グラエナが一番に到着した。
「くそ～負けた～！グラエナ、お前足速くなったなぁ！」
「えへへ♪いつもアニキと競走してるっすからね♪そういえばドダイトスのアニキはどうしたっすか？」
二人が振り返るとドダイトスは遥か遠くにいた。
「お～いドダイトス～！速く来いよ～！」
「これでも全速力で走ってんだよ！！」
ドダイトスは身体が大きい為速く走れないのだ。「しゃあない。アイツが来るまで待つか。・・・結構古い建物みたいだなぁ。」
バクフーンは改めて建物を眺める。その建物は高貴な者が住んでいた屋敷のようだ。だが、ところどころクモの巣やらホコリが目立つところ、どうやら廃墟のようだ。
「・・・何かボロボロっすね、この建物。」
「だな・・・一体どんな奴が住んでたんだろうな？」
バクフーンとグラエナがそんな事を話しながらドダイトスが来るまで暇つぶしをする事にした。
それからしばらくしてようやくドダイトスがやって来た。
「おっやっと来たな！」
「ハァ・・・ハァ・・・お、お前らなぁ、俺の身体じゃあお前らみ

たいに速く走れないって事くらいすぐに解るだろ！？」
結構お疲れのご様子であるドダイトス。
「悪い悪いドダイトス（笑）さぁ早速この屋敷の中に入ろうぜ♪」
「了解っす♪」
バクフーンとグラエナは屋敷の中に入って行った。
「す、少しくらい休ませろって・・・はぁ・・・ラグラージは良く耐えてたな・・・」
愚痴を言いながらドダイトスも屋敷の中に入って行った。

「へぇ～結構広いな！」バクフーンが言うように屋敷の中は意外に広かった。たくさんのポケモンでパーティーが出来そうなくらい。
「でもちょっと不気味な感じっすね（汗）」
「廃虚だからな。案外出たりしてな？」
「何が出るんすかドダイトスのアニキ？」
「幽霊とか。」
「幽霊っすか～？でも実際そんなのいるはずが・・・」
その時突然バクフーン達が入って来た扉がバタンと勢い良く閉まった！
「で、出たっす～！？」
グラエナは慌ててバクフーンの背中の方に隠れた。
「おいおい。大丈夫だってグラエナ。風が吹いて扉が閉まっただけさ。」
「ほ、本当っすか？」
身体がガクガク震えているグラエナ。実は幽霊とかそういうのに弱いらしい。

「怖いなら外で待ってるか？」
ドダイトスがグラエナに聞いた。
「だ、大丈夫っす！一緒にいるっす！」
「良し、じゃあ早速探検開始だ♪」
バクフーンが屋敷の奥に進み始めた。
「ま、待って下さいっすバクフーンのアニキ～！？」慌ててグラエナはバクフーンのあとを追いかけた。
「・・・本当に昔と変わってないなバクフーンは・・・」
そう言いながらドダイトスもあとを追いかけた。「・・・ねぇ兄ちゃん。誰か来たよ？」
「・・・みたいだな。きっと俺達の家を奪うつもりなんだ！」
「そんな！？ど、どうするの兄ちゃん？」
「奴らを追い出す！俺に考えがあるんだ！良いか？良く聞けよ・・・」
物陰に隠れているポケモン達がいた。どうやらバクフーン達を追い出すつもりらしい。バクフーン達はこのポケモン達の存在にまだ気づいていない。

「さてと、まずはこの部屋から覗いてみますか♪」そう言ってバクフーンは一つの部屋の扉を開けた。中には大きなテーブルがあり、その上には食器、天井にはシャンデリアがあった。奥の方にはキッチンもある。ここは食堂のようだ。
「食堂みたいっすね？」
「だな。」
「・・・兄ちゃん来たよ！」
「良し、さっき話した通りにやるんだぞ！良いか・・・今だ！」

バクフーン達を追い出そうとするポケモン達がサイコキネシスを発動した！食堂にある食器棚が揺れ始めた！ちなみにこのポケモン達はテーブルの下に隠れている。
「バ、バ、バクフーンのアニキ・・・食器棚が動いてるんすけど（汗）」
「・・・風かな？」
「いやバクフーン、それは無いと思うが？」
「な、何で二人共そんなに冷静なんすか！？」
バクフーンとドダイトスは冷静なのに対しグラエナはパニック寸前である。
「あんまりびびってない奴らがいるな？よ～し、皆！やるぞ！」
「うん！」
食器棚が空中に浮き始めた。
「しょ、食器棚が浮いたっすよ！？」
「・・・物凄い強い風？」
「いやだからバクフーン、それは絶対無いから。これはポルターガイスト現象ってやつだろ。」
「へぇ～詳しいなドダイトス？」
「だから何で二人共そんなに冷静なんすか！？」
その時食器棚がバクフーン達に向かって来た！
「き、き、来たっす～！？」グラエナはバクフーンの後ろに隠れた。
「なぁドダイトス。あれ壊したらやっぱし弁償しないとダメかな？」
「いや、ここは廃虚だから別に大丈夫なんじゃないか？」
「良し！なら遠慮なく・・・火炎・・・」
バクフーンが火炎放射を放とうとした。
「ってバカ！？こんな所で炎技使ったら火事になんだろ！？俺がやる！リーフストーム！」
ドダイトスがバクフーンを止めたあと、リーフストームを食器棚に放った！食器棚は吹き飛ばされて壁に激突！食器棚は壊れてしまった。

「見事にぶっ壊れたなぁ。やるじゃんドダイトス♪」
「まあな。てかバクフーン、ここでは絶対炎技禁止だからな！」
「解ったよ。グラエナ、いつまで俺の後ろにいるんだ？もう大丈夫だぞ。」バクフーンが後ろを振り向いたらグラエナはビクビク震えていた。
「・・・幽霊怖い・・・幽霊怖い・・・（汗）」
「あらま（汗）しゃあない。グラエナは先に外で待ってな。ドダイトス、俺達はもうちょい探検しようぜ♪」
バクフーンは目をキラキラさせながらそういう言った。
「・・・お前は本当に変わらないなぁ。解った。付き合ってやるよ。」
「さっすがドダイトス♪じゃあグラエナ、またあとでな！」
バクフーンとドダイトスは屋敷の更に奥へ進んだ。
「えっ！？ちょ、ちょっとアニキ達！？俺を一人にしないで下さいっす～！？」グラエナは一人でいるのが嫌なので、慌てて二人のあとを追いかけた。
「・・・兄ちゃん。アイツら全然帰る気無いよ？」
「う～ん・・・予想以上に手強いな・・・良し、次の作戦だ！」

バクフーン達は今度は何やら古い本がいっぱい置いてある部屋にやって来た。どうやら書斎のようだ。
「うわぁ、難しそうな本がいっぱいだなぁ。」
「グラエナ、何で一緒に来たんだ？」
ドダイトスが聞いた。
「だって一人で出口まで行くの怖いっすよ～（汗）アニキ達と一緒

が良いっす！」
すっかり脅えてしまっているグラエナである。
「なぁ二人共～こっち来てみろよ。何か面白そうな本があるぜ！」
バクフーンが二人を呼んだ。
「どうしたよ？」
「これ見てみ！」
バクフーンが指差した先には伝説のポケモンについてと書かれた本が置いてあった。
「伝説のポケモンについてかぁ・・・結構面白そうだなぁ。」
「だろだろ♪」
ドダイトスはその本を開いてみた。
「・・・だいぶ古いみたいだなぁ。字がかすれててほとんど読めないぞ。」ドダイトスが言うように本に書かれている文章がかすれていてほとんど読めない状態だった。
「マジかよ～！」

「読めても部分的だな・・・えっと・・・時の神・・・ディア・・・空間・・・キア・・・」
「それってディアルガとパルキアじゃねぇか？」「多分そうだな。続きがあるな・・・二人の神・・・同等の力・・・ギ・・・あ～こっからは完全に消えてて読めないなぁ。」
「二人の神って事はさっき出たディアルガとパルキアの事っすかね？」
「多分そうだろうな。そしてここに書いてある同等の力・・・これはディアルガとパルキアと同じ力をもったポケモンがいるって事だろうな。」
「あのディアルガとパルキアと同じ力をもったポケモンがいるってか！バトルしてみてぇなぁ♪」
「でも本当にいるんすか？神と呼ばれる二人のポケモンと同等の力

を持ったポケモンなんて？」
「さあな。・・・あと読めそうなところは・・・」ドダイトスは本のページをどんどん捲っていった。

「・・・奴らは本に夢中になってるな。良し、今だ！」
「解った！」
またポケモン達がサイコキネシスを使った。本棚にある本がどんどん床に落ちてくる！
「ア、アニキ？何か勝手に本が落ちてくるんすけど（汗）」
「だな。例のポル・・・なんだっけ？」
「ポルターガイストだ。ポルターガイスト。」
「そうそれそれ！」
「だから何でそんなに冷静にしていられるんすか！？」
次の瞬間、落ちてきた本が今度は空中に浮いた！そして渦を巻くように回転し始めた！
「こ、今度はなんすか！？」
「・・・回ってるな。」見たまんまの事を言っているバクフーン。
「皆良いか？今だ！」
回転していた本の大群がバクフーン達に向かってきた！
「来たっす～！？」
またバクフーンの後ろに隠れたグラエナ。
「スピードスター！」
バクフーンは本の大群に向かってスピードスターを放ち、本を全て撃ち落とした！
「良し、終わり！」

「に、兄ちゃん、全部撃ち落とされちゃったよ（汗）」
「くそ！こうなったら最後の手段だ！行くぞ皆！」ポケモン達が大きな白い布を被ってバクフーン達の前に出ていった。
「な、な、何か出たっすよ～！？」

「お前達・・・ここから出ていけ！」
ポケモン達は相手を怖がらせる為に凄い低い声を出して言った。
「・・・新種のポケモンか？」
「いやバクフーン、さすがにこんなポケモンはいないだろ？」
「出ていけ！」
ポケモン達がバクフーン達に向かってきた！
「なぁドダイトス、ああいうタイプってやっぱノーマル技は効かないのかな？」
「まぁ恐らくゴーストタイプだろうから効かないだろうな。」
「じゃあ俺が使える技で効果があるのは炎技だけになっちゃうなぁ（汗）ドダイトス頼む！」
「解った。リーフストーム！」
ドダイトスはリーフストームを放った！リーフストームでポケモン達が被っていた白い布が吹き飛んでしまった！そして中にいたポケモン達の姿が現れた。
「あっ（汗）」
「ば、バレちゃったよ兄ちゃん（汗）」
そのポケモン達とはゴースにゴースト、カゲボウズにヨマワルにフワンテだった。
「あら？中からポケモンが出てきたぞ？」
「・・・今までのポルターガイスト現象はこのポケモン達のせいだったのか。」
「そうなのか？何でまたそんな事をしたんだお前達？」
バクフーンが聞いたらゴーストが自分達の住む家を奪いに来たと思い、追い出そうとしたと説明した。
「なんだそういう事だったのか。俺達はただ探検しに来ただけなんだ。」バクフーンが言った。
「えっ！？じゃあ俺達の家を奪いに来た訳じゃあ・・・」
「そんなつもりは無いよ。」
「じゃあ兄ちゃんの勘違いだったの？」

カゲボウズがゴーストに言った。
「・・・みたいだな（汗）あの・・・すみませんでした！！」
ゴーストはすぐに謝った。他のポケモン達も一緒に。
「別に良いさ。勘違いは誰にだってあるんだからさ！なぁグラエナ？」
バクフーンがグラエナにそう言った。だが、グラエナから返事が帰ってこない。
「ん？グラエナ？」
バクフーンが振り向くとそこにグラエナはいなかった。
「あれ？アイツ何処行った？」
「あの人なら一目散に逃げて行きましたけど？」ゴーストが答えた。
「本当に幽霊ダメなんだなぁアイツ・・・あっ♪良い事思いついた♪」
何か思いついたのか、バクフーンがニヤニヤ笑い始めた。
「どうしたよバクフーン？」
「いやな、ちょっとグラエナを驚かそうと思ってさ♪お前達も協力してくれないか？」
「えっ？」
バクフーンがドダイトスとゴースト達を集めて、グラエナに何をするのか説明した。
「・・・って訳だ。」
「面白そうじゃないですか♪喜んで協力しますよ！なぁ皆？」
「うん♪」
「お前好きだなぁそういうの？でも、確かに面白そうだな！」
「良し、じゃあ早速行動開始だ♪」

現在グラエナは屋敷の出入口の所にいた。
「お、思わず逃げて来ちゃったっすけど・・・バクフーンのアニキ達は大丈夫っすかね・・・もうこんな所から速く出たいっすよ（泣）」
ブルブル震えているグラエナ。その時、屋敷の廊下の方から足音が聞こえてきた。
「だ、誰っすか？バクフーンのアニキっすか？」グラエナはゆっくりと廊下の方を覗いてみた。するとそこには、先程書斎でみた白い幽霊が！
「み～つ～け～た～ぞ～！」
低い声でグラエナに向かって叫んだ白い幽霊。
「で、出たっす～！？」
グラエナは一目散で逃げた。
「・・・すぐにバレると思ったが・・・意外にバレないものだな。」
白い幽霊の正体はドダイトスだった。実はバクフーンの考えでグラエナに肝試しをしようとゆう事になったのだ。
「ハァ・・・ハァ・・・は、速くアニキ達と合流してここから脱出するっす！でも・・・幽霊怖いっす～（泣）」
グラエナは食堂のテーブルの下に隠れていた。
その時、食堂の扉が開く音が。
「誰か来たっす！？ってまずいっす・・・」
グラエナはバレないように必死に声を出さないように前足で口を押さえる。食堂に入って来たのは先程会った幽霊、もといドダイトスよりも小さい白い幽霊だった。しかも五人も・・・皆浮いている。
中身はゴースにゴースト、カゲボウズにヨマワルにフワンテである。
「さて、何処にいるのかなぁ？」

「・・・兄ちゃん、あのテーブルの下。」
白い幽霊、もといカゲボウズがゴーストにテーブルの下を見るように言った。そこにはグラエナの尻尾が。
「・・・まさに頭隠して尻隠さず・・・いや尻尾か？まぁ良いや。じゃあお前達、サイコキネシスであのテーブルを浮かせるぞ。」
「ＯＫ♪」
ゴースト達はサイコキネシスでテーブルを浮かせた。グラエナは突然の事にビックリした。
「み～つけた♪」
カゲボウズがグラエナに言った。
「に、逃げるっす！？」
グラエナは猛スピードでその場から逃げた。

「おっ来た来た♪」
グラエナが廊下を走っている所を白い幽霊もといバクフーンが待ち伏せしていた。グラエナはバクフーンに気づき急停止した。
「こ、ここにも幽霊っすか！？」
グラエナは慌てて引き返そうとした。だが、後ろからはドダイトスとゴースト達がやって来ていた。挟み撃ちである。
「は、挟まれたっすか！？ど、どうしよう（汗）」
悩んでいる間にどんどんバクフーン達が近づいてくる。
「・・・も、もうこうなったらやけっす！くらえっすシャドーボール！！」グラエナはバクフーンに向かってシャドーボールを放った！
「うわっ！？」
バクフーンはいきなりだったのでシャドーボールを避ける事が出来

ずに受けてしまった!それと同時に被っていた白い布が吹き飛んでしまった。
「イタタタ・・・ほ、本気のシャドーボールで撃ちやがって・・・」
「あ、あれ?アニキ?何で幽霊がアニキなんすか?・・・ま、まさかアニキ!?死んじゃったんすか!?」
「んな訳あるか!生きてるよ!そう簡単にくたばってたまるかって!」
「じゃあ何でアニキが幽霊なんすか?」
鈍いグラエナである。
「バレちゃしょうがないか。皆、もうそれ取って良いぞ。」
バクフーンがそう言うとドダイトス達は被っていた白い布を取った。
「えっえっ?一体何がどうなってるんすか?」
混乱してきたグラエナ。バクフーンがグラエナに今までの事をちゃんと説明した。
「・・・という訳。」
「え~(汗)アニキ達ひどいっすよ~!」
「ハハハ悪い悪い(笑)」「でも楽しかったね兄ちゃん♪」
カゲボウズがゴーストに言った。
「あぁ(笑)」

皆グラエナを驚かす事が余程楽しかったみたいで満面の笑みを浮かべている。
「そういえばゴースト、ちょっと聞きたい事があるんだが・・・」
ドダイトスがゴーストに質問した。
「何ですか?」
「この屋敷なんだが、地図に載ってないんだ。その理由は知ってるか?」
「う~ん・・・俺にはちょっと解らないですねぇ・・・俺達がここに住み始めたのがつい最近なので・・・」
ゴーストは知らないようだ。

「そうか・・・解った。ありがとう。」
「さて、充分屋敷の探検はしたし、肝試しで楽しんだし、そろそろバトルアリーナに行きますか！」バクフーンがドダイトスとグラエナに言った。
「俺はちっとも楽しくなかったっすよ・・・」
「バクフーン、今からバトルアリーナに向かうのは止めた方が良いと思うぞ？」
「なんで？」
「外見てみろよ。」
ドダイトスに言われバクフーンは外を見た。すっかり暗くなっていたうえに霧が発生していた。
「げっ！？もうこんな時間になってたのか！？」
「屋敷の探検とグラエナの肝試しで随分と楽しんでたからな。今日はここに泊めてもらおう。ゴースト、良いか？」
「全然構わないですよ！なぁ皆？」
ゴーストがカゲボウズ達に言うと皆頷いた。
「僕もっとお兄ちゃん達と遊びたいって思ってたんだ♪」
カゲボウズが言った。
「よ～し！何して遊ぶか？・・・また肝試しでもするか♪」
「もうそれは勘弁してほしいっす～！？」

第六十五話謎の屋敷で探検！グラエナは幽霊が嫌い？（後書き）

第六十五話完成です。
ラグラージ：ねぇ作者さん。
作者：うお！？いきなりなんだラグラージ？
ラグラージ：僕最近ちょい役ばっかり何だけど・・・いつ僕は活躍出来るのかな？
作者：・・・
ラグラージ：ってなんで黙っちゃうの！？
作者：いやぁ・・・非常に言いづらいんだが・・・君の出番は当分無いよ。うん。
ラグラージ：・・・えぇ～！？だって前リザードンが僕の活躍があるって作者から聞いたって言ってたよ！？
作者：僕はそんな事言った覚えは無いけどなぁ・・・
ラグラージ：・・・ちょっとリザードンの所に行ってくる。
作者：・・・まずい事言ったかな？リザードン、すまない（汗）

第六十六話二つ目の施設！バトルアリーナ！

「おい、起きろバクフーン。朝だぞ！」
「・・・あと五分・・・ムニャムニャ・・・」
現在の時刻は午前九時。バクフーンを起こそうとしたドダイトスだが、バクフーンは中々起きようとしない。
「これも昔と変わらずか（汗）まぁ昨日あんだけ騒いだからなぁ・・・」
昨日は結局肝試しをして楽しんでいたバクフーン達。グラエナだけは楽しむ事は出来なかったようであるが（汗）
「はぁ・・・こうなったバクフーンは中々起きないからなぁ（汗）さて、どうしたものか・・・」
「アニキ、早く起きないと朝飯俺が全部食っちゃうっすよ？」
「それは困る！？」
朝飯というキーワードが出た瞬間バクフーンは飛び起きた。
「・・・マジか（汗）」

さすがグラエナ。ずっと一緒にいるからバクフーンの起こし方を良く知っている。
「おはようっすアニキ♪」笑顔で言うグラエナ。
「おはようグラエナ。ところで朝飯は？」
バクフーンは朝飯を探しているのか辺りをキョロキョロと見ている。
「あ～あれは嘘っす（汗）あぁでも言わないとアニキ起きないっすから。」
「なぬ！？朝飯無いのか！？」
「一応木の実を持ってきてはいるぞ。」
朝一番で起きていたドダイトスは木の実を集めに外に出ていたようだ。
バクフーンの食欲を考えてかなり多めに持ってきている。

「さっすがドダイトス♪気が利くぜ♪」
「しかし、俺は料理が苦手でな（汗）このまま食べる事になるが・・・」
「まぁ良いんじゃない？木の実はそのまま食べても美味いからさ！ゴースト達も食べようぜ♪」
「えっ良いんですか！？」
「当たり前だろ？食事は皆でした方が美味いからな！」
「じゃあお言葉に甘えて♪」
ゴースト達も沢山の木の実の前にやって来た。
そして全員でいただきますと言ってから食事を始めた。

「ごちそうさま～♪はぁ～食った食った♪」
山のようにあった木の実が一つ残らず無くなっていた。皆満腹の様子。
「良し、そろそろ出発するぞバクフーン。」
ドダイトスが言った。
「もう行っちゃうの？」少し寂しそうにカゲボウズが言った。
「ごめんなカゲボウズ。俺達、バトルフロンティアをどうしても制覇したいんだ。」
「・・・ねぇバクフーンのお兄ちゃん。また遊びに来てくれる？」
「あぁ良いぜ！」
「本当？約束だよ？」
「あぁ！約束する！」
笑顔で答えるバクフーン。それを見てカゲボウズも笑顔になった。
「じゃあな皆！また会おうぜ！」

「バクフーンさん！バトルフロンティア頑張って下さいね！」
「おう♪」
ゴースト達に見送られてバクフーン達は再びバトルアリーナ目指して進み始めた。

バクフーン達がバトルアリーナ目指して出発した時、バトルアイランドの港にとあるポケモンが二人やって来ていた。
「ここがバトルアイランドか・・・」
「兄さん。まずはバトルフロンティアオーナーのヨルノズクさんに会いに行くのよね？」
「そうだ。気を引き締めるぞ。俺達のポケモンレンジャーとしての最初のミッションなんだからな！」
「うん！」
二人のポケモンはバトルフロンティアオーナーのヨルノズクに会う為に現在ヨルノズクがいると思われる島の南にあるバトルピラミッドに向かった。

一方バクフーン達は・・・
「着いた～！」
「ここがバトルアリーナっすか！」
ようやくバトルアリーナに到着した。
「よっしゃ！早速挑戦だぜ♪」

「でもバクフーンのアニキ、門が閉まってて中に入れないっすよ？」
グラエナが言うようにバトルアリーナの門は堅く閉ざされている。
「あり？留守かな？こんにちわ～！」
バクフーンが思いっきり叫ぶが中から返事は無い。
「それじゃあダメだバクフーン。」
ドダイトスが言った。
「何がダメなんだ？」
「お前ちゃんと調べてないんだろ？まぁ見てな・・・頼もぉぉぉ！！」
ドダイトスが叫んだ！
「通れ！！」
するとバトルアリーナの中から大きな声が聞こえてきた！それと同時に門が開いた！
「開いたよ！」
「こうしないと中に入れてくれないんだよ。さぁ、中に入ろう。」
バクフーン達はバトルアリーナの中に入った。
中はまるで空手の道場みたいな雰囲気を持っていた。
「良く来たわね！ようこそバトルアリーナへ！」そう言ったのはバトルフィールドの中心にいた一人のポケモン。
「あなたがフロンティアブレーンですか？」
珍しく敬語で話すバクフーン。
「そうよ！私がフロンティアブレーン。バトルアリーナのアリーナキャプテン、チャーレムよ！」チャーレムがビシッと決めた。それを見たバクフーンは眼をキラキラさせている。
「か、かっこいい♪サンダーもかっこよかったけどチャーレムもかっこいい♪」
感動しているバクフーンである。
「さぁチャレンジャー君！早速バトルを始める？」
「もちろん！絶対俺達が勝つ！」
「元気があって良いわね！だけど、勝つのは私よ！」

バクフーンとチャーレムは熱く燃えている。
「・・・なんだこの暑苦しい二人は（汗）ってちょっと待って下さいチャーレムさん！まだここでのバトルのルールを聞いてませんよ？」
ドダイトスがチャーレムに言った。
「あっいけない！ごめんなさいね（汗）私すぐに熱くなっちゃうタイプでね（汗）えっと、ここでのルールは複数あるんだけど、そのルールをルーレットをして決めるの。カポエラー！ルーレット持ってきて！」
チャーレムがそう叫ぶと奥からカポエラーが重そうに巨大なルーレットを持ってきた。このルーレットは機械仕掛けで、ボタンを押すと作動して光が点滅しながら回りだす。そしてもう一度ボタンを押すと光が止まる。その止まった場所に書かれているルールでバトルをするのだ。
「さぁチャレンジャー君！ルーレットを！」
「よっしゃ～行くぜ！」
「・・・いちいち暑苦しいなぁ（汗）」
ドダイトスのツッコミを無視してバクフーンはボタンを押してルーレットをスタートさせた。光が点滅しながら回っている。
「もういっちょ！」
バクフーンはもう一度ボタンを押した。そして光が止まる。止まった場所に書かれているのは・・・
「うん！今回はダブルバトルね！さぁチャレンジャー君！誰とタッグを組むの？私はカポエラーとタッグを組むわよ！」
「えぇ！？し、師匠！？ぼ、僕が出るんですか！？他にエビワラー先輩やサワムラー先輩がいるでしょ！？」自分がパートナーに選ばれた事に驚いているカポエラー。
「文句言わない！やると言ったらやるの！」
「はぁ・・・解りましたよ（汗）」
カポエラーは嫌な顔をしながらもバトルフィールドに入って準備し

た。
「よっしゃ！俺絶対出るからな！」
バクフーンはやる気満々だ！
「アニキが出るなら俺も・・・」
グラエナがバトルフィールドに入ろうとした時、ドダイトスにそれを阻まれた。
「グラエナ、俺にやらせてくれないか？」
「えぇ～！？俺もバトルしたいっすよ～！」
「頼む・・・」
かなり真剣な顔してグラエナに頼むドダイトス。
「う～・・・解ったっすよ・・・でも、次にバトルする時は絶対俺がやるっすからね！」
「すまない。」
ドダイトスがバトルフィールドに入った。
「へへ！一緒にバトルするなんて何年ぶりだろうな？」
「そうだな・・・まぁよろしく頼むぜバクフーン。」
「おう♪こっちもよろしくなドダイトス！」
バクフーンとドダイトスのペアでバトルするようだ。
「それじゃあ始めるわよ！」
チャーレムが構えた。
「って師匠！？審判無しでバトルするんですか！？」カポエラーが慌ててチャーレムに聞いた。
「あっ！？いけないいけない（汗）忘れてたわ（汗）」本当に熱くなりやすいタイプのようだ。
「ゴーリキー！審判お願い！」
チャーレムがそう叫ぶと奥からゴーリキーがダッシュでやって来た。
「それじゃあゴーリキー！審判よろしく！」

「解りました。アリーナキャプテンチャーレム&

ブルバトルを開始します！それでは、試合開始！！」
バクフーン達とチャーレム達のバトルが始まった！まずはバクフーンが電光石火でチャーレムに突っ込んで行った！
「冷凍パンチ！」
チャーレムは冷凍パンチをバクフーンにではなく地面に放った！すると、そこから氷柱が現れてバクフーンの進路を塞いだ！
「マジか！？」
バクフーンは氷柱にぶつかりそうになったので急停止！
「隙あり！飛び膝蹴り！」氷柱の右側からチャーレムが周り込んでバクフーンに飛び膝蹴りを炸裂させた！バクフーンは吹っ飛ばされた！
「まだ終わりじゃないですよ！回し蹴り！」
飛び膝蹴りを受けて吹っ飛ばされているバクフーンにいつの間にかカポエラーが接近していて、駄目押しの回し蹴りをバクフーンに決めた！
「ぐっ！？」
「おっと！」
吹き飛ばされたバクフーンをドダイトスが受け止めた。
「サ、サンキュードダイトス！」
「勢い良く突っ込んで行ったのは良いが、ちょっとやられ過ぎじゃないかバクフーン？」
「ハハハ・・・面目無い（汗）」
「たくっ・・・ダメージが回復するまでちょっと休憩してな。」
そう言ってドダイトスが前に進んだ。
「えっお、おいドダイトス！？俺はまだやれるって！？」
「ちょっと試したいんだ。俺一人で何処までやれるのかを。だから、少しの間だけ一人でやらせてくれ。」
ドダイトスは真剣な表情でバクフーンに言った。「う～ん・・・解ったよ。ただし、本当に少しだけだぞ？」
「それで良い、ありがとう。」

そう言ったあとドダイトスは深く深呼吸をして集中力を高めた。
「・・・ふぅ～・・・行くぞ、ハードプラント！！」
ドダイトスはいきなり草タイプの最強技、ハードプラントを発動させた！地面からイバラのような植物が次々と生えてチャーレムとカポエラーに向かって行く！
「ハードプラント・・・強力な技だけど、当たらなければたいしたことはないわ！見切り！」
「自分も見切り！」
二人は見切りを使い、ドダイトスのハードプラントを避けた。
「そしてハードプラントは一度使ったあとは技の反動でしばらく動けない！高速スピンからトリプルキック！」
カポエラーの頭には角みたいなものが一つある。その角を軸に回転を始めた！まるでコマだ！
回転したままドダイトスに迫る！
「確かにハードプラントは使ったあと反動で動けなくなる技・・・だがそれは使い終わったらの話だ！」
カポエラーの目の前にイバラみたいな植物が地面から生えた！そしてカポエラーの身体に巻き付いて捕縛した！
「カポエラー！？」
「俺は長い間特訓してこのハードプラントを数分間持続させる事が出来るようになったのさ。そら！」
捕縛したカポエラーをドダイトスは地面に叩きつけた！カポエラーは眼を回して倒れた。
「カポエラー戦闘不能！」あっという間にカポエラーを倒してしまったドダイトス。しかもまだハードプラントは続いている！
「ス、スゲー・・・」
バクフーンはドダイトスの強さに驚いている。
「さぁ、残るはあなただけだ！ハードプラント！」ドダイトスはチャーレムに無数のイバラのような植物を放った！

「サイコキネシス！」
チャーレムはサイコキネシスを使った！全てのハードプラントはサイコキネシスのせいでまるで時間を停められたように静止している！
「くっ！？」
「これであなたが持続出来る時間まで耐えてやるわ！」
「そんな時間まで俺が待てないって！ブラストバーン！！」
ハードプラントに気を取られていたチャーレムはバクフーンが横に来ていた事に気づけなかった。バクフーンのブラストバーンがチャーレムに直撃！チャーレムは吹き飛ばされた！チャーレムは眼を回している。
「チャーレム師匠戦闘不能！よって勝者、チャレンジャーバクフーン&ドダイトスペア！」
バクフーンとドダイトスが勝った！
「・・・良いとこ持っていきやがって。」
「少しだけって約束だったろ？でも、さすがだったぜドダイトス！あんなに長い時間ハードプラントを使えるなんてさ！」
「だが、サイコキネシスに停められてしまった。まだまだだよ。」
二人が話てる時、チャーレムの弟子、ゴーリキーが何かを持ってやってきた。
「師匠がまだ眼を覚まさないので自分が代わりに・・・これがバトルアリーナを勝ち抜いた証、ガッツシンボルです。」
ゴーリキーから金色に輝くバッジを受け取ったバクフーン。バッジにはGと書かれている。
「これがガッツシンボルか！サンキューゴーリキー！これで二つ目だ！」バクフーンはシンボルケースの中にガッツシンボルを入れた。
「やったっすねアニキ達♪」
笑顔で言うグラエナ。
「おう♪この調子で次のシンボルもゲットしてやるぜ！」
「ここから一番近い施設は・・・バトルドームだな。」
地図を確認したドダイトスが二人に言った。

「じゃあ次の目的地はバトルドームに決定だな！良し、早速出発だ♪」
「了解っす♪」
「ちょっと待った！」
バクフーンとグラエナをドダイトスが止めた。
「な、なんだよドダイトス？」
「今日のバトルで俺もお前も疲れてる。今日は近くのポケモンセンターで休もう。バトルドームには明日向かえば良い。」
「「えぇ～！」」
バクフーンとグラエナは凄い不満そうに言った。
「・・・良いから行くぞ。」
ドダイトスはポケモンセンターに向かった。
「あっ待てよドダイトス！？」
「待って下さいっす～！？」二人は慌ててドダイトスのあとを追いかけた。

一方バトルピラミッドでは、オーナーのヨルノズクと二人のポケモンが何か話していた。
「・・・なるほど。まずはそのジラーチを見つけ保護するのが優先って事ですね？」
「さよう。ジラーチさえ無事保護すれば奴らにその力を悪用される事は無いからの。」
「あの、ヨルノズクさん。何かジラーチさんの写真や何かありませんか？私達、ジラーチさんに会った事が無いから捜そうにも・・・」
「それなんじゃが・・・実はジラーチの姿がどのような姿なのか記

録した資料が盗まれしまってのう（汗）」
「えぇ！？」
「じゃが、ジラーチが眠っている間にその身を包む繭の姿を記録した資料なら残っておる。これじゃ。」
ヨルノズクがとても古そうな本を持ってきた。
二人のポケモンはその本を開き中をチェックする。そこには不思議な形をした石が書かれていた。
「これがジラーチの繭？まるで石みたいだな・・・」
「ヨルノズクさん、ジラーチが目覚めるまであと日にちはどれ位ですか？」
「・・・あと5日じゃ。」
「・・・時間は残されてないな。すぐに探しに行きます！行くぞ！」
「解ってるわ兄さん！」二人のポケモンは資料を持って外に出た。
「別れて探そう！俺は南側を調べる！」
「じゃあ私は北側を！兄さん、気をつけてね！」
「お前もな、ラティアス！」
この二人のポケモン・・・それはポケモンレンジャー成り立てのラティオスとラティアスだった。ラティオスは南側へ、そしてラティアスは北側に向かって飛んで行った。

第六十六話二つ目の施設！バトルアリーナ！（後書き）

第六十六話完成です。
バクフーン：やっほ～作者♪遊びに来たぜ～♪
作者：こらこら！勝手に来たらダメじゃないかバクフーン！
バクフーン：堅い事言うなって♪それよりさ、あんた最近また新しい小説書き始めたみたいだな？作者：タクミの事かい？バクフーン：そうそれ！でもさ、俺やアスカの小説もあるのに新しいの作って大丈夫なのか？
作者：なんとか頑張るさ！まぁ見ててよ！
バクフーン：またしばらく更新が遅れるって状況になんなよ？もし遅れたら、罰ゲームだからな♪作者：ば、罰ゲーム？
バクフーン：例えば、俺がキャラクター紹介のコーナーで作者の秘密を暴露するとか（笑）
作者：・・・さぁて小説書かないとなぁ（^＿^；）
バクフーン：って無視すんなこら！？

第六十七話敵の名は焔の悪魔！幹部の一人、ドクロッグ現る！

バトルアリーナを見事勝ち抜きガッツシンボルをゲットしたバクフーン達。その勢いに乗って次の施設に行こうとしたバクフーンとグラエナであったが、ドダイトスの提案で一日ポケモンセンターで休む事になった。

翌日。ジラーチの目覚めまであと４日。

「う～ん・・・見つからないなぁ・・・」

ジラーチを捜す為にバトルアイランドの北側に来ているラティアス。一生懸命ジラーチを捜すが何処を捜しても見つからない。

「参ったなぁ・・・あと４日しかないのに・・・兄さんは見つけたかなぁ？」

その頃ラティオスは・・・

「うわぁ！本物のラティオスさんだ～♪」

バトルアイランドに住んでいる子供達に囲まれていた。この子供達は前のポケモンリーグでのラティオスの戦った姿を見てファンになってしまったらしいのだ。

「ラティオスさんサインください♪」

「あ、あぁ。良いよ。」可愛い子供達のお願いを断る訳にもいかずラティオスは子供達一人一人にサインを書いてあげた。（・・・こんな事してる場合では無いのに（汗））

その頃バクフーン達は、バトルドーム目指してポケモンセンターを出発していた。
「なぁグラエナ。前から気になってたんだけど、お前のバックに入ってるその石は何？」
バクフーンがグラエナのバックの中にある石を指差しながら言った。
「これっすか？俺も良く解らないんすよ。この前アニキが疲れたって言って休憩した時があったじゃないっすか。その時に拾ったんすよ。・・・そういえばその時に声が聞こえたような・・・」
「声？」
「なんか・・・頭の中に語りかけてきたって言うか・・・」
グラエナがそう話している時、突然空から光る閃光が！
「危ない！？」
ドダイトスがバクフーンとグラエナを突き飛ばした！そして次の瞬間その閃光はドダイトスに直撃した！
「ドダイトスのアニキ！？」
「これは破壊光線！？一体誰が！？」
バクフーンの疑問はすぐに解けた。空から四人のポリゴンZが舞い降りてきたからだ。
「お前達はあの時の！？」「・・・強攻手段を取る。Gを奪取する為目の前の敵は全て排除する！」ポリゴンZ達はバクフーンとグラエナに突撃して行った！
「来るぞグラエナ！」
「解ってるっすよアニキ！」
二人は身構えた！
「伏せてろ二人共！リーフストーム！！」
バクフーンとグラエナの背後からリーフストームが放たれた！二人はすぐにその場で伏せて回避し、リーフストームは四人のポリゴンZに直撃！ポリゴンZ達を吹き飛ばした！

「ドダイトスのアニキ！無事だったんすね！」
「当たり前だ。俺の防御力をナメてもらっては困るな。」
破壊光線を四発受けたにも関わらず、ドダイトスはあまりダメージを受けていない様子。
「くっ・・・ま、まだだ！まだ、やれる！」
ポリゴンZ達が起き上がった！
「まだやる気みたいっすよ？」
「お前ら、悪い事は言わないからとっとと帰れ！俺達とお前達じゃあ力の差がありすぎる。」
バクフーンが言った。
「帰れる訳がない！Gを奪取出来なければ、俺達に明日は無いんだからな！」
「明日が無い？どういう意味だ？」
「こういう意味さ！」
その時突然空から一人のポケモンがポリゴンZ達の前に舞い降りた！そしてそのポケモンは次々とポリゴンZに自分の拳から生えているトゲを突き刺した！
「うっ！？・・・な、なんで・・・ドクロッグ様・・・」
「なんで？んなもん決まってんだろ？お前らは任務失敗したんだよ。だから・・・死ね。」
次の瞬間ポリゴンZ達は倒れた。
「あ、あいつ・・・何をしたんすか？」
「簡単な事だぜそこのグラエナちゃんよ！俺様はこの拳から生えてるトゲから猛毒を出す事が出来んのよ！しかも、かすり傷でも命を落とす程の猛毒をな・・・お前もこいつらみたいになりてぇか？」
ドクロッグは倒れているポリゴンZを踏みつけながら言った。
「・・・お前・・・そいつらは仲間じゃないのか？」
バクフーンが言った。
背中から出す炎がいつもより激しく燃えている。
「仲間・・・ねぇ。へっ！こいつらはただの駒さ！使えない駒は切

り捨てる、それがうちらのルールだ。うちらには仲間なんて必要ねぇ、いるのは力のみ。力こそが全て。力が無い奴は生きてく価値はねぇのよ！」

ドクロッグがそう言いきった瞬間、バクフーンは激しい炎に包まれた！怒りのブラストモードだ！「・・・ただの駒？仲間はいらない？力が全て？力が無い奴は生きてく価値がない？・・・ふざけんなよこのクソ野郎・・・」

バクフーンはドクロッグに激しい怒りをむき出しにしている。

「なんだ・・・このバクフーンから感じる力は・・・」

ドダイトスはバクフーンのブラストモードを初めて見たのでかなり驚いている。

「お～怖っ。そんなに怒りをむき出しにしちゃってさ！」

ドクロッグは笑いながら言った。ドクロッグのこの態度にバクフーンの怒りは爆発した。

「ブラストバーン！！」バクフーンは最大パワーのブラストバーンを放った！

「おっと！」

だが、最大パワーで放ったブラストバーンは威力は高いが技のスピードが遅かった為、ドクロッグに簡単に回避されてしまった！そしてブラストバーンを回避したドクロッグは素早い身のこなしでバクフーンの目の前へ！「俺を殺りたいんなら、もっと地味な技にするんだな。毒突き！」

ドクロッグは拳から生えているトゲをバクフーンに突き刺した！

「ぐっ！？」

「・・・俺の仕事はGの奪取に失敗したポリゴンZを始末する事・・・だから、奴らを始末したらすぐに帰るつもりだったが気が変わった・・・お前ら全員始末して俺がGを奪取してやる。」

ドクロッグがそう言い終えた瞬間バクフーンは倒れてしまった！

「アニキ！？」

グラエナはバクフーンの所に駆け寄ろうとしたがドダイトスに止め

られた。
「バカ！今は戦闘中だぞ！」
「だってアニキが！？」
「あいつはまだ死んでない！良く見ろ！」
ドダイトスに言われグラエナはバクフーンを見た。バクフーンはまだ息をしている！だが、かなり苦しそうだ。
「驚いたな。俺様の猛毒を受けて即死しなかった奴は初めてだ。・・・気に入らねぇ、一発であの世に行けってんだよ！」ドクロッグが瀕死のバクフーンにもう一発毒突きを直撃させようとした！
「アニキー！？」
グラエナが全速力で走るが間に合わない！
毒突きが直撃しそうになったその時！
「サイコキネシス！」
誰かがサイコキネシスを発動してドクロッグの動きを封じた！
「何！？」

「今だ！リーフストーム！」
動きを止められたドクロッグにドダイトスがリーフストームを放った！
リーフストームを受けたドクロッグは近くの森の中まで吹き飛ばされた！
「俺はあのドクロッグを追う！グラエナ、お前はバクフーンを頼む！」
「わ、解ったっす！」
ドダイトスはドクロッグを追って森の中へ。
「アニキ！アニキ！」
「ハァ・・・ハァ・・・よ、ようグラエナ・・・油断しちまったよ・・・うっ！？」
バクフーンはグラエナを心配させまいと笑顔で答えようとしたがかなり苦しいみたいだ。

「アニキ！？」
「グラエナさん！私に任せて下さい！」
グラエナとバクフーンの前に空から一人のポケモンが舞い降りてきた。
「ラティアスさん！」
そのポケモンはジラーチを捜していたラティアスだった。
「なんでラティアスさんがここに？」
「話は後で！今はバクフーンさんの治療が先です！」
そう言ってバクフーンに近づくラティアス。
「ラ、ラティアス・・・？久しぶりじゃんか・・・」
「バクフーンさん喋らないで！今治療しますから・・・リフレッシュ。」ラティアスはバクフーンにリフレッシュの技を発動した。優しい光がバクフーンを包む。
リフレッシュは本来自分にかかった状態異常を回復する技なのだが、ラティアスは自分だけではなく相手にもリフレッシュをかけられるのだ。
「・・・暖かい・・・」バクフーンの表情が穏やかになってきた。
ラティアスのリフレッシュで毒が身体から抜けてきたようだ。
「・・・ふぅ～。もう大丈夫ですよ。あとは体力を回復させるこのオボンの実を・・・バクフーンさん、食べて下さい。」ラティアスは自分が持っていたオボンの実をバクフーンに食べさせた。
「アニキ、大丈夫っすか？」
グラエナは凄く心配そうな顔をしてバクフーンに聞いた。

「あぁ・・・ラティアスのおかげで助かったよ・・・ありがとなラティアス。」
「どういたしまして。」
「ラティアスさん。どうしてラティアスさんがここにいるんすか？」
「それはポケモンレンジャーとして任務で・・・あれ？」
ラティアスがこのポケモンアイランドに来た理由を話そうとした時、

ラティアスは倒れているポリゴンZの内一人がまだ息をしている事に気づいた。
「この人まだ息がある！待っててくださいね。今治療を・・・リフレッシュ。」
ラティアスはポリゴンZにリフレッシュをかけた。
「・・・うっ・・・な、何故・・・助ける？」
ポリゴンZがラティアスに聞いた。
「目の前で死にそうになっている人を見殺しには出来ません。」
「そうだぜ・・・」
回復したばかりのバクフーンがグラエナに支えてもらいながらポリゴンZに言った。
「どんな奴だって、死んで良い訳がない・・・」
「・・・俺は敵だぞ・・・お前達を殺そうとしたんだぞ・・・」
「そんなもん関係ない・・・目の前の消えそうな命を助ける・・・それだけさ・・・」

一方ドダイトスは・・・
「リーフストーム！」
「悪の波動！」
ドクロッグと死闘を繰り広げていた！
ドダイトスのリーフストームとドクロッグの悪の波動がぶつかり合い大きな爆発が発生した！
「タネマシンガン！」
ドダイトスは口からエネルギー弾をマシンガンみたいに連続で発射した。だが、ドクロッグは軽い身のこなしでタネマシンガンを簡単に避けた！

「逃がさん！岩石封じ！」ドダイトスが前足を思いっきり地面に叩きつけるとドクロッグの周辺の地面から巨大な岩が出現した！
「岩砕き！」
ドクロッグはドダイトスの岩石封じで出した岩を岩砕きで粉々に粉砕した！
「へっ！この程度の技が俺様に通用すると思って・・・」
「ウッドハンマー！！」いつの間にかドダイトスはドクロッグの目の前まで来ていた！そしてその巨大な身体を立たせ、全体重をかけた前足でドクロッグを踏みつけた！
「がはっ！？」
「・・・貴様に聞きたい事がある。貴様らの組織の名は焔の悪魔か？」
ドダイトスが口にした名前、焔（ほむら）の悪魔とは漆黒の闇と並ぶ悪の組織だ。
「・・・だったらなんだってんだ？」
「・・・そうか、やはり焔の悪魔なんだな・・・という事はお前達のボスの名はヒードランだな？」
「お前・・・一体何者だ？」
「・・・俺か？俺は・・・復讐者だ！」
そう言ってドダイトスがもう一発ウッドハンマーをドクロッグに直撃させようとした！
「くらうか！」
一瞬の隙をついてドクロッグはドダイトスから離れた！ウッドハンマーは空振りに終わり地面に直撃した。
「あばよ！泥爆弾！」
ドクロッグは地面に泥爆弾を放ち爆発させた！
そして爆発で起きた爆煙で自分の姿をドダイトスから見えなくした。
「リーフストーム！」
ドダイトスはリーフストームで爆煙を吹き飛ばした。

「・・・逃がしたか。」爆煙を吹き飛ばした時にはもうすでにドクロッグはいなくなっていた。
「・・・ヒードラン・・・」

「・・・はい。これでもう大丈夫ですよ。」
その時ラティアスのリフレッシュによる治療がようやく終わった。
「さすがっすラティアスさん！」
「でもこれはあくまで応急処置・・・ポケモンセンターでしっかり診てもらった方が良いですね。もちろんバクフーンさんもですよ？」
「は～い・・・今日はバトルドームに挑戦したかったんだが・・・」
「仕方ないっすよアニキ。身体の方が大事っすよ。」
「無事だったみたいだなバクフーン。」
その時森からドダイトスが帰って来た。
「なんとかな・・・ラティアスのおかげで助かったぜ・・・アイツは？」
「逃げられた・・・すまん。」
「良いさ、お前が無事でなによりだよ・・・」
「皆さん、今はとにかくポケモンセンターに行きましょう。話はそこで。」バクフーン達は朝出発したポケモンセンターに再び戻る事にした。

ポケモンセンターに着いたバクフーン達。バクフーンとポリゴンZ

はラティアスの完璧な応急処置のおかげで命に別状は無い。だが念のため1日安静にしていくようにとハピナスに言われたので寝室で休む事にしたバクフーンとポリゴンZ。
その頃ラティアスとグラエナ、そしてドダイトスはロビーにいた。
「そういえば自己紹介がまだでしたね?私の名前はラティアスって言います。」
「俺はドダイトスだ。よろしく。」
二人が自己紹介を済ませた時、グラエナがラティアスに何故このバトルアイランドにいるのかを聞いた。ラティアスは兄ラティオスと共にポケモンレンジャーとして任務でやって来た事を説明した。
「ラティアスさん達、ポケモンレンジャーになれたんすね!おめでとうっす!」
「ありがとうグラエナさん。」
「そういえばどんな任務なんすか?」
「・・・私達はバトルフロンティアのオーナーにある依頼を受けたんです。その依頼内容はジラーチを捜す事。」
「ジラーチ?なんすかそれ?」
「1000年に一度だけ目覚めると呼ばれる伝説のポケモンなんです。なんでも好きな願い事を叶えてくれるみたいなんです。」
「そんなポケモンがいるんすか!?」
「えぇ。だけど、そのジラーチを狙っている悪の組織がいるんです。私と兄さんの任務はその組織よりも先にジラーチを見つけだして保護してあげる事。ジラーチの願い事を叶える力を悪用されない為に。だけど、中々見つからなくて(汗)」
「ジラーチってどんな姿をしてるんすか?」
「これなんですけど・・・」
ラティアスは自分のバックから古そうな本を取り出してグラエナ達に見せた。
「・・・これは・・・石か?」
「それはジラーチが眠っている間にその身を包む繭なんです。実は

ジラーチがどんな姿をしているのか記録した資料は盗まれてしまったらしくて今はこの資料しか無いんです（汗）」
「あれ？これって・・・」グラエナは自分のバックからこの前拾った石を取り出した。
「これに凄く似てるっすね？」
グラエナは取り出した石をラティアスに見せた。
「・・・あ～！？」
ラティアスは凄く驚いた。
「それですよ！間違いないです！」
「マジっすか！？じゃあ、あの時聞いた声はジラーチだったんすかね・・・」
「あの、グラエナさん。それを渡してもらえませんか？」
「良いっすよ。ラティアスさん達の任務はジラーチの保護っすもんね。」グラエナはラティアスにジラーチの繭を手渡した。
「ありがとうございますグラエナさん。あとは私達に・・・」
ラティアスが私達に任せてと言いかけた時、受け取った筈のジラーチの繭が突然消えた！
そして消えたジラーチの繭がグラエナの所に戻ってきた。
「な、なんすか！？」
「一体・・・どうなってるの？」
「・・・ちょっと資料を読ませてもらうよ。」
ドダイトスはラティアスが持っていた資料を読み始めた。

「・・・あった！・・・ふむふむ・・・グラエナ、どうやらお前はジラーチのパートナーに選ばれたらしいぞ。」
「パートナー？どういう事っすか？」
「ジラーチは眠っている間は無防備だ。だから、目覚めるまで自分を守ってくれる奴が必要って事だ。」
「でもラティアスさんもジラーチを守ろうとしてるっすよ？」
「パートナーに選ばれた者以外が繭を持とうとすると例えそいつが

良い奴でもテレポートで消え、自分が選んだパートナーの所に戻る・・・と書かれている。」
「困ったなぁ。これじゃあグラエナさんも一緒に保護しないといけない事に・・・」
「俺はアニキと一緒が良いっす！」
「ですよね（汗）う～ん・・・仕方ないですね。じゃあ保護ではなく護衛に切り替える事にします！私もグラエナさん達と一緒に行動させて下さい！良いですか？」
「俺は全然良いっすよ！アニキも喜ぶっすよ！ラティアスさんとまた一緒にいられるって！」
「俺も構わない。」
「ありがとうございます！あっそうだ！兄さんにもこっちに来てもらわないと・・・」
ラティアスは眼を閉じて意識を集中し始めた。ラティオスとテレパシーで会話する為だ。
『兄さん、兄さん！聞こえる？』

その頃ラティオスは・・・
『兄さん！』
『ラティアスか？悪いが後にしてくれないか？』『何かあったの？』
「ラティオスさん何処に行ったのかしら？」
「きっと近くにいるわ！絶対ラティオスさんをゲットするんだから！」
ラティオスは子供達にサインを書いていた時、今度はラティオスのファンクラブだと言う女の子達がやって来て自分とお付き合い下さ

い！とか結婚してっとか言ってきたらしい。さすがにラティオスはこの子達と相手していたら任務に戻れないと思いその場から逃げたのだが、ファンクラブの執念は凄まじくまだラティオスを追っているのだ。『・・・随分と忙しそうな事で。』

ラティアスは夢映しでラティオスが置かれている状況を知った。

『違うぞラティアス！？彼女達が勝手にだな・・・』

『解ってるわよ兄さん。ちょっとからかってみただけ（笑）私ジラーチを見つけたわ。』

『本当か！？』

『うん。グラエナさんが見つけて拾ってくれたみたい。』

『グラエナが？なんでグラエナがバトルアイランドにいるんだ？』

『バクフーンさんもいるわ。バトルフロンティアに挑戦してるんですって。とにかく兄さんも私達と合流して。最初に予定してたジラーチの保護がちょっと出来ないみたいだから。』

『どういう事だ？』

『詳しい話は合流した時にするわ。兄さん、なるべく早く来てよ？』

ラティアスはテレパシーを切った。

「早く来てよと言われても・・・」

「見つけたわ！ラティオスさんよ～♪」

ファンクラブの女の子達がラティオスに向かって来た！

「・・・合流出来るのか俺は（汗）とにかく逃げる！」

ラティオスは全速力で逃走した。

ラティオスとのテレパシーによる交信を終えた後、夜遅いという事で今日はもう眠る事にしたラティアス達。

・・・深夜。
「・・・行くか・・・」ドダイトスが一人、寝静まった皆を起こさないように寝室を出た。
そしてポケモンセンターの外へ。
「・・・ポリゴンZの話だと・・・ヒードランはあの山にいるらしいな・・・」
そう言ってドダイトスはバトルアイランドの中心にある大きな山を見た。実はドダイトスはポリゴンZをポケモンセンターに運んでる最中に焔の悪魔が隠れている場所を聞き出していたのだ。
「・・・待っていろよ・・・ヒードラン・・・必ずお前は俺が倒す！」
怒りに満ちた表情のまま、ドダイトスはバクフーン達を残し、一人バトルアイランドの中心にそびえる大きな山に向かって行った。

第六十七話敵の名は焔の悪魔！幹部の一人、ドクロッグ現る！（後書き）

第六十七話完成です。

第六十八話　ドダイトス死す！？ヒードランＶＳドダイトス！（前書き）

ドグロックの毒を受け、死にかけたバクフーンだったがラティアスのおかげで一命を取り留める事が出来た。
ドダイトスは単身、焔の悪魔がいるとされるバトルアイランドにそびえる大きな山に向かって行った・・・

第六十八話　ドダイトス死す！？ヒードランＶＳドダイトス！

ジラーチが目覚めるまであと3日。
「うお～復活～！」
ドグロックから受けた攻撃もすっかり癒えて元気になったバクフーン。
「良かったっすねアニキ♪」
「おう♪もうバトルがしたくてたまらないぜ♪」一度死にかけた者とはとても思えない程元気なバクフーンである。
「バクフーンさんらしいですね。」
「あれ？なぁ、ドダイトスは何処に行ったんだ？」バクフーンは辺りをキョロキョロとしながらラティアスに聞いた。
「解りません。でも、こんな置き手紙がありましたよ。」
そう言ってラティアスは一枚の手紙をバクフーンに手渡した。
「これはドダイトスの文字だな・・・用事が出来た。俺はしばらくお前達とは別行動を取らせてもらう。勝手な行動を許してくれ・・・だってさ。」
「用事？一体何の用事っすかね？」
「さあな。でも、その用事ってのが終わったらまた俺達の所に戻って来るだろ。・・・そういえばポリゴンZの奴もいないな？」
「あっ本当っすね！何処行ったんすかねぇ？」

その頃ドダイトスはバトルアイランドの中央にある大きな山に来ていた。「・・・ここの頂上にヒードランが・・・待ってろよ、ヒードラン！」

ドダイトスは山を登り始めた。そんなドダイトスのあとを追いかけていた一人のポケモンがいた。ポリゴンZだ。
「・・・あいつ程のポケモンが俺の存在に気づかないなんて・・・あいつとボスに一体何があったっていうんだ?」
ポリゴンZもドダイトスを追って山を登り始めた。

ドダイトスが山を登り始めて数時間。ようやく頂上付近に到着した。
「・・・あれは・・・」ドダイトスの視線の先には大きな洞窟があった。洞窟の出入口周辺には見張りのポケモンが数人いた。
「間違いない・・・あの中に奴がいる・・・まずは邪魔なあいつらを退かせるか・・・ハードプラント!」
ドダイトスはハードプラントを発動した!
見張りのポケモンの足下からイバラが出現し、そのイバラで見張りのポケモン達を包み込んだ!
「・・・お前達を殺しはしない。しばらくその中で大人しくしていてもらおう。」
見張りのポケモン達をイバラの檻に閉じ込めたあと、ドダイトスは洞窟の中へ侵入した。
「・・・暑いな・・・確かこの山は火山だったな・・・」
洞窟の中はかなり暑かった。ドダイトスの言う通りこの山は火山なのだ。洞窟の奥まで来るとそこは洞窟の中なのに凄く明るかった。マグマがあるからだ。中央には大きな穴があいておりその下にはマグマの池が。穴の周りは今にも崩れ落ちそうな崖になっている。
「何処だヒードラン!いるなら出てこい!」
ドダイトスは叫んだ。
洞窟の中でドダイトスの声が響き渡る。

「・・・何者だ？」
ドダイトスがいる向かい側から低い声が聞こえてきた。そしてズシン、ズシンと足音が。どんどんドダイトスに近づいて来る。
「・・・ヒードラン。」ドダイトスの目の前にヒードランが現れた。
「貴様は何者だ？何故俺を知っている？」
「・・・知ってるさ・・・お前は・・・お前は・・・俺の家族を殺した奴なんだからな！！」
ドダイトスはヒードランに怒声を浴びせた。

話は遡る（さかのぼる）事１５年前。当時のドダイトスはまだナエトル、バクフーンやリザードン、そしてラグラージもヒノアラシとヒトカゲとミズゴロウ。その中のヒトカゲが寂しげにそう言った。
その日はナエトルが家族と一緒にフレイムシティからリーフシティに引っ越す日だった。
「寂しくなっちゃうね。ナエトル・・・」
「・・・うん・・・」
ナエトルの引っ越すを見送りに来ていたヒノアラシとヒトカゲとミズゴロウ。その中のヒトカゲが寂しげにそう言った。
ナエトルはヒノアラシ達と別れるのが辛いのであろう。涙が溢れていた。
「泣くなよナエトル。本当に泣き虫なんだからお前は。また会おうと思えば会えるでしょ？」
ナエトルの肩に手を当てながらヒノアラシが言った。
「・・・うん・・・」
「ナエトル～！そろそろ出発するぞ～！」
荷物をトラックに乗せ終わったナエトルの父、ドダイトスのガイア

がナエトルを呼んだ。
「あ、うん・・・今行くよ・・・」
ナエトルは父の所に向かって行った。
「ナエトル！ちゃんと手紙とか送ってよね！待ってるから！」
「元気でね！」
「また会おうね！」
ヒノアラシ達がナエトルに叫んだ。
ナエトルも泣きながらではあるが、うん！っと答え、父がいるトラックに向かった。

リーフシティに向かう途中、トラックの中。
ナエトルはまだ泣いていた。
「ごめんなナエトル。父さんの仕事の都合で引っ越す事になって・・・」ドダイトスのガイアが申し訳なさそうにナエトルに言った。
「・・・」
「ほら、もう泣かないの。男の子でしょ？」
そう言いながらキレイハナがナエトルの涙をハンカチで拭いてあげた。
このキレイハナはサクラと言う名前でガイアの妻、そしてナエトルの母だ。
「お兄ちゃん、大丈夫？」ナエトルを心配しているのはナゾノクサだ。
この子の名前はナナ。
女の子でナエトルの妹。
「・・・だ、大丈夫だよ・・・」
そうは言うがまだ涙が止まらないナエトル。

「良し！ナエトル、今度仕事の休みが取れたらまたみんなに会いに行こう！」
ガイアがナエトルに言った。その言葉を聞いた瞬間暗かったナエトルの表情が明るくなった。
「本当？」
「あぁ本当だ！約束する！」
ガイアはナエトルと約束した。その時！
突然トラックが急停止した！
「な、なんだ！？何があった！？」
ガイアは運転手のゴーリキーに聞いた。
「あ、あれ・・・」
ゴーリキーは前を指差した。脅えているのか震えている。ガイアはゴーリキーが指差した方向を見てみた。
「あれは！？」
ガイアが目にしたものは漆黒の闇と焔の悪魔の悪の2大勢力がバトルをしているところだった。
当時の漆黒の闇と焔の悪魔は互いに潰しあおうと頻繁にバトルをしていたのだ。だが、普通なら警察などに見つからない為に誰もいない所でバトルをするのだが、この日に限って人の通りが多い場所で派手にバトルをしていたのだ。
「巻き込まれたらまずい！逃げるんだ！」
ガイアは家族を連れてトラックから降り、その場から逃げ出そうとした。
「うわっ！？」
だがナエトルが躓いてこけてしまった。
「ナエトル！」
ガイアがナエトルの所に駆け寄ったその時、一つの光る閃光がトラックに直撃！トラックが爆発した！爆発の衝撃でナエトルはガイアの所まで吹き飛ばされた。
ガイアは何とかナエトルを受け止めた。

「ナエトル！大丈夫か！？」
「と、父さん・・・」
ナエトルは火傷を負っていた。
「あなた！ナエトル！」キレイハナのサクラとナゾノクサのナナもナエトルとガイアの所に駆け寄った。
「・・・邪魔だ・・・」その時近くに漆黒の闇の首領、ダークライが来ていた。そしてダークライが見ている先には焔の悪魔の首領ヒードランが。「くたばれダークライ！マグマストーム！！」
ヒードランが炎タイプの大技、マグマストームを発動した。ガイア達の目の前に炎の竜巻が出現！
「現れよ・・・闇の盾！」ダークライは特殊な闇の力を使い目の前に大きな漆黒の壁を出現させてマグマストームを防ぐが、ガイア達は防ぐ手段を持っていなかった。
マグマストームはガイア達家族を飲み込んだ！
ナエトルはあまりの熱さにすぐに気を失ってしまった。

「・・・うっ・・・」
気を失っていたナエトルが目を覚ました。
辺りは静かになっていた。漆黒の闇と焔の悪魔はもういなくなっていた。
「・・・父さん？」
ナエトルを覆うようにガイアがナエトルの上にいた。マグマストームからナエトルを身体を張って守ったのだ。ナエトルが呼びかけるが、ガイアは返事をしない。
「・・・母さん？ナナ？」ナエトルの隣にはサクラとナナがいた。
だが、二人共目を閉じたままだ。ナエトルが呼んでも起きない。
「・・・ねぇ・・・冗談止めてよ・・・父さん、母さん、ナナ・・・ねぇ、返事してよ！」

ナエトルがいくら呼びかけてもガイア達が返事する事はなかった。
ナエトルだけが生き残ったのだ。

それからナエトルはただヒードランに復讐する為だけに生きてきた。
家族を奪ったヒードランを倒す為にひたすら強くなる為に特訓をした。
そして現在に至る。
「貴様の家族を俺が殺った?覚えてないなぁ。何せ、今まで何人も殺ってきたからなぁ・・・」
ヒードランは覚えていない様子。
「貴様ぁぁぁ!!」
ドダイトスは怒りに任せヒードランに向かって突進して行った。
「灰にしてくれる!火炎放射!」
ヒードランは火炎放射をドダイトスに放った。
「リーフストーム!!」ドダイトスはリーフストームを使い火炎放射を吹き飛ばした!
「捨て身タックル!!」そしてドダイトスはそのままヒードランに捨て身の体当たりを決めた!
だが!
「フッ・・・大したパワーだ。だが、俺を倒す事は出来ないぞ!」
ドダイトスの捨て身タックルを耐えたのだ!
「なっ!?」
「本当の攻撃ってのはな・・・こうすんだ!アイアンヘッド!!」
ヒードランはドダイトスにアイアンヘッドを直撃させた!
「ぐっ!?」
「オーバーヒート!!」アイアンヘッドを受けて怯んでいたドダイ

トスにヒードランはオーバーヒートを直撃させた！
ドダイトスは吹き飛ばされた！だが、ドダイトスはすぐに体勢を立て直した！
「エナジーボール！！」ドダイトスは草のエネルギーを集めたエネルギー弾を放った！
「鬼火！」
ヒードランは自分の前に火の玉を無数に出現させた。そして無数の火の玉は合体して大きな火の壁となりエナジーボールを防いだ！更にエナジーボールを防いだあと、火の壁はドダイトスに向かって行った！
「岩石封じ！」
ドダイトスは岩石封じを使い自分の前に岩の壁を出現させて火の壁を防いだ。
「これで決めてやる！ハードプラント！！」
ドダイトスはハードプラントを発動した！地面からイバラが無数に出現してヒードランに向かって行った！
「火炎放射！」
ヒードランは火炎放射を放ちハードプラントを焼き払った！
「まだだぁぁぁ！！」
再びイバラが出現してヒードランに向かって行った！ドダイトスは数分間ハードプラントを発動し続ける事が出来るのだ。
「どうやらしばらくの間ハードプラントを持続出来るらしいな・・・攻撃し続ける事は確かに強力だが、本体の守りがおろそかになっているぞ！火炎放射！」
ヒードランはハードプラントを無視してドダイトスを直接狙った！
「くっ！？」
ドダイトスは攻撃に使っていたハードプラントを火炎放射から身を守る為に自分の前にハードプラントを集結させて壁にし、防御に使った！
「ラスターカノン！！」ドダイトスがハードプラントを防御に使用

したその瞬間ヒードランがラスターカノンを放った！
通常のラスターカノンはシャドーボールやエナジーボールのように鋼のエネルギーをエネルギー弾として放つ技なのだが、このヒードランのラスターカノンはまるでレーザーのようにドダイトスに向けて放たれた！
ラスターカノンはハードプラントを貫通してドダイトスの右前足を貫いた！
「ぐあぁぁぁっ！？・・・あ、足が・・・！？」
ドダイトスは激痛に襲われその場に倒れた。
「俺のラスターカノンは殺傷能力を極限まで高めてあるんだ。・・・残りの足も使えなくしてやる！」
ヒードランはドダイトスの左前足、そして後ろの両足をラスターカノンで貫いた！そしてまたドダイトスの絶叫が洞窟に響き渡った。
全ての足を貫かれ立ち上がる事が出来なくなってしまったドダイトス。そんなドダイトスにゆっくりとヒードランが近づいて来る。
「・・・消えろ、カスが・・・」
ヒードランの口から灼熱の炎が溢れ出し始めた！
「・・・くそ・・・」
「破壊光線！！」
その時突然何処からか破壊光線が放たれた！
破壊光線はヒードランに直撃した！
「・・・誰だ？」
破壊光線を受けた筈なのに、全く効いていないようだ。
「お、お前は・・・」
ドダイトスが見た先にはポリゴンZがいた。
「貴様・・・何のつもりだ？」
「・・・何でかな？俺でもどうしてこんな事をしたのか良く解らない・・・だけど、このままそいつが死ぬのを見てるのはいけない・・・そう思ったんだ。」
どうやらバクフーン達に命の助けられ、そして命の大切さを教えら

れた事でポリゴンZに良心が芽生えたらしい。
「・・・お前を殺すのは後回しだ。先に始末しなきゃならない奴が出来た。」
ヒードランがポリゴンZに向かって歩き始めた。「に、逃げろ!お前じゃヒードランに勝てない!」ドダイトスが叫ぶがポリゴンZは逃げようとしない。
「くそ!待てよヒードラン!お前の相手は俺だ!」ドダイトスはヒードランを止めようと立ち上がろうとするが、足に大怪我を負っているため立ち上がる事が出来ない!
「逃げないのか?」
ヒードランがポリゴンZに聞いた。
「・・・どうせ俺には帰る場所が無い。だが、最後くらい誰かの役に立ちたいんだ・・・それに・・・あんたの命令で殺された仲間の仇を取らないといけないからな!うおぉぉ!!」
ポリゴンZがヒードランに突っ込んで行った!
「・・・カスが・・・マグマストーム!!」
ヒードランはマグマストームを放った!
ヒードランのマグマストームを受けてポリゴンZはその身を焼かれながら洞窟の外まで吹き飛ばされた!
「ふん。カスが粋がりやがって・・・さぁ、あとはお前・・・」
「ハードプラント!!」ドダイトスが最後の力を振り絞って最大パワーのハードプラントを発動した!更に特性の深緑が発動した事でハードプラントはより強化されている。ハードプラントはヒードランを束縛し、そのままマグマの中へとヒードランを引きずり落とした!
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・や、やったぞ・・・」
ドダイトスは勝利を確信した。だが!
「本当にそれで勝ったつもりか?」
マグマの中からヒードランが戻って来た!
身体にはドロドロのマグマが付いている。

「なっ！？」
「マグマは俺にとってはプールのようなものでな・・・さぁ、今度こそお前を始末してやる！」
ヒードランの口から灼熱の炎が溢れ出した！
「くらえ！マグマストーム！！」
ヒードランがマグマストームを放った！
ドダイトスの家族の命を奪った技が向かってくる！ドダイトスは動く事が出来ずマグマストームを受けてしまった！そしてマグマの池がある穴の中へ吹き飛ばされた！
（・・・父さん・・・母さん・・・ナナ・・・）ドダイトスの脳裏に過去の思い出が走馬灯のように蘇ってきた。
（仇・・・取れなかったよ・・・ごめん・・・）ドダイトスの目から涙が溢れた。そしてドダイトスはそのまま落ちて行った・・・

その頃バクフーン達はバトルドーム目指して歩いていた。
「ん？」
バクフーンは何か感じたのか急に山の方を見ながらその場で止まった。
「どうしたんすかアニキ？」
「いや・・・何か・・・嫌な胸騒ぎがして・・・」
「大丈夫ですか？」
「あ、あぁ。多分気のせいだろ。さっ先に進もうぜ！」
バクフーン達はまた歩き始めた。
（・・・ドダイトス。お前に何かあったのか？）

第六十八話　ドダイトス死す！？ヒードランＶＳドダイトス！（後書き）

第六十八話完成です。

第六十九話　ジラーチの目覚め！（前書き）

マグマの中へ落ちて行ってしまったドダイトス。果たして彼は本当に死んでしまったのか・・・

第六十九話　ジラーチの目覚め！

「・・・うっ・・・こ、ここは・・・？」
周りは森で覆われていて、近くには綺麗な泉がある。そんな場所でマグマの中へ落ちた筈のドダイトスが目を覚ました。
「・・・ここは天国か？」
「天国ねぇ。あながち間違いじゃないけど、ここはバトルアイランドの秘境の地だよ。この島の人達も知ってる人はほとんどいない。ちなみに、君はまだ死んでないよ。」誰かがドダイトスに話しかけてきた。
「・・・生きてるのか俺は・・・君は・・・一体・・・うっ！？」
「動かない方が良いよ。まだその足の怪我は治ってないんだからね。自己紹介が遅れたけど、僕の名前はミュウ。世界を自由に旅する冒険家ってところかな。」
ミュウ。世界で一番珍しいと言われる幻のポケモンだ。
「ミュウ・・・君が俺を助けてくれたのか？」
「まあね。でも、お礼を言うなら僕じゃなく彼に言ってね。」
ミュウがそう言いながらドダイトスの隣の方を見た。ドダイトスが隣を見てみるとそこには眠っているポリゴンZがいた。全身に火傷を負っている。
「偶然近くを通りかかった時に彼が山から落ちてきたから慌てて助けたんだ。そしたら彼が山の頂上にいる君を助けてくれって頼んできてね。
頂上に行ってみたら君がマグマの中に落ちかけていたからテレポートを使って君を助けたんだ。
君は運が良いよ。僕が彼に頼まれなかったら君は本当に死んでいたんだから。」
「こいつが・・・なぁミュウ。俺はどれ位眠っていたんだ？」
「ん？3日だけど、それがどうかしたの？」

「3日!?ジラーチが目覚めるの今日じゃないか!?こうしちゃ・・・ぐっ!?」
ドダイトスが立ち上がろうとしたが足に激痛が走り、立つ事が出来なかった。
「だからまだ足の怪我が治ってないんだから無理しちゃダメだよ。」
「そうも言ってられないんだ・・・俺の友達が・・・あいつらに狙われる!もう・・・誰かが死ぬのは見たくないんだ!」
「・・・大切な友達みたいだね?だけど、今の君のその身体じゃ何処にも行けないよ。ここの泉は傷ついたポケモンの身体を癒す効果があるんだ。お風呂みたいに泉に入れば怪我も治るよ。
でも、君とそこの彼の怪我はちょっとひどいから治るのに時間が掛かるかもしれないけど・・・ところで、君の友達の名前はなんて言うの?」
「バクフーンだが・・・何故名前を聞く?」
「バクフーンね。OK、僕が君の代わりにそのバクフーンって子を助けてあげるよ。」
ミュウのその言葉を聞いてドダイトスは驚いた。
「どうして・・・」
「君と隣の彼にここまでの重傷を負わす相手が君の友達を狙ってるんでしょ?僕、困っている人を見ると放っておけないタイプでね。」
「・・・すまない。」
ドダイトスは頭を下げて言った。
「謝らないでよ。あっそうだ、身代わり!」
いきなりミュウは身代わりを使って自分の分身を作り出した。

「僕がここを離れてる間はもう一人の僕が君達を守ってくれるから。じゃあ行ってくるよ。
もう一人の僕、ここは任せたよ?」
「OK。任せてよ。」
本体のミュウはテレポートを使ってその場から居なくなった。

ドダイトスが眠っていた3日間。
バクフーン達はバトルドームとバトルチューブの2つの施設を制覇していた。
最初のバトルドームではグラエナとラティアスがバトルをした。
ルールはトーナメント形式のダブルバトル。
グラエナ達を含む複数の挑戦者達が争い、優勝した者だけがフロンティアブレーンとバトルが出来るというルールだった。グラエナとラティアスは見事なチームワークでこれを制覇。
その後のバトルチューブではバクフーンがバトルした。
ルールは1対1のシングルバトル。
だが、挑戦者はフロンティアブレーンとバトルする前に施設に用意された3つの部屋の内の1つを選んで中に入る必要がある。
バトルチューブは挑戦者の運を試す場所なのだ。部屋の中に入ると毒、麻痺、火傷などの状態異常にする技を使ってくるポケモンがいて、挑戦者はどれかの状態異常になった状態でバトルしなくてはいけないのだ。
その中でバクフーンは氷状態にされたのだが、バクフーンは火炎車で氷を溶かす事が出来るので普通にバトルする事が出来た。
そして現在バクフーン達は次のバトル施設。
バトルパレスに向かっていた。
「これで集めたシンボルは4つ。あと3つ集めればバトルフロンテ

ィア制覇かぁ。何かこの調子で行くとあっという間に制覇出来そうな気がしてきたなぁ（笑）」
集めたシンボルを見つめて笑いながらバクフーンは言う。
「そうっすねアニキ♪」グラエナも笑顔で言う。調子の良い二人である。
「あまり調子に乗るなよ二人共。そういう油断がバトルの敗北に繋がるんだからな。」
ちょっと厳しくラティオスが二人に言う。
ちなみにラティオスはバクフーン達がバトルチューブを制覇した後に合流した。
「ファンクラブの女の子達に追いかけられてたラティオスに言われても説得力に欠けるよなぁ？」
「そうっすよねぇ？」
いやらしい眼をしながらバクフーンとグラエナはラティオスを見つめる。「うん。バクフーンさん達の言い分もごもっともです。」
頷くラティアス。
「ラ、ラティアスまで・・・」
妹のラティアスに言われたのが応えたのか地に手をつけて落ち込んでしまったラティオス。
「でも、兄さんが言ってる事も正しいです。
バクフーンさんにグラエナさん、あまり調子に乗りすぎないようにして下さいね？」
「「は～い！」」
ラティアスの言う事は素直に聞く二人であった。

「・・・ヤドキング、ちょっと来い。」
場所は変わってここは焔の悪魔が隠れているバトルアイランドの火山の頂上。ボスのヒードランに幹部の一人であるヤドキングが呼び出された。
「お呼びですかボス？」片手に何やら難しそうな本を持ちながらヤドキングがやって来た。
「・・・ジラーチの目覚めが今日であるのは知っているな？」
「存じております。」
「・・・お前にジラーチ捕獲の任務を与える。
ジラーチが目覚める前になんとしても奴らから奪うのだ。
ジラーチが目覚めてからだと何かと面倒だからな・・・」
「解りました。」
ヤドキングはお辞儀をするとその場から去って行った。

「・・・全く。人使いが荒い奴だ。他の奴にやらせる前に自分がやれば良いものを・・・」
ヒードランから離れたヤドキングは本音を漏らした。
ヤドキングはあまりヒードランの事を好きでは無いらしい。
「まぁ、奴のおかげで私は好きな実験が出来るから文句は言えんか・・・さて、ジラーチの捕獲か・・・まず捕獲する前に邪魔な奴らを排除しなければならないな。」
ヤドキングはどうジラーチを捕獲するかを考えながら自分の部屋に入って行った。
「ドグロックの話では相手は今年のポケモンリーグチャンピオンチームのリーダーであるバクフーンだと言っていたな・・・さて、バ

クフーンっと・・・」
ヤドキングは自分の部屋に用意してあるパソコンを起動させた。
ヤドキングのパソコンには様々なポケモン達の情報が映し出された。
その中にはバクフーンの名前が。
ヤドキングがマウスを使ってバクフーンの名前をクリックすると、
パソコンの画面には過去バクフーンが戦ったバトルの映像が映し出
された。
あごに手を当てながらバクフーンのバトルをじっくり観察している
ヤドキング。

「・・・バトルのレベルは中々だな。
まともに戦えば勝ち目は無いだろう・・・
さて、どういう作戦でやろうか・・・」
ヤドキングは目を閉じて作戦を考え始めた。

それから数十分後。
「・・・この作戦で行くか。」
作戦を思いついたようだ。ヤドキングは部屋を出て、自分の部下を
率いてバクフーン達の所へ向かった。

その頃バクフーン達は。
「もう日が暮れちゃいましたね。」
「そうだな。今日はここで野宿だな。」
バトルパレスまではまだ遠く、森の中で野宿する事にした。
「いつ起きるんすかねぇ・・・早くジラーチを見てみたいっす。」
グラエナが前足でジラーチの繭を抱きながら言った。
「ジラーチかぁ・・・俺も早く見たいなぁ。
なぁラティアス。
ジラーチってどんな願い事も叶えてくれるのか?」
「えぇ。資料によると確かにそういう力を持っているそうです。
バクフーンさんは何か叶えて欲しい願い事でもあるんですか?」
ラティアスに聞かれたバクフーンは急にニヤニヤしだした。
「まあなぁ♪」
「お前の事だ。何か美味い食い物を出して欲しいとか考えているんだろ?」
「なぬ!?何故バレた!?」図星だったらしい。
「適当に言ったつもりだったが・・・本気だったのか(汗)」
「バクフーンさんらしいと言えばらしいですけど(汗)」

バクフーン達がいつものように賑やかにしていた時、近くにヤドキング達が来ていた。
「・・・何やら人数が増えてるな・・・まぁ、何人増えようが作戦に変更は無いがな。
バリヤード、ちゃんと壁を作っておいたんだろうな?」
アゴに手を当てながらヤドキングはバリヤードに聞いた。
「もち。あいつらの周りにしっかりと見えない壁を作っておいたよ。」
頷きながらバリヤードは答えた。

「よろしい。では、作戦を開始する。パラセクト、キノコの胞子を。」
「了解。」
ヤドキングの指示を受けてパラセクトがキノコの胞子を発動した。
バクフーン達に胞子が向かっていく。

だが、キノコの胞子は見えない壁にぶつかりバクフーン達に届かなかった。
「ってバリヤード！一ヶ所だけは開けておけ！
キノコの胞子が当たらなきゃ意味ないだろ！」
「おっと！これは失礼！」
バリヤードが指をパチンと鳴らすと一ヶ所だけ壁が無くなったのか
キノコの胞子がバクフーン達に向かって行った。
そして見えない壁で作られた空間の中に胞子は充満した。
「なんだ・・・急に・・・眠く・・・」

バクフーン達はキノコの胞子の効果で眠ってしまった。
「効いたみたいだな。
良し、バリヤード。もう壁を消して良いぞ。」
「ＯＫ。」
バリヤードが指をパチンと鳴らすと壁が消滅したのかバクフーン達
の周りで漂っていた胞子が周囲に放たれた。
「サイコキネシス。」
ヤドキングはサイコキネシスを使って胞子を空の方へ吹き飛ばした。
バクフーン達はキノコの胞子が余程効いているのか熟睡している。
「良く眠ってる事で。
さて、ジラーチは頂いていくとしましょうか・・・」
ヤドキングは熟睡しているグラエナが抱いているジラーチの繭に手
を伸ばそうとした。
「・・・させるか！」

ヤドキングに突然眠っていたと思われたラティオスが竜の波動を放ってヤドキングを攻撃した！
「守る！」
しかし、ヤドキングは守るを発動して竜の波動を防御してしまった。
「貴様・・・何故眠っていない？」
「・・・神秘の守りを使った。ただそれだけさ。お前達にジラーチは渡さない！」
ラティオスはとっさに神秘の守りを使ってキノコの胞子を防いでいたのだ。本当はバクフーン達にも使おうとしたのだが、間に合わず自分だけにしか掛ける事が出来なかったみたいだが。
「・・・なるほど、神秘の守りか・・・あらゆる状態異常から身を守る技・・・とっさにそれを発動するとは。
だが、貴様一人で一体何が出来るのかな？」
ヤドキングとその部下の二人がじりじりとラティオスに迫って来る。
（確かに数では俺が不利だが・・・ラティアス達が眠らされた今、俺がやるしかないんだ！）
ラティオスはバトルする体勢に入った。

「バトルするのは彼だけじゃないよ？」
突然何処からか声が聞こえてきた。
ラティオスやヤドキング達が辺りを見回すが誰も何処にもいない。
「上だよ君達。」
皆が上を見ると、そこにはフワフワと浮いているミュウがいた。
「なっ！？」
ミュウを見てヤドキングが驚きの表情を見せた。
「君は？」
ラティオスはミュウに尋ねた。

ミュウはゆっくりとラティオスの目の前まで降りてきた。
「僕の名はミュウ。世界を自由に旅する冒険家とでも言っておこうかな。僕もジラーチを守るのに協力させてもらうよ。」そう言ってミュウはラティオスの隣に来てバトルする体勢に入った。
「・・・ふ、ふふふ・・・まさか・・・まさかこんな所で・・・幻のポケモンと呼ばれるミュウに会えるとは・・・」
ヤドキングはミュウを見てから急に様子が変わった。
「気味悪いよ君（汗）」
ヤドキングを見てミュウは素直に思った事を言った。
「・・・バリヤード、パラセクト。今日は引き上げるぞ。」
いきなりそう言い出したヤドキングはミュウ達に背を向けて去って行ってしまった。
「ちょ、ちょっと待ってよヤドキング!?ジラーチはどうするのさ!?」
バリヤードとパラセクトは慌ててヤドキングのあとを追って行った。

「な、なんだ?どうしたんだあいつら?」
急に去って行ったので驚いているラティオス。
「まぁ何にしても戦わなくて済んだんだから良かったんじゃない?それよりも・・・」
ミュウは眠らされているバクフーン達の所へ。
「癒しの鈴。」
ミュウは状態異常を治してくれる技、癒しの鈴を発動した。

「・・・あれ?」
癒しの鈴が効いてバクフーン達が目を覚ました。

「・・・えーっと、確か大食い大会に出場して・・・」
「アニキと一緒に遊んでたような・・・」
「綺麗なお花畑にいた気が・・・」
眠っている間バクフーン達はどうやら夢を見ていたようだ。
「お前達・・・何寝ぼけてるんだよ（汗）」
「それほどパラセクトの技が強力だったって事だよ。」
「「「誰？」」」
三人がミュウの事を見ながら言った。
「僕はミュウ。世界を自由に旅する冒険家だよ。」
「世界を自由に旅する冒険家・・・何かカッコイイ♪」
目をキラキラさせているバクフーン。
「その冒険家がなんでここにいるんすか？」
首を傾げながらグラエナが聞いた。
「それはね・・・」
ミュウはバクフーン達に説明した。
ドダイトスの代わりに来た事やドダイトスとポリゴンZがヒードランとバトルして大怪我してしまった事を。
「ドダイトスが大怪我！？だ、大丈夫なのか！？」
バクフーンは凄く心配そうな表情をしている。
「命に別状は無いよ。今は傷の治療をしている。身代わりで作ったもう一人の僕が一緒にいるから大丈夫だよ。」
ニッコリと笑顔で答えたミュウ。
「良かったぁ～・・・」バクフーンはドダイトスが無事だと解ると胸に手を当てて安堵の表情を見せた。
「でも・・・なんでドダイトスのアニキは一人で戦いに行ったんすかね？」グラエナは首を傾げながら言った。
「解んねぇけど・・・でもあいつが無事なら俺はそれで良い・・・」
「アニキ・・・」

皆が話てる時、突然グラエナが抱いていた繭が光輝き出した！
「な、なんすか！？」
「いよいよ目覚めるんだよ、ジラーチが！」
光輝き出した繭が徐々に形を変えていく。
どんどんポケモンのシルエットに変わっていく。

しばらくすると光が消えてグラエナの前足に抱かれてた繭は無くなり、代わりに小さなポケモンがそこにいた。
「う～ん・・・」
朝起きたばかりみたいに眠そうに目を擦る小さなポケモン。
「この子がジラーチ・・・可愛い♪」
ラティアスはジラーチのあまりの可愛さに思わず大きな声を出して言った。
「ふぁ～・・・君達は誰？」
まだ眠そうな表情をしているがしっかりとバクフーン達を見てジラーチは質問した。
「俺はグラエナっす。」
「俺はバクフーン！よろしくな♪」
「私はラティアスよ。」
「ラティオスだ。」
「僕はミュウ。よろしく。」
皆笑顔で自己紹介をした。ジラーチは一人一人しっかりと顔を見て確認していく。
「・・・君・・・夢で見た事ある。」
グラエナを見ながらジラーチがそう言った。
「俺をっすか？」
「・・・何人も君の事を襲ってきて・・・僕は危ないって叫んでた

んだ。」
「それって・・・もしかしてポリゴンZ達が最初に俺を襲ってきた時の事っすかね・・・あの時確かに誰かの声が聞こえてきたんすけど・・・やっぱり、あの声はジラーチだったんすね。」
「なあなあジラーチ!ちょっと頼みたい事があるんだけど・・・」
突然バクフーンがジラーチに話しかけた。
「バクフーン、まさか本当にさっき言ってた美味い食い物を出して欲しいって願いを・・・」
「違うってラティオス!頼みたい事ってのはドダイトスの事さ!なぁジラーチ、俺の友達のドダイトスとポリゴンZが大怪我しちゃったんだ。二人の怪我を治す事って出来ないかな?」
バクフーンはジラーチの願いを叶える力でドダイトス達の怪我を治して欲しいみたいだ。
「出来ない事はないけど・・・ふぁ〜・・・ごめん・・・僕まだ・・・すー・・・すー・・・」
ジラーチはグラエナの前足に抱かれたまま、また眠ってしまった。
「って寝ちゃったよ!?」
「まだ本調子じゃないんだよきっと。今は寝かせてあげよう?明日頼めば良いんだしさ。」
「しゃあないか・・・」ミュウに言われバクフーンは明日頼む事にした。
「ふぁ〜・・・何かジラーチの寝顔見たらこっちも眠くなってきちゃったよ・・・今日はもう寝ようぜ?」
「そうですね。」
バクフーン達も眠る事にした。

その頃ヤドキング達はヒードランや他の幹部達がいる火山の頂上には戻らず、ヤドキングが密かにバトルアイランドに作っていた自分の秘密研究所にいた。
「なぁヤドキング、なんでジラーチの捕獲を止めたんだよ？ボスが知ったら絶対俺達殺されるぞ！」
バリヤードはヤドキングを怒鳴った。
「そう怒らないバリヤード。もう彼処に戻るつもりは無いんだからな。」パソコンをいじりながらヤドキングが言った。
「へっ？」
予想外の返答に唖然としているバリヤード。

「私は私の研究を進める為に奴を利用していたにすぎん。まだしばらく利用するつもりだったが・・・ずっと捜していた奴が見つかったからな。」ヤドキングは不気味な笑みを見せた。
「・・・ミュウか？」
パラセクトが聞いた。
「察しが良いなパラセクト。そうだ。
全てのポケモンの先祖と言われているミュウ・・・奴を使えば私がずっと研究していたものが完成する！最強のポケモンを作り出すという私の研究がな！」

第六十九話　ジラーチの目覚め！（後書き）

第六十九話完成です。
バクフーン：作者～！
あけおめ～♪
作者：やぁバクフーン！あけましておめでとう！バクフーン：そしてことよろ～♪
作者：うん！今年もよろしくね！
バクフーン：てな訳でお年玉くれ♪
作者：うおい！？いきなりそれか！？

第七十話　ジラーチの過去

ジラーチが目覚めた次の日の朝。
時刻は午前8時。
「・・・ふぁ～・・・」ジラーチが眠そうに目を擦りながら起きた。
「おはようっすジラーチ。良く眠れたっすか？」先に起きていたグラエナが朝の挨拶をした。
「うん。えっと・・・グラエナ・・・さんでしたよね？」
「もう覚えてくれたんすか？嬉しいっすねぇ♪
あっそうだジラーチ。
俺と一緒に朝の散歩にでも行かないっすか？
ついでにアニキ達のご飯も取りに。」
「良いですよ。」
まだ眠っているバクフーン達を起こさないようにグラエナとジラーチは朝の散歩に出かけた。

森の中は凄く静かで爽やかな風が吹いている。
大きな木と木の間から朝日が差し込み森の中を明るく照らしている。
そんな森の中をグラエナとジラーチはのんびり散歩していた。
「風が気持ち良いっすねぇ♪空気も美味しいし♪確かこういうのを森林浴って言うんすよね？」
「うん。」
「あっ！」
グラエナは何か見つけたようだ。
その何かに向かって走りだした。

「見つけたっす♪アニキが好きなモモンの実♪」グラエナが見ている先にはたくさんのモモンの実を付けた木があった。
でもその木は結構大きく、モモンの実もかなり高い位置にあった。
「よ～し！」
グラエナは少し後ろに下がった。
「えっ？何をするんですか？」
「こうするんすよ！」
グラエナは勢いをつけてモモンの実目指してジャンプした！
「え～！？届く訳が・・・」ジラーチの予想とは裏腹にグラエナはモモンの実まであと少しのとこまで来ていた！
「もうちょっとっす～！」モモンの実の目の前まで来た！・・・が。
遂に勢いが無くなりその場で静止してしまった。
「・・・マジっすか（汗）」必死に前足を伸ばすグラエナだが、爪がちょっとかすっただけだった。そしてグラエナは地面に向かって落下していった。
「あぁぁぁ！？」
ドスン！
頭から地面に落下してしまったグラエナ。
「だ、大丈夫ですか！？」ジラーチが心配してグラエナの所に駆け寄った。
「・・・だ、大丈夫っすよ・・・イタタタ・・・」頭を前足で押さえながらグラエナは答えた。
（とても大丈夫そうには見えないんだけど（汗））心の中で呟くジラーチ。
「くそ～！もう一度っす！」
グラエナはまたジャンプする気だ。
「ちょ、ちょっとグラエナさん！？無理しない方が・・・」
「ネバーギブアップっすよ！！」

またグラエナはモモンの実目指してジャンプしたのだが、失敗したのは言うまでもない。
「あ～・・・心が折れそうっす・・・」
早くもギブアップ寸前のグラエナであった。
（・・・面白い人だなぁ。）
ちょっと笑みがこぼれているジラーチ。
「おっいたいた！お～いグラエナ～！ジラーチ～！」
グラエナとジラーチは声がする方に振り向いた。そこにはバクフーン達がいた。
「捜したぜお前ら！こんな所でなにしてんだ？」
「あれを取ろうとしてたんすよ。」
グラエナが見ている先をバクフーンは見た。
「あっ！俺の好物のモモンの実じゃん♪」
バクフーンの目がキラキラと輝いている。
「アニキが好きな物だから取ろうとしたんすけど、届かなくて（汗）」
「なら俺が！うおぉぉぉ！！」
バクフーンがモモンの実目指して凄い勢いで木を登り始めた。
「エイパム顔負けだな（汗）」
ラティオスが言った。
「食べ物が絡むと凄い力を出しますからねバクフーンさんは（汗）」
木を登り始めたバクフーンはモモンの実まであと少しという所まで来ていた。
「待ってろよモモンの実ちゃん！」
バクフーンがモモンの実に手を伸ばした。
だが、中々モモンの実に手が届かない。

「もうちょいで・・・」バクフーンが思いっきり手を伸ばしたその時、木を掴んでいた手が滑ってしまった。
「あっ（汗）あぁぁぁぁ！？」ドスン！
先程のグラエナと同じように頭から落下してしまったバクフーン。
「うわぁ・・・痛いぞ今のは（汗）おいバクフーン、大丈夫か？」
ラティオスがバクフーンに言った。

「あ～・・・ダメ・・・死んじゃうかも・・・」
「大丈夫だな。」
軽く流すラティオス。

「ってラティオス！？少しは心配してくれても良いんじゃないのか！？」
軽く流された事にちょっと怒ったバクフーンがラティオスに言った。
「まぁまぁ落ち着いて。これでも食べなよ。」
ミュウがバクフーンにあるものを手渡した。
「ってこれモモンの実じゃん！？いつの間に取ってきたんだ？」
「今。僕は飛べるからね。皆の分も取ってきたから食べようよ。」
ちゃんと皆の分も取ってきていたミュウ。

一人一人にモモンの実を配り始めた。

その頃、焔の悪魔が隠れている火山の山頂では・・・
「・・・以上です。」
「やはり奴は裏切ったか・・・クロバット、ご苦労だった。下がって良いぞ。」
「失礼します。」
ヒードランはヤドキングをジラーチ捕獲に向かわせた時、別の幹部であるクロバットにヤドキングを追跡させていたのだ。
「ボス。ヤドキングは始末するのかい？」
腕組みをしながらドグロックが質問した。
「当たり前だ。だが、奴を始末する前にジラーチ捕獲が先だ。」
「でもさ、どうやってジラーチを捕獲するつもりだ？あいつもう目覚めちまったんだろ？」
「・・・プランBだ。」
「あれをやんのか？」
「不満か？」
「いいや・・・面白くなってきたじゃねぇか♪早速準備に取り掛かるぜ！」
ドグロックは何処かへ走って行った。
ヒードランが言うプランBとは一体なんなのか？

「ごちそうさま～♪はぁ～食った食った♪」
バクフーン達はモモンの実を食べ終えた。

「君って結構大食いなんだね（汗）」
バクフーンの食べる量に驚いているミュウ。
「そうか？普通だと思うけど？」
「いや、普通じゃない（汗）」
「普通じゃないです（汗）」ラティオスとラティアスが言った。

「なんだよ二人して？誉めても何も出ないぞ？」
「「いや、誉めてないから（汗）」」
兄妹揃ってツッコミをいれた。
（・・・面白い人達ばかりだなぁ！こんなに楽しくなったのは久しぶりだよ！・・・でも・・・僕はこんなに楽しんで良いのかな・・・）
急に暗い表情になってしまったジラーチ。
「どうしたんすかジラーチ？」
隣にいたグラエナがジラーチの顔を覗き込むようにして質問した。
「な、なんでもないよ！」
「そうっすか？あっそうだ！ねぇジラーチ。前のジラーチのパートナーだった人はどんな人だったんすか？」

「・・・前の・・・パートナー・・・」
また更にジラーチの表情が暗くなった。
「あれ？俺、何かまずい事聞いちゃったっすか？」
「うんうん、そんな事無いよ！・・・ちょっと近くを散歩してくるね・・・」
そう言ってジラーチはバクフーン達から離れた。
「どうしたんすかね？」
「・・・あれは何か昔、辛い経験をした顔だね。」
グラエナの隣にミュウがやって来た。
「辛い経験？」
「今と違って、昔の人達は頻繁に戦争を起こしてたからね。

１０００年前にも大きな戦争があったんだよ。」
ミュウが言うように、現代と違い昔は戦争が良く起きていた。
「戦争・・・っすか？」
「あくまで推測だけど、その戦争でジラーチは辛い経験をしたんだと思うよ。」
ミュウのその言葉を聞いて、グラエナは立ち上がった。

「俺が昔の事を思い出させるような事を言っちゃったからジラーチは・・・俺、ジラーチの所に行って謝ってくるっす！」グラエナはジラーチを捜しに走り出した。

「・・・」
ジラーチは一人、海が見える崖の所にいた。
とても悲しい目をしている。
「・・・ルーク・・・」
「ジラーチ～！」
ジラーチを呼ぶ声が聞こえた。
ジラーチが後ろに振り向くとそこにはこっちに向かって走って来ているグラエナがいた。
「グラエナさん・・・」
「ジラーチ・・・すまなかったっす！」
グラエナはいきなりジラーチの前で土下座した。

「ど、どうしたんですかいきなり！？」
いきなり土下座されてジラーチは戸惑っている。
「俺が前のパートナーの事を聞いたから、ジラーチは何か辛い事を思い出したちゃったんすよね？だから、ごめんっす！」深く頭を下げるグラエナ。
「顔を上げてくださいグラエナさん。
グラエナさんは悪くないんですから・・・」

「でも・・・」
「悪いのは僕です。僕のせいで・・・僕のせいでルークは・・・」
目から涙が溢れ出そうになっているジラーチ。
「・・・ジラーチ・・・一体何があったんすか？」
「・・・実は・・・」
ジラーチはグラエナに昔何があったのかを話だした。

今から１０００年前。
今みたいにハイテク機器が無い時代。
そして戦争が一番ひどかった時代。
そんな時代の時に目覚めたジラーチ。
「・・・う～ん・・・」
「よっ！お目覚めだな寝ぼすけ♪」
爽やかな笑顔でジラーチの目の前にいる一人のポケモン。

「君は？」
「俺か？俺の名はルーク！ルカリオのルークだ！よろしくな♪」
彼がルーク。
ジラーチが一番心を許したパートナーだ。
今までジラーチのパートナーになってくれたポケモン達は皆良い人ではあったが何処か他人のような接し方だった。
だがルークだけは違った。まるで昔からの親友のように接してくれた。

「波動弾！」
戦争が激しいこの時代、ジラーチの願いを叶える力を狙って襲ってくるポケモンは大勢いた。
皆、戦争の勝利者になって世界の独裁者になるという野望を持っていた。そんな奴らの願いを叶える訳にはいかないと言い、ルークはジラーチをそいつらから守る為に必死に戦った。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・ったく！
しつこいってんだよ・・・」
身体中傷だらけのルーク。立っているのもやっとなのかフラフラしている。
「ルーク！！」
ジラーチが心配してルークの所に駆け寄った。
「バ、バカ！？出てくんなって言っただろ！？」

その時、ルークが戦っていた相手のポケモンがジラーチに向かって火炎放射を放った！
鋼タイプを持っているジラーチには効果抜群だ！
「くそっ！？神速！！」
ルークは神速を使ってジラーチの前に立ちはだかり火炎放射を自ら受けて、火炎放射からジラーチを守った。
「ルーク！？」
「うっ・・・出て来んなって・・・言っただろうが・・・かはっ・・・」ルークはその場で倒れてしまった！
それと同時に相手のポケモンがジラーチを捕獲しようと迫ってきた！
「・・・近づくんじゃねぇ！！波動弾！！」
倒れながらもルークは最後の力を振り絞り波動弾を放った！
波動弾は相手に直撃して相手を吹き飛ばした！
「ハァ・・・ハァ・・・クソ野郎が・・・」
「ルーク！？ねぇルーク大丈夫！？」
ジラーチはもう泣きそうな顔をしてルークの名前を必死に呼ぶ。
「ハァ・・・ハァ・・・なんて顔してんだよ・・・笑顔でいろって・・・いつも言ってんだろ？」苦しい筈なのに笑顔を見せるルーク。
「そんなの無理だよ！だってルークが・・・僕のせいでルークが・・・」
「お前のせいじゃねぇよ・・・自分を攻めるな・・・」
「ルーク・・・」
「・・・なぁ・・・ジラーチ・・・最後に一つ・・・頼んで良いか？」
「何言ってるのさ！最後なんて言わないでよ！」
「・・・お前の・・・笑ってる顔・・・見せてくれ・・・好きなんだ・・・お前の笑顔・・・」
意識が途切れそうになりながらルークはジラーチに頼んだ。
ジラーチは涙をボロボロと流しているが、なんとか笑顔を作った。
「・・・やっぱ・・・お前の笑顔・・・最高だぜ・・・その顔・・・

忘れる・・・なよ・・・な・・・」
そう言い残すとルークは力尽きた・・・
「・・・嫌だ・・・嫌だぁぁぁ！！」
ジラーチの悲痛な叫びが響き渡った。

「・・・そんな事があったんすか・・・」

「・・・僕があの時、ちゃんと隠れていたら・・・ルークは死なずに済んだ筈なんだ・・・僕のせいでルークは・・・」
「ねぇジラーチ・・・そんな風に自分を攻めるのはダメっすよ。」
「・・・僕が悪いんだ・・・」
ジラーチは自責の念に駆られている。
「ジラーチ・・・良し！」グラエナは何を思ったのか、突然後ろ足を上げて逆立ちを始めた。
「シャドーボール！」
目の前にシャドーボールを出した。
そして逆立ちしたままシャドーボールにグラエナは乗って玉乗りを始めた。
「どうっすかジラーチ？俺の曲芸っすよ♪」
グラエナなりにジラーチを元気づけようとしているようだ。
「よっ！」
グラエナはジャンプして身体をクルクルと回転させた。

そしてもう一度シャドーボールの上に着地しようとした・・・のだが、目測を誤って頭から地面に激突してしまった（汗）
「イタタタ・・・ま、まさか1日に2回頭をぶつけるなんて（泣）」
前足で頭を押さえながら痛みを堪えているグラエナ。それを見たジラーチは思わず笑ってしまった。
「やっと笑ってくれたっすね！・・・ルークさんがジラーチの笑顔が好きな理由、良く解ったっすよ。とっても良い笑顔じゃないっすか。」
「グラエナさん・・・」
「・・・ルークさんが亡くなった事は残念っす。だけど、ジラーチがいつまでも暗いままだとルークさんは安心して眠れないっすよ。ジラーチが笑顔でいられるように、俺がジラーチを守るっすよ！」
グラエナは笑顔で言った。
（・・・似てる・・・ルークの笑顔に・・・）
グラエナの笑顔がルークの笑顔に似ている事に少し驚いているジラーチ。「俺の顔に何かついてるっすか？」
「あっうんうん！何もついてないよ！
ありがとうグラエナさん。少し元気が出たよ。」
「良かったっす♪さあ、そろそろアニキ達の所に戻るっすよ！心配してると思うっすから！」
「うん！」
二人はバクフーン達の所に戻って行った。

第七十話　ジラーチの過去（後書き）

第七十話完成です。
バクフーン：お～い作者！
作者：また勝手に来ちゃったのかいバクフーン？
バクフーン：良いだろ別に。それよりさ、また最近小説の更新遅れてないか？
作者：いやあ（＾―＾；）今月ポケモンのワールドチャンピオンシップの東京大会予選があるんだけど、どのメンバーでやろうかずっと考えてたら小説の更新がおろそかになってしまって（＾―＾；）
バクフーン：へ～！抽選当たったんだ！
どっちに出るんだ？
カード？プラチナ？
作者：プラチナの方。
バクフーン：ゲームの方か！なぁ、もちろんメンバーの中には俺がいるんだよな？
作者：入れたいんだけどねぇ・・・最近だとこだわり噴火のバクフーンは古いらしいからねぇ・・・
バクフーン：まさか俺がメンバーに入ってないのか！？
作者：僕的には入れたいんだけど・・・まだ検討中。
バクフーン：頼むから俺をメンバーに入れてくれ！
作者：考えておくよ。

第七十一話　驚愕！実はミュウはおじいちゃん！？（前書き）

第七十一話を書き直しました。
何か改めて自分で読んでみたらつまらないなぁって思ったんで（＾―＾；）

第七十一話　驚愕！実はミュウはおじいちゃん！？

「ねぇジラーチ、ジラーチの好きな食べ物ってなんすか？」
「好きな食べ物？そうだなぁ・・・クラボの実とかかな？僕辛いのが好きなんだ。」
バクフーン達がいる所へ帰る途中のグラエナとジラーチ。
グラエナはジラーチともっと仲良くなろうと積極的に話しかけていた。
「へぇ～！俺は甘いモモンの実が好きなんすよ！じゃあ、好きな事ってなんすか？」
「好きな事かぁ。いっぱいあるんだよねぇ。
でも一番好きなのはバトルかな？」
意外にもジラーチはバトルが好きらしい。
「マジっすか！？俺もバトルが好きなんすよ！」
それを聞いてテンションが上がったグラエナ。
バクフーンの影響でグラエナ自身もバトルが好きになっていたのだ。
「そうなんだ！ねぇグラエナさん、今度バトルしようよ！」
「良いっすよ！それとジラーチ、俺の事は呼び捨てで良いっすよ？」
「えっ？でも・・・」
「俺とジラーチはもう友達っす。友達が友達を呼ぶ時にさん付けは変っすよ。ねっ？」
「・・・じゃあ、グラエナ。約束だよ？
絶対バトルしてよね？」
「俺は約束は守るっすよ！」
笑顔で答えたグラエナ。

「遅いなぁあいつら？」一方のバクフーン達はちょっと帰るのが遅いグラエナ達を心配していた。「大丈夫。今こっちに向かって来てるよ。
気配で解る。」
ミュウがバクフーンに言った。
「気配？俺は全く解んないけど・・・」
「長く生きてるとこういう能力が発達するんだよね。」
「長くって・・・ミュウさんは今おいくつなんですか？」
隣にいたラティアスがミュウの顔を覗き込むようにして聞いた。
「いくつに見える？」
質問に質問で答えるミュウ。
「見た感じはバクフーンさんや私と兄さんとあまり変わらないように見えますけど？」
「そう？一応僕は皆よりずっと歳上だよ。」
「本当かよ？」
ちょっと疑った目でミュウを見るバクフーン。
「それより、君達に聞きたい事があるんだけど。君達はジラーチの事をどこまで知ってる？」
今度はミュウが皆に聞いた。
「えっと・・・１０００年に一度目覚めて、何でも願い事を叶えてくれる力を持っているんだろ？」
バクフーンが答えた。
「確かにそうだけど、その願い事を叶える事が出来るのが三つまでって事は知ってるかい？」
それを聞いたバクフーン達は皆揃って首を横に振る。

「三つまでなのか？」
「そうだよバクフーン。そして、何故ジラーチが１０００年もの長い間眠らないといけないのかは知ってるかい？」
再び皆揃って首を横に振る。
「それはね、ジラーチが三つの願いを叶えたせいなんだ。どんな願いも叶えるって事は膨大なエネルギーを使う事になる。エネルギーを使い果たしたジラーチはエネルギーを回復する為に１０００年眠る必要があるんだ。」
「そうなのか・・・じゃあ、もし三つの願いを叶えなかった場合はどうなる？」
ラティオスが聞いた。
「その場合は普通のポケモンと同じだよ。朝起きて、ご飯を食べて、好きな事して、夜には眠る。いわゆる普通の日常を過ごせる。１０００年も眠る必要は無い。」
やけにジラーチの事に詳しいミュウ。
「なぁミュウ。何でそんなにジラーチの事を知ってるんだ？」
バクフーンが首を傾げながら聞いた。
「そりゃそうさ。僕は実際に見た事があるからね。」
「へぇ～なるほど。実際にねぇ・・・・・・実際に？」
ミュウの言った事に一瞬耳を疑ったバクフーン。「あ、あのさミュウ、もう一度聞くけど・・・今実際にって言ったか？」
「うん言ったよ。」
軽く答えるミュウ。
「「「え～！？」」」
バクフーン達が驚きの声をあげた。
「ちょっと待て！？どういう事だよ実際に見たって！？それじゃ、お前もう１０００年以上生きてるって事になるだろ！？」
「５０００年以上生きてるよ。」
「ごっ！？」

更に驚く三人。

そんな時にグラエナとジラーチ戻って来た。

「ただいまっす～♪

あれ？どうしたんすかアニキ達？」

驚いた表情のままミュウを見つめているバクフーン達。今来たばかりなので状況が解らないグラエナとジラーチ。

「どうしたんだろ？」

「解んないっす。」

「え～！？ミュウさんって５０００年以上生きてるんすかぁ！？」

「僕より歳上なんだ（汗）」バクフーン達にミュウについて聞いたグラエナとジラーチは驚きの表情をしている。

ちなみに今バクフーン達はバトルパレスに向かっている最中だ。

「やっぱ驚くんだね皆？」

「驚かない方が変だって（汗）」

ツッコミを入れるラティオス。

「ミュウさんって何でそんなに長く生きてられるんすか？」

「それはね、親友のおかげなんだ。」

「親友っすか？それって一体誰なんすか？」

「ごめん。それは言えない。約束なんだ。

その親友は不老不死の力を持っていてね。
その力を狙っている悪者がたくさんいるんだ。
だから、誰にも親友の事は話さないって固く約束したんだ。」
真剣な表情で言うミュウ。
「解ったっす。」
グラエナはそれを聞いてそれ以上聞くのは止めた。

それから数時間後。
「やっと着いた～♪」
バトルパレスに到着したバクフーン達。
「うお～早くバトルしてぇ～！早く行こうぜ皆！」バクフーンが一人先にバトルパレスの中へ走って行った。
「あっ待ってくださいっすよアニキ～！？」
グラエナ達も慌ててバクフーンを追ってバトルパレスの中へ。

「・・・スゲー・・・ここ本当に建物の中か？」先に入っていたバクフーンはバトルパレスの中を見て驚いていた。
中はかなり広く、例えるなら東京ドーム一個分だ。そして見渡す限り木、木、木！まるでジャングルだ！
「挑戦者か？」
ジャングルの奥から一人のポケモンがやって来た。背中には大きな花が咲いている。
「そうだ！俺はバクフーン！あんたがフロンティアブレーンか？」
「そうだ。バトルパレス、パレスガーディアンのフシギバナだ。

挑戦者はお前一人か？」
「アニキ～！」
やっとグラエナ達がやって来た。
「他にも仲間がいる。」「みたいだな。」
「フシギバナ、ここのバトルルールはなんだ？」
「本来は一対一なんだが、仲間がいるなら三対三の勝ち抜き戦だな。フィールドはこのバトルパレス全域だ。」
どうやらこの広いジャングルがバトルフィールドらしい。それを聞いてますますやる気が出たのかバクフーンは目をキラキラさせる。
「こんなに広い所でバトルなんて初めてだ！ワクワクしてきたぜ♪」
「元気の良い奴だな。
どうやら久しぶりに楽しいバトルが出来そうだ。スピアー！マスキッパ！」フシギバナが叫ぶと奥からスピアーとマスキッパがやって来た。
「俺を含めたこの三人で相手をする。
さあ、お前達もバトルするメンバーを決めるが良い。」

「俺は絶対出るからな！」やる気満々のバクフーン。
「俺もやらせてくれ。久しぶりにバトルがしたい。」
ラティオスも参加したいらしい。
「僕も良いかな？なんだか面白そうだからね。」ミュウがバクフーンに言った。
「ＯＫ！フシギバナ！俺達はこの三人でやるぜ！」バトルするのはバクフーン、ラティオス、ミュウの三人のようだ。
「解った。では最初にバトルする者は前へ！
スピアー、任せたぞ？」
「ウイ～ス。」

スピアーが前へ出てきた。
「最初は俺からやらせてもらうぞ？
良いよなバクフーン？」
「解ったよ。頼むぜラティオス！」
ラティオスが前へ出た。「それじゃ、始め！」
ラティオスとスピアーのバトルが始まった。
果たしてバクフーン達はバトルパレスを制覇する事が出来るのか？

第七十一話　驚愕！実はミュウはおじいちゃん！？（後書き）

第七十一話完成です。
（二回目）
バクフーン：よう作者！書き直すとか珍しい事したな？
作者：何かね、急にストーリーが思いついてね。こっちの方が良いんじゃないか？って思ったから書き直したんだ。
バクフーン：思いついたって事は、スランプは抜け出せたのか？
作者：多分ね。まぁ調子に乗りすぎてまたスランプにならないように気をつけるよ（＾―＾；）

第七十二話　制覇出来るか？バトルパレス！（前書き）

バクフーン達はバトルパレスを制覇出来るか？

第七十二話　制覇出来るか？バトルパレス！

「ミサイル針！」
バトルが始まったと同時にスピアーはラティオスに向かってミサイル針を放った！
無数の針がラティオスに向かっていく！
「サイコキネシス！」
ラティオスはサイコキネシスを使ってミサイル針をコントロール！
逆にスピアーに向かってミサイル針を飛ばした！「高速移動！」
スピアーは高速移動を使ってミサイル針を回避した。そしてそのままラティオスの周囲をぐるぐると飛び回る。

「俺を攪乱（かくらん）させるつもりみたいだが、生憎だがその戦法は俺には通用しない！竜星群！」
ラティオスは自分の周りに竜星群を放った！
無数のエネルギー弾が雨の如く降り注ぐ！
スピアーは慌ててラティオスから離れた。
「逃がすか！」
ラティオスは竜星群をサイコキネシスでコントロールしてスピアーを攻撃した！
だが、スピアーはそれを紙一重で避けた。
そしてスピアーは密林の中へ。
ラティオスもスピアーを追って密林の中へ向かった。

「あれはまずいね。」
「何がまずいんだミュウ？」
首を傾げながらバクフーンがミュウに聞く。
「虫タイプのスピアーにとっては密林の中は庭も同然。その中に入

るという事は自分から不利な状況を作ってしまうって事。彼、もしかしたら負けるかもしれないよ？」

ラティオスとスピアーが密林に入ってから数十分。

「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」

ミュウの予感は当たっていた。

高速移動で素早く動きながらミサイル針でラティオスを攻撃しつつ、すぐに自分は密林の中に逃げてラティオスの反撃を受けないようにする。

ヒット&アウェー戦法でラティオスを追い詰めているスピアー。

ラティオスは何とか自己再生をして粘っているが、それも長く持たない。「ミサイル針！」

再びスピアーがラティオスに接近してミサイル針を放った！

「くっまたか！？守る！」ラティオスは守るを使ってミサイル針を防御した。

「竜の波動！」

ラティオスは竜の波動で反撃するが、スピアーは密林の中へ逃げた。

竜の波動は木に直撃してスピアーには当たらなかった。

「ハァ・・・ハァ・・・クソ・・・密林に入ったのが・・・まずかったな・・・」

その時、近くからスピアーの羽が高速で動く音が聞こえてきた。

「来たか・・・次の攻撃を受けたら・・・やばいな・・・どうする

？」

ラティオスは必死に打開策を考えた。

「一か八か・・・やってみるか・・・」

ラティオスは何か思いついたようだ。

「これで終わりだ！」

その時スピアーが一気に勝負を決めようとラティオスに突っ込んで来た！

「今だ！ラスターパージ！！」

その瞬間ラティオスはラスターパージを発動！

眩しい光がその場を照らす！あまりの眩しさにスピアーはその場で思わず止まってしまった！

「ドラゴンクロー！！」動きを止めたスピアーにラティオスは接近し、最大パワーのドラゴンクローを炸裂させた！

スピアーは吹き飛ばされ、木に叩きつけられた！「かはっ・・・」

スピアーは倒れた。

「・・・こいつ・・・」ラティオスまで倒れてしまった！

良く見るとラティオスの胸に針が刺さっていた。スピアーはドラゴンクローを受けた時、ラティオスに毒針を決めていたのだ。体力が残り少なかったラティオスにはこの攻撃を耐える事が出来なかったのだ。

それから数分後、倒れてしまった二人を仲間達が安全な場所まで運んでいった。

「大丈夫かラティオス？」心配そうな表情でラティオスに喋りかけるバクフーン。
「何とかな・・・すまないバクフーン・・・油断した・・・」
「気にすんな。あとは俺達に任せな？」
そう言ってラティオスをラティアス達に任せて、バクフーンとミュウは再びフィールドへ戻った。

「次は俺がやるぜ！ミュウ、良いよな？」
「君がリーダーなんでしょ？リーダーの言う事に従うよ。」
「サンキューミュウ！じゃあ行ってくる！」
次はバクフーンがバトルするようだ。
相手の方からはマスキッパがやって来た。
「次は僕が相手だよ～！よろしくね～！」
「おう！良いバトルにしようぜ！」
やる気満々の二人。
「それでは、始め！」
フシギバナの合図と共にバトルが始まった。
まずバクフーンが電光石火でマスキッパに突っ込んで行った！
「こんなのはどう～？
草結び～！」
マスキッパが草結びを発動。いきなりバクフーンの足下から草が生えて足に絡みついてきた！
「うわっ！？」
バクフーンは勢い良くその場でこけた。
「うっひょひょ～♪掛った掛った～♪」
マスキッパはバクフーンが草結びに掛った事を大いに喜んでいる。
「にゃろ！火炎放射！」バクフーンは火炎放射で反撃した。
「守る～！」
だが、マスキッパは守るを使って火炎放射を防御した。
「炎技対策はちゃんとしてるよ～！

それ、タネマシンガン！」マスキッパは口から無数のエネルギー弾をマシンガンの如くバクフーンに向けて放った！
バクフーンは回避しようとしたがまだ足に草が絡みついていて動けなかった。
「だったら火炎車だ！」バクフーンは火炎車を発動してタネマシンガンを弾いた！
更には足に絡みついていた草も燃やして動けるようにした。
そしてバクフーンは火炎車でマスキッパに向かって行った！
「逃っげろ～！」
マスキッパは空中に浮遊して火炎車を回避した。「あいつ飛べたんか！？」
「タネマシンガン～！」空中からマスキッパはタネマシンガンを放った。エネルギー弾が雨の如く降り注ぐ！
「電光石火！」
バクフーンは電光石火でタネマシンガンを回避した。そしてバクフーンはそのまま近くにある木に向かってジャンプ！
木から木へとジャンプして行ってマスキッパがいる空中へと高く飛んだ！
「嘘～！？ここまで来た～！？」
まさかバクフーンが空中に来るとは予想もしてなかったマスキッパは驚いている。
「捕まえたぜ！」
バクフーンはマスキッパにしがみ付いた。
マスキッパは振り落とそうとするがバクフーンは全く離れない。
「この勝負もらったぜ！フレアドライブ！！」
バクフーンはフレアドライブを発動した！
自分を包む炎がマスキッパをも包み込んだ！
「アチチチ！？」
「もっと火力を上げるぜ！炎全開！！」
バクフーンはフレアドライブを最大パワーにした！マスキッパはあ

まりの熱さに耐える事が出来ずにその場で目を回して気絶してしまった。
そしてバクフーンと共に地上へ落下していった。「火炎放射！」
バクフーンはマスキッパを抱えたまま地上に向かって火炎放射を放ち、その勢いを利用して落下の衝撃を抑える事で安全に着地した。

バクフーンはマスキッパを安全な場所まで運んであげた後、フィールドに戻って来た。
「お待たせ！さあ、バトルの続きをしようぜ！」
「良いだろ。」
最後の相手、フシギバナが前へ出てきた。
「先攻はお前からで良いぞ。」
「じゃあ遠慮なく行くぜ！電光石火！」
バクフーンとフシギバナのバトルが始まった。
まずバクフーンは電光石火でフシギバナに突っ込む！
「マジカルリーフ！」
フシギバナは自分の周りにマジカルリーフを発動。葉っぱの竜巻のようになってバクフーンを寄せ付けないようにした。
だが、バクフーンはそれでも構わずにマジカルリーフに突っ込んだ！・・・のだが。
やはり無理があったのかバクフーンはマジカルリーフに弾き飛ばされた！「イタタタ・・・結構強力なマジカルリーフだなぁ！」
「面白い奴だな？自らダメージを受ける事を承知で突っ込んで来るとは・・・俺の技の威力を確かめる為にわざとやったのか？」
「ま、まぁな！」
（本当は突っ切れると思ったんだけどな（汗））

心の中で呟いたバクフーン。

「さあ、続きだフシギバナ！火炎放射！」
バクフーンはマジカルリーフの竜巻に火炎放射を放った！
渦巻く葉っぱがどんどん燃やされて灰になっていく！
だが、大量の葉っぱが燃えて灰になった為にフシギバナの姿が見えなくなってしまった！
「噴火！！」
バクフーンは噴火を使って灰を吹き飛ばしながらフシギバナに攻撃しようとした。
だが、すでにその場にはフシギバナはいなかった。どうやら密林の中へ入ったようだ。
「これは・・・さっきスピアーがラティオスに使ったあれか。
どうすっかなぁ？
密林に入ればフシギバナの思うつぼだし・・・かと言ってこのままだとバトルにならないし・・・あ～！考えても仕方ない！行ってやるぜ！」
バクフーンは意を決して密林の中へ入って行った。

密林の中でバクフーンはフシギバナを捜すが中々見つけられずにいた。

「何処行ったんだ?何かそこら中にフシギバナの花に似た植物があるから余計に解らねぇし（汗）」フシギバナは上手く擬態してバクフーンから身を隠しているようだ。
（来たな・・・）
フシギバナの近くにバクフーンがやって来た。
だがバクフーンはフシギバナの存在に気づいていない。
（今だ!ハードプラント!!）
フシギバナはハードプラントを発動した!
バクフーンの足下から無数のイバラが出現した!
「うわっ!?で、電光石火!!」
バクフーンはハードプラントが直撃する間一髪のところで電光石火を使い回避した。
（外したか!）
「危ねぇ!?近くにいんのか!何処だ!?」
バクフーンは必死に捜すがそこら中フシギバナの花に似た植物だらけでどれが本物なのか解らずにいた。
「これか!火炎放射!」バクフーンは勘で一つの花に火炎放射を放った!だが、その花はフシギバナではなかった。
「あ〜もう!こうなったら最後の手段だ!
フシギバナ!火事になるけど許せよ!」
バクフーンは力を溜め始めた。
（あいつ・・・まさか!?）
「炎全開!噴火!!」
フシギバナの嫌な予感は的中した。
バクフーンは自分の周りにある植物全てに最大パワーの噴火を放った!
周りの植物は噴火の炎でどんどん燃えていく!
そして噴火の炎がフシギバナに向かって来た!
「くっ!?守る!!」
フシギバナは仕方なく守るを使って噴火を防御した。その為バクフ

ーンに自分の居場所がバレてしまった。
「そこか！フレアドライブ！！」
バクフーンはフシギバナに向かってフレアドライブで突っ込んだ！
すでに守るを使ってしまったフシギバナは他に防御手段が無い！
「ならば真っ向勝負だ！ギガインパクト！！」
フシギバナはギガインパクトでバクフーンに向かって行った！
そしてフレアドライブとギガインパクトがぶつかり合い大きな爆発が発生した！

爆発で起きた爆煙が晴れていく。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」
バクフーンはまだ立っていた。
フシギバナは倒れている。まだ意識はあるようだが、身体が言う事をきかないみたいだ。
「俺の・・・負けだな・・・しかし、無茶しやがって・・・」
勝負はバクフーンの勝ちのようだ。
だけど、バクフーン達の周りの密林はバクフーンの炎のせいで火事になっている。
「ハァ・・・ハァ・・・マジで悪い・・・あれしか方法が思いつかなかったんだ・・・」
申し訳なさそうに言うバクフーン。
「まぁ良いさ・・・もうすぐこの建物のスプリンクラーが作動する頃だ・・・」
フシギバナがそう言った時、上から雨が降って来た。天井に付いているスプリンクラーが作動したようだ。
密林の火事がどんどん消えていく。

火事が消えて数十分後。その頃にはフシギバナも動けるまでには回復していた。
「あ～あ。せっかく俺が育てた植物達が燃えちまったよ・・・」
「だからマジでごめんって！」
両手を合わせて謝っているバクフーン。
「冗談だよ冗談。こんな事炎タイプの奴とバトルすればしょっちゅうある事だからさ。
それより、これを受け取ってくれ。
バトルパレスを勝ち抜いた証、スピリットシンボルだ。」
バクフーンはフシギバナからスピリットシンボルを手渡された。
シンボルにはSのマークが刻まれている。
「ありがとうフシギバナ！よっしゃ！これで五つ目だ！」
バクフーンはシンボルケースにスピリットシンボルを入れた。

「もう五つ集めたのか？」
「あぁ！あとはバトルタワーとバトルピラミッドだけなんだ！」
「タワーとピラミッドか・・・ここからだと一番近いのはタワーの方だな。お前達、今日はここに泊まってけ。
ここからタワーまでの道にポケモンセンターは無いからな。」
フシギバナがバクフーン達をパレスに泊めてくれるらしい。
「良いのか？」
「もちろんだ。」
「じゃあ、ありがたく泊めさせてもらいま～す♪」バクフーン達は

バトルパレスに泊まる事にした。バトルフロンティア制覇まで、あと二つだ！

「バクフーン、泊めてやる代わりに新しい植物を植えるの手伝えよ！」

ちょっと怒り口調でバクフーンに言うフシギバナ。

「やっぱ燃やした事怒ってる（汗）」

第七十二話　制覇出来るか？バトルパレス！（後書き）

第七十二話完成です。
ラティオス：作者。
作者：あれ？ラティオスじゃないか！
珍しいな君がここに来るなんて？
ラティオス：ちょっと聞きたい事があってな。前回小説を書き直しただろ？その時のジラーチの設定。あれどうなんだ？
普通ジラーチは七日間だけ活動出来るんだろ？
作者：僕も最初その設定でやろうと思ったんだけど、それじゃジラーチの出番が少なくなるから色々とオリジナルと違う設定でやろうと思ってやってみたんだ。
ラティオス：良いのかそれ？
作者：何を今更？
それ言っちゃうとバクフーンはどうすんの？
ブラストモードとか絶対アニメにもゲームにも出ないような事やっちゃってるんだよ？
ラティオス：・・・だな（汗）すまん。
作者：これからもアニメにもゲームにも無い設定の力を持ったポケモン出そうと考えていたりするんだよね！
ラティオス：ほう？例えばどんな？
作者：それはここでは言えないよ。
でもそういう力を持ったポケモンをバトルフロンティア編が終わったら出そうと考えてるんだ。
ラティオス：・・・つまり、この小説はバトルフロンティアで完結しないって事か？
作者：その通り！アイデアが無くなるまでとことんやるよ！
ラティオス：頑張るなぁあんた（汗）

第七十三話　動き出した焔の悪魔！プランB発動！（前書き）

バトルパレスを見事制覇して、五つ目のシンボルをゲットしたバクフーン達。現在はフシギバナの好意でバトルパレスに泊まっている。

第七十三話　動き出した焔の悪魔！プランB発動！

バクフーン達がバトルパレスを制覇した次の日の朝。時刻は九時。

「アニキ！もう朝っすよ？起きて下さいっす！」

「頼むから～・・・・・・もう少し寝かせてくれ～・・・・・・」

グラエナがバクフーンを起こそうとしているが、バクフーンはまだ寝ていたいらしく起きるのを拒んでいる。

「やっぱ昨日の作業の疲れがまだ残ってるみたいだな？」

ラティオスが言った。

昨日の作業とは、バクフーンが燃やしてしまったバトルパレスの植物があった所に、フシギバナと一緒にまた新しい植物を植えるという作業である。燃やしてしまった数が半端ではなく、フシギバナとバクフーンが作業を終えたのは夜中の三時。まだバクフーンは疲れが取れていないのである。

「あ～腰が痛いよ～・・・・・・眠いよ～・・・・・・」

嘆いているバクフーン。

「こりゃ何がなんでも動かないな（汗）

しょうがない、バクフーンが回復するまでもうしばらくここにいよう。」

ラティオスの提案に皆首を縦に振って頷いた。

場所は変わって、バトルアイランドの火山、焔の悪魔アジト。

「ボス、あと三時間でプランBの準備が出来るぜ？」

幹部の一人、ドグロッグがボスのヒードランに報告した。

「解った。・・・・・・準備が出来次第、プランBを実行しろ。」

「了～解♪」

ドグロッグは笑いながらその場を去った。

「・・・・・・待っていろジラーチよ、必ず貴様を我がものにしてやる！フフフ・・・・・・」

それから二時間後。

また場所は変わってバトルパレス。
ようやくバクフーンが目覚めた。

「あ～・・・・・正直まだ寝たりねぇ。」

目を擦りながらベッドから降りるバクフーン。

「あんだけ寝てまだ寝たりないってか（汗）」

バクフーンの発言に呆れた表情をしているラティオス。

「アニキ、これ食って元気出してくれっす！」

そう言ってグラエナがバクフーンの好物であるモモンの実を三つ渡した。それを見たバクフーンは目の色を変えた。

「うおっ！？モモンの実じゃん！！いっただっきま～す♪」

バクフーンはモモンの実に噛り付く。
先程までだるそうにしていたのが嘘のようだ。
あっという間にモモンの実を完食してしまった。

「あ～美味い♪なぁグラエナ！もっと無いの？」

食欲に火が付いたらしい。更にモモンの実を求めるバクフーン。

「今ので全部っすよ？」
「え～！？」

モモンの実が無いと聞いた瞬間、バクフーンは肩を落として落ち込んだ。

「あっそういえば、さっきフシギバナさんが食堂の冷蔵庫にモモンの実を入れていたような・・・・・・」

「シーッ!?余計な事を言うなジラーチ!」

「ん～!?」

ラティオスは慌てて両手でジラーチの口を塞ぐ。いきなりなので驚きの声を出そうとするジラーチだが、塞がれているので上手く出せない。

「食堂にモモンの実・・・・・・」

せっかくラティオスがジラーチの口を塞いだのだが、バクフーンはジラーチの発言を聞き逃さなかった。

次の瞬間バクフーンは食堂に向かって猛ダッシュした。

「まずい!?バクフーンを止めるぞ!」

ラティオス、ラティアス、グラエナの三人は急いでバクフーンのあとを追った。

「な、何なの?」

状況が理解出来ないジラーチは戸惑いの表情をしている。

「とにかく、僕達もあとを追いかけよう!」

ジラーチはミュウと一緒にバクフーン達を追って食堂に向かった。

「うお～止めるなお前達～！！」
「ダメだっての！？人様の冷蔵庫の中身を取ろうとか非常識だろ！？」
「そうですよバクフーンさん！」
「そんな事したらダメっすよアニキ！」

食堂では冷蔵庫の中にあるモモンの実を食べようとしているバクフーンをラティオス、ラティアス、グラエナが彼の身体にしがみ付いて必死に止めようとしていた。
そこに遅れてジラーチとミュウがやって来た。

「これってどういう状況？」
「見たところ、あのバクフーンが食欲を抑えられなくなってここの冷蔵庫の中身を食べようと暴走して、それをあの三人が必死に止めようとしているってところかな？」

ミュウが冷静にその状況をジラーチに説明した。

「何だ～？何の騒ぎ～？」
騒ぎを聞いてマスキッパが食堂にやって来た。

「あっ悪いマスキッパ！こいつがここの冷蔵庫の中にあるモモンの実を勝手に食べようとしてさ・・・・・」

ラティオスがマスキッパにこの状況を説明した。

「何だ～そういう事か～！だったら～食べて良いよ～？」

「「「えっ？」」」

マスキッパの意外な言葉にラティオス、ラティアス、グラエナは驚きの表情をした。

「マジ！？ヤッホ～♪」

それを聞いたバクフーンはまるで子供のように喜びながら冷蔵庫へ。そして中にあったモモンの実を手に取り噛り付く。

「美味い～♪モモンの実最高♪」

幸せそうな顔をしながらモモンの実をバクバク食べるバクフーン。

「良いのかマスキッパ？あいつかなりの大食いだから、冷蔵庫の中身全部食われるかもしれないぞ？」

「大丈夫～。あのモモンの実はね～僕の友達から貰った物なんだ～。でも～いっぱい貰い過ぎて処分に困ってたんだよね～。」

まったりした感じでマスキッパがラティオスに言う。

「ハァ～食った食った♪ごちそうさま～♪」

気がついたらバクフーンは冷蔵庫の中に山のように入れられていたモモンの実を全て平らげていた。バクフーンのお腹が若干丸くまるでカビゴンのようになっている。

「もう食ったんか！？」

あまりのバクフーンの食べる早さに驚いているラティオス。

「いや～凄いね彼～！
綺麗に全部食べてくれたんだ～！」

マスキッパはバクフーンがモモンの実を全部食べてくれた事を喜んでいる。

それから時間が少し経って、バクフーン達はようやく次のバトル施設のバトルタワーに向けてバトルパレスを出発しようとしていた。

「フシギバナさん、泊めてくれてありがとうございました。」

ラティアスがフシギバナにお辞儀をして泊めてくれた事へのお礼を言った。

「良いって事よ。お前達、残りの施設の攻略は難しいが・・・・・・頑張れよ！応援してるからさ！」

笑顔で言うフシギバナ。フシギバナに見送られ、バクフーン達はバトルタワー目指して出発しようとした。

ドォーン！！！

だがその時、何処からか大きな爆発音が聞こえてきた！

「な、何だ今の！？」

バクフーン達は爆発が起きた場所が何処なのか探すため辺りを見回す。

ドォーン！！！

また爆発音が聞こえた！

「どうなってんだよ！？」

「フシギバナリーダー！」

バトルパレスからスピアーが慌てて出てきた。

「どうしたスピアー？」

「今ヨルノズクオーナーから連絡があって、このバトルアイランドのあちこちで爆発が起きてるみたいなんです！」

「何だって！？」

ドォーン！！！

再び爆発音が！

しかも今度のは近くから聞こえてきた！

「アニキ！彼処から煙が出てるっすよ！」

グラエナが見ている先をバクフーンも一緒に見た。確かにその先には真っ黒な黒煙があがっている。

「おい・・・・・あの煙が出てる場所って、もしかしてあの屋敷がある所じゃないか？」

バクフーンが言うあの屋敷とは、以前バクフーン達と仲良くなったゴーストタイプの子供達が住み着いている屋敷の事だ。

「屋敷？何の話だバクフーン？」

首を傾げながらラティオスが質問した。
ラティオスやラティアス、それにミュウはその時一緒にいなかったので屋敷の事は何も知らないのだ。

「嫌な予感がする・・・・・俺ちょっと行ってくる！」

そう言ってバクフーンは屋敷目指して走り出した。

「あっおい待てよバクフーン！？」

ラティオス達も慌ててバクフーンのあとを追いかけようとした。

「み～つっけた♪」

その時、ラティオス達の前に立ちはだかるように一人のポケモンが現れた。そのポケモンとは、焔の悪魔の幹部、ドグロッグだ！

「お前はドグロッグ！？」

グラエナはドグロッグを見て驚きの表情をしている。

「まさかこんな所にいたとはなぁ？予定と大分違うが、まぁ良い。ジラーチ、お前には俺と一緒に来てもらうぜ～？」
「そうはいかないっす！ジラーチは俺が守るっす！」

グラエナがドグロッグの前に立ちはだかった！

バトルパレスから屋敷までそんなに離れていなかった為、全速力で走ったバクフーンは屋敷に到着した。
そしてバクフーンがその場で見た光景は、炎に包まれ炎上している屋敷だった。

「嘘だろ・・・・・おいゴースト！カゲボウズ！皆！」

バクフーンは子供達の名前を叫んだ。
すると、近くから誰かの唸り声が聞こえてきた。バクフーンはその声がした方へ走っていった。

「お前ら！？」

そこには傷つき倒れているゴースト達がいた！
バクフーンはすぐに駆け寄る。

「おいしっかりしろ！
一体何があったんだ？」

バクフーンはカゲボウズを抱きかかえて何があったのかを聞く。だけどカゲボウズはひどくやられていて、何かを喋ろうとしているの

だが上手く声が出ないようだ。

「・・・・・何者だ？」

突然バクフーンの背後から声が聞こえてきた。

バクフーンが振り向くとそこにはヒードランがいた！

「俺はバクフーンだ！

あんたこいつらをポケモンセンターに運ぶのを手伝ってくれ！

ひどい怪我なんだ！」

バクフーンはヒードランが焔の悪魔のボスだとは知らないのでヒードランにカゲボウズ達を運ぶのを手伝ってほしいと頼む。

「・・・・・何故カス共を助ける？

そんな力も何も持たない奴など放っておけば良い。」

「・・・・・何言ってんだよ？」

ヒードランの発言にバクフーンは耳を疑った。

「バクフーン・・・・・さん、そ、そいつが・・・・・俺達を攻撃したんだ・・・・・」

ゴーストが力を振り絞ってそう叫んだ。

「うるさいカスだ。・・・・・消えろ！

火炎放射！」

ヒードランがゴーストに火炎放射を放った！

だが、ゴーストの前にバクフーンが立ちはだかり、火炎放射を受け止めてゴーストを守った！

「何？」

自分の火炎放射を受け止められた事に少し驚いているヒードラン。

「許さねぇ・・・・・」

バクフーンはゴースト達を傷つけられた事への怒りで身体を震わせている。そして次の瞬間、バクフーンは激しい炎に身体を包まれた。ブラストモードだ！

「お前だけは許さねぇ！俺がお前をぶっ倒す！」

第七十三話　動き出した焔の悪魔！プランB発動！（後書き）

第七十三話完成です。

バクフーン：オッス作者！連続更新とか調子良さそうじゃん！

作者：今のところはね。だけど、そろそろ日にちが空きそうな予感（＾―＾；）

バクフーン：おいおい（汗）頑張れや～い！

第七十四話　ジラーチを守れ！グラエナＶＳドグロッグ！（前書き）

ジラーチを守る為、グラエナはドグロッグにバトルを挑む！

第七十四話　ジラーチを守れ！グラエナＶＳドグロッグ！

「お前がジラーチを守る？はっ！無理だな！
お前じゃあジラーチは守れねぇよ！
何故なら・・・・・ここで俺様に倒されるからな！毒突き！！」

ドグロッグは素早い身のこなしでグラエナに近づき、自分の拳の鋭く尖ったトゲを突き刺そうとした！
だが、スピードには自信があるグラエナはその攻撃を紙一重で避ける。

「守るって決めたから守るっす！シャドーボールっす！！」

グラエナはドグロッグの懐に飛び込み、至近距離でシャドーボールを放った！シャドーボールを受けたドグロッグは吹き飛ばされた！
バランスを崩されたドグロッグだが、あまりダメージは無かったらしく、すぐに体勢を立て直す。

「へっ！意外に出来るじゃねぇか！」

余裕の表情をしているドグロッグ。

「連続でシャドーボールっす！！」

グラエナは攻撃の手を緩めない。
シャドーボールの乱れ撃ちをドグロッグに放つ！

「もうその技は効かねぇよグラエナちゃん！
おらぁぁぁ！！」

ドグロッグは毒突きで無数に放たれたシャドーボールをどんどん打ち消していく！

「こいつはお前に返すぜ！」

最後に一発残ったシャドーボールを、ドグロッグはまるでサッカーボールのように蹴り飛ばしグラエナに放った！
思わぬ奇襲にグラエナは対処出来ず、シャドーボールを受けてしまった！グラエナは少し後ろに吹き飛ばされたが、何とか踏ん張って体勢を立て直す。

「負けてたまるか！」

グラエナはドグロッグに向かって全速力で走っていく！

「俺様に接近戦を挑むってか？良い度胸じゃねぇかぁ！」

ドグロッグは格闘タイプ。接近戦では無類の強さを発揮するのだ。
ドグロッグは拳のトゲをグラエナに突き刺す為に構えた！

「アイアンテールっす！！」

グラエナは高くジャンプし、自分の尻尾を鋼のように硬くしてドグロッグに叩きつけようとした！

「毒突き！！」

だが、グラエナのアイアンテールが決まるよりも先にドグロッグの毒突きが決まってしまった！

拳のトゲがグラエナの胸に突き刺さる！
毒突きが決まった事でドグロッグは勝利を確信したのか笑みを浮かべる。しかし、すぐにこの笑みは消える事になる。
何故なら、毒突きを受けたグラエナが突然目の前で消えたからだ！

「なっ！？」
「アイアンテール！！」

ドグロッグの背後からグラエナがアイアンテールで攻撃した！
アイアンテールはドグロッグの後頭部に直撃！
ドグロッグは顔面から地面に叩きつけられた！

「残念だったっすね！
さっき毒突きを決めたのは俺が影分身で作り出した幻影だったんすよ！」

グラエナはジャンプする瞬間に影分身を発動していたのだ。

「うっ・・・・・・テ、テメェ～・・・・・・」

怒りの表情を浮かべながらドグロッグが起き上がる。

「そこまでにしておけドグロッグ。」

突然空から誰かの声が聞こえた。
その場にいた皆が空を見るとそこには焔の悪魔の幹部の一人、クロバットがいた。

「なんだよクロバット！邪魔すんじゃねぇよ！」
「何を熱くなってる？

俺達の目的はジラーチの捕獲だ。バトルする為じゃない。何の為のプランBだと思ってる？」

「・・・・・ちっ、解ったよ。」

クロバットに言われ冷静さを取り戻したドグロッグは素直になる。

それを確認したクロバットは、グラエナ達の近くまで飛んできた。

「お前達、大人しくジラーチを渡せ。

素直に渡さなければ、この島に住む住人達が大変な事になるぞ？」

クロバットの言った言葉に、グラエナ達は驚きの表情をした。

「どういう事だ！？」

ラティオスがクロバットに質問する。

「今島のあちこちで爆発が起きているな？

あれは我々が仕掛けた爆弾が起爆したからだ。

だが、あんな物はまだまだ序の口。

この島の中心にある火山に特大の爆弾を仕掛けた。その爆弾が爆発すれば、火山は噴火を起こし島をマグマで包み込むだろう。そうなれば、島の住人はどうなるかな？」

「貴様ら！？」

ラティオスは焔の悪魔の非情さに怒りをあらわにする。

「俺は他の奴らと違ってそこまで非情じゃない。お前達には考える時間を与えてやる。

二十四時間後、ジラーチを渡す気になったら火山まで来い。

それまでに来なければ、我々は容赦なく爆弾を起爆させる。

ドグロッグ、行くぞ。」

そう言うとクロバットはドグロッグと共にその場から去って行った。

「僕があいつらの所に行かなきゃ島の人達が・・・・・・」
「ダメっすよ！ジラーチはあいつらの所に行っちゃダメっす！」
す！」「だけど、行かないと島の人達が死んじゃうんでしょ！？」
「待って二人共。僕に考えがある。」

ミュウが言った。
何か閃いたらしい。

「なんすか？その考えって？」
「それはね・・・・・・」
ミュウが皆に閃いた案を説明しようとした時、突然森の中から大き
な火柱が現れた！

「何だあれは！？」

火柱を見たラティオス達は驚きの表情をした。

「彼処は、アニキが向かった場所っすよ！」

グラエナが言うように、火柱があがった場所はバクフーンが向かっ
て行った屋敷がある場合だった。

「まさかバクフーンに何かあったのか！？
行くぞ皆！」

ラティオス達は急いでバクフーンの所に向かった。

第七十四話　ジラーチを守れ！グラエナＶＳドグロッグ！（後書き）

第七十四話完成です。

第七十五話　バクフーンＶＳヒードラン！

ジラーチを守る為にドグロッグとバトルを始めたグラエナ。
それと同時にバクフーンもヒードランとのバトルを始めていた。

「「火炎放射！」」

バクフーンとヒードランは同時に火炎放射を放った！二つの火炎放射はぶつかり合い大きな爆発が発生した！

「ラスターカノン！」

すかさずヒードランはラスターカノンを放った！殺傷能力を高めているヒードランのラスターカノンはまるでレーザーのようにバクフーンに向かっていく。

「電光石火！」

バクフーンは電光石火でラスターカノンを回避した。その後もヒードランは連続でラスターカノンを放つが、ブラストモードになっているバクフーンはとても素早く、攻撃を当てる事が出来ない。

「気合い玉！」

電光石火で素早く動きながらバクフーンは気合い玉を放つ！

「火炎放射！」

ヒードランは火炎放射を気合い玉にぶつけ相殺させた！

「ちょこまかとすばしっこい奴だな。
これで動きを停める！
岩石封じ！」

ヒードランが右前足で地面を強く踏みつける。
すると、バクフーンの周りの地面から巨大な岩石が現れた！
そして岩石はバクフーンを押し潰そうと迫って来た！

「穴を掘る！」

バクフーンは穴を掘るで地面に潜り岩石封じを回避した。

「穴を掘るで上手く逃げたつもりだろうが、甘いな！地震！！」

ヒードランは地震を発動した。地面に潜っているバクフーンには凄まじい衝撃が襲いかかる！

「くっ！？」

バクフーンは地面から地上へと引き戻された。
そこへすかさずヒードランが接近してバクフーンの左腕に噛みついた！

「この腕、へし折ってやる！噛み砕く！！」

噛む力を強めたヒードラン。バクフーンは苦痛の表情を浮かべる。
逃れようと必死にもがくがヒードランは離さない！更にヒードランは噛む力を強めると、ボキッと鈍い音がした。

バクフーンの左腕の骨が折れてしまったようだ。

「ぐあぁぁぁ!?」

バクフーンの悲鳴が森に響いた。
バクフーンの悲鳴を聞いて笑みを浮かべるヒードラン。ヒードランは噛みつくのを止めて少し後ろへ下がる。
バクフーンは左腕を押さえながら地に蹲る（うずくまる）。

「俺の・・・・・・腕が・・・・・・」
「へし折ると言っただろ?まぁお前は良くやったほうだ。良い暇つぶしになったぞ。」
「暇つぶし、だと?」
「ジラーチが俺の物になるのも時間の問題。それまで暇だから、俺はこうして暇つぶしをしているのさ。」
「・・・・・・許さねぇ。そんなくだらない理由でゴースト達を・・・・お前だけは、絶対許さねぇ!!」

バクフーンは激痛に耐えながら起き上がる!
そして全炎エネルギーを集め巨大な火の玉を作り出した!

「ブラストバーン!!」

最大パワーのブラストバーンを放ったバクフーン。ブラストバーンはヒードランに直撃し、凄まじい炎でヒードランは包まれた!

「ハァ、ハァ、どうだ!」
「ふん。お前はどうやら俺の特性を知らないようだな?」

ブラストバーンを受けてまだ炎に包まれたままのヒードランが余裕

の表情でバクフーンに言う。
そして次の瞬間、ヒードランはブラストバーンの炎を口の中へと吸い込み、身体の中に取り込んでしまった！

「なっ！？」
「俺の特性は貰い火。
貴様の炎、俺のエネルギーに変えさせてもらった。お前に真の炎技を見せてやる！くらえ！
マグマストーム！」

ヒードランは先程取り込んだバクフーンの炎の力を使い強力なマグマストームを放った！
マグマストームに飲み込まれたバクフーンは身体を凄まじい炎で焼かれた！

「ぐあぁぁぁ！？」

再びバクフーンの悲鳴が森に響く・・・・・

しばらくしてマグマストームは消えた。
バクフーンは仰向けに倒れたままピクリとも動かない。
そんなバクフーンを黙って見つめるヒードラン。微かに笑みを浮かべているようにも見える。
その後ヒードランはその場から去っていった。

第七十五話　バクフーンＶＳヒードラン！（後書き）

第七十五話完成です。
バクフーン：ちょい作者！俺どうなっちゃうのよ！？
作者：それは今は言えないよ。だってネタバレになりますもの。

バクフーン：ぬお～マジで俺どうなるんだ～！？

作者：まぁ落ち着きなさいってバクフーン。
今日は僕ワールドチャンピオンシップの予選に出るんですから。

バクフーン：あっそういえば今日か？
んで、メンバー決まったのか？

作者：当然。メンバーはメタグロスにガブリアスにトゲキッス、そして君。
バクフーン：うお！俺メンバーに入ってんのか！
作者：やっぱ好きなポケモンですもの。
もちろん入れたよ。
・・・・・本当はゴウカザルにしようとしたんだけど、育てる時間が無かったんだよね（＾―＾；）
でもこんな事バクフーンには言えない言えない（＾―＾；）
バクフーン：聞こえてるぞ作者！

第七十六話　バクフーンの中に眠る、もう一つの魂。（前書き）

ヒードランにやられてしまったバクフーンはどうなってしまったのか？

第七十六話　バクフーンの中に眠る、もう一つの魂。

ヒードランとのバトルに敗れ、その場で仰向けに倒れているバクフーン。そんなバクフーンのもとに、グラエナ達が慌てて駆け付けてきた。

「アニキ!?」
「バクフーン!?」

バクフーンのボロボロにされた姿を見てグラエナ達は驚きの表情をしている。

「アニキ!?ねぇアニキ!?起きて下さいっす!?」

グラエナがバクフーンを呼ぶが、バクフーンは目を閉じたままピクリとも動かない。

「ちょっと僕に見せて。」
ミュウがバクフーンの首に手を当てる。
脈をみているようだ。
しばらくミュウは手を当てたまま無言だった。
そして・・・・・・

「・・・・・残念だけど、彼はもう・・・・・・」
「そんな!?嘘っすよ!?アニキが、アニキが死ぬ訳ないじゃないっすか!?
ねぇアニキ、起きて下さいっす!」

グラエナは目から涙を溢れさせている。
ラティオスやラティアスも涙を流す。

「嫌だっすよ!?アニキ、俺、俺はもっとアニキと・・・・・・アニキと一緒にいたいんすよ!
お願いだから、目を開けて下さいよ!?」

グラエナがいくら呼んでも、バクフーンは何も返事をしない・・・・・・

「・・・・・・グラエナ、僕の力を使って。」

ジラーチがグラエナの隣まで来てそう言った。

「ジラーチ・・・・・・」
「大事な人がいなくなる気持ち・・・・・・僕は痛い程良く解るよ。
僕の力を使えば、バクフーンさんを生き返らせる事が出来る。
だから・・・・・・僕の力を使って、グラエナ。」
「・・・・・・ありがとうっす。」

グラエナはジラーチにバクフーンを生き返らせてと願おうとした。

だけどその時!
突然バクフーンの身体から凄まじい炎が吹き出した!

「な、なんすか!?」
「これは!?あの時と同じ!?」

ラティオスが言うあの時。それは、かつてディアルガとパルキアの戦いを止める為、バクフーンが捨て身の作戦でパルキアにしがみ付き、ディアルガに時の咆哮を撃たせてパルキアもろとも自分も受けた時の事だ。
あの時もバクフーンは死んだと誰もが思ったのだが、今みたいに凄まじい炎に包まれて見事に復活したのだ。
今まさにその時と同じ状況が起きているのだ。
皆が見てる前で、バクフーンの身体の傷がどんどん治っていく!

「この炎・・・・・・まさか、いや、そんな筈は・・・・・・」

ミュウはこの炎に見覚えがあるみたいだ。

しばらくしたら完全にバクフーンの傷は治ってしまった!
そして、今まで眠っていたバクフーンが目を覚ました!

「・・・・・・アニキ?」
恐る恐るグラエナがバクフーンを呼ぶ。
バクフーンはグラエナを見つめる。
その後、他にいる皆の顔を一人一人確認するように見つめる。

「バクフーン、大丈夫、なのか?」

ラティオスは心配そうな表情をしながら聞く。

「・・・・・・あぁ。」

少し間を開けてからバクフーンは答えた。

「アニキー！！」

グラエナが涙をボロボロと流しながらバクフーンに抱きついた。

「良かった～！アニキ～！そうっすよね！
アニキはそんな簡単に死ぬ筈が無いっすよね！」
「・・・・・心配かけたみたいだな。」
「ミュウ、バクフーンは生きてるぞ？
ちゃんと脈をみたのか？」
首を傾げながらラティオスがミュウに聞く。

「えっ？あ、えっと、ぼ、僕の勘違いだったみたいだね！
ア、アハハ・・・・・・」
何故か笑って誤魔化しているミュウ。

「・・・・・俺以外にゴースト達も怪我をしているんだ。
見てやってくれないか？」
バクフーンはグラエナ達に頼む。
皆は解ったと言って頷き、ゴースト達の所へ向かった。
だけど、ミュウだけはバクフーンから離れなかった。

「・・・・・久しぶりだな。我が友よ。」

いきなりバクフーンがそんな事を言った。

「まさかとは思ったけど、やっぱり君だったんだね?あの炎、君以外に使えるポケモンはいないもの。でも、どうして君がバクフーンの中にいるの?」

どうやら今目の前にいるのはバクフーンはバクフーンだが、中身が違うらしい。

「詳しく説明したいが、あまり長くこの者の身体を借りる訳にはいかない。奴に気づかれる。」

真剣な表情で言うバクフーン、いやバクフーンの身体を借りた誰か。

「奴?一体何があったんだい?」
「友よ。お前に頼みがある。我の側近達を捜してくれないか?」
「側近って・・・・・あの三人の事かい?」
「そうだ。詳しい事はその三人が教えてくれる。・・・・・・そろそろ時間だ。我はまたこの者の中で眠りにつく。」

バクフーンの目がとろ~んとしてきた。

「あっ待ってよ!?」
「頼むぞ・・・・・我が友よ・・・・・・」

完全に目を閉じたバクフーン。
それからわずかに数秒後、またバクフーンが目を覚ました。

「ん?あれ?俺今まで何してたんだ?」

いつものバクフーンに戻っている。

「確か、あのムカつく野郎とバトルして負けちゃって・・・・・・ってあれ!?腕の骨折られた筈なのに治ってる!?おまけに身体中の怪我も!?なんで!?どうして!?」

一人混乱しているバクフーン。

「バクフーン、君は僕の親友に治してもらったんだよ。」

ミュウがバクフーンの肩をポンと叩いて答えた。

「ミュウの親友に?」

「うん。」

「んじゃお礼言わなきゃ!何処にいんだ?」

辺りをキョロキョロとしながらミュウの親友を捜すバクフーン。

「彼は・・・・・・もう行っちゃったよ。」

「マジか~ちゃんとお礼言いたかったのに~!」

残念がるバクフーン。

ミュウはただ微笑んで見ているだけだった。

(君がバクフーンの中にいる・・・・・・つまり、余程の事が君の身に起きたんだね。

あの三人に会えば解るとは言ってたけど・・・・・・でも今は、目の前で起きている事を解決しないと。途中で投げ出す事なんか出来ないからね。ちょっと時間は掛かるけど、待っててよ。

僕の親友・・・・・・)

心の中でそう呟くミュウ。一体バクフーンの中に誰がいるのか?

第七十六話　バクフーンの中に眠る、もう一つの魂。（後書き）

第七十六話完成です。

バクフーン：作者、俺の中に何がいんだよ？

作者：それはバトルフロンティア編が終わった後で解るよ。
ずっと前から考えてたストーリーがあるんだ。
今回はその一部をちょっと載せたんだ。

バクフーン：じゃあフロンティア編が終わったら俺の中にいる何かが次のストーリーのキーポイントになるって事か？

作者：そういう事。

第七十七話　ヒードランの過去。

ここはバトルアイランドの中心にある火山。
焔の悪魔のアジト。

「お帰りなさいませボス！」

アジトの見張り役のポケモンが帰ってきたヒードランに頭を下げながら言った。

「ご苦労。」

一言そう言ったヒードランはそのまま中に入っていった。

「ボス。」

中に入ってすぐ、幹部の一人のクロバットがやって来た。

「何か進展はあったか？」
「はい。二十四時間以内には結果が出ると思います。」
「解った。俺は今から一休みする。
何かあったら知らせに来い。」
「はい。」

クロバットはその場から去っていった。
ヒードランは自分が休む為の専用の部屋に向かった。

ヒードランの専用の部屋には特に何も無く凄く寂しい感じの部屋だった。唯一あるとすれば壁に貼られている写真が一枚あるくらいだ。

「・・・・・待ってろよ。もうすぐで、俺とお前の夢が叶う。」

その写真を見ながらそう呟くヒードラン。
その写真にはヒードランともう一人、炎タイプのポケモンのマグカルゴが写っていた。
今まで残虐非道な行いをしてきたヒードランだとはとても思えない程彼の表情は優しい表情をしている。
元々ヒードランは現在のように残虐ではなかったのだ。
何故彼が現在のように残虐非道な行いをするようになったのか、それは遡る（さかのぼる）事四十年前の出来事にある。

「お〜いマグカルゴ〜！何処だよ〜？」

四十年前、とある寂れた町。若きヒードランがマグカルゴの名前を叫びながら歩いていた。

「ここよヒーちゃん♪」

廃墟になっている家の中からマグカルゴが現れた。どうやら女の子らしい。ヒードランの事をヒーちゃんと呼んでいるみたいだ。

「そのヒーちゃんって呼ぶの止めてくれよ恥ずかしい（汗）」

ヒードラン自身はあまりその呼び名は好きでは無いみたいだ。

「良いじゃないヒーちゃん！だってその方が呼びやすいんですもの！」

笑顔でそう言うマグカルゴ。そんなマグカルゴを見てヒードランは一つため息を吐く。

「まぁ良いか。それよりマグカルゴ、こんな所で何してんだよ？そろそろ戻らないと、またあの連中がやって来るぞ？」

ヒードランが言うあの連中とは、この寂れた町を拠点としているブラックウッドと呼ばれる組織の事だ。

このブラックウッドは表向きは困った人を助ける事を中心とした仕事をする善良な組織と言う事になっているが、実際は拠点とした町から金銀財宝を根こそぎ奪い盗り、更には暇つぶしと言う名目で見つけたポケモンを手当たり次第に襲いかかると言う最悪な組織なのだ。この町もブラックウッドが来るまでは明るく活気に溢れた良い町だったのだが、奴らが来てからは寂れる一方なのだ。

「大丈夫よ。あいつらが戻ってくるのは決まって一週間に一度の金曜日の夜。今日は木曜日よ？
戻って来ないわよ。
それより、こっちに来てみなさいよヒーちゃん！すっごく良い眺め

なのよ～♪」

廃墟になっている家の窓があったと思われる場所からマグカルゴは景色を眺めていた。
ヒードランはマグカルゴの隣まで来て一緒に景色を見る。

「へぇ～！確かにこれは良い眺めだなぁ！」
「でしょでしょ♪」

その景色は夜空に輝く月が海を明るく照らし、その近くを蛍ポケモンのバルビートとイルミーゼが一緒に飛んでいた。
たくさんのバルビートがお尻から綺麗な光を出しながらイルミーゼを追いかけている。
バルビートはイルミーゼが出す甘い香りが大好きなのだ。
イルミーゼは甘い香りを出しながらバルビートを誘惑。
そうしていろんな方向へ飛んでいる為、バルビートの光がラインのようになり幻想的な光景を作り出しているのだ。

「綺麗♪」
「本当だなぁ。」

しばらくこの光景を眺める二人。

「・・・・・ねぇ、ヒーちゃん。」
「うん？」

マグカルゴが急にヒードランに寄り添いながら言った。

「いつか、いつかきっと二人で・・・・・ブラックウッドみたいな酷い連中がいない、平和な世界を作ろう？

そうなれば、もう誰も苦しまなくて済むから・・・・・・」
「マグカルゴ・・・・・そうだな。
いつかきっと作ろうな。俺達ならやれるさ。」
「ヒーちゃん・・・・・・」

二人はそんな約束をする。だが、その約束は叶わぬ事になる。

二人が約束をしてから四時間後・・・・・・

「逃げろ!?殺されるぞ!?」
町に住むポケモン達が悲鳴をあげながら逃げ惑っている。
ブラックウッドが戻ってきたのだ。
奴らはこの町に見切りをつけて他の町に移るらしい。移るさいに、
この町のポケモンが自分達の事を世の中に知らせないようにする為
に、皆殺しにしようとしたのだ。
そして、ブラックウッドの魔の手がマグカルゴに・・・・・・

「マグカルゴ!!おい、しっかりしろ!!」

ヒードランがマグカルゴの名を呼ぶが、すでにマグカルゴは事切れ
ていた・・・・・・

「マグカルゴ・・・・・・何で、何でマグカルゴが死ななきゃならないんだよ!?」
「はっ?んなもん決まってんだろ!
力が無い奴は生きてく価値なんて無いのさ!
この世は力が全て!
力がある奴は生き残り、力が無い奴は死ぬ!
貴様も死ね!!」

ブラックウッドの団員がヒードランに襲いかかった!

「マグマストーム!!」

だが、ヒードランはマグマストームを放ち、団員を返り討ちにした!

「・・・・・許さない・・・・・・ブラックウッドの奴ら、全員殺してやる!!」

マグカルゴを殺された事への怒りとブラックウッドにたいする憎悪が頂点に達したヒードランは、その後ブラックウッドの団員を一人残らずその命を奪いさった。

「・・・・この世は力、力が全て・・・・・・なら、俺がこの世で最強の力を手に入れ、この世の支配者になれば・・・・・・・マグカルゴが言った平和な世界を作る事が出来る・・・・・・やってやる、最強の力を手に入れてやる・・・・・・どんな手段を使ってもな・・・・・・」

もうこの時にはヒードランは正気を失っていた。それ以降、彼は力

を求めて各地を転々とし、一人でも自分に歯向かう者がいたら殺す。
そんな事を繰り返して現在に至る。

第七十七話　ヒードランの過去。（後書き）

第七十七話完成です。

バクフーン：また連続投稿か？最近頑張ってんじゃんか作者！

作者：まぁねぇ♪

バクフーン：それよりさ、ヒードランって結構可哀想な奴なのな？

作者：ヒードランのこの設定はかなり考えたよ（汗）このヒードランを作るのにいろんな映画やアニメを見てヒントがないか探したんだから！

バクフーン：ふ～ん。

作者：あっ興味無いって感じだな（汗）

第七十八話　ミュウの奇襲作戦！

焔の悪魔が仕掛けた爆弾が起爆するまでタイムリミットが十二時間と迫っていた。
完全復活したバクフーンと怪我をしてしまったゴースト達を連れて、バトルパレスに戻っていたグラエナ達。
今はバトルパレスの中にあるバトルフィールドに集まって皆で作戦会議を始めていた。

「・・・・・それじゃあ、住人達の避難はもう始まっているんだね？」

ミュウがフシギバナに聞く。

「あぁ。ヨルノズクオーナーはこういう事態に備えて住人達を全員避難させる事が出来る船を用意していたんだ。
まだ時間は掛かるが、なんとかタイムリミットまでには間に合う筈だ。」

バトルフロンティアのオーナーであるヨルノズクが住人達を避難させているらしい。

「それを聞いて安心したよ。」
「それでミュウ、君が考えた作戦ってのは一体どんな内容なんだ？」

腕組みしながらラティオスがミュウに聞いた。

「今から説明するよ。
まずはこれを見てほしい・・・・・・」

そう言うとミュウは急に目を閉じて意識を集中し始めた。
すると、突然ミュウの身体が光輝き出した！
光は更に強さを増す。
次の瞬間ミュウの身体に変化が起こる。
なんと段々別のポケモンの姿になっていくのだ！ミュウが別のポケモンに変化するまであまり時間は掛らなかった。
光が消えて何に変化したのかようやくバクフーン達は確認出来た。

「うおっ！？俺じゃん！？」

バクフーンが驚きの声をあげた。
そこにいたのはバクフーンに変化したミュウだったからだ。

「どう？そっくりでしょ？」
「驚いたな・・・・・ミュウ、君は変身が使えるんだな？」
「うん。この変身を使って僕はジラーチになる。それで奴らに近づいて油断させたところを奇襲するんだ。」
「相手の不意を突くという訳か・・・・・確かにそれは良いかもしれないが、本物のジラーチはどうするんだ？」

首を傾げながらラティオスが言った。

「本物のジラーチには安全な場所に避難してもらおうと思ってる。住人達が避難しようとしている船に行ってくれないかな？
もちろん、パートナーのグラエナも一緒にね。」「えっ！？俺も皆と戦うっすよ！」

ミュウの言葉を聞いてグラエナは驚いている。

「君はジラーチのパートナーなんだよ？
君が側にいて守ってあげなきゃ。」

グラエナの右肩に手を置いてミュウが言う。

「でも・・・・・・」
「ジラーチを守るって事は、僕達と一緒に戦うって事と同じなんだよ。
元々、これはジラーチを守る為の戦いなんだから。ね？」
「・・・・・・解ったっす。全力でジラーチを守るっすよ！」

グラエナは力強く答えた。それを見てミュウは微笑みながらありがとうと言った。

「なぁミュウ、パートナーのグラエナが俺達と別行動をするのはマズイんじゃないか？
奴らもジラーチのパートナーがグラエナだという事は知っている筈だ。
そのグラエナがいなかったら奴らは怪しむんじゃないか？」
「あぁ、それなら大丈夫だよ。身代わり！」

ラティオスの疑問に答える為にミュウが身代わりを使って自分の分身を作り出した。

「このもう一人の僕がグラエナに変身する。
それで問題解決さ。」

笑顔でミュウが言った。

「さぁ、時間はあまり残されていない。

すぐに奴らがいる火山に行こう！」
「よっしゃ！絶対奴らをぶっとばしてやる！」

気合いを入れるバクフーン。
バクフーン達は焔の悪魔がいる火山へ。
グラエナとジラーチはフシギバナの案内で一緒に船がある所へ向かった。怪我をしたゴースト達もグラエナ達と一緒に。

それから二時間後。
バクフーン達は火山の前までやってきた。

「そろそろだね。」

本体のミュウと分身のミュウが変身を発動した。本体はジラーチに、分身はグラエナになった。

「準備ＯＫ！」
「いつでも良いっすよ！」
「姿だけじゃなく性格や声までそっくりだな（汗）」
ミュウの完璧な変身に驚くラティオスであった。

「そうだ。ラティオス、ラティアス。

二人にちょっとお願いがあるんだけど。」
「なんだ?」

ミュウがラティオスとラティアスの耳元で何か話ている。

「なんでひそひそ話な訳?」

バクフーンは首を傾げる。

「・・・・・解った。確かにそういうのは俺とラティアスは得意だ。」
「任せて下さい。」

二人はそう言うと自分達の姿を透明にして何処かへ飛んでいった。

「なぁミュウ、二人は何処に行ったんだ?」
「秘密。」
「なんで!?」

驚きの表情をしているバクフーン。

「君って隠し事が出来ないタイプでしょ?
だから、教えちゃうと奴らにもバレそうだから君には秘密。」
「秘密っす。」

本体と分身の二人揃って秘密だと言ってバクフーンに教えようとしない。

「グラエナの姿でそういう事言わないでくれよ(汗)」

「それより、早く奴らの所に行こう。
時間が勿体無い。」
「行くっすよバクフーン。」
「うわぁ（汗）グラエナに呼び捨てにされるとスゲー違和感ある（汗）」

ミュウとバクフーンは焔の悪魔がいる火山の頂上へと向かった。

「来たか・・・・・・」

頂上付近には焔の悪魔の幹部、クロバットが待っていた。

「弟よ。すぐにボスに報告してこい。」
「あいよ兄貴。」

そう言ってゴルバットがヒードランに伝える為にアジトの中へ入って行った。

「ちゃんと来たぞ。
お前らのボスは何処だよ？」

バクフーンは険しい表情をしながらクロバットに聞く。

「そう怖い顔をするな。すぐに来る。
しかし、意外だな？

少しは抵抗すると思ったんだが・・・・・何か企んでいるんじゃないか？」

「大勢の命が掛ってるんすよ？本当は嫌っすけど、仕方ないっす。」

グラエナに変身したミュウが言った。

「連れてきたぜ兄貴。
ボス、こちらです。」

ゴルバットが戻ってきた。すぐ後ろにはヒードランがいる。

「お前がボスなのか！？」

バクフーンはヒードランを見て驚いた表情をしている。

「貴様・・・・・何故生きているんだ！？」

バクフーンを仕留めたと思っていたヒードランも同じく驚いた表情をしている。

「俺はそう簡単に死なないんだよ！」
（実際は助けてもらえなかったらマジで死んでたんだけどな（汗））

心の中でそうバクフーンは呟いた。

「どうやって助かったのかは知らないが・・・・・まぁ良い。
ジラーチに俺の願いを叶えさせたあとに今度こそあの世に送ってやる！
さあジラーチ！
こっちに来い！」

ヒードランが強い口調でそう言うと、ジラーチに変身したミュウが無言でヒードラン達に近づいていった。

（ここまでは作戦通り。あとはギリギリまで接近して・・・・・・）

「ラスターカノン！！」

突然ヒードランがラスターカノンをグラエナに変身した分身のミュウに放った！

レーザーのように放たれたラスターカノンは分身のミュウの身体を貫いた！ラスターカノンを受けた分身のミュウは光の粒子となって消えてしまった。

「えっ！？」

「ふん、やはりな。

お前達が素直にジラーチを渡す筈がないからな。何か仕掛けてくるとは思ってはいたが、くだらんな。正体を明かせ、貴様はジラーチではないんだろ！」

強い口調でジラーチに変身したミュウに言うヒードラン。

「はぁ・・・・・・勘が鋭い奴なんだね君は。」

ため息を吐きながらミュウは変身を解いた。

「こざかしい真似を、消えろ！ラスターカノン！！」

ヒードランがミュウにラスターカノンを放った！

「サイコキネシス！」

ミュウはサイコキネシスを使ってラスターカノンの軌道を変えた。
ラスターカノンは空の彼方に飛んでいった。

「こうなったら予定変更！テレポート！」

ミュウはテレポートでヒードランの背後に瞬間移動した。

「吹っ飛べ！波動弾！」

ミュウの波動弾がヒードランに直撃！
強力な波動弾を受けたヒードランは麓の所まで吹き飛ばされた。

「ス、スゲー波動弾だ・・・・・・」

ミュウの強力な波動弾を見てバクフーンは驚いている。

「ありゃ、ちょっと力を出し過ぎたかな？
まぁ良いか。
バクフーン！君はヒードランを頼むよ！」
「わ、解った！」

バクフーンはヒードランのあとを追っていった。

「あのボスを簡単に吹き飛ばすとは・・・・・・貴様は一体何者だ！？」

クロバットはヒードランを吹き飛ばされた事にかなり驚いている。

「僕？僕はミュウ。

世界を自由に旅するただの冒険家さ。
さぁ、降参するなら今のうちだよ？」

その頃グラエナとジラーチは住人達が避難する為に用意された船がある港に来ていた。

「アニキ達・・・・・・大丈夫っすかね・・・・・・・」

グラエナはとても心配そうな表情でそう呟く。

「心配だったら行って良いんだよ？
僕なら大丈夫だから。」

ジラーチがグラエナの肩にそっと手を置いてからそう言った。

「ジラーチ・・・・・・いや、俺はジラーチを守るって約束したんです。
だから・・・・・・」
「グラエナ・・・・・・あっそうだ！」

ジラーチは何かを思いついたみたいだ。
何処かへ行こうとしている。

「何処行くんすかジラーチ？」
「皆がいる所だよ！」
「ダ、ダメっすよジラーチ！？捕まっちゃうっすよ！？」
「グラエナが僕を守るんでしょ？
なら問題無いよ。
それに、僕が皆の所に行けばグラエナも皆と一緒に戦えるでしょ？」
笑顔でそう言うジラーチ。

「で、でも！」
「大丈夫大丈夫♪
ほら、早く行こう！」
ジラーチが火山へ向かって行こうとした。

「あ～もう！待つっすよジラーチ！」
グラエナもジラーチを追いかけようとした。

「見つけたぞグラエナ！！爆裂パンチ！！」
その時、誰かがグラエナに向かってきた！

「影分身！」
グラエナは爆裂パンチを影分身を使って紙一重で避けた。

「またお前っすかドグロッグ！しつこいっすよ！」
グラエナに攻撃してきたのは焔の悪魔の幹部、ドグロッグだった。

「うるせぇ！前はクロバットの野郎が邪魔して決着をつけられなかったが、今度は邪魔する奴はいねぇ！決着をつけてやる！」

どうやらドグロッグは焔の悪魔とは別行動できたようだ。
グラエナとの決着をつける為に。

「グラエナ！」

ジラーチがグラエナの所に戻ってきた。

「ジラーチは下がってるっす！あいつは俺が倒すっすから！」
「う、うん！」

ジラーチはグラエナの邪魔にならないように離れた。

「いくぞこらぁ！！」
「俺はお前なんかに負けないっす！！」

その頃火山の麓では・・・・・・

「くっ・・・・・・あのミュウ、想像以上の力を持っていたな・・・

・・・俺とした事が、油断したか。」

波動弾を受けたヒードランは無事だった。

「ヒードラァァァン！」

ヒードランの所に向かってバクフーンが全力で走ってきた。

「貴様か！」

「今度は負けねぇぞ！！電光石火から気合い玉！！」

バクフーンは電光石火で一気にヒードランに接近して気合い玉を放った！

「火炎放射！！」

ヒードランは火炎放射を放ちバクフーンの気合い玉にぶつけた！

その瞬間大きな爆発が発生！バクフーンは吹き飛ばされた！

「なんのこれしき！！」

バクフーンはすぐに体勢を立て直した。

一方のヒードランは自慢の防御力で爆発に耐えていた。

「まだいくぜ！！」

「死にぞこないが！！

今度こそ殺してやる！！」

バクフーンとヒードラン、グラエナとドグロッグ、ミュウとクロバット。それぞれのバトルが始まった。

バクフーン達は焔の悪魔を撃破出来るのか？

第七十八話　ミュウの奇襲作戦！（後書き）

第七十八話完成です。

バクフーン：お～す作者！

作者：また来たのかいバクフーン？

バクフーン：まぁ良いじゃんかよ♪
それよりさ、今月からやるんだろ？
不思議のダンジョン、探検隊の小説。

作者：うん。これから更新するつもり。

バクフーン：また俺の新しい後輩が出来んのかぁ！ちょっと楽しみだな♪

作者：後輩って言っても君達が共演してる訳じゃないんだよ？

バクフーン：細かい事は気にすんな♪

第七十九話　ミュウＶＳクロバット&ゴルバット！（前書き）

ミュウはクロバットに降参するよう勧めるが・・・・・・

第七十九話　ミュウVSクロバット&ゴルバット！

「降参だと？」
「そう。怪我したくないなら降参すると良いよ。僕、結構強いんだよ。」
笑顔でクロバットにそう言うミュウ。
「ふざけるな！！
俺は焔の悪魔の幹部だぞ！降参などするか！」
怒り心頭のクロバット。そんなクロバットを見てミュウは一つため息を吐く。
「君の為を思って言ったんだけどなぁ・・・・・しょうがない。
やるからには本気でやらせてもらうからね。」
ミュウは戦闘体勢に入った。
「兄貴、俺も協力するぜ！こんな野郎すぐに倒しちまおうぜ！」
クロバットの隣に弟であるゴルバットがやってきた。
「あぁ！俺達兄弟のコンビネーションに敵う奴なんかいない！
行くぞゴルバット！」
クロバットとゴルバットがミュウに向かってきた！
「「エアスラッシュ！」」

二人でエアスラッシュを放った！
二つの空気の刃がミュウに襲いかかる！

「サイコキネシス！」

だがミュウはサイコキネシスを使って二つのエアスラッシュをコントロールし、クロバットとゴルバットに跳ね返した！

「「影分身！」」

二人は影分身を使ってエアスラッシュを回避。
無数の分身を作り出してミュウを取り囲んだ！

「これなら避ける事は出来まい！
行くぞゴルバット！」
「おうよ！」
「「翼で打つ！！」」

数えきれない程のたくさんのクロバットとゴルバットがミュウに向かって突っ込んでいった！

「甘いね。」

ミュウは自分をエスパーの力で作ったエネルギーの膜で包み込んだ。
見た目は光の玉の中にミュウがすっぽり入った感じだ。
クロバットとゴルバットはその光の玉に翼で打つで攻撃するが、全てその光の玉に弾かれてしまった！

「はっ！」

ミュウが力を入れると、光の玉は一気に膨れあがりクロバットとゴルバットを吹き飛ばした！

「くっ！？まだだ！！」

すぐに体勢を立て直す二人。

「「シャドーボール！」」

二人はシャドーボールを放った！

二つのシャドーボールは混ざり、通常の倍の大きさとなってミュウに襲いかかる！

「テレポート！」

ミュウはテレポートを使ってシャドーボールを回避。クロバットとゴルバットの後ろに瞬間移動した！

そしてミュウは二つのエネルギー弾を作り出す。

「本当のシャドーボールはこうやるんだよ！」

シャドーボールを二つ同時に作り出したミュウはそれをクロバットとゴルバットに直撃させた！

再び吹き飛ばされた二人、地面に叩きつけられた！しかし、二人はすぐに起き上がり戦う構えに入る。

「兄貴、こうなったら奥の手を使おうぜ！」

「あぁ、やるぞ！」

「「黒い霧！」」

クロバットとゴルバットは黒い霧を発動させた。辺りが黒い霧で覆われていった。

「何にも見えなくなっちゃったよ・・・・・・・
何をするつもりだ?」

黒い霧で視界がゼロ。
先が全く見えない状況になってしまった。

「エアスラッシュから翼で打つ!」

クロバットが自分の翼にエアスラッシュの空気の刃を纏わせてミュウを攻撃した!

「痛っ!?」

視界を奪われていたのでミュウは避ける事が出来ずに右腕に攻撃を受けてしまった!
攻撃を受けた所を左手で押さえるミュウ。

「この状況で何で僕の場所を特定出来たんだ?」

ミュウは考える。
だが考えている間に再びクロバットがエアスラッシュと翼で打つのコンビネーション攻撃を繰り出した!
その攻撃はミュウの背中に直撃する!

「ぐっ！？」

苦痛の表情になるミュウ。

「ま、またか・・・・・何で僕の居場所が・・・・・クロバットとゴルバット・・・・・進化する前はズバット・・・・・そうか！
超音波で僕の居場所が解るのか！」

「当たりだよ！！」

今度はゴルバットがエアスラッシュと翼で打つのコンビネーション攻撃を繰り出した！
その攻撃はミュウの左腕に直撃した！

「くっ！？」

「確かに俺達兄弟は超音波を使って相手の位置を知る事が出来る。だが、それが解ったところでこの状況を打破する事は出来まい！
これで最後だ！」

クロバットとゴルバットが同時にミュウに向かって突っ込んでいった！

「変身！カイリュー！
最後になるのは君達だ！竜巻！！」

ミュウは変身を使ってカイリューになり、身体を高速回転させて竜巻を作り出した！
巨大な竜巻はクロバットとゴルバットを飲み込み遥か空の彼方へ二人を吹き飛ばした！

「ふ～、意外にてこずったかな・・・・・・」

ミュウは変身を解除して元に戻った。

「あ～あ、攻撃を受けた所から血がちょっと出ちゃってるよ・・・・・」

エアスラッシュと翼で打つのコンビネーション攻撃を受けた箇所から出血している。

「自己再生！」

ミュウは自己再生を発動した。すると、あっという間に傷が治ってしまった。

「これで良しっと！」

「お～い！」

突然焔の悪魔のアジトの中からミュウを呼ぶ声が。

「あっ！見つかったのかいラティオス、ラティアス？」

アジトから出て来たのはラティオスとラティアスだった。

二人はミュウに頼まれてアジトに潜入、焔の悪魔が仕掛けたという爆弾を探していたのだ。

「見つけたは見つけたんだが・・・・・・」

「ちょっと問題がありまして・・・・・・」

二人共浮かない表情をしている。

「とりあえず、爆弾の場所に僕を案内してよ。なんとか出来るかもしれないから。」
「解りました。こっちです！」
ラティオスとラティアス、そしてミュウはアジトの中へ入っていった。

第七十九話　ミュウVSクロバット&ゴルバット！（後書き）

第七十九話完成です。

バクフーン：また遊びに来たぞ～♪

作者：何かここに来るのが当たり前になってきてないかいバクフーン？

バクフーン：気にすんなよ♪それよりさ、ミュウって色々技使ってるよな？

作者：うん。僕が考えたミュウの設定はほとんどの技を使える事にしてあるんだ。

バクフーン：マジか！

作者：マジです。

第八十話　ジラーチの実力！グラエナ&ジラーチVSドグロック&

ジラーチを守る為、再びグラエナはドグロックと戦いを始める！

第八十話　ジラーチの実力！グラエナ&ジラーチVSドグロック&

「毒突き！」

ドグロッグは自分の拳にある鋭いトゲをグラエナに突き刺そうとした。

「影分身！」

グラエナは影分身を使い自分の幻影を三人作り出し、ドグロッグに的を絞らせないようにした。

「さぁ、どれが本物っすかね？」
「くだらねぇんだよ！
泥爆弾！！」

ドグロッグは口から泥の塊を吐き出しグラエナの目の前に放った。
泥の塊が地面に触れた瞬間それは爆発！
爆風でグラエナは吹き飛ばされた！
更に影分身で作り出した幻影も消えてしまった。

「このっ！シャドーボールっす！！」

吹き飛ばされたグラエナであるが、すぐに体勢を立て直し、シャドーボールを放って反撃した。

「居合斬り！」

だが、グラエナが放ったシャドーボールをドグロッグは拳にある鋭

いトゲをまるで刀のように振り落とし、シャドーボールを一刀両断にしてしまった！
シャドーボールを一刀両断した後、ドグロッグは素早い身のこなしでグラエナに向かって行った。

「影分身から毒突き！」

ドグロッグは影分身で二人の幻影を作り出して拳にある鋭いトゲをグラエナに突き刺そうとした！

「アイアンテールから岩砕きっす！」

グラエナは自分の尻尾を鋼のように硬くして、地面に叩きつける。
地面は砕け、細かい岩の塊が雨のようにドグロッグに降り注ぐ！

「ちっ！？」

細かい岩の塊を受けたドグロッグは怯んでその場で動きを止めた！

「隙ありっす！突進！」

グラエナは全速力で走り、ドグロッグに全体重を掛けた突進を決めた！
ドグロッグは吹き飛ばされ、仰向けになって倒れた！

「これで決めるっすよ！アイアンテールっす！」

グラエナはドグロッグ目掛けて高くジャンプ！
全体重を掛けたアイアンテールを繰り出そうとした。だが！

「そこに俺参上！
ソニックブーム！！」

突然何処からか衝撃波が放たれ、グラエナに直撃した！
ソニックブームを受けたグラエナは吹き飛ばされた！

「何やられてるのさドグロッグの旦那？」

ドグロッグに近寄った一人のポケモン。
足長ポケモンのアリアドスだ。

「スパイダーか・・・・・余計な事しやがって。」

ゆっくりと起き上がるドグロッグ。

「旦那が勝手にアジトから離れちゃったから、ボスがめっちゃ怒ってたぜ？まぁ、旦那の事だからどうせ気に入らない奴を潰す為に離れたんだろうけど、勝手な行動はすんなよな？」

アリアドスのスパイダーは呆れた感じで言う。

「うるせぇよスパイダー。それにテメェは俺様の部下だろ、言葉には気をつけやがれくそ野郎。」

スパイダーを睨みつけるドグロッグ。

「おっとこれは失礼！
丁寧な言葉遣いってのはどうも苦手でね、旦那と同じく。
それより、さっさとこいつを片付けてボスの所に行きやしょうぜ？
何かあっちマズイ状況になってるみたいだからさ！」

戦闘体勢に入るスパイダー。

「ちっ、しゃあねぇ。
本当は俺一人であいつを消すつもりだったが、そういう事なら手段を選んでられねぇな。
速攻で終らせるぞスパイダー！」
「旦那に言われなくても解ってさ！」

ドグロッグとスパイダーが倒れているグラエナに向かって襲いかかった！

「悪く思うなよグラエナ！毒突き！！」
「俺の毒突きも受け取りな！！」

二人は毒突きでグラエナを突き刺そうとした。

「影分身っす！」

グラエナはすぐに起き上がり、影分身を発動した。三人の幻影を作り出す。ドグロッグとスパイダーの毒突きは他の幻影二人に当たり本体のグラエナは回避する事が出来た。グラエナは一旦距離を取ろうと二人から離れようとする。

「逃がさねぇぜ！」

スパイダーが口から粘着力が高い糸を吐き出し、グラエナの両前足と両後ろ足に巻き付けた！
グラエナは走る事が出来なくなりその場で倒れてしまう！

「ショータイム！おらおらぁ！！」

スパイダーはグラエナを上下に振り回して何回もグラエナを地面に叩きつける！
何とか抜け出したいグラエナだが、糸は中々ほどけない！

「そろそろフィナーレといきますかい！」

スパイダーはグラエナを空高く放り投げた！

「旦那！フィニッシュ頼むぜ！」
「毒突き！！」

ドグロッグもグラエナを追いかけて空高くジャンプ！拳の鋭いトゲを突き刺そうとした！
足を糸で縛られているうえに空中なのでグラエナは回避行動が出来ない！

（もうダメっす！？）

グラエナは諦めてしまい目を閉じてしまう。

「これで終わりだぁ！」
「させない！」

ドグロッグの毒突きがグラエナに直撃しそうになったその時、いきなりジラーチがグラエナの前にやってきてグラエナの代わりにジラーチが毒突きを受けた！

「ジラーチ！？」

「大丈夫、僕は鋼タイプを持っているんだ。
毒タイプの技なんか効かない！
ラスターカノン！」

ジラーチはエネルギー弾を作り出し、ドグロッグに直撃させた！
ドグロッグは地上へ吹き飛ばされた！

「ってこっちに来んなよ！？げはっ！？」

スパイダーは吹き飛ばされてきたドグロッグに押し潰された。

「す、凄いっす・・・・・ってあぁぁぁ！？」

グラエナも地上に落下していった。

「水の波動！」

ジラーチは水の波動を使い、大きな水のクッションを作り出した。
グラエナはその水のクッションの上に落ちる事で地面への激突は避けられた。

「た、助かったす～（汗）」
「大丈夫グラエナ？」

心配そうな表情でグラエナに聞くジラーチ。

「大丈夫っすよ。
ジラーチを守るつもりが・・・・・俺がジラーチに守られちゃったっすね（汗）」

グラエナの無事が解るとジラーチは安堵の表情を浮かべる。

「くそが・・・・・邪魔しやがってこの野郎!!」

怒り心頭のドグロッグ。怒鳴りながらジラーチを睨みつけている。

「ちょっと待っててねグラエナ・・・・・電撃波。」

ドグロッグを無視してジラーチは弱い電撃波を使い、グラエナの足に巻き付いている糸を焼き切った。
おかげでグラエナは自由に動けるようになった。

「グラエナ、僕も一緒に戦うよ。」
「えっ!?」

ジラーチの発言にグラエナは驚きの声を上げた。

「いつまでも守られてばっかは嫌なんだ・・・・・」
「だ、だけど!」
「話してる暇は無いよ!構えてグラエナ!」

ジラーチが見ている視線の先には凄い形相で走ってくるドグロッグが!
後ろにはスパイダーも。

「やるよグラエナ!」
「仕方ないっすね!
ジラーチ、無茶はしちゃダメっすよ!」
「解ってる!」

グラエナとジラーチは戦闘体勢に。

「くたばりやがれ！！
爆裂パンチ！！」
「毒針！」

ドグロッグはジラーチに爆裂パンチ、スパイダーはグラエナに毒針で攻撃した。

「グラエナ！ちょっと我慢しててよ！重力！」
「わわわ！？」

ジラーチが技を発動すると突然周囲の重力が重くなった！
グラエナは立つ事が出来ず地べたにへばりつく。それはドグロッグとスパイダーも同じである。

「くっ！？き、貴様！？」
「君達は僕のパートナーを傷つけた・・・・・・許さないんだから！」

ジラーチは両手を空にかざす。すると、ジラーチの頭上に巨大なエネルギーの塊が現れ始めた！

「この技はあまり好きじゃないんだけど・・・・・・グラエナを傷つける奴は僕が許さない！
破滅の願い！！」

空にかざしていた両手をドグロッグ達に向けて振り落とすと、巨大なエネルギーの塊が動けないドグロッグとスパイダーに向かって落ち始めた！

破滅の願いは二人に直撃し、大きな爆発が発生！二人は沖の海の方へ吹き飛ばされた！

「す、凄いっす・・・・・あっ身体が軽いっす！」

いつの間にかジラーチの重力が解けていたらしい。立ち上がるグラエナ。

「ごめんねグラエナ。
重力なんか味方にも影響する技使っちゃって。」「気にしてないっすよ。でも、ジラーチってあんなに強かったんすね！
びっくりしたっすよ！」
「ルークに鍛えてもらったからね。
それより、さっきあのスパイダーが言ってたよね？アジトがマズイ事になってるって。」
「きっとアニキ達が頑張ってるんすよ！」
「僕達も手伝いに行こうよグラエナ！」

ジラーチは火山目指して進み始めた。

「あっ！待ってよジラーチ！」

グラエナも慌ててジラーチの後を追いかけた。

その頃バクフーンは・・・・・・

「ラスターカノン!!」
「電光石火!!」

バクフーンはヒードランと壮絶な死闘を繰り広げていた。
ヒードランのレーザーラスターカノンをバクフーンは電光石火で全て紙一重で回避した。

「気合い玉!!」

バクフーンはヒードランに効果がある格闘タイプの気合い玉で反撃!

「火炎放射!!」

ヒードランは火炎放射で気合い玉を弾き飛ばし、そのまま火炎放射でバクフーンを攻撃した!

「くっ!?電光石火!!」

バクフーンは再び電光石火で火炎放射を回避した。

「くそ!あいつに炎技が通用すれば!」

自分の炎技が全て効かないヒードランに大苦戦のバクフーン。
炎技以外の技で戦っているが、どの技もヒードランには通用しない!

「マグマストーム!!」

ヒードランがマグマストームを放った！
巨大な炎の竜巻がバクフーンに襲いかかる！

「穴を掘る！」

バクフーンは穴を掘るで地中に潜りマグマストームを回避した。

「学習能力の無い奴だ、俺がこの技を使える事を忘れたか？地震！！」

ヒードランは地震を発動しようとした。

「忘れてないぜ！」

バクフーンは地震が発動するよりも先に地面から飛び出した。
そしてヒードランのアゴに一発頭突きを決めた！

「痛っ！？お前身体硬すぎだぞ！？」

攻撃した側のバクフーンが頭を両手で押さえながら痛がっている。

「噛み砕く！！」

ヒードランにはあまりダメージが無かったようだ。すかさず反撃でバクフーンに噛みつこうとした。

「身代わり！」

バクフーンは自分の前に身代わりで自分の分身を作り出した。

ヒードランの噛み砕くは分身に直撃。
その間に本体のバクフーンは電光石火でヒードランから離れた。

「こざかしい事を。ふん！」

分身の首に噛みついていたヒードランは噛む力を強めた。
次の瞬間分身は攻撃に耐えられなくなり光の粒子となって消滅した。

「いい加減に殺られろ！火炎放射！」

ヒードランは最大パワーで火炎放射を放った！

「殺られてたまるかって！電光・・・・・・」

バクフーンは電光石火で火炎放射を回避しようとした。
だが、どういう訳か足が動かなかった。
バクフーンは自分の足を確認してみる。
すると、バクフーンの足は地面から飛び出している岩に挟まれていた！

「げっ！？これはまさか岩石封じか！？
いつの間にそんな技使って・・・・・・」

ヒードランの火炎放射がバクフーンの目の前まで迫ってきた！
足を岩に挟まれているので身動きが出来ないバクフーン。

「やばっ！？」

「ハードプラント！！」

突然バクフーンの目の前にイバラが無数に現れた！そのイバラは何本も絡み合い、極太の大木のようになって火炎放射を防ぎバクフーンを守った！

「えっ！？」

バクフーンは突然現れたイバラに驚いている。

「何とか間に合ったみたいだな。」

バクフーンの背後から声が聞こえてきた。
バクフーンは後ろに振り向く。

「あっ！？」

バクフーンは思わず驚きの声をあげてしまう。
何故なら、そこにいたのは重傷を負っていた筈のドダイトスだったからだ。

「ドダイトス！」
「よう。無事かバクフーン？」
「お前、怪我は大丈夫なのか？」
「大丈夫じゃなきゃここにいないさ。
それより話は後だ。
今はあいつを倒すのが先決だからな。」

そう言い終わるとドダイトスはヒードランを鋭い眼光で睨みつけた。

「貴様が何故ここに!?
確かに溶岩の中へ落ちた筈だ!?」

ヒードランはドダイトスが生きている事が信じられないようでかなり驚いている。

「ミュウに助けられた。それだけさ、岩砕き!」

ドダイトスはバクフーンの動きを封じている岩を砕いた。

「サンキュー!」
「・・・・・バクフーン、俺に力を貸してくれ。悔しいが、俺一人ではあいつに勝てない。」
「頼まれなくても一緒に戦うぜ?
俺も一人じゃ、野郎に勝てないからさ。」

バクフーンとドダイトスはタッグを組んでヒードランに挑むらしい。

「どいつもこいつも次から次へと・・・・・・
皆まとめて今度こそあの世に送ってやる!!」
「そうはいくかよ!
行くぜドダイトス!」
「あぁ!」

バクフーンとドダイトスはヒードランに向かって行った!

第八十話　ジラーチの実力！グラエナ&ジラーチVSドグロック&

第八十話完成です。

グラエナ：どうもっす～♪

作者：グラエナじゃないか！ここに来たのは初めてだったかな？

グラエナ：はいっす♪

作者：それで、今日は何しに来たんだい？

グラエナ：特に用事はないっすよ？

作者：えっ（汗）

グラエナ：それじゃ失礼したっす～♪

作者：・・・・・・何しに来たんだ一体（汗）

第八十一話　リベンジ！バクフーン&ドダイトスVSヒードラン！

バクフーンとドダイトスは力を合わせてヒードランに挑む！

第八十一話　リベンジ！バクフーン&ドダイトスVSヒードラン！

「消えろ！ラスターカノン！！」

ヒードランはドダイトスに向けてレーザーラスターカノンを放った！

「守る！」

ドダイトスは守るを発動した。ドダイトスはバリアに囲まれ、ラスターカノンはバリアに弾かれた。

「ドダイトス！背中借りるぜ！」

バクフーンはドダイトスの背中に乗った後、高くジャンプした。

「気合い玉！！」

バクフーンは気合い玉を空中から放った！

「火炎放射！！」

ヒードランは火炎放射を気合い玉にぶつけ打ち消した！

「まずはお前からだ！
ラスター・・・・・」
「リーフストーム！」

ヒードランがバクフーンにラスターカノンを放とうとした時、ドダイトスがリーフストームをぶつけ、ヒードランを妨害した！

「サンキュードダイトス！もう一発気合い玉だ！！」

落下しながらバクフーンはヒードランに気合い玉を放った！
今度はヒードランに直撃！大きな爆発が発生した！

「ドダイトス！」
「解ってる！ハードプラント！！」

攻撃の手を緩めないバクフーンとドダイトス。
バクフーンの気合い玉が直撃した後すぐにドダイトスはハードプラントを発動した。
無数のイバラが爆煙の中へ突撃していく！

「ん？」

だが、ドダイトスは違和感を感じた。
技が直撃した手応えがないのだ。
しばらくすると爆煙が晴れていった。
そこにはヒードランの代わりに大きな穴が・・・・・・

「くっ穴を掘るか！？」
「もらった！噛み砕く！！」

ヒードランは穴を掘るでハードプラントを回避していたのだ。
ドダイトスの背後をとったヒードランはドダイトスに噛みつこうとした！

「させるかよ！身代わり！！」

バクフーンは身代わりで自分の分身を作り出してヒードランの噛み砕く攻撃を分身に受けさせた！

「今だドダイトス！」
「任せろ！」

ドダイトスはハードプラントを持続する事が出来る。無数のイバラを分身ごとヒードランに巻き付けた！そしてヒードランを持ち上げ、最大パワーで地面に叩きつけた！

「これで決まれ！気合い玉ぁぁぁ！！」

バクフーンは最大パワーの気合い玉を放った！
気合い玉はヒードランに直撃して大きな爆発が発生した。

「ハァ、ハァ、や、やったかな？」

爆発で発生した爆煙がゆっくりと晴れていく・・・・・・

「なっ！？」
「まさか俺に守るを使わせるとはな・・・・・誉めてやるよ。」

爆煙が晴れた時、バリアに守られたヒードランが姿を現した。
気合い玉が当たる寸前でヒードランは守るを発動していたのだ。

「ハァ、ハァ、ハァ・・・・・ふっ。」

突然ドダイトスが笑みを浮かべた。

「何が可笑しい？」

「この勝負、俺達の勝ちだヒードラン！」
突然のドダイトスの勝利宣言。
「バクフーン、火炎放射だ。」
「えっ！？」
ドダイトスがバクフーンに火炎放射を放つよう言ってきた。
これにはバクフーンも驚いた。
「あいつには俺の炎技は効かないんだぞ？」
「大丈夫だ。俺を信じろバクフーン。」
ドダイトスは真剣な表情で言っている。
「・・・・・解った。お前を信じるよ。
良し、気合い入れ直すぜ！！」
バクフーンは凄まじい炎に包まれた！
ブラストモードだ！
「火炎放射！」
バクフーンはヒードランにブラストモードで強化された火炎放射を放った！
「この俺に火炎放射など通用しな・・・・・・」
ヒードランがバクフーンの火炎放射を吸収しようとしたが、どういう訳か吸収する事が出来ず火炎放射をまともに受け、吹き飛ばされ

た！

「バ、バカな！？」

火炎放射を吸収出来なかった事に激しく動揺しているヒードラン。

「俺の火炎放射が効いた？どうなってるんだドダイトス？」

「簡単な事だ。さっきのハードプラントを奴の身体に巻き付けた時に、ある種を奴の身体に植え付けたんだ。」

「種？」

「あぁ。奴の背中を見てみろ。」

ドダイトスに言われ、ヒードランの背中を見てみるバクフーン。

「あ、あった。」

ヒードランの背中には凄く小さな植物の種が植え付けられていた。

「あれなんだよ？」

「あれは悩みの種さ。」

悩みの種。

それを受けた相手は特性が不眠という特性に変化してしまう技である。

ヒードランが本来持っている特性、貰い火は全ての炎技を吸収して自分のエネルギーに変換してしまうのだが、悩みの種で貰い火が不眠に変化した事で炎を吸収出来なくなったのだ。

ちなみに不眠という特性は名前の通り不眠になってしまうのである。

「こざかしい事を！

こんな種燃やして・・・・・・」

ヒードランは炎の渦を発動して自分を炎の渦で囲み、背中の悩みの種を燃やそうとした。

「無駄さ。俺の植え付けたその種を燃やす事は出来ない。もし燃えるんだったら、さっきのバクフーンの火炎放射でとっくに燃えている。」

ドダイトスの言った通り、悩みの種は燃える事なくヒードランの背中に残っている。

「くっ！？」

「やるじゃないかドダイトス、おかげで俺はいつも通りにバトル出来る！電光石火からオーバーヒート！！」

バクフーンは電光石火で一気にヒードランに接近！ゼロ距離でヒードランにオーバーヒートを直撃させた！
ヒードランは吹き飛ばされ、近くにあった大きな岩に身体をぶつけた！
その衝撃で岩が砕かれ、ヒードランはその岩に埋もれてしまった。

「どうだ！」
「調子に乗るなよ貴様らぁぁぁ！！」

岩に埋もれていたヒードランは熱風を使い、岩を吹き飛ばした！
そして鬼のような形相でバクフーンに向かって行った！

「下がれバクフーン！

ハードプラント！！」

バクフーンは電光石火でヒードランから離れた。そしてヒードランの周囲からハードプラントで生み出されたイバラが無数に出現し、ヒードランの身体に巻き付いた！

「これで動きを封じた！バクフーン！」
「もう準備は出来てるさドダイトス！」

バクフーンは炎エネルギーを集めた大きな炎の塊を作り出していた！

「これで終わりだヒードラン！ブラストバーン！！」

バクフーンは最大パワーのブラストバーンを放った！巨大な炎の塊はまるで太陽！
ブラストバーンはヒードランの身体を包み込み灼熱の業火でヒードランの身体を燃やす！
ヒードランは身体を燃やされながら吹き飛ばされ、火山から落下していく。

「バカな・・・・・この俺が・・・・・・あんな奴らに・・・・・・」

「ハァ、ハァ、ハァ・・・・・お、終わったぁ～（汗）疲れたぜ（汗）」

バクフーンはその場で仰向けで大の字になって倒れた。

「バクフーン、ありがとうな・・・・・・」

近くまで来たドダイトスが急にバクフーンにお礼の言葉を言った。

「何だよ急に？」

「お前のおかげで奴を・・・・・・ヒードランを倒す事が出来た。家族の仇が討てたよ。」

「家族のって・・・・・・まさか、お前の家族はあいつに？」

「あぁ・・・・・・フレイムシティから引っ越したあの日にな・・・・・俺はあの日からずっと家族の仇を討つ為だけに生きてきた・・・・・そして今日、遂に仇が討てた・・・・・・」

ドダイトスの目から涙が流れ出てきた。

「ドダイトス・・・・・・」

「あっ！アニキ～！」

突然何処からかバクフーンをアニキと呼ぶ声が聞こえた。

「この声は！」

バクフーンが声が聞こえた方へ振り向くと、そこにはグラエナとジラーチがいた。

「グラエナ！？それにジラーチまで！？
お前ら、船に乗ったんじゃなかったのか？」
「本当はそうする筈だったんすけど、ジラーチがアニキ達の所に行くって聞かなくて（汗）」
「良く言うよ！途中からグラエナが急ぐっす！って言って僕の前を走ってたくせに！」
「言ってないっすよ！」
「言った！」
「言ってないっす！」

やって来るなりいきなりケンカを始めたグラエナとジラーチであった。

「お前らな（汗）まぁ来ちまったもんはしょうがない。とにかく、早く頂上に向かおう！
爆弾をなんとかしないと！」

火山の頂上を見上げながらバクフーンが言った。

「了解っす！行くっすよジラーチ！」
「うん！」
「ドダイトスも急げ！」
「あぁ！」

バクフーン達は火山の頂上を目指して走り出した。

第八十一話　リベンジ！バクフーン&ドダイトスVSヒードラン！

第八十一話完成です。

バクフーン：ウイ～ス！

作者：また来たねバクフーン？

リザードン：今回は俺も一緒だぞ作者。

作者：リザードン！凄い久しぶりじゃないか！

バクフーン：今日はリザードンがあんたに聞きたい事があるって事で連れて来たんだ。

作者：聞きたい事？

リザードン：作者、俺の出番ってあるのか？

作者：あ～その事ね。
大丈夫、君の出番は必ずあるから。
バクフーンの相棒の出番を作らない訳が無いじゃない！

リザードン：良かったぁ～（汗）俺このまま消えるんじゃないかと心配だったんだ（汗）
それで、俺はいつこの小説に復帰するんだ？

作者：現在やっているバトルフロンティア編が終わった後に出す予定だよ。

リザードン：意外に俺の復帰まで時間が掛りそうだなおい（汗）

作者：まぁ気長に待っててよ。

第八十二話　合流！爆弾を止めろ！（前書き）

バクフーン達はそれぞれの敵を倒す事が出来た。あとは爆弾を解除するだけだ！

第八十二話　合流！爆弾を止めろ！

「これは・・・・・確かに厄介だね（汗）」

焔の悪魔のアジトの中。ミュウとラティオスとラティアスは焔の悪魔が仕掛けた爆弾がある場所にいた。
そこには大量の爆弾がセットされていた。しかも一つ一つが大きい。
爆弾には時間が表示されていて時間が過ぎる度にカウントしている。
時限爆弾になっているようだ。

「あいつら最初から爆発させるつもりだったみたいだね・・・・・・」

ミュウは時限爆弾を解除出来るか確認し始めた。

「何とかなりそうか？」

ラティオスが聞いた。

「一つだけなら何とかなりそうだけど、こうも数が多いとねぇ（汗）
ちょっと待ってね。
何か方法がないか考えるから・・・・・・」

ミュウは目を閉じて考え始めた。

（どうするかなぁ？
一つだけなら僕の力で爆発のエネルギーを抑え込む事が出来るけど、
こんなにたくさんだと僕の力でも無理だし・・・・・・ラティオス

とラティアスに協力してもらう？
いや、リスクが高すぎるな（汗）
もっと確実で安全な方法は・・・・・・）

打開策を考えるミュウだが中々良い案が浮かばないようだ。

「俺がやろうか？」

突然誰かがラティオス達に声を掛けた。
ラティオス達が声がする方へ振り向くとそこにはポリゴンZがいた。

「あなたはあの時の！」「誰？」

首を傾げるラティオス。ラティオスはポリゴンZに会うのは今日が初めてだから無理もないだろう。

「あのね兄さん。彼は・・・・・・」

ラティアスがポリゴンZの事をラティオスに説明してくれた。

「君、まだ怪我は完全に治ってないでしょ？
もう一人のドダイトスといい君といい・・・・・・無茶し過ぎだよ？」
「じっとなんか出来るかよ。それよりも、困ってんだろ？
俺が何とかしてやるよ。」

ポリゴンZが爆弾を停めてくれるらしい。

「君が？」
「この時限爆弾は全てアジトのメインコンピューターで管理してる

んだ。俺がメインコンピューターの中に侵入して爆弾を停めてやるよ。」
「そんな事が？」
首を傾げるミュウ。
「俺は作られたポケモンだぜ？それ位朝飯前だ。ただ、そのメインコンピューターがある部屋が問題なんだよな・・・・・・」
「問題？何かあるの？」
「とにかくその部屋に来てくれ。行けば解る。」
ポリゴンZはミュウ達を連れてそのメインコンピューターがある部屋に向かった。
「ここがその部屋だ。」
ポリゴンZの案内でミュウ達が来た場所にはとても大きな扉があった。
扉はパスワードで開く仕掛けになっている。
「お前達、守るは使えるか？」

いきなりポリゴンZがラティオス達にそんな事を聞いてきた。

「使えますけど・・・・・・なんでそんな事聞くんですか?」

首を傾げながらラティアスはポリゴンZに聞いた。

「いつでも守るを使えるようにしておけ。
扉を開けた瞬間攻撃が飛んでくるからな。」

そう言いながらポリゴンZが扉を開ける為にパスワードを入力し始めた。

「攻撃が飛んでくるって・・・・・・中に何がいるんだよ（汗）」

「お～い！」

その時ミュウ達に誰かが声を掛けてきた。
声がする方へミュウ達が振り向くとそこにはバクフーン達がいた。

「バクフーン！お前焔の悪魔のボスを倒したのか?」

「当たり前だろラティオス!まぁ、俺一人で倒した訳じゃないんだけどさ。こいつの協力で何とか倒す事が出来たんだ。」

バクフーンはドダイトスを指差した。

「誰?」

ラティオス本日二度目。

「そういえばラティオスは会うの初めてだったな?こいつは・・・・・」

「話は後にしろ！開くぞ！」

バクフーンがラティオスにドダイトスを紹介しようとした時、ポリゴンZが叫んだ。
そして扉が開く。
扉が開いた瞬間中から破壊光線がバクフーン達に向けて放たれた！

「「守る！！」」

ラティオスとラティアスは二人で守るを使って自分とバクフーン達をバリアで包み込み破壊光線から身を守った！

「な、なんだよいきなり！？」
「ビックリしたっす！？」

バクフーン達はいきなりの攻撃に驚いている。

「ポリゴンZ。今のはどういう事？」

ミュウがポリゴンZに聞いた。

「あれのせいさ。」

ポリゴンZは部屋の中を見ながらそう言った。
ポリゴンZが見ている視線の先にはヤドキング・・・・・の姿をしたロボットが四体並んでいた。その後ろには大きなコンピューターが。

「何あの悪趣味なロボットは（汗）」

ミュウが四体のヤドキングロボを見て気味悪がっている。

「元焔の悪魔の幹部、ヤドキングが設計したガードロボだ。
あいつらを倒さないとコンピューターに侵入出来ないんだ。」
「なるほどね・・・・・・」
「なぁ何がどうなってんだよ?」

首を傾げながらバクフーンが聞いた。

「あまり時間が無いから簡単に説明する。
とにかく俺がコンピューターに侵入出来るようにあいつらを倒してくれ。」

ポリゴンZがバクフーンに簡単に説明した。

「あいつらを倒せば良いのか?」
「あぁ。」
「解った!」

そう言うとバクフーンは凄まじい炎に包まれた!ブラストモードだ!

「先に行くぜ。電光石火!」

バクフーンは電光石火でメカヤドキングに向かって突っ込んで行った!

「侵入者確認・・・・・・排除します・・・・・・」

メカヤドキングの目が不気味に赤く光った!
その刹那、メカヤドキングが二体バクフーンよりも素早く動きバク

フーンに向かって来た！

「なっ！？」

「「気合いパンチ！！」」

二体のメカヤドキングは強烈なパンチをバクフーンに打ち込んだ！
バクフーンは吹き飛ばされ壁に身体を激しくぶつけた！

「言い忘れてたが、あいつらは機械だから本物と違ってかなり素早く動くぞ。」

ポリゴンZが言った。

「それを先に言えって・・・・・結構効いたぜ（汗）」

気合いパンチを受けた所を右手で押さえながらバクフーンは立ち上がった。

「面倒だな。一気に片付けてやる！
ハードプラント！！」

ドダイトスがハードプラントを発動した！
地面から無数のイバラが出現して四体のメカヤドキングに向かっていった！だが、四体のメカヤドキングは口から火炎放射を放ちハードプラントを燃やしてしまった！

「また言い忘れてたが、あいつら火を出せるぞ。」

「そういう事は先に言え！？」

ドダイトスにもツッコミを入れられたポリゴンZ。

「落ち着け。いくら素早く動き火炎放射を使えても所詮は機械。水には弱い筈だ。
ラティアス！」
「解ってるわ兄さん！」
「「水の波動！！」」

ラティオスとラティアスは水の波動を放った！
水の波動は四体のメカヤドキングに直撃した！
だが、メカヤドキング達には全くダメージがなかった！

「更に言ってなかったが、奴らは防水加工でできている。」
「お前な！？」
「そういう大事な事はもっと早く言って下さいよポリゴンZさん！」

ラティオスとラティアスにまでツッコミを入れられてしまったポリゴンZであった。

「排除します・・・・・ターゲットロックオン・・・・・破壊光線！」

四体のメカヤドキングは破壊光線を同時に放った！四発の破壊光線はラティオス達に向かっていく！

「サイコキネシス！」

ミュウがサイコキネシスを使って四発の破壊光線をコントロール！
メカヤドキングに跳ね返した！

「防御フィールド展開します・・・・・」

だが、メカヤドキング達はバリアを展開して破壊光線を防いでしまった！

「君達、あんまりのんびりはしてられないよ。
爆弾が爆発するまで残りのタイムリミットは三時間なんだからね。」

ミュウが言う通り、爆弾が爆発するまで残り時間が三時間に迫っていたのだ。

「マジかよ！？確かにのんびりしてられないな！」

そう言いながらバクフーンは炎のエネルギーを集め始めた。

「お前もお前だなミュウ。そういう一番大事な事は最初に言えっての！」

ドダイトスもエネルギーを集め始めた。

「兄さん！」
「解ってるさラティアス！」
「ジラーチ、俺らもやるっすよ！」
「うん！」

ラティオス達もエネルギーを集め始めた。
皆次の攻撃でメカヤドキング達を倒すつもりのようだ。

「ポリゴンZ、いつでも行けるように準備しといてよ。」
「解ってる。」

ポリゴンZはもうすでにスタンバイが出来ていた。

「行くぜ皆！ブラストバーン！！」
「ハードプラント！！」
「「竜星群！！」」
「破壊光線っす！！」
「破滅の願い！！」
「波動弾！！」

バクフーン達は自分達が使える強力な技を最大パワーで放った！

「防御フィールド展開・・・・・・」

メカヤドキング達は防御フィールドを展開するが、バクフーン達が最大パワーで放った攻撃を防ぐ事は出来なかった。
バクフーン達の攻撃は防御フィールドを突き破りメカヤドキング達に直撃！大きな爆発が発生しメカヤドキング達を粉々に吹き飛ばした！

「ポリゴンZ！」
「行くぞ！」

ポリゴンZはメカヤドキング達が吹き飛んだと同時にコンピューターに向かって飛んでいった！

「プラグイン！」

ポリゴンZはコンピューターの中へ侵入した。

「プラグインって・・・・・・ロッ○○ンかよ（汗）」

場所は変わりここはコンピューターの中の電脳世界。
ポリゴンZは時限爆弾の爆破プログラムを解除する為にセキュリティーをどんどん突破していた。

「あと三つのセキュリティーを突破すれば・・・・・・」

ポリゴンZはあと少しで時限爆弾を解除出来る所まで来ていた。
爆弾が起爆するまで残り時間が二時間となっていた。

「ウイルス発見、ウイルス発見。デリートします。」

電脳世界のセキュリティーがポリゴンZをウイルスとみなし、消去しようとポリゴンZに襲いかかってきた!

「放電!!」

ポリゴンZは放電を放ち襲いかかってきたセキュリティーを撃破した!

「あと二つ!」

ポリゴンZは高速移動を使いスピードを上げた。

一方現実世界のバクフーン達は・・・・・・

「火炎放射！」

全部で四体だと思っていたメカヤドキングだが、まだ他にもいたらしく次々とバクフーン達に襲いかかってきていた。
バクフーン達はなんとかメカヤドキングを倒してコンピューターに近づけさせないようにしていた。

「どんだけいるんだよこいつらは！？
倒しても倒しても出て来やがりやがって！」
「波動連弾！！」

ミュウが波動弾を五発連続で放ってメカヤドキングを五体破壊した！

「バクフーン、今はとにかくポリゴンZが爆弾を解除するまでこのコンピューターを守るんだ！」「解ってるよ！」

バクフーン達はコンピューターを守りきれるのか？タイムリミット、

残り二時間。

第八十二話　合流！爆弾を止めろ！（後書き）

第八十二完成です。

バクフーン：おっす～♪作者、一昨日携帯を機種変したんだって？

作者：そうだよ。まだ操作に慣れないからちょっと小説作りにも影響が出ちゃってたりしてるんだよね（＾―＾；）

バクフーン：おいおい（汗）

第八十三話　カウントダウン！

電脳世界で爆弾の起爆プログラムを解除する為に突き進んでいるポリゴンＺ。
あと一つセキュリティーを突破すれば起爆プログラムを解除できる所まで来ていた。
現在最後のセキュリティーと戦闘中。

「さすがに最後のセキュリティーは手強いな……だが、負ける訳にはいかないんだ！
ロックオンから破壊光線！」

ポリゴンＺはロックオンを使い確実に攻撃が当たるようにしてから破壊光線を放った！
破壊光線はセキュリティーに直撃し、破壊する事が出来た！

「良し！後は爆破プログラムを破壊して起爆しないようにすれば……」
「悪いがそうはさせんぞ。ポリゴンＺＮｏ．２。」

突然何処からか声が聞こえてきた。
ポリゴンＺが振り向くとそこにはヤドキングがいた！

「なっ！？ヤドキング！？」
「ふっ。しばらく会わない間に生みの親である私を呼び捨てにするようになるとはな？
ポリゴンＺＮｏ．２よ。」
「何故貴様がこの電脳世界にいるんだ！？」
「ここにいる私はただのアバターだ。

本物の私はすでにこのバトルアイランドから離れている。」

ヤドキングは自分が持っている船に乗り、すでにバトルアイランドから脱出していた。

そして、船の中でハイテクマシーンを使いこのコンピューターにハッキング。アバターを使って今ポリゴンZの前にやって来たのだ。

「お前に爆破プログラムを解除してもらっては色々と困る事があるのだよ。だから、お前にはここで消えてもらう。」

アバターのヤドキングが戦闘体勢に入った。

「ここまで来てやられてたまるか！
トライアタック！」

ポリゴンZはトライアタックを放ち先制攻撃した！

「無駄だよ。」

ヤドキングにトライアタックが直撃しそうになった瞬間、一瞬でヤドキングが姿を消した！

「なっ！？」
「何処をみているんだ？ポリゴンZNo．2よ。」

ポリゴンZの背後からヤドキングが喋りかけた。

「私のアバターは全ての能力が極限にまで高められている。
お前は私に勝てない。」
「うるさい！シャドーボール！」

ポリゴンZが振り向いてすぐにシャドーボールを放った！
だが、ヤドキングは再び高速で動きシャドーボールを回避した。

「だから無駄だと言っているだろ。」
「ロックオンから電磁砲！」

ポリゴンZはヤドキングにロックオンしてから電磁砲を放った！

「サイコキネシス。」

しかし、ヤドキングはサイコキネシスを使って電磁砲をコントロール。
電磁砲をポリゴンZに跳ね返した！

「くっ守る！」

ポリゴンZは守るでなんとか電磁砲を防御した。

「これならどうだ！」

ポリゴンZはシャドーボールを五発放った！
更に五発のシャドーボールをサイコキネシスでコントロール。
五発のシャドーボールはヤドキングの周りをぐるぐると回り始めた。

「ほう。こういう芸当が出来るようになったか。」

右手を顎に当てながらヤドキングが言った。
余裕の表情をしている。

「くらえ！」

五発の内の一発がヤドキングに向かっていった！

「ふっ。」

ヤドキングは向かってきたシャドーボール左手ではじき飛ばしてしまった！

「なら四発まとめて！」

ポリゴンZは残りのシャドーボール四発をヤドキングに放った！

「目覚めるパワー！」

ヤドキングは自分の周囲にエネルギー弾を作り出してシャドーボールにぶつけて相殺させた！

「中々面白い芸当だったが、私には通用しない。」

そう言い終えた刹那、再び高速で移動したヤドキングはポリゴンZの目の前に現れた！

「くっ！？」

「面白い芸当を見せてくれた礼だ。
私も面白い事をしてやろう！」

ヤドキングの右手が突如光輝きだした！
光輝いた右手でヤドキングはポリゴンZの胸に向かって一発殴った！
すると、右手から発せられていた光がポリゴンZの身体を包み始め

た！

「な、なんだこれは！？」

「今に解る。」

不気味に笑うヤドキング。次の瞬間、ポリゴンZを包み始めた光はより強く光輝き出しポリゴンZを完全に包み込んだ！

しばらくすると光は消えていった。

「い、一体何を？」

「お前の身体を良く見てみるが良い。」

ポリゴンZは自分の身体を確認してみた。

「なっ！？ば、馬鹿な！？」

ポリゴンZは驚きの声をあげた。
何故なら自分の身体がポリゴンZの物ではなく、ポリゴン2の身体になっていたからだ。

「私が作った退化プログラムだ。
それでお前をポリゴンZからポリゴン2に退化させた。」

「退化プログラム……だと！？」

「この世界でしか使えぬ物だがな。
どうだ？面白いだろ？」

笑いながらヤドキングはポリゴン2に言った。

「ふざけるな！！
シャドーボール！！」

ポリゴン2はヤドキングにシャドーボールを放った！
しかし、ヤドキングは右手で軽くシャドーボールを弾いてしまった！

「退化したお前の攻撃などコイキングの体当たり以下だ。
……遊びは終わりだ。
時限爆弾のタイムリミットが残り五分になったからな。」

そう言ってヤドキングが破壊光線を放とうとエネルギーを集め始めた。

「消えるが良い！
破壊光線！」

ヤドキングは最大パワーで破壊光線を放った！

「くそっ！？」
「破壊光線！」

ヤドキングが放った破壊光線がポリゴン2に直撃しそうになった時、何処からか別の破壊光線が飛んできてヤドキングの破壊光線を打ち消してしまった！

「何！？」
「高速移動！そして破壊光線！！」

ヤドキングの前に何者かが高速移動でやって来て至近距離で破壊光

線を直撃させた！
ヤドキングは吹き飛ばされた！

「大丈夫か？」
「……リーダー？」

ポリゴン2は信じらないといった表情をしている。何故なら、今目の前にいるのはヒードラン達に最初に消された筈のポリゴンZだったからだ。

「しばらく見ない間に随分と可愛くなったな？」
「なんでリーダーが？
あの時確かに消された筈……」
「確かにな。だけど完全に消えた訳じゃなかったのさ。
あの時俺は消される瞬間になんとかコンピューターの中に逃げる事が出来たんだ。
俺の身体は半分以上消えかかっていたがな……
だけど、俺はこのコンピューターの中にあるありとあらゆるデータを自分の身体に取り込む事によって消える事を防いだのさ。
それより、お前はこの先にある爆破プログラムを破壊するんだろ？
俺がヤドキングを押さえてるから早く行け。」
「えっだけど、リーダー一人じゃ……」
「そんな事言ってる場合じゃないだろバカ！
早く行け！」
「……解りました……
リーダー、どうか無事でいてください！」

ポリゴン2は高速移動で爆破プログラムがある所に向かった。

「無事で……か。そいつは出来ない約束だな……」

「よくもやってくれたな、ポリゴンＺＮｏ．１！」

ヤドキングが怒鳴りながらポリゴンＺにゆっくりと向かってきた。

「その名で呼ばれるのは久しぶりだな。
だが、今の俺はもうあんたに作られた当時の俺とは違う。」
「ほう？どう違うのかな？ポリゴンＺＮｏ．１よ！破壊光線！！」

ヤドキングが最大パワーで破壊光線を放った！
ここでポリゴンＺは何か回避行動を取ると思われたが、なんとそのまま破壊光線目指して突っ込んで行った！
そして破壊光線をまともに受けてしまい大きな爆発が発生した！

「自滅するだと？気でも狂ったか？」
「これで良いのさ！」

爆発で発生した爆煙の中から光の粒子となったポリゴンＺが現れてヤドキングの身体にまとわりついた！

「何を！？」
「俺自身がコンピューターウイルスになったのさ。貴様のコンピューターに侵入して今まで研究していたデータもろとも全て消去してやる！」

ポリゴンＺは自分を犠牲にしてヤドキングのコンピューターにあるデータを全て消去するつもりのようだ。

（ポリゴン２……いや、弟よ……新しい仲間と仲良くやれよ。
じゃあな……）

一気に光の輝きが強くなり始めた！

「止めろぉぉぉ！？」

ヤドキングの叫びが響き渡った瞬間、ポリゴンZはヤドキングもろともその場で爆発して消え去っていった。

「リーダー……」

爆破プログラムの目の前まで来ていたポリゴン2は爆発を確認した。

「リーダーの思い、無駄にしません！
こんなプログラム、消えて無くなれ！電磁砲！！」

ポリゴン2は最大パワーで電磁砲を放った！
電磁砲は爆破プログラムに直撃し、大きな爆発が発生した！

場所が変わり現実世界。

なんとか大量のメカヤドキングを破壊する事が出来たバクフーン達は時限爆弾がある所にいた。

時限爆弾の解除に失敗した場合を考えて、ミュウとラティオス、ラティアスの力で爆発のエネルギーを押さえ込む為だ。

「バクフーン達はエスパーの力が使えないから逃げれば良かったのに、なんで逃げなかったの？」

ミュウが首を傾げながら言った。

「仲間を置いて逃げられるかってんだよ。」

腕組みしながらバクフーンが言った。

「ミュウ、そろそろ準備した方が良さそうだぞ！」

ラティオスが叫んだ。

爆発まで残り十五秒となっていた。

「解った！」

ミュウはラティオスとラティアスの所へ。

「良いかい二人共、大きなシャボン玉を作るようにイメージするんだ。

それで作り出したエスパーの膜で爆発のエネルギーを覆って押さえ込むんだ。」
「解った。」
「解りました。」

三人は両手を前にかざして爆発のエネルギーを押さえ込む準備を始めた。爆発まで残り五秒に……
全員に緊張が走る……
残り三秒……

「二人共！」

ミュウの合図と共にラティオス達は時限爆弾を全部エスパーの力で作った膜で覆った！

時限爆弾を全部エスパーの力で作った膜で覆ってからしばらく時間が経った。
爆弾は爆発していない。

「……どう……なったんだ？」

バクフーン達は時限爆弾を確認してみる。
残り時間が一秒というところで止まっている。

「もしかして……爆弾の解除にあいつ成功したのか？」
「……みたいだね。」

「助かったんすね～（汗）」

緊張の糸が切れたのかグラエナがその場で座り込んでしまった。
グラエナだけじゃなくその場にいた皆も同じように座り込んだ。
皆、安堵の表情を浮かべている。

「ここにいたのか。」

電脳世界から帰還したポリゴン2がバクフーン達の所にやって来た。
だけど、何故か皆ポリゴン2を見てキョトンとしている。

「ん？どうした？」
『誰？』

皆、口を揃えて同じ事を言った。

「あ～この姿じゃ解らないか？」

ポリゴン2は今まで起きた事を皆に説明した。

「って事だ。」
「またあの気味悪い奴が来たんだね（汗）」

ミュウが言った。

「なぁ、もうポリゴンZには戻れないのか？」
バクフーンが首を傾げながら聞いた。
「解らない。」
「まぁでも、ポリゴン2さんのその姿。
私は好きですよ。」
笑顔でラティアスがそう言った。
「そ、そうか？」
ちょっと赤面しているポリゴン2。
「ミュウ、この大量の爆弾はどうする？」
ラティオスが爆弾を指差しながらミュウに聞いた。
「もちろん処分するさ。皆もちょっと手伝ってくれない？」
「解った。」
バクフーン達はミュウの指示で爆弾を全部外に持ち出した。
「準備ＯＫ！皆、ちょっと下がってて。」

ミュウに言われ、バクフーン達はその場から少し離れた。
それを確認したミュウは両手を前にかざした。

「はっ！」

爆弾全部をエスパーの力で作り出した膜で包み込んだ。
そして空高く爆弾を浮かせた。
ある程度高く浮かせた後、ミュウは開いていた両手を握る。
すると、爆弾を包んでいた膜が突然光輝き出し、光った刹那爆弾が一気に爆発した！

「うおっ！？」

遥か上空で爆発したにも関わらず、その衝撃は凄まじくバクフーン達は吹き飛ばされてしまった。

「想像以上に威力があったね……皆、大丈夫かい？」
「な、なんとか大丈夫です（汗）」
「お、重い……ドダイトス、俺から降りてくれ（汗）」

バクフーンがドダイトスの下敷きになっていた。

「あっ悪い。」

ドダイトスはバクフーンから降りた。

「はぁ～死ぬかと思った（汗）お前、ちょっとダイエットした方が良いんじゃないか？」
「失礼な奴だな！

体重３０５キロの俺はドダイトスの中では軽い方だ！」
「なるほど、って３００オーバーしてるお前の何処が軽いんだよ！？」

バクフーンとドダイトスのやりとりを見て周りの皆が笑い出した。

「なんか、こんな感じ久しぶりっすね（笑）」
「そうですね！」

良い笑顔をしているグラエナとラティアス。

「皆、この島の人達にもう安全だよって知らせに行こうよ。」

ミュウがバクフーン達に言った。

「そうだな！良し、行こうぜ皆！」

バクフーン達は島の人達に知らせる為に港に向かって行った。

第八十三話　カウントダウン！（後書き）

第八十三話完成です。

バクフーン：おい作者！

作者：ど、どうしたんだいバクフーン、そんなに慌てて？

バクフーン：この小説さ、明日で連載してからちょうど一年になるんだぞ！興奮しちゃってさ！

作者：そういえばそうだったねぇ。
一年前に小説を作ってみようと思って始めたこのバクフーン達の冒険……時が経つのは早いねぇ。

バクフーン：何か記念にくれたりしない？

作者：君の狙いはそれか（汗）

第八十四話　バトルフロンティア巡り、再開！（前書き）

焔の悪魔を倒し、爆弾を解除してバトルアイランドを救う事が出来たバクフーン達。

第八十四話　バトルフロンティア巡り、再開！

焔の悪魔のボスと幹部を全て倒し、爆弾を解除して島の危機を救ったバクフーン達。
その後は島の住人達に安全を報告したり、爆破で怪我をしたポケモン達をポケモンセンターに運ぶのを手伝ったりした。
バクフーン達は今までの焔の悪魔との戦闘で疲れていたので怪我をしたポケモン達を運び終わった後、ポケモンセンターで一日休む事にした。

そして翌日。

「本当に行っちゃうのかミュウ？」
「うん、親友と約束したからね。」

ミュウの親友。
それはバクフーンの中で眠っているもう一つの魂の事だ。
親友に側近を捜すよう頼まれたミュウは、その側近に会う為にバトルアイランドを離れようとしているのだ。

「なんか寂しいなぁ。
一度お前とバトルしてみたかったんだけどさ……」

バクフーンが少し寂しそうに言った。

「またきっと会えるよ。その時がきたらバトルしてあげるよ。」
「マジで？約束だぜミュウ！」

目をキラキラさせながらバクフーンが嬉しそうに言った。

「うん、約束だよ。
それじゃ、僕はもう行くね。バクフーン、バトルフロンティア頑張ってね。」
「おう♪」

ミュウはバクフーン達にそう言うとバトルアイランドから飛び立ち、何処かへ行ってしまった。

「行っちゃったか……そういえばドダイトス、お前はどうすんだ？」

腕組みしながら隣にいたドダイトスに質問したバクフーン。

「俺はお前達と行動するさ。元々、お前達を手伝う為にここに来たんだからな。」

ドダイトスはバクフーン達と一緒に行動するようだ。

「ポリゴン2、お前はどうする？」
「俺は……」

考え込んでしまったポリゴン2。
まだポリゴン2はこれからどうするか決めてないようだ。

「なぁポリゴン2。
もし良かったら、俺達と一緒に行かないか？」

「お前達と……良いのか？」
「あぁ。もうお前と俺達は敵同士じゃない。友達だからな。」
「友達……か。なんか……嬉しいもんだな……そういう風に呼ばれるのは。俺なんかで良いなら……一緒に行かせてくれ。」
「もちろん！これからよろしくなポリゴン２♪」

笑顔でバクフーンは言った。チームブラストに新しい仲間、ポリゴン２が加わった。

「あっそうだ！ラティオス達はこれからどうするんだ？」
「俺達はポケモンレンジャー本部に戻る。俺達の任務はジラーチの保護、もしくはジラーチを狙う焔の悪魔の退治。焔の悪魔は倒したからこれで任務完了だからな。マニューラやクレセリア達に報告しないと。」

ラティオス達はポケモンレンジャー本部に戻るらしい。

「そっか……あっそうだ！本部に戻る前に一つ頼み事しても良いかな？」
「頼み事ですか？」
「あぁ。お～い！ちょっとこっちに来てくれ！」

バクフーンが呼びかけるとバクフーンと仲良くなったゴーストタイプの子供達がやって来た。

「あら、こんにちわ♪」

ラティアスが優しい笑顔でカゲボウズに言った。

「こんにちわ……」

カゲボウズも挨拶したが、少し元気が無い。

「バクフーンさん、この子達は？」

「俺の友達さ。この島の古い屋敷に住んでたんだけど、ヒードランの奴が屋敷を破壊しちゃって住む所が無くなっちゃったんだ。」

「……可哀想に……」

「それでさ、ラティアス達にこいつらをリザードンの所まで連れて行ってもらいたいんだ。」

「リザードンさんの所に？」

首を傾げるラティアス。

「あいつは子供が大好きだからさ。

それに、あいつはこのゴースト達のように行き場を失った子供達を助けたいって言って孤児院を作るって言ってたんだ。

だから、あいつならこいつらの力になってくれると思うんだ。」

「リザードンさんらしいですね……解りました！私達が責任を持ってこの子達をリザードンさんの所に連れて行ってあげます！兄さん、良いよね？」

「当然だろ？」

「ありがとう二人共。

皆聞いたか？この兄ちゃん達が俺の親友のリザードンの所まで連れて行ってくれるから。

ちゃんと二人の言う事を聞くんだぞ？」

バクフーンがゴースト達にそう言うと、皆頷いて答えた。

「じゃあ、頼むよラティアス、ラティオス。」

「はい。さぁ、皆行くわよ。」

ラティアス達と共にゴースト達はリザードンがいるフレイムシティに向かって飛び立った。

「さぁ、俺達も次の施設に向かうとするか！」

「そうっすね！」

「地図によると、ここから北の方角に次の施設、バトルタワーがあるみたいだな。」

地図を見ながらドダイトスが二人に言った。

「北か！良し、行くぜグラエナ！」

「了解っすアニキ！」

バクフーンとグラエナがバトルタワーを目指して走りだした……が。

「って二人共～！そっちは南だよ～！」

ジラーチが叫んだ。

バクフーンとグラエナは全くの逆方向に向かっていたのだ。

「「あり？」」

おかしいなぁと言いたげな表情でバクフーンとグラエナは首を傾げた。

「北と南を間違えるって……大丈夫かあの二人（汗）」

ポリゴン2がちょっと心配そうな表情をしながら言った。

「はぁ……しょうがない奴らだなぁ（汗）
お前ら、俺がちゃんと案内してやるからついてこい。」

少し呆れながら、ドダイトスはバトルタワーがある北の方角へ歩き始めた。

「行こう二人共！」

ジラーチもドダイトスとポリゴン2と一緒に北へ向かう。

「あっ待てよお前達！」
「待ってっす～！」

バクフーンとグラエナも慌ててドダイトスとジラーチとポリゴン2を追いかけた。

第八十四話　バトルフロンティア巡り、再開！（後書き）

第八十四話完成です。

バクフーン：お～い作者！随分と更新するの遅かったじゃんか？

作者：え～すでにアスカやレオン、それにタクミにも説明したけど、風邪ひいて寝込んでました（汗）

バクフーン：マジか！
バカは風邪ひかないって聞いた事あったけど……

作者：ほほう？バクフーンは僕がバカだと思ってたのかい？

バクフーン：……さぁってちょっとラグラージの所に行ってくるかな～（汗）

作者：あっ逃げられた。

第八十五話　六つ目の施設、バトルタワー！

バトルフロンティア巡りを再開したバクフーン達。今はバトルタワーを目指して森の中を進んでいるのだが……

「だ～か～ら～！
バトルタワーはあっちだって！」

指差しながらバクフーンが強い口調で言う。

「違うっす！
絶対バトルタワーはあっちの方っすよ！」

グラエナも負けじと強い口調でバクフーンに言い返す。
森の中に三つの別れ道があり、バクフーンは左の道、グラエナは右の道がバトルタワーへと繋がる道だと言ってケンカしているのだ。

「お前達、白熱してるところ悪いが……
どっちの道もバトルタワーには繋がってないぞ？」

ドダイトスが地図を見ながらバクフーンとグラエナに言った。

「「えっ（汗）」」

二人共口を揃えて言った。ちょっと恥ずかしそうな表情をしている。

「地図によると、この道を真っ直ぐだな。
行くぞ。」

地図を片付けるとドダイトスは真ん中の道へと歩きだす。
ドダイトスに続いてポリゴン2も真ん中の道へ。

「グラエナ、バクフーンも早く行こう！」

笑顔でバクフーン達に言ったジラーチも真ん中の道へ。

「なんか……俺達ってカッコ悪い？」
「……かもしれないっすね（汗）」
「「はぁ～（汗）」」

二人揃ってガックリと肩を落として落ち込む。
重い足取りで二人も真ん中の道を進み始めた。

それから歩き続ける事数十分。

「あれ？おい皆、何か彼処にデカいタワーが見えるぞ！」

バクフーンが森の中からでも確認出来る大きなタワーを指差しながら皆に言った。

「あれがバトルタワーのようだな。」

地図を確認しながらドダイトスが言う。

「あれがそうなんすか！
凄く大きいタワーっすね～！」

タワーの大きさに驚いているグラエナ。
ジラーチやポリゴン2も驚いている。

「う～ん？あのタワー……どっかで見た事あるような……何処だったかなぁ……」

腕組みしながら首を傾げるバクフーン。
バトルタワーに見覚えがあるらしい。
バクフーンは何処でタワーを見かけたのか考えている。

「どうしたんすかアニキ？何考えてるんすか？」

隣にいたグラエナがバクフーンの顔を覗き込むようにしながら聞いた。

「いやさ、あのタワーを何処かで見たような気がしてさ～……」
「それはバトルシティにあるバトルタワーの事ではないかの？」

突然何処からかバクフーン達に話かける声が聞こえてきた。

「あっそうだそうだ！
バトルシティで見たんだよ！……って、今誰が喋ったんだ？」

バクフーンはキョロキョロとしながら辺りを見る。

「上におるぞ？」

また声が聞こえてきた。バクフーン達は上を見上げた。
するとそこには、木の枝に止まってバクフーン達を見下ろしているヨルノズクがいた。

「あ～！あんたはいつかの爺さん！」

ヨルノズクを見ながらバクフーンが叫んだ。

「ねぇグラエナ、あのお爺さんは誰？」

ジラーチがグラエナに聞いた。

「俺とアニキが初めてこのバトルアイランドに来た時、バトルファクトリーの場所を教えてくれた親切な爺さんっすよ。」

グラエナがそうジラーチに説明した。
ちなみにバクフーンとグラエナはヨルノズクがバトルフロンティアのオーナーである事はまだ知らない。
もちろんジラーチも。

「おいバクフーン、グラエナ、言葉遣いには気をつけろよ？
あの人はこのバトルフロンティアのオーナーだぞ。」

ドダイトスがバクフーン達に言った。
それを聞いたバクフーン達は驚きの表情をした。

「マジか！？ってか、何でドダイトスが知ってるんだよ？」
「バトルフロンティアのパンフレットに書いてあったからな。ほら。」

ドダイトスはバクフーンにパンフレットを見せた。確かにパンフレットにはヨルノズクがバトルフロンティアのオーナーであると紹介されていた。

「あっ本当だ（汗）
俺そんな偉い人にため口たたいてたのか（汗）」
「ほっほっほ！
確かにワシはバトルフロンティアのオーナーじゃが、普段通りに喋って良いぞ。
ワシもその方が喋り易いからのう。」

ヨルノズクは優しい表情でバクフーンに言った。

「んじゃ爺さん、あのバトルシティのタワーと全く同じタワーが何でここにあるんだ？」

早速ため口のバクフーンである。

「簡単な事じゃよ。
お主達のようにバトルを楽しみたいという者や、強くなる為に修行したいという者達の為に、ここだけにしかなかったバトルタワーをもう一つバトルシティに建てたんじゃ。」

ヨルノズクがバクフーン達に説明してくれた。

「でも、何でバトルシティなんすか？」

首を傾げながら今度はグラエナが質問した。

「バトルシティのジムリーダー、ルカリオとは知り合いでの。
ワシがバトルタワーをもう一つ建てようと計画している事を話たら
是非バトルシティに建ててほしいと頼まれての。
それでバトルシティに建てる事にしたんじゃ。」

バトルシティに建てた理由をグラエナに話したヨルノズク。

「へぇ～！爺さんはルカリオと知り合いだったんだ！」

ルカリオとヨルノズクが知り合いという事に少し驚いているバクフーン。

ドォーン！！！

その時、突然タワーの方から大きな爆発音が！
その爆発音に驚くバクフーン達。

「な、なんだよ今の爆発は！？」
「はぁ～……またあやつじゃな（汗）」

ため息を吐くヨルノズク。爆発が起きたのに凄く冷静である。

「爺さん、何が起きたんだよ？」

バクフーンがヨルノズクに聞く。

「とにかくついて来なさい。」

一言そう言うとヨルノズクはバトルタワーへと飛んで行った。
バクフーン達も慌ててヨルノズクのあとを追いかける。

タワーの前まで来ると、タワーの頂上付近から煙が出ている事が確認出来た。

「やはりあやつか（汗）」
「爺さん、一体何が起きたんだよ？
説明してくれよ。」

バクフーンがもう一度ヨルノズクに質問した。

「ここのバトルタワーのフロンティアブレーンじゃよ。
実力もあり、優しい奴なんじゃが、バトルになると人格が変わってやり過ぎるんじゃよ（汗）」

困った表情をしながらヨルノズクが説明してくれた。

「バトルになると人格が変わるって……一体どんな奴なんだよ（汗）」
「あれ？バクフーン君？バクフーン君じゃないか！」

突然誰かに声をかけられたバクフーン。
声が聞こえた方にバクフーンが振り向くとそこにはチーム龍のリーダーでありライバルであり友達でもあるカイリューがいた。

「カイリュー!?うわぁ～すげー久しぶりじゃんか!元気だったか？」

久しぶりにカイリューに会えた事に喜んでいるバクフーン。

「もちろん元気だよ。
バクフーン君も元気そうで何よりだよ。」

カイリューは前と変わらず優しい笑顔でバクフーンに言った。

「久しぶりじゃの～!
カイリュー!」

ヨルノズクがカイリューの近くまで来てそう言った。

「お久しぶりですヨルノズクさん。
ヨルノズクさんも元気そうで何よりです。」

礼儀正しく挨拶するカイリュー。
カイリューとヨルノズクは知り合いのようだ。

「ヨルノズクさん、兄は今どうしてますか?」
「お主の兄か……上を見れば解るぞ（汗）」

ヨルノズクはカイリューにバトルタワーの頂上を見るよう言った。

そう言われたカイリューは上を見上げる。

「あっ……」

頂上から煙が出ているのを見たカイリューは思わずそう呟いた。

「えっ？カイリューって兄貴がいたのか？」

隣にいたバクフーンが聞いた。

「うん。僕の兄さんはこのバトルタワーのフロンティアブレーンなんだ。今日は父さんに頼まれて、この荷物を兄さんに届けに来たんだけど……
どうやら、またバトルでやり過ぎたみたいだね（汗）」

手に持っている荷物をバクフーンに見せながらカイリューはそう言った。

「カイリューの兄貴がフロンティアブレーン……って事はめちゃくちゃ強そうじゃん♪」

カイリューの兄がフロンティアブレーンだと聞いたバクフーンは目をキラキラさせながら喜んでいる。

「あ～もう我慢出来ない！早速バトルだぁ！」

早くバトルがやりたいバクフーンは我慢出来なくなり、猛ダッシュでバトルタワーの中へ入って行った。

「あっ！？待って下さいよアニキ～！」

グラエナも慌ててバクフーンのあとを追いかける。ジラーチも一緒に追いかける。

「……やれやれ（汗）
そんなに慌てなくてもフロンティアブレーンは逃げやしないだろうに。」

少し呆れた感じでドダイトスが言う。

「ほっほっほ！
元気があって良いではないか。
さぁワシ達も中に入ろう。カイリューの兄も下に戻って来ている頃じゃろ。」

ヨルノズクと一緒にドダイトス達もバトルタワーの中へ。

バトルタワー内部。
一階。

「うおっ！？めっちゃ人がいっぱいいる！」

先に中に入ったバクフーンは驚いている。

何故なら、バトルタワーの中には大勢のポケモン達がいたからだ。

「バトルシティと同じで、ここも世界各国から様々なポケモン達が集まってバトルするからのう。」

あとからやって来たヨルノズクがバクフーンに説明した。

「へぇ～！なんかすげーな！」

世界から来ていると聞いたバクフーンは少し驚いた。

「はい退いた退いた～！怪我人が通るよ！」

その時、バクフーン達がいた所にハピナスとラッキーが担架を持ってやって来た。

担架の上には怪我をしているストライクが。

バクフーン達はその場から退いてハピナス達の邪魔にならないようにした。ハピナス達は大急ぎでバクフーン達の前を通り、バトルタワーの一階に用意されている部屋の中へ入って行った。

「今のもしかして、フロンティアブレーンにやられた奴か？」

バクフーンはヨルノズクに質問した。

「多分……いや、間違いなくそうじゃな（汗）」

もう何度も同じ事があったのであろう。

少し呆れた感じで答えるヨルノズク。

「あっ！ヨルノズクオーナーじゃないですか！」

その時、ヨルノズクに誰かが声をかけた。
声がする方へ皆が振り向くとそこには首に竜の牙をネックレスのようにぶら下げているカイリューがいた。
ちなみに竜の牙は、持っているとドラゴンタイプの技の威力を上げてくれる道具なのだ。

「シン……また怪我人を出しおったな！
やり過ぎるなと何度言ったら解るんじゃ！」

ヨルノズクがカイリューのシンに怒鳴る。
このシンがバトルタワーのフロンティアブレーンのようだ。

「す、すみませんオーナー（汗）
どうしてもバトルになるとテンション上がっちゃって（汗）」

右手を頭に当てて、申し訳なさそうにシンは謝っている。

「相変わらずだねシン兄さん。」

シンの隣にカイリューがやって来た。

「カイリュー！久しぶりじゃないか！」

弟のカイリューが来てくれた事に喜んでいるシン。

「バトルを楽しむのは良いけど、やり過ぎるのは良くないよ？」

「反省してます（汗）」

弟に注意されてさらに落ち込むシン。

「気をつけてよ？
はいこれ。父さんからの贈り物だよ。」

カイリューが持ってきていた荷物をシンに手渡した。

「ありがとうカイリュー。……まぁ、多分父さんの事だから贈り物ってきっとトレーニンググッズだよな（汗）」

嬉しいような嬉しくないような……複雑な表情をするシン。

「あの～！あんたがフロンティアブレーンなんだよな？
俺とバトルしようぜ！」

中々話が終わりそうにないので、バクフーンは無理やり会話の中に乱入してシンにバトルを申し込んだ。

「ん？君は？」
「彼はバクフーン君だよ。前に話したでしょ？」

カイリューがシンにそう言うと何か思い出したのか両手をポンと叩いた。

「あ～君がそうなのか！弟に勝ったバクフーンっていうのは！
前から君とはバトルしてみたいって思ってたんだよ！
……だけど、今すぐって訳にはいかないんだよね（汗）」

少し残念そうに言うシン。

「な、何ですぐにバトル出来ないんだよ？」

首を傾げるバクフーン。

「このバトルタワーのルールなんだよ。
このバトルタワーは五十階建てで、各階にバトルフィールドが用意されているんだ。
そのバトルフィールドでバトルして勝利した者だけが次の階に進める。
そうやって勝ち進んだ者だけがこのタワーの頂上に行けて、俺とバトルする事が出来るんだ。」

シンがバクフーン達に説明した。

「ちょっと質問！」

バクフーンが右手を上げて言った。

「なんだい？」

「各階でバトルしないといけないのは解ったけど……相手は誰？
それと、仲間と一緒に行っちゃダメなのか？」

バクフーンは二つシンに質問した。

「えっと……まず仲間とは一緒に行けるよ。
でもバトルのルールは一対一のシングルだから、仲間がピンチになったから助太刀するってのは無しだからね。
それとバトルの相手だけど……これは自分の目で確かめた方が良い

よ。
ここで喋っちゃうと面白くないと思うからね。」

バクフーンの一つの質問には答えたが、もう一つの質問には答えなかったシン。

「見てのお楽しみって訳か？まぁ何でも良いや！
とにかく、バトルに勝って頂上目指せば良いって事だろ？
やってやるぜ！」

気合い十分なバクフーンである。

「君とバトル出来るのを楽しみにしてるよ。
じゃ、俺は頂上で待ってるよ！」

そう言ってシンは外に出てバトルタワーの頂上へと飛んで行った。

「良し、俺達も行こうぜ！」

バクフーン達もタワーに挑戦する為にこの一階にあるバトルフィールドがある部屋に向かおうとした。

「あっバクフーン君！
僕も一緒に行っても良いかな？
なんだか面白そうだからさ。」

カイリューがバクフーン達を呼び止めた。
カイリューも一緒に同行したいらしい。

「良いぜ！一緒に行こう！」

バクフーンは快くカイリューに言った。

「ありがとうバクフーン君。」

「良し、じゃあ今度こそ行くぜ！」

バクフーン達はバトルタワーに挑戦する為にバトルフィールドへ向かった。

バトルタワーの一階。

バトルフィールドへやって来たバクフーン達。

そのバトルフィールドにはすでに一人のポケモンが待ち構えていた。

「……何でメタモンがここにいるんだ？」

首を傾げるバクフーン。バクフーンが言うように、バトルフィールドにはメタモンがいたのだ。

「良く来ましたね。

僕がこの階であなた達と戦う相手になります。

早速バトルを始めましょう！」

そう言ってメタモンはいきなり変身を発動した！光に包まれたメタモンのシルエットがどんどん変わっていく。

しばらくすると光は消え、メタモンは別のポケモン、ミロカロスに変身していた。

「あれ？あのミロカロス……ウォーターシティのジムリーダーにそっくりだな？」

バクフーンが言った。

「そりゃそうじゃよ。
ウォーターシティのジムリーダーのミロカロスに変身したんじゃからのう。」

バクフーン達と一緒に来ていたヨルノズクが言った。

「まさか……各階にメタモンがいて、各地のジムリーダーに変身してバトルするのか？」

ドダイトスがヨルノズクに質問した。

「半分正解じゃ。
確かに各階にはメタモンがおる。
ただし、変身するのはジムリーダーだけではないぞ。
過去にポケモンリーグで優勝した事があるポケモンや今年のポケモ

ンリーグで優勝、または優秀な戦績を残したポケモンにも変身するんじゃよ。」

質問に答えたヨルノズク。

「って事は、もしかしたら俺に変身したメタモンともバトルするかもしれないって事か？」

今度はバクフーンが質問する。

ヨルノズクはそれに頷いて答えた。

「へぇ～！なんかめちゃくちゃ面白そうじゃん♪ますますやる気が出てきたぜ！」

子供みたいにはしゃぐバクフーン。

「あの～？どなたが僕とバトルするんですか？」

ミロカロスに変身したメタモンがバクフーン達に言った。

「あっ（汗）悪い悪い！
じゃあ俺がバトルするぜ！」

バクフーンがバトルフィールドに入ろうとした。

「ちょっと待てバクフーン！相手は水タイプだろ？ここは草タイプの俺がやるべきだろ！」

ドダイトスが自分がやると言ってバクフーンを呼び止めた。

「いやいや、今回は俺にやらせてくれっす！
俺だってバトルしたいんすよ！」

そこにグラエナが乱入。自分がバトルすると言ってきた。

「え～僕もバトルやりたいよ～！」

ジラーチまでバトルがしたいと言い出した。

「……正直誰でも良いだろ（汗）」

皆バトルしたいと言い合っているのを遠くで静観しているポリゴン2。

「よ～し！こうなったらジャンケンで決めようぜ！」
「いやちょっと待てお前！それだとグーしか出せない俺とグラエナが不利だろ！」

バクフーンがジャンケンで決めようと言ったのを拒否するドダイトス。

「……それを言うなら俺何かどうよ？
ジャンケンすら出来ねぇよ（汗）」

ぼそりと言うポリゴン2。

「絶対俺がやる！」
「いや、相性から言ったら俺がやるべきだ！」
「俺がやるっす！」
「僕やりたい～！」

いつまで経っても誰がバトルに出るのかが決まらないバクフーン達。

「……はぁ～（汗）
しゃあないな。」

深くため息を吐きながらポリゴン2がバクフーン達に黙ってバトルフィールドに入った。

「あっ！？」

それにバクフーン達が気づいた。

「こらポリゴン2！
何勝手に入ってんだよ！？バトルフィールドから出ろよ！」
「一度バトルフィールドに入ったら、その人がバトルしてもらう事になります。」

ポリゴン2を呼び戻そうとしたらミロカロスに変身したメタモンに止められてしまったバクフーン。

「マジかよ！？」
「悪く思うなよ？
俺がバトルしている間に、次に誰がバトルするのか決めておけ。」

そう言って戦闘体勢に入るポリゴン2。

「準備は良いですか？」
「いつでも良いぞ。」
「解りました。それでは、始めましょう！」

ポリゴン2とミロカロスに変身したメタモンのバトルが始まった！

第八十五話　六つ目の施設、バトルタワー！（後書き）

第八十五話完成です。

バクフーン：お～す作者！また来たぜ～♪

作者：ちょくちょくこっちに来るな～君は（汗）

バクフーン：まあ良いじゃんよ♪
それよりさ、ちょっと気になる事聞いたんだけど、あんたまた新しい小説を考えてるんだって？

作者：うん。
まあその小説を連載するのはまだ大分先だけどね。

バクフーン：具体的にいつなんだ？

作者：そうだね～……このバクフーン達の冒険が完結した時かな？

バクフーン：ってこの小説いつ完結するんだよ？

作者：いつになるんだろうねぇ？
まあ、百話超えてもまだ完結しないと思うよ。
バトルフロンティア編が終わった後のストーリーも結構長いし。

バクフーン：なんだかんだでこの小説結構続きそうなんだな（汗）

作者：だね。

第八十六話　頂上を目指せ！バトルタワー！前編（前書き）

バトルタワーの頂上を目指して、バクフーン達のバトルが始まった！

第八十六話　頂上を目指せ！バトルタワー！前編

ポリゴン2がまずトライアタックを放って先制攻撃した！

「トライアタック！」

ミロカロス（メタモン）は水の波動で自分の前に水の壁を作り出してトライアタックを防御しようとした。
だが、トライアタックは氷、炎、雷の三つのエネルギーが合わさった技。氷と炎のエネルギーは水の壁で防ぐ事が出来たが雷だけは防ぐ事が出来なかった！
水は電気を通すからだ！
雷のエネルギーがミロカロス（メタモン）に向かっていく！

「水の波動！」

ミロカロス（メタモン）は自分の尻尾を鋼のように硬くして地面に突き刺した！
それで身体に受けた雷のエネルギーを地面に逃がし、ダメージを受けないようにしたのだ。

「アイアンテール！」

ミロカロス（メタモン）は水の波動で生み出した水を竜巻に巻き込んでポリゴン2に放った！

「水の波動から竜巻！」

「冷凍ビーム！」

ポリゴン2は冷凍ビームを放って水の波動と竜巻のコンビネーション攻撃を凍らせた！
凍りついたコンビネーション攻撃は大きな氷柱となった。

「この氷柱、利用させてもらうか！
シャドーボールからサイコキネシス！」

ポリゴン2はまずシャドーボールを放って氷柱にぶつけた。
氷柱は大きな音をたてながら粉々に砕けた！
そこにポリゴン2はサイコキネシスを使い、細かい氷の破片となった氷柱を操り、ミロカロス（メタモン）に向けて飛ばした！ミロカロス（メタモン）に無数の氷の破片が雨のように降り注ぐ！

「竜巻！」

ミロカロス（メタモン）は竜巻を発生させて氷の破片を全て吹き飛ばした！
そしてミロカロス（メタモン）はハイドロポンプで反撃しようと構えたのだが、ついさっきまで目の前にいたポリゴン2がいなくなっていたのだ！

「えっ！？一体何処に！？」

辺りをキョロキョロとしてポリゴン2を捜すミロカロス（メタモン）。

「これで終わりだ。」

ミロカロス（メタモン）の背後から声が聞こえてきた。

ミロカロス（メタモン）が振り向くとそこには電磁砲を放つ体勢に入っていたポリゴン2がいた！
ポリゴン2は氷の破片を飛ばした時に高速移動を使ってミロカロス（メタモン）の背後に移動していたのだ！

「電磁砲！！」

ポリゴン2は最大パワーで電磁砲を放った！
ミロカロス（メタモン）はさっきみたいにアイアンテールを使おうとしたが、間に合わずに電磁砲をまともに受けた！
電磁砲を受けたミロカロス（メタモン）は吹き飛ばされて壁に身体を激しくぶつけた！
その衝撃で変身が解けて元のメタモンに戻ってしまった。
メタモンはその場で目を回しながら倒れた。

「俺の勝ちだな。」

バトルに勝利したポリゴン2は余裕の表情でバクフーン達の所に戻っていった。

「やるじゃんかポリゴン2！」

ポリゴン2の勝利を喜んでいるバクフーン。

「まあな。それより、次に誰がバトルするのか決めたのか？」
「いや、それがまだ（汗）ついついお前のバトルに見入っちゃってさ（汗）」

右手で頭を押さえながらバクフーンは言った。

「おいおい（汗）」

それを聞いて少し呆れるポリゴン2であった。

「どうしたお主達？
上の階に進まないのか？」

上の階に行ける階段の所にいるヨルノズクがバクフーン達に聞いた。

「あっ今行くから！
とりあえず上の階に行こうぜ皆。
誰が次にバトルするのかは上に着いてから決めよう。」

バクフーンの提案を聞いて頷いたドダイトス達。とにかく最初のバトルを突破したバクフーン達は次の階に向かった。

バトルタワー二階。
そこのバトルフィールドにもメタモンがいた。
バクフーン達の姿を確認したメタモンは早速変身を発動した。
この階のメタモンが変身したポケモンは……

「あっエレキブルのオッサンだ！」

バクフーンがエレキブル（メタモン）を指差しながらそう言った。
今回はライトニングシティのジムリーダーであるエレキブルに変身したのだ。

「さて、誰がバトルするか？ちなみに俺はすっげーやりたいんだけど！」

バクフーンが言った。

「相手は電気タイプだろ？ここは俺だろ！」

ドダイトスが自分がバトルすると言い出した。

「俺もやりたいっすよ！」
「僕もやりたいよ～！」

グラエナとジラーチもやりたそうにしている。

「はぁ～……（汗）
またこの展開かよ（汗）
なぁ、そんなに言い合っても決まらないなら名前順でやったらどうだ？」

ポリゴン2バクフーン達に提案した。

「名前順？」

首を傾げるバクフーン。

「あ行、か行ってあるだろ？
その順番でやるのさ。
俺達の場合だとまずグラエナが先、その次にジラーチ、ドダイトス、
バクフーン、俺って感じでやるんだ。」

ポリゴン2がバクフーン達に説明した。

「それ良いな！んじゃそれでやるか！」

バクフーンが皆に言うとドダイトス達も頷いて答えた。

「じゃ、頼むぜグラエナ！」
「了解っすアニキ！」

グラエナがバトルフィールドに入った。

「準備はよろしいですか？」

エレキブル（メタモン）が聞いてきた。

「いつでも良いっすよ！」

準備万端なグラエナ。

「解りましたそれでは始めましょう！
先攻はそちらからどうぞ！」

エレキブル（メタモン）とグラエナのバトルが始まった！

「行くっすよ！

シャドーボールっす！」

グラエナはシャドーボールで先制攻撃をした！

「雷パンチ！」

エレキブル（メタモン）は雷パンチでシャドーボールを打ち消した！
シャドーボールを打ち消した後、エレキブル（メタモン）は電光石火でグラエナに接近して雷パンチで攻撃しようとした！

「影分身っす！」

グラエナは影分身で二体の幻影を作り出した！
エレキブル（メタモン）の雷パンチはグラエナ本体には当たらず幻影に直撃した！

「残念だったっすね！
突進っす！」

グラエナはエレキブル（メタモン）に突進を決めた！突進を受けたエレキブル（メタモン）は吹き飛ばされた！
だが、エレキブル（メタモン）は踏ん張ってすぐに体勢を立て直した。

「１０万ボルト！」

エレキブル（メタモン）は１０万ボルトで反撃した！

「シャドーボールっす！」

グラエナは１０万ボルトに向けてシャドーボールを放った！
１０万ボルトとシャドーボールはぶつかり合い大きな爆発が発生した！
爆発で発生した爆煙でグラエナはエレキブル（メタモン）の姿を見失う。

「煙が晴れた時が勝負っすね……」

いつでも攻撃出来るように構えるグラエナ。
だが！

「地震！！」

エレキブル（メタモン）は地震を使ってフィールド全体を攻撃した！

「わわわ！？」

地震の衝撃で立ってられなくなったグラエナはその場で伏せる。
ちょうどそのタイミングで爆煙が晴れた！

「雷！」

エレキブル（メタモン）は伏せているグラエナに向けて雷を放った！

「身代わりっす！」

グラエナはいつ覚えたのか、身代わりを発動して自分の前に分身を作り出した！
雷は本体には当たらずに身代わりに直撃した！
雷を受けた分身は光の粒子となって消えてしまった。

「そろそろ決着をつけますよ、雷！」

そう言ってエレキブル（メタモン）は自分の長い二本の尻尾の先から雷を放った！

だが、雷はグラエナに放ったのではなく自分に向けて放ったのだ！

「何で自分に雷を？」

首を傾げるグラエナ。

「気をつけろグラエナ！あいつ特性の電気エンジンを利用する気だぞ！」

バクフーンが叫んだ。

「電気エンジン？」

「その通りです！」

いつの間にかエレキブル（メタモン）はグラエナの目の前まで来ていた！

「炎のパンチ！」

エレキブル（メタモン）は右手に炎を纏（まと）わせてグラエナを攻撃した！炎のパンチはグラエナの右の頬に直撃！

グラエナは吹き飛ばされた！

けど、すぐに体勢を立て直した。

「アチチチ……や、火傷したっす……」

グラエナは右の頬を火傷したようだ。

「エレキブルの特性電気エンジン。
電気タイプの技を受けるとその技を吸収してスピードを上げる事が出来るんです。
良くライトニングシティのジムリーダー、エレキブルが使う戦法ですよ。」

丁寧にエレキブル（メタモン）がグラエナに説明してくれた。

「なるほど……だから、さっきとは比べ物にならない位にスピードが上がってたんすね。
でも、面白くなってきたじゃないっすか！」

グラエナはワクワクしてきたらしい。
まるでバクフーンである。

「これで終わりです！
ギガインパクト！！」

エレキブル（メタモン）は物凄いスピードでグラエナに突っ込んで行った！

「そう簡単には終わらないっすよ！」

目の前まで迫ってきたエレキブル（メタモン）をグラエナは今までとは比べ物にならないスピードで回避した！

「なっ！？」

ギガインパクトを避けられた事に驚いているエレキブル（メタモン）

「そっちが電気エンジンなら、こっちは早足っすよ！」

早足。

それは毒、麻痺、火傷などの身体に悪い状態になるとスピードが倍に跳ね上がる特性なのだ。

「一気に決めるっす！

ピカチュウのアニキ、ちょっと真似させてもらうっすよ！

影分身、そして身代わりっす！」

グラエナは影分身で四体の幻影を作り出した。

だけどただの幻影ではない。

身代わりと一緒に発動した事により、この四体に実体を持たせたのだ。

かつてピカチュウが使っていた戦法である。

「皆！あいつを取り囲むっすよ！」

五人になったグラエナはエレキブル（メタモン）を取り囲んだ！

「シャドーボール、いくっすよ！」

五人のグラエナはエレキブル（メタモン）にシャドーボールを放った！

「守る！」

しかし、エレキブル（メタモン）は守るを発動した！
エレキブル（メタモン）はバリアに包まれた。
シャドーボールはそのバリアに阻まれてエレキブル（メタモン）には当たらなかった。

「ならこれはどうっすか？破壊光線っす！」

五人のグラエナは最大パワーで破壊光線を放った！エレキブル（メタモン）はもう一度守るを使おうとしたが、守るは連続で使うと失敗しやすくなる技。
守るは発動せずにエレキブル（メタモン）は五発の破壊光線をまともに受けた！
破壊光線が直撃した瞬間大きな爆発が発生した！

しばらくして爆発で発生した爆煙が晴れていった。エレキブル（メタモン）は目を回して倒れている。どうやら戦闘不能のようだ。

「やった～！俺の勝ちっす～♪」

グラエナは飛び跳ねて喜んでいる。

「やったっすよアニキ～！」

バクフーンの所に駆け寄っていくグラエナ。

「やったなグラエナ！

にしても驚いたぜ？
いつ身代わりを使えるようになったんだよ？」

バクフーンは気になっていたことをグラエナに聞いた。

「えっと……ポケモンリーグの決勝トーナメントが終わった後位っすね。ピカチュウのアニキみたいに出来たらなって思って実はこっそり練習してたんすよ。」

グラエナは身代わりが使えるようになった理由を説明した。

「そうだったんだ。」
「さぁ、次はジラーチの番っすよ！」
「うん！」

バクフーン達は次の階に向かって行った。

その後のバクフーン達は勢いに乗り順調にバトルタワーを登って行った。気がつけばもうバトルタワーの四十八階まで登っていた。
あと少しでバトルタワーのフロンティアブレーン、シンが待つ最上階に辿り着ける。

「はぁ～……まだ上があんのかよ～（汗）」

深くため息を吐いた。
若干お疲れ気味のバクフーンである。

「頑張ってバクフーン君。あと少しでしょ？」

見学者のカイリューがバクフーンを励まそうとした。

「解ってるよ。
えっと……次は誰がやるんだっけ？」
「僕だよ。」

ジラーチがバクフーンに言った。

「頑張るっすよジラーチ！」

ジラーチを応援するグラエナ。

「うん！行ってくるよ！」

ジラーチはバトルフィールドに入った。

「準備は良いですか？」

メタモンがジラーチに聞いた。
ジラーチは頷いて答えた。

「解りました。では、早速始めましょう！」

そう言った後、メタモンは変身を発動した。
この階のメタモンが変身したポケモンは……

「あっ僕だ（汗）」

見学者のカイリューがちょっと驚いている。
何故なら、メタモンが変身したのはカイリューだったからだ。

「先攻はどうぞ！」
「じゃあ、遠慮なくやらせてもらうよ！」

カイリュー（メタモン）とジラーチのバトルが始まった！

第八十六話　頂上を目指せ！バトルタワー！前編（後書き）

第八十六話完成です。

バクフーン：なんか、途中大分省略したな作者？

作者：５０回分のバトルを１つずつやったら長くなるし、読者の皆さんが見てて飽きると思ったから省略したんだよ。

バクフーン：まぁ確かに５０回分を１つずつってのは長いよなぁ（汗）

あっそうだ。

話変わるけど、作者。

この小説のリメイク版とかやらないのか？

作者：大分話が変わったなぁ（汗）

でも、何で急にそんな事聞くんだい？

バクフーン：この小説の一番最初の頃ってさ、結構文章がひどかっただろ？

セリフばっかりで誰が何喋ってるのが解らないし、描写が全然足りなかったりさ。

作者：始めたばっかりだったからねぇ（汗）

まあ今でも僕の文章や描写はまだまだだけど（汗）

う～ん……そうだね。

いつになるかは解らないけど、リメイク版作ってみようかな？

それと、ちょっと追加ストーリーなんかも加えたりとかしてさ。

バクフーン：おっ良いなそれ！

作者：さらに、主人公をバクフーンからリザードンに……

バクフーン：待てこら！？それはないぞ作者！？

作者：冗談だよ（笑）

第八十七話　頂上を目指せ！バトルタワー！後編（前書き）

カイリューに変身したメタモンにジラーチは勝てるのか？

第八十七話　頂上を目指せ！バトルタワー！後編

「ラスターカノン！」

ジラーチはエネルギー弾を作り出してカイリュー（メタモン）に放った！

「竜の舞い！」

カイリュー（メタモン）はまるで踊るようにしてジラーチのラスターカノンを回避した。
竜の舞いは自分の攻撃力とスピードを上げる技なのだ。

「ドラゴンクロー！」

カイリュー（メタモン）は竜の舞いでラスターカノンを回避した後、素早くジラーチに接近してドラゴンクローで攻撃しようとした。

「水の波動からサイコキネシス！」

ジラーチは水の波動で大きな水の塊を作り出した。それをサイコキネシスでコントロール。
大きな水の塊をカイリュー（メタモン）にぶつけた！すると、カイリュー（メタモン）は大きな水の塊の中にすっぽりと入ってしまい、中に閉じ込められてしまった！

「その状態じゃあ攻撃は避けられないでしょ？
１０万ボルト！！」

大きな水の塊に閉じ込められ、身動き出来ないカイリュー（メタモン）にジラーチは１０万ボルトを直撃させた！

（この水から脱出するには……これですね。竜巻！）

カイリュー（メタモン）は少し考えてから行動した。まず身体を高速回転させて大きな竜巻を発生させ、水の塊を吹き飛ばして脱出。さらに竜巻をジラーチに向けて放った！

「だったら、砂嵐からサイコキネシス！」

ジラーチはまず砂嵐を発生させた。
そして砂嵐をサイコキネシスでコントロール。
疑似竜巻を作り出してカイリュー（メタモン）の竜巻にぶつけ相殺させた！

「隙ありですよ！
ドラゴンダイブ！」

竜巻と疑似竜巻が相殺した瞬間、カイリュー（メタモン）はドラゴンダイブでジラーチに向かって突っ込んでいった！

「リフレクター！」

ジラーチはリフレクターを発動させた。
ジラーチの目の前にバリアのような壁が出現した。しかし、カイリュー（メタモン）はお構いなしにリフレクターに突っ込んだ！そしてリフレクターを突き破り、ジラーチにドラゴンダイブを直撃させた！

ジラーチは吹き飛ばされたがすぐに体勢を立て直した。
リフレクターは相手の物理攻撃の威力を半減させる効果があるのだ。
そしてジラーチ自身が鋼タイプを持っているので、ドラゴンタイプの技の効果は今ひとつ。
ジラーチには然程(さほど)ダメージは無い。

「火炎放射！」

カイリュー（メタモン）は攻撃の手を緩めない。
ジラーチに向けて火炎放射を放った！

「水の波動！」

ジラーチは水の波動で自分の前に巨大な水の壁を作り出した。
カイリュー（メタモン）の火炎放射は水の壁に阻まれた。
そして火炎放射が水の壁に阻まれた時、熱せられた水が蒸発して水蒸気が発生。
バトルフィールドが水蒸気で覆われて何も見えなくなった。

（何にも見えなくなっちゃったよ……
だけど、これならあの技を使う準備が出来るね。良し……）

ジラーチはカイリュー（メタモン）を倒す為に準備を始めた。
ジラーチは両手を上に向けて翳(かざ)した。
両手を翳した先に少しずつエネルギーが集まっていく。

「霧払い！」

その時、カイリュー（メタモン）が霧払いを使った！カイリュー（メタモン）は翼を思いっきり羽ばたかせて霧を吹き飛ばす。

「あっマズい（汗）」

まだエネルギーを集めている最中のジラーチ。
完全に無防備な状態だ。

「これで決めます！
高速移動から炎のパンチ！」

カイリュー（メタモン）は高速移動でジラーチに向かって行った。
そして右手に燃え盛る炎を纏(まと)わせる！

「これじゃ破滅の願いが間に合わない！
トリックルーム！」

ジラーチはエネルギーチャージを中断。
別の技、トリックルームを発動した！
トリックルームを発動した瞬間、バトルフィールド全体が歪んで見えるようになってきた。
時空が歪み始めたのだ。その瞬間、猛スピードでジラーチに向かっていたカイリュー（メタモン）の動きがどんどん遅くなってきた！

「か、身体が思うように動かない！？」

動揺するカイリュー（メタモン）。
トリックルームの中では素早い者が遅くなり、遅い者が素早くなる。
つまり逆転するのだ。
カイリュー（メタモン）が動揺しているその間にジラーチは背後に回り込んだ。

「竜の舞いや高速移動を連発したのが裏目に出たね。これで決めるよ！」

再びジラーチは両手を上に向けて翳（かざ）した。
そしてエネルギーチャージを始める！
カイリュー（メタモン）はジラーチのエネルギーチャージを阻止しようとするが、素早く動けない為すぐにはジラーチに近づけない。

「……準備完了！
いっけぇえぇ！
破滅の願い！！」

エネルギーチャージを完了したジラーチはカイリュー（メタモン）に向けて巨大なエネルギー弾を放った！
エネルギー弾はカイリュー（メタモン）に直撃した瞬間爆発した！
そしてカイリュー（メタモン）は吹き飛ばされ壁に身体を激しく衝突させた！カイリュー（メタモン）は目を回しながらその場で倒れた。
どうやら戦闘不能のようだ。

「やった～！僕の勝ちだよ！」

万歳しながら喜ぶジラーチ。
そして満面な笑みのままバクフーン達の所へ戻る。

「やったよ皆！」
「やったっすねジラーチ！凄いっすよ！」

まるで自分の事のように喜ぶグラエナ。

「あちゃ～……僕が負けちゃったよ（汗）」

バクフーンの仲間がバトルに勝ったのは嬉しいが、ちょっと複雑な表情をする本物のカイリューであった。

「次はドダイトスだな。負けんなよドダイトス？」

バクフーンが腕組みしながらドダイトスに言った。

「お前に言われるまでもない。」

強気のドダイトス。

そしてバクフーン達は次の階へと進んで行った。

バトルタワー四十九階。ドダイトスは早速バトルフィールドに入った。

そしてそこで待っていたメタモンが変身を発動する。

メタモンが変身したポケモンは……

「はっ!?俺じゃん!?」

バクフーンが凄く驚いている。
メタモンが変身したのはバクフーンだったからだ。

「ふっ……相手にとって不足はないな!」

バクフーンが相手という事でさらにやる気を出したドダイトス。

「う～……ドダイトスには勝ってほしいけど、ドダイトスが勝つという事は俺が負けるって事に～……だぁ～どっち応援すれば良いんだ俺は～!?」

頭を抱えて叫ぶバクフーンであった。

「いや俺応援しろよ（汗）」

ツッコミを入れるドダイトス。

「あの～……始めてもよろしいですか?」

バクフーン（メタモン）がドダイトスに聞いた。

「あ、嗚呼（ああ）（汗）」
（バクフーンの姿で敬語、違和感あるなぁ（汗））

少し戸惑いを感じたドダイトスであった。

「解りました、先攻はそちらからどうぞ!」

バクフーン（メタモン）とドダイトスのバトルが始まった！

「遠慮なくやらせてもらうぞ！
タネマシンガン！」

ドダイトスは口からエネルギー弾をマシンガンの如く乱射してバクフーン（メタモン）を攻撃した！

「電光石火！」

バクフーン（メタモン）は電光石火で素早く動いてタネマシンガンを回避した。

「火炎放射！」

タネマシンガンを全て回避した後、バクフーン（メタモン）は火炎放射を放った！

「リーフストーム！」

ドダイトスはリーフストームを放ち、火炎放射を吹き飛ばした！
そしてそのままリーフストームはバクフーン（メタモン）に向かっていく！

「穴を掘る！」

バクフーン（メタモン）は穴を掘るで地中に潜ってリーフストームを回避した。
ちなみに、バトルタワーの各階にはこのような地面タイプの技を使うポケモン達の為にある程度深さがある地面を用意してあるのだ。

「それで避けたつもりか？甘いな、地震！！」

ドダイトスは地震を発動した！
凄まじい衝撃がバトルフィールドに広がり、その衝撃でバクフーン（メタモン）は地上へ引きずり出された！

「リーフストーム！」

ドダイトスは再びリーフストームを放ち、バクフーン（メタモン）に直撃させて空中に吹き飛ばした！リーフストームは使う度に威力が下がってしまう技だが、それでも威力は強力だ！

「くっ……ならばこれで！ブラストバーン！」

バクフーン（メタモン）は空中からドダイトスに向けてブラストバーンを放った！

「守る！」

ドダイトスは守るを発動させた！
ドダイトスはバリアに囲まれる。
そしてブラストバーンはバリアに直撃して爆発した！
しかし、中にいるドダイトスには全くダメージはない。

「ブラストバーンを使うタイミングを間違えたな。これで終わりだ！ハードプラント！！」

ドダイトスはハードプラントを発動した！
地面から無数の棘（いばら）が出現してバクフーン（メタモン）に向かって行

った！
そして無数の棘はバクフーン（メタモン）に巻きつき縛り上げた！
縛り上げた状態のままドダイトスはバクフーン（メタモン）を地面に叩きつけた！
その瞬間変身が解けて元のメタモンに戻った。
メタモンは目を回している。
戦闘不能のようだ。

「所詮は偽物……って事だな。
本物はそんなに弱くない。」

余裕の表情でドダイトスはバクフーン達の所に戻っていった。

「あ～俺が負けた～！？
もうちょい頑張れよ俺！？」

自分に変身したメタモンが負けた事にがっかりしている本物のバクフーン。

「お前はどっちの味方だよ（汗）」

またツッコミを入れるドダイトス。

「バクフーン君。
がっかりしてる場合じゃないよ？
次はバクフーン君がバトルするんだから。
それに、次の相手は僕の兄さんなんだよ？」

バクフーンの隣にいたカイリューが言った。

「あっそうだった！
よっしゃ～気合い入れるぜ！」

切り替えが早いバクフーンである。

バトルタワー最上階。
そこには壁も何も無い。あるのはバトルフィールドのみ。
そのバトルフィールドの中心には腕組みをして目を閉じてバクフーン達が来るのをずっと待っていたバトルタワーのフロンティアブレーン、カイリューのシンがいた。

「……ようやく来たようだな。
待ちくたびれたぞ。」

迫力ある声でシンはバクフーン達に言った。

「なんか……最初に会った時と雰囲気違くないか（汗）」

ちょっと戸惑った感じでバクフーンが言った。

「気をつけてよバクフーン君。
今の兄さんは完全にバトルモードに入ってる。
……あの兄さんは僕より強いよ。」

カイリューがバクフーンに言う。

「それ聞いたら益々やる気が出てきたぜ！
絶対勝つ！」

気合いを入れてバクフーンがバトルフィールドへ。

「……準備は良いか？
バクフーン！」

今まで目を閉じていたシンが目を開いた！
そして次の瞬間シンの身体から金色に輝くオーラが出現した！
カイリューがポケモンリーグでバクフーンと戦った時に見せたあのオーラと同じだ！

「すげープレッシャーだ……気を許したらすぐに気絶しちまいそうだ……ワクワクしてきたぜ！
最初から俺も全力でやる！！」

バクフーンの身体から凄まじい炎が出現した！
その炎は鎧のようにバクフーンの身体を覆った。ブラストモードだ！

「行くぞ！」

戦闘体勢に入るシン！

「やってやるぜ！」

バクフーンも戦闘体勢に入る！

そして、バクフーンとシンのバトルが遂に始まった！

第八十七話　頂上を目指せ！バトルタワー！後編（後書き）

第八十七話完成です。

第八十八話　バクフーンＶＳシン！（前書き）

ついにバトルタワーのフロンティアブレーン、シンとのバトルが始まった！

第八十八話　バクフーンＶＳシン！

「火炎放射！」

バクフーンはシンに向かって火炎放射を放った！　ブラストモードになったバクフーンの強力な火炎放射がシンに襲いかかる！

「ならば俺も火炎放射！」

シンも火炎放射を放ち、バクフーンの火炎放射にぶつけた！
だが、ブラストモードになったバクフーンの火炎放射の方が威力が上だったようで徐々にシンの火炎放射を押していく！
そしてバクフーンの火炎放射がシンに直撃しそうになった！

「高速移動！」

シンは火炎放射を放つのを止め、バクフーンの火炎放射が当たる寸前でシンは高速移動を使い火炎放射を回避、バクフーンの背後まで移動した！
このバトルを観戦していたドダイトス達にはシンが一瞬消えたように見えたみたいだ。
いきなりバクフーンの背後から現れたのでかなり驚いている。

「さっすがカイリューの兄貴だな。
動きが速い速い。」

バクフーンはシンの動きが見えていたようだ。　驚きもせずに冷

静にしている。

「お前もポケモンリーグで弟を倒し、チームを優勝に導いただけはある。良い火炎放射だ。」

バクフーンの火炎放射を誉めるシン。

「さぁ、続けようか？」

「嗚呼（ああ）、やろうぜ！」

二人がそう言い合った直後、二人揃って高速で移動を始めた！

二人の動きが速すぎて、再びドダイトス達には二人が消えたように見えた。

「電光石火！」

「高速移動からドラゴンクロー！」

二人は超高速で移動しながら互いの技を何回もぶつけ合った！

二人の技がぶつかり合う度に閃光が発せられた。

「す、凄いっす……二人の姿が全然見えないっすよ……」

バクフーンとシンの超高速バトルを見て、ただもう驚くしか出来ないグラエナ。

「バクフーン君……あれからまた強くなったみたいだね……僕の兄さんと互角に戦っているなんて……」

以前よりも強くなったバクフーンを見て、カイリューもかなり驚いていた。

「竜巻！」

ここで流れを変えようとシンが仕掛けた！
巨大な竜巻を作り出してバクフーンに放った！

「竜巻か……ちょうど良いや、俺が考えたこのコンビネーション攻撃を試してみるか！」

バクフーンは電光石火で竜巻から離れる。
だが、このバトルタワー最上階には周りに壁が無い。
バクフーンはあと一歩後ろに下がればバトルタワーから落ちてしまう所まで来ていた。

「この位離れてれば良いだろ……そんじゃ行くぜ、ジャイロボールから火炎放射！」

バクフーンはまず身体を高速回転させた。
そしてすかさず火炎放射を使う。
次の瞬間には火炎放射が巨大な炎の竜巻となっていた！
バクフーンはジャイロボールの回転と火炎放射を合わせて炎の竜巻を作り出したのだ！
バクフーンはシンが作った竜巻に向けて炎の竜巻を放った！
竜巻と炎の竜巻はぶつかり合い消滅した！

「炎の竜巻か……面白い事をしてくれるじゃないか！」

若干笑みを見せるシン。一方のバクフーンは……

「あ～……ちょ、調子に乗って回り過ぎた～……世界が回って見えるぞ～（汗）」

全力で回転したのでバクフーンは目を回してフラフラしている。

「……凄いと思ったけど……やっぱアホだあいつ（汗）」

ぼそりと言うドダイトス。

「隙だらけだ、高速移動から雷パンチ！」

シンが高速移動で一気にバクフーンに接近！
そして右手に電気を纏(まと)わせて攻撃しようとした！

「おっと！」

バクフーンは雷パンチが当たる寸前でその場で伏せ、雷パンチを回避した。

「電光石火！」

バクフーンは電光石火で勢い良く頭からシンに向かって突っ込んだ！
バクフーンの頭突きがシンの顎(あご)に直撃して、シンを空中に吹き飛ばした！

「まだいくぜ！」

バクフーンは思いっきり高くジャンプした！
そしてシンの真上へ！

「オーバーヒート！！」

バクフーンの強力なオーバーヒートがシンに直撃した！
オーバーヒートを受けたシンは吹き飛ばされ、一気にバトルフィールドへと落下、身体をバトルフィールドに叩きつけた！

「もう一発、オーバーヒート！！」

バクフーンはもう一発オーバーヒートをシンに向けて放った！
オーバーヒートはシンに直撃し、シンは凄まじい炎に身体を包まれた！

「やった……のか？」

まだ炎は収まらず、シンの姿を確認出来ないバクフーン。

「……竜巻！」

突然炎の中から巨大な竜巻が発生！
オーバーヒートの炎を吹き飛ばしてしまった！　そして竜巻の中

からはまだピンピンしているシンが姿を現した！

「……やっぱこれ位じゃ倒れてくれないよな。
さすがだぜカイリューの兄貴！」

再び戦闘体勢に入るバクフーン。

「……ふ……ふふふ……強い……強いなぁお前は……」

急に不気味に笑いだしたシン。

「い、いかん（汗）
あいつ、また暴走する気か！？」

シンの様子を見て観戦していたヨルノズクが焦り始めた。

「バクフーン……俺の最後の攻撃……受けてみやがれ！！！」

シンを覆っていた金色のオーラが更に輝きを増した！
そしてシンの目付きが鋭さを増した！

「逆鱗（げきりん）！！」

シンは今までの倍のスピードでバクフーンに向かって行った！
そして鋭い爪でバクフーンを切り裂こうと攻撃した！

「電光石火！」

バクフーンは電光石火で素早く動き、シンの攻撃を回避した。

（今までとは桁違いに速いな……けど何だ？
逆鱗って爪を使う攻撃なのか？
いや、シンが最後の攻撃って言ったんだ。
この程度の攻撃で終わる筈が……）

バクフーンは今まで逆鱗を受けた事がなかったので一体どういう技なのか解らないのだ。
色々と考えるバクフーン。

「まだまだぁぁぁ！！」

シンが凄い形相で再びバクフーンに突っ込んできた！
そしてシンは右手に炎を纏わせてバクフーンを攻撃しようとした！

「今度は炎のパンチか！なら真っ向勝負だ！
火炎車！」

バクフーンはシンの炎のパンチに対して火炎車で対抗した！
だが、シンのパワーが先程よりもパワーアップしていてバクフーンの火炎車を破り、バクフーンに炎のパンチを直撃させた！
バクフーンは吹き飛ばされたがすぐに体勢を立て直した。

「うらあぁぁぁ！！！」

シンが叫びながら破壊光線を放った！

「電光石火！」

バクフーンは電光石火で破壊光線を回避した。　そしてそのままシンに向かって電光石火で突っ込んで行った！

だが、シンは連続で破壊光線をバクフーンに放ってきた！

「やばっ！？」

バクフーンはギリギリで破壊光線を回避した。　そしてバクフーンは体勢を立て直す為に一旦シンから離れた。

だが、シンはバクフーンのあとを追いかけてきてまた破壊光線を放ってきた！

今度は回避出来ずにまともに破壊光線を受けてしまったバクフーン。

バトルフィールドの端まで吹き飛ばされバトルタワーから落ちそうになる！

「くっ！」

落ちそうになったがなんとか踏ん張る事が出来たバクフーン。

「避けろバクフーン！」

突然ドダイトスがバクフーンに向かって叫んだ！　バクフーンが前を見るとそこには凄いスピードで向かってくるシンの姿があった！

バクフーンは回避しようとしたが、シンのスピードが速くて回避が間に合わずにシンの体当たりを受けてしまった！

そしてバクフーンはバトルフィールドの外へと吹き飛ばされてしまった！

「落ちてたまるかって！身代わり！」

バクフーンは大急ぎで身代わりを使い、自分の分身を作り出した。

「ちょっと背中借りるぜもう一人の俺！」

バクフーンは身代わりで作り出した分身の背中に乗り、そこから思いっきりジャンプしてバトルフィールドに戻ってきた！　一方の分身はそのままバトルタワーから落ちていってしまった……

「あ～らら……悪いもう一人の俺（汗）」

申し訳なさそうに分身に謝るバクフーン。

「ガアァァァ！！！」

その時、シンが突然破壊光線を当たり構わずに連射して暴れだした！

「な、なんだよ……どうなってんだ？」

バクフーンは暴れだしたシンを見て驚いている。

「あやつは逆鱗を使ったせいで混乱しておるんじゃよ……」

バクフーンの近くまで来たヨルノズクがそう言った。

「どういう事だよ？」
「逆鱗は使った本人の能力を大幅に上げる事が出来る……じゃがリスクもある。
逆鱗を使えば確かに強力な攻撃が出来るのじゃが、発動してから時間が経つとあのように混乱してしまうのじゃよ。
全く……じゃからあれほど逆鱗は使うなと注意しておったのに……
あれが原因で一体何人のチャレンジャー達を病院送りにした事か（汗）」

ヨルノズクは長々とした説明をバクフーンにした。

「バクフーン、悪い事は言わんからここはシンが大人しくなるまで隠れた方が良い。
今のあやつにバトルを挑めばお主まで病院送りに……」
「嫌だ。」

ヨルノズクが隠れるように言ったのだが、バクフーンは一言だけ言ってそれを拒否した。

「な、何故じゃ！？」

バクフーンの予想外な返事に驚くヨルノズク。

「確かにあいつが大人しくなるまで隠れるってのはありなんだろうけどさ……俺、そういうやり方好きじゃないんだよな。それに、あいつは俺と全力でバトルする為に逆鱗を使ったんだろ？
だったら、俺は隠れないで真っ正面からバトルするだけさ。」

あくまでバクフーンは今のシンとバトルするつもりのようだ。

（……こういうところまでリリにそっくりじゃな……あやつ、良くここまで育てたもんじゃな。）

心の中でそう言うヨルノズク。

バクフーンの母親のリリとヨルノズクは親しい仲のようだ。

「爺さん、危ないからドダイトス達の所に戻ってな。電光石火！」

ヨルノズクにそう言った後、バクフーンは電光石火で暴れているシンに向かって行った！

「グルァァァ！！」

まるで獣のような叫び声をあげながらシンは向かってきたバクフーンに破壊光線を放った！

バクフーンは素早い身のこなしでこれを回避、さらにシンに接近する！

「くらえ、火炎放射！」

至近距離で火炎放射を放とうとしたバクフーン。だが、ここでシンは身体を高速回転させて巨大な竜巻を作り出してバクフーンを空中へと吹き飛ばした！

「くっ！？」

「ガァァァ！！！」

空中に吹き飛ばしたバクフーンに向かってシンがギガインパクトで突っ込んで行く！

「身代わり！」

バクフーンは身代わりを使って自分の前に分身を作り出した。
次の瞬間にはシンのギガインパクトが分身に直撃した！
ギガインパクトを受けた分身はその一発で光の粒子となり消滅してしまった。
だが、バクフーンの狙いは分身でギガインパクトを防ぐ事ではない。
ギガインパクトが分身に直撃したその際にバクフーンはシンの背後へ。　そして抱き締めるようにシンを掴む！
背中から抱き締められた為にシンは翼を使えなくなってしまい、バクフーンと共にバトルフィールドへと落下し始めた！
シンはバクフーンを振り落とそうともがくがバクフーンは離れない！

「これで決めてやる！
フレアドライブ！！」

バクフーンは得意技のフレアドライブを発動、自分と一緒にシンもフレアドライブの炎で包んだ！　そして身体を螺旋（らせん）回転させ、そのままバトルフィールドへ落下していく！

「これで……どうだ！」

バクフーンはシンを思いっきりバトルフィールドに叩きつけた！
その後バクフーンは電光石火で素早くシンから離れた。

「ハァ……ハァ……き、決まったかな……」

息を切らせながらバクフーンはシンの様子を窺う。

「……ま、まだだ……」

なんとまだシンは力が残っていた！

シンはゆっくりと立ち上がる。

「ハァ……ハァ……俺の逆鱗を耐えるなんてな……」

息を切らせながらシンは言う。

さっきのバクフーンの一撃で混乱は解けたようだ。

「あれ受けてまだ立ち上がれんのかよ……本当に強いなカイリューの兄貴……だけど、次で決めてやっからな！」

バクフーンは炎のエネルギーを集め始めた。

「来い……次で本当に最後の攻撃だ！」

シンも残りの全エネルギーを集め始める。

「くらえ、フルパワーのブラストバーン！！！」

バクフーンは最大パワーのブラストバーンを放った！

「破壊光線！！！」

シンも最大パワーで破壊光線を放った！

そして二つの技は激しくぶつかり合う！

「ぐっ！」

最初は互角だったが、徐々にバクフーンのブラストバーンがシンの破壊光線を押し始めた！

シンが少し苦しそうな表情をする。

「いっけぇぇぇ！！」

バクフーンが大きく叫ぶとブラストバーンがどんどん破壊光線を押し始めた！

そしてついにブラストバーンは破壊光線を打ち破り、シンに直撃した！

シンはブラストバーンを受けてバトルフィールドの端まで吹き飛ばされた！

そのままシンはバトルタワーから落ちそうになる！

「あっまずい！？」

シンはさっきのブラストバーンを受けて気を失っていた。
バクフーンは電光石火で急いでシンの所へ。
だが、シンの身体はバトルタワーから落ちてしまった！

「間に合え！」

バクフーンはバトルタワーから落ちたシンの左手を両手で掴んだ！
そして引っ張り上げようとする……が、今までのバトルで体力を消耗したバクフーンにはもうシンを引っ張り上げる力が残ってなかった。
シンを落とさないようにするのが精一杯だ。

「くそっ……これ以上力が入らねぇ……」
「バクフーン君！」

その時カイリューがやってきて一緒にシンの手を掴んでくれた。

「一緒に引っ張り上げるよ！」
「た、助かるぜカイリュー！」

その後バクフーンはカイリューと一緒にシンを引っ張り上げる事に成功した。
そしてシンをバトルフィールドの中心まで連れて行く。

「ふぅ～……もうダメ……疲れた～（汗）」

バトルに勝って、シンを助ける事が出来て安心したのかバクフーンは大の字になって仰向けに倒れた。

「アニキ～！」

グラエナ達がバクフーンの所へ駆け寄って来た。

「凄かったっすよ！
格好良かったっすよアニキ♪」

目をキラキラさせてバクフーンを見るグラエナ。尻尾までブンブン振っている。

「サンキューグラエナ……」

笑顔で答えるバクフーンだが、かなり疲れたのかあまり元気がない。

「あの状態のシンを倒すとは……やるのうバクフーン。」

バクフーンの隣まで来たヨルノズクが言った。

「本来なら、シンがお主にこれを渡すのじゃが……見ての通りあやつは伸びておるからの。
ほれ、バトルタワーを勝ち抜いた証のアビリティシンボルじゃ。」

バクフーンはヨルノズクからアビリティシンボルを受け取った。

「これがアビリティシンボルか……サンキュー……爺……さん……」

ヨルノズクにお礼を言い終えた時、バクフーンは突然目を瞑った。

「アニキ？」

グラエナはバクフーンの顔を覗き込むようにした。

「……す～……す～……」

バクフーンから寝息が聞こえてきた。
バクフーンは寝てしまったようだ。

「寝ちゃったんすか！？」

驚くグラエナ。

「凄いバトルだったからね。とにかく、バクフーン君と兄さんを下に連れて行こう。
休ませてあげないと。」

カイリューの提案に皆頷いて答えた。
カイリュー達は二人を一番下の階まで連れて行った。

第八十八話　バクフーンＶＳシン！（後書き）

第八十八話完成です。

バクフーン：作者～何か逆鱗の効果変わってなかったか～？

作者：アニメの逆鱗を参考にしてみたんだよ……それでも多少効果を変えてやったけどね（汗）

バクフーン：まあそれは良いけど……そういえばバトルフロンティア編もうすぐで終わりそうだな？

作者：うん。
　あとはバトルピラミッドだけだよ。

バクフーン：最後の相手はどんな奴なんだ？

作者：それはネタバレだから言えないなぁ。
　でも、今までで一番苦戦するかもよ？

ラグラージ：それより作者！

バクフーン：うおっ！？
　どっから出てきたラグラージ！？
　ってかすっげー久しぶり！

作者：どうしたんだいラグラージ？

ラグラージ：どうしたんだい？じゃないよ！

もうそろそろ僕を出してくれても良いんじゃないの！？
僕まだチームブラストから抜けた訳じゃないんだよ！？

バクフーン：あれ、そうだっけ？

作者：覚えてないな～？

ラグラージ：……良いんだ良いんだ……どうせ僕何か弁当の隅っこにあるちっちゃい食べ物みたいに存在感が無いんだから……

バクフーン：あっラグラージが激しく落ち込んでいる（汗）

作者：ラグラージってこんなキャラだったかな（汗）

第八十九話　不穏な動き。（前書き）

フロンティアブレーンのシンを倒し、見事アビリティシンボルをゲットしたバクフーン達。
残すはあと一つだ！

第八十九話　不穏な動き。

バトルタワーの一階。　カイリュー達に運ばれたバクフーンとシン。

バトルタワーの一階にはポケモンセンターもあるのでそこで二人は休んでいた……のだが。

「あ～バトルの後の飯は最高に美味いなぁ♪」

あれほど激しいバトルをした筈なのだが、休んでからわずか一時間後、バクフーンはポケモンセンターの食堂で食事をしていたのだ。

「いや～本当にバトルした後のご飯は美味しいよね～！　バクフーン、君とは気が合うみたいだね♪」

バクフーンの隣ではシンがバクフーンと同じように食事をしている。

バトルの時とはまるで別人である。

「みたいだな♪」

バクフーンとシンはお互いに笑顔で楽しそうに食事している。

「……お前らある意味すげーよ本当（汗）」

ドダイトスが少し呆れた感じで言った。

「そういえばドダイトス君、君達は今シンボルをいくつ持ってるの？」

ドダイトスの隣にいたカイリューが聞いた。

「ここのシンボルを合わせて今六つだ。あとバトルピラミッドを制覇出来れば、バトルフロンティアを制覇出来る。」

「バトルピラミッド……あのフロンティアブレーンがいる所だね。」

バトルピラミッドと聞いた時、カイリューの表情が少し曇った。

「ん？　どうした？」

カイリューの顔を覗き込むようにしてドダイトスが聞いた。

「……バトルピラミッドのフロンティアブレーンは全フロンティアブレーンの中で最強なんだ……しかも、今までそのフロンティアブレーンに勝ってシンボルをゲットしたポケモンはほんの一握りしかいないんだよ……」

若干声のトーンが下がるカイリュー。

「そんなに強いのかそのバトルピラミッドのフロンティアブレーンは？」

ドダイトスが聞くと、カイリューは頷いて答えた。

「へぇ～フロンティアブレーン最強か～！早くバトルしてぇ！」

カイリューの話を聞いていたバクフーンは早くバトルピラミッドのフロンティアブレーンとバトルしたくなったようだ。　目をキラキラさせているバクフーン。

「君は本当にバトルが好きなんだねバクフーン君。」

いつもの優しい笑顔で言うカイリュー。

「いや～それほどでも♪」

右手を後頭部に当て、笑顔で言ったバクフーン。

「いや誉めてないし（汗）」

ツッコミを入れるドダイトス。

そんなこんなで楽しい食事時間は過ぎていった。

翌日の朝。

最後の施設、バトルピラミッドに向かう為にバクフーン達はバトルタワーから出発しようとしていた。

「それじゃあバクフーン、最後のバトルピラミッドは大変だと思う

けど……君ならきっと制覇出来るよ！　応援してるからね！」

見送りに来てくれたシンが笑顔でバクフーンに言った。

「おう♪　頑張るぜ！」

それに笑顔で答えるバクフーン。

「バクフーン君、今度また何処かであったらバトルしようね。」

シンと一緒に見送りに来ていたカイリューが言った。

「もちろんだぜ！
カイリュー、その時は最初から全力で来てくれよな？」

笑顔で言うバクフーン。

「解ってるよ。」
「じゃあ、俺達はそろそろ行くぜ！　またな！」

バクフーン達は最後の施設、バトルピラミッド目指して出発した。
カイリューとシンはバクフーン達の姿が見えなくなるまで手を振った。

「……行っちゃった……あっ兄さん、一つ頼みがあるんだけど良いかな？」
「頼み？　何だ頼みって？」

首を傾げながらシンはカイリューに聞いた。

「今日、僕とバトルしてくれないかな？
バクフーン君と兄さんのバトルを見たら僕もやりたくなっちゃって（汗）」

カイリューは兄であるシンとバトルがしたいようだ。

「バトルか！　良いよ、弟の頼みだしな！」

快くバトルを受けたシン。

「ありがとう兄さん。
じゃあ、バトルタワーの一階のバトルフィールドを借りてやろうよ。」
「ＯＫ。」

二人はバトルする為にバトルタワーの中へ入っていった。

一方その頃、バトルアイランドから遥か離れた場所にある大きな島。
その島には一つの大きな山が存在していた。
その島に一人のポケモンがやって来ていた。

「……あの三人がいるとしたらここだと思うんだけど……いるかなぁ？」

そのポケモンとはバクフーン達と一緒に焔（ほむら）の悪魔と戦ってくれたミュウである。
ミュウはバクフーンの中で眠る親友の魂の頼みでとある三人のポケモンを捜していたのだ。

「……麓（ふもと）にはいないみたいだね……じゃあこの山の頂上かな？」

ミュウは三人のポケモンを捜す為に山の頂上目指して飛んで行った。

山の頂上。

「うーん……もしかしてここにもいないのかなぁ？」

辺りを見回しながらミュウは呟いた。

ちなみに、この山の名前は風の霊峰（れいほう）と呼ばれる神聖な山だ。

「うん？　誰かいる？」

その時、ミュウは近くに誰かいる気配を感じ取った。　気配がした方に振り向いて声を掛けるミュウ。

「さすがですねミュウ殿。かなり気配は消していたつもりだったのですが……」

「やっぱあんたにはバレたか（笑）」

ミュウが見ていた先から二人のポケモンがやって来た。

「久しぶりだね、エンテイ、ライコウ。」

ミュウは笑顔で二人の名前を呼んだ。

そう、この二人は伝説のポケモン、エンテイとライコウなのだ。

「最後にミュウ殿とお会いしたのは……五十年程前でしたかな？」

エンテイがミュウに聞いた。

「そうだね、確かあの時は皆で楽しく雑談したり遊んだりしたんだよね。」

笑顔でミュウが答えた。

「そうそう！　あん時は笑ったよな！」

ライコウがその時の事を思い出したのか笑いながら言った。

「ねぇ、ところでスイクンは？　一緒じゃないの？」

辺りを見回しながらミュウはエンテイ達に聞いた。　スイクンとはエンテイ、ライコウといつも共に行動しているポケモンなのである。

「……あいつは……今ちょっと用事があってここにはいないんだよ。」

何故か言葉を濁しながらライコウが答えた。

「それよりミュウ殿、ここにはどういったご用件で？」

今度はエンテイがミュウに質問した。

（どうも二人の様子が変だ……いつも一緒の筈のスイクンがいないし……それに、親友の魂がバクフーンの中に眠ってるから何か非常事態が起きた筈なのにこの二人の落ち着きよう……これは素直に言わない方が良いかもしれないね……）

心の中でそう呟くミュウ。

「あっうん……近くを通ったから久しぶりに会いに来ただけなんだけど……ねぇ、スイクンが用事があるのは解ったけどホウオウは何処にいるの？」

ミュウの親友、それはホウオウの事だったようだ。　この風の霊峰には良くホウオウが来るのだが、今ホウオウはいないのだ。

「……ホウオウ様も用事がありましてね……ここには来ていないんですよ……」

エンテイはそう答えた。

（やっぱり変だ……これはスイクンを捜して彼に聞いた方が良いね……）

冒険家としての勘が働いたミュウ。

「……そっか、じゃあまた日を改めて来るよ。ホウオウとスイクンによろしく言っといてね。」

そう言ってミュウはその場から離れた。
エンテイとライコウは黙ってミュウを見送った。

「……あれがミュウかい？」

エンテイとライコウの背後から突然声が聞こえてきた。　二人が振り向くとそこには大きなポケモンがいた。

「……はい。」

エンテイがそう答えた。

「強い力を感じるよ……あの子も仲間に欲しいな。」

まるで子供のような口調でその大きなポケモンは言った。

「……ならば我ら二人が仲間に引き入れましょう。」

さっきとは違う口調でライコウが言った。

「よろしくね二人共。

……あの子が仲間になるのを断ったら……解ってるよね？」

大きなポケモンのその言葉を聞いた二人は頷いて答えた。

「じゃあ、よろしく頼むよ。」

「「お任せを。」」

エンテイとライコウが麓に降りていったミュウを追いかけて走り出した。

風の霊峰、麓。

「ホウオウ……君の身にはどうやら大変な事が起きてるみたいだね……とにかく、今はスイクンを見つけないと！」

ミュウはスイクンを捜す為に島から飛び立とうとした。

だけどその時、突然目の前にエンテイとライコウが現れた！

「……何か用かい？」

ミュウが質問した。

「……ミュウ殿、我らの仲間になりませぬか？」

単刀直入にエンテイがミュウに言った。

「仲間？」

「我らの新たな主が束ねる組織、深淵（しんえん）の闇の仲間になっていただきたい。」

ライコウがミュウに説明した。

「深淵の闇？　新たな主？　君達の主はホウオウただ一人の筈だろ？」

首を傾げながらミュウが言った。

「……もう一度言います……我らの仲間になっていただきたい。」

ミュウを少し睨みつけながらエンテイが言った。

（こんなの僕が知ってるエンテイとライコウじゃない……誰かに操られてるのか？　でも、ホウオウの加護を受けた彼らを操るなんて相当な力を持った奴じゃないと……）

色々と考えるミュウ。

「……答えてもらおうか……我らの仲間になるのか……ならないのか？」

ライコウがミュウに言った。

「……せっかくの誘いだけど、断らせてもらうよ。」

ミュウはきっぱりと誘いを断った。

「……そうですか……ならば……あなたにはここで消えてもらいましょう！」

エンテイとライコウが戦闘体勢に入った！

すると、エンテイとライコウの身体から禍禍(まがまが)しい黒いオーラが現れた！

「なっ！？」

二人の黒いオーラを見てミュウは驚いている。

「消えろ！　ダークラッシュ！」

エンテイが素早い身のこなしでミュウに向かって突進していった！

「テレポート！」

ミュウはテレポートを使ったエンテイのダークラッシュを回避した。

エンテイはそのまま近くの木に向かって突進していき、衝突した！

木はエンテイの凄まじいパワーでへし折られてしまった！

「ダークラッシュ……そんな技聞いた事がない……」

ミュウは驚いていた。

「新たな主が我らに授けてくれた力だ。
ダークサンダー！」

ミュウの背後からライコウがダークサンダーを放った！

黒い雷がミュウに襲いかかる！

「くっ守る！」

ミュウは守るを発動した！　自分をバリアで包み込みダークサンダーを防御した！

（一体どうなってるんだ……ダークラッシュにダークサンダー……
そんな技初めて聞いたよ……とにかく、今はこの場から逃げた方が良いね。）

「テレポート！」

考えたミュウはテレポートを使ってこの島から何処か遠く離れた

場所に瞬間移動してエンテイ達から逃げた。

「……あ～らら。
逃げられちゃったの？」

エンテイとライコウの前に突如ブラックホールのような黒い穴が出現し、その中から先ほどの大きなポケモンが現れて二人に話しかけた。

「……申し訳ありません……」

エンテイとライコウは深々と頭を下げる。

「じゃあ罰ゲームで君達はあのミュウを消すまでは戻って来ちゃダメだよ？　解ったね？」

大きなポケモンのその言葉を聞いて頷いて答えた二人。

「じゃあ頑張ってね～。こっちはそろそろあいつを迎えに行かないといけないからさ。」

そう言い残し、大きなポケモンは空間に開いたブラックホールのような黒い穴の中に戻っていった。

とある異空間。

「……あの二人は使えると思ったけど、案外使えないなぁ……」

大きなポケモンがエンテイ達の事について愚痴(ぐち)を言っている。

「まあ良いか……利用価値はあるんだし。
それよりも、あいつの力を手に入れる事に集中しないとね。
待っててよ……ディアルガちゃん……フフフ……」

大きなポケモンは不気味に笑いながら何処かへと向かって行った

……

第八十九話　不穏な動き。（後書き）

第八十九話完成です。

バクフーン
　ちょい作者！　何だよダークラッシュとかダークサンダーって！？

作者
　あ～あれ？　あれはゲームのポケモンＸＤ闇の旋風ダークルギアやポケモンコロシアムに登場するダークポケモンが使っていた技だよ。
　でも、確かライコウはダークサンダーを使えなかった筈なんだけどね（汗）

バクフーン
　じゃあなんで使ってんだよ？

作者
　この小説色々とゲームやアニメで有り得ない事をやってるでしょ？　例えば君のブラストモードやカイリューの内なる波動を解放した覚醒モードとか。

バクフーン
　あ～言われてみればそうだな（汗）　てか、カイリューのあれ覚醒モードって名前だったのか！？

作者
　今考えました（笑）

バクフーン
今かよ！？

作者
まあとにかく、これからのこの小説に登場するポケモンはアニメやゲームでは絶対やらない事をやるから……極一部のポケモンだけだけどね（汗）

バクフーン
うおい（汗）

第九十話　バトルピラミッド！　バクフーンＶＳピラミッドキング、レジギガス

「おっ！　何かピラミッドみたいなのが見えてきたぞ！」

バトルタワーを出発してから約二時間。

バクフーンがピラミッドみたいな建物を指差しながら言った。

「……どうやらあれがバトルピラミッドみたいだな。」

地図を見ながらドダイトスが言った。

「あれがバトルピラミッド……最強のフロンティアブレーンがいる所か！　よっしゃ～！

待ってろよ最強のフロンティアブレーン！」

バクフーンはバトルピラミッド目指して走り出した。

「あっアニキ待ってくれっす～！？」

慌ててグラエナがバクフーンを追いかけた。

「ちょっと！？　僕を置いて行かないでよ～！？」

ジラーチも急いであとを追う。

「はぁ……あいつらはもう少し落ち着いて行動出来ないのか？」

ため息を吐き、少し呆れるようにしてドダイトスが言った。

「同感だな……」

頷きながらポリゴン2が言う。

そしてドダイトスとポリゴン2は慌てず騒がずゆっくりとバクフーン達のあとを追った。

バトルピラミッド前。

「ひょえ～……思ってた以上にデカいピラミッドだな～！」

先に来ていたバクフーンがピラミッドを見上げながら言った。

「アニキ～！」

グラエナとジラーチが追いついたようだ。

「うわ～！　スッゴいピラミッドっすね～！」

ピラミッドの大きさに驚くグラエナ。

「あれ？　ねぇ二人共。彼処に誰かいるよ？」

ジラーチがピラミッドの出入り口らしき場所を指差しながらバクフーン達に言った。
二人はジラーチが指差す方を見てみると、確かにそこにはポケモンが一人いた。
「誰っすかね？　今まで見た事のないポケモンっすよ……」
首を傾げながらグラエナが言った。
「珍しい奴がいるな。
あいつは確かレジロックって奴だ。」
ゆっくりと歩いてきたドダイトスとポリゴン2がバクフーン達に追いついた。
そしてドダイトスがあのポケモンはレジロックだとバクフーン達に説明した。
「レジロック？」
首を傾げるバクフーン。
「かなり珍しいポケモンだ。噂ではあいつの身体は全部岩で出来ていて、怪我をしてもそこら辺に落ちている岩をくっつければ治っちまうらしいぞ？」
ドダイトスが皆にそう説明した。
「へぇ～便利な身体してんだな～！」
腕組みしながらバクフーンがそう言った。

その時、レジロックがバクフーン達の所に歩いてやって来た。

「……挑戦……するのか……？」

レジロックがバクフーン達にそう問い掛けた。

「もちろんだぜ！」

その問い掛けに、バクフーンがすぐに挑戦すると答えた。

「……解った……こっちだ……」

レジロックはバクフーン達を案内する為にバトルピラミッドの中へ入っていった。

バクフーン達もレジロックのあとを追ってピラミッドの中へ。

バトルピラミッド内部、バトルフィールド。

中に入ってすぐにバトルフィールドがバクフーン達の前に広がっ

ていた。

「ピラミッドの中にはバトルフィールドしかないのかよ（汗）」

ツッコミを入れるドダイトス。

「なぁレジロック、ここのフロンティアブレーンは何処にいるんだよ？」

バクフーンがレジロックに質問した。

「……目の前……」

レジロックはバトルフィールドの中心を見つめながらそう答えた。
バクフーン達もバトルフィールドの中心を見る……

「……もしかして……あの馬鹿でかい奴がそうなのか？」

バクフーンがレジロックに聞くと、レジロックは頷いて答えた。
バクフーン達が見ている先には、とても大きなポケモンが佇（たたず）んでいた。

「……ピラミッドキング……レジギガス……」

レジロックが佇んでいるポケモンを見ながらそう言った。
そしてレジギガスがバクフーン達に気づき、ゆっくりとバクフーン達に向かって来た。

「挑戦者か……案内ご苦労レジロック。
持ち場に戻れ。」

レジギガスがそう言うとレジロックはバトルピラミッドの外へ出て行った。

「さて……レジロックが説明したと思うが、我がこのバトルピラミッドのフロンティアブレーン、ピラミッドキングのレジギガスだ。」

「俺はバクフーンだ。

レジギガス、ここのバトルのルールは？」

「ルールは単純明快だ。

我とそなた達の誰かと一対一のシングルバトルだ。」

腕組みしながらレジギガスがバトルのルールを説明した。

「シングルバトルか！

よっしゃ、俺がやる！」

バクフーンが元気良くレジギガスの前に立った。

「アニキずるいっすよ～！　俺もやりたいっすよ～！」

バトルをやりたそうにしているグラエナ。

「グラエナ、今回は俺にやらせてくれ！

頼む！」

両手を合わせて頼み込むバクフーン。

「う～……解ったっすよ～……」

しょうがないなぁって感じでグラエナが言った。

「サンキューグラエナ♪
さぁ、やろうぜレジギガス！」

戦闘体勢に入るバクフーン。
バトルの邪魔にならないようにドダイトス達は隅(すみ)っこに移動した。

「始めるか……何処からでも掛かってこい。」

手招きするようにしてバクフーンに言うレジギガス。

「そんじゃ遠慮なくやらせてもらうぜ！
電光石火！」

バクフーンは電光石火で素早く動き、レジギガスに向かって突っ込んで行った！
そして強力な体当たりをレジギガスに決めた！

「……スピードは中々だが、その程度の力では我にダメージを与える事は出来ぬ。」

確かに電光石火は決まったのだが、レジギガスにはダメージが無いようだ。

「あらま（汗）」

ちょっと驚いた表情をするバクフーン。

「メガトンパンチ！」

レジギガスは右手でバクフーンを殴ろうとして構えた。

（大振りだな……そんな大振りじゃあ俺には当たらないぜ！）

「電光石火！」

バクフーンは電光石火のスピードでバックステップし、レジギガスのメガトンパンチを回避した。レジギガスのメガトンパンチは空振りに終わり空を切る。

すると、レジギガスのメガトンパンチがかなり強力だったのか凄まじい突風が発生！

その突風でバクフーンはバトルフィールドの端まで吹き飛ばされた！

「おっとっと！？」

バクフーンはすぐにバランスを立て直した。

「すっげー（汗）

あんなもん受けたら一発でＫＯされちまう（汗）」

レジギガスの強力なメガトンパンチに驚くバクフーン。

「冷凍パンチ！」

レジギガスの右手が冷気を帯び始める。

そしてその右手で地面を叩くレジギガス！

すると、叩きつけた所から冷気がバクフーンに向かって行った！

冷気が通った後には氷柱が出来上がっていた！

バクフーンから見れば、突然地面から氷柱が現れ自分に向かってきているように見えた。

「火炎放射！」

バクフーンは氷柱に向かって火炎放射を放った！　バクフーンの火炎放射は向かってくる氷柱を溶かし、レジギガスにそのまま向かって行った！

「炎のパンチ！」

今度は左手に炎を纏わせたレジギガス。そしてその炎をバクフーンの火炎放射にぶつけ相殺させた！

「ならこのコンビネーションならどうだ！」

バクフーンはジャイロボールを使う体勢に入る。火炎放射とジャイロボールのコンビネーションで炎の竜巻を作るつもりなのだ。

「雷パンチ！」

バクフーンがコンビネーション攻撃をする前に、レジギガスは右手に電気を纏わせ、地面を叩きつけた！

雷パンチを叩きつけた場所には先程バクフーンが火炎放射で溶かした氷の水が……その水はバクフーンの足下まで続いていた。

「ぐあぁぁぁ！？」

バクフーンは雷パンチの電撃を受けてしまった！　水は電気を通す……足下まで繋がっていた水を伝って、レジギガスの雷パンチの電撃がバクフーンに直撃してしまったのだ！

「くっ……冷凍パンチを使ったのは俺に火炎放射を使わせる為か……」

膝を突きながらも雷パンチを耐えたバクフーン。

「どうした？　まだ我は半分も力を出しておらぬぞ？」

挑発するように言うレジギガス。

「あ～そうかい……だったら、全力を出させてやるよ……うおぉぉお！！」

バクフーンは凄まじい炎に包まれた。

ブラストモードだ！

「……行くぜレジギガス……電光石火から捨て身タックル！」

バクフーンは先程よりも更に素早く動き、レジギガスに強力なタックルを決めたバクフーン！

捨て身タックルを受けたレジギガスは少し後ろに蹌踉けた。

「ほう……先程よりもパワーが上がったな……自分の能力を上げる事が出来るようだな？」

まだまだ余裕といった感じでバクフーンに言うレジギガス。

「良いだろう……身体も暖まってきた頃だ。

そろそろ本気といこうか……」

そう言い終わると同時に、レジギガスがその巨大からは想像出来

ないスピードでバクフーンの背後に回り込んだ！

（は、速い！？）

バクフーンにはレジギガスが一瞬消えて見えたようでかなり驚いた表情をしている。

「遅い！」

レジギガスはその大きな両手でバクフーンを掴んだ！　そしてそのままバクフーンを持ち上げるレジギガス。

バクフーンは逃れようともがくが、レジギガスの力が強く、バクフーンは逃げられない！

「握り潰す！」

レジギガスは両手に力を入れて、バクフーンを握る！

「ぐあぁぁぁ！？」

レジギガスの力は強く、バクフーンの身体には凄まじい激痛が襲う！

「これで決めさせてもらう！」

レジギガスはバクフーンを思いっきりバトルフィールドの外の壁に向けて投げつけた！

バクフーンは壁に身体を激しく叩きつけられた！

「ギガインパクト！！」

レジギガスは素早い動きでバクフーンに接近し、ギガインパクトをバクフーンに決めた！
強力なギガインパクトを受けたバクフーンは壁にめり込む。

「かはっ……」

バクフーンは倒れた。

「終わりだ。」

レジギガスはバクフーンが倒れた事を確認するとバトルフィールドの中心に戻っていった。

「ア、アニキが……負けた……」

バクフーンが負けた事が信じられないようで、呆然としているグラエナ。

「バクフーン！！」

先にバクフーンに駆け寄ったのはドダイトスだった。
それからグラエナや他の皆もバクフーンの所へ。

「おいバクフーン！」

バクフーンを呼びかけるドダイトス。

「……ようドダイトス……悪い……負けた……」

申し訳なさそうにしているバクフーン。

「……バトルピラミッドの隣にポケモンセンターがある。そこに連れて行き、休ませてやるが良い。」

背を向けたまま、レジギガスがそうドダイトス達に言った。

「……そうさせてもらう。皆、バクフーンを俺の背中へ。」

グラエナ達はバクフーンをドダイトスの背中に乗せてあげた。

「……レジギガス……次はぜってー勝つからな……」

弱々しくバクフーンは言った。

レジギガスは背を向けたまま無言だった。

「怪我人があまり喋るな。行くぞ。」

バクフーンはドダイトス達と一緒にバトルピラミッドの隣にあるというポケモンセンターへ向かった。

第九十話　バトルピラミッド！　バクフーンＶＳピラミッドキング、レジギガス

第九十話完成です。

第九十一話　特訓開始！（前書き）

レジギガスに敗れたバクフーンはドダイトス達に運ばれてポケモンセンターへ。
そして一日ゆっくりと休んですっかり元気になったバクフーンはというと……

第九十一話　特訓開始！

「う～ん……」

バトルピラミッドの隣にあるポケモンセンター内にあるポケモン達が寝泊まり出来る寝室。

その中にあるベッドの上で胡坐（あぐら）をかき、腕組みしながらバクフーンが考え事をしていた。

「アニキが考え事をしてるっす（汗）」

バクフーンが考え事をする所を初めて見たグラエナは驚きの表情をしている。

「今日は大雨か雹（ひょう）が降るな（汗）」

グラエナの隣にいたドダイトスがそう言った。

「って俺が考え事したら何で大雨や雹が降ってくんだよ！？」

ツッコミをするバクフーン。

「……冗談はさておき、何を考えてるんだ？」

軽く流すドダイトス。

「いやさ、どんなトレーニングしようかなぁって考えててさ。」

バクフーンはトレーニングの事を考えていたようだ。

「トレーニングか……普通のトレーニングじゃダメなのか？」

首を傾げながらドダイトスがそう言った。

「普通のトレーニングやってもレジギガスには勝てないだろ？だから何か普通とは違うトレーニング方法は無いかなぁって思ってさ。」

「普通とは違うトレーニング方法って言われてもなぁ……」

考えるドダイトス。

しばらく沈黙が続いた。

「ねぇ、一つ良いトレーニング方法があるよ？」

沈黙を破ったのはジラーチだった。

何か良いトレーニング方法があるらしい。

「本当かジラーチ！どんなトレーニングなんだ？」

バクフーンがジラーチに聞いた。

「これは、前の僕のパートナーであるルークが考えた方法なんだけど……ルークはそのトレーニングで強くなったんだ。」

ルークとは千年前にジラーチのパートナーだったルカリオの事である。

「口で説明するより実際に体験した方が早いね、早速やってみる？」
「やるやる♪」

子供みたいに言うバクフーン。
バクフーン達はジラーチが言うトレーニングを体験する為にポケモンセンターのが用意してあるトレーニング場へ向かった。

トレーニング場。

「じゃあ早速やってみようか！
バクフーン、バトルの相手は誰にする？」
「えっ？　トレーニングってバトルなのか？」

首を傾げながらバクフーンが言った。

「やってみれば解るから、相手を選んで。」

笑顔でそう言うジラーチ。

「んじゃあグラエナ！
相手してくれ！」

「了解っす～！」

グラエナがバクフーンの前へやって来た。
ドダイトスやポリゴン２は邪魔にならないようにトレーニング場の隅(すみ)っこに移動した。

「それじゃあ始めるよ、重力！」

ジラーチはいきなり重力を発動した。

「うおっ！？　か、身体が……重くなった！？」

地面に倒れ込みそうになったバクフーンは踏ん張って、なんとか立っている。
グラエナもバクフーンと同じように踏ん張っている。

「僕の使った技で周りの重力を変化させたんだ。今は通常の倍の重力が発生している。
だから、今のバクフーン達の体重は倍の体重になっているんだ。
この状態の中でバトルすれば、嫌でも強くなれるって訳。」
「な、なるほどな……俺の体重は大体８０キロだから……それの倍だから１６０キロ！？
重い訳だ（汗）」

苦笑いするバクフーン。

「じゃあ……俺は体重３７キロっすから……７４キロっすね（汗）」
「倍でもまだ二桁かよ……良いな～グラエナ。」

羨(うらや)ましそうにしているバクフーン。

「ほら二人共、バトルしないとトレーニングにならないよ！
この重力をキープするの結構疲れるんだよ？」
「あ～悪い悪い（汗）
んじゃ、早速やるかグラエナ！」

バトルの体勢に入るバクフーン。

「いつでも良いっすよ！」

グラエナもバトルの体勢に入る。

「いくぜグラエナ！
電光石火！」

バクフーンは電光石火でグラエナに先制攻撃しようとした……のだが。

「あ～身体が重くて速く走れねぇ（汗）」

倍の重力が発生している為、素早く動く事が出来ないバクフーン。
電光石火が普通の体当たりになっていた。
バクフーンのこの攻撃をグラエナは難無く回避する。

「今度はこっちの番っすよ！　シャドーボールっす！」

グラエナがバクフーンに向かってシャドーボールを放った！

「火炎車！」

バクフーンは火炎車を発動した！
炎の鎧を身に纏い、シャドーボールを弾いた！
そしてそのまま火炎車でグラエナに向かって行く！

「影分身っす！」

グラエナは影分身を使ってバクフーンを攪乱しようとした。

「うっ……身体が重いから分身がいっぱい作れないっす（汗）」

グラエナは三人の自分の幻影を作ろうとしたのだが、やはり重力が倍になった影響があるみたいで一人の幻影しか作れなかった。

「当たれぇぇぇ！！」

バクフーンは直感を信じて右側にいたグラエナに突っ込む！

「やばいっす！？
穴掘って逃げるっす！」

バクフーンが突っ込んだグラエナは本物だった。しかし、グラエナは穴を掘るを使って地面に潜り、火炎車を回避した。

「穴掘って地面に潜ったか……だけど、俺は知ってんだよな。
この技の攻略法は！」

バクフーンはグラエナが掘った穴の中に向かって火炎放射を放った！
すると……

「熱っ！？　熱いっす～！？　尻尾に火が付いたっす～！？」

地面からグラエナが飛び出した。
尻尾の先にバクフーンの炎が付いている。

「あっやりすぎた（汗）」

申し訳なさそうにしているバクフーン。

「水の波動！」

ジラーチが水の波動を使い、グラエナの尻尾に付いた炎を消火した。

「はぁ～……た、助かったっす～……ありがとうっすジラーチ。」
「どういたしまして。」

笑顔でジラーチは言った。

「どう？　このトレーニングは？」

バクフーンにこのトレーニングの感想を聞くジラーチ。

「結構ハードだけど……気に入ったよ！
なあ、次はドダイトスやろうぜ！」

このトレーニングが気に入ったらしいバクフーン。
今度はドダイトスと一緒にやりたいらしい。

「良いだろ。グラエナ、チェンジだ。」

「了解っす～。」

グラエナとドダイトスが交代した。

「そんじゃジラーチ、頼むぜ！」

「オッケー、重力！」

再びジラーチは重力を発動した！

「くっ……なるほど……こ、こいつはかなりハードだな……」

倒れないように踏ん張るドダイトス。

ドダイトスの体重は３０５キロ。

それが倍になり、今ドダイトスは６１０キロとなっているのだ。

あのカビゴンよりも重くなっているドダイトス。

「準備は良いかドダイトス！」

もうバトルする体勢になっているバクフーン。

「あ、嗚呼（ああ）……いつでも来い！」

ドダイトスもバトルする体勢に。

バクフーン達がジラーチに教えてもらったトレーニングを始めてから二週間が経過。

「ハードプラント！」
「電光石火！」

このトレーニングにも慣れてきたバクフーン達はいつもよりも重い体重になっていても、普段と同じ動きが出来るようになっていた。
さらにバトルだけじゃなく、腕立て伏せ、スクワットなどの運動もしっかりとやっていたので筋肉も付いてきていた。
今はバクフーンとドダイトスがバトルしているのだが、ドダイトスのハードプラントをバクフーンは電光石火で素早く動き、無数に迫り来る棘（いばら）を全て回避していた。ちなみに、今ジラーチが発生させている重力は通常の四倍だ。
つまり、バクフーンの今の体重は３２０キロ。
通常のドダイトスの体重を超えていた。
ドダイトスに関しては体重１２２０キロになっていた。

「二人共～！　ちょっと良いかな～？」

バトル中だったバクフーン達にジラーチが話しかけてきた。

「うん？　何だジラーチ？」

バクフーンがジラーチに聞いた。

「試しに重力を通常に戻してみる？
もう結構身体が鍛えられてる筈だから、大分感覚が違うと思うよ？」

重力を元に戻す事を提案したジラーチ。

「そうだな、じゃあ頼むよジラーチ。」
「解った。」

ジラーチは重力を解除した。

「うっは～！　すっげー身体が軽い！」

何回か飛び跳ねて身体の軽さを確認するバクフーン。

「んじゃ、ちょっと試してみるか、電光石火！」

次の瞬間バクフーンがその場から消えた！
いや、動きが速すぎて消えたように見えたのだ。

「アニキ、何処に行ったっすか？」

辺りをキョロキョロとしながらバクフーンを捜すグラエナ。

「何処見てんだよグラエナ？」

いつの間にかバクフーンはグラエナの背後にいた。

「いつの間に（汗）」

驚いているグラエナ。

「いや～身体が軽いから前より速く動けるようになったみたいなんだ！
これなら、レジギガスにも勝てちゃうかもな♪」

満面な笑みを浮かべるバクフーン。

「調子に乗るなよバクフーン。
相手は最強のフロンティアブレーンなんだ、いくら速く動けるようになったからって勝てるとは限らないぞ。」

バクフーンに注意するドダイトス。

「解ってるってドダイトス。」

トレーニングを終えてから一時間後。
時刻は午後五時、バトルピラミッド前にやって来たバクフーン達。

「良し、行くか！」

気合いを入れて中に入るバクフーン。
バクフーンを追ってドダイトス達も中へ。

バトルピラミッド内部、バトルフィールド。
バトルフィールドの中心にはレジギガスが腕組みしながら佇(たたず)んでいた。

「レジギガス！
リベンジしに来たぜ！」

バクフーンが大きな声でレジギガスに言った。

「……やはり来たか。
少しは強くなったか？」

腕組みしたままレジギガスはバクフーンに聞いた。

「バトルすれば解るさ。早速始めようぜ！」

バトルする体勢に入るバクフーン。

「それもそうだな。
何処からでも来るが良い！」

レジギガスもバトルする体勢に入る。
ドダイトス達は二人の邪魔にならないようにバトルフィールドの外へ。

「そんじゃ……行くぜ！」

次の瞬間、バクフーンがその場から消えた！
そして……

「火炎車！」

バクフーンの火炎車がレジギガスに直撃した！
火炎車を受けたレジギガスはバトルフィールドの端（はじ）まで吹き飛ばされた！

「……ほう、以前よりもスピードとパワーが格段に上がっているな。」

強力な火炎車を受けたレジギガスだが、余裕といった感じだ。

「まだまだこんなもんじゃないぜ！
行くぜレジギガス！」

第九十一話　特訓開始！（後書き）

第九十一話完成です。

バクフーン
もうちょいでバトルフロンティア編も終わりだな作者？

作者
だね～……何かやっと終わりか～って感じだね～……

バクフーン
どうしたよ作者？
何か脱力感たっぷりなその喋り方？

作者
いや～……仕事が忙しくてスッゴい疲れたからさ～（汗）

バクフーン
あ～現実世界の話をこっちの方に持ってくんなよ（汗）

作者
良いじゃん、こういう話出来るの君しかいないんだから。

バクフーン
……それはそれで何か悲しいなあんた（汗）

第九十二話　リベンジ！　バクフーンＶＳレジギガス！

「火炎放射！」

バクフーンは口から灼熱の炎を吐き出し、レジギガスを攻撃した！

「炎のパンチ！」

レジギガスは両手を前に翳す。
そして両手に炎を纏わせて、バクフーンの火炎放射を防御してしまった！

「いくらパワーアップしたと言っても、以前と変わらず、攻撃が単調だな。それでは我は倒せんぞ？」

余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）といった感じのレジギガス。

「攻撃が単調ねぇ……なら、こんなのはどうだ？
身代わり！」

バクフーンは身代わりを使って、自分の分身を作り出した。

「行くぜもう一人の俺！」
「おうよ！」

二人のバクフーンが電光石火で素早く移動！
目にも留まらぬ速さでレジギガスの周りを走る！

「スピードスター！」

「火炎放射！」

二人のバクフーンはそれぞれ違う技を使ってレジギガスを攻撃した！

「炎のパンチ、雷パンチ！」

なんとレジギガスは一度に二つの技を発動させた！

右手に炎を纏わせて火炎放射を防御。

さらに左手に電気を纏わせてスピードスターを防御してしまった！

「その程度の攻撃では我は……」

「下ががら空きだぜ！

気合い玉！」

いつの間にかレジギガスの足下にバクフーンが！　エネルギー弾をレジギガスに放ち、直撃させた！

「くっ！？」

ノーマルタイプのレジギガスには格闘タイプの気合い玉は効果抜群。

気合い玉を受けたレジギガスは後ろによろけた！

「行くぜ皆！」

「「「火炎車！」」」

三人のバクフーンの火炎車がレジギガスに直撃！　レジギガスはバトルフィールドの外の壁まで吹き飛ばされ、身体を思いっきりぶつけた！

「うっ……さっきの火炎放射とスピードスターを放っている時にまた身代わりを使っていたか……」
「正解♪」

してやったりといった表情をするバクフーン。
レジギガスが言うように、先程の火炎放射とスピードスターを放っている時に、バクフーンはもう一度身代わりを使って新たに分身を作り出していたのだ。

「この戦法はリザードンの母さんが使っている戦法だ。
前からやってみたかったんだよなこれ。
でも、やっぱり連続で身代わり使うのは疲れるな（汗）」

苦笑いするバクフーン。

「ふっ……面白い奴だなお前は……」

ゆっくりと歩きながらバトルフィールドに戻ってきたレジギガス。

「……そろそろ身体が暖まってきた……本気で行くぞ……」

先程よりも迫力が増したレジギガス。
次の瞬間、レジギガスが目の前から消えた！
いや、素早く動いたから消えたように見えたのだ。

「スピードなら負けねぇぜ！」

三人のバクフーン達も電光石火を使いその場から消えた！
レジギガスとバクフーンが消えた刹那（せつな）、凄まじい衝撃音がバトル

フィールド中に響き渡った！
レジギガスとバクフーンが互いに体当たりした音だ！
その後もバクフーンとレジギガスは何度も何度も同じ事を繰り返した。
そのたびに衝撃音が響き渡る。

「このっ！！」
「はあぁぁぁ！！」

レジギガスとバクフーンは渾身（こんしん）の力を込めて体当たりした！
そして今までで一番大きな衝撃音がバトルフィールド中に響き渡った。
レジギガスとバクフーンはその一撃で互いに吹き飛ばされた。

「ふ～……やっぱ強いなあんた。
俺の分身が皆消されちまったよ（汗）」

苦笑いするバクフーン。先程の超高速バトルで、レジギガスに二人の分身を消されてしまったのだ。

「……強いのはお前もだ……久しぶりだぞ。
こんなにバトルが楽しいと思えたのはな。」

バクフーンとのバトルを心から楽しんでいるようだ。
少し興奮気味でレジギガスがそう言った。

「へへっ俺も今すっげー楽しいぜ！」

笑顔でバクフーンは言った。

バクフーンもこのバトルを思いっきり楽しんでいるようだ。

「さあ、続けようかバクフーン！」

再び構えるレジギガス。

「嗚呼（ああ）、楽しくバトルしようぜ！」

バクフーンも構える。

「行くぞ、冷凍パンチ！」

レジギガスは右手に冷気を纏わせ、地面を思いっきり殴った！

そして殴った先から冷気が地面を伝ってバクフーンに向かって行った！

冷気が通ったあとには氷柱が出来上がっていた。

「火炎放射！」

バクフーンは火炎放射を放ち、冷気を吹き飛ばした！

バクフーンの火炎放射で先程出来た氷柱が溶けて、バトルフィールドが水浸しに。

「雷パンチ！」

そこにレジギガスが雷パンチを使った！

水を伝って電気がバクフーンに向かっていく！

「同じ手は効かねぇよ！
身代わり！」

バクフーンは身代わりで分身を作り出した。
そしてその分身の背中に乗り、高くジャンプして電気を回避した。

「同じではないさ！」

高くジャンプしたバクフーン目指してレジギガスもジャンプしてきた！

「嘘っ！？　あの巨体でここまでジャンプしやがった！？」

驚くバクフーン。

「握り潰す！」

レジギガスはその巨大な手でバクフーンを握ろうとした！

「もう一度身代わり！」

バクフーンは再び身代わりを使い、自分の前に分身を作り出した。
そして分身に自分を地上に投げてもらいレジギガスの攻撃を回避した。

「逃さん！　ギガインパクト！！」

レジギガスは全体重を掛けて、バクフーンに向かっていった！
落下スピードも加わって破壊力は計り知れない！

「これで決めてやる！
うおぉぉぉ！」

バクフーンは凄まじい炎に包まれた。
ブラストモードだ！

「ブラストバーン！！」

バクフーンは最大パワーでブラストバーンを放った！
ブラストバーンはレジギガスに直撃した！
ブラストバーンを受けたレジギガスは天井まで吹き飛ばされた！
天井に身体をぶつけた後、レジギガスは地上に落下。
そのまま身体を打ちつけた。
レジギガスはピクリとも動かない。
どうやら戦闘不能のようだ。

「勝った……のか？」

キョトンとしているバクフーン。

「……終わったみたいだな……」

バトルフィールドにレジロックがやってきた。

「あっレジロック。」
「……ピラミッドキングに勝った証だ……受け取れ……」

レジロックはバトルピラミッドを勝ち抜いた証、ブレイブシンボルをバクフーンに手渡した。

「これがブレイブシンボル……サンキュー、レジロック！」

笑顔になるバクフーン。

「……うぅっ……」

その時、倒れていたレジギガスがゆっくりと起き上がった。

「……キング、久しぶりに見ましたよ……あなたが負けるところ……」

レジロックがレジギガスに言った。

「そうだな……だが、何だか良い気分だ……」

レジギガスは負けた事よりも楽しくバトル出来た事が嬉しいみたいだ。

「バクフーン、良いバトルをありがとう。」

軽く頭を下げてお礼を言うレジギガス。

「俺の方こそ、楽しいバトルだったぜレジギガス！　またやろうぜ！」

笑顔でバクフーンは言う。

バトルピラミッドでのバトルを終えた後、ポケモンセンターで一日休んだバクフーン達。
次の日の朝、見事バトルフロンティアを制覇する事が出来たバクフーン達は今、故郷に帰る為にバトルアイランドの港に来ていた。

「なあ、本当に一緒に行かないのかお前達？」

バクフーンがドダイトスとポリゴン2に言った。この二人、バトルアイランドに残ると言っているのだ。

「俺はお前達の手伝いって事でここに来た……そして昨日、その役目は終わった。
今度は自分の為にこのバトルフロンティアに挑戦しようと思うんだ。」

真剣な表情でドダイトスが言う。

「俺は……まだこの島の人達にちゃんと謝ってないからな……それと、ドダイトスと同じで……俺もバトルフロンティアに挑戦してみたいんだ。」

ポリゴン2も真剣な表情で言った。

「そっか……解ったよ。
バトルフロンティア、頑張れよ。」

バクフーンはドダイトス達を応援した。

『まもなく船が出航いたします。』

アナウンスが流れた。

「やっべ!?　急ぐぞ二人共!」
「あっ待ってくださいっすアニキ～!」
「待ってよ～!」

バクフーンとグラエナ、そしてジラーチは慌てて船に乗った。
三人が乗ったと同時に船が出航した。

船が出航してから一時間が経過。

「……」

船のデッキでぼーっと海を眺めているバクフーン。

「ほらほら、こっちっすよジラーチ～♪」

「あ～待ってよグラエナ～！」

バクフーンの後ろではグラエナとジラーチが楽しそうに鬼ごっこをしていた。

「はぁ……」

深くため息を吐くバクフーン、様子が変だ。

「ん？　どうしたんすかアニキ？」

グラエナがバクフーンの様子が変なのに気がついた。

「……これからどうしようかなぁって思ってさ……最初はポケモンリーグで優勝したいって目標があった……そしてこれは達成出来た。次に、母さん達でも制覇出来なかったバトルフロンティアの制覇……これも出来た。

だけど……もう目標が無いんだよなぁ……」

目標を全て達成してしまったバクフーンは今、やりたい事がないのだ。

「目標っすか……難しいっすね～……」

何か新しい目標を考えるグラエナ。

だけど、ちっともピンとこない。

「おい、何だあれ！？」

突然バクフーン達がいる反対側の方から騒がしくなってきた。

バクフーン達は騒がしい方に振り向く。

「ア、アニキ……あれって……」

グラエナが怯えている。

「……マジかよ……あれ……津波じゃねぇか！？」

バクフーン達が見た光景、それは船に向かってくるとてつもなく巨大な大波だった！

第九十二話　リベンジ！　バクフーンＶＳレジギガス！（後書き）

バクフーン
　ちょい作者！　津波来たぞ津波！？

作者
　来たね。

バクフーン
　なんでそんなに冷静なんだよ！？

作者
　まあ落ち着きなさい。
君達はあれで死んだりしないから。

バクフーン
　あっそうなの？　じゃあ良いや。

作者
　切り替え早いな君は（汗）

バクフーン
　そういえば作者、最近プロローグと第一話が修正されたみたいだけど？

作者
　うん、そろそろ最初の頃の酷い文章を直そうと思ってね。
時間があればどんどん直していくよ。

バクフーン
　頑張るねぇ。でもさ、結構量があるぜ？

作者
　なんとか頑張ります。

第九十三話　時空の死闘、ディアルガＶＳ深淵の闇・首領！（前書き）

とある異空間で、壮絶なバトルが始まろうとしていた。

第九十三話　時空の死闘、ディアルガＶＳ深淵の闇・首領！

「……何だ……この嫌な気配は……」

バクフーン達がバトルフロンティアを制覇し、故郷に帰る為に船に乗った時、バクフーン達がいる世界とまた違う異次元の世界で一人のポケモン、時の神と呼ばれるディアルガが不気味な気配を感じ取っていた。

「この嫌な気配……あっちからか……」

ディアルガは気配を感じる場所に向かって飛んでいった。

異次元世界。

「……こんな空間が存在したのか……」

少し驚いた表情をするディアルガ。

その空間には、バクフーン達が暮らす世界と同じように建物や草木が存在していた。
だが、一部の建物や草木は逆さまになっている。

「この空間に嫌な気配を出していた奴がいる筈だが……」

辺りをキョロキョロとして、嫌な気配を出している何かを捜すディアルガ。

「竜の波動！」

突然ディアルガの頭上からエネルギー弾が一発降ってきた！

「原始の力！」

ディアルガは頭上に無数のエネルギー弾を集め壁を作り、竜の波動を防いだ！

「何者だ！？　姿を現せ！」

怒鳴るディアルガ。

「……ふふふ……ディアルガちゃん、見〜つけた♪」

上空からディアルガの目の前に一人の巨大なポケモンがゆっくりと降りてきた。

「なっ！？」

驚きの表情をするディアルガ。

「ようやく会えたよ。
ずっと捜してたんだよ？
でもまさか、自分から僕の方に来るなんてね。」

まるで子供みたいに無邪気な笑顔を見せながらその巨大なポケモンは言った。

「お前……何故ここに……それに……どうしたんだその喋り方……」

ディアルガはこの巨大なポケモンの事を知っているみたいだ。

「あ～この身体のポケモンはディアルガちゃんとパルキアちゃんの親友だったね？
でも残念、もうこの身体は僕の物なんだ。彼の意識は深い闇の底で眠りについてるよ。」

相変わらず無邪気な笑顔を見せながら、その巨大なポケモンはそう言った。

「……貴様……一体何者だ？　ギラティナに何をした！？」

再び怒鳴るディアルガ。ディアルガの前にいる巨大なポケモン、それは伝説のポケモンのギラティナ（オリジンフォルム）だったのだ。

このギラティナはディアルガとパルキアの親友なのだが……今は別の何かが身体を乗っ取っているらしい。

「僕は闇……闇そのものさ……ダークネスとも言われているよ。
僕は心に闇を持っているポケモンだったら誰にでも寄生する事が出

来るのさ。
このギラティナの身体は居心地が良いよ。
これほど強い心の闇は中々無いからね。」

自らをダークネスと名乗るギラティナに取り憑いた闇。

「ギラティナから出ていけ！」
「嫌だよ。こんなに居心地が良い身体をそう簡単に手放したくないもん♪」

無邪気な笑顔でそう言うダークネス。

「ならば……力ずくで追い出してやる！」

戦闘体勢に入るディアルガ。

「戦う気？　この身体は君の親友なんだよ？」

首を傾げながら言うダークネス。

「ギラティナはプライドが高い奴だ……貴様のような奴に身体を乗っ取られたままよりも、倒された方がマシだと言う筈さ！」

ディアルガは本気のようだ。
ディアルガはエネルギーを集め始め、目の前に大きなエネルギー弾を作り出した。

「ふ～ん……親友の身体を盾にして君やパルキアちゃんをいたぶろうかなぁって思ってたのに……残念。」

残念がるダークネス。

「ラスターカノン！！」

ディアルガはそんなダークネスにお構いなしにエネルギー弾を放った！

「シャドークロー！」

ダークネスは、ギラティナ（オリジンフォルム）の身体から生えている触手のような物でディアルガのラスターカノンを突き刺した！

突き刺されたラスターカノンは爆発して消滅した。

「はい、残念でした～♪

それじゃあ、次は僕から行くよ……竜の波動！」

ダークネスは再び竜の波動をディアルガに放った！

「ならばこちらも竜の波動だ！」

ディアルガも竜の波動を放った！

二つの技がぶつかり合った次の瞬間凄まじい爆発が発生した！

「互角か……」

「そりゃねぇ、ギラティナちゃんは君とパルキアちゃんと互角に戦う事が出来る数少ないポケモンの一人なんだからね。」

余裕の表情で言うダークネス。

「あっ言い忘れてたけど、あまり僕との戦闘が長引くと現実世界が

大変な事になるからね♪」

無邪気な笑顔で言うダークネス。

「それはどういう事だ？」

「周りを見てごらんよ。」

ダークネスに言われ、ディアルガは周りを見てみた。

「何だ……あの泡のような物は？」

周辺にはシャボン玉のような丸い泡がいくつも浮遊していた。
その泡を良く見ると、現実世界の建物や海、その場にいるポケモン達など様々な光景が映し出されていた。

「この世界はこのギラティナちゃんの力を使って、僕が作り出したちょっと特別な世界でね。
あの泡を破壊すれば……現実世界にも影響があるのさ。」

不気味に笑うダークネス。

「現実世界に……影響が出るだと？」

「証拠を見せてあげるよ。そうだなぁ……あっじゃあこれにしようかな♪」

再び無邪気な笑顔を見せながら、ダークネスは一つの泡を割った。
ちなみにその泡に映し出されていたのは、リーフシティの近くにある自然豊かな緑溢れる森だった。

「上にある大きな泡を見てごらん？」

そう言われ、ディアルガは上を見た。
そこには確かに大きな泡が一つ存在していた。
その泡にはちょうどリーフシティの近くにある森が映し出されていた。
ディアルガがその光景を見た次の瞬間、森に突如衝撃波が発生し、大きな木々が次々になぎ倒されていった！

「なっ！？」

驚くディアルガ。

「こういう事になるんだよね～♪
あの大きな泡以外は割れやすいから、ちょっとの衝撃でも割れるんだ。
だから、僕との戦闘が長引けば長引く程、現実世界は大変な事になる。
お解り？」

首を傾げながら言うダークネス。

「……つまり、お前をすぐに倒せば良い訳だな。
なら、この戦いは一瞬で終わらせてやる。」

そう言うとディアルガは目を閉じて意識を集中し始めた。
すると、ディアルガの胸にあるダイヤモンドのような宝石が光り輝き始めた！

「……我が力を解放し、汝（なんじ）の時を封じる！」

ディアルガの胸から眩い光がダークネスに向けて放たれた！
ディアルガのこの光を浴びた者は時間を停められるのだ。

「このやり方はあまり好きでは無いのだが……そうも言ってられないのでな……これで終わりだ！」

ディアルガはダークネスに向かって突っ込んで行った！

「……竜の波動！」
「ぐはっ！？」

時間を停めたと思っていたダークネスが突然動きだし、ディアルガに至近距離で竜の波動を決めた！
ディアルガは吹き飛ばされ、建物に激突した！

「アハハハハ……引っかかった引っかかった～♪
残念だったね～ディアルガちゃん♪」

無邪気に笑うダークネス。

「くっ……どういう事だ……私の時間停止が失敗したとでも言うのか？」

驚きの表情をするディアルガ。

「さっきも言ったよね？
この世界は僕が作り出した特別な世界だって。
この世界では、ディアルガちゃんの時を操る力は封じられるんだよね～♪
つまり、今の君は普通のポケモンとなんら変わらないのさ。

この世界では……僕が神なのさ！」

自慢気に言うダークネス。

「竜星群！」

「うわっ！？」

ディアルガの無数に放ったエネルギー弾が全てダークネスに直撃した！

ダークネスは吹き飛ばされた！

「……私を甘く見るな。

たとえ時を操る力を封じられても、お前を倒す事は出来る！」

「イタタタ……やってくれたな～！　波動弾！」

ダークネスは波動弾をディアルガに放った！

「ドラゴンクロー！」

ディアルガはその鋭い爪でダークネスの波動弾を切り裂いた！

「なら、このギラティナちゃんの得意技でやってみようかな。

シャドーダイブ！」

突如、ディアルガの目の前からダークネスが姿を消した！

「シャドーダイブ……ギラティナにしか使えない技か……」

シャドーダイブ。

それはギラティナのみが使う技で、自分の姿を完全に透明にして、

相手を奇襲する技なのだ。
さらにこのシャドーダイブ、たとえ守るを使っても防御する事が出来ない技なのだ。

「はい背後からこんにちは♪　シャドーボール！」

ダークネスはディアルガの背後から現れ、シャドーボールを放った！
シャドーボールはディアルガの背中に直撃した！

「ぐっ……そっちか！
竜星群！」

ディアルガはすぐに振り向いて竜星群を放った！

「シャドーダイブ！」

ダークネスは再びシャドーダイブを使い、ディアルガの竜星群を回避した。

「またか！？」
「ほい今度はシャドークロー！」

またもディアルガの背後から現れたダークネスはシャドークローでディアルガを攻撃した！
ディアルガの背中に直撃する！

「ぐっ！？」

苦痛で表情を歪めるディアルガ。

「いくら鋼タイプを持っていても、同じ所を何度も攻撃されたら効くよね～♪　それ、もう一度シャドークロー！」

連続でディアルガにシャドークローで攻撃しようとするダークネス。

「調子に……乗るな！！
ラスターカノン！！」

ディアルガは素早く振り向き、ダークネスにラスターカノンを直撃させた！

「さらに竜星群！！」

ディアルガは怒涛（どとう）の攻撃で一気に勝負を決めようとした！
ディアルガの竜星群は全てダークネスに直撃した！

「……やったか？」

竜星群の爆発で発生した爆煙がゆっくりと晴れていく……

「……やってくれちゃったね～ディアルガちゃん……」

あれだけの攻撃を受けて、まだ倒れていないダークネス。

「もう僕は怒ったよ。
腹癒（はらい）せに現実世界を滅茶苦茶にしちゃうんだもんね！」

そう言ってダークネスはそこら中に浮遊している泡を手当たり次

第に割り始めた！

「なっ！？　止めろ！？」

「嫌だね、全部割って現実世界を壊してやるんだ！」

そう言ってまた一つ泡を割ったダークネス。

その割った泡には海が映し出されていた。

ディアルガは慌てて上にある大きな泡を見る。

次の瞬間、海に衝撃波が発生して大きな津波が発生してしまった！

そしてその津波が向かった先には一隻の船がいた。

その船とはバクフーン達を乗せた船だった。

次の瞬間には津波は船を飲み込んでしまった。

「何という事を……」

「アハハハハ！　そ～れ壊れろ壊れろ～！」

笑いながらダークネスは次々と泡を割っていく。

「止めろぉぉぉ！！」

ディアルガはダークネスに向かって突っ込んで行った！

（ふふ……来た来た♪）

ディアルガが向かって来るのを確認すると、不気味な笑みを見せるダークネス。

「ドラゴンクロー！！」

一気にダークネスに接近したディアルガはドラゴンクローで攻撃

しようとした。

「シャドーダイブ！」

ディアルガのドラゴンクローが当たる寸前で、ダークネスはシャドーダイブを使って一瞬で姿を消した！

「くっ！　何処に行った！」

辺りをキョロキョロとしてダークネスを捜すディアルガ。

「もらったぁぁぁ！」

ディアルガの背後から現れたダークネスは、ギラティナの身体から生えている六本の触手をディアルガの身体に突き刺した！

「ぐっ！？」

痛みを堪え、ダークネスを振り払おうとするが、ダークネスはディアルガから離れない！

「ふふふ……そういえば、まだ言ってなかったよね？　僕がディアルガちゃんを捜してた理由……」

次の瞬間、ディアルガは身体から力が抜けるような感覚に襲われた。

「力が……」

「僕がディアルガちゃんを捜してたのはね……君のパワーを奪う為だったんだよ♪」

笑顔で言うダークネス。

「私の……パワー……だと……」

「そっ。君の時を操る力……それと、パルキアちゃんの空間を操る力……この二つの力を僕の物にしようとしてるのさ。そして……現実世界を僕が支配するのさ。」

ダークネスがそう言った次の瞬間、ディアルガの身体に異変が起きた。

ギラティナの触手が刺さった箇所から、ディアルガの身体が灰色に染まり始めたのだ。

そして灰色に染まっていく度にパキパキッと乾(かわ)いた音が響く。

「なっ……貴様……私の身体に……何を……」

「君の力を奪った後、僕はパルキアちゃんを捜しにいく。もちろん力を奪う為にね。君は必ず邪魔をしようとするからね。だから、君には石になってもらうよ。身体を石にされれば、動きたくても動けないからね♪」

無邪気な笑顔で言うダークネス。

そして、ディアルガの石化は首の所まで来ていた。

「くっ……たとえ……私やパルキアの力を奪ったとしても……まだ……お前を倒す事が出来る者が……」

「例えばホウオウとかかな？」

ダークネスがそう言うとディアルガはそうだと答えた。

「あいつの……聖なる力なら……闇であるお前を……」

「それはどうかな～？
そのホウオウ自身が戦えなかったら無理だと思うけど～？」

そう言いながら、ダークネスはある方を見つめた。ディアルガも、その方向を見てみた。

「……そんな……」

ディアルガは驚いた。
何故なら、ディアルガが見つめる先には石化していたホウオウの姿があったからだ。

「残念でした♪
ホウオウはもう十九年も前に僕が石にしたんだよ。僕を倒せる力を持った奴を、放置しとくと思う？」
「……ホウ……オ……」

そこまで言いかけて、ディアルガの口が石化した。もう喋る事が出来ない。

「あっちなみに石になっても意識は残るから。
動けない石の身体でこれから世界がどうなるか、ここで見ててよ……ディアルガちゃん♪」

ダークネスがそう言った時、ディアルガは完全に石化した。
だが、ダークネスが言うようにまだ意識は残っていた。

（くっ……身体が……全く動かない……）

心の中で言うディアルガ。

「さて、じゃあディアルガちゃんはホウオウちゃんの隣に飾ってあげるよ♪」

ダークネスは石像となったディアルガを運び、ホウオウの隣に置いた。

「ふ～……ようやくディアルガちゃんの力を手に入れる事が出来たよ……ディアルガちゃんもパルキアちゃんも空間を移動してるから中々見つからなくて十九年も掛かっちゃったよ（汗）」

愚痴を言うダークネス。

「まっ後はパルキアちゃんだけだから良いけどね。さて、早速ディアルガちゃんの力……試してみようかな♪」

まるで新しいおもちゃを貰った子供のような笑顔で、ダークネスは何処かへと飛び去って行った。

（パルキア……気をつけろよ……）

石にされ、動けなくなったディアルガはただひたすら、パルキアの無事を祈っていた。

第九十三話　時空の死闘、ディアルガＶＳ深淵の闇・首領！（後書き）

バクフーン
　ダークネスって恐っ！？
　何よあいつ！？

まあ、今まで君が戦ってきた相手の中で史上最強の敵だよ。

バクフーン
　え～あいつと戦うのか俺！？

イエス。

バクフーン
　……逃げよう（笑）

こらっ！　主人公が逃げるんじゃない！

バクフーン
　う～……じゃあせめて、何かくれよ。
　そしたらやる気起きるかもよ？

何かって……じゃあポフィン１０年分は？

バクフーン
　やらせていただきます♪

切り替え早っ！？

第九十四話　新たな出会い（前書き）

津波に巻き込まれてしまったバクフーン達はどうなったのか……

今回はとある先生が書かれた小説のキャラクター達が僕のバクフーン達の冒険に登場します！

いわゆる、コラボってやつです！

あっちゃんと本人には許可をもらってますからね！

第九十四話　新たな出会い

「……ゲホッゲホッ……はぁ……はぁ……こ、ここは……？」

大津波に巻き込まれ、海に流されてしまったバクフーンはとある島の海岸で目を覚ました。

「はぁ……はぁ……あっグラエナ……ジラーチ……」

バクフーンは津波に流される時、グラエナとジラーチを守る為に二人を抱きしめていたのだ。

二人の事をしっかりと抱きしめていたので、二人共バクフーンと一緒だ。だが、気を失っていた。

「はぁ……はぁ……ダメだ……意識が……」

バクフーンはかなり体力を消耗していたみたいで、また気絶してしまった。

バクフーン達が流れ着いた島の中心。
そこにはとても大きな建物が存在していた。
その建物のドアから五人のポケモンが出てきた。

「しかしフィル、君って本当にお金持ちだったんだね？
こんな立派な別荘を持ってるなんて……」

別荘から出てきたポケモンの一人、メガニウムがフィルと呼ぶリーフィアに言った。

「ここは数多くある別荘の一つに過ぎないですよ。それに、ここはそれ程立派ではないですよ？」

笑顔であっさりと言うフィル。

「いや、充分立派なんだけど（汗）」

苦笑いしながらメガニウムが言う。

「ねぇフィル、この島で一番綺麗な場所って何処？」

そうフィルに質問しているのはラティアス。
とても元気がありそうな女の子である。

「そうですね～……あってしたら海岸なんてどうですか？
ここから南の方なんですが、とても綺麗な砂浜がありますよ。」

ラティアスに海岸をすすめるフィル。

「海岸……一緒に行こうブラキオ～♪」

「うわっ！？」

ラティアスは隣にいたメガニウム、ブラキオに抱きついた。
ブラキオはいきなりだったので顔が赤面している。

「ちょ、ちょっとルーチェ……皆が見てるよ（汗）」

明らかに動揺しているブラキオ。
そんなブラキオにお構いなくラティアス、ルーチェはブラキオに密着した。

「……お似合いだな。」

そんな二人を冷静に見つめるガブリアス。

「じゃあ皆、またあとでね♪　ほら、行くわよブラキオ♪」

半(なか)ば強引にブラキオを連れて行くルーチェ。

（良し、これでブラキオと二人きり……海岸であんな事やこんな事をブラキオと……ふふふ♪）

何やら色んな事を想像しているルーチェ。
自然と顔がにやけていた。

「ルーチェさん……頑張って下さい！」

何故かルーチェを応援するフィル。

「ところでフィル、この島にどこか修行が出来る場所はないか？」

腕組みしながらガブリアスがフィルに質問した。

「それでしたら島の北側に良い所がありますよ。」

「解った。うしだ、付き合ってくれ。」

ガブリアスは隣にいたケンタロス、うしだに言った。

「別に構わないが……別荘にまで来て修行かアクセル？」

少々呆れたような感じでガブリアス、アクセルに言ううしだ。

「じっとしてられないのさ。」

クールに言うアクセル。

海岸付近。

「……ねぇルーチェ、いつまでくっ付いてるつもりかな？」

海岸へと続く道を歩いているブラキオとルーチェ。ブラキオはちょっと赤面した表情で、ルーチェに聞いた。

「ずっと♪　ブラキオだって本当は嬉しいくせに～♪」

とびきりの笑顔で言うルーチェ。

「べ、別に嬉しくなんか……」

（本当は嬉しいけど。）

言葉とは裏腹に、実は結構嬉しかったりするブラキオ。

「ほら、やっぱり嬉しいんだ♪」

「あああ!?　今テレパシーを使ったな!?」

焦るブラキオ。ルーチェはテレパシーで相手の考えてる事が解るのだ。

「さあ何の事かしら?」

とぼけるルーチェ。

「はあ……（汗）」

（前にもテレパシーは禁止って言ってたのにな～（汗））

深くため息を吐くブラキオ。

「テレパシー禁止って言ってたっけ?」

「またテレパシー使った!?」

なんだかんだで……中々お似合いのブラキオとルーチェである。

海岸。

二人が色々と話してるうちに海岸にたどり着いた。

「へー……結構綺麗な場所だね。」

ブラキオが言う。

「さあってと……」

「何がさあってとなのかなルーチェ？」

首を傾げるブラキオ。

「決まってるじゃない。

こんな綺麗な場所で私とブラキオの二人だけなのよ？　当然……」

ルーチェがゆっくりとブラキオの顔に自分の顔を近づける。

（えええ!?　ちょっとルーチェ、これはつまり……あれですか!?）

そう心の中で言うブラキオをよそに、どんどん顔を近づけるルーチェ。

（やっぱりあれだ……確か一番最初にルーチェにされたのはあの森の中だったっけ？

あの時は寝ぼけてやられたんだよね（汗）

ルーチェとの最初に出会った時を思い出していたブラキオ。
もうルーチェの顔がブラキオの目の前まで……

「ん？　あれは……」

とその時、ブラキオの視界にあるものが入り込んだ。
ブラキオはそれが気になり、ルーチェから離れる。そしてルーチェのあれは空振りに。

「ってちょっとブラキオ！？」
「ねぇルーチェ、あれ何だろ？」

ルーチェの言う事をスルーして、ブラキオはルーチェに聞いた。

「うーん……」

ルーチェはブラキオが見てるものを良く目を凝らして見る。

「……ポケモン？」

首を傾げながらルーチェは言った。

「行ってみよう！」

そう言ってブラキオはそのポケモンに向かって走り出した。

「あっ待ってよブラキオ～！」
（ちぇっ……あと少しだったのに……）

残念がるルーチェ。
ブラキオを追ってルーチェもポケモンがいる所へ。

「……生きてる……よね？」

首を傾げながらブラキオはルーチェに聞いた。
ブラキオが見てる先には気を失って倒れているバクフーン達がいた。

「大丈夫、まだ息はあるわ。でも、何でこんな所に倒れてるのかしら？」
「解らないけど……とにかく、この人達をフィルの所へ運ぼう！ルーチェ手伝って！」
「うん！」

ブラキオとルーチェはフィルがいる別荘へバクフーン達を運んでいった。

別荘内の寝室。

「……うっ……」

バクフーンが目を覚ました。

「あれ？　ここは……」

「あっ目が覚めましたか？」

バクフーンが寝ていたベッドの横にいたフィルが言った。

「君は？」

「ボクはフィルと言います。」

礼儀正しく挨拶するフィル。

「俺はバクフーンって言うんだ。

あっ！？　そうだ、グラエナとジラーチは！？」

グラエナとジラーチを捜すために慌てて辺りをキョロキョロとするバクフーン。

「落ち着いて下さいバクフーンさん。

お仲間でしたら別室で今寝ていますから。」
「そ、そうなのか……はぁ～良かった～……」
胸をなで下ろしてほっとするバクフーン。
ガチャッ！
その時寝室に二人のポケモンが入ってきた。
ブラキオとルーチェだ。
「あっ目が覚めたんだね！　良かったね！」
笑顔でブラキオが言う。
「彼らはメガニウムのブラキオさん、そしてラティアスのルーチェさんです。
ブラキオさん達が倒れていたあなた達を助けてくれたんですよ。」
フィルがブラキオ達の事を紹介した。
「初めまして。僕はブラキオ。」
「私はルーチェ！　将来ブラキオのお嫁さんになる女の子よ♪」
そう言ってブラキオに抱きつくルーチェ。
「ちょっ！？」
赤面するブラキオ。
（俺の仲間のラティアスとは大分違うな～（汗））

ラティアスにも色々いるって事か……）

苦笑いしながらそんな事を考えるバクフーン。

「あんた達が俺達を助けてくれたんだな……俺はバクフーンだ。助けてくれてありがとうな。」

お礼を言うバクフーン。

「当然の事をしただけだよ。それより、どうしてあんな所に倒れていたんだい？」

首を傾げながらブラキオが聞いた。

バクフーンは故郷に帰る途中、津波に遭遇した事をブラキオ達に説明した。

「津波……大変な目にあったんですね。」

「正直死ぬかと思ったぜ（汗）」

（いや、普通死んでると思うんだけど（汗））

心の中でそう呟くブラキオ。

ぐぅ～……

「あっ（汗）」

バクフーンのお腹が鳴った。

「お腹空いたんですか？」

首を傾げながらフィルがバクフーンに聞いた。

「そういえば、船に乗ってた時に飯を食う前に津波に襲われたから、飯食えなかったんだよな（汗）」

「それでしたら、ボクが何か用意させましょう。そろそろお昼の時間ですからね。ブラキオさんとルーチェさんも一緒にどうですか？」

フィルがそう言うとブラキオ達は頷いて答えた。

別荘内の食堂。

グラエナとジラーチも目を覚まして、バクフーン達と一緒に食堂に来て豪華な料理を食べていた。

「美味い～♪　こんなに美味いもん食ったの初めてだ♪」

用意された豪華な料理を美味しそうに食べるバクフーン。

「おかわりはたくさんありますから、遠慮なく食べて下さいね。」

「マジで！？　よっしゃ～とことん食うぞ～♪」

バクフーンは次々と料理を平らげる。

バクフーンの前にはたくさんのお皿が積み重なっていく。

「相変わらずアニキは凄い食欲っすね（汗）」

苦笑いするグラエナ。

「本当に美味しいわね～この料理♪
まだまだいけるわよ～♪」

ここにもう一人、バクフーンに負けていないポケモンが。

ルーチェである。

ルーチェの前にも大量に皿が積み重なっていた。

「相変わらず良く食べるねルーチェ（汗）」

苦笑いするブラキオ。

（あのラティアス……結構出来るな……）

（あのバクフーン……意外とやるわね……）

バクフーンとルーチェの目が合う。
そして突然、食べる量を競い合うかのようにバクフーンとルーチェは料理をどんどん食べていく。

「おかわり！」
「私もおかわり！」

それから十分が経過。
バクフーンとルーチェはまだ食べていた。
もう二人の前には皿がたくさん積み重なって、かるくタワーのようになっていた。

（……あのルーチェと張り合うなんて……あのバクフーンやるな～。ってか、一体いつまで食べる気なんだこの二人（汗））

バクフーンとルーチェの食欲に呆れているブラキオ。

ガチャッ！

食堂に二人のポケモンがやって来た。
アクセルとうしだだ。

「ふ～……良い汗をかいたな。」
「俺はもうクタクタだぜ（汗）……って、なんだこりゃ！？」

バクフーンとルーチェが積み重ねた皿のタワーを見て驚きの表情

をするうしだ。

「あっうしだ、アクセル、お帰り。」
「ブラキオ、これは一体どういう状況だ？
ここで大食い大会でも始めたのか？」

腕組みしながらブラキオに聞くアクセル。

「いや、そういう訳じゃないんだけど（汗）」

ブラキオはアクセルとうしだに、簡単に今までの経緯（けいい）を説明した。

「……なるほど、理解した。」

頷くアクセル。

「は～……もう食えねー（汗）」
「私も～（汗）」

ブラキオがアクセル達に説明していた間に、やっと満腹になったバクフーンとルーチェが食べるのを止めた。
二人の前には数え切れない数の皿が積み重なっていた。

「ルーチェだっけ？
中々やるじゃんか。」
「あなたもね、バクフーン。」

何故か友情みたいなものが芽生えたバクフーンとルーチェであっ

た。

「終わったみたいだな。」

バクフーン達のフードファイトが終わったのを確認したアクセル達がバクフーン達の所へ。

「あら、アクセルにうしだじゃない。いつ帰ってきたの？」

「さっきからいたぞ。しかし……お前達良く食べたなこの量を（汗）」

二人が食べた量を見て若干呆れたようにアクセルが言う。

「あんたは？」

バクフーンが首を傾げながら聞いた。

「俺はアクセル、他の皆にはそう呼ばれている。ブラキオから大体の事は聞いてる。大変だったみたいだなバクフーン。」

「俺はケンタロスのうしだだ。よろしくなバクフーン！」

二人共バクフーンと挨拶した。

「アクセルにうしだか……俺はバクフーン。それから、こいつがグラエナでこっちがジラーチだ。」

バクフーンは二人にグラエナ達を紹介した。

「グラエナっす！
よろしくっす～！」
「ジラーチって言います。よろしくお願いします。」
グラエナ達もアクセル達に挨拶した。
「よろしく二人共。
なあバクフーン……一つ聞いても良いか？」
アクセルがバクフーンに言った。
「なんだ？」
「もしかしてお前は、チームブラストのリーダーのバクフーンじゃないのか？」
アクセルが腕組みしながら聞いた。
「そうだけど……知ってんのか？」
「アクセル、チームブラストって何？」
首を傾げながらブラキオがアクセルに聞いた。
「こっちの方ではかなり有名なチームの事だ。
ポケモンリーグと言われる大きなバトル大会で優勝したチームで、
バクフーンはそのチームのリーダーなんだ。」
アクセルがブラキオに詳しく説明した。

「へ～……じゃあバクフーンって結構強いんだ？」
「アニキは強いんすよ！
俺の憧れなんすから！」

目をキラキラさせながらグラエナが言った。

「憧れって……照れるじゃんかよグラエナ。」

右手を後頭部に当てながら言うバクフーン。

「強いといえば、ブラキオも結構強いぜ？」

うしだがブラキオを見ながら言った。

「確かにな。ブラキオはバトル大会でも優勝する実力を持っている。」

腕組みしながら言うアクセル。

「へ～そうなのか！
なあブラキオ、俺とバトルしないか！」

ブラキオが強いと聞いて、バクフーンはブラキオとバトルがやりたくなったようだ。

「えっ僕とかい？」

つるのムチで自分の事を差しながらブラキオが言った。
バクフーンは目をキラキラとさせながら頷いて答えた。

（バクフーンって……バトル大好きなんだね（汗）
すっごく解りやすいなぁ（汗））

苦笑いするブラキオ。

「やってみろよブラキオ！　ポケモンリーグチャンピオンとバトル
なんて滅多に出来ないんだからよ！」

うしだがバトルするようにブラキオに言った。

「う～ん……ＯＫ、解ったよ。」

ブラキオはバクフーンとのバトルを了承した。

「バクフーンさんとブラキオさんがバトルですか……これは見物で
すね！
二人共、バトルするのに良いところがありますからそちらに行きま
しょう。」

フィルの案内でバクフーン達はある場所に向かった。

別荘内、バトルフィールド。
別荘の中には本格的なバトルフィールドが存在していた。
「って、この別荘の中にはバトルフィールドもあったの!?」
驚くブラキオ。
「フィル、お前って結構金持ちなんだな（汗）」
（もしかしたらラグラージよりも金持ちかもしれないなフィルは（汗））
バクフーンも驚く。
「別荘の中にバトルフィールドがあるのは普通じゃないんですか?」
不思議そうな表情でフィルが言う。
「「いや普通じゃないから（汗）」」
バクフーンとブラキオが二人同時にフィルにツッコミを入れる。
「ま、まあ良いや（汗）
それより、早速始めるかいバクフーン?」
「おうよ!」
バクフーンとブラキオはバトルフィールドへ。

「審判は俺がやろう。」

審判台にアクセルが立った。

フィルやルーチェ達はバクフーンとブラキオのバトルの邪魔にならないように観客席の方へ移動した。

「アニキ～、頑張ってくださ～い！」

バクフーンを応援するグラエナ。

「ブラキオ～、頑張ってね～！」

ルーチェもブラキオを応援する。

「二人共、準備は良いか？」

アクセルが二人に聞く。二人共戦闘体勢に入った後、頷いて答えた。

「良し、それでは……バトル開始！」

アクセルの合図と同時にバクフーンとブラキオのバトルが始まった！

第九十四話　新たな出会い（後書き）

バクフーン
「本当にブラキオをレンタルしてきたよこの人（汗）しかもブラキオだけじゃなくルーチェ達まで（汗）」

いや～試しに言ってみるもんだね！
おかげで物語がどんどん思いついたからね！
ハーブさん、ありがとうございます！

バクフーン
「でもさ、なんで今回の話で俺とブラキオをバトルさせなかったんだよ？」

だってすぐにやっちゃうのは勿体無いって思ったんだもん！

バクフーン
「おいおい（汗）ブラキオ達をいつまでもレンタルする訳にはいかないだろうが（汗）」

次話ではちゃんとブラキオ達をハーブさんの所に帰すからさ。
……本当はちょくちょくこの小説に登場させたいんだけどね……

バクフーン
「聞こえたぞ～？
それよりも、このコラボに浮かれてあんたタクミやアスカ達の小説を放置してただろ？」

ギクッ！？　い、今から猛スピードでやるつもりだったんだよ！？

バクフーン
「本当かよ（汗）まあ良いや、ハーブ、こんな作者に協力してくれてありがとうな。」

本当にありがとうございます！

第九十五話　バクフーンＶＳブラキオ！（前書き）

バクフーンとブラキオ……勝つのはどっ……

バクフーン
「ただいま～……」

ってバクフーン！？
今ナレーション中なんだけど！？
ってか、ヒトカゲの所には行けたの？

バクフーン
「道に迷ってました（汗）
んで、途中ブラキオに会ってここまで送ってもらったと……」

あ～やっぱり道に迷ったんだ（汗）
ってそれより、もうすぐ君とブラキオのバトルが始まるからスタンバイして！

バクフーン
「あっそうだった！？
急げ～！？」

……オホン、失礼しました（汗）
では、バクフーンとブラキオの対決の始まり！

第九十五話　バクフーンＶＳブラキオ！

「いくぜブラキオ！
火炎放射！」

バクフーンはブラキオに火炎放射を放った！

「守る！」

ブラキオは守るを使い、自分の前にバリアのような壁を作り出して火炎放射を防いだ！

「次は僕の番だ！
エナジーボール！！」

ブラキオはエネルギー弾を作り出し、バクフーンに向けて放った！

「電光石火！」

バクフーンはエナジーボールが当たる寸前で、電光石火で素早く動いてエナジーボールを回避、そのままブラキオ目掛けて突っ込んで行った！

（は、速い！　避けるのは無理だ……なら！）

ブラキオは攻撃に備えて構えた。
そして、バクフーンの電光石火がブラキオに直撃した！

「今だ、カウンター！」

バクフーンの電光石火を受けると同時に、ブラキオはカウンターを仕掛けた！
カウンターは受けた物理攻撃のダメージを倍にして相手に返す技だ。

「うおっ！？」

この攻撃は予想出来なかったバクフーンはカウンターをまともに受けて吹き飛ばされた！
だけど、すぐに体勢を立て直す。

（ブラキオの奴、カウンターが使えたのか……だとすると、フレアドライブとか火炎車で突っ込むとあれで返り討ちって訳だな……）

今日のバクフーンは冷静だ。

「攻めるなら今だ！
タネマシンガン！！」

ブラキオは口からエネルギー弾をマシンガンの如く放ち、バクフーンを攻撃した！

「電光石火！」

バクフーンは電光石火で素早く動き、ブラキオのタネマシンガンを回避した！
ブラキオのタネマシンガンは地面に直撃した。

「火炎放射！」

バクフーンは再びブラキオに火炎放射を放った！

「なら守るだ！」

ブラキオは守るを使い、火炎放射を防御した。

「つるのムチ！」

すかさずブラキオは反撃でつるのムチを使い、バクフーンを攻撃した！

「おっと！」

バクフーンはバックステップして、つるのムチを回避した。

（良し、狙い通り！）

何故か笑みを見せるブラキオ。

そしてバックステップしたバクフーンは地面に着地した……その次の瞬間！　突然地面が光輝きだした！

光を放っていたのは、先程ブラキオが放ったタネマシンガンだった。

「いっ！？」

ドォーン！！

地面に埋まった無数の種が一気に爆発した！

バトルフィールドを爆煙が包み込む。

（大成功！　さっきのタネマシンガンは種爆弾と一緒に使っておいたんだよね！）

実はブラキオ、タネマシンガンと種爆弾のコンビネーション攻撃を仕掛けていたのだ。

地面に埋まった種爆弾は地雷のようになり、バクフーンがそこに着地した為に爆発が起きたのだ。……しばらくすると爆煙が晴れた。

「あれ、バクフーンがいない？」

不思議そうな表情をしているブラキオ。

何故なら、そこにいる筈のバクフーンがどこにもいなかったからだ。

「俺はここだブラキオ！！」

突然上の方から声が！

ブラキオは慌てて見上げた。そこには、ブラキオに向かって落下してくるバクフーンがいた！

「嘘っ！？」

「くらえ、オーバーヒート！！」

バクフーンはブラキオに向かってオーバーヒートを放った！

「守る！」

ブラキオは守るを使ってなんとかオーバーヒートを防御した。

だが、バクフーンの攻撃はまだこれで終わりではない！

「連続で守るは出来ないだろ！　火炎放射！」

すかさずバクフーンは火炎放射を放った！

「まだ防御手段はある、身代わり！」

ブラキオは身代わりを使い、自分の前に分身を作り出してそれに火炎放射を受けさせて自分の身を守った。

その間にブラキオはいったんその場から離れて、バクフーンとの距離を取った。

「あちゃ～、全部防がれたか～。」

残念そうな表情をするバクフーン。

「びっくりした～（汗）
一体どうやってあの爆発から……」

不思議そうな表情をするブラキオ。

「あ～あれ？　爆発する瞬間、俺は咄嗟（とっさ）に身代わりを使ったのさ。
それで、分身の背中に乗って爆発のダメージを回避、爆発の衝撃で空に上昇って感じかな？」

（あのわずかな時間で身代わりを……やっぱりそう簡単には勝てないみたいだね。）

心の中でそう言うブラキオ。

「さあ、バトルを続けようぜブラキオ！」

再びバトルする体勢に入るバクフーン。

「良いよ、続けよう！」

ブラキオもバトルする体勢に入る。

「久しぶりにこの戦法を使うかな？
まずは電光石火！」

バクフーンは電光石火で素早く動き、ブラキオの周囲をぐるぐると走り始めた。

「良し、炎全開！」

バクフーンは背中から最大パワーの出力で炎を出した。

「一体何をするつもりなんだ？」

考えるブラキオ。
その間にもバクフーンはひたすら走り続けていた。

（なんか……急に暑くなってきたぞ（汗））

バクフーンが出す炎により、バトルフィールドの温度は上昇していた。
そして徐々に陽炎（かげろう）が起き始めた。

（バクフーンの姿が歪んで見えるように……あっそうか陽炎！
これがバクフーンの狙いか！）

バクフーンの狙いに気づいたブラキオ。

「そろそろ攻めるぜ！
火炎放射！」

ブラキオの背後からバクフーンは火炎放射を放った！

「熱っ！？」

ブラキオは火炎放射を背中に受けてしまった！

「くっそこか！　エナジーボール！」

すかさずブラキオはエナジーボールを放って反撃した！
しかし、ブラキオのエナジーボールはバクフーンには当たらなかった。

「陽炎のせいで狙いが……なら、これならどうだ！　タネマシンガン、そして種爆弾！」

ブラキオはタネマシンガンと種爆弾のコンビネーション攻撃を仕掛けた！　バクフーンの炎に攻撃が当たった瞬間爆発が発生した！

「うわっ！？」

爆風でバクフーンは吹き飛ばされた！
それと同時に陽炎が消えた。

「まだいくよ！
エナジーボール！」

ブラキオは吹き飛ばしたバクフーンにエナジーボールを放った！

「くっ避けれない！？」

バクフーンはエナジーボールに備えて身構えた。

「あ、ちなみにそのエナジーボール……」

ブラキオがそこまで言いかけた時、エナジーボールがバクフーンに直撃した！　その瞬間爆発が発生した！
その爆発でバクフーンはさらに吹き飛ばされ、バトルフィールドの外の壁に身体をぶつけた。

「種爆弾を仕掛けたから爆発するよ。」

ブラキオはエナジーボールの中に種爆弾を仕掛けていたのだ。

「いって～……草タイプの技で、ここまでダメージをもらったのは初めてだぜ（汗）」

そう言いながら、バクフーンはバトルフィールドに戻ってきた。

（あれでも倒れないの！？
タフすぎるでしょ（汗））

苦笑いするブラキオ。

「ブラキオ、お前強いよ。世界には、まだブラキオみたいに強い奴がいるんだな……」

「えっ？」

いきなりだったので、ブラキオは首を傾げた。

「ブラキオ……俺の本気、見せてやるよ！
うおぉぉ！！」

次の瞬間、バクフーンは凄まじい炎に包まれた。ブラストモードだ！

（何……この凄いパワーは！？）

バクフーンのブラストモードを見て驚くブラキオ。いや、ブラキオだけじゃなく、ルーチェやアクセル、うしだにフィルも驚いていた。

「……次で決めるぞ、ブラキオ。」

バクフーンは炎のエネルギーを集め始めた。
「……僕の体力も残り僅(わず)か……この一撃で終わらせるよ！」
その時、ブラキオの身体から緑色のオーラが出現した！　特性の深緑が発動したのだ！
そしてブラキオもエネルギーを集め始める。
そして！
「ブラストバーン！！」
「ハードプラント！！」
バクフーンとブラキオ、二人が持つ最強の技が放たれ、二つの技は激しくぶつかった！
そして二つの技がぶつかった事により凄まじい爆発が発生した！
それからしばらくして、爆煙がようやく晴れた。バトルフィールドに立っているのは……
「はぁ……はぁ……良いバトルだったよ……ブラキオ。」
立っていたのはバクフーンだった。
ブラキオはその場で倒れていた。

「そこまでだな……ブラキオは戦闘不能、勝者はバクフーンだ。」

審判をやってくれたアクセルが言った。

別荘内、寝室。

「う～ん……あれ？」

寝室のベッドの上で、ブラキオが目を覚ました。

「あっ気がつきましたかブラキオさん？」

ベッドの隣にいたフィルがブラキオにそう言った。

「フィル？　ここは？」

「寝室ですよ。気を失ったブラキオさんをバクフーンさんが運んでくれたんです。」

フィルが笑顔でそう言った。

「じゃあ僕負けたんだ……そういえばバクフーンや他の皆は？」

辺りをキョロキョロとしながらブラキオがフィルに聞いた。

「バクフーンさんでしたら、今アクセルさんとバトルしてると思いますよ？」

別荘内、バトルフィールド。

「ドラゴンクロー！」

「電光石火！」

アクセルのドラゴンクローをバクフーンは電光石火で回避した。

「面白い奴だなぁ！

本当に攻撃すればする程に攻撃スピードが上がってやがる！」

楽しそうにしながらバクフーンがアクセルに言った。

「お前も凄い奴だ、ブラキオとバトルしたばかりだというのにまだ動けるとはな……」

バクフーンの体力に驚かされているアクセル。

再び別荘内、寝室。

「……化け物ですかあの人（汗）」

呆れた感じで言うブラキオ。

「アクセルさんがバクフーンさんとやりたいって言ったら、バクフーンさんは喜んでバトルを受けてましたよ。」

「そうなんだ（汗）
……バクフーンとアクセルは解ったけど、ルーチェやうしだ達は？」

首を傾げながら聞いたブラキオ。

「ルーチェさん達は冒険したいって言って島の西側にある洞窟に行きましたよ？」

島の西側にある洞窟内部。

「へ～……この島にこんな洞窟があったなんてね～……」

少し驚いている感じでルーチェが言った。

「しかしよ、お前達のリーダーって本当にバトルが好きなんだな？」

うしだが隣にいたグラエナとジラーチに言った。

「バトルが好きなのは俺も同じっすよ。」
「僕も～♪」
二人共笑顔で答えた。
（あ～……皆バトルバカって事なのな（汗））
苦笑いするうしだ。

また別荘内、寝室。

「……誰か僕の事を心配してくれる奴はいないのかい！？」
叫ぶブラキオ。

「ボクは心配しましたよ？」

笑顔で答えたフィル。

「はぁ……（汗）」

それから約一時間後にバクフーン達は戻ってきた。バクフーンとアクセルのバトルは、バクフーンの勝利だったようだ。

そしてルーチェ達はたっぷり冒険を楽しんだらしい。途中、道が岩で塞がっていた所をうしだがギガインパクトで壊したら岩雪崩が起きて大変だったらしいが……そしてブラキオはフィル以外に心配してもらえなかった事で、しばらくいじけていた……

次の日の朝。

「悪いなフィル、ヘリコプターなんて用意してもらって……」

バクフーン達はフィルが持っているヘリコプターの前にいた。

バクフーン達はこのヘリコプターに乗って、フレイムシティまで飛んでいくみたいだ。

「ボクに出来るのはこんな事くらいですよ。

エルレイドさん、バクフーンさん達を頼みましたよ？」

「解っております、フィルお嬢様。」

フィルの召し使いのエルレイドが礼儀正しく言った。

「ん？　フィル……お嬢様？」

その言葉に引っかかり、首を傾げたバクフーン。それにグラエナやジラーチも。

「言ってませんでしたっけ？　ボクは女ですよ。」

笑顔で言うフィル。

「初耳だそれは！？」

驚くバクフーン達。

「バクフーン、気持ちは解るよ。

僕も最初聞いた時は驚いたもん（汗）」

苦笑いしながらバクフーンに言ったブラキオ。

「お別れだねバクフーン。」

「だな……」

ちょっと寂しそうな二人。

「また何処かで会いましょ？　その時は昨日の決着をつけましょバクフーン！」

「おう、望むところだぜルーチェ！」

またフードファイトをしようと言うバクフーンとルーチェ。

「じゃあな皆！　いろいろ楽しかったぜ！」

「また会おうっす～！」

「バイバ～イ！」

バクフーン達はヘリコプターに乗った。

そしてヘリコプターは上昇し、フレイムシティへと飛んで行った。

第九十五話　バクフーンＶＳブラキオ！（後書き）

もう、君のせいで前書きがグダグダになったじゃん！

バクフーン
「すんません（汗）」

まあ、今回は許してあげるよ。

バクフーン
「あざーす♪」

……こいつ反省してねー（怒）

第九十六話　帰郷、そして再会！

フレイムシティ、噴水広場。

フィルの気遣いでヘリコプターに乗せてもらったバクフーン達はフレイムシティに無事帰ってくる事が出来た。

「サンキューなエルレイド！　フィルにはよろしく言っておいてくれ。」

バクフーンがここまで送ってくれたエルレイドに言った。

「かしこまりました。
では、私はこれで。」

エルレイドはヘリコプターに乗ってフィルが待っている別荘に帰って行った。

「さあ、久しぶりに帰ってきたぞ～！
あ～母さんの作った飯が食いたい♪」

フレイムシティに帰ってきて、嬉しそうなバクフーンである。

「この街がバクフーンが生まれ育った場所なんだね？」

ジラーチがバクフーンに聞いた。

「嗚呼(ああ)そうさ。

そういえばまだジラーチは母さんに会った事なかったな？」
「アニキの母さん、凄く料理が上手なんすよジラーチ！　木の実グリルなんかもう……」
バクフーンとグラエナはリリが作ってくれる料理を想像し始めた。
二人共口から涎（よだれ）が出ている。
「二人共、口から涎出てるよ（汗）」
苦笑いしながらジラーチは言った。
「もう我慢出来ねぇ！
早速家に向かってダッシュ！！」
「俺もっす！！」
リリの料理が無性に食べたくなったバクフーンとグラエナは家に向かって走り出した。
「あっちょっと待ってよ二人共～！？」
慌ててジラーチは二人を追いかけた。

フレイムシティ、リザードンの実家前。

「ん？　ちょっとストーップ！」

いきなりバクフーンが急停止した。
すぐ後ろを走っていたグラエナは顔からバクフーンにぶつかる。

「イタタタ……もう、いきなり止まんないでくださいよアニキ～（汗）」

両前足で鼻を押さえながらグラエナが言った。

「どうしたのバクフーン？」

今追いついたジラーチが首を傾げながらバクフーンに聞いた。

「いや……なんかリザードンの家が前と違う感じがしてさ。」

リザードンの実家を見ながらバクフーンが答えた。

「まさかそんな事……あるっすね（汗）」

グラエナも気がついたみたいだ。
リザードンの実家は木の実を売るお店で、そこまで大きな訳ではなかったのだが、今のリザードンの実家は凄く大きくなっていた。

「……宝くじでも当たったのか？」

腕組みしながら呟くバクフーン。

「ねぇ、そのリザードンって誰？」

ジラーチが首を傾げながらバクフーンに聞いた。

「俺の幼なじみで大親友なんだ。」

笑顔で答えたバクフーン。

「そうだ！　ねぇアニキ、せっかくっすからリザードンのアニキに会っていきましょうよ？」

グラエナがバクフーンに言った。

「そうだな！　良し、行くか！」

バクフーン達はリザードンに会う為にリザードンの実家の中に入って行った。

リザードンの実家の中。

「あ～チコちゃんが僕のお菓子食べた～!?」

「何の事かな～？」

小さな子供のポケモン……ヒノアラシがチコリータに叫んでいる。

チコリータはヒノアラシのお菓子を食べたのだが、ヒノアラシから外方（そっぽ）を向いて誤魔化している。

「鬼さんこっちら、手の鳴る方へ～♪」

「捕まえちゃうぞ～♪」

さらに別の子供ポケモン……ヨマワルとサボネアとバネブー、そしてプラスルとマイナンがワニノコに捕まらないように逃げている。

鬼ごっこをしているみたいだ。

「……リザードンの奴……孤児院を作るとは聞いてたけど、まさか自分の家を改装して孤児院にするなんて（汗）」

リザードンの実家でたくさんの子供達を見て驚いているバクフーン。

「お～い！　皆、ご飯の時間だぞ～！」

その時、子供達がいる部屋の奥の別の部屋から誰かが子供達を呼ぶ声が聞こえてきた。

『は～い♪』

子供達は皆待ってましたといった表情で声がした部屋へ走って行った。

「今の声は……」

その声に聞き覚えがあったバクフーン。

バクフーンは声がした方に向かって行った。

ジラーチとグラエナもバクフーンのあとをついて行った。

リザードンの実家の中、食堂。

「あ～またチコちゃんが僕のを食べた～!?」
「僕は知らなーい。」

どうやらまたもやチコリータがヒノアラシの物を横取りしたらしい。
だがチコリータは自分はやってないと言わんばかりの表情で惚(とぼ)けている。

「こらチコリータ!
人の物をとるなって前から言ってるだろ!」

そんなチコリータを叱っている一人のポケモン。そのポケモンとは……

「リザードン!」
「ん? お～バクフーンじゃんか!」

そのポケモンとはリザードンだ。
バクフーンがリザードンを呼ぶと嬉しそうな表情でリザードンが返事をした。

「いつ帰って来たんだよバクフーン?」
「ついさっきさ。それよりビックリしたぜ?
お前自分の家を改装して孤児院を作ったんだな?」

「嗚呼(ああ)。ラグラージの協力で、作る事が出来たのさ。」

腕組みしながらリザードンが答えた。

「ラグラージが……そういえば、メガニウムさんとジュカインさんはどうした？　姿が見えないみたいだけど……」

辺りをキョロキョロとしながらバクフーンがリザードンに聞いた。

「母さん達は食料を買いに行ってるよ。
こんなに子供達がいると、たくさん必要だからさ。」

子供達を優しい眼差しで見ながらリザードンは答えた。

「そっか……リザードン、しっかりと自分がやりたい事をやってんだな……」

「嗚呼……大変だけど、でも楽しくやってるよ。
そういえば、そこにいるのは誰だ？」

リザードンはジラーチを見ながらバクフーンに聞いた。

「こいつはジラーチ。
新しい仲間さ。」

「初めましてリザードンさん、ジラーチって言います。よろしくお願いします。」

礼儀正しく挨拶するジラーチ。

「俺はリザードンだ。
よろしくなジラーチ。」

笑顔でリザードンが言った。

「ところでバクフーン、お前バトルフロンティアはどうだったんだ？」

「ん？　へっへ～ん……これを見ろ♪」

バクフーンは自慢気にフロンティアシンボルが入ったケースを取り出し、リザードンに見せた。

「お～！　バトルフロンティアを制覇出来たんだなバクフーン！」

「おうよ♪」

満面な笑みで言うバクフーン。

「あっバクフーンさんだ！」

その時、バクフーンに声を掛けるポケモン達が。ゴースにゴースト、カゲボウズにヨマワル、そしてフワンテだ。

このゴーストポケモン達は以前バクフーン達がバトルアイランドで出会ったポケモン達である。

「お～お前達！　元気だったか？」

「お陰様で。あの時は本当にありがとうございました！」

ゴーストがお礼を言った。

「良いって事よ。」

「お前達、ちゃんと食器は片付けたのか？」

リザードンが腕組みしながらゴースト達に聞いた。

「あっ（汗）」

「……まだみたいだな（汗）ちゃんと食べた後は食器を片付けろって言ってるだろ？」
「ごめんなさいリザードンのお兄さん（汗）すぐ片付けるから。」
ゴースト達は食器を片付ける為に戻っていった。
「あいつら、元気そうで良かったよ。」
ちょっとホッとした表情をするバクフーン。
「あっそうだ！　なぁバクフーン、母さん達はまだしばらく戻って来ないんだけど……戻って来るまでちょっと手伝ってくれないか？」
リザードンがバクフーンに頼んだ。
「別に良いけど……何をすれば良いんだ？」
首を傾げながらバクフーンが言った。
「これから皆で遊ぶんだけど、皆の遊び相手になってほしいんだ。」
「遊びか……ＯＫ、手伝ってやるよ！親友のお前の頼みだからな！」
笑顔で言うバクフーン。
「俺も手伝うっすよ！」
「僕もやるよ。」
グラエナとジラーチも手伝うようだ。

「助かるよ。」

その後、バクフーン達はリザードンと一緒に子供達の遊び相手になる事になった。

それからバクフーン達はリザードンと一緒に子供達と遊ぶ事になったのだが、これが結構大変だった。

すぐ目を離すと、チコリータがヒノアラシに悪戯(いたずら)したり、プラスルとマイナンがふざけて電撃を放出したり、怪我をしては大変なので常に注意しなければならないバクフーン達。

だが……

「わ～い♪　こんなところに風船がある～♪」

プラスルとマイナンが風船があると言ってヒモを引っ張って喜ん

でいる……が、それは風船のように見えて風船ではない。フワンテだ。

そしてさっきからプラスルとマイナンが引っ張っているのはヒモではなく、フワンテの手だ。

「あっ!?　こ、こら二人共!　そんなに引っ張ると……」

バクフーン達が止めようとしたのだが……

「もう……止めて!!」

ボン!!

フワンテが怒って自爆を発動した!

「……ゲホッ……」

自爆を受けて、周りにいたバクフーン達や子供達の顔が煤(すす)で真っ黒に。

バクフーンは口から煙を出している。

「プラスルにマイナン……あとでお仕置きだからな（怒）」

怒っているリザードン。だが、顔が煤で汚れ黒くなっているので怒っていてもいまいち迫力がない。

それから約一時間後。

「ただいま～！」

ようやくメガニウムとジュカインが帰ってきた。

「……あら～（汗）
またフワンテの自爆を受けたの？」

苦笑いしながらメガニウムがリザードンに言った。

「う、うん（汗）プラスルとマイナンが悪戯したせいでね（汗）」

リザードンも苦笑いしながら答えた。

「お帰りなさいメガニウムさんにジュカインさん……」

リザードンの横でぐったりしているバクフーンが言った。
バトルとは勝手が違ったようで、さすがのバクフーンもお疲れのご様子。

「あら！　帰ってきてたのね！」
「久しぶりだなバクフーン。元気そう……でもないみたいだな（汗）」

苦笑いするジュカイン。

「リザードン……いつもあんな感じなのか？」
「まあな。手伝ってくれてありがとうなバクフーン。それにグラエナとジラーチもな。」

笑顔で言うリザードン。

「そういえばバクフーン、もうリリには会ったのか？」

ジュカインがバクフーンに聞いた。

「まだですけど？」
「なら、早く会ってやりなさい。
リリ、お前の事を心配してたぞ？」
「母さんが……解りました。リザードン、またな！」
「嗚呼！」

バクフーン達はリザードン達と別れ、リリが待っている家に帰っていった。

第九十六話　帰郷、そして再会！（後書き）

リザードン
「久しぶりに本編に復帰したぞ～！」

バクフーン
「本当に久しぶりだなぁリザードン！」

リザードン
「おう♪　そして作者、あんたに言いたい事がある！」

な、何でしょうか？

リザードン
「今回の文章、酷くないか？」

ごめん（汗）眠くてさ（汗）

バクフーン
「おいおい（汗）」

リザードン
「それともう一つ。
空の探検隊買ったらしいな？」

もちろんですよ！
あとポケモンカードとかポケスペのコミックとかね！

バクフーン

「金持ってんな～（汗）」

貯めてましたから。
空の探検隊は朝早くに買って早速プレイ！
そして僕がなったポケモンはリオルでした！

バクフーン
「へ～。確か、生意気な性格の男の子だとリオルになるんだよな？」

リザードン
「作者は生意気だったんだな。」

……間違いではないです（汗）そしてパートナーはイーブイ♀にしました。

バクフーン
「ヒノアラシじゃないのか！？」

リザードン
「ヒトカゲじゃないの！？」

だってイーブイ可愛かったんだもん♪

バクフーン&リザードン
「おいおい（汗）」

第九十七話　懐かしいメンバー

バクフーンの家。

リザードンの手伝いを終えた後、家に戻ってきたバクフーン達。
久しぶりに息子に会えたバクフーンの母親、リリは凄く喜んだ。
さらに、バクフーンがバトルフロンティアを制覇したと聞いた瞬間リリは大喜び！
「お祝いよ♪」っと言って、その日はリリが豪華な料理を作ってバクフーン達のバトルフロンティア制覇を祝った。

次の日の朝。

「いっただっきま～す♪」
「いただきますっす～♪」
「いただきま～す♪」

バクフーン、グラエナ、ジラーチの三人は仲良くリリが作った朝食を食べていた。

「あっそうだ！　坊や、ピカチュウちゃんから手紙が来てるわよ。」

朝食を食べている時、リリがバクフーンに手紙を一枚手渡した。

「ピカチュウから？
なんだろ？」

一度食事を中断し、バクフーンは手紙を読み始めた。

「よう！　久しぶりだな。元気にしてるかバクフーン？　俺は元気にジムリーダーやってるぜ！
妹のピチューも相変わらず元気だ。
今回手紙を書いたのは……実は今度、全ジムリーダーが集まったバトル大会みたいなもんが始まるんだ。
お前も知ってると思うけど、全ジムにはレベルが設定されてるだろ？言い方が悪いが……何処のジムが一番弱くて、何処のジムが一番強いのかを決める大会なんだ。
俺もライトニングシティのジムリーダーとして、この大会に出るんだ。
それで……この大会は一般の奴も見学出来るから……その……お前も来ないか？　……別に応援してほしいって訳じゃないぞ！　ただ、ちょっとお前の顔が見たくなっただけだからな！
場所はウォーターシティだ。気が向いたら来いよ。待ってるからさ。
ピカチュウより。」

手紙を読み終えたバクフーン。

「素直じゃないわねピカチュウちゃん。」

台所で食器を洗いながらリリが言った。

「ピカチュウらしいな。
えっと大会が始まるのは……明日の午後一時か。
しゃあない、応援しに行くか！」

ピカチュウを応援しに行く事を決めたバクフーン。

「俺もピカチュウのアニキを応援しに行くっす！」
「僕も行きたいな。
バクフーンの仲間なら、ちゃんと挨拶もしたいし。」

グラエナとジラーチもバクフーンと一緒に行きたいらしい。

「んじゃ皆で行くか！
あっそうだ、リザードンも誘うか！」
「それ良いっすね～♪」

段々盛り上がってきたバクフーン達である。

「バクフーン、ご飯冷めちゃうよ？」
「はっ！？　いかん、ご飯はホカホカの時が一番美味いのに！」

急いで朝食を食べるバクフーン。

「ア、アニキ、そんなに急いで食べると……」
「んぐっ！？」

バクフーンが苦しみだした。

「アニキが喉（のど）にご飯を詰まらせたっす～！？」
「わわわわ！？　は、はいバクフーン水！！」

ジラーチは急いでバクフーンに水の入ったコップを手渡した。
バクフーンは水を一気に飲む。

「ぷはぁ～……あ～死ぬかと思った（汗）」

まだ時刻は午前八時。
朝から騒がしいバクフーン達である。

翌日の朝、ウォーターシティ。

バクフーンはグラエナ、ジラーチ、そしてリザードンと共にウォーターシティにやって来た。

「うお～！　すっげー！　ウォーターシティにこんなバトルフィールドがあったのか！」

ウォーターシティの中心には巨大なバトルフィールドが用意されていた。

「ポケモン協会が作った特設のバトルフィールドってところだろうな。」

冷静に言うリザードン。

「ところでさリザードン……」

「も～らい♪」

「あ～！？　もうチコちゃん、返してよ僕の帽子～！？」

チコリータがヒノアラシが被っていた麦わら帽子を取ってしまった。

「皆で鬼ごっこしようよ♪」

「賛成～♪」

ワニノコの提案で鬼ごっこを始めたヨマワルとゴース、そしてサボネアにフワンテ。

「何で子供達全員を連れてきたんだよ？」

腕組みしながらリザードンに言うバクフーン。

「仕方ないだろ？
この子達が一緒に行きたいって言うんだから。
あっこらプラスルにマイナン！　それは店の商品だから勝手に触っちゃダメだ！」

プラスルとマイナンを注意しに慌てて走るリザードン。
「大変そうっすね、リザードンのアニキ（汗）」
苦笑いしながらグラエナが言った。
「お～い！」
その時、遠くの方からバクフーン達に声を掛けるポケモンが一人。
駆け足でそのポケモンはバクフーン達に向かってきた。
「ようラグラージ！」
バクフーンが手を振りながら言った。
バクフーン達に向かってきたのはラグラージだったのだ。
「久しぶりだなぁラグラージ！」
「本当だね！　ドダイトスから聞いたよ。
バトルフロンティア制覇、おめでとう！」
笑顔でバクフーンに言うラグラージ。
「サンキューラグラージ！　ところで、何でお前がここに？」
「ここは僕が住んでる街だよ？　いて当然。
それに、ピカチュウから手紙貰ったからね。
応援しに来たんだよ。」
腕組みしながらラグラージが言った。
「お前のところにも来たのか？　俺のところにも来たんだけど……」

そう言ってピカチュウの手紙を見せるバクフーン。

「本当だ……なんだピカチュウ……結局は皆に応援してほしいんじゃないか（汗）」

ちょっと呆れた表情をするラグラージ。

「あれ？　皆さんも来てたんですか？」

不意に声を掛けられたバクフーンとラグラージ。二人が振り向くとそこにはラティアスとラティオスがいた。

「あっラティオスにラティアス！　久しぶりだね！」

笑顔で言うラグラージ。

「お久しぶりですラグラージさん！」

「久しぶりだな。もしかしてお前達もピカチュウの手紙を貰ったのか？」

ラティオスがそう聞くと、バクフーンとラグラージは頷いて答えた。

「あいつ……皆に手紙出すって事は結構緊張してんのかもな？」

少し笑みを見せながら言うラティオス。

「ところで、お前達ポケモンレンジャーの仕事はどうしたんだよ？」

首を傾げながらバクフーンが聞いた。

「休暇を貰ったんです。
マニューラさんがたまにはのんびりして来いって言ってくれて。」

ラティアスが答えた。

「そうなんだ……ってあれ？　リザードンは何処行った？」

辺りをキョロキョロとするバクフーン。

「アニキ、彼処っすよ。」

グラエナが見つめる先をバクフーン達も見てみる。悪戯していたプラスルとマイナンを叱っているリザードンがいた。

「またあの二人か（汗）」

呆れた表情をするバクフーン。

「リザードンさん、もうすっかりあの子達のお兄さんって感じですね。」

笑顔で言うラティアス。

「だな。俺達も行こう。
リザードン一人じゃ大変だろうからな。」

ラティオスの言った事に皆頷いて答えた。
皆でリザードンのところへ。

「勝手に店の商品に触らない！　解ったな？」

腕組みしながらプラスルとマイナンに言うリザードン。

「「は～い。」」

返事をするプラスルとマイナン。

「本当に解ってんのかな（汗）ん？」

その時、リザードンの視界にあるポケモンが入った。

「どうしたリザードン？」

そこにバクフーン達がやって来た。

「あれ見てみろよ。」

リザードンはウォーターシティの市場がある方を指差した。

「う～ん……」

目を凝らして見るバクフーン。

「……あの片っ端から女の子に声を掛けてる黄色い奴は……やっぱりあいつか？」

ラティオスが言った。

ウォーターシティ、市場。

「そこの娘さん。僕と一緒にお茶でも飲みにいきませんか？
そして、将来の事をゆっくりと話ながら……」

若い女の子のキルリアに、跪(ひざまず)きながら喋りかける一人のポケモン。
何処から用意したのか、手には花束を持っている。

「ごめんなさい、私あなたに興味無いから。」

ストレートに言い切ったキルリア。
その場を去って行った。

「……これで三十連敗……俺の何処がいけないんだ……（泣）」

肩をがっくりと落として落ち込むそのポケモン。

「やっぱりピカチュウだったな（汗）」

そこにバクフーン達がやって来た。

「あっお前ら!?　……見てたのか（汗）」

バクフーン達は頷いて答えた。

「相変わらずですねピカチュウさん（汗）」

苦笑いしながらラティアスが言った。

「お～ラティアスちゃん久しぶり～！
再会を祝してハグしよう♪」

ピカチュウがラティアスに接近する。

「ラティアスは誰にもやらん！！」

ピカチュウとラティアスの間にラティオスが割ってはいる。

「に、兄さん（汗）」

「ラティオスが久しぶりにキャラが変わったよ（汗）」

ラティアスとラグラージが苦笑いする。

「……はは、このやり取り久しぶりだな。」

「……だな。」

急に笑顔になるピカチュウとラティオス。

「皆良く来てくれたな。
やっぱり手紙は書いてみるもんだな！」

腕組みしながら一人で頷くピカチュウ。

「しかしピカチュウ……あと二時間もすれば大会だろ？　良いのか

ここにいて？」

首を傾げながらラティオスが言った。

「じっとしてられなかったんだよ。
だからこうして市場に……」

その時、ピカチュウの視界の中に若い女の子のキレイハナが入った。

「そこの綺麗なお嬢さ～ん♪」

ピカチュウがキレイハナ目指して走り出した。

「……（汗）」

皆呆れた表情をしている。っとその時、ピカチュウを追いかける小さな影が。

「……お兄ちゃん！！」

その小さなポケモンはピカチュウに素早く近づき、ピカチュウの耳を引っ張る。

「イタタタタ！？」

思いっきり耳を引っ張られて痛がるピカチュウ。

「やっと見つけたわよ！
もう、こんな大事な日に何ナンパしてんのよ！」

「痛い痛い！？　悪かった、兄ちゃんが悪かったからピチュー、耳を放してくれ～！？」

耳を引っ張っているのはピカチュウの妹、ピチューだ。

「久しぶりに見たな、ピチューの必殺技（汗）」

苦笑いしながら言うバクフーン。

「良いかお前達。ああいう奴には絶対なっちゃダメだぞ。」

ピカチュウを見ながらリザードンは子供達に言った。子供達は皆頷いて答えた。

「って俺を悪い見本みたいに言うなよ！？」

「悪い見本でしょ！」

ピチューがさらに強くピカチュウの耳を引っ張る。

「イタタタタ！？」

それからしばらく、ピチューの説教が続いた。

「良い、もうナンパとかしないのよ！」

「……解りました（汗）」

正座しながらピカチュウが頷いた。

「ジムリーダーが正座して説教されてるよ（汗）」

苦笑いするラティオス。

「ピチュー、もうその辺で良いんじゃない？
ピカチュウさんも反省してるみたいだし……」

ラティアスが言った。

「う～ん……ラティアス姉ちゃんが言うなら良いわ。今日はこれで許してあげる。」

両手を腰に当てながらピチューが言った。
それを聞いたピカチュウはほっとして胸を撫で下ろす。

「バクフーン、君の仲間って個性的な人達ばかりだね。」

ジラーチがバクフーンに言った。

「だろ？　そして皆良い奴なんだ。
俺の自慢の仲間達さ♪」

笑顔でバクフーンは答えた。

「ねぇバクフーン兄ちゃん、その子は？」

ピチューがバクフーンに聞いた。

「まだ紹介してなかったな。こいつはジラーチ、新しい仲間さ。」
「よろしくお願いします。」

ジラーチが礼儀正しく挨拶した。

「アタシはピチュー。
よろしくね♪」

笑顔で言うピチュー。

「俺はピカチュウ。
将来世界一強いポケモンになる男だ！
覚えといてくれよ。」

腕組みしながら言うピカチュウ。

「僕はラグラージ。
よろしくねジラーチ。」

ラグラージも挨拶した。これで、ジラーチと初対面のピカチュウ達の挨拶は終わった。

「そういえば……ピカチュウ、時間は大丈夫なのか？」

首を傾げながらラティオスが言った。

「……あっ（汗）」

ちょうど近くに時計を売っている店があり、そこで売っている時計を見てピカチュウは焦りの表情を浮かべた。
いつの間にか時間は経っていて、大会まで残り三十分になっていた。

「やばい！？　急げ～！？」

慌てて試合会場に走るピカチュウ。

「あんな調子で大丈夫かあいつ（汗）」

ちょっと心配そうな表情をするラティオス。

「ピカチュウなら大丈夫さ。さあ、俺達も行こうぜ。ピカチュウを応援してやんなきゃさ！」

バクフーンがそう言うと、皆頷いて答えた。
そしてバクフーン達は大会が行われる試合会場へ。

特設バトルフィールド。

ポケモン協会が作った特設バトルフィールドには八人のジムリーダーが集まっていた。

そしてバトルフィールドを囲むように周りには観客席が用意されてある。すでに満席状態。

たくさんのポケモン達がこの大会を見ようと集まっていた。

その中には当然バクフーン達もいた。

「お前達、周りの人達に迷惑を掛けないようにな。」

リザードンが子供達に言った。

「は～い！」

子供達は素直にリザードンの言う事を聞いた。

（やっべー……すっげー緊張してきたよ（汗））

バトルフィールドにいるピカチュウは表情は冷静だが、内心凄い緊張しているようだ。

「……」

その時、ピカチュウの視界の中に腕組みをして静かに佇むバトルジムのリーダー、ルカリオとドラゴンジムのリーダー、カイリューのリュウが入った。

（あの二人落ち着いてるな～……）

ピカチュウがそんな事を思っていた時、何処からともなく審判のハッサムが現れた。

「お待たせしましたジムリーダーの皆様。
これよりバトルを開始します。
ルールは総当たりです。
一番勝利した数が多いリーダーが、全ジムリーダーＮｏ．１となります。
それでは、ライトニングジムのリーダー、ピカチュウ様、アイスジムのリーダー、マンムーのムウ様、バトルの準備を。
それ以外の方達はバトルフィールドから離れて下さい。」

なんといきなりピカチュウの出番がきた。
相手は最近新しくアイスジムのリーダーになったマンムーのムウ。
ジムリーダー新人対決だ。

（いきなり俺かよ（汗））

心の中で呟くピカチュウ。

「緊張するなピカチュウ。いつも通りにやれば良いんだ。」

ルカリオがピカチュウに近づき、そう言った。

ルカリオはピカチュウが緊張していた事を見抜いていたようだ。

「ルカリオ……」

「お前のバトル、見させてもらうぞ。」

最後にそう言って、ルカリオはバトルフィールドから離れた。

「いつも通りにか……」

ここでピカチュウは一つ大きく深呼吸をする。

「ふぅ～……良し、やってやるか！」

緊張が解けたようだ。

気合いを入れるピカチュウ。

「おめぇがオラの相手か……随分とちっこい奴だべな？」

ムウが挑発的な態度でピカチュウに言った。

「……バトルは体格で決まるもんじゃねぇよ。」

ムウを睨みつけながらピカチュウが言った。

「両者、準備は良いですか？」

ハッサムが聞くと二人は頷いて答え、戦闘体勢に入った。

「それでは……ライトニングジムリーダー、ピカチュウとアイスジムリーダー、ムウのバトルを始めます！　試合開始！」

ピカチュウとムウ、新人ジムリーダーのバトルが始まった！

第九十七話　懐かしいメンバー（後書き）

バクフーン
「久しぶりに旧チームブラストのメンバーが揃ったな！」

ピカチュウ
「俺久しぶりの本編復帰だぜ！」

ピチュー
「アタシもかなり久しぶりよね。」

ラグラージ
「今まで空気と言われ続けたけど……これから僕は目立っていくぞ！」

リザードン
「気合い入れるのは良いが、空回りしないようにな？」

ラティオス
「確かに。」

ラティアス
「程良く頑張っていきましょ、ラグラージさん。」

ジラーチ
「でもすぐ空気になりそうだよね彼（笑）」

お～……後書きなのに凄い賑やかになってしまった（汗）
ここにドダイトスやポリゴン2が加わると更に賑やかに……

ドダイトス&

第九十八話　目指せ、ジムリーダーＮｏ．１！　前編（前書き）

はい、ちょっと読者の皆さんに報告です。

リザードン
「何だよ報告って？」

このバクフーン達の冒険でもキャラ投票を始めようと思います！

リザードン
「マジか！？」

詳しい事は後書きで。

第九十八話　目指せ、ジムリーダーＮｏ．１！　前編

「行くぜデカいの！
高速移動！」

ピカチュウは高速移動で素早く動き、マンムーのムウを攪乱（かくらん）しようとした。

「そんな戦法、オラには効かねぇぞ！　地震！」

ムウは両前足で地面を強く踏みつけ地震を発動した！

「光の壁！」

ピカチュウは足下に光の壁を作り出し、その上に乗る。
さらに高くジャンプして地震を回避した！

「逃がさねえべ、氷の飛礫（つぶて）！」

ムウは氷のエネルギー弾を作り出し、空中にいるピカチュウに向けて放った！

「アイアンテール！」

ピカチュウは尻尾を鋼のように硬くして、氷の飛礫を打ち返した！
打ち返された氷の飛礫はムウに直撃した！

「くっ！？」
「へへ、ヒットだぜ！」

笑みを浮かべるピカチュウ。

「このっ原始の力！」

ムウは岩タイプの技、原始の力を発動した。
エネルギー弾がピカチュウに向かっていく！

「今度のはちとデカいな……光の壁！」

ピカチュウは光の壁を作り出す。
そして壁を強く蹴って、地上へと急降下して原始の力を回避した！

「身代わり！」

地面にぶつかる前に身代わりを使い、自分の分身を作り出したピカチュウ。分身をクッションの代わりにして安全に着地したピカチュウ。

「いって～……俺をクッションにすんなよもう一人の俺！？」

分身が怒っている。

「そう怒んなよ。
それより、あのデカいのを倒すのが先だろ。」

ムウを睨みつけながら言う本体のピカチュウ。

「だな……」

戦闘体勢に入る分身。
本体も戦闘体勢に。

「身代わりをそんな風に使うとは……おめぇ、チビのくせにやるでねぇか。」
「「……チビ？」」

本体と分身がその言葉に反応する。
実はピカチュウ、チビと言われるのが大嫌いなのだ。

「……おいもう一人の俺……あれやるぞ。」

本体のピカチュウがそう言うと、分身のピカチュウは頷いて答えた。

「身代わり……」

本体と分身がそれぞれ身代わりを使い、さらに分身を増やした。
ピカチュウが四人になった。

「これで終わらせてやるよデカいの……高速移動！！」

四人のピカチュウが高速移動を使った。
怒っているピカチュウのスピードは先程よりもさらに素早くなっている！　四人のピカチュウはムウを取り囲むようにして走る。

「終わりだ！！」

次の瞬間、四人のピカチュウは一斉にムウに向かって突っ込んだ！
そしてアイアンテールをムウに連続で直撃させた！

「かはっ……」

氷タイプを持っているムウに鋼タイプの技、アイアンテールは効果抜群。それを連続で決められたムウは耐えきれずに倒れた。

「アイアンテール・カルテット……言葉には気をつけな、デカいの……」

そうピカチュウが言った後、三人の分身は消えた。

「アイスジムリーダー、ムウ様戦闘不能！
よって勝者、ライトニングジムリーダー、ピカチュウ様！」

審判のハッサムが高々とコールした。
その瞬間、観客席から歓声があがった。

「やったじゃんかピカチュウ！」

バクフーン達もピカチュウが勝った事に喜んでいる。

「凄いですよピカチュウさん！」

ラティアスも喜んでいる。その時、ラティアスの声を聞いたピカチュウの耳がピクッと動く。
そして次の瞬間、ラティアスがいる観客席に向かってピカチュウがダッシュした。

「ラティアスちゃ～ん♪
見てた俺の活躍？

俺格好良かった？
俺に惚れちゃった？」

いつものピカチュウに戻っている。

（バトルしてる時は格好いいのになぁピカチュウさん（汗））

苦笑いしながら心の中でそう呟くラティアスであった。

その後、次々と各地のジムリーダー達がバトルしていった。
最初のバトルはピカチュウが勝利。
次に行われたのは、リーフジムのリーダー、ロズレイドとサンドロックジムのリーダー、バンギラス。このバトルは、砂を見事に操ったバンギラスが勝利した。
そして次はウォータージムのリーダー、ミロカロスとバトルジムのリーダー、ルカリオ。
このバトルはルカリオが圧勝した。

そしてフレイムジムのリーダー、コータスとドラゴンジムのリーダー、カイリューのリュウ。
勝者はリュウ。
コータスは善戦したが、リュウの方が格上だった。
こうしてジムリーダー達は最初のバトルを終えた。

「では、第二試合を始めようと思います。」

審判台に立っているハッサムが言った。
全てのバトルが終わってまだ間もないのに何故すぐに次のバトルを行えるのか……それは、ウォーターシティのポケモンセンターで働いているハピナスとラッキーのおかげである。
彼女達が卵産みというポケモンを回復させる技を使って、バトルで疲れたジムリーダー達を回復させているからだ。
その為スピーディーに大会が進められるのだ。

「まずサンドロックジムリーダーバンギラス様。バトルフィールドへ。」

ハッサムに呼ばれ、バンギラスがバトルフィールドへやって来た。

「続いて、バトルジムリーダールカリオ様。」

次に呼ばれたのはルカリオだった。

「ルカリオか……今日こそは必ず倒してやるぜ！」

相手がルカリオだと解った瞬間、闘志を漲(みなぎ)らせるバンギラス。

対照的にルカリオはいたって冷静である。

「それでは、試合開始！」

バンギラスとルカリオのバトルが始まった。

「最初から全力で行くぜ！　そらっ！！」

バンギラスは特性の砂起こしで砂嵐を発生させる。そして砂をルカリオに向けて放った！

「波動は我にあり……波動弾！」

ルカリオは両手でエネルギー弾を作り出し、砂に向かって放った！
ルカリオの波動弾は強力で、バンギラスの砂を簡単に吹き飛ばした！
波動弾はバンギラスに向かっていく！

「ちっ！　岩石封じ！」

バンギラスは右手で地面を強く殴りつける。
すると、バンギラスの目の前の地面から巨大な岩の壁が出現した！
バンギラスはこの岩の壁でルカリオの波動弾を防ごうとしたのだが、なんと波動弾は岩の壁を貫通してバンギラスに直撃した！
バンギラスは吹き飛ばされた！

「くっ！？　前よりもパワーが上がってやがる！？」

なんとか耐える事が出来たバンギラス。
だが、ルカリオが以前よりもパワーアップしている事に驚きを隠

せないでいる。

「私は常に己を高めようと修行しているのだ。以前より強くなっていて当然……さあ、まだバトルは始まったばかりだぞバンギラス。」

そう言った後、バトルする体勢に入るルカリオ。

「テメェに言われなくても解ってる！」

口が悪いバンギラスである。

「行くぞ。」

ルカリオが走りだした。バンギラスとの距離を詰めて接近戦にするつもりだ。

「おらっ！！」

再び砂嵐の砂をルカリオに放つバンギラス。

ルカリオに接近戦では勝てないと解っているバンギラスはなんとか近づけさせないようにしようとする。

しかし、ルカリオは軽やかなフットワークで砂を全て回避、あっという間にバンギラスに接近した！

「飛び膝蹴り！」

接近したルカリオはバンギラスに飛び膝蹴りで攻撃しようとした。

「くっ！？」

バンギラスは急いで砂の盾を作り出して、ルカリオの飛び膝蹴りを防御した。
だがルカリオはまだ攻撃をする。
次に身体をクルクルと回転させながら、バンギラスの頭に踵落(かかと)としを決めようとした。
これをバンギラスは両手を使って防御する。

「この野郎っ！　炎の牙！」

バンギラスは自分の牙に炎を纏(まと)わせてルカリオに噛みつこうとした。

「真空波！」

ルカリオは衝撃波を放ち、バンギラスを少し吹き飛ばした！
そのせいで、ルカリオから離れてしまい炎の牙を当てる事が出来なかったバンギラス。
その間にルカリオは安全に着地して、次の攻撃を仕掛ける！

「神速、そしてインファイト！！」

神速で素早く動きバンギラスに接近、そして神速のスピードを利用した超高速インファイトをバンギラスに決めた！

「ぐっ……」

意識が朦朧(もうろう)としてきたバンギラス。
そこにルカリオはジャンプして回し蹴りをバンギラスの顔に決めた！

バンギラスは倒れた。

「サンドロックジムリーダーバンギラス様戦闘不能！　よって勝者、バトルジムリーダールカリオ様！」

ハッサムが高々とコールした。

ルカリオは涼しい顔をしてバトルフィールドを離れた。

そしてジムリーダー達が休めるように用意されてあるベンチへ。

「さすがだなルカリオ。」

ベンチに座っていたピカチュウが言った。

「全力でやっただけだ。」

一言そう言うと、ルカリオはベンチに座る。

「全力で……ね……あんた、まだ全力じゃないだろ？」

腕組みしながらピカチュウがそう言った。

それを聞いたルカリオは少しだけ驚いた表情をする。

「何故……そう思う？」

「いや、なんとなくさ。

何て言うか……バクフーンとやりあった時よりもあまり楽しそうじゃなかったからさ。」

「ライトニングジムリーダー、ピカチュウ様。
バトルフィールドへ。」

二人が話をしてる時にハッサムがピカチュウを呼んだ。

「俺の番か……ルカリオ、俺と当たるまで負けんなよ?」

少し笑みを見せながらピカチュウはルカリオにそう言い、バトルフィールドへ向かった。

「……俺と当たるまで負けるな……か……あいつも面白い奴だな。」

笑みを浮かべるルカリオ。

バトルフィールドへ入ったピカチュウ。
気になる相手は……

「ドラゴンジムリーダー、リュウ様。
バトルフィールドへ。」

なんとドラゴンジムのリーダーであり、カイリューのお父さんでもあるリュウが相手に!

「……こんなに早くあんたと当たるなんてな。」

腕組みしながらピカチュウが言った。

「……さっきのバトルは見事だった。
だが、相手の発した言動に怒りをむき出しにしているようではまだまだだ。」

冷静に言うリュウ。

「忠告どうも。」
「両者、そろそろ準備はよろしいですか?」

ハッサムが二人に聞くと、二人は頷いて答えた。そして二人は戦闘体勢に入る。

「それでは、試合開始!」

ピカチュウとリュウのバトルが始まった!

第九十八話　目指せ、ジムリーダーＮｏ．１！　前編（後書き）

さて、ではキャラ投票の方法です。
メッセージを送る、もしくは感想でお願いします。あと、僕の携帯のメアドを知ってる方はメールでも構いませんから（笑）

この小説、かなりの数のキャラが出てますので一人に絞るのは難しいと思うので、お一人様三名までの好きなキャラを選んでいただいてもらいます。あと選んだ理由なんかも書いて下さい。
あっちなみにコラボでやってきたハーブさんのポケモン達は対象外です。
ハーブさんすみません（汗）

次に注意なんですが、過去にこの小説に★をつけて評価した事がある方は、感想を書く時に、評価しないを選択して下さい。
よろしくお願いします。

期限は……そうですね～……５月１０日くらいにしておきますかね。

リザードン
「ずいぶん適当だな（汗）」

あんまり長くするのもあれだしね。

結果発表はバクフーン達の冒険、キャラクター紹介でやります。
では、投票お待ちしておりますね。

第九十九話　目指せ、ジムリーダーＮｏ．１！　後編（前書き）

いやぁ、ようやく書けたよ（汗）

バクフーン
「ずいぶんと時間が掛かったな？」

ちょっとこっちにも色々とあったんだよ（汗）

バクフーン
「ふ～ん……まあ良いや。それより、今回ピカチュウはどうなんだ？」

それは見てのお楽しみって事で（笑）

第九十九話　目指せ、ジムリーダーＮｏ．１！　後編

「いくぜリュウ、１０万ボルト！」

まずピカチュウが１０万ボルトを放って先制攻撃した！

「竜の舞い。」

リュウは竜の舞いで攻撃力と素早さを上昇させながら１０万ボルトを回避した。

「燕返し！」

ここでリュウが得意コンボ、竜の舞いからの燕返しを繰り出した！
物凄いスピードでピカチュウに接近していく！

「高速移動！」

ピカチュウは高速移動で素早く動き、リュウのコンビネーション攻撃を回避した！

「影分身！」

ピカチュウは高速移動で移動しながら影分身を使い、無数の幻影を生み出した！
リュウを攪乱（かくらん）しようとしているようだ。

「その程度、竜巻で！」

リュウは身体を高速回転させて巨大な竜巻を作り出した！
全ての幻影は竜巻に飲み込まれて消滅した！
だが本体のピカチュウは何処にもいなかった。

（……地面には穴が空いてないから穴を掘るを使った訳じゃない……ならば……上か？）

冷静に考えながら、リュウは上を見上げた。
するとそこにはなんとピカチュウが！
あの時ピカチュウは光の壁を作り出してその上に乗り、竜巻が作り出す突風に乗って空へ上昇したのだ。

「ちっ気づかれたか！」

舌打ちをして言うピカチュウ。

「面白い方法を使って上手く竜巻を防御したな。
だが……空中では身動き出来まい！
ドラゴンダイブ！」

リュウが全速力でピカチュウがいる空中に飛んだ！　そしてドラゴンダイブでピカチュウに突っ込む！

「それが出来たりするんだよな！　光の壁！」

リュウが目の前まで迫った時、ピカチュウは再び光の壁を作り出す。
そしてその壁を強く蹴ってジャンプして、リュウのドラゴンダイブを回避した！
そのあとピカチュウはもう一度光の壁を作り、それを強く蹴って

地上へ！

「身代わり！」

地上に激突するギリギリのところで身代わりを使い分身を作り出したピカチュウ。

一回戦の時と同じように分身をクッションの代わりにして安全に着地した。

「またお前は俺をクッション代わりにしやがって（怒）」

やはり分身は怒った。

「そう怒んなよ。
それより、集中しないとあっという間に倒されるぞ今回の相手は……」

そう言いながら空中にいるリュウを見つめるピカチュウ。

「光の壁を使い、空中でも移動を可能にするとは……面白い奴だな。」

少し笑みを見せながら、リュウは地上へ舞い戻ってきた。

「ルカリオと戦うまでは温存しておこうと思っていたが……そうも言ってられないみたいだ。」

そう言うと、リュウは目を閉じて意識を集中し始めた。
すると、徐々にリュウの全身からエメラルドグリーンの色をしたオーラが現れた！

うちなる力を解放したのだ！

「あれは……前にドラゴンジムで見た……本気って訳か。なら、こっちも全力でやるか！」

ピカチュウは空を見る。ちょうどそこには大きな雲が存在していた。

（あの雲なら良い雷を落としてくれそうだな！）

「雷！」

ピカチュウは大きな雲に向けて雷を放った！

ピカチュウの雷は雲に直撃する。

雲は雷雲となり、自然の雷が発生した！

そして自然の雷がピカチュウとピカチュウの分身に向かって落ちた！

「ぐっ！？　相変わらず……キツいぜ……」

身体に走る激痛に耐えるピカチュウ。

そして徐々に自然の雷のエネルギーを身体の中に取り込んでいく。

「うおぉぉぉ！！」

大きな掛け声をあげるピカチュウ。

そして自然の雷を取り込む事に成功！

ピカチュウと分身の身体が金色に輝きだした！

「……ふぅ～……待たせたなリュウ、ライジングモードの完了だぜ！」

ピカチュウはこの状態をライジングモードと命名したみたいだ。

「さあ……始めようか！」

リュウが戦闘大勢に入る。

「嗚呼（ああ）！」

ピカチュウも戦闘大勢に入る！

「まずは身代わりだ！」

ピカチュウと分身がそれぞれ身代わりを使い、新たな分身を二人作り出した！

「行くぜ皆、高速移動！」

四人のピカチュウが一斉に高速移動で素早く動き、リュウの周りを走り始めた。

一方のリュウは目を閉じて意識を集中し始めた。

「くらえ！　アイアンテール・ライジングカルテット！！」

四人のピカチュウは一斉にアイアンテールでリュウを攻撃した！

その時、リュウが目を開けた！

「燕返し、そしてドラゴンクロー！！」

リュウは燕返しとドラゴンクローのコンビネーション攻撃で、ピカチュウの攻撃を全て弾き返した！

「ちっ！　電光石火！」

四人のピカチュウは電光石火でリュウを攻撃、リュウはそのままコンビネーション攻撃を継続。

そしてハイスピードバトルが始まった！

超高速で動きながら互いに技をぶつけ合う。

その度に衝撃と共に閃光が走る！

ライジングモードになっているピカチュウは、バクフーンのようにとはいかないが、スピードは二倍に跳ね上がっている。しかし、パワーだけならブラストモードになったバクフーンを凌ぐ！

一発でも攻撃が当たればリュウを倒せるのだ。

だが、リュウにそう簡単に攻撃が当たる訳がない。覚醒モードになったリュウは全ての能力が二倍に跳ね上がっている。

しかし、それだけではピカチュウの攻撃を相殺する事は出来ない。

そこでリュウは竜の舞いを使い、攻撃力を上げながら上手くピカチュウの攻撃を相殺させているのだ。

（さすが現ジムリーダーＮｏ．１だ……俺の攻撃を全部相殺させてきやがる……なんとかして動きを封じる事が出来れば……）

作戦を考えるピカチュウ。

「ドラゴンクロー！！」

作戦を考えている時にリュウがドラゴンクローを仕掛けてきた！

「……そうか！　この手があったじゃねぇか！」

何か思いついたピカチュウ！　まずピカチュウはドラゴンクローを紙一重で回避、一旦リュウから離れる。

「おい分身、ちょっと耳を貸せ……」

ピカチュウは分身達に思いついた事を説明する。

「え～……それ確実に俺達が犠牲になんじゃねぇかよ（汗）」

ちょっと嫌そうな表情をする分身二人。

「んな事言わねえでさっさとやれ（怒）」

怒る本体のピカチュウ。

「……はい（汗）」

渋々と承諾した分身二人。

「行ってやるよチキショー！！」

分身二人が電光石火でリュウに突っ込んでいった！

「何をするつもりかは知らんが……迎え撃ってやる！　ドラゴンクロー！」

リュウは向かってきた分身二人をドラゴンクローで攻撃！
ドラゴンクローは見事に分身二人に直撃し、分身は消え去った…
…が！

「くっ！？」

突然リュウは身体にビリビリと痺れを感じた。
ピカチュウの特性、静電気が発動したのだ。
静電気は物理攻撃をしてきた相手を麻痺させる事が出来るのだが
……そう簡単に発動しない。
しかし、分身は身体に雷を取り込んでいたので発動しやすくなっていたのだ。

「良し成功！　さあ、これで決めるぜ！」

ピカチュウと分身のピカチュウが高速移動でリュウに向かって突っ込んでいった！
そしてピカチュウ達は身体から電気を放出して、身体に纏(まと)わせた！　まるで電気の鎧だ！
リュウは迎え撃とうとするが、身体が麻痺していて思うように動けないでいる。

「デュアル・ライジングボルテッカー！！」

二人のピカチュウのボルテッカーがリュウに直撃した！
ボルテッカーを受けたリュウはバトルフィールドの外まで吹き飛ばされた！

「ハァ……ハァ……」

苦しそうに息をするピカチュウ。
分身はボルテッカーを決めた時の反動で消滅していた。
リュウは倒れたまま動かない。

「ドラゴンジムリーダー、リュウ様戦闘不能！
よって勝者、ライトニングジムリーダー、ピカチュウ様！」

審判のハッサムが高々とコールした。
その瞬間、周りにいた観客が大きな歓声をあげた。それもそうであろう。現ジムリーダーＮｏ．１であるリュウが倒されたのだから。

「ハァ……ハァ……か……勝ったぁ……」

ピカチュウはその場に大の字になって倒れた。

それから約数時間後。

リュウとの戦闘が終わったあと、ハピナス達に治療をしてもらい回復したピカチュウ。

リュウを倒した事により勢いに乗ったピカチュウはその後も勝ち続けた。気がつけば六連勝。

あと一人とのバトルを残すのみ。

そしてその残り一人の相手は今、第六回戦目のバトルを始めようとしていた。

「……ようやく、あなたと戦える事が出来る。

前回は負けたが、今回は私が勝たせてもらう！」

闘志を漲(みなぎ)らせるのはバトルジムリーダー、ルカリオ。

相手はピカチュウと激闘を繰り広げたドラゴンジムリーダー、リュウだ。ここまでルカリオは五連勝、リュウは四勝一敗。この二人は常にお互いを高めようとバトルを繰り返してきた……いわばライバル同士。

「お前相手に出し惜しみをしている場合ではないな……最初から本気でやるぞ、ルカリオ！」

リュウの全身からエメラルドグリーンの色をしたオーラが現れた！

「それは私も同じだ！」

ルカリオはうちなる波動の力を解放した。

ルカリオの全身から碧(あお)いオーラが現れた。

「それでは、試合開始！」

ルカリオとリュウのバトルが始まった！

「神速からインファイト！！」

「燕返しからドラゴンクロー！！」

試合開始直後から超高速ハイスピードバトルが展開された！

ルカリオは神速とインファイトのコンビネーション、リュウは燕返しとドラゴンクローのコンビネーションでぶつかり合った！

お互いに何度も攻撃をぶつけ合う！

お互いに一歩も譲らない攻防戦だ！

試合開始から三分が経過。まだハイスピードバトルは続いていたが、ここで流れを変えようとリュウが動く！

「はあぁぁぁ！」

リュウが渾身のドラゴンクローで攻撃した！

「見切り！」

ルカリオは見切りを使い、リュウのドラゴンクローを紙一重で回避した！　そして一気にリュウの懐（ふところ）に入り込む！

「うおぉぉ！！」

ルカリオは超高速インファイトをリュウに決めた！

「ぐっ！？」

苦痛に顔を歪めるリュウ。

「スカイアッパー！！」

攻撃の手を緩めないルカリオ。

ルカリオのスカイアッパーがリュウの顎（あご）に直撃した！

リュウは空中に吹き飛ばされた！

「これで終わらせる！」

吹き飛ばしたリュウを追って、高くジャンプしたルカリオ！

思いっきりジャンプしたルカリオはリュウの真上を取った！

（波動の力を右足に！）

ルカリオは右足に波動の力を集めた。

ルカリオの右足からは碧い炎が！

「はあぁぁぁ！！」

ルカリオは身体をクルクルと回転させて、踵落（かかと）としをリュウの腹に直撃させた！

リュウは地上へ落下し、地面に激突した！

リュウは倒れたまま動かない。

「ドラゴンジムリーダー、リュウ様戦闘不能！
よって勝者、バトルジムリーダー、ルカリオ様！」

ハッサムが高々とコールした。

「リュウ……」

ルカリオがゆっくりと倒れているリュウに近寄った。

「ふっ……到頭お前に負けてしまったな……」

負けたのに、何処か清々（すがすが）しい表情をしているリュウ。

「今度は、あなたが私を追い越す番ですよ。」

笑みを浮かべながら、ルカリオはリュウに手を差し伸べる。

「……嗚呼、そうだな。」

リュウはルカリオの手をしっかりと握り、立ち上がる。
その時、観客の皆が拍手をし始めた。
皆、ルカリオ達のバトルに感動したようだ。

「それでは、本日最後のバトルを始めます！
ピカチュウ様、ルカリオ様、バトルフィールドへ！」

ハッサムに言われ、ピカチュウとルカリオがバトルフィールドに入った。このバトルに勝った方が、ジムリーダーＮｏ．１になるのだ！

「やっとあんたと戦えるな。」

腕組みしながら言うピカチュウ。

「そうだな。
最初から全力でこい、ピカチュウ！」

ルカリオはうちなる波動の力を解放した。
ルカリオの身体から蒼いオーラが現れた！

「やってやるよ、雷！」

ピカチュウは空に浮いていた大きな雲に向かって雷を放った！
雷を受けた雲は雷雲となり、自然の雷が発生。
自然の雷はピカチュウに落下した！

「うおぉぉ！！」

そしてピカチュウは自然の雷を取り込み、ピカチュウの身体が金色に輝きだした。

ライジングモードだ！

「それでは、試合開始！」

ピカチュウとルカリオのバトルが始まった！

「いくぜ、高速移動から影分身！」

ピカチュウは高速移動と影分身のコンビネーションを使い、無数の幻影を作り出してルカリオを攪乱しようとした。

「その戦術は私には通じないぞ……そこだ！波動弾！」

ルカリオはピカチュウの波動を感じ取り、波動弾を放った！

「ちっ！　アイアンテール！」

ピカチュウはアイアンテールでルカリオの波動弾を打ち返した！

「波動弾！」

ルカリオはもう一度波動弾を放ち、ピカチュウが打ち返した波動弾にぶつけた！
ぶつかり合った二つの波動弾は爆発した！
爆発が起きた事で爆煙も発生。ピカチュウとルカリオはお互いに姿が見えなくなった。
だが、ルカリオには相手の波動を感じ取り、居場所を知る事が出来るので見えているも同然だ。

「神速！」

ルカリオは神速で素早く動き、ピカチュウに接近した！

「放電！！」

ピカチュウはルカリオが接近してくる事を予想していたようで、周囲に電撃を放出した！

「くっマズい！？」

爆煙が晴れていく……

「……やっぱりそう簡単に攻撃を受ける筈がないか……」

少し残念そうにしているピカチュウ。

ルカリオはメタルクローを使い、鋭く尖った爪を地面に刺し、身体に受けた電撃を地面に逃がしたのだ。

「正直、危なかったぞ。
あと少しメタルクローを出すのが遅かったら、確実に私はダメージを受けていた。」

正直に言うルカリオ。

「さすがだよルカリオ。
だけど、次の攻撃はどうかな？　身代わり！」

ピカチュウは身代わりを使って自分の分身を作り出した。
そしてさらに分身と一緒にもう一度身代わりを使って新たな分身を作り出す。ピカチュウが四人になった。

「カルテットか……」

構えるルカリオ。

「いくぜ、高速移動！」

ピカチュウ達は高速移動で素早く動き、ルカリオを囲むように走り始めた。

「アイアンテール・ライジングカルテット！」

四人のピカチュウが一斉にアイアンテールで攻撃した！

「見切り！」

ルカリオは見切りを使ってピカチュウの攻撃を回避しようとした。
だがその時、ピカチュウは笑みを浮かべた。

「そうくると思ったぜ！
フェイント！」

本体のピカチュウがアイアンテールを中断し、フェイント攻撃を仕掛けた！

「しまっ！？」

ピカチュウのフェイント攻撃が決まる！
ピカチュウの右ストレートがルカリオの腹部に直撃した！
そのせいで、集中力が切れて見切りが出来なくなった！

「今だ分身！」
「トリニティー・アイアンテール！」

三人の分身がアイアンテールをルカリオに決めた！　ルカリオは吹き飛ばされた！

「くっ……まだだ！」

吹き飛ばされたルカリオだが、すぐに体勢を立て直す。

「ちっタフな奴だな。
だが、次で決めてやるぜ！　高速移動！」

四人のピカチュウは高速移動でルカリオに向かっていった！

「……波動は我にあり……真空・波動弾！」

ルカリオが真空波と波動弾のコンビネーション攻撃を放った！
通常の波動弾よりも速い速度だ！
あまりに速すぎた為に、分身のピカチュウは回避出来ずに受けてしまった！　分身は消滅した。
だが、残ったピカチュウ達は走り続けた！

「真空・波動弾！」

ルカリオはさらにもう一発放ち、さらに分身を一人消滅させた！

（くっあれも偽物か！？）

少し焦り始めたルカリオ。身代わりで作り出した分身は本体と同じ波動を持っているので、見分けがつかないのだ。

「これで終わりだ！！」

残った二人のピカチュウが身体から電気を放出して身体に纏わせた！

「今度こそ……真空・波動弾！」

ルカリオは最大パワーで放った！

だが、直撃したのはまたしても分身だった。

「ライジングボルテッカー！！」

ピカチュウの最大パワーのボルテッカーがルカリオに直撃した！

「かはっ……」

ルカリオはその場に倒れた。

「ルカリオ様戦闘不能！
よって勝者、ライトニングジムリーダー、ピカチュウ様！」

ハッサムが高々とコールした。
その瞬間、観客が大きな歓声をあげた。

「ピカチュウが勝っちまったよ！　すげーよピカチュウ！」

今までずっと応援していたバクフーンがまるで自分の事のように喜んでいる。

それからしばらくして表彰式が行われた。
見事ジムリーダーＮｏ．１になったピカチュウ。
そしてルカリオがＮｏ．２、リュウがＮｏ．３になった。それ以外のジムリーダー達は……
バンギラスがＮｏ．４
ミロカロスがＮｏ．５
コータスがＮｏ．６
マンムーのムウがＮｏ．７
ロズレイドがＮｏ．８
という結果になった。

ウォーターシティ、飲食店。

「お疲れさんピカチュウ！　凄かったぜマジで！」

今バクフーン達はピカチュウがＮｏ．１になった事を祝う為に、ウォーターシティにある飲食店に来ていた。

「本当に凄かったですよピカチュウさん！」

笑顔で言うラティアス。

「ありがとうラティアスちゃん♪
お祝いに、キスを……ってイタタタ！？」
「はいはい、調子に乗らないでねぇ。」

ピチューの必殺耳を引っ張るが炸裂した。

「またいつものピカチュウだね（汗）」

苦笑いするラグラージ。

「まあピカチュウらしいけどな……ってこらお前達！　店の中で走り回っちゃダメだろ！？」

店の中を走り回っていた子供達を叱るリザードンであった。

場所は変わり、迷いの森。

「手始めにこの森で力を試してみようかな♪」

迷いの森上空に、ギラティナの身体を乗っ取っているダークネスがいた。今のギラティナの姿はアナザーフォルムになっている。
どうやらダークネスはこの迷いの森で、ディアルガから奪った力を試そうとしているようだ。

「それじゃ、早速……」

ダークネスは意識を集中し始めた。

「……はっ！」

ダークネスはエネルギー弾を迷いの森に放った！　エネルギー弾は迷いの森の中心に直撃した。
すると、迷いの森全体が眩い光に包まれた！

しばらくすると、光は消えた。
そして迷いの森は跡形もなく消えていた！

「時間の巻き戻し、成功っと♪」

満足そうな笑みを浮かべるダークネス。
どうやら迷いの森の時間を戻し、森を消滅させてしまったようだ。

「さすがディアルガちゃんの力だね。
あとはパルキアちゃんを捜し出して……っとその前に。ねぇ、ちょっと来てくれる？」

ダークネスがそう言うと、何もなかった空間に突如、黒い門のような物が出現した。
闇のゲートでも言うのか……そのゲートが開き、中から一人のポケモンが現れた。

「……お呼びですか？」
「うん♪　新入りの君に仕事をあげようと思ってね♪　彼処に街が見えるよね？」

ダークネスはウォーターシティを見つめながらそのポケモンに言った。

「……はい。」

そのポケモンは頷いて答えた。

「あの街をね、破壊してきてほしいんだ♪
一度君の力を見てみたいからね。」

笑顔で言うダークネス。

「……解りました、ダークネス様……」
「頼んだよ。あっそうだ、君は自然の力を操るんだったね？
なら……はっ！」

ダークネスは再びエネルギー弾を地上に放つ。
すると、消滅していた迷いの森の一部が復活した。

「時間の再生成功っと♪
さあ、あれで君の力をフルに使えるでしょ？」

ポケモンは頷いて答えた。そして、復活した迷いの森の中へ降りていった。

「楽しみにしてるよ……セレビィちゃん♪」

第九十九話　目指せ、ジムリーダーＮｏ．１！　後編（後書き）

バクフーン
「ライジングモードかぁ……やるなピカチュウも！」

Ｌｉｎｏさ～ん、一緒にピカチュウのライジングモードの名前考えてくれてありがとうございました～♪

バクフーン
「あれってＬｉｎｏと一緒に考えたのか？」

うん。メールで色々楽しい事を話ながらね（笑）
いやぁあのメールのやりとりは楽しかったなぁ♪

バクフーン
「なんか友達感覚だな作者（汗）
ってそれより、なんでセレビィがダークネスの仲間になってんだよ？」

それは次話で明らかになる……かもよ？

バクフーン
「かもかよ！？」

あっあと読者の皆さん、まだキャラ投票受付中なんで！　現在……まさかあのキャラが上位にくるとは！

バクフーン
「誰だ！？」

それは秘密です（笑）

バクフーン
「マジかよ（汗）」

あとさらに報告！
バクフーン達の冒険がプロローグを含めて、ついに百話に突入です！

バクフーン
「百かぁ……結構やってんだなぁこの小説。」

もう連載してから一年を過ぎたもんねぇ。

バクフーン
「この小説、一体何処まで続くんだ？」

……それは秘密さ（笑）

バクフーン
「そこは教えろよ！？」

嫌だ！ε＝┐（　・＿・）┌

バクフーン
「あっ待てこら！？」

第百話　チームブラストＶＳダークセレビィ！　前編（前書き）

バクフーン
「また前編と後編に分けんのかよ（汗）」

良いでしょ別に。

バクフーン
「まあ良いけどよ。
んで、今回はどうなるんだ？」

君達チームブラストとセレビィの対決だよ！

第百話　チームブラストＶＳダークセレビィ！　前編

迷いの森。

「……さすがは森の神と呼ばれるポケモンだね。凄い凄い。」

感心しているダークネス。何故なら、今セレビィが森の木々を念力の力で持ち上げ、自分の身体を覆い、新たな身体を作っているからだ。

セレビィの体長は０．６メートル。

その小さな身体を森の木々で覆い、巨大な怪物のような姿になっていた。体長は約３０．０メートル。ホエルオーの倍以上の大きさになっていた。

「名付けるなら、セレビィ・ゴーレムってとこかな？　さあ、君の力を見せておくれ♪」

ダークネスが子供みたいに笑いながら言う。

そして、セレビィ・ゴーレムはゆっくりとウォーターシティに向かって前進した。

ウォーターシティ。

「はぁ～食った食った♪
ラグラージ、ゴチになりま～す！」

満足そうな表情をしながらバクフーンが言う。
ピカチュウがジムリーダーＮｏ．１になったお祝いで飲食店で飲み食いしていたバクフーン達。
だが、ピカチュウがメインの筈だったのだがバクフーンの食欲が爆発。
いつの間にかバクフーンの大食い大会になってしまったのだ。
ピカチュウはあまり気にしてはいないようだが、皆の会計はラグラージが払う事になってしまった。

「はぁ～……何で僕が払わないといけないんだよ？」

溜め息を吐きながら、ちょっと不満そうな感じでラグラージが言った。

『だって一番お金持ってるから。』

皆が口を揃えて言う。

「……まあ、良いけどさ……そういえばこれからどうする？

ピカチュウ達はすぐに帰っちゃうの？」

首を傾げながらラグラージがピカチュウに聞いた。

「いや、もうしばらくこの街にいるつもりだ。
何せこの街には可愛い女の子達が……ムフフ♪」

ナンパする気満々のピカチュウである。
ちょっと顔がにやけている。

「お兄ちゃん、もう忘れてるみたいね？
ナンパはしないって約束……し・た・わ・よ・ね！！」

ピチューの必殺耳を引っ張るがピカチュウに炸裂した。

「イタタタ！？　わ、解った解りましたから、耳を離して～！？」

懇願（こんがん）するピカチュウ。
毎度のこととはいえ、懲りないピカチュウを呆れた表情をしながら見ているバクフーン達であった。

「……って、どうする？
もし良かったら僕の家に来る？」

ラグラージが皆に家に来ないかと誘ってきた。

「アタシ行きたい！
ラグラージ兄ちゃんの家がどんなのか見てみたいし。お兄ちゃんも……行くわよね？」

ちょっとピカチュウを睨みつけながらピチューが聞いた。

「は、はい、行かせてもらいます（汗）」

頷きながら答えたピカチュウ。
ちなみに今、ピカチュウの耳は強く引っ張られた為に赤く腫れている。

「俺達も行こうぜ！」

バクフーンがリザードン達に言うと、皆頷いて答えた。

「……ところでさラグラージ、お前ん家になんか美味い食い物あるか？」
「まだ食べる気かお前は！？」

バクフーンの質問に驚いているラグラージ。
他の皆はバクフーンの食欲に呆れ顔である。

「お、おい何だあれ！？」

その時、街のポケモン達が騒ぎ始めた。
皆、同じ方向を向いている。
何事かと思い、バクフーン達も街のポケモン達が見ている方を見てみる。

「なっ!?　なんだよあれ!?」

バクフーン達も驚いてしまった。
それもそうだろう。
とてつもなく巨大な怪物、セレビィ・ゴーレムが街に向かってきているのだから。

「おっ！　驚いてる驚いてる♪　良いねぇ、ポケモン達が慌てふためくあの感じ♪」

ウォーターシティの遥(はる)か上空、そこでダークネスは見物していた。
ダークネスはウォーターシティにいるポケモン達が慌てふためくのを楽しんでいるようだ。

「さあセレビィ、思いっきり暴れちゃってよ！」

そうダークネスが言うと、セレビィ・ゴーレムがその巨大な腕を振り下ろし、街を破壊し始めた！

「に、逃げろー!?」

街にいるポケモン達が慌てて逃げ始めた。

「俺達も逃げるぞ！
お前達、行くぞ！」

リザードン達も子供達を連れて逃げようとした。だが、バクフーンだけは逃げようとしなかった。

「おいバクフーン！
何してんだよ、お前も早く逃げろ！」

リザードンがそう叫ぶ。

「うおぉぉ！！」

突然バクフーンは、自分の身体を凄まじい炎で包んだ。
ブラストモードだ！

「お前達は逃げろ。
俺はあいつを止める。」

バクフーンはセレビィ・ゴーレムと戦うつもりらしい。

「な、何言ってんだよバクフーン！？
あんなにデカい奴と戦って勝てる訳がないでしょ！？」

驚きながらラグラージが言う。

「やってみなきゃ解らねぇだろ。」

そう言うとバクフーンは、セレビィ・ゴーレムに向かって走り出した。

「バクフーン一人行かせるのは危険だ！

ラティアス、行くぞ！」
「うん！」

ラティオスとラティアスもセレビィ・ゴーレムのところへと向かって行った。

「俺も行くぜ！　ピチュー、危ないからお前は子供達と一緒に避難してろよ！」

ピカチュウはそう言うとバクフーン達を追って走り出した。

「って子供扱いしないでよね！　アタシだってちゃんと戦えるんだから！」

ピチューまでもが走り出した。

「俺達も行くっすよジラーチ！」
「解ってるよ！」

グラエナとジラーチもセレビィ・ゴーレムのところへ向かおうとした。

「待ってくれ二人共！」

グラエナとジラーチをリザードンが呼び止めた。

「俺もバクフーン達と一緒に戦う！
だけど、その前にこの子達を避難させるのを手伝ってくれ。」

リザードンはすっかり怯えてしまっている子供達を見ながら言っ

た。

「解ったっす！」

グラエナとジラーチは頷いて答えた。

「ラグラージ、お前は先に行ってバクフーン達を援護してやってくれ。」

「はぁ～……結局こうなるんだよな（汗）解ったよ。」

ラグラージは渋々バクフーン達を追いかけた。

そしてリザードン達は子供達を安全な場所まで避難させる為にバクフーン達が向かった方向とは逆の方へ向かった。

「……近くで見るとデカいな……」

先にセレビィ・ゴーレムの近くにやって来たバクフーン。
その大きさに改めて驚いている。

「……やってやるか。
いくぜ化け物、火炎放射！」

バクフーンはセレビィ・ゴーレムの腹部に向かって火炎放射を放った！
セレビィ・ゴーレムはその巨体の身体の為か、動きが遅く、火炎放射は簡単に直撃した！
しかし、火炎放射が直撃した箇所が少し燃えただけで、セレビィ・ゴーレムは何事も無かったかのように街の破壊を続けた。

「効いてるのか解りやしねぇな……なら、頭はどうだ！　火炎放射！」

今度はセレビィ・ゴーレムの頭部に火炎放射を直撃させた！
だが、やはり効いてないみたいだ。
その時、セレビィ・ゴーレムがバクフーンの存在に気がついた。
そしてバクフーンに向けて、巨大な腕を振り下ろした！

「電光石火！」

バクフーンは電光石火で素早く動き、セレビィ・ゴーレムの攻撃を回避した。

「う～ん？　何だあのポケモンは？」

上空で見物していたダークネスがバクフーンに気づいた。

「抵抗しちゃってるよあのポケモン。
逃げ惑わないなんてつまらないなぁ……セレビィ！　そのポケモンを跡形もなく吹き飛ばしちゃってよ！」

ダークネスが大声でセレビィ・ゴーレムに言った。その時、バクフーンがダークネスの存在に気づいた。
しかし、ダークネスの存在よりも、バクフーンは一つの言葉が気になった。

（セレビィ……？
今あいつ、セレビィって言ったのか？）

心の中で呟く。
そして、改めてセレビィ・ゴーレムを見つめるバクフーン。
そしてバクフーンは、セレビィ・ゴーレムの口の中が光っている事に気づく。
その光をじーっと見つめるバクフーン。

「……なっ！？　セ、セレビィ！？」

その光とはセレビィ自身だったのだ。
セレビィがそこにいた事に驚くバクフーン。
しかし、驚いている間にセレビィはエネルギーを集め始めた。

「止めろセレビィ！！
俺が解らないのか！？」

バクフーンはセレビィに呼び掛けるが、セレビィはエネルギーを

集める事を止めない。
そして、エネルギーを集め終えたセレビィは極太のレーザーのような破壊光線をバクフーンに放った！

「「サイコキネシス！」」

その時、駆けつけたラティオスとラティアスがサイコキネシスを使い、セレビィが放った破壊光線の軌道をずらした！
軌道をずらされた破壊光線は海に直撃し、凄まじい爆発が発生した！

「大丈夫かバクフーン？」
「怪我はないですか？」

心配そうな表情で二人はバクフーンに聞いた。

「あ、嗚呼（ああ）。
大丈夫だ。」

バクフーンが無事だと解ると、ラティオスとラティアスは安堵（あんど）の表情を浮かべた。

「また抵抗するポケモンが来たよ……」

ダークネスはセレビィ・ゴーレムから逃げ惑わないポケモンがいる事に不満のようだ。

「お～い！」

その時、バクフーン達の所にピカチュウ、ピチュー、ラグラージが駆けつけてきた。

「お前達……逃げろって言っただろ。」

「お前一人残して逃げられっかよ。俺達も戦うぜ！」

腕組みしながらピカチュウがバクフーンに言った。

「……解ったよ……だけど、相手はやりづらい相手だぞ？セレビィだからな……」

バクフーンの言葉に、皆が驚きの表情を浮かべた。

「セレビィだって！？本当なのかそれ！？」

ピカチュウが聞いた。

「嗚呼……あの口の中にセレビィはいる。」

セレビィ・ゴーレムの口の中を指差しながらバクフーンが言う。

「……俺の声が全く聞こえてないみたいなんだ……」

「そりゃそうさ。今のセレビィには僕の声しか聞こえてないんだからね。」

今まで上空で見物していたダークネスが地上に降りてきた。

「何だお前は？」

ダークネスを睨みつけながらピカチュウが言った。

「初めまして、僕はダークネス。深淵（しんえん）の闇の首領さ♪」

子供のように笑いながら言うダークネス。

「君達はこのセレビィを知っているみたいだけど、今のセレビィは僕の闇の力の虜（とりこ）になって、ダークセレビィに生まれ変わったのさ♪」

また笑いながら言うダークネス。

「ダークセレビィ……だと？　お前がセレビィをこんな風にしたのか？」

バクフーンが聞いた。

バクフーンの表情は怒りに満ちている。

「そう言ったでしょ？」

無邪気に笑いながらダークネスは答えた。

「……許さねえ……火炎放射！！」

バクフーンは怒りの火炎放射をダークネスに放った！

「シャドーダイブ！」

ダークネスは一瞬で姿を消し、火炎放射を回避した！

そしてダークネスは再び上空へ。

「君達の相手は僕じゃないよ。セレビィ！
こいつらを消しちゃってよ！」

ダークネスがそう言うと、セレビィ・ゴーレムが動き出した。
巨大な腕をバクフーン達に振り下ろす！

「避けろ皆！」

バクフーン達はセレビィ・ゴーレムの攻撃を回避した。

「くっ……一体どうすればセレビィを元に戻せる……」

バクフーンはセレビィを元に戻せる方法を考える。

「雷！」

ここでピカチュウは、雲に向かって雷を放ち、雷雲を作り出した。
雷雲からは自然の雷が発生、自然の雷はピカチュウに落ちた。

「はあぁぁぁ！！」

ピカチュウは自然の雷を自分の身体に取り込んだ。すると、ピカチュウの身体は金色に輝き始めた。
ライジングモードだ！

「まずあのセレビィを包んでいる物をぶっ壊す。
セレビィを元に戻す方法はその後に考えるんだバクフーン！
１０万ボルト！！」

ピカチュウはセレビィ・ゴーレムの右腕に１０万ボルトを放った！
ライジングモードになり、強化された１０万ボルトは右腕に直撃し、凄まじい爆発が発生した！
１０万ボルトを受けた右腕は一部が破壊されていた。

「……そうだな。
良し、やるぞ皆！」

バクフーン達はセレビィ・ゴーレムを囲むような陣形を取る。

「一斉に攻撃するぞ！
オーバーヒート！！」

「ハイドロポンプ！！」

「雷！！」

「１０万ボルト！！」

「ラスターパージ！！」

「ミストボール！！」

バクフーンはオーバーヒート、ラグラージはハイドロポンプ、ピカチュウは雷、ピチューは１０万ボルト、ラティオスはラスターパージ、ラティアスはミストボールを放ち、セレビィ・ゴーレムを攻撃した！
全ての攻撃は直撃し、凄まじい爆発が発生した！

しばらくしてようやく爆煙が晴れてきた。
そしてバクフーン達はセレビィ・ゴーレムの姿を確認出来るように。
セレビィ・ゴーレムの両腕が消し飛んでいた。
「良し、この調子でセレビィをあの中から引きずり出すぞ！」
バクフーン達はもう一度攻撃体勢に入る。
「……ふふ、ダークセレビィの力はこんなもんじゃないよ♪」
上空で見物しているダークネスは不気味に笑っていた。

第百話　チームブラストＶＳダークセレビィ！　前編（後書き）

バクフーン
「セレビィ・ゴーレムって思いっきり映画のあれやん（汗）」

やっぱりあれは出したかったんですもん！

バクフーン
「てかさ、セレビィ・ゴーレムって本当にホエルオーの二倍なのか？」

……なんとなくイメージ的に（汗）

バクフーン
「イメージかよ（汗）」

これでも考えたんだよ？
最初はレックウザと同じ7メートルかなって思ったんだけど、絶対レックウザよりは大きいだろうって事で……あまり大きすぎるとまた変だから、ホエルオーの二倍がちょうど良いかなぁって思ったのさ。

バクフーン
「あっそうなの（汗）」

第百一話　チームブラストＶＳダークセレビィ！　後編（前書き）

バクフーン
「最近更新スピード遅くないか？」

ごめん（汗）
とにかくごめん（汗）

バクフーン
「いやそんなに全力で謝られても（汗）
まあ良いや、んで今回は？」

ダークセレビィとの戦いに決着がつくよ！

第百一話　チームブラストＶＳダークセレビィ！　後編

「おい……嘘だろ……」

驚きの表情を浮かべるバクフーン達。
何故なら、先程一斉攻撃で破壊したセレビィ・ゴーレムの両腕が再生したからだ。

「ちっ再生能力か……厄介だな……」

舌打ちをするピカチュウ。

「セレビィは森の神と呼ばれる伝説のポケモン、これくらいは当然だよ」

空で見物しているダークネスが笑みを浮かべながら言った。

「さあセレビィ！
そいつらに君の強さを見せてあげてよ！」

ダークネスがそうセレビィに指示をすると、セレビィ・ゴーレムの身体から無数の触手が出現した。そして、無数の触手はバクフーン達に向かってきた。

「電光石火！」

バクフーンは電光石火で素早く動き、襲いかかってきた触手を次々と回避していく。

「１０万ボルト！」

ピカチュウは襲いかかってくる触手に向けて１０万ボルトを放ち、迎撃した。

「きゃあ！？」

ピカチュウのすぐ隣でピチューが触手に捕まってしまった。

「ピチュー！？　このっアイアンテール！！」

ピカチュウはピチューに巻きついた触手をアイアンテールで切断した。

「大丈夫かピチュー！」

「う、うん！」

ピカチュウはピチューを抱え、一旦その場から離れた。

「ピチュー、お前はどっかに隠れてろ！」

ピチューに隠れるよう言うピカチュウ。

「な、何でよお兄ちゃん！？　アタシだってちゃんと戦えるのよ！」

「確かにそうだが……頼むよ、隠れていてくれ」

ピカチュウはピチューにもしもの事があってほしくないと思い、ピチューに隠れるよう懇願（こんがん）する。

「うわっ！？」

ピカチュウが懇願している時、ラグラージが触手に捕まってしまった。

「あいつ！？　良いなピチュー、大人しく隠れてるんだぞ！」

ピチューにそう言った後、ラグラージを助ける為にピカチュウはラグラージの所へ。

「……アタシだって……アタシだって、やれるんだから！」

「この、放せ！」

ラグラージは巻きついてきた触手を振り解こうともがくが、触手はなかなか解けない。

「ジッとしてろラグラージ、アイアンテール！」

そこにピカチュウがやってきて、アイアンテールでラグラージに巻きついていた触手を切断し、ラグラージを助けた。

「あ、ありがとうピカチュウ！」

「ったく、自分の身くらい自分で守れよな？」

少し呆れた表情をしながら言うピカチュウ。

「あっピカチュウ後ろ！？」

ラグラージが慌ててピカチュウに後ろを向くよう言う。
無数の触手が迫ってきていたのだ。

「しまっ！？」

「火炎放射！」

そこにバクフーンが火炎放射を放ち、無数の触手を燃やし、灰にした。

「す、すまないバクフーン、助かったぜ」

「気にするな。それより、油断するなよ。
また来たぞ！」

再び無数の触手がバクフーン達に襲いかかってきた。

「火炎放射！」

「１０万ボルト！」

「ハイドロポンプ！」

バクフーンが火炎放射、ピカチュウが１０万ボルト、ラグラージがハイドロポンプを放ち、触手を吹き飛ばした。

「ラティアス、同時攻撃であれを破壊するぞ！」

「解ったわ兄さん！」

セレビィ・ゴーレムの頭上にいるラティオスとラティアスは無数のエネルギー弾を作り出した。

『竜星群！！』

ラティオスとラティアスは二人同時に竜星群をセレビィ・ゴーレムに向けて放った。

無数のエネルギー弾が雨の如く降り注ぎ、セレビィ・ゴーレムに直撃、凄まじい爆発が発生した。

「やったか？」

爆発が生み出した爆煙でセレビィ・ゴーレムの姿を確認出来ないラティオス達。

しばし静寂が流れる。

「あっ危ない兄さん！？」

突然爆煙の中から触手が現れ、ラティオスに襲いかかってきた。
ラティオスを助けようとラティアスはラティオスを突き飛ばした。
そしてラティアスは触手に巻きつかれ、動きを封じられてしまう。

「うっ！？」

「ラティアス！？
くそ、ラティアスを放せ！！」

ラティアスを助けようとラティオスは身体に巻きついた触手を解こうとした。
だが、ラティオスの背後からまた別の触手が襲いかかり、ラティオスの身体に巻きついた。

「くっしまった！？」

ラティオスは振り解こうとするが、上手く身動きが出来ない。

「ラティオス、ラティアスちゃん！？
待ってろ、今行くからな！」

ラティオス達を助けようとピカチュウはセレビィ・ゴーレムに向かって行った。

「ラグラージ、ピカチュウを援護するぞ！」

「解ってるよ！」

ピカチュウを援護する為にバクフーンとラグラージもセレビィ・ゴーレムに向かって行った。
それに気づいたセレビィ・ゴーレムはバクフーン達に無数の触手を伸ばした。

「火炎放射！」

「冷凍ビーム！」

襲いかかってきた触手をバクフーンは火炎放射、ラグラージは冷凍ビームで迎撃した。

「ピカチュウ、触手は俺達に任せてラティオス達を！」

「解った！　任せたぜバクフーン！」

ピカチュウはセレビィ・ゴーレムの身体に飛び乗り、ラティオス達を捕まえている触手があるゴーレムの肩の部分を目指して登り始めた。
その間にも触手がピカチュウを捕らえようとするが、バクフーンとラグラージが援護して触手をピカチュウに近づけさせない。

「あと少しだ……」

ピカチュウはラティオス達を捕らえている触手まであと少しという所まで来ていた。

「待ってろよ二人共！
アイアン……」

ピカチュウはアイアンテールでラティオス達を捕まえてる触手を切断しようとアイアンテールを使う体勢に入った。
だがその時、突然ピカチュウの足下から触手が出現し、ピカチュウの身体に巻きつき動きを封じてしまう。

「くそっ!?　放しやがれ!」

もがくピカチュウだが、触手は解けない。

「ピカチュウ!?
ラグラージ、ピカチュウを助けに行くから援護を……」

「うわっ!?」

いつの間にかラグラージの背後に回り込んでいた触手がラグラージを捕縛した。

「ラグラージ!?　くそ、火炎……」

ラグラージを助けようとバクフーンが火炎放射を放とうとした。
しかし、背後から忍び寄った触手に捕縛されてしまう。
さらに、火炎放射を放てないように触手に口を塞がれてしまった。
ピチュー以外の皆がセレビィ・ゴーレムの触手に捕らえられてしまった。

「……アタシだって……ちゃんとやれるんだからね……」

その時ピチューは、セレビィ・ゴーレムの背中をよじ登っていた。
気づかれないように、セレビィ・ゴーレムの内部に侵入するつもりだ。

「はあ……はあ……」

息を切らしながらもピチューはセレビィ・ゴーレムの肩の部分まで登ってきた。

「あとは……何処か入れそうな場所を……あっ！？」

内部に侵入出来そうな場所を探している時、ピチューは触手に捕らえられているバクフーン達に気づいた。

皆、セレビィ・ゴーレムの口がある箇所の前に集められていた。

「君達は良く頑張ったほうだよ？
それは誉めてあげる……だけど、これでもうお仕舞いだよ！
セレビィ、そいつらを消し飛ばしちゃって！」

空で見物していたダークネスがセレビィに指示を出す。
それを聞いたセレビィはエネルギーを集め始めた。

「あ、あんなの受けたら、僕達一溜まりもないよ！？」

慌て始めたラグラージ。

（マズい……何とかしないと……だけど、口を塞がれていたんじゃ……）

口を塞いでいる触手を解こうともがくバクフーン。だが、触手は解けてくれない。
そうこうしているうちに、セレビィはエネルギーチャージを完了してしまった。

「お兄ちゃん達が!?
アタシが……アタシがやらなきゃ!」

ピチューは急いでセレビィ・ゴーレムの口の中から内部に侵入しようとした。
しかし、ピチューが侵入するよりも先に、セレビィの巨大な破壊光線が放たれてしまった。

(ダメだ!?)

バクフーン達は思わず目を瞑(つむ)ってしまう。

「サイコキネシス!!」

その時、バクフーン達の前にジラーチがやって来て、サイコキネシスでセレビィが放った破壊光線をコントロールした。
破壊光線はまるで時間を停められたみたいにその場で静止している。

「飛んでけっ!!」

ジラーチが両手を勢い良く空へ翳す。
すると、静止していた破壊光線が空へ急上昇、ダークネスに向かっていった。

「守る」

ダークネスは自身をバリアで覆った。
破壊光線はバリアに直撃、凄まじい爆発が発生した。

「た、助かったぁ～……」

安堵の表情を浮かべるラグラージ。

「お前ら無事か！」

「アニキ達、大丈夫っすか？」

バクフーン達の所にリザードンとグラエナが飛んでやってきた。
ちなみにグラエナはリザードンの背中に乗せてもらっている。

「今助けてやるから待ってろよ、火炎放射！」

リザードンは火炎放射を放ち、バクフーン達の身体に巻きついている触手を焼き切った。
そして、空を飛べないバクフーンをリザードンが抱え、ピカチュウはラティオスの背中に、ラグラージはラティオスとラティアスのサイコキネシスで浮かばせてもらい、安全に地上へ着地した。

「はぁ～……良かった、お兄ちゃん達……」

まだゴーレムの肩にいるピチューはピカチュウ達の無事を確認すると、ほっとして胸を撫で下ろした。

「……良し、行くわよ……」

気合いを入れるピチュー。ゆっくりとセレビィ・ゴーレムの内部に侵入していった。

「助かったぜリザードン、ジラーチ、それにグラエナ。サンキューな」

リザードン達にお礼を言うバクフーン。

「気にすんなよ。
仲間を助けるのは当たり前なんだからさ。
それより……近くで見るとマジでデカいなこいつ……」

セレビィ・ゴーレムを見つめながら、リザードンはそう呟いた。

「それと、何か変な奴が上にいるっすね……」

空にいるダークネスを見つめながらグラエナが言う。
ちなみにダークネスは、先程の破壊光線を守るで防御していたの

で無傷である。

「バクフーン、今どういう状況か説明してくれる？」

ジラーチがバクフーンに聞いた。

そしてバクフーンはジラーチ達に簡単な状況説明をした。

「……って訳だ」

「あいつがセレビィ！？

マジかよ！？」

驚きの声をあげるリザードン。

隣にいたグラエナも信じられないといった表情をしている。

「そのセレビィってバクフーン達の友達なんだね？　なら、早く助けてあげないとね！」

ジラーチはセレビィ・ゴーレムを見つめながらそう言った。

「……ってあれ？

皆、ゴーレムの様子が変だよ？」

セレビィ・ゴーレムを指差しながらジラーチが言った。

バクフーン達はセレビィ・ゴーレムの方に振り向く。

何故か、急にセレビィ・ゴーレムが苦しむような仕草をしだした

のだ。

「あっピカチュウのアニキ、あのゴーレムの口の中にいるの、ピチューじゃないっすか？」

「なんだって！？」

ゴーレム内部。

ピチューはセレビィを何とかゴーレムの外へ連れ出そうとしていた。

ちなみに、セレビィは植物の蔓（つる）のようなものに包まれている。

見た感じは昆虫の繭（まゆ）のようだ。

その繭からセレビィを引っ張り出そうとするピチューだが、セレビィはそれを拒否するかのようにピチューを電撃波で攻撃する。

「止めてセレビィ姉ちゃん！　アタシはただ、セレビィ姉ちゃんを

助けたいだけなの！」

セレビィの攻撃を回避しながら、必死に呼びかけるピチュー。

「……あなたは敵……敵は排除する……」

しかし、ピチューの叫びはセレビィには聞こえていないようだ。

虚ろな目をし、まるで生気がないセレビィ。

「もう、お願いだから止めてセレビィ姉ちゃん！」

「ラグラージ！　俺を彼処に向けて投げろ！」

外にいたピカチュウが、セレビィ・ゴーレムの口の中へ投げるようラグラージに頼む。

「えっ！？　でも……」

「良いから早くしろ、ピチューが危ないんだ！」

真剣な表情で言うピカチュウ。

「もう……解ったよ！」

そう言ってラグラージはピカチュウを手のひらに乗せる。

「いくよピカチュウ……せーのっ！！」

ラグラージはピカチュウをセレビィ・ゴーレムの口目掛けて全力で投げた。

「きゃあ！？」

ゴーレム内部では、ついにピチューがセレビィの攻撃を受けてしまい、その場に倒れてしまった。

「……あなたは敵……敵は排除……」

セレビィは黒い色をしたエネルギー弾を作り出し、ピチューに向けて放とうとしている。

「待ちやがれぇぇぇ！」

そこに、ラグラージによって投げ飛ばされたピカチュウがやってきた。

そしてピカチュウは、自分の身体に吸収した雷のエネルギーを尻尾に集め始めた。

「くらえ、ライジング・アイアンテール！！」

ピカチュウの渾身のアイアンテールがセレビィを覆っていた植物の蔓に直撃、アイアンテールは蔓を全て切断し、セレビィに直撃した。

アイアンテールを受けたセレビィは繭の外へ吹き飛ばされた。

「はあ……はあ……」

少し息切れを起こしているピカチュウ。

全ての雷のエネルギーを今の一撃に込めた為、ピカチュウのライジングモードが解けている。

「ピチュー……大丈夫か？」

心配そうな表情をしながらピチューに近づき、そう言ったピカチュウ。

ピチューは大丈夫だと言うように、頷いて答えた。

「……ピチュー、お前なんで一人でこんな無茶を……」

「……アタシだって……お兄ちゃん達と一緒に戦える……お兄ちゃん達の足を引っ張ったりしない……だから……」

自分が思っていた事を正直に話すピチュー。

「……ピチュー……お前の気持ちは解った……だけど、もうこんな無茶はすんなよ？」

そう言いながら、ピカチュウはピチューを優しく抱きしめた。

ピカチュウがピチューを抱きしめてからわずか数秒後、突然激しい揺れが発生した。

「な、なんだ！？」

驚きの表情を浮かべるピカチュウ。

「おいピカチュウ、ピチュー！　ゴーレムが崩れ始めたぞ！急いで脱出するんだ！」

外からバクフーン達の声が聞こえてきた。
セレビィを気絶させた事により、コントロールを失ったゴーレムが崩壊を始めたのだ。

「やばいな……ピチュー、俺にしっかり掴まってろよ！」

「う、うん！」

ピカチュウは背中にピチューを乗せる。
ピチューは落ちないようにしっかりと両手でピカチュウの肩に掴まる。
そしてピカチュウは、気絶していたセレビィを抱きかかえ、そのまま外に向かってジャンプした。

「ピカチュウ！」

外で待っていたリザードンがピカチュウ達をキャッチした。
そして、崩壊していくゴーレムから離れバクフーン達の所へ。

「ピカチュウ、ピチュー、大丈夫だったか？」

無事にバクフーン達の所へ来たピカチュウ達。
心配そうな表情をしながらバクフーンがピカチュウ達に聞いた。

「嗚呼（ああ）、大丈夫だ」

「心配かけてごめんね、バクフーン兄ちゃん」

二人共笑顔を作ってそう言った。

「……あ～あ……セレビィが負けちゃった。
君達意外にやるんだね？」

今まで空で見物していたダークネスが地上まで降りてきた。
少し驚いた表情をしながらダークネスは言った。

「お前……一体何が目的なんだ……何故セレビィにこんな事をした
!?」

怒りに満ちた表情でダークネスを怒鳴りつけるバクフーン。

「目的？　目的はこの世界を支配する事♪
セレビィを操ったのは、僕に従順な部下を作る為だよ♪　お解り？」

首を傾げながらダークネスが言った。

「……やっぱり……お前は許せねぇ……んなくだらない目的の為にセレビィを……くらえ、火炎放射！」

ダークネスに向けて怒りの火炎放射を放ったバクフーン。

「波動弾！」

ダークネスはエネルギー弾を放ち火炎放射にぶつけ、これを相殺させた。そしてダークネスは再び空へ上昇していった。

「お～怖い怖い！
悪いけど、君達と遊ぶのはまた今度ね♪
充分暇つぶし出来たし、僕は帰るよ。
開け、ダークゲート！」

ダークネスがそう言うと、突然何もなかった空間から黒い門のような物が出現した。

「それじゃあね～♪」

無邪気に笑いながら、ダークネスはダークゲートの中へ入っていった。
それと同時にダークゲートが消滅した。

「……何なんだよあいつ……」

ダークゲートがあった空を見ながらバクフーンが呟く。

「……うっ……」

その時、ピカチュウに抱きかかえられていたセレビィが気がついた。

「気がついたかセレビィ？」

心配そうな表情をしながらピカチュウが言った。

「……敵！」

いきなりセレビィはサイコキネシスで衝撃波を作り出し、ピカチュウ達を吹き飛ばした。

まだダークネスの力で操られているようだ。

「敵は排除……敵は全て排除……」

「あいつがいなくなってもまだ……どうやったらセレビィを元に戻せるんだ！？」

セレビィを元に戻せる方法を必死に考えるバクフーン。

『……任せろ……』

（えっ？）

突然、バクフーンの頭の中で声が響き渡った。
その声を聞いた瞬間、バクフーンは急激な睡魔に襲われた。

（なんだ……意識が……）

ここでバクフーンの意識が眠りについた。
代わりに別の意識が、ホウオウがバクフーンの中で目覚めた。

「……汝（なんじ）の中に宿りし悪しき力よ……我が聖なる炎を受け、消えされ！」

バクフーン（ホウオウ）が両手を前に翳す。
すると、セレビィの足下から凄まじい炎が発生。火柱となってセレビィを包み込んだ。
聖なる炎に包まれて瞬間、セレビィは悲鳴をあげる。

「ちょっ！？　アニキ、相手はセレビィっすよ！？
攻撃を止めるっす！」

グラエナが慌ててバクフーン（ホウオウ）に止めるよう言う。

「……案ずるな……これは攻撃ではない」

聖なる炎でセレビィを包み込んだまま、バクフーン（ホウオウ）がグラエナに言った。

「攻撃じゃないって……あんなに苦しがってるのではない。
あの者の中にある悪しき力が苦しんでいるのだ。

「あれはあの者が苦しがってるじゃないっすか！？」

見ろ」

バクフーン（ホウオウ）に言われ、グラエナはセレビィを見る。

「な、なんすかあれ!?」

驚きの表情をするグラエナ。グラエナが見た光景、それはセレビィの身体からどす黒いオーラのようなものが抜けていく光景だった。

「……悪しき力よ……滅せよ!」

バクフーン（ホウオウ）が翳していた両手で握り拳を作る。
すると、聖なる炎の火力がさらに強くなり、どす黒いオーラのようなものは跡形もなく消滅してしまった。
オーラが消滅すると、セレビィはその場で倒れてしまった。

「セレビィ!?」

グラエナ達がセレビィの所へ駆け寄る。

（……これ以上、私が目覚めた状態が続くのは危険だな……ダークネスに感づかれてしまう……）

バクフーン（ホウオウ）は目を閉じ、再び眠りについた。
そして今まで眠っていたバクフーンの意識が目覚める。

「あれ?　俺今まで何やってたんだ?
うおっ!?　セレビィがぶっ倒れてる!?」

ホウオウが身体を借りていた間、バクフーンにはその間の記憶が

無いのだ。バクフーンは慌ててセレビィの所に駆け寄る。

「セレビィ！」

バクフーンは気絶しているセレビィに呼びかける。まだ息はあるが、目を覚まさないセレビィ。

「とにかく、セレビィをポケモンセンターに連れて行こうよ！」

ラグラージの提案に皆頷き、セレビィをポケモンセンターに運んでいった。

第百一話　チームブラストＶＳダークセレビィ！　後編（後書き）

バクフーン
「なんか途中記憶が飛んだんだけど……その間俺何してた？」

えっと、君本人は眠ってたね。

バクフーン
「なぬ！？　あんな一大事の時に寝てたんか俺！？」

まあ落ち着いて（汗）
あっ今度はタクミを執筆しなくちゃ（汗）
それっε＝┌（　・　＿・）└

バクフーン
「走っていったよ（汗）
ってか、今からタクミを執筆かよ（汗）」

第百二話　十九年前の出来事（前書き）

バクフーン
「今回はどうなるんだ？」

ホウオウ達に何があったのかが解ります。

第百二話　十九年前の出来事

傷ついたセレビィをウォーターシティのポケモンセンターに運んだバクフーン達。
今、セレビィは治療を受けている最中だ。

「セレビィ……」

心配そうな表情をするバクフーン。
今バクフーン達はポケモンセンターのロビーにいる。

「大丈夫かな……セレビィ……」

ラグラージも心配そうな表情をしている。

「……ふぅ～……」

その時、セレビィを治療していたハピナスがバクフーン達の所へやってきた。

「ハピナス！　セレビィは？」

バクフーン達はハピナスに駆け寄り、セレビィの事を聞いた。

「大丈夫、ちゃんと治療したわよ。
今は寝室で眠ってるわ」

優しい笑顔でハピナスはバクフーン達にセレビィの治療が成功した事を伝えた。

それを聞いたバクフーン達は安堵（あんど）の表情を浮かべた。

「良かった～……ありがとうなハピナス！」

ハピナスにお礼を言うバクフーン。

「これが私の仕事だからね。それより、あの子と一緒にいてあげなさい。
友達なんでしょ？」

ハピナスの問いにバクフーン達は頷いて答え、セレビィがいる寝室へ向かった。

その頃、ウォーターシティから遠く離れた無人島に一人のポケモンが。

「……微かだけど……この島に気配を感じる……スイクン、ここに

いるのかい？」

そのポケモンとはミュウである。
今まで行方不明だったスイクンを捜し続けていたミュウ。
この島にスイクンの気配を感じ、ここへやって来たのだ。

「……あの洞窟の中だね……」

島の中心には小さな洞窟があった。
ミュウはその洞窟からスイクンの気配を感じたようだ。
ミュウは洞窟の中へと入っていった。

「暗くて何にも見えないや……フラッシュ」

真っ暗だった洞窟の中をミュウはフラッシュを使い、自らの身体を発光させ洞窟の中を照らす。

「ちょっとは見えるようになったね……ん？」

ミュウは洞窟の奥に何かを発見した。
気になったミュウはその何かに近づいていく。

「えっ……これは……」

驚きの表情を浮かべるミュウ。
そこにあったのはポケモンの石像。
額には特徴的な水晶を思わせる部位がある。
それはスイクンにそっくりな石像だった。

「何でこんな誰も来ないような場所にスイクンの石像が……」

不思議そうな表情をしながらミュウは石像のスイクンの顔に手を当てる。当然、石の冷たい感触がミュウに帰ってくる。

「もうこの先には道がないみたい……変だなぁ……確かにここにスイクンの気配を感じたんだけど……まさかこの石像……本物のスイクンだったりする？　……いや、そんな訳ないよね。ポケモンが石になるなんて聞いた事ないもん」

苦笑いしながらそんな事を呟くミュウ。

『……ミュウ……殿……』

「えっ？」

突然ミュウの頭の中に声が聞こえてきた。
思わず辺りをキョロキョロとするミュウ。

『……ミュウ殿……私の声が聞こえますか？』

またミュウの頭の中で声が響く。

「まさか……」

はっとした表情で石像のスイクンを見つめるミュウ。

『聞こえるんですね！

私の声が！』

再びミュウの頭の中に声が響く。

「本当に……スイクンなの？」

信じられないといった表情で石像のスイクンを見つめるミュウ。

『お久しぶりですミュウ殿。またお会い出来て嬉しいです』

「本当にスイクンなんだね？　でも……何で石に……」

不思議そうな表情をするミュウ。

『深淵（しんえん）の闇の首領、ダークネスと名乗る者の攻撃を受け、私は石にされてしまいました……』

「深淵の闇……ライコウ達が言ってた組織だね……スイクン、一体何が起きてるんだい？」

スイクンに今何が起きているのかを質問するミュウ。

『……全ては十九年前の事です……』

スイクンはミュウに何が起きているのかを説明しだした。

十九年前の風の霊峰。

当時の風の霊峰にはまだ石化されていないホウオウやスイクン、ダークネスに操られていないライコウやエンテイがいつもと変わらぬ、平和な日々を過ごしていた。

「ふぅ～……今日も風が気持ち良いですね、ホウオウ様」

涼しい風を身体に感じ、気持ち良さそうな表情をしながらスイクンはホウオウに聞いた。

「そうだな」

ホウオウも風を身体全体で感じ、気持ち良そうな表情をしている。

「ふぁ～……俺は暇でしょうがないんだけど」

大きな欠伸(あくび)をして、退屈そうにしているライコウ。

「こら！　ホウオウ様の前でお前はまたタメ口を……」

ライコウを叱るエンテイ。

「構わぬよエンテイ。
そこがライコウの良いところではないか」

優しい笑顔でそう言うホウオウ。

「だってよエンテイ、これが俺の良いところなんだよ」

調子に乗るライコウ。

「調子に乗りすぎですよライコウ」

少し呆れた表情をするスイクン。

「……見〜つけた♪
捜したよホウオウ♪」

ホウオウ達が会話していた時、不意に誰かに声を掛けられた。
ホウオウ達は声がした方を向く。
そこにいたのは全身を白い体毛に覆われ、右側頭部には鎌のように湾曲した黒い角を持つポケモン、アブソルだった。

「何者だ貴様！　ここに一体何をしに来た！」

アブソルを睨みつけるエンテイ。

「……君に用はないよ。
邪魔するって言うなら……消すよ」

エンテイを威圧するアブソル。

（な、何だ……この者から放たれる威圧感は……）

アブソルの威圧感に押され、一歩後ろに下がってしまうエンテイ。

「……そなた、一体何者だ？　ポケモンではないようだが？」

アブソルを睨みつけながらホウオウがそう言った。その一言を聞いたスイクン達は驚きの表情を浮かべる。

「さすがホウオウ、もう僕の正体を見破ったんだ？　そう、僕はポケモンじゃないよ」

子供みたいに無邪気な笑顔を見せるアブソル。

刹那（せつな）、アブソルの身体から禍禍（まがまが）しい黒いオーラが出現した。

「僕はダークネス……ポケモンの心に潜む闇を喰らう者……そして深淵の闇の首領でもある」

不気味に笑いながらアブソル（ダークネス）は名乗った。

当時のダークネスはこのアブソルの身体を乗っ取っていたのだ。

「ホウオウ、闇そのものである僕にとって聖なる力を持つ君は邪魔な存在……消えてもらうよ」

戦闘体勢に入るアブソル（ダークネス）。

「そう簡単に我を倒す事は出来ぬぞ」

鋭い眼光でアブソル（ダークネス）を見るホウオウ。

「お待ち下さいホウオウ様、この者は私達が」

スイクン達がアブソル（ダークネス）の前に立ちはだかる。

「いや、そなた達は下がっていろ。
この者は……我が倒す」

スイクン達に下がるよう命じるホウオウ。

「……解りました」

スイクン達はホウオウの後ろに下がる。
そしてホウオウは戦闘体勢に入る。

「いくよ……鎌鼬（かまいたち）！」

アブソル（ダークネス）の右側頭部の湾曲した角が光り輝き出した。
そしてアブソル（ダークネス）は角を振り下ろし、三日月型のエネルギー波をホウオウに向けて放った。

「鋼の翼！」

ホウオウは自らの翼を鋼のように硬くし鎌鼬を攻撃、鎌鼬を打ち消した。

「火炎放射！」

ホウオウは口から灼熱の炎を吐き出し、アブソル（ダークネス）に向けて放った。
それをアブソル（ダークネス）は高くジャンプして回避した。

「シャドーボール！」

すかさずアブソル（ダークネス）は黒いエネルギー弾を作り出し、ホウオウに向けて放つ。

「その程度の攻撃、我には効かぬ！　鋼の翼！」

再びホウオウは鋼の翼を使い、シャドーボールを打ち消した。

「ならこれはどう？
破壊光線！」

アブソル（ダークネス）はエネルギーを集め、強力な破壊光線を放った。

「ならばこちらも破壊光線だ！」

ホウオウも同じ破壊光線で対抗。
二つの破壊光線はぶつかり合い、凄まじい爆発が発生した。

「くっ！？」

爆発によって発生した衝撃波でアブソル（ダークネス）は吹き飛ばされた。だが、すぐに体勢を立て直し安全に地面に着地する。

（……やっぱりこの身体じゃこれが限界か……）

少し悔しそうな表情をするアブソル（ダークネス）。

「次で終わらせてもらうぞ、ダークネス」

そうホウオウが言った刹那、ホウオウの身体が赤く光り輝き始めた。

（……あれを受けたらさすがにマズいね……倒せないなら、僕の邪魔を出来ないようにするしかないね……）

何かを思いついたのか、アブソル（ダークネス）は不気味な笑みを浮かべた。

「……我に宿りし聖なる力よ……悪しき者を裁く、紅蓮（ぐれん）の炎となれ！」

ホウオウの身体から発せられる赤い光が更に強くなる。

刹那、アブソル（ダークネス）の足下が赤く光り輝き出した。

「消え去れ悪しき者よ、聖なる炎！」

「今だ、電光石火！」

アブソル（ダークネス）はホウオウの技が発動する前に電光石火で素早く動き、ホウオウに向かって突っ込んでいった。

その直後にアブソル（ダークネス）が立っていた場所から凄まじい炎が火柱となって燃え盛った。

「くっ！」

向かってくるアブソル（ダークネス）を迎え撃とうとするが、もうすでにアブソル（ダークネス）は目の前まで迫っていた。

「ダークネス・ボール」

アブソル（ダークネス）は先程のシャドーボールとは違った黒いエネルギー弾を作り出し、ホウオウに向けて放つ。

至近距離で放たれた為、回避する事が出来ず腹部に受けてしまう。だが直撃したにも関わらず、爆発も何も起きない。ダークネス・ボールはホウオウの身体に溶け込むようにして消えていった。

「フフ……」

それを確認したアブソル（ダークネス）は不気味に笑いながら、ホウオウから離れた。

「今のは一体？」

確かに攻撃を受けた筈なのに、身体には全く痛みがない為、不思議そうな表情をするホウオウ。

だが、すぐにそれは戸惑いの表情に変わる。

（身体が……動かない！？）

身体を動かそうと思ったら、全く動かなくなっていた。

その事にホウオウが驚いている時、突然パキッパキッと辺りに乾いた音が響く。

ダークネス・ボールが当たった箇所から、ホウオウの身体が石に

変わり始めていたのだ。

「ホウオウ様！？」

その光景を見たスイクン達は驚愕する。

「この身体じゃあホウオウを倒せなさそうだったからね……倒す代わりに、石になってもらうよ」

勝ち誇ったような表情で言うアブソル（ダークネス）。

「貴様ぁぁぁ！！」

怒ったエンテイがアブソル（ダークネス）に向かって突っ込んでいった。

「あいつだけは許さねぇ！　スイクン、俺達も行くぞ！」

「当然だ！」

スイクンとライコウもエンテイに続こうとした。

「待て……スイクン……ライコウ……」

スイクン達をホウオウが呼び止めた。

すでに石化は首の所まで進んでいた。

「ホウオウ様……」

「我は……このままでは完全に石になってしまう……だが……その

前に、我の魂を……お前達に託す……」

そう言い終えると、ホウオウは口から光り輝く玉を二つ吐き出した。

吐き出した直後、ホウオウの身体は完全に石になってしまった。

「ホウオウ様！？」

『案ずるなスイクン……我の魂はここだ』

スイクンとライコウの前にホウオウが吐き出した光の玉が浮遊していた。

『スイクン、ライコウ……今から我は別のポケモンに生まれ変わる為に卵となる……ダークネスに悟られぬよう、卵を何処か遠くへ連れて行き隠してくれ……我の身体を元に戻す方法が見つかるまでな……頼むぞ』

次の瞬間、二つの魂が光り輝き始めた。

それからしばらくすると光は消え、二つの魂はポケモンの卵に変わっていた。

「ホウオウ様……」

「ぐあぁぁぁぁ！？」

突然辺りに悲鳴が響き渡った。

アブソル（ダークネス）にエンテイが倒されたのだ。

「ホウオウは倒せないとは言ったけど、君を倒せないとは言ってな

いよ」

無邪気な笑顔をしながら、アブソル（ダークネス）は気絶しているエンテイの顔を右前足で踏みつける。

「てめぇ……よくもエンテイを……スイクン、お前はホウオウ様を連れて行け！」

アブソル（ダークネス）を睨みつけながら、ライコウはスイクンを行かせようとした。

「……解った……だがライコウ、無茶はするな」

「嗚呼（ああ）、解ってるよ」

スイクンは二つのポケモンの卵を背中に乗せ、走り出した。

「逃げるつもり？
そうはいかないよ！」

アブソル（ダークネス）はスイクンを追いかけようとした。
だが、ライコウがアブソル（ダークネス）の前に立ちはだかった。

「行かせねぇよ」

「……邪魔だよ君」

ライコウとアブソル（ダークネス）の戦いが始まった。

その頃スイクンはもうすでに下山し、島の海岸まで来ていた。

「波乗り！」

スイクンは波乗りという技を使い、海の上を走っていく。

（とにかくこの島から出来るだけ離れなければ！
このホウオウ様の魂が宿った卵を守る為に！）

そして現在へ。

「そんな事が……」

驚きを隠せないミュウ。

『その後私は卵を安全な場所に隠しました。
……本来なら卵を私が育てるべきだったのですが……私はホウオウ様をあのような姿に変えたダークネスを許す事が出来ず、私はダークネスを倒す為に奴を捜しました。
そしてこの島で奴を見つけ、戦いを挑んだのですが……結果がこれです……』

悔しそうにミュウに語りかけるスイクン。

（なるほど……どうしてバクフーンの中にホウオウがいたのか、これで解ったよ。
彼はホウオウの生まれ変わりなんだ……だけど、今の話だとあともう一人生まれ変わりがいるって事に……ダークネスに気づかれた時の事を考えて二つの魂に分けたんだろうけど……捜すのは大変だねこりゃ……）

思わず苦笑いするミュウ。

『今ホウオウ様の卵はどうなっているのでしょう……』

心配そうに語りかけるスイクン。

「スイクン、ホウオウなら無事だよ。
僕、ホウオウの生まれ変わりに会ったからね」

笑顔で言うミュウ。

『本当ですか！？』

「うん。でもホウオウの生まれ変わりにしては、ホウオウに全然似てないけどね。
あともう一人には会った事はないけど……きっと無事だよ」

優しい笑顔でミュウは言った。

「あっそうだ。スイクン、ちょっと僕と一緒に来てほしいんだ」

何かを思いついたのか、ミュウは念力を使って石になってしまっているスイクンを浮かばせる。

『ミュウ殿、一体何処へ？』

「君を元の身体に戻せる事が出来るポケモンの所さ。えっと……あっちの方角にいるみたいだね。
じゃあ、行くよ。
テレポート！」

あるポケモンの気配を感じ取ったミュウは、そのポケモンがいる所を目指し、スイクンと共にテレポートした。

第百二話　十九年前の出来事（後書き）

バクフーン
「ちょい！？　俺ってホウオウの生まれ変わりなんか！？」

イエス。

バクフーン
「マジか～（汗）」

さて、次はタクミだよ（汗）行ってきます！
ε＝ε＝┐（　・＿・）┌

バクフーン
「ってもう行っちゃったよ（汗）」

第百三話　再会（前書き）

バクフーン
「タイトルが再会？
誰と誰が再会すんだ？」

君だよバクフーン。

バクフーン
「俺？」

え～またまたコラボです！　今回の小説の最後の方に登場します。
大分前から相談してたんですが、ようやく登場させる事が出来ました。

バクフーン
「誰だ誰！？」

君が喜びそうな相手だよ。

第百三話　再会

「……うーん……あれ……ここは……？」

フレイムシティのポケモンセンターの寝室。
そこで今までベッドの上で眠っていたセレビィが目を覚ました。
セレビィは上体を起こし、辺りをキョロキョロとしている。

「あっ！　目が覚めたかセレビィ！」

ベッドの隣で今までセレビィを看病していたバクフーンが嬉しそうにしている。
バクフーンだけでなく、一緒に看病していたリザードン達も嬉しそうにしている。

「あなた達……誰？」

バクフーン達を見ながら首を傾げるセレビィ。
この言葉は予想していなかった為、バクフーン達は驚きを隠せない様子。

「お、おい冗談はよせよセレビィ」

苦笑いしながらバクフーンが言った。

「冗談って……私、あなた達とは初対面よ？
それよりここは何処よ？
私、森の中を散歩してた筈なのに……」

部屋を見回すセレビィ。どうやら本当にバクフーン達の事は知らないみたいだ。

「本当に……俺達を知らないのか？」

「初対面なんだから知ってる訳ないでしょ。
それよりも誰かこの状況を説明してくれない？」

腕組みしながらセレビィは言った。

「俺が説明しよう」

ラティオスがセレビィに現在の状況を説明した。ここがポケモンセンターの中である事、セレビィがダークネスに操られて暴れていた事、自分達がセレビィを助け出した事など今まで起きた事を全て。

「嘘……私が……そんな事を……」

信じられないといった表情をするセレビィ。

「操られていたんだ。
セレビィが悪い訳じゃない」

セレビィを慰(なぐさ)めるラティオス。

「だけど……私がやった事には……」

「そんなに気にすんなよセレビィ。
誰もセレビィを責(せ)めたりしないさ」

笑顔で言うバクフーン。バクフーンなりにセレビィを慰めようとしているのだ。

「……あなた、名前は？」

「俺か？　俺はバクフーンだ！　それから俺の隣にいるのがリザードン、そしてあっちがラグラージ、ピカチュウ、ピチュー、ラティオス、ラティアス、グラエナ、そしてジラーチだ」

バクフーンはリザードン達を一人一人セレビィに紹介した。

「……あなた達が私を助けてくれたのよね……」

セレビィが続けて何かを言おうとした時、突然寝室の窓ガラスを誰かが叩く音が寝室に響いた。

バクフーン達はそれに気づき、窓を見る。

「えっミュウ！？」

思わずバクフーンは驚きの声を上げた。

窓の向こうにはミュウがいたのだ。

「やあ、久しぶりだね皆。ここ開けてくれる？」

「あ、嗚呼（ああ）。
ちょっと待ってな」

バクフーンは窓を開け、ミュウを中に入れてあげた。

「誰？」

ミュウを見ながら首を傾げるセレビィ。

「おや？　バクフーンの友達かい？」

「まあそんなもんだ。
セレビィって言うんだ」

ミュウにセレビィを紹介するバクフーン。

「初めまして、僕はミュウ。よろしくね」

笑顔でミュウは右手をセレビィの前に差し出す。

「よ、よろしく……」

少し戸惑いつつも、セレビィはミュウと握手をする。

「んでミュウ、なんでここに？」

腕組みしながらミュウに質問するバクフーン。

「あ～そうだった。
ジラーチはいるかい？」

「えっ僕ですか？」

自分を指差しながらジラーチがミュウの前に来た。

「ちょっと君の力を借りたいんだ。

願いを叶える事が出来る君の力をね」

ミュウはジラーチのどんな願いも叶える力を借りに来たようだ。

「僕の友達を助けてほしいんだ。
彼を助けるには……君の力を借りる以外に方法は無さそうだからね」

真剣な表情をしながら言うミュウ。

「……解りました。
まだ一回も願いを叶える力は使ってませんから」

ミュウの頼みを受ける事にしたジラーチ。

「ありがとうジラーチ。
彼は外に待たせてるんだ。ついて来て」

ミュウと一緒に外へ向かうジラーチ。
ミュウ達を追ってバクフーン達やセレビィも外へ。

「彼だよ」

外に出たバクフーン達。ミュウは石像になっているスイクンを指差した。

「おいミュウ、あれはただの石像じゃないか」

両手を腰に当てながら言うバクフーン。

「正確には石像にされたポケモンだよ」

「……え～！？」

またしても驚きの声を上げてしまったバクフーン。

バクフーンだけではない、リザードン達もミュウのその言葉を聞き、驚きの表情を浮かべている。

「ほ、本当なのか！？」

「うん。詳しく話したいけど……その前に彼を早く元に戻してあげないと。ジラーチ、頼むよ」

「解りました。じゃあ、ミュウさん。
僕の前に来て下さい」

ジラーチに言われ、ミュウはジラーチの前に。

「今から僕の第三の目を開きます。
その目を見ながら、願って下さい」

そう言った次の瞬間、ジラーチの腹部にあるもう一つの目、第三の目がゆっくりと開き始めた。

「……さあ、願って下さい」

第三の目が完全に開いた。ミュウは第三の目を見つめ、スイクンを元の身体に戻すようにと願った。すると、ジラーチの頭に垂れ下がっている三つの短冊のような物のうちの一つに文字が浮かび上がってきた。

「……僕に宿る願いを叶える力……ミュウさんの願いを叶えて……」

ジラーチは祈るように両手を合わせる。

すると、ジラーチの身体が光り輝き始めた。

その光は腹部の第三の目に集まり、集まった光はスイクンに向けて放たれた。

スイクンは優しい光に包まれる。

「……うぅっ……」

光に包まれたスイクンの身体に変化が起き始めた。灰色に染まっていた身体が、スイクンの本来の美しい水晶のような水色の身体に戻り始めたのだ。

スイクンの身体が元通りになるまで時間は掛からなかった。

「身体が……動く！」

石化の呪縛から解放されたスイクンは嬉しそうに身体を動かす。

「助かりました、ありがとうございます！」

スイクンはジラーチにお礼を言う。

「どういたしまして……ふぅ～……」

疲れてしまったのか、ジラーチがその場で倒れそうになる。

「ジラーチ！？」

そこにグラエナがやって来て、ジラーチを背中に乗せてあげた。

「大丈夫っすかジラーチ？」

「ちょっと……疲れちゃった……休憩……させてね……」

そう言うと、ジラーチはグラエナの背中の上で眠ってしまった。

願いを叶える力は体力の消耗が激しいのだ。

「ジラーチ……ゆっくり休むっすよ」

優しい眼差しでジラーチを見るグラエナ。

「本当に石にされてたんだ……なあ、何で石になってたんだ？」

バクフーンがスイクンやミュウに聞いた。

二人はバクフーン達に今までの事を説明した。

ダークネスの攻撃で石にされた事、ホウオウの事などを。

「またダークネスかよ」

「また？」

バクフーンが今言った

「また」という一言が引っかかったミュウ。

「またってどういう事だい？」

首を傾げながらバクフーンに質問するミュウ。

「実はよ……そのダークネスがここに来て、セレビィを操ってこの街を襲わせたんだ」

「えっ！？」

驚きの表情を浮かべるミュウ。

「まあ、何とかセレビィは助ける事は出来たんだけど……あいつはどっかに消えちまった」

腕組みしながら言うバクフーン。

（ダークネス……ホウオウを石に変えた次は街の破壊……何の目的でそんな事を……？）

右手を顎（あご）に当てながら考え込むミュウ。

「あっそうだ、ねぇセレビィ、さっきポケモンセンターで森を散歩してたって言ってたよね？」

いきなりラグラージがセレビィにそんな事を聞いた。

「え、ええ。確かにそう言ったけど」

「その森って何処の？」

続けて質問するラグラージ。
それにセレビィは迷いの森と答えた。

「迷いの森……すぐ近くだね。皆、今から迷いの森に行ってみない？もしかしたら、ダークネスが何か痕跡（こんせき）を残してるかもしれないよ？」

ラグラージは皆に迷いの森に行く事を提案した。

「良いかもな。ダークネスに関しての情報が少ない今、少しでも奴に関する情報は欲しいからな」

ラティオスがラグラージの提案に賛成した。
皆も首を縦に振って頷き、ラグラージの提案に賛成した。

「んじゃ早速行きますか！」

バクフーン達は迷いの森へと出発した。

「何だ……これ……」

ウォーターシティから迷いの森まではそんなに離れていないのですぐ到着したバクフーン達。

迷いの森はダークネスがディアルガの力を使い、消滅させていたので、迷いの森があったそこには何も無かった。

ただそこには荒野が広がるのみ。

ダークネスの仕業とはバクフーン達は知らないので、皆この状況に驚愕している。

「……この辺一帯の時間が乱れてるわね……」

時を渡る事が出来るセレビィはその事に気がついた。

「時間が乱れてる？
どういう事だよ？」

首を傾げるバクフーン。

「簡単に言えば、過去の迷いの森で何かが起きたのよ……もしかしたら未来か現代かもしれないけど……」

「……う～ん……」

腕組みして考え込んでしまったバクフーン。

「……まあ、良いわ」

少し呆れた表情をするセレビィ。

「あっ今俺がバカだと思っただろ!?」

思わず声を上げるバクフーン。

「だってバカでしょ」

「バカ言う奴がバカなんだぞ!」

まるで子供のバクフーンである。

そんなバクフーンを見て皆苦笑いをする。

「……まあ、迷いの森がこんなんじゃダークネスの痕跡何て残って無さそうだね」

残念そうに言うラグラージ。

「痕跡だったら私が捜してくるわよ」

「えっでもどうやって?」

首を傾げながらラグラージはセレビィに聞く。

「私は時を渡れるのよ?
ちょっとタイムスリップして捜してくるわよ。
ついでにこの森が消滅した原因も調べてくるわ」

両手を腰に当てながら言うセレビィ。

「それじゃあ、頼んで良いかセレビィ?」

バクフーンがセレビィに聞く。

「良いわよ、じゃあ早速行ってくるわ。
皆、巻き込まれないようにちょっと下がってて」

セレビィに言われ、バクフーン達はセレビィから離れた。

「……時渡り！」

セレビィの身体が光に包まれた。
その光は一気に強く光り輝き出し、バクフーン達はあまりの眩しさに目を開けていられず、目を瞑(つむ)る。
それから約十秒後、光は消えた。
バクフーン達が目を開けると、さっきまでそこにいたセレビィはいなくなっていた。

「時渡りしたみたいだな……やっぱりそうだったんだな……これでセレビィが初対面だって言った事も納得がいく」

一人納得しているラティオス。

「はい？　何が納得いくんだ？」

首を傾げるバクフーン。

「簡単に言うと、以前俺達が迷いの森で出会ったセレビィは、今時渡りをしたセレビィって事だ。
だから、あの時会ったセレビィは俺達の事を知っていたんだ」

腕組みしながらラティオスが説明した。
それを聞いたリザードン達は理解したみたいで皆頷く。

「……どゆ事？」

だが、バクフーンだけはまだ理解してなかったみたいで、また首を傾げる。

「……とにかく、セレビィはもう友達って事だ」

詳しく話してもおそらくバクフーンは理解出来ないだろうと判断したラティオスは凄く適当な事を言う。

「何だそういう事か。
だったら最初からそう言ってくれよな」

バカにされてると気づいてないバクフーンは腕組みしてそう言う。

「何がそういう事なのかしら？」

「うおっ！？」

まだ出発してから一分しか経っていないのに、いつの間にかセレビィが戻ってきていた。
背後からいきなり声が聞こえた為にバクフーンは飛び上がって驚いた。

「も、もう帰って来たのか！？」

「何驚いてんのよ？

私は時を渡れるのよ。
出発した時間から一分後に戻って来る事くらい私にとっては簡単よ」

自信たっぷりといった感じで言うセレビィ。

「それでセレビィ、何か解ったの？」

ラグラージがセレビィに聞いた。

「……ごめん、ダークネスの痕跡は見つけられなかったわ……でも
一つだけ解った事があるわ。
時間の乱れが起きたのは過去でも未来でもない。
現代よ」

「現代？」

首を傾げるバクフーン。

「そう、この時代で何か大きな力が働いてこの森を消してしまった
のよ。
時間を歪ませる程の大きな力がね……」

「時間を歪ませる程の大きな力……まさかディアルガか？」

腕組みしながらふとそんな事を呟くラティオス。

「おいおい、いくら何でもディアルガがそんな事する訳ないだろ？」

少し呆れた表情をしながらバクフーンは言った。

「そうは言うがバクフーン、他に誰かいるか？
時間を歪ませる程の力を持ったポケモンを」

腕組みしたままラティオスはバクフーンに聞く。

「そ、それは……」

返す言葉が見つからないバクフーン。

「じゃあ本人に確認してみようよ。
ここにいても何も解らないしさ」

ラグラージが皆にディアルガに会いに行く事を提案した。

「……そうだな……でもさ、どうやってディアルガに会いに行くよ？」

首を傾げながらラグラージに聞くバクフーン。

「アグノムに頼むんだよ。彼ならディアルガを呼んでくれると思うし」

「それじゃまずアグノムに会いに行く訳だな？
んじゃ早速行こうぜ！」

バクフーン達はディアルガに会う為、まずアグノムに会いに行く事にした。

「あっ！？」

出発しようとしたその時、いきなりリザードンが声を上げた。

「いきなりどうしたよリザードン？」

首を傾げながらリザードンに聞くバクフーン。

「子供達をポケモンセンターに預けたままだったのすっかり忘れてた！？」

リザードンは子供達をポケモンセンターに預けたままだった事を忘れていたらしい。

「まだ預けたままで良いじゃねぇかよ」

腕組みしながらバクフーンは言った。

「そういう訳にはいかないんだよ。
あいつら、大人しく出来ないタイプだから……母さんや父さんなら任せられるけど、ハピナスじゃあ無理だ。
傷ついたポケモン達を治療するっていう仕事があるんだからな……
皆は先にアグノムの所に行っててくれ。
俺は子供達を一度家に連れて帰る。
そしたらすぐに飛んで行くからさ。
じゃあ、後でな！」

そう言ってリザードンは子供達が待つポケモンセンターに向かって飛んで行ってしまった。

「……行っちゃったよ……まあしゃあないか。
んじゃ、俺達だけで先に行こうぜ」

「……見つけたぞミュウ……」

バクフーン達が出発しようとしたその時、行く手を阻むように二人のポケモンが現れた。

一人は獅子のような風格を持ち、全身は茶色の毛に覆われ、背中には噴煙を思わせる鬣を持つポケモン。

もう一人は虎のような姿をし、背中の雨雲のような鬣を持っている。

「はあ……もうしつこいよエンテイ、ライコウ」

ため息を吐き、少し呆れた表情をするミュウ。

そう、バクフーン達の前に現れたのはエンテイとライコウなのだ。

「ダークネス様の命により、ミュウ、お前を消す！」

戦闘体勢に入るエンテイ達。そしてエンテイ達の身体から禍禍しい黒いオーラが出現した。

「エンテイ……ライコウ……」

悲しい目で二人を見つめるスイクン。

「消えろ、火炎放射！」

「１０万ボルト！」

エンテイは口から灼熱の炎を吐き出し、ライコウは身体から強力な電撃を放出。

二つの技はミュウに向かっていく。

「しょうがないな……」

ミュウは両手を前に翳(かざ)し、サイコキネシスを使おうとした。

「エナジーボール！」

「火炎放射！」

だがその時、突如何処からか火炎放射とエナジーボールが放たれた。

エナジーボールは１０万ボルトに、火炎放射は火炎放射にそれぞれ直撃し相殺された。

「何者だ！？」

邪魔された事で怒りを覚えたエンテイは大きな声を上げる。

「それはこっちのセリフだよ、君達こそ何者なんだ？」

「……まあ、いきなり攻撃する所を見ると、敵なのは明らかだがな」

エンテイ達の前に二人のポケモンがやって来た。一人は首が長く、さらに首周りには大きな花びらがあり、草食恐竜のような姿をしているポケモン、メガニウム。

そしてもう一人は細身の肉食恐竜のような体型をしていて、背中や腕にはサメの鰭(ひれ)のような形状の翼を持ち、頭部の形状はシュモクザメに似ているポケモン、ガブリアスだ。

さらにこの二人のポケモンの後ろにもあと三人のポケモンが。

一人は体色が白と赤を基調とし、戦闘機に似た外見をしているポケモン、ラティアス。
もう一人は体色がクリーム色で、体の各所から草が生え、緑色の耳や尾の先には葉のような切れ込みや葉脈（ようみゃく）があるポケモン、リーフィア。最後の一人は牛のようなポケモンのケンタロスだ。

「えっブラキオ！？
それにアクセル、ルーチェ、フィル、うしだまで！？」

五人のポケモンを見て思わず声を上げるバクフーン。

「やあバクフーン！
とりあえず話はあとでね。まずこいつらを追い払らわないと。
アクセル、やるよ！」

そう言ってメガニウム、ブラキオは戦闘体勢に入る。

「嗚呼（ああ）、解ってるさブラキオ！」

ガブリアス、アクセルも戦闘体勢に入る。

「邪魔する奴らは皆排除する！」

ブラキオとアクセル、エンテイとライコウのバトルが始まった。

第百三話　再会（後書き）

バクフーン
「ブラキオ達だったのか～！　また一緒にいられんだな♪」

ハーブさんと相談した結果、ダークネスとの決戦までブラキオ達は出演してもらう事になりました。

バクフーン
「マジ！？　テンション上がるなぁ！
……それより、うしだの紹介が酷くなかったか？
牛のようなポケモンって……」

だって牛以外無いでしょ、紹介するんだったら。

バクフーン
「まあ……確かに（汗）」

第百四話　ブラキオ&アクセルVSエンテイ&ライコウ！（前編）

バクフーン
「ブラキオ達のバトルかぁ！　どうなるんだ？」

それは見てのお楽しみ。

第百四話　ブラキオ&アクセルVSエンテイ&ライコウ！

「タネマシンガン！」

ブラキオは口からエネルギー弾をマシンガンの如く連射してライコウに向けて放った。

「ドラゴンクロー！」

アクセルはその素早い身の熟(こな)しでエンテイに接近、鋭い爪でエンテイを攻撃しようとした。

「放電！」

ライコウは自分の身体から強力な電撃を放電、その電撃はライコウの身体を覆いまるでバリアのようになりブラキオのタネマシンガンを防いだ。

「炎の牙！」

エンテイは自らの牙に炎を纏(まと)わせアクセルのドラゴンクローにぶつけ相殺させた。

アクセルとエンテイは技がぶつかり合った衝撃で後ろに吹き飛ぶ。

『火炎放射！』

アクセルとエンテイはほぼ同じタイミングで口から灼熱の炎を吐き出す。二つの火炎放射はぶつかり合い大きな火柱となった。

「今だ、エナジーボール！」

アクセルに集中しているエンテイに、ブラキオは緑色をしたエネルギー弾を放った。

「させん！　１０万ボルト！」

ライコウが１０万ボルトを放ち、ブラキオのエナジーボールにぶつけ相殺させてしまった。

「貴様の相手は俺だ！
ダークサンダー！！」

ライコウがブラキオに向けて黒い雷を放った。

「ま、守る！」

ブラキオはバリアのようなエネルギーの膜（まく）で自分を包み、ライコウのダークサンダーを防御した。

「何なんだ……今の雷は……」

初めて見た攻撃にブラキオは驚きを隠せないでいた。

「ダークファイア！！」

一方のエンテイもダーク技を繰り出した。
真っ赤に燃えていた火炎放射が黒い火炎放射に変化した。
そしてアクセルの火炎放射をどんどん押していく。

「くっ！？」

アクセルはパワー負けすると冷静に判断、火炎放射を中断してエンテイのダークファイアを回避する。
そしてブラキオの所へ移動する。

「アクセル、あんな技見た事ある？」

視線はライコウ達から逸らさずにブラキオはアクセルに聞いた。

「……いや、俺もあんな技は初めて見た」

アクセルもエンテイ達から視線を逸らさずにブラキオに答える。

「だが、当たらなければ問題ない。
次で決めるぞブラキオ」

「解ってるよアクセル」

再び戦闘体勢に入るブラキオとアクセル。

「次は外さん、ダークファイア！」

「ダークサンダー！」

再びエンテイ達はダーク技を放ってきた。

「身代わり！」

ブラキオは自分に向かってきたダークファイアを身代わりで作っ

た自分の分身に受けさせ、自分の身を守る。
そしてアクセルは素早い身の熟しでダークサンダーを回避、そしてライコウに突っ込んでいく。

「ドラゴンダイブ！！」

アクセルの強力なドラゴンダイブがライコウに決まった。
ドラゴンダイブを受けたライコウは吹き飛んだ。

「貴様っ！」

「余所見はダメだよ！
ソーラービーム！」

ブラキオはエンテイに向けて強力なソーラービームを放った。
アクセルに気を取られていたエンテイは回避する事が出来ず、ソーラービームをまともに受けた。エンテイはライコウの所に吹き飛ばされた。

「まだやるかい？」

戦闘体勢を維持したまま、ブラキオがエンテイ達に聞いた。

「くっ……ここは引き下がるか……行くぞライコウ」

「あ、嗚呼（ああ）……」

エンテイとライコウは逃げるようにその場から走り去っていった。

「あっ待てエンテイ、ライコウ！？」

「無駄だよスイクン」

スイクンが二人を呼び止めようとしたのをミュウが止めた。

「し、しかしミュウ殿！」

「……今の彼らに僕や君の声は届かないよ。
あの二人の中にある闇をなんとかしない限りはね……」

とても悲しそうな目をしながらミュウは言った。二人が話してる間にエンテイ達はもう姿が見えなくなっていた。

「……ふぅ～……何とか追い払えたみたいだね」

ほっと一息吐くブラキオ。その後ブラキオはアクセル達と一緒にバクフーン達の所へ。

「久しぶりだねバクフーン」

笑顔でブラキオはバクフーンに言った。

「本当だな！　助けてもらった時以来だぜ！
あの時は本当にありがとうな！」

久しぶりにブラキオに会えた事が嬉しいようで、バクフーンはとびきりの笑顔で答えた。

「あの～バクフーンさん、彼らは？」

ラティアスがブラキオ達を見つめながらバクフーンに質問した。

「あ～そういえばブラキオ達に会ったのは俺とグラエナとジラーチとの三人だったもんな。
紹介するよ、こいつらは俺達の命の恩人だ。
まずこのメガニウムがブラキオって言うんだ。
さっきのバトルを見て解ったと思うけど、結構バトル強いんだぜ」

バクフーンはラティアス達にブラキオの事を紹介した。

「初めまして、僕はブラキオ。よろしくね」

軽く会釈するブラキオ。
その後バクフーンはアクセル、ルーチェ、フィル、うしだの順番でラティアス達に紹介した。

「ブラキオ、次に俺の仲間を紹介してやるよ！」

次にバクフーンはラグラージ、ラティオス、ラティアス、ピカチュウ、ピチュー、セレビィ、ミュウ、スイクンの順番でブラキオ達に紹介した。

「そういえばブラキオ、何でここに？」

一通り紹介し終えた後、バクフーンはブラキオに質問した。

「えっと……何かこの辺りにデッカい怪物みたいなのが見えたから、もしかしたらバクフーン達が危ないんじゃないかって思って来たんだよ」

何故か少し間を置いてからブラキオは答えた。

「怪物……あ～あれな。
あれなら見ての通り何とか解決出来たよ。
今はちょっと調べたい事があるから俺の友達の所に行こうとしてたとこなんだ」

間を置いた事は気にしないでバクフーンはそう言った。

「調べたい事？」

首を傾げるブラキオ。

「嗚呼、実はさ……」

バクフーンはブラキオ達にダークネスの事、この辺には迷いの森という森が存在していた事、森が消えた理由を知っていると思われるディアルガに会う為にこれからアグノムがいる湖に向かおうとしている事を話した。

「なるほど……ねぇ、僕達も一緒に行って良いかな？　何か協力出来るかもしれないし」

ブラキオ達はバクフーン達に協力してくれるみたいだ。

「マジで！　もちろんＯＫさ！　良いよな皆？」

即答でバクフーンは答えた。皆も断る理由が無いので頷いて答えた。

「よっしゃ、んじゃ今度こそアグノムの所に出発♪」

バクフーンは凄く嬉しそうにしながら歩きだした。

「遠足じゃないんだから……ってかバクフーンそっちは反対方向だよ！」

ラグラージが叫ぶ。

「……あり？」

「全く……お前の方向オンチは相変わらずだな。
僕が先頭を歩くからバクフーンはちゃんとついて来な」

少し呆れた表情を浮かべながら、ラグラージは正しい方向に歩き始めた。ラティオス達もラグラージに続く。

「あっ待てよお前ら！？」

バクフーンは慌ててラグラージ達のあとを追いかける。
その光景を見てブラキオ達は思わず苦笑いしてしまう。

「……ねぇ」

その時、不意にミュウがブラキオ達に声を掛けた。

「何だい？」

首を傾げながらブラキオは言った。

「君達……この世界のポケモンじゃないでしょ」

腕組みしながらミュウはそう言った。

その言葉を聞いたブラキオ達は驚きの表情を浮かべる。

「な、何でそれを！？」

「何となくね。君達からはこの世界にいるポケモンとは違う波動を感じたから……まあ、君達が別の世界から来たポケモンだろうと関係ないけどね。バクフーンの友達、それで充分さ」

笑顔でそう言うミュウはバクフーン達の方へ飛んでいった。

「……不思議な人だなぁ……」

不思議そうな表情を浮かべながらブラキオはそう呟く。

「おーい！　何してんだよ？　置いてっちゃうぞー？」

遠くの方でバクフーンがブラキオ達を呼んでいる。

「あっ今行くよー！」

ブラキオ達は急いでバクフーン達の所へと向かった。

その頃とある島で……

「やあやあ、皆集まってるね♪」

子供みたいに嬉しそうな声を上げているのはダークネスだ。
今この島にはダークネスとダークネスによってダークポケモンにされたポケモン達が集まっていた。

「……ダークネス様、何かあったのですか？」

ダークネスに質問したのは右側頭部にある鎌のように湾曲した黒い角が特徴的なポケモン、アブソルだ。

「皆に仕事を与えようと思ってね♪」

「仕事……ですか？」

首を傾げるアブソル。

「ちょっと僕なりに調べてみたんだよね、パルキアを捜す方法をさ。そしたら、意思、感情、知識を司る三人のポケモンがパルキアと繋

がってるみたいなんだよね♪
だから、その三人のポケモンを君達に捜してきてもらって……僕の所に連れて来てほしいんだ♪」

笑顔で話すダークネス。それを聞いたダークポケモン達は了解しましたと一言言って、アグノム達を捜す為にその場を去っていった。

「……ふん、お前……アグノム、ユクシー、エムリットの事も知らなかったのか？　それじゃあディアルガを捜すのに時間が掛かり、パルキアも見つけられない訳だ」

他のポケモンが去っていった中、一人だけ残ったポケモンがいた。そのポケモンは胴の短いトカゲやサンショウウオのような姿をしていて、溶岩のような体色を持ち、頭部や足首は金属的な装甲に覆われている。

「貴様！　新入りのくせにダークネス様に対して何て口の聞き方だ！」

ダークネスの隣にいたアブソルが怒鳴る。

「事実を言ったまでだ」

悪怯(わるび)れる様子も無く、そのポケモンはそう言った。

「貴様……」

怒ったアブソルはそのポケモンを攻撃しようと技を使おうとする。右側頭部にある湾曲した角が光り輝きだす。

「やる気か？」

そのポケモンは戦闘体勢に入る。

口からは灼熱の炎が漏れ出している。

「はい二人共そこまで。

アブソル、そんなに怒らないの♪」

ダークネスが笑顔で止めるようアブソルに言う。

「し、しかしダークネス様！？」

「……僕の言う事が聞けないのかな？」

ダークネスは鋭い目つきでアブソルを睨む。

「し、失礼しました……」

ダークネスが放つプレッシャーにアブソルは怯え、後退（あとずさ）りする。

「それと君もあんまり調子に乗らない方が良いよ。今の僕はディアルガの時を操る力を使える……君の時間を永遠に停める事だって出来るんだよ」

もう一人のポケモンを睨みつけながらダークネスはそう言った。

「そいつは勘弁だな。

悪かった……そろそろ俺も捜しに行こう」

ポケモンは一言謝ると、その場から去っていった。

（今は我慢だ……いつか必ず奴に隙が出来る筈……その時が来たら……奴を仕留めて深淵（しんえん）の闇を乗っ取ってやる！　ふふふ……）

第百四話　ブラキオ&

第百五話　捜索開始

エンテイとライコウを退ける事が出来たバクフーン達とブラキオ達。

今彼らはアグノムがいる湖の前に来ていた。

「ここにそのアグノムがいるのバクフーン？」

首を傾げながらバクフーンに質問するブラキオ。この質問にバクフーンは頷いて答えた。

「あいつに会うの久しぶりだなぁ……おーいアグノムー！」

バクフーンは湖に向かって思いっきり叫んだ。

すると、湖の中から突然何かが浮上してバクフーン達の前に現れた。

それは青い竜のような姿をしたポケモン、アグノムのガーディアンであるギャラドスだった。

「騒がしいと思ったら、お前達だったか」

「よっ！　久しぶりだなギャラドス！　アグノムは？」

軽く挨拶を済ませたバクフーンはギャラドスにアグノムの事を聞いた。

「僕ならここだよ」

ギャラドスの頭の上からアグノムがひょこっと姿を現した。

「久しぶりだねバクフーン！」

凄く嬉しそうにしながらアグノムはバクフーンに抱きついた。

「本当に久しぶりだな！
元気にしてたか？」

バクフーンがそう聞くとアグノムは頷いて答えた。

「うわぁ！　また友達が増えたみたいだねバクフーン！」

バクフーンの周りにいるグラエナ達やブラキオ達を見て少しアグノムは驚いている。

「嗚呼（ああ）……アグノム、実はお前にちょっと……」

「あっそうだ！　僕、バクフーン達に頼みたい事があるんだ」

バクフーンが言い切る前にアグノムが言った。

「アグノムが頼みたい事？」

「うん……一緒にディアルガ様を捜してほしいんだ」

アグノムの頼み。
それはディアルガの捜索だった。
それを聞いたバクフーン達は驚きの表情を浮かべた。

「ディアルガがいなくなったのか！？」

「そうなんだよバクフーン……エムリットやユクシー、それとパルキア様と一緒にずっと捜してるんだけど見つからないんだ……」

俯きながらアグノムは言った。

「ディアルガがいなくなった……でも何でいなくなったんだ？」

首を傾げながらバクフーンは質問した。

「僕にだって解らないよ……」

少し表情を曇らせるアグノム。

「……もしかしたら……」

何か解ったのかミュウがそう呟いた。

「何か解ったのか？」

ミュウに質問するバクフーン。

「……これはあくまで僕の勘だけど……もしかしたら、ダークネスの仕業かもしれない」

腕組みしながらミュウは皆に言った。

「ミュウ殿、何故そう思われるのです？」

首を傾げながらスイクンがミュウに質問する。

「十九年前に君やホウオウを石に変え、エンテイやライコウを自らの仲間にする為に洗脳、さらにセレビィまで……そして今はディアルガが行方不明……何か気づかない皆？」

逆に今度はミュウが皆に聞いた。

それを聞いた皆は揃って考え始める。

そしてしばらく沈黙が続く……

「……あっもしかして皆伝説のポケモン？」

先に沈黙を破ったのはラグラージだった。

そのラグラージの言った事にミュウは頷く。

「もしかしたら強い力を持ったポケモンを狙った結果そうなったのかもしれないけどね。

スイクンの話だと十九年前はアブソルに取り憑いていたみたいだし……だけど、ディアルガが行方不明になった原因がダークネスの仕業の可能性は高いと僕は思う」

腕組みしながらミュウは皆にそう言った。

「ねぇ、そのダークネスって何者なの？」

首を傾げながらアグノムがミュウに質問した。

その質問に答えるべく、ミュウはアグノムにダークネスについて今解っている事を説明した。

「……ダークネス……何だか不気味な奴なんだね……でも許せないよそいつ！」

怒りを露(あらわ)にするアグノム。

「確かにダークネスは許せないよ……奴を見つけだせれば、ディアルガの居場所も解ると思う」

「ねぇミュウ。ダークネスを見つけだすのは良いけどどうやって捜すの？
何も手掛かりが無いのに……」

少し困った表情を浮かべながらミュウに質問するラグラージ。

《アグノム……アグノム、聞こえる？》

その時、アグノムに誰かがテレパシーで語りかけてきた。

「あっエムリット？」

アグノムが声に出してその名前を呼ぶ。

「どうしたんだ？」

バクフーンが聞いた。

「エムリットがテレパシーで話しかけてきたんだ。皆にも聞こえるようにするね」

アグノムは目を閉じて意識を集中させる。
すると、アグノムの身体が淡い水色をした光に包まれた。

「これで良し。エムリット、一体どうしたの？」

《さっき、私のガーディアンから久しぶりに連絡があったんだけど……何だかまた私達を狙ってる奴らがいるみたいなの》

アグノム達が狙われている……それを聞いたバクフーン達は驚きの表情を浮かべる。

「またなの？」

もううんざりといった感じに言うアグノム。

《また結構大勢で私達を捜してるみたいよ。私のガーディアンが言うには、そのポケモン達は見た目は普通何だけど……身体から黒いオーラを出すみたいなの》

「黒いオーラ……どうやら、君達を捜してるのはダークネスの仲間みたいだね」

腕組みしながら冷静に言うミュウ。

《とにかく伝えたわよアグノム。じゃあね》

最後にそう言って、エムリットはテレパシーを中断した。

「ラグラージ、さっきの君の質問に答えるよ。ダークネスを見つけだす方法……それは、奴の仲間を捕まえて居場所を吐かせるんだよ」

ミュウが考えたダークネスを見つけだす方法。

それはダークネスの仲間を生け捕りにし、情報を吐かせるというシンプルな方法だった。

「素直に吐いてくれるかなぁ？」

首を傾げるラグラージ。

「大丈夫だよ、ここに尋問のエキスパートがいるから」

笑顔でミュウはスイクンを指した。

「私に任せてくれれば、必ず情報を吐かせてみせます」

自信満々で言うスイクン。

「そういう事。さて、奴の仲間は大勢いるらしいから何人かにグループを分けて捜した方が良いね。まず……」

ミュウはダークネスの仲間を捜す為に、何人かにグループを分ける事にした。まずバクフーン。

バクフーンはミュウとスイクンと一緒に行く事になった。

次にブラキオ。

彼にはルーチェ、ラティアス、ピカチュウが一緒に行く事になった。

そしてラグラージ、フィル、うしだ、ピチューの四人。

次にグラエナ、ジラーチ、セレビィの三人。

「あとはアクセルとラティオスだね。

二人だけになっちゃうけど……」

「お～い！　悪い皆、遅くなった！」

その時、子供達を預けてきたリザードンがようやく到着した。

「あっ三人目がいた」

リザードンを見て笑みを浮かべるミュウ。

「へっ？」

来たばかりで状況が解らないリザードンはポカンとしている。

「良し、んじゃ行くか！
ギャラドス、アグノムをしっかり守ってやるんだぜ？」

「お前に言われなくても解っているさバクフーン。アグノム様は私が全力でお守りする！」

アグノムと守ると約束したギャラドス。

「あの～……何が何だか全然解んないんすけど……？」

状況を理解出来ないリザードンは皆に聞いた。

「あとで説明してやるよリザードン。アクセル、よろしくな」

ラティオスがアクセルに言った。

「こちらこそ、よろしく頼む」

腕組みしながらアクセルは言った。

「それじゃあ皆、ダークネスの仲間を捕まえる事が出来たらまたここに集合って事で良いよね？」

ミュウの出した提案に、皆は頷いて答えた……もっとも、まだ状況が理解出来ないリザードンは首を傾げているが。

「皆、気をつけてな！
そんじゃ、出発！」

バクフーンの掛け声と共に、皆各地に向かって出発した。

「……アグノム様、この事はパルキア様にもお伝えした方が良いのでは？」

「そうだね……」

アグノムは目を閉じて、意識を集中する。

バクフーン達がいる世界とは違う空間の世界、そこにパルキアはいた。

《パルキア様、パルキア様聞こえますか？》

「ん？　お～アグノムか、どした？」

両手を腰に当てながら、パルキアは聞いた。

アグノムは今までの事をパルキアに説明した。

「……ダークネス……ふざけた野郎だな。

解った、伝えてくれてありがとよアグノム」

《では……》

アグノムはテレパシーを中断した。

「……ディアルガは本当にダークネスって野郎に……だとしたら、バクフーン達だけじゃ危ねぇかもな……あいつの力が必要だな……」

そう呟いたパルキアはとあるポケモンがいる所へ向かって飛び立った。

第百五話　捜索開始（後書き）

バクフーン
「更新遅いっつうの！」

ごめ～ん（汗）
空の探検隊に夢中になってしまって（汗）
いや～何とか運命の搭をクリア出来たよ。

バクフーン
「なんだそりゃ？」

結構難しいダンジョンだったよ（汗）
入ったらレベルが１になるし、持ち物が持っていけないし、復活の種が使えない……ってかそのダンジョンに落ちてないし、賢さの効果が発揮されないし、ダンジョンが９９階あるし……

バクフーン
「……めんどくさそうなダンジョンだな（汗）」

でもクリアしたら、アルセウスの石像があって、レアアイテムを貰えるんだよね。
ってかさ、フワライドがチートなんだけどこのゲーム（汗）

バクフーン
「そうなのか？」

特性のかるわざで道具を持ってないと一度で二回攻撃出来て、技使っても消費ＰＰが一回分しか減らないし、怪しい風でフロア全体を

攻撃出来るんだよ?
チートだって（汗）
救助隊の時の心の眼から粉雪を使うフリーザー並みにチートだよ（汗）

バクフーン
「マジか（汗）」

第百六話　新たな戦力（前書き）

バクフーン
「やっとバクフーンに戻れた～（汗）つうか更新遅いっての！？」

ごめんごめん（汗）
他の作者さんの小説夢中で読んでたら更新遅くなっちゃった（汗）

バクフーン
「ったくよ……んで、今回のタイトルの新たな戦力ってどゆ事？」

今回はバクフーン達のグループのストーリーで、君達に意外なあいつが助っ人として登場するのさ。

バクフーン
「誰だよ？」

さあ？　だけど、久しぶりの登場とだけは言っておきましょう。

第百六話　新たな戦力

皆と別れ、各地へと向かったバクフーン達とブラキオ達。

「バクフーン、そっちに行くとアグノムがいる湖に戻っちゃうよ？」

バクフーン、ミュウ、スイクンの三人組は緑溢れる街、リーフシティに向かおうとしていたのだが、バクフーンが道を間違えてアグノムがいた湖に戻ってしまいそうになったのだ。

「……あり？」

ミュウに呼び止められたバクフーンはその場で立ち止まり首を傾げた。

「……バクフーン殿は方向オンチなのですねミュウ殿……」

苦笑いしながらスイクンはミュウにそう言った。

「そうなんだよね……ほらバクフーン、リーフシティならあっちの方角に真っ直ぐだよ」

ミュウはバクフーンが行こうとした道とは反対側を指す。

「あ、そっちね！　よっしゃ、気を取り直して出発！」

まるで遠足に行くみたいな感じでバクフーンはミュウが指した方向に向けて歩き出した。

「……やれやれ」

少し呆れ顔になりながら、ミュウとスイクンはバクフーンの後を追いかけるように進み始めた。

バクフーン達がリーフシティに向かっている時、バクフーン達がいる世界とは違う空間の世界でパルキアがあるポケモンの所に向かっていた。

「良し、そろそろだな……開け、空間の扉！」

パルキアが右手を前に翳（かざ）すと目の前の空間が裂け、別世界への入り口が出来た。

パルキアはその裂け目を通って別世界へ。

「……相変わらず気味悪い所だぜ……」

思わずパルキアはそう呟いた。パルキアがやって来た場所には何も無く……不気味な闇が広がる空間だった。

「おい！　何処にいんだ？　姿を見せな！」

辺りをキョロキョロとしながら叫ぶパルキア。だが、パルキアが捜す相手からの返事はなく、ただパルキアの声が闇の空間に響くだけだった。

「……ったく、しょうがねえなあ……」

パルキアは目を閉じ、意識を集中し始めた。

「……そこか！　波動弾！」

パルキアは右方向にエネルギー弾を放った。

「悪の波動！」

パルキアが波動弾を放ったその方向から黒いエネルギー波が放たれた。エネルギー波は螺旋状に回転しパルキアの波動弾に直撃、大きな爆発が発生した。

（俺の波動弾を相殺させたか……へっ前より強くなってんじゃねぇか！）

少し笑みを浮かべるパルキア。

「やるようになったじゃねぇかよ」

「……それはどうも」

闇の中から一人のポケモンがパルキアの前に現れた。そのポケモンは魔法使いを思わせる黒い衣を纏った幽霊のような姿をし、頭部からは白い髪のようなものが伸び、首の周りには赤い牙のような突起がある。

「……パルキア様が俺の所に来るという事は……何かありましたな？」

腕組みをしながらその黒いポケモンは言った。

「嗚呼……お前の力が必要だ。バクフーンを覚えてるか？」

バクフーン……その名前を聞いた瞬間黒いポケモンは驚きの表情を浮かべた。

「バクフーン……懐かしい名前ですな……彼がどうしたんです？」

「今バクフーンとその仲間達がダークネスって野郎の事を調べてんだが……そのダークネスって野郎がヤバい奴らしくてな……あいつらだけじゃ危ねぇかもって思ったからお前にバクフーン達の力になってもらおうと思った訳だ」

両手を腰に当てながらパルキアは言った。

「なるほど……解りました、彼らに協力します」

「うしっ！　なら早速あいつらの所に行くぞ！　開け、空間の扉！」

右手を前に翳すパルキア。そして目の前の空間に裂け目が。パルキアと黒いポケモンはその裂け目に入っていった。

現実世界の方では、バクフーン達はもうすぐでリーフシティに到着する所まで来ていた。

「……ん？」

何かを感じ取ったのか、ミュウがその場で止まった。

「ミュウ殿、如何（いか）なさいました？」

「どした？」

バクフーンとスイクンが不思議そうな表情をしながらミュウに聞いた。

「何か……来る」

ミュウがそう呟いた刹那、ミュウ達の目の前の空間が裂けた。そして空間の裂け目から一人の大きなポケモンが現れた。

「ようバクフーン、久しぶりじゃねぇかよ！」

そのポケモンはパルキアだった。右手を上げて軽く挨拶するパルキア。

「あ～パルキアじゃんか！　久しぶり～元気だったか？」

「元気じゃなきゃここにはいねぇよ」

「あっそうか」

右手を後頭部に当てて、納得するバクフーン。

「ん？　後ろの二人は見ねぇ顔だな？」

ミュウとスイクンを見つめながらパルキアは言った。

「僕はミュウだよ」

「私はスイクンと申します」

パルキアに自己紹介する二人。

「俺はパルキアだ、よろしくな二人共」

「ところでパルキア、何でここに？」

首を傾げるバクフーン。

「お前達がダークネスを捜してるってアグノムから聞いてな……何か、ヤバい奴みたいだからお前達に助っ人を連れてきたんだ。ほら、来なよ」

パルキアは裂け目の中を見ながら手招きする。すると、空間の裂け目から黒いポケモンが現れた。

「なっ！？　お、お前！？」

その黒いポケモンを見た瞬間バクフーンは驚愕（きょうがく）した。

「久しぶりだな……バクフーン」

「何で……何でお前がここにいる……ダークライ！！」

その黒いポケモンとは、かつて漆黒の闇の首領でバクフーン達を苦しめた敵、ダークライだったのだ。バクフーンはすぐに戦闘体勢に入った。

「ちょっと待った！　バクフーン、もうダークライは昔のダークライじゃねぇよ」

バクフーンとダークライの間にパルキアが割って入った。

「ど、どういう事だよ？」

「言った通りだ。ダークライは俺とディアルガで……えっと再教育っての？　それをやってだな、ダークライを良い奴にしたんだ」

ダークライを見つめながらパルキアはそう説明した。

「良い奴って……そんなのすぐには信用出来ねぇよ！」

バクフーンはダークライを睨みつける。かつて自分の母親を奪い、仲間も傷つけたダークライを信用出来ないのだ。

「まあお前の気持ちも解るけどよ、こいつの力はお前達の大きな助けになる筈だぜ？　とにかく、ダークライはこれからお前達と一緒に行動する事になっからよろしくな」

そう言うとパルキアは空間の裂け目に戻ろうとした。

「何処行くんだよ？」

バクフーンが尋ねた。

「決まってんだろ？　俺もダークネスって野郎を捜すんだ。野郎を見つける事が出来ればディアルガの居場所も解るかもしれねぇんだからな。ダークライ、バクフーン達は頼むぜ」

「……了解です」

そう言うとパルキアは裂け目の中へ。そしてパルキアが入ったと同時に空間に出来た裂け目は消え、元に戻った。

「……という訳だ。これからは俺も一緒に行動させてもらう。よろ

しくな」

腕組みをしてダークライはそう言った。

「君があのダークライか……僕はミュウ、よろしく」

笑顔でミュウはダークライに挨拶した。

「私はスイクン。ダークライ殿、よろしくお願いします」

スイクンも軽く挨拶を済ませる。

「……」

しかしバクフーンはまだダークライを睨みつけている。

「……よろしくな、バクフーン」

「……ふん！」

バクフーンは外方（そっぽ）を向いてしまった。そしてバクフーンはリーフシティに向けて歩き出した。

「あらら……余程君の事が嫌いみたいだね彼」

「まあ……仕方ないだろ、俺が過去にやってきた事を考えれば……バクフーンを見失ってしまう、行こう」

バクフーンを追ってダークライ達も進み始めた。

バクフーン達が歩き出してからしばらくして、ようやく彼らはリーフシティに到着した。

「やっと着いたね」

リーフシティの特徴であるツリーハウスを見ながらミュウが呟いた。

「そうですね……しかしミュウ殿、一体どうやってダークネスの仲間を見つけ出すんです？」

首を傾げながらスイクンはミュウに尋ねる。その刹那、突然リーフシティの中心部で大きな爆発音が聞こえてきた。

「な、何だよ今の爆発音！？」

「……行くぞ」

ダークライが爆発音が聞こえてきた街の中心部へと向かった。バクフーン達も慌てて後を追う。

「もう一度聞く、意思、感情、知識を司る神と呼ばれるポケモンは何処だ？」

街の中心部では、四人のポケモンが街に住む住人であるキノガッサを囲むようにしてアグノム達の事を聞いていた。

一人は全身茶色の体毛で覆われ、胸には輪っかのような模様がある熊のようなポケモン、リングマ。次は岩のような硬そうな皮膚と長い牙を持ったゾウのようなポケモン、ドンファン。

次は茶色の体色で足は下駄のようになっており、白くて長い鬣（たてがみ）があり、両手に付いている葉っぱの団扇（うちわ）が特徴的な天狗のようなポケモン、ダーテング。最後に額に血管が浮き出ていて豚と猿を合わせたようなポケモン、オコリザルだ。

「し、知らないよ！」

アグノム達の事を知らないキノガッサは首を横に振りながらそう答えた。

「……役に立たねぇ野郎だなぁ……この野郎どうする？」

ドンファンが三人に聞いた。

「消す」

一言そう言ったのはダーテングだ。他のリングマやオコリザルもそれに納得したのかそれが良いと言って頷く。

「だとよ……あばよ、キノコ野郎！」

ドンファンはその鋭い牙でキノガッサを攻撃しようとした。

「……悪の波動！」

そこにダークライがやって来て、ドンファンに向けて悪の波動を放った。ドンファンに悪の波動が直撃し、ドンファンは吹き飛ばされ近くにあった木に身体を打ちつけた。

「な、何だてめぇは！？」

声を上げるリングマ。ちょうどその時にバクフーン達も駆けつけた。

リングマ達はバクフーン達に気を取られている。その隙にキノガッサは急いでリングマ達から離れて逃げ出した。

「……お前達、ダークネスの仲間か？」

ダークライがリングマ達に尋ねる。

「ダークネス様を知ってるようだな……何者だお前達？」

今度はダーテングが尋ねてきた。それと同時にダーテングとリングマ、そしてオコリザルの身体から禍禍(まがまが)しい黒いオーラが出現した。

「あれはライコウ達と同じオーラだね……ちょっと君達には僕らと一緒に来てもらうよ？　ダークネスの事をいろいろと教えてもらう為にね」

戦闘体勢に入るミュウ。スイクンやバクフーン、それにダークライも戦闘体勢に入る。

「ダークネス様の力を授かった俺達に勝てると思ったら大きな間違いだぜ……おい鈍重（どんじゅう）！　寝てないでさっさと構えろ！」

吹き飛ばされていたドンファンに向かって怒鳴るリングマ。

「誰が鈍重だゴラ！」

リングマを睨みつけるドンファン。ドンファンの身体からも禍禍しい黒いオーラが出現した。

「バクフーン、君はダーテングを頼むよ。スイクンはドンファン、オコリザルは僕がやるからダークライはリングマを」

ミュウのその言葉を聞いた三人は頷いて答えた。そして、バクフーン達とダークネスの仲間であるダーテング達のバトルが始まった。

第百六話　新たな戦力（後書き）

ダークライ
「まさかまた本編に復帰するとは思ってもみなかったぞ」

バクフーン
「何で最初のボスキャラが俺達の仲間になんのよ！？」

実はダークライとの戦いを書き終わった時からこういう展開をずっと考えてました（笑）

バクフーン
「マジっすか（汗）」

ダークライ
「……作者、確か俺はディアルガ様にタマゴにされた筈だな？　何故記憶が残ってるんだ？」

残ってるっていうか、一度君はタマゴにされて記憶が完全に消えたんよ。それをディアルガが再教育した後にまた蘇らせたのさ。

バクフーン
「何で？」

悪に染まりきったダークライを再教育するのは難しいじゃん？　だから、一度記憶を全部消して悪でも善でもない真っ白の状態にする。
んで、そこから再教育して善の心を育てる。
そして、再教育終了後にディアルガは記憶を蘇らせたんよ。
善の心を持ったダークライが記憶が蘇っても悪に染まらないとディ

アルガは信じてね。そして結果がこれ。

バクフーン
「な、なるほど……ってかディアルガって優しいのな」

ダークライ
「ディアルガ様は本当に優しいお方なんだ。
お前も見習え」

バクフーン
「……善になったダークライってすげー違和感ある（汗）」

第百七話　ＶＳダーテング！　リーフシティでの戦い！（前書き）

バクフーン
「作者、連載小説４つとか無理してんじゃねぇか？」

気合いで何とかするのさ（笑）

バクフーン
「マジですか（汗）んで、今回は？」

バクフーン達とダーテング達のバトルだよ。

第百七話　ＶＳダーテング！　リーフシティでの戦い！

リーフシティでダークネスの仲間と遭遇したバクフーン達は、彼らを捕まえる為にバトルを挑んだ。

「まずは彼らを引き離すよ。一ヶ所にいられたら戦いずらいからね」

ミュウの提案にバクフーン達は頷いて応えた。

「それじゃあやるよ、サイコキネシス！」

ミュウは右手を前に翳す。すると、右の手の平からサイコキネシスによる衝撃波が放たれ、ダーテング以外の三人のポケモン達が吹き飛んでいってしまった。

「ダーテングは任せたよバクフーン。行くよスイクン、ダークライ！」

ダーテングはバクフーンに任せ、ミュウ達は吹き飛んでいったオコリザル、リングマ、ドンファンの所へそれぞれ向かって行った。

「分散させたか……」

「お前の相手は俺がやらせてもらうぜ！」

バクフーンが電光石火で素早く動き、ダーテングに向かって行った。

バクフーンがダーテングと戦闘を始めた時、ミュウ、スイクン、ダークライも戦闘を始めていた。

「久しぶりのバトル……思いっきりやらせていただきます！」

ジラーチに石化を解いてもらうまでずっと動けなかったスイクンは少し興奮しているようだ。

「とっとと終わらせてやるぜ！　丸くなるから転がる！」

ドンファンは自分の身体を丸くし、スイクン目掛けて転がり始めた。

「守る！」

スイクンは自分の前方にエネルギーを集め壁を作り出し、ドンファンの転がる攻撃を防御した。攻撃を防御されたドンファンは後ろへ弾き飛ばされる。

「バブル光線！」

体勢を崩したドンファンに向けて素早く攻撃を繰り出したスイクン。無数の泡のようなエネルギー弾がドンファンに直撃、ドンファンを吹き飛ばした。

「野郎！　ダークラッシュ！」

吹き飛ばされてもすぐに体勢を立て直したドンファンは身体から黒いオーラを出しながらスイクンに突進していく。

「……北風よ、渦巻け……」

スイクンを囲むように冷たい北風が渦巻き始めた。そして冷たい北風を受け、空気中の水分が凍り、鋭く尖った氷の刃が生まれた。

「舞え、氷刃の刃！」

スイクンは北風をドンファンに向けて放つと氷の刃もドンファンに向かっていった。

「ナメるなぁぁぁ！」

氷の刃を身体に浴びながらも構わず突進していくドンファン。

「ただ突進するだけでは……私には勝てませんよ。北風よ、敵を阻む障壁となれ！」

スイクンの周りに強烈な突風が発生し、まるで竜巻のようにスイクンを包み込んだ。スイクンに向かって突進したドンファンだが突風に阻まれスイクンには攻撃が届かなかった。

「そろそろ大人しくなってもらいますよ」

スイクンがそう言うと突風の勢いが増し、ドンファンを空中へと浮かばせた。もがくドンファンだが、スイクンが生み出した突風からは逃げられない。

「冷凍ビーム！」

スイクンは口から超低温のビームをドンファンに向けて放った。冷凍ビームはドンファンのお腹に直撃、そして直撃した箇所からドンファンの身体が凍りついていった。

「ク、クソ……」

「氷の中で眠っていなさい」

スイクンがそう言った時、ドンファンは完全に氷の中に閉じ込められた。そしてそのまま地面に落下、辺りに鈍い音が鳴り響いた。

一方のミュウの方では……

「空手チョップ！」

ミュウに向かってジャンプしたオコリザルは右の平手で切るように殴ろうとした。

「はいはい」

ミュウは右手でオコリザルの空手チョップを軽く受け止めてしまった。

「なっ！？」

これにオコリザルは驚愕してしまった。

「そんなに驚かなくても良いよ？　ただサイコキネシスの力を右手に集めて君の攻撃を受け止めただけだからさ」

涼しい顔をしてミュウはそう説明した。

「くっならこれでどうだ！」

オコリザルはミュウを強く両手で抱き締め、空高くジャンプした。そして身体をクルクルと回転させる。

「地球投げ！」

クルクル回転しながら地面に落下していくオコリザルとミュウ。そしてオコリザルは地面にミュウを叩きつけようとした。

「ならテレポート」

地面に激突する寸前でミュウはテレポートを使いその場から瞬間移動した。そして地面にはオコリザルのみが激突した。

「残念だったね～」

オコリザルの頭上を優雅に浮遊しながらミュウは笑みを浮かべそう言った。

「テメェ……潰す！　インファイト！！」

怒ったオコリザルはミュウに向かって殴りかかった。

「サイコキネシス」

ミュウは右手を前に翳(かざ)して強く念じた。そしてサイコキネシスの力でオコリザルを捕縛し、動きを封じた。

「くっ!?」

オコリザルは逃れようとするが強い拘束力で身体はピクリとも動かない。

「悪いね。僕は君よりもずっと強いから……これで決めるよ」

ミュウはサイコキネシスを維持したまま左手で別の技を準備し始めた。左手の先にミュウと同じ大きさはあろうと思われる青色のエネルギー弾が出現した。

「波動弾!」

捕縛したオコリザルにミュウは波動弾を放った。波動弾はオコリザルに直撃し爆発。オコリザルは吹き飛んで地面に倒れた。

「終わりっと……他の皆も終わったかな?」

一方ダークライの方は……

「くらえアームハンマー!」

ダークライに接近したリングマが右手をハンマーのように振り下

ろし、ダークライを殴りつけようとした。

「……我が闇の力よ、我を守る盾となれ！」

ダークライの目の前に黒い色をしたエネルギーの壁が出現し、リングマのアームハンマーを弾いた。

「これは……ダークネス様と同じ闇の力！？」

「ふん……そのダークネスとかいう奴と一緒にするな……これは俺だけの力だ」

少し不機嫌そうな感じでダークライは言った。

「闇の力ってのは悪の力というイメージがあるが……使い方によっては闇の力は正義の力にもなる……ディアルガ様やパルキア様がそう教えてくれた……だから俺はこの力を正義の為に使う。過去に犯した過ちを償う為にもな……」

「んなもん俺が知った事じゃねぇ！　気合い玉！」

リングマは両手で作った白いエネルギー弾をダークライに向けて放った。

「無駄だ」

ダークライが右手を前に翳すと再び黒いエネルギーの壁が現れ、リングマの気合い玉を防いでしまった。

「お前ではこの防御を破る事は出来ない……」

「うるさい！　そんな壁、ぶち破ってやる！　いくぞギガインパクト！」

リングマが最大パワーでダークライに向かって突進していく。

「……隙だらけだな……俺の悪夢の世界にお前を招待してやる……ダークホール！」

向かってくるリングマに向けてダークライは黒いエネルギー弾を放った。ダークホールがリングマに当たった瞬間それは大きく膨らみリングマを包み込んでしまった。

「な……に……」

しばらくするとダークホールは消え、リングマはその場に倒れて眠ってしまった。悪夢を見ているのかリングマは魘(うな)されている。

「俺の悪夢にようこそ……さて、他の奴らも終わっている頃だろ」

ダークライは魘されているリングマを引きずりながらミュウ達の所へ向かった。

ダークライ達が相手を倒した時バクフーンは……

「火炎放射！」

「ソーラービーム！」

まだバクフーンはダーテングとのバトルを続けていた。バクフーンが放った火炎放射とダーテングのソーラービームがぶつかり合い激しい爆発が発生した。

「くそ、こいつ結構強い！」

ダーテングの強さに驚いているバクフーン。

「タネマシンガン！」

ダーテングは口から無数のエネルギー弾をマシンガンの如く放ち、バクフーンを攻撃した。

「くっ！」

バクフーンはバックステップして何とかタネマシンガンを回避した。

「お返しだ、火炎放射！」

バクフーンは口から灼熱の炎を吐き出して反撃した。

「無駄だ！」

ダーテングは両手に付いてる葉っぱの団扇（うちわ）を思いっきり振る。すると凄まじい突風が発生し、火炎放射を打ち消してしまった。

「この俺に炎技は通用しないぞ」

腕組みをしてバクフーンを挑発するように言うダーテング。

（まだ……俺の火炎放射はあの突風で消される……おまけに……）

バクフーンは空を見上げる。眩しい太陽がリーフシティを照らしていた。

（天気が良いから特性の葉緑素が発動してて、奴の動きが速いから接近しようにも逃げられちまう……どうすっかな～この状況……）

この悪い状況を打破する方法を考えるバクフーン。

「悪の波動！」

その時ダーテングが黒いエネルギー波を放ってきた。螺旋状に回転しながらバクフーンに向かっていく。

「こうなったら出来る限りの事全部やってやる！　電光石火！」

バクフーンは電光石火で素早く動き、悪の波動を回避。そのままダーテングに突っ込んで行った。

「そんなスピードじゃ俺には追いつけないぞ！」

ダーテングが素早い身の熟（こな）しで移動を始めた。電光石火で追いかけるバクフーンだが、なかなか追いつけない。

「だったら挟み撃ちにしてやる！　身代わり！」

バクフーンは身代わりを使って自分の分身を生み出した。

「もう一人の俺！　反対側に回り込んであいつを挟み撃ちにするんだ！」

「任せな！」

分身のバクフーンはダーテングを挟み撃ちにする為に先回りを始めた。本物はそのままダーテングを追いかけ続けた。

「身代わり……なるほど挟み撃ちか……」

ダーテングはバクフーンがやろうとしている事に気づいた。

「先回り成功！　逃がさねぇぞ！」

ダーテングの目の前に分身のバクフーンが立ちはだかった。そしてダーテングに向かって電光石火で突っ込んだ。

「甘いな！」

ダーテングは両手の葉っぱの団扇を下に向けて扇(あお)ぎ、突風を生み出した。そして突風の勢いでダーテングは空高く飛んだ。

「飛んだ！？　ってうわっ！？」

ダーテングに注目していた為に目の前に分身がいた事を忘れていたバクフーン。本物と分身は正面衝突してしまった。

その衝撃で分身は消えてしまった。

「痛たた……」

「隙ありだ！　悪の波動！」

バクフーンに向けてダーテングは悪の波動を放った。

「ってやばっ！？　電光石火！」

バクフーンは悪の波動が直撃するギリギリのところで電光石火を使って何とか回避した。

「危ねぇ……もうちょいで当たるとこだったぜ……」

冷や汗をかくバクフーン。

「すばしっこい奴だな」

地上に降りてきたダーテングが腕組みをしながらそう言った。

（……本当はダークネスとやりあうまでは使いたくなかったけど……仕方ねぇ、やるか！）

「うおぉぉぉ！！」

バクフーンは凄まじい炎に身体を包まれた。

ブラストモードだ。

「……一気に終わらせるぞダーテング……」

「ふん……そんな炎ただの虚仮威しだな。それで強くなったとでも言うのか？」

挑発するように言うダーテング。

「……すぐに解るさ……電光石火！」

先程の数倍以上のスピードでバクフーンは素早く動き、ダーテングに接近した。ダーテングには一瞬バクフーンが消えたように見えたみたいだ。驚きの表情を浮かべている。

「なっ消えた！？」

「……消えてねぇよ、火炎放射！」

ダーテングの背後に回り込んでいたバクフーンは火炎放射を放ち、ダーテングの背中に直撃させた。ダーテングは吹き飛んで地面に激突した。

「ぐぅ……や、やるじゃないか……」

弱点である筈の火炎放射を……しかもブラストモードになったバクフーンの攻撃を受けたにも関わらず、ダーテングは立ち上がった。だが、かなりつらそうだ。

「……堪えるを使ったな？」

「ふふ……その通りだ……あと少しタイミングが遅ければやられていたがな……」

堪える、それはあらゆる攻撃を文字通り堪える技だ。火炎放射が直撃する寸前でダーテングは堪えるを発動していたのだ。

「バクフーン！　こっちは終わったよ！」

その時、オコリザル達を倒したミュウ達が戻ってきた。

「オコリザル達がやられたか……」

「残るはお前だけみたいだな」

バクフーンは技を放つ体勢に入る。

「……フラッシュ！」

ダーテングは小さなエネルギー弾を作り出した。そのエネルギー弾からまるで太陽のような眩しい閃光が放たれた。

「くっ！？」

あまりの眩しさにバクフーン達は目を瞑(つむ)ってしまう……しばらくして光は消えた。

「……逃げられたか」

さっきまでそこにいた筈のダーテングはいなくなっていた。どうやら逃げ出したようだ。

バクフーンは悔しそうな表情を浮かべる。

「良いよバクフーン、この三人を捕まえる事が出来たんだから」

凍り漬けのドンファン、気絶したオコリザル、悪夢に魘されているリングマを指しながらミュウは言った。それを確認したバクフーンはブラストモードを解いた。

「ふぅ～……ごめんなミュウ。あいつ、次会った時は必ず倒してやっからな！」

いつものバクフーンに戻った。

「バクフーン殿、何か目的が違うと思うのですが……」

苦笑いするスイクン。

「まあバクフーンらしいけどね。さあ、こいつらを連れて湖に戻ろう。サイコキネシス」

ミュウは三人をサイコキネシスで宙に浮かばせ、そのまま湖目指して移動を始めた。スイクンも後に続く。

「……行くぞ、バクフーン」

ダークライもミュウ達の後に続いた。

「お前に言われなくても行くっての！」

まだダークライを仲間と認められないバクフーンは少し怒鳴りながらもアグノムがいる湖目指して歩き始めた。

第百七話　ＶＳダーテング！　リーフシティでの戦い！（後書き）

バクフーン
「あ～悔しい！！」

ダーテングに逃げられたのが相当悔しいみたいね（汗）

バクフーン
「次会ったらフルボッコにしたる！」

まあまあ（汗）
それよりダークライともっと仲良くしたら？

バクフーン
「……まだあいつの事は信じられねぇ……だから無理！」

ありゃ～（汗）
２人の間の溝を埋めるにはまだ時間が掛かりそうだね（汗）

第百八話　暴れ牛に注意？　うしだ＆ａｍｐ；うしだ応援団ＶＳならず者三人衆

バクフーン
「バクフーンと！」

リザードン
「リザードンの！」

バクフーン＆ａｍｐ；リザードン
『週間ポケモン放送局！』

バクフーン
「さあ今日から新しく始まりました週間ポケモン放送局！」

リザードン
「ちょっと待った！　これ思いっきり火曜日にやってたタケシとカスミのアニメのパクリだろ！」

バクフーン
「細かい事を気にしたら負けだぜ（笑）」

リザードン
「マジか（汗）」

バクフーン
「とりあえず作者から俺達で前書きと後書きを楽しくやってくれと言われたから急遽この週間ポケモン放送局を始めたのさ（笑）」

リザードン

「本当急だな（汗）」

バクフーン
「さて、今回はラグラージ、ピチュー、フィル、うしだの四人組のストーリーだな！」

リザードン
「タイトルからして明らかにうしだがメインって感じなんだが……」

バクフーン
「まあとりあえず今回のストーリーを見れば解るだろ」

リザードン
「そりゃそうだ」

バクフーン
「それじゃ、第百八話を……」

バクフーン&リザードン
『どうぞ！』

第百八話　暴れ牛に注意？　うしだ＆ａｍｐ；うしだ応援団ＶＳならず者三人衆

バクフーン達がダークネスの仲間の捕獲に成功した時、フィル、うしだ、ラグラージ、ピチューの四人組は今、アグノムがいた湖から遠く離れたバトルシティに向かっている最中だった。

「ねぇラグラージ兄ちゃん、バトルシティはまだ～？」

途中で歩き疲れたピチューがうしだの背中でゴロゴロしながらラグラージに聞いた。

「まだだよ。あと一時間位歩かないとね」

一時間……それを聞いたピチューは深くため息を吐く。

「一時間か……結構歩くなぁ……」

うしだもラグラージの言った事を聞いて少し萎(な)えている。

「何言ってるんですか。一時間位あっという間ですよ。ほら、しっかり歩いて下さい」

うしだにそう言ったのはフィルだ。しかし、当のフィル本人はいつの間にかうしだの背中に乗り、何やらノートパソコンと睨めっこしていた。

「って何俺の背中に乗ってんだよ！？」

「非常食さんが気にする必要はありません」

涼しい顔をしてフィルはうしだを非常食と呼んだ。

「ひ、非常食って……」

苦笑いするラグラージ。

「誰が非常食だ！？」

「ボクが今乗っている方ですよ」

「うしだ兄ちゃんって非常食だったんだ」

「非常食じゃねぇよ！？」

ピチュー、フィルにイジられてしまっているうしだ。ラグラージはただ苦笑いするしかなかった。

「やっと着いたね、バトルシティに」

うしだの事をいじっているうちにラグラージ達はついにバトルシティに到着した。

「やっと着いたわね～何か疲れちゃったわ」

「ボクもです」

そうは言うがとても疲れたようには見えない二人である。

「俺に乗ってただけなのに良く言うなお前ら!?」

「さて、ボクお腹空いちゃいました」

「アタシも～」

うしだを無視して二人はそんな事を言う。

「無視かよ!?　ってか、ダークネスって野郎の仲間を捜すんじゃなかったのか!?」

「ラグラージさん、この辺りに食事が出来る店はありませんか？安っぽくなく高級そうな店です」

再びうしだ無視のフィル。

「それだったらバトルシティで一番の飲食店があるよ」

「じゃあそこに行きましょう、案内して下さい」

ラグラージを先頭にフィルとピチューは飲食店に向かってしまった。

「だから俺を無視すんなっての！？　待てよお前達！」

慌ててうしだは三人を追いかけた。

飲食店。

「は～美味しかった♪」

満足そうな顔をするピチュー。

「悪くありませんね」

「……俺の前で良く美味そうに肉を食えるよなお前ら……」

若干うしだのテンションが低い。フィル達が食べたのはその店で高級なステーキだったのだ。

ちなみにフィルはナイフとフォークを持てないので食べやすいサイコロステーキを食した。

「ねぇフィル、さっきもうしだが言ってたけど、僕達こんなにのんびりしてて良いの？　ダークネスの仲間を捜さないといけないのに」

「いや今更かよ！」

うしだの鋭いツッコミがラグラージに炸裂した。

「……ボク達が捜しに行かなくてもあっちからボク達の所へやってきますよ。果報は寝て待てです」

笑みを浮かべながらフィルはそう言った。

「敵がこっちにやってくるってどういう事だよ？」

「さて、株の動きはどうなったかな？」

ノートパソコンを開きまた睨めっこを始めるフィル。

「無視なんだな。俺を無視なんだな？」

「非常食さん、少し静かにお願いします」

「だから俺は非常食じゃねぇって……」

うしだが非常食ではない事を否定しようとした時、突然店の外から爆発音が聞こえてきた。

「な、何今の爆発音は!?」

爆発音に驚くピチュー。

「どうやら来たみたいですね。行きますよ」

ノートパソコンを仕舞い、フィルは店の外へ。フィルを追ってラグラージ、うしだ、ピチューも店の外へ。

「どうやら彼らがダークネスの仲間のようですね」

フィル達が見つめる先には禍禍(まがまが)しい黒いオーラを身体に纏(まと)っている三人のポケモンが暴れていた。

そのポケモン達は額には星の飾りのような物が付いており、立派なハサミを持つザリガニのようなポケモンのシザリガーだった。

「フィル姉ちゃんが言ってたように本当にあっちから来た……フィル姉ちゃん、何で解ったの？　この人達が来るって？」

「それは敵は自らやって来るという法則が……」

「んな法則聞いた事ねぇよ」

横目でフィルを見ながらうしだがツッコミをする。

「と、とにかくあいつらを倒して湖に連れて行こう！」

戦闘体勢に入るラグラージ。

「あ～大丈夫ですよラグラージさん。さあ、こちらに来て」

「えっ？」

何故かフィルはラグラージとピチューと一緒に物陰に身を潜めた。

うしだを残して。

「さあ、頑張ってあいつらを捕まえて下さーい非常食さーん」

「ってだから非常食じゃねぇっての！？　つうか、何で俺一人であいつらの相手をしなきゃなんねぇんだよ！？」

まさかの展開に声を上げるうしだ。そんなうしだに気づいたシザリガー達がうしだを睨みつける。

「ほら、余所見してると相手に攻撃されますようしださん？」

「だから俺はうしだじゃなくて非常食……あっ……」

「グフフフ……今自分を非常食と認めましたね」

少し怖い笑みを浮かべるフィル。

「……だぁーもう！　俺は非常食じゃなくてうしだだー！」

キレたうしだ。そしてこの怒りをぶつけようとシザリガー達に向かって突進していった。

シザリガー達はうしだに向かって破壊光線を放って攻撃するが、うしだの凄い迫力に圧倒され破壊光線の狙いがズレてしまった。

「俺は非常食じゃねぇ、うしだだー！　ギガインパクトォォォ！！」

怒りのギガインパクトをシザリガー達に決めたうしだ。ギガインパクトの威力は強力で、まともに受けたシザリガー達は空高く吹き飛んでいき、星になってしまった。

「あっ……」

「ふぅ～スッキリしたぜ～！」

今の一発でストレス発散になったうしだはスッキリしたようだ。

そして自慢気な表情をしながらラグラージ達の所へ。

「どうだ？　ぶっ飛ばしてやったぜ？」

「……うしださん、ボクは捕まえて下さいと言ったんです。あんなにぶっ飛ばしてしまったら捕まえ事が出来ませんよね」

「あっ……」

今気がついたうしだ。

「うしだ……」

「ダメじゃんうしだ兄ちゃん……」

「非常食さんに任せたのが失敗でした」

言われたい放題のうしだ。名誉挽回のチャンスを水の泡にしてしまったうしだはガックリとしてしまった。

その時アグノムがいる湖では……

「はあ～……バクフーン達がいなくなるとやっぱり寂しいなあ」

アグノムが寂しそうにしながら湖周辺を浮遊していた。

「アグノム様、仮にもあなたは敵に狙われている身なのですよ？湖の中に戻って下さい」

「大丈夫だって、ギャラドスが守ってくれるしバクフーン達だっている……ん？」

空を見たアグノムは何かを発見した。その何かはアグノム達に向かってどんどん近づいてくる。

「何あれ？」

首を傾げるアグノム。そして次の瞬間その何かはアグノム達の前に墜落、墜落の衝撃で砂塵が舞った。

「……シザリガーだ」

墜落したのはなんと先程うしだに吹き飛ばされたシザリガー達だったのだ。三人共目を回している。

「何で空からシザリガー？」

不思議そうにしているアグノム。

「シザリガーはならず者ポケモンと言われる気性が荒いポケモンです。悪さでもして誰かにギガインパクトでもくらってここまで吹き飛んできたのでしょう」

ギャラドス、ご名答である。

「じゃあどうする？」

「こうします。冷凍ビーム！」

口から超低温のビームを放ったギャラドス。

冷凍ビームはシザリガー達に当たり、あっという間に凍り漬けになった。

「とりあえずこれで良いでしょう。バクフーン達が戻ってくるまでは氷の中で大人しくしてもらいます」

これで安心といった表情をするギャラドス。

こういう状況になっているとは当然うしだ達は知るはずもなく、また別の街に向かって移動を始めていた。その道中またうしだがいじられたのは言うまでもない。

第百八話　暴れ牛に注意？　うしだ＆ａｍｐ；うしだ応援団ＶＳならず者三人衆

リザードン
「……うしだが滅茶苦茶イジられてたな（汗）良いのか、ハーブ先生のキャラをあんなに……」

バクフーン
「リザードン、あのカンペ見てみろ」

リザードン
「ん？　何々……作者がハーブ先生に確認をした所、どうぞイジって下さいとの許可をもらった……ってマジか（汗）」

バクフーン
「そしてイジった結果かなり遊んだストーリーになったという事らしいぞ？」

リザードン
「うしだは目立つには目立っているがイジられキャラになってるよな（汗）」

バクフーン
「あっまたカンペ……気にしたら負けだよ（笑）……作者より」

リザードン
「何なんだあの作者は（汗）」

バクフーン
「まあ何はともあれ、無事に第百八話が終了っと！　さて、次回は

どうなんのかな？」

リザードン
「資料によると次回は……おっブラキオ組のストーリーのようだぜ」

バクフーン
「確かメンバーはブラキオにルーチェ、ピカチュウにラティアスだったな？」

リザードン
「実はハーブ先生のルーチェとラティアスの絡みを見たいっていう読者からのメッセージが結構あったみたいだぞ？」

バクフーン
「ラティアスとルーチェ……全く性格が違う二人がどう絡むのか楽しみだな！」

リザードン
「じゃあ今日はここまで！」

バクフーン＆amp;リザードン
『次回もよろしくなー！』

第百九話　悪魔、再び！（前書き）

バクフーン
「バクフーンと！」

リザードン
「リザードンの！」

バクフーン＆amp;リザードン
『週間ポケモン放送局！』

バクフーン
「さあ今回で2回目となりました週間ポケモン放送局！」

リザードン
「今回のストーリーはブラキオ達のようだな」

バクフーン
「タイトルが気になるところですな……悪魔って誰だ！？」

リザードン
「ＭＣのくせに知らないのか？（汗）」

バクフーン
「リザードンは知ってんのか？」

リザードン
「知ってるさ」

バクフーン
「誰！？」

リザードン
「それは……第百九話を見れば解る！」

バクフーン
「やっぱそうなんのな（汗）」

リザードン
「では、第百九話を……」

バクフーン＆amp;リザードン
『どうぞ！』

第百九話　悪魔、再び！

うしだがシザリガー達をぶっ飛ばしてしまった頃、ブラキオ、ルーチェ、ピカチュウ、ラティアスの四人はアグノムがいる湖から遠く離れた街、ドラゴンシティを目指して歩いていた。

「ねぇラティアス」

「呼んだ？」

ブラキオはラティアスに呼びかけたのだが、ルーチェが反応した。

「いやルーチェじゃないから。ラティアス、ドラゴンシティまではあとどの位なのかな？」

「そうですねぇ……あと三十分位ですかね」

ブラキオの質問にラティアスは答えた。

「三十分か……解った、ありがとうラティアス」

「呼んだブラキオ？」

「だからルーチェじゃないから」

苦笑いするブラキオ。

（やばい……ラティアスちゃんとはまた違う可愛さを持ってるよこのルーチェちゃん！　今ならピチューはいない……良し♪）

ナンパしたいという衝動を押さえられないピカチュウが動いた。

「ねぇルーチェちゃん、ドラゴンシティに着いたら一緒にお茶でも飲まないかい？　そして一緒にゆっくりと将来の事を話しながら……」

「ごめ～ん、私ブラキオ一筋だから。ねぇブラキオー♪」

甘い声を出してブラキオに抱きつくルーチェ。

「ちょっとルーチェ、二人が見てる前で……」

「良いじゃん減るもんじゃあるまいし♪」

「うわぁ……ルーチェさんって大胆……」

ルーチェのこの行動を見て驚いているラティアス。

「お、おのれブラキオ……あんな可愛いルーチェちゃんとべったりとは……なんて羨ましい！」

嫉妬の炎をメラメラと燃やすピカチュウはブラキオを睨んでいる。

（な、何で彼は僕を睨んでるの？）

ピカチュウが何故睨むのか解らないブラキオは首を傾げた。

それからしばらくして、ようやくブラキオ達はドラゴンシティに到着した。

「へー、結構大きな街なんだね」

街を見回しながらブラキオは呟いた。

「ドラゴンシティは全国で一番大きな街ですからね。年に一度、バトル大会やお祭りを開催したりもするんですよ」

ラティアスがブラキオにドラゴンシティの事を説明した。

「そうなんだ……っていうかルーチェ、そろそろ離れてくれないかな？」

ここに来るまで実はずっとブラキオに抱きついていたルーチェ。

「え～どうしても～？」

「離れなさい」

「ぶ～」

膨れっ面になりながらルーチェはブラキオから離れた。

「膨れっ面のルーチェちゃんも素敵だぁ！　ルーチェちゃん、僕と付き合って下さい！」

何処から持ってきたのか、ピカチュウは花束を手に持ってその場に跪き、ルーチェにプロポーズした。

「ごめん無理」

「……がっくし……」

速攻でフられたピカチュウ。両手を地面について落ち込んでしまった。

ピカチュウの気持ちが花束に乗り移ったのか、花束が枯れてしまった。

「ピ、ピカチュウさん……」

苦笑いするラティアス。

「さて、どうやってダークネスの仲間を捜すかが問題だね……僕は二手に別れて捜した方が良いと思うんだけど……どうかな？」

「確かに……それが良いかもしれないですね」

ブラキオの提案に賛成したラティアス。ルーチェもブラキオに賛成のようだ。ピカチュウは……

「何故……何故俺はモテないんだ……」

まだ激しく落ち込んでいた。

「か、彼は大丈夫？」

「気にしなくて良いですよブラキオさん。いつもの事ですから」

ピカチュウを見ながら、ラティアスは苦笑いをしながらブラキオに言った。

「……あら？　何かしらこれ？」

その時、ルーチェの足下に一枚のチラシが。

ルーチェはそのチラシを拾い、何が書いてあるのか確認する。

「こ、これは……」

書いてある内容を見て目の色を変えたルーチェ。口からは涎（よだれ）が垂れている。そのチラシにはこう書かれていた……

『全国の甘いスイーツを集めたケーキ屋がついに本日開店！　開店記念に女の子限定、ケーキの大食い大会を開催します！　二人一組のチームを作り、大食い大会に参加しませんか？　優勝チームには滅多に食べる事が出来ない幻のケーキ、イバンの実を使った超激甘ケーキをプレゼント！』

「超激甘ケーキ……これはもう行くしかない！　行くわよラティちゃん！」

ルーチェはラティアスの手をしっかり握り、大食い大会が開催される店に直行した。

「ちょっルーチェさん！？」

「待ってなさいよ！　私の超激甘ケーキ！」

ルーチェとラティアスはあっという間にブラキオ達の視界から消えてしまった。

「……完全に目的忘れてるよねルーチェ……」

苦笑いするブラキオ。

「はあ……仕方ない、僕達でダークネスの仲間を捜そうピカチュウ……あれ？」

ブラキオが後ろに振り向くと、さっきまでそこにいたピカチュウがいなくなっていた。

ピカチュウを捜す為辺りを見回すブラキオ。

「……あっいた」

「そこの綺麗なお嬢さん、どうでしょう？　僕と一緒に、お茶など……」

ついさっきまで落ち込んでいたピカチュウは早くも復活していて、

近くを通った可愛いポケモンに声を掛けていた。

「……こっちはこっちで苦労しそうだなぁ……ほらピカチュウ、行くよ」

「え～い邪魔をするなブラキオ！　今取り込み中なんだ……」

「はいはい、解ったから行くよ」

ブラキオはつるのムチをピカチュウの身体に巻き付け、強引に引っ張った。

「ぬお～放せブラキオー！？」

ブラキオとピカチュウがダークネスの仲間の捜索を開始した時、ルーチェとラティアスは大食い大会の会場にやってきていた。すでに会場には大勢の女の子達が集まっていた。

「あの～……ルーチェさん？　私達、ダークネスの仲間を捜しに来たんですよね？　この大会に参加してる場合じゃないと思うんですけど……？」

「何言ってんのよラティちゃん！　超激甘ケーキよケーキ！　これ逃したらいつ食べられるか解らないんだから！　それに、ダークネスの仲間だったらブラキオが見つけて捕まえてくれるから大丈夫よ！」

「は、はあ……」

ルーチェの勢いに押され、何も言えなくなってしまったラティアス。

「あら？　あなたもしかして、ブラストのラティアスじゃない？」

その時、誰かがラティアスの名前を呼んだ。

声がした方にラティアスは振り向く。そこには二人のポケモンがいた。

「あっ！　あなた達は、確かチーム竜星のミミロップさんにグレイシアさん！」

その二人のポケモンとはライバルチーム、竜星のミミロップとグレイシアだった。

「久しぶりじゃないのよ！」

「……まさか、あなたがこの大会にいるなんてね。ビックリだわ」

「私もビックリですよ！　フライゴンさん達も一緒なんですか？」

ミミロップとグレイシアに質問したラティアス。

「フライゴン達ならほら、彼処にいるわよ」

ミミロップが指した先には、大量の荷物を持ったフライゴン、バシャーモ、ライボルトがいた。

フライゴン達はミミロップとグレイシアの買い物に付き合わされているようだ。

「あれ？　スターミーさんとマナフィさんはどうしたんですか？」

首を傾げながらラティアスは質問した。

「……彼らは今、里帰りしてるわ。彼らの出身地は海を越えた北の地方だから、しばらく帰って来ないのよ」

二人の事を説明してくれたグレイシア。

「そうなんですか」

「……ところで、そっちにいるラティアスはあなたの親戚？　それとも姉さん？」

ルーチェを見ながらグレイシアがラティアスに質問した。

「いえ違いますよ。彼女はルーチェさん。訳あって、今一緒に行動してるんです」

「よろしく！」

元気良く挨拶したルーチェ。

「……よろしくね」

「ところであなた達がここにいるって事は……この大会に出場するの？」

「もちろんそのつもりよ！　超激甘ケーキは私がゲットしちゃうんだから♪」

完全に優勝する気でいるルーチェ。

「悪いけどそうはいかないわよ？　優勝して超激甘ケーキを食べるのは私達よ！」

なんとミミロップ達も大会に参加するようだ。

「私が食べるの！」

「いいえ、私よ！」

睨み合うルーチェとミミロップ。両者の間で火花が散っている。

「……ラティアス、あなたも付き合わされてるの？」

「グレイシアさんもですか？」

小声で話す二人。

「……お互い大変ね」

「……ですね」

『はあ……』

二人揃って深くため息を吐いた。

一方のブラキオとピカチュウは、まだダークネスの仲間の捜索を続けていた。

「う～ん、怪しいポケモンは見つからないなぁ」

「こんだけ捜してもいないって事は、この街にはいないって事なんじゃないか？」

両手を腰に当て、ピカチュウはそうブラキオに言った。

「だったら良いけど……」

「なぁ、ルーチェちゃん達の所に行かないか？　大会どうなったのか気になるしさ」

「良いけど……ルーチェがぶっちぎりで優勝する気がする」

苦笑いしながらブラキオは答えた。

「まあとにかく行こうぜ」

ブラキオとピカチュウはルーチェ達の所へ向かおうとした。

「……ん？」

その時、ブラキオの視界の中に一人のポケモンの姿が飛び込んできた。

「どうした？」

「……ピカチュウ、先にルーチェ達の所に行っててくれないかな？」

「ん？　まあ良いけど」

「ごめんね。すぐ戻るから」

そう言ってブラキオは何処かへと走り出した。

「……どうしたんだあいつ？」

ドラゴンシティの街外れ。

「あれ？　見失っちゃったかな……」

辺りを見回すブラキオ。

「……俺に何か用か？」

その時、ブラキオの背後から声が。ブラキオが振り向くと、そこには溶岩のような体色を持ち、頭部や足首は金属的な装甲に覆われたポケモンがいた。

「うん。君からは、他のポケモンとは違う雰囲気だったからね……君、ダークネスの仲間かい？」

「……俺は奴の仲間になった覚えはないが……形的には仲間って事だろうな……で、俺をどうするつもりだ？」

「捕まえるよ。ダークネスの居場所を教えてもらうからね」

戦闘体勢に入るブラキオ。

「俺を捕まえる？　……ふふふ……出来るかな貴様に……この俺、ヒードランを捕まえる事が！」

第百九話　悪魔、再び！（後書き）

バクフーン
「新コーナー！　バクフーンの、お悩み相談室！　あ～俺１人で進行すんのは緊張すんな～（汗）
このコーナーはとあるポケモンのリクエストがあったから作っちまったぜ（笑）さて、最初の悩みを抱えたポケモンは誰かな～？」

ラグラージ
「お邪魔しま～……ってバクフーン！？」

バクフーン
「あっＭｒ．空気（笑）」

ラグラージ
「空気言わないでよ（汗）それが悩みなんだからさ」

バクフーン
「あっやっぱし？」

ラグラージ
「うん……同じ空気だと思ってたうしだが凄い目立ってて……僕どうしたら目立てるかなぁって思ってさ」

バクフーン
「なるほど……良し、お前も弄られキャラになるか（笑）」

ラグラージ
「え～（汗）」

バクフーン
「うしだも弄られた事により目立つようになったし、何より弄られキャラで人気Ｎｏ．１になったポケモンもいるしな（笑）」

ラグラージ
「人気Ｎｏ．１？　誰？」

バクフーン
「バンちゃん」

ラグラージ
「……彼には勝てない（汗）」

バクフーン
「まあとにかく、お前も弄られキャラになれば目立つって（笑）」

ラグラージ
「本当に～？」

バクフーン
「本当だって（実際は解らないけど）」

ラグラージ
「今小声で何か言った？」

バクフーン
「気のせいさ。本日はここまで！　悩みがある奴は俺がバッチリ答えてやるぜ」

ラグラージ
「あんま信用出来ないよ（汗）」

第百十話　光の導き手、ブラキオＶＳ焔の悪魔、ヒードラン！（前書き）

バクフーン
「バクフーンと！」

リザードン
「以下略」

バクフーン
「略すなよ！？」

リザードン
「毎度同じだと読者が飽きるだろ」

バクフーン
「うっ正論言いやがって（汗）」

リザードン
「さて、今回はブラキオがヒードランと激突するみたいだな」

バクフーン
「ブラキオなら絶対勝てる！」

リザードン
「まあ勝敗の結果はこの第百十話を見れば解る」

バクフーン
「待ちきれねえ！　それじゃ第百十話を……」

バクフーン&

第百十話　光の導き手、ブラキオVS焔の悪魔、ヒードラン！

「タネマシンガン！」

ブラキオは口からエネルギー弾をマシンガンの如く吐き出し、ヒードランに向けて放った。

ヒードランは防御しようとはせず、そのままタネマシンガンを受けた。タネマシンガンが直撃した事で小規模の爆発が発生、ヒードランを爆煙が包み込む。

「……何か、やったか？」

爆煙が収まった時、ヒードランの身体には傷一つ無く、余裕の表情をしているヒードラン。

「やっぱり、炎と鋼の両方を持ってるから、この程度の技じゃダメージは無いみたいだね」

「攻撃ってのはな……こうやるんだよ！　火炎放射！」

ヒードランは口から灼熱の炎を吐き出し、ブラキオに向けて放った。

「守る！」

ブラキオは自分の身体をバリアで覆い、火炎放射を防御した。だが、ヒードランの火炎放射は強力で、守るで防御しているブラキオは後方に吹き飛ばされてしまう。

「くっ！？　なんて威力なんだ！？」

「オーバーヒート！」

立て続けにヒードランは攻撃を繰り出した。
強力な炎がまるでレーザーのようにブラキオに向かっていく。

「つるのムチ！」

ブラキオはつるのムチを二本出し、地面を強く叩きつけ、その反動を利用して空高くジャンプ、オーバーヒートを回避した。

「エナジーボール！」

ブラキオは口から緑色のエネルギー弾を吐き出し、地上にいるヒードラン目掛けて放った。

「岩石封じ！」

ヒードランは右前足で地面を強く踏む。すると、ヒードランの前に地面から巨大な岩石が出現、それが壁となり、エナジーボールを防いだ。

「火炎放射！」

空中では身動きが出来ないと考えたヒードランは、すかさずブラキオに向けて火炎放射を放った。

「身代わり！」

ブラキオは自分の前に分身を作り出した。分身に火炎放射を受けさせ自分の身を守り、ブラキオ本体は安全に地上へ着地した。

「連続でエナジーボールだ！」

ブラキオはエナジーボールを五つ作り出し、ヒードランに向けて放った。だが、ヒードランはこのエナジーボールに対して火炎放射を放ち、五つのエナジーボールにぶつけ、相殺させてしまった。

「ほう……草タイプにしては出来るな」

「このポケモン……強い！」

ブラキオとヒードランがバトルをしている時、ルーチェ達はというと……

「まだまだ余裕だわ！　おかわり！」

「私だってまだいけるわ！　こっちもおかわり！」

ケーキの大食い大会で、物凄い勢いでケーキを食していた。ルーチェ&ラティアスチームとミミロップ&グレイシアチームが他に参加している五チームを圧倒している。

と言っても、ラティアスとグレイシアは一般的な女の子が食べる量しか食べていない。ほとんど、ルーチェとミミロップのタイマン勝負となっている。

「……もうダメ、ギブアップ……」

ここでルーチェやミミロップのチーム以外のチームが続々とリタイアしていった。

「これくらいでギブなんて未熟未熟～おかわりよ！」

口の周りに生クリームを付けたまま、ルーチェがおかわりを宣言。

「私もおかわり！」

ミミロップもルーチェとほぼ同時におかわりを宣言した。一体この二人の胃袋はどうなっているのであろうか？

「ルーチェさん……凄すぎです……」

ルーチェの隣でゆっくりとケーキを食していたラティアスが、ルーチェの食欲にかなり驚いていた。そしてグレイシアは、ミミロップやルーチェの食欲に驚きを通り越して呆れてしまっている。

ルーチェ達が大食い大会で盛り上がっているとは知らないブラキオは、ヒードランと壮絶なバトルを繰り広げていた。

「タネマシンガン！」

「岩石封じ！」

ブラキオが放ったタネマシンガンを、ヒードランは岩石封じを使って防御した。タネマシンガンが岩石に直撃し、岩石に食い込む。

「良し、狙い通り！」

ブラキオがそう言った刹那（せつな）、岩石に食い込んだタネマシンガンが光り輝き始めた。

実はブラキオ、タネマシンガンと種爆弾のコンビネーション攻撃を繰り出していたのだ。

次の瞬間、岩石に食い込んだタネマシンガンは爆発を起こし、岩

石を吹き飛ばした。細かい破片となった岩石がヒードランに直撃する。

「くっ小賢(こざか)しい真似を……」

「ソーラービーム！」

無数の岩石の破片にヒードランが怯んでいる隙に、ブラキオは口から強力なエネルギー波を放った。ソーラービームはヒードランに直撃し、大きな爆発が発生した。

「……やった、かな？」

爆煙がゆっくりと収まっていく……

「……この俺に傷をつけるとは……貴様、もう容赦しないぞ！」

ソーラービームが直撃した筈だが、ヒードランはブラキオの攻撃を耐えていた。そして、本気になったヒードランの身体から禍禍(まがまが)しい黒いオーラが現れた。

「鬼火」

ヒードランは自分の周囲に、無数の火の玉を出現させた。

「くるか！」

ブラキオはいつでも防御出来るよう、守るを使う体勢に入る。

「ふん、鬼火は相手を攻撃するだけに使うものじゃないんだぜ？」

ヒードランはそう言った刹那、無数の火の玉を一ヶ所に集め、巨大な炎の塊を作り出した。
そして次にヒードランが取った行動に、ブラキオは驚愕する。
「炎の塊を……食べた！？」
ヒードランは自分が作り出した炎の塊を丸呑みしてしまったのだ。
「俺の特性は貰い火……炎を吸収して、自分の炎技の威力を上げる事が出来る……遊びは終わりだ！　マグマストーム！」
ヒードランは口から今までとは比べ物にならない程の強力な炎を吐き出し、巨大な炎の竜巻を作り出してブラキオに放った。
「守る！」
ブラキオは自分の身体をバリアで覆って、マグマストームを防御しようとした。巨大な炎の竜巻が守るを使っているブラキオに直撃する。
「くっ！？」
ヒードランが放ったマグマストームは強力で、守るで防御しているブラキオはマグマストームに少しずつ後方へ押されていく。何とか踏ん張ろうとするブラキオだが、自分を覆っていたバリアに亀裂が入り始めた。
「ダメだ……守るが、持たない！？」

次の瞬間、ヒードランのマグマストームはブラキオの守るを打ち破り、マグマストームがブラキオに直撃してしまった。　マグマストームを受けたブラキオは、大きく後方へ吹き飛ばされた。

「……終わったな」

勝利を確信したヒードラン、身体から出していた禍禍しい黒いオーラが消えた。そしてヒードランはその場を去ろうとする。

「……待ってよ……まだ、僕は負けてないよ」

ヒードランの背後から声が。ヒードランが振り向くとそこには、身体から緑色をしたオーラを発しているブラキオがいた。特性の深緑が発動したようだ。

「……くたばりぞこないが……いい加減死ね！　マグマストーム！」

ヒードランは再びブラキオに向けてマグマストームを放った。先程よりも更に威力が上がっている。

「僕は……負けない！　リフレクトオーラ！」

ブラキオの首にある花びらが青く輝き始めた。刹那、身体から出ている深緑のオーラがブラキオの前方に集まりバリアとなり、ヒードランのマグマストームを完璧に防御した。

「なっ！？　俺のフルパワーのマグマストームを防いだだと！？」

自分が持つ、最強の技を防御された事に驚愕するヒードラン。

「次はこれだ！」

ブラキオは身体に力を込める。すると、首にある花びらから発せられていた青い輝きが、今度は紫色に変わり始めた。

「バインディングプラント！」

ヒードランの足下から、樹木の根が無数に飛び出し、ヒードランの身体に絡みつき捕縛した。

「ぐっ！？」

抜け出そうともがくヒードランだが、しっかりと絡みついた樹木の根を振り解く事が出来ない。

「はあ……はあ……次で、決めるよ……ハードプラント！！」

今度は地面から無数の茨（いばら）が出現した。ハードプラントはヒードランに直撃した。

深緑で強化されたハードプラントを受けたヒードランはバインディングプラントの呪縛から解放されたが、後方に大きく吹き飛ばされた。

「はあ……はあ……」

リフレクトオーラやバインディングプラントなどは体力をかなり消耗するようで、苦しそうに呼吸するブラキオ。

「ぐぅ……貴様……絶対に許さん！」

吹き飛ばされたヒードランは立ち上がり、ブラキオを睨みつける。
だが、かなりブラキオの攻撃が効いたのか、ふらふらしている。

「ハードプラントを受けてもまだ倒れないのか……」

ハードプラントは強力な技故(ゆえ)、使った後しばらく反動でブラキオは動けない。
そんなブラキオに、ゆっくりとヒードランは近寄ってきた。

「消えろ！　マグマ……」

「雷！」

ヒードランがブラキオに向けてマグマストームを放とうとした時、突如ヒードランの頭上から雷が落ちてきた。
雷はヒードランに直撃、その衝撃でヒードランはマグマストームを撃てなくなってしまう。

「気になったから追いかけてきてみれば……ヤバそうな奴とバトルしてんじゃないかよブラキオ」

ブラキオとヒードランの間に一人のポケモンがやってきた。ピカチュウだ。

「貴様……」

ピカチュウに怒りの眼差しを向けるヒードラン。

「こっからは俺も参加させてもらうぜデカいの。ブラキオ、加勢するぜ」

「助かるよ」

戦闘体勢に入るピカチュウとブラキオ。

「何人増えようが……皆纏(まと)めてぶっ殺して……」

「そこまでだヒードラン」

その時、また新たに一人のポケモンがやってきた。右側頭部に湾曲した角を持つポケモン、アブソルだ。

「何故貴様がここにいる？」

アブソルを睨みつけながら質問するヒードラン。

「お前はダークネス様に従順ではないからな……勝手な行動をされては困ると思ったからずっと尾行していた……その身体でこの二人を相手にするのは無理だ」

「……貴様が俺を心配するのか？　どういう風の吹き回しだ？」

「勘違いするな。今貴様に消えてもらっては、ダークネス様の目的を果たす事が難しくなるからだ」

冷たい態度を取るアブソル。

「二人で色々話すのは勝手だが……逃がしゃしねえよ」

頬の電気袋から電気をバチバチと放出しながら二人を睨みつける

ピカチュウ。

「……フラッシュ！」

突然アブソルの右側頭部にある湾曲した角から目映い光が。

あまりに強い光に思わず目を瞑るブラキオとピカチュウ。

しばらくすると光は消えた。ブラキオ達が目を開けると、そこにはもうヒードランとアブソルはいなくなっていた。

「ちっ！　逃げられたか！」

舌打ちをして悔しそうにするピカチュウ。

「はあ……はあ……良いよ、別の奴を捕まえれば……はあ……」

「おい、大丈夫かブラキオ？」

ブラキオを心配するピカチュウ。

「大丈夫だよ、光合成」

ブラキオの身体が光輝きだした。そして身体の傷がどんどん治っていく。

「ふぅ～、回復完了！」

すっかり元気になったブラキオ。

「そういえば、ルーチェ達はどうしたのかな？」

「ま、負けたわ……」

「私の勝ち～♪」

大食い大会に決着がついた。両手を地につけ、悔しがっているのはミミロップ。満面な笑みを浮かべ、喜んでいるのはルーチェだ。どうやらルーチェとラティアスのチームが優勝したらしい。

「……やっと終わったわね……にしても、あなた達の胃袋はどうなってんのよ？」

ルーチェとミミロップが食べたケーキを乗せていた皿の数を見て呆れた表情をするグレイシア。

皿の数はかなりの量で、重ねたら小さなタワーが何個か作れる程だ。

「さあ、これで超激甘ケーキは私の物♪　食べるわよ～♪」

「まだ食べるんですか！？」

ルーチェの発言に驚愕するラティアス。

「優勝おめでとう二人共！　さあ、これが優勝した君達へのご褒美の超激甘ケーキだ」

パティシエのバリヤードが優勝商品である超激甘ケーキを二つ、ルーチェとラティアスに持ってきてくれた。

「これが超激甘ケーキ……いただきま～す♪」

早速ケーキを食するルーチェ。ちょうどその時、ブラキオ達が戻ってきた。

「ルーチェ……またこれは……たくさん食べたね」

ルーチェが食べた量を見て、苦笑いするブラキオ。小さなタワーが何個か作れる程の量の皿がルーチェの前に置かれている。

「甘～い♪　さすが超激甘ケーキね♪」

ブラキオが大変な目にあっていたとは知らないルーチェは、美味しそうに超激甘ケーキを食するのであった。

第百十話　光の導き手、ブラキオＶＳ焔の悪魔、ヒードラン！（後書き）

バクフーン
「やっぱブラキオは強いよ、うん」

リザードン
「ルーチェは食欲が凄い（汗）」

バクフーン
「さすがはライバルだ」

リザードン
「いつからルーチェとライバルに？（汗）」

バクフーン
「気にすんなって（笑）
それより次回は、グラエナ、ジラーチ、セレビィのチームみたいだな？」

リザードン
「嗚呼。そして、作者がまたやってくれたよ。ハーブ先生以外にまた、もう一人の先生とコラボするみたいだぞ」

バクフーン
「また！？　今度は誰？」

リザードン
「秘密だってさ」

バクフーン
「気になるじゃんかよ～」

リザードン
「まあ次話まで待て。
あっそうそう、今回のブラキオのオリジナル技は、先生の許可をちゃんともらってからやってるからな」

バクフーン
「作者が言うには、オリジナル技はじゃんじゃん使って下さいって言われたらしいぞ」

リザードン
「おっと、そろそろ時間みたいだな」

バクフーン
「もうか！？　しゃあない、そんじゃ……」

バクフーン&リザードン
『次回もよろしくな～』

第百十一話　新たなる敵、異世界からの訪問者（前書き）

バクフーン
「お～ついに１１０話突破か！　祝いに絵文字を使いたいが、ここじゃ使えないんだよな～（汗）」

リザードン
「絵文字って……あっそういえばお前、この前ＧＲＥＥってサイトで作者を困らせたんだって？」

バクフーン
「な、何の事かな～？（汗）ただ絵文字使って遊んでただけだけど（汗）」

リザードン
「迷惑だってのそれ（汗）それより、今回もコラボだぞ」

バクフーン
「あ～そうだった！　なあ、ハーブ以外に誰とコラボすんだ？」

リザードン
「相変わらずお前ＭＣのくせに知らないのな？（汗）」

バクフーン
「悪かったな」

リザードン
「まあ、お前がブラキオと同じ位会いたがってた奴が来たんだよ」

バクフーン
「ブラキオと同じ位？　いっぱいいるから解らねえ（汗）」

リザードン
「……（汗）ま、まあとにかく、第１１１話を……」

バクフーン＆amp;リザードン
『どうぞ！』

第百十一話　新たなる敵、異世界からの訪問者

ブラキオがヒードランと死闘を繰り広げ、ルーチェがミミロップと激闘（？）を繰り広げていた時、グラエナ、ジラーチ、セレビィの三人はアグノムがいた湖から遠く離れた場所、過去にバクフーン達がライバル達と激しいバトルを繰り広げた地でもあるレジェンドシティにやって来ていた。

ここに来たのはもちろん、ダークネスの仲間を捜す為……なのだが。

「それ、水掛け攻撃っすよ♪」

「うわっ冷たい！　やったな～それっ！」

レジェンドシティにある海岸でグラエナとジラーチは楽しそうに遊んでいた。今の気温は三十度を軽く超えていてとても暑い。ちょっとでもこの暑さを紛らわそうと海で涼もうとしたのだが……気がつけば二人は遊び始めたのである。

「ちょっとあんた達！　遊びに来たんじゃないんでしょ？　ダークネスの仲間を捜す為に来たのよ？　解ってるの？」

両手を腰に当て、まるでダークネスの仲間を捜すつもりがないグラエナとジラーチを怒鳴るセレビィ。

「解ってるっすよ～♪　それ、水掛け連続攻撃っす♪」

「負けるもんか～♪」

お互いに水を掛けあうグラエナとジラーチ。

「……絶対解ってないわよね」

呆れた表情を浮かべるセレビィ。

それから約三十分。ようやく水遊びを止めたグラエナとジラーチと一緒に、ダークネスの仲間を捜す事になったセレビィ。今はレジェンドシティのポケモンリーグ会場周辺で捜索している。

ポケモンリーグが始まっていないせいか、会場周辺にはグラエナ達以外には誰もいない。

「ねぇ、私達レジェンドシティに来たの間違いだったんじゃない？誰もいないじゃないのよ」

「おかしいっすね～俺や兄貴達が来た時にはポケモン達がいっぱいいたんすけど……」

首を傾げるグラエナ。

ポケモン達がいないのは当然である。このレジェンドシティはポケモンリーグが開催される時以外は誰もいないのだ。

無人島状態になるのである。

「実際今は誰もいないじゃないのよ。これじゃあいくら捜したってダークネスの仲間なんて見つかりっこないわよ。別の街に行きましょ」

「……そうっすね」

グラエナはセレビィの意見に賛成した。ジラーチも頷いてセレビィの意見に応えた。

「あれ……なんか嫌な天気になってきたっすね」

徐(おもむろ)にグラエナは空を見上げる。

さっきまでは眩しい太陽が照りつけていたのに、今はたくさんの雲が現れ太陽を隠してしまっている。

「もしかしたら一雨来るかもね……天気が崩れる前に街から離れましょう。あのサーナイトって子を待たせてるし」

実はグラエナ達はラグラージの協力で、船を借りていたのだ。船の運転はラグラージの家のメイドをしているサーナイトである。

「あっ！？」

突然ジラーチが声を上げた。

「どうしたんすかジラーチ？」

「グラエナ、あれ！」

ジラーチが指した先をグラエナも見てみる。

「あ、あいつは！」

険しい表情になるグラエナ。そこには二人のポケモンがいたのだ。

一人は両手に鋭いトゲがある、カエルのようなポケモンのドクロッグ。

もう一人は蜘蛛のようなポケモンのアリアドスだ。そう、焔（ほむら）の悪魔の元幹部であるドクロッグとその部下であるアリアドスがそこにいたのだ。

「何？　あいつら知り合いなの？」

セレビィがグラエナ達に質問する。

「あいつらは悪い奴らっすよ。ジラーチを狙って、俺達を襲ってきたんすから……でも、なんであいつらがここに？」

「グラエナ、あいつら何処かに行くみたいだよ」

グラエナ達に気づいていないドクロッグ達は何処かへと歩いていく。

「あとを追いかけるっすよ。あいつら、また何か企んでるかもしれないっすから」

「解ったわ、行きましょう」

グラエナ達はダークネスの仲間の捜索を一旦中止し、ドクロッグ達のあとを追いかける事にした。

グラエナ達がドクロッグ達のあとを追いかけている時、最初にグラエナ達が水遊びをしていた海岸で異変が起きていた。
空間に歪みが生じ始めたのだ。その歪みは徐々に大きくなり、次の瞬間凄まじい閃光が発せられた。……しばらくすると、閃光は収まり歪みも消えていた。
しかし、代わりにその場には七人のポケモン達が倒れていた。

「痛たた……もう、何がどうなってんの？」

右手で頭を押さえながら、体色がオレンジ色で小さな恐竜のような姿をしており、尻尾の先には炎が灯っているポケモン、ヒトカゲが起き上がった。

「うぅっ……こ、ここは一体何処なの？」

ヒトカゲに続いて起き上がったのは、頭にある葉っぱが特徴的なポケモン、チコリータ。

「お、起きれねえ！」

じたばたともがいているのは亀のようなポケモンのゼニガメ。甲羅を背に倒れてしまったので起き上がれないのだ。ヒトカゲとチコリータが協力して、ゼニガメを起こしてあげた。

「重い……おいドダイトス、早く降りろ……」

「あっわ、悪いバンギラス」

背中の甲羅に樹が生えていて、陸亀のような姿をしているポケモン、ドダイトスの下敷きになっている巨大怪獣のようなポケモン、バンギラスが降りるよう言った。

ドダイトスは急いでバンギラスから降りた。

「ぶはぁー！？　うげ～口ん中砂だらけだ～」

顔や口の中の砂を払っているのは、バクフーンだ。

「くそ……何がどうなってやがる」

そしてバクフーンの隣で起き上がったのは、片目に傷があり、ゼニガメよりも大きなポケモン、カメックスだ。

「皆、大丈夫？」

ヒトカゲがゼニガメ達に大丈夫かと聞くと、皆は頷いて応えた。

それを確認したヒトカゲは胸を撫で下ろしてホッとする。そして、改めて今自分達が何処にいるのかを確認する為、辺りを見回す。

「ここ、リーフアイルじゃないみたいだね。サニーゴがいないみたいだし……」

腕組みをしながら、ヒトカゲはそう呟いた。

リーフアイルとは、サニーゴが沢山いるリゾート地の事だ。ヒトカゲ達はそこへ旅行しに来ていたのだが、先程の空間の歪みに巻き込まれ、ここに飛ばされたらしい。

「とにかく、今は情報を集めよう。ちょうどあっちに街が見えるから、行ってみようぜ」

バクフーンがレジェンドシティを指しながらヒトカゲ達に言った。ヒトカゲ達はバクフーンの意見に頷いて応える。そしてヒトカゲ達はレジェンドシティへ向かって歩き始めた。

ヒトカゲ達がレジェンドシティに向かっている時、ドクロッグ達を追いかけていたグラエナ達は街から少し離れた所にある森の中へやってきていた。

「なんすかね、あの建物？」

ドクロッグ達の目の前には少し大きな建物が存在していた。そしてドクロッグ達はその建物の中へ入っていく。

「見た感じ、何かの研究所ってところかしら？」

建物の第一印象を言うセレビィ。

「とにかく、行ってみるっすよ」

グラエナ達も建物の中へ入っていった。

建物の中は、最初にセレビィが言ったように何かの研究所のような雰囲気を出していた。

ドクロッグ達に気づかれないようにゆっくりと追いかけるグラエナ達。

しばらく歩いていると、ドクロッグ達はある部屋の中へと入っていった。グラエナ達は、部屋には入らないで入り口付近から中を覗き込む。

「ようやく来ましたか。待ってましたよドクロッグ、スパイダー」

ドクロッグとアリアドスのスパイダーを迎えたのは、体色がピンク色で頭に貝のような物を付けているポケモン、ヤドキングだ。焔の悪魔の元幹部である。

ヤドキングは椅子に座っていて、隣には彼の部下であるバリヤードとパラセクトがいる。

さらには、同じ焔の悪魔の元幹部であるクロバット、クロバットの弟で部下のゴルバットまでもがいた。

「今まで姿を晦(くら)ましていたお前が俺様達を呼ぶとは……一体どういうつもりだヤドキング？」

腕組みをしながらヤドキングに質問するドクロッグ。

「簡単な理由ですよ。私が新しく組織した、世界の創造に入ってい

ただきたい」

右手を顎に当てながら、ヤドキングは自らが作り上げた組織、世界の創造に入るようドクロッグ達に言った。

「世界の創造？　そりゃまた大層な名前だなヤドキングの旦那」

組織の名前に少し驚いているスパイダー。

「ヒードランの部下だったと思ったら今度は新しい組織のボスかい……あんた、一体何がやりたいんだ？」

「何、組織の名前の通り、この世界を私達が新しく作り直すんですよ」

ヤドキングは自らの目的をドクロッグ達に明かした。

「世界を作り直す？　本気で言ってんのか？」

「もちろんですよ。今の私達にはそれが出来るだけの力がある。このポケモンの力がね」

ヤドキングは椅子に付いているスイッチを押す。すると、ヤドキング達の後ろにある壁が開いた。

「ドクロッグの旦那……ありゃ一体……」

「俺様が知るかよ……」

壁の向こうには、液体が入った大きなカプセルがあり、そのカプ

セルの中には一人のポケモンが入っていた。まるで眠っているように動かない。

「ポリゴンＺＮｏ．１に研究データを破壊された時には焦りましたが、データのコピーがあった為、とくに支障無くこのポケモンを作る事が出来ました。これはクロバットとゴルバットが採取したミュウのＤＮＡから作り出したポケモンです。ミュウツーとでも名付けておきましょうか」

ヤドキングはこのポケモンをミュウツーと名付けた。以前ミュウがクロバットとゴルバットとの戦闘した時、攻撃されて怪我をした事がある。

その時にクロバット達はＤＮＡを採取したのだ。

「ミュウから作り出したってか……そいつが世界を作り直す力を持ってるって言うのか？」

「その通り」

自信満々に言うヤドキング。

「でもヤドキングの旦那。それほどの力を持った奴が、大人しく言うこと聞くのか？」

首を傾げながらヤドキングに質問するスパイダー。

「心配は無用ですスパイダー。私の言うことには逆らえないようプログラムしてありますから」

「相変わらず用意周到だなあんた……面白い、その世界の創造とや

らに入ってやるよ」

「ドクロッグの旦那が入るなら俺も入るぜ」

ヤドキングが組織した世界の創造に入る事にしたドクロッグとスパイダー。

「……なんか、変な奴らが出てきたわね」

一部始終を見ていたセレビィが小声で言う。

「グラエナ、あの数が相手だと僕達危なくない？」

「そ、そうっすね……ひとまず、ここから離れた方が良さそうっす……」

グラエナ達はヤドキング達に気づかれぬよう、そーっと動く。

「……ところでよヤドキング、彼処にいる害虫共はどうする？」

『バレてたー！？』

場所は変わりレジェンドシティ。他のポケモン達を捜していたヒトカゲ達。だが誰も見つける事が出来ず途方に暮れていた。

「なんで誰もいないんだよここは！」

愚痴るゼニガメ。

「……私達、帰れるのかな……」

無事に帰れるか不安になってきてしまい、俯(うつむ)くチコリータ。

「お嬢……」

チコリータを心配するドダイトス。

（ポッポの奴……俺がいなくて寂しくしてねぇかな……）

バンギラスは仲が良いポッポを思い出していた。

「何ぼーっとしてんだよバンちゃん？　あっ！　さてはあっちに帰ったらポッポを……」

「どう料理するかを考え……る訳ねえだろうが！　それにバンちゃんって呼ぶんじゃねー！」

見事なノリツッコミをバクフーンに決めるバンギラス。その光景を見て、思わずヒトカゲ達は笑みを浮かべた。

「良し、今ので暗い気分なんか吹っ飛んだだろ？」

どうやらバクフーンは皆を明るい気分にする為にワザとバンギラスをおちょくったようだ。

「バクフーン兄ちゃん……」

皆の気分が和んだ時、突然森の方から大きな爆発音が聞こえてきた。

その森は、グラエナ達とドクロッグ達がいる森だ。

「な、なんだ！？」

「とにかく行くぞ！」

カメックスを先頭に、ヒトカゲ達は森に向かった。

「ヘドロ爆弾！」

「シャドーボールっす！」

森の中では、なんとか研究所から抜け出せたグラエナ達が追ってきたドクロッグ達と戦闘を繰り広げていた。

ドクロッグのヘドロ爆弾とグラエナのシャドーボールがぶつかり合い、大きな爆発が発生した。

「逃がしゃあしねえよグラエナちゃん！」

グラエナ達を追いつめるドクロッグ、スパイダー、クロバット、ゴルバット、バリヤード、パラセクト、ヤドキングの七人。

「ドクロッグ、ジラーチとセレビィだけは生け捕りにして下さい。良い研究材料になりそうですから」

不気味に笑いながら言うヤドキング。

「そういうとこも相変わらずだなあんた。良いだろう、だがその代わりにグラエナちゃんは俺様が仕留めさせてもらうぜ」

「好きにしなさい」

戦闘体勢に入るドクロッグ達。グラエナ達も戦闘体勢に入る。

『火炎放射！』

『エナジーボール！』

『ハイドロポンプ！』

「破壊光線！」

その時、何処からか複数の技がドクロッグ達に向かって放たれた。

ドクロッグ達はそれを回避し、一旦後方へ下がる。

「誰だ！？」

ドクロッグが怒鳴る。

グラエナ達は技が飛んできた方へ振り向く。

そこにはヒトカゲ達の姿が。

「ようやくポケモンを見つけたと思ったら……悪そうな連中だなおい」

ドクロッグ達を睨みつけながら言うバンギラス。

「君達、大丈夫？」

ヒトカゲがグラエナ達にそう聞いた。

「だ、誰っすかあなた達？」

「話はあとだ。まずは目の前のこいつらを片付ける」

カメックスが両肩のハイドロキャノンをドクロッグ達に向けながらそう言った。

「俺様達の邪魔をしようってのか？　だったらまずはてめえらから始末してやるぜ！」

ヒトカゲ達とドクロッグ達のバトルが始まった。

第百十一話　新たなる敵、異世界からの訪問者（後書き）

バクフーン
「あ～ヒトカゲ達じゃん！？　来てくれたんだ！」

リザードン
「コラボの相手はＬｉｎｏ先生の『ヒトカゲの旅』からだったのさ」

バクフーン
「うわ～早く本編で会いてぇ～♪」

リザードン
「作者の話だと、ハーブ先生のブラキオ達と同様、Ｌｉｎｏ先生のヒトカゲ達もダークネスとの最終決戦までコラボするんだとさ」

バクフーン
「ブラキオ達にヒトカゲ達……豪華なメンバーだな～♪」

リザードン
「作者は、前からＬｉｎｏ先生とコラボしてみたいという願望があったみたいで、テンション上げまくりで執筆したらしいぞ」

バクフーン
「マジか（汗）」

リザードン
「んで、作者は今、Ｌｉｎｏ先生のキャラ達の魅力を上手く引き出せているのかどうか不安らしい」

バクフーン
「う～ん……引き出せていたら良いな」

リザードン
「さて、次回はヒトカゲ達とドクロッグ達のバトルだそうだ」

バクフーン
「この小説にも到頭ミュウツーの名前が出たし……これからどうなっていくのやら……」

リザードン
「深淵の闇に世界の創造か……面倒な事になってるのは間違いないけどな（汗）」

バクフーン
「確かに（汗）」

リザードン
「んじゃ、そろそろ時間だ」

バクフーン＆amp;リザードン
『次回もよろしくな～』

第百十二話　激突！（前書き）

バクフーン
「いや～ヒトカゲ達のバトルが見られんのか～楽しみだな～♪」

リザードン
「ちなみに、ヒトカゲ達のバトルという事もあってか作者が力入りすぎてな。いつもより長くなってるらしいぞ」

バクフーン
「マジ？」

リザードン
「普段は３０００～５０００でやっているが、今回は力入りすぎて１１０００文字を超えたらしい」

バクフーン
「……長っ！？」

リザードン
「そんだけ楽しく執筆したって事だろ」

バクフーン
「とりあえず、お疲れ作者（汗）」

リザードン
「じゃあ、今回長めの第百十二話を……」

バクフーン&リザードン

『どうぞ！』

第百十二話　激突！

「いくぞヒトカゲ！」

「解ってるよバクフーン兄ちゃん！」

『火炎放射！』

ヒトカゲとバクフーンは口から強力な炎を吐き出した。二つの炎は合わさり、ドクロッグとアリアドスのスパイダーに向かっていく。

「岩石封じ！」

ドクロッグは右手で地面を思いっきり殴る。

すると、突然地面から巨大な岩がドクロッグ達の前に現れ、ヒトカゲとバクフーンの火炎放射を遮った。

「さすがだなドクロッグの旦那！　そんじゃ、俺も目立たせてもらいますかねっと！」

スパイダーは近くにあった木の枝に向かって、口から粘着力が強い糸を吐き出し、枝に絡ませる。そして蜘蛛だけあって、枝に絡まった糸の上をすいすいと歩いていき、あっという間に木の上の方まで登った。

「毒針！」

次にスパイダーは口から無数の毒針を吐き出し、ヒトカゲ達に向けて放った。高い位置から放たれた毒針が雨の如くヒトカゲ達に降

り注ぐ。

「させないわ！　リーフストーム！」

そこにセレビィがやってきて、木の葉を巻き込んだ凄まじい突風を放ち、毒針を吹き飛ばしてしまった。

「あ、ありがとう！」

ヒトカゲが礼を言う。

「気にしないで良いわ。それより二人共気をつけなさい。さっきグラエナが言ってたけど、あいつらの毒系の攻撃は掠(かす)っただけでもヤバいらしいわよ」

「それってつまり……死ぬって事か？」

バクフーンがセレビィに質問した。セレビィはその問いに頷いて応えた。

『ハイドロポンプ！』

ヒトカゲ達がドクロッグ達の相手をしている時、カメックス、ゼニガメの兄弟はクロバット、ゴルバットの兄弟と戦っていた。カメックスは両肩のハイドロキャノンから、ゼニガメは口から大量の水

を放出させ、空中で浮遊しているクロバット達に向けて放った。

『影分身！』

クロバットとゴルバットはハイドロポンプを難無く回避すると同時に影分身を使い、無数の幻影を生み出した。

「残念だけど、その技の対抗策は知ってるんだぜ！　雨乞い！」

ゼニガメが両手で水色をしたエネルギー弾を作り出し、それを空中に向けて放った。すると、ゼニガメ達とクロバット達の周囲だけに雨が降り始めた。そしてゼニガメは目を凝らして大量にいるクロバット達を見る。

「……いた！　兄ちゃん、彼処だよ！」

ゼニガメが指した先には本物のクロバット達がいた。幻影には雨が当たらず、すり抜けてしまうが本体には雨が当たり、身体が濡れてしまう。

ゼニガメはそれを知っていたのだ。

「良し任せろ！　ハイドロポンプ！」

カメックスは本物のクロバット達に向けてハイドロポンプを放った。

ゼニガメが使った雨乞いの御蔭（おかげ）でカメックスのハイドロポンプは先程放った時よりも強力きなっていた。

『エアスラッシュ！』

クロバット達は翼を羽ばたかせ、空気の刃を作り出し、カメックスのハイドロポンプに向けて放った。二つのエアスラッシュとハイドロポンプはぶつかり合い、相殺された。

「ちっ相殺か」

舌打ちをして少し悔しそうな表情を浮かべるカメックス。

「ゴルバット、一気に終わらせるぞ！」

「了解だぜ兄貴！」

『ブレイブバード！』

クロバット達は一気に急降下して、カメックス達に向かって突進していった。

「迎え撃つぞゼニガメ！」

「おう！」

カメックス達は身構える。とその時、カメックス達の前に一人の小さなポケモンがやってきた。

ジラーチだ。

「吹っ飛べー！　サイコキネシス！」

ジラーチは両手を前に翳（かざ）し、強く念じる。すると、両手からは衝撃波が放たれ、クロバット達に直撃する。

クロバット達は空中へ吹き飛ばされるが、すぐに体勢を立て直す。

「僕も協力させてもらうよ！」

「おっありがてぇ！」

笑顔でゼニガメはそう言った。

「パラセクト、バリヤード、行きなさい」

一方のチコリータ、ドダイトス、バンギラスの三人はヤドキング、パラセクト、バリヤードの三人とバトルしていた。

ヤドキングの指示で、パラセクトとバリヤードが前に出る。

「バンギラス、コンビネーションいくぞ！」

「おうよ、岩砕き！」

「ストーンエッジ！」

バンギラスは両手で地面を強く殴りつけ、地面を砕く。砕かれた地面から岩の破片が。その破片をドダイトスが操り、バリヤードとパラセクトに向けて飛ばす。

「ほいリフレクター！」

バリヤードは目の前にオレンジ色をしたエネルギーの壁を作り出し、ストーンエッジを防いだ。

「パラセクト、出番だぜ！」

「……キノコの胞子！」

パラセクトは身体から胞子をドダイトス達に向けて放った。

「させないわよ、神秘の守り！」

チコリータがドダイトス達の前に立ち、自分を含めてエメラルドグリーンの優しい光を放つ神秘のベールに包まれた。

キノコの胞子は神秘の守りに阻まれた。

これでしばらく、チコリータ達は身体に悪い状態異常にならなくなった。

「ほう、あのチコリータは神秘の守りを使えるのですか……となると、味方を補助する技を中心に使う可能性が……」

右手を顎（あご）に当てながら、ぶつぶつと独り言を言い始めた。

「……ならば、バリヤード、パラセクト、そのチコリータから先に倒しなさい」

「あいよ！　シャドーボール！」

バリヤードは両手で黒いエネルギー弾を作り出し、チコリータに向けて放った。

「……エナジーボール！」

パラセクトは口から緑色のエネルギー弾を吐き出し、同じくチコリータに向けて放った。

「お嬢はやらせない！　エナジーボール！」

「悪の波動！」

チコリータを守る為、ドダイトスはバリヤードのシャドーボールに向かってエナジーボールを放つ。そしてバンギラスも、両手から黒いエネルギー波を放つ。螺旋状に回転しながら、パラセクトのエナジーボールに向かっていく。

互いの技はぶつかり合い、大きな爆発が発生した。辺りに爆煙が立ち込める。

「仲間意識が強い事で……ならば、それを利用する戦法を考えてみますか……」

また独り言を言い始めるヤドキング。その時、ヤドキングの背後に忍び寄るポケモンが一人。

グラエナだ。

「不意打ちっす！」

グラエナは一気にヤドキングに接近、突進していった。

「影分身」

グラエナの不意打ちが当たる寸前で、ヤドキングは影分身を使い

攻撃を回避した。

「おわっ！？」

攻撃を回避された事でグラエナはバランスを崩し、顔から地面にぶつかってしまった。

「痛たた……は、鼻が～……」

両前足で鼻を押さえるグラエナ。

「……水の波動」

ヤドキングが片手で水のエネルギー弾を作り出し、グラエナに向けて放つ。

「わわわ！？　穴を掘る！」

グラエナは慌てて穴を掘るで地面に潜り、水の波動を回避した。

そしてグラエナは、チコリータ達の所まで戻っていった。

「あ、危なかったっす……」

全員がバトルを始めている中、ヒトカゲ達のバトルがヒートアップしていた。

「毒突き！」

「電光石火！」

ドクロッグが毒突きでバクフーンを攻撃しようと接近、拳にある鋭いトゲで刺そうとした。

バクフーンは電光石火で素早く動き、毒突きを回避する。

「今度は俺の番だ、火炎放射！」

ドクロッグから離れたバクフーンは火炎放射を放つ。

「掴まりなドクロッグの旦那！　糸を吐く！」

今までの戦闘中にスパイダーは木と木の間を自分の糸を絡ませ、巨大な蜘蛛の巣を作っていた。

スパイダーは蜘蛛の巣からドクロッグに向かって糸を吐いた。ドクロッグはその糸を掴む。

「そらっ！」

スパイダーは力いっぱいドクロッグを引っ張り上げた。それにより、ドクロッグは火炎放射を回避出来た。

「良いアシストだぜスパイダー！」

ドクロッグは掴んでいた糸を放し、バクフーンに向かって落下していった。

「くたばりやがれ！」

ドクロッグは再び毒突きで攻撃を仕掛けた。

「電光石火！」

バクフーンは素早く後方に下がり、毒突きを回避した。ドクロッグの毒突きによる攻撃は地面に直撃する。

「今だ、火炎放射！」

そこにヒトカゲがドクロッグに向けて火炎放射を放つ。

「旦那！」

先程と同じようにスパイダーが吐いた糸をドクロッグが掴み、スパイダーが引っ張り上げて火炎放射を回避した。

「やっぱり、あのスパイダーってのが厄介だな……セレビィって言ったっけ？　何かあいつらの動きを止める事が出来るような技を持ってるか？」

バクフーンがセレビィに質問した。

「あるにはあるけど、あいつらが地上にいないと無理よ！」

「持ってる事が解れば充分だ！」

そう言った刹那（せつな）、バクフーンはドクロッグとスパイダーの真下へ向かっていった。

「これでもくらえ、噴火！」

バクフーンは背中から大量の炎を噴き出させ、蜘蛛の巣にいるドクロッグ達に向けて放った。

噴火の炎は蜘蛛の巣に燃え移り、糸を燃やしていく。

「やばっ！？　旦那、一旦降りるぜ！」

スパイダー達は炎から逃れる為に蜘蛛の巣から離れ、地上に着地した。

「今だセレビィ！」

「森の力よ……彼らを捕縛して！」

バクフーンがセレビィに合図を出した刹那、ドクロッグ達の足下から植物の蔓（つる）が出現し、ドクロッグ達の身体に絡みついて動きを封じた。

森の神と呼ばれる、セレビィならではの力だ。

「くそっ動けねぇ！？」

もがくドクロッグ達だが、蔓はしっかりと身体に絡みついて解けない。

「ヒトカゲ、最後は決めてくれよ！」

バクフーンがヒトカゲに合図を出した。

「……紅蓮の炎を操る神よ……」

合図を受けたヒトカゲは目を閉じ、両手を合わせると、なにやら呪文のような詠唱を始めた。

すると、ヒトカゲを中心に風が渦巻き始める。

「……我ここに誓う　我と汝の力ここに集結し時　我の前に現る悪を持つものに　粛正の咆哮を与えん！　くらえ、ブラストバーン！」

詠唱を唱え終えた直後、本来ヒトカゲが使う事が出来ない技、ブラストバーンを放った。

凄まじい炎の塊はドクロッグ達に直撃し、ドクロッグ達はその炎に身を焼かれた。ブラストバーンが強力だったためか、ドクロッグ達は目を回しその場に倒れた。

「ヒトカゲが、ブラストバーンを使った!?」

本来ならあり得ない光景を目の当たりにして、セレビィは驚愕している。

「ナイスだヒトカゲ！」

「へへ♪　バクフーン兄ちゃんこそ、良い噴火だったよ！」

そんなセレビィを余所（よそ）に、二人は笑顔でハイタッチした。

ヒトカゲ達のバトルに決着がついた時、カメックス達は……

「ハイドロポンプ！」

「水の波動！」

「ラスターカノン！」

カメックスは両肩のハイドロキャノンから大量の水を、ゼニガメは両手で水色をしたエネルギー弾を、ジラーチは銀色をしたエネルギー弾をそれぞれ、クロバットとゴルバットに向けて放つ。

『電光石火！』

クロバット達は電光石火で素早く動き、カメックス達の攻撃を次々と回避していく。素早いクロバット達になかなか攻撃が当たらず、苦戦しているカメックス達。

「ちっ！　ちょこまかと動きやがって！」

少し苛立っているカメックス。

「ふっ俺達兄弟のスピードについて来れまい！」

「おらいくぞ！　エアスラッシュ！」

クロバットとゴルバットが連続でカメックス達にエアスラッシュを放つ。無数の空気の刃が襲いかかる。

「僕に任せて、サイコキネシス！」

ジラーチはサイコキネシスによって作り出した衝撃波を無数に向かってくるエアスラッシュに向けて放った。衝撃波を受けたエアスラッシュは全て吹き飛ばされ、クロバット達に向かっていく。

『電光石火！』

クロバット達は冷静に電光石火で素早く動き、回避した。

「兄ちゃん！」

「解ってる、いくぞゼニガメ！」

カメックスはハイドロポンプでゼニガメをクロバット達がいる空中に打ち上げた。

「これでもくらえ！　高速スピンからハイドロポンプ！」

ゼニガメは甲羅の中に自分の顔や手足を引っ込め、高速回転を始めた。

その状態のままゼニガメはハイドロポンプを放つ。高速スピンしながらのハイドロポンプは三百六十度、全ての方向に放たれ、高速で飛行していたクロバット達に命中する。ハイドロポンプを受けたクロバット達は地上に落下し、地面に身体を打ちつける。

飛べないゼニガメも地上へ落下してしまうが、落下地点にカメックスが先回りし、ゼニガメを見事にキャッチした。

「くっ……まだだ……まだ俺達は……」

バトルを続けようとクロバット達は立ちあがろうとする。

「次で終わりだよ、重力！」

ジラーチは両手を前に翳す。そしてクロバット達の周辺のみ、重力を変化させた。急に身体が重くなった事で、クロバット達は起き上がれなくなった。

「今だよ二人共！」

『冷凍ビーム！』

カメックスとゼニガメは口から超低温のビームを吐き出し、クロバット達に向けて放った。

冷凍ビームはクロバット達に直撃し、あっという間に凍り漬けにしてしまった。

「はい、蝙蝠（こうもり）の氷像の出来上がりってな！」

腕組みをして、得意気に言うゼニガメ。

一方のチコリータ、ドダイトス、バンギラス、グラエナは……

「いくわよドダイトス！」

「ええ、いきますよお嬢！」

『エナジーボール！』

チコリータとドダイトスはヤドキングに向けてエナジーボールを放つ。

「バリヤード」

「ほいきた、光の壁！」

ヤドキングの前にバリヤードがやってきた。

そして自分の前方にエネルギーの壁を作り出し、エナジーボールを防いでしまう。

「パラセクト」

「……シザークロス！」

いつの間にかパラセクトはチコリータの背後に回っていた。そしてチコリータに向けて、自分の鋭い爪を振り下ろす。

「させないっすよ！　不意打ち！」

そこにグラエナが、パラセクトの左側から突進し、パラセクトを吹き飛ばした。

「破壊光線！」

吹き飛ばされたパラセクトに、バンギラスは破壊光線を放った。

破壊光線は見事にパラセクトに直撃、パラセクトは目を回してそ

の場に倒れた。

「おっしゃ！」

ガッツポーズするバンギラス。

「大丈夫っすかチコリータ？　怪我はないっすか？」

「え、ええ大丈夫。ありがとう、助けてくれて」

グラエナに礼を言うチコリータ。

「すまない、お嬢を助けてくれて感謝する」

ドダイトスもグラエナに礼を言う。

「当然の事をしただけっすよ。さあ、あと二人っすよ！」

グラエナは残ったヤドキングとバリヤードを睨む。

「パラセクトがやられましたか……これは、少しマズいかもしれませんね。仕方ありません、バリヤード、時間を稼いで下さい。私は、奴を起こしてきます」

「えっあいつを!?　けど、まだあいつは完全じゃないんだろ？暴走でもしたらどうすんだよ？」

「私が作った作品に、暴走なんてありえません。とにかく、ここは任せましたよ」

そう言ってヤドキングは研究所の中へと入っていった。

「……前のポリゴンZの時は歯向かわれただろうが……はあ、しゃあない、やるか」

呆れた表情を浮かべながらも、バリヤードは戦闘体勢に入る。

「何？　一人あの建物の中に入ったわよ？」

ヤドキングの不可解な行動に首を傾げるチコリータ。

「逃げたんじゃねぇか？」

バンギラスは腕組みをしてそう言った。

「……あっマズいっす！？　あの建物の中にはあいつが作ったポケモンがいるんすよ！」

ヤドキングが作ったミュウツーがいる事を思い出したグラエナが慌てた様子で声を上げる。

「あいつが作ったポケモン？　一体どんなポケモンなんだ？」

グラエナに質問するバンギラス。

「とにかくやばそうなポケモンっすよ！　ヤドキングを止めるっす！」

グラエナはヤドキングを止める為、研究所に向けて走り出した。

「悪いけど、こっから先は通行止めだ！」

バリヤードがグラエナの前に立ちはだかり、両手を翳す。

「邪魔っすよ！」

構わずグラエナはバリヤードに向かって突進した……が。

「ぐっ！？」

バリヤードの目の前まできたグラエナは、何かにぶつかったような衝撃を顔に受ける。

「痛たたた……」

両前足で顔を押さえるグラエナ。

「残念でした。俺は指先から波動を出して、空気を固めて壁を作り出す事が出来るのさ。今、研究所への入り口周辺には見えない空気の壁を張り巡らした。この壁は絶対に壊せないぜ！」

自信満々の表情で言うバリヤード。その後、バリヤードは研究所の入り口に向かいながら、見えない空気の壁を何重にも張り巡らせ、侵入出来ないように完全にシャットアウトした。

「お～い！」

その時、バトルを終わらせたヒトカゲ達が合流した。

「おいおい……ドクロッグ達やクロバット達もやられたのかよ。は

あ……俺の負担がまた増えたなこりゃ……」

ため息を吐くバリヤード。

「これは……一体どういう状況だ？」

バクフーンがドダイトス達に質問した。

バクフーンの問いにはドダイトスが答え、状況を全員に説明した。

「……じゃあ、あの偉そうにしてたポケモンは中にいるんだね？」

ヒトカゲの問いに、ドダイトスは頷いて応える。

「んで、あいつが見えない壁を何重にも張り巡らして、中への侵入を妨害してんだな？」

「そういうこった」

今のバクフーンの問いにはバンギラスが答えた。

「……なあ、誰か瓦割りを使える奴いないか？」

急にバクフーンはそんな事を皆に聞いた。

「俺が使えるが？」

「俺も使えるぞ」

カメックスとバンギラスの二人が瓦割りを使えるようだ。

「良し！　したら、二人であの壁に瓦割りをやってくれ」

「壁にか？　けどよ、あいつはこの壁は絶対に壊せないって言ってたんだぜ？」

「良いから良いから、早くやってくれ」

バンギラスの言う事を軽く流し、早くやるようバクフーンは促す。訳が解らないバンギラスとカメックスだが、とりあえず言われた通りにする事にした。

（げっ！？　まさか、気づかれたのか？）

焦りの表情を浮かべるバリヤード。
そしてバンギラスとカメックスは見えない壁の前へ。

『瓦割り！』

二人は壁を思いっきり殴った。すると、見えない壁は簡単に壊れてしまった。

「壊れた！？」

余りに簡単に壊れてしまったので、バンギラスは驚きの声を上げる。

「見えない壁って言っても、リフレクターや光の壁の類いと同じなんだよ。だから瓦割りで簡単に壊せる。それに、そいつは絶対に壊せないって言っておきながら何重も壁を作った……絶対なら、壁を何重も作る必要はないからな。自分からこの壁は壊せるって言って

るようなものさ」

自分が推理した事を自信満々に言うバクフーン。このバクフーンはかなり頭が良いようだ。

「うっバレてる……」

焦りまくっているバリヤード。

「な～るほど……んじゃ、さっさとこの壁壊すか！」

バンギラスは連続で瓦割りを壁に決める。
カメックスも一緒になって壁を攻撃する。
二人の攻撃で壁はどんどん壊されていき、ついに壁は全て破壊された。
そしてバリヤードをバンギラスとカメックスが囲む。

「覚悟は良いか？」

そう言いながらカメックスはハイドロキャノンをバリヤードに向ける。

「あわわわ……」

「くらえ、ハイドロポンプ！」

カメックスはバリヤードに至近距離でハイドロポンプを直撃させた。
バリヤードは吹き飛ばされ、研究所の壁に身体を打ちつける。そして目を回し、その場に倒れた。

「片付いたな。良し、中に入るぞ」

カメックスを先頭に、全員で研究所の中へ入ろうとした……がその刹那、研究所の中から青色をしたエネルギー弾が二つ放たれた。

「ぐはっ!?」

「カメックス!?　おわっ!?」

カメックスとバンギラスは腹部にエネルギー弾を受けてしまい、大きく後方へ吹き飛ばされた。

「兄ちゃん!?」

「バンギラス!?」

慌ててカメックス達の所へ駆け寄るヒトカゲ達。

「大丈夫っすか!?」

「くっ……な、なんとかな……」

バンギラスとカメックスは攻撃を受けた箇所を押さえながら、なんとか立ち上がる。

「おやおや、バリヤードもやられてしまいましたか……まあ良いでしょう。さあミュウツー、敵を排除しなさい」

研究所の中からはヤドキング、そしてミュウツーが出てきた。

『ミュウツー！？』

ミュウツーの姿を見た瞬間、ヒトカゲ達は驚きの声を上げる。

「お、おいどういう事だよ？　ミュウツーはあの時やっつけた筈だろ！？」

声を上げたのはゼニガメだ。そう、ヒトカゲ達がいた世界でもミュウツーがいた。ヒトカゲ達は皆で力を合わせ、ミュウツーを倒したのだ。

しかし、今目の前にいるのは紛れもなくミュウツー。だから、ヒトカゲ達は混乱しているのだ。

「やっつけた？　おかしな事を言う奴ですね。このミュウツーは私が作り出したばかりの作品ですよ？　戦っている筈がありません……無駄話も終わりにしましょう。やりなさい、ミュウツー」

ヤドキングの指示を聞き、ミュウツーは無言のままヒトカゲ達にゆっくりと近づいていく。

「こっちに来るんじゃないわよ！　私に宿る森の力よ……あいつを捕縛して！」

ミュウツーの足下から植物の蔓が現れ、ミュウツーの身体に絡みついた。しかし、ミュウツーはサイコキネシスを使い、蔓を吹き飛ばしてしまった。

「そんなっ！？」

「俺がやるっす！」

グラエナがミュウツーに向かって走り出した。

「アイアンテール！」

グラエナは自分の尻尾を鋼のように硬くして、ミュウツーを攻撃した。

しかし、ミュウツーが右手を前に翳すとバリアーが張られ、アイアンテールはバリアーによって弾かれてしまう。

弾かれた事で体勢を崩したグラエナに、ミュウツーは左手をグラエナの腹部に当てる。すると、左手からはエネルギー弾が作り出される。

波動弾だ。波動弾はゼロ距離でグラエナに直撃、グラエナは大きく後方へ吹き飛ばされてしまった。

「がはっ……」

グラエナは倒れ、気を失ってしまう。

「グラエナ！？　こいつ、よくもグラエナを！」

怒ったジラーチは両手を上に向けて翳す。

すると、ジラーチの頭上に大きな銀色をしたエネルギー弾が現れた。

「破滅の願い！」

上に向けて翳していた両手を振り下ろし、破滅の願いをミュウツーに向けて放つジラーチ。

それに対してミュウツーは右手にエネルギーを集め、振り下ろす。
すると、右手からは三日月型のエネルギー波が放たれ、破滅の願いに向かっていった。サイコカッターといわれる技だ。
破滅の願いとサイコカッターはぶつかり合い、凄まじい爆発が発生した。

「僕の破滅の願いが相殺された！？」

自分が持つ最強技を相殺された事に驚愕するジラーチ。……再びミュウツーがゆっくりと近づいてくる。

（こうなったらもう一つの詠唱を使うしか……）

近づいてくるミュウツーと戦う為、ヒトカゲは目を閉じ両手を合わせ、再び呪文のようなものを唱えようとした。
しかしその刹那、ヒトカゲ達の前に一人のポケモンが現れた。そのポケモンとは、グラエナ達をこのレジェンドアイランドまで連れてきてくれたラグラージのメイド、サーナイトだった。
テレポートを使ってここまで瞬間移動をして助けにきたのだ。

「あ、あなたは？」

ヒトカゲがサーナイトにそう聞いた。

「話はあとでしましょう！　今は逃げるのが先です、テレポート！」

サーナイトは強く念じる。すると、サーナイト自身と周りにいたヒトカゲ達の身体が光り輝き出す。次の瞬間、サーナイト達はその場から一瞬で消え去った。テレポートしたのだ。

「逃げられましたか……まあ、ミュウツーが言う事を聞くのが解っただけでも良しとしましょう。ミュウツー、そこに倒れている者達を研究所まで運んで下さい」

ミュウツーは無言のまま、サイコキネシスを使い気絶しているドクロッグ達の身体を浮かばせ、研究所の中へと運んでいった。

一方テレポートでミュウツーから逃げ出したサーナイト達は船に乗って、レジェンドアイランドを出発していた。

「あの、助けてくれてありがとう。僕はヒトカゲ」

サーナイトに礼を言いながら挨拶するヒトカゲ。その後、自分の仲間達の事もサーナイトに紹介した。

「私はサーナイトと言います。間に合って良かったです。あの時、私が駆けつける事が出来たのはある人に教えてもらったからなんです」

「ある人？　ある人って？」

「私よ」

ヒトカゲの背後から突然声が。

「わっ！？」

飛び上がって驚くヒトカゲ。ヒトカゲの背後にいたのは、アグノムと同じく神と呼ばれるポケモン、エムリットだった。

「あなた良いリアクションするわね。私はエムリット。とりあえず神だからよろしく」

軽く挨拶するエムリット。

「そのエムリットさんが、あなた達の危機を教えてくれたんです。だから、テレポートで助けに行く事が出来たんです」

助けに行けた理由を説明するサーナイト。

「あのポケモンからは嫌な力を感じたからね。あのまま戦ってたら、仮に勝つ事が出来たにしても、被害は大きかった筈……それより、あんた達はこの世界のポケモンじゃないわね」

ヒトカゲ達の事を見ながら、エムリットはそう言った。突然そんな事を言われても、いまいちピンとこないのか困惑した表情をするヒトカゲ達。

だが、バクフーンだけは納得した表情を浮かべる。

「やっぱりな。あの海岸にいた時からなんか違和感があったんだ。あの空間の歪みに巻き込まれて飛ばされたのは俺達がいた世界じゃなく、別の世界って事か」

「あら。あなたはあっちのバクフーンよりも賢いみたいね？　飲み込みが早くて助かるわ」

笑顔で言うエムリット。

「……ね、ねえ、僕達は元の世界に戻れるの？」

一番気になっている事をエムリットに聞くヒトカゲ。そして、ヒトカゲだけじゃなく他の皆もそれが気になっていたようで、エムリットに注目する。

「戻れるわよ。パルキア様の力でね」

「ほ、本当!?」

「嘘言ってどうすんのよ？」

戻れる……それを聞けた瞬間、ヒトカゲ達は嬉しそうにした。

「もっとも、パルキア様が無事ならの話だけど」

『えっ？』

今の一言で表情が固まるヒトカゲ達。

「今パルキア様は何者かと戦っているわ。それも空間を歪ませてしまう程のね。あなた達は、その歪みに巻き込まれたのよ」

エムリットの説明だと、ヒトカゲ達が歪みに巻き込まれてこの世

界に飛ばされた原因、それはパルキアと謎のポケモンとの戦闘によって生じた空間の歪みらしい。

「パルキア様は強いお方……あの方に限って負けるという事は無いと思うけど……」

エムリットは少し不安そうな表情を浮かべながら、空を見つめた。

第百十二話　激突！（後書き）

バクフーン
「詠唱かっけぇ～♪　ヒトカゲやるな～♪」

リザードン
「俺の昔の姿がヒトカゲだが……全てにおいて負けた気がする（汗）」

バクフーン
「それよりさ、ヒトカゲ達がこっちに飛ばされた原因がパルキアと誰かさんの戦闘らしいじゃんか！」

リザードン
「次話では、パルキアとその誰かさんの戦闘の話みたいだぞ」

バクフーン
「一体誰だ？」

リザードン
「まあパルキアと戦って空間が歪んじまうときたら相手は奴しかいないだろ」

バクフーン
「……ですよね～（汗）」

リザードン
「さて、そろそろ時間だ」

バクフーン
「早いな～時間が経つのはよ（汗）」

バクフーン&リザードン
『次回もよろしくな～』

第百十三話　激突！　パルキアＶＳダークネス！（前書き）

バクフーン
「ついにパルキアがダークネスとバトルすんのか！」

リザードン
「俺らや作者の間では兄貴と呼ばれるパルキアがダークネスとどう戦うのか……気になるところだな」

バクフーン
「なあなあ、早く見ようぜリザードン♪」

リザードン
「……お前、完璧ＭＣの仕事を忘れてるだろ（汗）」

バクフーン
「は～や～く～♪」

リザードン
「はあ（汗）しゃあないな。それじゃ、第百十三話を……」

バクフーン＆ａｍｐ；リザードン
『どうぞ！』

第百十三話　激突！　パルキアＶＳダークネス！

「……一体何処にいやがんだ？　ダークネスって野郎はよ……」

バクフーン達がダークネスの仲間を捜している時、パルキアはダークネス本人を捜していた。

異空間を渡り、ダークネスと思われる気配を辿ってきたパルキアだったが、なかなかダークネスを見つけられずイライラしていた。

「あ～俺はこういうのが苦手なんだよちきしょうが！　何か良い方法はねえのか！」

パルキアはダークネスを見つける方法が無いか考える。

「……ん？　なんだこの気配は？」

考え事をしていた時、何かを感じ取ったパルキア。

「この気配……ギラティナか？　なんでギラティナの気配をバクフーン達がいる世界で感じるんだ？　あいつは別次元にいる筈だろ……」

不思議がるパルキア。

ギラティナはダークネスに身体を乗っ取られている事をパルキアは知らない。当然の反応だろう。

「……とにかく、行ってみるか。開け、空間の扉！」

パルキアは右手を前に翳す。すると、目の前の空間が裂け、別世

界への入り口が出現した。そしてパルキアはその入り口へと入っていく。

「なんだここは？　島か？」

パルキアがやって来たのは、辺り一面岩ばかりで何も無い殺風景な島だった。

「こんな所にギラティナが……おいギラティナ！　何処にいんだ！」

ギラティナの名を叫ぶパルキア。辺りにパルキアの声が響き渡る。

「……まさか、ディアルガちゃんに続いて君まで自分からやってくるなんてね……パルキアちゃん♪」

パルキアの背後から声が。パルキアは振り向き、ダークネスの姿を確認する。

「あん？　俺をちゃん付けで呼ぶとはなんの冗談だギラティナ？」

喧嘩腰になりながらパルキアは言った。

「ギラティナ？　彼なら心の奥底に幽閉してるよ、パルキアちゃん♪」

子供みたいな無邪気な笑顔で言うダークネス。

「……どうやらギラティナじゃねえみてぇだな……何者だてめぇ？」

「……これから倒される君に名乗る必要は無いと思うけど……せっかくだから名乗ってあげる。僕はダークネスだよ」

「ダークネス……てめぇが……おい、ディアルガをどうした？」

戦闘体勢に入りながら、パルキアは質問した。

「さあ、どうなったでしょう？」

恍（とぼ）けるダークネス。

「ふざけやがって……だったら、力ずくで聞き出してやる！　いくぞゴラァ！」

怒号を上げながら、パルキアはダークネスに接近していった。

「ドラゴンクロー！」

パルキアは右手の鋭い爪でダークネスを攻撃しようとした。

「守る」

ダークネスは自身をバリアーで覆い、パルキアのドラゴンクローを防御した。

「今度はこっちからいくよ、竜の波動！」

ダークネスは口から青色のエネルギー弾を吐き出し、パルキアに向けて放つ。

「んなもんくらうか！」

パルキアはドラゴンクローで竜の波動を切り裂いてしまった。

「ふふ、ディアルガちゃんと違って、君はずいぶんと攻撃的だねパルキアちゃん♪」

パルキアを嘲笑（あざわら）うようにしながら、ダークネスは空へと上昇した。

「っるせぇ！　竜の息吹き！」

パルキアは口からエネルギー波を吐き出してダークネスを攻撃する。

「シャドーダイブ」

ダークネスはギラティナだけが使える技、シャドーダイブを使い、その場から姿を消した。

竜の息吹きはさっきまでダークネスがいた場所を通過し、遥か上空へ飛んでいった。

「ちっシャドーダイブか、厄介な技を使いやがって！　何処行きやがった!?」

辺りを見回してダークネスを捜すパルキア。

「ここだよ!」

突如ダークネスはパルキアの背後から現れた。

パルキアに向かって突進していく。だが、パルキアは攻撃が直撃する寸前で空へ急上昇し、シャドーダイブを回避した。

「くらえ、竜星群!」

パルキアは両手から無数のエネルギー弾を作り出し、ダークネスに向けて放つ。無数のエネルギー弾はまるで雨の如くダークネスに降り注ぐ。

「守る!」

だがダークネスは守るを使い、竜星群を全て防御した。

「ドラゴンクロー!」

守るは連続で発動させるのは難しい技。今が攻めるチャンスだと考えたパルキアはダークネスに向かって一気に急降下、ドラゴンクローで攻撃を仕掛ける。

「鋼の翼！」

ダークネスは翼を鋼のように硬くして、パルキアのドラゴンクローに対抗。二つの技がぶつかり合うと凄まじい衝撃波が発生し、周囲に転がっていた岩が吹き飛んでしまった。

「オラァァァ！」

パルキアはドラゴンクローを連続で使い続けた。ダークネスも鋼の翼でこれに対抗する……が、パルキアのパワーが強いせいか、じりじりと後ろに押され始める。

「くっ……しつこいよ！　シャドーボール！」

ダークネスは口から黒いエネルギー弾を吐き出し、パルキアに向けて放つ。至近距離で放たれた為、パルキアは回避出来ずにシャドーボールをまともに受けてしまい、後方に大きく吹き飛ばされた。

「この野郎！」

すぐに体勢を立て直したパルキアは再びダークネスに接近する。

「シャドーダイブ！」

ダークネスはパルキアとの接近戦は不利と判断、シャドーダイブを使い姿を晦ました。

「くっまたかよ！」

パルキアはその場で急停止、ダークネスを捜す為に辺りを見回す。

「……竜の波動！」

突如ダークネスはパルキアの頭上から姿を現し、強力な竜の波動を放った。

「波動弾！」

とっさにパルキアは両手で青色をしたエネルギー弾を作り出し、竜の波動目掛けて放つ。

二つの技はぶつかり合い凄まじい爆発が発生、爆発の衝撃で地面に地割れが。地割れは島全体に広がった。

「そっちがシャドーダイブで姿を隠しながら戦うってんなら、俺はこうだ！　開け、空間の扉！」

パルキアは右手を前に翳して目の前の空間を裂き、別次元への入り口を作り出した。パルキアはその中へと入っていく。

パルキアが完全に中へ入ると、裂けていた空間が元に戻った。

「パルキアちゃんだけの力、空間移動か……さて、何処から来るのかな？」

辺りを見回すダークネス。

「もらったぁ！」

突如、ダークネスから見て右側の空間が裂け、中からパルキアが飛び出した。

「ドラゴンクロー！」

パルキアはフルパワーのドラゴンクローをダークネスに直撃させた。

ドラゴンクローを受けたダークネスは地上へ吹き飛ばされ、身体を強く地面に叩きつけられた。

パルキアの力が余程強かったのか、ダークネスの身体は地面にめり込んでいる。

「痛たた……やってくれたねパルキアちゃん！　もう怒ったよ！」

「っるせぇんだよ！　こっちはもうとっくにキレてんだ！　竜星群！」

パルキアは最大パワーで竜星群を放った。

「シャドーダイブ！」

だがダークネスはまたシャドーダイブを使い姿を晦まして竜星群を回避。そしてすぐにパルキアの背後へ。

「お返しだよ！　竜の波動！」

「ぐっ！？」

パルキアは背中に竜の波動を受けてしまった。

パルキアは吹き飛ばされ、地面に身体を叩きつけられた。その衝撃で辺りに砂煙が立ち込める。

「どうだい僕の攻撃は？　結構効くでしょ♪」

仕返しが出来て喜ぶダークネスは満面な笑みを浮かべながら地上に着地する。

「ちっ……やりやがったなてめぇ！　これでもくらいな！」

起き上がったパルキアは攻撃する体勢に入る。

すると、パルキアの右肩部分にあるパールのような宝石が光り輝きだした。そしてパルキアの右手も光り輝きだす。

パルキアだけが使える技、亜空切断だ。

「なら僕はこの力を使わせてもらうよ！」

ダークネスも攻撃する体勢に入る。そして、ダークネスの身体が淡い水色の光に包まれ、口に高密度のエネルギーを集め始めた。その技を見て、すぐにパルキアはその技がなんなのかを理解した。

「てめぇ、まさかその技!?」

「その通り♪　くらいなよ、ディアルガちゃんの力を！　時の咆哮！」

ダークネスは高密度のエネルギー波をパルキアに向けて放った。

「ちっ！　亜空切断！」

そしてパルキアも右手を大きく振り下ろす。

すると、右手から三日月型のエネルギー波が放たれた。ダークネスが放った時の咆哮とパルキアが放った亜空切断はぶつかり合う。

刹那（せつな）、島を飲み込む程の凄まじい爆発が発生、その衝撃でパルキア

とダークネスは海へと吹き飛ばされた。そして島は爆発の力で跡形もなく消し飛んでしまった。

時の咆哮と亜空切断の激突は時空を歪ませてしまい、所々の空間には穴が空き、今まで雲一つ無い快晴だったのが、雷雲で空が覆われていた。

「はあ……はあ……くそが……痛ッ！？」

海へと吹き飛ばされたパルキアは無事だった。

だが、爆発の衝撃で左肩を負傷してしまったようだ。左肩部分にあるパールのような宝石に罅（ひび）が入っている。

「くっ……野郎は何処だ？」

痛めた左肩を押さえながら、辺りを見回すパルキア。

「……いやがった」

パルキアは海の上にぷかぷか浮かぶダークネスを発見した。先程の爆発の衝撃で気を失ったようだ。

「……やったのか？」

ゆっくりとダークネスに接近するパルキア。

刹那、ダークネスの……いや、ギラティナの身体から禍禍（まがまが）しい黒いオーラが現れた。

その黒いオーラはギラティナの身体を離れ、球体となって空中に浮遊した。

「な、なんだ……あれは……？」

「……あ～あ、今の爆発でギラティナちゃんの身体が使い物にならなくなっちゃったよ……まあ、今までギラティナちゃんの身体を酷使してきたから当然かな」

球体から声が聞こえてきた。その球体は、ダークネスなのだ。

「それがてめぇの正体か！」

「当たり♪　しかしさすがだよパルキアちゃん。ディアルガちゃんの力と互角なんてさ」

「……一つ聞かせろ。何故てめぇがディアルガの力を使えるんだ？」

球体のダークネスを睨みつけながら質問するパルキア。

「簡単な事さ。僕がディアルガちゃんから力を奪ったのさ♪」

「力を……奪っただと！？」

「そうさ♪」

子供みたいに無邪気な声で言うダークネス。

「ちなみに、力を奪われたディアルガちゃんは僕が作った特別な空間で石になってたりするんだよね～♪」

「んだと！？」

ディアルガが石にされた。それを聞いて驚愕するパルキア。

「さて、お喋りはこれでお終い。ディアルガちゃんの次は君だよパルキアちゃん。君の力……奪わせてもらうよ！」

球体のダークネスがパルキアに向かっていった。

「そうはいくかよ！　はっ！」

パルキアは右手を前に翳す。すると、ダークネスの周囲だけ空間が歪み始めた。

「こんなもの！」

球体のダークネスは構わず突っ込もうとするが、歪みに阻まれて先に進めなかった。

「はあ……はあ……そいつは俺の力で作った空間の檻（おり）だ。簡単に抜け出せやしねぇ……」

そう言うと、パルキアは海の上に浮いているギラティナの所へ。

「はあ……はあ……しっかりしやがれギラティナ……おいダークネス、今回はこれで引き下がらせてもらう……次に会った時は……必ずてめぇをぶっ潰すからな！」

最後にそう言うと、パルキアは空間の扉を開き、気を失ったギラティナと共に扉の中へと入っていき、ダークネスの前からいなくなった。

パルキアがいなくなった事で、歪んでいたダークネスの周囲の空間は元に戻った。

「……ふ、ふふふ……やってくれるよ本当に……パルキア……力を奪って石にしたら……粉々に砕いてやるよ……」

第百十三話　激突！　パルキアＶＳダークネス！（後書き）

バクフーン
「さすがパルキアの兄貴！　ダークネスからギラティナを解放しやがったな！」

リザードン
「つうかさ、完璧ダークネスってポケモンじゃねぇよな（汗）」

バクフーン
「だよな（汗）なんか雰囲気的に、劇場版ポケットモンスターアドバンスジェネレーション　七夜の願い星ジラーチに出てくるメタ・グラードンみたいな未知の怪物みたいだよな（汗）」

リザードン
「作者が言うには、まさにそれらしい」

バクフーン
「マジか（汗）」

リザードン
「あっそういえば、次回は俺とラティオス、そしてハーブ先生のアクセルの出番みたいだな」

バクフーン
「久しぶりにお前を本編で見れんだな？」

リザードン
「その通り。そして、次回でハーブ先生のキャラがもう一人登場す

るぞ」

バクフーン
「えっ？　ブラキオにルーチェ、フィルにうしだ、んでアクセルだろ？　あと誰が来るんだ？」

リザードン
「ハーブ先生のキャラで大人のお姉さんと言えば？」

バクフーン
「大人のお姉さん……あ～あのポケモンか！」

リザードン
「前から出すって話をハーブ先生としてたらしいんだが、どのタイミングで出すかで悩んでたらしいぞ？」

バクフーン
「んで、次回で出す事が決まった訳か」

リザードン
「そういう事だ。あっそろそろ時間だな」

バクフーン
「んじゃ！」

バクフーン＆amp;リザードン
『次回もよろしくな～』

第百十四話　きぬ姉さん登場！　フレイムシティ、孤児院での戦い！（前書き）

バクフーン
「お～きぬ姉さんが出んのか！」

リザードン
「そして俺も登場だ……ところで、作者が家族と友達と一緒に食事に行って、酒をちょっと飲みすぎたらしいぞ」

バクフーン
「なんだよその情報（汗）つうか、作者ってあまり酒飲まないじゃん？」

リザードン
「楽しかったみたいでつい飲みすぎたとか……んで、今回はちょっと酔った状態で執筆したらしい（汗）」

バクフーン
「……大丈夫か？（汗）」

リザードン
「本人が言うには、多分大丈夫との事だ」

バクフーン
「……不安だ（汗）」

リザードン
「ま、まあとにかく第百十四話を……」

バクフーン&

第百十四話　きぬ姉さん登場！　フレイムシティ、孤児院での戦い！

パルキアとダークネスが激しい戦いを繰り広げていた時、リザードン、ラティオス、アクセルの三人はアグノムがいる湖から遠く離れた場所、フレイムシティに向かっていた。何故フレイムシティに向かっているのか……それは、リザードンの提案である。

もしフレイムシティにダークネスの仲間が来ていたら、孤児院にいる子供達が危ないと思ったからだ。やはり子供達の事が心配なのである。

「ん？　なんか天気が悪くなってきたな？」

空を見上げるラティオスがそう呟く。

「そのようだな……」

アクセルも空を見上げる。

「おい二人共、早く行こうぜ！」

リザードンがラティオスとアクセルに早く行くよう急かす。

「リザードン。子供達が気になるのは解るが、ちょっと心配しすぎなんじゃないか？　孤児院にはお前の母さんと父さん、メガニウムさんにジュカインさんがいるんだろ？」

腕組みをしてラティオスはそう言った。

「そうだけど……やっぱり心配なんだよ！　ほら、早く行くぞ！」

そう言ってリザードンは先に行ってしまった。

「あっおい待てよリザードン！」

ラティオスとアクセルも急いでリザードンを追いかける。

それからしばらくして、三人はようやくフレイムシティに辿り着いた。

今三人はフレイムシティの噴水広場にいる。

「ここがフレイムシティか……長閑（のどか）で良い所だな」

辺りを見回しながらアクセルはそう言った。

「待ってろよ皆、すぐ行くからな！」

早く子供達の所に行きたいリザードンは、ラティオス達を置いて先に孤児院に向かって飛び立ってしまった。

「あっおいリザードン！？　……行っちまったよ。あいつ子供の事になると居ても立っても居られないみたいだな」

少々呆れた表情を浮かべるラティオス。

「メガニウムさんにジュカインさんが子供達の面倒を見てくれてるから大丈夫だと思うんだが……」

「ラティオス、さっきから気になっていたんだが……リザードンのご両親がメガニウムとジュカインというのはどういう事だ？　普通、親もリザードンと同じ炎タイプの筈だろ？」

腕組みをして、今まで疑問に感じていた事をラティオスに質問するアクセル。

「それは……孤児院に向かいながら説明してやるよ」

ラティオスは孤児院に向かいながら、アクセルに説明してあげた。

リザードンはタマゴの時に捨てられた事、そのタマゴをメガニウムが拾った事、今までメガニウムとジュカインが自分の子供のようにリザードンを育ててくれた事などを全て。

「……そういう事だったのか……」

「あいつも辛い事を経験しているんだ。その経験のせいか、路頭に迷った子供達を放っておけないみたいでさ……それで孤児院を作って、子供達を助けようとしてるんだ」

「……優しい奴なんだな……」

その頃、先に孤児院に向かっていたリザードンは……

「……おっ見えた！」

地上に孤児院を発見したリザードンは降下して、孤児院の前に着地した。

「良かった、特に異常は無さそうだ……」

いつもと変わらぬ孤児院を見て、ほっと胸を撫で下ろすリザードン。

「あっ兄ちゃん！」

その時、リザードンの背後から元気の良い声が聞こえてきた。

リザードンは後ろへ振り向く、そこにいたのはチコリータだった。

「おっチコリータ！」

「お帰り兄ちゃん！」

嬉しそうにそう言いながら、チコリータはリザードンに飛びつく。

「ただいまチコリータ……ってあれ？　なんでチコリータが孤児院からじゃなくて外からやって来たんだ？　それに父さんと母さんは？」

首を傾げるリザードン。

「おばさんとおじさんは買い物に行ったよ。僕はあのお姉さんと一緒に皆で遊びに行ってたの」

チコリータが首からつるのムチを一本伸ばし、ある方向を指す。

指された先をリザードンが見てみると、そこには孤児院の子供達と楽しそうに話しをしながらリザードン達の所に向かってくるポケモンがいた。

そのポケモンはとても綺麗な毛並みをしていて、尻尾が九本あり、キツネに似た姿をしたポケモン……キュウコンだった。

「あっリザードンの兄さん！」

キュウコンと楽しく話していた子供達がリザードンに気がつき、皆揃ってリザードンの所に駆け寄ってきた。

そして、キュウコンはゆっくりと歩きながらリザードンの所へ。

「あなたがこの子達の保護者？」

「え、ええそうですけど……失礼ですが、あなたは？」

「きぬ？」

その時、ようやくラティオスとアクセルが孤児院にやって来た。

アクセルがキュウコンを見て、そう呟くとキュウコンはアクセルの方に振り向く。

「あらアクセル」

「きぬ……遅かったじゃないか。すぐに俺達と合流する筈だっただろ？」

アクセルはキュウコンの事をきぬと呼んだ。

このキュウコンの名前らしい。そして、会話の内容から二人は仲間という事が解る。

「その筈だったんだけど……この子達が妙な連中に絡まれてたのを見つけてね。放っておけなかったのよ」

「何！？　お前達、本当なのか！？」

妙なポケモンに絡まれたと聞いて驚いたリザードンは子供達に本当の事なのか質問する。

子供達はその問いに頷いて応えた。

「兄ちゃんが僕達と別れてからしばらくして、いつものように家の中で遊んでたんら……いきなり変なポケモンが家の前にやって来たんだ」

チコリータがその時の事をリザードン達に話してくれた。リザードンが子供達を孤児院に送って、アグノムがいる湖に飛び立ってからしばらくして、妙なポケモン達がやって来たらしい。

「変なポケモン？　一体どんな……」

「おいキュウコン！」

リザードンがチコリータに質問しようとした時、突然背後から怒声が。

リザードン達が振り向くとそこには体色が黄色と茶色の2色でバク似た姿をしているポケモン……スリープと、体色が黄色で首の回りには白いフサフサとした毛、左手には振り子のような物を持ったポケモン……スリーパーがいた。

「なんだ、あいつら？」

「あ、あいつらだよ兄ちゃん！　変なポケモンは！」

つるのムチでスリープ達の事を指しながらそう言うチコリータ。

「またあなた達？　ワタシに何か用かしら？」

「この前は良くもやってくれたな？　借りを返させてもらうぜ！」

戦闘体勢に入るスリープとスリーパー。

「あいつらがお前達に……俺があいつらにお仕置きしてやる！」

リザードンが戦闘体勢に入ろうとした。

「待って。こいつらはワタシに用があるのよ。こいつらの相手はワタシがやるから、あなたは子供達と一緒にいなさい」

そこへきぬが自分一人でやると言ってリザードンを止める。

「えっでも……」

「大人の言う事は、素直に聞いておくものよ」

少し笑みを浮かべるきぬ。そしてゆっくりとスリープ達の前へ歩いていく。

「舐(な)めやがって……やっちまうぞスリープ！」

「解ってるさ兄貴！」

怒り心頭の二人。

その時、二人の身体から禍禍(まがまが)しい黒いオーラが出現した。

「いくぜ、サイケ光線！」

「シャドーボール！」

スリープは両手で黒いエネルギー弾を作り出し、きぬに向けて放つ。

そしてスリーパーは右手でエネルギー波をきぬに向けて放った。

だが、きぬは素早い身の熟(こな)しでこの攻撃を回避した。

「その程度の攻撃、ワタシには当たらないわよ」

「ならこれはどうだ！　シャドーボール！」

「サイコキネシス！」

スリープが放ったシャドーボールをスリーパーが強く念じてコントロール。シャドーボールは不規則な動きをしながらきぬに向かっていく。

「鬼火！」

きぬの九本ある尻尾の先端から青白い炎が出現した。九つの火の玉は一つに合わさり巨大な火の玉となりシャドーボールに向かっていく。

そして二つの技はぶつかり合う。だが、鬼火の方がパワーが上だったようであっという間にシャドーボールは消滅した。

「もらったぁ！」

いつの間にかスリーパーがきぬの背後に回り込んでいた。右手に電気を纏わせ、きぬに殴りかかる。

「雷パンチ！」

「甘いわね」

少し笑みを浮かべるきぬ。刹那、スリーパーの前に先程の鬼火が現れ、スリーパーの雷パンチを受け止めてしまった。そして、鬼火に雷パンチで攻撃してしまったスリーパーは火傷を負ってしまう。

「くっ！？」

「この野郎、サイケ光線！」

スリープが両手を使い、きぬに向かってサイケ光線を放った。

「火炎放射！」

きぬは口から強力な炎を吐き出し、サイケ光線にぶつけた。刹那、爆発が発生してその場に爆煙が立ち込める。

「まずあなたからよ、火炎放射！」

サイケ光線を打ち消した後、きぬは火傷に苦しんでいるスリーパーに火炎放射を放った。

火炎放射はスリーパーの腹部に直撃し、後方へ大きく吹き飛ばした。

「電光石火！」

すかさずきぬは電光石火で素早く動き、スリープの背後に回り込む。

「こいつっ！　シャドーボール！」

振り向き様にシャドーボールを放つスリープだが、きぬは身を屈(かが)めてそのシャドーボールを回避、そしてスリープの懐(ふところ)に飛び込む。

「火炎放射！」

超至近距離できぬはスリープに火炎放射を直撃させた。火炎放射を受けたスリープはスリーパーの所まで吹き飛ばされた。

「まだやるのかしら？」

二人を挑発するように言うきぬ。

「くっ……仕方ない、一旦引くぞスリープ」

「わ、解った……」

二人はその場から逃げようとした……が。

「悪いが……お前達をこのまま帰す訳にはいかない。ドラゴンクロー！」

「俺もドラゴンクローだ！」

アクセルとラティオスの鋭い爪がスリープ達に直撃した。この一撃を受け、二人は気を失った。

「……俺、今回出番無しか？」

バトルに参加出来ず、少し寂しそうにするリザードンであった。

第百十四話　きぬ姉さん登場！　フレイムシティ、孤児院での戦い！（後書き）

バクフーン
「リザードン子供達を心配しただけでバトルに参加してねー（汗）
てかきぬ姉さん強いな（汗）」

リザードン
「……ちょっと今から作者の所行って文句言ってくる（怒）」

バクフーン
「あっおい！？　……あ～行っちゃったよ（汗）まあしゃあない、
最後は俺が一人でやるか。さて、次回はどうなるかっつうと……お
っようやく皆が合流するみたいだぞ！　ようやく本編でヒトカゲ達
に会えんのか～楽しみだな♪」

第百十五話　合流（前書き）

バクフーン
「あれ？　次はタクミの更新じゃなかったっけ？　なんでこっちが更新されてんだ？」

リザードン
「なんかまたタクミのストーリーが思いつかないみたいだぞ？」

バクフーン
「またかい（汗）」

リザードン
「次からタクミとかアスカ、ピースのストーリーが思いつかない場合はこっちの方を更新するようにするらしいぞ」

バクフーン
「……まあ俺ら的には嬉しいけどさ、つうかこっちはすんなりストーリー思いつくのなあの作者？」

リザードン
「まあ大体のストーリーは出来上がってるらしいからな。それより、今回は全員集合らしいぞ」

バクフーン
「ようやくヒトカゲ達に会えんのか～♪」

リザードン
「あと……今回ハーブ先生のうしだとかＬｉｎｏ先生のバンギラス

がまた弄られてるっていう情報が（汗）」

バクフーン
「2人の弄られキャラっすな（笑）なあリザードン、ラグラージも弄られキャラにしようぜ～（笑）」

リザードン
「……お前な（汗）まあとにかく、第百十五話を……」

バクフーン&

第百十五話　合流

各地に行き、ダークネスの仲間を捜索していたバクフーン達は、合流場所であるアグノムがいる湖に集まっていた。

「皆集まったみたいだな。良し、んじゃ結果報告だな。俺達は……」

「ちょっと待ったー！　リザードン、そちらの美しいお姉さんはなんていう名前なんだ？」

バクフーンが全員集まったのを確認してから結果を報告しようとした時、突然ピカチュウがリザードンにきぬの事を聞いてきた。

「えっ？　あ～彼女はきぬさんだ。アクセル達の仲間なんだ」

「きぬさん……良い名前ですね～♪　僕とお付き合いしてくれませんか？」

早速ナンパを始めるピカチュウ。

「はいはい、今はそれどころじゃないからね～」

そこにすかさずピチューが必殺耳を引っ張るをピカチュウに炸裂させ、耳を引っ張ったままピカチュウを引きずる。

「イタタタ！？　ちょ、ピチュー！？　俺が悪かったから離して～！？」

「……若いわね」

苦笑いしながらも、きぬは冷静だった。

「えっと……じゃあ始めっか！　俺達は三人捕まえてきたぞ」

改めて結果を報告するバクフーン。

「それじゃ次はボク達の報告ですね……すみません、ゼロです。非常食さんが敵さんをぶっ飛ばしてしまいまして」

横目でうしだを見つめながらフィルは報告する。

「だから、俺は非常食じゃねぇ！」

自分は非常食ではないと否定するうしだ。

「ねぇ、もしかして君がぶっ飛ばしたっていうのは彼らかな？」

アグノムが肩から下が氷漬けになっている三人のシザリガーを指しながらうしだに質問する。

「あっ！　奴らだよ！」

「なんか空から降ってきたんだよね彼ら。ギャラドスが彼らが逃げないようにって氷漬けにしといたんだけど……」

「って事は、こいつらは俺のおかげで捕まえる事が出来たって事だよな？」

少し自慢気に言ううしだ。

「調子に乗らないで下さい非常食さん。偶然ぶっ飛ばした先がここだっただけなんですから」

「だから非常食じゃねぇって……」

「次の方どうぞ」

「無視かよ!?」

軽くうしだを無視したフィル。そして結果報告は続く。

「僕達はゼロ。ダークネスの仲間を見つけて戦ったまでは良かったんだけど……逃げられちゃったんだ……ごめん」

申し訳なさそうにしながら、ブラキオは報告した。

「俺達もゼロっす……」

しょんぼりとしながら報告するグラエナ。

「俺らは二人だ」

リザードンも自分達の結果を皆に報告した。

「って事は、合計八人を捕まえたって事だね。じゃあスイクン、あとは任せたよ」

ミュウが笑みを浮かべてスイクンに頼む。

「任されました」

捕まえた八人をスイクンに任せ、ミュウ達は別の所へ向かった。

「……さて、こういうのは久しぶりですな……覚悟してもらいますよ？」

少し笑みを浮かべながら、捕まえた八人を見つめるスイクン。

「さて、色々聞きたい事がたくさんあるけどまず一つ……なんでこいつが一緒にいるんだ？」

スイクン達から少し離れた場所に来て、リザードンがダークライを睨みつけながらバクフーンに質問する。

「パルキアが連れて来たんだよ。俺らの力になるからってさ……」

リザードンにそう説明するバクフーン。

「……信用出来んのかそれ？　あのダークライだぞ？」

小声でバクフーンに耳打ちするリザードン。

「……俺も完全に信用した訳じゃねぇよ。だけど、今のところ問題を起こしてねぇから心配ないとは思うけど……」

「アニキ達、なんでひそひそ話してるんすか？」

首を傾げるグラエナ。

「えっ！？　あっいやなんでもないさ！　そ、それよりさグラエナ、そこの七人は誰なんだ？」

バクフーンはヒトカゲ達を見つめながらグラエナに質問した。

「この人達は俺達を助けてくれたんすよ」

「そうなのか？　じゃあお礼を言わなきゃな。ありがとうな、仲間を助けてくれて。俺はバクフーンだ」

ヒトカゲ達にお礼と挨拶をするバクフーン。

「あっ初めまして！　僕はヒトカゲ、よろしくね」

礼儀正しく挨拶するヒトカゲ。

「俺はヒトカゲの親友のゼニガメだ」

「私はチコリータです」

笑顔で言うゼニガメとチコリータ。

「私はドダイトス。お嬢……あっいや、チコリータの警備を任されている者です」

「俺はバンギラスだ。よろしくな」

「カメックスだ」

「俺はバクフーン……ってあんたと同じ名前じゃややこしいな……サイクスって呼んでくれ。よろしくな」

バンギラス達も挨拶をした。

「皆よろしくな。あっそうだ！　俺の仲間も紹介するぜ！」

「じゃあまずは俺からだな。バクフーンの幼なじみのリザードンだ。よろしく」

笑みを浮かべながら挨拶するリザードン。

「同じく、バクフーンの幼なじみのラグラージだよ。よろしくね」

ラグラージがそう挨拶し終えた時、小さな影が凄いスピードでチコリータに接近していった。

「僕はピカチュウです。綺麗なお嬢さん、どうかこの僕と付き合ってはくれませんか？」

チコリータの前で跪き、何処から用意したのか花束を持ってチコリータにいきなりプロポーズをするピカチュウ。

「え、え～！？」

突然の事に戸惑うチコリータ。

「お兄ちゃん！　初対面の人にいきなりプロポーズとかしないの！」

そこにピチューがやってきて、必殺耳を引っ張るをピカチュウに炸裂させた。

「イタタタ！？　わ、悪かった！　兄ちゃんが悪かったから、耳を引っ張らないでくれ～！？」

この光景を見て思わず苦笑いするヒトカゲ達。

「全く！　……あっ見苦しいとこ見せちゃってごめんなさい！　アタシはピチュー、一応このダメなお兄ちゃんの妹よ」

ピカチュウの耳を引っ張りながら挨拶するピチュー。

「俺はラティオスだ。ポケモンレンジャーでもある。よろしくな」

「私はラティアスです。ラティオスの妹で、同じくポケモンレンジャーをしています。よろしくお願いします」

ラティオスとラティアスも挨拶を済ませる。

（……あのピチュー……可愛いな～♪）

ピチューを何故かじっと見つめるバンギラス。

実は可愛い物好きだったりするようだ。

「……おいバンちゃん、まさかあのピチューにいきなり……」

「背後から襲いかかって……ってんな訳あるか！？　つうか、バンちゃんって呼ぶなっつってんだろ！」

バクフーンのサイクスにノリ突っ込みを炸裂させるバンギラス。

「バンちゃんって呼ばれるのが嫌いなの？」

首を傾げながら、バンギラスに質問するピチュー。

「えっいや……ま、まあどうしてもっつうならバンちゃんって呼んでも良いぞ」

バンギラスは右手の人差し指で右の頬を軽く掻きながらそう言った。

「じゃあバンちゃんって呼ばせてもらうね♪　よろしく、バンちゃん♪」

とびきりの笑顔で言うピチュー。

「よろしくな」

「じゃあ俺もバンちゃんって呼ばせて……」

「てめぇはバンちゃんって呼ぶんじゃねぇ！」

何故かサイクスには怒鳴るバンギラス。

「なんだ差別か！？」

「うっせぇよ！」

そんなバンギラス達のやりとりを見て、他の皆が笑いだす。

「面白い奴だな～♪　俺お前の事好きだな♪」

どうやらバンギラスの事をバクフーンは気に入ったらしい。

「随分(ずいぶん)賑やかですね？」

その時、スイクンがバクフーン達の所へと戻ってきた。

「あれ？　尋問終わったのか？」

首を傾げながらバクフーンは質問し、スイクンはその質問に頷いて応える。

「いや～久しぶりだったんですが、上手く吐かせる事が出来ましたよ」

満足そうな表情をするスイクン。

「どうやらダークネスはここから東の海を越えた場所にある島、ディアボロス島と呼ばれる所にいるようです」

「……なんか怖そうな場所っすね……」

島の名前を聞いて少し怖がるグラエナ。

「良くあいつら場所を吐いたな？　どうやったんだよ？」

バクフーンが尋問のやり方をスイクンに質問した。

「秘密です。でもちょっと教えるとしたら……最終的に彼らはああなります」

スイクンが見つめる先には氷像にされてる八人がいた。

「……ああなる前に一体何されたんだよ……」

「ですから秘密です。でも、楽しかったです♪」

笑みを浮かべるスイクン。その笑みに若干バクフーンは恐怖を感じた。

「相変わらずだねスイクン……ん？」

急に辺りをキョロキョロとし始めるミュウ。

「どうした？」

「何かが……来る」

ミュウがそう言った刹那（せつな）、湖の中に何かが落ちたみたいで大きな音が辺りに響いた。

バクフーン達が湖の方に顔を向けると、そこには怪我をしているパルキアとギラティナがいた。

「パルキア！？」

「はあ……はあ……よ、ようバクフーン……」

かなり辛そうにしながらも、パルキアはギラティナを支えながらゆっくりとバクフーン達の所へと向かっていく。

「お、おいそいつは！？」

「はあ……はあ……慌てんなバクフーン……こいつはもうダークネスじゃねぇ……ダークネスはこいつの身体から追い出してやったからな……ちょっと……座らせてくれ……さすがに限界だ……」

パルキアは湖から上がるとギラティナを地面に寝かせ、そのあと自分も倒れ込むように地面に座る。

「何があったんだよ？」

「……俺もお前らと同じでダークネスを捜してたんだ……それで野郎を見つけて戦闘……なんとかギラティナからダークネスを追い出したんだが……この様だ……ぐっ！？」

怪我をした左肩を押さえるパルキア。

「お、おい大丈夫かよ？」

「バクフーン下がってて。僕が二人の怪我を治すから」

ブラキオがパルキア達の前まで来た。

「はあ……はあ……お前は……誰だ？」

「僕はブラキオ。それよりじっとしてて……」

ブラキオは目を閉じて、意識を集中し始めた。

すると、ブラキオの身体から黄色のオーラが出現、ブラキオの身体を包む。

「ヒーリングサークル」

ブラキオの身体を包んでいたオーラが広がり、パルキアとギラティナを包み込む。それはまるで結界のようだ。

ヒーリングサークルに包まれたパルキアとギラティナの怪我が見る見るうちに治っていく。

パルキアの左肩にあるパールのような宝石に入っていた罅（ひび）も完全に消えた。

「怪我が……治っちまった!?」

身体の怪我が治った事に驚くパルキア。

「ふ～……これでもう大丈夫だね」

ブラキオがそう言った時、ブラキオ達を包んでいた黄色のオーラは消えた。

「すっげーブラキオ！　お前こんな事も出来んのか！」

ブラキオの力にバクフーンは感動したようだ。

「まあね。でもそんなに連続では使えないんだけどね」

「……うっ……うぅっ……」

その時、ギラティナが意識を取り戻した。

「ギラティナ！」

「……パル……キア？　ここは……？」

ゆっくりと起き上がるとギラティナは辺りを見回す。

「ここは僕が住んでいる湖です、ギラティナ様」

アグノムがギラティナに説明した。

「……湖？　なんで俺が湖に……俺は……確かいつものように自分の世界にいて、こっちの世界を見守っていた筈なのに……」

どうやらギラティナはダークネスに身体を乗っ取られていた間の記憶は無いようだ。

「お前はダークネスってふざけた野郎に身体を乗っ取らてたんだよ」

腕組みしながらパルキアがギラティナに説明した。

「この俺が乗っ取られていた……そうか、あの黒い奴に……」

ダークネスに身体を乗っ取られた時の事をギラティナは思い出し

たようだ。すると、急にギラティナは身体を震わせる。

「この俺があんなふざけた奴に身体を乗っ取られていたとは……くそっ！　今まであいつの良いように身体を使われたと思うとむしゃくしゃしてくる！」

怒り心頭のギラティナ。そんなギラティナを見て、急にパルキアは笑みを浮かべる。

「何が可笑しい！？」

「いや……本来のお前が見れて、なんか嬉しくなっちまってな」

素直に思った事を言うパルキア。

その頃、深淵（しんえん）の闇の本拠地があるディアボロス島では……

「ごめんね～また皆に集まってもらっちゃってさ」

ギラティナの身体を失ったダークネスは、まだ黒い球体の形をしていた。

「……ダークネス様、今回はどのような？」

側近のアブソルがダークネスに尋ねる。

「君達にはアグノム達を捜すよう命じてたけど、予定変更。仲間を集めてほしいんだ」

「……というと、心に闇を持った者を見つけだし、そいつらを我ら深淵の闇に引き入れるという事ですか？」

「さすがアブソルちゃん、その通りだよ♪」

子供みたいな無邪気な声を出すダークネス。

「それとね、僕の新しい身体も見つけてきてほしいんだよね。強そうな奴を見つけたら僕に知らせてね。自分からそいつの所に行くから」

ダークネスが言った事に、集まっていたダークポケモン達は頷いて応える。

「じゃあ、皆頼んだよ♪」

「了解」

アブソルを含めたダークポケモン達はその場から去っていった。

だが、一人のポケモンだけはその場に止(とど)まっていた。

「新しい身体が見つかるまで、また君の身体を借りるよ、グレン」

「……はい、ダークネス様……」

グレンと呼ばれたそのポケモンには昔付けたのであろうか、身体中に傷跡がある。球体のダークネスはグレンの身体の中に溶け込むように入っていった。

「……久しぶりだな～この身体♪　アブソルちゃんの次に乗っ取った身体だからね～……ギラティナちゃんと比べると物足りないけど、今は贅沢言ってられないしね。新しい身体が手に入るまでしばらくはこのグレン……バクフーンの身体で我慢しなきゃ」

第百十五話　合流（後書き）

バクフーン
「……あり？　最後に出てきたあのバクフーン……どっかで会った事があるような……どこだったかな？」

リザードン
「まあそれはいつか解る事さ。それより、次回はあのキャラが出るかもしれないぞ？」

バクフーン
「あのキャラ？　誰だよ？」

リザードン
「お前の彼女」

バクフーン
「……え～！？　あ、あいつが！？　て、ていうか彼女って！？」

リザードン
「動揺してんな（笑）」

バクフーン
「べ、別にど、動揺なんか！？」

リザードン
「滅茶苦茶してんじゃん（笑）まあとにかく皆、次回もよろしくな！」

バクフーン
「本当にあいつが出んのか～！？」

第百十六話　レナ（前書き）

バクフーン
「久しぶりの更新だな～……つうか作者遅ぇよ」

リザードン
「まあそう言うなよ。作者の働いてる所に新人が来て、色々と教えるので忙しかったみたいだからさ……それより、お前の彼女が出るぞ（笑）」

バクフーン
「だ、だから俺とレナはそういう関係じゃないっつうの！」

リザードン
「はいはい（笑）」

バクフーン
「……お前、絶対俺をからかって面白がってんだろ（怒）」

リザードン
「なんの事かな？（笑）」

第百十六話　レナ

「良し、早速ダークネスがいるディアボロス島に向かおうぜ！」

スイクンがダークネスの仲間を尋問した結果、ダークネスが率いる深淵の闇はディアボロス島と呼ばれる島にいる事が判明、バクフーンが早速その島に向かおうと皆に提案した。

「ちょっと待ってバクフーン。無計画に敵の本陣に突っ込むのは無謀だよ。ちゃんと計画を立てないと」

ラグラージがディアボロス島に向かう前に計画を立てようと言い出す。

「アジトに乗り込んでダークネスをぶっ飛ばせば良いだけだろ？なんとかなんだろ」

「簡単に言わないでよバクフーン。皆がバクフーンみたいに凄く強い訳じゃないんだよ？　それに、ダークネスには仲間が大勢いるみたいだし……ここにいるメンバーだけじゃ戦力不足だと僕は思うんだ。だから、もっと仲間を集めるべきなんじゃないかな？」

ラグラージはその場にいた皆を見ながらバクフーンにそう言った。

「俺はそのラグラージの意見に賛成だ」

バクフーンのサイクスが一歩前に出て、一言そう言った。

「そこの空間の神、パルキアが負傷する程の相手なんだろ？　そん

な奴が率いてる組織を相手にするには、確かに俺達だけじゃ戦力不足だ」

パルキアの事を見ながら、サイクスはバクフーンに言った。

「うーん……でもよ、仲間集めようにも他の連中が今何処にいんのか解らねぇし……」

「それならバクフーン、俺とラティアスに任せろ」

ラティオスが自分とラティアスを指しながら言った。

「ポケモンレンジャー本部の人達の力を借りれば、すぐに仲間を集める事が出来ますよ」

「あっそうか！　じゃあ頼んで良いか？」

「もちろんだ」

「合流場所は海に近いウォーターシティで。じゃあ皆さん、ウォーターシティで会いましょう！」

そう言い終えると、ラティオスとラティアスはポケモンレンジャー本部に向かって飛び立った。

それを確認したバクフーン達は、先にウォーターシティに行ってラティオス達を待つ事にした。

「ほら、着いたぞ」

ラティオス達と別れた後、バクフーン達はパルキアの空間移動の力を使い、湖からあっという間にウォーターシティへと到着した。

「へ～、さすが空間の神だね。移動が楽チン楽チン」

わざわざ歩かずに移動出来た事に感心しているブラキオ。

「でも……ちょっと気持ち悪いかも……」

慣れない空間移動をしたせいか、ヒトカゲが蹲(うずくま)って少し気持ち悪そうにしている。

「おい大丈夫かよヒトカゲ？」

ヒトカゲの背中を摩(さす)りながら、心配そうな表情をするゼニガメ。

「……悪いがお前ら、俺とダークライはしばらく抜けるぞ」

腕組みをしながら、パルキアが突然抜けると言い出した。

「えっ！？　抜けるってどういう事だよ！？」

突然の事にバクフーンは思わず声を上げる。

「やらなきゃならねー事があんだよ。他の連中が集まったら、俺達を待たずに先に行け。心配すんな、ちゃんと来るからよ。ギラティナ、俺達が来るまで、バクフーン達を頼むぜ」

最後にそう言うと、パルキアはダークライと共に空間移動で何処かへと行ってしまった。

「行っちゃったよ……一体なんだよやらなきゃならねー事って？」

「パルキアにはパルキアの考えがあるんだろ。あいつは約束を破るような奴じゃない、必ず来るさ」

パルキアとダークライがいなくなった場所を見つめながらギラティナがバクフーンにそう言った。

「……そうだよな。パルキアは絶対来るよな」

そうバクフーンが言った刹那、バクフーンのお腹からぐ～という音が鳴り響いた。

「そういえば……ダークネスの仲間捜してた間、飯を食ってなかったんだ……腹減った～……」

両手でお腹を押さえながら、その場に座り込んでしまったバクフ

ーン。

「こういう雰囲気で良くそういう事が言えるよねバクフーン？」

ちょっと呆れた表情を浮かべるラグラージ。

「んな事言われたって腹が減っちまったんだからしょうがないだろ」

そして再びバクフーンのお腹がぐ～と鳴る。
それに釣られて今度はヒトカゲのお腹も鳴る。

「あははは……僕もお腹空いてきちゃった」

右手を頭に当て、照れ笑いを浮かべるヒトカゲ。

「もうしょうがないな～……僕の家で何か食べてく？　ラティオス達が戻ってくるまで僕達はこの街に待機してなきゃならないし……」

「行くっ♪」

ラグラージの家に行く事が決まった途端に元気になったバクフーン。

「そういえば、ラグラージ兄ちゃんの家ってまだ見た事なかったわね。何処にあるの？」

いつの間にかバンギラスの頭の上に乗っかっていたピチューがラグラージに質問した。

「それなら彼処に……ってピチュー、なんでバンギラスさんの頭に

乗っかってるの？」

「なんだか居心地が良くて♪」

笑顔で答えるピチュー。

「そんな事したらバンギラスさんが迷惑でしょ……」

「ん？　俺は別に気にしてないぞ？」

全く気にしてない様子のバンギラス。

「あっそうですか……」

「気をつけろよピチュー。バンちゃんがいつお前を襲って食べようとするか解らないからな」

笑みを浮かべながらサイクスが言った。

「殴られたいのかてめぇ？」

右手で握り拳を作り、サイクスを睨むバンギラス。

「まあまあ、暴力はいけませんよ。それに、食べるんでしたらここに丁度良い肉がありますよ」

和(にこ)やかにしながらフィルはうしだの事を見る。

「ってなんで俺を見るんだよ？」

「あ～なるほど……」

「確かに丁度良さそうだな……」

怪しい笑みを浮かべるバンギラスとサイクス。

「俺は食いもんじゃねー！！」

全力で自分は食べ物じゃないと否定するうしだ。

「あの～……そろそろ僕の家に向かいませんか～？」

いつまでも話していそうだったので、ラグラージが早く家に行こうと催促する。

「もう少しうしださんをからかいたかったんですが……仕方ないですね。行きましょう」

少し残念そうな表情をするフィル。今度こそ皆はラグラージの家に向かおうとした……しかしその刹那、港の方から大きな爆発音が聞こえてきた。

「な、なんだ！？」

「港の方みたいだよ！　行ってみよう！」

バクフーン達は急いで爆発音がした港に向かった。

ウォーターシティ、港……そこでは、三人のポケモンが暴れていた。

「ケケッ！　なんだなんだ？　こいつらちっとも強くねぇぞ」

「これじゃ、準備運動にもならねえな」

「二人共、私達の目的は深淵の闇に新たな仲間を引き入れる事……暴れる事ではありませんよ」

その三人のポケモンとは……一人は体色が深い紫色で少し人の姿に近いポケモン、ゲンガー。

もう一人は……体色が黒と灰色、少しふっくらとした体型をしたポケモン、ヨノワール。

そして最後……両手にスプーンを持ち、口元には長い髭（ひげ）、人に近い姿をしたポケモン、フーディン……かつて、バクフーン達と戦った漆黒の闇の元幹部ポケモンだった者達だ。

「あ、あいつら!?　生きてたのか!?」

そこにバクフーン達が到着した。

「バクフーン、彼らを知ってるのかい？」

ブラキオがバクフーンに質問する。

「あ、嗚呼（ああ）……前に俺達と戦った悪い奴らだ。てっきり死んだもんだと思ってたんだが……」

「それよりバクフーン、あいつらを止めるのが先だろ！」

「わ、解ってるさリザードン！　行くぞ！」

バクフーンとリザードンがフーディン達の所へ向かおうとした…だがその時、二人を追い抜き、フーディン達に向かって一人のポケモンが突っ込んでいく。

「電光石火から火炎車！」

そのポケモンは素早い身の熟（こな）しでフーディン達にコンビネーション攻撃を決め、三人を後方へ吹き飛ばした。

「何者だ！？」

ヨノワールが怒鳴る。

「それはこっちのセリフよ。あんた達、なんの罪も無い人達を傷つけて何が面白いのよ？」

そのポケモンはとても綺麗な毛並みをしていて、体色はオレンジ色……色違いのバクフーンだった。

「ケッ！　随分威勢の良い姉ちゃんだな。怪我しねえうちに帰んな」

色違いのバクフーンを挑発するように言うゲンガー。

「怪我すんのはどっちかしらね？」

色違いのバクフーンは戦闘体勢に入る。

背中からは熱い炎を吹き出している。

（あのオレンジ色をした毛並み……もしかして……）

「何ぼーっとしてんだ、加勢しに行くぞ！」

「お、おう！」

バクフーンとリザードンは急ぎ色違いのバクフーンの所へ。

「ゲゲッ！？　お前らは！？」

バクフーン達の姿を見て驚いているゲンガー。

「加勢するぜ」

「助かるわ」

バクフーン達も戦闘体勢に入る。

「久しぶりですねあなた達……ふふふ……これは仲間を引き入れるよりも、以前の借りを返さなければなりませんね……」

怪しく笑うフーディン。そして身体からは禍禍(まがまが)しい黒いオーラが出現した。

「リベンジさせてもらうか……！」

ヨノワールの身体からも黒いオーラが。

「お、おいお前ら？　ここは帰った方が良くないか？」

ゲンガーは戦わずに帰ろうと言い出す。

「何を言ってるんですゲンガー……私達にはダークネス様より授かった力があるんですよ？　以前にダークライから授かった力よりも遥かに強い力を……こいつらに負ける筈がありません」

「……はあ、しゃあねぇ……やってやる！」

ゲンガーも身体から黒いオーラを出現させた。

そしてフーディン達も戦闘体勢に入る。

「来るわね……私はレナよ、二人共よろし……」

『レ、レナ！？』

色違いのバクフーン……レナの名前を聞いた瞬間、二人は思わず声を上げてしまった。

「ほ、本当にあのレナなのか！？」

リザードンが確認する為に質問する。

「あのレナって……あなた達、何処かで会った事ある？」

「あん時はまだリザードだったからな。フレイムシティって言えば解るか？」

「フレイムシティ……あっえっ！？　あの時のリザード！？」

思い出したようで声を上げるレナ。

「そうだ」

「って事はこっちのバクフーンって……あの時のマグ君！？」

「マ、マグ君は止めてくれよ……もう俺はバクフーンなんだからさ」

少し顔を赤面させるバクフーン。

「ヤダ本当にあのマグ君なの！　久しぶりー！　もうすっかり逞(たくま)しくなっちゃったわね！　リザードンは……ちょっと太った？」

首を傾げながら言うレナ。

「太っ！？　おいレナそれはあんまりだぜ？」

「いや、確かにこいつはリザードンになってからは少し太ったな」

一人納得しているバクフーン。

「よね～？」

「お前らな……」

苦笑いするリザードン。

「……お前ら俺達を無視すんな！？」

ゲンガーが大きな声を上げる。

『あっ忘れてた』

三人声を揃えて言う。

「……随分とナメられたものですね……ゲンガー、ヨノワール、こいつらを潰しますよ」

「潰されるのはあんた達よ。二人共、こんな奴らとっとと倒しちゃうわよ！」

『おう！』

第百十六話　レナ（後書き）

レナ
「私が登場～♪」

バクフーン
「って俺らのコーナーに来ちゃったよ（汗）」

レナ
「細かい事は気にしないのバク君♪」

バクフーン
「バ、バク君？（汗）」

レナ
「バクフーンだからバク君。気に入らないなら、マグ君にするけど？」

バクフーン
「い、いや……バク君で良いです（汗）」

リザードン
「お～い、それより次回予告っぽいのやるぞ」

レナ
「あっそうだったわね」

バクフーン
「えっと次回は……俺達とあの懐かしいフーディン達とのバトルだ

な」

レナ
「あんな奴らに私達が負ける訳ないわよ」

リザードン
「そういえば……レナってバトル強いのか？」

バクフーン
「あっそういえば……」

レナ
「それは次回で明らかになるわよ」

第百十七話　レナの実力（前書き）

バクフーン
「やっと更新されたな（汗）」

リザードン
「なんか作者、レナのバトルをどういう感じにするかずっと考えてたみたいだぞ？」

バクフーン
「いつも通りのバトルじゃないのか？」

リザードン
「なんか少し違うらしいんだが……実際はどうなんだか（汗）」

バクフーン
「おいおい（汗）」

リザードン
「あっそうそう、バクキャラでやってる人気投票が今ヤバい事になってるみたいだぞ？」

バクフーン
「マジ？」

リザードン
「なんでも、激戦になっているとか……」

バクフーン

「……俺、1位になれんのかな～（汗）ピースとか可愛いから負けそうな気がする（汗）」

リザードン

「まあ結果発表されるまで気長に待とうや」

第百十七話　レナの実力

「電光石火から火炎車！」

「俺も行くぜ！」

バクフーンとレナは身体全体に炎を纏い、素早い身の熟しでゲンガーとヨノワールに向かって突っ込んでいく。

「なら俺はエアスラッシュだ！」

リザードンは翼を素早く羽ばたかせ、空気の刃を作り出してフーディンに向けて放つ。

「サイコカッター！」

フーディンは右手に持つスプーンにエネルギーを集め、大きく振り下ろす。すると、エネルギーが集められたスプーンから三日月の形をしたエネルギー弾が放たれ、リザードンが放ったエアスラッシュに激突して爆発した。

「ケケッ！　真っ向勝負は好きじゃねぇんだよ！」

そう言ってゲンガーは地面に映る影の中へと潜り込んだ。

「なら、もう一人の方を狙うまでよ！　行くわよバク君！」

「おう！」

バクフーンとレナは狙いをゲンガーからヨノワールに変更、電光石火と火炎車のコンビネーションで突っ込んでいく。

「ナメるな、守る！」

ヨノワールは自分の目の前にエネルギーの壁を作り出し、バクフーンとレナの攻撃を防御した。攻撃を防がれたバクフーンとレナは体勢を立て直す為に、一旦後方へ下がろうとした。

「もらったぜ！　影打ち！」

バクフーンとレナの下に映る影からゲンガーが飛び出した。

「やばっ！？」

「させるか！　火炎放射！」

援護に来たリザードンが口から炎を吐き出し、ゲンガーに向けて放った。

「ぐはっ！？」

ゲンガーはリザードンの火炎放射をまともに受け、大きく後方へ吹き飛ばされる。

「サ、サンキューリザードン！　助かったぜ」

「気にすんな。それより、一気に決めてやろうぜ！」

リザードンは攻撃体勢に入る。

「よっしゃ、やってやるぜ！」

「オッケー！」

バクフーンとレナも攻撃体勢に入る。

『火炎放射！』

バクフーン、リザードン、レナの三人は口から炎を吐き出し、フーディン達に向けて放つ。

三つの火炎放射は合わさり、巨大な炎となってフーディン達に襲いかかる。

「サイケ光線！」

「ケッ！　シャドーボールだぜ！」

「悪の波動！」

フーディンは両手に持っているスプーンから七色に輝くエネルギー波、ゲンガーは両手から黒いエネルギー弾、ヨノワールはお腹にある大きな口のような所から黒いエネルギー波をそれぞれ放ち、バクフーン達の火炎放射にぶつけた。

お互いの技がぶつかり合った刹那（せつな）大きな爆発が発生、辺りに爆煙が立ち込める。

（これはチャンスね！）

レナが一人、爆煙の中に突っ込んでいく。

「良いですか二人共。爆煙が収まった瞬間に一斉攻撃を仕掛けますよ」

攻撃体勢に入りながらゲンガーとヨノワールに指示するフーディン。

「ケッお前に言われなくても……」

「解っているさ」

ゲンガーとヨノワールも攻撃体勢に入る。

しかしその刹那、立ち込めていた爆煙が急に吹き飛んだ。

「……完成♪」

吹き飛んだ爆煙の中からレナの姿が。

無数の星の形をしたエネルギー弾が炎を纏ってレナを中心に渦巻いている……炎を纏った星形のエネルギー弾が放つ光がレナを照らし、その綺麗な毛並みをより魅力的に見せている。

「いくわよあんた達！」

自分の周りに無数のエネルギー弾を渦巻かせながら、レナは空高くジャンプした。

「集いし星が、炎を纏う灼熱の矢となる……降り注げ！　シューティング・フレイムスター！」

レナは身体を回転させ、渦巻かせていた炎を纏った星形のエネル

ギー弾をフーディン達に向けて放つ。炎の雨の如く、フーディン達に降り注ぐ。シューティング・フレイムスターのスピードが速すぎた為、フーディン達は防御する事や回避する事も出来ずにまともに受けてしまう。

シューティング・フレイムスターが直撃した途端、フーディン達がいた場所は火の海となった。

『す、すげー……』

レナの放ったシューティング・フレイムスターに見蕩れてしまっているバクフーンとリザードン。

「どうよ二人共？　コンテストで鍛えた、私のオリジナル技よ♪」

自慢気に言うレナ。

「コンテスト？」

レナが言ったコンテストという言葉が気になったバクフーンは首を傾げる。

「あれ？　バク君コンテスト知らないの？　コンテストっていうのはね……」

レナがバクフーンにコンテストの事を説明しようとした時、火の海の中から突然シャドーボールがレナに向かって飛んできた。

「ドラゴンクロー！」

いち早くシャドーボールに気づいたリザードンがレナの前に立ち、

右手の鋭い爪でシャドーボールを切り裂いた。

「あ、ありがとうリザードン。助かったわ」

「このくらい大した事ないさ。それより、あいつらまだやられてないみたいだぜ？」

リザードンが睨みつける先には、火の海からゆっくりと歩いてくるフーディン達の姿があった。

「……やってくれるじゃないですかあなた達……」

「まだやる気か？」

戦闘体勢を維持したままバクフーンはフーディンに尋ねる。

（……ダークネス様の力を授かってもこいつらには勝てないとは……仕方ありません）

「ゲンガー！」

「ほいきた！　黒い霧！」

突然ゲンガーは口から黒い煙を吐き出し、自分達の姿をバクフーン達には見えないようにした。

「うわっ何も見えねぇ！？」

「任せろ！」

リザードンは翼を力強く羽ばたかせて突風を作り出し、黒い煙を吹き飛ばした。

「あっ！？　あいつらいねぇ！？」

煙を吹き飛ばした時にはすでにその場にはフーディン達はいなくなっていた。ゲンガーの黒い霧を利用して逃げたのである。

「状況が悪くなったからとんずらしちゃったのかしら？　案外あいつら弱いのね」

フーディン達の実力にレナは少々呆れた表情をする。

「まあ何はともあれ、あいつらを追い返す事が出来たからそれで良いじゃないか」

腕組みをしながらリザードンはレナに言う。

「それもそうね」

「なあレナ、さっき言ってたコンテストってなんだ？」

バクフーンが首を傾げながら質問する。

「まだ言ってなかったわね。コンテストっていうのはね……」

レナがバクフーンにコンテストの説明をしようとした時、レナの前に一人の小さなポケモンが素早く現れた。

片手には何処から用意したのか、花束を握りしめている。ピカチュウだ。

「綺麗なお姉さん、どうでしょう？　僕とお付き合いしてくれませんか……」

「はいはい。毎度毎度そういう事はしないでね～」

そこにピチューがやって来て、ピカチュウの耳を強く引っ張る。

「イタタタ！？」

「ピカチュウ……」

毎度の事とはいえ、懲りないピカチュウにリザードンは呆れた表情を浮かべる。

「な、何、今の？」

「あ～レナは気にしなくて良いからな。俺の仲間で、ピカチュウって言うんだけど……女の子を見るといつもこうなるんだ」

バクフーンはピカチュウの事を簡単にレナに説明する。

「ねぇバクフーン。その人は誰なの？」

ラグラージがレナの事を見ながらバクフーンに質問する。

「あ～こいつは……」

「レナって言ってバクフーンの彼女さ」

バクフーンが説明しようとしたら、リザードンが先に説明してしまった。

『か、彼女～!?』

バクフーンの彼女……その言葉を聞いて、他の皆が驚きの声を上げる。

「バ、バクフーン、彼女いたの!?」

バクフーンに彼女がいるとは思ってもみなかったラグラージは驚きながら、バクフーンに確認する為に質問した。

「えっと……その……まあそんなもん……なのかなぁ?」

右手を後頭部に当て、顔を赤面させながらバクフーンは答えた。

「初めまして。私はレナ、よろしくね皆♪」

とびきりの笑顔で、皆に挨拶をするレナ。

(へ～、あのレナってバクフーン、結構可愛いなぁ)

レナの事を見つめながらそんな事を考えるバンギラス。

「おいバンちゃん、お前まさかポッポを捨てて……」

「レナと一緒に暮らす……ってんな訳あるか!　つうか、バンちゃんって呼ぶなっていつも言ってんだろが!?」

バクフーンのサイクスにノリツッコミを炸裂させた後、右腕をサイクスの首に巻き付けて、逃げ出さないようにしっかりと締め上げる。

「ちょっ……バンちゃん、苦しいって……」

「だからバンちゃんって呼ぶな！　今日という今日はもう我慢出来ねぇ！　覚悟しやがれ！」

空いている左手で、バンギラスはサイクスの頭を思いっきりグリグリし始める。

「痛たた！？」

「痛そ……」

お仕置きされているサイクスを見て苦笑いするヒトカゲ。

「痛たた……お、おいヒトカゲ、見てないで助けてくれよ！？」

「無理っ！」

即答でヒトカゲは答えた。

「うふふ♪　バク君の友達って皆面白いわね♪」

「だろ？」

そうバクフーンが答えた時、バクフーンのお腹がぐ～と鳴る。

「そういえば、まだ飯食ってなかったんだった～……ラグラージ、飯～」

「はいはい。じゃあ僕の家に向かいますか」

第百十七話　レナの実力（後書き）

バクフーン
「コンテスト？」

リザードン
「アニメでポケモンコンテストってあるだろ？　あれだよあれ」

バクフーン
「あ～あれか！」

リザードン
「でも作者、コンテストバトルとかは初めて執筆したから、ちょっと解りにくいかもしれないな（汗）」

バクフーン
「……あっカンペだ。えっとなになに……もっと解りやすく執筆出来るよう頑張ります、作者より……だってさ」

リザードン
「直接自分で言えよ（汗）」

バクフーン
「まあまあ（汗）そんで、次回はどうなんだ？」

リザードン
「俺達のライバル達が集まるらしいぞ」

バクフーン

「ライバル……つう事は、ゴウカザルとかか！」

リザードン
「だな」

バクフーン
「うわぁ久しぶりじゃん！　あいつ元気にしてるかな～？」

リザードン
「あいつ、ポケモンリーグで負けたのが相当悔しかったみたいで、ずっと特訓してたみたいだぞ」

バクフーン
「へ～！　会うのが楽しみだぜ！」

リザードン
「おっと、そろそろ時間だな」

バクフーン&リザードン
『次回もよろしくな～』

第百十八話　集結（前書き）

いや～疲れた～（汗）

バクフーン
「って作者、何俺達のコーナーに出てきてんだよ（汗）」

たまには良いじゃん。

リザードン
「……まあ良いけどよ、んでどうしてそんなに疲れてんだ？」

今回のストーリーはやたらと登場するキャラが多かったのよ（汗）
Ｌｉｎｏさんのキャラとハーブさんのキャラ、さらにバクフーン達とそのライバル達……全員のセリフを執筆したからさ（汗）

バクフーン
「乙～（汗）」

第百十八話　集結

「美味っ♪　おかわりだ！」

フーディン達を追い返す事が出来たバクフーン達は今、ラグラージの家でご飯を食べていた。

余程お腹が空いていたのか、バクフーンはガツガツとご飯を食べている。

「相変わらず良く食べるな～……サーナイト、まだ食料残ってる？」

ラグラージはメイドのサーナイトに質問する。

「はい、まだ残ってますけど……このままの勢いだと、食料が無くなりそうです」

ガツガツと食べるバクフーンを見ながら、サーナイトは苦笑いして答える。

「あはは……まあバクフーンだけならなんとかなると思ってたんだけど……」

そう言ってラグラージはバクフーンの隣に座っている二人のポケモンを見つめる。

「まだまだいけるわよ～じゃんじゃん持ってきちゃって！」

「おっなかなかイケるじゃんかこの料理♪　俺もおかわり頼む～！」

バクフーンと一緒になって料理を食べているのはルーチェにサイクスだ。

「あの二人もバクフーン並みに食べるとは予想出来なかったよな～……」

ルーチェとサイクスの食欲を見て苦笑いを浮かべるラグラージ。

「なんか、本当に食料が無くなりそうで怖いな……」

「大丈夫ですよラグラージさん。いざとなれば非常食がありますから」

そう言ってフィルは笑みを浮かべながらうしだの事を見つめる。

「って俺を食うな！？」

「大丈夫だようしだ。せめて骨だけでも拾ってあげるから」

「いやフォローになってねぇよブラキオ！？」

悪のりしたブラキオにツッコミを入れるうしだ。

「バクフーン兄ちゃん、良くそんなに食べれるね～……あっこれ美味しい♪」

サイクスの前の席に座っているヒトカゲが若干呆れた表情を浮かべ、目の前にある料理を食べながら言う。

「そう言いながらお前も食ってんじゃねぇかよ……あっ本当に美味

い♪」

ヒトカゲの隣に座っていたゼニガメも一緒になって料理を食べる。

「本当に美味いっすねこれ♪」

「だね♪」

さらにグラエナやジラーチも一緒になって料理を食べる。

「あのラグラージさん、一つお尋ねしますが冷蔵庫はどちらに？」

急にドダイトスがラグラージに冷蔵庫の場所を聞いてきた。

「えっ？　冷蔵庫ならそこの廊下の突き当たりを右に曲がればあるけど……」

「そうですか……では早速……」

ドダイトスは冷蔵庫がある所へ向かおうとした……が。

「ドダイトス、お酒はダメよ」

ドダイトスの目の前にチコリータが立ち塞がる。

「お、お嬢、せめて一杯だけでも……」

「あなたが酔っ払うと他の皆に迷惑だからダメよ！」

強い口調で言うチコリータ。

「そ、そんな～……」

がっくりと肩を落とすドダイトス。

「ドダイトスの奴、酒が飲めなくて落ち込んでやがるな？」

そんなドダイトスの事を少し離れた所で見ていたのはバンギラスだ。

「あっバンちゃん、アタシあれ食べたーい」

バンギラスの頭の上に乗っているピチューが、テーブルに並べられているショートケーキを指差す。

「おっあいよ」

バンギラスはショートケーキが乗った皿をピチューに手渡した。

「ありがとバンちゃん♪」

ピチューはバンギラスの頭の上でショートケーキを食べ始める。

「さすがに賑やかね、これだけ集まると」

「嗚呼（ああ）……そうだな」

「……賑やかすぎるのもどうかと思うがな」

部屋の隅で皆の事を見つめているのはアクセルときぬ、そしてカ

メックスだ。

（今ピチューはショートケーキを食べるのに夢中になっている……今がアタックチャンス！）

突然きぬの前に何処から用意したのか、花束を持ってやって来たのはピカチュウだ。

「きぬさん、どうかこの僕とお付き合いして……」

「はいはい、お前もいい加減諦めろよな」

ピカチュウがきぬに告白しようとした時、リザードンがピカチュウの首根っこを掴んでひょいと持ち上げる。そしてそのままピカチュウを運んでいくリザードン。

「は、放せリザードン！？　お前まで俺の恋の道を邪魔するのか！？」

「アホかお前」

足掻(あが)くピカチュウを尻目に、リザードンはそのままピカチュウを連行していった。

「……やっぱり若いわね」

「あっいたいた」

バクフーン達がラグラージの家の中で賑やかにしている時、家の外にはギラティナにミュウ、スイクンがいた。

「ん？　どうしたんだお前ら？」

首を傾げながらギラティナはミュウ達に質問する。

「ギラティナ殿がお一人だけでは暇なのではと思いまして……」

「それでこっちに来たのさ」

ギラティナの問いに答えるミュウとスイクン。

実はギラティナの身体が大きすぎた為、中に入れないので外で待機していたのだ。

「別に……一人でいるのには慣れてるからな」

ミュウ達から視線を逸らし、空を見つめながらギラティナは言う。

「俺に構わず、中であいつらと一緒にいたらどうだ？」

「まあそういう事言わないで、なんか話そうよ。暇つぶしにはなると思うし」

そう言ってミュウはスイクンと一緒にギラティナの隣に来て、地面に座り込む。

「……変わった奴だな」

場所は戻ってラグラージの家の中。まだバクフーンはルーチェ、サイクスと一緒に料理を食べていた。

「バク君ってこんなに食べれるのね？」

バクフーンの前の席に座っていたレナが、バクフーンの事を見つめながら言った。

「こんくらいは余裕さ。まだまだ食えるぜ」

料理を食べながら、バクフーンは余裕の表情で答える。

「みたいね？　……でもバク君のこういうところも、私は好きだな」

「んぐっ！？」

レナの好きという言葉に驚き、喉（のど）に食べ物を詰まらせて噎（む）せるバクフーン。

慌てて目の前にある水が入ったコップを手に取り、水を飲み干す。

「ぷはぁ～！　あ～死ぬかと思った……いきなりそういう事言うなよレナ～」

少し涙目になりながらバクフーンは言う。

「だって本当の事なんだから仕方ないでしょ？」

「いや本当の事って……まあ良いや。それよりさレナ、コンテストの事を教えてくれよ」

話題を変えようと、バクフーンはコンテストの事をレナに質問した。

「あ～まだ説明してなかったわね。コンテストっていうのは、トップアイドルになろうとしているポケモン達が集まって、如何（いか）に自分を綺麗に魅せるかを競い合うの」

「魅せるって事は……さっきレナが使ってた……えっと、シューティング・フレイムスターだっけ？　あんな感じか？」

首を傾げながらバクフーンは聞く。

「そうよ。それで各地にコンテスト会場があって、コンテストリボンを五つ集めるとグランドフェスティバルに出場出来るのよ」

「コンテストリボン？　グランドフェスティバル？」

またまた首を傾げるバクフーン。

「バク君に解るように言うならリボンがジムバッジ、グランドフェスティバルがポケモンリーグって感じかな？」

「あ～なるほど解りやすい」

理解したのか、頷くバクフーン。

「じゃあレナは今までコンテストリボンを集めて、そのグランドフェスティバルっていうのに出ようと旅してたのか？」

「まあね。グランドフェスティバルに出て優勝して、トップアイドルになるっていうのが私の夢なんだ。でも、なかなか上手くはいかないのよね……それで、気分を変えようと思ってフレイムシティに里帰りしようと思ってこっちに来たんだけど……」

「そこで俺達にばったり遭遇って訳か」

バクフーンが言った事にレナは頷いて応える。

「皆、ちょっと外に来てみてよ」

その時、急にミュウがバクフーン達の所へやってきて外に出るように言う。

「どうしたんだよ？」

ミュウに何があったのかを質問するバクフーン。

「団体さんがやってきたんだよ」

「団体さん？　……って事はまさか！」

バクフーン達はミュウと一緒に家の外へと向かった。

「うおっ！　本当に団体さんだぜ！」

バクフーン達が外に出て、そこで見た光景……それは、仲間を集めると言って出発したラティオスとラティアスがたくさんのポケモン達を連れ、こちらに向かってくる姿だった。

「待たせたな皆」

「仲間、たくさん集めてきましたよ」

ラティオスとラティアスは笑みを浮かべながらそう言った。

「ようバクフーン、久しぶりじゃんか」

ラティオス達の後ろから親しげに声を掛けてきたポケモン、そのポケモンは……

「おっゴウカザルじゃんかよ！　うわ久しぶりだな～！　元気だったか？」

嬉しそうな声を上げるバクフーン。そのポケモンとはバクフーン達チームブラストのライバル、チーム業火のリーダーであるゴウカザルだった。

「まあな」

「……なんかお前雰囲気変わったんじゃね？　それに、身体中傷だらけじゃんかよ」

バクフーンの言う通り、ゴウカザルは以前と雰囲気が変わっていた。

そしてゴウカザルの身体には無数の傷跡が。

「ポケモンリーグでお前らと当たる前に負けたのが悔しくてな……ずっと強くなる為に特訓してきたのさ」

「そうなのか……あっ他の連中は？　来てんのか？」

「当たり前だろ？　ほら、彼処」

ゴウカザルは後ろを指差す。指された方をバクフーンが見ると、そこにはチーム業火のメンバーであるライチュウ、エルレイド、ドサイドン、ムクホーク、プラスルにマイナンとフルメンバーが揃っていた。

「うお～お前らも久しぶりだな！」

「ちょっとゴウカザルさん、俺達もいるんですから挨拶位させて下さいよ」

バクフーンがチーム業火のメンバーに向かって手を振って挨拶していた時、チーム竜星のリーダーであるフライゴンがやってきた。

「あっ悪かったなフライゴン」

「フライゴン！　お前もすっげー久しぶりじゃんか～！」

「お久しぶりですバクフーンさん」

バクフーンとフライゴンは互いに握手をして挨拶をした。

「なんだか、またとんでもない敵と戦っているみたいですね……俺達もバクフーンさん達に協力させてもらいますよ」

「ん、俺達？　って事は、他のメンバーも来てるのか？」

「当然ですよ。ほら」

フライゴンが後ろに振り向く。その先にはチーム竜星のメンバーであるミミロップ、グレイシア、バシャーモ、ライボルト、そして里帰りから戻ってきたスターミーにマナフィとこちらもフルメンバーが揃っていた。

「うわ懐かしいなぁ！」

「……あなたは相変わらずみたいですね」

さらにもう一人バクフーンに近寄ってきた。
そのポケモンはチームメタルのリーダー、メタグロスだった。

「あっメタグロスじゃん！　久しぶり～！」

「……まあ、確かに久しぶりですね」

軽く挨拶をするメタグロス。

「メタグロスがいるって事は、あいつらも一緒なのか？」

「当たり前です」

メタグロスがバクフーンから視線を逸らし、後ろに振り向く。
その視線の先には、チームメタルのメンバーであるハガネール、エアームド、ドータクン、ボスゴドラ、ジバコイルとこちらもフルメンバーが揃っている。

「お～！　お前らも久しぶり～！」

「僕も久しぶり……って訳でもないかな？」

そこにチーム龍のリーダー、カイリューがやってきた。

「あっようカイリュー！」

「助太刀に来たよバクフーン君」

いつもの優しい笑顔で言うカイリュー。

「カイリューがいるって事は、他の連中もいるのか？」

「残念。他の皆はマニューラさんやクレセリアさんの手伝いで一緒に仲間捜しをしてるからここには来てないんだよ」

カイリューが言うには、チーム龍のメンバーであるガブリアス達はポケモンレンジャーのマニューラやクレセリアと共に仲間捜しに行っているらしい。

「なんだそうなのか……じゃあ、来てくれたのはこれで全員って事か」

「おいこら、俺らを忘れてるぞバクフーン！」

そこに大きな声を上げながら二人のポケモンがやってきた。そのポケモンとは、バトルフロンティアで別れたドダイトスとポリゴン2だった。

「あっお前ら！　バトルフロンティアから帰ってきてたのか！」

「嗚呼。そしたら途中でカイリューに会ってな、お前らがまた厄介な敵と戦ってるって聞いたから、お前らに協力する為に来たんだ」

バトルフロンティアから帰ってきたドダイトス達は、バクフーン達に協力する為にカイリューと一緒に駆けつけてくれたらしい。

「そうなんか。あっお前ら、バトルフロンティアはどうだったんだ？」

首を傾げながらバクフーンはドダイトスに質問する。

「残念ながら、最後のバトルピラミッドを制覇出来なかったんだ…
…お前、良くあのバケモンみたいな強さのレジギガスに勝てたよな
？」

どうやらドダイトス達はバトルピラミッドを制覇出来なかったようだ。

「あの時は俺必死でやったからな～」

「バクフーン、話をするのは良いが……そろそろ出発の準備をしないと」

ラティオスがバクフーンにそう言った。

「あっそうだな。よ～し、待ってなよダークネス！　ぜってーぶっ飛ばしてやっからな！」

第百十八話　集結（後書き）

バクフーン
「本当にキャラ多かったな（汗）」

リザードン
「確かに（汗）でもさ、懐かしいキャラがたくさん出てきたな」

バクフーン
「ゴウカザルにフライゴンにメタグロス、それにドダイトスやポリゴン2。本当に懐かしいよなぁ……あっ！」

リザードン
「いきなりどした？」

バクフーン
「そういえばＬｉｎｏのキャラにもドダイトスいたよな？　俺らんとこのドダイトスとどうやって見分けんだ？」

リザードン
「あ～その事か。安心しな、作者とＬｉｎｏ先生はドダイトス達を見分ける事が出来るようにちゃんと考えてるからさ」

バクフーン
「マジか。どうやって見分けるんだ？」

リザードン
「それは次回で明らかになるさ。そして、次回はいよいよダークネスのアジトに殴り込みだ」

バクフーン
「お～なんか盛り上がってきたじゃんか！」

リザードン
「嗚呼。おっと、もうお別れの時間だな」

バクフーン&リザードン
『次回もよろしくな～』

第百十九話　突撃！　ディアボロス島！（前書き）

バクフーン
「ん!?　なんか更新されてる!?」

リザードン
「おいおい、作者の奴インフルエンザだろ?」

インフルエンザ……ふん、インフルエンザがなんぼのもんじゃい！

バクフーン
「ってなんか出た！（汗）」

……あ～……やっぱしんどい（汗）

リザードン
「って良く見たらマスクしてたこの人（汗）」

バクフーン
「作者の空元気だったか（汗）」

はあ……タミフル飲んで寝る……あとよろしく～……

リザードン
「帰ってった（汗）」

バクフーン
「何しに来たんだよ（汗）」

第百十九話　突撃！　ディアボロス島！

「皆、準備は良いか？」

ダークネスが率いる深淵（しんえん）の闇のアジトがあるディアボロス島に向かう為仲間達を集め、出発する準備をしていたバクフーン達。

準備が出来たのか、バクフーンが皆に聞いている。それに皆は頷いて応えた。どうやら準備は出来たようだ。

「よっしゃ！　じゃあ行こうぜ皆！」

「あっちょっと待ってバクフーン！　行くのは良いけど、移動手段はどうするの？」

首を傾げながらバクフーンに聞くラグラージ。

「あっそういえば……」

「それなら問題無いですよバクフーンさん、ラグラージさん。ちゃんと用意してありますから」

ラティアスが笑みを浮かべながら二人に言う。ちゃんと移動手段を用意してあるようだ。

「そうなのか？」

「ええ、まずは港の方へ。そこで待たせている人がいますので」

ウォーターシティの港。ラティアスに連れられてやって来たバクフーン達。

「あっ皆さん久しぶりっす～！」

大きな声を出してバクフーン達に呼び掛けるポケモンが一人。体色は紫色でスライムみたいな身体をしたポケモン……メタモンだ。

「あっメタモンじゃん！　うわ～マジで久しぶりだな～！」

かつて漆黒の闇と共に戦った仲間であるメタモンとの再会を心から喜ぶバクフーン。

「なるほど、前に漆黒の闇のアジトに乗り込んだ時みたく、メタモンがホエルオーに変身して皆を乗せて移動するんだな」

腕組みをして言うリザードン。

「そういう事です。メタモンさん、よろしくお願いしますね」

「任せるっすよ！」

やる気満々のメタモン。

「あれ？　なんかグラエナとメタモンさんの声が同じに聞こえるような……気のせいかな～？」

首を傾げるジラーチ。グラエナとメタモンの声が似ていると思ったようだ。

『まさか～。気のせいっすよそれは……えっ？』

見事にハモったグラエナとメタモン。二人共驚いて互いに見つめ合う。

「あっ本当にそっくりだ」

グラエナとメタモンの声がそっくりな事にバクフーンも驚く。

「ちょっと真似しないでくれっす！」

メタモンが真似したと思ったグラエナはメタモンに向かって言う。

「何言ってるっすか！　真似してるのはそっちっすよ！　そっちこそ真似しないでほしいっす！」

逆にグラエナが真似していると思ったメタモンは、グラエナに言い返す。

「真似してるのはそっちっす！」

「いやそっちっす！」

言い合いながら互いを睨むグラエナとメタモン。

「……どっちでも良いだろ、声が似てるだけなんだから」

呆れた表情を浮かべながら言うリザードン。

「メタモン、口喧嘩してないで早く変身してくれないか？」

腕組みをしながらラティオスが言う。

「え～でもまだ決着ついてないっすよ……」

「良いから早くしろ」

ちょっと怒り口調になるラティオス。

「うっ……わ、解ったっすよ。変身、ホエルオー！」

渋々メタモンは変身を発動させる。スライムのようだった身体は光り輝き、その光の中でメタモンの姿はどんどん変化していく。体長が０．３メートルだったメタモンは一気に１４．５メートルまでに大きくなり、姿はスライムから鯨のように変化した。

「変身完了っす！　さあ皆乗るっすよ！」

ホエルオーに変身したメタモンに言われ、バクフーン達はメタモンの背中に乗る。

（うっ……ま、前に乗せた時よりもなんか重いっすね……）

心の中でそう呟くメタモン。メタモンが重いと思うのは無理も無い。

メタグロスやハガネールといった重量級のポケモンに、さらにギラティナまで加わった為だ。

「……なあ、俺は飛んだ方が良くないか？」

メタモンの気持ちを察したのか、ギラティナはメタモンに聞く。

「へ、平気っすよ！」

笑顔でそうは言うが、本当は強がっているメタモンである。

「……いや、やはり俺は自分で飛ぶ」

ギラティナはメタモンから降り、空へと飛ぶ。

（ふ～……あ、ありがたいっす……）

ギラティナが降りてくれた事で大分楽になったメタモン。心の中でそんな事を呟く。

「じゃ、じゃあ皆さん、そろそろ出発するっすよ！」

深淵の闇のアジトがある島、ディアボロス島に向けてバクフーン達は出発した。

場所は変わり、ここディアボロス島では仲間集めを終えたダークネスの配下になっているポケモン達が戻ってきていた。

「ダークネス様、言われた通りに仲間を集めました」

配下の一人であるアブソルが、深々と頭を下げて仲間を集めてきた事をダークネスに伝える。

「ご苦労様アブソルちゃん♪　いや～かなり集まったね～♪」

アブソル達が集めてきたポケモン達の数を見て子供みたいに喜ぶダークネス。その数は元々いた配下のポケモン達と合わせると百を超えていた。

「ですが……ダークネス様の新たな身体になる強いポケモンを見つける事は出来ませんでした……申し訳ありません」

再び深々と頭を下げ、謝罪するアブソル。

「仕方ないよ。ギラティナちゃん並みに強いポケモンなんてすぐには見つからないさ……それよりアブソルちゃん。君は他の仲間達と一緒に戦闘準備をした方が良いよ」

「戦闘準備……ですか？」

首を傾げるアブソル。

「ギラティナちゃんの気配を感じるんだ。長い事彼の身体を使ってたから解る……もうすぐここにやって来るよ」

「わ、解りました！　すぐに準備します！　お前達、行くぞ！」

アブソルは仲間を連れ、アジトの外へ向かった。

一方その頃バクフーン達は、ディアボロス島目指して順調に海を渡っていた。

「なあドダイトス～」

「なんですか？」

「なんだよ？」

バクフーンが呼び掛けると、ヒトカゲの仲間のドダイトスとバクフーンの仲間のドダイトスが返事する。

「あっそういえば今ここにはドダイトスが二人いるんだった……」

右手を後頭部に当て、苦笑いするバクフーン。

「これでは呼ぶ時に色々と面倒ですね……私の事を呼ぶ時は、クライドと呼んで下さい」

ヒトカゲの仲間であるドダイトスは、自分の事はクライドと呼んでくれとバクフーン達に言う。

「クライドか……解ったよ」

「んでバクフーン、どっちに用があったんだ？」

首を傾げながら質問するドダイトス。

「あ～そうだった……ってあれ？　俺何聞こうとしたんだっけ？」

『ズコッ！？』

まさかの発言にその場にいた皆が思いっきりずっこけた。

「お、お前な～……」

「うーん……何聞こうとしたんだっけかな～？　……まっいっか！」

思い出すのを止めてしまったバクフーン。

「……軽い奴だな……」

思わずギラティナはそう呟いてしまった。

「まあでも、こういうとこもバク君の良いとこでもあるのよね」

笑顔で言うレナ。

「ははは……相変わらずみたいっすねバクフーンさんは……あっ皆さん、見えてきたっすよ！」

メタモンに言われ、バクフーン達は前方を確認する。

「あれがディアボロス島……」

バクフーン達の前には一つの大きな島が。

島を中心に空には黒い雲が渦巻き、雷まで発生している。

「うわ～……いかにもラスボスがいますって感じだね……」

第一印象を素直に言うラグラージ。

「彼処に俺の身体を良いように使ってた野郎が……待ってやがれくそ野郎！」

ギラティナはスピードを上げ、先にディアボロス島へと向かっていく。

「あっおいギラティナ！？　メタモン、スピードを上げてくれ！」

「了解っす！」

メタモンはスピードを上げ、ギラティナを追い掛ける。

「はい到着っす！」

ディアボロス島に到着したバクフーン達はすぐにメタモンから降り、上陸する。すでに上陸していたギラティナに追いつく。

「一人で先に行くなよなギラティナ～？」

両手を腰に当てながら言うバクフーン。だがギラティナは返事をしないで、前だけを見ている。

「ギラティナ？」

「……気をつけろお前達。どうやら敵さんは俺達が来るのを知ってたみたいだ」

バクフーン達も前を見てみる。そこにはアブソル達、深淵の闇のポケモン達およそ百人が集まっていた。かたやバクフーン達は今いる全員の人数を合わせても三十七人……数では圧倒的に不利だ。

「敵の数が多すぎるでしょ！？」

あまりの敵の多さに思わず声を上げるラグラージ。

「ふん……上等じゃねぇか。バトルの勝敗は数で決まるんじゃねぇ、実力で決まるんだ」

両肩のハイドロキャノンを出し戦闘体勢に入るカメックス。

「へっ良い事言うじゃねぇかよカメックス！　きやがれ雷！」

上空に漂う雷雲に向けて電撃を放ち、自分の所へ雷を呼び寄せるピカチュウ。

「はあぁぁぁ！」

呼び寄せた雷を自分の身体に取り込む。すると、ピカチュウの身体は金色に光り輝き始めた……ライジングモードだ。

「確かにカメックス君の言う通りだね。バトルの勝敗は数で決まるんじゃない……はっ！」

カイリューのいつもの優しい表情が厳しくなり、閉じられていた目も開かれる。そしてカイリューの身体からは金色のオーラが……カイリューの覚醒モードだ。

「僕達なら、どんな敵にだってきっと勝てる」

ブラキオも戦闘体勢に入る。

「最初から全力でやらないとダメみたいだね……紅蓮の炎を操る神よ……」

ヒトカゲは目を閉じ、両手を合わせる。
そして詠唱を始める……刹那(せつな)、ヒトカゲを中心に風が渦巻き始める。

「……我ここに誓う　我と汝の力ここに集結し時　我の前に現る悪を持つものに　粛正の咆哮を与えん」

詠唱を終えたヒトカゲ。渦巻く風がより一層強くなる。

「ダークネスをぶっ倒すまで、絶対負けねぇぜ！　うおぉぉぉ！」

身体に力を入れるバクフーン。刹那、バクフーンは凄まじい炎に包まれた……ブラストモードだ。

「ダークネス様の所へ近づけさせるな！　行くぞ！」

アブソルを先頭に、深淵の闇のポケモン達がバクフーン達に向かっていく。

第百十九話　突撃！　ディアボロス島！（後書き）

バクフーン
「やべ～、カメックスなんかかっけぇ～♪」

リザードン
「作者が言うには、カメックスの兄貴ならあの状況でも多分こう言うんじゃないか……そう思ったんだと」

バクフーン
「そしてドダイトス。ヒトカゲの仲間の方にはクライドって名前があったんだな？」

リザードン
「えっとＬｉｎｏ先生から預かった資料によると……」

バクフーン
「ってそんなもんがあんのか（汗）」

リザードン
「……おっあったぞ！　この資料によると、昔ドダイトスが生きる為に強盗してた時に使ってた偽名なんだってさ」

バクフーン
「マジか（汗）」

リザードン
「さて、次回はなんか色々と大変な事が起きるみたいだぞ？」

バクフーン
「百人相手にすんのにまだあんのか？（汗）」

リザードン
「えっと……」

バクフーン
「その資料俺にもくれよ（汗）」

リザードン
「……あっ嘘（汗）」

バクフーン
「どした？」

リザードン
「……ネーミングセンスの欠片も無い奴らがやって来るんだと……（汗）」

バクフーン
「……面倒なのが来んのかよ～（汗）」

第百二十話　ＶＳ深淵の闇！（前書き）

いやぁ……タミフルの効き目には驚きだな～。

バクフーン
「そう言いながらマスクしてんじゃん（汗）」

念のためだ！

リザードン
「いやつうかこの時間は普通寝てるだろ（汗）」

バクフーン
「ってかさ、順番的に次はタクミじゃねぇのか？」

なんか、熱出して寝込んでる時にこっちの方のストーリーが思い浮かんじゃって（汗）

リザードン
「あっそう……（汗）」

第百二十話　ＶＳ深淵の闇！

ディアボロス島に乗り込んだバクフーン達。だが、すでにバクフーン達が来る事を知っていた深淵（しんえん）の闇のポケモン達は待ち伏せていて、バクフーン達に襲い掛かってきた。数は深淵の闇が百、かたやバクフーン達は四十八……数では圧倒的不利だが……

「電光石火から火炎車！」

バクフーンが素早い身の熟（こな）しで敵に接近、炎を身体に纏（まと）って体当たりを一気に十人のポケモンに直撃させる。バクフーンの攻撃が強力だったようで、技を受けたポケモン達は大きく後方へ吹き飛ばされて倒れる。

「竜の舞い……さらにドラゴンクロー！」

カイリューは竜の舞いを使って自身の攻撃力と素早さを上げる。そこから素早く敵に接近して両手の鋭い爪で敵を攻撃。

カイリューもバクフーンと同じく一気に十人の敵を薙（な）ぎ倒す。

「俺だって負けねぇぜ！　身代わり！」

ピカチュウは身代わりを発動して分身を作り出す。さらに分身と一緒に身代わりを発動して新たに分身を作り出し、本体と合わせて四人のピカチュウが現れる。

「アイアンテール・カルテット！」

四人のピカチュウ達は尻尾を鋼のように硬くして敵を攻撃、八人

の敵を吹き飛ばす。

「いっけぇー！　火炎放射！」

ヒトカゲは詠唱を使って強化された火炎放射を放つ。ヒトカゲが放った火炎放射は敵一人に直撃、後方に吹き飛ばされる。そして後方にいた別の敵に吹き飛ばされた者がぶつかり、まるでドミノ倒しみたいにどんどん倒れていって合計九人が倒れる。

「つるのムチ！」

ブラキオは二本のつるのムチを出して横一杯に伸ばす。

「それっ！」

その状態でブラキオは身体を回転させ、周囲の敵十人を薙ぎ倒していく。バクフーン、カイリュー、ピカチュウ、ヒトカゲ、ブラキオ、……この五人が不利な状況をものともしない活躍で相手を翻弄（ほんろう）している。

「どうやら……奴らの中で一番厄介なのはあいつらのようだな……ならばあいつらは放置して他の奴らを先に潰し、戦力を削るか」

バクフーン達以外を倒して戦力を削ろうと判断したアブソル。

「まずは……奴からだ！」

ターゲットを定めたアブソルが走り出す。

アブソルに狙われたポケモン……それはチーム竜星のメンバーであるミミロップである。

「辻斬り！」

ミミロップに接近したアブソルは、鎌のような湾曲（わんきょく）した黒い角でミミロップを攻撃する。

「飛び跳ねる！」

アブソルに気づいたミミロップは自慢の脚力を活かして空高くジャンプ、アブソルの辻斬りを回避する。

「私に攻撃してくるなんて良い度胸してるじゃないのよ！　気合いパンチ！」

落下しながらミミロップは右手に力を込める。そして渾身の右ストレートでアブソルを攻撃する。

「動きに無駄がありすぎるな」

アブソルはこの攻撃を素早い身の熟しで回避する。外れた攻撃は地面に直撃、ミミロップの強力なパワーで地面は砕ける。

「パワーはあるみたいだが……これで終わりだ！　身代わり！」

ミミロップに向かって走りながらアブソルは身代わりを発動、自分の分身を作り出す。

「は、速い！？」

「くらえ辻斬り！」

アブソルのスピードが速すぎ、ミミロップはアブソルの攻撃を回避する事が出来ずにまともに受けてしまった。

「……こんな……奴に……」

ミミロップは倒れてしまった。

「辻斬り二重奏……レクイエム。まずは一人」

「ミミロップ！？　貴様ぁぁぁ！」

仲間のミミロップがやられた事に怒り、超低空飛行でアブソルに接近するフライゴン。

「ドラゴンクロー！」

「攻撃が直線的すぎる」

怒りで冷静さを失ったフライゴンの攻撃をアブソルは余裕で回避する。

「くっ！？」

「終わりだ……連続辻斬り！」

攻撃を回避したアブソルは分身と一緒にフライゴンを連続斬りと辻斬りのコンビネーション攻撃を直撃させる。

「かはっ……」

攻撃に耐えられなかったフライゴンは倒れてしまった。

「ブラッディーレクイエム……これで二人」

冷徹な笑みを浮かべるアブソル。

「お前達も俺に続け！　そいつらは放置、他の奴らを先に仕留めるんだ！」

アブソルの号令を聞き、他のポケモン達もバクフーン達を狙わないでメタグロス達を狙い始める。

「俺達が弱いとでも思ってんのか？　ナメんじゃねぇ！　ハイドロポンプ！」

「俺もハイドロポンプだ！」

カメックスは両肩のハイドロキャノンから、ゼニガメは口から大量の水を放出、向かってきた敵を吹き飛ばす。

「強いのはブラキオ達だけでは無い！　ドラゴンクロー！」

襲い掛かってくる敵を次々とドラゴンクローで薙ぎ倒していくアクセル。しかも、攻撃する度にその攻撃スピードはどんどん上がっていく。

「あまりワタシ達を見縊（みくび）ると、痛い目に遭うわよ。鬼火！」

きぬは九本ある尻尾の先端から炎の塊を作り出し、それをコント

ロールして向かってくる敵の攻撃を全て防ぐ。

「ドダイトス、合わせ技いくぜ！　岩砕き！」

「今はクライドって呼べバンギラス！　ストーンエッジ！」

バンギラスは右手で地面を思いっきり殴って砕く。そして砕け散った岩の破片をドダイトスのクライドがコントロール、敵に向かって飛ばす。

「ジラーチ！　あれよろしくっす！」

「任せて、重力！」

両手を前に翳(かざ)すジラーチ。刹那、目前にまで迫ってきた敵が地面に押し付けられるように倒れる。重力が重くなったのだ。

「リザードンの兄貴、あとよろしくっす！」

「任せな！　オーバーヒート！」

敵が動けなくなったところにリザードンが強力な炎を直撃させる。

「もう、鬱陶(うっとう)しいわね！　冷凍ビーム！」

ルーチェは両手を使い、超低温のビームを放つ。冷凍ビームを受けた敵達は一瞬で凍りつく。

「アームハンマー！」

「ギガインパクト！」

ラグラージは右手をハンマーのように振り下ろし、うしだは強力な突進で攻撃、確実に敵を倒していく。

「うーん、少しは敵の数が減りましたが……まだ多いですね。ラグラージさんに非常食さーん、もっと頑張って下さーい」

ラグラージとうしだの後方で、物陰に隠れながら応援しているのはフィル。そして一緒にピチューとチコリータがいる。

「こういう時位は名前で呼べよ！？　俺は非常食じゃねぇっつうの！　それと、お前ら見てないで戦え！？」

「ボクはブイズコーポレーションの社長なんですよ？　社長は安全な場に避難しとくもんでしょ」

「私は一応お嬢様だし」

「アタシはか弱い女の子だし」

言いたい事を言うフィル、チコリータ、ピチューの女の子三人組。

「あっ危ない三人共！？」

『え？』

ラグラージが三人に向かって叫ぶ。フィル達が振り向くと、そこには敵が三人襲い掛かろうとしていた。

「リーフブレード！」

「葉っぱカッター！」

「１０万ボルト！」

フィルは葉っぱのような尻尾で、チコリータは頭の葉っぱをカッターのように飛ばし、ピチューは強力な電撃を飛ばしてそれぞれ攻撃。攻撃を受けた敵は後方へ吹き飛ばされる。

「ボク達の背後から攻撃するなんて……」

「良い度胸してるわね？」

「覚悟は良いかしら、あんた達？」

この後フィル達によるお仕置きが始まったのだとか……

「……うしだ、女の子って怖いんだね」

「俺に聞くなよ……」

バクフーン達がアブソル達と激しい戦いを繰り広げている時、ディアボロス島に近づいてくる一つの船が。

「おうおう、派手にやってんじゃねぇか！」

「……ふむ、どうやら互いに戦力が減ってきているようですね」

双眼鏡でバクフーン達の戦闘を見ているのは、世界の創造のリーダーヤドキングと仲間のドクロッグだ。

「……ヤドキング、確認してきたぞ」

ヤドキング達の所にクロバットがやって来た。ヤドキングはクロバットにバクフーン達とアブソル達、双方に出ている戦闘不能になったポケモンの数を確認させていたのだ。

「ご苦労様ですクロバット。それでどうでした？」

「まずバクフーン達だが、情報通りチーム業火なんかの他のチームや俺達を倒したヒトカゲ達がいるんだが、見慣れないメガニウム達が一緒に来ているようだ。そして現在の状況はチーム竜星は全滅、チームメタルはメタグロスとハガネール以外は全滅、チーム業火はゴウカザルとライチュウ以外は全滅……あと妙なスライムの野郎が一人伸びてたな。バクフーン達やヒトカゲ達とメガニウム達はどうやらまだやられていないようだ……一方の深淵の闇は大分やられてるようだな。倒れてる奴らの数は五十四だった」

ヤドキングにバクフーン達とアブソル達の現在の状況を報告したクロバット。

「ふむ、さすがバクフーンとその仲間……というところですか。しかし妙ですね……」

左手を顎（あご）に当てながら首を傾げるヤドキング。

「何がだよヤドキング？」

「情報によれば、バクフーン達にはギラティナが一緒にいる筈なのですが……そのギラティナが見当たりません。それにミュウ、スイクン、さらにラティオスとラティアス、それにヒトカゲと一緒にいたバクフーンもいません」

場所は変わり、深淵の闇のアジト。

「あ～らら……アブソルちゃん達、あんな少人数相手に苦戦しちゃってるよ」

アジトからバクフーン達の戦いをダークネスは眺めていた。

「……高みの見物とは大した身分だな貴様」

ダークネスの背後から声が。ダークネスが振り向くとそこにはギ

ラティナがいた。

「ギラティナちゃん……彼処にいないと思ってたら、もうここまで来ちゃったの？」

「ギラティナのシャドーダイブでこっそりと来たのさ」

ギラティナの背中から一人のポケモンが飛び降りてきた。サイクスだ。

「しかしサイクス殿、良くあの状況でこういう事を思いつきましたな？」

「でもおかげでここに来れたよ」

さらにギラティナの背中から二人のポケモンが降りてきた。ミュウとスイクンだ。

（……ギラティナちゃんだけじゃなく他にもぞろぞろと……面倒だな……）

ダークネスは少しずつ後ろに下がり、この場から逃げようとする。

「何処に行くつもりだ？」

またダークネスの背後から声が。ダークネスが後ろを見るとそこにはラティオスとラティアス、さらにレナまでいた。

「おー良いタイミングだぜ♪」

ラティオス達の到着に笑顔になるサイクス。

「あら？　ダークネスって私やバク君にサイクス君と同じバクフーンなの？」

今のダークネスを見て少し驚いているレナ。

「油断しないで下さいレナさん、ダークネスはポケモンに乗り移る事が出来る……ポケモンじゃない何かなんですから」

ダークネスを睨みつけながらそう言うラティアス。

「そんなに心配すんなよラティアス。ダークネスは袋の鼠なんだぜ。こっちにはギラティナだっているんだ、今のダークネスならここで倒せる」

自信満々に言うサイクス。ギラティナのシャドーダイブの力で誰にも気づかれずにダークネスの所へ接近、ミュウやスイクン、ラティオス達と協力して弱体化しているダークネスを包囲して一気に仕留める……ここまでサイクスが考えた作戦のシナリオ通りに進んでいた。

第百二十話　ＶＳ深淵の闇！（後書き）

バクフーン
「……あれ、なんかおいしい所をサイクスに持っていかれてる気が（汗）」

リザードン
「この調子で行くとバクフーン主人公からサイクスが主人公って事も……」

バクフーン
「なにー！？」

リザードン
「まあそれは無いか（笑）」

バクフーン
「あったら困るし（汗）」

リザードン
「でもさすがサイクス。ああいう状況でもすぐに作戦を思いつくんだもんな」

バクフーン
「ブラキオ達だって凄いだろ？」

リザードン
「まあ確かに。ブラキオはバクフーンと同じ位敵倒してるし」

バクフーン
「だよな。んで、次回はどうなんだ？」

リザードン
「とりあえず言えるのは、これが最終決戦じゃないって事」

バクフーン
「……ほえ？」

リザードン
「はい、以上」

バクフーン
「ってそれだけかい！？　なんか他に無いのかよ！？」

リザードン
「時間の都合でこれ以上無理」

第百二十一話　介入（前書き）

リザードン
「久しぶりに更新されたなぁ……ってあれ、バクフーンがいない？
……ん、なんかメモが置いてあるな。えっと何々……『ちょっとサイクスと一緒に飯食ってくるから、あとよろしく！』……あいつまたサイクスと一緒に飯食いに行ったのかよ（汗）」

ラグラージ
「ＭＣの自覚ゼロだね（汗）」

リザードン
「確かに……ってなんでお前がいるんだよ！？（汗）」

ラグラージ
「バクフーンに代わりに出てくれ言われたから来たんだよ」

リザードン
「あっそうなん？」

ラグラージ
「って、今回はどうなるの？」

リザードン
「今回はあのネーミングセンス無い奴らの切り札が戦闘に介入するみたいなんだ」

ラグラージ
「……やばくない？（汗）」

リザードン
「まあどうなるのかは本編見れば解るから」

第百二十一話　介入

深淵（しんえん）の闇のアジトがあるディアボロス島……そこでバクフーン達はダークネスの配下であるアブソル達と死闘を繰り広げていた。

現在の状況はバクフーン達が二十三人、かたやアブソル達が四十六人……互いに戦力を消耗している。だが、勢いがあるバクフーン達の方が優勢だ。

「なぁヤドキング、いつまで様子を見てるつもりなんだ？」

ディアボロス島から少し離れた沖の方で、船の上から戦況を観察していたドクロッグが隣にいるヤドキングに聞く。

「もう少し奴らの戦力が減ってきてからです」

右手を自分の顎（あご）に当てながら、ヤドキングはそう言う。

「もう充分減っただろ？　それに、俺達にはミュウツーっていう切り札があるんだぜ？」

船の中心で目を閉じ、静かに佇んでいるミュウツーを見ながら言うドクロッグ。ミュウツーの首には何やら黒い首輪が付けられている。

（……確かにドクロッグの言う事も解ります。攻め込むには今が好機ですからね。ミュウツーは今、私が作った首輪型の制御装置で大人しくしていますからやれない事はありません。ですが……）

右手を顎に当てたまま、考え込み始めるヤドキング。彼は恐れて

いるのだ、ミュウツーが自分達の指示を聞かずに勝手に行動してしまうのではないかと。ミュウツーには勝手な行動を取らせない為にヤドキングはミュウツーを作る際、“心”を持たせないようにした。

こうする事で、自分達の命令を忠実に聞く戦闘マシーンにしようとしたのだ。だがヒトカゲ達との戦闘後、ミュウツーに変化が起きた。

ミュウツーに“心”が芽生え始めたのだ。

“心”を持ったミュウツーはヤドキングの命令に逆らい始めた…

…だが、ヤドキングはあらかじめ用意していた首輪型制御装置をミュウツーの首に取り付ける事で、無理矢理“心”を封じ込めて現在に至る。

（あの制御装置がもし戦闘中に破壊されでもしたら、自分を束縛した事に怒ったミュウツーが私達を攻撃してくる可能性も充分考えられる……）

「おいヤドキング、何ボケーッとしてんだよ？」

腕組みをしながらドクロッグはヤドキングに言う。

「別にボケーッとはしていません。ただ考えてただけですよ」

「何を考える必要があんだよ？　ただ殴り込みに行くだけだろうが」

「私はあなたみたいに無計画に突っ込んだりはしないんですよ。少し黙っていなさい」

そう言ってヤドキングは再び考え始める。

（……ここは私達は船で待機したまま、ミュウツーだけをあの場に

送り込む事にしましょうか……そうすれば、仮に制御装置が破壊されても私達はすぐに避難する事が出来ますからね）

「決めました。ミュウツーだけをあの場に送り込みます」

考えが纏まったヤドキングはドクロッグ達にミュウツーだけを送り込む事を伝える。

「はぁ！？　なんでこいつだけなんだよ！？」

戦闘に参加したかったドクロッグはヤドキングの決定に納得がいかないようだ。

「あなたは黙っていなさい。ミュウツー、今からあなたに任務を与えます」

ヤドキングがそう言うと、目を閉じていたミュウツーは目を開ける。

「彼処で戦闘をしている奴ら、全員を排除する事です。任務を確認しなさい」

「……敵を全て排除……任務了解。只今より任務を開始します」

そう言ってミュウツーはバクフーン達とアブソル達が戦うディアボロス島に向かって飛び立った。

一方ディアボロス島では、ミュウツーがこっちに向かっていると
は知らないバクフーン達は全力でアブソル達と戦っていた。

「火炎放射」

バクフーンは口から灼熱の炎を吐き出して敵を攻撃、三人を後方
へ大きく吹き飛ばす。

「……あと少しで全員倒せるか」

バクフーンは敵の数を確認してそう呟く。
だがその時、バクフーンの背後からまた新たな敵が忍び寄りバク
フーンに飛びかかろうとした。
しかしその刹那(せつな)、猛スピードでカイリューが突っ込み体当たりを
直撃させ、敵を吹き飛ばした。

「背中ががら空きだったよバクフーン君？」

「悪ぃカイリュー、助かったぜ」

笑みを浮かべてカイリューにお礼を言うバクフーン。

「あと少しで全員を倒せる、気合い入れていくよバクフーン君！」

「解ってるさ」

バクフーンとカイリューは再び敵の中へと飛び込んでいった。

「タネマシンガン！」

ブラキオは口から無数のエネルギー弾をマシンガンの如く吐き出し、向かってくる敵を返り討ちにする。順調にタネマシンガンで返り討ちにしていたその時、ブラキオの右方向から何者かが放った黒いエネルギー弾、シャドーボールが向かってきた。

「あれは守るじゃ間に合わないか……仕方ない。うしだ！　ちょっとごめんよ！」

一言謝ってから、ブラキオはつるのムチをうしだの身体に巻き付ける。

「……まさかこの展開は……」

「よっと！」

ブラキオは思いっきりうしだの事を引っ張り、自分の所へ引き寄せる。

「やっぱりかよぉー！？」

引っ張られたうしだはブラキオの前に連れてこられ、シャドーボールの盾にされた。

ノーマルタイプであるうしだには、ゴーストタイプの技であるシャドーボールは効果が無い為ダメージを受ける事はなかった。

「友情技・牛ガード成功。ふぅ～、危なかったぁ」

「本当危なかったよなぁ……じゃねぇよ!?　何また俺の事を盾にしてんだお前は!?」

ノリツッコミを炸裂させるうしだ。かなりご立腹な様子。

「だから前もってごめんよって言ったじゃないかうしだ」

「いやそういう問題じゃ……ん?」

何かを言いかけた時、うしだは視線をブラキオからずらして別の方角に向ける。

「どうしたのうしだ?」

「何かがこっちに来るぞ」

うしだが見つめている方角にブラキオも顔を向ける。そこにいたのは凄いスピードでディアボロス島に向かってくるミュウツーだった。

「敵を確認、排除開始」

ミュウツーは両手を使ってエネルギーを集め、エネルギー弾を作り出す。

「波動弾」

ミュウツーは青色のエネルギー弾を連続で発射する。

「あいつも敵か！？」

「下がってうしだ！　守る！」

うしだを背後に行かせ、ブラキオはエネルギーの膜を作り出して自分とうしだを包み込む。

ミュウツーが放った波動弾は守るで防ぐ事が出来、ブラキオとうしだはダメージを受ける事はなかった。だが、周囲にいたダークネスの仲間には波動弾が直撃、大きく後方へと吹き飛ばされていく。さらにミュウツーは連続で波動弾を繰り出し、他の皆にも向けて放つ。バクフーン達はこの攻撃に素早く対応し、ダメージを受ける事を防ぐ。

だがダークネスの仲間は、実力者以外の者全員が波動弾をまともに受け、戦闘不能になってしまった。残ったのはアブソルを含めてたったの六人だ。

「あいつはあの時のポケモン！？」

ミュウツーを見て、驚きを隠せないグラエナ。

「グラエナ、あいつ知ってんのか？」

バクフーンはグラエナにミュウツーの事を聞く。

「ヤドキングが作ったポケモンっすよ！　気をつけるっすよアニキ、あいつ滅茶苦茶強いんすから！」

ミュウツーを警戒しながらグラエナはバクフーンに気をつけるように言う。

「……任務続行、敵を全て排除する」

ミュウツーは再び波動弾で攻撃しようと構える。しかしその刹那、深淵の闇アジトから大きな爆発音が聞こえてきた。

その場にいた全員がアジトの方に振り向く。

アジトからは爆煙が立ち込めている。

そして爆煙の中から一人のポケモンが姿を現す。グレンの身体に乗り移っているダークネスだ。

「残念、逃げられちゃったか」

残念そうな表情を浮かべるダークネス。

「な、何？　一体何があったの？」

何が起きたのか解らないヒトカゲは困惑した表情をする。

「危なかったよ……」

その時ヒトカゲの背後から声が。ヒトカゲが振り向くと、そこには傷だらけのミュウと、ミュウと同じく傷つき気を失ってしまっているギラティナやサイクス達がいた。

「み、皆！？　どうしたのその傷！？」

「……サイクスの作戦で、上手いことダークネスに近づく事が出来

たんだけど、返り討ちにあってね……」

痛むのか、左腕を押さえながらミュウは言う。

「危うくやられるとこだったけど、テレポートで皆と一緒に脱出したんだ……予想外だったよ、まさかダークネスがディアルガの力を使ってくるなんてね」

ダークネスを睨みつけながらミュウはそう言った。ダークネスを倒す為ミュウ達は全員で攻撃しようとしたのだが、ダークネスはディアルガから奪い取った力を使って反撃、返り討ちにされてしまったのだ。

「ダークネス様！」

アブソルが慌てた様子で残った仲間達と一緒にダークネスの所へ駆け寄る。

「申し訳ありませんダークネス様、アジトへの侵入を許してしまって……」

「別に良いよ。どうせ侵入されると思ってたし……それより、残ったのは君達だけ？」

首を傾げながらダークネスはアブソルに聞く。

アブソルはその問いに頷いて応える。

「……なんで……」

ダークネスを……いや、グレンの事を見つめていたバクフーンは

驚きの表情を浮かべている。

「バクフーン、どうしたんだい？」

バクフーンの様子がおかしい事に気づいたブラキオ。ブラキオはバクフーンに聞く。

「あのバクフーン……俺の父さんだ……」

『えっ！？』

バクフーンの父さん……それを聞かされたブラキオ達は全員驚きの声を上げる。

「……排除する」

突如、ミュウツーがダークネスに向かって猛スピードで突っ込んでいった。

「タイムボール」

ダークネスは左手から青色のエネルギー弾をミュウツーに向けて放った。その青いエネルギー弾はミュウツーの目の前で大きく膨れ上がり、ミュウツーを包み込んでしまった。エネルギー弾に包まれたミュウツーはピタリと動かなくなる。

「挨拶も無しに突っ込んでくるなんて、行儀悪い奴だね～。そのタイムボールに包まれると時間が停止するんだよね……まぁ意識は残るけど。君はもう生きた彫刻さ」

ディアルガの力を使った技でミュウツーの時間を停止させたダークネスは子供みたいな笑みを浮かべる。

「あのミュウツーを簡単に……信じられないっす……」

驚愕するグラエナ。

「さすがですダークネス様」

「誉めても何も出ないよアブソルちゃん？　……でもこのポケモン、なかなか良い心の闇を持ってるねぇ。僕の新しい身体に……」

「ラスターカノン！」

突如ダークネスの身体を銀色のエネルギー波が貫いた。

「がっ！？」

激痛で表情を歪め、地に膝(ひざ)をつくダークネス。

「ふふふ……油断したなぁダークネス。この時が来るのをずっと待っていたぜ」

アジトの中からゆっくりと一人のポケモンが歩いてきた。そのポケモンとは、焔(ほむら)の悪魔のボスだったヒードランだ。

第百二十一話　介入（後書き）

ラグラージ
「うしだが（汗）」

リザードン
「友情技・牛ガードか（汗）あっ作者はちゃんと許可をもらったって言ってたぞ」

ラグラージ
「うしだが可哀想だよ（汗）」

リザードン
「まあ確かに（汗）」

ラグラージ
「あとヤドキングって、意外と臆病だったりするの？　ミュウツーだけに介入させるとか……」

リザードン
「作者から渡された資料によると……ヤドキングはチキンハートの持ち主、自分の身が危ないと判断すると逃げ出すタイプ……」

ラグラージ
「そういうタイプなんだね彼（汗）」

リザードン
「らしいな（汗）」

ラグラージ
「そして最後の方……あまり姿を見せないと思ってたヒードランがここぞとばかりに出てきたね」

リザードン
「ダークネスの身体を……ってかバクフーンの親父さんだけど、ラスターカノンで貫きやがったな（汗）」

ラグラージ
「次回どうなっちゃうの？」

リザードン
「とりあえず言える事は、ダークネスがそんな簡単にくたばる筈が無いと……」

ラグラージ
「……あれ不死身ですか（汗）」

リザードン
「まあ詳しくは次回でって事だ」

第百二十二話　ダークネスＶＳヒードラン！（前書き）

リザードン
「ヒードランとダークネスが対決か……」

バクフーン
「どっちが勝つんだろうな？」

ラグラージ
「どっちが勝っても結局僕らの敵なんだけどね（汗）」

リザードン
「ってさりげなく何故お前がいる？（汗）」

バクフーン
「俺らのコーナーだぞ」

ラグラージ
「最近また空気化し始めてるから、少しでも僕の存在をアピールしとかないといけないからさ……だからここにいさせて！　お願い！」

リザードン
「って土下座しなくても良いだろうよ（汗）」

第百二十二話　ダークネスＶＳヒードラン！

「あいつ……生きていやがったのか！」

怒りの表情でヒードランを睨むドダイトス。

「くっ、いつかは裏切ると思ってたけど……まさか今とはね……」

激しい痛みで顔を歪ませるダークネス。
ラスターカノンを受けた箇所から大量に出血している。

「ふふふ……この時が来る事をずっと待っていたぜ。お前を始末して、俺が新たなボスになるこの日をな……消えろ、火炎放射！」

ヒードランは口から強力な灼熱の炎を吐き出し、ダークネスに直撃させる。火炎放射を受け、吹き飛ばされたダークネスは宙を舞う。

（もうグレンちゃんの身体は限界だね……仕方ない、出るか）

グレンの身体から禍禍（まがまが）しい黒いオーラが出現、その黒いオーラはグレンから離れ、球体に形を変えて宙に浮かぶ。グレンの身体はバクフーン達の所まで吹き飛ばされ、バクフーンがグレンをしっかりと受け止める。

「父さん！」

バクフーンはグレンに呼び掛けるが、グレンは返事をしない。
だがまだ呼吸をしているので死んでいる訳ではない……しかしヒードランから受けた攻撃で重傷を負ったグレンの出血が酷く、いつ

死んでもおかしくない状況だ。

「父さん！　頼むから目を覚ましてくれよ！？」

「バクフーン、僕に任せて」

バクフーンの所にブラキオが歩み寄る。

「ブラキオ……」

「僕の力なら、もしかしたら救えるかもしれない」

そう言ってブラキオは目を閉じ、意識を集中する。すると、ブラキオの身体から黄色いオーラが現れる。

「ヒーリングサークル」

ブラキオのヒーリングサークルが発動、黄色いオーラはブラキオを中心に広がり結界のようになる。ヒーリングサークルの結界に包まれたグレンの怪我が少しずつ治っていく。

（かなり酷い怪我だから、これは少し時間が掛かるかもね）

一方グレンの身体から離れたダークネスは黒い球体になって宙に浮いたまま、ヒードランを見下ろす。

「それがお前の正体って訳か……ふん、変な姿だな」

ダークネスの事を鼻で笑いながら言うヒードラン。

「闇に形なんか無い……これはあくまで仮の姿さ。さて、早速新しい身体の中にでも入ろうかな？」

ダークネスはゆっくりと時間を停止させたミュウツーに近づいていく。

「させるか！　ラスターカノン！」

ヒードランは口から銀色のエネルギー波を吐き出し、ダークネスに向けて放つ。

「無駄だよ」

ダークネスがそう言った刹那（せつな）、なんとラスターカノンはダークネスの身体をすり抜けてしまった。

「何っ！？」

「闇である僕にそんな技が通用する訳が無い……まあ、ホウオウみたいな聖なる力を宿した攻撃なら話は別だけどね。アブソルちゃん、そのポケモンに付いてる邪魔な首輪、外してくれるかい？」

「お任せを。鎌鼬(かまいたち)！」

アブソルは右側頭部にある湾曲した角から衝撃波を放ち、ミュウツーに付けられていた制御装置を破壊する。

「それじゃ、お邪魔しま～す♪」

ダークネスはミュウツーの身体の中へ溶け込むようにして入っていく。

「そのポケモンの身体ごと灰にしてやる！　マグマストーム！」

ヒードランは口から先程の火炎放射よりも強力な灼熱の炎を吐き出す。

炎の竜巻となり、ダークネスに向かっていく。

「……時間停止解除、念力！」

ミュウツーに完全乗り移ったダークネスは停止していた時間を元に戻し、右手を前に翳(かざ)して強く念じる。

刹那、マグマストームは遥か上空へと吹き飛んでしまった。

「俺のマグマストームを……念力で吹き飛ばしただと！？」

驚愕するヒードラン。

「……凄いやこの身体。ギラティナちゃんの身体よりも居心地が良いし、力がどんどん漲(みなぎ)ってくる」

両手の平を見つめ、笑みを浮かべるダークネス。

「……さて、早速君でこの身体を試してみようかな？」

ヒードランを見つめ、不気味な笑みを浮かべるダークネス。

「アブソルちゃん達は邪魔だから下がってて」

「かしこまりました」

アブソル達はダークネスとヒードランから離れる。

「さあ楽しもうか、ヒードラン！」

ダークネスの身体から禍禍しい黒いオーラが現れる。その黒いオーラはどんどん大きくなり、ダークネスとヒードランを包み込んでまるでドームのようになってしまった。ドームの中は暗く、外にいるアブソル達やバクフーン達は中の様子を見る事が出来ない。

「なんだ……この空間は？」

ドームの中にいるヒードランは、暗闇が広がる空間を見回す。

「ダークゾーン……僕が作り出した特別な空間さ」

暗闇の中、ダークネスがヒードランの前に姿を現す。

「さあバトルを始めようか。シャドーボール！」

ダークネスは右手で黒いエネルギー弾を作り出し、ヒードランに向けて放つ。

「火炎放射！」

ヒードランは火炎放射を放ってシャドーボールにぶつける……しかしダークネスのシャドーボールは強力で、ヒードランの火炎放射をどんどん押し返していく。

「くっ、オーバーヒート！」

ヒードランは火炎放射よりも強力なオーバーヒートに切り替える。オーバーヒートがシャドーボールにぶつかった瞬間爆発が発生、その爆発の衝撃でヒードランは後方へ軽く吹き飛ぶ。

「どうしたんだいヒードラン？　ほら、かかってきなよ」

ヒードランを挑発するダークネス。

「貴様……調子に乗るなよ！　鬼火！」

ヒードランは小さな無数の炎の塊を出現させる。そしてその炎を一つに纏(まと)め、巨大な塊にする。そしてヒードランはそれを丸呑みにする。

特性の貰い火で、炎技を強化するつもりだ。

「くたばれ！　マグマストーム！」

ヒードランは最大パワーでマグマストームを放つ。貰い火の特性で強化されたマグマストームがダークネスに向かっていく。

「それが君のフルパワーか……サイコキネシス！」

ダークネスは右手を前に翳して強く念じる。

刹那、マグマストームは動きを停める。

「なっ！？」

自分が持つ最強の技をダークネスにいとも簡単に停められた事に驚愕するヒードラン。

「この技、返すよ」

ダークネスが更に強く念じると、停止していたマグマストームがヒードランに向かっていった。

マグマストームはヒードランを飲み込むが、特性の貰い火によってヒードランにはダメージは無い。しかし、最強技を返された事による精神的ダメージは大きい。

「俺の……マグマストームを……」

「悪いけど、今の僕には可愛い攻撃だったよ」

笑みを浮かべ、余裕の表情を見せるダークネス。

「そろそろ終わらせてあげるよヒードラン。あの世で愛しのマグカルゴに会わせてあげる」

ダークネスはそう言って攻撃する体勢に入る。

「貴様……何故マグカルゴを知っている？」

「ふふ……当然知っているさ。だって、マグカルゴを殺ったブラックウッドと呼ばれた組織……あれは僕が作った組織だからね」

「……何……？」

ダークネスの言い放った言葉に耳を疑ったヒードランは思わずそう呟く。

「聞こえなかったかな？　ブラックウッドは僕が作った組織なんだよ。ポケモンの心に闇を作り出し、その闇を取り込んで僕が強くなる為にね」

淡々と喋るダークネス。ダークネスはポケモンの心に自分のエネルギーとなる闇を作り出す為、ブラックウッドを組織したという。

当時のダークネスは自分を強化する為、ブラックウッドを組織してポケモンの心に闇を作り出す為に各地で殺戮行為を行っていた。

そして、ヒードランが住んでいた町がターゲットにされ、マグカルゴが殺されてしまったのである。

「お前が、お前のせいで俺の故郷が……マグカルゴが……」

怒りで身体を震わせるヒードラン。

（そうだ、もっと怒るんだ。怒れば怒る程、心の闇は大きく膨れ上がり、僕のエネルギーになるんだからね）

ダークネスはヒードランを怒らせる為、わざとマグカルゴが死んだ原因が自分にあると真実を告げたようだ。

「殺してやる……貴様だけは、必ず殺してやる！！」

怒りが頂点にまで上り詰めたヒードラン。

刹那、ヒードランの身体から禍禍しい黒い怒りのオーラが現れた。

「そろそろだね。その闇……僕のエネルギーにするよ！」

ダークネスは両手を前に翳して強く念じる。

すると、ヒードランの身体から現れたオーラが吸い寄せられるようにダークネスに引き寄せられていく。

「ぐっ！？」

刹那、ヒードランは脱力感に襲われその場に倒れてしまう。

「この闇は君のエネルギーそのもの……それを吸収してるんだから、倒れて当然」

「くっ……力が……」

立ち上がろうとするヒードランだが、力が入らず上手く立てない。

「さてっと……君を始末しようと思ったけど、良い事思いついたか

ら始末するのは止め。君にはまだ働いてもらうよ」

何かを思いついたダークネスは不気味に笑う。

刹那、ヒードランの身体が少しずつ闇に飲まれ始めた。それと同時にヒードランは睡魔に襲われる。

（マグカルゴ……仇、討てなかった……）

心でそう呟いたのを最後に、ヒードランの意識は眠りにつき、身体は完全に闇に飲み込まれてしまう。

「さて……あとは彼らだけだね。ダークゾーン、解除」

ヒードランを完全に闇に飲み込んだ後、ダークネスはダークゾーンを解除、黒いドームは消え去った。

「ダークネス様、あいつはどうしたんです？」

アブソルが歩み寄り、ダークネスに質問する。

「彼なら闇の中に堕ちたよ。それより、邪魔な彼らをここで始末しなきゃね……」

ダークネスはバクフーン達を見つめる。

「……ふぅ～、なんとか助ける事が出来たよ」

丁度その時、ヒーリングサークルによるグレンの治療が終わったようだ。グレンの傷は完全に治っている……今グレンは静かに眠っている。

「ブラキオ、父さんを助けてくれてありがとうな……」

バクフーンは心からブラキオにお礼を言う。

「お礼なら、彼処にいる敵を倒してからだよバクフーン」

ダークネスを睨みつけながらブラキオはバクフーンに言う。

「……そうだな。ミュウ、父さん達を頼むぜ」

「解った」

バクフーンはグレンやサイクス達をミュウに任せ、ダークネスと戦う為に戦闘体勢に入る。

「ダークネス、お前だけは……絶対にぶっ倒す！」

第百二十二話　ダークネスＶＳヒードラン！（後書き）

ラグラージ
「あっ混ぜるな危険と言われてた組み合わせが（汗）」

リザードン
「ダークネス＋ミュウツー＝混ぜるな危険……作者の奴やりやがったよ（汗）」

バクフーン
「なぁ、今回のストーリー見て思ったんだけどよ、ヒードランも被害者の１人なんだな」

リザードン
「まあ確かにな……ダークネスがいなけりゃ、ヒードランはあんな奴にはならなかったかもしれないしな」

ラグラージ
「……ダークネスって一体何十年前から行動してんだろ？（汗）」

それはいずれ明かされると思うよ。

バクフーン
「ってさりげなく作者が出た！（汗）」

人を幽霊みたいに言うなこら（怒）

ラグラージ
「まあまあ（汗）それより作者さん、次回は？」

次回はダークネスと君達が直接対決だよ。

バクフーン
「盛り上がってきたじゃんか！　絶対勝つ！」

リザードン
「……作者、この台本なんだけど……これに書かれてる内容はマジ？」

マジ。

リザードン
「……大変だなこりゃ（汗）」

第百二十三話　ＶＳダークネス！（前書き）

バクフーン
「いよいよ俺達とダークネスの対決かぁ！」

ラグラージ
「どうなっちゃうのかな？」

リザードン
「まあそれは今回の話を見れば解るさ。つうか、お前完全にこっちに居着いたな（汗）」

ラグラージ
「良いでしょ別に！」

第百二十三話　VSダークネス！

「僕をぶっ倒す……か。出来るかなぁ君達に？」

腕組みをしてバクフーン達を挑発するように言うダークネス。

「ダークネス様、奴らの相手は我々が……」

「アブソルちゃん達は下がってて良いよ。邪魔だから」

「……かしこまりました」

ダークネスの命令で、アブソル達はバトルの邪魔にならないようにダークネスから離れる。

「俺達を相手に一人でやるってか？　ずいぶんとナメられたもんだな」

怒りを露(あらわ)にするハガネール。

「本当にお前一人でやれるのか……試させてもらうぜ！　火炎放射！」

ゴウカザルは口から炎を吐き出し、ダークネスに向けて放つ。

「その程度の攻撃、僕には効かないよ」

ダークネスは右手を前に翳(かざ)し、前方にエネルギーの壁を作り出して火炎放射を防ぐ。

「だったらこれでどうだ！　捨て身タックル！」

ハガネールはその巨体を活かし、ダークネスに向かって突っ込む。

「念力」

ダークネスはハガネールを見つめながら念じ始める。そしてハガネールの巨体が宙に浮かばせ、動きを制限する。

「くっ！？　ね、念力なんかでこの俺を！？」

「余裕なんだよね。吹き飛んじゃえ！」

ダークネスはさらに念じ、ハガネールを後方へと大きく吹き飛ばす。

「後ろががら空きだ！　ドラゴンクロー！」

ダークネスの背後に回り込んでいたアクセルが、右手の鋭い爪で攻撃しようとする。しかし、ダークネスは尻尾を器用に伸ばしてアクセルの右手に巻き付かせ、ドラゴンクローを止める。

「残念だったね。それっ！」

「くっ！？」

ダークネスは尻尾を巻き付かせたままアクセルを振り回し、勢い良く投げ飛ばす。だがアクセルはなんとか体勢を立て直し、安全に着地する。

「バンギラス、同時攻撃いくぞ！　エナジーボール！」

「任せな、悪の波動！」

ドダイトスのクライドが口から吐き出し放った緑色のエネルギー弾に、バンギラスは両手を使って放った黒いエネルギー波を絡ませる。

悪の波動は螺旋状に回転しながらエナジーボールを包み込み、その状態を維持したままダークネスに向かっていく。

「波動弾」

ダークネスは左手で青いエネルギー弾を作り出し、クライド達が放ったエナジーボールと悪の波動に向けて放つ。

互いの技はぶつかり合い爆発する。

「これならどうだ！」

ピカチュウが電気を放出しながらダークネスに向かって突っ込む。

放出された電気は鎧のようになりピカチュウを包む。

「ボルテッカー！」

「リフレクター」

ピカチュウのボルテッカーに対してダークネスは前方にオレンジ色をしたエネルギーの壁を作り出す。ピカチュウのボルテッカーはリフレクターによって阻まれてしまう。

「ちっ、本当にこれリフレクターかよ！？」

リフレクターは本来、相手から受ける物理攻撃のダメージを半減させる技……攻撃を防ぐ効果は無い。しかし、ダークネスが作り出したリフレクターは守ると同じように攻撃を完璧に弾いてしまったのだ。

「確かにリフレクターだよ。君の攻撃が弱かっただけの事……そんなに驚く事じゃない」

「瓦割り！」

素早い身の熟(こな)しでダークネスに接近していたゴウカザルが手刀を繰り出し、ダークネスのリフレクターを破壊する。

「リフレクターなら、この技で対処すれば良いだけの事……くらえ、オーバーヒート！」

ゴウカザルは先程の火炎放射よりも強力な炎を口から吐き出し、至近距離でダークネスに直撃させる。オーバーヒートを受けたダークネスは後方へ吹き飛ばされ、近くにあった岩石に身体を打ちつける。

「……残念。僕に技を直撃させた事は誉めてあげるけど、効かないんだよねぇそんな攻撃♪」

ダークネスは何事もなかったかのような表情をしている。

「バカな！？　オーバーヒートを受けて傷一つ無いだと！？」

驚愕するゴウカザル。

「種明かししようか？　これだよ」

そう言った刹那、ダークネスの身体全体から黒いオーラが出現する。

「闇の衣……とでも言っておこうかな。これはあらゆる攻撃を完璧に防ぐ事が出来るんだ。だから、君達の攻撃は端から通用しないんだよ。まあ君達にホウオウの聖なる力があれば話は別だけど」

「火炎放射」

いつの間にかダークネスの背後に回り込んでいたバクフーンが、背中に火炎放射を直撃させる。

「ぐっ！？」

闇の衣で守られている筈のダークネスが苦痛で表情を歪める。

「なんだ、効いてんじゃねぇかよ」

（バ、バカな！？　僕にダメージを与えた！？）

絶対にダメージを受けないと思っていたダークネスは驚きを隠せない様子。信じられないといった表情でバクフーンを見つめる。

（ホウオウは僕が石に変えたから、他の誰かがホウオウの聖なる力を使う事なんて出来ない筈だ！　なのに何故！？）

「電光石火から火炎車」

バクフーンは炎を全身に纏い、素早い身の熟しでダークネスに向かっていく。

「くっ、波動弾！」

ダークネスは波動弾を連射して攻撃、だがバクフーンは全てを紙一重で回避する。そして一気に接近したバクフーンは火炎車をダークネスに直撃させる。

「くっ！？」

ダークネスは後方へ吹き飛ばされる。今の攻撃も効いたようで、表情が歪む。

「ブラキオ、今だ！」

「解ってるよ！」

バクフーンの合図を受け、ブラキオは技を使う体勢に入る。首にある花びらが紫色に輝き始めた。

「バインディングプラント！」

ダークネスの足下から樹木の根が無数に飛び出し、ダークネスに絡みついて捕縛する。

「いくぜ皆、一斉攻撃だ！」

動きを封じられたダークネスに向かってバクフーン達はそれぞれの得意技を放ってダークネスを攻撃する。全ての攻撃がダークネスに直撃し、凄まじい爆発が発生する。
周囲に爆煙が立ち込める。

「やったか……？」

爆煙をじーっと見つめるバクフーン。

「……ダーク・インパクト！」

突如爆煙の中から凄まじい衝撃波が放たれる。
その衝撃波によりバクフーン達は大きく後方へ吹き飛ばされてしまう。

「……少し君達を甘く見すぎてたみたいだね。守るを使ってなかったら、せっかくの新しい身体がボロボロになるところだったよ」

爆煙の中からダークネスがゆっくりと歩いてきた。守るを使っていたらしく、身体には傷一つ無い。

「くっ、こいつ……」

なんとか立ち上がるバクフーンだが、先程のダーク・インパクトによるダメージがあるのかふらふらしている。

「まず先に君から始末させてもらおうか、サイコキネシス」

「ぐっ！？」

右手を前に翳して強く念じるダークネス。
サイコキネシスの力でバクフーンは捕縛され、身体を宙に浮かばされる。身動きが出来ないバクフーンにダークネスはゆっくりと近づいていく。

「君には驚かされたよ、まさかホウオウの聖なる力を使うなんてね。だけど、これで終わりだよ」

ダークネスは左手で黒いエネルギー弾を作り出す。それは少しずつ大きくなっていく。

「バ、バクフーン……」

リザードンはバクフーンを助けようとなんとか立ち上がろうとするが、身体に力が入らず上手く立てない。

「消えちゃえ、ダーク……」

「波動弾！」

「悪の波動！」

ダークネスが技を放とうとした刹那、何処からか波動弾と悪の波動が放たれ、ダークネスに向かっていく。

「おっと！」

ダークネスはサイコキネシスを解き、波動弾と悪の波動を回避する。
サイコキネシスから解放されたバクフーンはその場に倒れ込む。

「間に合ったみてぇだな。おいおい、なんてザマだよバクフーン？」

バクフーンを助けたポケモン……それは、ダークライと共に別行動を取っていたパルキアだった。

「パ、パルキア……」

「野郎は俺に任せろ。ダークライ、もし俺に何かあったら……あとは頼んだぜ？」

「……解りました」

バクフーン達をダークライに任せ、パルキアはゆっくりとダークネスに向かって歩いていく。

「パルキア……前回は逃げられたけど、今回は逃がさないよ」

パルキアを睨みつけるダークネス。

「それが今のてめぇの姿か。ふん、誰が逃げるかよ。今度こそてめぇをぶっ倒してやる」

第百二十三話　ＶＳダークネス！（後書き）

バクフーン
「……あり？」

ラグラージ
「……僕達ちょっと負けてる感じ？」

リザードン
「やっぱり台本通りになったか（汗）」

バクフーン
「ちょいリザードン、その台本見せろ！」

リザードン
「お前に見せると絶対暴露するからダメだ」

バクフーン
「なんでだよ～（汗）」

ラグラージ
「ってか、主人公なのに知らないのね、この先の展開（汗）」

リザードン
「まあバクフーンだし」

バクフーン
「どういう意味だこら！」

ラグラージ
「まあまあ落ち着いて（汗）」

リザードン
「とりあえず次回はまたパルキアの兄貴とダークネスが激突。そして俺達は……」

バクフーン
「俺達は？」
リザードン
「……これ以上は言えないんで勘弁」

バクフーン
「いや言えよ！？」

リザードン
「言ったら楽しみ減るだろ」

ラグラージ
「確かに」

バクフーン
「でも気になるじゃんか～」

リザードン
「我慢しな」

第百二十四話　再び！　パルキアＶＳダークネス！（前書き）

バクフーン
「あれ？　また更新されてんぞ？」

本当はアレンの方を執筆しようと思ってたんだけど、こっちのストーリーを思いついちゃってね。

リザードン
「アレン放置しちゃった訳か」

失礼な！ちゃんとアレンも執筆してるんだからね！

ラグラージ
「それで作者さん、今回は？」

兄貴とダークネスの対決だけど……まあ詳しくは本編をどうぞ！

バクフーン
「あっそこ俺らのセリフ！（汗）」

第百二十四話　再び！　パルキアＶＳダークネス！

「いくぜ、波動弾！」

「ならこっちも！」

パルキアとダークネスは互いに両手を使い、青いエネルギー弾を作り出して相手に向けて放つ。

互いの技はぶつかり合い爆発が発生する。

パルキアとダークネスの間で爆煙が立ち込める。

「一気にいくぜ！　ドラゴンクロー！」

パルキアは爆煙の中を突っ切ってダークネスに接近、右手の鋭い爪を使って攻撃しようとする。

「リフレクター！」

ダークネスは前方にエネルギーの壁を作り出し、ドラゴンクローに備える。

「オラァァァ！」

パルキアはそんな物関係無いと言わんばかりにドラゴンクローを炸裂させる。パルキアのドラゴンクローはリフレクターを突き破り、ダークネスにヒットする。

ドラゴンクローを受けたダークネスは後方へ吹き飛ばされるがすぐに体勢を立て直す。

「力ずくでリフレクターを破ってくるなんて、相変わらず強引だねぇ」

リフレクターの効果でダメージを半減した為、ダークネスはまだ余裕といった表情をしている。

「てめぇも相変わらずの喋り方だな、聞いててイライラしてくる」

ダークネスを睨みつけるパルキア。

「お誉めの言葉として受け取っておくよ、パルキアちゃん♪」

「……本当にムカつく野郎だぜ、てめぇはよっ！」

パルキアは凄い勢いでダークネスに接近していく。

「またドラゴンクロー？　今度は完璧に防いであげるよ」

「やれるもんならやってみな！　開け、空間の扉！」

パルキアが念じると、突如二人の間に空間の歪みが発生する。

パルキアはその歪みの中に入り姿を消す。

「空間移動……何処から来るのかな？」

周囲を警戒するダークネス。

「もらったぁぁぁ！」

パルキアはダークネスの背後から飛び出し、ドラゴンクローを直

撃させる。ダークネスは吹き飛ばされる。

「完璧に防ぐんじゃなかったのか？　あ、ダークネス？」

挑発的な態度を取るパルキア。

「すげー……さすがパルキアだぜ」

ダークネス相手に優勢に戦うパルキアに驚くバクフーン。

「見蕩(みと)れてる場合かバクフーン。さあ立て、ここから脱出するぞ」

バクフーンを支えながらダークライは言う。

「脱出？　なんでだよ、俺達もパルキアと一緒に戦って……」

「その身体でか？　そんな状態ではまともな戦闘は出来ないだろ。却(かえ)ってパルキア様の足手纏いになる。ここはパルキア様に任せ、俺達は脱出して態勢を立て直すんだ」

「……解ったよ。けど、どうやって脱出するんだ？　メタモンはさっきの戦闘でもう動けない状態なんだぜ？」

首を傾げながらバクフーンは聞く。

「それなら大丈夫だ。パルキア様がウォーターシティに繋がっている空間の扉を開いてくれているからな。さあ、皆を集めて脱出だ」

ダークライはバクフーンを支えたまま他のポケモン達の所に向かい、脱出準備を始める。

「竜の息吹き！」

「波動弾！」

一方のパルキアとダークネスのバトルは激しさを増していた。
パルキアは口からエネルギー波を吐き出して攻撃、それに対抗してダークネスは波動弾を放つ。
互いの技はぶつかり合い爆発が発生する。

「開け、空間の扉！」

パルキアは再び空間移動でダークネスに接近しようとする。

「また空間移動か……」

周囲を警戒しつつ、いつでも反撃出来るように身構えるダークネス。

「くたばれダークネス！　ドラゴンクロー！」

ダークネスの真上から飛び出したパルキアはドラゴンクローで攻撃する。

「守る！」

ダークネスは自分自身をエネルギーの膜で包み込み、ドラゴンクローを防御する。

「波動弾！」

守るで防いだ後すかさず波動弾で反撃するダークネス。波動弾はパルキアの腹部に直撃、パルキアを上空へと吹き飛ばす。

「ぐっ！？　野郎、竜の息吹き！」

「サイコキネシス！」

パルキアが反撃で放った竜の息吹きをダークネスはサイコキネシスを使ってコントロール、パルキアに向けて跳ね返す。

「ちっ、波動弾！」

跳ね返ってきた竜の息吹きに向けてパルキアは波動弾を放ち相殺させる。

（野郎……ギラティナに取り憑いていた時よりも強くなってやがる。いや、新しく取り憑いたあのポケモンが強いのか。どっちにしろ、俺にとっては不利だなこりゃ……）

以前戦闘した時よりも強くなっているダークネスに焦りを感じているパルキア。

「どうしたんだいパルキアちゃん？　もうバテたのかな？」

「冗談じゃねぇよくそ野郎が、勝負はこれからだ！」

再び戦闘体勢に入るパルキア。

「そうこないと面白くないよ……ん？」

その時、ダークネスはバクフーン達が脱出の準備をしている所を目撃する。

（ここから脱出するつもりかな彼ら？　そうはいかないな。あのバクフーンだけは始末しておかないと、後々僕にとって脅威になるからね）

「余所見してんじゃねぇよ！　ドラゴンクロー！」

ダークネスに一気に接近したパルキアはドラゴンクローで攻撃する。

しかしダークネスはこれを紙一重で回避する。

「悪いけどパルキアちゃんの相手は後回しだよ。先にあっちから始末する！」

ダークネスはパルキアから離れ、バクフーン達の所へと向かっていく。

「野郎！？　そうはさせるかよ！」

ダークネスを慌てて追いかけるパルキア。

しかし、ダークネスの方がパルキアよりも素早く追いつけない。

「ちっ！　気をつけろお前ら！」

パルキアの叫び声を聞き、バクフーン達は振り向く。すぐそこまでダークネスが迫っていた。

「ダーク・インパクト！」

ダークネスは両手を使い、バクフーン達に向けて凄まじい衝撃波を放つ。

「我が闇の力　あらゆる攻撃を跳ね返す壁となれ　ダーク・フォース！」

ダークライが右手を前に翳（かざ）すと、バクフーン達を守るかのように黒いエネルギーで出来た壁が出現する。

そしてダークネスが放ったダーク・インパクトがその壁に直撃するとそれは跳ね返り、逆にダークネスがダーク・インパクトを受ける。

「がはっ！？」

自らの技を受けたダークネスは後方へ大きく吹き飛ばされる。

「闇の力を使うのは貴様だけではない。俺も使う事が出来る」

「やるじゃねぇかダークライ、心配して損したぜ」

少し安心したのか、ほっとした表情を浮かべるパルキア。

「俺はあなたやディアルガ様に鍛えられたんですよ？　これ位当然です」

「へっ、言うじゃねぇか」

「……やってくれたねぇ、僕は怒ったよ」

吹き飛ばされたダークネスはゆっくりと立ち上がる。身体からは禍禍(まがまが)しい黒いオーラが出現している。

「あの野郎、キレたみたいだな……お前ら、早く空間の扉に入ってここから脱出しな」

「パルキアはどうすんだよ？」

「お前らが脱出出来るまで時間稼ぎしてやるよ。心配すんなバクフーン、俺は神と呼ばれるパルキアだぜ？　簡単に負けやしねぇ。さあ、早く行きな！」

そう言ってパルキアはダークネスに向かって突っ込んでいく。

「パルキア……」

「パルキア様なら大丈夫だバクフーン。さあ、皆早く中に入るんだ」

ダークライの誘導で、傷ついたヒトカゲ達やブラキオ達はパルキアが開けた空間の扉に入っていく。

「邪魔だよパルキア！　そこを退いてよ！」

「退けと言われて退く訳ねぇだろうが！　竜の息吹き！」

ダークネスをバクフーン達に近づけさせないように攻撃を続けるパルキア。

（バクフーン達は？）

攻撃を続けながらパルキアはチラッとバクフーン達の方を見る。
ほとんどのポケモンは脱出していて、残っているのはバクフーンとダークライだけになっていた。

（良し、後少しだな……）

「隙ありだよ！」

パルキアがバクフーン達に気を取られていた本の僅かな隙を突き、ダークネスは一気にパルキアに接近して胸元を右手で殴る。刹那（せつな）、パルキアは身体の力が抜けるような脱力感に襲われる。

「な、なんだ……」

「君の空間を操る力……僕がもらうよ！」

ダークネスがそう言った時、パルキアの身体に異変が起きる。
ダークネスに殴られた胸元部分から徐々に石へと変化し始めたのだ。
パキッパキッと乾いた音が辺りに響く。
石化はどんどんパルキアの身体に広がっていく。

「くっ……こうやって、ディアルガからも力を……」

「そういう事。君の力を全部奪ってから、彼らを始末してあげるよ」

怪しく笑みを浮かべながら言うダークネス。

「パルキア！？」

パルキアの異変に気づいたバクフーンは思わず声を上げる。

「クソッタレが……てめぇの、思い通りにさせてたまるかよっ！」

パルキアは最後の力を振り絞る。刹那、まだ石化していない腕にあるパールのような宝石部分が光り輝き始める。

すると、パルキアとダークネスを中心に空間が歪み始めた。

「何をするつもり？」

「ふっ……今から、俺とお前を別空間に飛ばすのさ……」

パルキアは別空間にダークネスと共に移動して、少しでもバクフーン達からダークネスを遠ざけようとしているのだ。

「さあ……てめぇを別空間に招待してやるぜ！」

そうパルキアが言った刹那、宝石部分の光がより一層強くなる。

そして歪みは大きくなり、パルキアとダークネスは別空間へと飛んでいった。

「パルキアーー！？」

「落ち着けバクフーン！　パルキア様はまだ死んじゃいない。お前は早く脱出しろ！」

「パルキアが危ないのに脱出なんか出来るか！」

ダークライの言う事を聞こうとしないバクフーン。

「……仕方ない！」

ダークライはバクフーンを空間の扉の中へと突き飛ばした。

「許せよバクフーン……その代わり、俺がパルキア様を助けだす！」

バクフーンを突き飛ばした後、ダークライはパルキアとダークネスが消えていった空間の歪みの中へと突入していった。

第百二十四話　再び！　パルキアＶＳダークネス！（後書き）

バクフーン
「……パルキア負けた！？」

リザードン
「つう事は、ダークネスはディアルガの力にパルキアの力も手に入れる……またチートになるなおい（汗）」

ラグラージ
「どうなっちゃうの～（汗）」

まあこの先どうなるかは次回解るよ。ちなみに次回はダークライのパルキア救出作戦だから。
うちの元祖チートがどこまでやれるか……

バクフーン
「ダークライ、絶対負けんな！」

第百二十五話　パルキア達を救い出せ！（前書き）

バクフーン
「最近作者絶好調じゃん！　更新がいつもより早いし！」

リザードン
「だがそれも長続きしないだろうなぁ。あの作者だし（汗）」

ラグラージ
「それより、今回はダークライがパルキア達を助けに行くんだよね？」

リザードン
「その通り。ダークライはパルキア達を見事助けだす事は出来るのか……」

バクフーン
「気になる～！」

ラグラージ
「じゃあ、第百二十五話を……」

バクフーン&リザードン『どうぞ！』

ラグラージ
「あっ、そこ僕も言わせてよ！？」

第百二十五話　パルキア達を救い出せ！

「全く……やってくれるよパルキアちゃん」

ディアボロス島からパルキアの力で別空間に飛ばされたダークネス。

そこは街や草や木など何も無い空間だった。

「だけど、空間を操る力を手に入れた僕には全然問題無いんだけどね……ねぇ、パルキアちゃん？」

笑みを浮かべながらダークネスが見つめる先には、力を奪われて石化してしまったパルキアがいた。

（くそ……身体が、ピクリとも動きやしねぇ……）

石化されたパルキアだが、意識は残っているようだ。

「石になった感想はどうだいパルキアちゃん？」

笑みを浮かべながらダークネスはパルキアの顔を撫でる。

（野郎……身体が動けば、ぶん殴ってやんのに！）

顔を触られて、怒りを覚えるパルキア。

「ふふふ、さて君をどうしてやろうかなぁ？　今ここで粉々に砕いてあげるのも良いねぇ」

腕組みしながらダークネスはパルキアをどうするかを考える。

「……いや、もっと面白い事を思いついたよ。パルキアちゃん、一緒に来てもらうよ。開け、空間の扉！」

ダークネスは何も無い空間に向けて右手を翳す。すると、空間が歪み始めてまた別の空間へと続く穴が開く。

そしてダークネスはサイコキネシスを使って石化したパルキアをコントロール、自分が開いた空間の扉の中へと誘導する。それに続いてダークネスも中へ。

（なんだ、この空間は？）

ダークネス達がやって来た空間……そこはかつて、ギラティナに取り憑いていたダークネスとディアルガが戦った空間だった。

「えっと確かこの辺に……あっ、いたいた」

ダークネスが見つめる先には、石化しているディアルガとホウオウの姿があった。

「やあディアルガちゃん、久しぶりだねぇ。ほら見てよ、君のお友達を連れてきたんだよ？」

そう言ってダークネスはディアルガの前にパルキアを連れてくる。

（パルキア！？　まさか、お前まで……）

自分と同じように石にされたパルキアを見てディアルガは驚愕する。

「さてと……そこでしっかりと見ててよディアルガちゃん。お友達のパルキアちゃんが砕かれる瞬間をね♪」

そう言ってダークネスは巨大な黒いエネルギー弾を作り出す。

（や、止めろダークネス！？）

ディアルガはパルキアを助けたいと思うが、石化した身体はピクリとも動かず、ただ見つめる事しか出来ない。

「今君の心に怒りの感情を感じるよ。どうだいディアルガちゃん？パルキアちゃんを助けたくても、身体が動かないそのもどかしさ……ふふふ、もう最高だね♪」

無邪気に笑いながらこの状況を楽しんでいるダークネス、まるで悪魔のようである。

「さあ、お別れの時間だよ……バイバイ、パルキアちゃん♪」

ダークネスは作り出した巨大なエネルギー弾をパルキアに向けて放とうとする。

「させん、悪の波動！」

その時、何処からか放たれた黒く螺旋状に回転したエネルギー波がダークネスに直撃する。

「ぐっ！？」

悪の波動を受けたダークネスは大きく後方へ吹き飛ばされる。その衝撃でパルキアをコントロールしていたサイコキネシスが解かれ、パルキアは落下してしまう。

「サイコキネシス！」

悪の波動を放ったポケモンがサイコキネシスを使って落下したパルキアをコントロール、ゆっくりとディアルガの隣に着地させる。

「誰だ僕の邪魔をするのは！？」

邪魔されたダークネスは怒りで表情を歪ませながら怒鳴る。

「ここまで案内してくれた事、礼を言うぞダークネス」

ディアルガとパルキア、そしてホウオウを守るように立ち塞がるポケモン……それはダークライだった。

（ったく遅ぇよダークライ、あと少し遅れてたら死んでたぞ俺）

心の中で文句を言うパルキア。

「君だったか……ずっと跡をつけてたのかい？」

「そういう事だ。パルキア様達は連れていくぞ」

「ふふふ……そうはいかないなぁ。君はここで消えてもらうよ！」

戦闘体勢に入るダークネス。刹那（せつな）、ダークネスの身体から禍禍（まがまが）しい黒いオーラが出現する。

「それにここは僕がギラティナちゃんの力を使って作った特別な空間……僕以外のポケモンは特別な力を封じられる。ここでは僕は絶対的な神なのさ！」

「御託（ごたく）は良い、さっさと来い」

ダークネスを挑発するダークライ。

「気に入らないなぁ……消えろ、亜空切断！」

怒ったダークネスはパルキアから奪った力を使い、右手か三日月型のエネルギー波を放つ。

「我に宿りし空間の力　立ち塞がる敵を切り裂く刃となれ　亜空切断！」

なんとダークライも同じ技、亜空切断を放つ。

二つの亜空切断はぶつかり合い凄まじい爆発が発生した。

「な、何！？」

ダークライがパルキアの技を使った事に驚愕するダークネス。

「何故君がパルキアの力を！？」

「……ディアボロス島に向かう前にパルキア様から力を授かった、それだけだ」

腕組みをして答えるダークライ。何故ダークライがパルキアの技

を使えたのか、それはバクフーン達と別行動をしていた時まで遡る。

バクフーン達と別れたダークライとパルキアは別空間にやってきていた。

「パルキア様、何故バクフーン達と別れたんです？」

首を傾げながらダークライはパルキアに聞く。

「ちょっと考えがあってな。お前、確かディアルガから力の一部をもらってたよな？」

「ええ、確かに授かりました。ディアルガ様にもしもの事が起きた時、俺がディアルガ様の役目を代わりに果たす為に」

実はディアルガは自分にもしもの事が起きた時を想定して、ダークライに代わりをしてもらう為に時を操る力の一部を授けていた。

「なら話が早い。今からお前に俺の力の一部をやるぞ」

唐突にパルキアはそんな事を言い出す。

「ちょ、ちょっと待って下さいパルキア様!?　一体どういう事ですか?」

いきなり力を授けると言われて戸惑うダークライ。

「ディアルガを助けだす為に、お前を強くする必要があんだよ」

「ディアルガ様を……助けだす?」

「そうだ。俺は奴と戦闘して、態(わざ)と野郎に隙をみせる。そうしたら野郎は俺の力を奪おうとする筈だ」

「まさか……自分を囮(おとり)にするつもりですか!?」

ダークライの問いにパルキアは頷く。

「力を奪われる前に、俺は野郎と一緒に別空間に飛ぶ。そしたら野郎の事だ、俺をディアルガがいる空間に連れて行く筈。その空間に連れてこられた所でお前がディアルガと俺を助けだすって寸法よ」

「いやしかし、その作戦は危険が大きすぎますよ!」

「んなもん気合いでなんとかなる!　つべこべ言わねぇでさっさと俺の力を受け取りやがれ!」

パルキアは強引にダークライに力の一部を授ける。それから二人はバクフーン達とダークネス達が戦うディアボロス島に向かい、現在に至る。

「まさか……僕に力を奪われる事も作戦だったて言うの！？」

ダークネスの問いにダークライは頷く。

「だけど、例え君がパルキアやディアルガの力を持っていても、この空間では封じられる筈！　なのに……」

「種明かしをしてやる。俺はディアルガ様の時を操る力、パルキア様の空間を操る力に俺が持っている闇を操る力を混ぜた特殊なバリアーを張っているんだ。どんな場所でも本来の力を発揮出来るようにな」

腕組みしながらダークライは答える。

「さあ、お喋りはここまでだ。ディアルガ様とパルキア様、そしてもう一人……ホウオウ様は連れて帰るぞ。開け、空間の扉！」

ダークライはバクフーン達がいる世界へと繋がる空間の扉を開く。

「させるか、ダーク・インパクト！」

ダークネスは両手を使ってダークライに向けて凄まじい衝撃波を放つ。

「我が闇の力　あらゆる攻撃を跳ね返す壁となれ　ダーク・フォー

ス！」

ダークライが右手を前に翳すと目の前にエネルギーで出来た巨大な黒い壁が出現する。

ダーク・インパクトはその壁に跳ね返され、ダークネスは自分が放った技を受ける。

「がはっ！？」

ダークネスは再び大きく後方へ吹き飛ばされる。

「今だ、サイコキネシス！」

ダークライはサイコキネシスでディアルガ、パルキア、ホウオウをコントロールして空間の扉の中へと連れていき、最後に自分も中に入り脱出する。ダークライはパルキア達の救助に成功した。

第百二十五話　パルキア達を救い出せ！（後書き）

バクフーン
「やるじゃんダークライ！」

ラグラージ
「それもそうだけど、パルキアの作戦だったんだねあれ？」

リザードン
「らしいけど……パルキアの兄貴も無茶するよな～（汗）」

バクフーン
「まあパルキアらしいよな」

ラグラージ
「それで次回は？」

リザードン
「次回はダークライがパルキア達を救出しようとしてた時、俺達はどうしていたのかって話だな」

バクフーン
「なあ、そういえばネーミングセンス無いあいつらは？」

リザードン
「作者が言うには、ミュウツーがダークネスに取り憑かれた時点でとんずらしたらしいぞ」

ラグラージ

「逃げ足速いね（汗）」

リザードン
「あっ、そうだ……次回はいつも目立ててない奴が頑張っちゃうって作者が言ってたぜ？」

バクフーン
「目立てない奴？　となると……」

ラグラージ
「そこで僕を見ない（汗）僕が活躍する訳無いじゃん」

バクフーン
「ですよね～（笑）」

ラグラージ
「……そんなはっきり言われると逆に凹むよ（汗）」

第百二十六話　負けられない戦い（前書き）

バクフーン
「昨日に続いて連続更新だな」

リザードン
「そして今回はあまり目立ってない奴がメインになるって話だが…
…」

ラグラージ
「どしたの？」

リザードン
「今回渡された資料の中にそのポケモンが誰なのか書かれてないんだよなぁ？」

バクフーン
「ふっふっふ～、ようやくＭＣらしい事が出来るぜ！」

ラグラージ
「あっ、なんか資料持ってる」

リザードン
「お前、何処から盗ってきた？」

バクフーン
「人聞きの悪い事言うなよ！　ちゃんと作者に渡されたんだからな」

ラグラージ

「それでバクフーン、誰なのメイン？」

バクフーン
「それは……こいつらだ！」

リザードン&ラグラージ
『……えっ！？』

バクフーン
「お前達なんだってよ」

ラグラージ
「ひ、久しぶりに本編で活躍出来るーっ！」

リザードン
「……あのさ、最近目立ってないキャラでラグラージなのは解るけどよ、なんで俺まで？」

ラグラージ
「……さり気なく酷い事言ったよね今（汗）」

バクフーン
「俺に聞くなよ、作者が決めたんだからよ。んじゃそろそろ、第百二十六話をどうぞ！」

第百二十六話　負けられない戦い

ダークライがパルキア達をダークネスから救い出そうとしていた時、バクフーン達はウォーターシティにあるラグラージの家で傷の手当てをしていた。

「痛っ！？　も、もうちょい優しくしてくれよ～……」

ラグラージのメイドであるサーナイトに包帯を巻かれているサイクス。

だが、少し巻く力が強かったようでサイクスは痛がる。

「すみませんサイクスさん、ですけど少し我慢して下さいね。すぐ終わりますから」

優しく微笑みながら、サーナイトはサイクスに包帯を巻いていく。

「サーナイト、何か僕も手伝おうか？」

そこにラグラージがやってくる。ラグラージは他の皆と比べると大した怪我はしていなかった為、何か手伝おうと考えたようだ。

「じゃあ、傷薬を買ってきてもらえますか？　そろそろ無くなりそうで……」

「解ったよ」

サーナイトに頼まれたラグラージは薬を買う為に外へ出て行こうとした。

「待てよラグラージ、俺も手伝うぜ」

リザードンがラグラージに駆け寄り、自分も手伝うと言う。

「いいよ、ただ買い物するだけだし……」

「そう言うなよ。俺だって何か手伝いたいんだからさ」

「うーん……解った、じゃあ一緒に行こ」

ラグラージはリザードンと一緒に薬を買う為に外へ出て行った。

「……父さん」

サーナイトに傷の手当てを受けたバクフーンは、まだ意識が戻らないグレンの事を心配そうに見つめている。

「まだ目が覚めないのかい？」

ブラキオがバクフーンに歩み寄ってきた。

「嗚呼（ああ）……ブラキオにヒーリングサークル使ってもらって、サーナイトにも手当てしてもらったのに……」

「バクフーン……大丈夫、きっとその内グレンさんは目を覚ますよ」

バクフーンを慰（なぐさ）めるブラキオ。

「ダークライ、大丈夫かなぁ……」

窓から外を眺めながらヒトカゲがそんな事を呟く。

「あの人ならきっと大丈夫よヒトカゲ。皆あの人は強いからって言ってるもの」

歩み寄ってきたチコリータがそうヒトカゲに言う。

「そう……だよね」

「きっとそうよ。あっ、ヒトカゲちょっと手伝ってくれない？　ドダイトスやバンギラスにも包帯巻いてあげないといけないから」

「うん、解った」

ヒトカゲはチコリータと一緒にドダイトスのクライドとバンギラスの所へと向かう。

その頃薬を買いに行っていたラグラージとリザードンは……

「これだけあれば、皆の傷を手当てする事が出来るよね？」

「そうだな」

二人共両手いっぱいに薬を持って家に戻ろうとしていた。

「しかし、改めてお前が金持ちだって事が解ったよ。支払いがブラックカードなんだからな」

どうやらラグラージがブラックカードを使って支払いをしたらしい。

「正確に言うと、父さんが金持ちなんだけどね。このカードだって、父さんのだし」

「へ～、お前の父さんの……って、お前まさか勝手にそれ使ったって事か!?」

「まあそういう事になるけど、別に問題無いよ。どうせ父さんお金には困ってないし」

淡々と答えるラグラージ。

「ほら、カードの話はもういいから、早く薬を持って帰ろう」

「お、おう」

薬を家に持ち帰る為に、二人は歩くスピードを上げる。

「ちょっと待った。お前達をこのまま行かせる訳にはいかないな」

ラグラージとリザードンの前に二人のポケモンが立ち塞がった。

その二人とは、ダークネスによって洗脳されてしまったエンテイとライコウである。

「お前らはいつかの！？」

「あの時は良くも邪魔してくれたな……任務を失敗したせいで、我々はダークネス様の下へ戻れなくなってしまったんだからな」

不満そうな表情をするライコウ。

「そんな事俺達が知るかよ。お前ら、一体なんの用だ？」

二人を睨みつけながらリザードンは聞く。

「ダークネス様に許しをもらう為、敵であるお前達を我々が始末しようと思ってな……」

怪しい笑みを浮かべながらエンテイは答える。

「だがさすがに全員を始末するには人数が多すぎる……そこで我々は、お前達がバラバラになるのをずっと待っていた。確実に始末する為にな」

戦闘体勢に入りながらライコウは言う。

（こいつら……ここで俺達がこいつらを倒さないとバクフーン達が狙われる……やるしかないな）

手に持っていた薬が入った袋を地面に置き、戦闘体勢に入るリザードン。そしてラグラージも戦闘体勢に入る。

「お前達はここで終わりだ、１０万ボルト！」

ライコウは身体から強力な電撃を放出し、それをリザードンに向けて放つ。

「させない！」

そこへラグラージがリザードンの前へ飛び出し、１０万ボルトを代わりに受ける。地面タイプを持っているラグラージには電気タイプの技は効果が無い、ラグラージは平気な表情をしている。

「サンキューラグラージ、火炎放射！」

リザードンは反撃で口から炎を吐き出し、ライコウに向けて放つ。

「ならばこちらも火炎放射だ！」

リザードンの火炎放射に対してエンテイも同じ技で対抗、二つの技はぶつかり合う。両者の炎は互角、力比べが始まる。

「スパーク！」

火炎放射を使っていて動けないリザードンに向かって、ライコウは身体からバチバチと電気を放出しながら突っ込んでいく。

「アームハンマー！」

そこにラグラージが立ち塞がり、右手をハンマーのように振り下ろしてライコウを攻撃しようとする。

「ちっ！」

ライコウはバックステップしてアームハンマーを回避する。

「君の相手はこの僕だよ！　ハイドロポンプ！」

ラグラージは口から大量の水を勢い良く吐き出し、ライコウに向けて放つ。ライコウは再びバックステップしてこれを回避する。

（ライコウは電気タイプ、絶対リザードンには近づけさせない！）

リザードンにとってライコウが使う電気技を受ける事は致命的、それだけはさせないと堅く誓うラグラージ。

「くっ……」

一方リザードンはまだ力比べを続けていたが、徐々にリザードンの火炎放射はエンテイの火炎放射に押され始めてきた。

（力が弱くなってきたか、一気に叩く！）

エンテイは火力を上げて一気にリザードンの火炎放射を押し返していく。

（マズい！？）

リザードンは火炎放射を中断し、エンテイの火炎放射を回避する。

「噛みつく！」

エンテイは素早い身の熟しでリザードンに接近、その鋭い牙で噛みつこうとする。

「くそっ！」

リザードンは翼を羽ばたかせて空に逃げようとする。

「痛っ！？」

だが翼を広げた刹那、リザードンの身体に激痛が走る。実はダークネスから受けたダーク・インパクトで、リザードンは翼を痛めていたのだ。サーナイトから手当ては受けていたが、完全に回復してはいなかったのである。

「もらったぁ！」

エンテイはリザードンの首に思いっきり噛みつこうとする。

「くっ！」

リザードンは咄嗟に出した右腕でエンテイの噛みつくを受ける。なんとか噛みつくを首に受けずに済んだが、エンテイの噛みつく攻撃を受けた右腕には激痛が走る。

「ぐっ！？」

「上手く首を守ったな。だが、お前が不利なのには変わりはない。ふん！」

エンテイは右腕に噛みついたままリザードンを振り回す。そしてエンテイはリザードンを思いっきり投げ飛ばす。
投げ飛ばされたリザードンは身体を強く地面に打ちつけられ、仰向けに倒れる。

「噛みつく！」

そこにエンテイは素早く近づき、リザードンの首に思いっきり噛みつく。

「がっ！？」

リザードンはなんとかエンテイを突き飛ばそうとするが、しっかりと噛みついてエンテイは離れない。

「まずは一人だ」

エンテイは噛む力を強める。首を強く噛まれた事でリザードンは呼吸が出来なくなる。

（息が……く、苦しい……）

少しずつリザードンは意識が遠のいていく。

「ハイドロポンプ！」

リザードンを助ける為、ラグラージがエンテイに向けてハイドロポンプを放つ。

「ぬっ！」

エンテイは噛みつくのを止め、ラグラージが放ったハイドロポンプを回避する。

「大丈夫リザードン!?」

ラグラージは慌ててリザードンに駆け寄る。

「ゲホッゲホッ!?　はあ、はあ……た、助かったぜラグラージ……」

かなり苦しかったのか噎せるリザードン。

「……リザードンはここで休んでて。あいつらは、僕が倒すから」

「ま、待てラグラージ、お前一人じゃ……」

「そんな状態じゃもう戦えないでしょ？　……いつも僕は君やバクフーンに助けられたり励まされてばかり……今度は、僕が助ける番だよ」

そう言って、ラグラージはエンテイとライコウの所へゆっくりと向かっていく。

「お前一人で我ら二人と戦うつもりか？」

「そうだよ。僕一人で充分だからね、ハイドロポンプ！」

ライコウ達に向けてラグラージはハイドロポンプを放つ。

「甘く見られたものだな……ダークファイア！」

エンテイは普通の火炎放射とは違う黒い炎を口から吐き出し、ハイドロポンプにぶつける。

エンテイのダークファイアはハイドロポンプを蒸発させながらラグラージに向かっていく。

（ハイドロポンプが通じない！？　くっ！）

ラグラージはハイドロポンプを中断し、ダークファイアを回避する。

「ダークサンダー！」

そこにライコウが普通の電撃と違う黒い電撃を身体から放出、ラグラージに向けて放つ。

「僕にそんな電気技は通用……」

そう言いかけた時、ダークサンダーはラグラージに直撃する。

「ぐあぁぁぁ！？」

ダークサンダーを受けた瞬間、ラグラージの全身に激痛が走る。

「くっ……な、なんで電気技が……」

なんとか攻撃を耐えたラグラージ。だがダメージが大きかったらしく、もうフラフラの状態だ。

「ダーク技に相性など関係無い。次で終わりだ」

エンテイとライコウはそれぞれ自分が使えるダーク技を放とうとしている。

「はあ、はあ……負けない、絶対に……僕は負けない！」

その時、ラグラージの身体から青く輝くオーラが出現する。特性の激流が発動したのだ。

「ダークファイア！」

「ダークサンダー！」

「ハイドロカノン！」

三人は同時に技を放つ。エンテイとライコウが放ったダーク技は混ざり合い電気を帯びた黒い炎に。それに激流によって強化されたラグラージのハイドロカノンはぶつかり合い、凄まじい爆発が発生する。

「はあ、はあ……こ、これで決まらなかったら僕の……」

ハイドロカノンは使えばしばらく反動で動けなくなる強力な技。これで決まってくれとラグラージは強く願う。

「……噛みつく！」

立ち込めていた爆煙の中からライコウが飛び出し、ラグラージに接近して首に思いっきり噛みついた。

「うっ！？」

「ラグラージ！？」

リザードンの叫びが辺りに響く。

「手子摺らせてくれたな……だがこれで終わりだ」

ライコウは噛む力を強める。鋭い牙がライコウの首に食い込む。

（い、息が……）

強く噛まれた事で呼吸が出来なくなるラグラージ。少しずつ意識が遠のいていく。

「止めろ……」

ラグラージを助けようとフラフラになりながらリザードンは立ち上がる。

「待っていろ、こいつを始末してからお前も始末してやる」

そう言ってライコウはまた更に噛む力を強める。

「がぁっ……」

「止めろぉぉぉ！！」

リザードンが大きな声を上げた刹那、尻尾の炎が大きく燃え上が

り始めた。そしてその炎はリザードンの身体を包み込む。

「な、なんだ!?」

リザードンの変化に驚いたライコウは思わず噛みついていたラグラージを離す。

「ゲホッゲホッ!?　はあ、はあ……あ、あれは……?」

嘘せながらラグラージはリザードンを見つめる。凄まじい炎に包まれたリザードンに更なる変化が。身体の傷がどんどん治っていくのである。

「くっ、死に損ないが!　ダークファイア!」

リザードンに向けてエンテイはダークファイアを放つ。

「火炎放射」

それに対してリザードンは火炎放射で対抗、先程よりも火力が強くなっているリザードンの火炎放射はダークファイアをあっという間に押し返してしまう。

「くっ!?」

エンテイはリザードンが放った火炎放射をギリギリで回避する。

「エンテイのダークファイアを……なんなんだ、あいつの炎は!?」

驚きを隠せないライコウ。

（あの炎……バクフーンのブラストモードに似てる……）

リザードンを包み込む炎を見てラグラージはそう心の中で呟く。

「……お前達は、俺が倒す」

そう言ってリザードンは翼を羽ばたかせ、空へ飛ぶ。凄まじい炎に包まれたリザードンの姿……それはまるで炎の竜である。

「燃え上がれ！」

リザードンの身体を包み込む炎から巨大な炎の塊が作り出され、それはエンテイとライコウに向けて放たれる。

その炎はスピードが速く、二人は回避する事も出来ずにその炎を受ける。強力な炎にその身を焼かれるエンテイとライコウ。刹那、エンテイとライコウの身体から禍禍(まがまが)しい黒いオーラが現れて二人の身体から離れていく。

かつてバクフーンの身体を借りて、洗脳されたセレビィを助ける為にホウオウが放った炎のように。しばらくして黒いオーラは消滅、二人はその場に倒れ込んだ。

「……うぅっ……」

力を使い果たしたのかリザードンを包み込んでいた炎は消え、力無くリザードンは落下していく。

「リザードン！」

地面に落下したリザードンの所へラグラージは痛みを堪(こら)えながら

歩み寄る。

「リザードン？」

ラグラージは声を掛けるがリザードンから返事は無い。どうやら気を失っているようだ。

「リザードンが出したあの炎、ブラストモードに凄く似てたけど……って今そんな事言ってる場合じゃない！　早く皆の所に連れていかないと」

ラグラージは気を失ったリザードンを背負い、皆に使う薬を手に持つ。

「さすがに彼らも一緒には運べないな……先にリザードンを運んでからじゃないと」

気を失っているエンテイとライコウはあとで運ぶ事にし、ラグラージは先にリザードンを運ぶ事にした。

第百二十六話　負けられない戦い（後書き）

リザードン
「……マジ？」

ラグラージ
「フラグ立ったよね？」

バクフーン
「お～、リザードンがそうなんか～！」

ラグラージ
「ってバクフーン、やっぱりそういう事は知らなかったんだね（汗）」

リザードン
「まあ、バクフーンだしな（汗）」

バクフーン
「なんだよ（怒）」

ラグラージ
「まあまあ（汗）でも本当に久しぶりだよ、僕が本編で目立ったの……なんか嬉しいよ～（泣）」

バクフーン
「泣くなよ（汗）」

リザードン

「余程嬉しかったんだな（汗）あっ、そうだ……次回はダークライ達と俺達が合流、そしてダークネス達も行動を起こすらしいぞ」

バクフーン
「お～、なんかまたストーリーが動いてきたじゃんか！」

ラグラージ
「一体これからどうなるんだろうね？」

リザードン
「それは作者だけが知る事だな」

第百二十七話　語られる真実（前書き）

バクフーン
「……ｚｚｚ……」

リザードン
「って起きろ！？（汗）」

バクフーン
「ほえ？　あれ、俺の特大ステーキは？」

ラグラージ
「ステーキ食ってる夢見てたんだ（汗）」

バクフーン
「ふぁ～……今何時よ？」

リザードン
「夜中の３時だ」

バクフーン
「普通寝てるだろ（汗）」

リザードン
「しょうがないだろ、作者がずっと執筆してたらこんな時間になっちまったんだから」

ラグラージ
「でも作者さん、とある先生と深夜４時過ぎまでメールしたり出来

る人だからまだ元気そうだったよ（汗）」

バクフーン
「マジか（汗）」

リザードン
「そういう話は置いといて、そろそろ始まるぞ」

バクフーン
「んじゃ、第百二十七話を……」

バクフーン&リザードン&ラグラージ
『どうぞ！』

ラグラージ
「やっと言えたよ（泣）」

バクフーン&リザードン
『いや泣くなよ（汗）』

第百二十七話　語られる真実

ダークライによってパルキア達を奪還されたダークネスは、パルキアの空間を操る力を使ってディアボロス島に戻っていた。

「ダークネス様、ご無事でしたか！」

部下であるアブソル達がダークネスに駆け寄る。

「この僕がやられる訳がないだろ。それよりアブソル、君達に仕事をあげるよ。僕に挑んできたあのポケモン達……全員を始末するんだ」

そう言うダークネスの身体から禍禍(まがまが)しい黒いオーラが現れ始める

……ダークライにパルキア達を奪還された事で頭に来ているようだ。

「か、かしこまりました……お前達、行くぞ！」

アブソル達はバクフーン達がいる所に向けて出発した。

「多分……いや、アブソル達じゃ絶対に返り討ちになるだろうね……そうなれば、数的にも僕が不利になる」

ダークネスはアブソル達が絶対負けると思っているようだ。

「……こういう時こそ、この力を使うか……エネルギーを集めるまで時間稼ぎ位はしてよね、アブソルちゃん♪」

不気味に笑いながら、ダークネスはエネルギーを集め始める。

一方のバクフーン達は……

『リザードンがブラストモードになっただって!?』

ラグラージの家にリザードン、そしてライコウとエンテイを運び終えたラグラージが皆にさっき何があったのかを説明、それを聞いたバクフーン達は皆驚いている。

「ラグラージ、それは本当なの？」

確認する為、ミュウはラグラージに聞く。

「本当だよ！　僕がやられそうになった時、いきなりリザードンがブラストモードになってエンテイ達をあっという間に倒しちゃって、あの黒いオーラも一緒に消滅させちゃったんだから！」

少し興奮気味にラグラージは答える。

（彼がブラストモードになっただけでなく、ダークネスの黒いオーラまで消滅させた……間違いない、彼がもう一人のポケモンだ）

ミュウはベッドで眠っているリザードンを見つめ、リザードンがバクフーンと同じホウオウの生まれ変わりである事を確信する。

「……うぅっ……」

その時、眠っていたリザードンが目を覚ます。

「あっ、気がついたかい？」

「……ミュウ？　あれ、俺今までラグラージと一緒に戦って……ってそうだラグラージは！？」

慌てた様子でリザードンは辺りを見回す。

「僕ならここだよ」

リザードンの所へ歩み寄るラグラージ。

「良かった～、無事だったかラグラージ」

ラグラージの無事を確認出来て、リザードンは安堵（あんど）する。

「リザードンのおかげで助かったよ。でもビックリしたよ？　リザードンがバクフーンみたいにブラストモードになっちゃうんだからさ」

「そういえば……ラグラージを助けたいって思ったら、急に力が湧いてきて……」

自分の両手を見つめながら、先程のバトルを思い出すリザードン。

「なんで、俺にあんな力が……？」

「知りたいかい？　何故君がバクフーンみたいにブラストモードになれたのか」

腕組みをしながらリザードンに聞くミュウ。

それを聞いたリザードン、いやその場にいたポケモン全員がミュウに注目する。

「知ってんのかミュウ？」

気になったバクフーンはミュウに聞く。

「うん。何故彼がブラストモードになれたのか、それは……」

ミュウがバクフーン達に説明しようとした時、突然外から何かがドスンと地面に落ちるような鈍い音が聞こえてきた。

「な、なんだ今の？」

音の原因を調べる為、バクフーン達は外へ向かう。

「あっ、あれは！」

外に出たバクフーン達が見た光景、それはダークネスによって石化されたパルキア、ディアルガ、ホウオウとその三人を救い出したダークライだった。

「ダークライ！」

そこにバクフーン達が駆け寄ってくる。

「はあ、はあ……どうにか、パルキア様達を助け出せたぞ……」

息を切らせながら言うダークライ。

「お、お前大丈夫か？」

ダークライを心配するバクフーン。

「はあ、はあ、エネルギーを使いすぎたみたいだ……」

パルキアの空間を操る力、ディアルガの時を操る力、そしてダークライ自身が持つ力……それら一つ一つが膨大なエネルギーを必要とする。

そんなエネルギーをダークライは一遍（いっぺん）に使用し、さらにパルキア達を運ぶのにサイコキネシスまで使用したのだ。その疲労は計り知れない。

「くっ……」

とても立っていられなくなったダークライはその場に倒れそうになる。
しかし、倒れそうになったダークライをバクフーンは支えてあげた。

「お、お前……」

「……仲間……だからな。これ位当然だろ」

今まで敵だったダークライを何処かまだ信じきれていなかったバクフーンだったが、今ようやくダークライを仲間だと認めたようだ。

「仲間、か……嬉しいものだな、そう呼ばれるのも」

仲間と認められた事が嬉しくて、笑みを浮かべるダークライ。

「……ところでよ、どうやってパルキア達を元に戻すんだ？」

石化しているパルキア達を見ながらバクフーンは聞く。

「また僕の力を使う？」

ジラーチがバクフーンに近寄り、自分の力を使うかと聞く。

「あっ、そういえばジラーチの力があったか！　でも、これで二回目になるだろ？　良いのか？」

「今はそんな事言ってる場合じゃないでしょ？　早く三人を元に戻してあげなくちゃ」

ジラーチはもう願いを叶える力を使う事を決めているようだ。

「……じゃあ、頼むよジラーチ」

「うん。それじゃ今から第三の眼を開くから、願ってねバクフーン」

ジラーチの腹部にある第三の眼がゆっくりと開き始める。そして眼が完全に開いた時、バクフーンはパルキア達が元に戻るようにと願う。

すると、ジラーチの頭に三つある短冊の一つに文字が浮かび上がる。

「……バクフーンの願い、受け取ったよ」

そう言ってジラーチは祈るように両手を合わせる……するとジラーチの身体が光り輝き始め、その光は第三の眼に集まる。集まった光はパルキア達に向かって放たれる……優しい光に包まれたパルキア達の身体に変化が起きる。

灰色に染まり、冷たい石に変えられていた身体が徐々に本来の色と温かさを取り戻していった。

そしてしばらくして、パルキア達は元の身体に戻った。

「ふぅ～、助かったぜ……身体動かせなかったせいで肩凝っちまった」

肩を回して肩凝りを解(ほぐ)すパルキア。

「もう二度と石にはなりたくないな……助かった、礼を言う」

頭を下げ、ジラーチにお礼を言うディアルガ。

「どう……いたしまして……」

願いを叶える力を使って体力を消耗したジラーチは浮かんでいられずに地面に落下していく。

「おっと！」

そこにグラエナが駆け寄り、背中にジラーチを乗せる。

「ごめんねグラエナ……また、眠くなってきちゃった……」

「気にしなくて良いっすよ。それより、ジラーチはゆっくり休むっすよ」

優しく微笑みながら言うグラエナ、そしてそんなグラエナを見て安心したジラーチはすやすやと眠り始めた。

「……ホウオウ様……」

石化は解かれたホウオウだが、その魂はバクフーンとリザードンの中にある為、本体は眠ったようにそこに佇(たたず)むだけだった。

そんなホウオウを、スイクンは心配そうにして見つめている。

「ホウオウの野郎、なんで起きねぇんだ？」

何があったのかを知らないパルキアは首を傾げる。

「ここにいるホウオウは魂の抜け殻……離れた魂をもう一度本体に戻さないと、ホウオウは目覚めないよ」

全てを知るミュウがパルキアに言う。

「抜け殻？　それはどういう事だ？」

「十九年前、ホウオウ様はダークネスにその身を石に変えられる前に自らの魂を二つに分けたのです」

スイクンがパルキアに説明する。

「魂を……二つに分けた？」

「はい。唯一ダークネスを倒す事が出来る力を持つホウオウ様が、完全にやられる事を避ける為に……そして二つになった魂は、新たに命を宿したポケモンのタマゴとなりました」

「さすが生命を司る神だな……それでスイクン、そのタマゴは今どうなっている？」

今度はディアルガがスイクンに聞く。

「その質問には僕が答えるよ。タマゴからは無事にポケモンが生まれて、ちゃんと育ったよ。しかも君達はすでにそのポケモンに会っている」

ホウオウの生まれ変わりに会っている……それを聞いたディアルガとパルキアは驚きの表情を浮かべる。

「会ってるだと！？　誰だよそいつは！」

「まず一人は……彼だよ」

ミュウはリザードンを指差す。

「えっ、俺？」

「そしてもう一人……」

続けてミュウはバクフーンの事を指差す。

「……って俺！？」

指差されて驚くバクフーン。そして同じく指差されたリザードンも……いや、その場にいたポケモン達全員が驚いている。

「さっきリザードンが言っていた質問の答え……それは君がホウオウの生まれ変わりだからだよ。バクフーンもホウオウの生まれ変わりだから、ブラストモードになれたり重傷を負ってもすぐに傷が治ったりしたんだ」

「俺とリザードンが……で、でも俺には俺を産んでくれた母さんや父さんがいるんだぜ？　俺とリザードンがホウオウの生まれ変わりだなんて何かの間違いじゃ……」

「間違いではありません、バクフーン殿」

スイクンがバクフーンに歩み寄ってくる。

「私は二つのタマゴを信頼出来る者に預けました……その者はミュウ殿と同じ探検家で、私達とも交流があった人物。バクフーン殿、

あなたの父親です」

「……嘘だろ……？」

信じられないといった表情を浮かべるバクフーン。

「……スイクンが言ってる事は本当だ……」

その時、家の方から誰かがバクフーンに話しかけた。バクフーン達が振り向くと、そこにはバクフーンの父親であるグレンが立っていた。

「父さん！」

バクフーンはグレンの所へ駆け寄る。

「……あの時、フレイムシティにスイクンがやって来てタマゴを預かってくれと言ってきた。スイクンの様子からして、やばい事が起きている事は容易に想像出来た……友達が困っているのを放っておけなかった俺はスイクンからタマゴを預かって、一つはメガニウムとジュカインに預けて別々に育てる事にしたんだ。それからしばらくして、お前達が生まれた」

「……そう、なんだ……」

グレンの言葉を聞き、バクフーンは俯く。

「俺、父さんと母さんの……本当の子供じゃなかったんだね……」

「……バカ言ってんじゃねぇよ」

グレンは右手をそっとバクフーンの頭に当てる。

「血は繋がってなくても、お前は俺と母さんにとって大切な子供だ。家族なんだよ」

バクフーンの頭を撫でながら、優しく微笑むグレン。

「父さん……」

バクフーンは泣きそうになりながら、グレンに抱きつく。グレンも優しくバクフーンを抱きしめる。

「……こんな立派なバクフーンになりやがって……ごめんな、お前と母さんと一緒にいてやれなくて」

抱きしめながら、グレンはバクフーンに謝る。

「……グレン、そろそろ良いかい？」

歩み寄ってきたミュウがグレンに聞く。

「嗚呼（ああ）、悪いミュウ……バクフーン、ホウオウを助けてこい」

「……うん！」

バクフーンはホウオウの所へと駆け寄る。

「リザードンも良いかい？」

「お、おう」

ミュウに言われ、リザードンもホウオウの所へ。

「二人共、ホウオウ様の身体に触れて下さい。そうすれば、あなた方の中にいるホウオウ様の魂は本体に戻る事が出来ます」

「解った」

バクフーンはホウオウの身体に右手を当てる。

「な、なあ、俺達の中にあるホウオウの魂が抜けたら……俺達どうなるんだ？」

リザードンは気になっていた事をスイクンに聞く。

「安心して下さい。あなた方はホウオウ様の魂とは違う魂を持っている……例えホウオウ様の魂が抜けても、死んだりとかはしませんよ」

スイクンは笑みを浮かべながらリザードンの問いに答える。それを聞いたリザードンは少しホッとした表情をする。

「ほらリザードン、お前もホウオウに触れよ」

「わ、解ってるさ」

リザードンはゆっくりとホウオウの身体に触れる……刹那（せつな）、バクフーンとリザードンの身体が光り輝き始める。

その光はバクフーン達の身体から少しずつホウオウの身体へと移

っていく。しばらくして、光は完全にホウオウへと移っていった。
そして、その光はホウオウの中に溶け込むように消えていく。

第百二十七話　語られる真実（後書き）

バクフーン
「……父さーん！（泣）」

リザードン
「っていきなりだなおい（汗）」

ラグラージ
「そういえばバクフーンは親子系の感動物に弱いんだっけ（汗）」

バクフーン
「うぅ～、久しぶりに父さんと話せた……嬉しいぞ～！（泣）」

リザードン
「落ち着けって（汗）」

ラグラージ
「そ、そういえば、君達の中にあるホウオウの魂が本体に戻ったよね？」

リザードン
「みたいだな。資料によると次回はついにホウオウが目覚めるらしいぞ」

ラグラージ
「ついにこの小説にもホウオウが出ちゃうんだね」

リザードン

「ホウオウの目覚めで果たして次回はどうなる事やら……」

第百二十八話　静寂の世界（前書き）

バクフーン
「なんか意味深なタイトルだな？　どゆ意味？」

リザードン
「それは本文の後半辺りで解る」

ラグラージ
「……やっぱりＭＣなのに知らないんだねバクフーン（汗）」

第百二十八話　静寂の世界

ホウオウの身体に触れていたバクフーンとリザードンは、光がホウオウの身体に溶け込むように消えていった事を確認した後、ホウオウから離れる。それからしばらくすると、閉じられていたホウオウの目がゆっくりと開いていく。

「ホウオウ様！」

居ても立っても居られなくなったスイクンはホウオウの所へ駆け寄る。

「……心配をかけたなスイクン。もう大丈夫だ」

力強く翼を羽ばたかせるホウオウ。

「お帰り、ホウオウ」

近くに歩み寄り、笑みを浮かべながらホウオウに言うミュウ。

「久しぶりだな友よ……ずいぶんと世話になったな」

軽く頭を下げ、ミュウに礼を言うホウオウ。

「気にしないで良いよホウオウ。親友の頼みを聞いただけなんだから……あっ皆紹介するよ、彼がホウオウ。僕の一番の親友さ」

ミュウはバクフーン達にホウオウを紹介する。

「えっと、初めまして……で良いんかな？」

首を傾げながら聞くバクフーン。

「こうしてそなたと会うのは初めてだから、それで良い。だが挨拶する必要は無いぞ、我はそなたとリザードンの中で今まで起きた事を見てきたからな」

どうやらバクフーンとリザードンの中にいたホウオウは、今まで起きた事を見てきたらしい。

「そ、そうなんか？」

「ふふ、そんなに堅くならなくて良いぞ？　普段のそなたらしくで構わぬ」

「んじゃそうさせてもらうぜ」

切り替えが早いバクフーンである。

「話してるとこ悪ぃが、ちょっと良いかホウオウ？」

パルキアがホウオウに歩み寄る。

「言わなくとも解っているパルキア……ダークネスだな？」

「嗚呼（ああ）……お前の聖なる力じゃねぇと野郎を完全に倒す事は出来ねぇ。お前の力を貸してくれ」

「もちろんそのつもりだ。だが……」

急にホウオウは表情を曇らせる。

「どうした？」

「奴はパルキアとディアルガの力を奪い、その力を強力にした。我だけでは、奴を倒す事は出来ないだろう……」

「じゃあどうすんだ？」

今度はバクフーンがホウオウに聞く。

「我一人では無理だが……我と同じ聖なる力をそなた達にも与え、全員で力を合わせれば奴を完全に消滅させる事が出来る筈」

「俺達にホウオウの力を？　んな事出来んのか？」

腕組みしながらパルキアは聞く。

「当然だパルキア。だが、多少時間が掛かってしまうが……」

「時間が掛かっても、ダークネスを倒せるんだったら……やろうぜホウオウ！」

やるべきだとホウオウに強く言うバクフーン。

「……そうだな。だがバクフーン、それにリザードン……そなた達に我が聖なる力を与える必要は無い」

『な、なんで？』

予想外の事を言われて驚くバクフーンとリザードン。

「我の魂はそなた達と長い間一緒だった。その影響で、そなた達にも我と同じ力が備わったのだ。だから、我が離れてもそなた達が放つ攻撃には聖なる力が宿っているし、ブラストモードになる事も可能という訳だ」

「俺達に聖なる力が？」

少し驚いた表情をしながら互いを見つめるバクフーンとリザードン。

「ただし……我の魂が離れた事で失われた能力もある。どんな重傷を負ってもすぐに回復し、死からも復活出来てしまう超再生能力だ……だから、今までのように無茶をしたら今度こそ死んでしまう。これだけは忘れないでくれ」

ホウオウの言葉を聞き、二人は頷いて答える。

「解ったよホウオウ。良し、じゃあ俺達以外の皆に聖なる力を分けて、ダークネスをぶっ倒しにいこうぜ！」

「待ってバクフーン君、聖なる力を与えてもらうのは君達チームブラストとミュウにスイクン……そしてディアルガにパルキア、ブラキオ君達にヒトカゲ君達だけで良いよ」

そう言い出したのはカイリューだ。

「な、何言ってんだよカイリュー！　全員でやらなきゃ……」

「周りを良く見てよバクフーン君。他の皆はさっきの戦いで負傷して満足に動く事が出来ないんだ。僕も、ダークネスの攻撃で翼をやられちゃったしね……君達と一緒に行っても足手纏いになる」

少し悔しそうな表情をしながら言うカイリュー……本当は一緒に戦いたい気持ちがあるようだ。

「カイリュー……」

「……ダークネスを絶対倒してよ」

「……おう、任せろ！」

親指を突き立てて、カイリューと約束するバクフーン。

「バク君……絶対ダークネスを倒して帰ってきてね。待ってるから」

心配そうにしながら言うレナ。

「心配すんなよレナ、絶対ぶっ倒して帰ってくるからさ」

「ラグラージ、お前は残った方が良いんじゃないか？　まださっきのライコウ達とのバトルで受けたダメージが残ってるだろ？」

ラグラージの身体を心配したリザードンは残るようラグラージに言う……しかし、ラグラージは首を左右に振ってそれを拒否する。

「こんな大事な戦いの時に、休んでなんかいられないよ。それに、戦力は出来るだけ多い方が良いでしょ？」

「お前……解ったよ。けど無茶すんなよ？」

「リザードンもね」

二人は笑みを浮かべる。

「サーナイトさん、ジラーチをよろしく頼むっす」

グラエナは自分の背中で眠っているジラーチをメイドのサーナイトに預ける。

「疲れて眠っちゃったジラーチを、一緒に連れてく訳にはいかないっすから……」

「解りました、ジラーチさんは私に任せて下さい。グラエナさん、頑張って下さいね」

「もちろんっすよ！」

そう言った後、グラエナはバクフーン達の所へ戻る。

「良し、それでは始めると……」

「そうはさせんぞ！」

ホウオウが皆に自分が持つ聖なる力を分け与えようとした時、突然何処からか大きな声が。

バクフーン達は声がした方へ振り向く……そこにいたのは、ダークネスからバクフーン達を始末するように言われたアブソル達だっ

た。

「お前達は……」

アブソル達の中に、かつて自分の部下だったフーディン、ヨノワール、ゲンガーを見つけたダークライは驚いた表情をする。

「久しぶりですねダークライ。ダークネス様の命令で、あなた達にはここで消えてもらいますよ」

戦闘体勢に入るフーディン。そしてアブソル達も戦闘体勢に。

「こんな時に！」

バクフーンも戦闘体勢に入ろうとする。

「待てバクフーン。ここは俺達に任せろ」

バクフーンを止めたのはゴウカザルだった。

そしてゴウカザル以外にもここに残る事になったポケモン達がバクフーンの前に立つ……その中にはグレンもいた。

「父さんまで……」

「お前達はダークネスと戦う事に集中するんだ。奴らは俺達が食い止めるから、お前達はホウオウから聖なる力を受け取ってダークネスを倒してこい……頼んだぞ」

バクフーンにそう言って、グレン達はアブソル達に向かって突っ込んでいった。

「父さん……」

「バクフーン、お前の親父さんやゴウカザル達の気持ちを無駄にしちゃならない……解るよな？」

「……解ってるさリザードン。父さん達……頼むぜ」

アブソル達をグレン達に任せ、バクフーン達はホウオウの所へと集まる。

「良し、始めるぞ」

皆集まったのを確認したホウオウは目を閉じ、意識を集中し始める。

すると、ホウオウの身体が光り輝き始める。

「……汝(なんじ)らに、我が聖なる力の加護を……」

ホウオウから発せられた光は周りにいたポケモン達を包み込んでいく。

一方ディアボロス島にいるダークネスは……

「あと少しだ……あと少しでエネルギーが集まる。そしたら……ふふふ♪」

不気味な笑みを浮かべるダークネス。

その身体からは、禍禍(まがまが)しい黒いオーラが溢れるように発せられている。そのオーラは少しずつ大きくなっていく。

「……良し、チャージ完了♪　さぁ、ショーの始まりだ！」

ダークネスは両手を上に向けて翳(かざ)す。

刹那(せつな)、禍禍しい黒いオーラが天に向かって放出される。

ダークネスが天に向けて黒いオーラを放出したと同時に、ホウオウは皆に聖なる力を与える作業を終える。

「……良し、これで準備完了だ」

ホウオウから発せられていた光が消える。

「じゃあ、ダークネスの野郎をぶっ倒しにいくか。ダークライ、空

間の扉を開けるか？」

皆準備が良い事を確認したパルキアはダークライに空間の扉を開くように言う。

ダークネスに空間を操る力を奪われてしまった為、今のパルキアには空間を操る事が出来ないからだ。

「まだこの力を完全に制御出来ていないので開けるか解りませんが……やってみます」

ダークライは両手を前に翳し、準備を始める。

「ね、ねぇあれ何！？」

ラグラージはダークネスが天に向けて放出している黒いオーラに気づき、指差しながらバクフーン達に知らせる。

「あの方角はディアボロス島がある方か……あのエネルギーはまさか……マズい！？　ダークライ、お前に与えた時を操る力を私に戻すんだ、早く！」

天に向かって放たれているオーラを見たディアルガは、何故か慌てながらダークライに自分の力を返すように言う。

「きゅ、急にどうなされたのですか？」

「良いからディアルガに力を戻してやれ！　ついでに俺にも空間を操る力を返せ！　あれを防ぐには時と空間、両方の力を完璧に使う必要がある！」

パルキアまで慌てながらダークライに力を返すように言い出す。

「わ、解りました……ふぅ～、はっ！」

ダークライは意識を集中して右手と左手、それぞれからエネルギーの塊を出現させる。

そして二つのエネルギーはダークライから離れ、ディアルガとパルキアの中に溶け込むようにして入っていった。

それと同時に、ダークネスが放出した黒いオーラがディアボロス島を中心に凄いスピードで広まり始めた。まるで世界の全てを飲み込んでしまいそうな勢いである。

「急ぐぞパルキア！」

「てめぇに言われなくても解ってら、やるぞ！」

力の一部を取り戻したディアルガとパルキア。

二人が意識を集中し始めると、ディアルガは胸にあるダイヤモンドのような宝石が……パルキアは両肩にあるパールのような宝石が光り輝き始める。そしてさらに輝きを強めると、二つの輝きは一つに合わさりバクフーン達を守るようにして包み込んでいく。

完全に光で包まれた後、黒いオーラはあっという間にその場にいたポケモン達や街などを飲み込んでいく。

「……もう大丈夫だな。パルキア、バリアーを解くぞ」

「嗚呼……」

それからしばらくして、ディアルガとパルキアはバリアーを解く。

「お、おい……なんだよこれ……」

目の前に広がる光景に絶句するバクフーン達。

ダークネスが放出した黒いオーラによって街や海、草や木が全て灰色に染まっていた……風は吹いおらず、太陽までもが灰色に染まっていて本来放つべき光を放っていなかった。

「……父さん？」

ふとバクフーンは先程までアブソル達と戦っていたグレン達に目を向ける。グレン達とアブソル達は攻撃を繰り出そうとした体勢のままピクリとも動いていない……まるで時を停められたように。

「どうなってんだよ……」

「ダークネスだ。奴が私から奪った時を操る力を使って、世界の時を停止させたんだ」

目の前に広がっている異常を説明したのはディアルガだ。

「ディアルガ、父さん達を助けられないのか？」

バクフーンに聞かれたディアルガは首を左右に振る。

「……今私にある時を操る力はほんの一部だけだ。パルキアと協力してお前達を時の停止から守る事は出来たが……グレン達を助ける為にはダークネスを倒し、奴から時を操る力を取り戻すしか方法がない」

「そう、か……なら、早くダークネスをぶっ倒さないとな！」

右手で作った拳を左手で受け止め、ダークネスを絶対倒すと心に決めるバクフーン。

「準備は良いなてめぇら、この戦いで決着をつけるぞ。開け、空間の扉！」

パルキアは右手を前に翳し、空間を歪めてディアボロス島に続く穴を開ける。そしてバクフーン達は中に入り、最終決戦の地へと向かう。

第百二十八話　静寂の世界（後書き）

バクフーン
「時間が停まった!?」

リザードン
「ダークネス、そのチートっぷりを発揮してるなぁ（汗）」

ラグラージ
「それでリザードン、次回は?」

リザードン
「ディアボロス島に再び乗り込んで、そこで最終決戦だ」

バクフーン
「おっ、クライマックスも近いのか!」

リザードン
「だが作者の事だ、すぐには終わらせないかもしんないぜ?」

ラグラージ
「あの人、バトル中心で執筆するとかなり話数増やすからね（汗）」

第百二十九話　怒りのダークネス（前書き）

バクフーン
「もう百二十九話かぁ……次で百三十になるんだな、この小説」

ラグラージ
「なんかバクフーンがしみじみしてる（汗）」

リザードン
「つうかラグラージ。クリスマスは残念だったな（笑）」

ラグラージ
「笑い事じゃないよ（汗）皆だけ楽しんで僕だけ風邪引いてたのに（汗）」

バクフーン
「ラグラージ、乙（笑）」

第百二十九話　怒りのダークネス

「ふふ、ふふふ……最高だねぇ、ディアルガから奪った力で世界の時を停止させる……もうこの世界で動ける者は僕以外誰もいない」

ディアボロス島の中心で不気味に笑うダークネス。

「さあ、あとは動けない奴らを僕がゆっくりと始末するだけ……」

「始末されるのはお前だダークネス！」

その時、誰かがダークネスに向かって大きな声を上げる……ダークネスは声がした方に視線を向ける……そこにはパルキアの力で空間移動をしてきたバクフーン達がいた。

「……どうやって時間の停止から身を守ったんだ？」

「俺とディアルガの力で時間停止を防いだ。てめぇに好き勝手やらせる訳にはいかねぇんだよクソ野郎」

ダークネスを睨みつけるパルキア、いつでも攻撃出来るような体勢に入っている。

「お前はここで倒されるのだ、ダークネス」

そう言いながらホウオウも戦闘に入る。

「ホウオウ……石の呪縛から解放されたのか……」

ホウオウが復活した事を知り、少し表情を歪ませるダークネス。

「俺達の方が圧倒的に数が多い、もうお前に勝ち目は無いぜダークネス！」

ダークネスを指差しながら、そう宣言するバクフーン。

「……どいつもこいつも無駄な抵抗ばかりしやがって……なんで僕の思い通りにならない？　なんで僕に歯向かう？　気に入らないな……全部が気に入らないよ！」

急に怒りを露(あらわ)にし始めるダークネス、身体からは禍禍(まがまが)しい黒いオーラが吹き出すように現れる。

「皆僕の言う事聞いてれば良いんだよ……皆僕のオモチャなんだからさぁ……オモチャが歯向かうなんて可笑しいだろうが！」

益々（ますます）ダークネスの身体から吹き出す黒いオーラが濃くなっていく。

「あいつキレやがったな……気をつけろよお前ら、野郎何しでかすか解らねぇぞ」

パルキアは注意するよう皆に呼びかける。

「言われなくても解ってるさパルキア、うおぉぉぉ！」

身体に力を入れるバクフーン。刹那(せつな)、バクフーンの身体から凄まじい炎が吹き出しそれに包まれる、ブラストモードだ。

「これで終わらせてみせる、はあぁぁぁ！」

リザードンも身体に力を入れる。すると尻尾の炎が大きく燃え上がり、リザードンはその炎に身体を包まれる。

リザードンのブラストモードである。

「僕達全員の力を合わせて、絶対にあいつを倒すんだ！」

ブラキオは身体から深い緑色のオーラに包まれる。ブラキオが持つ、光の導き手の力が解放されたようだ。

「絶対に負けられない……紅蓮の炎を操る神よ　我ここに誓う　我と汝の力ここに集結し時　我の前に現る悪を持つものに　粛正の咆哮を与えん」

ヒトカゲは両手を合わせて詠唱――混沌語（カオス・ワーズ）を唱え、自身の能力を強化する。

「皆消してやる……現れよ、僕の闇の下部（しもべ）！」

ダークネスは右手を前に翳（かざ）す……刹那、地面からいくつもの黒い液体が吹き上げる。

その液体は意思を持っているかのように動き出し、一つに集まっていき巨大な黒くて丸い物体となる。そしてその丸い物体にさらなる変化が起きる……手足が生え始めてきたのだ。

そして尻尾も生え、どんどん形を変えていく……見た目は肉食恐竜に近くなり、首と尻尾に三本、腰に二本づつトゲが生えてくる。そして両手両足にも爪が生えてきて、腕の爪は四本、足にも三本生えた。その姿は伝説の超古代ポケモン、グラードンにそっくりだ。

だが通常のグラードンと違い全身真っ黒で、体長は四倍以上もあ

る。

「なんだ？　グラードンの紛い物か？」

自分よりも遥かに大きな偽物グラードンを見ても全く動揺していないパルキア。

「お前達はこの僕が生み出したダーク・グラードンが始末する……」

そう言った刹那、ダークネスはふわりと宙に浮かぶ。

「逃げんのか！」

ダークネスに向かってバクフーンは叫ぶ。

「逃げる？　違うな……今世界の時間は停止している。停止に巻き込まれたポケモン達は意識を残したまま動けなくなっているだろう……例えば、お前達の仲間とかね？」

不気味な笑みを浮かべるダークネス。

「お前……まさか！？」

「気づいたみたいだなバクフーン……そう、僕は今からお前達の仲間を始末しにいく。僕を完璧に怒らせた、その報いを受けてもらう」

ダークネスの目的……それは時間停止で動きを停められた仲間達を始末する事らしい。

「そうはいかない、破壊光線！」

ディアルガは口から凄まじいエネルギー波を吐き出し、ダークネスを攻撃する。だがしかし、その攻撃は腕を伸ばしたダーク・グラードンによって防がれてしまう。

「お前達の相手はそのダーク・グラードンだと言っただろうが……僕はもう行く。ダーク・グラードンここは任せたぞ。開け、空間の扉」

そう言ってダークネスは右手を前に翳し、目の前にフレイムシティへと繋がっている空間の扉を開く。

「そうはいかねぇ、閉じろ！」

パルキアも右手を前に翳し意識を集中、ダークネスが開いた空間の扉を強引に閉ざす。

「貴様……！」

パルキアを睨むダークネス。

「言っただろうが、てめぇの好き勝手にはさせねぇってよ！　お前ら！　この紛い物は俺とディアルガに任せて、お前らは野郎をぶっ倒してこい！」

「解った！　二人共……負けんなよ！」

ディアルガとパルキアにダーク・グラードンを任せ、バクフーン達はダークネスを倒す為に走り出す。

「ダークネス、我が聖なる力によって浄化されるが良い！　聖なる炎！」

ホウオウが力強く翼を羽ばたかせると、その翼から神聖な炎が現れダークネスを襲う。

「守る！」

ダークネスは自身をエネルギーの膜で包み込み、聖なる炎から身を守る……しかし、聖なる力を宿した攻撃はダークネスにとっては強力で、直撃こそはしなかったが辛そうな表情を浮かべる。

「くっ……やはり厄介だよお前のその力は！　まずお前から先に始末して……」

「タネマシンガン！」

ブラキオが口から吐き出した無数のエネルギー弾がダークネスに直撃、直撃した瞬間爆発が発生してダークネスは後方へ吹き飛ばされる。

ブラキオはタネマシンガンの中に種爆弾を仕掛けて威力を上げていたのだ。

「僕達もいる事を忘れてもらっちゃ困るよ」

「な、何故だ……何故ホウオウ以外の攻撃で僕にこんなダメージが……」

ホウオウが全員に聖なる力を分け与えている事を知らないダークネスは少し驚いた表情を浮かべる。

「奴は怯んでいる！　今がチャンスだ！」

アクセルの合図と共に、ダークネスに向けて一斉攻撃を放つバクフーン達。ダークネスに全ての攻撃が直撃し、凄まじい爆発が発生する。

「やったか？」

爆発で発生した爆煙を見つめるバクフーン。

「……貴様ら……そんなに死にたいか！？」

爆煙の中からダークネスが現れた、しかも無傷だ。ダークネスはパルキアの空間を操る力を混ぜた守るで、攻撃から身を守ったのだ。

「ちっ、しぶとい野郎だな」

舌打ちをするカメックス。

「貴様ら全員、まとめて始末してやる！　ダーク・インパクト！」

ダークネスは両手を前に翳し、バクフーン達に向けて凄まじい衝撃波を放つ。ダーク・インパクトを受けたバクフーン達は後方へ大きく吹き飛ばされる。

「現れよ、新たなる闇の下部！」

ダークネスが右手を前に翳すと、再び地面から黒い液体が吹き出してくる。吹き出た液体はまた一つに集まり、大きな黒い球体にな

る。
そして球体に変化が始まる……丸かった形がどんどん細くなっていき、手が生えてくる。
それからも形が変わっていき、見た目は東洋の竜のような姿になる。
鋭い爪に鋭い牙、そして鋭い眼光……それはグラードンと同じく超古代ポケモンと呼ばれるレックウザにそっくりな姿だった。だがやはり通常と違い全身真っ黒である。

「ダーク・レックウザ、ここは任せたぞ」

そう言うとダークネスは再びフレイムシティに向かって飛んでいく。

「あっ、待てダークネス!?」

ダークネスを追いかけようとしたバクフーン達だが、ダーク・レックウザが行く手を遮る。

「くそ、邪魔すんなよ！　火炎放射！」

バクフーンは口から凄まじい炎を吐き出してダーク・レックウザを攻撃する……しかし、ダーク・レックウザは素早く、攻撃は回避されてしまう。

「くそ!?」

「焦んなよバクフーン。あの紛い物は俺達が引き付けるから、その間にお前はリザードンと一緒にダークネスを追いな」

そう言ったのはピカチュウだ。そしてピカチュウやラティオス達はバクフーンとリザードンの前に立つ。

「お前ら……」

「俺達の中で実力があるのはお前とリザードンだからな。絶対ダークネスを倒せよ。負けたりなんかしたら許さねぇからな！」

「……解ったよ」

バクフーンとリザードンは頷く。

「ホウオウ、君もバクフーン達と一緒に行って。君がいなきゃ、ダークネスを完全に倒す事は出来ないからね」

ミュウはホウオウを見つめながら言う。

「ミュウ……」

「行って下さいホウオウ様。ミュウ殿は私がサポートします」

ダーク・レックウザを睨みつけながらスイクンが言う。

「解った。頼むぞ」

ホウオウはいつでも飛び立てるように準備する。

「ダークライ、君も行ってくれ。君の力は絶対ホウオウ達に必要だから」

「……了解した」

ミュウに言われ、頷いて答えるダークライ。

「ブラキオ、お前もバクフーン達と一緒にダークネスを追え。光の導き手の力がバクフーン達には必要だ」

アクセルはブラキオにバクフーン達と行くように言う。

「えっ、でもアクセル……」

「心配するな。俺達の力は知っているだろ？　負けたりはしないさ」

「そうよブラキオ君。あなたは、ダークネスを倒す事に集中しなさい」

そう言うのはきぬだ。

「行きなブラキオ。あんな紛い物、俺達がぶっ飛ばしてやるよ」

「絶対にダークネスを倒して下さい、これは社長命令です」

「ブラキオ、負けないでよ」

うしだ、フィル、ルーチェにも言われたブラキオは皆の気持ちに応える為に頷く。

「ヒトカゲも行け。詠唱が使えるお前なら、あいつらの助けになる筈だ」

ヒトカゲにバクフーン達を助けてやれと言うのはサイクスだ。

「行ってヒトカゲ、私達負けないから」

「負けたら許さねぇからなヒトカゲ！」

チコリータやゼニガメの言葉にヒトカゲは頷いて応える。

「お嬢達は俺が守る、ヒトカゲ。安心してダークネスを倒しに行け」

「ヒトカゲ、もし負けやがったら……解ってんだろうな？」

「いやカメックス、脅してどうすんだよ？」

苦笑いしながらバンギラスはカメックスに言う。

「皆……絶対ダークネスを倒すからね！」

ダークネスを倒すと決意したヒトカゲ。

「あっ、そうだヒトカゲ。ちょい耳貸せ」

「な、何バクフーン兄ちゃん？」

「良いから早く」

訳が解らなかったヒトカゲだが、サイクスに近寄って耳を貸す。

サイクスはヒトカゲの耳元で何かを話している。

「……それ本当？」

「当たり前だ。このサイクス様が言うんだから間違いない！　とにかく、そういう事だから頼んだぜ」

「う、うん」

笑みを浮かべるサイクスにヒトカゲは頷く。

「良し、それじゃ皆……俺が合図したらあの黒いレックウザに攻撃を仕掛けて注意を引き付ける。したらその間にバクフーン達はダークネスを追いかける……これで良いな？」

サイクスの意見に全員が頷いて応える。

「良し……今だ！」

サイクスの合図と共に全員が一斉攻撃を仕掛ける。ダーク・レックウザはこれを回避する為に空高く上昇する。

「行くぞ！」

チャンスと思ったバクフーン達は一気に駆け抜ける。そしてバクフーン達はダーク・レックウザから離れる事に成功し、ダークネスを追いかける為に海の上を走る。

時間が停止した海は固まっていて、バクフーン達は陸地と同じように走る事が出来るのだ。

ディアルガとパルキアにはダーク・グラードンを……そしてアクセルやサイクス達にはダーク・レックウザを任せ、バクフーン達はフレイムシティに飛んでいったダークネスに追いつく為に全速力で走る。

第百二十九話　怒りのダークネス（後書き）

バクフーン
「なんかダークネス口調変わってね？」

リザードン
「資料によると、ダークネスは怒り出すと口調が変わるタイプなんだと」

ラグラージ
「ふ～ん……あっ、そういえば最後になんか紛い物が出たよね？」

バクフーン
「レックウザにグラードンだったか？」

リザードン
「作者からの情報だと、グラードンは映画のジラーチに出てきたあれ、あれを想像しながら考えたんだとよ」

バクフーン
「あ～、あのも〇〇け姫に出てきそうなあれか！」

ラグラージ
「レックウザは？」

リザードン
「おまけらしい」

バクフーン

「おまけかい（汗）」

第百三十話　二人の神ＶＳダーク・グラードン（前書き）

バクフーン
「パルキアとディアルガがあのダーク・グラードンとバトルすんのかぁ」

ラグラージ
「どうなるのかなぁ？」

リザードン
「それは本編見れば解るさ。あっ、今回パルキアの兄貴が新技を披露するらしいぞ」

第百三十話　二人の神ＶＳダーク・グラードン

ダークネスをバクフーン達に任せたパルキアとディアルガは、ダークネスが生み出したダーク・グラードンと対峙していた。

「さて……石にされてストレスが溜まってんだ。思いっきり暴れさせてもらうぜ」

両手を組み、骨の音を鳴らせるパルキア。

「パルキア、お前も私も本来の力が戻っている訳じゃない。油断するなよ？」

「てめぇに言われなくても解ってらぁ！　行くぜ！」

パルキアはダーク・グラードンに向かって突っ込んでいく。

「まずはその面に一発ぶち込んでやるぜ、オラァ！」

パルキアは渾身の右ストレートを顔面に直撃させる……しかし、ダメージが無いのかダーク・グラードンは無表情だ。

「何っ！？」

渾身の一撃があまり効いていない事に驚くパルキア……そんなパルキアに、ダーク・グラードンはその鋭い爪でパルキアを切り裂こうと腕を大きく振り上げ、勢い良く振り下ろす。

「波動弾！」

ディアルガは口から青いエネルギー弾を吐き出してダーク・グラードンに直撃させて蹌踉けさせる。蹌踉けた事により軌道がずれ、ダーク・グラードンが振り下ろした右腕の爪はパルキアにではなく地面に刺さる。

「す、すまねぇディアルガ」

「だから油断するなと言っただろうパルキア？　一つ貸しだからな」

ダーク・グラードンから視線を逸らさずに言うディアルガ。

「グルルル……」

蹌踉けていたダーク・グラードンはすぐに体勢を立て直す……ディアルガとパルキアを睨みつけながら低い唸り声を上げる。

（……さっきのパルキアの一撃に私が放った波動弾を受けても痛がっている素振りを見せない……まるで痛みを感じていないみたいだな）

ダーク・グラードンを冷静に観察するディアルガ。そして彼は次にどうするかを考え始める。

（本当に痛みを感じていないのか確かめてみる必要があるな。良し……）

「パルキア、二人同時に破壊光線を放って奴を攻撃するぞ」

ディアルガはパルキアに同時攻撃をやろうと持ちかける。

「同時攻撃ってやつか。良いぜ」

頷いて答えるパルキア。そして二人は攻撃する体勢に入る。

『破壊光線！』

ディアルガとパルキアは口から強力なエネルギー波を吐き出し、ダーク・グラードンを攻撃する……二人の破壊光線はダーク・グラードンの腹部に直撃し、凄まじい爆発が発生する。

爆発で発生した爆煙が立ち込め、ダーク・グラードンの姿が見えなくなる。

「手応えありだな」

少し笑みを浮かべるパルキア。それに対してディアルガはじーっと爆煙を見つめる。爆煙はゆっくりと晴れていく……

「グルルル……」

爆煙が晴れた時、ダーク・グラードンは何事も無かったかのようにそこに佇んでいた。

「……やはりか」

「やはりって……どういう事だディアルガ？」

首を傾げながらパルキアは聞く。

「ダーク・グラードンはダークネスが生み出した存在……つまり、

奴はエネルギーの集合体なんだ。だから私達がいくら攻撃しても、エネルギーの集合体である奴には一切ダメージが無いんだ」

ダーク・グラードンから視線を逸らさずにディアルガはパルキアに説明する。

「ダメージを受けねぇってか……ちっ、面倒な野郎だな」

舌打ちをしてダーク・グラードンを睨むパルキア。

「だが奴にも心臓……エネルギーの核がある筈だ。それさえ潰せば奴を倒す事が出来る。問題はその核が何処にあるか……」

「んなもん探すより手っ取り早い方法があんだろうが」

そう言ってパルキアは空高く上昇し、攻撃する体勢に入る。

「あのバケモンを、跡形もなく吹き飛ばしゃ良いんだよ！　竜星群！」

パルキアは両手で無数のエネルギー弾を作り出す。そしてそれをダーク・グラードンに向けて、まるで本物の流星群の如く放つ。竜星群は全弾ダーク・グラードンに直撃し、凄まじい爆発が発生する。

「こいつも食らっときな！　破壊光線！」

さらにパルキアは破壊光線を放ち、ダーク・グラードンに直撃させる。

「これでどうだクソ野郎が！　……おっと」

攻め疲れたのか、突然パルキアは蹌踉けてしまう。

「ちっ、少しエネルギーを使い過ぎたか……だが、あれだけ攻撃したんだ。野郎は跡形もなく――」

そうパルキアが言い掛けた刹那、爆煙の中から黒いエネルギー波が放たれパルキアに直撃してしまう。

「くっ！？」

大きく上へ吹き飛ばされたパルキアだがすぐに体勢を立て直す。

「グルルル……」

あれだけの攻撃を受けていながらダーク・グラードンは無傷だった。

「ちっ……」

「パルキア、私とお前の破壊光線を受けても無傷だった相手だぞ？並みの攻撃じゃ倒せない事位、冷静に考えれば解るだろ？」

そう言いながら少々呆れた表情を浮かべるディアルガ。反論出来ないパルキアは黙り込んでしまう。

「やはり核を潰すしかないな……」

ディアルガはダーク・グラードンの核が身体の何処にあるかを考え始める。

（奴が生み出された時、最初奴は丸い球体だった……それから手足が生えていってグラードンの姿に変化した。おそらくあの球体が核……グラードンに変化してから球体の位置が変わっていないとすれば……）

ディアルガはダーク・グラードンの胸元を見つめる。

「彼処だな……パルキア、少しの間時間を稼いでくれないか？」

「解ったのか？　奴の核が？」

パルキアの問いにディアルガは頷いて応える。

「私は今から時の咆哮を最大パワーで放つ為にエネルギーを溜める。奴の硬い身体を貫く為には、私の全エネルギーを使わなければならないからな」

「……解った、一発で決めろよディアルガ。行くぜ！」

パルキアはダーク・グラードンに向かって突っ込んで行く。そしてディアルガは自分が持つ全エネルギーを集める為に意識を集中し始める……刹那、胸にあるダイヤモンドのような宝石が光り輝き始めた。

「勝負だバケモン！　波動弾！」

パルキアは波動弾を連続で放ちながらダーク・グラードンに接近していく。波動弾は全弾直撃するがダーク・グラードンは怯まずにパルキアを攻撃しようと口から黒いエネルギー波を吐き出す。

「食らうかよ！」

パルキアはこれを紙一重で回避、さらにダーク・グラードンに接近していく。

「見せてやるぜ、俺のとっておきをよ！」

意識を集中し始めるパルキア。刹那、腕にあるパールのような宝石が光り輝き始める。

（こいつを使えば俺もエネルギーを全て使い果たす事になるが……やるしかねぇ！）

パルキアの両手にエネルギーが集まっていく。

集まったエネルギーはまるで剣のように形を変化させていく。

そしてパルキアは両手を合わせ、二つのエネルギーを一つにして大きな大剣のように変化させる。亜空切断を応用した、パルキアのオリジナル技だ。

「オラァァァ！」

パルキアは大剣をダーク・グラードンの右腕に向けて振り下ろす。

刹那、ダーク・グラードンの右腕は切断され、腕は地面に落下する。

地面に落ちた腕は黒い液体へと変化し、地面に溶け込むようにして消えていった。

「もう一本も切り落とす！」

パルキアは残った左腕も切り落とそうと大剣を振り翳す。
それを阻止しようと、ダーク・グラードンはパルキアに向けて黒いエネルギー波を放つ。

「今の俺に、んなもん効かねぇんだよ！」

パルキアは大剣で黒いエネルギー波を真っ二つに切断してしまう。
そしてパルキアはすぐさま反撃で左腕に向けて大剣を振り下ろし、左腕も切断する。

「これで両腕を潰したぜ……」

ダーク・グラードンの左腕を切断したと同時に大剣が消滅してしまった。どうやら空間を操る力を使い果たしてしまったようだ。

「離れろパルキア！」

エネルギーチャージが完了したディアルガがパルキアに叫ぶ。
それを聞いたパルキアは急いでダーク・グラードンから離れる。

「これで終わりだ！　時の咆哮！」

ディアルガは口から自分が持つ全エネルギーを集めた強力なエネルギー波を吐き出す。
最大パワーで放たれた時の咆哮はダーク・グラードンの胸元に直撃し、一瞬で貫いてしまった。
ダーク・グラードンの身体にはぽっかりと大きな穴が空いている。
そしてダーク・グラードンは立ち尽くした状態のまま液体に変化して、地面に溶け込むようにして消えていった。

「終わったか……はあ……」

時を操る力を使い果たしたディアルガは地上に着地するとその場に座り込んでしまう。

「はあ、はあ……おいディアルガ、休んでる暇はねぇぞ。まだ倒さねぇといけねぇ野郎がいんだろ」

息を切らせながら、パルキアはディアルガに歩み寄る。

「……そうだったな、まだダークネスが残っていた……それに、あのガブリアス達の援護にも行かなければな」

ディアルガはゆっくりと立ち上がり、パルキアと共にダーク・レックウザと戦っているアクセルやサイクス達の所に向かって飛び立った。

第百三十話　二人の神ＶＳダーク・グラードン（後書き）

バクフーン
「お～、やるじゃんかパルキア！」

ラグラージ
「さすが兄貴だね」

リザードン
「ディアルガも冷静に戦うところさすがだな」

バクフーン
「んで次回は？」

リザードン
「サイクス達とアクセル達、そしてラグラージ達がダーク・レックウザと戦うストーリーだ」

ラグラージ
「……これを逃したらもう目立てるチャンスが無い……頑張るぞーっ！」

リザードン
「……台本見るとアクセルとかサイクスが目立つような感じだなぁ……ラグラージ、目立つの無理なような気がする（汗）」

第百三十一話　VSダーク・レックウザ（前書き）

バクフーン
「皆～、ちょっと遅いけど明けおめ～♪　そしてことよろだぜ～♪」

リザードン
「新年を迎えての初更新だな。今回はダーク・レックウザとの対決だな」

ラグラージ
「目立つぞ僕！」

バクフーン＆リザードン
『無理だろ』

ラグラージ
「そんな事言わないでよ（汗）」

第百三十一話　VSダーク・レックウザ

ディアルガとパルキアがダーク・グラードンを倒す事が出来た時、ダーク・レックウザと戦っているラグラージ達は……

「冷凍ビーム！」

口から超低温のビームを吐き出し、ダーク・レックウザに向けて放つラグラージ。

「……神速」

冷凍ビームが直撃する寸前でダーク・レックウザは、目にも留まらぬ速さで動いて冷凍ビームを回避する。

「……ドラゴンクロー」

いつの間にかバンギラス達の背後に回り込んでいたダーク・レックウザは、その鋭い爪で攻撃する。素早い攻撃に対処する事が出来ずにバンギラスはドラゴンクローを受けてしまう。

「おわっ！？」

大きく後方へ吹き飛ばされるバンギラス。

近くにあった自分よりも大きな岩石に身体を打ちつける。バンギラスがぶつかった衝撃で、岩石が砕けてしまう。

「痛ぇ……やりやがったなこの野郎！　ストーンエッジ！」

バンギラスは砕けた岩石をコントロールして、ダーク・レックウザに向けて放つ。

「……神速」

ストーンエッジが直撃する寸前でダーク・レックウザは再び神速を使い、攻撃を回避する。

バンギラスの攻撃を回避したダーク・レックウザは、次にラグラージ達に狙いを定め一気に接近していく。だがラグラージ達はダーク・レックウザのスピードが速すぎて、誰も接近している事に気づいていない。

「皆気をつけて、何処から来るか分から――」

「ドラゴンクロー」

ラグラージが皆に注意するよう呼びかけようとした刹那（せつな）、目の前に現れたダーク・レックウザはラグラージにドラゴンクローを直撃させる。ドラゴンクローを受けたラグラージの巨体は宙を舞う。

「ラグラージ!?　くそ、１０万ボルト!」

攻撃をした事で動きが停まったダーク・レックウザに向けて、ピカチュウは身体から強力な電撃を放出する。しかし、ダーク・レックウザは再び神速を使ってピカチュウの１０万ボルトを回避してしまう。

「ラグラージ!」

ドダイトスが落下するラグラージをしっかりと受け止める。

「大丈夫か？」

「痛たた……な、なんとかね……ダーク・レックウザは？」

周囲を見回してダーク・レックウザを捜すラグラージ。

「あいつは上だ」

上を指差しながら言うピカチュウ。

ラグラージ達が上を見てみると、そこには皆を見下ろしているダーク・レックウザがいた。

「もう彼処まで移動していたなんて……速すぎだよ、あいつ」

ドダイトスに支えてもらいながら立ち上がるラグラージ。

「んな弱音を吐いてる場合か、次がくるぞ」

そう言いながら構えるピカチュウ。ダーク・レックウザは攻撃しようと口にエネルギーを集めていた。

「……敵は、排除。破壊――」

「ドラゴンダイブ！」

ダーク・レックウザが破壊光線を放とうとした刹那、何者かが物凄い速さでダーク・レックウザの背後から突進する。

アクセルである。

彼は身体を折り畳んで翼を伸ばし、ジェット機のようなフォルム

となってダーク・レックウザにドラゴンダイブを直撃させる。ドラゴンダイブを受けたダーク・レックウザは破壊光線を撃てず、上空に吹き飛ばされる。

「動きは確かに速いが、打たれ強い訳ではないようだな」

折り畳んでいた身体を元に戻し、宙に浮いたままダーク・レックウザを睨むアクセル。

「一気に倒してやる、ドラゴンダイブ！」

再び身体を折り畳んだアクセルは凄いスピードでダーク・レックウザに向かっていく。

「……ドラゴンクロー」

ダーク・レックウザは体勢を立て直し、ドラゴンクローでアクセルを迎え撃とうとする。

「甘い！」

アクセルは折り畳んでいた身体を元に戻してその場に急停止、ダーク・レックウザのドラゴンクローは空を切る。

「ドラゴンクロー！」

隙だらけになったダーク・レックウザにアクセルがドラゴンクローを直撃させる。

「もう一度ドラゴンクロー！」

攻撃の手を緩めないアクセル。連続でドラゴンクローを繰り出していく。
しかも攻撃する度にその攻撃スピードがどんどん上がっていく。

「……神速」

ダーク・レックウザはアクセルから離れる為に神速を使い上昇する。

「……敵を全て排除する。竜星群」

神速で上昇したダーク・レックウザはアクセル達に向けて無数のエネルギー弾を放つ。まるで本物の流星群の如く、アクセル達に降り注ぐ。
守るを使えるポケモンは守るを発動して防御、それ以外のポケモンは攻撃をして竜星群を相殺させたり、素早く動いて回避したりする。

「……神速」

皆が竜星群を回避する事に集中している隙に神速を使って素早く降下するダーク・レックウザ。
そしてきぬ達の背後に回り込む。

「きぬ！　後ろだ！」

ダーク・レックウザがきぬ達の背後にいる事に気づいたアクセルは大きな声で叫ぶ。きぬ達はアクセルの声に気づき、後ろに振り向く。

「……ドラゴンクロー」

ダーク・レックウザのドラゴンクローがきぬに襲いかかる。

「鬼火！」

きぬは9本ある自分の尻尾から炎の塊を作り出しそれをコントロール。

鬼火を自分の前に誘導してダーク・レックウザのドラゴンクローにぶつける。これにより、きぬはドラゴンクローを防ぐ事が出来た。

「今よルーチェちゃん！」

「わかってるわよきぬ姉！　冷凍ビーム！」

一瞬動きを停めたダーク・レックウザにルーチェは冷凍ビームを放つ。

ルーチェの冷凍ビームは胴体に命中、一瞬で胴体は氷漬けになる。

それにより、ダーク・レックウザの動きが鈍くなる。

「うしだ！」

「おう、任せろルーチェ！　ギガインパクトォォォ！」

動きが鈍くなったダーク・レックウザに、うしだは全速力で突進していく。そして強力なギガインパクトを直撃させる。

その時の衝撃で氷が砕け、ダーク・レックウザは大きく後方へ吹き飛ばされる。

「決まったぜ！」

今の一撃で倒したと思ったうしだは勝ち誇った表情をしている。
だが、倒したと思ったダーク・レックウザは何事もなかったかのようにすぐ起き上がってしまう。

「なっ！？」

「……逆鱗（げきりん）」

急に目の色を変えるダーク・レックウザ。
刹那、凄い勢いでうしだに向かっていき、その鋭い爪でうしだを攻撃する。これを回避出来なかったうしだは空中に吹き飛ばされてしまう。
さらに暴れ狂うように近くにいたきぬ達にも襲いかかる。

「ドラゴンダイブ！」

そこにアクセルが駆けつけ、ダーク・レックウザにドラゴンダイブを直撃させて後方へ吹き飛ばす。だがすぐに体勢を立て直したダーク・レックウザはアクセルに襲いかかる。

「下がってろアクセル！　ハイドロポンプ！」

「俺もハイドロポンプ！」

カメックスとゼニガメ兄弟は大量の水を凄い勢いで放出し、ダーク・レックウザにぶつける。
それにより、ダーク・レックウザは前に進む事が出来ずに動きを停める。

「ナイスだカメックスにゼニガメ！　誰か、冷凍ビームを使える奴はすぐに冷凍ビームをあいつにぶつけてくれ！」

大きな声で皆に呼びかけるサイクス。

実は今まで、サイクスはダーク・レックウザの攻撃を回避している間に確実に相手を倒す方法を考えていたのだ。

そして今、それを実行しようとしている。

『冷凍ビーム！』

ラティオス、ラティアス、ルーチェ、ラグラージ、ポリゴン2はサイクスに言われた通り冷凍ビームを放ってダーク・レックウザにぶつける。

カメックスとゼニガメのハイドロポンプを受けて身体が濡れていたダーク・レックウザはあっという間に氷漬けになってしまう。

「よし！　全員であいつに一斉攻撃だ！」

サイクスの合図と共に全員が氷漬けになったダーク・レックウザに攻撃を仕掛ける。

それぞれが持つ得意技がダーク・レックウザに直撃する。すると、ダーク・レックウザを覆っていた氷に罅（ひび）が入っていく。それはどんどん大きくなっていき、氷全体に罅が入る。

全体に罅が入った刹那、ダーク・レックウザは氷と共にバラバラに砕けてしまった。

「ふぅ～……終わった～……」

ダーク・レックウザを倒す事が出来てほっと一安心するサイクス。

サイクスだけでなく他の皆も安心したような表情をする。中には疲れて座り込んでしまう者もいた。

一方ダークネスを追いかけているバクフーン達は……

「くそ、なかなか追いつけねぇ！」

ダークネスの姿は確認出来るが、スピードが速くてなかなか追いつけないでいた。

「ヒトカゲ、落ちてないよな？」

「大丈夫だよ」

他よりも身体が小さくて速く走れないヒトカゲはバクフーンの背中に乗っていた。

「……全く、しつこい奴らだ」

バクフーン達が追っている事に気づいていたダークネス。自分の思った通りにならない事にまたイライラし始めているようだ。

「……早速あいつを使うか。しっかり役に立ってくれよ。現れよ、僕の下部（しもべ）！」

ダークネスは右手で小さなエネルギー弾を作り出し、それを時が停止して固まった海に向けて放つ。小さなエネルギー弾が海にぶつかると、それは海に溶け込むように消える。すると、溶け込んだ部分から溢れ出すように闇のオーラが出現する。

「な、なんだ！？」

突然の出来事に驚いたバクフーン達はその場に急停止する。

「ふふふ……君達は僕の新しいおもちゃに遊んでもらうと良いよ」

不気味に笑うダークネスはフレイムシティに向かって飛んでいった。

「あいつ！？　行かせてたまるか――」

「火炎放射」

ダークネスを追いかけようとしたバクフーンに、突如闇のオーラから放たれた火炎放射が襲いかかる。

「悪の波動！」

バクフーンを守る為にダークライは両手でエネルギー波を放つ。螺旋状に回転する黒いエネルギー波は火炎放射にぶつかり、爆発する。

「……ここから先には行かせない」

闇の中から1人のポケモンがゆっくりと姿を現す。

「ヒードラン！？」

驚きの声を上げるバクフーン。闇の中から現れたのは、ダークネスに敗れて闇に取り込まれてしまったヒードランだった。ヒードランの身体からは禍禍(まがまが)しい黒いオーラが吹き出している。

「くそ、こんなとこで足止めされてたまるかよ！」

戦闘体勢に入るバクフーン。

「待てバクフーン。あいつの相手は……俺がする」

そう言ったのはダークライだ。

「お前……」

「ダークネスに追いつかなければ、時間を停止されたお前の仲間達が危ない。ここは俺に任せて、お前達は早く先に行け。心配するな、すぐに追いつく」

笑みを浮かべながら言うダークライ。

「……わかった。絶対すぐに追いついてこいよ？」

「嗚呼(ああ)」

頷いて答えるダークライ。それを聞いたバクフーン達はダークネスを追いかける為に走りだす。

「……行かせないと言っただろ、火炎放射」

バクフーン達を邪魔する為、ヒードランは火炎放射を放つ。

「悪の波動！」

ダークライは再び悪の波動を放ち、火炎放射を相殺させる。その間にバクフーン達はこの場を離れ、ダークネスを追いかけていった。

「お前の相手はこの俺だヒードラン」

戦闘体勢に入るダークライ。

「……貴様」

第百三十一話　ＶＳダーク・レックウザ（後書き）

ラグラージ
「……（泣）」

バクフーン
「やっぱり目立ってなかったな」

リザードン
「アクセル達がいるから仕方ないだろ。にしても作者、台本とは違う展開にしやがったな（汗）」

バクフーン
「マジ？」

リザードン
「なんか執筆していくうちに気づいたら最初に考えてたストーリーと違ってらしいぞ。でもこっちのストーリーの方が最初に考えてたのよりも良かったみたいだな」

バクフーン
「あの作者、執筆作業してる時に新しいストーリーを思いつくタイプだからな（汗）んでリザードン、次回は？」

リザードン
「元ボスの２人が対決」

バクフーン
「面白そうじゃん！」

ラグラージ
「……今年終わったな、僕（泣）」

リザードン
「泣きすぎだっての（汗）」

第百三十二話　ダークライＶＳヒードラン（前書き）

な、なんとか出来た（汗）

バクフーン
「お疲れ～」

リザードン
「よく仕上げたな？」

いやね、気分転換に友達の家に行って一緒に遊んだりＤＶＤ見たりしたんだけど……そのＤＶＤのアニメを見てアイデアが頭の中に降臨してさ（笑）

リザードン
「意外なとこで降臨したな（汗）」

バクフーン
「んで、今回はあの２人が対決なんだよな？」

うん。色々と新技が飛び出すよ。んじゃ第百三十二話をどうぞ！

ラグラージ
（僕喋ってないのに　泣）

第百三十二話　ダークライVSヒードラン

ダークネスを追わせる為、バクフーン達を先に行かせたダークライ。

今彼は、ダークネスに操られているヒードランと対峙している。

「……よくも邪魔してくれたな。貴様は簡単には殺さない、地獄の苦痛を味合わせてからゆっくりと殺してやる」

ダークライを睨みつけるヒードラン。その身体からは禍禍(まがまが)しい黒いオーラが吹き出している。

「ふっ……そう簡単に俺は殺れないぞ」

両手で黒いエネルギー弾を作り出し、いつでも放てるように準備するダークライ。ヒードランも技を放つ体勢に入る。

口からは灼熱の炎が漏れだしている。

そしてしばらく互いはにらみ合ったまま、エネルギーを集めていく……

「悪の波動！」

先に攻撃を放ったのはダークライだ。彼が放った黒いエネルギー波は螺旋状に回転しながらヒードランに向かっていく。

「……火炎放射！」

ヒードランも攻撃を放つ。口から吐き出された灼熱の炎は悪の波動にぶつかる。２つの技がぶつかり合った刹那、凄まじい爆発が発

生する。
爆発によって発生した爆煙が2人の間で立ち込める。

「……ラスターカノン！」

ヒードランは口から銀色のエネルギー波を吐き出す。それはまるでレーザーのように爆煙の中を突き進み、ダークライに向かっていく。

ラスターカノンの威力が高いせいか、爆煙は一瞬で吹き飛んでしまう。

「守る！」

ダークライは自身をエネルギーの膜で包み込み、ラスターカノンから身を守る。しかしヒードランのラスターカノンはやはり相当な威力があるようで、ダークライは少しずつ後方へ押されていく。

「くっ……我が闇の力　あらゆる攻撃を跳ね返す壁となれ　ダーク・フォース！」

守るを維持しながらダークライは新たに技を発動させる。ダークライを包み込んでいたエネルギーの膜が下から黒く変色していく。膜全体が黒く変色した時、膜に当たっていたラスターカノンは弾かれてヒードランに向かっていく。

「……守る！」

跳ね返ってきたラスターカノンをヒードランは守るを使って防御する。

「影分身！」

ヒードランに接近してダークライは無数の幻影を作り出し、ヒードランを包囲する。

「電撃波！」

影分身を維持したまま、ダークライは両手から強力な電撃をヒードランに向けて放つ。

「……炎の渦！」

回転しながらヒードランは炎を吐き出す。

するとヒードランを中心に巨大な炎の渦が発生、電撃波は渦に阻まれてヒードランに直撃しなかった。

「……金属音！」

ここでヒードランは補助技を発動する。金属が擦（こす）れるような嫌な音が辺りに響く。

その嫌な音にダークライは思わず両手で耳を塞ぐ。影分身までとけてしまった。

「……火炎放射！」

ダークライ本体の居場所が分かったヒードランは火炎放射を放つ。

「くっ、悪の波動！」

それに対してダークライは悪の波動で対抗する。２つの技はぶつ

かり合い、再び凄まじい爆発が発生する。

（俺が思ってた以上にヒードランは強くなっている……俺に残された闇の力、使えたとしてあと3回が限界だ。ダークネスと戦うまで、なんとか温存しなければ……）

実は対ダークネス戦の疲労がまだ残っているダークライ。彼が使える闇の力はあと3回が限界……彼はどうやったら力をあまり消費しないでヒードランを倒す事が出来るか、それを今必死に考えている。……爆発で発生した爆煙が晴れていく。

「なっ!?」

爆煙が晴れて、見えてきた光景に驚くダークライ。彼が見た光景……それは1人だった筈のヒードランが3人に増えている光景だった。

ヒードランは爆煙が立ち込めている間に身代わりを使い、2人の分身を生み出していたのだ。

「……味合わせてやるよ、地獄の業火ってやつをな。やれ」

『マグマストーム!』

2人のヒードランは口から火炎放射よりもさらに強力な炎を吐き出す。

2つの炎は合わさり巨大な炎となる。それは渦となってヒードランとダークライを囲んでしまい、炎のバトルフィールドが出来上がる。

「……インフェルノ・ステージ。炎タイプではないお前にとって、

まさに地獄の舞台になる訳だ」

炎の中心はどんどん温度が上昇していく。

ダークライの額から流れ落ちる汗が地面に触れると一瞬で蒸発してしまう程に。呼吸をすれば肺が焼けるような感覚にダークライは襲われる。

「……さあ、地獄の舞台で踊ってもらおうか。火炎放射！」

ヒードランはダークライに向けて火炎放射を放つ。だかダークライはこれを守るで防御する。

「悪の波動！」

反撃で悪の波動を放つダークライ。しかし、悪の波動はヒードランに直撃しなかった。

実は陽炎まで発生していて、ヒードランの姿が歪んで見えていたダークライは正確に狙う事が出来なかったのだ。

「くっ……」

あまりの暑さに頭が朦朧（もうろう）としてきたダークライ。ふらふらとし始める。

（マズいな……このままでは負ける……残り3回、全て使い切る前に奴を倒す！）

温存する事を諦めたダークライは闇の力を使い、一気に決着をつけようと考える。

「……そろそろ終わらせてやる。死ね、マグマストーム！」

ヒードランはフルパワーでマグマストームをダークライに向けて放つ。

「闇よ……俺に力を！　はあぁぁぁ！」

ダークライは両手を前に翳す……すると目の前に小さな黒いエネルギー弾が出現する。

黒いエネルギー弾が出現した刹那、ヒードランが放ったマグマストームはその黒いエネルギー弾に吸い込まれていく。

「なっ！？」

フルパワーで放ったマグマストームを取り込まれた事に驚愕するヒードラン。

「くらえ、ダーク・ブレイカー！」

ダークライは取りこんだマグマストームのエネルギーを倍に膨らませ、ヒードランに向けて強力なエネルギー波を放つ。極太の黒いエネルギー波はヒードランに直撃、凄まじい爆発が発生する。爆発の衝撃でヒードランは後方へ大きく吹き飛び、インフェルノ・ステージも吹き飛んで消滅してしまった。

「はあ、はあ……」

かなり辛かったようで、肩で息をしているダークライ。一方のヒードランは倒れたままピクリとも動かない。

身体からは禍禍しい黒いオーラが離れていく。

ホウオウから授かった聖なる力の影響で、浄化されたようだ。

「くっ、かなり体力を消耗してしまったな……だが、休んでいる暇はない。早くバクフーン達と合流しなければ……」

ふらふらになりながらも、ダークライはバクフーン達と合流する為に前へと進んでいく。

第百三十二話　ダークライVSヒードラン（後書き）

バクフーン
「ダークライの新技かっけぇ！」

とあるアニメの影響であんな技が出ました。

リザードン
「ヒードランも新技出してたな？」

あれは僕の思いつき（笑）

バクフーン
「マジか（汗）」

さて、次回は君らとダークネスの対決だよ。

リザードン
「いよいよか」

バクフーン
「今度こそ勝つ！」

気合い十分だね。
それじゃ、次回もよろしくお願いしま～す。

ラグラージ
「だから僕にも喋らせてよ（泣）」

第百三十三話　最終決戦！　ＶＳダークネス！　前編（前書き）

バクフーン
「いよいよかぁ」

リザードン
「いよいよだな」

バクフーン
「なんかさ、今回結構バトルに力入ってる感じだよな？」

リザードン
「そりゃ最終決戦だもんよ。作者も力が入るさ」

ラグラージ
「……やっぱり僕出番が無かった（泣）」

バクフーン＆amp;リザードン
『あっ、ラグラージ（汗）』

第百三十三話　最終決戦！　ＶＳダークネス！　前編

「……見えてきたね、フレイムシティ」

時の停止に巻き込まれ、身動きが出来なくなっているバクフーン達の仲間を始末しようとしているダークネス。今彼はフレイムシティを目視出来る距離まで近づいていた。

「逃げんなダークネス！　俺達と戦え！」

そんなダークネスを必死に追い掛けるバクフーン、リザードン、ヒトカゲ、ブラキオ、ホウオウの５人。

「……本当にしつこい連中だな。ヒードランの奴、まともな足止めも出来ないのか……」

後ろから追い掛けてくるバクフーン達をちらっと見ながら、ヒードランに悪態をつくダークネス。

（このままじゃダークネスに追いつけない……バクフーン兄ちゃんが言ってた事、やるしかないみたい）

バクフーンの背中に乗っているヒトカゲは、追い掛ける前にサイクスに言われた事を思い出していた。ヒトカゲは言われた事を実行しようと、深く息を吸い、そして大きな声を出してダークネスに言い放つ。

「僕達から逃げる事しか出来ないのか！　さては僕達が怖いんだな、臆病者のダークネス！」

言い放った言葉……それはダークネスを挑発するような内容だった。
ヒトカゲがサイクスに言われた事……それはダークネスを挑発する事だった。
サイクス曰く、ああいうタイプは挑発すれば乗ってくるとの事。

「臆病者……だと？」

挑発を聞いたダークネスはヒトカゲを睨みつける。
そして若干ではあるが、飛行スピードが落ちてきている。

（あっ、本当に挑発に乗ってきた）

こんな簡単な挑発に乗ってくるとは思ってなかったヒトカゲは少し驚く。だが同時にこれはチャンスと思ったヒトカゲはさらにダークネスを挑発する。

「そうさ！　今までグラードンやレックウザ、そしてヒードランを出して僕達に戦わせておいて、自分は逃げるだけじゃないか！　ダークネス、お前は臆病者なんだよ！」

思いついた事を全部言ったヒトカゲ。
そしてヒトカゲの挑発を聞いたダークネスはその場で静止、ゆっくりと地上へ降下していく。
ヒトカゲの挑発に頭にきたのか、体からは禍々しい黒いオーラが吹き出している。

「どうやら今すぐ死にたいらしいな……ならば望み通りにしてやるぞ！」

（うわっ、めちゃめちゃ怒ってるよ）

想像していた以上に怒りを露(あらわ)にしているダークネスを見て苦笑いするヒトカゲ。

「一瞬で終わらせてやる……」

ダークネスは両手を空に向け翳(かざ)す。

すると、ダークネスの頭上に黒いエネルギー弾が出現。それはどんどん大きくなっていく。

その大きさはホウオウの体長よりも一回り大きい。

「消えてしまえ！」

空に向けて翳していた両手を一気に振り下ろすダークネス。刹那(せつな)、巨大な黒いエネルギー弾はバクフーン達に向かって飛んでいく。

「破壊光線！」

「ソーラービーム！」

『オーバーヒート！』

ホウオウとブラキオは口から強力なエネルギー波を、バクフーンとリザードン、そしてヒトカゲは口から強力な炎を吐き出してダークネスが放った黒いエネルギー弾にぶつける。全員の技がぶつかり合った刹那、凄まじい爆発が発生する。

「おわっ！？」

爆発の衝撃でバクフーン達は後方へ大きく吹き飛ばされてしまう。

「まずは貴様からだ！」

爆発の衝撃を物ともせずに、ダークネスはヒトカゲに向かって突っ込んでいく。

「させん！　ブレイブバード！」

体勢を立て直したホウオウは凄い勢いでダークネスに突っ込んでいく。

「ちっ！」

ホウオウが突っ込んでくる事に気づいたダークネスはヒトカゲに向かうの中断、すぐさま後方へ下がりブレイブバードを回避する。

「電光石火！」

攻撃のチャンスだと思ったバクフーンは電光石火でダークネスに突っ込んでいく。

「アシストするぜバクフーン！　追い風！」

リザードンは両翼を力強く羽ばたかせ風を生み出す。それが追い風となり、バクフーンのスピードをさらにアップさせる。

「くらえ！」

追い風によってスピードが強化された電光石火を回避出来ず、ダークネスはまともに受ける。

「僕もいるよ！」

リザードンが使った追い風によってスピードが上がったのはバクフーンだけではなかった。

ブラキオも追い風を受け、凄いスピードでバクフーンの後に続いていたのだ。つるのムチを地面に強く叩きつける事によってブラキオの巨体は空高く飛び上がり、ダークネス目掛けて落下していく。

「離れてバクフーン！　のしかかり！」

電光石火で素早くバクフーンはダークネスから離れる。そしてブラキオの攻撃がダークネスに直撃、ブラキオの下敷きになるダークネス。

「最後は僕だ！　離れててブラキオ、ブラストバーン！」

混沌語（カオス・ワーズ）で自身の能力を高めていたヒトカゲが、下敷きになっているダークネスに向けてオーバーヒートよりも強力な炎を放つ。

急いでブラキオはダークネスから離れる。

そしてヒトカゲが放ったブラストバーンがダークネスに直撃する。

刹那、巨大な火柱が発生してダークネスを包み込んでしまう。

「よし！」

自分が放ったブラストバーンが直撃し、ヒトカゲは小さくガッツポーズする。

「……ふふふ……それがお前達の攻撃か？　全然効かないなぁ」

その身をヒトカゲの炎で焼かれながらも、ダークネスは平気そうな顔をして起き上がった。

「えっ、効いてないの！？」

自分が放ったブラストバーンを受けても平気な顔をして起き上がったダークネスを見て驚愕するヒトカゲ。

「この炎、そっくりそのまま返すぞ！　サイコキネシス！」

ダークネスは強く念じる事で強力な念力を発動、自分を包み込んでいた炎をコントロールして丸い火炎弾に変化させ、ヒトカゲに向けて放つ。

「させないよ、守る！」

ヒトカゲを守るようにブラキオが前に立ちはだかる。そしてエネルギーの膜を作り出して自分とヒトカゲを包み込み、ダークネスが放った火炎弾を防御する。

「こいつ、火炎放射！」

ダークネスの背後に回り込んだリザードンが火炎放射を放ち、背中に直撃させる。しかし、直撃しているにも拘（かかわ）らずダークネスは平気な顔をする。

「無駄だよ。今の僕は時と空間、両方の力を合わせた強力なバリアで体をコーティングしてるからね」

ダークネスはディアルガとパルキアから奪い取った時と空間を操る力を使った特殊なバリアによって身を守っていたのだ。以前ダークライが使っていたのをダークネスは真似したのだ。

「だったら、そのバリアを破る攻撃をすれば良いんだろ！　電光石火からフレアドライブ！」

バクフーンは電光石火のスピードを維持したまま体を炎で覆い、ダークネスに向かって突進していく。バクフーンのスピードに反応出来なかったダークネスはフレアドライブを受け、後方へ大きく吹き飛ばされる……が、すぐさま体勢を立て直して体を宙に浮かばせる。やはりダメージは無いようで、ダークネスは余裕の表情だ。

「吹き飛べ！　ダーク・インパクト！」

ダークネスは全方位に向けて強力な衝撃波を放つ。ダーク・インパクトを受けてしまったバクフーン達は大きく後方へ吹き飛ばされる。

「痛ぇ……くそ、負けられるかよ！」

バクフーンはすぐに起き上がり、戦闘体勢に入る。他の皆も起き上がって戦闘体勢に。

「しぶとい奴らだ……だが、これで終わりに――」

「悪の波動！」

ダークネスが攻撃を放とうとした刹那、何処からか放たれた螺旋

状に回転するエネルギー波がダークネスに直撃、爆発が発生する。

「はあ、はあ……ま、待たせたな皆……」

『ダークライ！』

バクフーン達が見つめる先には、ヒードランとの戦いに勝利したダークライがいた。

しかし、ヒードランとの戦闘でかなり疲労している為、かなり辛そうにしている。

そんなダークライの所へバクフーン達は駆け寄る。

「お前、大丈夫なのか？」

ダークライの体を心配したバクフーンは尋ねる。本当は辛いダークライだが、笑みを浮かべながら「大丈夫だ」と答える。

「はあ……かなり手子摺（てこず）っているようだな。ここからは俺も一緒に戦うぞ」

1つ呼吸を整えてから、自分も一緒に戦うとバクフーン達に言うダークライ。

「……ヒードランを倒したのか……その様子だと、かなりやられたようだね？　まさかそんな状態で僕と戦うつもり？」

「そうだ……お前と戦うには良いハンデだろ」

笑みを浮かべながらダークライはダークネスを挑発する。

「ハンデだと……全く。どいつもこいつも僕をイライラさせる……うざいんだよお前ら！」

ダークライの簡単な挑発に怒りを露にするダークネス。そして両手を空に向けて翳し、巨大な黒いエネルギー弾を作り出す。最初に放った時よりも倍以上の大きさになっている。

「お、おい……あれヤバいんじゃねぇのか？」

ダークネスが作り出した巨大なエネルギー弾を見て、思わずリザードンは少し後退りしてしまう。

「心配するな……俺に任せろ」

バクフーン達の前にダークライが立つ。そして両手を前に翳す。

「我が内に宿りし闇の力、我に力を……ダーク・チャージ！」

ダークライの体から黒いオーラが溢れ出し始めた。闇の力を使い、次に自分が放つ技の威力を向上させる。充電に似た効果を持つダークライのオリジナル技だ。

（これで俺が使える闇の力はあと1回……この一撃で決めてみせる！）

ダークライは残り僅かな闇の力を使い、ダークネスを倒すつもりらしい。

「全員まとめて……消えてしまえ！」

ついにダークネスは巨大な黒いエネルギー弾をバクフーン達に向けて放った。

「はあぁぁぁ！」

ダークライは両手で小さな黒いエネルギー弾を作り出す。刹那、ダークネスが放った巨大なエネルギー弾が小さなエネルギー弾に吸い寄せられていく。ダークライはヒードラン戦で使ったあの技を使うつもりなのだ。

しばらくすると、ダークネスが放った攻撃はダークライの作り出したエネルギー弾に吸収されてしまった。

「これで終わりだダークネス！　ギガ・ダーク・ブレイカー！」

吸収したエネルギーを倍に膨らませ、ダーク・チャージによってさらに威力を倍増させた超強力な極太のエネルギー波を放つダークライ。

ギガ・ダーク・ブレイカーはダークネスに直撃……すると、体をコーティングしていたバリアは一瞬で消し飛び、ギガ・ダーク・ブレイカーに完全に飲み込まれてしまうダークネス。

ダークネスは大きく後方へと吹き飛ばされていった。

「はあ、はあ……くっ」

「ダークライ！」

体力の限界に達したダークライは倒れそうになるが、バクフーンがダークライを支えてあげて倒れないようにする。

「ダークライ、お前すげーよ！　あんな技今まで見た事ねぇ！」

ダークライが放ったダーク・ブレイカーに感動しているバクフーン。

「俺のとっておきだからな……ダークネスは？」

ダークライはダークネスの方に目を向ける。

バクフーン達もダークネスに目を向け、そしてダークネスが倒れたままピクリとも動かない事を確認する。

「……どうやらやったみたいだね」

ダークネスを倒した……そう思ったブラキオはほっとした表情を浮かべながら呟く。

「……いや、まだだ」

倒れているダークネスを睨みつけたまま、ホウオウはそう呟く。

刹那、ダークネス……いや、ミュウツーの体から黒いオーラが吹き出し、ミュウツーから離れていく。ミュウツーから離れた黒いオーラは球体となり、宙に浮かぶ。

「本気で怒ったぞ貴様ら！　皆殺しにしてやる！」

球体からダークネスの声が発せられる。

興奮したような口調からして、かなり怒っているようだ。

そして球体のダークネスに変化が起こる。

第百三十三話　最終決戦！　ＶＳダークネス！　前編（後書き）

バクフーン
「わっ、ダーク・ブレイカー出た！」

リザードン
「しかも強化したバージョンだな。作者曰く、某アニメの魔力ブーストしたド○○・スレ○○を意識した感じにしたらしいぞ？」

バクフーン
「……それ、わかる奴いるかな？（汗）」

リザードン
「わかる奴にはわかるさ。それより、ダークネスはしぶといなぁ（汗）」

バクフーン
「だよなぁ（汗）倒したと思ったらミュウツーの体から出てくるし（汗）」

リザードン
「しかも何か変化が起きたときた（汗）」

バクフーン
「どんな変化が起きたんだ？」

リザードン
「それは次回わかるんだと」

ラグラージ
「……良いなぁ、あんなに皆目立ってて……僕なんか全然なのに……」

リザードン
「そんな隅っこでのの字を書くなよ（汗）」

第百三十四話　最終決戦！　ＶＳダークネス！　中編（前書き）

バクフーン
「ん、中編？　後編じゃねぇの？」

リザードン
「中編らしいぞ」

ラグラージ
「って事は――むぐっ！？」

リザードン
「そっから先は喋るなよ？」

バクフーン
「リザードンがラグラージの口を両手で押さえてる（汗）」

第百三十四話　最終決戦！　ＶＳダークネス！　中編

ダークネスに起きた変化……球体からどんどん形が変わっていこうとしているのだ。

ダークネスの変身が完了するまで時間は掛からなかった。

「お、おい……あの姿ってまさか……」

ダークネスが変身した姿を見てバクフーン達は驚きを隠せない様子。

「我と同じ姿、だと？」

特に驚いているのはホウオウだ。何故なら、ダークネスが変身した姿はホウオウと全く同じだったからだ。

唯一違うのは、ホウオウの特徴でもある七色に輝く体が漆黒に染まっているところだ。さらに目が赤く光っている。

「殺す……殺してやる。僕の邪魔をした貴様ら全員、殺してやる！」

怒り狂うダークネスの体から禍々しい黒いオーラがまるで炎のように吹き出している。

「姿は我と同じでも、中身は邪悪な闇という訳か……ん？」

ホウオウの視界に倒れているミュウツーの姿が入る。弱々しいが、まだ息をしている。

「どうした？」

「あの者……まだ生きているようだ」

バクフーンの問いにホウオウはミュウツーを見つめながら答える。
それを聞いたバクフーン達は少し驚いた表情を浮かべながら、ミュウツーの方に目線を向ける。。

「……本当だ、まだ息してるよ！」

弱々しくも息をしているミュウツーを見て、思わず声を上げるヒトカゲ。

「しかし、あのままにしておけばあの者は死んでしまう。早く治療をしなくては……」

「だったら、僕のヒーリングサークルで彼を治療するよ」

ブラキオは自分の力を使ってミュウツーを助けるとホウオウに申し出る。

「確かにそなたのヒーリングサークルならあの者を助けられる。しかし、あの傷ではすぐに治す事は無理だろう。ヒーリングサークルを発動している間にダークネスに狙われたらお終いだ」

「じゃあどうすんだよ？」

首を傾げながら質問するバクフーン。
すると、ホウオウは徐(おもむろ)に自分の翼から七色に輝く羽を1本抜き取り、バクフーンに手渡す。

「それをあの者に与えるのだ。我の羽にはあらゆる傷を癒やす力があるからな」

「そんな力があるんかこの羽！？」

七色に輝く羽にはどんな傷も癒やす効果がある……それを聞いたバクフーンは羽を見ながら驚きの声を上げる。

「我が奴に攻撃を仕掛けて注意を引きつける。その間にミュウツーに羽を与え、傷を癒やすのだ」

「わかった」

バクフーンは頷いて答える。他の皆も同じように頷く。

「よし……では行くぞ！　火炎放射！」

ホウオウは口から強力な炎を吐き出し、ダークネスに向けて放つ。

「ダークファイア！」

ダークネスは口から黒い炎を吐き出し、ホウオウの火炎放射にぶつける。２つの技がぶつかり合った瞬間爆発が発生する。

「ダークネスよ、我についてこれるか！」

ホウオウは力強く翼を羽ばたかせ、空高く飛翔する。

「逃がすか！」

ホウオウを追い掛ける為、ダークネスも空高く飛翔する。
そして互いに火炎放射とダークファイアを撃ち合い、激しい空中戦が始まる。

「よし、今だ！」

その間にバクフーン達は急いで倒れているミュウツーの所へ向かう。

「この羽をこいつに……」

バクフーンはホウオウから受け取った七色に輝く羽をミュウツーの体に当てる。
すると、七色に輝いていた光がさらに強まり始める。光は優しくミュウツーを包み込み、どんどん体中にあった傷を治していく。しばらくすると光は消え、ミュウツーの体にあった傷は全て治っていた。

「すげー……傷が全部治った」

傷が全部治っているのを見て驚いているバクフーン。一方のミュウツーは、まだ意識を失ったままだ。

「このままここに彼を置いておくのはマズいね……何処か安全な場所に避難させた方が良いね」

ミュウツーを安全な場所に避難させようと提案するブラキオ。

「そうだな……だったらすぐ近くに砂浜があるからそこに連れていこう」

リザードンの提案で、ミュウツーをフレイムシティの近くにある砂浜へ避難させる事にするバクフーン達。
一方ダークネスと戦っているホウオウは……

「火炎放射！」

まだダークネスとの激しい空中戦を続けていた。ホウオウが放った火炎放射はダークネスに直撃する。

「無駄無駄ぁー！」

しかし、ダークネスはまたしても時と空間の力を使ったバリアで体をコーティングし、ホウオウの攻撃を全て無効化していた。ダークネスは真っ直ぐホウオウに突っ込んでいく。

「くっ、影分身！」

ホウオウは影分身で自分の幻影を無数に作り出し、ダークネスを攪乱（かくらん）。構わず突っ込むダークネスだが、攻撃は本体にではなく幻影に直撃する。

「オーバーヒート！」

ダークネスの背後を取ったホウオウは火炎放射よりも強力な炎を吐き出し、背中に直撃させる。
しかし、やはりバリアによって攻撃が無効化されてしまう。

「オーバーヒートでもダメか……ならば、我が奥義で破ってみせる！　聖なる炎！」

ホウオウは自身を神聖なる炎で包み込む。
聖なる炎に包まれたホウオウの七色に輝く体はより一層輝きを増す。
その姿はまるで不死鳥のようである。

「受けてみよダークネス！　我が奥義……ゴッド・フェニックス！」

聖なる炎に身に纏ったホウオウは凄い勢いでダークネスに突っ込んでいく。
聖なる炎とゴッドバードを組み合わせたホウオウのコンビネーション攻撃である。
ホウオウのゴッド・フェニックスはダークネスのバリアを突き破り本体に直撃、大きく後方へ吹き飛ばさせる。

「くっ、うぅ……僕のバリアがまた破られるなんて……」

すぐに体勢を立て直してきたダークネス。
ホウオウのゴッド・フェニックスはバリアによって威力が若干弱まったらしく、ダークネスにはあまりダメージがないようだ。

（奴のバリアは消えた……一気に叩く！）

今が攻めるチャンスと思ったホウオウは、再びゴッド・フェニックスを発動する。

「ゴッド・フェニックスか……なら僕はこうだ！　ダークファイアー！」

ダークネスはダークファイアで自身の体を包み込んだ。そしてゴ

ッドバードも発動させる。

「何!?」

「ダーク・フェニックス……今の僕は貴様と同じホウオウだ。貴様に出来て、僕に出来ない訳がないだろ?」

不気味な笑みを浮かべるダークネス。

一方ミュウツーを避難させる為に移動していたバクフーン達は砂浜にやってきていた。

「よし、ここなら大丈夫だろ」

背負っていたミュウツーを砂浜に寝かせるバクフーン。

「ダークライ、お前もミュウツーと一緒にここで待っててくれ。力を使い果たして、もう戦える状態じゃないんだろ?」

ダークライの体を考え、ミュウツーと一緒に待っていてほしいと言うバクフーン。

「し、しかし……」

「心配すんなって。俺達は負けたりしねぇからさ、なっ?」

笑みを浮かべ、俺達は負けたりしないと自信たっぷりに言うバクフーン。ダークライを心配させない為の、彼なりの優しさである。

「……わかった。絶対に負けるなよ」

「おう！」

笑みを浮かべながら親指を突き立てるバクフーン。刹那、遠くの方で何かがぶつかり合ったような凄い衝撃音が響き渡ってくる。

「な、なんだ！？」

バクフーン達は衝撃音がした方に視線を向ける。その先にはホウオウとダークネスがゴッド・フェニックスとダーク・フェニックスで何度もぶつかり合っていた。

「はあ、はあ……」

何度もぶつかり合っていくうちに体力をどんどん消費していくホウオウ。少し苦しそうな表情を浮かべる。

「いい加減くたばれ！」

ダークネスは再びダーク・フェニックスで攻撃を仕掛けてきた。これをホウオウはゴッド・フェニックスで迎え撃つが、疲労が蓄積したホウオウの攻撃にはパワーがない。ゴッド・フェニックスは打ち破られ、ホウオウにダーク・フェニックスが直撃してしまう。

「がはっ！？」

ホウオウはバクフーン達がいた砂浜まで吹き飛ばされてしまう。

「ホウオウ！？」

バクフーン達は慌ててホウオウの所へ駆け寄る。

「大丈夫かホウオウ？」

「な、なんとかな……」

ふらふらになりながらも立ち上がるホウオウ。

「手子摺(てこず)らせやがって……だがこれで終わりにしてやる！」

ダークネスは再びダーク・フェニックスを発動させ、バクフーン達に向かって突っ込んでいく。

「そうはさせないよ！」

ブラキオは体に力を入れる。刹那、首にある花びらが紫色に光り輝き始める。

「バインディングプラント！」

地面から樹木の根が無数に飛び出し、ダークネスの体に巻きついて捕縛する。

「なっ、何！？」

もがくダークネスだが、バインディングプラントから抜け出せな

い。

「今だよ皆！」

大きな声で合図を送るブラキオ。刹那、ブラキオの首にある花びらが紫色から虹色に輝き始める。

「生命を与えし七色の神よ……」

ヒトカゲは目を閉じてから両手を合わせ、もう1つの詠唱――混沌語（カオス・ワーズ）を唱え始める。

「我に力を授けよ　我ここに誓う　我と汝の力ここに集結し時　全ての悪を持つものに　悪の滅びと善の再生を与えん　また誓う　全ての善を持つものに　清らかなる生けし力を与えん！」

混沌語を唱え終えるとヒトカゲは攻撃体勢に入る。

「俺達もいくぜバクフーン！」

「当然だぜ！　はあぁぁぁ！」

バクフーンとリザードンは互いにブラストモードになり、エネルギーを集める。

「我に残された全ての力……この一撃に込める！」

ホウオウも残された力を口に集め、巨大なエネルギー弾を作り出す。

「……導かれし光、悪しき者を貫く希望の光となれ！　ソーラーキャノン！」

ブラキオは口からソーラービームよりも遥かに強力なエネルギー波を吐き出し、ダークネスに向けて放つ。

『ブラストバーン！』

もう1つの混沌語で強化されヒトカゲのブラストバーン。そしてブラストモードになったバクフーンとリザードンが最大パワーで放ったブラストバーン。3つのブラストバーンは1つに合わさり、巨大な炎の塊となってダークネスに向かっていく。

「破壊光線！」

ホウオウは全エネルギーを集めたエネルギー波を口から吐き出す。全員が放った攻撃はバインディングプラントで動きを封じられたダークネスに直撃し、凄まじい爆発を発生させる。

あまりに強力な爆発だった為、その衝撃でバクフーン達は後方へ吹き飛ばされてしまう。

「な、なんだあの爆発！？」

ダークネスにバクフーン達の攻撃が直撃した時、ダーク・レックウザとダーク・グラードンを倒したアクセル達やサイクス達は時が停止した影響で固まっている海の上を移動していた。

全員、今の爆発を目撃して驚いている様子。

「彼処でバクフーン達が戦ってんだな……おいてめぇら、急ぐぞ！」

パルキアを先頭に、皆急いでバクフーン達の所へと向かっていく。

「痛ぇっ……」

爆発の衝撃で吹き飛ばされたバクフーンが右手で頭を押さえながらゆっくりと起き上がる。

バクフーンの周りでは、ブラキオやヒトカゲ達が倒れていた。

「皆、大丈夫か？」

バクフーンは皆に声を掛ける。それを聞いたブラキオやヒトカゲ達は皆ゆっくりと起き上がる。

（良かった、皆無事みたいだ……あっ、ダークネスは！）

バクフーンはダークネスがいた方に目を向ける。まだ爆発で発生した爆煙が立ち込めていて、ダークネスの姿を確認出来ない。

「やった、のかな……？」

爆煙を見つめながら首を傾げるヒトカゲ。

しばらくすると爆煙が晴れていった……

「はあ、はあ……まさか、この僕がここまで追いつめられるなんてね……」

ダークネスはまだやられてはいなかった。
しかしバクフーン達が放った攻撃が効いたようで、ホウオウの姿ではなくなり球体に戻っていた。

「まだ倒れないのかよあいつ……いい加減しつこいぞ」

しぶとく生きているダークネスを見てバクフーンは勘弁してくれといった表情を浮かべる。

「ここまで僕を追い込んだ事は誉めてあげるよ……だけど、最後に勝つのは僕だ！」

そう言い放つと、ダークネスは球体の状態でバクフーン達に向かって突っ込んでいく。

「火炎放射！」

向かってくるダークネスに向けてバクフーンは火炎放射を放つ。
しかし、ダークネスに紙一重で回避されてしまう。

「貴様の体、僕が頂く！」

「しまっ――」

一気にバクフーンに接近したダークネス。
そして体をドーム状に変化させ、バクフーンを飲み込んでしまう。

第百三十四話　最終決戦！　ＶＳダークネス！　中編（後書き）

バクフーン
「ちょっ!?　俺どうなんの!?」

リザードン
「まあ焦んなよ。それは次回にならんとわからねぇんだから」

ラグラージ
「なんでそんな冷静?（汗）」

リザードン
「これでもビックリしてんだ……」

ボトッ、台本を落とす。

リザードン
「あっ（汗）」

ラグラージ
「台本……」

バクフーン
「それをよこせぇー!」

リザードン
「ダメだっての!?　お前見たら絶対暴露するだろ!?」

バクフーン

「絶対暴露しないからよこせぇー！」

ラグラージ

「……（汗）」

第百三十五話　最終決戦！　ＶＳダークネス！　後編（前書き）

バクフーン
「ついに決着……俺マジどうなんだ？（汗）」

ラグラージ
「それは本編見ればわかる、でしょ？」

リザードン
「そういう事だ……ちなみに読者の皆、今回バクフーンが新技を披露するからな（小声）」

第百三十五話　最終決戦！　ＶＳダークネス！　後編

一瞬の隙を突きバクフーンを飲み込んでしまったダークネス。
黒いドーム状に変化したダークネスに飲み込まれたバクフーンの姿は外からでは確認出来ない。

「バクフーン！？」

バクフーンを助け出そうと思ったリザードンは駆け寄ろうとする。
しかし、そんなリザードンをホウオウが止める。

「待てリザードン、今行けばお前までダークネスに飲み込まれるぞ！」

「だ、だけどバクフーンが！？」

「落ち着けリザードン！　心配するな、バクフーンはまだ無事だ。感じるんだ……今バクフーンは、あの中でダークネスと戦っている」

「なんだ……ここ？」

何処を見渡しても何も存在しない真っ暗な空間。そんな空間にバクフーンは１人でいた。

「……そうか。俺、ダークネスに飲み込まれたんだっけ」

「そういう事さ」

突然真っ暗な空間に響き渡るダークネスの声。その声を聞いたバクフーンは警戒して戦闘体勢に入る。

「ここは君の精神世界。今から僕は君の精神を破壊し、体を奪う……ふふふ、君の体で仲間達を皆殺しにするなんて最高だね」

「ふざけんな！　俺はお前なんかに絶対負けない！　そして誰も殺させはしない！」

バクフーンの背中から勢い良く炎が吹き出す。

仲間を殺させないという思いからか、バクフーンの表情はいつも以上に険しくなる。

「言うねぇ……だけど、いつまでそんな強がりを言ってられるかな？」

ダークネスがそう言うと、突然真っ暗だった空間が眩しい光に包まれる。あまりの眩しさにバクフーンは目を開けていられず、思わず目を瞑る。

しばらくすると光は消えていき、バクフーンはゆっくりと目を開ける。

「これは……」

先程まで何もなかった空間はポケモンバトルを行う為の競技場に

変化していた。突然の事にバクフーンは驚きの表情を浮かべる。

「本来なら君にとって大切な存在が消えるという幻影を見せ、精神攻撃を仕掛けたいところだけど……君の心はかなり強いみたいだからこれは通用しない。だから、シンプルな方法でやらせてもらう」

再びダークネスの声が周囲に響き渡る。

それと同時に競技場の中心から黒い球体のダークネスが姿を現す。

「ダークネス！」

ダークネスの姿を確認したバクフーンはすぐに身構える。そして背中から吹き出していた炎は勢いを増し、体全体を包み込む――ブラストモードである。

「君を僕自身の手で殺す。この世界で死ねば君の精神は完璧に崩壊する……そして君の体は僕が有効活用させてもらうよ」

ダークネスの体から黒いオーラが吹き出すように現れ、そして体に変化が起きる。

少しずつ大きくなり、手足が生える。そして頭も生え、顔は少しネズミに近い感じになる。

そして小さな丸い三角形の耳、フサフサとした体毛が生えたところでダークネスの変化は止まる。変化したダークネスの姿を見て、バクフーンは驚きの表情を浮かべる。

「俺と同じ……バクフーン？」

ダークネスはバクフーンに変身していたのだ。

しかし、通常と違い全身は黒く、目は赤く光っている。

「さぁ、始めようか……死のバトルをね！」

ダークネスは口から黒い炎を勢い良く吐き出し、バクフーンに向けて放つ。不意を突かれたバクフーンだが、慌てる事なく体を屈めてこの攻撃を回避する。

「電光石火！」

低い姿勢のままバクフーンは素早い身の熟しでダークネスに接近していく。そしてダークネスの目の前までくると、両手を使ってエネルギー弾を作り出す。

「気合い玉！」

ゼロ距離でバクフーンはダークネスにエネルギー弾を放つ。放たれたエネルギー弾はダークネスの腹部に直撃して爆発を起こし、大きく後方へ吹き飛ばす。

「その程度の攻撃、効かないね！」

吹き飛ばされたダークネスだがすぐに体勢を立て直し、背中から黒い炎を勢い良く吹き出す。

吹き出された黒い炎はダークネスの全身を包み込む。そしてその状態を維持したままダークネスは素早い身の熟しでバクフーンに向かって突っ込んでいく。

「火炎車！」

それに対してバクフーンは自身を包み込んでいる炎の火力を上げ、

向かってくるダークネス目掛けて走る。そして互いの技がぶつかり合い、爆発が発生する。

爆発の衝撃でバクフーンとダークネスは後方へ吹き飛ばされるが、またすぐに体勢を立て直して同じ技で互いにぶつかり合う。ぶつかり合っては吹き飛び、ぶつかり合っては吹き飛び……これを2人は何度も繰り返す。

「このままじゃきりがないな……一気に決める！　フレアドライブ！」

流れを変える為、バクフーンは自身を包み込んでいる炎の火力を最大にまで上げてダークネスに突っ込んでいく。

「甘いね、電光石火！」

バクフーンにぶつかる寸前でダークネスは素早い身の熟しで攻撃を回避、バクフーンの真横に回り込む。そしてダークネスはバクフーンの脇腹に強力な頭突きを直撃させる。

「がはっ！？」

頭突きを脇腹に受けたバクフーンは横に吹き飛ばされ、体勢を立て直す事が出来ずに倒れてしまう。

「痛ぇ……」

右手で脇腹を押さえ、苦痛で表情を歪めるバクフーン。

「その苦痛で歪んだ表情、最高だねぇ。だけどまだ足りないな……もっと苦しんでもらうよ」

不気味な笑みを浮かべながら、ダークネスは両手で黒いエネルギー弾を作り出し、それをバクフーンに向けて放つ。

「くっ!?」

バクフーンは痛みを堪(こら)えて起き上がり、エネルギー弾の直撃を避ける為に後方へバックステップする。バックステップした事によって直撃は回避出来たが、エネルギー弾が地面に直撃した時に大きな爆発が起こり、その時に発生した爆風でバクフーンは大きく後方へ吹き飛ばされてしまう。だが今回はなんとか体勢を立て直し、安全に着地する。

「爆風でこの威力かよ……直撃したら、マジでやべぇな……」

ダークネスが放ったエネルギー弾の威力を見て冷や汗をかくバクフーン。

「何を余所見(よそみ)してるのかな?」

いつの間にかバクフーンの背後に回り込んでいたダークネス。
そして右手でバクフーンの首をしっかりと掴み、持ち上げて宙吊り状態にする。

(く、苦しい……)

首を強く絞められ、呼吸が出来なくなってしまったバクフーンは苦悶(くもん)の表情を浮かべる。
なんとか抜け出そうともがくバクフーンだが、ダークネスの力は強くてなかなか抜け出せない。

「さぁ、そろそろ終わりにしようか。君を殺した後に君の仲間を全員殺し、そして世界中にいる全てのポケモンを殺すんだ」

そう言いながら不気味な笑みを浮かべるダークネス。そして左手にエネルギーを集め、黒いエネルギー弾を作り出す。

「な、んで……お前は、ポケモンを……殺す、んだ？」

首を絞められ、蚊の鳴くような掠(かす)れた小さな声しか出せなかったが、バクフーンは何故ポケモンを殺すのかとダークネスに尋ねる。

「ポケモン達の妬み、恨み、憎しみ……心に生まれた負の感情。僕はそれらの心の闇が集まって生まれた存在なんだ。ポケモン達を殺す理由なんて簡単だよ？　ただ目の前にいるポケモンを殺したい……それだけさ」

バクフーンの問いに答えると、ダークネスはさらに首を絞める力を強める。

「がっ……」

強く絞められた事によりバクフーンの意識レベルが低下していく。それにより、バクフーンを包み込んでいたブラストモードの炎が消えてしまった。

（く、そ……俺、死んじゃうのか……？）

戦意を失い諦めかけていた時、バクフーンの脳裏に仲間達と出会った思い出が走馬灯のように蘇る。

（リザードン、ブラキオ、ヒトカゲ、皆……俺が死んだら、皆ダークネスに……）

自分が死んでしまえば、大切な仲間達が殺されてしまう……そう思った時、バクフーンの体に自然と力が漲（みなぎ）ってきた。殺させはしない、皆は絶対に自分が守る……そう心に決めたから。

（負けない……負けられない！　皆は……俺が守るんだ！）

戦意を取り戻したバクフーンは背中から勢い良く炎を吹き出す。その炎はあっという間に全身を包み込む――ブラストモードだ。

「今更（あが）足掻いても遅い！　くらえ――」

「オーバーヒート！」

ダークネスが技を放つよりも先にバクフーンは口から炎エネルギーを凝縮した強力なエネルギー波を吐き出し、ダークネスの顔に直撃させる。

大技をまともに受けたダークネスは大きく後方へ転がりながら吹き飛んでいく。拘束から解放されたバクフーンはたっぷりと息を吸う。

「くっ……この、くたばり損ないがぁ！」

吹き飛ばされたダークネスはすぐに起き上がり、鬼のような形相でバクフーンに向かって突っ込んでいく。

「俺は……俺は絶対に負けない……天照（アマテラス）！」

バクフーンは体を包み込んでいる炎の火力を最大にし、バトルフィールド全体に炎を展開する。
咄嗟に思いついた、バクフーンのオリジナル技である。

「なっ！？　ぐあぁぁぁ！？」

バクフーンの炎に完全に体を包まれてしまったダークネスは倒れ込み、悶え苦しむ。

「俺は……絶対に負けない！　俺の中から出ていけ！」

「お、おいあれ見ろ！」

現実世界でバクフーンの無事を祈りながら見守っていたリザードン達。
バクフーンを飲み込んでいた黒いドームが少しずつバクフーンから離れていくのを確認したリザードンは、それを指差しながら他の皆に伝える。
そして黒いドームは完全にバクフーンから離れ、再び球体に戻り宙に浮かぶ。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

ダークネスを追い出す事に成功したバクフーンはかなり疲労しているようで、地に跪いて苦しそうに息をする。

「バクフーン！」

バクフーンの所へリザードンとブラキオ、そしてヒトカゲとホウオウが駆け寄る。

「くっ……まさか、あいつにまだあんな力があったなんて。もう、僕に力は残ってない……逃げた方が良さそうだね」

力を使い果たしてしまったダークネスはこの場から逃げ出そうとする。

「てめぇ、一体何処に行くつもりだ？」

ダークネスの行く手を阻むように2人のポケモンが立ち塞がる。ディアルガとパルキアだ。そして地上にはサイクス達やアクセル達もいる。

「もう貴様に逃げ道はない。覚悟するんだな」

口にエネルギーを集め、いつでも攻撃出来るように準備するディアルガ。パルキアも両手でエネルギー弾を作り出し、いつでも攻撃出来るように準備する。

「……ふっ、ふふふ……」

「何笑っていやがる？　気でも触れたか？」

不気味に笑うダークネスを理解出来ないパルキアは首を傾げる。

「僕は消えない……この世界に住むポケモン達の心に闇がある限り、僕は何度でも蘇るんだ」

何度でも蘇る……それを聞いたパルキア達は驚きの表情を浮かべる。

「だから、今この場で僕を倒しても結局は無駄――」

「んなもん関係ねぇ！」

ダークネスの言葉を遮るようにバクフーンが叫ぶ。

「お前が何度でも蘇るってんなら……俺達が何度でもお前をぶっ倒せば良いだけの話だ！」

背中から勢い良く炎を吹き出し、攻撃体勢に入るバクフーン。

それを合図に、他の皆も攻撃体勢に入る。

「これで最後だ、ダークネス！」

バクフーン達はそれぞれ自分が持つ得意技をダークネスに向けて放つ。

「はっ、ははは……僕は……僕はねっ！？」

それぞれが放った技はダークネスに直撃、凄まじい爆発が発生する。

ホウオウの聖なる力を宿したバクフーン達が放った攻撃に耐える

事が出来なかったダークネスは光の粒子となり、消滅した。

「……終わった、ふぅ～……」

ダークネスが完全に消滅したのを確認すると、疲れ果てたバクフーンはその場に座り込む。

「ん？　なんだあれ？」

その時、リザードンは空に浮かぶ2つの光を発見する。1つは淡い青色、もう1つは淡いピンク色の輝きを放っている。

「あれは私とパルキアの時を操る力と空間を操る力だ」

ディアルガとパルキアはそれぞれ、2つの光の前まで飛んでいく。淡い青色の光を放ったエネルギーはディアルガに、そして淡いピンク色の光を放ったエネルギーはパルキアに。それぞれの体の中へ溶け込むようにして入っていく。

「ようやく戻ってきたか、俺達の力がよ」

両手で握り拳を作ったり解いたりして、力が戻ってきた事を確かめるパルキア。

「そうだな……さぁ、停止してしまった時間を元に戻さなければ」

ディアルガは体に力を入れる。すると、胸元にあるダイヤモンドのような宝石が光り輝き始める。

「我に宿りし時を操る力……その力を解放し、再び時を動かせ！」

光がより一層強くなる。強くなった光はディアルガを中心に広がっていき、時間が停止してしまった世界全体を覆う。

2002

第百三十五話　最終決戦！　ＶＳダークネス！　後編（後書き）

バクフーン
「勝ったどぉー！（笑）」

ラグラージ
「長かったねぇ（汗）それよりバクフーン、あんな技持ってたんだ？」

バクフーン
「あれ、思いつきでやっただけ（笑）」

ラグラージ
「マジですか（汗）」

リザードン
「バクフーンらしいよな（汗）さて次回は、お祭りだ（笑）」

バクフーン
「祭り！（笑）」

ラグラージ
「……フィルにサイクス、僕のお金だけじゃ絶対足りないから協力お願い（汗）」

リザードン
「なんか頼んでるし（汗）」

第百三十六話　パーティーでお祭り騒ぎ！（前書き）

やっとこさ出来た～（汗）

バクフーン
「あっ、作者だ」

リザードン
「なんで作者がいるんだ？」

ちょっと発表したい事があるからね、それで来たんだよ。

バクフーン
「何発表するん？」

それは……後書きにて（笑）

リザードン
「今じゃないんかい（汗）」

2004

第百三十六話　パーティーでお祭り騒ぎ！

長き戦いの末、ついにダークネスに打ち勝つ事が出来たバクフーン達。

停止していた世界の時間も動き、再び平和な世界に戻る事が出来た。

ダークネスの配下となっていたアブソルやフーディン達はダークネスが消滅した事により、ダークポケモンから普通のポケモンに戻る。

しかしダークポケモンになっていた間の記憶は彼らには無いらしく、何故自分がここにいるのか全く分からなかったらしい。ダークネスの力で全員洗脳されていただけだったようだ。

ダークネスが消滅してから数日後、戦いで受けた傷もすっかり癒えたバクフーン達はダークネスを倒し、世界を守る事が出来た事を祝う為、ラグラージの家にある中庭に集まっていた。

中庭には長いテーブルがたくさん置かれ、その上には全員分の料理やお酒、ジュースなどが用意されている。

「皆、もう集まってるよね？」

中庭の中央で全員集まったかどうかを確認する為、ラグラージは周囲を見回す。

「当然集まってるって。なぁラグラージ、早く始めようぜ～！」

早く目の前にある料理に食いつきたいバクフーンは、口から涎(よだれ)を垂らしながら早く始めるようラグラージを急かす。

「はいはい分かったよ……それじゃ皆、パーティーの始まりだよ！」

ラグラージの言葉を聞き、皆は一斉に料理を食べ始めたり、飲み物を飲み始める。

「……ふぅ～、なんとか無事に始める事が出来たね。フィルにサイクス、協力してくれてありがとうね」

無事にパーティーを始める事が出来てほっと一安心するラグラージは、近くにいたフィルとサイクスにお礼を言う。

実はパーティーを始める為の資金援助をしてくれたのだ。

フィルはブイズコーポレーションと呼ばれる大きな会社の社長。

そしてサイクスは父親が大きな会社の社長をしている。

どちらもラグラージと同じ大富豪なのだ。

「気にすんなって、パーティーはやっぱ豪勢にやらないとさ。さて、あの肉料理食べよっ♪」

満面な笑みを浮かべながらサイクスは肉料理が並ぶテーブルに向かって走り出した。

「……サイクスって本当バクフーンに似てるとこがあるよねぇ。まさか、大食いだったりする？　いやまさかそこまで似てる訳が……」

「バクフーン兄ちゃんなら凄い食べるよ？」

料理を乗せた小皿を片手に持ちながら、美味しそうに料理を食べるヒトカゲがラグラージにサイクスは大食いである事を伝える。

「ほ、本当に？」

「うん。レストランで料理頼む時、このページに載ってる料理を全部下さいって言うくらいだからね」

ページに載ってる料理を全部頼む……それを聞いたラグラージは顔を青ざめる。

「確かフィルの仲間のラティアスも大食い、それに加えてサイクスとバクフーン……食料が全然足りない気がする……」

「安心して下さいラグラージさん、念の為に食料は多めに発注しときましたから。それにいざとなったら非常食もありますからね」

不気味な笑みを浮かべながらフィルはうしだを見つめる。

「俺は非常食じゃねぇっての！」

うしだは即座に自分は非常食ではないと否定する。しかしそんな事を聞くフィルではない為、「いえ立派な非常食ですよ」と涼しい顔で返答されてしまう。

「フィル、うしだ焼く時はミディアムレアでよろしくね」

とそこにブラキオが会話に入り込み、ミディアムレアでうしだを焼くように要求する。

「ってちょっと待て!?　なんでブラキオがそんな事を言うんだよ!」

「場の空気的に」

「いやそこは空気読まなくて良いとこだから!」

「これがパーティーというものか。賑やかで、なんだか楽しくなってくるな」

パーティーに招待されていたホウオウは、皆が楽しく賑やかにしているのを見て笑みを浮かべている。

「確かにそうですねホウオウ様」

ホウオウの隣にいたスイクンも笑みを浮かべながらパーティーを楽しんでいる皆を見つめる。

「しかし、よろしいのでしょうかホウオウ様?　我らがこのような場にいて……」

あまり賑やかなのには慣れていないようで、落ち着かない感じで

エンテイはホウオウに尋ねる。

「たまには良いではないかエンテイ。それに見てみろ、ライコウは存分に楽しんでいるぞ？」

そう言ってホウオウは前方を見つめる。

ホウオウが見つめる先にはドダイトスのクライド、そしてラティオスらと一緒に楽しく酒を飲んでいるライコウの姿があった。

「うん、結構美味いじゃんかこの酒！」

「ライコウ様、なかなかイケる口のようですな？　ささ、もう一杯いきましょう♪」

そう言ってクライドはライコウのグラスに酒を注ぐ。

「おっ、悪いねぇ♪」

「さぁ今日は宴だ、楽しんで飲むぞ！」

そう言ってラティオスは酒をゴクゴクと飲む。

それに続いてクライドとライコウも酒を飲む。

「……確かに楽しんでいるようですけど……ちょっと羽目を外しすぎじゃないですか？」

「まあそう言うなエンテイ。大目に見てやれ」

「あの……」

何者かがホウオウ達に話し掛けてきた。
声がした方に顔を向けるとそこにはダークネスの元配下だったアブソルがいた。

「そなたは……」

「どうしても言いたい事があってここに来ました。その……操られていたとはいえ、あなた達に大変な事をしてしまって……本当にすみませんでした！」

突然アブソルは深く頭を下げ、ホウオウ達に謝罪する。いきなりだったので、ホウオウ達は少し驚いてしまう。

「……顔を上げなさい」

歩み寄ったホウオウはアブソルに顔を上げるように言う。それを聞いたアブソルはゆっくりと顔を上げ、ホウオウを見つめる。

「そなたは何も悪くない。そなたはダークネスに操られていただけなのであろう？」

「だ、だけど……俺はあなた達を襲い、仲間達にも襲い掛かってしまった。それは許される事じゃ……」

「確かにそなたは我らに襲い掛かったが、それはダークネスの意志であってそなたの意志ではなかろう？　そなたが謝る必要などない」

ホウオウは優しく微笑みかけながら、アブソルに接する。

「ホウオウ様が仰る通りですよアブソル殿。あなたは悪くありませ

ん、私達はあなたの事を許しますよ」

スイクンもまた、ホウオウと同じように優しく微笑みかけながらアブソルに接する。

「……ありがとう、ございます……」

ホウオウ達の優しさに触れ、アブソルは思わず涙を流す。

パーティー会場の外、そこで1人空を眺めているポケモンがいた。体色は薄紫で姿は人型に近く、長い尻尾を持ち太股（ふともも）は少し太い。後頭部には背中と繋がっている管のような物がある。

「こんな所で何をしてるんだいミュウツー？」

片手に料理を乗せた小皿を持ったミュウがミュウツーに声を掛ける。

「……僕は人がたくさんいる所は初めてで……なんだか落ち着かないんです」

空を見つめたまま、ミュウの問いに答えるミュウツー。この世に生まれてからあまり日にちが経っていないからか、何処かまだ幼い雰囲気がある。

「そっか……ねぇ、隣良いかい？」

「あっ、はい」

ミュウツーの隣まで来たミュウはその場に座り込み、一緒に空を眺める。

「……あの、ミュウさん。１つ聞いても良いですか？」

「うん？　なんだい？」

「僕は、あなたの遺伝子から作り出されました。僕を作った人、ヤドキングに歯向かう者達を倒す為の道具として……」

話していくうちに気持ちが沈んできてしまったのか、ミュウツーは少しずつ俯いていく。

ミュウは黙ってミュウツーが言う事をしっかりと聞いている。

「戦闘兵器として作り出された僕はこの世に存在しちゃいけないんじゃないかって……思う事があるんです。ミュウさん、僕はこの世に存在しちゃいけないんでしょうか？」

自分は存在しちゃいけない命なのか、ミュウツーにそう質問されたミュウは腕組みをして考え始める。

「うーん、難しい質問だね……」

しばらく考え込むミュウ。そして考えが纏（まと）まったようで、ミュウは喋り始める。

「僕個人の考えで言うと、この世に存在しちゃいけない命なんてないって……僕は思うんだ。君は確かに作り出されたポケモンかもしれない。だけど、僕達と同じでこの世に生まれた命……生きていて良い命だと思うよ」

自分の考えを全てミュウツーに伝えたミュウ。

「……生きていて良い命……」

「うん。だから、君は今ある命を大切にして精一杯生きるんだ。君だけの命なんだからね」

優しく微笑みながら、ミュウは言う。

ミュウの言葉を聞き、暗かったミュウツーの表情は明るくなる。

2013

「ほう、なかなか良い酒を用意してやがんじゃねぇか」

再びパーティー会場内。パーティーに参加していたパルキアは用意されていた酒をがぶ飲みしていた。

「パルキア様、少し飲みすぎではないですか？　飲みすぎは体に毒ですよ」

次々と酒を飲み干すパルキアを見て、少し心配になったダークライは注意する。

「はん、こんくれぇは飲んだうちに入んねぇよ」

しかしパルキアはダークライの注意を聞かず、また酒を飲み始める。

「やれやれ……」

そんなパルキアを見て呆れた表情を浮かべるダークライ。

「……そういえばダークライ、あいつらは？」

何かを思い出したのか、酒を飲みながら急にパルキアはダークライに尋ねる。

「あいつら？」

何を言っているのか分からないダークライは首を傾げる。

「ほらあいつらだ。昔お前が部下にしてたっていう……」

部下……それを聞いたダークライは誰の事を言っていたのかを理解する。

「嗚呼（ああ）、フーディン達ですか？」

「そうそいつらだ！　あいつらこれからどうすんだ？」

「フーディン達は……俺と一緒に旅をする事になりましたよ」

ダークライと一緒に旅をする、それを聞いたパルキアは驚きの表情を浮かべる。

「旅!?　おい俺は何も聞いてねぇぞ!?」

「すみません、ディアルガ様にはすでに話していたんですが、パルキア様には言いそびれてしまって……」

申し訳なさそうにしながらダークライはパルキアに謝罪し、軽く頭を下げる。

「別に謝る事はねぇが……でもなんでまた急に旅に?」

「フーディン達は、昔の俺と同じでたくさん罪を犯してきました……だけど、変わる切っ掛けを与えればあいつらは変われると思うんです。ディアルガ様やパルキア様が俺に切っ掛けを与えてくれたように……だから、俺もあいつらが変われる為の切っ掛けを与えたいって思ったんです」

真剣な表情で、ダークライは自分の考えている事全てをパルキアに話した。

「なるほどな、そういう事か……だったら、お前を止める理由なんてないな。しっかりやりなよダークライ」

「はい!」

パルキアに旅へ出る事を認められ、ダークライは嬉しそうに笑み

を浮かべる。

「この料理美味っ♪　おかわりだおかわり♪」

余程料理が美味しいようで、バクフーンは次々と目の前にある料理を平らげていく。

「うん、これを作った料理人は良い腕してるわね。私もおかわりよ♪」

バクフーンと同じくらい食べているのはルーチェ。彼女もまた料理が気に入ったようでどんどん平らげる。

「いや～、なかなかイケるじゃんかこれ♪　俺もおかわりだ～♪」

そしてここにもバクフーンやルーチェに負けず劣らず食べているポケモンが1人、サイクスである。同じテーブルでどんどん料理を平らげていくなか、3人は目が合う。

（相変わらずルーチェは食うなぁ。だけど、サイクスまであんなに食うとは……）

（やっぱりバクフーンはよく食べるわね……でも、このサイクスって人も私達と同じくらい食べるなんて……）

（俺と同じくらい食べれる奴がこっちにもいるなんて驚いたな……）

3人共、自分と同じくらい食べる者がいて少し驚いているようだ。
そして3人共ある考えが頭の中で生まれる。

『負けられない！』

3人同時に口を揃えて言い、料理を食べるスピードを上げる。
最早大食い大会だ。
次々と料理を平らげていくバクフーン、ルーチェ、サイクス……
気がつけば3人の前には皿がタワーのように積まれている。それに気づいた周りにいるポケモン達はどんどんバクフーン達の所へ集まり始める。

「や、やっぱりこういう事になっちゃったよ……」

バクフーン達が大食い大会を始めてしまったのを見て、食料が足りなくなってしまうんじゃないか心配になり、表情を引きつらせるラグラージ。
そんなラグラージの気持ちを知る由（よし）も無いバクフーン達はハイペースで料理を平らげていく。

「も、もう食えねぇ……」

「私も～……」

「さ、さすがに限界だな……」

しばらくしてようやく限界に達したバクフーン、ルーチェ、サイクスは食べる事をやめる。

3人共お腹が大きく膨れていて、目の前には皿が積み重なって出来たタワーがいくつもあった。

数はほぼ同じ、3人共引き分けのようだ。

彼らが食べた量を見て、他の皆は口をあんぐり開けて驚いた表情をしている。まさに開いた口が塞がらない状態だ。

しかし、ただ1人だけは違った。

「まだ若いなお前達。それくらいでギブアップしてるようじゃ、まだまだだな」

そう言い放ったのはバクフーンの父親、グレンである。その場にいたポケモン達全員がグレンの方に顔を向ける。

グレンの前にはたくさんの皿が積み重なったタワーが出来上がっていた。数はバクフーン達の倍近くある。

「う、嘘……」

「俺らよりすっげー食ってるあの人……」

自分達よりも多く食べているグレンを見て驚愕するルーチェとサイクス。

「は、ははは……さすが父さん、勝てないや」

グレンが食べた量を見て苦笑いするバクフーン。

「うわぁ、バク君のお父さんって凄い食べるのねぇ……」

バクフーンに歩み寄ってきたのはレナだ。

バクフーンの父親、グレンが食べた量を見て驚きを隠せない様子。

「ようレナ」

「ねぇ、バク君。あの……大事な話があるんだけど……聞いてくれるかな？」

少し顔を赤面させながら、大事な話があるとバクフーンに伝えるレナ。

「大事な話？　なんだ大事な話って？」

首を傾げながらバクフーンはレナに尋ねる。

「うん。あのね、私バク君とずっと一緒にいたいって思ってるんだ……ダメ、かな？」

ずっとバクフーンと一緒にいたい……自分の気持ちをストレートに伝えたレナ。レナはバクフーンにプロポーズしたのである。

「えっと……つ、つまりそれってそういう事……だよな？」

状況を理解したバクフーンは顔を赤面させながらレナに尋ねる。

それにレナは頷いて応える。

そしてレナや周りにいるポケモン達はバクフーンの返答を待つ。

「……こ、こちらこそ……よ、よろしくな」

「ほ、本当に？」

「俺も……レナとずっと一緒にいたいって、思ってたからさ……」

バクフーンは照れくさそうに右手の人差し指で頬を掻きながら答える。

「嬉しい、ありがとうバク君！」

良い返事を貰えたレナは嬉しさのあまりバクフーンに抱きついてしまう。いきなり抱きつかれたバクフーンは驚いて顔を思いっきり赤面させる。

「お～、結婚すんのか～！　こりゃめでたいねぇ、よしクライドにライコウ！　祝い酒といこうぜ～♪」

「賛成～♪」

「おい、誰か酒持ってこいやーっ！」

ここで良い雰囲気だった空気をぶち壊してしまうポケモン達がやってきた。酒を飲みすぎて泥酔状態になっているラティオスとライコウ、そしてクライドである。

「あいつら……空気読めよな……」

すっかり泥酔してしまっているクライド達を見て呆れた表情を浮かべるバンギラス。

「……兄さん達。1回……頭冷やそうか？」

泥酔してしまっているクライド達に向かって、低い口調で言うラティアス。両手で冷気を集めたエネルギーの塊を作り出している。良い雰囲気をぶち壊してしまったラティオス達が許せないようでかなり怒っている。

「せっかくの良い雰囲気をぶち壊しにして……許さないんだから！冷凍ビーム！」

エネルギーの塊から超低温のビームが照射され、ラティオス達に直撃する。そしてラティオス達の体は凍りつき、あっという間に氷のオブジェになってしまった。

「しばらくそのまま反省してなさい！」

ラティオス達の暴走をラティアスが止めてから数時間が経過、陽はすっかり沈んでしまい夜になっていた。

今までパーティーで騒いでいたポケモン達はさすがに騒ぎ疲れたようで、ラグラージの家の中で静かに眠っている。

ちなみにラティオス達はちゃんと氷から出され、風邪を引かないように毛布にくるまって寝ている。

「……結婚、か……夢じゃねぇんだよな」

1人中庭で夜風を受けながら、夜空に輝く星を眺めているバクフーン。

「眠れないのかい？」

そこへブラキオがやってきて、バクフーンに話し掛ける。

「ブラキオか……そうなんだよ。レナと結婚するって決まってからなんか興奮しちゃってさ……」

右手で後頭部を掻きながら、少し照れくさそうにして答えるバクフーン。

「そうなんだ」

「ところでブラキオは？　お前も眠れないのか？」

今度はバクフーンがブラキオに尋ねる。

「ちょっとね。実はバクフーンにお願いがあって、君を捜してたんだ」

「お願い？」

「……バクフーン、僕とバトルしてくれないかな？」

ブラキオのお願い……それはバクフーンとバトルする事だった。

「以前にバトルした時は負けちゃったけど……あの時より僕は強くなった。今の僕が、バクフーンにどこまで通用するのか確かめたいんだ」

「そういう事か……バトルだったら、いつだって受けてやるぜ！」

ブラキオのバトルを受ける事を決めたバクフーン。またブラキオとバトルが出来る……そう思っただけで自然とバクフーンの顔から笑みがこぼれる。

「ありがとうバクフーン。じゃあ明日の朝にバトルで良いかい？」

「もちろんさ！　悪いけど、俺は負けるつもりはないからな！」

「それはこっちも同じさ」

2023

第百三十六話　パーティーでお祭り騒ぎ！（後書き）

リザードン
「発表ってまさかバクフーンとレナが結婚する事だったのか？」

違うよ。

バクフーン
「じゃあ俺とブラキオのバトル？」

それも違うよ。

ラグラージ
「じゃあ……」

絶対違うよ。

ラグラージ
「まだ何も言ってないよ！？（汗）」

とにかく発表するからちょっと黙っててねぇ。

バクフーン
「ふ～い」

えっとですね……もうすぐ「バクフーン達の冒険」は2周年を迎える訳ですが……実はあと数話で完結となります。

バク＆リザ＆ラグ

2024

『……はい？』

いやだから完結するんだってば。

バクフーン
「……嘘ーっ！？」

リザードン
「マジで言ってんのかあんた！？」

マジ。これはだいぶ前から決めてた事だから。

ラグラージ
「脱空気する前に完結……なんか嫌だ～（泣）」

泣かないの（汗）

とにかく、本当に完結しますよ。まあ、修正とかちょくちょくやりますけど、最新話を更新するのはあと数話だけです。

2025

第百三十七話　全力全開！　バクフーンＶＳブラキオ！（前書き）

バクフーン
「ブラキオとのバトル、久しぶりだなぁ♪」

ラグラージ
「なんか凄い嬉しそうだね？」

リザードン
「そりゃそうだろ。あのブラキオと全力でバトルするんだからな」

バクフーン
「あ～、早くバトルしてぇ！」

ラグラージ
「バクフーンが軽く暴走しそうだよ（汗）」

リザードン
「暴走しないうちに、早速本編に行くか。それじゃ、第百三十七話をどうぞ！」

2026

第百三十七話　全力全開！　バクフーンＶＳブラキオ！

「ふぁ～……あ～、よく寝た……」

パーティーが終わった翌日の早朝、ラグラージの自宅にある寝室。泊めてもらっていたバクフーンは大きな欠伸（あくび）をしながら目を覚まし、ゆっくりとベッドから起き上がる。まだ起きたばかりだからか、バクフーンの目は半開きの状態だ。

「……今何時だ？」

目を擦（こす）りながらバクフーンは壁に掛けられている時計を見つめる。現在の時刻は午前１０時である。

「……しまった、朝飯の時間！？」

時間を見て一気に目が覚めたバクフーンはベッドから飛び降り、猛ダッシュで食堂へ向かう。

実はラグラージに午前９時に朝食の準備が出来るからそれまでに食堂に来るようにと言われていたバクフーンなのだが……完璧に寝坊した訳である。

一方食堂では、もう朝食を済ませていたブラキオ達やヒトカゲ達は会話したりお菓子を食べたり、はたまたお茶を飲んだりしてまっ

たりのんびりとしていた。

「これも～らいっ♪」

小皿に乗っていた残り1枚のポテトチップを手に取るサイクス。

「あーっ！？　それ僕が食べようとしてたのに～！」

ヒトカゲもポテトチップを食べようとしていたらしく、それをサイクスに取られて思わず声を上げてしまうヒトカゲ。

「悪ぃなヒトカゲ、こういうのは早い者勝ちなんだぜ♪」

憎たらしい程満面な笑みを浮かべながら、サイクスはポテトチップを口の中に放り投げる。

「あ～ポテチが～……」

「……お前ら朝から騒ぐな、頭が痛ぇんだ俺は……」

水が入ったコップを左手で握り、右手で頭を押さえながら騒ぐなとヒトカゲ達に言うカメックス。パーティーで酒をかなり飲んでいたせいか、二日酔いになっているようだ。

「だから飲みすぎだよって言ったのに……大丈夫かよ兄さん？」

カメックスの隣で心配そうにしながら彼を見つめる弟のゼニガメ。

「うーん……良い香りだなぁ」

一方ブラキオは、ハーブティーが入ったティーカップを首から伸ばした蔓で器用に掴み、ハーブティーの香りを楽しみながらゆっくりと美味しそうに飲んでいる。

「このケーキ、なかなかイケるわね♪」

ブラキオの隣ではルーチェが大量に持ってきたケーキを美味しそうに頬張る。口の周りには生クリームがついているが、ルーチェは全く気にしていない様子。

「ルーチェ……朝食あんなに食べたのに、まだそんなに食べるの？」

衰える事を知らないルーチェの食欲を見て呆れた表情を浮かべるブラキオ。

「甘い物は別腹なの♪」

かわいらしくウインクしてブラキオにそう答え、ルーチェはさらにケーキを頬張る。そんな彼女を見て「はぁ……」とため息を吐き、ブラキオはまたハーブティーを口にする。

「俺の飯ーっ！」

「ブフゥーッ！？」

勢いよく扉を開けて食堂に入ってきたバクフーン。そんなバクフーンに驚いてしまったブラキオは口に含んでいたハーブティーを思いっきり吹き出してしまう。

「熱っ！？」

ブラキオが吹き出してしまったハーブティーは見事うしだの顔に直撃する。

「あっ、おはようっす皆。ってそれより俺の飯は！　まだあるよな！」

バクフーンは皆に軽く挨拶すると、周囲を見回しながら自分の朝食を探す。

「そんなに慌てなくても大丈夫よバク君。ほら、ちゃんと私が取っておいたわよ」

そんなバクフーンにレナが歩み寄り、朝食が乗ったトレーをバクフーンに手渡す。

「おっ、さすがレナ♪　ありがとな♪」

「どういたしまして♪」

レナから朝食を受け取ったバクフーンはすぐ近くにあったテーブルに朝食を置き、椅子に座ってすぐに朝食を食べ始める。

「いいわねぇあの2人、なんだかラブラブって感じで……」

バクフーンとレナの事を見つめながら、ルーチェはさりげなくブラキオに寄り添う。

「なんで僕に寄り添うのかな？　っていうかルーチェ、口に付いた生クリームを拭きなさい」

「じゃあブラキオ拭いて～」

甘えるような声を出しながら、ルーチェはハンカチをブラキオに渡し、口に付いた生クリームを拭いてと頼む。

「なんで僕が？　自分でやればいいじゃないか」

「空気的にここはブラキオが拭いてよ～」

「いや何その空気的にって……」

自分で拭こうとせずにやってもらおうとするルーチェに困った表情を浮かべるブラキオ。

「バクフーンにレナちゃんといい、ブラキオにルーチェちゃんといい……なんて羨ましい事をしてるんだお前達ーっ！」

バクフーンにレナ、ブラキオにルーチェの関係を羨ましいと思ってしまったピカチュウは嫉妬の炎をメラメラと燃やしながら思わず叫んでしまう。

「こうなったら俺もラティアスちゃんと一緒に良い事をしてやる！　ラティアスちゃ～ん、俺と一緒に楽しい事を――」

「はいはい、楽しい事ならアタシと一緒にやろうねぇ～」

我慢出来なくなったピカチュウはラティアスに駆け寄ろうとしたが、すかさずピチューが右手でピカチュウの耳を握って思いっきり引っ張る。

そしてラティアスから離す為にそのままピチューはピカチュウを引きずっていく。

「イテテテ！？　ちょっ、ピチュー痛いから放してくれ～！？」

放してくれとピチューに懇願（こんがん）するピカチュウだが、ピチューは無視してそのまま引きずる。

「……何やってんだか」

そんなピカチュウを呆れた表情で見つめるリザードンであった。

「ふぅ～、食った食った。ごちそうさまでした。よし、んじゃブラキオ、そろそろやっか？」

朝食を食べ終えたバクフーンは席を立ち、ブラキオに問いかける。

「僕はいつでも良いよ」

持っていたティーカップをテーブルに置き、ブラキオはバクフーンの問いに答える。

「んじゃやりますか♪　ラグラージ、ちょい中庭借りるぜ～」

ラグラージに中庭を借りる事を伝えると、バクフーンはブラキオと一緒に食堂から出て中庭に向かう。

「やるって……一体何をやるつもりなんだ？」

バクフーンとブラキオが何をやるのか知らないラグラージは気に

なって2人の跡を追いかける。
他の皆もラグラージと一緒になってバクフーンとブラキオが向かった中庭に向かう。

中庭にやってきたバクフーンとブラキオ。
2人はある程度離れると、足首を回したり首を回したりと準備運動を始める。
2人が準備運動を始めた時、遅れてラグラージ達が中庭にやってくる。

「……ちょ、ちょっと2人共、何する気なの？」

準備運動をしている所を確認し、バクフーン達がこれから何をするつもりなのか理解したラグラージだが、念の為に何をするかをバクフーン達に尋ねてみる。

『バトル』

2人は声を揃えてこれからバトルする事をラグラージに答える。

「や、やっぱりね……」

想像していた通りの返答をされ、ラグラージは思わず苦笑いする。

「皆、見学するんだったらもうちょい離れた方が良いぜ？　俺らのバトル、結構激しくなりそうだからよ」

バクフーンに離れるように言われたラグラージ達は、言われた通りにバクフーン達から離れる。

「……よし、んじゃいっちょやりますか！」

準備運動を終えたバクフーンは身構え、背中から炎を吹き出して戦闘体勢に入る。

「いつでも良いよ！」

ブラキオも準備運動を終え、身構えて戦闘体勢に入る。

「いくぜブラキオ、火炎放射！」

バクフーンは口から強力な炎を吐き出し、ブラキオに向けて放つ。

「守る！」

ブラキオはエネルギーの膜を体全体を包み込むようにして展開、それはバリアになりバクフーンが放った炎を防ぐ。

「エナジーボール！」

炎を防ぎきると反撃でブラキオは口から緑色のエネルギー弾を吐き出し、バクフーンに向けて放つ。

「おっと！」

バクフーンは素早くその場でしゃがみ、ブラキオが放ったエネル

ギー弾を回避する。

「電光石火！」

姿勢を低くしたまま、バクフーンは素早い身の熟(こな)しでブラキオに接近していく。

「忘れたのかいバクフーン？　僕はカウンターを使える事を！」

物理攻撃で仕掛けてくると予想したブラキオはすぐさま身構え、反撃体勢に入る。カウンターは相手から受けた物理攻撃のダメージを倍にして相手に返す技なのだ。

「忘れてねぇぜブラキオ！」

ブラキオの前まで来たバクフーンはそこで素早く方向転換、ブラキオの背後に回り込む。

「くっ、フェイントだったか！」

「そういうこった、火炎放射！」

背後に回り込んだバクフーンは再び口から強力な炎を吐き出してブラキオに向けて放つ。

「つるのムチ！」

ブラキオは首から蔓を2本伸ばし、それを力強く地面に叩きつける。

叩きつけた時の衝撃を利用して、ブラキオは空高くジャンプして

バクフーンが放った炎を回避する。

「タネマシンガン！」

空からブラキオはバクフーンに反撃する。
口から無数のエネルギー弾を吐き出して連射、それは雨の如くバクフーンに降り注ぐ。

「電光石火！」

バクフーンはそれを素早い身の熟しで軽々と回避していく。
ブラキオが放ったエネルギー弾は全て地面に直撃し、地面に埋まる。

「エナジーボール！」

地上に着地したブラキオは再び口から緑色のエネルギー弾を吐き出してバクフーンに向けて放つ。だがその攻撃もまたバクフーンに回避されてしまう。

「火炎放射！」

攻撃を回避したバクフーンはまた強力な炎を吐き出す――しかし、放った方向はブラキオではなく、先程ブラキオが放ったエネルギー弾が埋まった地面だった。
炎が地面に直撃した瞬間凄まじい爆発が発生する。

「……やっぱりタネマシンガンの中に種爆弾を仕掛けてたな」

「バレてたか」

実はブラキオ、先程連射したエネルギー弾の中に爆発する種を仕掛けていたのだ。だがバクフーンに見破られてしまい、ブラキオは思わず苦笑いする。

「……だけど、まだ種爆弾は残ってるんだよね」

「残ってる？」

「ほら、肩に」

ブラキオは首から伸ばした1本の蔓でバクフーンの肩を指す。恐る恐るバクフーンは自分の右肩に目を向ける。するとそこには確かに植物の種が付着していた。

「げっ！？」

「時間だね」

ブラキオがそう言い放った瞬間、バクフーンの肩に付着していた種は爆発する。爆発の衝撃でバクフーンは真横に吹き飛び、地面に倒れ込む。

「痛っ……い、今のは効いたぜ……」

痛みで表情が歪むバクフーンだが、なんとか立ち上がり再び戦闘体勢に入る。

「一体いつ種爆弾を俺の肩に……」

「僕に接近した時があったよね？　その時にこっそりと時限式種爆弾を仕掛けておいたのさ」

バクフーンがフェイントを仕掛ける為に接近したわずかな間に、ブラキオは種をバクフーンの肩に飛ばしたのだ。

「やるなぁブラキオ、さすがだぜ」

「君だってさすがだよ。あの爆発を受けても普通に立ってるんだからね」

このバトルを楽しんでいるようで、自然と2人の顔からは笑みが零れる。

「んじゃ、ウォーミングアップはここまでにして、そろそろ本気でやるか？」

「そうだね」

バクフーンの問いに頷きながら答えた後、笑みを浮かべていたブラキオの表情は険しくなる。

そしてバクフーンもまた表情を険しくする。

「い、今までのがウォーミングアップだったんだ……」

バクフーンとブラキオが繰り広げていたバトルがウォーミングアップであった事を知り、ラグラージは驚きの表情を浮かべる。

「はあぁぁぁ！」

バクフーンは体全体に力を入れる。すると、背中から吹き出す炎が勢いを増しバクフーンの体を包み込んでいく――ブラストモードだ。

「ここからが本当の勝負だよ、バクフーン！」

ブラキオの体からは深い緑色のオーラが吹き出し、体全体を包み込んでいく。光の導き手の力を解放したようだ。

「いくぜ……電光石火！」

バクフーンは先程よりも倍以上のスピードで動き、ブラキオに接近する。

「カウンターが間に合わないな……なら、守る！」

カウンター技が間に合わないと判断したブラキオは体全体をエネルギーの膜で包み込む。

バクフーンは構わずブラキオに突っ込むが、展開されたエネルギーの膜に阻まれて攻撃が直撃する事はなかった。しかしその威力は凄まじく、防御したブラキオの体は衝撃で後方に吹き飛ばされる。

「タネマシンガン！」

後方に吹き飛ばされながらもブラキオは反撃、口から無数のエネルギー弾を連射して吐き出し、バクフーンに放つ。

しかしスピードが上がっているバクフーンは素早く動いてその攻撃を回避する。そして自身を包み込む炎の火力を上げてブラキオの周りをぐるぐると走り始める。

「陽炎（かげろう）か……だけど、前にも見た事があるその戦法は僕には通用しないよ！　つるのムチ！」

ブラキオは首から2本の蔓を左右いっぱいに伸ばし、その状態で体を回転させる。

「くっ！」

伸ばされたうちの1本がバクフーンに直撃。

それはバクフーンの体に巻きついて動きを制限させる。さらに伸ばしていたもう1本も体に巻きついてバクフーンの体を締めつける。

「それっ！」

拘束したままブラキオはバクフーンを持ち上げ、勢いよく地面に叩きつけようとする。

「なんの！」

地面に叩きつけられそうになるが、体勢を立て直したバクフーンはなんとか無事に着地する。

そしてバクフーンは体を拘束していた蔓を両手でしっかりと握る。

「お返しだーっ！」

バクフーンは蔓をしっかりと握ったまま、背負い投げの応用で力強くブラキオを投げ飛ばす。

投げ飛ばされたブラキオは背中から地面に叩きつけられる。その衝撃で、ブラキオはバクフーンを掴んでいた蔓を放してしまう。

「火炎放射！」

バクフーンは倒れているブラキオに向け、口から強力な炎を吐き出して放つ。

（防御が間に合わない……なら、攻撃を受けても構わないから、あの技をバクフーンに決めて動きを封じる！）

防御が間に合わないと判断したブラキオは、起き上がって技を使う体勢に入る。すると、ブラキオを包み込んでいた深い緑色のオーラが紫色に変化する。しかし、オーラが変化したその時にバクフーンが放った炎がブラキオに直撃してしまう。

「バインディング……プラントォーッ！」

激痛に表情を歪ませながらも、ブラキオはバクフーンの攻撃を耐えて技を発動させる。

すると地面から樹木の根が無数に飛び出してバクフーンの体に絡みつき、束縛する。

「こ、こいつはダークネスと戦闘した時に使ってたあれか、くそっ！」

この束縛から逃れようとバクフーンはもがくが、体に絡みついた樹木の根は振り解けない。

「はぁ、はぁ……き、効いたよ、今の火炎放射……」

なんとかバクフーンを束縛する事に成功したブラキオだが、先程受けた炎の威力は凄まじかったようでふらふらの状態だ。

「光合成じゃ回復しきれないかなこれは……ふぅ～……」

ブラキオは1つ深呼吸すると目を閉じ、意識を集中させる。すると、紫色だったオーラが今度は黄色に変化する。

「ヒーリングサークル」

黄色のオーラはまるで結界のようにブラキオを包み込む。すると、今まで受けた体の傷がみるみるうちに回復していく。

（ヒーリングサークル……あれで回復して、大技で一気に終わらせるつもりだな？　早いとこ、これから脱出しねぇと！）

ブラキオが次に仕掛ける攻撃が大技だと予想したバクフーンはなんとか束縛から逃れようとするが、やはり体に絡みついた樹木の根は振り解けない。そうこうしているうちに、ブラキオは回復を完了させる。

（これで光の導き手の力を使った回数は2。あと僕が使えるとしたら2回が限界かな……だけど、次で決める！）

回復を完了させたブラキオは攻撃準備に入る。

「これで決めるよバクフーン、ハードプラント！」

ブラキオが叫んだ瞬間地面から茨（いばら）が無数に飛び出し、バクフーン目掛けて向かっていく。

「……こうなったら、あれしかねぇ！」

何か思いついたバクフーンは体を包み込んでいる炎の火力を全開にする。

「天照（アマテラス）！」

全開にされた炎は樹木の根を包み込み、一瞬にして燃やし尽くして灰にしてしまう。それだけでなく、向かってきた茨までをも飲み込み灰にする。

「なっ！？」

まさか2つの技を一気に打ち消してしまうとは予想しなかったブラキオは驚愕する。

「オーバーヒート！」

拘束から解放されたバクフーンはすかさず反撃、炎エネルギーを凝縮した強力なエネルギー波を口から吐き出し、ブラキオに向けて放つ。

（あれを受けたらマズい！）

先程まで黄色だったオーラが今度は青色に変化。青色に変化したオーラはブラキオの前に展開されて壁のようになり、バクフーンが放った攻撃を完璧に防御する。

「はぁ、はぁ、はぁ……天照、思ってた以上に体力を使うな……」

束縛から脱出する為に使用した技はかなりの体力を消耗するらし

く、バクフーンは苦しそうにしている。

「はぁ、はぁ……」

一方のブラキオも、体に受けた傷は回復してはいるが導き手の力を3回も使用した為、体力をかなり消耗しているようだ。

「はぁ、はぁ……次の攻撃で、ラストかな……？」

「そ、そうだな……次で最後だ……」

互いに残された体力は僅(わず)か……バクフーンとブラキオは最後の攻撃を仕掛ける為、攻撃体勢に入る。

（俺の残った力を、この一撃に……）

バクフーンは自分に残された力全てを口に集め、巨大な炎の塊を作り出していく。

（今度こそ、これで決める……）

ブラキオを包み込んでいた青色のオーラが、七色に輝くオーラに変化する。そして、互いに攻撃準備が完了する。

「ブラストバーン！」

「ソーラーキャノン！」

バクフーンとブラキオはほぼ同時に自身が持てる全ての力を込めた攻撃を放った。

バクフーンが放った炎エネルギーを集めた巨大な火炎弾と、ブラキオが放った極太のエネルギー波はぶつかり合い、凄まじい爆発を発生させる。

爆発の衝撃でバクフーンとブラキオは大きく後方へ吹き飛ばされる。

さらには観戦していたラグラージ達までもがその衝撃で後方に吹き飛ばされてしまう。

「痛たた……み、皆大丈夫かい？」

吹き飛ばされた時に家の壁に腰をぶつけたらしく、ラグラージは右手で腰を押さえている。

腰を押さえながら、ラグラージは他の皆に大丈夫かと尋ねる。皆は「大丈夫」と答えながら頷く。

「ど、どっちが勝ったのかな？」

勝敗の行方が気になったラグラージ達はバクフーンとブラキオの方に視線を向ける。

爆発で発生した爆煙でまだ2人の姿を確認出来ない。……しばらくすると、爆煙が晴れてきた。

そこにはバクフーンとブラキオ、2人が倒れている姿があった。

2人共体力の限界を超えたようで、身動きが出来ないようだ。

「はぁ、はぁ、はぁ……ブラキオ、やっぱお前最高だぜ……」

仰向けになって倒れているバクフーンは、最高に楽しいバトルが出来た事が嬉しいようで満面な笑みを浮かべている。

「はぁ、はぁ……バクフーンこそ……」

横たわっているブラキオもまた、バクフーンと楽しくバトル出来て満足したようで笑みを浮かべていた。

第百三十七話　全力全開！　バクフーンＶＳブラキオ！（後書き）

リザードン
「今回は引き分けだったか……にしても、良いバトルだったなぁ」

ラグラージ
「ってか２人共レベル高すぎ（汗）」

バクフーン
「いや～楽しんだ♪　さて、次回はあいつとか……（笑）」

ラグラージ
「ん？　次回？」

リザードン
「なんだ、珍しく次回何があるのか知ってんのかバクフーン？」

バクフーン
「そりゃなぁ♪　作者から直接聞いたしな（笑）」

ラグラージ
「次回どうなるの？」

リザードン
「それは……まあお楽しみってやつだ」

第百三十八話　見た目は子供、中身は大人？　バクフーンＶＳヒトカゲ！（前書

ラグラージ
「えっ、ヒトカゲとバクフーンがバトルするの？」

リザードン
「そういう事らしい」

バクフーン
「前からヒトカゲとはバトルしてみてぇって思ってたんだよな～♪」

ラグラージ
「バクフーン上機嫌（汗）」

リザードン
「まぁ、バクフーンだしな（汗）そんじゃ第百三十八話、始まるぜ」

第百三十八話　見た目は子供、中身は大人？　バクフーンＶＳヒトカゲ！

バクフーンとブラキオのお互い一歩も譲らない激しいバトルが終わってから数時間後……

「火炎放射！」

バクフーンは口から強力な炎を吐き出し、相手に向かって放つ。

「わわ！？」

バクフーンとバトルしている相手はヒトカゲ。

ヒトカゲはバクフーンが放った炎をその場で伏せて、直撃する寸前で回避する。

「危なかったぁ～……お返しだよ！　火炎放射！」

すぐさま起き上がったヒトカゲはバクフーンが放った技と同じ技を使い、反撃に出る。

「おっと！」

バクフーンはヒトカゲが放った炎を真横にステップする事でこれを回避する。

「あ～惜しい！　頑張れヒトカゲのお兄ちゃん！」

『頑張れー！』

ヒトカゲに声援を送っているのはリザードンの孤児院で預かっている子供達だ。皆大きな声を出して一生懸命ヒトカゲの事を応援している。

「頑張るよ～♪」

子供達の声援にヒトカゲは笑みを浮かべ、手を振りながら答える。

「バクフーン、相手は子供なんだから加減しろよ～」

子供達の隣にいたリザードンは応援するのではなく、加減するようにとバクフーンに注意する。

「応援じゃねぇのかよ」

まさか注意されるとは思ってなかったバクフーンは苦笑いする。

何故バクフーンとヒトカゲがバトルする事になったのか……それは数十分前までに遡（さかのぼ）る。

「まだ全然足んねぇ、おかわりだ！」

ブラキオとのバトルで受けたダメージから回復したバクフーンは「バトルしたから腹減った」と言い出し、食堂で次々と料理を平らげていた。

「僕とバトルしてからまだ数時間しか経ってないのに……凄い回復力だね」

自分と全力バトルをした後だとは思えない、バクフーンの並外れた回復力に驚いているブラキオ。

「まぁ、バクフーンだしな……」

ブラキオの隣にいたリザードンは、バクフーンを見つめながら苦笑いしている。一方ヒトカゲはというと……

「捕まえちゃうぞ～！」

「逃げろ～♪」

ヒノアラシやワニノコなど、リザードンの孤児院にいる子供達と一緒に楽しそうに遊んでいた。

今は追いかけっこをしているらしく、逃げ回る子供達をヒトカゲが追いかけている。

「それっ！」

ヒトカゲは逃げ回っているうちの1人、ヒノアラシを両手でしっかりと捕まえる。

「はい、捕まえた♪」

「あ～捕まっちゃった～」

最初に捕まってしまったヒノアラシは残念そうに肩を落とす。

「よ～し、この調子で全員捕まえちゃうもんね♪」

それからしばらくして、ヒトカゲは残った子供達を全員捕まえる事に成功していた。

「はいこれで全員♪」

子供達全員を捕まえる事が出来たヒトカゲは少し得意気に胸を張る。

「あ～逃げ切れると思ったのになぁ……」

逃げ足には自信があったらしく、ヒトカゲに捕まってしまって残念そうにしているワニノコ。

「さて、次は何して遊ぶ？」

両手を腰に当てながら、ヒトカゲは子供達に何をして遊ぼうかと尋ねる。子供達は「うーん」と言いながらどんな事をしようかと考え始める。

「あっ、僕ヒトカゲのお兄ちゃんがバトルしてるとこ見たいな」

ヒトカゲがバトルしているとこを見たいと言い出したのはワニノコだ。

「僕がバトルしてるとこ？」

「うん♪」

ワニノコは目を輝かせながら頷いて答える。
そして他の子供達もワニノコの意見に賛成なようで、皆でヒトカゲがバトルしてるとこを見たいと言い出す。

「良いけど……でも相手がいないよ？」

「バトルなら俺が相手してやるぜ」

ヒトカゲ達の所へご飯を食べ終えたバクフーンが歩み寄ってきた。
そして自分がバトルの相手をすると言い出す。
かくしてバクフーンとヒトカゲはバトルをする事になり、現在に至る。

「さて、いくぞヒトカゲ！　電光石火！」

バクフーンは素早い身の熟(こな)しでヒトカゲに接近していく。

「煙幕！」

ヒトカゲは口から黒い煙を吐き出す。吐き出された黒い煙は周囲に広がり、ヒトカゲの姿が完全に見えなくなってしまう。見えなくなってもバクフーンは構わずそのまま突っ込んでいくが、ヒトカゲにぶつかる事なく黒い煙を突っ切ってしまう。

「もういっちょ！」

バクフーンはすぐさまUターンして再び黒い煙の中に突入する。
しかし、またしてもヒトカゲにぶつかる事なく突っ切ってしまう。

「あれぇ、当たんねぇぞ？」

なかなか攻撃がヒトカゲに直撃せず、首を傾げるバクフーン。…しばらくすると黒い煙が消えていった。

「ヒトカゲが……いない？」

再び首を傾げるバクフーン。先程までそこにいた筈のヒトカゲがいなくなっていたからだ。

バクフーンは周囲を見回し、ヒトカゲを捜す。しかしヒトカゲの姿は何処にも見当たらない。

あるのは数時間前にバクフーンがブラキオとバトルしている時、ブラキオが放った技“ハードプラント”や“バインディングプラント”などによって地面に空いた穴くらいだ。

「……まさか、地面の中か？」

ヒトカゲが地面の中にいるのではと思ったバクフーン。その予想は的中していた。

ヒトカゲは煙幕で姿を隠していた時、近くにあった穴に飛び込んで地面に潜っていたのだ。

「足音が止まった……この上だね」

そして今、ヒトカゲはバクフーンの真下にいた。バクフーンが真上にいると予想したヒトカゲは早速攻撃準備に入る。

ヒトカゲは両手を合わせて詠唱――混沌語（カオス・ワーズ）を唱え始める。

「紅蓮の炎を操る神よ　我ここに誓う　我と汝の力ここに集結し時

我の前に現る悪を持つものに　粛正の咆哮を与えん」

詠唱を唱え終えると、ヒトカゲを中心に風が渦巻き始める。

「準備完了っと。よ～し、ブラストバーン！」

ヒトカゲは口から炎エネルギーを集めて凝縮した強力な火炎弾を真上に向かって放つ。

放たれた火炎弾は地中を突き進んで地上に向かっていく。

「な、なんだ？　地面が揺れてっぞ？」

ヒトカゲが放った技が地中を突き進む事でバクフーンが立っている所で小規模の地震が発生した。そして地面からヒトカゲが放った火炎弾が勢いよく飛び出してバクフーンを襲う。

「おわっ！？」

突然の奇襲に対処出来ず、まともに火炎弾を受け大きく上空へ吹き飛ばされてしまう。吹き飛ばされたバクフーンは体勢を立て直す事が出来ず、背中から地面に叩きつけられる。

「やった！」

穴からひょこっと姿を現したヒトカゲは、バクフーンに技が決まった事を確認すると嬉しそうに笑みを浮かべる。

「ヒトカゲのお兄ちゃんすげー！」

子供達もヒトカゲの活躍を見て嬉しそうに笑みを浮かべている。

「痛っ……あ～、今のは効いた～……」

倒れていたバクフーンは右手で後頭部を押さえ、何事もなかったかのようにむくっと起き上がる。

「お、起きた！？」

決まったと思っていたヒトカゲは、バクフーンが普通に起き上がった事に驚いている。

「ブラキオが空けた穴を利用して地面に潜り、それから詠唱ってやつを使ってから攻撃ってとこかな？　ヒトカゲ、なかなかやるじゃんか」

ヒトカゲが強い事が嬉しいようで、バクフーンは笑みを浮かべながら言う。

「うし、んじゃそろそろ本気でいくか！」

バクフーンは体に力を入れる。すると背中から吹き出している炎が勢いを増し、バクフーンの体を包み込む――ブラストモードである。

「だったら僕だって！」

ヒトカゲは再び目を閉じて意識を集中させ、両手を合わせてもう1つの詠唱を唱え始める。

「生命を与えし七色の神よ　我に力を授けよ　我ここに誓う　我と

汝の力ここに集結し時　全ての悪を持つものに　悪の滅びと善の再生を与えん　また誓う　全ての善を持つものに　清らかなる生けし力を与えん」

詠唱を唱え終え、自身の能力を強化したヒトカゲは攻撃体勢に入る。

そしてバクフーンもまた攻撃体勢に入る。

お互い口に炎エネルギーを集め、それを凝縮した火炎弾を作り始める。

『ブラストバーン！』

そして両者同時に火炎弾を放つ。放たれた2つの火炎弾はぶつかり合い、凄まじい爆発が発生する。爆発と同時に爆煙も発生し、周囲を包み込んでしまう。

「バクフーンのブラストバーンと互角……あのヒトカゲ、やっぱ只者じゃねぇな」

バクフーンが放った攻撃を相殺させたヒトカゲに驚くリザードン。

……しばらくすると爆煙が収まる。バクフーンとヒトカゲはまだ立っていた。

「俺のブラストバーンを相殺させたか……やっぱやるなぁヒトカゲ。だけど、次の攻撃はどうかな？」

そう言うとバクフーンは右手で握り拳を作り、攻撃体勢に入る。

（何かくる！）

バクフーンが何かを仕掛けてくると思ったヒトカゲは警戒して身構える。

「いくぜ！」

バクフーンがそう言った直後、その場にいたバクフーンは一瞬にして消える。そして気がついた時にはバクフーンはもうヒトカゲの前まで来ていて、拳をヒトカゲの顔に当たるギリギリで寸止めしていた。

「えっ……？」

刹那（せつな）の出来事、ヒトカゲは何が起きたのか分からないようできょとんとしている。

「気合いパンチ……見えなかったみたいだなヒトカゲ、今の俺の動き」

そう言いながらバクフーンは拳をヒトカゲから離す。

「今……何をしたの？」

「簡単さヒトカゲ。俺は両手と両足にブラストモードのエネルギーを集めてスピードを強化したんだ。ブラキオとバトルした後に思いついてよ、今試しにやってみたんだけど……上手くいったみたいだな」

ヒトカゲの質問にバクフーンは笑みを浮かべながら答える。

「この勝負、どうやらバクフーンの勝ちみたいだな」

2人の所にリザードンが歩み寄る。

「え～、まだ立ってるよヒトカゲのお兄ちゃん？　なんで負けなの～？」

ヒトカゲが負けという事に納得がいかないようで、子供達はリザードンに文句を言う。

「目にも止まらぬ速さによる超高速移動、それに加えて気合いパンチ……体が小さいヒトカゲがそんなもん受けたら、一溜まりもないだろ？」

「う～、確かにそうかも……」

ヒトカゲは自分がバクフーンの強力なパンチを受けたとこを想像したらしく、若干表情を引きつらせる。

「しかし、一体いつ気合いパンチを使えるようになったんだよバクフーン？」

知らない間に気合いパンチを習得していたバクフーンにリザードンは首を傾げながら尋ねる。

「バトルフロンティアでヒードランとやりあった後からこっそり練習してたんだ。実戦で使ったのは今回が初だけどさ……炎技が通用しないような相手とバトルする事があっても良いようにと思ってさ」

炎技が通用しない相手とバトルしても負ける事がないようにとバクフーンはこっそり練習していたらしい。

「なるほどな……」

「ねぇお兄ちゃん達、バトル終わっちゃったから僕達別の遊びがやりたいよ～」

まだ遊び足りないようで、子供達は遊びたいとバクフーン達に駄々を捏ねる。

「よし、んじゃ皆でかくれんぼでもやるか♪」

バクフーンはかくれんぼをしようと提案する。

子供達は「賛成～♪」と元気よく答える。

「うし、じゃあリザードンが鬼な」

「いや俺かよ!?」

まさか自分が強制で鬼をやらされるとは思ってなかったリザードンは驚きの声を上げる。

「リザードン、気にしたら負けだぜ♪　隠れて良い場所は家の中だけで外は無しな？　んじゃリザードン、俺ら隠れるから１００数えてろよ？」

「はぁ……へいへい、分かったよ」

リザードンはバクフーン達に背を向け、１つ２つと数を数え始める。

「皆、隠れるぞ～♪」

『おーっ♪』

バクフーン達は一斉に家の中に向かって走り出した。

第百三十八話　見た目は子供、中身は大人？　バクフーンＶＳヒトカゲ！（後書き）

ラグラージ
「この小説もうすぐ終わりが近い筈なのに、またバクフーンがやらかしたね（汗）」

リザードン
「ブラストモードのエネルギーを両手両足に集めてスピード強化か……なんか、これに似たような事某テニス漫画でもやってなかったか？（汗）」

ラグラージ
「あ～、あったねそういえば（汗）」

ちょうどその漫画読んでて、それをバクフーンに応用出来ないかと考えた結果こうなりました（笑）

バクフーン
「あっ、作者だ」

リザードン
「またいつの間に（汗）」

気にしちゃいかんよ（笑）さて次回は……バク君とレナによる式でございます。

バクフーン
「ついにきたか」

ラグラージ
「あっ、お金が減る（汗）」

リザードン
「でっかい式場頼むぜラグラージ（笑）」

……まぁ、色々トラブルが起きる事になるんだけどね（笑）

バクフーン
「今なんか言ったか？」

別に？（笑）

第百三十九話　結婚式！　そして友との別れ（前書き）

まず最初に……2ヶ月以上更新ストップしてて申し訳ありませんでした！↑土下座

バクフーン
「出だしから土下座かい！？（汗）」

リザードン
「まぁ、2ヶ月以上更新ストップだったからなぁ（汗）」

次からは気をつけますですはい（汗）

第百三十九話　結婚式！　そして友との別れ

「あ～それはそこに置いてください。あっ、それはそっちじゃなくてこっちですよ」

ここはウォーターシティから少し離れた場所にあるフィル、サイクス、ラグラージの3人が協力して特別に用意させた結婚式会場。会場内ではフィル達に雇われたスタッフのポケモン達がフィルの指示を受け、忙しそうに装飾品を配置したりテーブルをセッティングしたりなど結婚式に向けて準備していた。

「大分準備出来てきたね。これなら今日の夜には始められそうだね？」

会場内を見回し、準備が着々と進んでいる事を確認しながらそう呟くラグラージ。

「いえいえ、こんなんじゃ準備出来たなんて言えませんよラグラージさん。もっと派手な仕込みをしないと」

「派手なって……結婚式なんだから普通で良いんじゃないの？」

「普通なんてつまらないじゃないですか、まぁ期待していてください。彼らには一生忘れられないくらい強烈な思い出を作ってもらいますから、ぐふふふ……」

「いやフィル、すっごく嫌な感じがするから普通でお願い……」

「私もラグラージさんと同意見です。社長、やはり普通がよろしい

かと……」

派手な結婚式にすると言って怪しい笑みを浮かべるフィル。

そんなフィルを見てこのままでは危ない方向に行ってしまうと感じたラグラージと秘書であり執事でもあるエルレイドは普通の結婚式にしてくれと頼み込む。

フィル達が会場の準備をしていた時、バクフーンと結婚する事になったレナは他の女性メンバーと一緒に結婚式に着るウエディングドレスを選んでいた。

フィル達が用意したウエディングドレスは数十着以上もあり、どれを着ようかレナはかなり悩んでいた。

「うわぁ、どれも凄くキレイだから悩むよ～」

ウエディングドレスを自分の体に重ね、姿見で似合っているかどうかをチェックするレナ。

「せっかくウエディングドレスを着るんだから、バク君にキレイって言われたいし……これかなぁ？　それともこっち？　うーん……」

「そんなに深く悩む事はないわよレナちゃん。自分が1番気に入った物なら、バクフーン君もきっと気に入ってくれるわよ」

レナに歩み寄ってきたきぬが優しく微笑みながら自分が気に入った物を選びなさいと助言する。

「1番気に入った物か……ありがとうきぬさん」

きぬの助言を聞き、何か吹っ切れたような表情をするレナ。そして再びウエディングドレスを選び始める。

「さすがきぬ姉、良い事言うわね」

きぬの大人な言葉を聞き、頷きながら納得した表情をするルーチェ。

（ウエディングドレス……私もいつかあれを着て、ドダイトスと……）

レナが真剣にウエディングドレスを選ぶ姿を見て、チコリータはある事を頭の中で想像する。

それは純白のウエディングドレスを身に纏(まと)う自分と、彼女が好きな相手であるドダイトスのクライドが結婚する場面である。そんな事を妄想していたチコリータの顔が自然と赤くなっていく。

（私とドダイトスが結婚して夫婦になって……そしたら朝ご飯を私が作ってあげてドダイトスに食べさせて……）

「そしたらあんな展開になったりこんな展開になったりして……キャハ、恥ずかしい～」

チコリータの妄想はだんだんと膨らんでいき自分だけの世界に入っていく。

最初は心の中で呟いていた独り言も気持ちが高ぶってきてついには口に出して独り言を呟き始め、頭にある葉っぱで自分の顔を隠す

始末だ。

「チコリータちゃん？」

チコリータの様子が変だという事に気づいたラティアスは声を掛けるが、完全に自分だけの世界に入ってしまったチコリータには彼女の声は聞こえていない。

（ムフフフ……女の子達がたくさん……ここはまさにパラダイスじゃないか♪）

そんな時、物陰に隠れながらレナ達を見つめるポケモンが１人……女の子大好きなピカチュウである。

「よぉ～し、では中に入って楽しい事を――」

「何をするつもりなのかな、お兄ちゃん？」

早速中に侵入しようとしたピカチュウの前に立ちはだかるポケモン、彼の妹であるピチューだ。笑みを浮かべながら何をするつもりなのかとピカチュウに尋ねるピチュー、顔は笑っているが目が明らかに怒っている。

「ピ、ピチュー！？」

まさかピチューが立ちはだかるとは思ってなかったピカチュウは驚きのあまり声が裏返る。

「どうやらまたキツいお仕置きが必要みたいね……覚悟は良いかしら？」

笑みを浮かべながらも怒りがこもった目でピカチュウを睨みながら、何処で用意してきたのか巨大なハンマーを手に取って構えるピチュー。

「ちょ、ちょっと待てピチュー！？　兄ちゃんまだなんもやってねぇって！？　ただこれからパラダイスに突入してレナちゃん達と楽しい事をやろうと……ん？　墓穴（ぼけつ）掘ってる？」

「……お兄ちゃん、いい加減にしなさいっ！」

「げふん！？」

怒りを込めた渾身の一振りをピカチュウに炸裂させるピチュー。ハンマーをまともに受けたピカチュウは屋根を突き破って空高く吹き飛んでいった。

ピカチュウがピチューに吹き飛ばされてしまった同時刻、レナと結婚する事になったバクフーンは他の男性メンバーと一緒にウォーターシティの港にある市場にやってきていた。

結婚式会場の準備が出来るまで、ここで買い物などして暇をつぶそうとしていたのだ。

「やべー、このタワシめっちゃくちゃ良いじゃん！　よしこれ買った♪」

市場に来て早々に商品を購入したのはゼニガメだ。本人曰く、甲（こう）

羅を磨くのにとても良いタワシだとの事。

「ほう、なかなか珍しい酒もあるんだな……あっ、すみません。この酒を1グロスください」

「はいはい1グロ……1グロス！？」

そして酒大好きなクライドは気になった酒を1グロス購入しようとする。まさか1グロスも酒を購入されるとは思ってもみなかったようで店長は驚きのあまり声が裏返る。

ちなみに1グロスは144本である。

クライドは祝い酒としてカメックスやバンギラス、そしてラティオスらと一緒に飲みまくるつもりでいるようだ。

「おっ、これ結構イケるじゃん！」

「本当だ、美味しい♪」

食べ物を扱っている店にある試食コーナー、そこでヒトカゲとサイクスは美味しそうに試食用の食べ物を食べていた。

「よしヒトカゲ、次はあっち行こうぜ♪」

「うん♪」

ここでの試食を終えた2人はまた違う店に行き、そしてまた試食コーナーで食べ物を食べる。

買い物など一切しないでヒトカゲとサイクスは試食コーナーの食べ歩きをして、ちょっとしたグルメツアーを楽しんでいた。

「……」

とある店に並べられている商品をじーっと見つめているバンギラス。

彼が見つめている先には小さなピチューの形をしたストラップがあった。しかも左耳が癖っ毛でギザギザの形をしているギザみみピチューのストラップだった。

かわいい物好きなバンギラスはしばらくギザみみピチューのストラップを見つめ、それから自分の財布を手に取って中身を確認する。

「お買い上げありがとうございました～」

気がつけばバンギラスはギザみみピチューのストラップを購入していた。少し笑みを浮かべており、何処か満足そうな表情をしている。

「あっ、こらプラスルにマイナン！　それは店の商品なんだから勝手に持ち出しちゃダメだろ！　カゲボウズにゴースはうしだを非常食って言ってからかうな！　ワニノコにチコリータ！　他の人の迷惑になるから走り回っちゃダメ！　そしてヒノアラシは何処行った!?」

自由奔放な子供達に振り回されているリザードンは買い物どころじゃないようだ。必死になって子供達が他のポケモン達に迷惑を掛けないように注意する。

しかしダメと言われて大人しくしないのが子供達、走り回って近くを歩いていたポケモン達にぶつかったり店の商品でイタズラしたりとどんどん行動がエスカレートしていく。

「コラッ!?　悪いアクセル、俺あいつらを止めるからいなくなっ

たヒノアラシを捜してくれないか？」

「俺か？　別に構わないが……」

「助かるよ。あっ、こらお前達やめなさい！？　グラエナにジラーチ、手伝ってくれ！」

「了解っす！」

「任せてよ」

迷子になってしまったヒノアラシをアクセルに任せ、リザードンはグラエナとジラーチと一緒にワニノコ達の所へ走っていった。

「大変そうだねぇリザードン……ん？」

子供達に駆け寄るリザードン達を見つめていたブラキオの視界に、何やら真剣な表情をしながら店に置かれている商品を見ているバクフーンの姿が入る。

何を真剣になっているのか気になったブラキオはバクフーンの所へ歩み寄る。

「何を見てるんだいバクフーン？」

「ん、あ～ブラキオか。いやさ、結婚記念って事でレナに何かプレゼントでもしようと思ってさ。だけど何をプレゼントしたらレナが喜んでくれるかなぁって悩んでてよ」

バクフーンが真剣になってた理由……それは結婚記念にレナへ何かプレゼントしようと考えていたからだった。

「なぁブラキオ、どういうのをプレゼントしたら良いと思う？」

「そんな事聞かれても……僕こういうのはよくわからないからなぁ……」

バクフーンに尋ねられたブラキオだが、彼はこういう事にはあまり詳しくないみたいで困った表情を浮かべる。

「そっかぁ……あっ、なぁカメックス。レナにプレゼント買おうと思うんだけどさ、どういうのを買ったら喜んでくれると思う？」

今度はちょうど近くを通りかかったカメックスに尋ねるバクフーン。

何処で買ってきたのか、カメックスの右手にはソーダアイスが握られている。

「さぁな、俺はレナの好みとか知らねぇからわからねぇよ。だが、お前の気持ちがこもったもんなら――」

カメックスがバクフーンに答えようとした時、突然空から小さな黄色いポケモンが降ってきてカメックスの背中にぶつかる。ぶつかった時の衝撃でカメックスは前方によろけ、手に持っていたソーダアイスを地面に落としてしまう。

「痛たた……ピチューの奴、手加減なしで思いっきりやりやがって……」

カメックスにぶつかったポケモンはピカチュウだった。

結婚式会場からここまで吹き飛ばされてしまったようだ。

「てめぇ……よくも俺のソーダアイスを……」

ピカチュウにぶつかられた事によってソーダアイスを落としてしまったカメックスは怒りのこもった目でピカチュウを睨みつける。

「ちょ、ちょっと待てカメックス！　これは事故だ事故！　俺はピチューに吹き飛ばされてお前にぶつかっただけで――」

「んなもん関係ねぇ、今すぐてめぇを始末してやる！」

完全にキレたカメックスは鬼のような形相でピカチュウに殴りかかる。

身の危険を感じたピカチュウはすぐさま起き上がり、全力でカメックスから逃げる。

「待ちやがれ！」

逃げるピカチュウをカメックスは追いかける。

両肩にあるハイドロキャノンからハイドロポンプやラスターカノンなどを放ち、周りにいる一般ポケモン達を巻き込みながら。

「……ピカチュウの奴、なんで空から降ってきたんだ？」

「いやそこ？　ってかバクフーン、カメックス止めなくていいの？」

「うーん……まぁ、大丈夫だろ。それよりレナのプレゼントをどうするか……」

一体何処からその自信がくるのか、ピカチュウを追いかけるカメ

ックスを止めなくても大丈夫だと言い切ったバクフーンは再び商品と睨めっこする。

「どうすっかなぁ……」

「悩んだ時は自分の勘に頼るのが良いぜバクフーン」

悩んでいるバクフーンにそう助言するのはついさっきカメックスに追われていた筈のピカチュウだ。いつの間にか近くにいたピカチュウにバクフーンとブラキオは驚く。

「い、今さっきカメックスに追われてたよね？」

「全速力で逃げてきたんだぜブラキオ。まぁとにかくだバクフーン、自分の勘を信じて買ってみ。そして当たって砕けろの精神でレナちゃんにプレゼントを渡すんだ」

「いやピカチュウ、当たって砕けちゃマズいと思うんだけど……」

自信満々に言うピカチュウに、ブラキオは苦笑いしながらツッコミを入れる。

「何言ってんだよブラキオ、こういう時こそだな――」

「見つけたぞネズミ！」

ピカチュウがブラキオ達と話している間にカメックスが追いついてきた。それに気づいたピカチュウは慌ててカメックスから再び全力で逃げる。

「たかがアイス1つで怒りすぎだろ！？」

「うるせぇ、絶対てめぇは始末してやる！」

怒りが収まらないカメックスはピカチュウに向けてハイドロポンプを乱射、ピカチュウはそれをギリギリで回避しながらひたすらカメックスから逃げていく。

「自分の勘か……よし、じゃあこれにすっか！」

ピカチュウの心配を全くしないバクフーンはようやく買う物を決め、商品を1つ手に取る。

彼が選んだのはネックレス。そのネックレスには赤く燃えるような色をしたキレイな石が埋め込められている。

それは炎の石と呼ばれる物で、ポケモンが進化する時に必要な特別な石なのだ。

それから数時間後、太陽が沈み代わりに月の光が地上を照らす夜の時間。会場の準備が出来てようやくバクフーンとレナの結婚式が始まろうとしていた。

会場内にはすでに大勢のポケモン達が集まっており、皆それぞれ会話したりしながら結婚式が始まるのを待っている。

なかには待ちきれずにもう祝い酒と言って飲みだしてしまっているグループもいるようだが。

「……や、やべー、すっげー緊張してきた……」

もうすぐ始まろうとしている結婚式、バトルとはまた違った緊張があるのかバクフーンの表情は堅く、足も震えている。

「しっかりしろよバクフーン、メインのお前がそんな緊張してどうすんだよ？　ほら、ネクタイずれてんぞ」

緊張しているバクフーンにしっかりしろと言うのはリザードン。リザードンはバクフーンが首に付けている少しずれてしまっている蝶ネクタイを直してあげる。

「わ、悪ぃリザードン」

「緊張するのはわかるけどよ、もっとリラックスしろよ。もうすぐレナが来るんだからさ」

「お、おう」

リラックスするようリザードンに言われ返事をしながら頷くバクフーンだが、まだ緊張しているせいかぎこちない返事になる。

とその時、急に会場内の照明が暗くなる。

そしてマイクを使ったフィルの声が会場内に響き渡る。

「お待たせしました皆さん。準備が整いましたので結婚式を始めようと思います。じゃエルレイドさん、あとはよろしくお願いします」

あとの進行をエルレイドに任せ、フィルは少し不機嫌そうにしながらさっさと自分の席に戻っていく。

派手な演出をした結婚式にしようとしたのをラグラージとエルレ

イドに止められ、普通に結婚式をやる事になったのが不満らしい。

「え～……早速始めようと思います。ではレナさん、どうぞ」

エルレイドの言葉と共に会場の出入り口である扉がライトアップされる。そして扉の向こうから純白のウエディングドレスを着たレナがゆっくりと会場に入ってきた。

ウエディングドレスを着たレナを見た瞬間、バクフーンは何かで胸を撃ち抜かれるような衝撃を感じる。

（あ、あれがレナ……？）

ゆっくりと自分の所へ歩いてくるレナから視線を逸らさずにじっと見つめ続けるバクフーン。

「お待たせバク君……ど、どうかなこのドレス、似合ってるかな？」

「お、おう……すっげーキレイだよレナ」

ドレスを着たレナに素直に思った事を伝えるバクフーン。

キレイと言われ、レナは嬉しそうに笑みを浮かべる。

「では、結婚式を始めます。バクフーンさんにレナさん、こちらへ」

エルレイドに指定された場所にバクフーンとレナは一緒に向かう。

いよいよ始まったバクフーンとレナの結婚式……しかし、この結婚式をよく思わない招かれざる者達がいた。

「……金目の物がありそうだったから侵入してみれば、奴らの結婚式だったか」

「あ、兄貴、今回は盗むのやめましょ？　相手が悪いですって」

物陰に隠れながら結婚式の様子を見ているポケモンが2人。

1人は黒と赤を基調とした体色、犬に似た体格で長い角が生えており、胸にはドクロのような形をした突起物がある――ヘルガーと呼ばれるポケモンだ。

そしてもう1人は黒を基調とした体色、カラスに似た姿をしていて頭はテンガロンハットを被ったような形状をしている――ドンカラスと呼ばれるポケモンである。

かつてグラエナの仲間だったバカ2人である。

金目の物を盗もうと、ヘルガーとドンカラスは結婚式会場に侵入してきたのだ。

「何言ってんだドンカラス、今まで散々奴らに虚仮（こけ）にされてきたんだ。ここで鬱憤（うっぷん）を晴らしてやる！」

盗みを諦めようと言うドンカラスだが、そんな事を聞かないヘルガーは何かをやろうと企む。

「な、何するつもりなんですか兄貴？」

「決まってんだろ？　この結婚式をめちゃくちゃにしてやるのさ。ついでに金目の物も盗む。俺にいい考えがあるんだ、ちょっと耳貸せ……」

ヘルガーはドンカラスの耳元で、これから何をやるのかを説明する。

「な、なるほど……それならもしかしたらやれるかもしれない……

やりましょう兄貴！」

最初は諦めようとしていたドンカラスだったが、ヘルガーの説明を聞いているうちにイケると思ったようでやる気になる。

「じゃあ早速行動開始だ。いいか、俺が合図したら仕掛けるんだぞ？」

「わかってますよ」

ヘルガーに頷きながら答えたドンカラスはいつでも行動を起こせるように準備する。

「よし……3、2、1……今だ！」

「黒い霧！」

ヘルガーの合図でドンカラスは口から大量の黒い煙を吐き出す。その煙はあっという間に会場内に充満し、バクフーン達から視界を奪う。

「上出来だドンカラス、あとは出来る限り金目の物を盗ってこい！」

「了解！」

ヘルガーの指示でドンカラスは煙が充満している会場に侵入し、手当たり次第に物を盗みまくる。

ヘルガーが考えた作戦……それはドンカラスに黒い霧を使わせてバクフーン達から視界を奪い、その間に金品を盗むというなんとも単純な作戦だった。

「完璧な作戦だ……あとはドンカラスが戻ってきてから俺の火炎放射でここを火事にしてやれば……奴らが慌てふためく姿が目に浮かぶぜ」

ドンカラスが戻ってきたと同時に結婚式会場を火事にしようと企むヘルガー。

頭の中では作戦が成功するイメージが出来上がっているようで、ヘルガーは怪しい笑みを浮かべる。

「ゲホッゲホッ!?　な、なんだよこの煙!?　レナ、大丈夫か？」

レナを守るようにしっかりと彼女を抱きしめるバクフーン。大丈夫かと聞かれたレナは「うん」と頷きながら返事をする。

「どうなってんだよ……待ってろ皆、こんな煙すぐ吹き飛ばしてやる。霧払い！」

リザードンは力強く翼を羽ばたかせて突風を作り出し、ドンカラスが放った黒い霧をあっという間に吹き飛ばしていく。

黒い霧が吹き飛んだ事でバクフーン達の視界が回復、ドンカラスやヘルガーの姿が確認出来るようになる。

「き、霧払い……その手があったのか……」

黒い霧を使った作戦は完璧だと思っていたヘルガーはいとも簡単にリザードンに黒い霧を吹き飛ばされてしまった事に驚愕している。

「あっ!?　お前らいつかの!?」

まさかこんな所でヘルガーとドンカラスに会うとは思ってなかったリザードンは2人を指差しながら驚きの声を上げる。

「ちっ、バレたんじゃ仕方ねぇ……ドンカラス、逃げるぞ！」

「りょ、了解です！」

ヘルガーとドンカラスは慌てて会場から逃げ出そうとする。

「逃がしはしないぞ」

「てめぇら、人の結婚式を邪魔しといて逃げられると思うなよ」

逃げ出そうとするヘルガーとドンカラスの前に、アクセルとカメックスが立ち塞がる。

出口にはアクセルとカメックス、背後にはバクフーン達……逃げ道が無くなったヘルガーとドンカラスは慌てふためく。

「こ、こうなったら正面突破だ！」

焦ったヘルガーはドンカラスと一緒にアクセルとカメックスに向かって突っ込んでいく。

しかしアクセルとカメックス相手に正面突破が出来る訳もなく……

「ドラゴンクロー！」

「ハイドロポンプ！」

鋭い爪を使ったアクセルの攻撃がドンカラスに、そしてカメックスの両肩にあるハイドロキャノンから勢いよく大量に放出された水

がヘルガーに直撃する。
たった1発の攻撃を受け、ヘルガーとドンカラスは気絶してその場に倒れてしまう。
その後盗んだ金品は全てバクフーン達に取り戻され、ラグラージが呼んだ警察によって呆気なくヘルガー達は御用となった。

「え～……ハプニングがありましたが、結婚式を続けようと思います」

ヘルガー達が御用となってから数分後、少し落ち着いてきたところでエルレイドが結婚式を続ける事をバクフーン達に告げる。

「バクフーンさん、あなたはレナさんを妻とし、生涯彼女を愛し続ける事を誓いますか？」

エルレイドにレナを生涯愛し続けると誓うかと尋ねられたバクフーンは力強く頷きながら誓いますと答える。
そしてエルレイドはレナにもバクフーンと同じ事を尋ね、彼女もまた誓いますと答える。

「では2人を夫婦と認めます……バクフーンさん、レナさん、ご結婚おめでとうございます」

笑みを浮かべながらエルレイドはバクフーンとレナが夫婦になった事を祝福する。
そして会場内にいるポケモン達も皆で拍手しながら2人の事を祝福する。

「ありがとうな皆……あっ、そうだ。レナ、結婚したらこれ渡そうと思ってたんだ。気に入ってもらえると良いんだけど……」

バクフーンは市場で購入したネックレスを取り出し、レナに手渡す。

「わぁ、キレイ♪」

「き、気に入ってもらえたかな？」

「もちろんよ！　ありがと、バク君♪」

バクフーンからのプレゼントを気に入ったレナは満面な笑みを浮かべる。

「それではただいまより結婚披露宴を始めたいと思います。皆さんに楽しんでいただけるよう一流シェフが調理した料理をご用意しておりますので――」

「飯ーっ！」

レナにプレゼントを渡し、無事結婚する事が出来てホッとしたせいかお腹が空いてしまったバクフーンは、エルレイドが喋りきる前に用意されていた豪華料理に飛びついた。結婚してもバクフーンはやはりバクフーンである。

「もうバク君ったら……でもバク君らしいわね」

そんなバクフーンを見て苦笑いするレナ。

それからバクフーン達は披露宴を楽しんだ。
料理を食べたり会話したり……酒を飲みすぎて完全に酔っ払ってしまって暴れ出した者が2名ほどいたが、ラティアスの怒りの冷凍ビームによって問題解決。色々とハプニングもあったが、それもまた1つの思い出となった。

バクフーンとレナが結婚してから数日が経過、今まで一緒に楽しく過ごしてきたブラキオ達とヒトカゲ達とのお別れの時がやってきた。

「本当に行っちゃうのか？」

「うん、あんまりこっちに長居するのはよくないからね」

「そっか……」

ブラキオ達とヒトカゲ達が元の世界に帰ってしまう……バクフーンは少し寂しそうな表情をする。

「たまには遊びに来いよ、歓迎するからさ」

「うん」

「ブラキオさーん、そろそろ行きますよー」

元の世界に戻る用意が出来たようで、フィルがブラキオの事を呼ぶ。

「あっ、今行くよー。じゃあねバクフーン、またいつか」

「おう、またな」

ブラキオはバクフーンに別れを告げ、フィル達と一緒に自分達の世界へと帰っていった。

「おいお前ら、行くんだったら早くしな。空間をずっと維持し続けるのは楽じゃねぇんだぞ」

ヒトカゲ達の世界へと続く道を作っているパルキアがヒトカゲ達を呼ぶ。

「あっ、ちょっと待って。えっと、今までありがとうねバクフーン、楽しかったよ」

「俺だって楽しかったぜヒトカゲ。元の世界に戻っても元気でな」

「うん。バクフーンも元気でね、それじゃ」

ヒトカゲは手を振りながらバクフーンに別れを告げ、サイクス達の所へと走っていく。

そしてパルキアが作った空間の扉に入り、ヒトカゲ達は自分達の世界へと戻っていった。

「……ブラキオ君達もヒトカゲ君達も……皆帰っちゃったわね」

「そうだな……」

ブラキオ達とヒトカゲ達がいなくなり、バクフーンとレナの2人っきりになった。

「私達も帰りましょうか、今日はバク君の好きな料理作っちゃうわよ♪」

「マジ！　やったぜ♪」

ブラキオ達とヒトカゲ達を見送った後、バクフーンとレナは仲良く一緒に自分達の家へと帰っていった。

第百三十九話　結婚式！　そして友との別れ（後書き）

バクフーン
「ブラキオ達とヒトカゲ達、帰っちゃったな」

まさかこんなに長期コラボになるとは思ってませんでした（汗）
コラボに協力してくださったハーブさんにＬｉｎｏさん、ありがとうございました。

リザードン
「しっかし……なんでヘルガー達が？（汗）」

彼らは忘れた頃にやってくるんだよ（笑）

バクフーン
「あいつらってさ、前に出たのってポケモンリーグ編じゃなかったっけ？」

約５０話ぶりの登場……かな？まあ扱いは酷くしたけど（笑）

リザードン
「それで作者、次回は？」

次回は……ラストですな。エピローグになります。

バクフーン
「いよいよラストか……なんか寂しいなぁ」

リザードン

「確かにな……」

ラグラージ

「……脱空気ならずか……（泣）」

そこ泣かないの（汗）

エピローグ（前書き）

バクフーン
「エピローグかぁ……」

リザードン
「来たか、この時が……」

始まりがあれば終わりもあるという事で。
あっ、今更なんですがユーザー登録してない人でも感想を書き込めるように設定してあるんで、よろしかったら感想お願いしますね～。

バクフーン
「いや本当今更だなおい！？（汗）」

エピローグ

「……平和だなぁ」

フレイムシティから少し離れた場所にある浜辺に座り、ゆっくりと沈んでいく夕日を眺めているバクフーンが思わずそう呟く。ダークネスを倒して世界に平和を取り戻し、そしてレナと結婚してから1年の月日が流れていた。

チームブラストの仲間達は皆別れ、それぞれ自分がやりたい事を一生懸命やっている。

チームブラストとして旅立つきっかけになった仲間であるラティアスは、兄であるラティオスと共に困っているポケモン達を助けるポケモンレンジャーとして活動している。

ピカチュウは現在もライトニングジムのジムリーダーとして、毎日やってくるチャレンジャー達とバトルしている。

ピカチュウの妹であるピチューはそんな兄をサポートしている……ピカチュウが仕事放棄してナンパしに行くのを止める事が大半だが。

グラエナやジラーチはバクフーンの両親であるグレンやリリと共に探検家として活動している。

最初はやりたい事がなくてお手伝いとしてグレン達と一緒に探検活動をしていたグラエナ達だったが、やっていくうちに探検家に魅力を感じたようで今では本格的な探検活動を行っている。

ドダイトスとポリゴン2はもっと強くなる為に様々な地方を転々と旅している。

ラグラージはまだ自分がやりたい事を見つけられずにいる為、現在は1人で自分探しの旅をしている。

そしてリザードンは今でも孤児院を経営しており、苦しい思いをしている子供達を保護して大切に育てている。

「……はぁ……」

1つ大きく溜め息を吐き、背中から地面に倒れ込んで大の字になり、夕焼け空を見つめるバクフーン。

（なんだろ、この感じ……レナと結婚出来て俺すっげー幸せな筈なのに……）

大好きなレナと結婚して幸せな生活を送ってきたバクフーンだが、何か物足りなさを感じていた。決してレナとの生活に不満がある訳じゃない、しかし何か……心が何かを求めている、バクフーンはそのように思えてならなかった。

（俺は……何をやりたいんだ？）

一体自分は何をやりたいのか、バクフーンは夕焼け空を見つめながらひたすら考える。

「ま、待ってよ～……」

「なんだもうバテたのか？」

考え事をしていた時、近所に住む子供達がフレイムシティ目指して走っていく姿をバクフーンは見つける。

「こんな事でバテてるんじゃ、ポケモンリーグになんか出れないぞ？　お前いつか出たいんだろ？」

「も、もちろんだよ！」

「ならもっと頑張ろうぜ。ほら、行くぞ！」

子供達はまるで競い合うようにしてフレイムシティに向かって走っていった。

「そうか……はは、なんかわかった気がする、俺がやりたい事……」

子供達を見て自分が何をやりたいのかがわかり、バクフーンは笑みを浮かべる。

「あっ、やっぱりここにいたわねバク君」

そこへ帰りが遅いバクフーンを捜していたレナがやってきた。

「帰りが遅いから心配しちゃったわよ」

「悪ぃレナ、ちょい考え事しててさ」

右手を後頭部に当て、苦笑いしながらレナに謝るバクフーン。

「バク君が考え事なんて珍しいわね？　どんな事考えてたの？」

バクフーンの隣に座り、どんな事を考えていたのかと尋ねるレナ。

「俺が1番やりたい事はなんなのかって考えてたんだよ……俺、やっぱりバトルをやりたい。世界には強い奴がまだたくさんいる筈だから、俺はそんな奴らとバトルしたい」

「そっか……実は私もね、コンテストに復帰したいなぁって思って

たんだ」

バクフーンの考えていた事を聞いた後、レナも自分が考えていた事を話す。コンテストに復帰したい……それを聞いたバクフーンは少し驚きの表情を浮かべる。

「あっ、別にバク君との生活に不満がある訳じゃないのよ？　私は――」

「わかってるよレナ。俺もレナも同じ事を考えていたみたいだからさ。俺はバトルを、そしてレナはコンテストに……だけど、何処に行けば良いかなぁ？　ここの地方でコンテストやってるって聞いた事ないし、俺は全部のジムを制覇しちゃったし……」

バクフーンは腕組みをして、何処に旅をすれば良いか考える。

「西にある地方に行ってみない？　あっちなら確か今コンテストが開かれている筈だし、あっちにしかいないジムリーダー達だっているわよ？」

「西か……よし、じゃあ決まりだな！」

レナの提案で、西の地方へ旅に出る事を決めたバクフーン。

旅に出ると決めてから翌日、行動を起こすのが早いバクフーンとレナは西の地方へと向かう船に乗り込んでいた。

「……あ～、気持ち悪ぃ～……」

「ちょっとバク君大丈夫？」

実は船に弱いバクフーンは船酔いでかなり気持ち悪そうにしている。

そんなバクフーンを心配してレナは優しく彼の背中をさすっている。

「う～……船が苦手だった事忘れてたぜ……ん？」

船酔いと戦っているバクフーンの視界にある光景が飛び込んでくる。

この船のデッキには小さなバトルフィールドがあり、暇な時はここにポケモン達が集まってバトル出来るようになっている。そして今そこでまさにポケモンバトルが行われていた。

「へぇ～、この船にはバトルフィールドもあるのねぇ……バク君、ちょっと近く……」

バトルしているポケモン達の近くまで行こうとレナが誘おうとした時、いつの間にかそこにもうバクフーンはいなくなっていた。

「あ、あれ？　バク君？」

バクフーンを捜す為、レナは辺りを見回す。

「あっ、いた」

「俺はバクフーンって言うんだ。あんた、俺とバトルしようぜ♪」

バクフーンはすでにバトルフィールドに入っていて、偶然そこにいたボスゴドラにバトルを申し込んでいた。

さっきまで船酔いに苦しんでいた筈なのに今はピンピンしている。

そんなバクフーンを見てレナは思わず苦笑いする。

「その勝負、受けてやる！」

「そうこなくっちゃ♪　んじゃ最初から全力全開で行くぜ！」

エピローグ（後書き）

バクフーン
「……短くね？」

まあエピローグだし。
それにセカンドシーズンもあるからこんな感じで良いかなぁと。

リザードン
「とにかく、これでファーストシーズンであるこの“バクフーン達の冒険”は完結だな」

だね。読者の皆様、今までこんな小説をご愛読していただきありがとうございます。
これからはこの小説をちょくちょく修正していったりとかしてちゃんとした物になるようにしますが、これが最後の更新となります。

バクフーン
「本当ありがとうな」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6917d/

バクフーン達の冒険

2010年10月10日01時15分発行